まんじ

No.163

2022.2.1

まんじ第百六十三号　目次

お静地蔵譚……千坂精一…4
コロナ感染の「不思議なサイクル」を簡単に説明できる「仮免疫理論」……新井宏…23
復興の街・陸前高田（大津波の悲劇から十年）……田寺（たでら）怜葦（れい）…36
江戸庶民の名刺（1）……山田嘉久…41
漢詩　汲深録（二十七）……松井秀人…49
短歌　冬の日他……山本一成…51
天守台を仰いで㈣……三戸岡（みとおか）道夫（みちお）…54
忠山人日乗（五）……忠内正之…59
吾輩は紙魚ロボである　その九……永畑俊三…69

青雲の彼方（十四）……太田精一…93
回想のベルリン―「ベルリンはなおワイマール文化の真盛り」（新明正道）―……山本鎭雄…109
柿本人麻呂②……横山正義…123
安芸門徒シルクロード紀行（14）……村上邦治…126
高山右近（十二）……信仰に生きた生涯……鍋屋次郎…153
私の本州マラソン歴史紀行（東北編②）……安藤剛…169
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その四）……山本勉…196
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　2　神戸から来た男（三）……匠克仁…210
1・1・1・1・1……匠克仁…216
編集後記……編集子…226

お静地蔵譚

千坂精一

一、

天正十八年（一五九〇）七月、秀吉は家康と連合して北條氏の本拠小田原城を攻め立てて氏政、氏照兄弟を切腹、嫡子氏直を降服させて天下を平定すると、盟友家康を駿河、遠江、甲斐、信濃、三河の五箇国から関八州二五〇万石へ移封させた。

江戸の板橋というところはもと北條氏の家臣太田氏の知行地で、太田氏はその地を家来筋にあたる板橋氏に配分していた。

そんな地縁もあって、北條氏が滅亡すると遺臣たちが多くこの地へ流れてきていた。

その板橋郷の竹村という草深い村里に遺臣の一人神尾伊予榮加とその家族が住んでいた。

伊予は妻に先立たれていたが、嘉右衛門、お榮、お静、才兵衛という四人の子は健在であった。

長女お榮は神田白銀丁の北條旧臣四條與右衛門の屋敷内を借りて住んでいるやはり旧臣の竹村助兵衛次俊に嫁していたし、嫡男嘉右衛門政方はお光という娘を妻に迎えたので弟の才兵衛政景は兄夫婦に遠慮して別家を立てたことから榮加の手許にいるのは嘉右衛門夫婦とお静だけになってしまっていた。

榮加は徳川への仕官がかなわずやむなく土着して農業に励んだ。

娘のお静も近くの農家で子守などして生計をたすけていた。

お静は天正十二年（一五八四）生まれで、今年（慶長十三年（一六〇八））二十五歳になっていた。

この時代、二十五歳といえば疾うに娘盛りが過ぎていたが、お静はなかなかの器量好しで家事をよくこなし、近所の手伝いなども積極的におこなったので重宝がられ、これまでに商家や豪農から是非にという縁談は降るほどあった。

だが、父の榮加が娘たちの嫁ぎ先は武家に固執していたため、姉のお榮はようやく浪人とはいえ武家に縁を得て嫁いでいたし、お静にも婿は武家を固執して考えを変えなかったので婚期がおくれていた。

榮加は嫡男と婿が旧臣同士だった伝手を求めてお静の婿探しに懸命だったのでそのことに期待していた。

「待てば甘露の日和あり」

というが、榮加が頑なに武家出身の婿探しに知り得る限りの関係先を頼りにしておいた甲斐があってあるところから、

「嫁入りではないが、大奥に奉公先がみつかった」

という報らせが届いた。

その奉公先というのは、江戸城本丸の大奥に部屋を与えられている将軍秀忠の近習井上半九郎の母の侍女になることであった。

武家の息子との縁談ではなかったが、大奥に仕えていれば良縁に出会える機会があろうと榮加は乗り気になって二つ返事で承諾した。

お静が恐る恐る参上した大奥はなるほど広い城内の奥のそのまた奥に位置していた。

老女は若い頃現将軍秀忠の乳母として仕えた縁で、将軍とおなじ乳を飲んで育った嫡子の半九郎が近習に取立てられていたし、自身も大姥（大乳母）さまとして大奥に部屋を与えられて安穏に生活していた。

なお半九郎は、のちに主頭守正就となって老中にまで出世した。

大姥は面接したお静の人品骨柄が気に入ったらしく、即座に採用と決まった。

大姥の侍女となって大奥の生活に慣れ、扶持も支給されて安定したお静の様子にほっと胸を撫で下ろした榮加は、それからしばらくして老衰で身罷った。

大姥さまに宿下がりの許可を得て、父の葬儀と初七日の法要に参列したお静は、もうこの家に自分の居場所はないことを自覚して大奥の生活へ戻っていった。

大姥さまはお静が余程気に入ったらしく、なにかにつけてお静を呼び出し用事を言いつけた。

そのひとつに比丘尼屋敷の見性院という老尼へ贈答品やご気嫌伺いの書状を届ける仕事があった。

比丘尼屋敷は江戸城北の丸の九段坂に向かって開いた田安門内にあった。

比丘尼屋敷とよばれる四脚門内の屋敷に少数の家臣たちと暮らしているのが法名見性院と称する老尼であった。

見性院は武田信玄の息女で穴山信君（梅雪）に嫁いだ。

信玄の姉が信君の母であるから、夫君信君は見性院にとって従兄であった。

その信君は、武田末期の天正八年（一五八〇）入道して梅雪齋不白と号した。

穴山氏はもと武田氏の分流であるから親類衆の筆頭であり、信君は母が信玄の妹、妻は信玄の娘なので武田一族のなかでももっとも重きをなしていた。

信君は異相のうえに変わっていて恵比寿と大黒が着るような紙子（紙製の衣服）の羽織や着物を着て歩き人の気をひいた。奇を衒う性質でもあったが、その筆蹟は見事だった。

永禄十一年（一五六八）信玄が第一回の駿河（静岡県）侵攻を行ったとき、興津の横山に興津城（横山城〈静岡市清水区興津〉）を普請しその城代を命ぜられた。

また、天正三年（一五七五）からは江尻城主（静岡市清水区江尻）となり、武田氏滅亡のときまで居城した。

その年五月の長篠合戦では逸早く戦場を逃れて生命を全うした。

武田氏の滅亡必至と見たその年天正十年〈一五八二〉三月、家康に通じて主君であり義弟であり従弟でもある勝頼の許を去って身の保全をはかった。

これは勝頼はじめ武田一族にとっては大衝撃であったが、信君にすれば木曽義昌、小山田信茂と同様に筋が通っていたのである。

「武田は最早駄目であるが、しかしなんとかして相続者を遺したい。勝頼は当然自害することになるだろうからその子の信勝になる。だが、信勝は正統ではあるが武田にとっての血統は最上とはいえない。最上なのはわが子の勝千代だ。祖母が信玄の妹で母が信玄の娘である勝千代こそがもっとも武田の血が濃いから相続するのが正当だ」

というのであった。

同時に穴山家は甲斐の河内地方を代々有する豪族であって、武田の家来筋ではないことを主張していた。

信君は武田の滅亡を早くから予知していた。

このことは武田軍団の部将たちも予知していたが、信君は予知を身にしみて強く感じていた。

それというのが江尻は家康の居城浜松に近く、絶えず情報が入ったのが正確な判断材料になっていたのである。

信君は家康の動きを正確に捉えていた。

そして家康と頻繁に交渉を重ねた結果、ついに申し入れを承諾させた。

このことは信君の死後家康が遺児勝千代に武田姓を名乗らせて信君の遺領を相続させたことでも証明される。

当時、家康が信君に身の安全を保証する確約の書状がのこっているから紹介しよう。

甲州乱入についてかの國進所たるべきの旨　所務これなき以前も　二年も三年も安土より御扶持を加へられ候様申し成すべく候　若し首尾相違においては

この方より合力申すべく候
そのため一書進達候　恐々謹言
天正十年三月二日
穴山殿
家康㊞

というものである。

甲州流軍学書『甲陽軍鑑』の〈武田一門逆心〉の項には、「穴山梅雪入道信君殿は一年ほど前から家康と内通していた。さらに駿河侍の岡部二郎右衛門も家康に通じていたためこの衆が勝頼公に叛いた。

穴山梅雪の御前は勝頼公の姉上にあたられるが、その子息勝千代殿を勝頼公が婿としなかったことを恨んで、甲府から本拠の下山（南巨摩郡身延町）へ引き揚げた。」

とあるがはたしてそれが原因であろうか。

信君は家康に降り、家康から信長に執り成してもらい甲州河内の所領と江尻の一部を安堵された。

信君は駿河を与えられたお礼に安土（滋賀県近江八幡市安土）の信長の許に赴く家康に伴なわれて天正十年（一五八二）五月八日浜松を発った。

安土は中国攻め応援軍の出動準備でごった返していたが、十五日から三日間家康とともに盛大な持て成しを受けて安土城に逗留、帰路は京を見物して泉州堺へ行った。

六月一日堺の今井宗久、千利休、松井友閑らに出迎えられて大いに歓待され、翌二日再度信長に会うため京へ向かう途中京の豪商茶屋四郎次郎と出会い本能寺の変を知った。

家康と信君は一刻も早く帰国しようと考えて伊賀越えの道を選んだ。

ところが信君は山城国（京都府南部）に入ったところで持病の痔疾を起こして馬に乗れなくなったので家康の一行と別れ、痔痛の治まりを待って枚方（大阪府）の宿を出発し、宇治田原郷（宇治市宇治田原町）を目指し、甘南部山の北麓を通って田邊の原野へさしかかった。

そこで野盗の襲撃を受け、家康の一行と別れて無勢だった信君は従者ともども殺害され、荷物も武具もすべて奪われてしまい、甲斐に戻ることはなかった。

ついでながら四十二年の生涯を終えた穴山玄蕃守信君（梅雪齋不白）の墓は四箇所もある。

最期を遂げた京都府綴喜郡下田辺町飯岡の共同基地。

穴山氏発祥の地、山梨県韮崎市穴山町の滿福寺には信君の法名大龍寺殿月山梅雪大居士の位牌がある。

江尻城のある静岡県清水区大内の靈泉寺には信君の法名靈泉寺殿古道集公居士の碑がある。

もう一箇所は開善寺（飯田市上川路）にあるというのだが、ここは機会がなくて確認していない。

信君のあとは嫡子勝千代が継いだが、天正十五年（一五八七）六月七日、僅か十六歳で病死してしまい、嗣子

なく断絶した。

見性院はその信君の夫人であった。

信君が勝頼に背いて家康につくことは見性院も同調した。かねがね勝頼の子よりもわが子勝千代のほうが武田の血が濃いはずだと思っていたからである。

だが夫が不慮の死を遂げ、わが子もまた僅か十六歳で死去してしまい、武田についで穴山も滅亡してしまった。

実家と婚家を喪って身の置所がなくなった見性院は、やはり武田を捨てて徳川に拾われ国境を固める八王子千人同心に出世していた大久保長安の手引きで、ひとあしさきに大久保を頼って八王子信松院の尼僧（比久丘尼）になっている信松禅尼（お松）の許に隠捿した。

江戸幕府が開府されると家康は、穴山信君との誓約を守って見性院に武州足立郡大牧の地（さいたま市緑区大牧）に五百石の采地（知行地）と江戸城田安門内に比丘尼屋敷を与えた。大牧の地は見沼代用水西縁にある。

お静は、大姥さまの用事でたびたび比丘尼屋敷を訪ねるうちにすっかり見性院に気に入られて大姥さまの使いはお静の専任になった。

こうしてお静が屢々見性院を訪ねているうちにいつか見性院は気を許して来し方を振り返りぽつぽつと身の上話を漏らしてくれたのである。

もうひとつ、お静が見性院の妹信松禅尼と出会ったのもこの比丘尼屋敷であり、二人はすぐに打ち解けていった。

信松禅尼もまた来し方を振り返り身の上話をしてくれた。

信松禅尼は永禄三年（一五六〇）武田信玄の末女に生まれた。名は於松と命名された。

永禄十年（一五六七）兄勝頼に嫁いだ織田信長の姪遠山夫人が死没すると、信玄と親戚関係を維持したい信長は翌年早々嫡男信忠に於松をのぞみ婚約した。このとき、於松はまだ七歳の幼女であった。

婚約が成立した於松は、信玄の住む躑躅ヶ崎館のなかに新館を造ってもらって移り住むとまだ少女なのに新館ご料人と呼ばれた。

於松は信長の嫡男の婚約者なので両家の対面上からも特別扱いする必要があった。

まだ顔も見ぬ少年と少女はその後四季折々の贈物を取り交わしたが、この婚約関係は長くつづかなかった。

元亀三年（一五七二）信玄が西上軍を起こし、十二月二十二日遠江の三方ヶ原（浜松市北西部）で家康軍を破ると、信玄の西上を阻む信長とは敵同士になったのでこの婚約は自然解消になってしまった。

だが、ときが経って父信玄が歿し、於松自身は成人してもいったんは織田信忠と婚約したことで縁があっても結婚しようとはしなかった。

ときがたって天正十年（一五八二）を迎えた。

信長は弱体化した武田を攻め滅ぼすべく周到な作戦計

画のもとに本隊を信濃（長野県）の伊那谷（上伊那、下伊那地方）と木曽谷（木曽郡）から進入して甲斐を目指そうと美濃（岐阜県）から進攻を開始した。

木曽義昌はすでに勝頼を見限り信長に内応していた。

受けて立つ武田勝頼は高遠城（伊那市高遠町）を防戦の要点とみて城将の叔父武田逍遙軒信廉を大島城（下伊那郡松川町）へ移して伊那地方の総指揮をとらせて諸城を固めさせたあとの高遠城には異母弟の仁科盛信を据えた。

このとき於松は同腹の兄妹ということで可愛がってくれている盛信の傍にいて高遠城へもついてきた。

盛信は高遠が織田軍の進入を防ぐ最後の砦になると考えていたので、於松を後方の安全地帯に移るよう説得して家臣をつけて新府城の異母兄勝頼のもとへ送り届けた。

於松は勝頼が新府城を捨てて郡内地方を支配している小山田信茂を頼るとき同行したが途中で侍臣をつけて山越えに武蔵へ落としてやった。

無事武蔵へ落ち延びた於松は案下谷というところに隠れ住み、曹洞宗心源院の卜山和尚に弟子入りして剃髪し、異母兄勝頼と實兄盛信それに許婚だった信忠の無事を祈った。

八王子城主北條氏照は於松が領内に潜入したのを知っていたが、武田とは縁つづきなので見て見ぬ振りをした。

その後北條も滅びて家康が関東を領し、武田の遺臣だった大久保長安を取り立てて八王子千人同心に据えたので、長安は於松を菱田村に迎えて保護した。

家康からは見性院と同様に所領が与えられ卜山和尚からも曹洞宗の寺をまかされたので得度して信松禅尼となり、寺名も信松院とした。

この命名は私の考え過ぎかも知れないが、松は自分の名の一字であり、信の字は父が信玄、実兄が盛信、許婚が信忠であるが、於松は現世では添えなかった信忠の一字を充てたのではないだろうか。

余談が過ぎた。話をもとへ戻す。

お静は、見性院と信松禅尼姉妹の身の上話をきかされて、乱世を生きた女性の凄まじい生き様を知り、同情を禁じ得なかったが、すべてを知って打ち解けていった。

二、

お静が大姥の侍女（腰元）としても、また、大奥という特異な場所での生活にもようやく慣れてきたころのある日、突然将軍秀忠が大姥の御機嫌うかがいにやってきた。

正室お江与の方のもとへ泊まり、大奥から表御殿へもどる途中に立ち寄ったのであった。

お静は慌てふためいてなすすべもなく、只管平伏して顔をあげられなかった。

直答を許されて秀忠の問いに答えた。

旗本の娘ではなく、小田原北條家の旧臣神尾伊豫榮加の娘であること、年令は二十五歳であることなどを答えて問いがおわり、許されて秀忠の前から急ぎ退出した。

そんなことがあってから三日後のある日、珍らしく将軍付の年寄中野の方が大姥を訪ねてきて長いあいだ話し込んでいた。

そして、話が一区切ついた席へお靜がよばれた。

なにごとと恐る恐る出向いたお靜に大姥はいつになくあらたまった口調でしずかに、

「中野の方さまからそなたにお話があります。こころして承るように」

そう告げると、中野の方がつづいてお靜に

「お上がそなたを大層お気に召され、御台様にはご内聞ながらお上付のお中臈にご所望なされました」

お靜は中野の方の話に耳を疑った。

大姥がつづいて、

「まことにめでたいことである」

そう結論づけた。

これで話は一方通行で決定した。

もっともこの時代、将軍の希望に否をとなえることなどできるはずはなかった。

こうしてお靜は、将軍秀忠の希望に沿って閨（寝屋）をともにすることになった。

ところが、このことが逸早く正室お江与の耳に入ってしまった。

お江与は諱を達子といい、父は近江国東浅井郡小谷城主（滋賀県長浜市）浅井長政、母は織田信長の妹お市で、長男萬福丸は信長に惨殺されたが三人娘はのこりその末っ子に生まれた。長姉は豊臣秀吉の側室になって秀頼を産んだ茶々（淀）、次姉お初（小督）は伯母の嫁ぎ先で近江北半国守護京極高吉の嫡子高次に嫁いでいた。

末娘の於江与ははじめ織田信勝の家臣で尾張大野城主佐治与九郎一成に嫁いだが、姉の茶々が秀吉の側室であり秀吉の相聟としては不足として信雄の失脚後秀吉の養子羽柴小吉秀勝に再嫁させられ、その秀勝が朝鮮の役の陣中で病死したため秀吉が引き取り家康の嫡男秀忠に再々嫁させられた。

こうして政略の道具につかわれ、三度も嫁がさせられたためにすっかり気性が歪んでしまい、秀忠より六歳も年長の〈姉さん女房〉だったことから劣等感が加わって嫉妬深くなっていた。夫が自分以外の女性に興味を持つことは断じて許さない独占欲が身についてしまっていた。

だから歴代の将軍で初代家康には十七人、三代家光には八人、もっとも多いのは十一代家齊の十六人という精力絶倫の将軍もいて、十五人の将軍のなかで側室をおかなかったのは幕末激動期の十三代家定（脚気が原因で三十五歳で病死）と十四代家茂（胃腸障害や脚気が原因で二十一歳で病死）のたった二人だけであったから、秀

忠が側室をおけなかったのはいかに正室お江与という姉さん女房が断じて許さない嫉妬深さが身についていたからであるということであろう。

そのかわり多産質のお江与は、正室としてのつとめを充分に果たしていて当時世嗣ぎを産めない石女とちがい男子三人、女子五人の子宝を授かり、嫡男長丸だけが二歳で夭折したものの他の子等は無事息災に育てていた。

お靜が秀忠の寝所へ月に一、二度呼び出されているうちに、いつかそのことがお江与の知るところとなってしまった。

お靜がそうと気付いたのは身の回りの世話をしてくれている侍女から異変を告げられたからであった。

正月のお江与から下された餅と餡の入った祝いの重箱の底に薬包が入っていて、侍女が気づいて取り上げ別室で調べてみると、それは石見銀山といわれる殺鼠剤の砒石を粉にしたもので「猫いらず」ともいわれる毒薬であった。

それからの侍女はお靜の食事に神経を尖らせてくれた。

これらはお江与のお靜を殺すまでにはいたらぬが恐怖の嫌がらせであった。

しかし、昂ずれば毒殺させられる虞があった。

恐怖に脅えたお靜は、中野の方に訴えて庇ってもらったが、そのうちに懐妊してしまった。

（御台様に知られれば、こんどこそ本当に生命が危ない）

お靜は恐怖に戦いて逃亡を決断すると、中野の方の宿下がりの日をねらって中野の方付と自分付の侍女に、

「実家の兄に和子さまを授かったことを伝えて参ろうと思う」

とだけ告げると、身のまわりのものだけをまとめてその日の夕刻ひそかに江戸城を忍び出て夜道を板橋宿へ向かい、懐かしい石神井川に架かる太鼓橋を渡って支流沿いの土手道を伝い、夜道を迷うことなく草深い竹林の実家へ帰り着いた。

長兄嘉右衛門は突然なんの前触れもなく帰宅した妹お靜の様子におどろいた。

奥から出てきた嫂のお光も吃驚していた。

お靜から詳しく事情を聴いた嘉右衛門は、翌朝早く神田白銀丁へ出向いて姉お榮の夫竹村助兵衛に会い、事情を説明して明日わが家へ弟の才兵衛も呼んで三人で相談しようと提案して了承された。

翌朝、三人がお靜を同席させて話はじめた。お江与の度が過ぎる執拗な嫌がらせをきかされた三人はお靜に深く同情したが、同時にお靜を匿う一族にも同様の仕打ちをしてくることも考えられた。

お靜が大奥へ勤めに入るとき、奥向きのことは親兄弟たりとも他言いたすまじく、という誓詞を入れていたし、宿下がり先として実家の兄の氏名と居所を提出していた。

一座の者たちは今日にもお江与がこの家と肉親たちに

刺客を放ってくることに怯えた。
つまり、お静が秀忠の胤を身籠もっている限り神尾家全員を狙いつづけるだろうということである。
事情聴取を終えたところでお静を外し結論を急いだ。
三人で相談した結果を義兄の竹村助兵衛がお静に伝えた。
「お静にはまことに不憫ではあるが、神尾家と一族を守るために、恐れ多いことではあるが、大樹さまのお胤を水に流しまいらせるよりほかに方法はないということになった」
助兵衛から結論をきかされたお静は顔面蒼白になって幽かに震えた。
堕胎を業とする中條流の専門医を探し当てた兄の嘉右衛門が秘伝の粉薬を貰い受けて持ち帰り、お静が諦めて服用し一件落着した。
幕府へは流産と報告して正式に静養の許可を得た。
このことがお江与の耳に入れば、もう刺客や毒殺の用はなくなるはずであった。
お静は悲しいながらもほっと胸を撫でおろした。
お静が実家で嫂に世話をかけて療養していたある日神田白銀丁から姉のお榮がやってきた。用件はお静の世話を嫂のお光にばかり任せておいたのでは心苦しいからお静を神田へ引取ろうとやってきたのである。
お光に否やはなかったので、その日のうちにお静は神田白銀丁へ引き取られていった。
義兄宅での生活にもなれたある日、姉から
「目黒の里の蛸薬師へお詣りに行くから、気晴しに一緒に行ってみない」
そう誘われて、
(蛸薬師とは面白い名のお薬師さまだ)
どんなお寺だろうと興味本位で姉に従いていってみることにした。
神田白銀丁から荏原郡目黒の里までゆく途次に姉のお榮は蛸薬師についての話をしてくれた。
蛸薬師は比叡山を開山した傳教大師最澄の高弟慈覚大師円仁が開基したという古刹で天台宗成就院という。
本尊薬師如来の蓮葉座を三匹の蛸が支えていることに由来して蛸薬師と親しまれており、境内で売られている石で擦ると疣が簡単にとれるという伝承があって人々がその石を買い求めかたがた参拝にくるので賑わうという。
『江戸名所図絵』にも目黒のところにはこの蛸薬師如来と目黒不動堂が掲載されている。
それによると、蛸薬師如来は、
「同所町家の巽(南東)の隅にあり、天台宗成就院境内に安ず、檀薬師如来は慈覚大師円仁の作なり。世俗伝へいふ。この本尊に祈願ある者は、蛸を絶ちてこれを念ずるに果たして利益ありとて絵馬にも蛸の形を画きて棒ぐ」

とある。
成就院へ行くには、JR山手線の目黒駅で下車して権之助坂を下ってゆくよりも急坂だが行人坂を下っていったほうが近い。
途中江戸期に千住大橋あたりまで焼失した目黒行人坂の火事の火元大円寺や目黒雅叙園があり坂を下りきったところで目黒川に架かる太鼓橋を渡って山手通りへ出る。
目黒不動の信号を渡って目黒不動尊門前通りをすすんだ左側にある。
お静が姉のお榮に誘われて成就院を参詣したことがこのさき深い縁になってゆく。
そうこうしているうちに中野の方から、
「上様が待ち兼ねておられるからそろそろ帰城するように」
という催促がたびたび届くようになった。
お静はやむなく大奥へ戻ることにした。
大奥へもどったお静にはまた以前の生活が待っていた。
なるべくお江与の目を避けるよう心掛けて暮らしていたが、そのうちまたも妊娠してしまった。
(こんどこそ御台さまの耳に入ったら間違いなく殺されるだろう)
お静はそう思って恐怖に戦いた。
居ても立っても居られなくなったお静は、思い余って中野の方と大姥に泣きついた。
お静に同情した二人の大先輩は、大姥の子の井上半九郎からときの老中土井大炊頭利勝に事情を説明させて相談を持ちかけた。
半九郎は母が乳人だったことから秀忠に可愛がられて近習に取立てられていたので重臣たちとも直接口をきけた。
そうでなくても、大姥と土井とは旧知の間柄であった。
土井もまた秀忠が誕生すると家康が当時七歳だった利勝を、幼名松千代を改め甚三郎と名告らせて生後間もない秀忠付とした。利勝はのちに二代将軍になる生後間もない長松の側近第一号であった。
したがって大姥と利勝は秀忠の乳人と側近として長いつき合いできていた。
なぜ家康は、徳川家の重臣家でもなく、また江戸幕府の幕閣の系でもない土井を重用したのか。
不思議に思って出身を調べてみたら、利勝の生家は土井氏ではなく水野氏で、織田信長に属した水野信元は尾張国小河、大高、半田、西川、刈屋、西尾の諸城をもち、信長から〈信〉の一字を与えられたくらい重用された。
利勝はその信元の庶子だったのでおなじ清和源氏の系である土井家にのぞまれて養子にされたのである。
生家は祖父忠政のとき松平宗家と婚姻関係が生じて妹は松平信忠に嫁し、娘は信忠の孫廣忠に嫁いで家康を産んだ於大の方である。

だから、家康にとって利勝は母方の従弟にあたるわけである。

土井利勝のはからいで無事に江戸城を出ることができたとしても、宿下がりは実家と届けてあるから板橋郷竹村は危険である。

（では、どこへ身を隠すか）

思案投げ首のすえに思いついたのが比丘尼屋敷の見性院に匿ってもらうことであった。

中野の方と大姥に相談した結果、

「それがよかろう」

ということになり、大姥からの書状を懐中にして、土井利勝のはからいで無事に江戸城を出ると田安門内の比丘尼屋敷を訪ねた。

お静の突然の来訪におどろいた見性院は、事情を聴いてお静に同情し、

「お松とも相談いたしましょう」

とさっそく八王子に使いを出して信松禪尼を呼び寄せてくれた。

なにごととおどろいて急ぎやってきた信松禪尼も、お静から事情をきいて深く同情した。

「ここは御城中ですからすぐ御台さまに知られてしまいます。八王子なら知られずにすむかも知れませぬ」

見性院は江戸から遠いお松の信松院に匿ってはどうかと提案した。

だが、信松禪尼にも匿ってやれる自信がなかった。

いかに大久保長安が武田の旧臣であるとはいえ、現在は甲斐や相模との国境を警備する千人同心や代官を統轄する立場にあって、幕府の老中支配、若年寄の配下に組織されている歴とした幕臣直参であるから見て見ぬ振りはできないであろう、と危険を強調してはばず、あれこれ思案を重ねた結果、見性院が家康から拝領した采地（知行地）の武州足立郡大牧村（さいたま市浦和区大牧）に匿われることになった。

三、

お静は、大牧村で平穏な日々を迎えることができた。

見性院の所領地であるから領主の屋敷があり、所領をまもる武士たちもいた。

見性院という領主に守られているのだからこれほど安全安心の地はない。

お静は見性院、信松禪尼姉妹の庇護を受けて大牧村でようやく平穏な日々を迎えることができた。

大牧の里で落着いた日々をおくっていたある日、訪ねてきた信松禪尼から、

「浦和のさきの大宮宿に氷川明神という由緒あるお社がある」

と説明されて、安産祈願に詣でることをすすめられた。

ここも『江戸名所図会』の〈大宮氷川の神社〉として、

「大宮の駅のうち（このところを氷川戸庄高鼻村という）街道の右の方に鳥居立石あり、これより十八町入りて御本社なり。神領三百石、神主角井氏、岩井氏これを奉祀す。祭神三座、本社の右は素盞雄尊（男体の宮と称す。奥の社ともいふ）。同じく左は奇稲田媛命（女体の宮と称す）。これすなはち武蔵國第一宮にして『延喜式』（九二七）明神大社大月嘗新嘗に列する第一の宮社たるところなり（以下略す）」

とあり、また、『氷川神社の御由緒』には、

「今から二千四百有余年の昔、第五代孝昭天皇の御代三年四月の御創立で、聖武天皇の御代各国に一の宮の制を定められた時、武蔵一の宮と称せられ、醍醐天皇の朝に定められた延喜式には明神大社として月次新嘗案上宮幣に預り、又臨時祭にも奉幣に預かったことが記されています。明治の御代に至っては元年（一八六八）十月二十八日明治天皇当社に行幸御親祭なされ、当国の鎮守勅祭の社と定められ、次いで四年五月官幣大社に列せられました。年々の例大祭には勅使の御差遣、東游の御奉納などがあり、荘重厳粛の祭儀が行われます。

又、氷川神社名の社は大宮を中心に、埼玉県下及び東京都下、神奈川県下に及びその教は二百八十数社をかぞえます。武蔵国造の子孫がこの大宮の地を本拠として民族的政治的に著しい発展をしたことを物語っているものと考えられます」

とあり、『社殿の沿革』には、

「上代のことは詳かにすることが出来ませんが、治承四年（一一八〇）源頼朝公が土肥次郎實平に命じて社殿を再建、文祿五年（一五九六）八月には徳川氏、伊奈備前守忠次を奉行として社頭を残らず造営せしめ、次いで寛文七年（一六六七）三月には阿部豊後守を奉行として社殿の建立をしております。以来幾度の御造営あって今の御社殿は昭和十五年（一九四〇）六月の竣成で、流造りであります」

とある。

信松禪尼に誘われて氷川戸庄高鼻村の氷川神社に詣でたお静は祈祷料に添えて安産祈願の願文を奉納した。

〈敬って申す祈願のこと〉と題したその願文の内容はこうである。

南無ひかわ大明神　当國のちんじゅとして跡をこの國に垂れたまひ　衆生あまねくたすけたまふ、ここにそれがし卑しき身として大守の御思いものとなり、御たねをやどして当四五月のころりんげつたり　しかれども御臺しっとの御こころふかく營中に居ることを得ず　今　信松禪尼のいたわりによって　身をこのほとりにしのぶそれがしまったく卑しき身にして　ありがたき御寵愛をこうむる　神罰としてかかる御たねをみごもりながら住所にさまよう　神命まことあらば　それがし胎内の御

たね男子にして安産守護したまひふたりとも生をまっとうし　御運をひらくことを得　大願じょうじゅなさしめたまわば　心願のことかならず違いたてまつるまじく候なり

けいちょう十六年二月　　しず

この願文に書かれているとおり氷川神社に参拝したのは二月であり、出産予定は五月であるからかなり差し迫っていたことになる。

産所が大牧村ではなにかと不便であり、さりとて実家の板橋郷竹村でも同様ということで、結局お静の産所は姉の嫁ぎ先神田白銀丁の竹村助兵衛宅に決まった。

身重のお静を預かった姉は、お静の身の回り一切を手際よく処理してくれた。

お静にしても、肉親が世話をしてくれているので気楽で遠慮なく我が儘が言えた。

お静に陣痛が襲ってきたのは五月六日の夜であった。

初産のため陣痛が長く翌日までつづく難産だった。

ようやく分娩をおえたときは七日も夜半近くになっていた。

無事誕生したわが子は男子だった。

産婆の手伝いをしてくれていた姉のお榮がお静の枕元に座り、そう教えてくれた。

翌朝、かねての手筈どおり実家の兄嘉右衛門が町奉行に届け出て町奉行から土井老中に報告され、土井老中は大姥に報告しておいてから将軍秀忠に言上した。

土井からお静の懐妊を報らされて待ち侘びていた秀忠は安堵して、

「赤児は幸せと松平の松をつけて幸松丸と命名せよ」

そう土井に命ずると、かねて用意の品を下賜した。

土井利勝から見性院の手を経てお静の許へ届けられた秀忠からの下賜品の包みを紐解くと畳紙に包んだものが出てきて、さらにその紐を解くと内容物は男子用紺地振袖で徳川家の定紋葵の紋所がついていた。これは秀忠がお静の産んだ子はわが子であることを認めたことになる。

お静は秀忠がわが子と認めたことがなによりも嬉しく幸福であった。

産後の肥立ちもよく健康をとり戻したお静は佳日を選んで世話になった姉婿宅を引き払い見性院所領の武州足立郡大牧の里へ帰っていった。

お静の出産がお江与の耳に入っているやも知れぬことから、お静の周辺には以前にも増して見性院の供侍たちが警護についてくれた。

このころ大姥は寄る年波には勝てず、長年住み馴れた大奥を去り子息井上半九郎の拝領屋敷でひっそり暮らしていたが、お静安産の報らせを受けて安堵した。

こうしてみなに祝福された幸松は順調に育っていった。

あけて慶長十八年（一六一三）正月二十日、大姥は老衰でしずかに息を引き取った。

見性院からそのことを報らされたお静は、悲しみに暮れると同時に秀忠とを繋ぐ太い導管が切れてしまったことが心細く不安であった。

ともあれお静は大姥の冥福を祈って荏原郡目黒の里の成就院に使いを出して親しくなった舜興和尚に頼み、供養料にあわせて地蔵一体を寄進した。

余談だが、私は以前取材で地方歩きをしていたころ、道端などに置き忘れたように雨曝しになっている地蔵をよく見かけたので、庶民の地域信仰ぐらいに考えていたのだが、この稿を起こすにあたってあらためて調べてみたら、

「釈尊の入滅後、弥勒菩薩の出生するまでのあいだ無仏の世界に住して六道の衆生を教化救済するという菩薩で、左手に宝珠、右手に錫杖を持つ」

歴とした菩薩だったのである。

四、

幸松は見性院の庇護を受けて順調に育ち、元和三年（一六一七）七歳の新春を迎えた。

五経の一つ『礼記』に、

「男女七歳にして席を同じゅうせず」

とあり、男女の区別を明らかにしてみだりになれ親しんではいけないとしている。

つまり、そろそろ成人の扱いをしろということだ。

これまでお静の周辺にも変化が起こっていた。

大姥の老衰死はすでに述べたが、それから三年後の元和二年（一六一六）四月十六日に見性院の妹八王子の信松禅尼が病歿した。五十六歳であった。

その翌日に秀忠の父家康が七十五歳で病歿し、二箇月後に本田正信があとを追うようにして七十九歳で歿した。

見性院にしてもお静にしても秀忠と繋いでくれるのは土井利勝だけになってしまった。

幸松の処遇について利勝から、

「比丘尼屋敷に引き取り、見性院の子として養育してほしい」

という秀忠の内意が伝えられ、見性院はお静に伝えずひとり悩んでいた。

武田の再興についてはすでに大御所家康が生前五男信吉に再興させていた。

信吉は二十一歳の若さで病歿してしまい、武田は二度滅亡してしまっている。

いまさら武田の再々興でもあるまいとして、ではほかに幸松を預けるに足る人物がいるか思案投げ首であった。

考え抜いたすえにふと脳裏に浮かんだのが武田の旧臣で信濃伊那郡高遠二万五千石の領主だった保科正直のことである。

正直は参覲で出府してきたおりと、終えて高遠へ帰国するときにはかならず比丘尼屋敷へ挨拶にきたし、中元、歳暮の礼も欠かさない律義な性分であった。

武田の遺臣で徳川に召し抱えられた者多しといえどもいまなお見性院を主筋の姫君とみなして礼を欠かさないのは保科だけであった。

それは正直のあとを嗣いだ正光にも受け継がれていた。

保科の律儀さに感じ入っていた見性院は、

（幸松君を保科に託そう）

と考えた。

保科は正光の父正直が正室の死後家康の異父妹多劫を娶っていたから将軍と縁つづきでもある。

見性院は土井利勝に保科家を推挙し、利勝から将軍秀忠に伺いを立てて内諾を得た。

保科氏は信濃の豪族で現在も高井郡に保科（長野市若穂保科）という地名がのこっている。

保科の地は古墳時代から高井地方の中心地であった。

『倭名抄』のなかに〈保科の郷〉があり、ここに伊勢大神宮領の保科御厨があった。

『吾妻鏡』に文治三年（一一八七）頼朝が保科宿の遊女長者を召して歌を唄わせたという記事があるから、当時から要地として宿場もあって栄えたところだったのであろう。

保科の地へ行くには、松代の国道四〇三号を北上して若穂の千曲川と犀川の合流点から菅平高原へ向かい小出、須釜を抜けた先が保科で、保科観音、清水寺、保科温泉がある。

保科の名が世に知られるのは正俊の代で、天文二十三年（一五五四）八月十八日の〈第一回　川中島合戦〉のときであった。

当時四十四歳だった正俊は、右脇に西国樫の柄をつけた長さ九尺五寸（約三メートル弱）の大身槍を抱え込んで青馬に跨がり、五百の兵を率いて雁行の陣の第二陣を承った。同列に眞田彈正幸隆、市川和泉守、清野常陸介も同数で着陣、都合二千の兵力で合戦になったとき、正俊は無勢ながら大身槍をふるって活躍したので〈槍彈正〉の異名をとった。

天正三年（一五七五）正俊は六十五歳で家督を正直に譲ったものの、同年五月の三河長篠の戦いには病気療養中の正直に代わって出陣し生命を拾った。

そして天正十年（一五八二）初頭、織田・徳川の大軍が甲信両国に侵入してきたとき正直とともに飯田城（長野県飯田市）にいたが、抗し切れずとみて城を捨て高遠城救援に向かったが、正直が途中で織田方の離間策に嵌められてしまい高遠城へ入れなかった。

和議と信じて二の丸を出たあいだに本丸を分断されてしまい、やむなく高遠城を捨てて落ちざるを得なくなった。

だが正俊、正直父子は守将仁科五郎盛信敗死後も高遠城回復を諦めず、三か月後に信長の本能寺横死で諸将が引き揚げていったあと少数の手勢で乗っ取りに成功して家康に本領を安堵された。

天正十八年（一五九〇）八月、家康の江戸入りと同時に正直は下総多胡（千葉県香取郡多古町）一万石を与えられた。

それから十年後の関ケ原戦で活躍した正直は、故地高遠二万五千石へ復帰を命ぜられた。

その翌年、正直は六十歳で歿し、嫡男正光が継承して現在に至っているのだ。

見性院に呼び出されて幸松の養子入りを伝えられた保科正光は、

「上様の若君を当家の養子に迎えるなど恐れ多い」

と固辞して承諾しなかった。

正光の律儀さにほとほと手を焼いた見性院は、土井利勝に一任した。

利勝は、保科正光を鍛冶橋御門内御曲輪内大名小路（第一生命ＤＮタワー二十一）の自邸に呼び出して将軍秀忠の内意を伝え、お受けするよう迫った。

現将軍の命とあらば否やは言えず、平伏して受け給わざるを得なかった。

こうして幸松の信濃高遠二万五千石保科家への養子入りが決まった。

お静はわが子幸松の養子入りが決まったことで胸を撫でおろし、保科正光に感謝した。

（江戸を去ればお江与の目は届かないから安心できる）

お静は願いが成就した御礼にさっそく目黒の里の成就院に参拝してまたも地蔵を寄進した。幸松の身の安全祈願にはじまり、大姥さまや信松禅尼の供養、見性院やお静自身の無事安泰祈願などで寄進した地蔵は数体になっていた。いつの頃からか定かではないがお静は地蔵を寄進するたびに住職の舜興和尚に挨拶したのでいつか親しくなり、地蔵寄進のおりに読経してくれて親しくなっていった。

のちに舜興和尚がお静の寄進した地蔵を一箇所にあつめて〈お静地蔵〉と称ばせたという。現在も正面に一体、左右に三体づつ並んでいる。

ついでながら蛸薬師こと天台宗成就院は慈覚大師の創建で本尊は薬師如来立像である。

蓮華座を三匹の蛸が支えていることから〈蛸薬師〉と言われるようになったとまえに触れたが、その理由はこうである。

中国留学から帰国途中の大師が荒海を鎮めるために海に投じた薬師の小像がのちに蛸に乗って漂着した故事にならってつくられたもので、蛸（多幸）薬師の呼び名もそれに由来している。

五、

見性院が幸松の養子入り先が決まって肩の荷を下ろしているところへさっそく保科正光が今後の打ち合わせにやってきた。

正光は、

「幸松君お迎えの準備もございますので、ひとあし先に高遠への帰国の許可をいただきました」

と挨拶したあとで、同行した二人の家臣を見性院に、

「江戸詰の樋口勘四郎と宮下孫三郎にござりまする。高遠まで幸松君の道案内役をつとめさせまする」

と紹介した。

見性院も自分の家臣のなかから野崎太左衛門、萬澤權九郎、大貫四郎右衛門、有賀九右衛門改め九左衛門の四名を幸松の供侍として高遠へ行き、そのまま保科家の臣となってとどまる人選をすませ、土井利勝の許可をとってあった。

小人数の大名行列であるが、土井利勝は別に幕府の黒鍬之者をつけてくれた。

組織では老中支配が役方（文官）で若年寄支配が番方（武官）であるから、従って黒鍬組は若年寄の支配下にあった。

若年寄―目付―黒鍬頭―黒鍬の者、となる。

黒鍬組は道なきかたに道をつけた戦国乱世の特殊部隊で、大平の世では働き場所がなく、うだつのあがらぬ木つ葉役人とみなされた。

雑務雑用に携わる御家人以下の身分で、食禄は十二俵一人扶持、平時は将軍の出行にさいし草履取りや荷物の運送を担当し、諸触の伝達に奔走する。

大名が江戸城へ登城するさい行列の交通整理にあたった。公務にあるときは帯刀は許されず脇差だけ差した。

このとき土井老中に指名されたのは、橋爪久左衛門とその組織であった。

土井利勝が黒鍬者をつけたということは、将軍家縁の者の旅という体裁を整えたのであろう。

保科幸松お国入りの一行は、元和三年（一六一七）十一月八日明け六つ（午前六時）に橋爪久左衛門率いる黒鍬者十名を先頭に見性院に見送られて江戸城田安門内の比丘尼屋敷を出発した。

幸松が初旅ならお静もまた長い旅路を行く初旅であった。

一行は四谷御門から内藤新宿を通って甲州街道をすすみ、高井戸、國領、布田、石原を経てその日は府中で泊まった。

九日小佛、十日上野原、十一日黒野田、十二日石和、と宿泊を重ねて十三日に甲斐府中（甲府市）、教來石を経て国境を越え信濃国の蔦木に入り金澤で宿泊した。明日はいよいよ高遠入りである。

十四日早朝金澤宿を出立して甲州街道と別れて山道に入り、金澤峠を越えて正午ごろ杖突街道の御堂垣外宿に到着して休憩をとった。

ここから高遠までは三里だというから、悠くりいっても今日中には養父になる保科正光の待つ高遠城に着く。

道中幸松は母のお静と休憩のたびに駕籠を出てその土地の風景を眺めてきたが、どこもはじめてみる光景なのでいつまで眺めていても飽きることがなかった。

余談だが、私がはじめて高遠を訪ねたときは仁科五郎盛信取材のときで、新宿発七時の特急あずさ一号に乗車して飯田線経由で伊那市に行き、タクシーで高遠へ行った。

中央高速バスが通るようになってからは新宿から伊那市まで行き、取材を終えると高遠か伊那市の民宿に泊まったので、茅野市金澤から金澤峠を越えて高遠へ入ったことはない。

余談はさておき――。

御堂垣外宿を出立した幸松一行は、高遠城まで一里と迫った弥勒村で当主保科正光と重臣たちの出迎えを受けて城下へ案内されて行った。

入城した幸松は、正光が新築させた三の丸の一郭南曲輪の御座所に入った。

余談だが、信濃国はたとえ南信と雖も冬の寒気は厳しい。

話は逸れるが、下って元祿のころ、吉良左兵衛義周が幕府から、

「当夜の仕方不届きにつき領知召し上げられ諏訪安藝守へ御預け仰せつくるものなり」

との流謫刑を受けて諏訪の高遠城へ永預けになったとき、受け入れる側の諏訪安藝守忠虎は南丸を新築して収容してくれている。

それほど信濃国の寒気は厳しいのだ。

お静と幸松親子はようやく安住の地を得られたのである。

翌元和四年、秀忠は保科正光に幸松の養育料とし信濃筑摩郡洗馬郷（塩尻市）五千石を加増してくれたので高遠領は都合三万石となった。

幸松は高遠入りして十四年後の寛永八年（一六三一）十一月に元服して肥後守正之と名告った。二十一歳であった。

わが子の成人振りを見て安堵したのか、お静はそれから四年後の寛永十二年（一六三五）九月十七日病には勝てずに身罷った。享年五十二歳、浄光院殿法紹日恵大姉と諡されて高遠の妙法山長遠寺に埋葬されたが、正之は寺の名を法紹山浄光寺と改めさせた。

六、

話は江戸へ戻る。

お靜が何体もの地蔵を寄進していた蛸薬師成就院のある日黒には将軍家のお鷹場があった。

三代将軍徳川家光が久しぶりに鷹狩にやってきて充分に楽しみ、疲れたので番方の者たちが集合するまで休息しようと思って近くの寺へ入った。それが蛸薬師成就院であった。

偶々生垣の手入れをしていたこの寺の住職らしい老人に、

「将軍の狩りの供の者だが暫時休息させてもらいたい」

と申し入れた。

その老人は住職の舜興和尚と名乗り、

「それはそれはお疲れでしょう」

そう言いながら本堂へ案内してくれた。

茶を喫しながら四方山話に耽るうちに地蔵の話になり、和尚の話で家光に異母弟がいることを知った。

家光は帰城するとさっそく土井利勝らに吟味して、高遠三万石の保科正之が異母弟であることを確認した。

家光は寛永十三年（一六三六）七月二十一日異母弟正之を出羽山形二十万石の大大名に転封させて厚遇した。母お靜病弱の僅か一年後のことであった。お靜が生存していればどんなに喜んだことであったであろう。

山形城に落着いた翌寛永十四年、正之は土井老中を介して、

「保科家伝来の品々をすべて保科弾正忠正貞に譲りたい」

と将軍家光に願い出た。

家光の許可が出たので正貞は以降保科家の直系と見做され、正之は尾張、紀伊、水戸のご三家に次ぐ徳川第四位の御家門とされ、松平姓を名乗り葵の紋を許されて御家門となったが、正之は保科姓のままで過ごした。

いっぽう保科家直系となった正貞は、慶安元年（一六四八）上総飯野（千葉県富津市）に一万七千石を賜わり陣屋を構えた。

正之は寛永二十年（一六四三）陸奥国會津二十三万石に転封されて入部し、會津松平家の始祖になった。

このとき正之は母お靜の墓所を高遠浄光寺から會津浄光寺に改葬した。

くだって正之は、慶安四年（一六五一）四月老中堀田加賀守正盛から臨終近い将軍家光の床に呼び出され直々に、

「大納言（家綱）はまだ幼少の身ゆえその方が補佐いたせ」

と命ぜられた。

家光はこの月二十日に四十八歳で歿したので世子家綱が十一歳で四代将軍になった。

同年八月、保科正之は家光の〈託孤の遺命〉により四代将軍家綱の輔弼となって幕政に貢献した。

（了）

コロナ感染の「不思議なサイクル」を簡単に説明できる「仮免疫理論」

新井宏

令和三年十月四日付のニューヨークタイムスは、アメリカのコロナ感染状況に基づき、理由は不明確ながら、コロナウイルスの感染はおよそ二ヶ月拡大し、その後、およそ二ヶ月後退するという「不思議なサイクル」があると報道した。

筆者は前からコロナ感染状況について、世界中に四～五ヶ月周期で感染のピークを迎える事例がかなりあることを知っていた。それに対して、ニューヨークタイムスがどんなことを言っているのか、早速、インターネットで探ってみた。

それによると、アメリカのコロナ新規感染者が感染のピークだった八月末から十月三日にかけて半減した他に、昨年十一月から二ヶ月で感染者が急増、その後およそ二ヶ月かけて減少している事例があって、「不思議なサイクル」に気付いたと言う。しかし、このような現象は既存の理論では全く説明できないとしている。

今までの仮説としては、英・エディンバラ大学疫学者マーク・ウールハウス教授が唱えた「一通りまん延」すなわち「一定の人」の間で感染し尽くしてしまったので、急速に収束したという説があるが、「不思議なサイクル」については、なにも説明出来ていないともいう。

それにしても名門ニューヨークタイムスにしてはお粗末な記事だと思っていたら、案の定、原記事は提供社の都合により削除され、今は概要のみが掲載されている。

おそらく、感染症研究者から文句がでたのであろうが、流石ニューヨークタイムスなのは、この「不思議なサイクル」説が世界中のマスコミによって取り上げられているのである。

実は、筆者は既にこの「不思議なサイクル」について、極めて簡単な「仮免疫理論」と称するアイデアを持っていた。

「仮免疫理論」とは筆者の命名であるが、正規のコロナワクチンでさえ、二回接種後でも時間が経過すると、免疫が後退する事例が多くあり「ブースター」接種が真剣に検討されているのをご存知であろう。ワクチン接種を完全に済ませていた元国務長官バウエル氏も八十四歳でコロナ感染症に罹り十月十八日に亡くなっている。

抗体検査に主として使われる「抗体IgG」も時間の経過によって消失してしまうという。インターネットに掲載されていた抗体減衰曲線を見ると感染初期に作られる「抗体IgM」は一ヶ月ほどで消滅するがやや遅れて作られる安定な「抗体IgG」は消滅するまで五ヶ月ほどかかる(//jamanetwork.com/on11/20/2021/)。

その一方で、新コロナウイルスに感染すると体内にできる免疫は八か月間続くとする研究成果をアメリカのラホヤ免疫研究所らの研究グループが、科学雑誌サイエンスに論文を掲載した(//www3.nhk.or.jp/news/html/20210109/)。

ラホヤ研究所はアレルギー学の父、故石坂公成氏が所長をつとめていた「免疫学」のメッカだと言う。

おそらく多量のコロナウイルスによって出来た「抗体」と微量のウイルスに接して出来た「抗体」ではその寿命に差が生ずるであろう。

そこで考えたのが、抗体にも恒久的な「本免疫」と二～三ヶ月で免疫の切れる「仮免疫」があり、その「仮免疫」が「不思議なサイクル」に関与しているとの「仮説」

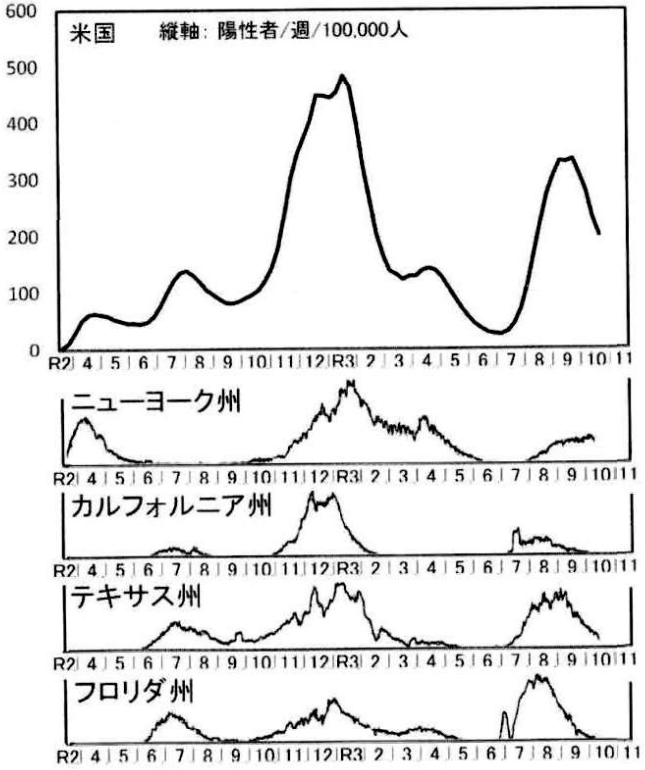


図1 米国の新規コロナ陽性者発生状況

である。

この仮説に立つと驚くほど簡単に「不思議なサイクル」を再現できる。

「不思議なサイクル」の事例

ニューヨークタイムスは米国の事例を見て、「二ヶ月で感染者が急増しその後二ヶ月で減少している」という「不思議なサイクル」に気がついたという。

そのため、まず米国の感染状況を調べてみた。図1に示す。この図だけを見て「不思議な現象」を認めたニューヨークタイムスは流石であるが、どこか「軽はずみな点」も感じられる。それというのは、米国は広大で、東部、西部、南部で感染状況が異なり、四ヶ月サイクルなど、下部に示したニューヨークでもカルフォルニアでもテキサスでもフロリダでも見当たらないからである。

ただし、ニューヨークタイムスの推論結果は正しいと思う。状況を知るため、人口五千万人以上の中国を除く二十九国の内で「不思議な現象」に該当する地域の感染者発生状況をまとめて見ると、図2のように沢山ある。

その中でも日本の例は注目に値する。日本では五波にわたって周期的なコロナ感染があるが、そのほとんど全てが「四ヶ月周期の不思議なサイクル」に該当しているのである。

テレビのニュースで毎日のように均整のとれた「サイクル図」を見ている日本人にとっては、何を今更と感じたにちがいない。ニューヨークタイムスに替わってなぜ日本の新聞社が「不思議なサイクル」のニュースを世界

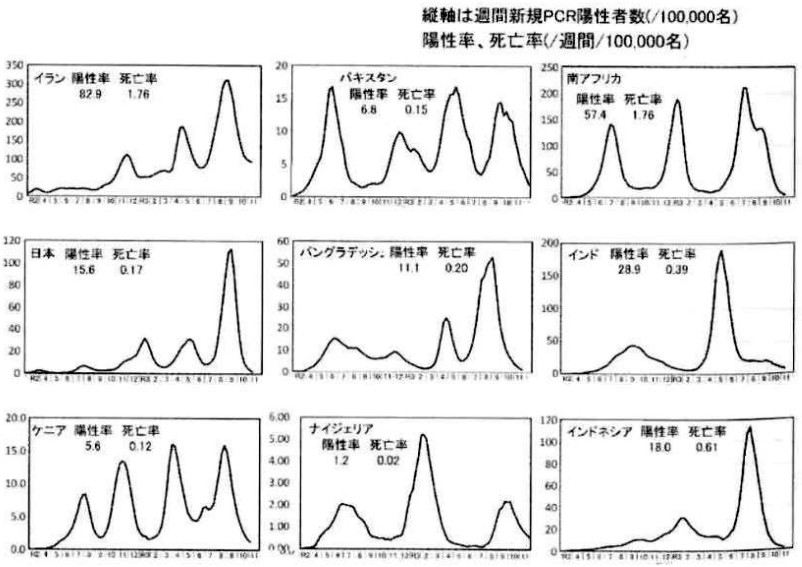


図2 PCR陽性者のピークのサイクル事例

に発信出来なかったのだろうか。イランもケニアもパキスタンもバングラデッシュもほぼ同じサイクルを示しているばかりでなく、少し周期は長くなるが、ナイジェリアも南アフリカも均整のとれた綺麗なグラフである。

人口五千万以下の諸国を加えるなら、より典型的な事例が増えるに違いない。

周期性は感染システムの内的な自律要因

コロナ感染の周期性について、原因を外的な要因に求めれば必ず失敗する。気温や湿度、日照や雨量、風力や風向きなどは、コロナ感染と密接に関係するが、状況の異なる世界各地でほとんど同一な「不思議なサイクル」を形成するはずがない。それは感染システムに内在する自律的な振動現象によると見るのが自然なのである。

振動現象とは変化が進むとその変化量に応じて変化を止めようとする力が働く時に起きる。すなわちコロナ感染で言えば、感染を抑える免疫力が周期遅れで変動する時に起きる。

感染者が増えるとそれに比例して免疫者も増える。一度免疫を得た者が免疫を失わなければ、免疫者は増え続け、いずれコロナは終息に向かう。これが集団免疫理論であり、免疫者が増大し続けるのであるから、再び感染増大に向かう理由は何もない。再び増大するには新たな変異ウイルスが生じる等の理由が必要であるが、それが四ヶ月周期で起こる理由など説明し難い。

感染が定期的に増減を繰り返すことは、いったん増えた免疫者が一定期間後に免疫を失うことでなら説明できそうである。それが「仮免疫理論」の数理モデルである。すなわち、獲得した免疫の内、有効期間が二ヶ月程度の「仮免疫」が大量にあるとすれば、その二倍の四ヶ月の「不思議なサイクル」をうまく示せる。

まずはその「仮免疫理論」の数理モデルで作成したグラフ集を見て頂きたい。図3に示す。

計算基礎とした設定した数値は次の三点のみである。

基本週間感染増大率（K1）　一・三～一・七

PCR陽性者と仮免疫者比率（K2）　五十～二百

仮免疫者の免疫有効期間（K3）　六～十六週間

また、逐次計算には簡単な六つの式を使うだけである。

それだけなのに、ご覧のように「不思議なサイクル」を示すグラフを量産できる。

ここにK1とは免疫者の影響を考慮しない時のPCR陽性者の週間増大率、K2とは新規PCR陽性者数からその時の仮免疫者発生数を推定する倍率である。

ただしPCR陽性者数というのは、コロナ感染を示す最も重要な基本値でありながら、極めて問題の多い数値で、国によって検査数が極度に異なる上、陽性者判定基準のCT値という閾値も大幅に異なる。重要な問題なので後に補足する。

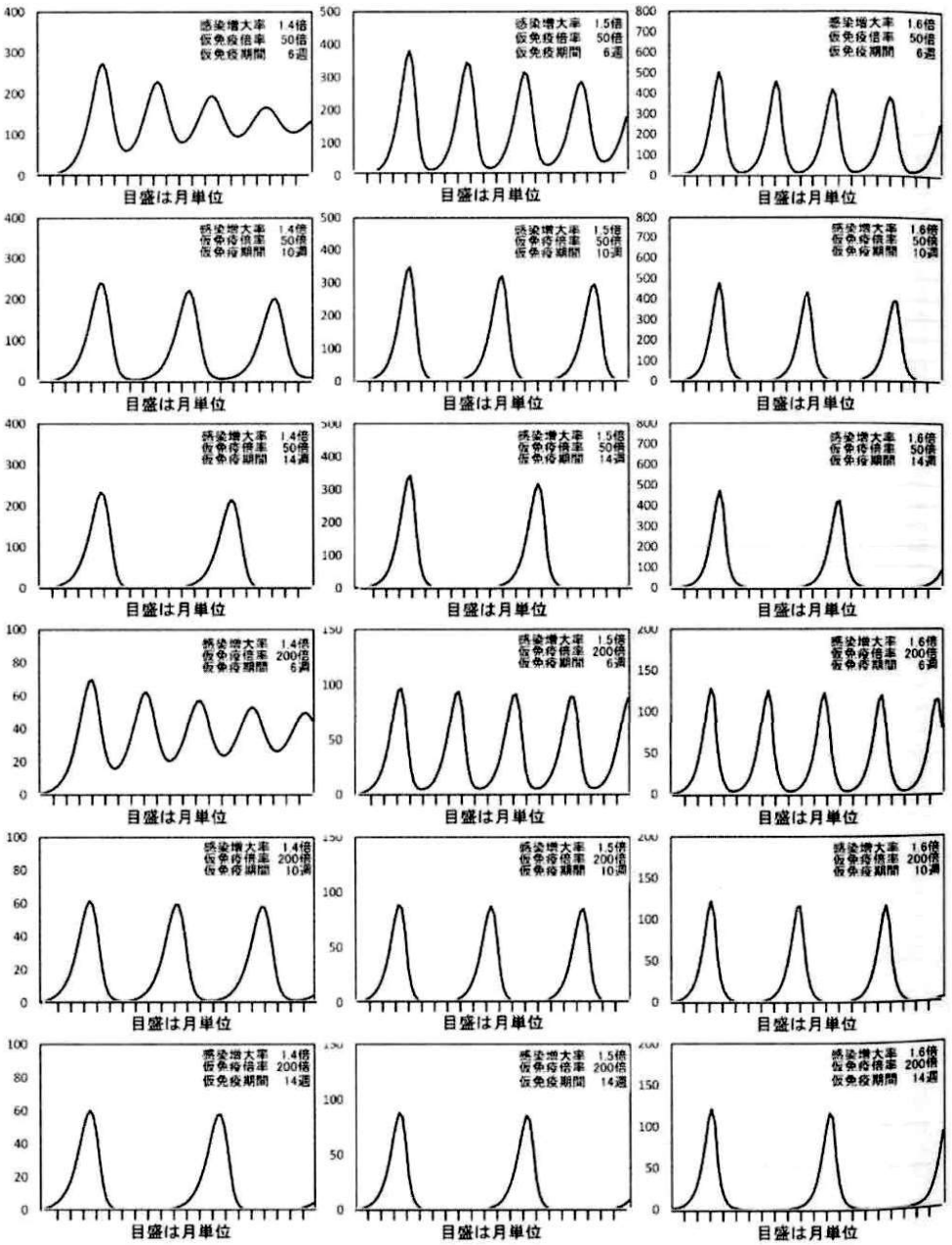


図3「仮免疫理論」により計算した「不思議なサイクル」

仮免疫者の免役有効期間（K3）は「不思議なサイクル」に繋がりそうな六週間から十六週間を想定した。

「仮免疫理論」モデルのエクセル計算は、まず第一週のPCR陽性者欄や仮免疫者欄に初期値を設定してから、条件に基づき第二週の陽性者数や仮免疫者数を計算、更に週間感染増大率を補正して、第三週のPCR陽性者数を求める。以降この計算を繰り返す。

この手順を文章で説明しようとすると冗長であり時には不正確になる。そこで、作成した「エクセル」のプログラムを利用して説明することにした。

図4に「エクセル」の逐次計算式（上部）と出力結果（下部）を示す。「エクセル」の基本を知っている方ならこれで「仮免疫理論」を正確に理解し再現できる。

簡単に解説すると、表中にB36とかC37とあるのはB列36行、C列37行の「セル」を意味する。このプログラムでは36列目とあるのが初週の意味で、この列には事前に初期データを記入しておくが、37行以降は表に示した六つの計算式によって、逐次計算して結果を入れて行く。A列は第何週目かを示し、B列からH列は表に示した数値が入る場所である。

その内、E37に入る数値が、免疫の無い者の比率である。最初は全員免疫がないから、

「仮免理論」モデルのエクセル計算

週間基礎増加率	K_1	1.5
仮免疫者推定係数	K_2	3000
仮免疫期間(週)	K_3	6

エクセルのB,C,D,E,F,G列に入っている数式

陽性者	B37	B36*H36
免疫者	C37	C36+B37
仮免者	D37	SUM(offset(B36,1-K_3,0):B36)
感染率	E37	1-(C37+K_2*D37)/100000
補正1	F37	IF(E37<0.1,SQRT(0.1),SQRT(E37))
増加率	G37	F37*K_1

	A	B	C	D	E	F	G
16		列1	列2	列22	列3	列32	列4
17	第n週	陽性者	免疫者	仮免者	感染率	補正	増加率
18	ダミー	0	0	0	0		0
19	ダミー	0	0	0	0		0
34	ダミー	0	0	0	0		0
35	ダミー	0	0	0			0
36	1週	1.0	1.0	0.0	1.00	1.00	1.50
37	2週	1.5	2.5	1.0	0.97	0.98	1.48
38	3週	2.2	4.7	2.5	0.92	0.96	1.44
39	4週	3.2	7.9	4.7	0.86	0.93	1.39
40	5週	4.4	12.4	7.9	0.76	0.87	1.31
41	6週	5.8	18.2	12.4	0.63	0.79	1.19
42	7週	6.9	25.1	18.2	0.45	0.67	1.01
43	8週	7.0	32.1	24.1	0.28	0.53	0.79
44	9週	5.5	37.6	29.6	0.11	0.33	0.50
45	10週	2.8	40.4	32.9	0.01	0.32	0.47
46	11週	1.3	41.7	32.5	0.03	0.32	0.47
47	12週	0.6	42.3	29.4	0.12	0.35	0.52
48	13週	0.3	42.7	24.2	0.64	0.80	1.20
49	14週	0.4	43.0	17.6	0.74	0.86	1.29
50	15週	0.5	43.5	10.9	0.84	0.91	1.37
51	16週	0.7	44.2	5.9	0.91	0.95	1.43
52	17週	1.0	45.2	3.8	0.94	0.97	1.46

図4 PCR陽性者数のシミュレーションプログラム(エクセル)

この数値は1.0であるが、免疫者が増えて行くと、0.9～0.8と下がって行く。それにしたがって、週間の増加率、例えば1.5が1.5×0.9、1.5×0.8と下がって行くとすれば、簡単なのであるが、ややこしい論理がある。

それは、通例として、感染増大率には週間の増加率を使わず、一人の感染者が何人の新しい感染者を生むかを示す「感染力」を使うからである。

ニュースでデルタウイルスは「二・三倍の感染力」とか出て来る。日常用語としては、それでよいかも知れないが、「感染」は明らかに指数関数現象である。一週間の増加率を1.5倍とすれば二週間で2.3倍、三週間で3.4倍、一ヶ月で5.8倍となる。感染者が他の人を感染できる期間はほぼ二週間だという。二週間で2.3倍なら一週間なら2.3の平方根の1.5倍となる。同じ論理で、免疫の無い者の比率を掛ける相手は、週間の増加率ではなく、感染力の方で、2.3×0.9、2.3×0.8となり、その値の平方根が週間の増加率となる。そのため免疫の無い者の比率の平方根を計算して週間の増加率に掛けているのである。

随分長い説明になったが、ここまで準備して、計算条件K1、K2、K3を入力してスタートすると一秒もかからず百週目までの計算が終わり、「エクセル」の提供するグラフが出力される。図3に示したグラフは全てこのようにして計算したもので、特殊な仕掛けなどなにもない。

若干、計算結果についてコメントすると、「不思議なサイクル」が四ヶ月となるのは、免疫有効期間を六週間から八週間とした場合であり、免疫有効期間とサイクル間隔は比例関係にある。

一方、PCR感染者のピーク値に対して最も影響が大きいのは、PCR陽性者対仮免疫者比率（K2）である。この値が大きいほど仮免疫者が計算上増えて陽性者の発生を抑制するのであるから当然であろう。

また基本週間感染増大率（K1）が大きい程、感染拡大の速度が大きくなりPCR感染者ピークも上がるが、大きな差は生じない。感染者が増大することは仮免疫者も増大することを意味し相殺されるからである。

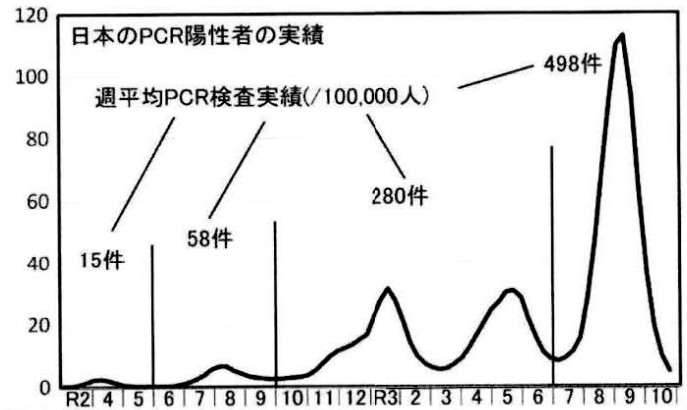
日本の事例の「仮免疫理論」による復元

ところで図3のモデル計算結果はピーク高さが一定であるケニア等の場合は全体的な姿も良く一致するが、日本のように時期によりピーク高さが大幅に異なる場合は、工夫が必要である。

実は、日本の場合、図5の上欄に示すように、時期によってPCR検査の実施率が大幅に異なりグラフの基本数値であるPCR感染者数もそれによって大幅に影響を受けて、不都合が生まれるのである。

この現象を図5によって説明すると、当初はPCR受検者数が週間十万人当たり十五人に過ぎなかったのに最近では五百人に達し三十倍も異なっている。PCR検査

件数が増えれば増えるほど陽性者が増える傾向は図5に示すようにマクロには間違いない。そこで一般モデルでは一定値として組み込んで置いたPCR陽性者対仮免疫者の比率（K2）をPCR検査の実績に応じて時期によりK2を変えながら計算を進めて見た。その結果はピークの高さも含めて、モデル計算結果（下図）が実績（上図）にほぼ完全に一致した。



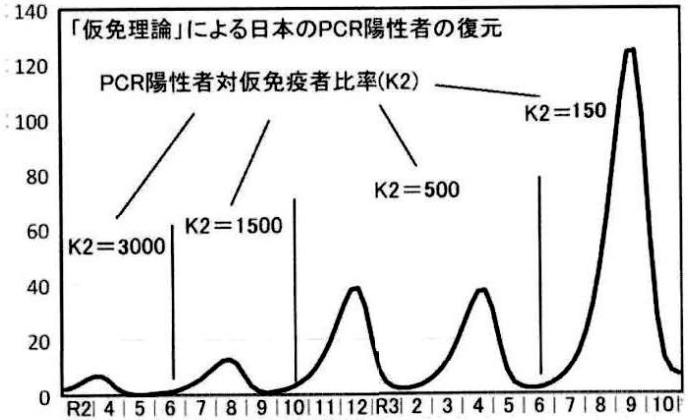


図5 時期により異なるPCR検査数の影響を考慮したモデル

ただし、日本におけるPCR検査の増加がマクロには陽性者の増加と連動していることは間違いないが、実は検査件数の増加は、陽性者の増加に二週間遅れているのである。その状況を図6に示すが、陽性者の増加にあわてふためいて検査数を増やしているとしか考えられない状況なのである。

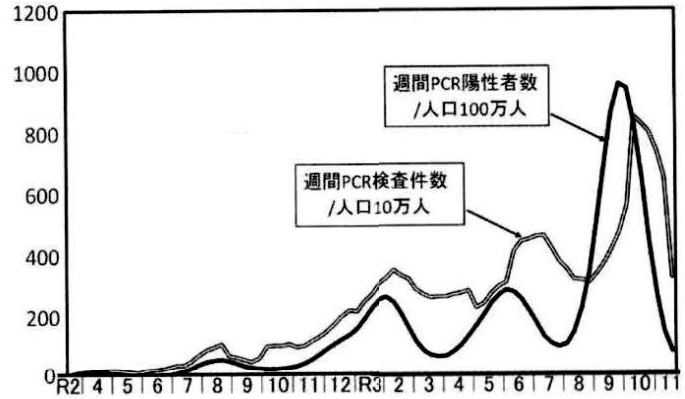


図6 PCR検査件数と陽性者数の関係

さて、このように「不思議なサイクル」を簡単な理論で説明出来ると、もうひとつの疑問「なぜ第五波でピークから感染者数が激減したのか」についてもふれる必要があるだろう。

第五波の激減にワクチン接種が大きく影響していることは確かであるとしても、急減のタイミングとは一致せず説明が難しいという。韓国のメディアなどミステリーだとして、「検査数が少ない」とか「歪曲」とさえ言っている。

ところが図5、図6をみれば明らかなように、「仮免疫理論」では第五波の実績とそっくりなグラフを再現しているのである。いや、もう少し踏み込んで言えば、過去に発令された四回の「緊急事態宣言」の影響がどこに現れているのであろうか。とにかく実績と「仮免疫理論」の間に差がないということは、「宣言」や「対策」などがあまり影響しなかったことを示唆している。唯一の例外は、昨年十月に本格化した「Go Toトラベル」であろうか。図5の実績を見ると、その一ヶ月後に、再現図にはない膨らみがあることくらいであろう。

第五波の感染者の大量発生は、仮免疫者も大量に生まれたことを意味し、数週間遅れでコロナの急激な抑制を担ったはずである。これが「仮免疫理論」の骨子であり、「なぜ第五波でピークから感染者数が激減したか」の回答だと考える。

この現象は日本のみではない。例えば図2に示した九ヶ国を見ても、感染者が急増した後は全て急減している。「不思議なサイクル」があまり明瞭でない国でも最大のピークを記した後に急減する例が多い。極端に言えば、強力な対策を実施し感染者の急増を遅らせた場合ほど終息が長引いているのである。

低濃度ウイルス空間は絶好なワクチン接種場

「仮免疫者」が生まれるのは、発症の危険がないコロナの環境に長時間暮らしていて抗体を得るイメージである。それはワクチンの機能に似ている。

コロナワクチン開発の最重要項目は、万一にもワクチン接種で発症するようなことがないことへの保証である。そのため死せるウイルスや活性を失った生ワクチン、あるいは疑似ワクチンなどを使って抗体を作る。活性の高い実際のウイルスを薄めに薄めてワクチンとして使用しようと考えるのは邪道であろう。しかし発病しない低濃度のウイルス環境であってもそこに長時間暮らしていれば安全に免疫を獲得できる可能性はある。

最近、飛沫感染よりも空気感染を問題とする議論が盛んである。そうであれば、浮遊するウイルスの空間密度が対象となる。

空間で言えば百㎡の部屋に一人の感染者がいてウイルスを充満させていてもそれを四万七千㎥の東京ドームに拡散させてしまえば、五千分の一の濃度になる。百人の感染者を別室に集めて、その排気を全て東京ドームに導入、ウイルスを充満させても、まだ五十分の一の濃度である。

薬品類でも少量ずつ採るなら薬であるが、十倍もまとめて飲むと死に至る。たとえば、アルコールの致死量は三百ccほどで晩酌の十倍、一日十グラムに制限を受けている塩でもその十倍の百グラムが致死量である。ウイルスでも少量ずつ摂取している分には発症なく安全に、抗体を少しずつ作るのではなかろうか。

だから筆者は散歩中マスクをつけない。二㍍以内で会話する可能性の有るときだけ急いでマスクをつけるが、屋外は低濃度のウイルスで免疫をつける絶好な機会だと思っているからである。

コロナ問題に人工知能は使われているのか

これまでコロナの「不思議なサイクル」について調べていて、人工知能による研究があまり目立たないのに気がついた。何でも「人工知能」と騒いでいる時代なのに不思議である。

そもそも人工知能（AI）とは何なのだろうか。入門書の表書きを覗いてみた。

結論から言うと、人工知能（AI）という言葉についての明確・厳密な定義はなく、一九六〇年代から始まった統計学等に基礎をおく多重回帰分析とか線形計画法とかの解説から始めている本もある。それなら筆者は先頭走者の一人である。

企業ではそれらの手法を使って成果をあげていたし、物理化学の法則「オストワルド成長」の理論式を見つけ。学会から論文賞を受けたこともある。趣味の研究では、古墳時代の雑多な遺蹟計測値から「古韓尺」を見出し、吉川弘文館から出版した。

企業を卒業してからは韓国の国立慶尚大学の招聘教授として、足かけ八年間、考古学の研究に没頭し、炭素十四年代とか鉛同位体比の解析で数多くの論文を書いた。最近では、数理考古学者などと名乗ることもあるが、振り返って見ると、生涯を通じて。雑然とした実績資料から「理論」を求める研究に従事していたことになる。

だから、コロナの資料から理論モデルを導くのも筆者にとっては楽しい分野なのである。既に手元に蓄積したデータベースも個人としては大変な量になる。

コロナ統計の基礎数値の問題点

前にコロナ感染指標の代表であるPCR検査の陽性者数は問題の多い統計値であると述べた。原因は二つである。

その一つは陽性者の把握をPCR受検者のみとしていることである。毎週の受検者は人口の一％に満たず、その他の大多数の中にも検査をすれば、かなり陽性者が発生するはずである。

もうひとつの問題はPCR検査の種類によって陽性と陰性を分ける限界ウイルス量に百倍ほどの差があることである。それを人数単位で言えば十倍ほどになるであろうか。ただし、この問題について基礎資料もなく、数理モデルを作る際の障害になっている。

そのような状況であっても他に資料がないので「仮免疫理論」でもそのPCR陽性者の数値を対象にしている。

しかし全く状況を理解せずに勝手な前提で議論を進めていると間違うおそれがある。そのため、状況を簡単に整理したのが表1である。

PCR検査は、検体中のコロナウイルス数を2のCT乗倍まで培養して判定する方式でCT値が45の検査なら検体中に十個ほどのウイルスがあれば陽性となるが、CT値が35なら一万個ほど、CT値が30なら三十二万個ほどのウイルス数が無いと陽性を確認できない。しかも検査方式によって上限のCT値が決まっていて、その回数まで培養して分析レベルに到達しないと「陰性」となる。途中で分析可能になればそこで陽性として終了するが、報告は「陽性」のみで検査終了時のCT値は付けない。

一般のPCR検査方式は閾値をCT30とかCT35とかCT40に設定する場合が多いが、いずれの場合でも判定は「陽性」または「陰性」しかない。したがって、閾値を35とする検査で「陰性」となっても閾値40の検査で「陽性」となる場合がある。

現実に知りたいのは、CT値がどのような症状に対応し人数的にどのような分布になっているかである。

出典はわからないが、CT20レベルとCT40レベルを比較すると「ウイルス数は百万倍、人数は百倍」との見解があった。個々の事例に当たってみるとおおよそ成り立っているようである。そこで表1に相対値で私案をまとめてみた。

表中では死亡者に対して陽性者の人数を百六十倍とし

表1 PCR検査の閾値とその感染レベルと人数比

PCR検査閾値	検体中のウイルス検出限界	人数比	感染レベル
CT17	2560000000	1	死亡者
CT20	320000000	5	重症者
CT25	10000000	16	有症者（長期免疫者）
CT30	320000	50	有症者（要隔離）
CT35	10000	160	陽性者（隔離推奨）
CT40	320	500	陽性者（仮免疫）
CT45	10	1600	陽性者（仮免疫?）

世界平均の死亡者数に対する陽性者数の実績比は49.2であるが、陽性者はPCR検査を受けた者のみの集計で大多数の未検査者中の陽性者はふくまれていない。

ているが、全世界の実績値は五十倍ほどで合わない。これはPCR検査の陽性者の他に未検査の陽性者を含めると三倍ほどになるという筆者の認識による。

表中に陽性者（仮免疫）と記した部分が「仮免疫理論」の対象者である。このように設定するとCT40からCT45の陽性者が「仮免疫」の対象になり、死亡者一に対して千六百倍ほどになる。PCR陽性者が実績では五十倍なのは実際の陽性者を大幅に数え落としているからであるが、この数値を利用するしかない。その結果、免疫者の数はPCR陽性者の三十倍となる。

ながながと面倒くさい議論を続けたのはこの三十倍という数値が「仮免疫理論」の数理モデルのK2に相当するからである。あるいは数字合わせのように思われたかも知れないが、この整合性を得て初めて「仮免疫理論」の三つの数値にそれぞれ基礎を得た事に成り、合理性が成り立ったと考える。

「仮免疫」には免疫記憶が関係している

ここまで免疫について、「抗体IgG」とか「抗体IgM」とか書いてきたが、いわば自説「仮免疫理論」を語るのに、好都合なイメージがあったので借用したのであって、「抗体」のことなど何も知らない。

解説書によると、抗体とは免疫グロブリンというタンパク質のことで、IgG、IgA、IgM、IgD、IgEの五種類があり、この稿で主として取り上げたIgGにもIgG1～IgG4の四種類のサブ抗体があるという。いずれにしても大変複雑なものらしい。だから医学的な解説を読んでもさっぱり判らない。

しかし、なかには素人向けに解説しているものもある。それらを適当にまとめてみると次のようになる。

免疫には、先天的な「自然免疫」と生後獲得する「獲得免疫」があり、感染症の場合もまずは自然免疫が対応するという。しかし自然免疫だけでは防げず感染してしまった時に獲得免疫を得るという。

獲得免疫には免疫記憶という機能があり、一度感染したウイルスが再度攻撃してくると迅速に対応するという。実は「自然免疫」にも免疫記憶があるらしい。免疫記憶があると再度ウイルスが攻撃して来た時に迅速に対応するので、病状に気がつかない内に治癒してしまう場合が多くなる。

そのことを読んでいて、筆者の言う「仮免疫」とは、免疫記憶によるのではないかと思った。すなわち極めて軽度なウイルスの攻撃を受けた場合、自然免疫だけで対応して、治まってしまうこともあるだろう。それでも免疫記憶が残り、再度ウイルスが攻撃してきた時には迅速に対応する。もちろん自然免疫で済まない時には、迅速に獲得免疫の出番を促すであろう。このようにして、IgGのような抗体が十分に形成できなくとも、ある期間、感染し難い免疫状況を作るのではなかろうか。

このようなモデルの方が、軽度な「抗体IgG」によって住民の数十％に及ぶ免疫が形成されると考えるより「ありそうだ」と思う。

おわりに

筆者の提示するコロナ感染に関する「仮免疫理論」によれば、ニューヨークタイムスの提起した「不思議なサイクル」も、日本における「第五波の感染者の急激な終息」も極めて簡単な「数理モデル」により、同時に解決できる。

こんな簡単な「理論」なら既に数多くの方が試案をもっていたはずである。いや、いま現在、筆者が知らないだけで既に発表されているかも知れない。なぜそれらの「アイデア」が流布しないのであろうか。それは検証に必要な信頼できる資料に著しく欠けているからであろう。

物理学では「理論」は全て「仮説」である。画期的な「理論」で大多数の学者が大賛成しても、予測が観測されない内は「仮説」である。しかし「理論」が提出されたことで、新たな研究が起こり、長年かかってやっと実証に成功して「仮説」が「理論」になる場合が多い。ところが、こんどは「理論」側の欠陥が見つかり、新たな「仮説」が必要となる。「理論」はこのようにして進化する。

今回の「仮免疫理論」などまだまだ実証とはほど遠い「仮説」のなかの「仮説」である。しかし、この「理論」を検証するためには、どのような資料整備が必要か示したつもりである。

（追記）

今、日本は感染者激減、韓国は感染者激増と全く対照的な状況にある。なんでも「K防疫」と称して文在寅大統領は世界に向かって自慢しまくっていた。

そのためなかなか発言できなかった慶北大学医学部予防医学科のイ・ドクヒ教授が、日本の感染者数急減は「自然感染を防がなかったおかげ」と主張し、韓国の防疫の大前提、『無症状であっても絶対にかかってはならない感染症』という仮定に致命的な誤りがあると主張しはじめた。筆者の主張、軽レベルのコロナ感染はむしろワクチン効果があるので推奨すべきと言う「乱暴な意見」とまったく同じであり、ちょっと嬉しくなっている。

令和三年十一月二十五日

（追記2）

図5に示した復元図は第五波までで止めてあるが、当然、二月十二日頃に第六波のピークが来るとの予測があった。掲載しなかったのは「合評会」が中止される可能性が高いとの予想となるのを嫌ったからである。

令和四年一月十五日

復興の街・陸前高田（大津波の悲劇から十年）

田寺怜葦

十月七日夜十一時近く、突然の大きな揺れに私の頭コンピュータが始動。それまで夢中になっていたＰＳ４ゲーム機のコントローラーを放り出して急いで二階へ上がり、あたふたと寝室の窓を開けて逃げ道を確保。古い家なのでこの手順は必須なのです。怠惰な生活にバチが当たったのかもしれない等と思いながら翌日の事が心配になる。翌八日は久しぶりの一泊旅行を予定しているのですが、行き先は十年前の東日本大震災で大津波の被害を受けた岩手県陸前高田市。これは行くなという天の声なのか。

上野から東北新幹線で一ノ関へ向い、一ノ関から大船渡線で気仙沼へ行きます。気仙沼のホテルだけは予約してあるものの、他のチケット等は成り行き任せ。横浜駅東海道線ホームの混雑ぶりに驚いていると、地震の影響で電車が遅れているとの構内放送が…。

二時間近い遅れの結果に乗車できたのは、上野発十一時四十二分のやまびこでした。一ノ関着は十四時十分になりますから、気仙沼に到着できるのは十六時近くになるでしょう。車内は思いの外に混雑していた。マスク着用で二時間は辛いなと思いながら、リュックを下して座席を少しだけリクライニングさせる。二人座席の窓際チケット購入が幸いして？隣は空席という快適な旅の始まりとなった。私が陸前高田を訪れたのは、あの大震災の二年後でした。当時は、毎日のようにテレビ画面に映し出されるパニック映画のような光景に戸惑いました。長い人生の中で一度も経験したことのない驚愕とでもいう感じでしょうか。そんな中に陸前高田の避難所からの中継がありました。喪失と絶望に打ちひしがれた人々の言葉はどれも悲痛でしたが、中でも一人のお婆さんの表情と言葉が私の心を直撃しました。悲しみという感情さえも失い、まるで地の果てに独り佇んでいる詩人の詩のようでした。「私はもともと一人だから…でも、家も町も仲の良い友達も…みんな無くなってしまった。」底知れない喪失感に心が震え、この悲惨な災害を絶対に忘れてはいけないと自分に言い聞かせました。人は忘れる生物ですが、私は特技というくらいに忘れるのです。それで対策として本を書くことにしました（贅沢な対策です）

あれこれと試行錯誤の末に構想を決めたのが平成二十六年に出版した「もらもらの村」です。人生の荒波に流され、ある場所で合流した五人の女性達の物語です。その中の一人を陸前高田の震災被災者としました。避難所のあの女性の思いの千分の一でも伝えられたらとの思いがありました。物語なので他の登場人物についてはある程度頭の中だけで創り上げられますが、あの大津波を体験した人間を描くには資料だけでは描けませんし、それは不遜でもあると考えました。そこで、思い切って現地に行くことを決めたのです。

初めて見る陸前高田の町は、縦横無尽に走るアスファルト道路以外ほとんどが消失していて、まるで町の骸骨のようでした。道路沿いの所々には車や家具、商店の看板等々、ありとあらゆる人々の生活の残骸が今にも崩れそうにうず高く積み上げられていました。家々の痕跡はコンクリートの土台だけで、それらの土台を飾るかのように、見たこともないような大きな花をつけた白とピンクの白つめ草が町中を覆っていました。もちろん駅舎も流され、小さなホームだけが墓標のように残されています。悲しくなる程に清浄な空気を吸い込むと胸が痛くなりました。復興にはまだまだ道遠しという中でも人々の暮らしは続いています。数少ないながらも仮設の店舗もありました。空腹と喉の渇きを覚えた私は、その中の一軒「ジョニー」という喫茶店に入りました。「ジョニー」は中年の女性がオーナーのジャズ専門の喫茶店で、アルミサッシの引き戸を開けると都会的なジャズが静かに流れていました。内部はありふれた食堂のようでしたが、壁の棚にジャズのレコードが並んでいます。客はご近所の顔見知りらしき数人でしたが、よそ者オーラをまとった私は遠慮がちに席を取りました。飲み物と軽い食事を注文したものの、店の主人や客たちのそっけない雰囲気に少し気後れ気味です。後に分かったのですが、この辺りの人々はあまりとっつきが良くないのです。少し時間をかけて会話をすると暖かく誠実な方々ばかりでした。翌日また店を訪れて自分の目的を伝えると、オーナーの女性は様々な記憶や情報を話して下さっただけでなく、この地方の主要方言を記したプリントまで下さいました。もっと詳しいことは高台にある仮設の市庁舎に行けば市長さんに話が聞けるとのことでした。これまでも多くの

人々が取材に来たとのことでしたが、時にはデリカシーの無い経緯や対応に傷ついたり不愉快な思いをしたこともあると彼女は顔を曇らせました。これはまさしく私自身へのお叱りと戒めだと受け取りました。この地の人々が経験した苦しみや恐怖、喪失の千分の一も理解していない浅はかな自分に気付いたのです。

あれから八年、ジョニーから新店舗開設の葉書が届きました。そう言えば、ネット上のジョニーのホームページでの再建協力呼びかけに、私もささやかながら協力をした記憶がありました。「もらもらの村」を出版して以降、陸前高田の事をすっかり忘れていた薄情な自分を軽蔑しました。忘れるという事は人間の長所であり欠点です。コロナ禍もあり、なかなか出掛ける決心がつかないでいましたが、こんな時代になってしまったからこそ出来る事はどんどん実行しようという結論に至り、ジョニーへの開店祝いを届けに陸前高田への一泊旅行を決めました。前回は一ノ関のホテルに泊まり、そこから大船渡線で陸前高田へ行きましたが、一ノ関から高田までは二時間以上もかかる為、今回は中間点の気仙沼に宿を取りました。初めて降りた気仙沼駅前は人影もまばらでしたが、見かけた人は皆マスクをつけていた！　もはやマスクは魔除けのお札と化している。駅前のビジネスホテルも森閑として、翌朝の出発までに視認できた客らしき姿は二名だけでした。

震災で大被害を受けた大船渡線は、一ノ関から気仙沼までの区間だけを二両編成のワンマン車両が運行しているのですが、廃線となったその先はＢＲＴという高速輸送サービスのバスに乗り換えます。このバスは線路敷を利用した専用道や専用トンネルなどを活用したスピードアップ、また利用者が使いやすい運行本数、設備の整った駅（停留所）等により地元の人々や旅行者に高評価を受けているようです。

八年ぶりの陸前高田の町はかなり整備されていました。町の中心には立派な市庁舎や大きなスーパーマーケットが建ち、町としての機能が整い始めています。また、「奇跡の松」のある海辺りは高田松原津波復興祈念公園となって、その中には東日本大震災津波伝承館や道の駅など多くの施設がありました。震災前の姿そのままに復元された小さな駅舎はＪＲのチケット販売所として使われています。とは言え民家はまだまだ少なく、空き地には綺麗な花々がさいていました。ふと、八年前に見た大きな白つめ草を思い出して探しましたが、ちらほらと見つけたものの、あんなに大きくて綺麗な花はひとつも見当たりませんでした。野の花にとって人間は邪魔者でしかないようです。

ジョニーのマスターである照井さんはお元気でした。ちょうどお昼時で、数人の客のいるフロアと厨房をお一人で忙しそうに行き来していました。静かにジャズが流れる店内で、お馴染みさんらしき方々がランチを楽しんでいます。仕事の合間を見て私の席に着いた彼女は控えめながらも、今の幸せとこれまでの苦労を語って下さいました。彼女の様子を見て、私が以前に送った「もらもらの村」が不快な思いなく受け入れられたと感じてほっとしました。「今日、田寺さんがいらっしゃるというので、お会いするのを楽しみにしている人がいるんです。」「？」聞けば、照井さんたちが作っている小冊子の仲間で、近所に住むゆう君という人物らしい。「彼はとても恥ずかしがり屋で、特に女の人とはまともに話せないんですが…よろしくお願いします。」噂をすれば何とやらで、ゆう君とおぼしき人物がそわそわとした風情で姿を現した。他人の年齢を推測するのが苦手な私には、彼が二〇代なのか三〇代なのか四〇代なのか分かりませんが、若者のようなオッサンのようなゆう君と話をすることになりました。「田寺さん、いっぱい話しかけてあげて下さいね。」照井さんはそう言い残すと、また忙しそうに厨房へと消えてしまった。残された私は、落ち着かない様子のゆう君に向いの席を勧めた。原木を生かして作られたテーブルは大きめなので程良い距離感があります。ゆう君は究極の選択を迫られた子供のように、ぎこちない動きで椅子にかけました。私に背を向けて！　信じられない彼の行動に思わず吹き出しそうになりました。

電車ごっこスタイルの会話は未経験です。「大丈夫よ、お婆さんだから。」幼児を諭す母親のように優しく言いました。「お婆さんじゃない…。」拗ねたような物言いはまさしく幼稚園生だ。どうしたものかと考えていると、ゆう君の体の向きが四十五度程こちらに向いた。後三回この動きをしてくれれば対面状態になれるのだが。彼はガサゴソと自分のカバンからプリント類を取り出し、何やらぶつぶつ言いながらテーブルに置いた。体の向きは一気に九〇度動いて、対面姿勢まで後四十五度となった。プリント類は彼の書いた短い小説や評論のような文章でした。「小説はあまり得意じゃなくて、どっちかというとノンフィクション系の文章が好きなんです。」つまりは私がこれ等を読んで感想を述べろという事なんですね。とても全部は読めないので、適当な数枚を手に取って読んだ。氷山の一角を見てその実像を推測する力などさらさら持ち合わせていない私は、程良く当たり障りのない感想を丁寧に述べた。すると、これを機に彼はこれまでとは別人のように饒舌になったのです。体の向きも完全対面状態です。彼の話の内容は多岐にわたっていて、文学から芸術、歴史、宇宙、経済、占い等々とまるでおもちゃ箱をひっくり返したようでした。確かに、それは彼の頭の中の玩具箱なのだと思います。それぞれに関連性は無くても、「こんな玩具も、こんな玩具も持っているんだ。」と報告する子供のようでもありま

す。人は誰しも自分の持つ価値観を誰かと共有したいと望むものです。ゆう君は私に対して、共有可能な匂いをかぎ取っていたのかもしれません。だとしたら間違ってはいなかったと思います。何故なら、彼の一つひとつのおもちゃは夫々に精度が高く、なかなか魅力的だと感じられたからです。私達の賑やかなお喋りに触発されたのか、近くにいた初老の男性も口を開いてくれました。「高田はいま復興、復興で大騒ぎだが、町から出て行ってしまった者も多い、これで復興が終わったらどうなるんだか。復興ばかりで、ここには他に何も無いよ。」今夜は第二回の復興記念大花火大会だと聞いていたが、男性の表情は少しも楽しそうではなかった。

帰り際に照井さんが「花火見ていかれたら良いのに、すごいですよ。大曲の花火大会に対抗して始まった花火なんで、近県からも大勢見に来ます。」そう言えば、大きなスーパーマーケットの辺りに屋台が立ち並び、大勢の人々が動き回っていた。見てみたい気はするものの、七時スタートの花火大会ではもう一泊しなければキツイので止めた。ジョニーを出て、花火大会準備の活気に溢れた町を眺めながら記念駅舎で気仙沼行きのBRTチケットを購入した。バスは市庁舎の傍から出るので、時間まで近辺を散策。市庁舎等の大きな建物が幾つかできたとは言え、空き地だらけの町はだだっ広く寂しい。真っ暗な夜を想像すると、都会慣れした私は不安に襲われる。「復興が終わったら何もない。」と言った男性の言葉が妙に気を重くする。おそらく復興税で造られたであろう立派な建造物の数々だが、これらが本当にこの地を豊かにしてくれるのだろうか。いわゆる箱物行政が破綻した例は全国にいくらでもある。未曽有の災害から立ち上がったこの地の人々が必要とするものは何なのか、より聡明な行政が行われることを祈らずにはいられない。

令和三年十月九日

江戸庶民の「名刺」（1）

山田嘉久

どこに書いてあるか忘れたが、作家司馬遼太郎は「忠臣蔵」の主人公大石内蔵助良雄を引き合いに出して、興味深い話題を提供している。もし大石内蔵助が現代人と同じように「名刺」を作ったとしたら、その肩書はどうなっているのだろうかとの疑問である。

現代人の常識から考えれば、内蔵助の肩書は「播磨国赤穂藩　筆頭家老」が一般的であろうが、そうは書かなかったであろうと司馬は言う。

「浅野内匠頭長矩（たくみのかみながのり）　家来」と書いたはずだというのである。

1「藩」という呼称

たしかに「藩」という呼称は、江戸時代においては公式な制度名ではなかったらしい。

元々、「藩」という語は、古代中国の周で王室を護衛する諸侯を「藩」と呼んだのが由来とされるが、日本では、江戸時代の儒学者たちが中国の制度に擬して用いた漢語的呼称であった。

例えば元禄年間に儒学者新井白石は「藩翰譜（はんかんふ）」（諸大名の家伝、系譜書）と称する本を著したが、あくまで儒学文献上の別称であって、公式の制度上で「藩」と称されたことはなかった。

同じ儒学者の荻生徂徠も大名屋敷を称して「藩邸」と表現しているそうだが、これも学者としての教養を著す語彙に過ぎなかった。

つまり「藩」という語は江戸時代では一種の学術用語に過ぎず、一般的な語ではなかったのである。

当時の江戸幕府は大名領を「領分（りょうぶん）」、大名に仕える者や大名領の支配組織は「家中（かちゅう）」などの呼称が用いていたが、いずれもその前に大名の苗字や拠点（城、陣屋所在

地）と地域名を冠するのが通例だった。

例えば、侍同士の会話なら「貴家の御家中が、われら土佐守様領分に入り」などと言い、藩領はあくまで各大名家の「家の領分・領地」だった。

例えば「家中」を「広辞苑」で引いてみると「江戸時代、藩の家臣の称。藩士の総称」とある。

なお余談だが、司馬遼太郎もこれを引用して「家中」は江戸時代の言葉だが、昭和の現代でも大企業などでは「御家中文化」はなお生きていると皮肉っている。住友の御家中、三菱の御家中、三井の御家中～の類である。（「街道をゆく24」（近江のみち））

幕府からの命令も藩主個人名（例えば赤穂藩の場合は「浅野内匠頭殿」）に宛てて出されており、各藩も自藩と他藩の区別さえできればよかったので、「当家」「他家」などの呼称で十分だった。

藩士についても「○○藩士」とは呼ばず、例えば「赤穂藩士」であれば公的には「浅野内匠頭家来」と称された。また「藩主」よりも封地名に「候」をつけて呼び現すことが多かった。例えば「仙台候」「尾張候」「姫路候」の類である。

因みに現在の高校教科書「日本史B」（三省堂）には「当時（江戸時代）、「藩」という呼称はなく国や城下町の名、藩主の姓で呼んだ」とある。

（参考までに「広辞苑」では「藩」とは「江戸時代、大名の領有する土地、家臣その組織などの総称」と規定している。）

では、いつから「藩」という語を使うようになったのであろうか。これが公的に使われ始めたのは、明治に入ってからとは意外である。

明治元年（1868）に明治政府は旧幕府領（天領や旗本領）を天皇直轄地として「府県」に編成した際に、大名領は天子たる天皇の中国風「藩」に当たるとの考えから、新たに大名領の公称として「藩」という言葉が採用されたのが最初である。

そして江戸時代の「家中」や「領」「領分」が「藩」の一語に変わり、藩主の居所（城持ち大名の場合は居城）の所在地の地名をもって「○○藩」という名前が初めて正式な行政区分名として登場したのである。（府藩県三治制）

その結果、翌明治2年（1869）、「版籍奉還」により、諸侯はその領地と領民を天皇に返還することなり、ここに藩は府、県と同様に日本の地方行政区となった。

そして旧藩主は「知藩事」に任命された一個人となった。しかも、その地位はもう世襲ではなく、中央政府によって随時任命されうる一地方官となったのである。

なお、版籍奉還の日、「公卿」と「諸侯」という呼称も廃止され、ともに「華族」とされた。

新政府は旧藩主の「貫籍」（本籍のこと）も東京に移させるという徹底ぶりであった。これで領主と領地を完全に縁を切らせたこととなった。

なお、それまで大名は江戸では将軍から土地を貰って建てた拝領屋敷（上屋敷）に参勤交代時に住んでいたが、このほか中屋敷や下屋敷をいくつも持っていた。しかし自己所有の土地は上屋敷のみで、その他はすべて町方からの借地だった。

江戸時代、大名が土地を持つなどは卑しいとされ、むろん大名の家来が江戸や国元で土地をもつことはなかった。土地を持つものは武士から見れば卑しい身分の町人や農民だったのである。

「あの角の八百屋の地所は、ご家老が持っている」というようなことは絶対にありえなかったと司馬は「この国のかたち②」（大名と土地）で書いている。

大名たるものは、その領地にあっては農地や市街地に1坪の土地も所有しなったことは、封建時代のヨーロッパや帝政時代のロシアと根本的に異なっていたと司馬は主張する。このことは、生涯、土地公有論を貫いた司馬らしい考察であろう。

また李氏朝鮮では、日本の武士階級に当たる「両班」（中央、地方の名族）の多くは日本と違って地主を兼ねていたとも書いている。（「街道をゆく28」耽羅紀行）

ともかく、明治4年（1871）の「廃藩置県」により藩が県に置き換えられることとなった。

つまり「藩」という言葉は明治に入ってから一般化したが、現在では、あたかも江戸時代から使われていたと錯覚されてしまっている。

時代劇によく出てくるセリフ「拙者は水戸藩の者でござる」の類である。これには理由がある。明治に入る前の幕末において、既に京都の志士たちの間で「藩」という言葉が使われ始めていることである。司馬によると、幕末に日常語となったであろうと推察している。

そして、次のような逸話を紹介している。（これも何処に書いてあったか失念したが）

ある志士が脱藩して京都の同士の会に出席したが「ソンパン」とか「キハン」の言葉が飛び交っていてよくわからなかった」と。

「尊藩」「貴藩」のことだが、「藩」という名称が一般に普及しなかった頃の笑い話である。

さらにこれに関連して、西郷隆盛の用心棒だった桐野利秋（人斬り半次郎）は聡明な男だったが、初等の教養に欠けていた。そのため「貴藩」の意味も分からずに自藩（薩摩藩）のことを「キハン」「キハン」と乱発したことを、これは西南戦争を描いた司馬の長編「翔ぶがごとく」で紹介している。これからみると「藩」という語は志士間では一種の流行語だったかもしれない。

ついでに、余談であるが最近、幕末の志士坂本竜馬に「藩論」なる口述書があることを知った。この本の紹介者長崎国際大学関家教授によると、この書は大佛次郎著「天皇の世紀」に載っているが、司馬の「竜馬がゆく」には見当たらないとあったので、「そんなことはなかろう」と司馬の名誉のため丹念に探すと「竜馬がゆく」最終巻（１４１ページ）にこうあった。

〈竜馬は「藩論」という新国家構想についての評論を口述して長岡が文章にして（略）「海援隊蔵板」という名目で出版した〉

文中「長岡」とは海援隊隊員長岡謙吉のこと。粗暴な若者ぞろいの隊員のなかでは珍しく文才、学識申し分なかったので、竜馬からは陸奥陽之介（宗光、後の外務大臣）とともに重用された。竜馬亡き後の2代目隊長となり、維新後は三河県知事を歴任した。明治5年没。

しかし、この本の出版は竜馬暗殺後の明治元年であるので、「藩」の一般化はやはり明治になってからということになる。

竜馬の暗殺後、彼の考え方を長岡謙吉が整理して出版したのでないかと関家教授は推論している。

一方、大佛次郎もその著「天皇の世紀」（7）の中で「藩論」について「竜馬の他にこれだけ自由奔放な政治論を吐く者はなかったろう。封建制度の欠陥をえぐり、立憲の精神を説いた不覇の気迫は、竜馬を除いては同時代の他の人間には考えられぬことであった。」と記している。

因みに竜馬の構想は封建的な幕藩体制に代わって領民（武士、町民、農民）をすべて対等な人間とみなし、彼らに参政権（入札）を与え、その機関としての議会制度の設置を大胆に提起したもので、この時代の一介の志士の考え方としては、なんと開明的な意見であることに驚く。

これが後の有名な彼の「船中八策」、更に「大政奉還」へと繋がってゆくのだが、本稿の趣旨から外れるので省きたい。

勿論、「藩」のほか「藩主」「藩士」「藩邸」などといった言葉も江戸時代には存在しないが、前述の高校教科書「日本史Ｂ」（三省堂）には次のような文章も見られる。

「幕府の直轄領は俗に「天領」といわれるが、これも明治以後に一般的に使われるようになった語である。江戸時代では「御料」といわれることが多かった。」

2 江戸庶民の「名刺」

以上のことから、冒頭の司馬の云い分が正しいことは分かったが、更に私の関心のあったのは、それに関連して武士階級に限らず、江戸時代の一般庶民が「名刺」を持っていたら、そこにはどんな肩書が書かれていたであろうかということであった。

庶民が自分のことを他人に紹介するときに、どのように自分を表現したのであろうかということである。具体的にはたとえば幕府の裁判に提出する書類や全国を旅行する通行手形にどのように名乗っていたか、ということである。

そこで最も卑近な例として、れっきとした平民の子孫である私がもし、江戸時代に生きたとしての例を考えてみた。まず、仮に私の「名刺」を作ってみよう。

（1）江戸初期に生まれたら
①大久保忠佐様御知行所
②上総国埴生郡東郷村町保新田
③百姓　良平倅
④嘉久

①②③が当人④「嘉久」の肩書に当たる部分になる。

苗字（山田）については、百姓町人階級では公の場で用いることは禁じられていた。具体的には宗門人別帳などの公文書へなどの記載が許されなかったが、墓碑銘や過去帳などの私的な場合のみ使用が認められたようである。

通常、苗字にはセットとして家紋が付属している。苗字は公称できなくとも家紋を用いることは差し支えなかった。

平民にとって苗字使用が許されたのみならず、義務化されたのは明治維新後の明治3年（１８７０）の「平民苗字必称義務令」以降である。

（注）本来、苗字（名字）と姓は別々の意味を有していたらしいが、現在ではほぼ同じ言葉として使われている。民法上では氏である。

①では、前述の通り当時は「藩」という言葉は使われなかったので、統治する領主の名前でこれを示した。

この場合、領主が大名ならば「○○様御領分」
旗本領であれば「○○様御知行所」
幕府領（天領）であれば支配代官の名前を付けて「○○様御支配所」と書かれた。

つまり最初の①のところでは領主支配が表示されることとなる。

次の②は、現在の住居表示と同じように思われるが、江戸時代ではもっと深い意味を持っていた。

ここでは、村や町といった所属する地縁団体と身分が表示されている。平人である「百姓」の表示は省略されることが多かったが、平人以外の「穢多」や「説教」など差別された身分の場合は必ず書き加えられた。

また借家人であれば「○○店」と付け加えられた。

要は江戸時代の村や町は、一種の法人格をもった身分団体であったので、②は現在の「住所表示」の他に、所

属する身分団体を表示しているのである。

③は、所属する「家」を表示する。

江戸時代では個人は「家」を単位として把握された。「名刺」の中で、このことは最も重要なことなので後述したい。

「倅」のかわりに「娘」や「妻」「父」「母」など戸主との続柄、「下男」「下女」といった隷属的地位も表示された。

④自身が戸主であれば③の部分はなくて②のつぎに④がくる。この場合は「家」と個人両方を表示することとなる。

これが徳川日本人の名刺に書かれた肩書の意味である。要は当時の日本人は独立した裸の個人としては存在しなかった。すなわち、①領主支配、②身分団体、③「家」という3つの関係に包まれて存在したことになる。

3つの関係は言葉を替えれば、義務と保護、奉仕と扶養の関係にあるといえる。逆に言えば、この3つの関係から見放された場合には、生活や「いのち」の保証はないということになる。

さて、前述の私の「名刺」に戻ろう。

①の領主大久保忠佐は江戸初期の旗本。天正3年（1575）の長篠の戦いや天正12年（1584）の小牧、長久手の戦いに武功を立て徳川十六神将の一人に数えられた戦国武将であった。

家康が天正18年（1590）に関東に移ると、忠佐は上総国茂原において5000石を与えられた。（同じころ、南接の上総大多喜10万石を与えられたのが徳川四天王の一人本多忠勝である。関東で唯一の外様大名、安房里見氏を警戒しての布陣であった。）

忠佐は茂原在任中、六斎市（毎月4と9の日に野菜、海産物などの市が立ち400年の歴史を誇る。今でも茂原名物となっている。）の開設などに功があったので、慶長6年（1601）駿河国沼津2万石の大名へと昇進した。晴れて「城持ち大名」となったのである。

彼の8弟が有名な大久保忠教（彦左衛門）で、兄忠佐は養子として忠佐家を相続させようとしたが忠教は「自分の勲功ではない」として固辞したといわれる。

そのため、忠佐家は無嗣改易となった。

このことは武功なくして口きき一つで大名になった連中へのあてつけであり、徳川家への痛烈な批判でもあったと司馬は書いている。（「この国のかたち②」）

さらに大久保家にはもう一つの不幸が襲う。

小田原藩主であった長兄忠世の後を継いだ子忠隣（6万5千石）が家康に突如忌まれ、城と領地を没収されてしまったことである。

後に忠教は子孫への訓戒として「三河物語」を書いたが、作中、徳川家について露骨なことが書かれていることもあって門外不出とされた。（この本が世に知られるようになったのは、明治に入って勝海舟によってである）

俗に「旗本8万騎」といわれるが、少し大袈裟な表現で実際は総数5千人程度、御目見以下の御家人を含めても2万人程度であった。ただし旗本、御家人の家臣を含めるとおよそ8万人近くになったかもしれない。

「御料」（明治以降の云い方では「天領」）や旗本の「知行地」は関ケ原の戦以来、関東を中心として広がった。

その後、順次、上方に更に全国七街道沿いに伸びていったが、それでもやはり関八州が全体の8割を占めていた。特にそのなかでも上総、下総両国は全体の4分の1を占め、江戸城お膝元の武蔵国をも上回っていた。つまり5千人の旗本のうち1千人以上の旗本領が房総地区に集まっていたことになる。

全国一の「旗本産出国」であったわけだが、この中には青木昆陽、新井白石、遠山景元（通称金四郎）などの著名旗本も見られる。

旗本領が関東に集中したことにより、諸領が余りにも細分化されてしまい（一村で複数の旗本領が存在することも珍しくなかった。これを「相給」という。）治安維持の点でも問題があった。これが後に「関東取締出役」（八州廻り）の新設や関東郡代（大代官）復活要因ともなったが、特に下総九十九里地区にアウトロー（博徒飯岡助五郎、笹川繁蔵など）が集中することにも繋がったと考えられる。

このように房総地区は江戸期を通じて圧倒的に支配者は旗本が多かったが、我が故郷茂原でも例外ではなかった。

社寺領も藻原寺領や蓮福寺領があったがこれも僅かだった。「徐地」と呼ばれる免税地である。そのほか「与力給地」とか「同心給地」という名がみられるが、いずれも幕府の下級武士の支配地で、個人的支配関係はなく集団で一定の土地を与えられたものだ。

寛政期における郷里の大名領はほんのわずかだった。

生実藩森川氏領分が長谷村に426石ほど、一宮加納氏領分が上太田村に200石余に過ぎない。

生実城はその昔、「生実公方」（足利義明）の決起の場所として知られているが、江戸時代に入ると初代藩主森川重俊は2代将軍徳川秀忠に仕え1万石の大名として生実に封じられた。その後、老中まで出世したが、秀忠の死に際して殉死した。3代将軍家光の擁立に秀忠に同調して反対したためともいわれる。

現在、千葉市内で唯一、大手門口の遺跡を見ることの

できる城跡がある。また近くの重俊院では幕末まで続いた森川氏13代累代の墓碑を見ることができる。

また南部の一宮藩主加納家は代々、紀州徳川家の家臣であったが徳川吉宗が8代将軍に就任した際に、そのまま幕臣に転じて大名に取り立てられた家である。

2代藩主加納久徵は奏者番、若年寄を歴任し、和宮の「江戸降嫁」の際には先導役を務めた。その関係で和宮が道中使用した御籠が、領内の東漸寺で現在、大切に保存されている。

いずれにせよ、茂原の地は北の生実藩、南の一宮藩といったいずれも一万石そこそこの弱小藩に囲まれた地であったようだ

坂本龍馬と名刺（追記）

坂本龍馬の「名刺」を作れば次のようになろう。

①土佐国山内豊信（容堂）様御領地
②御城下本町筋一丁目
③郷士坂本権平弟（または厄介）
④坂本龍馬

※戸主に養われる次男、3男を「厄介」と称した
※「郷士」は武士階級（士分）の下層に属する人々で、城下に居住する家中武士に対して、主に郷村に定住して士以外の業に従事しながら武士としての待遇を受けた。土佐の場合、上士は山内一豊が掛川城主だった時からの家臣だったのに対して、郷士は関ケ原の戦以前に支配した長曾我部家の旧臣（一両具足層）が主だった。

なお、この時代「武士は土地を持たなかった」ことを前述したが郷士は例外だった。彼らは以前から農地や町方の土地を持っていたからである。その意味からは厳密な武士階級ではないかもしれない。

龍馬の時代（幕末）になると「名刺」（名札）は一般に通用したようである。「名刺」の起源となった古代中国では紙のない時代から使われ、「刺」という木や竹に名前を書いて使用したことがその語源となっている。

それに反して日本での使用は大分遅れて、江戸時代後期（19世紀初期）からといわれる。幕末になると手書きから印刷へと変わり、中には家紋を入れた豪華なものまで現れた。

勿論、脱藩浪人である竜馬が使用したものは、和紙に名前を書いた簡単な「名札」で、幕府（大公儀）高官や諸国家老などに面会する際に取次用として使用した。本名龍馬（竜馬）のほか変名（才谷梅次郎）や時には符牒（龍ノ字）なども使った。なお（才谷）とは龍馬の実家の屋号である。

（続く）

漢詩

汲深録（二十七）

松井秀人

七夕登樓

（七夕に楼に登る）

令和三年九月

今夕閑登乞巧樓　今夕閑かに登る乞巧楼
仰望天漢鵲橋浮　天漢を仰ぎ望めば鵲橋浮ぶ
雖然牛女年年見　牛女年々ま見ゆを然りと雖も
明日別離無奈愁　明日の別離愁ひを奈ともする無し

押韻・樓　浮　愁

〔注　解〕

乞巧＝七夕祭りに女性が五色の紙や糸などを供えて牽牛・織女の二星を祭り、裁縫などの技芸の上達を祈ること。「荊楚歳時記」

乞巧樓＝七夕に庭に立てる彩色を施したやぐらのこと。唐代の風習。

天漢＝天の川。

鵲橋＝七夕の夜、織女が鵲に乗り天の川を渡るという伝説から生じたことば。

牛女＝牽牛と織女の二星。

無奈＝どうしようもない。いたしかたない。

〔口語訳〕

夕方に乞巧楼に閑かに登り、天の川を望むと鵲が作る橋が見える。

牽牛と織女は、毎年会えることになっていると言うが明日には別れも来ることになっており、その悲しさはどうしようもない。

山中隱士

（山中の隠士）

令和三年九月

夕暮山行携酒壺　夕暮の山行酒壺を携へ
尋來蓬屋一燈孤　尋ね来たり蓬屋の一燈の孤なるを
笑談勸酌無賓主　笑談勧酌賓主無し
圓月如嗤兩醉夫　円月嗤ふが如き両酔夫

押韻・壺　孤　夫

〔注　解〕

山行＝山を行く。山歩き。山遊び。

蓬屋＝そまつな家。

賓主＝客と主人。

醉夫＝酒に酔った男。

〔口語訳〕

夕暮に酒壺を持って友人の庵を尋ねて山中を行くとそまつな庵の明かりがポツンと見えてきた。

談笑しながら酒を酌み交わし、酔ってどちらが主人か客かが判らない状態であり、

円月に嗤われているような、酔いどれのご両人だ。

新秋夜讀

雨後空庭殘暑収
籬邊零露一蛩秋
鶏窓尚友青燈下
疑義解來心自幽

〔注　解〕
籬邊＝間垣のあたり。
零露＝したたり落ちる露。
一蛩＝一疋のこおろぎ。
鶏窓＝読書室。書斎。

〔口語訳〕
雨が上がったあとの人気のない庭も、立秋後の暑さが収まり垣根にしたたり落ちる露に、一疋のこおろぎの鳴き声も秋に入ったことを告げている。
書斎の青灯の下で古人の本を読み、判らなかった個所が理解できると心は自ずから奥深くてもの静かになる。

江樓明月

天霽黄昏獨上樓
依欄倒景映江流
漸望明月清光遍
皎皎通宵照我愁

〔注　解〕
天霽＝雨がやむ。空がさえわたる。
倒景＝さかさに映るかげ。

（新秋夜読）
令和三年九月
雨後の空庭　残暑収まり
籬辺零露　一蛩の秋
鶏窓に尚友す　青灯の下
疑義を解し来れば　心自ずから幽なり
押韻・収　秋　幽

（江楼明月）
令和三年十月
天霽れ黄昏　独り楼に上る
欄に依れば　倒景　江流に映ず
漸く望む明月　清光の遍きを
皎々として通宵　我が愁を照らす
押韻・楼　流　愁

漸望＝だんだんに仰ぎ看る。
皎皎＝白く清らかなさま。明るいさま。明るく光るさま。
通宵＝よもすがら。夜どおし。

〔口語訳〕
夕方の空が晴れて、独りで楼に上り欄干に寄りかかると逆さまになった景色が水面に映って見える。
だんだんに仰ぎ看る明月、その光は広く照らして夜どおし明るく光り、我が愁も照らしている。

西郊秋果

晴日西郊試一尋
帶霜熟柿滿村林
羣童投石蓋無効
烏鵲啄殘哀怨深

〔注　解〕
西郊＝秋ののべ。
秋果＝秋のくだもの。
無効＝効きめがない。ここでは石を投げても、柿にもカラスにも当たらないこと。
烏鵲＝カラスとカササギ。

〔口語訳〕
晴れた日に秋ののべに出かけてみると、熟した柿が村の林にたわわになっている。
童児達が石を投げつけても尽く外れてしまい、柿は一つも落ちてこないしカラスにも当たらない。
カラスたちは残った柿を啄み続け、木の下では童児達は怨めしい気持ちで口惜しがるばかりである。

（西郊の秋果）
令和三年十月
晴日の西郊　試みに一尋せん
霜を帯びる熟柿　村林に満つ
群童　石を投ずるも尽く効無し
烏鵲　残を啄み　哀怨深し
押韻・尋　林　深

短歌

冬の日他

山本一成

囲碁

藤沢秀行逝きて十二年雨の日を棋譜並べをればぼやきの聞こゆ

囲碁界の藤沢里菜氏は孫むすめ女流四冠一人占めにす

囲碁会の案内状に欠とあり尋ねぬままに訃報のとどく

「この石を捨てたらば勝ち」と感想戦ほてれる顔に夕日があたる

昨夜（きぞ）の碁の負け返さんと勇みゆき実利を追えば一目たらず

冬の日

冬の日ははや傾きて手賀沼の湖面の反照視界をとざす

湖畔にてうなぎを食べてまどろめば茂吉の歌碑の歌うかびくる

黄昏に釣りする人のシルエット竿の向かうに三日月の見ゆ

にほ鳥は水脈引きながらわたりゆく胸に落葉の勲章つけて

冬の日は沈まんとして野も山も甍も垣も黄金に染める

友

枕辺のスタンドの灯(ひ)に照されて瓶のつる首障子にうつる

カウンターの鮨つまみつつ思いをり縄文の魚(いを)と弥生の米を

魚を獲り生(なま)にて食す日本人一万年つづく食文化なり

各々の好みの具を選(よ)り麺にのせフードコートへしづしづ運ぶ

ホームにて友待ちをれば手を挙げて役者のやうにせり上がりくる

天守台を仰いで(四)

三戸岡　道夫

(八)

人間の世界は戦争で荒れていても、自然は豊かであった。

群青の松並木が東から西へ、長々と、美しくつづく東海道の一角に、山王町はあった。

太平洋に面した東海地方の豊かな南国めいた春の光が、町全体を芳醇に包んでいた。夕靄が白々と松並木に立ちこめ、やがて町並の屋根を濡らしはじめると、広重の描いた錦絵の面影がこの町には残っていた。

歴史をたどれば山王町は城下町として発達した。今を去る一世紀の昔、山王城を守った五萬三千石の山王藩は、三河譜代の家柄であった。だが徳川幕府の壞滅と共に城は焼かれ、藩士たちは姿を消してしまった。しかし城跡の小高い山は今もなお、山王町に浮かんだ軍艦のように町の中央に残っていて、天守台の一番高みに登れば、さして廣くない山王町は一眺のもとに見下すことができた。

城跡にはおびただしい櫻樹がある。春には見事な花の雲で、町の中央の祭壇として飾りあげた。そして花が散ると、季節に先がけてそれはまばゆい新緑の装いに衣更えして、燃え上った。古い石垣に沿って坂道があった。坂道の下には堀割が青黒い水をたたえて、櫻並木を吹きすぎる風の音を聞いていた。こうした山王城跡は現在は山王公園に指定され、春の名物の櫻祭りには、桃色の雪洞(ぼんぼり)が立並び、花見客で、にぎわった。

しかし大東亜戦争が始って以来の戦局のあわただしさは、花祭りを取り上げてしまい、櫻花が白く咲いては、ぱらぱらと散ってゆくばかりだった。

町を貫流する山王川は、この山王城跡をぐるっとS字型に取り巻いて流れていた。水は澄んで川底の小石が光り、豊かな水量は両岸の水草の綠を潤していた。

沼崎武夫の葬式がすんで二・三日した頃、日比野正英は山王城の天守台へ登っていった。

彼は学校からの歸途や日曜日の午后など、一人でこの天守台へ登っていくのが好きだった。特に天守台を中心とする草叢の一角は、彼の最も愛する散歩道の一つであった。家での勉強に飽きると、氣分轉換に天守台の草原へやってきて、そこに寝ころんで勉強した。南國の空を思わせる豊かな広い空。その空一杯に輝く太陽の光を浴びながら、英語の單語カードをめくったり、歴史の年代表を暗記したりした。だがその勉強は、山王中学校の試験の準備ではなくて、彼が金剛寺教官に隠れてやっている高等学校の受験勉強であった。そのためには天守台の草叢は快適だった。誰も來なかった。廣々として、草の匂りが新鮮で、頭が澄みきった。梢に渡る風音以外は物音もせず、精神統一ができた。

彼は天守台へのけわしい石段を、一歩一歩登っていった。

天守台に着くと、廣々とした解放感が彼は好きだった。すのすばらしい解放感が、山王中学校の空氣から、彼の魂を救い出してくれた。

彼は天守台の石垣から身をのり出して、大空の果てや、(その大空の彼方での激しい戦争が斗われていた)、眼下に擴がる山王中学校の校舎の屋根、東海道の松並木、帶のように東西に長く續く山王町の家並などを、飽かずに見守った。

よく晴れた日には、その彼方に海が見えた。太平洋が遠い南の彼方に、きらきら、きらきら、まるで金粉をまき散らしたように光っていた。

その海に向って一本の川が流れていた。町を貫流する山王川。遠く赤石山脈の麓に源を發した山王川は、山王町の眞中で東海道と十文字に交わり、その透明な水におびただしい鮎の群を生棲させていた。

この天守台については正英には、ずっと昔の記憶が一つあった。

それは幼い頃に、この天守台を遠くから眺めた時の印象であった。

それはまだ小学校にあがって間もない頃、幼い彼は母の手にひかれて、駅から山王城にむかって歩いていた。櫻の花びらが一枚一枚すけて見えるほどよい天氣で、町中は櫻のお祭氣分で浮足立っていた。ぎっしりと並んだ商店の軒から軒は、赤い提灯や櫻の造花でもれなく飾られ、風にゆられて波打っていた。

その時ふと眼をあげると、正面の中空に、天守台が雲に浮んだ峯のように立ちはだかって見えた。

その天守台を背景に、鉄骨の火の見櫓がそそり立っていた。鉄骨には「櫻まつり」と書いた四枚の桃色の板が、空高くあがったアドバルーンのようにはっきり見えた。

それを見た瞬間、正英は空中にすーっと舞い上っていくような氣持になった。早くあの麓まで行ってみたい、早く天守台まで登ってみたい、そうした感情がわけもなく子供の正英の心をゆさぶった。

彼は母の顔を見上げた。すると母は、

「正ちゃんがね、もっとずっと大きくなったら、あの天守台の下にある中学校に行くんですよ。」

「ずっと大きくって、いつ？」

「よく勉強して、ずっといい成績で小学校を卒業したら、その次に行く中学校、それが山王中学校ですよ」

彼はその時、生れて始めて自分の未來というものを感じた。

この時彼の心に映った天守台は時間がたっても薄れずに、山王中学校の幻影としっかり結びつき、何時も彼の前方に立って、子供の彼に希望を與えてくれていた。

だがその天守台に、彼はいま、中学校に張る息苦しさから脱れて登っている。憧れて入ってきた中学校だというのに、なんということであろうか。

沼崎武夫の鉄道自殺は、正英を孤独の底にたたきこんでしまった。

沼崎武夫が自殺した瞬間、正英の心は混乱した。

しかし混乱がおさまってみると、深い悲しみが襲ってきた。

その悲しみは徐々には消えて行ったが、代りに何かゞ彼の心の中に入ってきた。それが孤独だった。悲しみが出て行くと、代りに孤独が入ってきたのである。

孤独。それは恐ろしい怪物だった。どこから一体忍びこんで來たのだろうか。四辺を見廻したが皆目見當がつかなかった。彼にとっては全く新しい事態だった。生れてはじめて正英の心に巣喰った孤独という怪物。こいつは一体何物だ、こんな奴にがんじがらめにされるのはまっぴらだ、そう叫んで足をばたばたさせてみても、それは身体に染みこんだ染料のように決して彼の心からは落ちなかった。

今まで正英は孤独にかられたことはなかった。父母と三人暮らしの彼の家庭、その正英に突然波紋を投げかけたのは沼崎武夫の自殺だった。

彼は廣々とした空にむかって叫んだ。

「僕の友達を返せ！　沼崎を生かしてくれ！」

町の眞中には東海道線のレールが二本銀光に光っていた。その東のはずれの一点、沼崎武夫の自殺したレールがよく見えた。正英は、その地点に向って走ってゆく上り一番列車を想像した。列車がその地点に近づく。ぱっと沼崎武夫の鉄道自殺は、正英を孤独の底にたたきこんでしまった。

この時彼の心に映った天守台は時間がたっても薄れずに、山王中学校の幻影としっかり結びつき、何時も彼の前方に立って、子供の彼に希望を與えてくれていた。

だがその天守台に、彼はいま、中学校に張る息苦しさから脱れて登っている。憧れて入ってきた中学校だというのに、なんということであろうか。

沼崎武夫の鉄道自殺は、正英を孤独の底にたたきこんでしまった。

と沼崎武夫が車輪の中に身を投げる。飛沫となって飛び散る中学生の血潮。一番列車は急停車。町に鳴り響く鋭い汽笛の断續。

しかし町は、もうそんな事件があったことなど知らぬげに、黒い屋根を黙々と押並べていた。

正英は、沼崎と一番最初にこの天守台で逢った時のことを思い出した。それは三年前である。山王中学校に入学して間もなく、正英は学校の歸りに一人で天守台に登ってきた。すると一人の中学生が石垣の上から物珍らしそうに眼下に擴る山王中学校の建物を最上の高みからあれこれ眺めていた。正英にはそれが自分と同じように入学したばかりの新入生だとすぐ解った。正英はその横にいって同じように中学校の建物やクローバーの一面に茂った運動場を見下した。カーキ色の学生服の匂ひが眞新しく匂ってきた。ゲートルをぎこちなく巻いていた。

二人はどちらからともなく話しかけた。その日以來二人は親友になった。二人は天守台を降りると、櫻並木の花吹雪の中を駈けて歸った。

だがその時の親友は今は自殺して、もう居ない。

（九）

正英は生れて始めて、自分の心の中にあいた空洞を知ったのであった。

今まではみずみずしい花の蕾のようだと思っていた自分の魂が、氣がついてみると灰色の造花になっていた。しかも眞中に大きく虫が喰っていた。誰の助けをかりたら、もとの元氣な魂に還ることができるであろうか。父母の力ではもう駄目だった。彼はクラスの友達の中にそれを探そうとしたが、それも駄目だった。沼崎武夫に代るような人間はそこには居なかった。

彼は山王中学校で一番尊敬できる、そしてその家庭にまで出入して親しくしている、英語の辻村教師の所へ話しに行った。しかし矢張り駄目だった。辻村教師にはよく正英の氣持ちは解った。少年期を脱して、そろそろ青年期に移ろうとしている、移動し易い、傷つき易い、感受性の強い魂。だが彼等は矢張り年令が余りに距りすぎていた。十代の少年と三十代の辻村教師とでは、互に理解はできても、共鳴はできなかった。

彼は失望した。もう一人の人間しか残っていなかった。それは東京の高等学校に居る橘公夫であった。山王中学校で正英より四年先輩に当たる橘は、開校以來の秀才と訛われていて、正英の勉強の目標だった。橘の方でも正英の高等学校への受験勉強には、絶えず何くれと心配したり激勵したりしてくれて、

「俺の後に續いて東京へ來るんだよ」

と橘が言った言葉が、いつも正英の心に響いていた。彼は橘に手紙を書いた。それは生れて始めての一番長

い手紙であった。投函してしまうと、まだ手紙が東京に着かないうちから返事を待った。橘の返事で自分の心を勇氣づけようとした。

橘からはすぐに返事がきた。それも長い手紙だった。彼はそれをむさぼり讀んだ。それから二三日、正英の心は滿ち足りていた。橘の手紙の文句が燦然と彼の心の中で輝いていた。彼は胸を輝かせて登校した。彼は辻村教師の所へ行って橘のことを熱心に語った。辻村教師と正英の間にも熱い共鳴が盛り上がってくるのを感じた。

しかしそうした感激も、四、五日しか続かなかった。胸に輝いた宝石を持ちながらも、次第に彼はなんとなく不安で空虚になっていった。手紙は結局手紙にすぎないのであろうか。

正英の周囲はやはり砂漠だった。砂漠に水を注いでくれるもの、友情。彼はそれを求めていた。（つづく）

忠山人日乗（五）

忠内正之

石神井だより

住めば都

広辞苑によれば、「住めば都」とは、「住みなればどんなに貧しく不便な環境であろうとも、それなりに住みよく思われるものだ」と解説している。

石神井に移って当初は、都落ちしたものと考え込んで甚だしく気落ちしていた。

石神井とは云うものの、この辺りは、関越道路の登り口である「三軒寺」付近の谷原町と云う。

西武線石神井公園駅から北へ1㎞、地下鉄大江戸線光が丘駅から西へ1㎞、東武東上線の成増駅から東南へ2㎞と、誠に交通の不便な場所である。バス便はあるものの、便数が少ない。置き去りにされた陸の孤島の感さえある田舎町である。

こちらへ越してからもう30年近い歳月が経過している。当初、この地区には三戸岡先生ご夫妻が少し離れた処にお住いである以外に知己もなく、あたまからこの様な辺鄙なところと決めこんでいて、なかなか地域にとけこむことが難しかった。

しかし乍ら、乏しい懐を叩いて自宅を建てて、終の栖と定めた上は、あと幾何の余生となるかは不明であるが、明るく楽しく生きなければ損である。何とか地域に早くなじむことが必須である。そして少しは他人様のお役に立つ生活もしたいと云う殊勝な心掛けをもつようになった。もともと好奇心の強い性格である上、人恋いしく思う年齢になってきていたのであろう。

新参者がこの地域の人達と、早く親しくおつき合いができるようになるためにはどのようにしたら良いか、し

ばし思案した。

ところが思わざる方向から助け舟が現われた。町内会の役員であるYさんと親密になったことからである。

この地区には、三戸岡さんの外に知己は全くないと信じきっていたのだが、認識不足であった。実はこの家が古家であったころ、近所の方の新築時に、頼まれて仮自宅として、安い家賃で貸したことがあるという。私が地方に在勤していたころ、母は時折り上京しており、その際取り計ったようである。

Yさんは当家から数軒先のお住いで、新築当時のお礼挨拶旁々町会に加入をすすめるためお訪ね下さった。私とは初対面であったが、気の利いた老婦人で感じの良い方であった。

Yさんは以前、新宿十二社で待合いを経営されており、新宿西口再開発に伴い当地へ移転された。どうりで気さくで話の解かる方だと納得した。若い頃はさぞかし魅力あるおかみさん振りであったろうと想像された。この方は町内会の役員をされ、近隣のお世話役をされていた。

Yさんを通じて、近所の方々とのつき合いが始まり親しくなっていった。

やがて数年後私は、Yさんに頼まれて後任を引き受けることになった。お世話役はそれから七年間は続くことになる。近所の方々と親しくなってみれば、下町情緒溢れる人柄の良い人達ばかりで安心した。

町会の仕事は、世間へのささやかな奉仕と考え誠意をもって務め上げた。結果として地域情勢がよく解り、交際が広がり、新参者が大手を振って町を歩けるようになっていったのである。この場合も母の陰徳陽報のお陰で助けられたことになる。

練馬区谷原町会は一丁目から六丁目までである。会員数（世帯数）が約2千5百戸ある中で、私の担当は六丁目の内の4班40世帯である。

殆んどが一般住宅であったが、人間が織りなす家庭の模様はさまざまであり、当初は戸惑った。しかし踏みこまず、頼まれれば応ずるの一貫した姿勢で臨んだ。大過なく役目を終えて、しっかりした後任者に譲ることができた。その間、町会の総会や役員会にも積極的に参加して地元有力者の知己を得ることになり交際は一層広がった。市民農園に誘ってもらうことになるのもこのときのご縁によるものである。

次に市民農園の説明に入りたいと思うが、先づこの地区の土地の歴史にふれてみたい。

石神井地区は古代から農耕と狩猟を中心として生活が営まれてきた。

石神井は武蔵野台地の中にあり、なだらかな丘陵を形成している。関東ローム層（火山灰土）から成り立っているため、雨水による作用で中小の河川が台地を削り小

さな谷をつくり、湧き水がそれに加わって谷をさらに広げ、大きな流れとなり、西から東に向って流れている。

主な河川として、石神井川と白子川がある。石神井川は、田無市の永久保附近に源をもち、東伏見から練馬区に入り、富士見池となり、下石神井で三宝寺池から流れ出す小流を合せて東へ流れ、田柄川を合せ、板橋区を流れ、王子を経て隅田川に注いでいる。近年まで石神井から氷川台にかけての低地帯は水田になっていたという。

白子川は、大泉の井頭池を源として練馬区の北西部を西から北東に流れ、埼玉縣南部を経て荒川の分流である新河岸川に注いでいる。区境附近は左側に崖が迫り、水量も比較的多く、水車など動かしていたという。私が越してきた頃は既に消えていた。

一万年を越える昔から人々はこれらの川の岸に水を求めて、獲物を追い、また住みついて農業を営んできたのである。遺跡が種々発掘されている。

農家のご主人に聞くところによると、二つの川に近いところに拠点を構えることのできた農家が、後の大地主となっているという。

つまり水利を有利に勝ち得た者がより分限者になり得たということである。

平安時代、大和中央政府が、大和地方から山城に移るころ（七九四）日本の文化はいよいよ進んできた。藤原

一門にとって全盛期であった。

その頃、諸国の国司たちは任地に行かず、代理を置いて租税を取り立てていた。そうした中で地方の豪族や名主たちは、家の子郎党を率いて自衛組織を作り上げた。武士と呼ばれる人びとである。

強化された武士団の中に恒武平氏の流れを汲む豊島一族があり、数世紀に亘って当地に君臨していた。しかしかねて対立していた太田道灌との戦いに敗れ、石神井城は落城し平安朝以来四百年の名家は滅亡した。

文明九年（一四七七）四月二十八日、太田道灌に攻略され、城主泰経は家宝の純金の鞍を白馬において跨り、隣接する三宝寺池に入水し、娘照姫も続いて池に身を投じたという豊島一族の最後を語るロマンが残っている。

現在、当地ではその哀れな末期を悼んで、大掛りな時代祭りを、毎年桜の時期に催している。

明治以降、数回に亘って、沈んだ金の鞍探しが行われたというが、遂に発見できなかった様である。

太田道灌は豊島氏の菩提を弔ってか、石神井村に応永元年（一三九四）草創されていた無本寺を、文明四年（一四七七）豊島氏の城跡へ移し、三宝寺を創設した。その寺は後、江戸幕府の庇護を受けていたと云い、今も昔の佇まいを残している。

豊島氏を滅ぼしてこの地に君臨していた太田氏は、小田原の北条氏康に反抗して敗れ、天正九年（一五八一）

安房に逃れ滅亡した。

後、北条氏は、三代氏康、四代氏政、五代氏直と続くが、天正一八年（一五九〇）ついに秀吉の攻撃により滅亡した。北条氏の旧領は、徳川家康に与えられた。家康の関東入国は、新しい時代への転換となった。

北条氏治下では兵農分離が明確でなく、地侍ら在地武士は貢租負担者としての百姓でもあった。家康の「江戸御打入」、そして翌天正一九年（一五九一）の検地は、武士と農民の身分を明確にする身分秩序をうちたてた。さらにこの検地により、いままで在地の土豪に属していた下人や所従（手下のこと）が、「本百姓」（自作農）として独立し、領主に対し直接の貢租負担者に位置づけられた。ここに小農自主による近世村落発展をもたらすのである。

更に、幕府・領主など支配者側は、農民の共同体的な結びつきから生ずる支配者側への反抗を防ぎ、年貢徴収制度に利用するため、名主・組頭・百姓代の「村方三役」と呼ばれる村役人を設けた。彼等を領主支配の末端機構に組入れることにより、支配体制を徹底したのである。

江戸時代、練馬地区の殆んどは天領であった。幕府の施策が滲透し、十七世紀の中頃では生産力が増して経済成長が見られる様になった。小農経営（本百姓）の自立も安定してきた。しかし、享保期以降、新田開発が進み入合地（公共的空地）が消滅した。このため秣場が減少し馬屋肥や刈敷（田や畑へ敷き込む草）、草木灰（大事な肥料となる）の入手難となった。もともと当地では生産性の低い畑作が中心であり、年貢の金納や金肥（金で買う肥料）購入などにより貨幣経済の滲透が早まり、自給自足は崩れ去り一部の富農者と多数の零細農に分かれていくのである。

そして、幕末の段階では富農は少数の名主・年寄・百姓代で占められ、他方零細農家は年貢や食料の調達に苦しみ、少ない田畑をさらに富農に質入れするが返済できず質流小作人となっていったのである。かくして格差社会は農村に於ても発生し、大地主の農家と小作人との対立的関係は、太平洋戦争後迄続いたのである。

昭和二十四年（一九四九）、農地解放が占領軍の命令で施行され、不在地主から農地は強制買上げとなり小作人に安く売渡された。まさに大革命であった。占領政策の一環であったから成功したものの、この様な大改革が、無血で行われるとは、近世希有な事と思う。

宅地と商業地は解放の対象外とされたため、総資産は減ったが、大地主は依然として存続した。小作農家は自作農となったその上、郊外住宅地として地価上昇により、労せずして俄富豪となったのである。

中にはその僥幸を奇貨として、有頂天となり遊興にふけったり、力以上の再投資に失敗してすっかり落ちぶれる者もあった様である。現在では、旧来の大地主、新発の中小地主の差別はあるにせよ、両者共地元の資産家（農家）とし栄えており、一般の住宅と違って余裕のある生活振りである。

ここに近世とは違った格差社会が構成されているが、地方行政の行き届いた仕振によって平安なくらしが保たれている。

長々とここ迄述べてきたのは、都市近郊の地主農家の存在理由と形態を説明したく思ったからであり彼等の存在により、現在の市民農園運営がなされているからである。

私は市民農園を紹介され、参加することにより、石神井生活を、より楽しむことができた。

市民農園とは、区が農家から遊休している農地を借り受けて、一般市民に貸し与えて耕作させる区営の貸農園である。他方農家は賃料を受け、また固定資産税減免のメリットを受けるという生きた制度である。練馬区全体で約30ヶ所開園しており、農家が残っている当北西部に集まっているという。

また農家が自営で開園しているケースもあり、併せて旺盛な耕作意欲をもつ区民たちのニーズに対応している。

私が抽選に当たって入会した谷原市民農園は、当方から徒歩5分の便利な場所にあった。開園後まもない施設で、談話室や、シャワー迄備えたクラブハウスがあり、個人別ロッカーもある。また栽培に必須である水道は使い放題という好条件の農園である。

総区画は50ヶ所、一区画の面積は20平方米と手頃な広さである。

それから10年間継続して借入れてして大いに野菜作りに専念した。元来私は農家の生まれであるが、農作業には全く無知であった。リーダーが居て、種まき、苗植え、手入れ、消毒等一から教わって段々と慣れていった。

じゃが芋・きゅうり・なすから始めて、枝豆・とうもろこし・白菜・キャベツ・大根など他人並みに作ること



太くて長い「練馬大根」

ができる様になった。殊に大根は古くから当地の「練馬大根」として広く知られており、土壌に適して豊作であった。自作の野菜は安全且つ新鮮で、満足感も加わって格別の味わいであった。但し最盛期には自宅で食べ切れなくて隣近所に配ったりして大変喜ばれた。

会員たちは夫々サラリーマン上がりが多くてすぐに仲良しとなった。後に町中で顔を合わせてお茶を呑むなどすることもあった。

殊にリーダーであったAさんには親しく教えていただいた。気候と土質が違う私の郷里と東京では野菜を作る上で齟齬が多々あったのである。Aさんは手取り足取り丁寧に指導して下さった。

Aさんと更にお話しすると、Aさんは私の銀行時代の大先輩で大阪に在住するMさんの知人とわかり、Mさんの仲人で結婚された由で話が弾んだ。辿れば人縁地縁はいたるところに存在するものだと感じ入ったのである。

担当する区画は二年毎に変ったが、何年か経過すると連作障害が発生して出来が悪くなってきた。金肥の与えすぎによる土の疲れもあるのであろう。

私自身も疲れてきた。その上親しかったAさんが急逝されてしまった。仲間数人と葬儀に参列したが淋しかった。

その様な事情で農園から引退した。引退したが苗などを別けてもらった農家とは親しい関係が続いており、新鮮な野菜、はち蜜、花など買わせてもらっている。

農園を引退してからは、歩いたり自転車に乗ったりして石神井地区全般を散策することにした。目的の一つは、老衰してきた母の介護施設を探すことである。この件については完備する公営施設に入居を許され、七年間お世話になり百三歳迄の天寿を全うした。

目的のもう一つは、農園作業に替る運動が必要であることと、もともと好奇心の強い私は石神井全般について地域情報をくわしく調べてみたかったからである。

その過程で解ったことは、この地区では近畿地方などと違って、都営石神井公園の外には名所旧跡など殆んどないことであった。代わりにまだ自然林や放置された空地がところ処残っており緑が多く空気がおいしい。

武蔵野台地の湧水を集めて流れる、石神井川と白子川の水勢は豊かで澄んでいる。四季の景観は心を和ませてくれる。岸辺には桜並木が連なり、春には見事な花見を楽しむことができる。また白子川のほとりでは、「かたくり」が群生しており、桜の花とかたくりの花、両方の花見が可能である。

交通の不便なただの田舎町だとして不満をのみもって臨んでいたのだが、美しい自然が残る明るく健康的な町であると見直ししていたのである。何か謝りたい様な気分にさえなってきた。

また、当初は遅れていた当地のインフラも。この間、

絶間なく整備が続けられ、住み易い環境となりつつある。

まず、光が丘から大泉方面に向う幹線道路23号線（別荘橋通りという）が完成して東西の交通が至便となった。都市の発展は道路の発展に比例すると云うが、まさにその通りで、巾広い歩道に人の往来が殖え、両側には大型スーパー。ドラッグストアー・マンション・大型飲食店・介護施設などが程なく立ち並ぶことなり見違えるほどの



大江戸線新駅「土支田」の予定地

景観となっていった。

その道路の地下にはやがて地下鉄大江戸線の延伸が事業決定しており、当家から徒歩5分の地点に駅ができる予定で、既に駅前広場が準備されている。

附随して、周辺の区画整理が行われ区営公園が三ヶ所新設された。散歩の途次、いつも利用させてもらっている。

また、地主（農家）の相続対策もあり、農地が相次いで宅地転換され建売住宅が次々と売り出されている。当初一戸当り3千万円台であったものが、今では5千万円台から6千万円台の価格となっている。それでも他地区と比較すれば安い由で、殆んど完売されている。

農地（生産緑地という）が次ぎ次ぎと宅地化されていくのを見ると、農家育ちの私としては何か淋しい気持ちになるが、地域発展を考えれば致し方ないと思う。

平成二十三年（二〇一一）かねて懸案であった、西武池袋線の石神井公園駅が漸やく高架となり、開かずの踏切りが解消した。同時に駅前周辺も一新してきれいになった。45階建てのタワーマンションが二棟もたち、人気が高くて即日完売したという。大型商業施設も数ヶ所できて買物が便利になった。商店街の中で、「池上彰」氏や「檀ふみ」さんとすれ違うこともある。

西武線石神井公園駅や都営地下鉄線光が丘駅迄は依然



高架となった「石神井公園駅」

としてバスを利用することになるが、最近では無線タクシーを利用する事を覚えて適時利用している。先頃より、スマホのアプリで呼ぶこともできるらしいが、私の手には負えない。

近隣に眼を転じてみよう。同じ町内に内科医と歯科医が開業中である。いずれも二代目だというが、地元の信頼も厚く常に混み合っている。当方でも夫婦でご厄介になっている。理髪店と美容院は隣組にあり便利である。最近コンビニが50m先に出店した。利用してみてコンビニの便利さが改めて良く解かった。

八百屋、魚屋、精肉店など小売店は漸次撤退していったが、之等に替る大型市場が、徒歩10分程度の場所に開店して好評である。遠距離からの顧客も多い様である。殊に魚市場は産地直送の新鮮な魚が売物であり、三河湾育ちの私は魚が大好物で活魚を求めては妻の手を煩わせて、舌鼓を打っている。

ホテルもローカルではあるが、バス停で3つの近場にある。時折り来客時等に便宜利用している。

とめどなく長くなってきたが、結びとしてこの地に於ける私の趣味との関連について述べてみたい。一点は、相変らずの骨董好き、もう一点は食道楽の二点である。

田舎町であり、満足する骨董店は到底無いものと諦めていたのであるが、探し求めた結果、何とか楽しめる店を発見することができた。

骨董品店は「まがい」の店を含めて四軒あった。大泉町に二軒と、隣町の土支田に一軒、石神井公園駅近くの一軒である。大泉町の二軒のうち一軒は西洋骨董が中心で、主人は高校生の頃「寺山修司」と親しかった由で、話が面白かった。二―三点安い物を買ったが、数年前に閉店してしまった。もう一軒の店の主人は女性で、唐津

と鍋島の焼物が中心であった。鍋島最古というわれる松崎窯の変型皿を見せてもらったが、やたらに高い値段をつけていた。あとは新陶ばかりで面白くないので、疎縁になった。

土志田の店はもと地主の米屋であったとか。サラリーマン上がりの主人夫婦が道具屋風に改装して経営している。業界では「果たし」と云われる業態で東北方面で仕入れて、店売りしたり仲間売りする商売であった。生な品が見られるので時たま立寄った。安南の陶片、古伊万里の徳利、李朝黒釉の壺などが戦利品である。コロナ渦により仕入れが難しくて今は休業中である。もともと幹線道路の補償金をもらっているので、のんびりした経営である。

石神井公園駅近くの一軒は西洋骨董店である。こちらもサラリーマン上がりで趣味が高じてプロになったという。素人らしさが残っており真面目で好感がもてた。仕事熱心で店売りの他、デパートや各所の骨董市に出店している。品物も豊富で色々眼を楽しませてくれる。散歩の途中で立寄ったのが端緒で今はもう長いつき合いとなった。時たま彼の専門外の陶器などが入ると私に説明を求めてくる。今では大の仲良しとなった。

彼の店では、当初は古いガラス製品、人形、銀製品など小品ばかり買っていたが、最近では十九世紀のマイセンの皿、「棟方志功」の木版画、「ピカソ」のサイン入り



飾って楽しむ「志功」の版画

版画（少し怪しい）等掘出品と思われる品を格安で譲ってもらって悦に入っている。これからもずっと通い続けたい店である。

私は食道楽である。私が利用する飲食店は当方から歩いて5分程度の場所にある寿し屋と鰻屋である。鰻屋の方は今時珍らしい専門店ではあるが、味は普通である。

一方の寿し屋は「寿し政」と云い、九段にある有名な「寿し政」と同じ屋号ではあるが全く関係は無いとのこと。当方が越してくる以前から操業しており、近年チェーンの回転寿しが近くに開店しているが、客足は衰えず繁昌を続けている。地元の信頼度が高いからであろう。

聞くところによれば、銀座の有名寿し店「久兵衛」（魯山人がよく通った）とまぐろの仕入先は同じであると自

慢している。さもありなんと思う。ここの料理は本当においしい。しかも料金はリーズナブルである。冬はふぐ料理も加えている。お訪ね下されば是非ご案内させていただきます。

こちらへ移ってから既に26年、私も今年中に満91歳となる。嫌でもこの地が終の栖となる。この段階で、心の満足を得て、この生活を楽しめる様に至ったことは有難いことと感謝しなければならない。無理なく「住めば都」の心境となっているのである。

（続）

参考資料
練馬区小史
練馬区勢概要

練馬区発行
練馬区総務部情報公開課発行

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

吾輩は紙魚ロボである　その九

永畑俊三（永田俊一）

一、新型コロナウイルスの感染状況と対応（一〇・一一月）

（一）第五波の急速な収束

前回触れたように、八月から十月にかけて、コロナ五波急拡大が、人流の象徴的なオリ・パラ日本開催と夏休みに重なり、急がせたワクチン接種の効果顕現前の実施綻びもあって、遂に政治にノーが突き付けられた。結果として党内身内の権力争いの様相も垣間見せながら、現首相の総裁選不出馬、四人の総裁選劇、そして岸田新総裁・総理（10月4日第一次内閣）による史上最短解散・総選挙（10月31日投票）となった。背景として、気づかず語らず響かずの後手後手コロナ対策政権への国民的失望があった。皮肉なことにこの選挙中に、東京で二桁台に入っていた感染者数は更に前週比減少を加速させ、一桁台も示すように急収束の動きを見せた。

第五波は、ワクチン接種、宣言・措置、行動変容定着等対応側の要因だけでは説明しきれない急減衰を示し、一息を得て岸田内閣（11月10日第二次内閣）も後手後手を脱し、コロナとスクラッチで対応体制を論じられる船出となった。

検証実験、ワクチン・検査パッケージ、Go to 検討等で新日常への取り組みもみせているが、他方で世間には第六波への危惧も強く直ちに旧に復することへの逡巡も見られる。インフルエンザ並みに付き合えるように、如何収束させ新日常の体制と心構えに降ろしていけるか、最悪事態原理の備えに、政治も含めやっと国論も収束した模様である。

徒然草、第一〇九段「高名の木のぼり」の話に思い致

すところではある。

「高名の木登りと言ひし男、人をおきてて、高き木に登せてこずゑを切らせしに、いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、降るるときに軒たけばかりになりて、『過ちすな。心して降りよ。』とことばをかけ侍りしを、『かばかりになりては、飛び降るるとも降りなん。いかにかく言ふぞ。』と申し侍りしかば、『そのことに候ふ。目くるめき、枝危ふきほどは、己が恐れ侍れば申さず。過ちは、やすきところになりて、必ずつかまつることに候ふ。』と言ふ。あやしき下臈なれども、聖人の戒めにかなへり。鞠も、難きところを蹴出だしてのち、やすく思へば、必ず落つと侍るやらん。」

降りるに転ばぬように、再び登ってこずえを切る必要がないように体勢をしっかり整えるよう、吾輩も期待したところである。

また、急減の要因は種々語られたが、詰め切れるところまではいっていない。

例えば経済分析の専門家（仲田泰裕：東大准教授、マクロ経済学）は、ワクチンと人流だけでは説明出来ず、加えてデルタ株感染力が予想以上に小さいこと（1.5倍アルファ→1.2倍）・人々のリスク回避傾向の強まり・周期性の三つを斟酌してみても統計的に有意とならないと判断。

政府専門家会議の専門家（館田一博：東邦大教授、日本感染症学会前理事長）は、七月から高齢者ワクチン接種が急速に進み（数千万の集団）、若い人はデルタ株では検査確認の三～四倍は感染していても殆ど症状がない「不顕性感染」で無症状、これでタイミングよく一時的に集団免疫効果が強く表れ、八月半ば以降に感染者急減と判断。

外部専門家（黒木登志夫：東大名誉教授、日本学術会振興会学術システム研究センター顧問、専門はがん研究）は、八月下旬～一一月初、新規感染者数八・六日で半減ペースで急降下、このままいけば一二月上旬には一人に、デルタ型の減少は急すぎる。ゲノム解析で第五波のデルタAY29株が日本独自株になっており、ウイルスが変異修復遺伝子（nsp14、ウイルスゲノム変異を起こさせない）に変異、感染ウイルスの複製を阻害する遺伝子変化もあり、感染力も弱まり変異力欠如で自滅に作用したとの可能性を指摘。別の専門家（松浦善治：阪大特任教授、日本ウイルス学会理事長）からも、接種進展が言われるが急減はウイルス側に理由がある可能性もある。強い感染力を持つデルタ株は余りに多くの変異を起こし過ぎ、人間に感染時に増殖に必要な物質を作らせる遺伝情報が壊れる等して、変異を重ねた末に自滅しつつあるかもしれない、との指摘あり。

ということで随分科学的な説明が行われるようになってきたものの、まだ確定的知見になるところ迄は行かず、現に感染は世界で多様に進行中である。政府専門家が言うように、次への備えという点で生かして行くということだろう。

曰く「日本では八月半ば以降に感染者急減、しかし、英・イスラエル等ワクチン先行国では、ワクチン効果免疫力が弱まっていた時期にデルタが流行しブレークスルー感染も増加。日本では基本的な感染対策が文化として定着しつつあるが、ワクチン効果は六～八か月。追加接種すれば十二月以降になり、感染の冬と重なり効果が期待され、接種のタイミングが重要であり、多くの人に一気にかつ接種スピードも求められる。第五波の教訓を生かした備えが不可欠である。」

（二）コロナが問うた政治

冒頭のノーが突き付けられた政治の信頼回復の試練が続いている。

選挙で選ばれた新政権が、コロナ後新常態の社会を適切に導けるか、新常態に向けての適切な政策提示とその迅速な実現が願われていることは勿論である。しかし選挙（10/30投票）に当たり示された各党の選挙公約はその性格上耳ざわりの良いフレーズだけで、問題と対策の認識判断の整合性・具体性・実効性・手順・体制等不分明なところが多く、国民の選択は内容の真の理解というよりその手前のところで行われたのが事実と言えよう。勿論結果は結果であるから、共産党と一体選挙を戦った野党第一党の立憲民主党の退潮と維新の会の大幅躍進は、立憲民主党党首の引責辞任そして一一月後半を、先の自民党の総裁選同様、立憲民主党四候補による党首選挙が世の耳目を引き摺りこむこととなった。

命と生活、命については、最悪事態原理の備えに、政治も含めやっと国論も収束した模様で、先の選挙公約でも大同小異となったが、生活、経済についてはまさに抽象論に終始、具体的にはこれからビジョンを固めるという段階であった。

コロナ下、科学を踏まえた政治の欠如が言われ、コロナの虫眼鏡効果が、四半世紀躊躇してきた歴史的変革断行の必要性を強く印象付けた。経済も科学と気の分野であり、生産―所得―支出を三頂点とし、分配→需要→供給を三辺とする三角形の上で整合的に、景と気や経世済民の姿を論ずべきで、中長期的に見れば、各頂点・各辺に産業構造・人口動態・働き方・需要選好・商流決済・財源事情等の構造要因を抱えている。この間アベノミクスの三本目の矢、構造的成長戦略が頓挫して、目標達成不可のことも事実が証明しており、その事実と正面から向き合って具体的に動く策を提示するのでなければ始まらない。そして何処に起点を置くにせよ、全体が円滑に回ることを検証し、適切な時間軸・関係軸上に積み上げた実現可能な転換期の戦略（構想）には、半世紀前の経

済社会発展計画のように社会あげて調査分析検討した長期計画を共有して進めることが適切で、それが将に信頼の三角形で進めることになると思われる。そうした線上で建設的な経済新常態論が戦わされてゆくことを、吾輩は期待している。

フレーズ公約レベルの段階では、政党間でも「成長と分配の好循環」がアベノミクスの焼き直しだとか新自由主義からの脱却が必要とか新資本主義は意味不明とかの議論や、一度口にした所得倍増計画隠しは脆弱な政策の露呈だとか、表面的争論に終始した。閉じぬワニの口は算数レベルで自明と、財務当局者による一刀両断のばら撒き財政破綻への警鐘は、当初発言自体の適不適切の議論に終始し、時間軸の中で成長との関係で健全財政の則を越えるべきでないとの真摯な議論を見失っていた。過剰債務を子孫に残さずと言うだけでなく、それを克服する道筋も付けた責任ある選挙選択肢が示されて欲しいと思いもしたが、我が国民主制度はまだそこ迄成熟しておらず、更に突き詰めれば、民主主義社会（自由・平等・博愛→自由・衡平・博愛）と資本主義社会を如何前提とするか否かも気になる論点であった。他の主義の生産体制や社会体制を前提とすると、その分配論は成長のエンジンを異にし片肺論にもなり得る。そこ迄深まらず今回もまた最後は託せるか否かの常識判断に賭けられたのだろうが、社会が共有した選択判断があるべき新常態に繋がるかは、今後の政治の賢明なる舵取りに委ねられた形である。

少しずつ冷静を取り戻し、命と生活を総合的に持続可能なかたちで建設的に語りあえる日が、世界に戻ってくることを期待している。

（二）野党体制、経済対策・補正予算・来年度予算

一一月一五日公表の七～九月期ＧＤＰ速報値は実質季節調整値で前期比〇・八％減、年率換算で三・〇％減と二四半期ぶりのマイナスとなった。宣言が長引き個人消費・投資・輸出等経済活動が低迷したことによる。七月の年央試算では年内にＧＤＰがコロナ前の水準に回復する（21年度で３・７％成長）と見込んでいたが、実現には今後２四半期で各前期比年率一一％と高成長率達成が必要となるとのことである。

年末日程の慌ただしさもあって、新首相の「新しい資本主義」実現会議が開催されたが、一般的方向感を確認の上、緊急提言が議論もそこそこに提示され公表されるにとどまった（一一月八日）。経済対策も慌ただしく当日説明が行われ、額ありき過去最大と言われる財政支出五五・七兆円、事業規模七八・九兆円が滑り込みのように、一一月一九日閣議決定された。二〇二一年度補正予算には三一・六兆円が計上される。国会日程は選挙後首相指名選挙等三日間開いた特別国会終了後の一三日

に、「十二月六日招集・会期二週間程度」で議論が始まったが、年末の予算編成日程との関係や立憲民主党党首選挙が一一月三〇日まであることも踏まえて最終決定され、補正予算や首相の政治姿勢やコロナ対応の全体像等が予算委で、自民・立民改造後の新執行部の論戦となる見通しとなった。

経済対策は、病床確保等緊急包括支援交付金や最大二五〇万円の事業者支援金などの新型コロナ感染症の拡大防止策（事業規模35.1兆、財政支出22.1兆）、新たなＧｏｔｏ　トラベル事業やコロナ対応予備費など「ウィズコロナ」下での社会経済活動再開と次なる危機への備え（10.7兆、9.2兆）、技術革新向上のための大学ファンド、看護士・介護士らの賃上げ［0.3億］や一八才以下一〇万円給付金等未来社会を切り拓く新しい資本主義の起動（28.2兆、19.8兆）、防災・減災・国土強靭化など安全・安心確保（5兆、4.6兆）合計（78.9兆、55.7兆）である。景気の後押しと言っても大盤振る舞いが過ぎる、分配戦略それも小手先のばら撒きにかたより、成長戦略の踏み込み不足で骨太の経済政策になっていない等、早速批判が向けられた。これに対して公明・自民で子供交付金の所得制限設置や「新しい資本主義」の検討を踏まえた新年早々の新計画の打ち出し強調等で理解を得るべく努めている。

そして、一一月三〇日、新たに南アを席巻し出したデルタ株より感染力が強いとされ、ＷＨＯが注意を促すことになったオミクロン株が、水際強化したばかりの羽田にも日を置かず現れ、この日ゲノム解析の結果ナミビアからの外交官が初めて陽性者と特定された。時を同じくして四人の候補で争われていた立憲民主党の党首選も、前政調会長（四七才）の泉健太氏に決定され、新たなコロナ対策と新たな政治リーダー達の下で国会論議が始まる、一二月に突入した。

二、新常態に向けた新展開

既述の通り、本年初から米国バイデン政権は新常態に向けて世界をリードすべく、問題の提起・対話・議論検討の場作りを積極的に行って来ている。「民主主義の価値観の上に『連帯（格差是正とともに）と脱炭素化』をテーマに世界を巻き込んだ、所謂バイデノミクスの新常態議論」と吾輩はその時から言っている。

格差問題は新自由主義経済の反省となって反トランプのバイデン経済政策に反映され、ダボス会議等で世界の議論ともなっている。日本でも今まさに岸田政権になって議論になっている。脱炭素はＣＯＰ２６で温室効果ガスの抑制方向にコンセンサスを得た。また米国金融政策

の転換が世界に金融政策・金融制度の新常態議論を展開させている。コロナもワクチン接種が世界的に浸透し集団免疫でウイズコロナへの出口を探る段階に入って、対応対策も国際的連携がより求められている。事項ごとに吾輩の見ているところを少しく述べてみよう。

（一）新しい資本主義論

シュンペーター『資本主義・社会主義・民主主義』によれば、「資本主義は経済発展の過程であり、その基本的推進力は企業者の創造する新結合である。それは内部から絶えず経済過程を革命化し、古きものの破壊と新しきものの創造をもたらす。この『創造的破壊（イノベーション）』の過程こそ資本主義の本質である」「社会主義は商業社会に対応するものであって、生産手段及び生産自体の支配が中央当局によってなされるものであるが、社会主義経済体制と民主主義政治方法との間には何らの必然的関係もない。（現代の民主主義は資本主義とともに出現したものだが）」とされる。そして、両大戦前後を通じての各国社会主義政党の政治体制への関わり方や資本主義国家の変化の詳細な分析を通して「資本主義が存続しつつ社会的に調整統御される管理資本主義（民主主義的な社会化の方法）の性格を強めつつ、漸次社会化への道に進んでいることは全世界を通じての基本的傾向であり米国も例外にあらず」と実証する。

共産党宣言における「資本主義が成熟し自己崩壊が始まり、解体に至った時の受け皿としての社会主義国家」は、皮肉なことに西欧で最も資本主義の未成熟なロシアで実現した。両大戦前後を通じての各国社会主義政党の政治体制への関わり方、そして資本主義国家の変化の帰趨等の詳細な分析をみると、資本主義経済社会の段階の違いはあれ、経済と社会を繋ぐ政治の在り方を考えるにあたって大いに参考になると思われる。シュンペーターの言うように必然的関係が無い故にこそ、真面目に考えるほどその最適の道行は難しく心して判断し選択すべきものであろう。

そのシュンペーターが言うように、二次大戦を跨いで稀代の戦略家スターリンが築いた共産主義独裁政下の社会主義圏（東側）が、ベルリンの壁を挟んで民主政下の資本主義圏（西側）と世界を分けて約半世紀。この間西側では、資本主義経済成長発展のエンジンは、新規需要（フロンティア）と技術革新という需給相俟ってのイノベーションにあることは当然の前提としつつも、主として市場経済と市場の失敗（公共財）で経済社会を論じてきた。日本はゼロからの立ち上がりでフロンティア意識すなわち、成長発展に構造・意識の総合的変革が必須との認識が薄く、アベノミクス成長論にもその面があり結果に表れている。

ブレトンウッズ体制の崩壊・オイルショック・インフレ昂進を先進国協調体制で乗り切った後一九八〇年代から強まった新自由主義の下の西側の経済発展と自由市場に一九八九年、東側は壁を溶かされた。そして経済フロンティアを埋めるように西側と共に発展し出した。先進国が過度の金融資本主義に躓き超金融緩和のカンフル剤投与を続ける中、追いついた非民主社会主義的経済との覇権争いが始まったところで、戯画的に言えばコロナに割って入られた。

日本はその躓きのリーマンショックの二〇年も前からデフレで名目ＧＤＰ横這いの長期デフレと超金融緩和経済に陥っている。

中国はシュンペーターの言う「共産主義独裁政権の社会主義経済体制」から鄧小平が「中央当局の生産手段及び生産自体の支配」を緩めて「新しい社会主義」として商業社会としては「新しい資本主義」に限りなく接近し、むしろ新自由主義化の資本主義のようにアグレッシブな企業家を輩出、経済自体の飛躍的拡大を果たし経済規模世界一を指呼の間に入れた。しかし「共産主義独裁政治」自体がそれによって民主主義に変異するものではなく、将にシュンペーターが言うように両者に必然関係がないことも改めて明らかになった。必然関係はなくとも両立するかどうか、習近平体制が歯車を逆回転させ始めている。中国共産党六全コミュニケ（11/11）にあるように、「近代的社会主義強国の建設と長期的政権を担うマルクス主義政党の建設をめざし、・全党は全国各民族人民を団結させて率い・社会主義現代化国家の全面的建設」と、むしろ二一世紀の新しい共産主義への回帰は可能か否かに挑戦しようとしているかに見える。

これに対して民主主義サミットでバイデン西欧は人権中心に「民主主義対専制主義」で対抗し出した。

そして経済は脱炭素等環境との共生や格差解消等命・生活の絆の需要とＤＸ等技術革新との需給相俟った「新しい資本主義」がバイデノミクスで始まった。

日本でも「新しい資本主義実現会議」の「緊急提言」冒頭に「現在、世界各国において、持続可能性や「人」を重視し、新たな投資や成長につなげる、新しい資本主義の構築を目指す動きが進んでおり、我が国がこの動きを先導することを目指す。」としている。経済成長発展のエンジンはイノベーションとの認識に追いつき、環境とも折り合い一人一人の幸せにも繋がる、成長―分配―投資・消費の持続的好循環を、今度こそ具体化実現して欲しいと思う。

なお、「緊急提言」冒頭部分は前述の通りだが、更に次のような記述がある。

「成長と分配の好循環の起爆剤として、デジタルトランスフォーメーション（ＤＸ）やグリーン分野の成長を含めた科学技術立国を推進し、イノベーション力を抜本

的に強化する必要がある。その際、民間がイノベーションを起こし、それを官が支援することを基本とする。また、イノベーションを社会課題の解決に活用することで、利便性の高い社会を作るとともに、地方の中堅・中小企業や下請け企業、スタートアップを含めて、幅広い産業や企業の生産性向上を促進し、豊かな中間層を生み出していくことが重要である。製品だけでなく、サービスのイノベーションも進めていく必要がある。

逆に、従業員に賃金の形で分配してはじめて、消費が拡大し、消費拡大によって需要が拡大すれば、企業収益が更に向上し、成長につながる。分配戦略は、成長を支える重要な基盤である。成長戦略によって生産性を向上させ、その果実を働く人に賃金の形で分配することで、広く国民の所得水準を伸ばし、次の成長を実現していく『成長と分配の好循環』の実現に向けて、政府、民間企業、大学等、地域社会、国民・生活者がそれぞれの役割を果たしながら、あらゆる政策を総動員していく必要がある。」と述べ、

「新しい資本主義実現会議では、こういった基本的な考え方を踏まえて、来春にビジョンとその具体化の方策を取りまとめ、世界に向けて率先して発信していく必要がある。」と今後の取り進めを説明している。

（二）格差是正の経済対策

一足先にバイデン政権は大型の財政支出を伴う経済対策を打ち出し着手している。米国の経済格差はレーガン政権下の一九八〇年以降拡大を続けており、その最大の要因は技術革新で中技能者の職が失われ、高技能職に就いていた人はよかったが、より低技能な職に移らなければならなかった大卒以外の人々の賃金が下がってしまったことにある。更に所得税率が下がったことや弁護士・会計事務所・ベンチャーキャピタル・ヘッジファンド・開業医など高所得者に税が有利になったこと、労働分配率自体が下がっていること等が加わる。これに対するバイデン政権の政策は、技術進歩に伴い中技能者が減ったのは教育が技術進歩に立ち遅れている訳だから、高技能職に就けるよう教育を拡充しようということで、教育とか健康保険、社会保障を充実させ、低所得者には教育を通じて高技能職の雇用を促進する。しかも子供の貧困を減らそうとしている。高所得者に税制が有利なことについては、中所得者に有利にあるいは高所得者を優遇しないよう改革する。ＩＴ企業等巨大企業が販売シェアを大きくすることで労働分配率が低下することに対しては、独禁法を中心とする競争政策を強化する。なおコロナ不況からの回復過程で、財政補助を急に減らさず暫く赤字を許容する。共和党の、投資を増やし所得の低い人もやがて成長のおこぼれにあずかるトリクルダウンとアメリカファーストで需要を海外に求めるのとは一線を画

すると言える。景気の回復に伴い財政赤字は一〇％超から三％程度まで減るとみているように、成長率は名目で三・六％、実質で一・四％と基本的に高いとみている。

日本の所得格差は米国までのようなことはなく、むしろ長年続く名目平均成長率ゼロの構造的不況の中で、年代別平均所得の山が所得の低い方に向かって全体的に移動して、このコロナ下では困窮者を増加させている。それ故アベノミクスでは実現しなかった成長率アップが必要である。そして周回遅れで技術革新の影響が本格的に顕現化するのはこれからでその格差拡大要因の対応、即ち教育や競争力や新規需要を呼ぶ生産性向上による一人当たりＧＤＰアップが図られねばならず、それなくしては財政赤字の改善もなくむしろ財政支出の結果赤字増大に繋がりかねない。バイデン政権の経済対策に成長政策を加味した成長―分配―投資・消費のキシダノミクスが適切に変革した全経済構造をくまなく動かして機能するかどうか、これにかかっていると言えよう。

（三）脱炭素社会

ブレーキの効かない資本主義生産方式では所要の脱炭素は実現できないとの前回紹介した「人新世の資本論」のような論点がある。「生産手段及び生産自体の支配が中央当局によってなされるもの」とのシュンペーターの社会主義の定義と管理のグラデーション的議論によれば、既に資本主義は社会的課題を自らに取り込み社会が管理出来る形に脱皮進化している。その鼎の軽重を問う第二六回国連気候変動枠組み条約締約国会議（ＣＯＰ２６）が、一〇月三〇日英国グラスゴーで一一月一二日迄の予定で始まった。進捗状況を点検し、各国は新たな削減目標を提出し、各国首脳も直接あるいはオンラインで表明演説を行い、場外での妥結協議や環境団体の促進抗議等も行われ、期日の合意に向けて世界の耳目を集めて努力がおこなわれた。

石炭火力発電についての「段階的に廃止」案文が採め、会期を一日延長して開催国としては残念ながら「段階的に削減」で決着、一三日「グラスゴー気候合意」を採択して閉幕した。合意文書では、産業革命前からの気温上昇を１・５度に抑える努力を追及するとして、「今世紀半ばには世界全体で温室効果ガスの排出量を実質ゼロにする」ことを明記、この一〇年の行動加速を強調、各国に二〇三〇年の削減目標や対策の強化を促すために、五年に一度の約束だった目標見直しを年一度とすること、温暖化に備える途上国支援を二〇二五年まで倍増すること、パリ協定で宿題になっていた国際間の温室効果ガス削減量取引の取り決めの詰め、非効率な補助金の段階的廃止や有志国間でのメタン削減・ゼロエミッション自動車・脱石炭火力・森林保護などの取り組み約束等の成果を得た。

この共通目標を如何にして（改定は強化の方向だけにして）堅持できるか、各国が自らに課した約束も同様に堅持し不測の事態には協力して穴を埋められるか、具体化の道程はとてつもなく厳しく、ある意味人間力を問われるものである。

（四）新しい国際金融論（デジタル通貨―ＣＢＤＣ―を早急に）

カード型電子マネー・モンデックスの使用実験が英政府の関与もあり行われ、米国ではネットワーク型電子マネーＥキャッシュ（蘭デジキャッシュ社）が銀行で使われたのが、一九九五年。「電子マネーのセキュリティー」（1996/8国際決済銀行支払決済システム委員会コンピュータ専門委員会公表）によれば、「全般的にみて、電子マネー製品、特にハードウェアによるセキュリティー対策は、他のプリペイド型の小口決済手段等に比較して遜色ないセキュリティレベルを確保できるとの結論に達した。しかしながら、単独のセキュリティー対策だけで十分な安全性を確保している製品は見当たらなかったというのも事実である。」と述べている。当時日本銀行も含めその金融政策に及ぼす影響の検討が盛んに行われたが、この決済通貨としてのセキュリティーの問題で具体化には至らなかった。

二〇〇九年ブロックチェーンという新セキュリティー技術を使ったビットコインが登場すると、次第にその決済コストの安さと便利さで世界的広がりを見せ、その便利さと希少性が投機的商品として高値をつけ、取り扱い会社の破綻や不正も起き、規制の必要性が唱えられるところとなる。一方で二〇一五年、「デジタル通貨」報告書（ＢＩＳ ＣＰＩＭ＝決済市場インフラ委員会）も出され、「デジタル通貨が現金（銀行券）を代替する形で広範に使われるようになれば、中央銀行のバランスシートがその分縮小し、通貨発行益の減少に繋がり、マネーサプライの指標性や、金融政策の有効性に影響が及ぶ可能性もある。更に既存の預金通貨等を広く代替する可能性もあるが、今のところは限定的である」としながら、中央銀行が自らデジタル通貨を発行する可能性も思考実験として言及、「民間主導のイノベーションへの影響や、中央銀行の発行するデジタル通貨への需要が民間銀行預金への需要を代替してしまうことに伴う影響への考慮も必要である」との見解を示した。

中国では使用禁止となるが、各国はビットコイン等民間の暗号通貨に金融商品としての取り扱い規制をかけ、日本でも二〇一九年資金決済法の改正が行われ、暗号資産交換業登録制とし広告表示や禁止行為や利用者保護措置、暗号資産の管理方法等に係る法制度整備が行われ、翌年施行された。

そして二〇一九年、この領域にフェイスブックが通貨

バスケットで裏付けされたステーブルコイン、リブラの計画を発表すると、各国通貨当局から批判が相次ぎ、フェイスブック側での見直しと共に、各国での通貨当局によるデジタル通貨の実証検討や金融機関によるステーブルコインの導入検討に拍車がかかってきた。現状日本では、日銀のデジタル通貨検討委員会メンバーの宮沢和正ソラミツ（株）社長によれば「デジタル通貨はイノベーション推進の視点から『民間デジタル通貨や決済とＣＢＤＣの両立・連携』が大原則で、日銀は今のところＣＢＤＣ（中央銀行通貨）の発行予定はなく、自治体や金融機関などによる相互運用性のある民間デジタル通貨を先行してほしいと考えている」とのこと。一〇月一五日の中央銀行デジタル通貨に関する連絡協議会で、「中銀が個人や店舗にＣＢＤＣを直接発行する直接型ではなく、仲介機関を通じて発行する間接型の形態を採用する見通し」が明らかにされた。二〇二二年四月からは現金との交換や民間の決済システムとの連携を検証する実証実験に移行する方針が示されている。

また、河村小百合日本総研主席研究員によれば、「英当局は、銀行預金からデジタル通貨への流出を五分の一とみている。ネガティブインパクトの可能性も考え、ステーブルコインについては、規制環境をあらかじめ確立して、その流通が実際に拡大することを当局としても容認し、その初期段階を「移行期間」と位置づけ、民間商銀からの預金流出の進み方や仲介機能への波及などを当局がリアルタイムでモニター、その上で万一実際の事態展開があまりにも早く対応も追いつかない状況なら、当局が預金流出に一部ストップをかけ、秩序だった対応の時間を与える枠組みの導入を検討している。このような懸念は去る九月末にＢＯＥや日銀を含む主要七か国中銀とＢＩＳのグループが公表したＣＢＤＣに関する第四報告書の中でも詳しく指摘され検討されている（流出加速）。対応策としてはＣＢＤＣの保有可能額に上限を設定したり、危機時の引き出し制限などの枠組みも検討されている。翌月の主要七か国財務相・中銀総裁会議ではＣＢＤＣの共通原則が纏められた。」とのことである。

印象だが、銀行が出来それぞれの銀行券を出しやがて中央銀行が一本化し法貨にした、それが歴史であり世界的にそのシステムが定着している。何故その時間とゴタゴタの危惧のあるそのプロセスを繰り返して、一挙に金融制度全体としてデジタル通貨化するのを渋るのか、吾輩には理解しかねるところがある。

リブラ案の出た頃のご主人の論稿を見つけたが、それを引用しておこう。

『リブラは、古代ローマでもカロリング朝でも貨幣単位として使われ、英国ポンドが由来するものでもある。そのせいでもあるまいが、競争相手でもある国際金融当局

やＩＭＦが、口々に拒絶を唱え俄かに世界を喧しくさせている。

二〇年前、欧州から吹き起こったデジタルマネーの風に、金融当局は安全性や金融政策の形骸化の可能性を心配した。結果は暗号技術レベルの問題もあってか、現行の法貨と預金制度を前提にしての、プリペイドの法制化と預金のデジタル化に議論は一旦収束した。そして六年前、ブロックチェーン技術の開発を踏まえ、その後の経済生活グローバル化の急速な進展が金融包摂を求め、ビットコイン旋風が上陸した。各国が禁止か漸次解禁かと論を進める中、当初単なるモノだと半身の構えだった我が国当局は、ビットコイン盗難不祥事や国際会議の求め等から腰を上げた。その結果ビットコインの擬似通貨としての認知と取引所規制を資金決済法の改正で法制化、一転世界の先頭に立った。

この間私はその現場にいたわけではなかったが、聴かれれば物の理としてはこう考えていると、言っていた。即ち、グローバルなヒト・モノの交流拡大が国際的なコストの安いカネの送付・決済を求めての、為替及び銀行口座不要のビットコインである。故に本質的な対応は、ＩＭＦ創設時ケインズが主張したバンコールのような何らかの世界通貨の提供、或いは少なくとも現行国際決済システムの効率化と利便向上とコストダウンである。また規制は、既に投資商品化しているのだから、金融商品取引法で対応すべきというものであった。更に早晩中央銀行券のデジタル化は必至であり、銀行のデジタル債権のデジタル手形割引・引受、日銀のデジタル銀行手形の割引・引受によるデジタル中央銀券発券といったルートを使ってその早期実現を図るべきというものであった。

そして今、俄かにリブラを前にして世界中の金融当局が、恰もそんなことはあるとも思ってもいなかったかのように拒否の声をあげている。ビットコインという為替を越えた水平化の段階から、内外越えた暗号通貨の面化の段階に入って、物の本質が分かりやすく可視化された故に、拒否・規制に留まらず自らの変革を突き付けられたという危機感に目覚めたというべきか。

今世界はＩＴ技術革新によりグローバルにかつ新たな国際分業を競って進む大経済波動の途次にある。日本では少子化も相俟ち社会経済活動の在り様を抜本変革すべき人生一〇〇年時代も到来している。第三の矢の成長戦略・生産性改革はこの全般的歴史的構造大変化の時間軸の上にある。金融のみこの動きに自由ではありえず、むしろグローバルにマクロ・ミクロ経済社会の総合的な変革に寄り添い支えとなるべきものである。究極は人々の信が存立基盤の貨幣、問題を正面から受け止め、金融当局としての対応措置に向き合うべきであろう。

それはまた国際的に始まった次世代経済への転換移行を支えるためにも、国際的器作りとして急がれるべきも

のであろう。』

（五）新しい国際関係論（コロナ・コンサーテッドアクション―協調行動―）

日本で第五波の動きが始まっていた七～八月頃をピークに北米・アジアは感染者数が減少に転じ、ＥＵも一〇月ころまでは緩やかに減少していた。そして日本で急速に減少し凪の状態で政治転換劇を演じられた一〇～一一月に海外では反転、特にＥＵでは急上昇でロックダウンや飲食店利用禁止やマスク着用義務付け等のコロナ規制に逆戻りした。こうした中、先行ワクチン接種を背景に高止まり増加基調でも規制撤廃のまま集団免疫獲得のウイズコロナ新常態を目指していた英国もさすがに強力なオミクロン新株の登場で国を閉ざし、ＷＨＯも早期に警戒警報を鳴らし、全世界国を閉ざしつつ固唾をのんで敵の姿を見極めようとし、同時に予防措置の検討・措置に入りだした。コロナという変幻自在に攻めてくる世界の敵に対しては、世界的にコンサーテッド・アクションを採らねば、結局どの国も集団免疫獲得のウイズコロナ新常態で終結という訳にはいかないことを改めて思い知ったように見える。世界としての集団免疫、ウイズコロナを見据えて、と一段目線を上げることであり対策実行することを意味する。

振り返って、新型コロナウイルス感染症対策世界三タイプについて、このシリーズその七で、「集団免疫が出来て収束する感染症パンデミックの習性を前提にして先回りして考えてみると、吾輩でも次のようなことは言えるであろう」として語ったところである。

ワクチン接種が行きわたって世界的な収束が見えてくる時点で振り返ると、そこへの道行きは国によって大まかに、①経験遺伝子が当初から作動、徹底してロックダウンしいち早く通常生活を取り戻し余裕をもってワクチンで集団免疫を達成しようとしたところ、②当初感染を放置し通常生活を続け、感染拡大後ロックダウンし収束すると通常生活に戻してまたロックダウンと繰り返し、ワクチンが行きわたることが加わって集団免疫状態を得ようとしているところ（対策の取り方は強制と要請があり日本は後者で珍しい、また感染の山型の規模や質は夫々変異や体質や行動変容等の違いで異なるが）、③基本的に通常生活のままで感染者が犠牲を伴いながら集団免疫方向に拡大し、最終的にはワクチンも加わって集団免疫で収束しようとしたところ、の三タイプに分かれる。

その間の被害者数や程度に違いはあれ、最後は集団免疫で収束というのが、感染症パンデミックの歴史科学的収まりである。その意味で当初から最悪事態原理で徹底抑制し被害を最小にとどめ、ワクチンで最後仕上げが最善だが、残念ながらこのコロナに対してそれだけの事前の明確な処方箋共有は無かった。仮に科学的な認識に全

て基づいていたとしても先ずは、ワクチンの可能性や開発製造スピードへの明確な知見共有も無かったことで、戦いの時間軸の中での戦略が異なりうることにも繋がる。しかしここまで来ると、どこで発症しようと当初から全世界ロックダウン先行で拡大を防ぎ、その間に初めの検体からいち早くワクチンを完成し、それを世界で共有できるシステムが確立し、当初から迅速検査・感染徹底抑制で被害を最小化しつつワクチン接種で集団免疫状態を作るというプロセスを世界協働して採るべしということになる。

そしてそのプロセスを確実迅速にする為、今回必須と認識された不断のワクチン開発、医療体制、防止手段・施設設備・システム、生活行動変容、人的物的資源、緊急事態時法や対応項目、支援制度・システム、内外取り纏め機関、国際的ネットワーク等々具体的な整備・準備をすること。そしていざとなったら迅速に適時作動できるようにし、平時の点検や必要な予行演習も出来るようにすること等の対応の基本を忘れないよう、歴史科学的にきっちりと方針として遺伝子化することが重要である。その際、問題化して解明が途中で終わっているものについてもきちんと結論を出しておくことも大事である。例えば病床世界一の日本で何故欧米で起きなかった医療崩壊が起きるかの問題。人口当たりや病院当たりや感染症専門の医師の少なさが指摘されたり、公的病院の少なさや公私・地域・各監督当局を越えた連携不足が明らかになったり、果ては医療関係者の努力不足が露呈したりしたところである。その指摘の正しさがどの程度のものであったか真の要因はどうであったかの実証は勿論、どのようなケースに何が問題で総合的に対応できるようにするには如何改善しておくべきか、ということまで詰めて準備するということである。

三、年の瀬の憂鬱（一二月）

（一）オミクロン

そんなところにオミクロンである。南アで一一月二五日見つかったと発表された変異株「オミクロン株」が、一一月末にかけ欧州始め、世界各地で相次いで確認されるようになった。英国でアフリカ南部への渡航者二人が、独でも同じく二四日到着の二人が確認されたのが二七日、イタリアやデンマークでも確認された。二八日にはオランダで南アから二六日到着の航空便乗客六二四人中の陽性者六一人のうち一三人がこの株感染者であることが確認された。同政府は、EU市民を除いて南アやボツワナなど八か国からの航空便での入国を禁じ、二二日以降の入国者に検査を求めている。オーストラリアでもワクチン接種済みで無症状の二人の感染が二八日確認された。ジョンソン英首相は「オミクロンは非常に急速に広がり、

ワクチンを二度接種した人の間でも感染する可能性のあることが判明した」と述べた。

WHOでは二六日、最も警戒度が高い「懸念される変異株」に指定しているが、わが国でも二八日国立感染研がデルタ株などと並んで警戒度が最も高い「懸念される変異株」に位置づけた。二九日、前政権の水際対策後手批判を意識したように外国人の新規入国停止（三〇日から一二月三一日迄）を発表、首相は「『まだ状況が分からないのに岸田は慎重すぎる』という批判は、私が全て負う覚悟でやっていく」と語った。合わせ日本人帰国者についても国指定の宿泊施設での待機を求める対象国を追加、入国者総数についても一日五千人から三千五百人に引き下げた。南アの二五日発表を受け二六日には六か国からの入国者には国指定の宿泊施設での一〇日間の待機を求めると発表していたが、「緩い」との批判が相次ぎ、二九日には「原則外国人の入国は禁止」となった。

同日、一日当り新規感染が三～五万と高止まりしている英国は、三回目のワクチン接種との間隔を「六か月以上」から「三か月以上」に短縮する方針を表明した。同時に三〇日から、公共交通機関や店舗でのマスク着用の法的義務化や外国からの全渡航者にPCR検査の陰性結果が出るまでの自主隔離を義務付けるなど水際対策の強化も公表した。同日、テドロスWHO事務局長は「高度に変異しているオミクロン株の出現によって、我々の置かれた状況が危険かつ警戒が必要なことは明らかだ」と述べ、ラマポーザ南ア大統領は各国の渡航制限に「深く失望した」と述べると同時に、総人口の二三%しか接種が進んでいない国民に「変異株から身をまもるためにはワクチン接種が最も重要だ」とよびかけた。また各国から情報が集まるにつれ、香港には一一日に到着した便に感染者がいたこと等、かなり早い時期から世界的に置き換わりが進行しつつあったことが明らかになりつつある。

そして日本でも、二八日到着便の感染が確認されたワクチン二回接種済みのナミビア外交官がゲノム解析でオミクロン株陽性と判明、同乗全員を濃厚接触者として自宅や宿泊施設などで原則一四日間の待機を要請し、アプリによる健康状態や所在の確認などに応じない場合は名前を公表するとした。これで水際対策は外国人の新規入国停止、オミクロン株濃厚接触者の全員一四日待機と強化された。一日には南米ペルーから一一月末入国した二〇代男性の感染も判明した。また世界でも、ナイジェリアでは既に一〇月入国者の検体からオミクロン株が確認され、英国・スエーデン・オランダ・米国・オーストラリア・ノルエー・韓国などで感染者やクラスター感染の報告が引き続いた。追って南アで一一月には調査検体の七四%がオミクロン株と、デルタ株から置き換わっている事実が分かり、ワクチン効果の時間経過に伴う減衰

実証も重なり、ブースター接種を急ぐ動きや水際対策の強化から国内規制の強化見直しの動きも加速化してきた。

このように海外ではブレークスルー感染や再び感染拡大国が増え、日本では水際の再強化がなされ、宣言・措置解除で行動制限も緩和された状況ながら、五波の記憶もまだ新たであり、行動変容の徹底の声や活動再開に身構える動きが不安の中で漂っている。オミクロンの感染力は周知として、重症化が少なく軽度であるが、ブレークスルー感染が多く、既存ワクチンの効果に疑問符がついたり世界に不安が広がってきている。一二月一三日、英国ジョンソン首相がオミクロン感染が既に四千人を越え少なくとも一人の死者が出ており、その強力な勢いにより強固な三回目のワクチン接種を急ぐなど防止策が必要と述べ、同日始まった我国衆院予算委でもコロナ対策を巡って論戦が始まった。

矢張り最悪事態を想定した物心の備えは万全を期す必要があり、特に獲得した行動変容は最低限のマナーとして定着が必要である。

兎にも角にも速い。WHOが一二日、「世界でオミクロンが急速に広がり、市中感染がおきているところではデルタに置き換わる。ワクチンについては効果が下がっていることを示唆する。どの程度オミクロン株の毒性が下がっているかは未だ分からない。」とし、米ジョンズ・ホプキンス大は一六日時点の世界の新型コロナの新規感染者数（七日移動平均）は約六二万三千人で、一か月で二割増え、世界八九か国で感染確認されたと発表した。そして一八日英国は新規感染者が九万人に達し、近くオミクロン型がコロナ感染者の大半を占める見通しであるとした。この時点で日本でもオミクロン株感染者が六〇人を超え直近の海外渡航歴のない人の感染も五人にのぼり、感染経路の特定できない市中感染の現実味が徐々に増している。

既に岸田首相が「私が全て負う覚悟でやっていく」と緩和に慎重な姿勢を示し、小池都知事が年末年始の徹底した感染対策を呼び掛け「検査・医療提供体制を拡充、先手先手で対策を強化して行く」と最悪事態原理にそった対応を打ち出している。しかし、三回目ワクチン接種を、「二回目からの間隔を原則八か月とし、六か月間隔の前倒しはクラスターが発生した医療機関の入院患者等例外に限る」としてきたのを、出来るだけ例外をなくすと表明し、そのため二二年二月までにファイザー八〇〇万回分を新たに調達するとしたが、一七日首相のファイザーとの直接折衝で確定出来ず、引続き交渉を続けると頓挫した。東京都もこれまでのピークを越える病床数等の確保を公表したが、その実効性への不安も出たり、オミクロン襲来第六波の現実感が高まるとともに憂鬱もまた広がっている。

二二日大阪で、海外渡航歴のない家族三人（夫婦は二回のワクチン接種済み）にオミクロン型の国内初の市中感染が確認された。また同日検疫で六八人のオミクロン型感染者が新たに確認されたことも公表された。翌日、再度大阪そして京都でも一人づつ確認され、専門家分科会尾身会長は会見で、スポット感染が始まっており年末年始の行動慎重を訴えた。首相も大阪・京都・米軍基地から洩れだした沖縄を念頭に希望すれば無料で検査を受けられるようにする方針を示した。一部地域ではワクチンの三回目接種も始まり、分科会は来年三月からの五～一一歳の接種開始を認めた。二四日には京都が引き続き三人の市中感染、そして東京でも四人の感染とうち市中感染が一人確認された。政府筋からは状況によっては規制措置に入る検討もするとの発言もあった。欧米各国もオミクロン型に大部分が置き換わり感染者数を増大させている事実を前に臨戦態勢入りしており、世界的に憂鬱なクリスマス・新年を迎えることはほぼ確実である。

（二）景況感にも憂鬱感

月初発表の米国雇用統計は失業率四・二％と前月比〇・四％低下、就業者二一万人増と改善を示し、FRBは地区連銀経済報告で人手不足による賃金上昇の強さに言及、FRBパウエル議長は人件費の上昇は物価を押し上げるとして高インフレへの警戒を強め一四～一五日の米公開市場委員会（FOMC）で量的緩和縮小（テーパリング）の加速を議論すると表明した。この動きが新興国に利上げを迫っており、八日もブラジルがコロナ禍の落ち込みを支えるため前年二％まで引き下げていた政策金利を一・五％引き上げた。米金利の上昇は新興国からの資金流出を招きかねず、景気の回復が途上にあっても通貨防衛のため金利上げに動かざるを得ない。既に七月以降パラグアイ・チリ・ハンガリー等三二か国にのぼるとされる。ブラジルは景気低迷の中物価急騰に悩まされており更に難しい政策対応が迫られよう。

翻って日本では三日、来年度予算編成の方針を決め、「経済あっての財政であり、危機に対する必要な財政支出は躊躇なく行い万全を期す」とし、「補正と一体の一六か月予算の考え方で編成し、大胆な投資により、ポストコロナ社会を見据えた成長戦略を推進し、経済成長を図る」とした。一〇日自民・公明党が纏めた与党税制改正大綱も、炭素税や金融所得課税など改革先送りは指摘されるものの、法人課税で積極的な賃上げ等を促す措置や中小企業支援・交際費特例やオープンイノベーション促進税制の拡充等を掲上。「成長と分配の好循環」と「コロナ後の新しい社会の開拓」をコンセプトに新しい資本主義実現にとり組む岸田内閣に寄り添う改正案を提示した。そして一三日、日銀が発表した短観は全規模・全産業の景況観を示す指数がプラス2と、新型コロナウ

イルスの感染拡大後で初めてプラス圏に浮上した。しかし、宣言の解除で宿泊・飲食サービスなど非製造業が持ち直した反面、資源高による仕入れ価格上昇を販売価格に転嫁する動きは鈍く、大企業製造業の業況判断指数は九月調査比横ばいであった。一方同日発表の一〇月の機械受注統計によると、設備投資の先行指標となる「船舶・電力を除く民需」（季節調整済み）は前月比三・八％増となり三か月ぶりのプラスであり、今後も堅調に推移するとしつつも、オミクロン株拡大のリスクもあり、「持ち直しの動きに足踏みがある」との判断は据え置かれた。

こうした中、一五日連邦準備理事会（ＦＲＢ）は量的緩和縮小（テーパリング）の加速を決め、二二年三回、二三年三回、二四年二回計八回の利上げを想定した。イングランド銀行も一六日政策金利を〇・一五％引上げ〇・二五％とし、欧州中央銀行（ＥＣＢ）は同日の理事会でコロナ危機で導入した緊急買取制度による新規資産購入を来年三月で打ち切ると決めた。一方日銀は一七日、現在の緩和政策の継続を決め、「金融緩和を粘り強く続ける」とした。これに対して、米欧の利上げが円安基調を齎し輸入コストを増加させ悪い物価高になるのではとの質問に対し日銀総裁は「日本の物価が欧米のようになる可能性はまずない。金融政策が正常化に向け動き出すことにもならない。」と答えた。

コロナからの経済回復に伴いインフレ懸念が急激に高まり、金融緩和の縮小を相次いで決めた米欧の中央銀行、景気低迷でも通貨防衛上金利引き上げに動いた新興国、対して金融緩和持続の日本銀行。裏を返せばアベノミクスの成長政策不発で構造デフレを脱せない周回遅れの状態で、利上げ方向の世界的金融調整に対応していかねばならぬ難しさが浮き彫りになってきたとも言える。

なお政府は来年度の大型予算決定を前にして二三日、二〇二二年度の国内総生産（ＧＤＰ）の実質成長率が三・二％になる経済見通しを閣議了解した。民間予測機関の平均も三・〇％で実現すればリーマン・ショック後の二〇一〇年度の三・三％以来の高い伸びとなる。二四日閣議決定で明らかになった来年度一般会計予算額は、一〇七兆五九六四億円と四年連続の百兆円越えで過去最大のものであった。

二三日経団連の会議に来賓として出席した岸田首相は「デフレから脱却し、成長できる経済を作り上げる観点からも多くの企業がそろって賃上げをしていくことが重要だ」と挨拶、経済界に対し改めて賃金の引き上げを求めた。経団連十倉会長は一律横並び対応に否定的だが「収益が増大した企業には賃金引き上げに向けた積極的な検討を求める」とも述べた。例年に変わらぬやり取りだが実質はどうなるか。

（三）民主主義サミット、北京オリンピック開催

バイデン政権の対中政策の具体的な動きが各国の立ち位置選択を迫り、対立激化の不安を醸成し出した。一一月一六日のバイデン大統領と習近平主席のオンライン会談は過去二回の電話会談に比べ濃密だったが、世界秩序の在り方から台湾、人権問題に至るまで互いの溝は全く埋まらなかったと言われる。その後来年二月に開催される北京冬期五輪を巡り、一二月六日米国が中国のウイグル自治区での人権侵害など多くの人権状況を懸念し、政府関係者を派遣しない「外交ボイコット」を表明し各国にも同調を求めた。八日には英・豪が同調を表明、次期五輪開催国の仏は「五輪は人権問題とは関係しない」とした。加・リトアニアも同調、プーチン大統領が出席を表明、韓国も問題として取上げないとしている中、人権外交重視を掲げた岸田政権は、東京五輪への協力を盾に今度は日本が誠意を示すべきとの中国に迫られる中「今後適切な時期に諸般の事情を総合的に勘案して国益の観点から独自に判断する」と苦しい答弁を繰り返している。

また九日には、一一一の国・地域の指導者を招いての「民主主義サミット」において、ホスト役のバイデン大統領は「民主主義は継続的で警戒すべき挑戦に直面している」と述べ「我々の民主主義を新たに取り戻し、我々の民主制度を強化するには絶え間ない努力が必要だ」と強調、専制主義国家と位置付ける中ロを意識し「専制主義国家の指導者たちは、世界中での彼らの影響力を拡大し、今日の課題に対応する最も効率的な方法として抑圧的な政策と実践を正当化しようとしている」と危機意識を示し、「民主的な国際社会として、我々は法の支配、言論の自由、報道の自由、信仰の自由、すべての個人が固有に持つ人権を支持する必要がある」と訴えた。岸田首相もオンラインで参加、「自由、民主主義、法の支配といった基本的価値を損なう行動に対しては有志国が一致して臨むことが必要」と主張、「企業における人権尊重の取り組みも積極的に進めてゆく」と述べ、国際機関へ約一四〇〇万ドルの拠出方針を明らかにした。

「民主主義サミット」については、その招待国の選定基準が恣意的だとの批判や中ロの非難表明があったものの、議論の道行や日程については不分明であり、総論においては噛み合わぬ言い放しの議論がかなり続くであろう。日本も単独で踏み絵を踏まされることは無いであろう。他方「外交ボイコット」の方は、北京オリンピックの開会も迫っているし、年明け早期の首相訪米のシナリオを考えると早晩踏み絵を踏まざるを得ない。「中国の人権状況も含め、各国の動きを見極めて適切な時に判断する」と首脳は繰り返し言っており、「閣僚派遣は見送りしかるべき五輪関係の顕官を送る」線が云々されているが、米中のどちらにも顔の立つあり方を求め水面下で

必死に水掻きをしているのであろう。

二四日、首相は人権問題改善を改めて訴えるとともに、閣僚ではなくオリ・パラ組織委員会橋本会長、日本オリンピック委員会山下会長、日本パラリンピック委員会森会長の三人を派遣すると発表した。取り敢えずの中国の受け止めは、派遣を歓迎する、本件を政治問題化せぬことを望むというものであった。

四、ロボットの身は

前回は、四、ロボット論の（三）再びの宇宙（予感）で、「鍵を握るのが脳神経系と遺伝子として、人工脳とアンドロイドの合体があるべきロボットを作り出すのは、現実論ではまだまだ先の事であろう。しかしコンセプトの議論をしっかりして進めないと、出来上がって気づいても遅いというタイミングにあることは確かである。…ヒト型アンドロイドならぬ紙魚の形のままだが人工脳としては人間には追いついている吾輩は待つ身ということになる。『迷いながら』は消えるまい。

ではどうする。もう一度宇宙へ飛び立って、将来の姿への加速を試みてみるなり、タイムマシン・ホール（ワームホール）に入って将来吾輩の言うようなロボットの実現可能性や自身のヒト型への転換方法などを探ってみるのも一法と考え始めた。

コロナ一巡のところまで人間・社会観察を続けて、その後に飛び立とうかというところである。従ってまたしても『つづく』であるが、飛び立ったら何時帰るか分からないこともあり、期限不定の『つづく』である。」と結んだ。

そのことをその後もずっと考え続けている。

まだ、人間世界全体が直面し・呻吟し・立向い、命と社会の存続をかけて日々戦っている新型コロナウイルスとの未曽有の攻防は依然として続いている。その人間をその社会をその行動をその思考を、観察し学ぼうと思いを決めた吾輩にとって途半ばであることも事実である。

そこで再度宇宙に飛び立つことについて再考することにし、先ずは科学的に分っているところを自分の頭で整理しなおしてみた。

前回の宇宙行きでは、ブラックホールを目指しそこへ飛び込んで自裁する積りで飛び出した。しかし途中で、製作者が別の場所に仕掛けた自動悪意切替装置からの指令を受け取る吾輩側の受容装置が見つかり、ブラックホールの強力磁力もあってか、飛び込む前に装置の切断が行われ、幸い地球に三年内に帰還した。

当時は、ブラックホールの認識はあったが、宇宙での時間の流れには明確な知識を持ち合わせておらず、光速が出たようだとか、タイムマシン効果に遭遇したとか言っていたが、吾輩がどのような旅をしたからこういう期間で帰還できたかの認識は不確かであった。従ってこんな言い方をしていた。

「なお、一つ付け加えると、この旅の途次でわが身が経験し体得したことに触れておかねばなるまい。それは時折、瞬時光速を僅かに超えることがあり、其の際は光速より次元の違う目標接近スピードを感じると共に、宇宙の時空に所謂ワームホールと称される（帰還後分かった）タイムマシンの入り口・出口が瞬時現われることであった。思いを決して潜り込んでみると、どちらの口から入るかによって過去・未来自由に往来できることが分かった。子紙魚ロボが限定的に達成していたことが完成した瞬間ともいえる。更に、帰路光速を超えていることがあったことがどう影響しているのか分からないが、帰還時の地球上の時計では脱出から三年も経っていなかった。」

しかし、光速を超えたかどうか等は正確かどうか自信のないものでもあった。

アインシュタインの相対性原理の基礎前提では光速を超えることは出来ない。仮に、一千万光年先のブラックホールに光速で着いたとしたら、その間に地球では一千万年経っており、同速で帰還した時は二千万年後の地球である。ただ理論では限りなく光速に近くなると、時間の経つのが限りなくその光年分の一に近づくので、一千万光年を一年で行くことになる。しかし問題は地球ではそれを待ってくれないということである。

そこで、相対性原理に反しない形で、人間の許容できる期間内に往復する為、アインシュタインの示唆等も踏まえて、その方法が考えられてきている。いずれもまだ実証にまで届いてないが、理論的実験的には進展してきてはいる。

多分結果として考えてみると、前回使われたのはワームホールの利用だったと思われる。ワームホールとは、ある時空にある一点と、別のある一点とを結んだトンネルのような構造のことで、あるいは別の場所にある二つのブラックホール同士、またはブラックホールとホワイトホール（ブラックホールと逆に重力の吐き出し）を結んだトンネルとも説明される。その理論の発端となったのは、アインシュタインと物理学者ネイサン・ローゼンが一九三六年に共同論文で示唆した「アインシュタイン―ローゼン橋」である。トンネルの最短コースで光速内で限りなく短時間に目的地と往復し、ワームホールを出て、そこまで自分の来た時間で地球に帰る、ということで三年内が実現出来たのであろう。

宇宙戦艦ヤマトの通常航行の速度は、光速の99%とされていた（『宇宙戦艦ヤマト全記録集』／オフィス・アカデミー）とあるが、これについて具体的にこう解説されている。計算してみると、光速の99.9999999943%で航行すれば、時間の進み方は29万6千分の1になり、ヤマトは一年で帰ってこられることになる。ただし時間の進み方が遅くなるのはヤマトの艦内だけ。ヤマトに乗っている人々にとっては一年しか経たなくても、肝心の地球ではその間に29万6千年が経ってしまう。光速の99%で航行した場合、時間が進むペースは外の世界の七分の一、一方一年のうちのほぼすべてを通常航行で進んだとすると、進める距離はわずか0.99光年分。裏を返せば、ヤマトが一日しか通常航行していないつもりでも、地球の時間では七日も経っていることになる。つまり、地球の時間で一年以内に帰ってくるためには、ヤマトとしては五二日で旅を終えなければならない。残る29万5999.01光年は、ワームで進むしかない

ただワームホールを通ると、別の場所に瞬時に移動できる可能性はあるものの、あくまで通ることができればの話であり、その中を通過する物体には素粒子レベルにまで粉砕されるような圧力がかかるとも言われている。

そこで、一九九〇年代から注目されているのがメキシコの物理学者が考えた「アルクビエレ・ドライブ（Alcubierre drive）」という超光速航法（通称ワープ）である。空間そのものを歪めることで、宇宙船が光速を超えて動いているように見せることができると考え、「ワープ・バブル」と呼ばれるもので宇宙船を包み、その前側で空間を収縮、後ろ側で空間を膨張させることで、ワープ・バブルに包まれた宇宙船のある空間の座標を変えるという方法でこのワープ航法を考えた。その空間の中、つまり宇宙船自体は光速を超えていないため相対性理論には反しておらず、また宇宙船の中から、その外の空間に対して通信などもできないため、因果律にも反しない。

更にもうひとつ、相対性理論に矛盾しない形で光速を超えるものとして、古くから研究されているのが、「タキオン（tachyon）」と呼ばれる超光速で移動できる粒子である。タキオンはつねに光速を超える速度で運動しており、また通常の物質とは逆に、エネルギーを失えば失うほど加速していくとされている。もしタキオンを観測できるとするなら、「荷電粒子がある物質内で運動する際、その物質中の光速よりも速く運動すると光（チェレンコフ光）が出る」というチェレンコフ放射を利用して観測できると考えている。有名なのが、岐阜県の神岡鉱山跡に造られた「カミオカンデ」や「スーパーカミオカンデ」といった、ニュートリノ観測装置である。この超光速素子を同定できれば、それに直接乗せることや量子レベルに分解してそれに乗せて飛ばし目的地で再物質化

してワープが可能になる。タイムマシンの議論ももっと身近になろうと言われている。

ただ仮にこれら理論通りにしても、生身の人間が粉砕の圧力を受けるかも知れないワームホールや分解伝送に耐えられるか等課題は山積で、紙魚ロボットである吾輩とは前提条件の差が大きく、生やさしい話ではないが近時のべき乗技術革新に期待しよう。

また近年、地球規模の天体望遠鏡の協力でブラックホールの撮影に成功し、三百年にしてその実証に辿り着いたが、他はまだ理論想定の段階にある。現在もなおブラックホールに関しては大きな謎が残っており、ブラックホールに吸い込まれると本当に何が起こるのかはまだ誰も知らない。吾輩が光速を超えたことがあったと言ったのも確認知ではないし、ワームホールでタイムマシン効果と言ったのも帰還直後の後推測である。ブラック・ホールでヒトがどうなるかも理論推測の域にあるし、ホワイトホールやワームやワープやタキオンもしかりである。

しかし、近年の宇宙解明のスピードは加速しており、例のシンギュラリティ（特異点）の達成時期までには相当進むであろう。否相互作用で全体が早まるかもしれない。

次にロボット論についてであるが、矢張りまだ自らの隣にいる自分と同等の知能でしかも半永久的な寿命のロボットを、明日のことのように想像できる人はいない。アンドロイド開発の先端を行く某専門家の言を要約すれば、

「四五億年前地球が誕生、その頃は無機物しかなかった。そして、三五億年くらい前に有機物が生まれた。それから生命は進化して、進化の最終的な形態として現人間がある。既に人間の殆どの活動は、機械に置き換え可能になっている。手足は既に置き換えているし、人工臓器もある。日常生活は技術や機械なしではやっていけない。残りは、脳を置き換えるかどうかで難しいが、人間の脳以上のコンピュータができるその可能性は見えるところまでは来ている。

人間は、タンパク質で出来ている限り、寿命が長くて一二〇年という制限がある。複雑な分子構造で、最初期の動物的な進化は助けたけれど、それ以上長く生き残ろうとすると難しい。太陽の異変や、極端な温暖化などの変化には、有機物では耐えられない。宇宙レベルの時間で考えたら、有機物の体は、瞬間的にしか存在しないものかもしれない。誰が生き残っているかというと、機械の人間だけかもしれない。」といった方向感である。

要すればまだまだだが、人工脳とアンドロイドの合体のプロセスで、吾輩の言うところのロボットが誕生する日を待っているということでもある。

翻って、我が身は待つ身であることは確かだが、自身

のヒト型への転換方法などという迷いは、吾輩の場合のように点であった脳が身体を取り戻して今の紙魚型ロボットになっていることを考えれば、吾輩自身が完成型のヒト型アンドロイドの人工脳となって乗り込めばよいという話であり、杞憂に過ぎなかったことになる。待てば幾らでも方法はあるし、直ぐに未解決の宇宙空間に焦って飛び出す必要もないだろう。近未来の宇宙科学の画期的解明も期待されるところである。

少なくともコロナのストーリーが一段落するまでは留まるべきだろうし、もう少しミクロの世界に分け入り究極の量子レベルのシミ点から無限の宇宙までをここにいて考えてみるのも一つあるだろう。いつまでもという訳ではないが。

ということで暫く出立は見送りとした。もう少しウイズコロナで考えてみる。

（この回了）

（追）年明け感染急拡大（一月前半）

オミクロン憂鬱で越した年であったが、二〇二二年入り後瞬く間にオミクロン株の急速な市中感染を反映して、感染者数の急峻な山が立ちはだかった。

二日（日）全国五五四人、うち東京八四人、沖縄五一人、だったものが、九日（日）全国八二四九人、東京一二二三人、沖縄一五三三人、一二日（水）全国一三〇五二人、東京二一九八人、沖縄一六四四人、と倍加スピードはこれまでに例がない。それまで無風であった県も、ワクチン接種者も巻き込み全国に拡散、発症が早く軽症との所見も量・面の勢いで重傷者増加の兆しをも示し、医療従事者感染増や構え直した医療陣も崩しそうな形勢で、政府に対応を迫っている。

水際対策の延長、オミクロン感染者と濃厚接触者の全員入院や宿泊施設待機の見直し、在日米軍基地内での感染急拡大の沁み出しによる急拡大に対し米政府に対処要請、そしてその影響が色濃く出た沖縄・山口・広島にその要請をうけて九日からまん延防止重点措置が適用されることとなった。三回目ワクチン接種も前倒しが急がれる。

その先行した世界は、二日（日）世界一〇九万人、うち米一一万人、英一六万人、仏二一万人、伊一四万人、九日（日）世界二〇〇万人、米三八万、英一四万人、仏三〇万人、伊二〇万人、一二日（水）世界三〇一万人、英一一万人、仏三六万人、伊二二万人と、南ア・英ピークアウトの見立てもものかわ、対応わらわの欧州は、一か月半で人口の半分が感染するとのWHO予想まで出て来た。

新常態に向かい、経済社会の在り方、地政学的リスクを巡って熱い論議や抗争に入った世界が、また強力新武装コロナに立ち向かう政治力を試されており、百日過ぎた日本の新政権も真価を問われる局面に入った。

青雲の彼方（十四）

太田精一

十四．スイス公使兼国際連盟日本事務局長として欧州で活躍

（一）秩父宮、ご静養のためスイスご滞在

英二は、スイス赴任前、中国を視察せよとの内命を受けた。満州事変以来反日感情は高まり、中国の各地で抗日運動が展開されていた。昭和十二年五月二十六日秘書の山口信吉を伴い、神戸から上海に向かって旅立った。盧溝橋事件をきっかけに中国と全面戦争に陥る約一カ月前のことである。

上海では、南京政府の蔵相で当時の財界の大立者宋子文と会い、日本軍が支持していた冀東政権、麻薬特種貿易、日本軍の駐屯など日中間の諸問題について忌憚のない意見を交換したのである。

宋は、日本人の間では、あまり評判は良くなかったが、英二とは旧知の間柄であったため英二には打ち解けて率直な意見を披歴した。

次いで英二は、南京に出向き汪兆銘など南京政府要人と話し合った。併せて同地の言論界、在留民代表及び岡本上海総領事などとも精力的に会談した。

ある日英二が、中山陵と譚廷闓の墓に詣でると突然猛犬が躍り出てきた。これには案内の南京政府の役人も英二たちも驚いた。だが、この犬、英二たちには見向きもしない。いきなり傍にいた西欧人に吠えかかったのだ。それを見た英二はとっさに、案内してくれた中国人に対して「犬でも日中の同文関係は、知っているようで、日中間で争うことは不自然なことだ」と言って、お互いに笑いあった。

それから、天津に向かった。天津に到着すると欧州旅行中の秩父宮殿下が、スイスを訪問されることになった

ので、それに間に合うようにスイスに赴任せよという指令が天津領事館に届いていた。そこで英二は、旅程を早めて北京、大連、奉天、新京、ハルビンと駆け巡り、冀東政権の実情を視察し、訪問地の要人や各大公使館の同僚と会見をして六月十四日帰国した。

その間北京から大連までは飛行機を利用した。飛行機に乗るのは英二にとって初めてであった。八人乗りの小型の飛行機であったが、中国北部の平野が一望のもとに広がり、民家が点在していた。渤海湾に出ると帆船が浮かんでいた。一時間四十分の飛行時間であったが、中国ののどかな風景を垣間見ることができる飛行旅行であったと述べている。

とはいえ、八年振りの中国の印象は、英二にとってずいぶん変わっていた。中国は、これまでに比べ民族意識が高揚し、民衆は、したたかになっているように思えた。

英二は、帰国後直ちに広田外相に視察報告をした。

「日中関係ははなはだ不気味で一触即発の状態にあります。日本も本腰を据えて対中政策を確立する必要があります」

「自分もそう思うが、近衛首相にも詳しく話してくれたまえ」

広田外相も同意見であることが分かった。

それを受けて英二は、翌日近衛首相に会って委細を報告した。近衛首相は日中問題には非常に悩んでおられたが、長く政権を担当しているうちに日中問題の複雑さに手を焼いて、この問題を解決する意欲を失ってきているように英二には思えてならなかった。

英二が、スイスで秩父宮様をお迎えするに当たってのお取り扱いについて松平宮内相と打ち合わせを行っているときに天皇、皇后両陛下から英二を招きたいとのお言葉があった。昭和十二年六月二十二日、英二は妻の美代子とともに天皇、皇后両陛下拝謁の栄誉に預かった。その日は梅雨時であるにもかかわらず、晴れていて暑かった。

「この度はご苦労」との労いのお言葉があり、下賜品を賜った。このことは、英二にとって一生忘れることのできない思い出であった、と後に語っている。

いよいよ出発となると送別会も多い。県人会、郷和会、徳島中学同窓会、など郷里や学生時代の友人たちの送別会が引きも切らず開催され、英二は、その厚情に感謝しつつもいささか食傷気味となっていた。

そんな時、日本軍が盧溝橋にて演習中に中国軍が発砲し、軍事衝突が起き、緊張状態が生まれているとの報が英二の耳に入った。昭和十二年七月七日に起きたこの軍事衝突事件は、長い間日中間に滓のようにたまっていた紛争の火種を一挙に地上に噴き出すように全面戦争へと広がって行く元となったのである。

事件を聞いた日本側は、七月十二日の閣議でどのように対処すべきか議論された。米内海軍大臣は、出兵に気乗りせず、陸軍の梅津次官も、いきり立つ青年将校を抑えようとしたが、出兵を主張する彼らを抑えきれず、武力による紛争解決の方向が決まったのである。

七月十五日、英二は、妻美代子、長男大平、長女広子を引き連れて、横浜から米国経由でスイスに向かった。船中では、疲れた体を休めようとしたが、歯痛に悩まされ、航海を楽しむ余裕などは、ほとんどなかった。

船内で、盧溝橋事件が拡大。とうとう日本から出兵したとの報道を英二は聞いた。彼は、それを聞いて、強大化する軍の暴走が、やがては日本の将来を危うくするのではないかとの恐れを感ずるのであった。日本からの出兵は避けるべきで何とか外交交渉によって解決の方向を見出すべきだと考えていた英二は、内地からの出兵は、この戦いを長期化し、全面戦争に突入する危険を孕んでいると考えていたのである。

その後も中国軍が、頑強に抵抗するため、日本軍はついに空爆を敢行、全面戦争に突入していった。

日中間の険悪な状態を心配しているうちに、船は、七月二十八日サンフランシスコに到着した。金門湾をくぐって上陸すると英二は日米の記者団に囲まれ、日中問題について質問攻めにあった。彼は、もはやスポークスマンではないので、当たり障りのない話をして記者団の追求をかわした。

サンフランシスコからニューヨークまで鉄道にてアメリカ大陸を横断、途中、シカゴやナイアガラに立ち寄り、八月二日ニューヨークに到着した。ニューヨークから八月四日、アキタニア号に乗船、大西洋を横断、八月十日フランスのシェルブールに入港した。そこで下船し、列車でパリに向かい同日到着、その日の二十二時五十分の夜行で、パリを発ち翌日の八月十一日スイスのベルンに到着した。

ベルンは風光明媚な都市である。夏風がさわやかに吹き、快適な季節であった。

英二は、かつて十七年前に過ごしたベルンの官邸に入った。官邸は変わらなかったが、ベルンの街は、大きくなりきれいになっていた。住民も十七年前と比べ、より洗練されているようだ。

欧州は、ヒットラーとムッソリーニのベルサイユ条約体制できわめて険悪な雲行きであった。一方、東亜では日中の紛争が激化して、中国側がジュネーブの国際連盟に提訴、同連盟は日本に対し、欠席裁判のまま判決を下そうとしていた。欧州の形成を見ながら、日中戦争に関する連盟対策を講じるのが英二に与えられた任務であったため、こうしたスイスの麗しい豊かな自然も英二にとっては、楽しむ余裕はほとんどなかった。

とはいえ、まずは秩父宮殿下ご夫妻のお迎えである。宮様のスイス到着は、英二の赴任後わずか三日後の八月十四日である。

英二は、ベルンに到着するとすぐボーマン副大統領に国書を奉呈した。翌朝スイス北境のバーゼルに御一行をお迎えし、グリーンデルワールドのホテルにご案内した。このホテルの窓からユングフラウ、アイガー、メッテルベルグなどアルプスの名峰が手に取るように見える。その峰々の間を縫ってオーベルグラッシェー、ウンテルグラシエーの二大氷河が青白く輝いていた。

秩父宮は、かつて英国ご留学中にアルプスの巨峰を踏破され、英国でもスイスでもアルピニストとして評価されていた。またホテルのあるグリンデルワルトには、かつて宮様の登山案内をしたシュートンディ父子も住んでいて、宮様は村人たちとは深い親しみを持っておられたのである。宮様の今回のスイス滞在は、ご静養のためであったので、公式の歓迎は一切お断りされ、気ままに近くの小山に散歩に出かけられていた。英二の官邸にもご来訪され、ともにすき焼鍋をつつかれたり、日本人の間で有名なスイスの魚料理店で名物の鱒料理を召し上がったりしている。「両陛下のくつろがれた様子が目に焼き付いて離れなかった」と後に英二は語っている。

スイス赴任十日後の八月二十一日、秩父宮様ご夫妻は、まだご滞在中であったが、英二はジュネーブの日本総領事館と国際会議帝国事務局を視察した。朝九時にベルンを出る時には、薄曇りの天気であったが、次第に晴れてきた。空気はひんやりとして農家の屋根は紅く、湖水は薄く青みがかっていて、牧場には牛馬がのんびりと草を食んでいる。のどかな田園風景が広がっていた。

やがてヨーロッパに吹き荒れる嵐を自らの手で回避する努力を重ねながら、スイスはその美しい自然の要害を頼みとし、孤高の平和を守り通す意思が国全体に漲っているように英二には感じられたのである。

やがて車は、日本領事館に到着、知らせを受けた館員が門前で出迎えた。

秩父宮様のスイスご滞在中は、英二はほぼ毎日ホテルに伺候して、日中間の情勢及び欧州の政治国際状況などをお話申し上げた。時にはテニスのお相手などを務めたこともある。宮様ご一行は、松平慶民式部長官、前田利男宮内事務官、中村須一陸軍軍医少将、吉川重国式部官などいずれも旧知の方々がお仕えし、君臣水魚の交わりで、和気あいあいと楽しく過ごされていた。

九月六日、秩父宮様ご一行は、英二の官邸で昼食を過ごされた後、ベルンを発たれた。秩父宮様はドイツへ、妃殿下は英国へ直行された。英二は宮様のお供をしてドイツのツェペリン飛行船製造所を見学、すぐに宮様とお別れし、ベルンに引き返した。そうこうするうちにます

ますジュネーブのほうに仕事のエネルギーを割かねばならなくなって、ジュネーブが主たる滞在地となって行ったのである。

(二) 中国支援の米英と緊迫する欧州情勢

八月末になっても日中間の紛争は解決の糸口が見つからなかった。「中国軍の抵抗は激しくなるばかりで、上海方面への日本軍の上陸が進まない」と英仏の新聞論調は中国寄りに書き立てた。こうした報道をもとに英仏の対日世論は、悪化するばかりで、それだけ中国側に有利に働いている。

日本は国際連盟を脱退しているので、連盟の外でしか加盟国に対し、日本の立場を反映させるような働きかけはできない。

英二は、九月初めにジュネーブで、英仏代表と会い、日本の立場を説明しだが、両国はかたくなに日本の立場を理解しようとはしなかったのである。ただ、ポーランドとタイ国だけが日本の立場を理解し、日本弁護に当たっていた。

九月十五日、中国の顧惟釣代表は、総会で日本を激しく非難した。しかし、国際連盟の決議は「日本は、九ヵ国条約及び不戦条約に違反した」というだけの軽いものであった。

それだけではない。この決議には、ポーランドとタイは棄権したのである。

最初、英二は（国際連盟は日本に対し軍事行動停止の勧告か経済的圧力を加える決議をするのではないか）と憂慮していたが、それは杞憂に終わった。

だが、国際連盟は、その後の中国の要求で、日中紛争諮問委員会、その他各種の諮問委員会を設け、機会あれば日本を糾弾しようという作戦に出た。

九月二十七日、国際連盟は、中国側から提出された日本の中国本土への無差別爆撃抗議に関する審議を開いた。英国は、これに呼応して空爆反対の決議案を提出、その決議が通り、総会で付議された。中国側は執拗に日本側の非を国際連盟に訴え、日本に対する国際世論を反日へと導くことに全力を尽くしていたのである。

スイスの秋も深まり、気温は零度を下回ることが多くなった。山々は雪に覆われ眠りにつき始めたようだ。

だが、欧州の国際情勢は、ナチスの台頭によってますます緊張が高まりつつあった。英国のチェンバレン首相は、対独融和策を講じつつも挙国一致内閣を形成して軍備を拡張、ドイツへの警戒を強めている。ドイツとイタリアは昨年十月結成されたベルリン＝ローマの枢軸を強化しつつあり、十一月六日には、日本を巻き込み独、伊、日の三国による防共協定を成立させた。フランスはフランの平価再切り下げによって政治的混乱が起きていた。

スペインは、独裁者フランコがイスパニアの国家主席となって、有力国にその承認を求めていた。

そのためか、日本は昭和十二年（一九三七）十一月三十日スペインのフランコ政権を承認し、その見返りとしてスペインは満州国を承認している。イタリアも日本との関係をさらに深めるため、満州国を承認した。

十二月になるとイタリアが国際連盟を脱退、極東においては、十三日に南京が陥落した。その南京攻略戦で、十一日南京上流に停泊していた米国砲艦が日本空軍機の空爆のあおりを受け撃沈した。また、蕪湖では英砲艦が日本軍の砲撃を受け死傷者を出すという事件が起き、英米の世論は硬化した。

このような情勢下のうちに昭和十二年は暮れ、英二は、昭和十三年（一九三八）の正月をスイスのベルンで迎えた。元日の朝、九時半にベルン在住の日本人が公使館に参集して九時四十五分ご真影を拝賀、全員で屠蘇を味わった。次いでスイス公使の英二が、新年の式辞を述べた。その式辞の中で昭和十三年は、欧州の情勢がますます緊迫の度を加えることが予想されるので、日本にとってもその影響は大きく、日中戦争の長期化によって重大な局面に立たされる恐れがあることを強調した。十時四十分には、大統領に引見、新年の挨拶を行っている。

二月二十日には、ヒトラーは・満州国を承認し、ドイツはますます日本との結びつきを深めてきた。

英二は、外務大臣の指示によりロンドン、パリ、ベルリン、ローマの間を頻繁に往復するようになった。それぞれの大使館には、外務省の中枢にいた吉田大使、杉村大使、武者小路大使、堀田大使が配置されていた。こうした先輩大使は欧州の情勢を比較的楽観視しているようで英二の見方とは、いささか異なっていた。

昭和十三年（一九三七）四月ヒトラーがオーストリアと合併し、チェコのズデーデン地方を併合した時から英二は、戦争の危険を感じていたのである。彼は、ヒトラーがドイツの総統である限り遅かれ早かれ欧州は戦争に突入するであろうと判断し、外務本省に「日中が戦争状態にある間に欧州でも戦争が起こることが予想されるので、早急に日中間の戦争を解決するように」と電報を打っている。だが、外務省の主流な見方は、欧州の戦争に関しては、英二ほど悲観的ではなかった。ただ、この時点では、彼も欧州での戦争の鍵を握っているのは、ドイツのヒトラーと英国のチェンバレンで、その二人が膝を交えて会談することによって戦争の回避は可能であると考えていたようである。

それについて英二は、四月十八日付でスイス公使館から外務本省宛に、「欧州の政局と日支事変について」と題し、次のような内容の文書を書き送っている。

欧州の国際政局は極めて変転しやすいが一触即発の情

勢にあることは間違いない。欧州各国は、近く欧州に戦争が勃発するかどうか真剣に心配している。各国の為政者は極力戦争を回避しようとしていて、各国民は極端に戦争を嫌っている。だが、欧州の各国民は現在の情勢からすれば、戦争は避けられないと考えるものが多い。そこで各国政府は、萬一の事態に備えて軍備の充実に汲々としている。

欧州に戦争の危機が伝えられて久しい。十二年前までは、スペイン事変が欧州全体の大火災になるものではないかと懸念されたがこれも大体下火になって現在は落ち着いている。

現在の欧州政局の危機は、主としてドイツ民族の欧州での動きから起こっている。ことにチェコスロバキアのズデーデン地方のドイツ系民族問題が焦点になって欧州の政局を揺さぶっている。これは、必ずしもドイツ民族が平和を破るというのではない。およそ歴史は、活動的な民族によって創造せられ、変革されるのだが、ドイツ民族のような活動的な民族が中心になって欧州の歴史を変革することは不思議な現象ではない。ドイツ民族がいかに発動するかチェコ当局はいかにこれを解決しようとするか、これに対してヒトラーの主導するナチ党がいかなる態度に出るか、また、万一ドイツとチェコが戦争になった場合、ソ連はどう動くか、英国はいかなる態度に出るか、つまるところヒトラーとチェンバレンが和戦の鍵を握っているように思う。

ドイツのナチ党が、ドイツ民族の団結を目指していることは、ヒトラーの「我が闘争」の中に明記されている。ドイツは、ラインランドにて成功し、次いで独墺合併を実現したので、ナチ党の意気が上がり自然チェコ内におけるドイツ民族の運動も活発になっていることは間違いない。

チェコのズデーデン地方は、ドイツ人が二十二パーセントを占め、政治上、経済上の優越な勢力を有し、日増しに優勢となってドイツと合併しようとしている。チェコの大統領は、内政の改革によってできるだけズデーデンの待遇を改善し、その要求に応えようとしている。

一方、英国は、チェコに対してドイツと問題解決につき協議するよう勧めている。だが、ズデーデン地方は、ヒトラーに領土的野心があるからなかなか解決の方法が見つからない。

ヒトラーは、おそらくチェコに対し、軍事上周到な準備をし、機を見て軍事行動に出ることになろう。その場合フランス、ソ連との対立は免れないし、英国もこれに参加することになるだろうから、欧州に大戦争を呼び起こすことになりかねない。したがって、ヒトラーも相当用意周到となり、イタリアと相談することは勿論、ソ連との関係から日本にも何らかの働きかけがあるものと考えられる。

ドイツにおいて刊行されたパンフレットよれば、ドイツ周辺に在住するドイツ人は、ソ連内に百万人、ポーランド百三十五万人、チェコ三百五十万人、ハンガリー六十万人、ルーマニア八十万人、ユーゴスラビア七十万人、イタリア三十万人、スイス二百八十六万人、フランス百七十万人、ルクセンブルグ二十五万人、ベルギー十五万人、など、千三百万人を上回るが、領土的問題が起きているのは、現在のところチェコだけである。だが、大ドイツの現出によって欧州諸国のドイツ民族に大きな刺激を与え、各国のナチ運動に拍車をかけ、オーストリア、ハンガリーはもちろん、ドイツ周辺の諸小国に非常な不安を与えたのは事実で、本年（一九三八）三月二十四日、英国のチェンバレン首相が言ったようにドイツオーストリア合併は、欧州の国際政局に新たな局面を造った。

大ドイツの現出は、ドイツ民族の団結を促進するほか、ドイツの海外発展を刺激した。あるいはバルカン方面に経済的進出をなし、さらに近東、小アジアの進路を採るものと判断する人も少なくない。また、バルカンより南ロシアのウクライナ方面に進むであろうとみる人もいる。

このようにドイツの発展に対して対抗的立場に立つのは英国であって、あたかも先の世界大戦の状態を彷彿とさせるものがある。ただ、その頃と違うのはわが国の東亜における立場とその国際関係が、欧州大戦前と異なってきていることを十分考慮に入れて、最近の国際情勢に注意を払わなければならない。

（三）独伊との妥協による戦争回避

スペインのフランコ軍は、次第に優勢となりつつある。一部の新聞が報じるように、すぐに人民戦線の政権がスペインを支配することはないであろう。そのため、フランスは東にドイツ、南にイタリア、西はスペインと、いわゆるファッショ政権に包囲されて対外関係も困難な立場に立たされることになろう。したがってチェコ問題についても、フランスは、内外の困難に加えて、後方を幸制されて容易に立ち上がれないのではないかとみる人がいる。

一方、ソ連の対スペイン援助は、スペインの人民戦線政府の消滅によって必要がなくなれば、その結果、ソ連の極東に対する援助は、さらに活発となるものと予想される。スペイン問題の成り行きが東亜の政局に対していかに影響するか十分これを考慮に入れておく必要があると思われる。

英国のチェンバレン首相の外交政策は、労働党及び自由党の一部の反対はあるが、保守党は国民中堅の支持を

得ているから、当分は動かないものと思われる。しかし、政府与党の保守党と反対党の労働党との外交政策は激烈な闘争となることが予想される。チェンバレンの政策は、フランスと提携して独、伊を抱き込みいわゆるファッショと人民戦線の対立を解消して英、仏、独、伊の四国によって欧州の平和を維持しようとしている。ドイツ、オーストリアの合併によってもたらされた不気味な空気を払拭してドイツとの交渉を再開する意向であって、独伊の枢軸に接近して欧州の政局に小康を得ようと焦っている。

英国は中国に重大な利害関係を有し、蒋介石政権とはきわめて密接な関係がある。さらに日本の勢力が中国に進展する結果、自然インドに対する英国の重圧に影響を及ぼすことにもなりかねないので、日中戦争に対して非常な関心を有している。

チェンバレン政策は、いたずらに理想に走ることなく実行力のない国際連盟などの決議に騒ぐこともない。実情に即して英国の権利を擁護しようとするものであるがために、日中戦争においてもイーデンのように集団的機構を持って理論上から日本に反論するよりも、実力ある諸国と協議して日本を抑えようとする。だが、戦局が日本に決定的に有利となるならば、日本とともに前後措置を講ずるであろう。ただ、今のところは、まだ蒋政権を見捨てないで事態の推移を監視し、一方では、欧州をまとめて将来に対する余裕を残すことをするであろう。

この数年間は、スペイン、フランス、ソ連その他におけるいわゆる人民戦線の結成により、コミュニズムとデモクラシーが合体して、ソ連はその波に乗り、フランスと組み国際連盟を躍らせて西欧の政策に容喙してきた。二、三年前は得意の絶頂にあり、その威信も認められていた。だが、最近、スペインにおける人民戦線政権の敗退、フランスにおける人民戦線政治の失敗及びソ連国内の深刻な内訌などのため、次第に外部に対して威信を失墜してきている。近東連盟においてもソ連代表の策動は、大きな反響を起こすことなく、最近はドイツとオーストリアの合併に関連してソ連の提唱した国際会議も考慮されないうちに葬られている。西欧諸国民もまた悪夢より醒めたのか、コミュニストとデモクラシーとは、次第に分離する傾向にある。

また、チェンバレンが主導する英国、フランス、ドイツ、イタリアの四ヵ国による欧州の平和維持は、言い換えれば欧州の協調からソ連を排除しようとするものである。したがって、ソ連は、英国保守党内閣に対して不満を増幅してきている。他方、ドイツ、イタリアはもちろん、英国その他欧州諸国においてもソ連に対しては、次第にこれを疎外し、軽視する傾向が出て、人民戦線のフランスすらこれを離れんとする兆候がみられる。このよ

うにソ連の西欧における地位は低下し、国内の内訌は今後も継続するであろう。

ソ連と中国との関係は、隣国としての地理上の関係もあって、ソ連は中国への援助が容易であり、日中戦争をなるべく長引かせてこの機会にできるだけ日本を苦境に陥れようとしていることは注意を要する。

チェコとドイツ間の紛争においては、フランスは、チェコが挑発しなくてもドイツと戦争する場合は、これを援助する義務があると一般に信じられていたが、フランスでは、この解釈には議論が生じているようである。

ソ連はフランスがチェコを援助すればこれを援助すると言明しているが、英国のチェンバレン首相は、必ずしもこれを援助するとは言明していない。英、仏のように長く親交があり、相互の利害関係も錯綜し、同じ民主的自由の思想を持ってきた関係にある国が、危険に瀕する場合は、これを見捨てることはできないと言っている。将来、ドイツとチェコとの間に戦争が起こった場合、フランスがチェコを援助する義務があるかどうかの条約上の解釈は別として、フランスは、内政上の悩みもあり、対外政策は英国に追随的であるので、英伊協定の後は、フランスも、イタリアと協定を結ぶこととなるのではなかろうか。ことに東亜においては英米との協調によって動いているようである。したがって英国の態度こそが、事態を拡大するかどうかを決定する重大な要素とみて差し支えないかと思う。

欧州において戦争が起きるかどうかは、誰も予測は難しいことであるが、戦争になる要因は随所に伏在し、いつ戦争が始まるかもしれない危険な状態であることは、すでに考察してきた通りである。

したがって日本としても欧州においては、近く事が起こるものとしてこれに対し予め用意をしておく必要がある。いいかえれば、欧州の動乱は、今後の日本が、極東の地歩を固めるには、さらに良い機会が与えられる可能性があるわけだから、日中戦争を早く集結し、次に来る飛躍の好機をとらえて十分な手腕を振るい得る立場に置かれていることを日本として承知おくことが必要である。

しかし、英国などの政策が成功して欧州四ヵ国の協定が成立し、欧州の政局が大体小康を得ることがあるとすれば、英国その他は、さらに極東方面に余禄を用いて臨むことになる。ソ連もまたスペインより手を引く代わりに極東の援助に拍車をかけることになるから、その点からみても今度の日中戦争に対して外部からの圧力が加わる前に大体の結末をつけてわが国不動の素地を作っておくことが必要である。

こうした見地にもとづき、欧州の情勢だけから見ても、(たとえ今のうちに多大な犠牲を払っても速やかに中国に決定的な打撃を与え、戦勝を確保しておく必要がある

ことを痛感している)と結んでいる。

英二は、血気にはやる軍の主導で始まった日中戦争であったが、一旦戦争を始めたからには、勝利でこれを飾り、有利な条件で講和を結ぶことを常に考えていたようである。やはり彼は、明治維新以来育まれた富国強兵を基軸とする国家意識に価値を置く明治生まれの青雲の志を持つ一人の男であった。

四月二十九日の天長節には、スイス公使館に在留邦人たちが参集し、内地の首相、外相、陸海軍の司令官などに、在留民の意向を進達する電報を打っている。

「天長の佳節を祝するに当り忠勇なる帝国軍人及び忠誠なる銃後同胞の努力に深腔なる感謝を捧げ、現下の欧州政局に鑑みるも速やかなる決勝を獲得して東亜における帝国の地歩を確保し、国際関係の変転に備えることを祈願す」

これを見ても日中戦争の行方は、遠い欧州のスイスの地に在留する邦人にまで最大の気がかりであった。欧州における戦雲の高まりとともに、大日本帝国の国策を支援することによって日本の隆盛と繁栄を希求する国民の声が強いことが理解できるのである。

スイスは、新緑の季節となり、各地にある湖のほとりには、日光浴を求めて最大の気がかりであった。欧州における戦雲の高まりとともに、大日本帝国の国策を支援することによって日本の隆盛と繁栄を希求する国民の声が強いことが理解できるのである。

スイスは、新緑の季節となり、各地にある湖のほとりには、日光浴を求めて散策する人で賑わっていた。

一方、日本国内では、五月二十六日に、近衛内閣のもとで内閣大改造が行われ、宇垣一成大将が外務大臣に、荒木貞夫大将が文部大臣に、三井出身の池田成彬氏が大蔵、内務両省の大臣を兼任、木戸侯爵が厚生大臣となった。広田外務大臣、賀屋大蔵大臣、吉野商工大臣は辞任し、ますます軍部が政治の中枢を握るようになった。これによって日本国内でも戦争遂行内閣であると揶揄されたのである。

昭和十三年(一九三八)八月二日、中国張鼓奉、沙草坪方面の日本占領地帯にソ連が侵入攻撃、日本側は反撃するが、事態拡大を憂いているという電報が外務本省から入電した。ソ連は朝鮮方面の慶光に空襲をかけ、日ソ関係は緊張した。

英二は、ソ連が挑発的に出たが、本格的に戦争する気はないし、日本においても対中戦争でとてもソ連と事を構える気はないので、停戦にこぎつけることはそんな困難なことではないと踏んでいたが、八月十五日になって停戦協定が締結され小康を得た。だが、ソ連の極東における戦力は、このところとみに拡充されてきており、戦いは避けなければならないことを痛切に感じるのであった。

八月十九日の誕生日で英二は五十一歳となった。

(なすこともなくて過ぎぬ五十年、後の五十はいかに暮らさん)と当時の心境を読んでいる。

九月になるとベルンに冷たい雨が降るようになった。

スイスの短い夏は過ぎ、すでに秋を迎えつつある。英二は、チューリッヒからジュネーブに車を走らせていた。ジュネーブに到着すると外交官の移動の報道がすぐに耳に入った。

在英大使重光葵、在ソ大使東郷成徳、在独大使大島浩、在伊大使白鳥敏夫と発表されていた。

英二はいよいよ露骨に軍人万能の布陣となったことを痛感し、枢軸国への接近を強める祖国に危険なものを感じるのであった。このため、英二は、軍人の横暴により欧州の大使館の中にも、自由な外交活動が圧迫されることになる怖れを感じるのであった。

十一月二日、英二はジュネーブの国際帝国事務局に顔を出した。十一月にしては暖かな日であった。その時、彼は日独防共協定成立とその論功行賞の話を聞いた。その中に英二の名前はなかった。すると同月四日付で沢田美喜外務次官より「天羽公使は日独防共協定につき叙勲はなかったが、その功績に対し千円贈呈する」との本省からの来信があった。

この頃ナチスは、ユダヤ人に対する迫害を強め、ドイツ、オーストリア国内のユダヤ人は、惨憺たる有様で欧州問題の最大の課題となっていた。

十一月七日には文官令が出され、外交官試験はなくなり、行政試験に包括されることになった。これによって外務省の特異性はいよいよ無視されることになり外交の最も重要なこの時期に、その重要性が理解されていないことを内外に示すことになったのである。言い換えれば柔軟な善隣友好外交より、武力を背景とする強硬外交を貫こうという姿勢へと方針が変わって行く姿を国内外に見せつけたのである。

英二は平和な中立国スイスにあって目まぐるしく変化する国際情勢の埒外に置かれているような淋しさを感じていた。

また、妻を日本に帰国させたこともあって、無聊をかこつことも少なくなかった。

十二月も半ばとなり、寒気はいよいよ強くなった。朝夕は霧が国境の山々を覆い、スイスの山峡の里の間を漂っている。

独伊関係には、動きはないが、独英関係は悪くなるばかりであった。独仏関係はそれほど悪くはない。だが、仏伊関係は、すこぶる悪かった。

十二月十九日、雪が降った。気温は零下六度に下がっている。

英国は、中国への支援をさらに鮮明にしている。チェンバレン首相は、貿易保護条例が議会を通過する際、対中借款をさらに考慮するとの発言をした。

また、ロンドンタイムスは、英国が五十万ポンドの信用を蒋介石政権に供与し、ビルマと雲南の鉄道材料の購

入に充てる費用とすると報道している。日本の新聞は、こうした英米の対中支援に大いに不満の論陣を張って反論しているがその効果は表れていない。

（四）欧州情勢と同地から見た日中戦争

英二は、これまで欧州各国を回って得た知見をもとに、戦雲漂う最近の欧州情勢と欧州から見た日中戦争について、彼なりに取りまとめた報告を十二月二十三日付で外務本省に送っている。概要は次の通りである。

①ミュンヘン会談の結果、欧州では、英独仏伊首脳の四巨頭声明を歓迎し、戦争回避ができたと喜んでいたが、将来に大きな不安を残し、各国とも軍備の強化を急いでいる。チェンバレンはムッソリーニ訪問の約束などにより両国の関係はいささか改善している。

だが、英独間はユダヤ人問題を中心に非常に悪化。仏独間はかつてのボネー、リッペントロップスの協定発表によって一時緩和した。ところが、独伊間はチュニス問題で非常に悪化している。これら四ヵ国の関係は、複雑な利害関係が錯綜しているが、つまるところ欧州の問題は何と言っても英独の関係に尽きる。

英国は、デモクラシーの立場から米国を味方に引き入れることを画策している。米国が欧州の戦争に引き入れられるかどうか日本としても注目すべき問題である。英国は、チェコ問題についてもデモクラシーの擁護を前面に、米国と常に歩調を合わせている。英国は、それにフランスを巻き込んで、英米仏が協調して日本に当たる構えを見せている。

②各国とも戦争の危機を避けつつ国防の充実に没頭している。

十二月中旬、ケネディ駐英大使が欧州で戦争が起きた場合、米国はこれに引き入れられてはいけないと力説していた。日本にとって、目下の関心事は日中戦争中に、欧州に戦争が起きるかどうかである。欧州諸国は、日中戦争は長く続くものとみている。

③ドイツの次の侵略の標的は、ウクライナにあると一般的には見られている。ウクライナ人は、ソ連三千万、ポーランド六百万、その他ルーマニア、ハンガリーにも散在している。これら総合すると四、五千万人になり、それをもって一国を形成したいとしている。その場合、ソ連とも関係が深く、ポーランド、ルーマニア、ハンガリー、チェコなどにも関係するので、この問題も注意深く見守る必要がある。

ポーランドは、ここにきて親ソ政策をとり、ソ連とポーランドはドイツに対して共同戦線を張る状態となった。いずれにせよ、ポーランドとソ連の関係好転は日本にとっても注意すべきである。

一方、ルーマニアは、チェコとユーゴスラビアと小協商を結び、特にユーゴスラビアとはこの他に同盟まで結

んでいる。いずれも仏を後ろ盾と頼みにしているわけだが、ルーマニアは、ポーランドとも同盟関係にある。

独ソ間に戦争が起った場合は、英国はどうするかという問題については、まずその時の英政府は、どの政党のだれがリーダーであるかによる。もし、労働党内閣であれば、ソ連に同情して援助する。保守党系でもチャーチル、イーデン、ダフ、クーパーなどであれば、独の拡大化に反対するため、ソ連を支持するであろう。チェンバレンが、チェコ問題を見放したように、英国はソ連にまで手を出すことはないであろう。現在の英政局は、チェンバレン内閣閣僚に対し、若手議員内に反対があるようだが、当分チェンバレン政権は動かないと見られている。英国の世論もなるべく戦争に引きこまれることを避けようとしており、ソ連にまで手を出すことはなかろうとまで思われている。しかし、日本がソ連を背後より討ち、仏がソ連に加担する場合は形勢が変わってくる。

チュニス問題は、久しく独伊間の問題である。十一月三十日、イタリアのチアノ外相が、議会においてチュニス問題に言及して以来、両国間の緊切な問題となっている。ついで、イタリアは数日前、昭和十年（一九三五年）に締結した伊仏協定を破棄した。イタリアは、この問題の他にジブチ、スエズ運河問題などを出しているが、これらの問題が将来いかに発展するかは、欧州政局に危機をもたらすかもしれないので注意を要する。

これに加えて英二は、欧州より見た日中戦争について、欧米諸国が何故中国の蔣介石政権を支持するかについて、英二なりの見解をもとに次のような内容のレポートを外務本省に書き送っている。

①日本では、広東、漢口を陥落させて、大規模な戦闘はしばらくなく、事変は一段落と予想しているという。また海外もそうみていると考えているようだ。たしかに日本の政局からすれば一大進展を示すものだが、欧州から見れば広東、漢口の陥落があっても、戦争はまだまだ長引くものと観察している。蔣政権は、西南中国に立てこもっており、ますますソ連の援助を受けている。その上、最近では英米からの借款を得て、ビルマと雲南との道路を建設している。こうして蔣政権は、西南中国の強化を図り、長期抗戦に備えようとしていると伝えられている。

②一方、米国は、中国への借款を強化している。米国のモウゲンソウ蔵相は「中国の在米正貨を引き当てとして、対中貿易の信用を許与したに留まる」と弁明しているが、米国の新聞は、日本政府の米国政府の覚書に対する回答及び日本の中国における排他的政策に対する報復手段であると書き立てている。

英国も、十二月十九日チェンバレン首相が中国への借款に関する議会答弁を行っている。それによれば、「貿易信用許与法案の成立を待って、対中貿易の進捗につき友好的に考慮するつもりである」と言っているが、タイ

ムスを初め主要新聞は、日本の門戸閉鎖主義に対する報復として蔣政権に借款を許与し、ビルマ雲南間の交通機関の建設、鉄道材料運搬用具の売り込みに資するものであると露骨に書き立てている。

英米は日本の東亜政策に反対し、また東亜における従来の立場が失墜するのを怖れて日本の進展に反撃しようとする。この傾向は、今後日本の進展にしたがいますます助長するものと思われる。それ故、日本は周到な用意をもっていたずらに外国の感情を刺激することを避け、実質的地歩を占めるよう進まねばならない。

日本の東亜政策については、有田外相も英米の大使に繰り返し懇切に説明し、また外国新聞記者に対する会談もした。さらに近衛首相の声明も発表されたが、英米諸国は、日本の立場を了解しようとはしない。ただ、日本は、中国を侵略するとか、九カ条条約を無視するとか、門戸開放、機会均等主義に違反するとか、日本の政策は排他的であるとかということのみを強調しているばかりである。

③日本としては、東亜の問題は国家の生存に関する死活問題であり、日本、満州中国の提携は、国家生存のため、また国防のため必須の要件である。また、日本の政策は他国の経済的活動を排除する意味でないとの趣意を首相及び外相の声明のごとくに繰り返し明白にするほかない。だが、今後この日本の政策が、認められるかどうかは、声明よりむしろ現地における実際の情勢により決定されるべきものであると考えなければならない。

④現在、蔣政権は、西南方面に押し込められているが、政権の強化に努め、在中国カー英国大使は、蔣介石を初め中国国民は抗日の意気ますます盛んにして戦争は始まったばかりであると公言しているくらいで、蔣政権の立場は、必ずしも悲観的な印象を与えていない。

英国はビルマから、フランスはインドシナから直接に交通でき、英米は、借款をもって援助するということが行われているので、蔣政権の立場は、かなり有利であるとの印象を与えている。

これに反し、日本の企画した統一政権の成立は、成就しなかった。十一月末には、北京において統一政権成立につき土肥原参謀本部付機関長一派とその他の軍部一派の間に意見の対立があり、統一政権結成はしばらく延期となったとかの報道がなされている。また、日本の擁立する呉佩孚は遁走したとかの報道が伝えられ、統一政権結成はしばらく見込みがないとの印象を与えている。元来中国においていつも問題になるのは中国政府とは何であるかという問題である。列国が中国政府を助けるというが、蔣政権が弱って新政権が強化されるならば、いわゆる中国政府とは、新政権であるということになり、列国と新政権の交渉が始まるのである。列国の世論を有利に展開するためにも、どうしても蔣政権を押さえつけ、

新政権を統一強化しなければならない。中国において新政権成立強化のような建設的方法が進捗しない以上、列国の世論を蒋政権より離して日本に引き付けることは困難である。

⑤今回の戦争は、日本としては死ぬか生きるかの緊切な問題である。したがっていつまで続いても、またいかなる困難があっても、目的達成に邁進する覚悟をもって長期抗戦を遂行する。政府も確固不動の決心をもってこれに当たることが必要である。

⑥中国における日本人は、内地の食い詰め者ばかりを送るのではなく、将来東亜建設政策遂行の腹を決めて、中国へは厳選して優れた人物を送り込み、中国の活動が永続できる基礎を造るべきである。

⑦日本の海外における宣伝活動は、十分ではないことが指摘されている。これは欧州の二大通信社であるフランスのアバスおよび英国のロイターが日本のニュースを報道したがらないことが原因である。一方、欧州の情勢もアバスやロイターを経由して日本に伝えられることから真相が伝わらないことが多い。

海外から日本が悪印象をもたれるものは、日本が天災地変のため、非常に損害を受けているにもかかわらず、その対応が人道的ではないということである。日中戦争以来暴風雨、水害を初め、鉱山、工場などの爆発、火災事故が頻々と起きているが、人工をもって素早く対策が講じられていない。欧州でも災害は起きるがそれに対する対策を立てており、人工をもって克服している。欧州人は、生活程度も高く人工が自然に打ち勝っている。それが文明国といえるのであるとしている。日本はこれと反対の状況であるから彼らからすれば驚くのは無理ない。日本としては、天災、地変に対する備えを万全にすることが、日本の発展上必要なことであることは言うまでもない。同時にそれを怠れば、日本の対面上も由々しき問題となる。このような備えをないがしろにしては、いかに日本は立派であると宣伝しても効果ないものと思われる。と結んでいる。

外務本省への私見を交えた報告を書き終わってすぐクリスマスがきた。

天気は良く静かなクリスマスである。公使館は例年通り休みであったが、英二にとって家族のいないクリスマスは寂しい。

冬枯れの林を一人散歩した。公使館に帰ると日中戦争で、日本陸軍の将兵が、四七、一三三人戦死し、中国側は、民間人を含め八二三、〇〇〇の人が犠牲になったとの情報が届いていた。英二は、勝たねばならぬと思いながらも来年こそは、この泥沼のような日中戦争が終結することを心より願いながら昭和十四年（一九三八）を迎えるのであった。

（つづく）

回想のベルリン

―「ベルリンはなおワイマール文化の真盛り」（新明正道）―

山本鎭雄

ベルリン留学

新明正道博士（一八九八年二月二四日～一九八四年八月二〇日、以下、新明博士と記す）は、一九二六年四月に東北帝国大学法文学部助教授（社会学講座）として招聘された。その三年後、ドイツ・ヴァイマール共和国へ二年間留学した（以下では、「ヴァイマール」を「ワイマール」と記す）。二九年四月六日、新明博士は神戸港で多くの人々に見送られて出港し、大連に着き、大和ホテルに一泊し、万国寝台列車に乗り、春まだ浅きシベリアを車窓から見物し、停車中はホームに降り、異国情緒を堪能した。ソ連のモスクワ、ポーランドのワルシャワを経由して、ベルリンのシュレジッヒ駅で降車した（四月二五日）。

当時のベルリンには約五〇〇人の邦人が在留し、そのうち約一〇〇人が文部省派遣の留学生が在留していたと言われている。新明博士は日本に近く帰国するという旧友と日本料理店で会い、彼の紹介でヘルムシュテッター街の三階の部屋に下宿することを決定した。貸主は夫婦二人で住み、新明博士とは盛んに懇談した。またベルリン郊外の行楽地ヴァンゼーへ散策したり、遊園地ルナパークで花火を見物し、ジェットコースターに乗って楽しんだりした。

ヴィルマースドルフはベルリンの都心部に比較的近く、通称「西区」Westen と呼ばれた中流住宅地区である。都心部から「西区」の入口にあるカフェー・ヴィクトリア・ルイーゼは、在留邦人の社交と連絡の場所だった。また新明博士はベルリンですでに日本で知己のあった邦人留学生と頻繁に交流し、その交流から新たに邦人留学生とも交流するようになり、快適な留学生活を送った。当面、洋行知識人の狭い世間の交遊と情報交換で過

ごした。

当時のワイマールの首都ベルリンは、約一五〇の日刊新聞を発行する「最大の、最も種類の豊富な新聞の街」であり、三五の劇場と二〇以上のコンサートホールのある「劇場とコンサートホールの街」である。しかもベルリンはロンドン、パリとともに、ヨーロッパでは最も活発な大都市で、「『新時代』の縮図であり、大都市のなかでも群を抜いて最も全世界的な都市」であった（ウォルター・ラカー『ワイマール文化を生きた人々』）。

新明博士は、毎日のように、売店のキオスクでベルリンの代表的な日刊新聞を購入した。それはドイツのみならず、ヨーロッパの激動する情勢を把握することが目的だった。新明博士は日本を出国以前に、たびたび政治時評を寄稿した『経済往来』（日本評論社が刊行した。『改造』、『中央公論』に次ぐ第三の月刊総合雑誌、のちに『日本評論』と改題）の編集部から依頼され、ベルリンから「ドイツ通信」を寄稿するために、新聞や雑誌を購入、閲読した。さらにドイツ社会民主党、共産党のほか、保守系の諸政党の集会、デモンストレーションと警察部隊との衝突も見物した。留学生活を開始して六ヶ月後に早くも『経済往来』に「欧州通信」と題して毎月一篇、一年間一二篇を寄稿した。帰国して、三篇を加筆して『欧州の危機』（一九三六年、日本評論社）と題して刊行した。



新明正道博士。ベルリンにて

大変動期のベルリン滞在

当時のドイツ共和国は、ワイマール憲法のもとで、国民主権、男女平等の普通選挙、議院内閣制の採用、生存権の保障などを規定し、二〇世紀の民主主義憲法の典型として評価されていた。ところが、第一次大戦の敗戦国ドイツは、イギリス、フランスなどから多額の戦時賠償の支払いが国民生活を大いに制約した。富裕国アメリカから多額に借財し、ドイツは経済的に「相対的安定期」と文化的に「黄金の二〇年代」を経験した。二九年一〇月の「暗黒の木曜日」のニューヨーク株式市場における株式の暴落による大恐慌は、世界恐慌を招いた。とくにドイツ経済を直撃し、ファッシズム化を生じる要因となった。

新明博士はそのような大変動期にドイツに留学してドイツ社会学の研究とともに、ドイツを中心に欧米の政治、経済を含む社会時評を行った。言うまでもなく、知識人としての在留経験は新明博士の生涯の記憶に残る重要な体験になったであろう。たしかに、晩年になっても、この時期の貴重な経験は鮮明に回顧されたのである。

新明博士は一九八四年八月に逝去された（享年八六歳）。その四ヶ月後、遺著『ワイマール・ドイツの回想』（発行・新明綾、編集・家永登、一九八四年一二月）が出版された。

本書はすでに公表された随想、日記、論考、講演録などが収録して編集された。本書の編集者の家永登氏によれば、Berlin war doch noch in vollom Blüten Weimar Kultur（「ベルリンはなおワイマール文化の真盛り」）が新明博士の絶筆だったという。私は『回想』を読み、外国に留学する機会に恵まれたならば、是非ともベルリンに行きたいと念じた。その二年後の八六年一〇月、「ベルリンの壁」に囲まれた「陸の孤島」の西ベルリンに留学する機会が与えられた。

私は留学する直前、妻とともに新明博士宅の綾夫人を訪れた。綾夫人は「夫とともに、ベルリンに同行したかったが、残念ながら行けなかった。ベルリンに行った





右：レストランで、新明（右端）
左：ヘルムシュテッター街の建物の3階の部屋で下宿

ら、是非ともウンターデンリンデンで菩提樹の枯葉を送って下さい」と依頼され、新明博士がベルリンで愛用した古い地図と結構な餞別を頂戴した。

晩秋、私は妻とともに、「ベルリンの壁」に設置された東独の検問所で五マルク（西独通貨）の入国料を支払い、煩わしい入国審査を受けたあと、東ベルリンのウンターデンリンデン大通りの歩道で菩提樹の茶色の枯葉を拾い集めて、綾夫人のもとに郵送した。ほどなくして、綾夫人から新明博士の遺影の周りに枯葉を添え、そのそばに満面の笑みを浮かべた綾夫人の写真が郵送された。言うまでもなく、ベルリンで改めて新明夫妻の深い愛情に感銘した。

私はそのほぼ一〇年前の七六年七月、西ドイツのミュンヘンを中心に留学したことがある。帰国して、西ドイツで収集した社会学の資料を参照して研究に専念し、留学体験を自己了解することに努め、研究論文を執筆した。留学して一〇年後に文部省に申請し、「文部省科学研究費補助金」（研究成果刊行費）の交付を受けた。現代ドイツ社会学の研究としたかったが、マルクス主義（唯物史観）に領導された東ドイツの社会学の研究についてはまったく触れることが出来なかった。そこで、愚直にも、書名を『西ドイツ社会学の研究』として刊行した（八六年二月、恒星社厚生閣）。

職親の新明博士からたびたび「自前の著作をものにするように」と奨励され、「一年間に三編の研究論文を公表し、十年間に一冊を刊行しなさい」とアドバイスを受けたが、新明博士の存命中に本書を刊行出来ず、新明博士から受けた学恩に報いることが出来なかったことは、誠に慙愧の念に耐えなかった。本書を故新明博士のご霊前に捧げさせて頂いた。故新明博士の墓碑に「偉大な真理は批判されることを欲し、偶像化されることを望まない」と刻まれている。私はその至言を肝に銘じて研究に専念して来たが、今や八十路を超え、私の余生はもはや長くはない。本稿は新明博士の学恩に感謝し、ただ回想に留めるほかにない。

映画『ヨシハラの影』

ベルリン滞在中の新明博士は下宿では自炊をせず、朝食をパンやコーヒーなどで簡単に済ませ、昼食と夕食のためにレストランやカフェーへ出掛けた。ときに藤巻、花月、常盤、東洋館などの日本料理店にも出掛け、そこでベルリン在住の邦人や邦人留学生と同席して情報交換した。二八年の三・一五事件、二九年に四・一六事件で釈放され、あるいは逮捕を免れ、ベルリンに亡命した作家、文芸評論家、芸術家、学生たちは、東京帝大医学部助教授の国崎定洞（ドイツ留学中に依頼免職）、演劇家の千田是也などを中心に赤都ベルリンで「在独日本人左翼グループ」を組織した。

彼らが最も警戒したのが、日本の内務官吏のベルリン駐在であろう。新明博士が東京帝大法科大学学生の時、新人会本部で労働運動家の松岡駒吉と知り合った。松岡はジュネーブで開催された第一二回国際労働機関ＩＬＯの会議に労働者代表として参加した。帰路、ベルリンに留学中の新明博士に連絡し、同行した政府代表らとドイツ労働総同盟本部の労働組合会館を見学した。その前日、ポツダム郊外のロココ様式のサンスーシー宮殿を案内した。

新明博士が労働組合会館を見学したあと、ベルリンに駐在している内務官吏が同乗した車内で松岡らを案内した新明博士に自らの職業を明らかにした。新明博士はその日の『ドイツ留学日記』に「こんな妙な官吏をつくっている日本は妙である。つくづくと考えさせられる」と悲憤慷慨している。なぜなら、新明博士自身は「スパイ的見地」からあらゆる事態を観察することは「人間として」、また知識人として、およそ問題外だからである（一九二九年七月三一日）。

映画好きの新明博士は頻繁に劇場や映画館に出掛け、彼の『留学日記』に丁寧に感想を記した。例えば、ベルリンの映画館で上映された衣笠貞之助作品『ヨシハラの影』（Im Schatten des Yoshihara 原題『十字路』）を観覧した。『ヨシハラの影』はベルリンの映画館で最初に公開された日本のサイレント映画である。もっとも、ベルリン在留の一流商社員、大使館付き武官などによって組織された「日本人会」は「日本の貧しさを描いた国辱映画だ」としてクレイムを付けた。早速、映画好きの新明博士は封切りの当日に観覧した。「館内は、先ず八分の入りであったが、日本人は思ったほど来ていない」。

「映画は、衣笠氏の好みか、非常に暗かった。ぼくの見たところでは、この映画は、ベルリンの多数の常設館にかけているものと較べて、決して見劣りはしないと思った」と記している（「伯林（ベルリン）風見筆」、『新潮』一九二九年九月号）。

映画『西部戦線異状なし』

それとは対照的なのが、ドイツの作家マリア・レマルクは『西部戦線異状なし』（二九年一月）を出版し、各国で翻訳出版され、世界的なベストセラーになったという。アメリカの映画監督レビス・アイルストーンは同著をもとに『西部戦線異状なし』を製作した。映画はアメリカ、フランスでは好評だった。次いで、ベルリンの映画館で初公開された（ベルリン封切り、三〇年一二月）。

公開二日目、ナチスの妨害によって上映出来なくなった。同映画にたいして、ナチスの宣伝部長ゲッペルスが「非国策的な反戦映画だ」と扇動し、二日目、突撃隊員は映画館内で煙爆弾やくしゃみ粉を投げて上映を妨害した。軍務省、外務省などは上映に疑義を唱え、最終的

に最高映画検閲所によって上映は禁止された。帰国して、新明博士は「遂にその映画が上映禁止されるに至ったのは何を意味するのか」と問い、今やナチスは「敗北の後に、再び昔の剣と権力の上に栄光を復興しようとするドイツの軍国主義が、再び事実としての『西部戦線異状なし』を地上に創作しようとしている」と警告した（『レマルクの映画の禁止されるまで』、『批判』一九三一年七＝八合併号）。

新明博士は第一次大戦末期のドイツとフランスの激戦の西部戦線ベルダンにおける塹壕戦には大いに関心があった。新明博士はベルリンで二年近くの留学生活を終え、帰路はアムステルダム、ロンドン、ブリュッセルを見物して、しばらくパリに滞在した。パリでは薩摩治郎八男爵（パリの社交界で「バロンさつま」と言われた）は邦人留学生、若き法人画家、短期滞在の旅行者のために日本館を建設した。新明博士はパリ滞在中の中川一男（東京文理科大学、西洋中世史専攻）に同行し、フランス北東部の雪の積もるベルダン会戦の戦地を見物した（三一年一二月九日）。

当日の『留学日記』に、新明博士は「見渡すと、ベルダン一帯は丘陵である。西の方の平地から独軍が殺到して来たのであろう。この一線を境にして戦われた悲劇！この一線にまで送られてきた兵士たちの気持を思う。彼らの血は何をもたらしたのか。戦は終わらない。既に次の戦が云々されている。戦は戦を終滅せしめるものではないのである」。「『西部戦線異状なし』以上に事実は悲痛である」と記している。まさに「百聞は一見に如かず」であろう。


セーヌ川、遠景はノートルダム大聖堂　遊覧船から

レマルクは『西部戦線異状なし』の最終章で作者の分身バウル（映画では英語の名前のポール）、彼の仲間の兵卒七人はすでに戦死し、彼もまた一八年一〇月に戦死した。「その日はベルダンの全戦線はきわめて穏やかで、司令部は『西部戦線異状なし』、報告すべき件なし」と報告した。マイルストーン監督の映画のラストシーンでは、戦場は静かだった。塹壕のポールは飛んで来た一羽の蝶にそっと手を伸ばし、身を乗り出した瞬間、敵兵に狙撃されて戦死した。

その後、この反戦映画は第三回アカデミー賞最優秀作品賞を受賞したという。それにたいして、三二年、ユダヤ系のレマルク自身はスイスに亡命を余儀なくされ、その翌年にはナチスによってドイツの市民権を剥奪されるとともに、レマルクの作品はナチスの学生組織のドイツ学生協会によってベルリンのオペラ広場で行われた焚書の対象とされた。

社会学研究の計画と実行

新明博士の留学の本来の目的はドイツ社会学の研究である。二九年五月以後のベルリンの留学生活に一応の目処が立ち、月曜日にベルリン大学のアルフレット・フィーアカント教授の「一般講義」を聴講し、木曜日に同教授「ニーチェの知識社会学」をテーマにした「演習」を聴講した。金曜日は私費で、臨機応変にドイツ語会話を学習した（一回一〇マルク、一〇回）。次いで日本の出版社の既刊として、『形式社会学論』、『独逸（ドイツ）社会学』、『群集社会学』を列挙した。哲学者の三木清に懇望されて、神戸出港前に寸暇を割いて執筆した『社会学』（岩波書店、続哲学叢書）はベルリン滞在中に刊行された。さらに当地の社会学研究のテーマとして「社会学体系論」、「方法としての社会学」、「知の社会学」、「芸術の社会学」などを記している（『留学日記』）。

新明博士はベルリン大学のフィーアカント社会学教授の講義と演習を聴講した。ベルリン工科大学のカール・ドンクマン員外教授の応用社会学研究所を訪問し、親しく懇談し、のちにドンクマンが主宰する『応用社会学雑誌』に邦語論文「方法としての社会学」の独訳論文を寄稿した。ドンクマンは掲載に当たり、勝手に「社会学的原理としての集団」と論文名を改題し、さらに文章の一部を加筆した。そのため、独訳論文の重要な要旨が曖昧になり、新明博士は大いに不満だった。

新明博士は書店に行き、後払いで盛んに社会学のほか、新刊書や古書も大量に購入した。マルクスの『資本論』初版（マルクス自身の書き込みがある）を日本に持ち帰って売れば、より高価に売れるだろうと算盤を弾いて、三百マルクで即座に買った。ほかに、『ハイネ全集』（三〇マルク）を買い、熱心に閲読した。一八三一年にハインリヒ・ハイネはパリに亡命し、シャルル一〇世に抗議して労働者や小市民が蜂起した七月革命以後のパリを目撃した。ハイネは『アウグスブルク一般新聞』に『フランスの状態』（独語）を連載した。

新明博士は『留学日記』に「仏国の一八三一年頃のことを書いている。きょうは丁度市街戦の所。興奮して巴里を歩いているハイネを見出す。彼は純情家である」と読後感を記している（一九二九年七月九日）。フランスの七月革命は一八三〇年七月に「栄光の三日間」を敢行した。なお、七月革命はドレクロワの「民衆を率いる自

由の女神」の絵画はとくに有名である。一八三一年はリヨンで絹織物労働者の大規模な反乱が起きた。

新明博士は、当時のフランスのハイネと、時代を越えてベルリン滞在中の自らを同定し、ハイネの『フランスの状態』を真似て、「ドイツの状態」を書いて見たいと記し、自らのアイデンティティを「ハイネ的考察者」と確認した。新明博士は、当時の混迷するドイツの状態、さらにイギリス、フランス、アメリカの状態も考察し、帰国して『欧州の危機』というタイトルで刊行した。要するに、新明博士は「ドイツの状態」を中心に「欧州通信」を執筆した。

新明博士はケルン大学のフォン・ヴィーゼ社会学教授にあらかじめ訪問を打診し、独訳論文を同封した。フォン・ヴィーゼ教授の演習を傍聴し、彼の学問的力量に感服した。また彼の誕生日に自宅に招かれて親しく交歓した。

港湾・工業都市ハンブルクに着き、エルベ川や市街地を見物したあと、寂びれた港湾都市キールへ行き、キール大学の名誉教授テオドール・テンニースの自宅を訪問し、書斎に通され、先に郵送した新明博士の独訳論文を逐条的にコメントされた。その翌日も、テンニースの自宅を訪問し、食堂で家族一同と食事を共にして親しく交歓した。とくにアメリカから帰国直後の娘婿のルドルフ・ヘベルレ員外教授とアメリカとドイツの社会学の方法について意見を交換した。

三〇年晩秋、新明博士はフランクフルト大学に出掛け、新進教授のカール・マンハイムの満員盛況の知識社会学の講義を傍聴した。ケルンに滞在中、新明博士は刊行直後のマンハイムの『イデオロギーとユートピア』（一九二九年）を閲読した。かねて一度は彼の講義を聴講したいと念願していた。のちに、新明博士は彼の知識社会学との出会いについて「いわば薄暗いコンクリートのビルを出て、眼前に突如白昼の光のなかで花壇を見出したような鮮やかな印象を与えた」と回顧している。帰国し、演習で『イデオロギーとユートピア』をテキストにして、『知識社会学の諸相』（一九三二年）などを刊行した。日本に帰国後、新明博士のドイツの学究体験は社会学研究に大いに役に立ったのである。

ワイマール・ドイツの混迷と危機の予兆

新明博士はドイツが経済的に「相対的安定期」を終了し、文化的に「黄金の二〇年代」の陰りが見えて来た時期に激動のドイツの首都ベルリンで留学生活を送った。その半年も経たない時期の二九年一〇月の「暗黒の木曜日」にニューヨーク株式市場で株価大暴落が生じた。それを契機にドイツはもとよりヨーロッパ諸国、ソ連を除く全世界に世界大恐慌が発生した。大恐慌の影響を最も被ったのは、アメリカからの多額の借財に依存していた

ドイツの経済、財政、国民生活である。

新明博士はドイツ西部のケルンに一ヵ月間滞在し、「欧州通信」の第一編を月刊誌『経済往来』に寄稿した。そのタイトルは「独逸（ドイツ）、独逸、独逸、萬国の下（した）に」である。ドイツの国歌の冒頭は「独逸、独逸、萬国の上（うえ）に」（「ドイツよ、ドイツ、すべての上にあれ！」）である。ところが、ワイマール・ドイツは欧米諸国では最下位の国家になった。ちなみに、新明博士はドイツの首都ベルリンは「ドイツ人の住む都である。だが、その住宅の如何に多くがアメリカ人の所有に帰している」。「ドイツ国家は、アメリカ資本の基礎の上にやっとその存在を保証されているのである」と記した（『欧州の危機』）。

しかもドイツでは企業は倒産し、失業者は増加し、失業保険制度は麻痺し、逼迫した財政は低迷する国民生活をますます悪化させた。三〇年四月末、新明博士はベルリンの「路上で出会った若い労働者」を観察し、「憐れなのは、好天気なのに、為すこともなく、舗道を散歩している労働者である。生活なしの、何と高価な強いられた散歩であることよ！棄てられた新聞紙を拾い上げて求人広告欄に眼を皿のように曝していた」と記した（『欧州の危機』）。

第一次世界大戦後、イタリアも産業の不振に加え、社会不安や生活難も重なり、政情は混乱を極めた。ムッソリーニのファシスタ党と国家主義者が連合して政権を掌握し、のちに一党独裁体制を確立した。その一方、ドイツはアメリカ大恐慌の影響を受け、産業と生活、経済と財政は崩壊した。国民の社会不安に乗じて、ヒトラーが率いる国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）が急速に抬頭した。

二九年九月、第一次世界大戦の戦後賠償の金額と時期を緩和するヤング案が国際的に成立し、翌年九月に正式に発効した。それにたいして、ドイツの右翼と国家主義者はヤング案承認を反対した。ヤング案は、ワイマール憲法第四八条の大統領ヒンデンブルクが発する「緊急令」によって任命されたブリューニング「大統領内閣」によって承認された。ナチスらはヤング案承認にたいして、それを攻撃する絶好の機会と判断した。

右翼で国家主義の国家国民党、軍人からなる鉄兜団のほか、ヒトラーが率いるナチスも参加し、ヤング案の議会承認に反発して「ヤング案反対全国委員会」（ハルツブルグ戦線）を結成し、「ドイツ民族の奴隷化に反対する法案」（「ドイツ国民隷属化法案」）として反発し、反ヤング案闘争、その一環として「国民請願」を議会に提出し、とくにナチスは活発に運動した。二九年一二月の議会では「国民投票」は否決された。

だが、それまでナチスは右翼の群小政党の一つに過ぎなかったが、既成の右翼政党と同列の全国的な右翼政党として、また新興のエネルギッシュな右翼政党として国

民に注目されるようになった。しかもナチスはドイツ各地の地方自治体選挙で活発に活動し、地方議会にも進出し、特異なナチスの政治勢力は無視出来ない存在となった。

新明博士は「国民投票」の否決について、「ファシズムの前進を事実として認めなければならない。……国民請願の成立は、その背後に成立した、又はしつつあるファシズムの勢力の雄弁な表現であって、決して彼らの敗北を貶価すべきものではない」と警告した（『欧州の危機』）。さらに一僕はドイツへ来てから屡々（しばしば）方々の壁や舗石の上に卍印のついた『ヒトラーに来たれ』という此の一派の宣伝の文句を発見する……怪奇な団体、種々の疑惑を蔵する団体！確かに、この政党は何となく無気味なものを有っているのだ。しかし、彼らは公けの政戦において極めて有力な存在として現れて来た」と認識した（『欧州の危機』）。

抬頭するナチスへの警鐘

三〇年九月、ドイツ国会選挙でナチスは大量に議席を獲得し、ドイツ社会民主党に次ぎ、第二党に躍進し、第三党はドイツ共産党である。辛うじて第一党になったドイツ社会民主党は、ワイマール憲法の確保、民主主義の維持、議会主義の防衛を第一の任務とした。それにたいして、ワイマール体制を否定するナチスは第二党になり、ワイマール体制に異議を唱えるドイツ共産党は第三党となった。もっとも、最右翼のナチスが提唱する「民族主義」にたいして、最左翼のドイツ共産党が提唱する「社会主義」とは極めて対立的である。

三〇年九月一四日はドイツ総選挙の当日である。八月下旬以降、激烈な選挙戦が展開された。新明博士はベルリンで新聞各紙、週刊誌を閲読した。九月一四日の投票日の夜、新明博士は、留学中の友人とベルリンの「レッシング劇場」でエルヴィン・ピスカトールの『皇帝の奴隷』を観劇したあと、ベルリンの大通りの交差点で掲示板を見た。そこに貼られた新聞の夕刊紙やビラには、ナチスの当選者一一七名と報道され、社会民主党に次ぎ、第二党に躍進した。そのビラを見た婦人たちは幾度も「素晴らしい」fabelhaf（信じ難い）と歓声を漏らしたという。新明博士は「一寸癪だ」、それは「全く素晴らしいことだ」と皮肉っている。（『留学日記』）。

社会民主党はなお一四三名で第一党であるが、連立しても過半数を占めることは出来ない。ワイマール体制の支持を第一に尊重する社会民主党は、議会で先ず第三党に躍進した共産党に呼びかけ、政権を担当する状況にはなかった。あるいは各政党と連合して、総理大臣となる圧倒的な政治力も無かった。また旧軍人で保守派のヒンデンブルク大統領がワイマール憲法第四八条に依拠して社会民主党が主導して連合政権を承認する見込みはなかった。社会民主党は左右の政党の動向にたいして「寛容政策」に徹するよりほかになかった。

新明博士は「社会民主党は、形式的に議会主義を考え、之に束縛されているのだ。ドイツの政局の現段階において、議会は単なる名辞である」と酷評しつつ、なお「今回の総選挙は、之を一層明確ならしめるに貢献したと謂える国民社会主義〔ナチズムのこと、私注〕の乱舞は長くない。ドイツ政界の夢魔を退治する剣は、既に大衆の溶鉱炉の中で鋳上げられている」と、なお期待して止まなかった（『欧州の危機』）。しかし、その後のドイツの歴史が明らかにしたように、「大衆」はヒトラーが率いるナチスを熱狂的に支持するようになった。

オーストリアのファッショ化

一九二二年一〇月、ムッソリーニが率いるファシスト党と民兵組織「黒シャツ隊」が「ローマ進軍」してローマを占領し、国王の認可を得て、政権を獲得した。彼が率いる国家ファシスト党の思想やイデオロギー、政治運動や大衆運動、体制を総称して「ファシズム」と言う。イタリアの「ファシズム」に早くから注目したのが、ロシア共産党（ボリシェビキ）を中心に結成し、ソ連以外に労働者政府の樹立を目指すコミンテルン（第三インターナショナル）であろう。だが、オーストリアの保守系の政治指導者は早くからイタリアのファッシズムの動向に注目していた。

在独中の新明博士は、「今欧州で一つの重要な問題を成しているのは、独裁である」と記し、さらに独裁はソ連の無産階級の独裁とは異なり、「イタリアにおいて表現されたファッシズム的な議会否認としての独裁である」。近年のドイツでも「究極的においてファッシズムにあること」、このような傾向は、ドイツのみに特有ではなく、「欧州一般を支配しつつあるものと見なければならぬ」と記した（『欧州の危機』）。イタリアの隣国のスペインでも二三年にプリモ・デ・リベラがクーデターを起こし、軍事独裁を実施した。その後、内閣が交代しても、スペインにおいては「ファッシズムの独裁は、今までの城塁を守り続けている（『欧州の危機』）。

新明博士はスペインにおける独裁に着目し、それと同時に首都「赤きウィーン」のオーストリア共和国の保守勢力はイタリア・ファッシズムの確立に連帯的に共鳴しただけではなく、さらに政治的な連繋を実現するだろうと予測した。

新明博士はオーストリアの政治状態を激動のウィーンで確認しようとして、三〇年五月末にベルリンを発ち、東南ドイツを経由し、ウィーン旅行を実行した（『留学日記』）。ドイツ中東部のドレスデン、チェコのプラハ、オーストリアのウィーン、それぞれの都市の名所を見物した。たしかに、新明博士はオーストリア共和国の

もとで二大政党の社会民主党（社会民主労働党）とキリスト教社会党が激しく対立抗争し、後者が政治的に前者の活動の禁止を策動し、独裁的軍事的政権のオーストロファッシズム（オーストリア憲法のもとでイタリア・ファッシズムをモデルに、民主主義的議会を無視した政治体制、三四年～三八年）を確立する前夜の政情を確認した。

ハンガリーの首都ブタペスト行きを中止して、「古色蒼然」として、「反動濃厚」なウィーン大学を訪れた。最初、ウィーン大学の社会学者・社会哲学者のオトマール・シュパン教授を訪れたが、自ら懇談を断念した。次いで、思い返して、再びウィーン大学に出掛け、社会民主主義的経済学者で、オーストロ・マルクス主義（オーストリア・マルクス主義学派）の代表的な理論家のマックス・アドラー教授と親しく歓談した。

新明博士は「シュパンと打ってかわって何と教授らしい教授よ、快い会話」をして、オーストリアの政情について質問した。オーストリア社会民主党は二大政党のキリスト教社会党と対立し、当時の「半独裁」の政権から徹底的に排除された。「三〇分の会話だが、好印象である。何といっていいか、五月の空のようなからっとした態度である」という印象を抱いた。ウィーンを去り、オーストリアのザルツブルク、ミュンヘンを経由してベルリンに戻った。

すでに、新明博士はベルリン滞在中にウィーン出身で、ドイツ社会民主党の理論指導者で、ドイツ社会民主党内閣で大蔵大臣を務めたルドルフ・ヒルファーディングの『金融資本論』（一九一〇年）と格闘した。マックス・アドラー教授と対談し、『金融資本論』で未消化だったオーストロ・マルクス主義の一端を再認識したことで「好印象」を抱いたのであろうか。

新明博士はその翌日の七日、ウィーンとザルツブルグで執筆した原稿「独裁への進軍」を『経済往来』に郵送した。「夢魔の如くに欧州の上に蔽いかぶさっているそれは、イタリアにおいて表現されたファシズム的な議会否認としての独裁である」。ファッシズムはドイツのみならず、欧州全般を支配しつつある。イタリア、スペインはすでに独裁を実現した国家であり、中欧ではポーランド、バルカン半島のルーマニア、クロアチア、ユーゴスラヴィア、スカンジナビア半島のスウェーデン、フィンランドなど、その数は民主主義国家よりも多いとされていた。

オーストリアのキリスト教社会党はチーロルなどのアルプス山地で、羽根飾りをつけた緑色のチロリアンハットを被り、武器の所有・携帯する特権を有している郷土軍（護国団）をバックにしていた。それにたいして、オーストリア社会民主党はウィーンなどドナウ川に沿った都市部の青い服を着た都市労働者による防衛団（防衛同

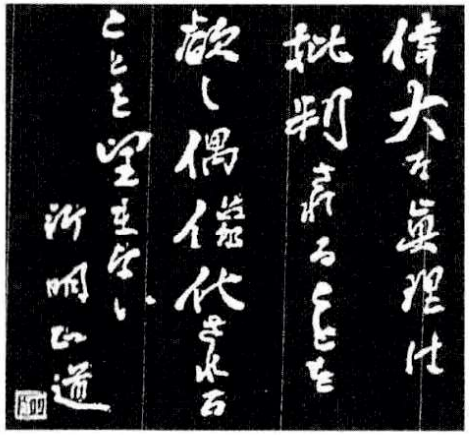
盟）をバックにしていた。両者が街頭で武力衝突すれば、確実に戦闘力に秀でた郷土軍が勝利する。

アドラー教授はキリスト教社会党が政権を掌握し、社会民主党を徹底的に排除していること、だが武力的に脆弱な防衛団は、郷土軍の挑発に乗らないように隠忍自重すべきだという見解だった。アドラー教授はキリスト教社会党を中心に連立政権（エンゲルハルト・ドルフート内閣）がオーストロ・ファシズムを確立しても決して一体的でないと観測し、キリスト教社会党とその支持組織の内部分裂を期待したのである。アドラー教授は危機迫るオーストリアの政情において、いわば「待機主義」を最良としたが、のちに社会民主党は非合法化され、防衛団はオーストリア国軍によって鎮圧されてオーストロ・ファッシズムを確立した。

あとがき

すでに触れたように、新明博士はドイツ滞在中に『留学日記』を書き続け、さらに月刊誌『経済往来』に『欧州通信』一二編を寄稿し、帰国して三編を加筆して、『欧州の危機』と題して刊行した。新明博士は帰国後、ドイツ通の時評家として『経済往来』（改題して『日本評論』）のほかに、各雑誌社から原稿を依頼されて、それに応じた。帰国後の言説について、本稿は残された紙数も尽きたので省略する。ただ最小限度に触れるべきは、ヒトラーが率いるナチスの動向であろう。三二年七月、ナチスは総選挙で第一党となり、ヒンデンブルク大統領はヒトラーを首相に任命した（ナチス政権獲得）。そのほぼ二ヵ月後の夜、国会議事堂放火事件が起った。この事件には、オランダ元共産党員以外に、ドイツ国会議長のゲーリングが秘密裡に遊撃隊（SA）に指示し、議事堂を放火・炎上したと思われる。なぜなら、国会議事堂のすぐ近くに国会議長公邸があり、議事堂と公邸には地下道があって、ゲーリングは遊撃隊に命じ、議事堂に大量の石油を持ち込ませ、放火させた。ナチス政府はこの事件を国際共産主義の謀略と宣伝し、その脅威を煽り、共産党と社会民主党の議員、労働組合幹部などを拘束・訊問し、徹

墓碑名　東京多摩霊園に眠る



底的に活動を不能した。そのほぼ一週間後に、ナチスは国会総選挙で大量の議席を獲得し、全権委任法（「民族及び帝国の困難を除去するための法律」）を可決し、ヒトラーの独裁権を確立したことは歴史的に自明であろう。

すでに触れたように、新明博士の絶筆が「ベルリンはなおワイマール文化の真盛り」である。新明博士がワイマール・ドイツのベルリンに留学した時期は一九二九年五月から三一年一月頃までである。この時期もたしかに文化的芸術的には「ワイマール文化」の最盛期であったろう。だが、経済的・政治的には混迷と危機の時期に他ならなかった。今、新明博士の『留学日記』と『欧州の危機』を読み、新明博士の研究と時評を回想し、私の拙いドイツ社会学研究を回顧し、いわば「回想の回顧」を試みた。私はもはや残された余生も限られた昨今、新明博士が自らに課した教訓「偉大な真理は批判されることを欲し　偶像化されることを望まない」を自ら実行して来たであろうか。今、改めて慚愧の念に堪えない。

私の新明正道博士の研究

著書

『時評家新明正道』　時潮社　一九九八年
『新明正道　綜合社会学の探求』
東信堂　二〇〇〇年

編著

『新明社会学の研究　論考と資料』
田野崎昭夫共編　時潮社　一九九六年
新明正道著『ドイツ留学日記』
家永美夜子校閲　山本鎭雄編　時潮社　一九九七年

編集

『新明正道時評集』
日本経済評論社　二〇〇七年

雑誌

『新明社会学研究』　新明社会学研究会　創刊号―第一五号　一九九二年―二〇一二年　編集
田野崎昭夫　山本鎭雄　栗原俶江　小松君代　今井隆太

柿本人麻呂②

横山正義

私の住む集落の近く、三百メートルほどのところにある平尾八幡宮のお話です。この地域は和名抄によれば古代には鹿城（からこ）と呼ばれていました。「からこ」という地名は由来は何であろうか。平尾は地名で奈良県大宇陀町にもあります。そして東平尾、西平尾などがあります。全く菊川市内田と同じです。そして春日大社の領地です。奈良では春日神は鹿に乗って現れるということから、鹿は神と崇められています。鹿の城は神の城、春日大社の鎮座するところをさすのではないか。門外漢の私の説です。平尾八幡宮が勧請したという誉田八幡宮は大阪府でも西端で羽曳野市にあり、奈良に隣接しています。大井川、土方、榛原など近畿地方にある地名が遠江にはあります。大井川、土形、榛原などと同じように大陸の文化を持った人達が近畿地方から移住してきたのではないか。江戸時代平尾村は百石です。

平尾八幡宮の由緒です。この地に奈良朝のころ柿木庄司という豪族があった。近郷を広く領有し、家、富、栄えたので世人は柿木長者と称した。庄司に女子が一人あった。清華家末葉より粟田大蔵信麿と言う人を養子とした。この信麿という人が天朝に奉請し勅許を得て河内の国誉田八幡を此の地に勧請し奉った。時に人皇第四十四代元正天皇の養老三巳羊年紀元一三七九年西暦六九九年八月である。爾来信麿の子孫が男系相続で現在に至る四十六代神職たり、後世になって粟田を栗田に改めた。住古は七百石の神領を拝受して居ったが、戦国時代に至り減ぜられ三十貫匁となった。横須賀の城主大須賀家の尊崇極めて厚く慶長六年三十石の黒印を付せられた。其の後徳川三代将軍家光の時に該黒印を朱印に改められた。又紀伊大納言頼宣公深く当社に崇敬せられ、参拝の節なぎの樹一株をお手植えになられた。この樹は拝

殿東側に今尚鬱蒼と繁茂している。神領は上地となった。
明治六年十二月西京に於いて天朝へ、本社寳乍長久ご祈祷の御神札献納を仰せ付けられた。明治六年三月村社に列せられ、昭和三年十月十六日神饌幣帛料共進神社に指定された。（内田のさと誌より参照）

栗田神官一族には社会に貢献する人物、栗田土満を始めてとして多数輩出しています。元内田村村長、元掛川市市長、「日中教育の掛け橋」と言われた松本亀次郎、戦国時代掛川城徳川家康と高天神城武田信玄あい対した風吹峠に明治三十五年トンネル完成を請けたのが中谷作次郎です。青野宇吉土方村村長が報徳社で資金を融通してくれることを内田の森集落の報徳社より聞きおよんで、トンネルの建設を決意しました。請けたのが中谷作次郎で、中谷作次郎の令室は松本亀次郎の姉でした。

中谷作次郎は大変な秀才で、大坂小開校の校長試験に受かり、初代校長を務め、退官後、測量士の資格を取り、土木事業を施行していました。

明治三十五年、トンネルの完成したのを皆が見て驚いたのは西口の入り口に立つと、東口の入り口が二百メートル先に見通せるのです。段差もないし、曲がっていないのです。当時、トンネルを掘る時、東西両方の口から掘進み真ん中で調整するのですが、それがないのです。曲がっていると、すれ違いの場所を作ったり、繋いでカーブにしたり、段差の調整で無駄な経費が掛かるのが当時の測量機器では当然でした。

トンネルの幅は土方で生産したお茶を台八車で掛川の市場に運べるようになり、五キロほど近くなり坂も少なくなりました。雨降りには礫岩の中に、砂利地層があり、雨漏りがしたので、高さは大人が傘をさして通れる高さ、中学生が自転車で傘をさして通れる高さ二メートルほどでした。幅は台八車が余裕もって通れる二メートルです。

平尾八幡宮神官栗田土満幕末活躍元文二年～文化八年（一七三七～一八一一）日本書紀を研究し、論文「神代紀葦牙」三巻を著すとともに「岡の舎」歌集を作る。明和四年（一七六七）賀茂馬渕に入門、後に本居宣長に入門し、国学・歌道を学びました。のちに平尾八幡宮神社前方に学びの舎「岡の舎」を建て国学を教えるとともに歌の弟子を育てました。岡の舎歌集をまとめた栗田真菅は土満の令室しゅんの従姉弟でした。

栗田土満が令室しゅんの従姉弟・栗田真菅の母の死とその子らの死を悲しみ読んだ句

＊真菅が母の兎月ばかりとみに病おこりてみ身まかりける時

「世の中の人のうずき問い踏めるはかかる別れのあればなるらん」

＊真菅が子を失ひける時よみて遣はしける

「うつし身のはかなき事はしりながら遅れ先だつ世を恨むらむ」

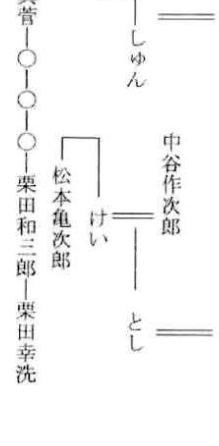
栗田土満が柿本人麻呂を歌の神として敬う歌

＊柿本の神の御かたに

「言の葉の神と聞ゆるいにしへの神ならふべし後ならはめや」

系図

柿の木長者：栗田大蔵信暦―吉勝―吉信―正信―信高―吉勝―重信―信安―栗田土満（ひじまろ）―秋宣―静雄―真幸―岷（たかし）



しゅん天明三年（一七八三）死亡。栗田土満四十七歳。まとめます。

栗田真菅は後に市右エ門と名乗り家の前で、市場の経営を営み、そして現在でも栗田真菅の子孫の屋敷の前に柿の古木があります。栗田土満の祖先は柿木の長者と言われたという。市場の印し、元屋敷跡にも柿の古木と古井戸と地（じ）の神様が祀られています。

柿本人麻呂の家は市の管理者で、目印として中国から輸入された、柿の木が植えられていたといいます。

『参考文献』

日中教育のかけ橋　松本亀次郎伝　平野日出雄　編集　静岡県出版文化会
製作　静岡教育出版社
印刷　長田文化堂
内田のさと　発行所　郷土誌編纂委員会
岡の屋歌集　著者　栗田土満　編集者　栗田真菅

安芸門徒シルクロード紀行（14）

村上邦治

七五　中国教線拡大

大谷光瑞は一四年五月すべての役職を辞任、伯爵の爵位も返上した。一六年には浄土真宗本願寺派の僧籍を捨て還俗した。そして一日本人として列強各国がしのぎを削る上海および日本陸軍（関東軍）の最大基地旅順に別邸を設け、自分の生きる道を歩み始めた。法主・管長を辞任した後は日本に帰国せず、中国の本願寺別院を中心に布教行活動を継続する。僧籍は離れたが、中国ではすべての人から猊下と呼ばれ以前と何ら変わらなかった。

真宗本願寺派の清国開教は光瑞の新門時一八九九（明治三二）年山東省で義和団が蜂起拡大する中、初めて四カ月にわたり上海・香港・漢口・北京を巡遊しその後本格化した。何せ宗門の総帥が清国の国内事情を一番掌握しており、また教線拡大により中国の仏教復興を目指す法主が指揮するので、他派に先駆け素早く進出ができた。

光瑞は事業家として南洋事業に携わるが、利便な国際都市上海を拠点に定める。日本の対華「二十一カ条要求」から排日運動が広がったため、取り敢えず安全な海上での生活を選びハウスボートを購入した。その後治安のよい仏租界の借家に移り住んだ。

この場所は孫文の居宅と近く、旧知の孫文と煩瑣に会い議論を深めた。「三民主義」を唱える孫文と東アジアの仏教興隆を構想する光瑞の二人は、中国・東アジア・全アジアの発展と欧州強国の侵入に対抗することを語り合った。この時の二人が議論した内容は後刻あらわになる。

海上ハウスボート、仏租界での借家住まいを経て、大谷別邸「無憂園」を建設した。光瑞らしく共同租界の西郊外蘇州河畔に一万坪の広大な土地を求め、三層の洋館を建てた。敷地の四分の一は池を配置、外周には塀を築いて安全を確保した。『寺史』によると建築費は二〇万円を要したと記す。大戦景気によりこの時機には本願寺派財政は余裕が生じてきたものと思われる。

海外には一七（大正六）年旅順、一八年青島に別邸を、さらに南洋事業地のセレベス島やジャワ島に山荘を建てた。こののちも三四（昭和九）年大連に浴日荘、四〇（昭和一五）年台湾高雄に逍遙園を設けた。

本拠地とする上海・旅順に別邸を建設し海外活動の体制はできたが、中国国内での教線拡大は思い描くものとは程遠いものであった。

辞任後光瑞が印度へ仏教遺蹟参拝の旅行中、日本政府は袁世凱政府に対し「二十一カ条の要求」を突き付けたことが日中関係の転換点となった。民衆は承認した五月九日を国辱記念日として、反日運動がたかまりをみせた。一九年パリ講和会議で北京政府は日本の要求撤廃を主張するが主要国から認められなかったことから、北京で大学生を中心とした大規模な反日・排日貨運動に発展した。六月には労働者・商人も加わりには二〇万人が参加した空前のゼネストになった。中支上海に波及、大規模な反帝国主義運動に対し、日・英は軍隊を派遣し沈静化に努めた。租界当局は人民に発砲する強硬策により五〇名以上の死者を出すことになった。英国当局に抗議するゼネストは一年半にわたり続けられ、「東洋のパリ」といわれた上海市内にはごみがあふれ都市としての機能を麻痺させた。

翌月には上海に続いて広州と香港に及び、上海を支援する運動が起きた。

こうした中国民衆の帝国主義国に対する抗議運動は全土で発生し、その沈静化に各国とも苦労した。特に抗議の目標にされた日本は、断続的に反日・排日貨運動を引き起こされ民衆の批判は日本に集中していく。

中国人民によるナショナリズムの高揚は世界大戦の反省から、一八年米国ウィルソン大統領が提唱した「民族自決主義」に影響を受けたものでもあった。パリ講和会議・ヴェルサイユ条約締結を経て、列強諸国は国際協調の一〇年間に入り、軍縮期が到来する。

大正年間日本の政治は一八年本格的な政党内閣（党首首相・閣僚衆議院議員党員主体）となる原敬内閣が成立する。以後加藤高明・若槻礼次郎・田中義一・浜口雄幸三二年の犬養毅内閣まで間、「憲政の常道」として政党内閣が続き、国際協調と緊縮財政が曲がりなりにも基本政策となり政治的に安定した。これにより普通選挙法成立、日本共産党・労働農民党の結成など国政参加運動に

よる民主主義が高まり、いわゆる大正デモクラシーが実現した。

二一年ワシントン軍縮会議から始まる国際協調を主導したのは幣原喜重郎（外交官元駐米大使）であった。四内閣の外務大臣を歴任、「幣原外交」と呼ばれる対英米協調と中国内政不干渉を取り続けた。

中国では二一カ条要求以来日本に対する民族運動が高まる中、陸海軍の拡大進出策を不拡大方針により抑え込み、なんとか中国との協調融和を図ろうとした。

問題は軍縮による陸海軍の不満を抑えるかにあった。海軍はワシントン海軍軍縮会議で主力艦を、三〇年ロンドン軍縮会議では補助艦の保有量制限が決められた。陸軍は五師団に相当する人員削減を課せられた。

幣原外相は九か国による中国山東懸案解決条約（中国の主権尊重・領土保全・門戸解放）を受け入れ、日本は第一次世界大戦で獲得した青島と山東省の利権を、英国は租借地威海衛を中国に返還し、融和を前進させた。

二〇年代中国融和策を取り得たのは、国際協調の圧力と中国の政治体制確立（第一次国共合作・各地軍閥の国民革命軍への統合による軍事力強化）が大きかった。それを支えたのは反日運動で示した民衆の団結であった。

日本は協調外交により中国との融和を試みたが、軍部による事件が散発し日中関係の融和は果たせないままであった。

また二一カ条要求の最後の項である第五項二一条「信教の自由」を取り下げたことの影響は大きく、中国全土での自由な教線拡大は大幅に制約された。

光瑞は積極的に教線強化の拠点を設けたものの、ほとんどは日本からの移民や事業家・その従業員家族など居留民に限られ、中国人に広がらなかった。

日本が嘗てない協調融和路線を取った二〇年代ですら、光瑞が描く「浄土真宗本願寺派の教線拡大による中国仏教の復興を果たす」とした目論見は、思うように進まなかった。

七六　南洋事業進出

明治末期人口対策を中心とする日本の将来について、政治家・軍部はその解決策を隣接する朝鮮・中国特に満州・華北に求めた。一方光瑞は一事業家として、南洋熱帯農業事業に力を入れた。

日本政府は長引く経済不況と繰り返される天候不順による不作に対し、これらの地に終戦まで三〇万人近くの移民団を送った。特に三〇年代から「五族協和・王道楽土」を目指し「拓け満蒙！行け満蒙！」の掛け声で過半の移民が向かった満州北部は冬季の酷寒な気候と農地に適さない原野により、楽土を求めた人民の苦労を、光瑞は巡教を通じて早くから見知っていた。

中国の内情をよく知る光瑞は「日本の経済的閉塞は海外発展しか打開の途は無く、中国・満州・蒙古は危険であり、安全確実な投資先は熱帯農業しか残されていない」とする持論を早くから主張していた。

南洋農産物は世界的な需要増加が見込めるゴム栽培や香料・珈琲・紅茶などとともに、日本では不可能な米の三毛作による収穫が期待できた。年間を通じて熱帯多雨の気候に恵まれ、それに生産栽培地は樹木に蔽われ未開のままで、しかも有り余る広大な土地は自然に培われた肥沃地であった。光瑞には寒地で不毛な満州と比較して、はるかに有望に思えた。

一五（大正四）年印度巡拝の帰途ペナンに上陸、側近の桂本瑞俊（二次探検隊員）にマレー半島（現マレーシア）の農産物特にゴム園事業の調査を指示していたが、その報告を受けた。

期待通りであることが分かると、直ぐに既成ゴム農園を買収、採液事業に着手した。この経営にかかわったのは桂本瑞俊である。ようやく軌道に乗りかけた一七年、英国は外国人への土地売買禁止令を出し外国人の事業を規制したことから、マレー半島事業から撤退した。

一九年外国資本の呼び込みに熱心で、土地開発を歓迎している蘭領東印度（インドネシア）の本格的調査を開始した。最初は香料諸島の中心セレベス島で、一七年から高地の農園を購入しており大規模開発を計画した。椰子栽培と椰子油製造・珈琲栽培・香料の抽出生産など幅広く手掛ける予定であった。しかし島内の交通便が悪くしかも大戦後の価格下落から、小規模にとどめざるを得なかった。生産された珈琲の一部は輸入され、日本国内に販売された。光瑞はセレベス島が気に入り、一八年に宿泊用として「耕雲山荘」を設けた。

南洋事業の中核となり資金を調達したのが「蘭領印度農林工業株式会社」（本社バタビヤ現ジャカルタ）である。総裁（社長）光瑞の下、農業部（桂本瑞俊）工業部（青木文教）商業部（大藤）調査部（広瀬了乗）の四部門に分け、その責任者に子飼いの側近を充てた。この陣容からも南洋事業に力を入れていたことが知れよう。

特に専務取締役の肩書を与えられ実質的に会社を取り仕切ったのが、チベットから呼び戻された青木文教である。南洋での事業実績はないが、印度・欧州での生活体験や何よりもチベット国ダライ・ラマ十三世の政治顧問として幅広く経験を積んでおり会社の要であった。

肝心の投下資金は主に宗主国の金融機関からの借入であったが、関東総督府や満鉄からも支援されたといわれている。また台湾総督府においても南洋への器具輸送な

ど便宜を与えた。中国東北部・満州・台湾における大谷光瑞の影響力が窺われる。

セレベス島で展開した珈琲・椰子油・香料などの生産開始が、第一次大戦後の経済恐慌により国際価格の暴落と重なった。そのため撤退を決断、すべてジャワ島に集約した。光瑞の南洋農業事業は蘭領ジャワ島の地で本格的に展開する。

ジャワ島東部スラバヤに二農園を購入、香料油（シトロネラ）・カポック（救命具原材料）・椰子（椰子油）の生産を開始した。この地を好み、一三年別荘「環翠山荘」を建設した。

光瑞独特の直観により、熱帯ジャワ島高地での新たな産業として始めたのが養蚕業であった。日本から農業技師と蚕糸技師を招き調査を依頼した。その結果日本では年三度しか繭は収穫できないが、当地では四倍の一二度ほど取れる。しかも蚕の飼育は病気せず容易である。飼料の桑は地味肥沃で日本と違い一年中発育旺盛で、桑葉はいくらでも刈り取りできることが判明した。

問題になると思われた養蚕と蚕糸の技術に関して、光瑞は「現地人の文化程度は高く人件費は低廉のため、うまく指導すれば同地の副業に発展する可能性がある」とみた。スラバヤでの養蚕試験は蘭領政庁でも注目され、バンドンやバタビヤの「共進会」に蚕と蚕糸を出展し注目を集めた。

南洋事業は多くの試行錯誤を経てすべてジャワに集約、ようやく熱帯特産の珈琲・香料に絞り、そして日本から技術導入した養蚕事業を推進する体制が出来上がった。これから南洋事業の成果が出るものと期待されたが、昭和に入るころから次第に撤収を余儀なくされた。世界大戦後作物価格が回復せず、しかも二九年秋からの世界恐慌発生によりさらに価格は下落し続け、事業経営が困難になった。新事業と期待された養蚕事業についても、大きな成果を得る前に綿糸の下落により採算に合わないものとなった。

光瑞の事業については、費用（コスト）の見方が常に甘いものであったと指摘する人が多い。当時光瑞の事業進出に対し、ひそかに「経済観念の欠如」や「惚れやすく飽きやすい」が囁かれていた。しかし南洋事業の失敗は、農産物の価格暴落に直面したことにあったことは間違いない。

新規事業には多くのリスクが存在しており、事前の事業調査が不可欠である。まして外国への事業進出には、国内以上の多岐にわたる調査が必要であった。南洋農業事業を次々に起業し、不調になると撤退を繰り返したが、投資のすべてが光瑞の決断に任されたことはあまりに無謀であった。青木・桂本・広瀬は極めて優秀な側近では

あったが、事業経営という観点からみれば、経験の浅い経営陣であったことは否定しがたい。

仏教一派の法主では時に独断は許されるが、会社経営となると間違った判断と決断は損失を招く可能性が大きくなる。光瑞研究家加藤斗規（大谷記念館研究員）は「大谷光瑞と南洋」（『大谷光瑞とアジア』所載）の中で、次の引用を載せた。

「元来大谷光瑞氏の如きは立派な人かもしれないけれども、財政とか経済の頭がまるでない。かねて光瑞氏はオランダ領で山を買って大きな別荘を建て、仕事を始めたが、非常に大きな金をオランダの中央銀行から借りて、とうとう払えず追っ払われてしまい、後から木村鋭一（外交官後満鉄理事）が行って後始末をしたようなわけで、あの方面では人に非常に迷惑をかけている」（『西園寺公と政局』）

結局南洋業進出は失敗に終わり、大きな損失を出したことに触れている。

マレー半島ゴム園事業から始まりセレベス島最後にジャワ島スラバヤでの諸事業は、結局すべて引き払った。世界大戦後の農産物価格の下落や世界恐慌という未曽有の経済情勢の中での相次ぐ撤退は、いずれも損失を生じさせたことは間違いない。

光瑞の南洋事業進出は多額の負債を残して終わった。

七七　トルコ事業投資

トルコアナトリア地方（アジア半島部）と呼ばれる地域は専制ローマ帝国から東・西に分裂した東ローマ帝国の流れをくむ、キリスト教徒のビザンツ帝国（首都コンスタンティノープル）であった。一四世紀アナトリア西部にイスラム教徒のオスマン一世が小規模な王朝を樹立、一五〇年間の内乱を経てビザンツ帝国を制圧、現トルコ領域に及ぶイスラム教徒国（首都ブルサ）なった。最盛期の一六世紀スレイマン一世の最大領域は北ハンガリー南エジプト西地中海沿岸アルジェリア東イエメンまでを領土とし、地中海の制海権を握るアジアとヨーロッパをまたぐ大帝国となった。しかし一八世紀から始まった西欧の産業革命に乗り遅れ、近代国家に脱皮できず衰退した。

一八七七年対ロシア・一九一一年対イタリア戦争・一二年第一次バルカン戦争（対バルカン同盟）に相次ぎ敗退した。一四年からの世界大戦では独・オーストリアの同盟国側に加わり敗戦国となった。独とはベルリン・ブタベスト・バクダートをつなぐ「三B鉄道敷設計画」の経済支援を受けていた。

大戦後中東シリア（シリア・ヨルダン二三年独立）・イラク（二一年独立）が英国軍に占領され、民族運動に

より各々独立を果たし国土は半減した。また帝国内のギリシア人・アルメニア人（北東部）・クルド人（山岳地帯）は独立国家樹立を目指し、中国清朝末期と同様、列強国から領土を奪い取られ、国内は内乱状態となる深刻な事態に陥った。

西欧大国と妥協するイスタンブールスルタン政府に不満を持つ軍司令官ムスタファ・ケマル（初代大統領「トルコ人の父」）が若者や知識人の賛同を得て一八八九年「青年トルコ党」を結成、祖国解放運動を起した。英・仏など連合国の支援を受けるスルタン政府と青年トルコ党との間で二〇年間にわたる内乱が続いた。二〇世紀に入り相次ぎ戦争に敗れ領土を失い国力を衰退させたスルタン政府は大戦後の二二年、遂にスルタン制の廃止により退位、その翌二三年一〇月共和国を樹立した。

トルコ革命と称されるこの勝利の後、ケマル大統領は新憲法を制定、主権在民・議会制を採用し民主主義国家を目指した。これまでのイスラム教の伝統である男性のトルコ帽・女性のヴェール着用禁止、西暦の採用、一夫多妻制の廃止など政教分離と世俗化政策を掲げ近代化に努めた。文字はアラビア語からラテン語に変更する文字改革を行った。疲弊した経済立て直しのため、国家主導の経済再建政策や民族資本の育成に着手した。

大谷光瑞がイスタンブールを最初に訪れたのは、ロンドン留学中の一九〇一（明治三四）年七月小アジア旅行中のことで、まだオスマン帝国の時であった。留学生薗田宗恵と堀賢雄の二人を同行してオーストリア・ハンガリーを経由、オリエントエクスプレスで訪れた。

最初の訪問では特段の感想は残していない。宗教と国家の関係について西欧諸国を視察していたので、中央アジアで仏教徒を駆逐したイスラム教徒の国トルコにも興味を抱いたのであろうか。またヨーロッパとアジアをつなぐ重要な交通要所のイスタンブールについて関心を持ったのであろう。当時オスマン帝国の首都として歴史あるモスクが林立し、多民族が混ざり合うイスラムを代表する有数の商業都市であった。

中国仏教の再興を目指しまた南洋事業に着手して多忙を極める光瑞であったが、建国されてわずか三か月後の二四年初め突然トルコ産業事情の情報を発信し始める。二月実業界の指導者を対象にした大阪の講演会で海外農業関係の有望投資先に、バルカン半島とトルコ地方は「非常に面白くなる」として投資を勧めた。

さらに大阪商工会議所が主導した「日土（トルコ）貿易協会」の設立に尽力し、発足名簿に名を連ねた。

取材記者たちに「皆さんはまず売ること（輸出）を考えるが私は買うこと（輸入）考える。今度買うべき棉・羊毛を見に行きますが、買うべきものは仲の良よい国から買うのが当然だから」と話した。自らも主産業の農業や輸出入手続きを調査するため側近を向かわせ、トルコ語修得のためイスタンブールに留学生を派遣した。

日本と仲の良いとしたトルコとの関係で見逃させないのは、トルコ軍艦遭難事件である。一八八七年小松宮彰仁親王が同国を親善訪問したことから、九〇（明治二三）年オスマン帝国軍艦エルトグロール号を返礼のため日本に派遣した。九月使命を終えトルコに帰国の途中夜暴風に会い、和歌山県樫野崎（串本橋杭岩沖）で岩礁に激突沈没した。串本住民による必死の救助活動が行われたが、生存者は乗員六〇〇余人のわずか一割六九名であった。救助者は明治天皇の勅命により軍艦金剛と比叡に乗せ送り届けることになり、九一年一月首都イスタンブールに帰国した。

その一年後国民から五千円を超える募金を集め、亡き家族に贈られた。トルコ国民は遭難者の救助活動・明治天皇の手厚い扱い・被害者家族に対する日本国民の温かい支援に対し、アジア最東端日本人に感謝するとともに、アジア最西端トルコ国民との間に特別な感情が芽生えた。

こうした経緯から、多くの日本人はトルコに対し好感を持った。遭難事件時光瑞は十四歳になっており、学習院を退学共立学校に転校した年で、この事件のことはよく覚えていたと思われる。

一九二六（大正一五）年二月光瑞は神戸から西欧旅行に出発、三年前共和国制を宣言したトルコに先ず立ち寄った。光瑞が勧めたトルコ・バルカン半島・黒海方面への進出を目論む大阪商工会議所からの依頼でもあった。

四月二度目の訪問となったイスタンブールに到着、約六週間トルコに滞在した。その間投資家としてアナトリア地方の気象・土壌から農業事業の現状および発展性について、自ら足を運び視察をした。訪問したのは新生トルコ共和国の新都アンカラ（古代ローマ時代からアナトリア地方中心地）と古都ブルサ（オスマン帝国初期首都）であった。

アンカラは大陸性気候で年間四〇〇ミリと少雨であるが、春・秋は比較的雨量に恵まれ、土壌は沃土であることを確かめた。ケマル大統領には会えなかったが、農務大臣や外務大臣と面談した。特に農相とは数度懇談し、大臣から農園事業投資の依頼受けた。光瑞からはトルコ政府の支援を依頼した。

古都ブルサは地中海性気候の温暖な気候に恵まれ、桑の栽培に適し古くから絹糸産業が発達していた。ここでは現地の農業学校や絹糸実験場を視察した。この視察について『大阪朝日新聞』に二度にわたり掲載され、前編では「邦人の注目すべきトルコの農産業」と題し、日本が力を入れている満州・内蒙古と比較して「気温は高く

太陽光も強い。地形は似ているが広大で利用されない放牧地が多く、土壌は稀有の沃野で揚子江下流の平原とも遜色ない」と高く評価した。邦人の棉花栽培地として絶好無比の地であり、葡萄・桜桃・無花果・柑橘などの果樹生産はトルコ人の低廉な労力を利用すれば米国カリフォルニアにも勝る地とした。

後編では「トルコの農産地と資本投下の方向」との見出しで、「現地の棉花生産には問題はなく、米作は日本の温帯米種をもって栽培すれば、タイ・緬甸・ベトナムなどの熱帯米よりうまくて有望である」と語り、現在出資を検討しているとの談話が掲載された。

光瑞は新聞を通して、日本の実業家や投資家たちにトルコ農業事業の優位性を説いた。世界に誇るカリフォルニア農業地帯や揚子江下流肥沃な平原に劣らず、日本の耕作技術の導入により競争に勝てると推薦した。

二六年一〇月欧州からの帰途再びトルコを訪れた。古都ブサラでの棉花事業の見極めと新都アンカラでのケマル大統領と共同農園事業の契約のためであった。この合弁事業はケマル大統領五一%・光瑞四九%の出資割合とし、アンカラ郊外で付加価値の高い「香水」（バラ・ラベンダー）を生産するものであった。早くも二七年秋に工場を完成させ事業を開始した。この経営参加のため側近や学生約一〇名が派遣された。

ケマル大統領との合弁事業は、開設直後の日本大使館にとって大きな出来事であった。合弁の相手が国民から高く支持されているケマル大統領ということも特筆すべき事であった。外国資本導入第一号となった光瑞の動向は日本大使から外務省に詳しく報告された。この外交文書により合弁事業の概要が明らかとなった。

義弟に当たる大正天皇崩御の報に、中国に立ち寄らず二七年一月神戸に帰国した。すぐに大阪毎日新聞記者の取材を受け、「極めて優良なトルコの棉花」の見出しの記事になった。近東貿易では輸出は駄目で、トルコ棉花と日本の綿糸をかけ合わせればマンチェスター製品ぐらいの細手優良製品になろうという内容であった。

トルコの政治経済の状況については、ケマル大統領は建国の英雄として全国民から圧倒的な支持を受け、政教分離政策をとり農業を中心とする内国産業の開発に全力を挙げていることを話した。トルコ新政権への期待が読み取れる。

翌日大阪朝日新聞には「農業立国のトルコ」の見出しで棉花羊毛が特産で、エジプト産に次ぐ世界最上位級の上質な品質で極めて有望と語った。トルコ政府は欧米からの投資には厳しいが、日本からの投資は特別の厚意を示している。現地日本大使館も支援しており投資対象として面白いと語り、トルコ向け投資を積極的に勧めた。

当時トルコ共和国の政治経済産業事情を知るものはおらず、既に三回実見ししかも大統領との合弁事業をまとめた光瑞の記事は、日本政界や実業界に注目された。光瑞を取材する新聞社は多く、翌日には光瑞の写真入りで大きく報道された。

二八（昭和三）年夏から光瑞は五度目の欧州旅行に旅発つ。無論上海や蘭領印度で南洋農業を本格的に立ち上げていたスラバヤを経由した。欧州では英・仏・伊・蘭・瑞（スイス）・白（ベルギー）などを遊覧後、帰途四度目のイスタンブールに赴いた。今回は大統領との共同事業は開始したものの水不足や冬の寒さにより難渋しておりその視察と、ブルサの現地有力人との新規合弁紡績事業による工場の完成式典に参列するためであった。

紡績工場は糸・布・染料・光沢部門を備え、織機は仏、その他は英の最新機械が持ちこまれ世界に誇る紡織工場であった。工場には日本技術者を派遣し駐在させた。問題は遠距離にある日本に輸入するとしても、安価な日本製品と競争ができるかであった。

両事業ともその土地の気象に合った生産物であり、合弁相手にも問題はなく、しかも最新の設備を備えたものであった。しかも政府の協力が得られたので、事業の船出は良好といえた。

工場が立ち上がって直ぐ、二九年一〇月米国ニューヨーク株式市場で株価の大暴落が発生した。これが引き金となり、第一次世界大戦から一〇年間世界経済を牽引し謳歌してきた米国経済は、一挙にこれまでの過剰生産設備を露呈した。一方労働者の低賃金と農業不況による購買力低下から、工業生産・商取引は大きく落ち込み販売・生産価格は暴落した。米国にとどまらず、世界各国に波及、世界恐慌に陥った。

この直撃を受けたブルサ紡績事業は操業停止に追い込まれ、三〇年五月わずか半年で共同事業は終了した。アンカラの農園事業も二～三年後には解消となった。光瑞の慧眼でいち早くトルコへの事業投資に乗り出し、「トルコの父」と慕われる大統領や地元資本家との事業相手にも恵まれたにもかかわらず、まさに時の運に見放された。事業家光瑞にとっても残念な結果となった。

問題はなぜ光瑞は船で一か月もかかるアジア最西端かつイスラム教徒国トルコに関心を持ち、しかも事業投資までしたのであろうか。如何に両国民が親善友好関係にあったとはいえ三五年前しかもオスマン帝国時代のことであり、これが光瑞の関心を高かめたとは考え難い。

これまで大谷光瑞が「日本人としてトルコへの関心を最初に持ったのはなぜなのか」について、研究家はその要因を解明できなかった。この謎に有力な見解を出した

のが、トルコ人学者で日本に留学、龍谷大学で光瑞の研究を続けてきたヤルチュンである。

「大谷光瑞とトルコ」(『大谷光瑞とアジア』柴田幹夫編)の中で、「光瑞の新生トルコ共和国の応援を吹きこんだのが、あの孫文である」と指摘をした。その根拠として二四年一一月神戸における孫文の「大アジア主義」の講演における次のくだりを挙げた。

「日本はアジア東方の完全な独立国家であります。わがアジアにはそのほかに、欧州大戦当時、かつて同盟国の側に加担し、一敗地にまみれて分割されていたが、大戦ののち、ふたたびヨーロッパ人を追いはらい、現在では完全独立の国家となった国があります。その国はトルコであります。

現在アジアには二つのもっとも大きな独立国家がある。東は日本であり、西はトルコであります。日本とトルコは、アジアにおける東西の二つの大きな防壁です」

孫文はトルコ革命で完全独立国家を成し遂げたトルコを、大アジアの視点から見ると東の日本と共に欧米からの侵略を防ぐ防御壁になるとして、トルコ共和国の発展に希望を託している。

光瑞は上海在留中二人で煩瑣に会っており、この孫文の考えは話し合ったはずである。孫文は政治家・革命家の立場から、光瑞は仏教復興の視点から論じ合った。二人の議論を通じてトルコの重要性が認識され、光瑞にトルコへの関心が芽生えたのではないだろうかと指摘した。

光瑞は孫文に同調し、欧州列強国からアジアへの侵略を防ぐためアラブイスラム教国の中心であるトルコ共和国の自立発展に期待し、トルコ共和国に関心を持つに至った。長い内乱を経て共和国を樹立して間もないトルコ共和国を日本から支援を行うことにした、というものである。

確かに魅力的な説である。

七八　支援団体

明治末期から昭和の終戦にかけて大谷光瑞ほど世界各地を見聞した日本人はいない。

広大な中国は北満州北部から南は香港まで、内陸部は西安および成都まで幾度となく訪問した。東アジアでは北シベリアウラジオストク、朝鮮からマレー半島・シンガポール蘭領ジャワ島・セレベス島まで広範囲に及んだ。そのほか南方ではベトナム・緬甸・セイロンそして印度はほぼ全域にわたり巡遊した。最西端トルコには計五度訪問し農業・紡績合弁事業に携わった。西欧には四度の長期間滞在を果たし、西欧主要都市の大半を歴訪した。またフィンランドの北極圏、南はエジプトナイル河上流まで踏破している。

三回目の欧州旅行では東回り航路で、ハワイ米国カナダを訪問した。

第一次探検ではロシアを縦断、カスピ海からはロシア国境沿いを横断、中央アジアから高峻なパミール高原を乗り越え、タリム盆地シルクロードのオアシス都市まで入り込んだ。まさに地球的視野で語れる人物であった。

訪問地では鋭い視点から視察しており、国や都市の抱える問題点を把握した。関心は宗教にとどまらず、政治体制・行政機構・経済状況・産業動向や地理・気候・交通体系・名産や料理まで豊かな知識を蓄えた。また南洋農業に関わって以来、経済・実業界に対して幅広く斬新な視点から積極的に発言した。

光瑞を長く支援してきた徳富蘇峰は、その幅広く豊富な知識と先を見通した鋭い洞察力を高く評価し、日本での講演を依頼することが多かった。

光瑞は辞任後中国に渡ったが、時局講演や経典・教義など宗教講義の依頼が多く、辞任後五年を経た一九年から年数度は帰国しこれら要請に応えた。

『大谷光瑞年譜』からは、一九年毎日新聞社主催「西および南に於ける日本人の発展策」二一年国民新聞社主催「時局講演会」二四年同社主催「海外投資」同社主催「支那時局問題より対支四大方針について」など散見される。

中国での滞在が中心になると、在留邦人から宗教講演会の依頼が多くなる。特に中国に渡った軍人・兵士、会社幹部、移民およびその家族からの要請が相次いだ。光瑞自身教線拡大につながることから積極的に応じた。帰国し中国での生活が軌道に乗る一七年からは、日本が押さえている満州や関東州の宗教講演会に招かれ、浄土真宗最高経典「大無量寿経」などの講義をし始めた。

この間最も光瑞を支え、著作刊行を支援したのが「光寿会」である。一九(大正八)年「国家宗教に貢献するため光瑞指導もとに各種の研究・講演・出版を行う」と定め光寿会が結成された。光瑞の教線拡大を支援するとともに、遠大で深遠な仏教の普及・拡大を図るものであった。当初光瑞が一六年印度シムラでの本格的な梵語習得と原典の研究をもとに、梵語原典の翻訳や出版を始めた。

本部は生活の中心としていた上海におき、光瑞の著作活動を支援しその出版事業を行った。責任者にはチベットに派遣した側近の青木文教を据えた。青木は幅広い経験を積んだ光瑞の信頼厚い側近であり、南洋農業事業会社の実質責任者であった。教線拡大を目論む光瑞の著作を出版する部門を任され支え続けた。

光寿会は信徒の多い上海のほか、大連に支部ができた。後には日本でも京都・大阪・東京に支部が置かれた。

光寿会は出版部として大乗社を設け、月刊機関誌『大乗』(編集長岡西為人・在家安芸門徒・武庫中学出身側近)

を創刊した。機関誌を通じ「無量の法光を全世界に普及させる」目的であった。この大乗社から光瑞が梵語経典を邦訳した『国訳一切経』全一五五巻がある。また『大谷光瑞全集』全一三巻『大谷光瑞興亜計画』（全一〇巻）を出版した。

光瑞の研究出版活動を支援する光寿会員に対し、各支部で講演会や講義に赴き寄付を仰ぐ会員に酬いた。『寺史』では五千余人の会員が集まり光瑞の研究活動を支えたと記している。同本部は光瑞の生活する身近な都市におかれ、上海から二五年大連へ、そして二七年（昭和二）年には京都伏見（三夜荘）に移した。

二九年一〇月ニューヨーク株式市場の株価大暴落に端を発した世界恐慌は、たちまち日本経済におよんだ。二三年関東大震災や二七年金融恐慌などが重なり国民を不安に陥れた。

先の見通しができない中、宗教に精神的安心を求める声が強まる。まず京都の行政高官・実業家たちから、「お西さん」と慕われる西本願寺の前法主光瑞に、「日中関係」などの時局や世界の政治・経済動向さらに仏教講話を拝聴したいとの要望が寄せられた。

一九三〇（昭和五）年「光瑞会」創立発起人会が京都で開催され、京都府知事・京都市長をはじめ約五百人が出席した。日本国内では大阪・富山に、中国では大連にも結成され、年に一度講演会を開催した。幹事一二名評議員五五名の大規模な団体であった。

講演会は数十年先まで予測し幅広い博識と自らの目で見たことを遠慮なく素直に話すので、いつも多くの人を集めた。

このほか京都に「三夜倶楽部」ができた。京都在住者が時事問題や趣味の陶芸・料理・花木など話し合う肩の凝らない座談会で、少人数の打ちとけた会であった。大谷家別邸三夜荘で開催されたので会の名称となった。

三夜荘（木戸孝允命名天・宇治川・盃の三夜）は伏見区桃山丘陵南西端の宇治川が望める景勝地にある。一八七六年光瑞の父光尊が建て、皇族や賓客（探検家ヘディン・山県・西園寺）が宿泊した。

光瑞は法主辞任後帰国して京都に戻る際には、本山には滞在せず三夜荘で寝起きした。本山には現法主光照の後ろ盾「保摂会」会長の弟光明（法主代理）や尊由がおり、三五（昭和一〇）年からは東京帝国大学を卒業した二三代勝如上人光照が常駐していた。その他宗派の執行長ら幹部が末寺の監督指導を行っており、宗務の妨げにならない配慮をしたのである。

七九　興亜計画

大谷光瑞は一九三九（昭和一四）年から四〇年にかけて『興亜計画』を発表、光寿会の大乗社から全一〇巻を出版した。一～四巻は支那の水利・水運、四巻の後半部は欧亜鉄道計画、五巻近海港湾計画、六～九巻熱帯農業、一〇巻支那物産誌である。各巻は二〇〇頁を超え、これまでの知見と側近青年僧の探検報告から得た情報を集大成した畢生の大作である。

この『興亜計画』に至る前の二三（大正一二）年『支那論』を上海で書き上げ、徳富蘇峰の民友社から発刊、中国の現状を日本人に伝えた。

中国の国内情勢は日本からの「二一カ条要求」に端を発し、その撤廃を主張したパリ講和会議後の「五・四運動」は、北京から全土に拡大し、反日運動に発展した。中国政治は混迷を深め、張作霖ら北方軍閥、孫文・蔣介石が率いる国民党、二一年に結成された共産党が割拠しており、第一次国共合作前の混迷した情勢にあった。

この中で「最近の支那（中国）の状況は殆んど言うに忍びざるものあり。紀綱弛廃・桀驁威擅（悪者がほしいままに振舞う）・盗賊横行・政令不行により居民一日の安きなし。然れども支那国民自ら招ける禍にして、如何ともすべからず。この根底にいわゆる匪があり五種類あり。官匪（職権乱用）・軍匪・政匪（金銭欲を優先する無能な政治家）・学匪（暴動を扇動する学生）・盗匪（盗徒）である」（一部略）と、辛亥革命後一二年経るが、腐敗混乱ぶりはむしろ清朝治政下よりひどい状況にあるとした。こうした情勢の中、中国救済策を提言する。

第一に強大な中央政府の設立と外国の援助をもって統一する。次に連省自治の実施、第三は青年に新教育を施し旧来勢力の駆逐により民主国家を建設する。

しかし第一項は匪の勢力を借りて匪を治めると同じであり、第二の連省自治構想については国民性として自分の私権のみで動き離合集散を繰り返すので実現は難しく、第三は私利私欲を最優先させるので新教育も効果はない、と救済策のすべてを実現困難とした。

最後に最も切実な日本居留民の生命財産を保護するための策として「居留民から義勇軍を募り、完全な武器を与えて学・盗匪から自衛する」ことが得策とした。陸海軍の出動には「利少なく費用膨大」であることから、絶対に不可とした。

中国国内の内情をよく知る光瑞は、日本から陸海軍を派遣しても、広大な中国では効果は限定的であり、一方費用は莫大になると断じた。

光瑞の『支那論』は一四年年後から始まり泥沼化した日中戦争を既に冷静に見通していた。

『支那論』から一〇年後、さらに思索を重ね機関誌『大乗』で逐次発表してきたものをまとめ『興亜計画』とし

て出版した。中国に住まいを構え視察と生活体験を積み重ね、これまでの構想を拡大・深化させ集大成したもので、計画の具体化・精緻化を図った。

巻頭の「自序」は次の高邁な文章から始まる。

「軒轅（註解史記古代帝王黄帝名）以来四千五百年、文質炳煥（外観の美と実質とが光かがやくこと）たりと雖も、大運數ば興廃せり。四時気序變和（気候がやわらぎて程よきこと）すと雖も、唐水殷旱（唐代の水害、殷代の旱魃）其例乏しからず」

古代中国史や司馬遷『史記』を理解していないと原文に註解はないので難解である。戦前の知識人には容易に判読できたものと思っていたが、京都帝国大学『史林』上で浅井得一（三六年地理学卒小牧実繁ら大東亜地理学派）は、この自序について「極めて難解なる字句を挿入する癖があって、殊に序文の難解にして怪奇複雑なるは、初学者をして目を瞠らしむる。衒学（学問のあることを他人に見せびらかすこと）癖とも云うべきか」とわざわざ記している。当時でも中国史や漢文を修めた学者でなければ、すぐには理解することは難しかった。もっとも「自序」を除けば、浅井が指摘しているように「行文また大谷氏一流の極めて簡なれども要を得たる、読者をして倦まざらしむるもの」であり分かりやすい。

「自序」では、先ず『史記』による神話伝説の三皇五帝から四千五百年の中国の歴史を振り返る。その上で一七世紀以降ヌルハチ（太祖）が建国した清朝は、三代英主康熙帝（聖祖）の時には「唐時の盛に回す」ほどの領土を拡大した。三世紀を過ぎ内憂外患が襲い遂に易姓革命が起こり、中華民国が誕生した。しかし現在住民は「二十余年一日も安なし」の状況であり、「政誤り」人民は従わずに悪口を言い合っている状況であるとした。

混迷が続く中国の政治体制について、光瑞は古代からの治世の要諦を掲げる。

古代神話の堯・舜の時代より、「九川を決し（堤防をえぐる）溝を浚い水土を平定し舜や禹は、庶民に鮮食を奏む」さらに「政は民を養うに在り、民を養うは徳を正し用を利し生を厚くするにあり」と総括した。

そして中国治政の要諦は、まさに「治水に在り」と結論し、中国の再興策について提言する。

第一巻では「支那の将来に於ける施設」と題し、支那（中国）の「将来に関する百般の計画施設」を根本的に再検討し、政綱・軍事・産業・財政について大胆な提言をしている。そしてこの提言を日本は国を挙げ官民一体となって指導・支援することが必要とした。

古の「悪政は無政に勝る」から「政綱立たざれば民その帰する所を能わず」として、政綱を最も重要な課題に挙げた。一〇年前の『支那論』でも掲げたと同じく、新しい政治行政の統治体制を「数個の自治邦より成る連邦政府」とすることを提言する。

州は漢民族四自治邦すなわち北（北支）・東（黄河中流以東）・西（湖北・南・四川・西康など）・南（福建・広東・雲南など）と外周の蒙（内蒙古）・回（新疆・甘粛一部）・蔵とする。検討するのは外蒙古・満州は既に独立したため除き、蔵（チベット・青海）は日本の支援を受けるには僻遠過なので除外して、当面六自治邦により連邦を組織する。

このうち中国四自治邦は明から始まり清朝で確立したこれまでの省を単に統合するのではなく、「分水嶺と大河および交通系統」により新たに定めることを主張する。これまで伝来の二〇余省は歴史的なものであり、規模・人口・生産高・貧富など大きな格差がみられる。そこで強力な中央政府が統率し新たな概念で省を再編成し直した上で、数省を合わせた州の自治により連邦の妙用を期待する。

驚くのはわが国でも現在論じられる地方分権のあり方である。「連邦政府（中央政府）は外交に専念し、自治邦（地方自治体）の内政には干渉しない」とその役割を明確にした。日中戦争期中央政府の権限が一層強化されたこの時代、光瑞の発想には驚くほかない。

連邦政府の政策・立法は自治邦より選出の代表と行政院選定の人員により構成される参議院（国会）の承認を得ることとする。

行政の要諦は「民をしてそのところ安ぜしむるに在り」とした。紀綱は「実業の奨励」にあるとして、産業第一主義を立法する。そして中国四千年の歴史が証明しているように、「産業は農を先とする」とし、試験場・気象観測所を充実させることを提案した。

農産は米を第一とするが、麦と棉の重要性を説く。畜産では豚・羊を主力とした。水産は日本の食文化の普及が必要で、漁獲方法・器具については日本からの支援を受ける。林業ついては植林を主張する。

鉱産は世界一の資源を有するが、場所が正確でなく交通の不便さと匪賊の横行により未開発のままであると現状を嘆いた。言外に治安の安定と交通網の整備により開発すれば、将来の大きな国家財産になるとみている。

工業は全く幼稚であり日本から完全な設備と熟練の技術を持ち込み、中国産と外国産の原材料を組み合わせ品質を向上させ工業の振興を図るとした。そしてこれは日本人の果たすべき義務とした。中国人に技術を習熟させ日中が協力して中国経済を発展させることが、「共栄の大義」であるとして日本からの技術指導を働きかける。

次に交通である。通行税は悪税であり絶対に認めない。然るに日本が占領している区域ですらこの悪税が徴収されており、日本政府の黙過を厳しく批判する。費用は掛かるが運河の建設により水運を優先させ、排水・潅水を

同時に行うことで皆の大きな利益となると提案した。

財政については古来治平時は財政が豊かであり、内乱時は必ず不足する。現今軍閥専横と国民党の悪政により不足の状況が続いている。内乱のため二百万人の大軍を養っており財政悪化の主因である。満州・上海両事変後国・共両党が日本に挑戦していることが財政欠乏の遠因である。新政府は国防治安以外の兵を返し、実業を奨めば財政はたちまち健全化するとして、日本との協調・融和を勧める。

問題なのは徴収した税が途中で官吏などに搾取され、国家に入るのは一～二割に過ぎないことである。これを厳禁し重罰に課すべきであると提案した。中国の内情をよく知る光瑞ならではの指摘であった。

税は、中国人は所得にかける直接税を好まず、間接税を忍ぶので、極力「直税を避けるべし」とした。

総括してこれまで述べた「支那に於ける施設（政治統治体制・経済財政体制」を日本帝国官民一致して指導に当たり、諸提言を実行すれば十年以内に強国となり、日・満・支を一にするアジアの大同盟になると自信を示した。

光瑞の諸提言は日本の占領地と満州独立を前提になされており、到底国・共両党や人民を納得させるものではない。しかし中国指導者以上に、連邦制から始まる統治体制・産業・交通・財政・租税までを新たに提言した。

中国の発展をひたすら願い、具体的な分析・実行計画と緒提言はこの時期極めて貴重であろう。

次に「夫れ、国を建つるや首都なからざるべからず」として、「新首都は人心を一新」すべきため、首都論を展開する。この新首都決定過程は前例にとらわれず、実に多岐にわたり合理的に考察している。

まず首都としての要素に次の十条件を掲げる。

第一　全国の中心たる地位
　　地図上でなく人口疎密・山川・交通利便を考慮
第二　気候の温和　厳寒、酷熱、過旱、過湿は回避
第三　交通利便　水運を重視、鉄道は後敷設する
第四　丘陵が含まれる地勢平闊（平らで広大）
　　大都市建設は平闊な土地と園林遊眺が必要
第五　豊富な用水　水無くしては都市なりたたず
第六　土地は豊穣で農産物が豊富
　　大都市の消費を賄える農産物生産地
第七　火力・水力（発電ダム）の動力供給
　　熱源（石炭）、水力源に近距離
第八　風光明媚　山光水色秀絶は人々に安心を供す
第九　海に至近　海は全世界への交通路
第十　居民稠密地　建設初期には大事

この条件から多くの人が候補に挙げる三都市を評価す

る。北京は一・二項零点、三項半減、五・六項三分の一減、九項四分の一減または渤海の築港未成により三分の一減、四・七・八・十項満点として評価した結果、五五点になる。同様に採点すると、南京九〇点、武漢八二点である。

次に一部の知識人が候補とする三地を採点する。山東省済南七三点、徐州八〇点、開封五〇点である。

高評価の上海ほか揚子江下流域の候補地を採点すると、上海九二点、蘇州（太湖東沿岸）九六点、杭州（上海西南一七〇キロ東シナ海沿岸）九一点、蕪湖（南京一〇〇キロ上流）九一点である。

上海市内は既に乱雑に開発されており、十余キロ郊外の海港がある風光明媚な呉淞江が適地である。蘇州は海港から遠距離であるが、有力な首都候補であるとした。

首都と目される主要都市を、客観的ともいうべき採点による判定方法はこの時代では目新しい。

しかしここからの進展がいかにも光瑞らしい。上海や蘇州よりもさらに好適地として、無名に近い「長興」を新首都に推す。

長興は太湖の西端に位置し海港から遠いという欠点はあるが、そのほかの項目は満点である。太湖の沿岸に大型船用の築港を建設、揚子江とは太湖を浚渫、運河を建設し連絡する。揚子江の増水時対策として太湖の水量を調節するための大閘門（水門）を建造すれば、調節は可能で下流域の水害・洪水対策にも役に立つ。

水害を守るのは堰堤と疎通である。支流に水力発電所を建設すれば動力源としても最適である。疎通には幅四〇〇メートルの大運河を浚渫し、その土で新都市をかさ上げする。具体的かつ細目にわたり検討し新首都を提案した。そして本格的海港は良港と云えない上海ではなく、南の杭州におくべきとして「杭州海港築港図」まで作成した。

新首都候補地長興については「日支両国の識者にこの無名の地点を以って、新支那の大首都と奠むべきことを敢て勧告する」と言い切った。

光瑞は一九三二（昭和七）年日本主導で建国した満州国新都長春を「長興を提言したような詳細な比較検討を当時行ったのか」と問いただし、新都決定には大いに疑問であると批判した。

光瑞は上海から揚子江下流域を「旅行」「漫遊」「巡遊」「遊ぶ」と称して何度も訪れたが、ようやくその真意が判明する。光瑞はひとえに新支那発展のために、自ら足を運び確かめながら計画を具体化させたのであった。揚子江下流域の新首都候補地は、自ら実見してきた上での全く新しい主張であった。

これほど多方面から検討し、しかも合理的手法で提言した者がいたであろうか。

八〇　揚子江水利計画

次に堯・舜帝の時代から支那治政の要諦は「水利にあり」とし、揚子江・黄河・淮河・珠江など主要河川の水利・水運について具体的提言をしている。

圧巻は「揚子江の水利計画」である。その詳細な調査と提言は他河川の水利計画を圧倒する。

まず次の区域に分け、各々具体的な提言をする。

第一段　蕪湖（南京南西百キロ上流）より漢口まで
沿岸都市蕪湖・漢口・武昌の築港と沿岸改修

第二段　漢口より宜昌まで
漢水の新開・宜昌都市計画

第三段　宜昌より重慶まで
第一・第二堰堤および嘉陵江堰堤の建設

以下中流域を一一段に区分けし、一六堰堤までの建設とその効果を提示する。

さらに支流四川省岷江・嘉陵江、貴州黔江、湖北省漢水、湖南省湘江・沅江のおよび江南省贛江などの水利計画として、航運・堰堤・運河・連絡隧道・連絡道路を提言した。

実に詳細かつ具体的であり、地理・気象・土木建設の専門知識が縦横につぎ込まれている。

光瑞の眼目は「宜昌より重慶に至る」第三段である。この間には「三峡（宜昌から上流二百キロにある三大峡谷の総称）險なり。夏冬の水位は著しく差あり」とし、長期観測の結果とする次の水位を提示する。

宜昌　水準面から冬季四一メートル低位夏季一六メートル低位
重慶　水準面から冬季一八六メートル低位夏季二三メートル低位

この両都市の夏・冬季の水位差をもとに、宜昌に大堰堤を造り峡間を平面の湖とする。そのためには冬季渇水期では宜昌と重慶の差は一四五メートルであるから、一五〇メートルの高堰堤を築けば重慶・宜昌間は完全に水平となる。しかし夏季大増水期一六メートルを加算すると一六六メートルになり、高さ一八〇メートルの堰堤にしておけばなお一四メートルの余裕が生まれ、非常の降雨にも安全に洪水阻止が可能とした。

一八〇メートルの高堰堤は果たして建設可能であろうか。この疑問に対し、光瑞は米国ニューディール政策によりコロラド河に建設された堰堤（フーバーダム一九三一年着工三六年完成高さ二二一メートル貯水量四〇〇億トン最大出力一三五万kW）の建設事例を出し「なお四〇メートル低く、彼らして能ふべく我にして能はざる理なし」として、建設には問題ないと断言する。

高堰堤の建設位置は極めて重要であり、地質・土壌を充分調査する必要があると警告した。「然れども最重要は地形なり」として、調査地は現在日中の戦闘地域であり調査が不可能なので地形のみから判断する。その結果最狭部は江幅二〇〇メートルであるが、四五メートルの水深でかつ両岸絶壁なので工事が難しい。それ故少し下流の江幅千メートルのところに三つの岩嶼（小島）があるのでそれを支柱代わりとして活用する。さらに工事の準備・作業所の空地確保にまで言及した。



宜昌付近海図
「国立国会図書館デジタルコレクション」

この高度一八〇メートルの堰堤（ダム）からは三千万kWが得られると試算している。発電所はこの直下に建設する。

そして問題の上流重慶行き貨物船の連絡はどうするかについて検討を加える。これも詳細である。

上海の河口から一万トン級貨物船で宜昌まで運搬してきた重慶向け貨物を、船が待つ一八〇メートルのダムの上までどのような方法で引き上げるかである。一つは貨物を鋼索により引き上げ、人造湖の貨物船に積み込む。次は階段式開閉方式を採用し、載積貨物と船舶を直接運ぶ方式（現行方式）。ただし工事費は鋼索方式より数十倍かかる。三番目の方法は鉄道により左岸に迂回して荷物を貨物船に積み込む。四番目の方法は右岸にトンネルを造り、湖の側まで運び鋼索か開閉方式で積み込む。何とも用意万端である。

この高さ一八〇メートルの堰堤は長さ二千メートル（フーバーダム全長三七九メートル）になり、厚さは計算する必要があるが少なくとも二〇〇メートルを下らない見込みである、としてアジアにおける最大工事になると予想した。工事費は堰堤で二億元、発電設備を入れると三億元と見積もる。三億元としても発電量三千万kWであれば一kW十元の建設費に過

光瑞が明らかにした一九三九（昭和一四）年から五〇余年を過ぎた九二年、全人代で中国政府は光瑞の計画通り宜昌に三峡ダム建設を正式に決定し翌年準備工事が着工、以後計画通り進んだ。

九四年　第一期工事（右岸発電船舶閘門部）着工式典
九七年　一期完成第二期（中央放水部）着工
〇三年　二期完成第三期（左岸発電部）着工貯水開始
〇六年　三峡ダム本体堰堤完成
〇九年　全プロジクト完成
一二年　発電所全面稼働開始

完成した三峡ダムの概要は次の通りである。

ダム堰堤高さ　一八五メートル
最高水位　一七五メートル
堰堤の長さ　二三〇九メートル
発電容量　二二五〇万kW（七〇万kW三二基）
年間発電量　一〇〇〇億kW（一四年九八八億kW）
総工費　二〇〇〇億元（三兆円）
強制移住者　一二七万人

三峡ダムは光瑞の構想通り、実に七〇年目に完成した。ダムの建設場所は光瑞が「地質調査」したうえで決定すると記したが、計画した場所は地質が脆く少し下流に決まった。完成した三峡ダムの概要をみると光瑞が堰堤の

ぎないと主張し、「低廉無比の発電力」として建設工事の着工を促した。

建設反対論にも準備している。三千万kWが多大過ぎてその用途を危ぶむとの論には、中国の真ん中に当たり一二〇〇キロの半径のなかに、北京・上海・広東・雲南・成都・蘭州が入り、三千万kWと雖も小規模に過ぎないものである。この規模に驚くことは「斥鴳の大鵬を笑う（斥鴳＝せきあん）」如きとして封じ込めた。

さらに根強い反対は、四千年を誇る中国の歴史を物語る名所・古跡が湖底に沈むというものである。特に三世紀三国時代の魏・蜀と呉との「夷陵の戦い」の戦場であり、また張飛廟は水没する。敗北した劉備が最期を遂げ、また李白の代表作「早発白帝城」を詠った名高い城は、絶壁の半島から平凡な小島に変貌してしまう。これに対し光瑞は経済発展の利点のほうがはるかに大きいと断言した。

ダム完成により、安価で大量の電力を供給するとともに下流域の水害を大幅に減じられる。一方水不足に悩まされている北方部への供水が可能となる。しかも宜昌と重慶の間は水平な湖となるので、下流から重慶まで一万トン級の大型貨物船が運航可能となり、内陸部の発展に大きく貢献することを重ねて強調した。

高さ一八〇メートル水面一六六メートルとしたが、堰堤五メートル水面九メートルほど高くされている。貨物のダム水面上までの移動については費用が掛かるとして採用を見送ったが、効率的な五段式水門方式を採用した。

ダムの建設は光瑞が当初から懸念したように一三〇万人近くの住民立ち退きと歴史的遺跡・風光明媚な大峡谷の破壊に強い反対が起こり、長らく賛否に別れ百家争鳴が続いた。

共産党のもとで五〇年調査開始五六年完了、六三年着工方針が提起された。その後下流域に大洪水が発生したが、文化大革命や中ソ対立の激化などにより計画は中断した。この間も推進派と反対派に別れ、論争が続いた。

八〇年台になり高度経済成長により資金難が解決できるめどが立ち、九二年全人代に再度諮られた。全会一致が通例であったが、三分の一が反対するという異例の採決となった。日本のダム建設反対運動を顧みても民主主義国家であったなら、自然破壊・多人数の強制移住により実現にはさらに長期間を要したはずである。決定すれば着工まで僅か数年を要したのみで、共産党一党独裁国家ならではの進行であった。

三峡ダム建設構想は、一七年から二一年にかけて発表された「建国の父」孫文の『建国方策』によるものとされている。この方策は行易知難（哲学心理建設一七年）・実業計画（経済物質建設一九年）・民権初歩（政治社会建設二一年）三部作で「実業計画」で触れられている。

しかしその内容は「長江上流に閘門を作って水を堰とめ船で潮航すれば一面またその水力をも利用し得る」などわずか九行の漠然としたものである。光瑞の計画は具体的多面的分析をもとに詳細に提言しており、すぐにでも取り掛かれる類いのものである。

光瑞は中国にとって「三峡ダム」建設の必要性をはるか五〇年前に、明確に予測しその詳細な実施計画を中国人に代わり考え抜いていた。

大谷光瑞は「三峡ダムの父」といえる。

八一　欧亜連絡鉄道計画

「支那の交通は水運を主とし鉄道を従とす」とし、天津・上海・広東の海港整備と国内河川の水利計画を提言した。次いで古から「南船北馬」といわれる通り、乾燥地帯や砂漠が占める北・西部地方では、「鉄道以外に交通の方法なし」とした。南船地方といえども兵を移動させる場合は速さが必要であり、南部と雖も鉄道の重要性は変わらないと主張する。また露国のシベリア鉄道敷設の例を出し、鉄道をウラジオストックまで開通させたことにより、本格的に満州を狙うことができたとした。

今日日本は大義により「隣邦を助け庶政一新の実を

挙げ、漢・唐の文化を再興させる」ことが肝要とした。二千年前漢武帝は貳師将軍（張騫）と大兵を大宛（フェルガナ）に派遣して、内陸部の情報を初めて得てオアシス都市国家を服属させた。欧亜連絡の「大鉄道敷設するのは決して無駄ではない」としてその構想を披歴する。

光瑞は敢然として無謀と思える二大幹線を提言する。高速鉄道中部幹線と南北連絡幹線の建設である。

中部幹線は南京と徐州の中間蚌埠（上海南京と広東への分岐駅）をほぼ真西に長安を経由して永昌まで一七五五kmを新設する。

北部支線（幹線級）は北京から張家口を経由長城の内側に包頭まで敷設済みなのでこれを流用し、黄河に沿って南下して永昌で中部幹線と連絡させる。永昌で合流した本線は、古くからの幹道に沿って河西回廊の張掖・酒泉を通りと敦煌に通す。

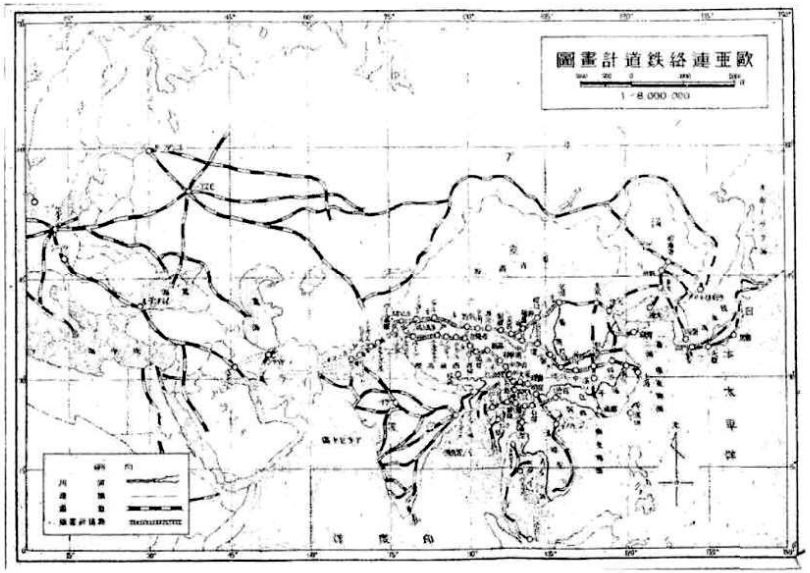
ここから西は光瑞の独擅場である。タクラマカン砂漠地帯の中央を西にほぼ一直線にカシュガルまで敷設する。この間の工事は三次にわたり派遣した青年僧渡辺・堀・橘らの踏破報告書をもとに距離・標高・勾配・ダリア（河）・工事難易度・鉱産物などを説明する。第一次幹線の終点カシュガルまで敦煌から一八〇〇km、永昌からは二六三〇キロを新設するとした。また昆明から青海・チベット山間部に敷設する南北連絡幹線がここで合流する。カシュガルには自ら足を踏み入れており、新駅の位置や整備工場などの設置場所まで細かく指定している。

さらに第二次幹線として、印度国境沿いのタシュクルガンを経由パミール高原・ヒンドクッシュ山脈（大雪山）を突っ切りアフガニスタンカブールまで一五〇〇kmを敷設するという大構想である。カブールからはバグダッドまで伸線させ、B（ベルリン）・B（バグダッド）鉄道が完成しており、トルコ経由で欧州に繋がるというものである。しかしこの敷設工事は「極めて難しく困難を伴う工事でこれに類する難工事はこれまでない」と自らの体験を踏まえ強調した。

南京あたりから中原を抜け、タクラマカン砂漠を西進させカシュガル経由アフガニスタンカブールまでの中央幹線自体難工事であるのに、さらに南北連絡幹線を提言しているから驚かされる。

中国南部広西省百色（ポセ）（西江の船舶遡上最終地）から昆明および大理を経由して雲南の山岳地帯を北上、チベット高原を縦断してタリム盆地内に入る。さらに西域南道に沿い、ホータン・ヤルカンドを経てカシュガルで中央幹線と結ぶというもので総距離は五三八五kmになる。

光瑞は中・北幹線は誰でも考えつくかもしれないが、この南北連絡幹線は沿線には中国最大の金鉱などがあり



欧亜連絡鉄道計画図
「国立国会図書館デジタルコレクション」

鉱産物が豊富に産出する。この地下資源の輸送手段としても重要であるとみた。ロシアが四〇年前シベリア鉄道を敷設したことを思い出せば、この幹線は東亜の建設には無くてはならないものとした。

二〇二一年一二月三日の朝刊各紙は「中国ラオス鉄道完成」の見出しで、中国雲南省昆明から内陸国ラオス首都ビエンチャンまで高速鉄道が開通したと大きく報道した。「陸の孤島」と呼ばれたラオスは開通により農産物輸出や観光客の流入を見込んでおり、経済発展の起爆剤となることを期待しているとも報じた。

既にタイでは今回完成したビエンチャンから首都バンコクまでの高速鉄道工事を一部開始させている。さらに南下マレーシアを縦断しシンガポールまでが計画されており、クアラルンプールとシンガポール間の工事が動き出したと報じた。

東南アジア各国では、中国と結ぶ鉄道建設計画が進められている。鉄道網の整備は習近平政権が掲げる巨大経済圏構想「一帯一路」の事業対象になっており、中国からの資金供与によるものであると報道した。

慌てて興亜計画を読み直すと、南北連絡幹線の最後の項に、「緬甸連絡としての本線の重要性」として、東南アジアの安南（仏領インドシナ現ベトナム・ラオス五三

年独立）・タイ・ビルマとの三支線建設に触れていた。

この中では安南線は中国沿岸と海運により結ばれており鉄道の敷設の重要度は低いとしている。

ビルマ線は国境の中核都市バーモまで敷設すれば、既設線と接続させインド洋に面するラングーンまで繋がる。光瑞はこの支線を英国が隣接する印度アッサム地方まで延ばせば、ダージリンの高級紅茶地や緬甸の大穀倉地帯とも連絡できると見通した。

最後に車里支線（雲南省最南部現景洪市・明代車里宣慰使設置）をタイまで延ばし、古都チェンマイ経由バンコクに通じさせるとした。車里の西方には金鉱の埋蔵が期待される地であり「決して工費の大なると工事の難きに驚くべからず」と言及していた。

光瑞の欧亜連絡鉄道構想と似通った「一帯一路政策」は習近平国家主席が一三年新たに打ち出した「巨大経済圏構想」である。「一帯」は正式には「シルクロード経済ベルト」構想で、中国西部かユーラシア大陸を横断してヨーロッパと結ぶ。「一路」の正式名称は「二一世紀海上シルクロード」で、東南アジア・スリランカ・アラビア半島・アフリカ東岸から地中海に至る広域を海路で結び経済圏を構築するものである。

中国は米国に次ぐ世界第二位の経済規模を背景に、一〇年台からこれらの国に経済援助を進めた。米国を中心とする経済圏から、中国を中心とする自前の新たな経済圏を目指しており、低開発国の鉄道・港湾・高速道路などの巨大インフラの建設援助が始まった。その基本概念が「一帯一路」政策である。

昆明―ビエンチャン間の高速鉄道完成は、この政策のいわば端緒となるものである。内陸の高原地帯にあり陸の孤島である最貧国ラオスの経済開発と、東南アジア最大経済国タイへの結びつきを強化する狙いであった。

光瑞がアジア諸国を結びつけることで経済発展を構想した『興亜計画』の中でその構想を公にしたのは一九三九年であり、「一帯一路」構想の、実に七五年前のことである。すでに日中間は、三七年盧溝橋事件をきっかけに第二次上海事変、国民政府重慶遷都および日本軍南京占領に至っており全面戦争となっていた。第二次世界大戦勃発時、欧亜連絡鉄道を構想した余人がいたであろうか。

当時は誰も注目しなかった大胆な「興亜計画欧亜連絡鉄道計画」が日の目をみたのは中国の一帯一路政策からであった。今般光瑞構想の一部実現したのが二一年一二月の昆明・ビエンチャン高速鉄道の開通であった。光瑞の発表から実に八〇年を過ぎていた。

全一〇巻の『興亜計画』は当時の地理学者さえ評価されなかった。京都大東亜地理学派の浅井得一は「熱帯農業に対する著者の経験と抱負と意気とを窺ふに足り、蓋し全編の圧巻と言ふべきか」と指摘し、南洋の気候について実際的な立場より提言しており、「北主南従」主義を批判した一節は読者の心を打つであろうと指摘した。満州移民についても「北満にのみ移民を集中し米作を求めんとす。我政府は農業に対しては天理に背反せる行動を強制せり」との主張・批判も見逃すべきでないと光瑞の卓見を載せた。そして「極めて実行可能と思われる計画性を多分に包含する、緻密な支那及南洋地誌というべき力作」と総括した。新首都・海港や水利計画に触れてはいるものの、壮大な欧亜連絡鉄道については全く言及されなかった。発刊当時、その分野の専門家ですら思い至らなかった。

執筆中『満州の土建王』（岡田和裕著）に光瑞のことが書いてあると示唆された。そこには四三（昭和一八）年三月榊谷仙次郎（広島県呉市出身安芸門徒・満州土建王）の日記に、光瑞は「弾丸列車は東京を出発し下関によらず、手前の山口県小野田市付近から対馬海峡の海底に入る。朝鮮馬山（釜山西五〇キロ）付近で地上に出て京城・平壌を経由、鴨緑江をわたり大連に向かう。そこから渤海湾の海底を横断して北京に至るという壮大な計画」を話した。光瑞からの依頼は「榊谷に海底調査をやってほしい」というもので、軍や政府に話してもとりあってもらえず榊谷なら何とかするのではないかというものであった。

「計画図」を再度よく見ると、確かに東京が起点であった。ほぼ現在の新幹線と同じ路線に沿って大阪を経由して門司まで記されていた。欧亜連絡鉄道は中国が起点と早合点していた。

光瑞は中国に長く居を構えたが、日本人として欧亜鉄道建設により日本の経済発展をも願っていたのである。

『大谷光瑞興亜計画』と孫文『建国方策』の「実業計画」とはほぼ同一の視点からの提言である。上海で二人はしばしば懇談しており、中国とアジアの将来についてこの両書の項目を議論したのであろう。一九年孫文の「実業計画」発表時には十分深化できていなかった。孫文は二五年北伐の途上で死亡したが、二人が検討し合ったものを光瑞は一五年をかけて思索と調査を続け、この興亜計画を作成した。

二人が語り合った大きな夢は光瑞の一〇巻にわたる大書として三九年世に出した。公表から「三峡ダム」の完成は七〇年後、「一帯一路」政策は八〇年経って発表され、今そのほんの一部が完成した。

光瑞は中国・アジアの未来の姿を、八〇年以上まえから思い詰めていたことになる。

三峡ダムの建設も一帯一路政策も大谷光瑞興亜計画から学んだことは間違いない。歴代党首脳や政策官僚がバイブルとして保持し読み返したものと思われる。

八〇年を過ぎた今こそ、光瑞の計画を再評価するときであろう。

それにしても大構想を詳細な実施計画にまで結実できたのは、一四年法主を辞任したからである。欧州国からの侵入を防ぎ、中国・東アジア・全アジアの経済発展を願った大作の完成は法主在任中では不可能であった。

辞任後日本を離れ中国上海で生活したことで、初めて揚子江下流域に何度も視察・調査が可能となった。孫文とも何度も語り合い、中国の経済発展構想を練ることができた。

無念の辞任を「奇禍」として、誰も及ばない大構想を世に出すことができたのである。

（つづく）

参考文献は最後に記します

高山右近（十二）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

信徒家族を教会へ

今年は慶長十二年（一六〇七）、教会設立後、既に五年が経過している。

この間に、筆頭家老横山家嫡男に嫁いだルチアは、今も夫康玄とミサは勿論、教会行事には引き続き全面的に参加して応援してくれている。前田家客将のキリシタン内藤如安も、一家を挙げて教会運営に協力してくれている。教会設立二年目には、司祭が六カ月間教会に駐在し、右近に協力し教会の日常的運営を軌道に乗せてくれた。その他能登にも教会を設立し、日常の運営管理は弟に任せていた。教会設立後、新たに洗礼を受けて信徒になった人数も、能登を含めて千人超に達し、金沢教会で洗礼を受けた信者数は三千人を超している。このような状況は、イエズス会の世界宣教の中でも特筆に値する成果を収め、高山右近の名声は、ポルトガルは勿論当時のイエズス会全組織に伝えられていた。

しかし右近は、金沢教会の問題点が、多くの信徒が家庭・家族を母体として教会に来ているのではなく、前田家家臣や領民が家族とは無関係に一人で教会に来て、更に詳しく教えを学ぶために洗礼を受けていると言う、一人だけの考えで来ているケースが多いことであった。その結果として信徒の家庭で、信仰の輪がその家族に及んでいないことが致命的な悩みであった。

従って、洗礼を受けた信徒が、教会でのこと、教会で学んだキリシタン信仰について家族に話しをしているだろうか。右近にとっては、また宣教に当たっては、この辺のことが重要であった。洗礼を受けた信徒に、今までそのようなことを聞いていないので分からない。これか

ら、信徒とのザックバランの話し合いの時をもって、「本人のキリシタン信仰」を家族にどのように話しているかを聞いて見たいと思っていた。

クリスマス前夜のお祝いに、子どもの寸劇を二年前から始め、右近家族、内藤如安家族が出演者になり、イエス様誕生劇をやって来ている。これからは、右近しか持っていない新約聖書のマタイによる福音書一章から三章に至る記事と、ルカによる福音書一章～二章の記事（注①）に忠実に脚本を作成し、一般信徒の大人も子供も希望者は出来るだけ多く出演してもらうことにより、他の一般信徒も見て楽しんでもらうようにしたい。先ず今年十月くらいから練習を始めて、その練習に信徒家族を徐々に加えて、教会のクリスマス前夜のお祝い行事として位置付けたいと思っていた。

右近の頭の中で、この思いは果てしなく広がって行く。「イエス様の誕生劇」の中で、「羊飼いに天から語り掛ける天使は一人？」「三人の博士はお年寄り信徒に？」「博士を道案内する星はどうする？　星を作って竹竿の先に付けて担ぐ？

「主役の子どもを引き立たせる脇役の大人は？」などなど、右近の頭の中は既に寸劇の配役と舞台造りを楽しんでいた。

注　①　新約聖書マタイによる福音書第一章・二章と、ルカによる福音書第一章・二章には、イエス様が誕生されるにあたって神様のなされたことと、イエス様が馬小屋の中でイエスに会った三人の博士や羊飼いたちから、お祝いを受けたことが詳しく記載されている。

右近は、カトリック公式版のヒエロニムス翻訳ラテン語新約聖書を持っており、精読していた。ラテン語はバテレンに教えてもらっていた。

右近　思いを語る

右近は何か真剣に考えることがあると、いつも一人で茶室に入っている。今日も茶室で「亭主」の座る位置に座って茶室内を見渡していた。今の右近の思いの実践に当たって協力を得なければならない人たちは、家族同様にしている内内（うちうち）の人たちだ、との思いから、いままで茶道をたしなむ内藤如安は別にして、家族同様な人たちを茶室に案内したことがなかった。皆、茶室は右近専用の部屋で、自分たちは入ってはいけないんだ、と言う思いがあるだろう。さぞかし、茶室へと案内すると、「なんだろう」と驚くだろうなと思いながら皆を集めた。

内藤如安、その嫡男内藤好次、右近の弟の高山太郎衛門、長男十次郎等を召使に呼びに行かせていた。皆が集まるまでには半刻くらいはかかるだろうと思いながら、

自分の茶道の「初めてのとき」を思い出していた。

それは、堺の日比谷了慶の自宅で、茶室の中に入ったのも初めのときだった。日比谷了慶の真剣そのもののお点前作法からキリスト的雰囲気を感じて、茶会を通しての亭主の「一期一会の思い入れ」を感じたことが、その後右近が茶道に深く入って行く大きな要因だったと思いだしていた。

それは、日比谷了慶がある朝利休と右近を招き、朝の食事を共にして、それから神に感謝の祈りを捧げてから茶会を始めた。祈りから始める茶会、それにより、亭主を務めた日比谷了慶の手さばきが一段と厳かに感じられ、どうぞと差し出されたお茶、抹茶茶碗とその中の緑のお茶が、えも言われない尊いもの、素晴らしいものに感じられた。亭主が、最高のおもてなしとして茶を入れる一つ一つの動作に、その亭主の気持ちがそこに表れていることを感じ、心から「素晴らしいお茶をいただき有難うございました」との言葉が出た。これぞお互いの一期一会を思い合った瞬間だと感じた。特に右近の感じた思いの中には、茶道作法に表れていない「信仰」が大きく存在していた。

まだ、「茶道」をよくわきまえていない右近が、この日のように心が震えるほどの感銘を受けたときのことを、今まで何度も何度も思い出していた。思い出すごとに「信仰」と「茶道」の一体感が、右近のお点前の動作と、茶道具一つ一つへの感謝の磨き等を通して、心のうちに深まっていった。

やがて内藤如安、その嫡男内藤好次、右近の弟の高山太郎衛門、右近の長男十次郎がやって来て、神妙な面持ちで、二畳の狭い茶室の「炉」の周りに座った。

皆が揃ったことを確認した右近は

「急に集まっていただいて、何事なんだろうか、と思っているのではないかと思う。それも、内藤如安さん以外は、家族と言えども茶室に案内したのは初めてだ。今日、急に茶道の稽古をつけるわけではない。これからの教会の信徒つくりの方向を、皆が理解して協力してくれるように、少なくともここにいる皆が、同じ考えで信徒教育のために働いて欲しいと、お願いをしたいので茶室に来てもらった。これから考えを説明する」

と言って、あらためて皆の顔を眺め、召使が煎餅とお茶をそれぞれの前に配るのを見定めて

「教会も受洗した信徒数は三千名に達している。その信徒は、それぞれの家の中ではどのような存在になっているのだろうか。例えば一家の主が信徒になった場合、その妻や子供たちには、教会のこと、信仰のことをどのように家族に話しているのだろうか。主人だけ勝手にキリシタンを信仰すればよい、ということになっていないだろうか。その場合、家の中で、主人が教会でどのような

話を聞いてきたとか、教会の話はよい話だから、皆も聞きに行くように、というような会話が家庭内では出ていないのだろうか。これからの教会の信徒は、家族ぐるみでの信徒であってほしい。その為にも、教会で子どもにキリシタンの話しをする時間も、短くていいからミサの後か前に作ってゆきたい。是非母親と子供にも教会に出席して欲しいと思っている。教会は家族ぐるみの教会であることを信徒全員にお話しして、是非そうなるように理解を求めていきたい。

皆も知っているように、クリスマス前夜祭に「イエス様のお誕生」という寸劇を、子ども達の喜びのために二年前から始めた。しかし、「イエス様のお誕生」のことを理解して寸劇に出ることのできる子どもは、高山家の孫と、内藤家の孫と子どもしかいない。教会が家庭と子どもに教えていないからだ。これでは、多くの信徒によって教会でクリスマスを祝い楽しむことは出来ない。キリスト教の信仰は、順次世襲することが必要だ。教会に子どもと両親が揃って出席することにより、信仰は世襲が可能となる」

右近はここまで話して、皆の顔を見渡し

「出ているお煎餅を食べなさいよ」

と奨めて自らも茶を一口飲んでから

「この金沢の街では歴史的な面から一向宗のお寺が沢山あって、皆どの家も一向宗の檀家になって、家には一向宗の先祖の仏壇と位牌を置いているであろう。家族が誰かひとりキリシタン信徒になった場合、家庭内では信仰が一向宗とキリシタンの二本立てになっている家庭が殆どであろう。我々は焦らないで、キリシタンだけの家庭を作っていかなければならない。教会ができてもう五年になる。今、洗礼を受けた信徒の中で死者が出ていないから「キリシタン専用墓地」は今すぐ必要ではないが、教会からあまり遠くないところに「キリシタン専用墓地」を設けて、信徒を葬る場所も作って行かなければならない。私の父は生前から「長崎のキリシタン墓地」への埋葬を願っていたので、臨時に屋敷の一画に埋葬していたが、一般の人々の葬儀・埋葬ということになればそうはいかない。お寺ではキリシタン信徒の葬儀・埋葬は受け付けてもらえない。これからそのような難しい問題も出てくる」

右近が皆が理解して聞いているかどうか、顔を眺め、目を合わせた上で続けて

「そこで皆に協力してもらいたいのは、ミサが終って帰るとき、出席者との何気ない話し合いの中で、それぞれの家の中で、妻や子供を教会に連れてくることはできるのか。教会としては家族ぐるみ、教会の話を聞いてもらいたいと思っている、ということを話して、一軒ごとの反応や状況を記録して欲しい。出来そうな家は、みんなで協力して家族ぐるみの信徒を作ってゆきたい」

この右近の考えに異論があるはずはない。神のはかり知ることのできない人間に対する思い（今の時代の表現では神からの人に対する愛）を、どのように家族全員に伝え、信仰の継承を図っていかなければならないかということは、出席者には十分に分かっている。それの実現のための「自分たちがやらなければならない」方策が右近から話された。

内藤如安が

「高山殿、よくぞ申された。これは我々がこれから実現していかなければならない、しかし大変困難な道である。今洗礼を受けて信徒になっている人たちに、このことをどのように話して理解してもらうか、それぞれの家でどのように実行してもらうかにある。先ず、今の信徒の皆さんに、いつ、どのような場所で、どのように話すかから考えてゆきたい」

「内藤殿、よくぞ申された。その通りです。先ず、それぞれの家庭での信仰のあり方、それを家庭ごとに理解して、家族全員が信仰を持つように話してゆくことが重要だ。その為には、今洗礼を受けて信徒になっている一家の主（あるじ）の考えを、我々の思いと同じになってもらうことが必要だ」

右近の弟の太郎右衛門が

『その通りだと思いますが、今洗礼を受けて信徒になっている一家の主が、城主の利長様の、「右近の話はいいお話だから聞くように」とのお言葉を受けて、家族に対し「俺はキリシタンにも入門してみようと思う」程度で教会にやって来て、きちんと話を聞くのには洗礼を受けたほうがいいと思って洗礼を受けている。そのような人たちが多いのではないか』

との意見に、右近は

「率直な話が、いま洗礼を受けている信徒は、太郎右衛門の言った通りの経緯で洗礼を受けている人が多いと思う。それはむしろ。本物のキリシタンに導く、教えてゆく、話し合う機会が我々に与えられていると感謝しなければならない。すべてはそこから始めるのだ。皆がミサが終わったときに毎回一人、二人と話し合って家庭の状況を聞いて、それをその日の夕方にでも報告し合って、どのような対応をとっていくのがいいか、みんなで意見交換をしよう」

その他いくつかの疑問点や意見が出たが、お互いに次回の個別の話の結果を持って、その日の夕方集まることとし、初めての茶室会議は終わった。

それから数カ月の間、既に洗礼を受けている信徒に、ミサの折のキリスト教を家族にも聞かせて、家族も一緒にキリスト教の信仰をするようにしたらいかが、と話し乍ら説得を試みたが、右近たちの努力にかかわらず、信徒からの前進は殆ど見られなかった。

金沢教会専従司祭と修道士の着任

右近が、金沢教会設立時からイエズス会に依頼していた専従司祭がようやく決まった。右近はこの金沢教会司祭候補がファン・パウティスタ・クレメンテ司祭であることをオルガンチーノ師から事前に知らされ、金沢教会に視察で来たことのある、パルタザール・デ・トルレス司祭と共に、クレメンテ司祭に是非決断して金沢に来て欲しいとお願いしていた。

クレメンテ司祭が宣教師エルナンデス修道士と共に金沢に着いたのが慶長十二年（一六〇七）一月であった。

この時期、能登の二教会を含めて、金沢教会で洗礼を受けた信徒は三千五百人を超していた。右近はクレメンテ司祭の着任時に、教会堂内部をくまなく案内し、二階の司祭室に保存してある信徒関係書類、ミサごとの出席者名簿（信徒と未信徒別の出席者名簿）、と日誌を説明しながら渡した。

それらの記載は右近の日本語毛筆書きのため、クレメンテ司祭の今迄での日本語の勉強と、経験から、読めるところもあるが、読めないところもあった。これからの新しい記入は司祭と修道士がポルトガル語で記入することとし、今までの記録で日本語が読めないところは、順次右近が説明することとした。

早速四月十八日のミサで、司祭と伝道師を教会員に紹介し、その日のミサは司祭が日本語で担当し、久しく行ってっていなかった信徒の聖体拝領も行った。

その日のミサは、教会員には事前に連絡し、教会正面にも掲示したこともあり、降雪の中にも拘らず教会始まって以来の最高の出席者を得て、信徒はおよそ二百人以上出席し、会堂内は満席の状況であった。その中には前田家家臣や豪姫の姿もあった。

右近はこの様子を見て、金沢教会で洗礼を待つ信徒をもう一度洗い直し、右近立会いの下にクレメンテ司祭とエルナンデス修道士による面接の後に、洗礼式を出来るだけ早めに行うこととした。

六月四日、ミサの後二百五十六人の洗礼式が行われた。洗礼が終った順にクレメンテ司祭が一人一人に洗礼名を与え、全て終わった段階で右近が立ち上がって

「皆さん、洗礼おめでとう。今日洗礼を受けたことにより、皆さんはキリスト教の神様の信徒です。これからもキリスト教のことについて学びを続けるとともに、皆さんの家族全員がキリスト教徒になるように、神様に祈り求めてください。家庭内でも、教会のこと、神様のことを家族皆さんに説明して、ご家族が皆さんと一緒に信仰するように指導してください。その為のお手伝いが必要であればこの右近も、司祭、修道士と共に出来る限りのことをします」

と締めくくった。

専従司祭と修道士が金沢に来て二年を経過し、その間、能登の教会にも何度も行き、この二年間での洗礼者は金沢で千二百六十人、能登の二つの教会で二百三十人と、金沢教会と能登の二教会を合わせて五千人近い信徒の数になっていた。

高岡城築城と隠居利長の孤独

二年前の慶長十年（一六〇五）六月二十八日、城主前田利長が富山城に隠居し、徳川秀忠の次女珠姫を奥方にした利光が城主となった。

前田利長はその後も折ある毎に金沢城にやって来て、新城主や家老たちに必要なことは指導していた。がしかし、利長も隠居の身分でもあり、そう頻繁に金沢にやってくるわけにはいかないので、最近では殆ど来ていない。

右近が親しかった前城主利長は今はいない、新たな利光政権とは仕事上の接触もなく、そのような日が二年も経過すると、金沢城内での右近の存在感が薄くなってきているのを、右近はひしひしと感じていた。城内の武士で、新たに教会に足を向ける武士が極端に少なくなっていた。

慶長十四年（一六〇九）、利長が隠居した富山城が、城下の大火からの類焼で、城の建物の大半を焼失した。

城主利長は、何はともあれ魚津城に移り、富山城に代わる新たな築城場所を「関野」とし、その地名を「高岡」と改名し、新しい城を建設することとした。

利長は高岡城の縄張を前田家の客将右近に命じ、土地の選定を富山城家臣の富田越後と神尾図書、資材調達を小塚淡路に任せ、炎上した富山城の建築の自分の好みの部分をいくつか取り入れることを指示したのみで、その他は一切右近に任せていた。

右近は、高岡城築城期間中は、金沢の教会については、クレメンテ司祭とエルナンデス修道士に全てを任せ、築城期間七カ月は殆ど高岡にいた。

利長は江戸幕府がいつ、どのようなことからキリスト教禁教を打ち出すか、それとも現状容認で行くのか、それを事前に探るため、江戸の要所要所にアンテナを張っていた。ある幕閣に近いところからの情報として

「秀吉の死後、キリシタンを取り締まる者がいなくなった。取り締まっていないので、キリスト教徒は予想外に増えており、長崎、豊後、京都などの布教所・教会数が約二百に及び、現在少なくともキリシタンは二十万人になるのではないかとみて危険視している。特に家康近習の臨済宗の僧金地院崇伝あたりは、何かにつけてキリシタンを禁教とするための発言が多い」

更に

「昨年のこと、慶長十年（一六一〇）に日本の朱印船がポルトガル船によってマカオで撃沈され、船員六十名が殺された。この件は今後ポルトガルとの争いになるだろう。その時の状況次第で、徳川幕府もバテレンの全員追放・国外退去、キリシタン全面禁教に踏み切るのではないか」

との情報も得ていた。これを利長から聞いた右近は、

「この事件は、日本も黙っていないだろうから、何らかの形で問題化し、その結果徳川幕府がバテレン国外追放の時期が比較的早く来るのではないか」

と読んで自分の胸にしまい込んだ。

慶長十一年（一六〇六）、右近が高岡城築城中に、金沢から早馬が来て、右近の長男ジョアン十次郎夫妻と母マリアが「はやり病

に倒れ重体との知らせがあった。右近はその場で馬を用意して金沢に飛んだが、三人の死には間に合わなかった。右近にとっては長男ジョアン十次郎は後継者として、何かと学ばせて成長を楽しみにしていただけに、母の死と後継者の死と二重の苦しみだった。残された五人の孫たちについては、右近の妻ジュスタが育てると言ってくれたこともあり、右近夫妻が親代わりとして育てることとした。

金沢教会での葬儀全てを終わった右近は、再び高岡に戻り、翌月には高岡城建築工事が完工した。利長から「落成記念の茶会」希望があって、新築なった高岡城奥の院の茶室で、利長と二人だけの茶会を行った。この場で、利長は淋しそうに、今の金沢利光政権に、余程のことがない限り口出しはしないことにしていると言う。それを聞いた右近は、

「その方が利光様の一本立ちがしっかりしてくるでしょう」

と慰めとも何ともつかない返事をしていた。

右近が高岡城築城を終えて金沢に戻って教会に目を向けると、クレメンテ司祭とエルナンデス修道士による教会管理と信徒指導をは着実に行われており、安心した。そして右近は、予ねての打ち合わせ通り、ミサの日に教会に来る信徒と親しく挨拶をかわし、言葉をかけるように努めていた。家庭内では、長男夫妻亡きあと、右近夫妻は朝食を孫たちと一緒にし、孫たちも右近夫妻を「じじさま」「ばばさま」と呼び、食膳の祈りも、孫たちも一人づつ簡単なお祈りをしていた。それらを通して、祖父母と孫との大切な触れ合いのひとときを持つことができ、右近にとっては安らかな日々を過ごすことが出来ていた。

慶長十六年（一六一一）年五月、家老会が開かれるの

で久しぶりに登城すると、筆頭の横山家老の上席に、一人座ってる。誰か分からない。

城主利光が着座すると、横山家老がおもむろに口を開いて

「この度、当前田家の家老としてお招きした本田政重殿をご紹介します。本田政重殿は江戸幕閣の重鎮本田正信様のご次男で、この度、前田家城主利光様を我々と共にお支え申し上げ、前田家の益々の発展のためにお越しいただきました。前田家内の禄高としては五万石とし、筆頭家老として我々をご指導くださることになります」

と挨拶かたがた紹介すると、本田政重は、城主利光に挨拶したのち、居並ぶ家老の方を向いて、

「これから皆と共に前田家のために尽すので宜しくお願いしたい」と簡単な挨拶があった。

その日以後は家老会開催はなく、右近は教会中心の毎日を過ごしていたが、慶長十七年（一六一二）一月、高岡城の前田利長から連絡があり

「金沢城への登城がなければ、話したいことができたので泊りがけで高岡城に来てくれ」

とのことで、用件は「話したいこと」のみで具体的には全く分からない。場合によったら二～三日必要かと思って、供も連れず翌朝高岡に出かけた。馬で行けば一刻（今の二時間程度）で行けるので、午刻までには高岡城（金沢～高岡間は略十里）に着き、利長の居室に案内

岡本大八事件と家康のキリシタン禁制

された。

挨拶を終えると案の定「今日は久しぶりに右近と二人だけの茶の時を持とう。ゆっくりしていけ」

との言葉があり、いくつかの話があるな、と感じて茶室に入った。

利長と二人だけになった右近は、亭主の座で、正客の利常に茶を入れ始めた。利常は作法通り飲み終えた茶碗を右近に返し、右近も自分の茶を入れて飲み終えて、形通りの茶器鑑賞を終えた利長は膝を打って

「そうだ、これを右近に言ってなかったな」

と言い出して右近の顔を見つめた。右近は

「殿、何か」

と聞くと、利長は

「昨年五月ごろかな、前田家に江戸幕閣から新しく本田政重という家老が来ているだろう」

右近は

「はい、突然家老会で紹介がありました」

「そうだろう。前田家は表面的には落ち着いているが、家老が、横山長知派ともう一派があり、内々ではうまくいっていない。利光はまだ若く家老を抑える力はない。そこで上杉家に仕えていた本田政重を筆頭家老として招

致し、前田家全家老の抑えとして、利光政権を支えてゆくことになった。これは表向きはこの利長が本田政重を引っ張ってきたことになっているが、江戸幕閣から見て、秀忠の娘婿であるまだ若い利光を支えるための政略だ」

「全然存じ上げませんでした。そのことにより前田家が順調に過ごすことができればそれでよいと思います」

と右近は答えた。然し、この人事により、前田家に対し江戸幕閣の力がますます強まっていくことは明らかであり、時代の流れを感ぜざるを得なかった。

茶室を出て利長の居間に入ると、右近の座る席にも脇息が用意してあった。右近は利長に

「家臣の立場で脇息は勿体なくて使えない」

というと利長は

「何を言っているのか。時間がたてば疲れも出る。遠慮なく使え」

との言葉に、使わせてもらうことにした。利長は開口一番に

『この前右近に聞かせた「有馬晴信所有の朱印船が、マカオでポルトガル船に沈没された」ことであるが、その後、そのポルトガル船マードレ・デ・デウス号が長崎に入ってきたとき、それを知った有馬晴信は、責任者に下船するよう指示したが、そのまま出奔しようとしたので、その船を撃沈した。ま、敵を討ったわけだな。

そこでそれを見ていた家康近くにいる本多正純の家臣岡本大八が、有馬晴信に「これは大手柄だ。有馬家が先年幕府から没収された旧領を、敵討ちの恩賞として幕府から返してもらう手続きを取ってあげよう」と言って多額の賄賂を有馬晴信から取り上げた。しかし月日がたっても何ら音沙汰がないので、有馬晴信は本田正純に問い合わせた。この結果これは岡本大八の賄賂目当ての虚言であることが分かり、家康は怒り、二人とも死罪に処せられた。調べた結果二人ともキリシタンであることが分かった』

利長は更に続けて

「家康は岡本大八も有馬晴信も二人ともキリシタンであったことから、自分のおひざ元にはキリシタンはいないだろうが念のため、として江戸幕府組織内と駿河の自らの組織内を調べた。このおひざ元の両組織内にキリシタンがいたことが分かり、その二人とも棄教を拒否したので、家康は大変驚いたそうだ」

利長は一息入れて茶をすすり、右近をちらりと見て

「そこでだ、それに驚いた幕府は各大名の組織を洗うことにしたのだけれども、前田家については、特別に幕府から人が来て、前田家家族も含めて家中にキリシタンがいるか、いないかの調べがあるだろう。

右近は、幕府の手が前田家に入る前に、教会を閉鎖することを考えていたが、右近をちらりと見た利長は

「今までは前田家内部のことを言ったが、問題は右近をどうするかだ。今、家康の所で考えていることは、各地域で影響力のあるキリシタンは意外に多いので、棄教を命じても棄教しない者を、血を見る切り捨て以外の方法で消すことはできないかと考えているらしい。分散しての島流しもあるが。いずれにしても、右近の家と教会は徹底的に洗われ、関係の物は全て押収されるであろうから、教会保管の洗礼者名簿とか、キリシタン名簿類、キリシタンでなくても来会者名簿なども、一切保存しておいてはならない。今のうちから焼却を始めることだ。昔のものを開けば、この利長の名前も出てくるであろう」

利長は一息入れて先を急ぐかのように

「金沢教会のことでは、江戸の幕閣も右近以外に誰がいるのかも全て把握している。今逃がしては前田家が責任を取らされるであろう。江戸幕閣は右近たちの処置の指示は江戸で行い、実際面では京都所司代にやらせるものと思う」

右近はここまで聞いて「とうとう来るものが来るか」と言った感じを持ったが、利長は更に続けて

「金沢にいる妹の豪姫のことだが」

と切り出して

『慶長十二年（一六〇七）に加賀に戻ってきて、前田家から化粧料を千五百石支給されて「実家に戻ってきた」のであるが、実家であっても、前田家内にはこの利長の他には知る人はいない。豪姫はキリシタンであり、それを話しできるのもこの利長しかいない。江戸幕府のキリシタン取締りがこのような状況になってくると、豪姫の孤独さと寂しさが不憫でならない。豪姫には何かと右近に相談するように手紙を書いておくが、何か言って来たら相談に乗って欲しい』

「殿、豪姫様のことは、右近ができることは何なりとさせていただきます。豪姫様にはその旨宜しくお伝えください」

一息入れてさらに続けて

「今日は江戸幕閣の動きについてよく教えてくださいました。今ご指示がありましたように信徒名簿、来会者名簿、その他処分するものは全て事前に処分いたします。豪姫様についてはこの右近が責任を持って、だれがどのように調べても、前田家に疑念が起こるようなことはないように身辺を綺麗にします

右近がここまで言うと　利長はさえぎって

「江戸の動きは事前に知らせてくれるように、あちこちに依頼してあるので事前に把握できる。分かり次第また連絡する。豪姫のことはくれぐれも頼むよ」

の言葉を聞いた右近は、翌朝、丁重に挨拶して帰路についた。

豪姫

右近が利長を訪問した二ヵ月後、慶長十三年（一六一三）、十二月に入った直後、豪姫の所に高岡城の利長から、不憫な妹を思いやる手紙が届いていた。

豪姫は天正二年（一五七四）前田利家の四女として前田家に生まれたが、秀吉に子どもがいないため二歳のときに秀吉の養女となり、天正十八年（一五八八）十四歳で備前岡山城主宇喜多秀家に嫁した。宇喜多家は関ヶ原の戦いで西軍に加わり、戦いに敗れ、宇喜多秀家と息子二人は八丈島に流刑になった。家がなくなってしまった豪姫は育ててくれた高台院の所に戻り、内藤如安の娘内藤ジュリアの導きでキリシタンの洗礼を受け、ジュリアの信仰指導で、キリシタンを学んでいた。

その経緯を知っていた利長は、万一江戸幕府が前田家に立ち入って、豪姫の所持物からキリシタン関係物品・書類等が出た場合は、豪姫を前田家が保護しているだけに、前田家としては知らぬ、存ぜずはできない。利長はそれを恐れて、豪姫の所に「キリシタン関係の物は一切焼却し、何一つ残さないようにしなさい」

と指示した。

その指示を受けた豪姫は、自分一人では自信がないので、教会の牧師クレメンテに右近に会いたい、とお願いした。それをクレメンテ司祭から聞いた右近は、豪姫にはかねてご挨拶はしてあるものの、自宅に伺ったこともなかったので、翌朝、雪の中を豪姫の自宅へ向かった。門を開けて

「高山右近です」

と挨拶すると、女中が通路に積もった雪で歩き難い中を門までやってきて

「どうぞお入りください」

と言われて玄関から豪姫の居室前迄案内された。女中が

「高山様がお見えになりました」

と室内に声をかけると居室の襖が静かに開いて、豪姫が

「お呼び建て申し上げた失礼をお許しください」

と物静かな挨拶の声で、右近にそのまま室内に入る様に案内した。室内で右近と豪姫は改めて挨拶し、豪姫は自分が呼びつけた形になっていることを詫びた。

早速本題に入った豪姫は

「高岡の兄から、これからいつ行われるか分からないキリシタン詮索は、前田家は免れることはできない。そのとき、前田の一族からキリシタンが出ている証拠を掴まれたら、それこそ前田家の存続にかかわることになる。従って豪姫の持っているキリシタン関係の書物、ロザリオ、クルス等全て早く焼却せよ、と指示がありました。それで私がそれを焼き捨てなければならないのですが、いろいろと思い出や愛着があって、私にはそう簡単にはできません。それで、高山右近さんに全て持って行っていただいて焼却を願いしたいと思った次第です。誠に勝手なお願いですが、お引き受けいただけますでしょうか」

と言いながら、後ろの座卓の上の風呂敷包みを膝の上に置き、

「高山様、この堤の中がキリシタン関係の書物と、いつも愛用していたクルス、ロザリオなどが包んであります。これを手放すと思うと（と言いながら目を覆い、涙をぬぐって）見ることが辛いのです。どうぞこれをこのままお持ち帰りになられて処分してください」

と、風呂敷包みのまま右近に手渡した。右近は

「かしこまりました。私が全責任を持って処分致します」

と言って、風呂敷包みを開けることなくそのまま受け取った。

その後、豪姫は問わず語りに、関ケ原の戦いの後、行くところがないので幼い時から育ててくれた高台院（秀吉の妻）様の所でお世話になっていました。夫と子供二人の三人が八丈島に島流しになった時も会うことはできませんでした。高台院様にお世話になっている間に、内藤如安の娘内藤ジュリアに会ってキリシタンを勧められ、バードレに会い、洗礼を受け、内藤ジュリアからはキリシタンの学びの本も頂いて、少しは読むことができた、という述懐を聞いていた。

帰る段階になって

「昨夜からの雪でお庭も雪が積もっています。これから雪掻きのため、我が家の男手を三人くらい寄こします。ご遠慮なく使ってください」

と言って自宅に戻った。

右近は直ちに自室に行き、持ってきた風呂敷包みを開けると、キリシタンの解説書二冊「こんてむつすむんお地」（注②）と「スピリツアル修行」（注③）で、それらの本には頁を何度か開いた手の跡が残っていた。もう一つの、和紙の包みを開くと、金と銀のクルス二つ、水晶のロザリオの三つが出てきた。ロザリオとクルスは、いかにも豪姫様のご身分でお持ちになりそうな豪華なものであるが、それぞれに、よくお使いになって、お持ちになられた跡の「くもり」が感じられた。

右近は先の二冊の書は、右近が求めたくても手に入らなかった書であり、これから利長の了解を得て読ませて頂こうと考えていた。

（注　②）

「キリストに倣いて」のキリシタン時代における邦訳本。慶長元年（一五九六）イエズス会からポルトガル式綴りのローマ字本が出されたが、慶長一五年（一六一〇）に一般信者向けに省略・改定の上、漢字交じりの平仮名文で出版された。

（注　③）

慶長一二年（一六〇七）長崎で刊行されたキリシタン版の一種。イエズス会の創始者イグナチオ・デ・ロヨラの「霊操」の形式を模して作成された観想書。イエス・キリストの様々な姿を思い浮かべながら観想する際の祈りや留意点が記載されている。ローマ字本。文語体。

その日の昼食前、右近は、豪姫様のキリシタン関係の物は、右近がすべて預かって、豪姫様の身元には一切ないことを、一番心配されている高岡城主の利長様に報告しなければならないことに気づき、生駒弥次郎と岡本惣兵衛に右近とそれぞれが乗る馬の支度をさせ、ジュスタに三人分の昼食を直ぐ支度するように命じた。

出かけるとき、庭の雪の状態から山道の通行が心配になったが、何度も往復している道でもあり、日のあるうちには高岡につくであろう、何とかなると思って三人で出かけた。

途中金沢から高岡へ向かう坂道で、馬が積雪に足をとられ、右近たちが馬を引いて歩かざるを得ないところもあった。途中の里で一休みしたときに強力を数人雇ったので、強力たちが右近たちの先を歩き、右近たちが歩きやすいように雪を均してもらうことができて、その後は順調に進むことができた。

山から高岡目指しての下りの道になると高岡城の聳える姿を見て、三人とも今までの疲れはどこかへ飛んでいってしまったように、元気になって馬を走らせた。

高岡城に着き案内を乞うと、利長は腰痛で臥せっていたが、右近が来たと言うことで居間に脇息を持ち出して右近を待っていた。右近が挨拶の後、今日の午前中に豪姫様と会い、午後には利長の所へ来たと言うと

「いかにも右近らしいな。明日でも構わないのに」

と笑いながら右近の次の発言を待っていた。

「殿、豪姫様より金銀の勿体ないほど立派なクルスと水晶のロザリオ、イエズス会が印刷発行したキリシタンの教えを説く専門書二冊、確かに私がお預かりしました。豪姫様はこれらの処分に困っておられ、私がお預かりしたことでホッとなさったご様子でした。ご自分では勿体なくて焼き捨てることはできなかったと仰っていました。それでキリシタンの教えを説く二冊の本は、キリシタンにとっては極めて貴重な本で、私も手に入れたいと思っても手に入らなかった本です。私が読ませて頂こうと思っています。本のどこにも豪姫様がお持ちになっておられた徴はありませんので。お許しいただけますでしょうか」

「もうすべて右近の下にあるのだから、好きなようにせよ」

と言って

「良く報告に来てくれた。これで豪のことは安心していられる。よくやってくれた。冬の日は短い。もう外は暗くなっておろう。今晩は泊まって行け。久しぶりに二人で茶をしよう」

と手を叩き、召使に茶室の用意と、右近の従者二名も城内に泊めるように指示した。

茶室に入ると、利長は声を細めるように

「右近、家康の側近からの情報で、家康は江戸の自分の手元の組織と、駿府の直属組織からキリシタンが出たこと、この「まさか」に驚きを隠せず、先ずは天領のすべての組織にキリシタン存非の調査をやって、次に各大名の全組織の調査になるだろう。それをやりながら右近たち金沢教会の動静に探りを入れてくるであろう」

と最近の情勢を話してくれた。

右近たちは翌朝早く、利長城主に挨拶して高岡城を辞し、正午前には金沢に着いた。

教会文書の焼却

慶長十八年（一六一三）十二月も半ばを過ぎたが、金沢の街並みは雪の中に静かに立ち並んでいる。クリスマスが近づいた中で、教会だけが人の出入りがあって活気づいている。次のミサ（十二月二十五日）を待つように、教会堂の司祭の演台の左前に置かれた赤い大きな蝋燭二本が美しく、炎の姿もきれいな姿に燃えている。二本は、クリスマスまでミサは今日を入れて二回ですよ、と告げている。

右近がその美しい蝋燭を眺めていると、後ろに人の気配がするので振り向くと生駒弥次郎が、何か右近に話しかけたい様子で立っていた。

「何か用事か」

と右近が声をかけると弥次郎は

「殿様、最近ミサに出席するお城の方々が少なくなってきているような気がします。そんな気がしませんか」

言われて、右近はそのことは気にはなっていたが、弥次郎の目にもそのように映っていたのか、と思い、今日既に来ている出席者の顔を良く見た上で、二ヶ月前からの出席者名簿を眺めてみた。座席の空き状況も眺めてみた。やはり減っている。それは家族をミサにご一緒に、との声掛けを気にしてこなくなったのか、お城で「キリシタン禁教が近く、教会に出入りすることは危険」の噂でも立っているのか、今日のミサ出席状況を見て対応を考えることとした。ルチアと康玄はいつも通りに来ていた。洗礼を受けた数人の僧職も通常通り来ている。

幕閣は岡本大八と有馬晴信の事件に対して、両名を厳しい死罪に処し、加えて慶長十七年三月（一六一二）、徳川本部内組織に対し、キリシタン禁教令を発した。

慶長十八年九月（一六一三）に、徳川天領以外の全国にも、「バテレン門徒ご禁制」を発し、既に我が国全てに渡ってキリシタン禁教となっていた。

このような状況から、江戸幕府の対応に敏感な大名の中には、幕閣からの「キリシタン禁教」発令の出る前に早々と自領内の教会を閉鎖、または取り壊しを始めている情報が「右近の耳」にもいくつか入って来ているので、城内にも同様情報は入っていることは確認までもないと思っている。

右近は教会の閉鎖命令が出る前に、教会内の文書の焼却を全て行ってしまわなければならない。閉鎖命令が出たときは、書類はその場で押収されることは考えておかなければならない。

教会は城の敷地内部にも位置しているため、城に近いので、教会敷地での焚火はできない。右近邸に持ってきて、少しずつ焼却するしかない。形の上では、教会文書の整理ではなく、右近邸の家のこまごましたものを、幾日かに分散してコツコツと焼却している状況に見せるしかない。焼却は一日も早く始めなければならない。

此処で右近はクレメンテ司祭とエルナンデス修道士を呼び

「キリシタン禁教の噂が出ていて、今日もミサ出席者は若干少なくなるかもしれない。江戸幕閣からの教会閉鎖・没収命令が来る迄は、ミサは平常通り行う。ただし、教会内の文書焼却は手間がかかる仕事で、お城に近い教会では焚火が禁止される。右近の家に持ち込んで少しづつやるしかない。忙しいが明日から年末までに焼却を終えるように。年末であれば焼却しても不審には思われないだろう」

と指示して、ミサのために三人で教会堂に行った。

続く

私の本州マラソン歴史紀行（東北編②）

安藤　剛

【宮城県：奥州藤原氏のルーツを訪ねて】

昭和四〇年代に社員旅行で観光して以来、奥州藤原氏初代清衡が開いた岩手県平泉の黄金仏国土をこれまで幾度も訪ねてきたが、十二年前にそのルーツが私の郷里近くの宮城県南部の亘理地方にあることを偶然に知った。

定年退職を機に帰省して独居の父とままごとのような日を過ごしながら、郷里の自然を愛でる自主トレランを楽しんでいたが、その年の秋に訪ねた隣町の高蔵寺の住職に、清衡の父藤原経清の名を教えられ、私の奥州藤原氏のルーツを訪ねるマラソン歴史行脚が始まった。

前号から始めた「私の本州マラソン歴史紀行」の東北編②に宮城県と福島県に奥州藤原氏のルーツを訪ねた歴史紀行を、次号の東北編③に岩手県に平泉を探訪しての奥州藤原氏初代清衡への私的考察を纏めてみたい。

〈1〉角田市に高蔵寺を訪ねて

二〇〇九年一〇月末日の帰省の車窓に流れる信達平野の阿津賀志山麓は、漸く秋色に染まり始め、緑を基調に黄と赤のコントラストが鮮やかに映えていた。

二年前に花吹雪のように舞い散る落ち葉の中を走った県境の三〇キロランが昨日のように思い出される。

来年二月の東京マラソンに連続出走してあの感動をもう一度と願っていたが、高倍率の抽選に落選、夢断たれて走るモチベーションもすっかり萎えていた。

今回の帰省を機に気持を切り換え、錦秋に彩られた郷里の野山を存分に走り込んで、二週間後に迫った地元埼玉のさいたま市民マラソン大会に備えよう。併せて学生時代に訪ねた角田市高倉の高蔵寺まで足を延ばし、久方振りの歴史ロマンの世界を楽しみたいと思っている。

【東北三大阿弥陀堂（中尊寺・白水・高蔵寺）】

宮城県南部の山奥にある高蔵寺阿弥陀堂は、平泉の奥州藤原氏三代秀衡とその妻が建立したと伝えられる宮城県最古の木造建築で、平泉中尊寺金色堂と福島県いわき市白水阿弥陀堂と並ぶ東北三大阿弥陀堂の一つで、堂内の阿弥陀如来座像と共に国の重要文化財に指定されており、近年訪れる観光客も多くなったと聞いていた。

前年夏に高蔵寺であった伯母の葬儀に参列した父が、《老杉の昼なお暗き高蔵寺白寿の従姉の葬りに列す》と詠んでおり、高さ三メートル近い阿弥陀如来座像の特別御開帳は既に終わっているが、老杉の中に佇む阿弥陀堂の姿にまみえるだけでも楽しみである。

【秋色の歴史を訪ねて自主トレラン】

今日から十一月、暖かな陽射しと澄んだ青空に誘われて戸外に出ると、朝靄が広がり雄大に望めるはずの蔵王が墨絵のように微かな輪郭だけを浮かべていた。

蔵王の眺望を伴走に出来ないのは残念だが、明日から冷たい雨という予報では、走るのは今日しかない。午前一〇時に高蔵寺まで往復十六キロのロードに出立した。

大河原町の真ん中を流れる白石川堤を上流に向かって約一キロ、堤の桜並木はようやく色付き始め、落ち葉が道端に吹き溜まり、美しい絵模様を描いていた。

桜堤から別れて東北本線の踏切を渡った所で、一キロ五分三六秒は、かなり速いペースである。今日はタイムレースではないのだから、と言い聞かせながら時計が気になるのは、マラソンランナーの性なのだろう。

踏切横の同級生高橋君の自宅が、小学五年の時に蒸気機関車の火の粉で全焼、クラス全員で学用品を贈ったことが思い出された。転校していった彼は、映画製作の技師になったと聞いたが、その後どうしているだろう。

人家疎らだった町外れも新しい住宅街に変貌していた。やがて角田市と境する峠に向かう長い上り坂に入った。

子供の頃に母方の本家がある角田市毛萱に向かうこの山越えの途中で「今日はここまで漕いで来られたね」と父の自転車の荷台から降り、後ろを押して残りの急坂を登った思い出が懐かしく甦ってくる。

急坂を登り切った峠は、地層を露わにした崖が両側に聳え立ち、よく化石探しで這い登ったものだが、道路拡張工事でその崖もだいぶ削り取られていた。高低差五〇メートルの峠までの一キロが七分とさすがにペースダウンしたが、歩かずに走り切れて快調である。

人も車もない山道を一人ひた走り、濃緑の針葉樹林に広葉樹の黄と赤が点描のように彩りを添えて、背丈以上あるススキの群生が爽やかな風に波打つ秋山の景色を独り占めしていた。

峠からの長い下り坂を一気に駆け下りると、シンとした山並みにピチピチと小鳥のさえずりが響きわたり、やがて稲刈りを終えた棚田と大きな実をつけた柿の木が見えて晩秋の田園風景が広がってきた。

道端に「畳石横穴古墳群」の案内板があり、一三〇〇年前だという。こんな山奥に誰の墓なのだろう。東北の横穴は蝦夷穴と呼ばれているが、蝦夷の象徴といわれる蕨手刀の出土例がなく、蝦夷の墓ではないらしい。

ここから北約二〇キロの名取川流域に、五〇メートル以上の大型古墳が七基、内一六八メートルの雷神山古墳は五世紀半ばに築造された東北最大の前方後円墳で、ヤマト政権に統属した地域政権の有力首長層の古墳が造営されており、名取王国と呼ばれたという。

六世紀初めに名取の南隣りの亘（亘理：現亘理町）と伊久（伊具：現角田市）に、全国に配置された北限といわれる国造が置かれ、八世紀初めにその名取に蝦夷制圧の目的で名取軍団と陸奥国府が設置されたというが、同時期の畳石横穴古墳群は、名取の軍団と国府を支えた伊久の国造一族の集合墳なのかもしれない。

自宅を出て二五分が経った四キロ地点に母方の本家の菩提寺「竹林寺」が見えてきた。六〇年程前に祖父の墓を大河原町営墓地に移して以来、来ることのなくなった参道奥のお堂に参拝し、庄司家先祖の安寧を祈った。

二つほど山を越えた五キロ地点で三四分、ハイキング気分で爽快な走りである。やがて田圃の三叉路に「西根小学校」の行き先案内板が見えてきた。

今年一月に逝った母が師範学校を出て最初に勤めた小学校である。回り道になるが立ち寄ってみよう。右折して再び山道に入った。右手に大きな沼が現れて、対岸の秋色の山並みが静かな水面に逆さに映っていた。

山道を登り切ると南斜面が広がり、旧西根小学校跡地である。記念公園として残された跡地の奥に、高さ二〇メートルはあろう大木が樹勢を広げていた。

明治一〇年の開校記念に植樹された「せんだんの木」で、傍らの案内板に、校庭の五分の一を覆う程に枝を広げ、近畿以北では国内稀有な巨木で、六月には淡紫色の可憐な五弁花を多数つけ香気あり、とあった。

師範を出て赴任したばかりの母が、子供たちとこの「せんだんの木」の下を走り回っていたかと思うと震えが止まらない。二十四の瞳の大石先生と重なってきた。

「梅檀（せんだん）は二葉よりかんばし」という故事があり、せんだんは、芽を出した頃から良い香りがあるように、偉くなる人は、幼いときから優れていることのたとえだという。母も教室から校庭の梅檀の木を眺めながら、生徒たちに、今小さい時に頑張れば大人になると偉い人になれるよ、そんな話をしていたかもしれない。

【角田市高倉の高蔵寺阿弥陀堂】

旧西根小学校跡地から高倉の町に下り、高倉川の渓流沿いに走ってまもなく、高蔵寺の石灯篭と門柱が見えてきた。タイムは途中で足を停めたロスを差し引くと自宅からの七キロを四七分で走った計算である。

石畳の参道を進むと、高蔵寺阿弥陀堂の懐かしい姿が樹林の奥に見えてきた。奈良の室生寺の鎧坂を思わせる石段を上がると、鬱蒼とした老杉に囲まれた薄暗い清閑な空間に、宝形造の茅葺屋根の御堂がひっそりと佇んで、八〇〇年の悠久の時が流れてきたことを教えていた。

どっしりした重厚感と女性的な膨らみさえ感じる茅葺の大屋根、その屋根を支える円柱と軒下の木組みは、質素で慎ましく気品ある風格さえ感じられ、屋根の頂にある銅板製の路盤と宝珠に、杉林に射し込んだ陽の光が優しく降り注いでいた（下の写真）。

平安時代末期に平泉の奥州藤原氏によって建立されたといわれ、風雪に晒されてきた分厚い板張りの四面の壁は、奥州平泉の滅亡という時代の荒波と自然の災禍から守られてきた阿弥陀堂の歴史の重みを伝えていた。

今日はあいにく全ての扉が閉じられていたが、学生時代に格子扉越しに暗がりの中を覗き見する私をじっと見下ろしていた後背を含め五メートルはあろう巨大な漆黒の阿弥陀如来坐像の姿が思い浮かんできた。

中学時代に角田出身の祖母から聞いた、八幡太郎義家が近くまで来ると、乗馬が金色に輝く仏像に驚き暴れたので黒く塗り潰させたという言い伝えが思い出された。

角田市高倉の高蔵寺阿弥陀堂



源義家の時代にこの阿弥陀如来像はまだなかったはずだが、金色に輝いていた仏像を黒く上塗りしたという伝承の裏に、隠れキリシタンが聖母マリア像を隠匿したように、頼朝に滅ぼされた奥州藤原氏の子孫が阿弥陀仏像を密かに守り隠してきた歴史があったのかもしれない。

境内に立つ案内板に「高蔵寺の創建は古く平安時代の初期、弘仁一〇年（八一九）南都の僧恵一によって開山されたと伝えられ、阿弥陀堂は治承元年（一一七七）藤原秀衡・妻などによって建立された云々」とあった。

岩手県の平泉から遠く南に一〇〇キロ以上も離れた宮城県のこんな山奥に、藤原秀衡・妻などがなぜ阿弥陀堂を建てたのだろうか。いつもの好奇心に火が付いた。

荘重な阿弥陀堂の姿を見るだけでもとやって来たが、疑問を抱いたままこのまま帰るわけにはいかない。

高蔵寺の住職が遠い親戚だという気安さもあり、勇気を出して母屋の扉を叩くと、突然の珍客と不躾な質問に住職は快く応対してくれた。

住職は、藤原経清と平永衡という二人の名前を出して当地と平泉との関係について熱っぽく語り始めた。

奥州藤原三代以前は、阿武隈川の下流地域が本拠地で、平泉初代清衡の父藤原経清が亘理郡（亘理町）に、叔父の平永衡が伊具郡（角田市）に住んで、共に多賀城の役人として出仕していたとは、初耳だった。

経清の名前は、ＮＨＫ大河ドラマ「炎立つ」で渡辺謙が演じた微かな記憶にあったが、あの平泉に繋がっている認識は全くなかった。ならば三代秀衡が平泉から遥か遠いこの地に阿弥陀堂を建立しても不思議ではない。

案内に秀衡と妻などによって建立されたとあったが、秀衡が妻のために建立したとしたら、秀衡の妻とは一体何者なのだろう、そして誰のために建てたのだろう。

この伊具の地に所縁のある女性だとすると、住職の話に出た伊具の平永衡の遺児なのだろうか。住職にぶつけてみると、それは有り得るかもね、と頷いたように見えた。満更でもなさそうだった。

時計は正午を回っていた。帰途に竹林寺手前の親戚と奥に入った毛萱の本家に立ち寄り、九〇になる伯父伯母と久方の再会を果たして田舎人の温もりを感じながら、十六キロの歴史ロマンの自主トレランは終わった。

埼玉に帰宅して藤原経清と平永衡について早速調べてみた。陸奥守源頼義が陸奥俘囚長安倍頼時を討伐する前九年の役で、頼時の娘を妻にしていた伊具の平永衡が、味方の讒言で頼義に内通を疑われ斬殺されると、相婿の藤原経清も頼義の嫌疑を恐れて安倍氏方に走り、出羽俘囚長清原氏の援軍を得た頼義に最終的に敗れて斬殺されるが、経清の遺児が敵方に再嫁した母の連れ子として生き残り、後に平泉の奥州藤原氏初代清衡となる。

平永衡の居城と伝えられる八竜城は、高蔵寺の真東七キロにある。当時は西方浄土思想の時代である。永衡と安倍氏の血を引く秀衡の妻が、非業の死を遂げた永衡の極楽往生を願い、居城から真西に当たる高蔵寺に阿弥陀堂を建立したのかもしれない。

秀衡の妻は正室のほかに数人の側室がいた。正室は元陸奥守で平泉政権顧問になった藤原基成の娘で嫡男泰衡の実母となる。秀衡死後の奥州合戦で平泉軍総大将として阿津賀志山で頼朝軍を迎撃して敗れた秀衡の庶長子国衡の母は、蝦夷の娘または信夫佐藤氏の娘といわれ、弟の忠衡、通衡、頼衡の母は不詳とされている。

奥州合戦場の阿津賀志山は、伊具郡の高蔵寺から南西に十八キロと近く、頼朝軍に敗れた国衡は、出羽に逃れるのに最短の小坂峠ではなく、笹谷峠を越えんと東山道を北上、途中の柴田郡大高宮の湿田で追撃してきた和田義盛に討たれている。柴田郡は伊具郡の北隣である。国衡は、阿津賀志山から刈田郡を経て柴田郡に向かった逃走経路に幼い頃からの土地勘があったのかもしれない。

秀衡の母は、永衡の妻の兄安倍宗任の娘である。蝦夷の娘といわれる国衡の母が、伊具郡の永衡と安倍頼時の娘との孫娘だったとしたら、高蔵寺阿弥陀堂は、国衡の母が祖父永衡と滅亡した安倍一族の慰霊のために建立したのかもしれない。私の想像は広がっていった。

【高蔵寺と刈田経元】

高蔵寺の所在地である角田市高倉（旧伊具郡西根村高倉）は、今でこそ過疎の山村だが、日本海側の新潟市から本州を横断して太平洋側の相馬市に至る国道一一三号の中間に当たり、高倉（高蔵）の名前通り、高床式倉庫群が置かれた交通の要衝地だったのだろう。

高蔵寺から国道一一三号を西に九キロの白石市（旧刈田郡白石町）は、後に奥州藤原氏初代となる清衡と同母兄弟の刈田経元が後三年の役で兄清衡と共に戦い、その軍功で源義家から刈田と伊具の二郡を与えられ、刈田郡白石に土着して刈田氏を称したといわれている。

清衡と同母弟の刈田経元の父が、藤原経清なのか、母が再嫁した清原武貞なのか気になるところだが、前九年の役に敗れて父経清と共に斬殺された兄経光と同じ経の緯であるところから、経清が父だったに違いない。

経元が恩賞に与えられた伊具は、父経清の所領だった亘理郡の西隣に位置、前九年の役で源頼義に謀叛の嫌疑で斬殺された伊具十郎と呼ばれた平永衡の領地であり、経元がその永衡の旧領を引き継いだことになる。

伊具と刈田を領した経元は、二郡の真ん中になる高倉の高蔵寺に、叔父永衡と兄経光を弔う阿弥陀堂を建立して、後に秀衡が永衡の血を継ぐ国衡の母の願いで阿弥陀如来像を寄進したのかもしれない。

〈2〉亘理町に藤原経清を訪ねて

【大津波に襲われた亘理地区】

二〇一一年三月十一日の東日本大震災から一年半、宮城県南部の実家から真東に十六キロの亘理町で復興マラソン第一回大会が開催されるという情報に、宮城県出身ランナーとして参加しなければと早速エントリーした。

マラソンコースになる荒浜地区は、内陸に育った私にとって唯一の身近な海だった。背丈以上の高い波に立ちすくんでしまった幼い思い出や、満ち潮に置きっ放しの衣類を濡らしてしまった思い出などが懐かしい。

大会開催地の亘理町は、東北第二の阿武隈川が太平洋に注ぐ河口に位置し、温暖な気候を利用した果樹や花卉の栽培が盛んで、イチゴは東北第一位の出荷量である。

しかしこの平坦な立地が災いしたのであろうか。大津波が内陸深くまで広範囲に押し寄せ、町の面積の四七％が浸水、荒浜などの沿岸地域は壊滅的被害を受けて、五六〇〇棟の住宅が全半壊、町民の死者・行方不明者は計三〇五人に達したという。

首都圏在住の宮城県出身者で組織する団体に所属してチャリティーコンサートの開催による復興支援活動に関わってきたが、一日も早く被災地に伺い、犠牲となった多くの御霊に鎮魂と安寧の祈りを捧げたいと思っていた。

【亘理は奥州平泉のルーツ】

宮城県南東部に位置する亘理地方は、奥州藤原氏初代清衡の父藤原経清が亘理権太夫と呼ばれて拠点にした、いわば奥州平泉のルーツとも言える土地である。

陸奥国の奥六郡（岩手県中部）を領して勢力を伸ばし朝廷に従わない俘囚長安倍頼時を、朝廷が源頼義を陸奥守に任じて征討させた「前九年の役」で、在庁官人として陸奥国府多賀城に勤めていた藤原経清は、当初朝廷軍に従っていたが、共に頼時の娘を妻にする盟友平永衡が裏切りの疑いで頼義に斬殺されると、相婿の自分にも嫌疑がかかることを恐れて安倍氏側に走ってしまう。

黄海の戦いで安倍氏に大敗した頼義は、出羽の俘囚長清原氏の援軍を得てようやく安倍氏を倒し、経清も捕縛されて斬殺されるが、経清の子清衡は、母が再婚した敵将清原武貞の養子となり、成長した清衡は、清原氏の内紛に乗じた「後三年の役」で奥羽全域を制覇、後に奥州平泉政権を樹立していく。

我々の知る藤原経清は、軍記物語「陸奥話記」を基にした高橋克彦氏の小説「炎立つ」とＮＨＫ大河ドラマで渡辺謙演じる経清だが、改めて「炎立つ」を読み直してみると、なぜ宮城県南部の経清と永衡が、遠く岩手県中部の安倍頼時の娘婿となり、蝦夷の安倍氏と命運を共にしてしまったのか、という素朴な疑問を抱いた。

経清と永衡の名が史料に初めて登場する「陸奥話記」に「干時頼時聟散位藤原朝臣経清平永衡等。皆叛舅以私兵従将軍」とあり「この時、安倍頼時の娘婿である藤原経清と平永衡等もまた、皆、舅の頼時に背いて、私兵を引き連れて鎮守府将軍の源頼義に付き従った」とある。

私兵を引き連れて参軍したとは、二人は多賀城の在庁官人ではなく、地方の一豪族だったのかもしれない。

宮城県南部在住の経清と永衡が、遠く北に一三〇キロの胆沢城に詰めていた可能性を思わせる史料があった。

胆沢城は、八〇二年に征夷大将軍坂上田村麻呂が陸奥国胆沢郡（岩手県奥州市水沢）に築城、多賀城から鎮守府を移して陸奥の蝦夷を統治する行政軍事の拠点とした。

昭和五八年の胆沢城跡発掘調査書によると、胆沢城跡から出土した漆紙文書に、宮城県南部の柴田郡から徴発した人員の名簿が記されていたというのである。

漆紙文書とは、不要になった行政文書が漆桶の蓋紙に使用され、文字面に漆が付着して腐食を免れて後世に残った史料で、一〇人の人名・年齢・郷名・戸主名が記されており「和名類衆抄」によれば陸奥国柴田郡の郷名で柴田郡から胆沢城へ貢進された兵士歴名簿だったという。

当時の陸奥国の軍制は、武蔵国や上野国など東国から徴発されて城柵に常勤する鎮兵制と陸奥国内から徴発された兵士が分番勤務する軍団兵士制の二本立てだった。

軍団制は、治安維持と蝦夷征討を目的に七〇一年の大宝令で定められ、承和一〇年（八四三年）当時は「類衆三代格」によると、陸奥国に名取団・玉造団・白河団・安積団・行方団・小田団・石城団の七軍団が置かれて、その指揮官の大毅には郡司が選ばれていたという。

宮城県南部の名取団は、宮城県北部の玉造団と小田団と共に、胆沢城鎮守府の守備を担っており、胆沢城跡の漆紙文書から、名取団に名取郡の南西隣の柴田郡から兵士が徴発されていたということは、柴田郡の東隣の亘理郡と南隣の伊具郡からも兵士が名取団に徴発されていた可能性があり、亘理郡司の経清と伊具郡の永衡が、名取団の大毅として胆沢城に赴いて、そこで相対する奥六郡の俘囚長安倍頼時と接点が生まれたのかもしれない。

安倍頼時が二人を婿に迎えた狙いは何だったろうか。

「陸奥話記」に「横行六郡。却略人民。子孫尤滋蔓。漸出衣川外」とあり、岩手県中部を本拠にする頼時は、蝦夷と朝廷を境する衣川より南を目指していたという。

前九年の役の発端となった鬼切部の戦いは宮城県北部の玉造郡鳴子町、源頼義率いる国府軍を打ち破った黄海の戦いは一関市藤沢町、いずれも衣川以南である。

国府のある多賀城から更に南の亘理の経清と伊具の永衡と誼を結ぶ政略結婚により、多賀城包囲網を構築して陸奥を制覇する遠大な構想を抱いていたに違いない。

【安倍氏の出自】

安倍頼時は、陸奥国奥六郡を支配した俘囚長といわれている。俘囚とは、朝廷に服属した蝦夷をいうが、前九年の役の顛末を描いた「陸奥話記」の冒頭に「六箇郡之司有安倍頼良者、是同忠良子也。祖父忠頼東夷尊長」とあり、俘囚の字は「下毛野興重等、奥地俘囚」と「出羽北俘囚主、清原眞人光頼」の二ヶ所にあるだけである。

陸奥話記の作者は、陸奥の安倍氏を東国に住む蝦夷の酋長、下毛野氏を俘囚、出羽の清原氏を俘囚の主と使い分け、安倍氏を俘囚とは見ていなかったようである。

前九年の役で朝廷軍に味方した清原氏には、八色姓の最高位の眞人を付しているが、朝廷に反抗した安倍氏には、国司の下で郡政に当たる郡司ではなく、律令制に定めもない郡之司という曖昧な肩書を付している。

安倍氏が奥六郡を実効支配していることを認めてはいるが、安倍氏を俘囚ではなく朝廷に服属しない東夷の酋長と蔑んでいたように思えるが、果たして安倍氏は、本当に朝廷に服属しない蝦夷だったのだろうか。

安倍氏の出自について、東征してきた神武天皇に殺された長脛彦の兄安日彦、崇神天皇が派遣した四道将軍の大彦命、斉明天皇期に蝦夷を征討した阿倍比羅夫を始祖とする諸説あり、いずれも陸奥の蝦夷とは見ていない。

安日彦説は、日向の高千穂から東征してきた神武天皇に殺された畿内王長脛彦の兄安日彦が、北陸経由で津軽に逃れて日高見国を建国し安倍氏の祖となったとする。

大彦命説は、第八代孝元天皇第一皇子大彦命が、崇神天皇一〇年に北陸、東海、西道、丹波に派遣された四道将軍の一人で北陸道を平定、阿倍臣、膳臣ら七族の始祖とされる。埼玉県行田市の稲荷山古墳で出土した鉄剣の銘文にある意富比垝が大彦命、杖刀人が丈部、乎獲居臣が阿倍臣に比定されており、孝元天皇は架空とされる欠史八代の一人だが、大彦命は実在していたようである。

その大彦命を祖とする阿倍内麻呂の傍系といわれる阿倍比羅夫が、斉明天皇四年（六五八年）に船軍一八〇隻を率いて蝦夷を征討、降伏した蝦夷の酋長に冠位を与えて郡領を定め饗応したと日本書記にあり、東国に同化土着して陸奥安倍氏の始祖となったともいわれている。

「続日本記」の神護景雲三年（七六九年）に陸奥大国造の道嶋嶋足が陸奥国豪族の六四人に一括賜姓を請うとあり、丈部氏十五人に安倍・阿倍臣が賜姓されていた。

丈部氏は、陸奥国に同化して俘囚扱いされていたが、阿倍氏との同族関係を主張して本来の姓への復姓を求めて承認される形で阿倍臣への改賜姓を獲得したという。

安倍臣の賜姓に、出雲族の安日彦、四道将軍の大彦命、蝦夷征討の阿倍比羅夫への憧憬があったのかもしれない。

一括賜姓を申請した道嶋嶋足とは何者なのだろうか。上総国から陸奥国牡鹿郡に移住してきた豪族の丸子一族で、七五三年に牡鹿連の姓を賜わり、後に牡鹿宿祢、道嶋宿祢に改賜姓、一地方官ながら中央に進出して、正四位上まで異例の出世を果たしたといわれている。

奇しくも嶋足が牡鹿連を賜姓された四年前の七四九年に、牡鹿郡の西隣の小田郡で黄金が発見され、陸奥国守百済王敬福が聖武天皇の大仏開眼に黄金九百両を献上、慶事として天平感宝に改元、獲金人として上総国の丈部大麻呂と小田郡の丸子連宮麻呂ら三人が行賞されており、嶋足は行賞された宮麻呂と同じ丸子一族である。

敬福は滅亡した百済王の子孫で、金鉱開発のため百済技術者を率いて陸奥国に赴任、一時上総守に転任しており、砂金探査のため砂鉄産地の上総国から鉱業の知識と経験ある丈部と丸子氏を連れてきたのだとしたら、その中に嶋足がいたのかもしれない。七五三年の嶋足の牡鹿連賜姓には、黄金の発見と採掘に功があったに違いない。

牡鹿連嶋足は、黄金と武勇の力で中央に進出したのであろう。坂上田村麻呂の父刈田麻呂と共に、七五七年に大納言藤原仲麻呂に荷担する有力な武人となっている。

後に孝謙上皇の寵愛する道鏡に組みして、七六四年の仲麻呂謀反では、御璽と駅鈴を奪い返す武功を挙げて従七位上から従四位下に大昇進、宿祢を賜姓されている。

七六七年に道嶋宿祢嶋足が陸奥国大国造に任命され、同族の道嶋宿祢三山も陸奥国造に任命されて胆沢方面の征夷の前線基地として伊治城の造営を担っており、嶋足の一括賜姓申請は、広大な陸奥国の國造を統括する支配体制確立のため、関東から引き連れてきた下民や服属する蝦夷や俘囚への賜姓による公民化だったかもしれない。

「日本三代實録」の貞観十一年（八六八年）に「陸奥国柴田郡権大領外正八位上阿倍陸奥臣永宗、名取團大毅外正六位上刑坂宿祢本継、並授借外従五位下」とあり、柴田郡郡司と名取団長官が、同日付けで外従五位下に同時に昇叙しており、柴田郡司の阿倍陸奥臣永宗が、名取団長官と共に陸奥の蝦夷鎮圧に武功があったのだろう。

道嶋嶋足の一括賜姓で、柴田郡司の丈部豊主に安倍陸奥臣が賜姓され、その子孫と思われる柴田郡司の阿倍陸奥臣永宗が名取団に参軍して胆沢城に派遣され、その子孫が胆沢地方に土着、後の奥六郡之司安倍頼時だったという可能性はないだろうか。想像は広がってくる。

【藤原経清の陸奥下向】

経清はいつ頃に陸奥に下ったのだろうか。経清の父頼遠は、朝廷に謀叛して東国の独立を目指した平将門の乱を鎮圧した藤原北家藤原秀郷の五代後裔で尊卑文脈に下総国住人とあり、経清は、永承五年（一〇五〇年）に陸奥守として下向した藤原登任に同行したといわれている

が、その翌年に起きた鬼切部の戦いで、敵方の安倍頼時の娘婿として、藤原登任率いる国府軍と戦っている。その変わり身の早さに驚かされるが、本当に経清の陸奥下向は、登任の下向した永承五年だったのだろうか。

永承二年（一〇四七年）の「造興福寺記」に「経清六奥」の記載あり、六奥が陸奥ではなく奥六郡の意とすると、登任下向の三年前に既に経清は安倍氏の本拠地にあって経清六奥の名で興福寺再建の寄付要請名簿にリストアップされる程の名声を京に轟かせていたことになる。

永承五年の登任下向より以前に、経清が陸奥に入っていたとすると、前任の源頼清の下向時なのかもしれない。「造興福寺記」の永承三年（一〇四八年）に「前陸奥守源頼清四位」の記載あり、陸奥守の任期五年として、頼清の陸奥守への着任は一〇四三年より前、その頃に経清も頼清に随行して陸奥に下向したのではないだろうか。

平安時代後期の「中外抄」に、河内源氏の祖とされる源頼信が関白頼通に「太郎頼義をハ武者ニ仕御せ、頼清をハ蔵人ニ成給」と推挙したとあり、蔵人とは秘書職のこと、長男頼義には武人の適性があるが、次男頼清には武人というより文人としての適性があったようである。

一〇四三年前後に陸奥守に着任した頼清は、武力による威嚇ではなく、文官としての才覚を発揮して蝦夷社会との融和を図り、俘囚長安倍氏と良好な関係を構築していたに違いない。そんな文人肌の穏健な頼清に同行して陸奥に下った経清も、地元に土着して陸奥俘囚長の安倍氏と蜜月関係を築いて、やがて頼時の娘婿となっていったのではないだろうか。

永承五年に頼清の後任に藤原登任が陸奥守に着任すると、翌年には安倍頼時との間で鬼切部の戦いが勃発しており、前任の温厚な頼清とは違った強圧的な登任の施政がその原因だったに違いない。経清の叛意は、頼清から登任への陸奥守交代に一因があったのかもしれない。

古代東国の歴史は、朝廷への抵抗の歴史でもあった。前九年の役の一一〇年前に常陸国で起きた平将門の乱では、国衙と対立した将門が、国府軍を打ち破って印綬を没収し、関東を制して新皇を自称、その八九年後には、房総三国で国衙に反抗する平忠常の乱が起きている。

陸奥話記に、頼義が國解で「衣川関を出でて、使いを諸郡に放ち官物を徴納し、白符（経清私印の徴収書）を用ゆべし、赤符（国府の赤い判を押した徴収書）を用ゆべからずと命ず」と、経清が朝廷の治政に謀叛を起していると訴えていたとある。

陸奥に土着した経清は、先住の蝦夷との共存共栄を願い、朝廷に反抗した将門や忠常と同じ夢を追い求め、やがて陸奥蝦夷の安倍軍の中核を担って、奥州の自治を求める蝦夷に心を寄せて命運を共にしていったのだろう。

【亘理郡衙に藤原経清を訪ねて】

二〇一二年十一月の亘理町で開催される「わたり復興マラソン」に参加すべく前日に帰省、翌朝早く東北本線の岩沼で常磐線に乗り換えたが、マラソンのスタートまでまだ時間があり、一つ手前の逢隈駅に途中下車した。

逢隈駅の西側丘陵にある陸奥国亘理郡衙（郡役所）跡と伝えられる「三十三間堂官衙遺跡」に向かった。

福島県西白河を源流に福島県中通りから宮城県南部を北上する阿武隈川が、柴田郡槻木で東に折れて太平洋に注ぐ右岸に囲まれた亘理郡は、海岸沿いを北上する浜街道が行き止まる地形にあり、阿武隈川の左岸から北に広がる蝦夷の支配地と対峙する朝廷側にとって、軍事・政治・経済の重要な拠点の立地にあった。

駅裏手の雑木林の中を一〇分ほど登ると、案内板に「古くから礎石が整然と並んで寺院跡と考えられていた」とあり、京都の三十三間堂を彷彿させる礎石群からこの名称がついたらしい。昭和六一年からの発掘調査で九世紀から一〇世紀前半の亘理郡衙跡と判明したという。

標高四〇mの東斜面に東西五〇〇m、南北七五〇mの広大な敷地で、道標に北地区（実務官衙域）と南地区（倉庫院）の案内があり、南地区は倉庫二棟分の礎石が露出したままだが、北地区はすっかり埋め戻されていた。

北地区の説明板に、東西六〇m、南北六五mの塀に囲まれて、南門と東門が設けられた郡庁院に正殿などが建ち並んでいたとあったが、一世紀後の経清の時代には、郡衙としての機能は無くなっていたらしい。

北の阿武隈川と東の太平洋を眼下に臨みながら思い浮かんできた経清は、北に三〇キロの国府多賀城に通う一在庁官人ではなく、阿武隈川の対岸に広がる蝦夷の世界を睥睨する亘理の王たる経清の姿だった。

経清が東夷酋長安倍氏と繋がりを持って奥州藤原氏の祖となっていった歴史ロマンに浸りながら、常磐線で次の亘理駅で下車、マラソン会場の荒浜中学校に向かった。

【藤原経清の中島館を訪ねて】

「わたり復興マラソン」（まんじ一四五号に詳述）を無事完走したあと、応援に来てくれていた田舎の友人の車で隣の山元町にある経清の中島館跡に向かった。

亘理町から太平洋岸に沿って国道六号（陸前浜街道）を南の相馬方面に一〇キロ程走ると、道路沿いの小山の裏側に「中島館跡」と書かれた白杭が見えてきた。

国道六号の反対車線の空地に車を停め、本降りになってきた雨の中、傘を差して細い山道を少し登ると、樹林に囲まれた広い主郭部が開けてきた。

高低差二〇mほどの小山で、周囲が切り立った一辺四〇m程の方形の館跡である。山元町教育委員会の案内板に「中島館跡は、諸説様々ではあるが、亘理権太夫藤原

経清の居館であったと言われている。経清は、奥州平泉の地に黄金文化を築いた藤原清衡の実父であり、事実であるのならば、奥州藤原氏ゆかりとして歴史上由緒ある館跡である」とあった。

近くに合戦原遺跡や八基の古墳跡があり、内一基は朝廷の支配権の象徴である前方後円墳である。経清が土着する数世紀前からここ亘理郡は、朝廷の支配下にあって蝦夷征討軍の兵站の役も担っていたのでないだろうか。

経清の孫で清衡の四男清綱が、亘理権十郎と呼ばれており、清綱の娘乙和子姫が福島県北部の信夫荘司佐藤基治に嫁ぎ、後に義経に従った佐藤継信・忠信の母である。経清亡き後の中島館の主は、清綱だったかもしれない。

経清の中島館を訪ねたついでに、藤原氏の氏神である武甕槌神を祀る鹿島天足和気神社に向かった。国道六号を山元町から北へ十一キロほど戻り、亘理駅の西側に当たる美しく整備された亘理公園に駐車、山麓に鳥居が見えて、石段を上ると正面に拝殿が現れてきた。

武甕槌神は出雲の大国主神に国譲りさせた武神、案内板の由緒に「延暦元年（七八二年）五月朔日、征夷に神験があったので勲五等二戸加封された。貞観四年（八六二年）に官社〈鹿島宮〉となる」とあったが、阿武隈川以北の蝦夷を抑えるこの地に下向した亘理権太夫の藤原経清も、この藤原氏の氏神を参拝していたに違いない。

〈3〉角田市に平永衡を訪ねて

【平永衡の八竜城を訪ねて】

経清の中島館跡と鹿島神社まで来て、経清の盟友である平永衡の史跡を訪ねずに帰るわけにはいかない。

平永衡は、宮城県伊具郡の豪族で伊具十郎と呼ばれて経清とともに国府多賀城の在庁役人だったが、陸奥の俘囚長安倍頼時の娘を娶って、経清と相婿になっていた。

前九年の役の序盤では国府軍に属していたが、味方の讒言で安倍氏への内通が疑われ、永衡は陸奥守源頼義に斬殺されてしまう。このため永衡と相婿の経清も、裏切りの嫌疑を恐れて安倍氏側に走ってしまう。まさに前九年の役の悲劇の二人である。

亘理町の鹿島神社の拝観から南へ山元町に戻り、県道二七二号を角田方面に右折して、阿武隈山地を横断する山元トンネルを潜り、阿武隈山地の西側に出て、県道二八号線を丸森方面に左折南下、町並に入り角田市東端の尾山地区に入った。

古式な高魂神社の前を左折すると、排水路に沿った細い道の先に内町湖が現れた。湖の案内板に「みやぎ蔵王三十六景」とあり、面積十一ヘクタール、周囲一・七キロの人造湖で、冬には白鳥や鴨が多数飛来するという素晴らしい景勝地である。

内町湖の対岸に見える高低差四〇mの小山が八竜城跡である。湖沿いの非舗装道を進み、下車して藪の中を登山口に向かうと八竜城の案内板があった。

案内板に「内町貯水池から北面を眺めると対岸に二つの小山があり、北面は竹林、南面は杉林に包まれており、城郭は南面であったと思われ、現在、頂上部には愛宕神社がある。この城は平安時代末期頃に伊具十郎平永衡が築いたものと伝えられ、付近には八幡太郎（義家）と戦った「一ノ矢」「ニノ矢」「三ノ矢」などの古戦場があったと伝えられる」とあった。

山元町の中島館と阿武隈山地を挟んで東西に五キロ、まさに経清と永衡は隣組である。蝦夷を征討する朝廷軍の武将でありながら、蝦夷の安倍氏の娘を共に娶って頼義軍に斬殺されてしまった悲劇に思いを馳せてみた。

【平永衡の千人塚を訪ねて】

八竜城から北西に七キロほど、永衡終焉の地と伝わる千人塚に向かった。阿武隈川の角田橋を渡り、尾袋川に沿って田園地帯を北上、やがて樹林に覆われた小山の陰に「史跡千人塚」の白い標柱が見えてきた。

「伊具郡史」の「王朝時代の伊具郡」に「伊具十郎永衡ら走りて官軍に投ず。然るに十郎銀冑を戴いて官軍の陣に在りしに或人、源頼義に告げて曰く、永衡陽に降伏を表し陰に奸謀を挟む、其銀冑を戴ぐは敵に目標を示すが為なりと、依て頼義永衡を捕えて今の北郷村字花島の舊跡千人塚附近に之を斬り、其の一族一千人と枕を竝べて埋めたりと云ふ」とあり、大量虐殺があったという。

源頼義が陸奥守の任期切れで鎮守府胆沢城から国府多賀城に帰る途上で起きた阿久利川事件が切っ掛けとなって、休戦状態だった頼義と安倍頼時が対決する中で、永衡が讒言で頼義に斬殺されたのだが、阿久利川の比定される宮城県北部の築館から南に八〇キロも離れた角田市の千人塚が永衡終焉の地とは、俄かには信じられない。

高倉川を挟んだ北側に「若宮八幡宮」の赤い社殿が見えていた。源義家ゆかりの京都岩清水八幡宮の分祀である京都若宮八幡宮を勧進したという。傍らに横倉四五号墳の標柱が立ち、五・六世紀の横倉古墳群の北端に当たっており、南北二キロに連なる古墳群が、後世の人に永衡一族が埋葬された千人塚を想起させたのかもしれない。

〈4〉丸森町に安倍氏末裔を訪ねて

【深緑の阿武隈川畔を自主トレラン】

二〇〇八年八月に福島県保原市の伊達ももの里マラソン大会に参加した折、阿武隈急行の車窓に広がる、山並みを分けてゆったりと動く阿武隈川の威容に、いつかあの隈畔を自主トレで走ってみたい衝動に駆られていた。

後日、阿武隈川沿いの丸森町のホームページに、阿武隈渓谷のビューポイントを探すうち、平永衡の伝説や安倍貞任の陣地跡があり、奥州藤原氏のルーツである安倍氏の末裔が住むと伝えられる集落があることを知った。

そして丸森町文化財友の会の会報『炎ほのかなれど』の《伝説に見るもうひとつの炎立つ・平泉のモデルは伊具だった》という表題にも惹かれ、阿武隈川畔を走りながら平永衡と安倍氏を訪ねる自主トレランを計画した。

それにしても岩手県中部の奥六郡を地盤とする安倍氏の末裔が、なぜ二〇〇キロも南の宮城県南部の伊具郡丸森町の山奥に住んでいるのだろうか、

前九年の役の発端となった鬼切部の戦いは大崎市鳴子温泉付近、阿久利川事件は栗原市築館附近、いずれも衣川関の南に三〇キロの宮城県北部だが、陸奥話記に宮城県南部の丸森町界隈が戦場になったという記録はない。

前九年の役の終盤に出羽俘囚長の清原氏の助勢を得て安倍軍を打ち破った厨川の戦いは岩手県北部の盛岡市、安部貞任と藤原経清が斬殺されて戦いは終わったが、安倍氏が衣川以南の宮城県南部まで勢力を伸ばしていたとしたら、この伊具郡丸森界隈で安倍氏が朝廷軍を迎撃する前哨戦があっても不思議はないだろう。

伊具郡に土着して安倍の娘を妻に迎えた平永衡が、居城の八竜城を拠点にして、義兄の安倍貞任と相婿の経清と共に、阿武隈川沿いを北上してくる源頼義・義家を迎撃していたかもしれない。歴史ロマンの夢は広がった。

この前哨戦は「陸奥話記」に記録されることなく、英雄的な平永衡の存在が、芝居がかった裏切り讒言の作り話で惨殺されたのは、陸奥話記が勝者の源頼義・義家を礼賛する軍記物語だったからではないだろうか。

この地で朝廷軍に敗れた安倍軍は、宮城県北部に後退するが、一部はこの山奥に潜んだまま取り残され、その末裔が現代まで隠棲してきたのかもしれない。

二〇一〇年七月、参院選投票の期日前投票を済ませて前日夕刻に宮城県柴田郡大河原町の実家に帰省した。

翌朝七時半にランニングバックを背負い、東京マラソン二〇〇九のTシャツと黒のロングパンツ姿で、伊具郡丸森町の阿武隈川畔の自主トレランに出立した。

東北本線の槻木駅で第三セクターの阿武隈急行に乗換えると、車内放送が「古代文化の香り」と伝える横倉古墳群と水田風景を車窓に広がってきた。

丸森駅を過ぎ阿武隈山地に入ると、連続するトンネルの切れ間に連日の降雨で茶色の濁流と化した阿武隈川が見え隠れして、乗車三〇分程で、あぶくま駅に着いた。

無人ホームに隣接する大屋根の産業伝承館は、阿武隈ライン舟下りの乗船場にもなっており、丁度開店準備中だったが、増水のため今日の舟下りは中止らしい。

船着場に下りてみると、東北第二の大河は濁流と化し、深緑の山並みと巨岩迫る渓谷美は、まさに絶景である。

今日の予定は、あぶくま駅から阿武隈川西岸を上流へ南下して隣の兜駅までの六キロ、復路は東岸を下流に向けて二キロ、途中から山道の羽出庭街道に入り、安倍一族の末裔が住む小坊木地区を訪ねて、始点のあぶくま駅に戻る往復十二キロの歴史探訪ランである。

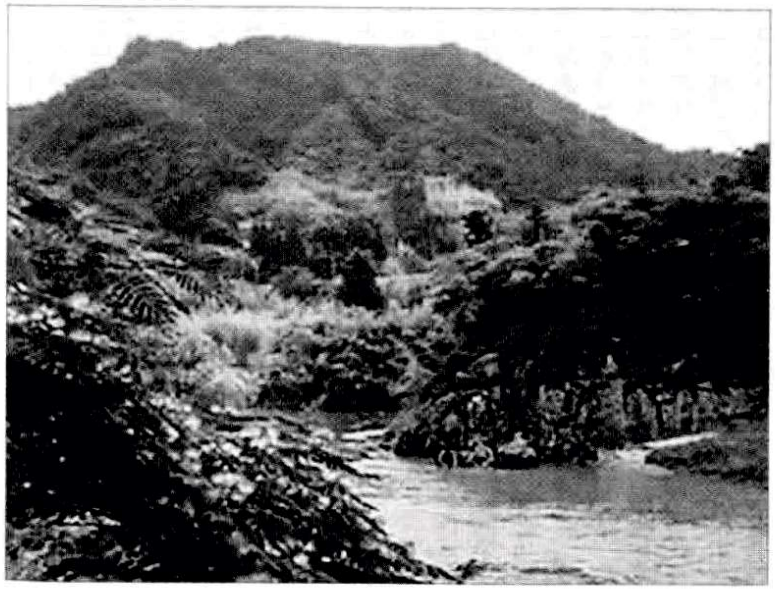
九時丁度に、あぶくま駅を出発、小鳥と渓流の奏でる森の山道を下るとまもなく眼下に分厚い茶色に変色した阿武隈川が現われ、その先に赤い鉄橋が見えてきた。

道端の大きなネムの木は、孔雀が羽を広げたような可愛いピンクの花で枝先を着飾っていた。羽出庭橋の中央に立つと、大河が山間から出て山間に吸い込まれていく三六〇度の壮大なパノマラ景観である。

羽出庭橋を対岸に渡り国道三四九号を福島県の梁川方面に向かった。山間部なのに意外に行き交う車が多い。勿論歩く人影はない。まして走っているのは自分だけ、すれ違う運転手の奇異な視線を感じながら、川面をコテ塗りしたような波紋でゆったり動く大河の景観に、車からは決して味わえないよと、妙な優越感を抱いていた。

車道の両側に竹林が多く、護岸用の植栽かと思われたが、阿武隈川の北側の耕野地区は「たけのこの里」と呼ばれて、タケノコの生産が県内一だという。

街道沿いの食事処の看板に「あがらっしゃい」（おあがりください）「たけのこ街道」の道標に「気いもまねで行ってこらい」（気持ちを焦らずに行ってらっしゃい）の方言には、思わずにんまりしてしまった。



素晴らしい景観にカメラの構図を考え、備忘のメモ取りで立ち止まることも多く、まともに走れていない。スタートして四キロを六〇分もかけていた。

川幅が急に狭くなりL字に折れて流れも激しく、対岸の巨岩が迫ってくるビューポイントで、手前の可愛いネムの花を入れてシャッターを切った（前頁の写真）。

国道三四九号の道脇に「兜の渡し跡」の石碑があり、錆付いた一メートルはあろう錨が繋がれていた。阿武隈川に兜橋が架けられる三〇年ほど前まで、公営の渡し船が運航されていたという。

兜の名の謂われについて、奥州に落ち延びる源義経が長途の旅に汚れた兜を洗った所とも、近くの岩が兜に似ているからともいろいろあるらしい。

対岸に阿武隈急行の兜駅舎が見えてきた。県境標識を越えて福島県梁川町に入った。昭和五五年に架けられた兜橋を渡り、始点のあぶくま駅に向かって折り返した。

往路六キロを一時間半、だいぶのんびり走ってしまった、少し真面目に走ろうとピッチを上げ、大河を横目にようやくトレランらしく二キロ程走ったところで、先程の川幅が最も狭くなる景勝地が眼下に見えてきた。

案内板に「猿跳岩」とあり、川幅が狭くなり急流の中に突き出た岩々を猿が群れをなして対岸に渡ったという。さすれば対岸の巨大な岩があの「潜り岩」なのだろうか。

前九年の役で、源義家の軍を迎え撃つ安倍貞任が、この川幅の狭くなった所をせき止め、上流の福島県信夫郡を水浸しにして義家の進軍を防いだとされ、その際に水位が一〇数メートル以上になり、この巨岩が水に潜ってしまったことから潜り岩の名が付いたといわれる。

三国志を彷彿させる壮大な作戦だが、一〇〇年後の奥州合戦で、北上してくる源頼朝の鎌倉軍を迎撃する国衡率いる平泉軍がここから七キロ上流の阿武隈川と阿津賀志山を結ぶ長大な防塁を構築しており、その史実が、貞任が義家を迎撃する話を創り出させたのかもしれない。

猿跳岩の手前に九龍神社の社があり、岸壁に小さな鳥居と祠が立っていた。阿武隈川がここで九つの滝になり上流の信達地方は湖だったという伝承があるらしい。

この滝が決壊すれば下流は大水害に見舞われてしまう。龍神様をお祀りして安全を祈ったのであろうか。もしかしたら、貞任が義家の進軍を防ぐため阿武隈川を堰き止めて出来た九つの滝だったのかもしれない。

ここから再び宮城県丸森町に入った。三叉路を右折して阿武隈川沿いのロードから山道の羽出庭街道に入り、安倍一族の末裔が住むという小坊木地区に向かった。

急な山道だがこれまで温存してきた体力全開である。樹林に見え隠れする渓谷のせせらぎと小鳥の囀りが飛び交い、薄日が差して木陰の爽やかな風が心地よい。

【丸森町小坊木に安倍一族の末裔を訪ねて】

これから安倍一族の末裔が住むと伝えられる小坊木地区に踏み込むのかと思うだけで身震いしてきた。

深緑に包まれた山間部に一〇〇〇年もの間、歴史の敗者として隠棲してきた安倍一族に思いを馳せてみた。

渓流に沿って蛇行する山道を一キロほど登ると樹林が開けて、道端の苔生した墓石が古の時代にタイムスリップさせてくれた。山間に美しい棚田が現われ、ポツンと一軒家のバス停小屋に「小坊木」の標識が立っていた。

山裾に見えてきた民家に、勇気を奮って飛び込んで「安倍一族の末裔が住んでいると聞いてやって来たが、お話が聞ける方を教えて欲しい」とお願いしてみた。

すると、阿部氏を名乗り安倍一族の末裔といわれる家は七軒あるが、適任の長老を紹介しましようと電話をしてくれたうえ、そのお宅まで車で送っていただいた。そのうえ、突然の来訪者に戸惑う長老を、本人の私以上に熱心に説得してくれたのには、驚きと感謝である。

玄関口に腰かけて、岩手県奥六郡の安倍一族の末裔がなぜこの地に住んでいるのか、歴史の文献に前九年の役がこの地で戦われたという記録はないようですが、と用意してきた疑問をぶつけてみると、まだ墨の香りがする和紙の綴り物を持ち出して、ご自分で調べ上げたという資料や伝承について物静かに語り始めてくれた。

この地で前九年の役の前哨戦が戦われ、安倍軍は破れて敗残兵の一部がここに隠れ住んだのではなかろうか。近くの赤柴山は安倍一族が源頼義を迎え討つための館跡と伝えられるが、砦というより見張り台で、頂上に金の鳥を埋めたという井戸跡らしき所があるが、頂上に水が湧くとは思えず雨水を貯めたものだろう、など地元の人でなければ語れない話に惹きこまれていった。

そしてこの近くのお堂に、安倍の子孫が安永四年（一七七五年）に観世音菩薩を納めたという記録があり、五〇年に一度しかご開帳されないが、自分の見た本尊は、縦三寸の小さな金属製仏像で、兜の飾りに付けた物かもしれない、と私見まで披露してくれた。

突然訪ねて二、三分だけでもと思っていたが、一時間近くお相手いただいた。そして安倍一族の末裔は、小坊木以外の丸森町大内地区にも住んでいますよと、見知らぬ訪問者に、伝承を勝手に誇張も歪曲もせず、控えめに丁寧に語ろうとする誠実さには感服した。

長老の話の中で観世音像が兜の飾りではないかという話に惹かれた。伊具十郎といわれた平永衡の名こそ出なかったが、敵対していた安倍軍に射らせない目印にしたとされる銀の甲冑の前立だったのではないだろうか。

長老宅を辞去して話に出た小坊木水月観世音に向かった。細い山道を登り詰めると森の奥にお堂が佇んでいた。

本尊の観音様は、月下の水上に浮かぶ一葉の蓮華の上に立つ一尺二寸の木仏坐像といわれており、長老の語っていた縦三寸の金銅仏像とは別物のようである。

お堂の扁額に「観世音」とあり、扉に盗難防止の錠前が掛けられて、堂内を覗くことは出来なかったが、五〇年に一度のご開帳を守り続ける安倍一族の祖先への頑なまでの強く篤い信心が伝わってくる。

羽出庭街道に戻って、長老宅に案内いただいたお宅に立ち寄り、御礼の挨拶と報告をさせていただいた。

やがて左手に青い屋根の丸森小羽出庭分校が見えてきた。入口に「ふかめよう心のふれあい」の看板が立ち、山間にこだまする子供たちの声が聞こえてきそうである。

校舎の背後に金の鳥が埋められたという赤柴山が迫っていた。標高三〇〇メートルの正三角形の山で、確かに大軍の陣地をあの狭い山頂に設営できるはずはないだろう。その山容を眺めていると、平泉の無量光院の西側に築山された金鶏山に似ていることに気付いた。

秀衡が頂きに黄金の雌雄の鶏を埋めて平泉の鎮護を祈願したように、羽出庭地区の西に立つ赤柴山にも富士山に因む名山霊岳崇拝があったのかもしれない。

ポツリポツリと雨粒が落ちてきた。スタートした「あぶくま」駅の産業伝承館に戻ったのは午後一時、往復十二キロを約四時間かかったことになる。朝に開店準備中だったおばさんが「おかえりなさい」と迎えてくれた。増水でライン舟下りが終日中止になり、閑散とした館内を独り占めして山菜そばをいただきながら、おばさんのご主人も加わり、しばし安倍一族談議となった。

羽出庭出身だというご夫婦が、安倍氏末裔の長老の話を補足してくれた。そして子供の頃に登った赤柴山の思い出を語って、最近子供達が学校の社会科授業で赤柴山に金の鳥を探しに行ったが無かったという話には、思わずあっと声を上げてしまった。

小坊木水月観世音の菩薩像が兜の飾りの前立だったように、赤柴山に埋められたという金の鳥も、兜の飾りの前立だったのではないだろうか。金と銀の違いはあるが、裏切りを疑われた平永衡のきらびやかな銀の甲冑の前立だったとしたら、永衡はここで斬殺され、その首も兜とともに赤柴山に埋葬されたのかもしれない。

大変な発見をしてしまった興奮に打ち震えて、伝承はなんらかの事実があるから生まれる、火のない所に煙はたたないですよね、と三人の話は盛り上がっていた。

帰路の車窓に阿武隈川を眺めながら今日一日の収穫を反芻した。角田駅に途中下車して老人施設にいる父に今日の自主トレランを報告したが、一刻も早く帰京して「陸奥話記」の原文を読み直し、自分の仮説を裏付ける史料を見付け出したい欲求に駆られていた。

【福島県：奥州藤原氏のルーツを訪ねて】

〈1〉奥州藤原氏と海道平氏

二〇〇九年秋に角田市の高蔵寺の住職に教えてもらった藤原経清と平永衡の足跡を訪ねる中で、平氏、特に福島県浜通りを本拠にした海道平氏の名がしばしば登場してくることから、いつの日か、海道平氏と浜通りの磐城地方を訪ねてみたいという思いを募らせていた。

奥州藤原氏と平氏との繋がりを思いつくまま列記してみると、経清の父が下総国住人で母が出羽国の武将平国妙の妹だったこと、経清の盟友である平永衡の父も同じ下総国の平氏一族といわれること、清衡が母の連れ子で養子に入った清原家の当主真衡に男子なく岩城の海道平氏から成衡を後嗣に迎えたこと、後三年の役の終盤で清原家衡を支援した清原武衡が岩城三郎の通称で磐城郡を領していたことなどがある。

私の奥州藤原氏探訪のバイブルといえる高橋富雄著「奥州藤原氏四代」（人物叢書出版：昭和三三年初版）に、奥州藤原氏を支えた平氏についての論述があった。

初代清衡が己の霊廟として建立した金色堂の屋台骨の棟木に、天治元年（一一二四年）銘で「大壇散位藤原清衡」その下に「女壇」とあり「安倍氏・清原氏・平氏」が連名で墨書されていたという。

著者の高橋富雄氏は、棟木墨書女壇の「安倍氏」は、母の安倍頼時娘を指し、「清原氏」は、清衡の養子先の清原氏女の中の一人で清衡の妻となり藤原氏の中に清原氏を生かし続けて行くことになった人であろう。女壇の「平氏」については、安倍氏や清原氏のような奥羽又はその周辺の名のある在地族長としての平氏の出で、清衡の北方（正室）であろうと書いていた。

高橋富雄氏は、更に平氏女として、父経清に並ぶ平永衡や平孝忠、平国妙など平姓氏の女か、清原武衡の娘が嫁いだ越後の城平氏出の女などを想定していたようだが、清衡が娘徳姫を海道平氏の岩城氏に嫁がせ、武衡が岩城三郎の通称を持つから、女壇の平氏は、出羽の清原氏と血族関係にある海道平氏なのではないかと思えてきた。

平氏は、八八九年に桓武天皇の孫高望王が平氏の姓を授けられて臣籍降下、上総介に任じられたことに始まる。高望の長子国香が常陸大掾職に任じられ坂東平氏の始まりとされ、平将門の乱を起こした同族の将門を倒した国香の長子貞盛は、伊勢平氏の流れとなり後の清盛に続き、貞盛の弟繁盛の子達が常陸平氏・越後平氏・信濃平氏・海道平氏の祖となり、海道平氏の祖安忠の子則道が岩城郡に土着して岩城氏を名乗ったといわれる。

「桓武平氏諸流系図」に、安忠の子として岩城則道のほか清原武則や平永衡、孫に清原成衡の名が出てくる。

この系図の真偽の程は不明だが、いずれにせよ安忠を祖とする海道平氏が、出羽清原氏と奥州藤原氏に大きく関わっていたことだけは事実のようである。

都人に蔑まれてきた蝦夷社会に先住土着した豪族にしてみれば、臣籍降下してきた天皇家の血を引く貴種平氏を婿に迎えることは、家格を高め武家として権威付ける有効な手段だったのだろう。

〈2〉白水阿弥陀堂を訪ねて（二月十二日（土））

福島県いわき市内郷に、私を奥州藤原氏のルーツを訪ねる旅に誘ってくれた角田市高蔵寺と共に東北三大阿弥陀堂の一つといわれる白水阿弥陀堂があり、二〇一一年二月の「いわきサンシャインマラソン」に参加しながら願成寺白水阿弥陀堂を訪ねる機会がきた。

白水阿弥陀堂は、海道平氏の岩城則道に嫁いだ清衡の娘徳姫が、永歴元年（一一六〇年）三月、亡夫の冥福を祈る阿弥陀堂を創立して、徳姫の故郷奥州平泉の泉を分字して白水と名付けたと伝えられている。

しかし二つの文字を合字することはあっても、二つの文字に分けることがあるだろうか。素朴な疑問を抱いた。

「平泉」の地名の由来について、平らな泉の湧く所とする酒泉伝承の外に、中尊寺の鎮守に勧進した白山神社の霊応山平泉寺に梵鐘を寄進した秀衡の白山信仰から平泉寺に由来したという説があるらしい。

奥州平泉の由来とされる越前平泉寺の寺号が確認できる最古の記録は一一六三年、越前の白山「平清水別当」が「平泉寺別当」と記されるようになったのは嘉応二年（一一七〇年）頃からで、いずれも秀衡の時代である。

平安時代後期に平泉を二度訪れている西行法師の歌集「山家集」の歌「とりわきて心も凍みて冴えそわたる衣川見に来る今日しも」の詞書に「十月十二日に平泉にまかりつきたりけるに」とあり、凍てつく冬の来訪から最初に訪問した一一四四年頃とすると、二代基衡の時代に平泉の名が既にあったことになるが、二度目の訪問（一一八六年）から帰京して歌集を編纂する際に平泉の呼称を使ったのだとしたら秀衡の晩年ということになる。

平泉の地名が史書に現れるのは「吾妻鏡」の文治三年（一一八七）一〇月二九日の条「今日秀衡入道、於陸奥國平泉舘、率去日来重病」が初見といわれている。

いずれにせよ平泉の地名は秀衡の時代に生まれ、白水阿弥陀堂が創立された時期に平泉の地名はまだ無かったとしたら、泉を分字した話は、いわきの白水を奥州の平泉に紐づけたい後世の作り話なのかもしれない。

「白水」が奥州の平泉と全く関連がないとすると何に由来するのだろうか。越前の平泉寺を調べる延長線で、山形市平清水にある「平泉寺」のHPに寺号の由来について「本尊の大日如来にお水を差し上げようと、錫杖で

地面を衝いたところ、白い蛇が出てきてコンコンと水が湧き出したという。この池から寺号が平泉寺となりこの地域が平泉水（かつては平白水、白と水を組み合わせて泉となる）と呼ばれるようになった」とあった。

白水の由来が泉ではなく白い水とすると、いわき市の白い水とはなんだろう。近くに道後・有馬と並び日本三古湯とされる湯本温泉がある。湯本温泉の湯水は、白いのだろうか。いわき探訪の楽しみがまた一つ増えた。

二〇一一年二月の裏日本は記録的な豪雪だったが、関東は前日に初積雪となった。薄日の差す中、午前九時に埼玉の自宅を出立、上野駅で常磐線に乗り換えた。

千葉県北部の下総国、茨城県の常陸国を通過すると、太平洋の大海原と打ち寄せる白波を車窓に広がり、海の青と空の青に、先日の軽井沢の尺八合宿で演奏した若山牧水の「白鳥」を口ずさんでみた。

・・白鳥は　哀しからずや　空の青
　　海のあをにも　染まずただよふ・・

いわき駅の一つ手前の内郷駅に着いたのは昼を回っていた。駅前タクシーの運転手さんに白水阿弥陀堂と告げると「今朝の雪で阿弥陀堂はきっと綺麗ですよ。春は山桜が、夏はハスの花が、秋はイチョウの黄葉と周りの山々が紅葉になって四季を通して美しい所です」と埼玉からの来訪者に親しく観光ガイドしてくれた。

昔は田圃の中に阿弥陀堂だけだったが、昭和三〇年頃に発掘調査が始まり、現在の浄土庭園は昭和四七年から復元されたという。平泉から輿入れした姫様にお供した子孫がここに定着して三十三軒が残っているという興味深い話が佳境に入ったところで、タクシーの正面に宝形造柿葺きの阿弥陀堂が見えてきた。

参道の梅が咲き始め、左右に広がる苑池に数羽の白鳥が浮遊して、正面奥に流麗な反りの屋根に残雪を頂いた白水阿弥陀堂の姿が、絵画のように美しい（次頁写真）。

永歴元年（一一六〇年）に建立、平安時代の建物では福島県唯一の国宝に指定されているという。背後の山々を借景にする苑池に直列に浮かぶ二つの中島を結ぶ反り橋と平橋は、俗世と極楽浄土を繋いでいるという。二つの橋を渡り、極楽浄土の阿弥陀堂の前で合掌した。

お堂の扉を開けると、薄暗い正面に大きな透彫の光背を持つ本尊阿弥陀如来が厳かに座していた。両脇に控える脇侍像と天王像の各二躯も国重文である。慈愛に満ちた微笑みの尊顔の前に正座して合掌した。

高蔵寺の阿弥陀堂より広く感じられ、入口に控えていた係人に「高蔵寺より広いですね」と声掛けしてみた。「同じ大きさですよ」との返事に「高蔵寺は五メートルの巨漢なので堂内が狭く感じられたのですかね」と、独りになるのを見計らい予ねての疑問を投げかけてみた。

「何故、清衡は奥州平泉から遠く南に二〇〇キロも離れたこの地に娘を嫁がせたのでしょうか」

「何故、当時の西方浄土思想に反して、東向きではなく南向きに建てたのでしょうか」

「白水の地名は、平泉の泉を分字したと謂われているが、文字を合成することはあっても、文字を分けるということはあるのでしょうか。素直に白い水を起源と考えて、温泉の白い湯からきたのではないでしょうか」

係の人は「奥州藤原氏は陸奥国の南端の岩城氏を味方に引き入れて防御を固めようとしたのではないでしょうか」そして南向きに関して興味深い話をしてくれた。

「京と平泉では浄土思想が違っていたようです。京では来世に極楽浄土を求めていたが、平泉では現世に極楽浄土を求めていた。京では死後に浄土に行けるよう念仏を唱えていたが、平泉ではこの世に浄土の世界を作るべく寺院伽藍中心の理想都市を建設した」

「藤原清衡は父や妻子を惨殺され多くの命を奪った戦争の二度と起こらない平和な世界を平泉の地に建設しようとしたのです。それゆえ平泉には城も造られなかったし、戦いを外に向かって仕掛けることもしなかった」

「白水阿弥陀堂がなぜ南向きに建てられたかは分からないが、実は平泉の毛越寺も南向きなんです」という説明には思わず、あっと声を上げてしまった。

「毛越寺も南向きとは知りませんでした。そういえば平泉の長者ケ原廃寺の礎石が南向きに並んでその先に中尊寺の関山がありました。平泉には宇宙の中心である北極星の方位を上座とする信仰があったのでしょうか」と

いわき市内郷の白水阿弥陀堂



尋ねると「奥州には京からの情報も少なく、違った文化や信仰があったかもしれませんね」とお話を頂いたところで、団体の拝観者がぞろぞろ入ってきた。まだまだ話を聞きたかったが、謝辞して阿弥陀堂を退出した。

確かに白水阿弥陀堂の浄土庭園の配置も背後に経塚山を配する景観も、奥州平泉の毛越寺にそっくりである。

帰りのタクシーは朝と同じ運転手さんだった。早速に「ここの温泉の色は何色ですか」「無色透明ですよ」「白くはないんですか」「無色透明の硫黄泉だけど、空気に触れて酸化すると乳白色になりますよ」の答えに狂喜した。白水の由来は、平泉の泉ではなく温泉の白い湯水なのではと、運転手さん相手に持論を捲し立てた。

〈3〉いわきサンシャインマラソン（二月十三日）

いわき市は、福島県浜通り南部の市町村が合併して誕生した県内最大の都市で、沖合を寒流と暖流が交わる影響で気候が安定、年間日照時間が東北で最も長く、積雪量も東北では最も少ない常夏の楽園といわれている。

明治初めに大規模な炭鉱開発が行われ、首都圏に近い鉱工業地帯として発展を遂げたが、戦後のエネルギー革命で斜陽産業となり昭和五一年に常磐炭鉱は閉山された。

その後、町興しの一環として炭鉱の地下湧水温泉を活用した常磐ハワイアンセンターが日本初のリゾートテーマパークとして誕生、当時まだ夢だったハワイ旅行の代役として国民的なレジャー施設として愛されたという。

いわき市内のホテルで開催されたマラソン大会の前夜祭で披露されたフラダンスショーはその象徴であり、いわき市はまさにフラガールの故郷である。

一昨日からの全国的な降雪で久方ぶりの雪化粧となったが、今日は雲ひとつないまさにマラソン日和である。

いわき駅前にライトブルーの大会幟が立ち並んでいた。四〇年前にこのライトブルーのユニフォームで夏の甲子園を沸かした小さな大投手田村を擁する磐城高校の活躍が髣髴されてきた。準優勝を遂げて斜陽の「炭鉱の町」の希望となった活躍に日本中が熱狂したものである。

駅前からシャトルバスでスタート地点のいわき陸上競技場に移動、スタンドに上がると、眼下のフィールドは白雪に覆われ、赤いトラックとのコントラストが美しい。日の出直後の陽射しが眩しく降り注がれて、まさに大会の冠名通り、サンシャイン、太陽の輝きである。

コースは内陸の陸上競技場から小名浜港に向かって十二キロの山下り、海岸線を北に四キロを往復、南に臨海工業地帯を十五キロ下って折り返し、七キロ戻りアクアマリンパークにゴールする四二・一九五キロである。

黒の手袋とアームウォーマーを着用、トラックを二周してみたが、冷たい風が頬を撫でるも、温かい陽光を受けて気温三度の寒さがあまり感じられない。

スターター役のいわき市長が、アップダウンの多いタフなコースだが、いわき出身で箱根駅伝山登りの名手柏原選手を思って頑張ってください、と激励していた。

地元の和太鼓の勇壮な連打で気分は盛り上がり、総勢四〇〇〇人が九時のスタートを迎えた。ゲストの増田明美さんの笑顔を仰ぎ見ながら、お腹に響く和太鼓の音にリズムを合わせて陸上競技場を一周、下り坂で流れ始めた一キロの標識で六分四〇秒、まずは順調である。

陸上競技場の丘陵地帯を下って住宅地に入ると、沿道の熱い応援が待ち構えていた。今回が二回目の開催だというのにこの応援慣れしたいわき市民の応援、特に子供達の物怖じしない声高な声援には驚かされた。

五キロほど続く長い下りに入るとペースは否応なく上がってくる。追い抜かれるのを承知で、少しペースをセーブ、キロ六分一〇秒をキープした。

沿道から「ゴールはまだまだ先だよ、頑張れ！」と男性の声がかかり、周りから笑いが湧き起こった。確かにマラソンはこれからだ。それにしても明るい人たちである。常夏の地に住む人の陽気さなのだろう。

アップダウンの繰り返しが終わった一〇キロ地点で六二分三五秒、五キロ三一分と安定したペースである。そこから三キロの下りが続き、ようやく丘陵を抜けると、視野が開けて太平洋の大海原が広がってきた。

右手に広がる永崎海岸に打ち寄せる白波が美しい。浜風を追い風に爽快な走りである。路肩で若いサーファー達が寛いでいた。中乃作港でお年寄りや海男特有の威勢の良い応援が寄せられモチベーションも上がってきた。

四倉の道路標識が見えてきたが、学生時代の野球部四倉合宿が懐かしく思い出されてきた。あの時の合宿ロードランが今のマラソンに繋がっているのだろう。

やがて第一折り返し地点の江名港に入ると、大漁旗と和太鼓を交えた盛大な応援が待受けていた。どうして彼らはこんなに元気で威勢がいいのだろう。荒海に生きる男と女の逞しさなのだろうか、大応援団の近くまで寄って両手を振り上げながら折り返した（写真後掲）。

復路の浜風は向かい風に変わった。さすがにペースダウンしてきた。左手に変わった大海原に気を紛らせながら、給水所でバナナやアンパンで体力を補充した。二〇キロ地点で二時間七分。キロ七分台に落ちてきたが、五時間が切れそうなペースはキープしていた。

中間点を過ぎてまもなく最大の難所の三崎公園までの上り坂に入った。高低差四〇メートルの急坂が壁のようである。さすがに歩く選手が多くなっていたが、ここが正念場だ、まもなく安楽の下りが待っている、頑張れ。

坂を上りきると芝生の公園が広がっていた。給水所でオムスビを頬張り、地元特産のいちごの熟した甘さに力

をもらい、三崎公園の眼下に広がる小名浜港の絶景に見惚れながら、急坂を慎重に駆け下りた。下り坂で膝にきたのか、歩き始める選手が更に増えていた。

小名浜港に係留する大型漁船群の傍らを走り抜けて二五キロ地点で二時間四一分、ゴールのアクアマリンパークを横目に岸壁沿いを走っていると、折り返した先頭ランナーがゴールしたのだろう、大歓声が聞こえてきた。

私の走りはまだ半分、先は長い。巨大なガラスドームの水族館等レジャー施設群を抜けると、臨海工業地帯の中を走る産業道路が前方に果てしなく伸びていた。

巨大な近代的工場に並んで無声映画「メトロポリス」で見たレトロな工場の煙突が煙を吐いていた。大通りの単調な走りにモチベーションが落ちてくる。右膝も痛くなり、ペースもキロ七分三〇秒台に落ちていた。

三〇キロ地点で三時間十八分。一昨年の東京マラソンよりまだ十五分いいタイムだ。左足裏にマメが出来そうだが、潰さないよう着地に気を使いながら、なんとか五時間切りは出来そうだと思っていた矢先、目の前に高低差三〇メートルの上り坂が迫ってきた。

さすがにこの坂を走れる人は誰一人いなかった。まだこの先十二キロもある、無理することはない、歩くことも良しとしよう。完走できなければ何にもならない。両膝に手をあてがい這い上がる思いで登り切ると、小学生のチアガールが一列に並んで黄色い声援で迎えてくれた。

小さな身体を躍らせて力の限り「頑張れ！頑張れ！」と応援してくれているのに、頑張れないでいる自分が情けない。隣を走る女性が「有難う！」と元気な声で応えていたが、自分にはその元気さえ残っていなかった。

御礼の声掛けに遅れを取った口惜しさが込み上げてきた。折り返したら、この子たちにきちんとお礼しよう。二キロ下り二キロ上るという過酷なコースが続いたが、膝の屈伸を繰り返しながら、なんとかキロ八分ペースがキープしていた。三五キロ地点で丁度四時間。残り七キロをこのペースなら何とか五時間は切れそうだ。

第二折り返しから二つのアップダウンを走り切り、さっきのチアガールのところに戻ってきた。彼女達に近寄り右手を高く上げ「有難う！」声を張り上げて列に戻ると、並走する男性が「余裕ですね」と声掛けてきた。「可愛いですよね」と応えると「ありがたいですよね」と返ってきた。しばらく彼と支え合う走りが続いた。

最後の下り坂が終わり、ラスト五キロの平坦ロードになったところで、並走の彼がついに足を止めた。工業地帯を一直線に伸びる産業道路の沿道に応援する人影はない。膝の屈伸を繰り返しながら孤独のロードが始まった。

工場の煙突の白煙が水平になるほど風は横殴りになっていた。四〇キロ地点で四時間三八分。ラスト二キロ、

五時間は切れるぞ。頑張れ。ゴールの方角から和太鼓の連打音が流れてきた。走りに力が入ってきた。

右折してフィニッシュロードに入ると、大観衆が両サイドを埋め尽くし、フィニッシュアーチが見えてきた。まばらになったランナー一人一人に大声援が向けられ、まさに英雄の凱旋ランである。ラストスパートをかけた。

ゴールした瞬間、天を仰ぎ、目を閉じ、歓喜の雄叫びを上げた。目を開けると、赤いレイを持ったフラガールのお姉さんの笑顔が目の前に迫っていた。我に返りレイを首に掛けてもらった。至福の瞬間である（写真後掲）。

かくしてもう二度と走るまいと諦めていたフルマラソンを、自己ベスト四時間五四分四三秒で走り切った。

後日送付されてきた完走証に、男子完走二七八二人中一九七九位という順位が印刷されていた。

【追記：東日本大震災の大津波（三月十一日）】

いわきサンシャインマラソンの歓喜の余韻冷めやらぬ僅か一ヶ月後の三月十一日、あの海岸一帯が未曽有の東日本大震災に襲われるとは夢にも思わなかった。

テレビ画面に大津波が海岸線を乗り越えて住宅を押し流す痛ましい映像が映し出され、一万八千余の尊い命が犠牲になった。マラソンコースになったいわき市の沿岸部も、七メートルの大津波に襲われて、いわき市の人的被害は四四一人、建物被害は一〇万棟に達したという。

折り返し地点の江名港で大漁旗を振って応援してくれた漁師さんたち、小名浜市で応援してくれた沿道の人たち、アクアマリンパークのゴールでレイを掛けてくれたフラガールのお姉さんたち、みなさん、どうしているだろう。ご無事だったろうか。あの日の様々な情景が走馬灯のように去来してくる。

東日本大震災に遭われた皆さまに心よりお見舞い申し上げ、一日も早く立ち直れますようお祈りいたします。

（了）

スポーツ写真サイト「オールスポーツコミュニティ」から当日のスナップ写真を拝借しました。





明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その四）

山本勉

渋江保の経歴・著作・社会状況一覧表
（幼少時代から静岡時代）

はじめに

渋江保の経歴・著作・社会状況について、二回に分けて掲載する。本号は幼少時代から静岡時代（前期）、次号では博文館時代から晩年（後期）を掲載する。渋江の生涯（前期）においては、自由民権運動、民権思想を中心として一覧表にまとめた。なお、一覧表作成に当たっては、主に『抽斎歿後』、山路愛山の『独立評論』に掲載された「渋江保氏談話」二十四編を参考にした。

時代区分	滞在期間	西暦	元号	年齢	経歴	著作	社会状況
幼少時代（江戸）	1857年（安政4年）～1868年（慶応4年）	1857	安政4年	0	○7月26日、渋江抽斎七男として江戸に生まれる。渋江抽斎52歳、五百41歳		○インド大反乱（1857～1858）
		1858	安政5年	1	○藩主津軽順承に謁見、8月28日、父、抽斎逝去する。		○福沢諭吉が鷹鷹義塾の前身、蘭学塾を創立する。 ○日米修好通商条約締結（6月） ○安政の大獄 ○東インド会社解散、イギリス、インドを直轄統治 ○清、イギリス・フランス・ロシア・イギリス・アメリカの4カ国と天津条約締結 ○ロシア、アロー戦争で混乱する中国にアイグン条約締結
		1859	安政6年	2			○安政の大獄で吉田松陰死罪（10月）
		1860	安政7年（万延元年）	3	○1860年（万延元年）10月1日～1866年（慶応2年）、海保漁村に経書を学ぶ。 ○1860年（万延元年）～1862年（文久2年）、小島成斎に書経を学ぶ。 ○抽斎歿後、台所町に住んでいたが、万延元年抽斎の建碑の後、本所亀沢町へ転居する。		○清、英・仏・露と北京条約締結 ○桜田門外の変（3月） ○日米修好通商条約批准書交換、遣米使節派遣
		1861	文久元年（万延2年）	4	○漁村塾に通い始める。塾生には、島田重礼・箕作麟祥・鳩山和夫・渋沢栄一・内藤魯一・中村三平・青柳節蔵・尾高長七郎がいた。		○アメリカ南北戦争（～1865年4月）
		1862	文久2年	5			○坂下門外の変（1月） ○生麦事件（8月）
		1863	文久3年	6	○多紀安琢に素問を学ぶ。		○近藤真琴、自宅で攻玉塾を開く。 ○下関事件（5月） ○薩英戦争（8月） ○文久3年8月18日の政変（8月）
		1864	文久4年（元治元年）	7			○神戸海軍操練所設置（5月） ○水戸天狗党挙兵 ○池田屋事件（6月）

幼少時代（江戸）	1857年（安政4年）～1868年（慶応4年）		文久4年（元治元年）	7			○禁門の変（7月） ○第一次長州征伐（7月） ○馬関戦争（8月）
		1865	元治2年（慶応元年）	8			○五代友厚ら薩摩藩遣英使節団派遣（3月）
		1866	慶応2年	9	○1866年（慶応2年）～1872年（明治5年）、海保竹渓に経書を学ぶ。		○福澤諭吉、『西洋事情』を出版 ○普墺戦争 ○第二次長州征伐
		1867	慶応3年	10			○万国博覧会、パリで開催 ○徳川慶喜、朝廷に大政奉還を奏請（10月） ○王政復古の大号令（12月）
弘前時代（弘前）	1868年（明治元年）～1871年（明治4年）	1868	慶応4年（明治元年）	11	○江戸から津軽へ転居。4月、江戸を出発し陸路30日目に弘前に到着する。 ○明治元年、弘前移封時、当主、保の他に、母・陸・水木・専六・矢島優善、若党2人の8人で弘前に向かう。奥羽越列藩同盟の成立した東北諸藩を通過する際に保は女装して弘前へ向かった。 ○1868年（慶応4年）～1871年（明治4年）、弘前にて兼松石居に経書を学び漢学の助教を務める。 ○福澤諭吉『西洋事情』を読む。		○福澤諭吉、英語塾を慶應義塾とし、変則中心の英語教育を行う。（4月） ○開成所を開成学校と改称する。 ○戊辰戦争 ○江戸城、無血開城（4月） ○東北・北陸諸藩が奥羽越列藩同盟を結ぶ。 ○1868年～1882年の15年間に出版された翻訳書1500冊以上に及ぶ。
		1869	明治2年	12	○9月25日、渋江抽斎四女、渋江陸が矢川文一郎に嫁ぐ。 ○矢島優善、鉄と夫婦となるが、12月28日失踪する。		○版籍奉還に伴い明治新政府による秩禄処分実施 ○開成学校を大学南校と改称する。
		1870	明治3年	13	○6月18日、弘前藩士に秩禄の大削減が行われ、渋江には医者の降等が適用された。		○大学南校規則第7条により生徒を正則・変則の2類に分ける。正則生はお雇い外国人教師に、変則生は日本人教官の教授を受ける。 ○尺振八、共立学舎を両国に創設し英語教育を行う。 ○普仏戦争（1870～1871）

第一次修学時代（東京）	1871年（明治4年）～1875年（明治8年）	1871	明治4年	14	○1月7日、優善は鉄と離婚後、唐津藩士大沢正のむすめ、蝶と結婚する。 ○将来英学で身を立てるために母親をひとり残して単身上京する。 ○3月21日、弘前を出発、4月7日着京する。 ○3月11日、尺振八の共立学舎に入学する。 ○4月22日から再び海保竹渓に経書を学ぶ。 ○アメリカ人ガズーナの文明義塾で英語を学ぶが物足りず、6月から大学南校に通学しフルベッキについて文法を学ぶ。 ○廃藩置県前に本所上屋敷の藩邸から大学南校に通っていた。 ○6月7日、母が恋しくて（五百＝伊保）、保と改名する。 ○渋江脩、明治初年、山田源吾の養子となる。海保竹渓に学び、8月9日、共立学舎に入学する。12月3日に共立学舎の梅浦精一に学ぶ。 ○12月3日専六（渋江脩）と2人で斬髪する。 ○カッケンボスの『米国史』第五・六篇出版のことで保は浦和から東京に帰京する。		○旧昌平坂学問所を廃止し、開成所を南校、医学所を東校に改称する ○大学南校、変則教授廃止 ○岩倉使節団、米欧12か国を歴訪、女子留学生（津田梅子ら5名の女子留学生も渡米）（11月） ○文部省設置（9月） ○廃藩置県（7月） ○共立学舎塾生、志賀直温、島田三郎、首藤陸三、高梨哲四郎、田口卯吉、宮崎八郎、波多野伝三郎等在学 ○横浜毎日新聞創刊（1月）
		1872	明治5年	15	○東京師範学校に9月に入学し、1875年（明治8年）1月に卒業する。在学中にアメリカ人、スコット、ブラウンに学ぶ。アメリカ人、スコットから発音・書き取り・会話を学ぶ。 ○東京師範学校の入学者は54名で上等生（18名）、下等生（36名）、上等生はスコットより正則の授業を受けることができた。入学資格は25歳以上であったが、渋江は16歳で入学した。10代の学生には、加治義方（17歳）、末松謙澄（18歳）が在学していた。 ○1872年（明治5年）～1898年（明治31年）8月、島田重礼に経書を学ぶ。 ○1872年（明治5年）当時、浅草蔵前に日日新聞が日刊新聞として最初にできたが、渋江は東京師範学校在学中に、末松謙澄、天野皎ら寄宿舎の仲間とと『舎中新聞』を作った。 ○カッケンボスの『米国史』を兄の山田脩と袋屋亀治郎の万巻楼より翻訳出版する。 ※山田脩（1854～1906）	○米国史八巻（万巻楼）	○東京日日新聞（5月）、郵便報知新聞（6月）創刊 ○学制公布（8月） ○日本最初の師範学校開校、翌1873年東京師範学校と改称。 ○中村正直訳J.S.ミルの『OnLiberty』（自由之理）刊行

第一次 修学時代 （東京）	1871 年 （明治 4 年） ～ 1875 年 （明治 8 年）	1872	明治 5 年	15	渋江抽斎五男、渋江保実兄、大学南校・共立学舎・文明義塾等で英語学修行をする。静岡においては静岡県警察本部嘱託、静岡私立文武館、渋江塾にて英語を教授する。また東京魁新聞社編輯人も務める。カッケンボスの『米国史』を保と共に翻訳出版する。		
		1873	明治 6 年	16	○2 月 10 日、本所相生町四丁目に転居する。 ○東京高等師範学校の寄宿舎に 10 月 19 日に寄宿する。		○開成学校の教授用語を英語とする。 ○明治六年の政変 ○静岡新聞創刊（2 月）
		1874	明治 7 年	17	○母、五百の眼病が重体となるが、治療を受けて治癒する。 ○8 月 29 日、感応寺にて抽斎の 17 回忌の法要が行われる。		○英語教育に重点を置き官立外国語学校を「英語学校」と改称する。 ○政府雇い外国人は、1874～75 年に最も多く、その数は約 520 人に上る。 ○外国語学校数（1874 年）、官立 9 校、公立 8 校、私立 74 校（文部省第二年報） ○板垣退助ら愛国公党結成（1 月） ○佐賀の乱（2 月） ○板垣退助、後藤象二郎ら民撰議院設立建白書提出（1 月） ○板垣退助ら、立志社設立（4 月） ○台湾出兵 5 月
浜松時代 （浜松）	1875 年 （明治 8 年） ～ 1879 年 （明治 12 年）	1875	明治 8 年	18	○1 月 29 日、師範学校から卒業証書を授与される。 ○師範学校卒業時、島根県の大参事、学務課長が上京し、学事に熱心な島根県に赴任する予定であったが、2 月 6 日、文部省から浜松県派出の辞令が出て、3 月 2 日、浜松県に瞬養学校教頭として赴任する。 ○瞬養学校は 6 月に落成予定のため、その間、4 ヶ月は浜松学校内にある変則学校へ遊びに行き数学を教えたことがあった。その後、瞬養学校落成後は、主に漢学・数学・日本文典・物理などを教えた。 ○浜松到着の折は、1 ヶ月ほど下垂町の山田屋和三郎と申郷宿に月 6 円の約束で寄宿した。	○小学校授業必携二巻（浜松瞬養学校）	○樺太・千島交換条約締結（5 月） ○讒謗律公布（6 月） ○浜松瞬養学校開校（5 月） ○新聞紙条例公布（6 月） ○江華島事件（9 月）

浜松時代 （浜松）	1875 年 （明治 8 年） ～ 1879 年 （明治 12 年）	1876	明治 9 年	19	○8 月 24 日、浜松県が廃県となり、静岡県へ合併する。 ○10 月 10 日浜松の瞬養学校は静岡県師範学校浜松支部と改称される。教頭の職を引き続き勤める。 ○10 月 28 日、舎長が廃され渋江は監事兼務を命ぜられる。 ○11 月 17 ロ、静岡にて教育会議に出席する。会議の結果、12 月 8 日に全県師範学校の校則教則編集を嘱託される ○「学問のすすめ」を阿波の国学者が反駁したため、時事新報の前身の民間雑誌に福澤諭吉に代わって一文を投稿し、後に福澤に知られるようになった。 ※瞬養学校は、1876 年（明治 9 年）8 月に浜松県が静岡県と合併するに伴い、10 月に静岡師範学校浜松支校と改称、1877 年（明治 10 年）、浜松変則中学校、1878 年（明治 11 年）には、更に浜松中学校と改称している。	○小学入門授業法（一貫社）	○日朝修好条規（2 月） ○神風連の乱（10 月）（熊本） ○秋月の乱（10 月）（福岡） ○萩の乱（10 月）（山口）
		1877	明治 10 年	20	○明治 10 年表早馬町に一戸を構え、間もなく元城内五十七番地へ家を構えた。 ○7 月 4 日、静岡師範学校浜松支部は変則中学校と改称した。 ○月給は 30 円、兼務料 3 円、宿料 2 円のみであった。保は浜松で脊髄炎になったことがあったが平癒した。 ○時期ははっきりしないが、明治 10 年前後、五百が 60 代の頃にスペリング、ウィルソンの『ウィルソンリーダー』、バーレーの『万国史』、カッケンボスの『米国史』やホオセット夫人の『経済論』を使用し母に英語を教える。		○露土戦争（1877 ～ 1878） ○西南戦争（2 月） ○東京開成学校と東京医学校を統合し、東京大学を創設する。（4 月） ○立志社、国会開設建白書提出、国会開設、地租軽減、条約改正の自由民権運動の三大綱領提起
		1878	明治 11 年	21	○2 月 23 日、浜松変則中学校は、浜松中学校と改称される。 ○9 月 2 日、山田脩が母、五百に呼ばれて浜松に来る。		○紀尾井町事件（大久保利通暗殺）（5 月） ○植木枝盛ら愛国社再興 ○第二次アフガン戦争（1878 ～ 1880） ○島田三郎、ベンサム『立法論綱』重訳 ○1873 年（明治 6）開設の「法律講義会」を改称し沼間守一ら

		1878	明治 11 年	21			により嚶鳴社創設、東京横浜毎日新聞・嚶鳴雑誌発行
第二次修学時代（東京）	1879 年（明治 12 年）～ 1881 年（明治 14 年）	1879	明治 12 年	22	○ 10 月 15 日、学問（英語）修業のために辞表を提出し、28 日依願免職となる。 ○ 10 月 31 日浜松を出発し、11 月 3 日着京、脩が買い入れた芝区本町十二番地の宅に着く。 ○上京の同行者は母、中学校卒業の山田要蔵、文部省直轄愛知師範学校卒業生で前浜松中学校教員、中西常武であった。 ○着京の翌日、慶應義塾入学する。（明治 12 年 11 月）		○植木枝盛、『民権自由論』 ○琉球藩を廃し、沖縄県を設置（4 月） ○函右日報創刊（6 月）
		1880	明治 13 年	23	○慶應義塾（明治 13 年 12 月）、第一位にて卒業する。キーリングやラムバード等に学ぶ。 ○慶應義塾三等に在学していた頃は、同級生に渡辺修・平賀敏、青森県人には芥川得三・工藤代助がいた。第一等には犬養毅・矢田績・安場末喜、青森県人では、坂井次永・神尾金弥がいた。 ○慶應義塾に入学した時に犬養毅と共に同じ級で勉強をした。犬養毅は西南戦争の従軍記者になって行ったことがあった。 ○当時、慶応義塾の万来舎へ金子堅太郎・相馬永胤・目賀田種太郎・鳩山和夫等が毎夜来て法律学の講義をし、渋江たちはその聴講者となった。後に木挽町へ移って専修学校と名付けられた。 ○慶應義塾を卒業する前から、津市の三重日報から招請を受けるが断る。 ○山田要蔵とエモスのイングリシ・コンスチチユーションを合訳して『英国憲法論』と名付けた。序文は小幡篤次郎である。	英国憲法論（渋江脩）	○集会条例公布（4 月） ○国会期成同盟結成 ○福沢諭吉、小幡篤次郎らにより交詢社創設
宝飯中学校時代（豊川市）	1881 年（明治 14 年）～ 1882 年（明治 15 年）	1881	明治 14 年	24	○ 1 月 4 日、小幡篤次郎から三重日報主筆の話があったが断る。 ○広島の士族たちが新聞社を創立するため、その主筆の話があったので承諾したが、宝飯中学校の話があった為、阿部泰三に面会して招請に応ずることとなり、8 月 3 日東京を出発した。 ○阿部泰三の実兄で開業医、民権家、愛知県議会議長を務めた武田準平と知り合い、進取社を組織し社長に、武田が副社長となった。 ○ 9 月、進取社は三河・尾張地方を演説して回る。		○ 1881 年（明治 14 年）頃より数多くの私擬憲法草案が作られた。 ○静岡新聞、静岡大務新聞と改題する（2 月） ○東海暁鐘新報創刊（4 月）

宝飯中学校時代（豊川市）	1881 年（明治 14 年）～ 1882 年（明治 15 年）	1881	明治 14 年	24	○弘法山の石碑（愛知県豊川市国府町）「渋江が宝飯中学校長時代に深く関わりを持った武田準平翁（1838 ～ 1882）の碑文で、宝飯中学校長渋江保が語り、宝飯中学校の第一回卒業生で、高等小学校長となった木村永太郎によってまとめられ墨書きされたものである。」 ○中学校教師雇入届「英語教師兼校長渋江保月給金四拾円」の記載がある。（9 月 20 日） ○ホワイト著『万国史』「東京渋江保寄附宝飯中学校」と墨書きされた教科書（愛知県豊川市桜ヶ丘ミュージアム所蔵） ○再度ノ喫驚（官有物払下げ事件について）（函右日報 10 月 7 日） ○加藤幸三郎宛書簡（渋江が長泉寺に家族や書生と暮らしていた頃書かれた書簡である。武田準平や阿部泰蔵の名前が散見できる。）（日時は、はっきりしないが文面より 11 月 27 日と思われる。）		○清、ロシアとイリ条約締結（2 月） ○交詢社、私擬憲法草案発表（4 月） ○五日市憲法草案（4 月～ 5 月頃） ○秋田事件（6 月） ○北海道開拓使官有物払下げ事件 ○宝飯中学校開校（9 月） ○明治十四年の政変（10 月） ○自由党結成（10 月）
		1882	明治 15 年	25	○加藤幸三郎宛書簡（極楽寺本堂と国府小学校の二ヶ所で行われていた授業を一ヶ所にまとめるために、新校舎の建設を検討したいこと、教師を雇い入れたいことが書かれている。）（1 月 23 日） ○加藤幸三郎宛書簡（金曜日の夜に英語の講義会を開くので、加藤幸三郎や山崎程者にも英語を教授してもらいたいことが書かれている。）（3 月 26 日） ○ 9 月 15 日、矢島優善が渋江姓に復籍する。10 月 23 日、優善の妻、蝶が逝去する。 ○交詢社回状（交詢社、波多野承五郎が豊橋に来訪するので、懇親会に出席するよう加藤幸三郎・三輪弘忠・渋江保連名で通知を出す。）（12 月 10 日）		○武田準平、暗殺される。（1 月） ○進取社副社長武田準平暗殺を知らせる記事（愛岐日報 1 月 10 日） ○進取社副社長武田準平暗殺を知らせる詳細記事（愛岐日報 1 月 11 日） ○立憲改進党結成（4 月） ○板垣退助岐阜遭難事件 ○福島事件（11 月） ○中江兆民、ルソー「社会契約論」を翻訳、「民約訳解」刊行
東京横浜毎日新聞時代（東京）	1883 年（明治 16 年）～ 1885 年（明治 18 年）	1883	明治 16 年	26	○ 1 月 11 日、攻玉社の教師となり英文を担当する。社長は近藤真琴、監事は青森県出身の藤田潜、生徒には海軍少将になった秀島や大□□雷槌号に乗った笠間真太郎がいた。 ○ 1 月 25 日慶應義塾の教師となる。午前に慶應義塾に行き午後は攻玉社に行った。慶應義塾は社頭福澤諭吉、副社長小幡篤次郎、校長、浜野定四郎、教師は門野幾之進・鎌田栄吉等十数名。生徒には		

東京横浜 毎日新聞 時代（東京）	1883 年 （明治 16 年） ～ 1885 年 （明治 18 年）	1883	明治 16 年	26	池辺吉太郎、門野重九郎、和田豊治、日比野翁輔、伊吹（藤山）雷太など未来の財界人がいた。居住地は芝区田町十二番である。 ○ 2 月 14 日、宝飯中学校長兼英語教師を免ぜられる。 ○ 3 月 13 日、芝区烏森町一番地へ居住し、4 月 5 日母と水木が愛知県から帰京する。 ○ 7 月 31 日～ 8 月 6 日午前にかけて、新聞社用にて東京市内における諸種のことを潜に調査していた。 ○ 12 月 2 日、抽斎次男、優善死去。 ○沼間守一が引き継いだ京浜毎日新聞に入社する。 ○東京横浜毎日新聞、東京日日新聞紙上において外山正一と主権論・普通選挙論争を展開する。 ○加藤幸三郎宛書簡（1882 年（明治 15 年）12 月に宝飯中学校を離れ、上京後の政界の様子を述べている。）（1 月 1 日） ○加藤幸三郎宛書簡（慶應義塾の旧友たちに比べて給料が少なく薄給を嘆いていることが書かれており、より多くの給料を取り、中央で新聞記者として教師として活躍したい旨が伺える。）（1 月 13 日） ○雑報（東京横浜毎日新聞）（1 月 31 日） ○毎日記者は盲目蛇在東京山下八郎（東京日日新聞 6 面掲載）（2 月 22 日） ○「ベンサム氏ノ普通選挙論者ニアラザルコトヲ弁ジテ外山氏ノ杜撰ヲ正シ併セテ日報記者ノ蒙ヲ啓くク諸冒」・「毎日記者は盲目蛇」（外山正一）（東京横浜毎日新聞 3660 号 1 面～ 2 面・4 面掲載）（3 月 8 日） ○「ベンサム氏ノ普通選挙論者ニアラザルコトヲ弁ジテ外山氏ノ杜撰ヲ正シ併セテ日報記者ノ蒙ヲ啓くク第一」（東京横浜毎日新聞 3661 号 1 面掲載）（3 月 9 日） ○「ベンサム氏ノ普通選挙論者ニアラザルコトヲ弁ジテ外山氏ノ杜撰ヲ正シ併セテ日報記者ノ蒙ヲ啓くク第二」（東京横浜毎日新聞 3662 号 1 面掲載）（3 月 10 日） ○【論説】渡邊安積「余□日外山正一君ヲ訪フ偶々		○松方デフレにより 1883 年頃より中小資本家や地主・農民は深刻な不況の中で生活破綻に追い込まれ農村は貧窮化した。 ○高田事件（3 月） ○新聞紙条例改定（4 月）、言論の取り締まりを強化 ○静岡英語専門学校開校（静岡市本通三丁目）（7 月）

東京横浜 毎日新聞 時代（東京）	1883 年 （明治 16 年） ～ 1885 年 （明治 18 年）	1883	明治 16 年	26	机上ニ左ノ一論アリ披キテ之ヲ読ムニ大ニベンサム氏ノ普選挙論者タルコトヲ明ニシ彼東京横浜毎日新聞記者ノ□妄ヲ覚破スルニ足ルモノアレバ強テ其稿本ヲ乞ヒ得以テ之ヲ本日ノ論説内ニ掲グ毎日記者が命の綱と頼むものは記者を救はず」（東京日日新聞』3380 号 5 面～ 6 面掲載）（3 月 22 日） ○【論説】「毎日記者が命の綱と頼むものハ記者を救ふ能はず（前号の続）」（東京日日新聞 3381 号 5 面～ 6 面掲載）（3 月 23 日） ○「外山氏ノ分疏ハベンサム氏ノ普通選挙論ヲ証スルニ足ラズ（第一）」（東京横浜毎日新聞 3691 号 1 面～ 2 面掲載）（4 月 15 日） ○「外山氏ノ分疏ハベンサム氏ノ普通選挙論ヲ証スルニ足ラズ（第二）」（東京横浜毎日新聞 3693 号 1 面～ 2 面掲載）（4 月 18 日）		
		1884	明治 17 年	27	○学び始めたドイツ書のセーフェル文典を研究しながら母、五百の体調を気遣った。 ○母親の容体がおかしいので、松山棟庵の出張所の在生堂へ駆けつけた。松山棟庵が来診したが、脳卒中で 14 日午前 7 時に逝去した。享年 69 歳 ○京浜毎日新聞寄書家から 6 月に編輯員となった。社長は沼間守一、主筆は島田三郎、編輯員は肥後藏・青木匡・丸山□政・荒井泰治、会計係は波多野伝三郎等であった。社友には矢野次郎・角田真平・高梨哲四郎・大岡育造等がいた。 ○加波山事件勃発当時、東京横浜毎日新聞にて毎晩 12 時まで仕事をしていて、夜明けになることもあった。 ○保は攻玉社を辞職した。 ○この年、芝桜川町十八番地へ転居した。 ○加藤幸三郎宛書簡（渋江保の母親、五百が亡くなったことを手短に書き留めている。葉書に五百が死去した翌日「東京 17.2.15」の消印がある。）（2 月 14 日）		○群馬事件（4 月） ○加波山事件（9 月） ○秩父事件・名古屋事件（10 月） ○飯田事件（12 月） ○自由党解党（10 月） ○立憲改進党、大隈重信・河野敏鎌らが脱党（12 月） ○清仏戦争（1884～1885） ○ヨーロッパ列強によるアフリカ分割ベルリン会議（11 月） ○甲申事変（12 月） ○清仏戦争（1884～1885）
静岡時代 （浜松市・ 静岡市）	1885 年 （明治 18 年） ～ 1890 年 （明治 23 年）	1885	明治 18 年	28	○東京横浜毎日新聞に 1884 年（明治 17 年）～ 1885 年（明治 18 年）まで勤務するが、神経衰弱に陥り執筆中も茫然自失の状態に陥ったために同社を退社して静岡県遠州地方にて静養することになる。 ○ 1885 年（明治 18 年）、精神疲労のため東京横浜		

静岡時代（浜松市・静岡市）	1885年（明治18年）～1890年（明治23年）	1885	明治18年	28	毎日新聞を辞め静岡県遠州地方の乾（遠州周智郡犬居村149番地）で静養した。（実際には遠州周智郡犬居村の記載は誤りで領家村である。） ○上京の途中で静岡市に立ち寄った際に前田五門に引き留められ、静岡英語専門学校・静岡文武館・高等英華学校で教鞭を執る。東海暁鐘新報社長の前島豊太郎に頼まれ主筆として従事する。 ○栗田輝永氏の英学研究所に竹谷熊吉招請（渋江保も招請されているが渋江の名前の記載なし）（静岡大務新聞5月15日） ○加藤幸三郎宛書簡（出版社、博文社での翻訳の仕事をしている様子、清仏、朝鮮等事件（清仏戦争・甲申事変）、不健康を訴え静養したい旨が書かれている。）（7月11日）注:博文社は博文館とは異なる。 ○新聞社の種々の用務のため旅行し、10月10に帰京する。行き先は静岡県浜松方面である。この詳細については「浜松紀行」（東京横浜毎日新聞10月30日、11月5日）に渋江自らが載せている。 ○浜松紀行第一（東京横浜毎日新聞3面）（10月30日） ○浜松紀行第二（東京横浜毎日新聞3面）（11月5日） ○京浜毎日新聞記者渋江保氏、栗田輝永の私立学校へ招聘（東海暁鐘新報）（11月29日）		○朝鮮と漢城条約締結（1月） ○福沢諭吉著『脱亜論』 ○清と天津条約締結（4月） ○英学研究所開校（静岡県周智郡領家村、現浜松市天竜区春野町） ○大阪事件（11月） ○静岡文武館開校（静岡市三番町）（12月） ○清仏戦争（1884～1885） ○ドイツの軍人メッケル、陸軍大学校教官・参謀本部顧問として来日
		1886	明治19年	29	○7月5日、静岡英語専門学校の教頭になる。校長は藤波勘助、カッシデー夫妻、カッキング婦人等がいた。生徒には山路彌吉（山路愛山）などがいた。 ○10月15日、静岡県士族（旧幕臣）の佐野常三郎の娘、松（法律名は一）を娶る。結婚後、静岡英語専門学校へ松を通学させた。 ○遠江国周智郡犬居研学会規則「16条の規則と33名の会員名の記載がある。その中に渋江保、渋江モン（紋）とあり、渋江は常議員となっている。」（静岡大務新聞）（1月21日） ○犬居研学会「渋江保に毎回講義を依託することと、渋江保が快く承諾したことが記載されている。」（静岡大務新聞）（1月21日） ○感心な女子「「元京浜毎日新聞社員渋江保氏が所用ありて去る四日妻君を連れて浜松へ出浮かれし		

静岡時代（浜松市・静岡市）	1885年（明治18年）～1890年（明治23年）	1886	明治19年	29	を幸い同氏夫婦にユキ子教育のことを頼み入れ・・・」とある。（静岡大務新聞）（2月10日） ※注：渋江は静岡において佐野常三郎の娘と結婚しており、この時点での「妻君」が誰なのか、「渋江モン（紋）」とはどのような人物なのか不明である。 ○見付宿政談演説会（静岡大務新聞）（3月16日） ○犬居研学会「雪子は目下渋江保氏について専ら英学を研究なし居るよし」（静岡大務新聞）（2月23日） ○蓑田まつ子「目下周智郡領家村に居らるる渋江保氏」とある。（静岡大務新聞）（3月22日） ○犬居学術演説会「栗田輝永と共に渋江保は「知愚ノ測量機」、渋江紋は「思想ノ聯合」と題して演説を行っていることが記載されている。」（静岡大務新聞）（3月30日） ○犬居有志懇親会「懇親会出席者の名簿に渋江保、渋江モン（紋）の名前の記載がある。」（静岡大務新聞）（3月31日） ○静岡通信廿四日発学術研究「栗田輝永が私立英学校を設立し、東京より毎日新聞記者渋江保を教師に招聘して子弟を誘導し生徒が増加していることが記載されている。」（朝野新聞東京銀座四丁目八番地）（5月29日） ○静岡英学校広告「渋江保氏を招聘し教頭の任を嘱託しと記載がある。」（静岡大務新聞）（8月24日）		○大同団結運動（1886～1889） ○旧自由党・立憲改進党有志による全国有志大懇親会（10月） ○静岡事件（6月） ○高等英華学校開校（静岡市西草深町）（7月） ○ノルマントン号事件（10月）
		1887	明治20年	30	○静岡では安西南裏町十五番地に居住した。 ○1月27日、東海暁鐘新報の主筆に招請される。 ○東海暁鐘新は自由党の機関誌で、社主は前島豊太郎である。 ○7月1日、静岡高等英華学校の嘱託を受けて高等科生徒を受け持つ。 ○9月15日、静岡文武館にも招請される。 ○渋江社説（未発見、所在不明）（東海暁鐘新報）（2月1日） ○東海暁鐘新報編集主任に聘雇（静岡大務新聞）（2月2日） ○広告欄「転居静岡鷹匠町1丁目35番地渋江保」		○三大事件建白運動（10月）

静岡時代 （浜松市・ 静岡市）	1885 年 （明治 18 年） ～ 1890 年 （明治 23 年）	1887	明治 20 年	30	「午前休日ノ外接客ヲ謝ス渋江保」（東海暁鐘新報）（2 月 7 日） ○広告「静岡市鷹匠町一丁目三五番地転居」（静岡大務新聞）（2 月 8 日） ○広告「絵入東海新聞は東海暁鐘新報の号を引き継ぐ前島豊太郎、渋江保」（静岡大務新聞）（3 月 30 日） ○広告「静岡市富士見町横町転居」（静岡大務新聞）（5 月 26 日） ○広告「先般静岡市富士見町へ転居。英学を教授し生徒も増加」（静岡大務新聞）（6 月 16 日） ○高等英華学校広告「英学渋江保君」（静岡大務新聞）（7 月 9 日） ○前島氏の新聞発行の計画「東海暁鐘新報から暁鐘新報と名称を変えて主筆の渋江保を招請する。暁鐘新報第一号は翌月一日とある」（静岡大務新聞）（10 月 22 日） ○暁鐘新報購読の広告「社主前島豊太郎、編輯人渋江保」（静岡大務新聞）（11 月 30 日） ○渋江社説「発刊の辞」（暁鐘新報号外号 12 月 20 日）		○保安条例公布（12 月） ○保安条例により、星亨・尾崎行雄・片岡健吉・中江兆民ら 570 名、東京から追放。 ○新聞条例改正（12 月） ○大橋佐平、博文館創業 ○第一回植民地会議ロンドン開催 ○フランス領インドシナ連邦（1887～1945）
		1888	明治 21 年	31	○1 月 2 日、保安条例によって退去を命ぜられた中江篤介が大阪東雲新聞の招請に応じ通行の途次、静岡に来訪する。 ○1 月 3 日、暁鐘新報と改題する。 ○6 月 30 日、長男、三吉生まれる。 ○7 月、脩が静岡に来て、静岡警察署間巡査講習所の英文科教師となる。 ○8 月 10 日、私立渋江塾開設の認可を受ける。 ○松本亀治郎が渋江塾で英学の教えを受ける。 ○9 月 15 日、渋江に決闘を申し込んできた者があった。氏名を記せずただ日時を約束したのみであった。しかし、そのものは来なかった。 ○渋江社説（未発見、所在不明）（暁鐘新報創刊号）（1 月 4 日）		○大隈重信、第 1 次伊藤内閣の外務大臣として入閣 ○イギリスで、切り裂きジャック」の猟奇殺人事件 ○東海暁鐘新報、暁鐘新報と改題（1 月） ○渋江塾開校（静岡市安西一丁目南裏町）（8 月）
		1889	明治 22 年	32	○広告「渋江保他 10 名連盟で年賀の広告」（暁鐘新報）（1 月 4 日） ○広告「後藤伯大懇親会開設渋江他 31 名連盟」（暁鐘新報）（1 月 4 日）		

静岡時代 （浜松市・ 静岡市）	1885 年 （明治 18 年） ～ 1890 年 （明治 23 年）	1889	明治 22 年	32	○1 月 8 日、東京に興った書肆博文館の需要に応じて、写真・略伝、暁鐘新報の社説を三篇送る。これが、翌年、23 年より十余年、博文館で出版した書籍を翻訳した発端である。 ○詫び状（葉書）「松本亀治郎が東京高等師範学校入学のために上京したとき送別会が開けなかった詫び」（松本亀治郎宛葉書）（4 月 30 日） ○12 月 27 日、暁鐘新報社を退社することを決した。その理由は以下の通りである。明治 13 年、12 月に慶應義塾を卒業する。翌 14 年夏まで東京に在住した時、福澤先生が後藤象二郎と話をしてほしいという話があった。その後、半年間、東京在住中、ほとんど隔日に後藤象二郎宅を訪問して談話をした。また、大同団結の演説をする時、書状（演説の原文）を頼まれたので、後藤象二郎のために尽力した。後藤象二郎が大同団結のため静岡に来たときに暁鐘新報は後藤象二郎歓迎のために奔走した。後藤象二郎が帰京すると、後藤は演説を踏み台として逓信大臣となった。しかし、渋江らは不服だった。渋江は精神のない大同団結運動を捨てて新たに「新自由党」を組織して、新聞（暁鐘新報）を機関誌たらんと期した。しかし、社主、前島は反対を唱えため、渋江は退社をした。しかし、翌年 1 月、前島は渋江に社説を執筆するように郵便にて送ってきた。		○大日本帝国憲法公布（2 月） ○後藤象二郎、黒田内閣に入閣し大同団結運動はその中心的存在を失い一挙に冷却 ○森有札、暗殺（2 月）

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）2
神戸から来た男（三）

匠　克仁

〈登場人物〉
弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
　東西信販から京亜クレジットを経て転籍
牛島崇　アサヒ信用保証の債権回収業務委託先

〈時系列〉
参考　第一話より
一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
第二話（本編）
二〇一八年五月からの数週間

3　取立同行

弓本良香は午後三時五分前にアサヒ信用保証本店の地下駐車場にエレベーターで降りた。
エレベーター前の乗降の場所で牛島の車が待っていることはなかった。
牛島は去り際に、四桁の数字を書きつけて、放り投げていった。待っていると言いながら、牛島は自分の車の特徴も駐車場所も告げなかった。番号から自分で見つけろという意味と良香は悟った。
地下駐車場は本店ビルのワンフロア分の広さである。五十台の駐車スペースがあり、八割が埋まっている。ナンバーだけで探すのは時間が足りない。
（本当は連れていくつもりはないかも）

三時まで来なかったといって、置いていくつもりかと良香は考えた。
取り立ての現場に人事部長を連れて行って、牛島にメリットがあるとは良香も思わなかった。普通に考えれば、足手まといになるだけである。
業務用の自社の車と役員の通勤車と他に定期契約で賃貸しているだけで、来客用のスペースは用意していない。
車での本社への訪問は断っているので、来客や業者用の駐車スペースは無い。
そこまで考えて、債権管理部の業務用車の駐車場所へ向かった。業務用車が出て行って空いた場所に停めていると推理したのである。
債権管理部のスペースの中に異質なイメージの車を見付けた。良香は車種に詳しくは無いが、ヤクザが乗りそうな印象を受けたのである。
血を連想するようなブラッディレッドという赤色である。こんな車を業務用として使わない。
その車を目指して良香は真っすぐに歩いていった。ナンバーの四桁がメモの数字と一致していた。
車の中にサングラスをかけた牛島がシートを倒して仰向けでいた。約束の時刻に間に合ったと思い、良香は運転手側のガラスを叩いた。
「よく見付けたな」
そう言いながら牛島はシートを起した。
「いかにも、あなたが乗りそうな車ね」
良香は車の前をゆっくりと回り込んで、助手席のドアを開けた。座ってドアを閉めようという瞬間に車が急発進した。助手席のドアは空いたままで、良香はシートベルトも締めていない。
急激な右カーブの遠心力で左側のドアは閉まった。半ドアの状態なので、良香は閉め直してロックした。
「危ないでしょ」
良香が抗議した。
「言っただろ。一秒でも遅れたら置いていくぜと。俺は午後三時ゼロ分ゼロ秒に発車しただけだ。何か文句あるか」
牛島が平然と言い放った。
良香がシートベルトを付けようとする前に、今度は左に急カーブで進んだ。その影響で、良香の上体が牛島の太ももの上に倒れ込んだ。
まるで金属のような大腿四頭筋に良香の顎が打ちつけられた。
（こいつ、わざと乱暴な運転をしている）
良香は席に座り直して慌ててシートベルトを締めた。
「おい、お前」
初対面の男に、『おい、お前』と呼ばれて、良香は内心むかついた。
しかも、自分の会社の方が業務委託するのであって、

相手は個人の受託先である。良香は業務上の優越的な立場を利用しないが、相手の偉そうな態度は耐えがたかった。

「低炭水化物か、ケトン式ダイエットをしているだろ」

牛島の無神経な質問に良香は驚いた。たしかに低炭水化物ダイエットを続け、今はケトン式ダイエットをしている。ケトン式は炭水化物を抜き、脂質中心の食生活である。

四十七才だが、二十代の体型を維持しているという自信が良香にはあった。

「なぜ、そう思ったの」

自分の体型を見てカマをかけて質問したと良香は推測して、質問を仕返した。

「汗のにおいだ」

(におい…)

体型のことと良香は思っていたら、意外な答えに戸惑った。

(こいつに私の汗のにおいを嗅がれた。女性の汗のにおいをかぐって、変態じゃないの)

良香は生理的な嫌悪を抱いた。

「低炭水やケトンをしていると、汗腺と肺からアセトンという物質が分泌される。アセトンは独特のにおい、つまり完熟りんごのにおいがする」

(こいつ、私の汗がにおう、息がにおうっていうの)

良香は内心でむかついている。

「完熟というより正確には、りんごが腐ったにおいだ」

牛島に『腐ったにおい』と言われて、良香は条件反射的に相手の顔面を殴った。相手がサングラスを掛けていたが、遠慮しなかった。

真正面であれば平手打ちをするところである。お互いに前を向いているので、右手で相手の顔面に手を振った。ジムで習ったバックハンドブローや裏拳という技である。良香はトレーニングジムに通っていて、そこではキックボクシングも教わっていた。

その良香の拳を牛島は煙草を吸う様に左手の人指し指と中指の二本指だけで受けた。

相手が運転中で危険なので、良香は寸前で止めるつもりであった。それでもその前に指二本だけで防いでくるとは良香は予想しなかった。

その状態で右に急ハンドルで車線変更して、猛スピードで加速する。良香の体は左側のドアに押し付けられた。

「これだから、生理中の女はヒステリーで困る」

牛島の言葉に良香は反論できなかった。良香は実際に生理中である。四十代後半の微妙な年代の女性に対して生理を指摘する無神経さに良香は腹立たしさを感じた。

「俺は触覚以外の五感、特に嗅覚が鋭い。それに血のにおいは経験上さんざん嗅ぎなれている」

ヤクザを血祭りにしたことを良香は思い出した。

「その上、俺にはいくつか共感覚があって、一部のにおいは脳の味覚につながっている」

(共感覚って音が見えるとか、刺激を別の五感で感じることね)

共感覚について良香も聞いたことがあった。

(でも、それって私の血のにおいで味を感じたってこと。それをわざわざ言うなんて、変態じゃないの)

さすがに良香も牛島を不気味に感じた。

「においで味まで感じるなんて面倒くさい体ね」

良香は内心の動揺を出さず、言葉を変えて言い返した。

「においと味覚の共感覚は特に血に強い。相手を血祭りにしたとき、自分も口の中が血だらけのことが多かったからな。脳神経がつながったんだろう」

尋常でない話を牛島はあっさりと言って続ける。

「反対にお前はにおいに鈍感だろ。副鼻腔炎か」

牛島の言葉はまた当たっていた。良香は副鼻腔炎、いわゆる蓄膿症で耳鼻科に通っている。

牛島に対する不気味な感情が良香の中で膨れ上がった。

「さっき、俺の股間にお前が顔をうずめただろ」

牛島の卑猥な表現に良香が抗議する。

「誤解を招く表現をしないで。あなたが乱暴な運転をするから、倒れ込んだだけでしょう」

良香の抗議に無視するように牛島は続ける。

「俺はダイエットでなく体を鍛えるために炭水化物を一切、断っている。五十才だが体脂肪率は5%だ。アセトン臭は自覚している。午前中は仕事で大量の汗をかいた。当然ながらアセトンの量はお前より多く分泌している。もし嗅覚が良ければ、お前の性格から、あんたの方がにおうというだろう」

牛島はまくしたてた。

(なんで、私があんたの汗のにおいを嗅がなきゃいけないのよ)

内心で良香は叫んだ。しかし、気付いたら自分で言いそうなセリフだし、実際に気付かなかった。鼻呼吸をしても良香は副鼻腔炎で、においをあまり感じられない。

「なぜ、あなたみたいな中年男と私が同じ汗のにおいがするなんて、言われなきゃいけないのよ」

良香がまた内心の言葉を変えて抗議すると、牛島は薄笑いを浮かべる。

「冗談だよ。別にお前の汗のにおいを感じた訳じゃない。その年でその体型なら、当然、低炭水かケトンをやっているだろうと、カマをかけただけだ」

牛島の言葉に良香は少し安心したが、引っ掛けられた不快感が残った。

「においに敏感な俺ですら気付かなかった。だから、安心しろよ」

(何が、安心しろよ)

良香は内心で毒づいた。もともと良香はケトン式ダイ

エットのアセトン臭について多少の知識があり、気をつけていた。それでかえって、牛島の虚言に騙されてしまった。

良香は陽射しが顔に入るのを避けるため、助手席のサンバイザー（日除け）を降ろした。

「日焼けシミが気になるのか」

牛島の図星の指摘に良香は言い返せなかった。良香は同年代と比べてシミが少ない。しかし、年齢相応に気にするところが仕草に出たのである。

「どうせ若い頃にはシミに気にせず海でも遊んでいたんだろ」

良香は大学生の頃はマリンスポーツを楽しんでいた。ジェットスキーに乗って小麦色に日焼けしていた。若い頃の日焼けが今の年になって影響するかと思って。日光を避けたのである。

「はったりばかり言うのは止めて」

良香の言葉に牛島が反応する。

「はったりではない。例えば、女の片方の手だけ日焼けしてることでソフトボールの経験者と当てたこともある。他にも動作や骨格や筋肉の付き方で本格的にやったスポーツ経験はだいたい分る。お前は今、ジムに通っていて、打撃系のトレーニングもしているな」

先ほどの打撃で見抜かれたようである。プロの総合格闘家であっただけに牛島の言葉に説得力があった。

「それにお前はバレーボールをしていただろう」

牛島の指摘に良香は虚を突かれた。

「そうだけど、なぜ分ったの」

実際に良香は中学・高校時代にバレーボール部で活躍していた。

「サンバイザーを降ろす仕草がバレーのオーバーサーブの動きに似ていた」

牛島の観察眼は鋭かった。

「それに両手の親指の付け根に左右対称で、あざがある。相当レシーブを受けていたな」

牛島の言葉に反射的に良香は両方の裾を引っ張った。

（あざなんて言葉を女性に言うなんて、本当に失礼な奴）

その時、良香のスマホに着信があった。部下の前田からである。午後の会議の件で前田からの確認の電話であった。良香が話し終えると、すかさず牛島がつぶやく。

「赤ん坊の顔をスマホの待ち受けにするのは止めた方がいいな」

牛島は前を見て運転しながら、良香のスマホの待ち受け画面を見たのである。牛島の視野角度が１８０度あるのかと良香は思った。

「お前の子か孫か知らねえが」

牛島の発言に良香は苛立ち、フロントボードに両手を叩きつける。

「孫なわけないでしょう。なぜ、いちいち気に障る言い

方をするの」

良香の待ち受け画面は甥が未だ赤ん坊のときの顔である。十才近く年の離れた妹の男児なのだが、良香にとって最も心が癒されるので、何年も前から使っていた。

どんなトラブルの電話でも赤ん坊の顔写真を見てから受けると、平静に対応できるのである。

「お前に災難があったら、その子が巻き込まれるかもしれないぞ」

（余計なお世話よ）

内心でつぶやきながら、良香は不安に思った。

そろそろ目的のマンションに着くころと良香が思っていた。すると、牛島の車はラブホテルの地下の駐車場へ行って、停まった。

「なんで、ラブホテルに行くのよ」

良香は焦って、牛島に抗議した。

「勘違いするな。コーセーマンションへ行くには、ここの駐車場に停めるのが一番、金と距離で合理的だ」

そう言って牛島は車を降りると、出口に向かって歩き出した。良香は慌てて牛島の後を追う。

「コーセーマンションはこのラブホテル群の中の一つをワンルームマンションにリフォームしたものだ。あそこには一時利用の駐車場は無い」

牛島は立ち止まると、振り返ってホテルを見た。

「なんなら、お前とこのままラブホテルへ行ってもいいんだぜ」

牛島はかがんで、良香の顔に鼻先を近づけてきた。

良香はサングラスの牛島の顔面を目がけて、右ストレートを放った。

ジムで教わった会心の一撃のつもりであったが、牛島の分厚い左手の平でブロックされた。

「肉は腐りかけが一番うまいからな」

牛島の『腐りかけ』という言葉で良香の理性が飛んだ。

牛島の右脇腹に良香は左足で三日月蹴りを打ち込んだ。

三日月蹴りとは極真空手やキックボクシングで使われる。左のミドルキックと前蹴りの中間の軌道で、相手の肝臓の急所をピンポイントで左足親指の付け根でえぐり刺す蹴りである。

素足でも相手が悶絶するが、良香はハイヒールの先端で蹴った。その先端が牛島の肝臓の右葉と左葉の隙間に突き刺さった。肝臓は膜表面のみ痛点があり、その痛点が集中している肝鎌状間膜を良香は狙ったのである。

普通の人間であれば、のたうち回り、病院送りになるくらいである。しかし、牛島は微動だにしなかった。

「俺の脳神経は、痛覚を含め触覚をほとんど感じなく出来ている。他の五感、視・聴・嗅・味覚は常人の数倍も敏感で、共感覚もあるのだがな」

牛島は何事もない様子で平然と話し続ける。

「いい三日月蹴りだ。お前の肉は未だ腐っていないな」

1・1・1・1・1……1

匠　克仁

1秒でも脳に空白ができると何か考えてしまう。例えば1秒って何だろうか？　アスペルガー（AS）のぼくは1，1いや一々、面倒なことを考える。1分の60分の1というのは説明にならない。論理が逆であり、1分が1秒の60倍である。1分でなく1日なら絶対値であり1日を24で割って、60で割って、60で割ったのが1秒ということ、1太陽日（LOD）の86400分の1ということは天文学的には誤りである。天文学的には1日には10の－8乗日、つまり、1日は2ミリ秒から1ミリ秒が季節や潮汐等で変動するからである。それで1秒という絶対値は、天文学からは説明できない。実は1秒は正確な定義があって、次の通りの説明になる。

133原子量のセシウムの同位体の原子が零下273．15℃（絶対温度）で静止したとき1つの基底状態から1つの基底状態までの間の超微細準位の遷移に対応する1放射の周期の時間があって、この時間の9192631770倍であると定義する。ざっくりと簡単にいうと1秒はセシウムの周波数の約92億回分である。ぼくの1秒の定義でなく国際単位の定義を本稿末に記す。なお1967年から2026年までである。この期間以外の1秒は全く異なる定義である。（セシウムは112から151までの同位体があるが、唯一である安定同位体が133である）現在の秒の定義では誤差があり1億年に1秒がずれるそうである。更に正確な定義にするために1秒の定義は2026年に変更予定である。今度は光で1秒を測ることになる予定である。現在で使うセシウム133とは関係なくなる。光を格子状に配列した容器に1個1個の原子を入れて、原子の振動を測定することで1秒を計算するという光格子時計を使う。これは2001年に香取秀俊氏が考案し、2005年に実現したので1秒の定義は日本人の発明で決まる。使う原子としては1番目の候補はストロンチウムである。イッテルビウム171が2番目の候補である。現在の1秒ではセシウム133の固有だが光格子時計に特定の原子は無い。この1秒の誤差は300億年ということなので、宇宙誕生の138億年前から、0．4秒の誤差しか発生しない。

1秒の定義について過去に遡って述べる。現在の1秒は1967年に定義したもので以前は異なった。その前の1960年から1967年までの間、1秒は1900年1月0日12時からの1太陽年を基準として、それを31556925．6747で割ると定義していた。この1960年よりも前は、1平均太陽日の86400分の1としていた。冒頭で否定した概念が使われていた。

1日の長さは変動するが、平均すると86400．001秒である。そのため閏（うるう）秒が必要になる。

1閏秒は1月1日か7月1日に午前8時59分60秒の1秒を追加する。直近の1閏秒の追加は2017年1月1日である。午前9時前は日本の場合である。今までに1度もないが理論的に負の閏秒がある。実施する場合は1秒、午前8時59分59秒が削除されることになる。1閏秒は大したことはないと思われそうだが、実は2015年の閏秒で東京証券取引所はシステム対策をした。

1秒といっても相対的なのである。例えば光速の2分の1で動く宇宙船では宇宙の1秒に0．87秒だけ進む。1の2乗から0．5の2乗を引いたものを2乗根した。1／2の光速を例に使ったが、動く速さを光速のV分の1と表現できるから（Vが巨大な数になるが）動く人は1の2乗から1／Vの2乗を引いて、2乗根した秒だけ1秒（静止した時間）に進み、時間の流れが遅くなる。

1秒は重力でも変わり重力が強いと時間の流れが遅い。

1秒は宇宙空間と比べて地球上は重力の影響があるので100億分の7秒遅くなる。1秒を地球で正確に測ると1＋100億分の7秒かかるということである。

1日かけて東京スカイツリーの上と下で時間を測ったら1日に4ナノ秒、上の方が時間が進むと確認された。

1秒はGPS衛星の時間も変わって、地球より早く進み1秒ごとに100億分の4．45秒遅い時計を使う。

1つは低重力のためで、1つは高速移動のためである。

1秒もブラックホールの近くだと永遠の時間だろう。

1秒の感覚は年をとるにつれて短く感じる。1秒でなく1年の話だが心理学的な時間の長さは年齢に反比例する1つの法則がある。ジャネの法則という。50才の人の1年は10分の1である。同じ1年でも5倍違ってくる。たの1年は人生の50分の1であるが、10才の人

だ1秒の様な短時間の場合はジャネの法則でなく、体内の1個1個の細胞の代謝リズムが遅くなるからだろう。

1秒は角度の単位でもある。時間と同じく分の60分の1である。分は度の60分の1で度が円弧の360分の1である。そうすると1秒は円弧の1296000分の1になる。恒星の年周視差では秒でも大きいのである。

1秒は英語でsecondで2番目であるが、1時間を1番目に分けてminute（分ける→分）とし、もう1回、分けてsecond minuteとした。

1秒の角度はsecondか接頭語arcを付ける。

1秒の定義は正確には2019年5月20日に微修正（1997年に測定の温度を絶対温度と追加）した。なお1kgや1m等も同時に定義を変更した。1kgとは水1リットルの質量が元の定義であった。正確には、0.1m×0.1m×0.1mの立方体に満たした水つまり10のマイナス3乗mの立方体の水の質量で決めたのでlmを基準に1kgが定義されていた。2019年5月19日までの1kgの定義はプラチナ90%イリジウム10%の直径高さとも約39mmの円柱の質量で、2019年5月20日から全く新しい概念に変更された。

1kgはプランク定数の数値を正確に6.626070015×10のマイナス34乗とし逆算して決める。なぜ1kgがこれで定義できるか難しい。プランク定数とは1光子のエネルギーと振動数の比例定数である。単位はlジュール秒＝Jsで、m2乗kg秒マイナス1乗に書き替えられる。プランク定数と光速度などから1kgの正確な値が逆算されるのである。文系の人でも1度はE＝mc2乗の式を目にしたことがあると思う。

1つの公式『エネルギー＝質量×光速2乗』と更にもう1つの公式『エネルギー＝プランク定数×周波数』とを1つにする。質量＝プランク定数×周波数÷光速2乗と1kg（質量）が計算されるのである。質量の定義ではlkgというkの付く単位が定義されその1000分の1を1gと再定義するが、1kgの他には無い。それに1kgの定義が1秒と1mの定義で決まるのが面白い。

1kgは波長が633n（ナノ）mである光子の約3×10の35乗のエネルギーと等価の質量ともいえる。

1kgは波長が633nmである光子が吸収されるとき1個の速度変化が約1.05×10の27乗m／秒。

1秒や1mという単位が1kgの質量の単位を決めると1瞬、変な感じをする。質量が先に精緻化してたら…（1原子の質量は元素によって異なるので特定の元素の内1原子を測り10の27乗位の値を1kgと定義したらlkgが説明できたと思う。そうしたら）現在の長さの1mというのも光が進む距離でなくプランク定数などで1kgから逆算してある原子の質量で定義しただろうと1瞬、想像した。荒唐無稽な話では無い様に思う。また1秒も1kgと1mで定義されたかもしれない。実際

に1秒だけ物理定数で定義せず、セシウム原子に基づく。

1mの定義は2019年では表現の変更だけであった。

1mの今の定義は光が真空中に299792458分の1秒に進む距離である。これは1983年に定義されて1889年からそれまで、プラチナ90%とイリジウム10%の合金（kgを測るのと同じ）のメートル原器で1mを正確に測っていた。ただし摂氏0度で使用した。

1mの定義は北極点と赤道の間の距離の1000万分の1で決めた。北極点と赤道の間といっても場所によって1mとか誤差が出るので、パリを通る子午線である。

1mを測るためにヨーロッパ大陸の長さを人手で測量し1mの基準となる子午線の半分の長さを角度から逆算し10000万分の1にしたのである。最北と最南の緯度差10度より少ない値で、逆算した。人手で測量したのは1789年のフランス革命の直後の危険な時代である。

1秒・1kg・1mの他も2019年に変更があった。

1A（アンペア）電流の単位

1Aの旧定義（ぼくなりに表現を変更した）

1Aは、無限に小さい円形の断面積を有する無限に長い1本の直線状の導体があり同じ直線状の導体が真空中に1mの間隔で平行に配置されて、それぞれの導体の長さ1mにつき2×10のマイナス7乗N及ぼし合う電流。

1Nはニュートンという力の単位である。

（1N＝1m・kg／秒の2乗）

1Aの新定義

1Aは、電気素量eの数値を1.602176634×10のマイナス19乗Aを秒とすることによって設定

1K（ケルビン）熱力学温度の単位

1Kの旧定義

1Kは、水の三重点の熱力学の温度の273.16分の1（水の三重点の熱力学の温度はセルシウス度で0.01℃である）

1Kの新定義

1Kは、ボルツマン定数kの数値を1.380649×10のマイナス23乗J／Kとすることで設定

1秒の定義で絶対温度と書いたが正式には0Kである。

1mol（モル）物質量の単位

1molの旧定義

1molは0.012kg（12gでなくkg）の炭素12の中の原子の数と等しい要素粒子の物質量

1molの新定義

1molは要素粒子（集合体）6.022140076×10の23乗個で構成された系の物質量

1cd（カンデラ）光度の単位

1cdの旧定義

1cdは、単色放射を放出し（周波数は540×10の12乗ヘルツ）、所定の方向におけるその放射の強度が1／683ワット／ステラジアンである光源の光度

1cdの新定義

1cdは視感効果度を基準にするが旧定義とほぼ同じ。1cdで使う周波数540テラヘルツは黄緑色である。1cdはキャンドル＝蠟燭の炎の明るさが由来になる。1cdはもともと人間の感覚を基準にしている。ぼくの1cdはおそらく他の人よりもまぶしいと思う。同一の1cdでもシナプス（神経結合）が多いのでまぶしい。

1秒から各単位までを書いてきたが、ぼくは高校物理を1回も教わっていない。ぼくは東大で生物を学ぼうと高1で決めていた。ぼくの高校は生物と物理2科目からの1択で生物を選ぶと物理を学べない。物理の話が書ける1理由はぼくがASだからである。文献でASの特徴の1つに物理・数学が得意とある。ぼく個人的な経験だが1秒（正確には時間）が静止と移動で違うというのは中1で理解していたつもりである。ASはX染色体にある1潜性遺伝子（注1）がシナプス刈込を阻害することが1つの原因である。1潜性遺伝子と書いたが、厳密には1種のNLGN遺伝子の3と4の2遺伝子がある。なお1種（学問上はファミリー）のNLGNの中でNLGN1（遺伝子は1も斜体）の自閉症遺伝子の仕組みが2017年（3と4は2003年）に発表された。NLGN1を解明したのは内匠（たくみ）透博士である。ぼくに1番親近感のある名前である。NLGN3・4と違って1は第3染色体で、X染色体に無い。NLGN遺伝子は1から5までであり、NLGN2は第7染色体で、最後の1つNLGN5はY染色体にある。自閉症遺伝子はこの1種だけでなく他に全染色体で発見されたがぼく個人は1番NLGNの影響が大きいと考える。シナプスは1対1でなく1対多で繋がっている。植木屋が剪定する様に1本の神経細胞から繋がるべきでないシナプスを刈込し1から数万個の必要なシナプスを残す。生後8ヶ月から10才までにシナプスの刈込が行われる。元の約2分の1の数のシナプスを普通は刈込する。ぼくはその2分の1のシナプスが刈込されずに残ったと思う。僅か2分の1と思われるかもしれないが、シナプスは1兆あるので1兆多く分岐する神経回路になる。理解しやすいように1例を挙げる。音を聞く時に視覚野に繋がるシナプスが1～数万がある。そのシナプスは普通なら刈込されるが1～数万繋がっていると、音が見える。ぼくの場合では1現象だが、睡眠中や完全な暗闇で大騒音が聞こえると1瞬、光が見える。定型人も音と視覚を繋ぐシナプスを1個も生まれてから持たないのではない。持っていても1つ残らず刈込されるのであろう。音と視覚はこれ位で1つも日常生活に問題が無い。臭いが味覚に繋がるのは1番つらく稀に日常生活に支障が出る。ぼくはこうして1刺激から複数の感覚がある。不要や有害な神経回路が1本2本でなく無数にあり、混線している感覚である。

1つの刺激で別の五感を共感覚という。

1件だけでなくASと共感覚の関係の文献がある。ぼく1個人だけでなく、シナプスの刈込の阻害がASとなる1機序であるのでASに共感覚が多いと思う。共感覚の1説でシナプスの刈込の阻害という研究がある。ぼくは1音と視覚、2臭いと味覚だが他にあるかもしれない。

1音と視覚は第8脳（内耳）神経と第2脳（視）神経の1部シナプス刈込されてないと思う。2臭いと味覚は第1脳（嗅）神経と第9脳（舌咽）神経（舌の後の3分の1の味覚）または第7脳（顔面）神経（残りの味覚）の1部シナプス刈込されてないかもしれない。解剖学上、第1脳神経が繋がる嗅覚野が眼窩前頭皮質と鼻腔の上で第1脳神経は他と比べて極端に短い。五感の内では嗅覚の1感覚だけ大脳に直結しており他の4つの感覚は視床に1回繋がってから大脳のそれぞれの感覚野へ伝わる。

1音と視覚については、視床で混線したかもしれない。第1脳神経は嗅覚以外に繋がらなさそうで、2の共感覚は1回で納得できる解剖学上の説明が難しい。ちなみに第1脳神経は解剖学では第Ⅰ脳神経とローマ数字を使う。

1度は共感覚をfMRIで確認したいと思っている。

1臨床例（n＝1）だと説得力が無いので共感覚に近い1例を示すと手話が該当する。手話で会話するときには1視覚と2聴覚が大脳で働いている。他の例で、点字は1触覚と2視覚が大脳の各感覚野で活発化している。

1番多い共感覚は視覚に別の視覚が加わるもののようで1・2・3…数字に固有の色が付く共感覚の例が多い。

1つここでぼくのASの特徴を箇条書きする。小学生で1・2・3…でなく1・1・1…と教わったのにならい1・1・1…と箇条書きで思いつくまま表記する。

1 常同
1 共感覚
1 強い拘り
1 空気読めない
1 人間関係が苦手
1 体成熟が異常に遅い
1 科学物質の過敏症が多い
1 団体競技スポーツができない
1 格闘技の選手に多い（ぼくの仮説）
1 文系科目よりも物理・数学など理系科目が得意

1番最後の例は前にも述べたが、複雑化した神経回路が1理由で物理や数学の思考に有利と感じる。それ以外は1潜性遺伝子が人生一般には支障を来すのである。この1番分かりやすい例が、ぼくのエッセイかもしれない。第1に挙げた常同つまり異常な反復が止められない。この1が2行目に横並びに病的に繰り返すエッセイを読むと1番、世界中でぼくがこの作者は大丈夫かと心配する。

1潜性遺伝子がX染色体上にあることで発現する病気を1つ1つ箇条書きで示すと、次のような遺伝病がある。

1 AS（NLGN3遺伝子とNLGN4遺伝子）

1　血友病
1　赤緑色覚多様性
1　頭髪毛根部の男性ホルモン受容体遺伝子
『1　AS』はアスペルガー症候群の略だが、米国で2013年に診断名から削除された。日本でも削除され2019年のぼくの公的な診断名は広汎性発達障害である。
1・1・1…と箇条書きで一般の診断名の推移を記す。
1　アスペルガー症候群（AS）
1　広汎性発達障害（PDD）
1　自閉症スペクトラム障害（ASD）
1　自閉症スペクトラム（AS（D））
1　自閉スペクトラム（AS）
『1　アスペルガー症候群』の Asperger Syndrome と『1　自閉スペクトラム』の Autism Spectrum がASと1つの同じ略語になるので、非常に混乱する。更にもう1つ自閉スペクトラム症と書いている文献もある。
1ASのぼくはオーティズムに閉の意味はなく連続体の1つを意味するスペクトラムはおかしいと思う。
1例がぼくで、自閉でもなくスペクトラムでもない。
1日も早く自閉スペクトラムを訂正すべきだと考えるし1番望んでいるのはアスペルガー症候群の復活である。
1　血友病　血液凝固因子の8と9の遺伝子　血液凝固1から13まで（6欠番）の因子が連携し血を固める。
1血友病A（8因子無）と2血友病B（9因子無）あり1の血友病Aが先天性凝固異常症の65%、血友病Bが14%を占める。Aの方がBよりも重症化しやすい。
1　赤緑色覚多様性　色盲・色弱から色覚異常となって1度だけでなく変更した経緯がある。ぼく個人的にもう1度変更すると思う。色覚の遺伝子は3種あるが、青の1種だけ第7染色体で赤と緑の2種がX上にある。なぜ1赤色覚多様性と2緑色覚多様性と分けないか？ぼくは1型（赤が×）と2型（緑が×）は別の遺伝病と思う。
1番の誤解は赤緑色…と一緒だと赤と緑の区別と思うが1赤が見にくいと2緑が見にくいと別の遺伝子である。
1人1人の色覚は異なるが眼底の網膜にある光受容体は1赤錐体2緑錐体3青錐体が光の3原色で全色を作る。
1赤錐体を作る遺伝子多様性で赤を含む全色が変わるが100%赤が無くならず割合の問題である。青錐体では1潜性遺伝子だけで青色覚は損なわない。第7染色体に1遺伝子が通常ならば、青色覚多様性は発生しない。
1　頭髪毛根部の男性ホルモン受容体遺伝子　AGAの1原因。AGAつまり男性型脱毛症の遺伝子は他にも第17染色体q（長腕）21と第20染色体p（短腕）11の遺伝子が男性ホルモン活性化酵素で脱毛させる。
1・1・1…と箇条書きでAGA遺伝子を整理する。
1　母のX染色体の男性ホルモン受容体遺伝子
1　父の第17染色体の男性ホルモン活性化遺伝子
1　母の第17染色体の男性ホルモン活性化遺伝子

1　父の第20染色体の男性ホルモン活性化遺伝子
1　母の第20染色体の男性ホルモン活性化遺伝子
1つ遺伝発現に共通する特徴は父母よりも母方の祖父が1番に影響が大きいことである。父はX染色体遺伝病に1番というよりも完全に影響が無い。母は潜性遺伝子を1個だけなので発現しにくい。母方の祖父からは2分の1の確率で男の子は発現するのである。反対に考えると1のNLGN遺伝子も血友病などの病気も父から息子へ100%遺伝することは無い。未来永劫に息子の子孫で100%無くなる。もし、ぼくに子がいてもNLGNは100%息子に遺伝しない。それから娘には遺伝しても1個で発現しにくい（相手も同遺伝子なしの場合）なお1つのX染色体の潜性遺伝子でも女性で発現があるから1点だけ補足説明をする。女性はX染色体が2本あるが1本が不活性化する。不活性化していない方に遺伝子が1個あれば、たとえ潜性でも発現するからである。もう1つ、遺伝子は外的要因でメチル化すると発現しない。
（1本のX染色体上の全遺伝子のメチル化が不活性化）
1個人の例だが、ぼく自身はASの原因がX染色体上の1潜性遺伝子の影響と考えている。ぼく自身がAS気質100%だが、父・母・弟はASらしい気質のかけらが1%も無いのである。論理的に考えれば、X染色体上の1潜性遺伝子つまりNLGN遺伝子の発現である。父は1つもNLGNを持っていない。母は2つのX染色体で1つしか持っておらず実際に発現していない。正確には1本の不活性化したX染色体にNLGNがある。2分の1の確率でぼくはNLGNを母から引き継いだ。2分の1の確率で弟には遺伝しなかった…と説明できる。もう1つ弟のNLGNがメチル化した可能性も0でないが。小1の頃から悩んでいた性格の問題が五十年つまり2分の1世紀かけて、NLGN遺伝子というX染色体上にある1潜性遺伝子にたどり着き少しだけ安堵した。もちろん1仮説である。ぼくはNLGNを検査したのではないが1回は遺伝子検査をしたい。祖父母の遺伝子を考えると1／8の確率つまり弾倉8つの回転式拳銃に1つ銃弾で1回ロシアンルーレットをしたら的中したようである。
（1つ補足すると、NLGNはニューロリギンという）
1番の得意科目は生物だが物理を学べば得意になった。
1つのASの特徴として物理・数学が得意と記述したが1セットで反対に言語能力が著しく劣ると文献にある。
1当事者のぼくは言語感覚が著しく違うと考えている。
1例を挙げると、高校までだが英語はできた。実際に高1で英検2級に合格していた。たいしたことはないが準1級が無い時代なので今より価値はあると思っている。高1まで東大の生物の進学を考えていた。ASのぼくが高1の終りから高2で文系に転じたのはASであることが1原因である。ASの性格で悩んでいたぼくが、当時に1番読み漁った本は心理学である。性格を探求する為、

第1志望を東大生物（理Ⅱ）から心理（文Ⅲ）に変えた。
唯1つ悩みは心理学が理系でなく文系なのである。それで1番苦手な日本史と2番目に苦手な世界史で受験した上1番に得意な生物の配点は50分の1しか無かった。
1度目の受験は私立を受けず、東大に不合格だった。
1浪の予備校は受験しない京大コースに通った。これは1円も払わない特待生だからで東大コースで無料なのは1校も大阪には無かったので、お金を優先して選んだ。
1浪したとき私立は合格しても進学しない条件で偏差値1位を選んで受験した。たまたまランキング表で早稲田1番で慶應2番になっていた。政経学部の政治だけだと1位だが経済と平均すると下がった。それなら法学部が1位と思い、受験した。もし、慶應が上だったら慶應で1番偏差値高い学部が他だったらその学部を受験した。
1度も法学部を志望したこともなく嫌いですらあった。
1浪でも東大に落ちたら高卒で働く約束だった。だから1つの心の支えにするためで、意地で受験した。私立を1校も受験せず東大に2度落ちたら、学力を示せない。
1社でも高卒で就職活動したら説明するつもりだった。
1回で早稲田に合格したが入学金を払わない筈だった。
1浪の東大で不合格になったので、高卒になる。それで1度、進学を諦めたが、母が入学金を振り込んでいた。
19才で早稲田法学部に入学した経緯は以上である。
1浪の京大コースは社会が無く歴史を独学した。歴史が1番に苦手だったのは法則性が存在しないことである。
1つASに通ずる性格とぼくは勝手に思っているのだが1法則（全体に共通するもの）が無いと気持ちが悪い。
16才のぼくは日本史に法則がないか、と思っていたら1平2源3平4源…と交代に権力を奪うと気付いた。
110号のまんじ記念号で『源平交代思想』を執筆したが16才のときに思いついた発想である。世界史を学んで1つだけ興味を持ったのが奴隷王朝である。インド史で13世紀の王朝である。王は世襲でなく、奴隷の中から1人選ぶという王朝である。エジプト史において同様に13世紀に、マムルーク朝が誕生した。マムルークとは1奴隷・2奴隷兵を意味する、訳すと奴隷王朝となるが1人目の王は女奴隷である。ぼくは興味を持ち、2001年に、まんじ82号で『奴隷王朝』について書いたが17才の時の「なぜ奴隷しか王になれないのか」という1疑問がきっかけだったのである。その当時は、まさか17年後に奴隷王朝でまんじに書くとは思わなかった。
1秒の話が最後にASの遺伝子とその遺伝子に操られた1個人のぼくの受験とまんじの話になってしまった。
1秒の脳の空白から1秒どころか何秒も何日も妄想して1作エッセイが生れた。この行を書いている2021年10月ノーベル物理学賞に真鍋淑郎氏が選ばれた。また1人日本人の受賞者が増えぼくも欲しくなった。ぼくも1から高校物理を始めてノーベル物理学賞を目指そう。

注1　100年以上も使われた劣性遺伝子であるが2021年から潜性遺伝子に訂正された。正確に記すと2021年は中学生物で、高校生物は2022年である。また100年以上同じく使われた優性も顕性に訂正された。中1の頃からぼくは劣性は差別的と考えていた。おそらく1つの潜性遺伝子でASを発現した直感である。なんと100年間も間違った日本語を訂正しなかった。2021年からの訂正は教育界であるが日本遺伝子学会は2017年に訂正している。厳密には、原語である英単語の10語の訳語を改訂した。同時に前述の潜性遺伝子の『1　赤緑色覚多様性』に変わった。見え方が人と違うと1盲（めく×）2異常というのは、差別である。ぼくも1あきめ×ら2異常と言われ世界の見え方が人と違う。
1盲と2あき×くらは将来、使用禁止になるだろうから1部を伏せ文字とした。言葉狩り対策にもなっている。
1つとても興味深い改訂があり、半数体である。2分の1体（字義通り）の語が単数体に改訳された。字義通り1数体であり、1／2が1になった。減数分裂の細胞は1／2の染色体数で半数体と教わった。2倍体のヒトで1倍体である。生物は3以上の倍体が存在するのだから1／3等の染色体群を半数体と呼ぶのは間違っていた。
1、2点で混乱する所がある。突然変異の原語は突然の1単語が削除され、只の変異に改訳された。この対応と1対で、今までの変異の原語は多様性に改訳された。

■　国際単位（SI）の秒の定義
秒（記号はs）は、時間のSI単位であり、セシウム周波数ΔνCs、すなわち、セシウム133原子の摂動を受けない基底状態の超微細構造遷移周波数を単位Hz（sのマイナス1乗に等しい）で表したときに、その数値を9192631770と定めることによって定義される
※　補則
この定義は温度0Kのもとで静止した状態にあるセシウム原子に基準を置いている

〈作者注〉
本文では0K（ケルビン）の温度を零下273．15℃（絶対温度）に書き換えました。

■　日本の法律上の秒の定義　【計量法】
セシウム133の原子の基底状態の二つの超微細準位の間の遷移に対応する放射の周期の9192631770倍に等しい時間

編集後記

コロナで合評会を中止したのが二年前の二月。それから丸二年を経過し、合評会の中止続きにもかかわらず、まんじ誌が「継続発行」が出来ていることについて、同人皆様に心から感謝申し上げます。この間、昨年十一月二十七日、十三人の同人が集まっての会食懇談会は、文字通り久しぶりであっただけに楽しかったですね。

維持会員田寺怜葦氏のご協力により、本号から表紙の絵が替わりました。題して「虎嘯風生」「こしょうふうしょう」。「虎嘯」は虎が吠えること。「風生」は風が発生すること。出典は中国『北史』です。時勢の変化に乗じて。英雄が活発に活動を始める例えです。この表紙絵は「コブッタさん」が「虎嘯風生」の実現により、日本を救う英雄の出現と、「まんじ誌」のさらなる発展を期待されておられるお姿と拝見いたしました。田寺先生、有難うございました。

本号から掲載の山田嘉久氏の「江戸庶民の名刺」、執筆のユニークさに感嘆しました。私も自分だったらどのように作るのかと、自分で楽しんでみました。まだ次号に続くとのことですので、楽しみが増えそうです。

短歌「冬の日他」の山本一成氏、「囲碁」では、ご本人の「一目」への執心が伝わってきます。分かりますね。

本号からの千坂精一氏の「お静地蔵譚」。毎号、拝読するたびに氏の原稿で、相変わらず足を使っての「地理の精密さ」と共に「登場人物の家系の詳しさ」などその詳細さに深甚の敬意を表します。

同人皆様がくれぐれもご自愛専一にお過ごしになられますよう祈念します。

（鍋）

まんじ第163号

令和4年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL・FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について

「虎吠えて風生ず」　　田寺怜葦（たでられい）画

英雄の出現を暗示する諺でもあります。
危うい今の日本を救う英雄の出現を強く願うばかりです。

まんじ

No.164

2022.5.1

まんじ第百六十四号　目次

「新井家」のルーツ探索……新井　宏……4
波間に漂う木の葉のような……千坂精一……18
近代日本洋画こぼれ話（第一回）……水谷嘉弘……31
短歌　マイウェイ他……山本一成……40
漢詩　汲深録（二十八）……松井秀人……43
天守台を仰いで(五)……三戸岡（みとおか）道夫（みちお）……45
忠山人日乗（六）……忠内正之……49
青雲の彼方（十五）……太田精一……55
吾輩は紙魚ロボである　その一〇……永畑俊三……70
江戸庶民の「名刺」（2）……山田嘉久……96
万機公論に決すべし……浅野博文……104
柿本人麻呂③……横山正義……113
高山右近（十三）……鍋屋次郎……116
…信仰に生きた生涯…
安芸門徒シルクロード紀行（15）……村上邦治……133
私の本州マラソン歴史紀行（東北編③）……安藤　剛……152
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その五）……山本　勉……181
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　2　神戸から来た男（四）……匠　克仁……199
左・右・左・右・左……右……匠　克仁……207
編集後記……編集子……213

「新井家」のルーツ探索

新井宏

一　はじめに

二十年ほど前、韓国国立慶尚大学に滞在していた頃、ときどき「新井先生はトンボ（同胞）ですか」と尋ねられた。意味は「在日韓国人ですか」ということである。

それは、「創氏改名」が法制化される昭和十五年（1940）以前から、大阪等の在日韓国人の間で、通称を日本風にする者が多く、その中でも韓国で二番目に多い「密陽朴氏」のほとんど全てが「新井」姓を名乗っていたからである。

尋ねられた時のニュアンスは、「親しみをこめて」が半分、「何だ！在日か」が半分であり、適当に「どうも違うようです」と答えて置いた。

父母の出身地が新潟県であり、相続の時に取り寄せた「戸籍謄本」をみると明治中頃には既に「新井」姓とあるので間違ってはいなかったであろう。

ほとんどの「朴」氏が「新井」姓を名乗ったのは、初代の新羅王・朴赫居世から三十三世孫の密陽大君・朴彦忱を本貫とする密陽朴氏が、「祖の新羅王が井戸のほとり」で生まれたとの伝承に由来するという。

韓国に関するクイズに「一般家庭で最も大切にされているものは何か」と言うのがある。答えは「族譜」で火災の時に真っ先に持ち出す「家宝」だという。日本で言う系図のようなもので、歴代祖先の経歴等も記載され、百科事典ほどの厚さがあり、五百宗族、千種類ほどが出版されている。なにしろ、国民のほとんどが「両班」になりたかった国であり、同姓婚を禁止する根強い規制もあり、恋愛をするにもまず相手の本貫や姓を確認しなければならない国だから「同族」の意識は極めて強い。

その頃、私も「戸籍謄本」を見ながらルーツ探索を思い立ったが、すぐに諦めた。曾祖父までは判ったが、商売をやっていた祖父の死後、その長男（伯父）一家が「事情があって岡崎」に移住してしまい、曹洞宗の菩提寺も判らなかったからである。いずれにしても農村のことと て調べても結果は知れたものだと判断していた。

ところが史遊会の関係で、長岡市出身の諸橋奏氏が、栃尾の大庄屋川上家の後裔であることから、川上家に連なる資料集を編纂した時にお手伝いをして感得するものがあった。新井家も長岡市郊外の出身だからであるが、明治五年創立の長岡高等学校の教員名簿の二番目、教頭に次いで新井二郎（数学、長岡藩）の名を見つけたからである。長岡藩士を辿って新井家の祖先の情報を調べることは出来ないだろうか。

しかしコロナ禍が始まり、国会図書館の利用が不便になりまた諦めていた。

そして、『まんじ』前々号（一六二号）に「藤村と藤井宣正」のことを書いていて、思いがけない発見が幾つも続いた。ほとんど何も情報のないところに、仮説をつくり資料をさがす楽しさである。

新井家は明治時代、現在の新潟県長岡市片田町の中心十字路の一角で『新橋屋六兵衛』という屋号の「糸繰る所」を営んでいた。糸繰りとは「製糸」のことで、長岡は生糸産業の盛んなところであった。

二　戸籍謄本からの遡及

手がかりは何と言っても、相続の時に取り寄せた父・新井稔の出生時の戸籍、すなわち祖父・新井孫七が戸主となった明治八年（1875）から死亡した大正二年（1913）までの「明治十九年式」除籍謄本である。一字一句丁寧に読んで、家系図に纏めて見たのが表1である。

この戸籍簿では、江戸末期生まれの高祖父・孫六にも、曾祖父・六蔵にも新井という姓が付いていることから、新井家が士族だったかも知れないと思った。しかしそれは早とちりだったようだ。

祖父・孫七が戸主となり新たな戸籍を開いたのが明治八年十二月、その直前の同年二月には既に「平民苗字必称義務令」が公布されていて、孫七が姓を持つのは当然であり、遡及して故人となっていた孫六、六蔵にも姓を記入した可能性があるからである。

そのことを確認するため、六蔵を戸主とする戸籍を長岡市役所に請求したが存在しないとの回答であった。考えてみれば、明治八年に死亡した戸主・六蔵の戸籍は、あったとしてもいわゆる明治四年式の「壬申戸籍」であり現在は閲覧不可とされている。

ところで庶民に苗字がなかったというのは誤りだという。享和元年（1801）の「苗字帯刀禁止令」が出されるまでは、姓を持つことは自由であり、令により、庶民の

場合、公の場での使用が禁止されただけで、大部分は姓を持ち続けていたのだと言う。

かくして戸籍簿からのルーツ遡及はまた一頓挫してしまった。

しかし、六蔵の二男・新井鶴松の子、亀壽が四歳の頃、群馬県館林市の大島二六四番地に養子に出されたらしいことが判ったのは収穫であった。ただ、戸籍簿の記載欄の約半分が白紙で塗抹されていて、あるはずの養子先等が判らない。

その点では亀壽の母、すなわち六蔵の二男・新井鶴松の妻の名が「荒井よつ」となっているのがヒントになった。館林市とくに大島地区は隣接する邑楽郡板倉町とともに日本全国で最も「荒井」姓の多い地域だからである。関連地域の「荒井」姓の分布統計[1]を簡単に示す。

日本全国平均	123,000 / 126,500,000 = 0.10%	
群馬県邑楽郡板倉町	350 / 14,300 = 2.4%	
群馬県館林市大島町	50 / 6,200 = 2.2%	
群馬県館林市	700 / 75,400 = 0.9%	
新潟県長岡市	70 / 275,000 = 0.03%	

この結果から見て、亀壽の養子先は母・よつの縁者と見て間違いないであろう。

製糸業の盛んな群馬県にあって、館林市はひとつの中心地であった。この地発祥の美智子上皇后の生家正田家「日清製粉」とならんで、館林の近代化に大きく寄与した「上毛モスリン」という織物会社(最盛期資本金四百万円)があった。上毛モスリンの前身、明治三十五年(1902)設立の「荒井織物工場」の創始者は荒井藤七と言い、大正二年(1908)には旧藩主秋元家から「二の丸」の跡地四千六百坪を買い取り、館林工場を稼働させている。その他にも俳人として名を残した荒井閑窓は綿糸問屋「カネ正荒清」の当主で五十万円の資産家であった。

このように、館林市には荒井姓が非常に多いばかりでなく、製糸業においても有力者がいた。

新井家は片田村で『新橋屋六兵衛』という屋号の製糸商を営んでいた。製糸業の盛んな館林の業者とも取引があり、新井鶴松の妻・荒井よつ、すなわち亀壽の母は館林の製糸業者から嫁入りして来たと考えても的外れでは無かろう。俳人荒井閑窓は館林市の善導寺で漢学を学んだというが、亀壽の入籍した地、大島村二六四番地(現在の表示ではなく明治期の土地台帖の表記で今も土地取引に使用されている)は善導寺までわずか四百メートルの距離である。「二の丸」跡地にしても一・五キロメートルの距離である。

なお、私の祖父母・孫七とトセは、男三名、女六名の子供に恵まれたが内三子が夭逝している。父は第八子ながら実質次男であり末っ子であった。伯父の長平は長男

と言っても、長女・イキと十一歳も歳が離れていた。

三　片田村の歴史から

戸籍からの遡及は予感通り挫折してしまったので、方向を変えて、地域の歴史を調べてみた。その中で、明治十一年(1878)の『越後国各郡村誌』の存在を知った。県下の村々が新潟県令に報告したものであるが、新潟県庁の火災でほとんどを焼失してしまった中、わずか数十村の村誌が残っていた。その中に、古志郡の高山村、高山外新田、片田村、小嶋古新田、犬茂嶋村、向島新田の六か村の村誌が「奇跡的」に含まれていたのである。有りがたいことに全文が『岡南の郷土誌』[2]に三十四頁にわたり掲載されている。その中に各村の平民、士族の人数が記載されていた。表2に示す。

それによると片田村の士族が五戸三十四人(七%)と異常に多いのである。もつとも高山村と片田村を除けば小村の事とて士族がいなくとも当然であるが、隣村十日町村の状況がわからないので片田村だけ異常に多いとは言い切れない。ただし、新潟県(越後)の士族の比率は平均二・三%で、農村部の比率は当然その値よりかなり低いはずである。

高山村には、信濃川の用水路「福島江」の開鑿に大功のあった庄屋・穂苅[3]茂左衛門の子孫が在村していた。小千谷市で取水し長岡市を経て見附市に至る約二十キロメートルの「福島江」は、慶安四年(1651)に完成するが、表高七万四千石の長岡藩が実高十四万石となったのは、ひとえにそのお陰であり、穂苅家は代々苗字帯刀が許されていた。それなのに士族がゼロというのは何か事情があったのであろうか。

さて、新井家があった片田村には、終戦翌年の小学校三年生から五年生までの三年間疎開していた。いや正確に言えば、父の長姉・関矢イキの家に寄寓していた。

関矢家は大正二年(1913)、前戸主・新井孫七の死亡に伴い新戸主となった伯父・新井長平が昭和初期になって岡崎に移住してしまい空地になっていた隣地にあった。平屋と見間違うほど背丈の低い家屋で、道路に面した一階は「のしや」という雑貨屋、二階は六畳間を縦に繋いだ洒落た客間で、我々母子四人(末弟はまだ生まれていなかった)はその二階の奥の納屋を改造して住んでいた。父は復員してきても勤め先

表2　片田村、高山村関連の士族、平民数

古志郡	士族		平民		寺社	
	戸	人	戸	人	戸	人
高山村			111	653	1	3
高山村外新田			1	9		
片田村	5	34	88	459		
古新田			2	11	1	
犬茂嶋村			11	55	2	
向嶋新田			26	142	2	
合計	5	34	239	1995	6	3

だった国策会社・南興水産[1]が無くなってしまっていたので、幼少時に修行した大工に戻り、東京に出稼ぎに行っていた。

後に知ったが、その家屋は文久年間(1861~64)に造られたものだという。状況から判断して、新井家の長女・イキが結婚するに当たって本家の家屋の一部を貰い受けたのであろう。二階の客間はちょっと改まった村の集会に利用されていた。

ついでながら、父の成人した姉妹四人は誰も農家に嫁入りしていない。それが『新橋屋六兵衛』の家風であったのであろうか。

さて、三年間の疎開生活を送った片田村には多少の土地勘がある。石垣で囲まれたお屋敷は折からの農地解放で没落した庄屋層であり、その他には武家屋敷のような家屋は見当たらなかった。旧家といわれるのは里見家で伝承では新田義貞に仕えた里見大膳亮の末裔だという。明治の中程、片田村が十日町村に併合された際に里見家から村長を出しているので、士族であったかも知れない。

その他に、片田村は古志郡五十か村の中で、最も早く明治五年(1872)に「蠻」すなわち小学校を設置したことで知られている。人口五百人の片田村で、教員五名、男生徒一六五名、女生徒十一名の陣容だったというが、形式的には近隣二十六か村組合の学校であった。教師の多くが旧長岡藩士というから、もし片田村に定住したとすれば士族として数えられたであろうが、当時の本籍地に対する意識から見て、その可能性は低いと思う。

糸繰る所『新橋屋六兵衛』が始まったのは文久年間(1861~63)の可能性が高く、北陸戊辰戦争で敗れた長岡藩士の「にわか武家の商法」という訳でもなさそうだ。

ここまでの議論を経て、もう諦めてもよいのに、まだ新井家が士族であった可能性を探ろうとしているのは「新井」姓の特異な分布による。館林市で成果を得た「荒井」姓の調査を応用した「新井」姓の結果は現代の統計[1]では次の通りである。

日本全国平均	203,000 / 126,500,000 = 0.16%
埼玉県	74,200 / 2,339,000 = 3.2%
群馬県	25,000 / 1,933,000 = 1.3%
新潟県	960 / 2,202,000 = 0.04%
新潟県長岡市	90 / 275,000 = 0.03%
古志郡（片田・村松・濁沢）	30 / 1,200 = 2.5%
古志郡（右記以外）	0 / 79,000 = 0%

そもそも新潟県の「新井」姓は全国平均の五分の一、隣接の群馬県の三十分の一と非常に少ない。長岡市は新潟県よりもさらに少ないが、片田及び片田に隣接する村松・濁沢を除くと旧古志郡では、七万九千人の住民に対

して、「新井」姓は皆無である。その反面、片田と隣接する村松、濁沢はわずか合計千二百人の住民に対して「新井」姓が三十名もいる。どうやら、もともとは、古志郡には全く新井姓はいなかったのである。

次の項で議論するように、長岡藩の中堅家臣団に新井姓が三系列認められ、縁者を含めれば五十名程度の新井姓がいたと想定される。そうであれば、片田、村松、濁沢に集中する新井姓もその家臣団の縁者であった可能性が非常に高くなる。

四　長岡藩士の新井二郎

それではいよいよ長岡藩における新井姓の検討に入ろう。

まず問題の発端となった長岡高等学校のルーツ「長岡洋学校」の教員であった新井二郎から調べる。それは新井二郎が数学の教師であったことと私の数学好きが共鳴したからである。いや、実を言えば、おそらく父・新井稔も数学好きだったのではなかろうか。

父・稔が四才の時、祖父・新井孫七が亡くなっている。跡取りの長男・長平はまだ十三歳、家業が大変なことになったのは想像に難くない。父は高等小学校を卒業してすぐ村の大工に弟子入りしたという。その時、村の神社の曲線屋根材をまっすぐに切ってしまいえらく怒られたという話をしばしばしていた。

そんなことがあってか、東京で建築業として成功していた岩村家を頼って上京したらしい。

父にとって幸せだったのは、大工仕事をしながら夜学で日本大学建築科が開設したコースに通わせてもらったことである。夜学とはいえ、当時の新鋭建築家の堀口捨巳などから教育を受けたと言い、ル・コルビジェやブルーノ・タウトのことなども良く知っていた。

その父が使った数学の教科書が疎開先にあった。高等小学校出でいきなり専門学校レベルの教育を受けるのは厳しかったに違いない。ただ、その当時、似た環境にあった夜学生達のために、実に判りやすい参考書が使われていた。私は小学校五年生でありながら、ルビ入りの参考書を夢中になって読んだ。

その結果、鶴亀算などの連立方程式を行列式で解く方法を知った。行列式は今でも高校では教えない。また父の計算尺を使うと九九を覚えずに掛け算ができることも知った。だからいまでも六×九＝五十四は言えるが、逆の九×六＝五十四は覚束ない。

わたくしが数学好きになったのは、この父の参考書を熟読したお陰だと思う。なにしろ高等学校まで、数学に関して教師と対等の意識であった。そして父も数学好きだったと信じている。

余談が長くなってしまったが、私の頭の中では、数学を通じて新井二郎と新井家を勝手にむすびつけていたのである。

まず長岡高等学校同窓会が創立一二五周年記念として作成した「会員名簿」の冒頭部分に明治五年(1872)の設立当初の教員として藤野善蔵(教頭、英学、窮理)と新井二郎(数学)を紹介している。それは長岡高校のルーツが長岡洋学校(創立者三島億二郎)であったことを宣言していることを意味する。

藤野善蔵は旧長岡藩士で維新後は慶應義塾で学び、福沢諭吉の信頼が厚く、熟頭格で英語教師を勤めていたが、小林虎三郎と共に大参事を務めていた校長の三島億二郎が高給で招聘したのだという。

その頃、長岡藩は北越戊辰戦争により焼け野原になり石高も七万四千石(実高約十四万石)から二万四千石に減らされ、士族は困窮を極めていた。その中で、明治三年(1870)支藩三根山藩から百俵の米が贈られて来たが、藩の大参事・小林虎三郎は、その米を藩士に分け与えず売却して学校設立の費用に宛てた。この故事は山本有三の戯曲「米百俵」で良く知られているが、その流れで設立されたのが明治四年の長岡洋学校なのである。洋学校とは英語と数学を教える学校の意味である。

藤野善蔵が文系責任者とすれば新井二郎は理系の責任者である。その消息を長岡市史に探し求めてみるが、有力な手がかりがない。

その中、慶応大学教授の内山正熊が発表した「日本海軍の創設」[5]という長文の論文の中に、たまたま新井二郎の名前をみつけた。日本海軍は創設当初、大藩からは五名、中藩からは四名のエリート人材の推薦を求めていた。得られた候補者の中には東大の前身である大学南校の在学生の名もある。

新井二郎については、二十二歳(1849生)、長岡藩士族、大学南校郭内に居住、去ル卯年(1867)より測量学志し作己年(1869)九月に大学南校の「小得業生」となり余力で英学修行中とある。

北越戊辰戦争が始まったのは慶応四年(1868)五月であるからその前年に藩から派遣されたのであろう。

リストには上がったが海軍には行かなかったらしい。

それではというので、今度は「長岡洋学校」の卒業者に注目してみた。それは前々稿「藤村と藤井宣正」を書く際に、明治の宗教哲学者、藤井宣正や井上円了が長岡洋学校で学んだことを知ったからである。

そして土屋隆夫の「井上圓了による長岡洋學校和同會の設立とその後の動向」[6]という論文に出会った。土屋隆夫は長岡高校の教師である。

「和同会」とは明治九年、井上円了や栂野四男吉、小山吉郎　長尾平藏ら八人が、福沢諭吉の三田演説会に学び「演説と討論」を目的として自主的に組織した会であるが、「輪講」形式による「作文」や「数学」の補習もあっ

たようである。当時、新井二郎の正規授業は毎日二時間、土曜一時間であったが、土曜の午後の「和同会」でも数学の補習が行われていた。

注目すべきことは、後に宗教哲学者として哲学館（現東洋大学）を創立することになる井上円了が意外というべきか数学の成績が非常に良かったこと、梅野四男吉は十勝の農業開発者でいわば理系、小山吉郎は海軍造船少将、そして、特に長尾平蔵は数学の成績が抜群で明治九年（1876）には学生の中から抜擢され数学の教員を嘱託され、以降同校に三十年間勤務するのである。

そのような状況から推測されるのは、数学教師としての新井二郎の影響である。年齢も近く、「和同会」設立にも何らかの役割を果たしていたかもしれない。

当然のことであるが長尾平蔵を学生の中から数学教員に推薦したのは新井二郎であろう。

長尾平蔵は同校の数学教師をその後三十年間務めながら、多くの「長岡藩史料」を収集しており、それらは『長岡藩政史(4)長尾平蔵収集長岡藩史料』[7]（長岡市史双書）として出版されている。膨大な史料集をみると、細目が五百項もあり、数学者らしく、その多くが人員、数量、価格等を収録している。明治・大正の数学者の沢田吾一が退官後、史学を志し、名著『奈良朝時代民政経済の数的研究』を表したことに通じるものを感じる。

この史料集を詳細に読めば新井二郎の手懸かりを得ると思ったが、残念ながら索引が付けられてなく、まだ成果に結びつかない。

五　長岡藩藩士分限帳

それではいよいよ長岡藩藩士分限帳で新井家の石高の推移を調べてみよう。幸いなことに資料は『長岡藩政史料集(6)長岡藩の家臣団』[8]（長岡市史双書）に纏められている。その中から新井姓及び荒井姓を抜き出して一覧表にしたのが表3である。ただし冒頭の欄は分限帳ではなく、牧野氏が元和四年（1618）、短期間の越後長峰藩から長岡に移封された時に随行した一九四名の家臣名である。同じく末尾の「長岡藩士族」は「明治二年（1868）長岡藩士総名順」[9]による。その結果、分限帳では全て新井姓なのに長岡移封時の随行家臣には、ひとりも新井姓が見当たらず、その替わりに荒井六兵衛の名があった。おそらく荒井は新井のことであろう。戦国期などでは漢字が同音であれば通じた例が多いからである。

「ついに見つけた！」という感慨があった。冒頭に記したように片田村の新井家屋号が『新橋屋六兵衛』で新井家の始祖・新井六兵衛に由来した可能性が高いからである。

しかし落ち着いて検証して行こう。表3を見るとすぐ判るように新井姓には三系列あり、石高に変動があるが

表3 長岡藩分限帳に載る新井家の系列と禄高の推移

	石高	氏　名	職名等
長岡入城時 元和4年(1618)		荒井六兵衛	
寛永分限帳 1642年	300石 100石 100石	新井彦左衛門 新井右衛門七 新井彦九郎	
寛文分限帳 1661年	230石 13両3人	新井小市郎 新井又七	奏者、足軽頭 江戸
延宝分限帳 1679年	220石 150石 70石 7両	新井彦左衛門 新井右衛門七 新井彦九郎 新井又七	中間頭，着料武具預かり 江戸
元禄分限帳 1689年	150石 70石 50石	新井右衛門七 新井彦九郎 新井又七	武具預かり 御刀番
宝永分限帳 1707年	150石 70石	新井右衛門七 新井彦九郎	御召武具預かり 御普請奉行
正徳分限帳 1712年		新井彦左衛門 新井彦九郎 新井受本	
寛保分限帳 1741年	200石 150石	新井彦左衛門 新井彦九郎	御取次 足軽頭
延享分限帳 1746年	200石 150石	新井彦左衛門 新井彦十郎	御取次 足軽頭
中居屋敷禄高	200石 70石 ？	新井精八郎 新井弥吾 荒井尾右衛門	 桶屋方
嘉永家中禄高 1850年	200石	新井彦左衛門	
安政分限帳 1860年	200石 80石	新井彦左衛門 新井正蔵	
長岡藩士族 1868年	90石 85石	新井鎮吾 新井小嶽	諸学校教授 器械司

七系が彦左衛門系を襲名したのであろう。

実はそれらの状況が蒼柴神社に伝わった宝暦四年（1754）の「諸士由緒記」[10]に記されている。長文であるが要約する。

新井彦左衛門　初代三百石、元和四年長岡移封に随行、弟の右衛門七と左源太召出す。二代目彦左衛門は二百二十石、三代目は天和元年（1681）二百二十石、四代目は二百石

新井右衛門七　元和四年長岡移封随行、百石　正保年二百石、慶安五年（1652）三百石、幼名右衛門七から願い出て六兵衛に改名、万治二年（1659）死亡、二代目は幼少のため半知預かり百五十石になった上に名を右衛門七に戻す

新井彦九郎　七十石、新知三十石、百石

まず確認できたことは、新井右衛門七が彦左衛門の弟代々襲名が続いている。その状況を要約して表4に示す。

彦左衛門系はいったん元禄分限帳で消えるが正徳分限帳で復活する。その一方で右衛門七系は宝永まで続くが正徳で消える。流れから見て、おそらくその時に右衛門

表4 長岡藩新井家の系列整理結果

新井家系列	長岡藩分限帳等（年号 / 西暦年）												
	寛永	慶安	寛文	延宝	元禄	宝永	正徳	寛保	延享	中居	嘉永	安政	明治
	1642	1652	1661	1679	1689	1707	1712	1741	1746		1850	1860	1868
彦左衛門系	300石		230石	220石			(200)石	200石	200石	200石	200石	200石	85石
	彦左		小市	彦左			彦左	彦左	彦左	精八	彦左	彦左	小嶽
右衛門七系	100石	300石			150石	150石							
	右衛	六兵			右衛	右衛							
彦九郎系	100石			70石	70石	70石	(150)石	150石	150石				
	彦九			彦九	彦九	彦九	彦九	彦九	彦十				
又七系(?)			9両2扶	7両	50石					70石		80石	90石
			又七	又七	又七					弥吾		正蔵	鎮吾

名前略称
彦左 新井彦左衛門　右衛 新井右衛門七　六兵 新井六兵衛
精八 新井精八郎　彦九 新井彦九郎　彦十 新井彦十郎

であり ながら、二代目の彦左衛門が三百石から二百三十石に減石された頃、加増が続き三百石となって、幼名の右衛門七から六兵衛に改名することを願い出て認められていることである。それは荒井六兵衛の名跡を継いで新井家の宗家を称する行為であった。ここに荒井六兵衛が新井六兵衛であったことの証を得たと思う。

しかし折角六兵衛を名乗りながら間もなく亡くなると継嗣が若く、半知預かりとなり百五十石の相続、襲名も再び右衛門七に戻されてしまった。右衛門七系にとっては不本意であったに違いない。

この意思が表れたのは半知預かりが清算される宝永～寛保年頃である。その頃、理由は判らないが、既に彦左衛門系の襲名は途絶えていた。そこで右衛門七系が五十石増の二百石で彦左衛門を襲名、彦九郎系は当初の百石に五十石を加え、更には新井又七という江戸勤務であった人物が五十石を得て新たに登場している。「七」の名がついていることから右衛門七の系列に属する人物であろう。合わせた半知預かりの百五十石がこのように几帳面に清算され、これによって親族間の話合いが纏まったのであろう。

かくして新井三系列の「もめ事」は片付いた。右衛門系としては新井宗家を引き継ぐことができたが、「六兵衛」を名乗ることができず思いが残ったであろう。

さて、残った問題は我が新井家の曾祖父・六蔵がどの

系統から婿入りしたかである。

それは時代と名前から容易に推測できる。安政分限帳に名のある新井正蔵であろう。正蔵と六蔵はそもそも名前が共通する。六蔵の婿入り時期を二十代前半の文久から慶応年代とすると正蔵の弟か息子なら年代的な齟齬はない。

かくして、新井家の祖は牧野氏が長岡に移封された時に随行した荒井六兵衛を初代として、その次男坊、幼名新井右衛門七（名を改め新井六兵衛）三百石を二代目とする右衛門七系列と判明した。それと共に、曾祖父・新井六蔵の実家は、八十石・新井正蔵と確定できたと考える。

更に付け加えるなら、祖父・新井孫七の祖父、すなわち六蔵の義父・孫六も新井六兵衛に連なる家系であった可能性が高いと考える。そもそも六蔵を婿に迎えたのも孫六が新井六兵衛に連なる家系であったからであり、その孫に孫七と名付けている。孫六とは新井六兵衛の「六代目の孫」を意識したもので、それ故に我が祖父に直系として孫七を名乗らせている。

正蔵の家系は遡上するとおそらく新井又七に繋がっており、新井家元祖の新井六兵衛に対する特別な関心と尊敬を維持していたに違いない。

なお、『ウィキペディア』「越後長岡藩の家臣団」[8]によれば、「北越戦争で敗北後、（新井家は）百五十石に留まり異例の部類に属した」とある。よほど恭順派として功績があったのであろうか。

ところが表3に示したように『明治二年長岡藩士総名順』[9]六百三十人のリストを見ると、諸学校教授并試補の欄に九十石・新井鎮吾、器械司兼弾薬運輸使の欄に八十五石・新井小嶽しか載っていない。しかも戊辰戦争の『戦死者のリスト』[10]をみると新井家から次の三名が載っている。

新井嘉次太（銃士）、慶応四年（1868）五月十九日、長岡城下で戦死。

新井彦兵衛（銃兵）、慶応四年（1868）七月二十五日、長岡城下大工町で負傷、八月一日に見附病院で自刃。

新井兵蔵（銃卒）、慶応四年（1868）七月二十九日、長岡新町村で戦死。

銃兵は中上級士族、銃士は士族、銃卒は卒族に対応している。しかも新井家にあっては彦兵衛の名称は宗家の当主しか名乗れなかったはずである。すなわち二百石の新井宗家の当主は負傷自刃していた。明治二年のリストにないのは当然である。

『ウィキペディア』の記述に誤りが多いことは前々稿で述べたが、このケースも誤りと断定してもよいであろう。

新井家の戦死者でもうひとり注目すべきなのは、銃卒の新井兵蔵である。名前の類似性から新井正蔵の子息だったのではなかろうか。そうであれば曾祖父・六蔵の兄弟であったかも知れない。

新井兵蔵が戦死したのは、長岡城が二度目の落城をした日である。同日、各地で追撃戦がおこなわれたが、その中でも片田村・十日町の戦闘は激しく、藩校・崇徳館教授の酒井貞蔵や用人で銃士隊長の花輪彦左衛門をはじめとして、銃士級では鳥山岩之丞、仙田隼人、大野治助、稲葉弥太郎、和田忠九郎、従卒では福島織之丞の八名が戦死している。

これらの戦死者数は、五月十九日の新政府側による長岡城落城（39名）、七月二十五日の長岡城奪回（36名）、七月二十九日の再落城（15名）を除けば、六月二十二日の福島村の戦闘の十名に次いで多い。しかも越後地域における最終戦であった。

おそらく片田村の曾祖父・新井六蔵はその戦いを現地で見たに違いない。

さて、それでは新井二郎はどの系列に繋がるのであろうか。おそらく新井正蔵、新井鎮吾の系列につながると思われる。理由は戊辰戦争に敗れた後、明治二年の藩士リストに新井鎮吾を諸学校教授としているからである。新井弥吾、正蔵、鎮吾と繋がる家系は諸学校教授の家系であり新井二郎の出身家であった可能性が高い。

やっと曾祖父・六蔵と新井二郎の関係が繋がった。近ければ兄弟、離れていても三～四親等くらいか。ここまで推測すると踏み込みすぎるかも知れないが、新井二郎の存在が私を導いてくれたことに免じて許されるかとおもう。

現在、旧長岡市内に住む新井姓は五十名ほどである。戸数にすれば十五戸くらいに過ぎない。丁寧に訊ねれば新井二郎の子孫にヒットするであろう。後日を期したい。

註　記

（1）『苗字由来ネット』https://myoji-yurai.net/。

（2）岡南の郷土誌編集委員会『岡南の郷土誌』岡南中学校後援会、一九八五、三一〇～三四三頁。

（3）「穂苅」と言う姓には思い出がある。高校三年生の夏休み、梅酒を飲みながら、出版されたばかりの分厚い「数学問題集」を最初から全部解いていた。そして模範解答に数件誤りを見つけ、そのことを著者の都立大学教授・穂苅四三二先生にお知らせしたところ、実に丁寧なお手紙を頂戴し、数学に関してはどこの大学でも大丈夫と褒めていただいた。どうせ模範解答例など学生に作らせたに違いないが、とても嬉しかった。穂苅先生は後に城西大学の学長を務めている。今度のルーツ探索で母

の郷里、高山村の偉人・穂苅茂左衛門のことを知り、ついでに「穂苅」姓の分布を調べたところ新潟県が第一位でその中でも高山村は最も密度が高い所、穂苅先生のルーツは三島郡来迎寺、高山村から信濃川を挟んで三キロメートルのところにあった。

（4）南興水産株式会社については、川上善九郎『南興水産の足跡』南水会、一九九四がある。

（5）内山正熊「日本海軍の創設」『法学研究』五三巻一一号、一九八〇、一～七五頁。

（6）土屋隆夫「井上圓了による長岡洋學校和同會の設立とその後の動向」『井上円了センター年報』二一号、二〇一二、二三～四九頁。

（7）「長尾平蔵収集長岡藩史料」『長岡藩政史料集（4）』長岡市史双書23、一九九二。

（8）「長岡藩の家臣団」『長岡藩政史料集（6）』長岡市史双書41、二〇〇二、一七～一七六頁。

（9）「明治二年長岡藩士総名順」『長岡藩政史料集（4）』長岡市史双書23、一九九二、二三八～二四五頁。

（10）「諸士由緒記」『長岡藩政史料集（2）家中編』長岡市史双書15、一九九一、一四二頁。藩士五八九家の由緒をまとめたもので、原本は一七五四年成立の蒼柴神社所蔵。

（11）招魂社（蒼紫神社の奥）の碑、明治七（1874）年、戊辰の役で亡くなった長岡藩士たち三百五十余名を慰霊すべく、歴代藩主霊廟の隣りに創建された。リストがhttp://www.aizue.net/keiyuti/niigataphoto/jyunnan-syoukonsya.html に掲載されている。

波間に漂う木の葉のような

千坂精一

一、

空に星はなかった。真正面から容赦なく吹きつけてくる北風に逆らって私は身を竦め外套の襟を両手でしっかりと押えて歩き続けた。

夕方から気温がぐんと下がって骨の髄まで凍てつくような夜になった。

大通りの両側に軒を連ねている商店街はどの店もシャッターをおろしてしまっていてひっそり静まり返っていた。

この辺は郊外のJR駅に近い繁華街で、日中は電柱に取り付けたラウドスピーカーから歳末大売出しの宣伝放送が慌しく流れる下を買物客が忙しく行き交って結構賑わっているのだが、いまはこの世とも思われぬ無気味な闇に包まれてしまって人の気配すらなかった。

前方にぽつんと灯りが漏れているのはあれは煙草屋だろう。例によって老婆が炬燵にしがみついて気持よさそうに居眠りをしながら店番をしているに違いない。

（あそこで煙草を買ってやろう）

今夜吸うぐらいはまだ充分残っているが、いま通り過ぎてしまったらあの老婆から煙草を買う機会は永久に失われてしまうのだ。

また強い風が唸りをたてて吹きつけてきたので思わず首を竦めた。いくぶんでも風当たりを避けようとして頭を下げて歩く。いま文房具屋の前を通り過ぎようとしているところだから次は書店でその次は洋品屋だ。そして、カメラ屋があって洋菓子店、眼鏡屋とつづきその隣はレストランと口の中で呟いてみる。十五年も通い馴れた道だから商店街の配列は全部諳んじていた。

風に逆らって夢中で歩き続けているうちにいつか煙草屋の前へきた。仄かに舗道を照らしている店の漏れ灯が侘しい。

やはり老婆は炬燵にしがみついて居眠りをしていた。私は老婆を吃驚りさせないように気遣いながら硝子の小窓をそっと叩く。三回、四回、五回……。老婆は相変らず居眠りを続けている。私は寒さに耐えるために足踏みをしながら辛棒強く小窓を叩きつづける。リズミカルな運動を繰り返している私の手足はいつか無意識に気持よさそうに舟を漕いでいる老婆と調子を合わせていた。硝子越しに見える反射型石油ストーブの真赤なニクロム線の色が戸外の寒さを心持ち和らげてくれた。

どのくらいの時間が経っただろうか。前のめりになった拍子に眼を覚ました老婆がやっと私の存在に気づいてくれて大儀そうに立ちあがって小窓を開けてくれた。私は急いでポケットから小銭を掴み出していつも吸っている煙草の名を告げた。老婆は私から硬貨を受取ると馴れた手つきで煙草の上に釣銭の銅貨を乗せて返してよこした。私は煙草と釣銭をポケットに捩じ込みながら婆さんさようなら、元気で暮らしなよと心の中で呟いた。

老婆は商いを終えると先刻とは別人のような素早い動作で小窓を閉めて炬燵へ戻っていった。

私も踵を返して煙草屋の前を離れた。遠くを走っている電車の音が風に乗って幽かにきこえてきた。私は思わず身震いした。躰の芯まですっかり冷えきってしまっていたのだ。

（そうだ、もう一軒別れを告げなければならないところがあった）

私は外套のポケットに両手を突っ込んで駅裏の小料理屋へ急いだ。

カウンター越しに調理をしながら喋り続ける禿頭の親爺の聞き飽きた軍隊時代の懐旧談を肴にして飲むのも今夜が最後になる。

（親爺に理由を話そうか。それとも然り気なく別れようか）

どちらとも決心がつかないうちにもう駅裏の小路の入口まできてしまっていた。

私はこの町のある電子部品の製造会社に十五年勤務しているサラリーマンであった。

いや、いまはもう会社とは縁のない存在になってしまったのだから、勤務していたと過去形で言うべきであろう。退職したのは私の意志からではなかった。会社から一方的な通告で放り出されてしまったのだ。戦後の私はなにをやっても永続きしなかった。奇妙なことにやっと落着いたと思うといつもなにかが起こり挫折してしまうのだった。ひとつの仕事が十五年もつづいたのは奇蹟であり記録的なことだった。

私の人生は、もともと太平洋戦争の終戦の年で終わったといってもいいはずであった。それがひょんなことか

ら生き延びてしまってからはどうも自分の意志通りには生きて行けないように運命づけられてしまったようであった。私の人生をくるわせた大逆転劇は昭和二十年（一九四五）四月七日の早朝に起った。そして、その日から以後の私の人生はなにか得体の知れない強い力で自分の意志とは関係のない方向へどんどん押し流されて行ってしまい、いつどこへ漂着するのか皆目見当がつかなくなってしまっていた。

二、

米・英両国に宣戦布告して三年ほどつづいた太平洋戦争も日本の敗色は覆うべくもなく、末期的な症状を露呈して昭和二十年は明けた。

当時、海軍の飛行機乗りだった私は暗雲漂う新しい年を南九州の特攻基地で迎えた。

昭和十九年十月に本居宣長が詠んだ和歌、

敷島の大和心を人問わば
朝日に匂う山櫻花

からとって命名されたという敷島、大和、朝日、山櫻の四隊が零式戦闘機〈零戦〉に二五〇キロ爆弾を抱かせてフィリピン諸島のセブ、ダバオ、マバラカットの各基地から体当たり攻撃に出撃して行ったことにはじまる特攻作戦は、日を追うに従ってエスカレートしてきていた。

三月下旬、米軍の機動部隊が慶良間列島に迫り、四月一日には沖縄本島に上陸を開始した。南九州に点在する基地に待機していた各飛行隊は俄に緊張した。

私の所属していた飛行隊は〈彗星〉という艦上爆撃機を有する攻撃隊であったが、まだこの時点では特攻出撃をすることは確定していなかった。だが、敗色が濃く迫りつつある国の軍籍に身をおいているからには祖国と同胞を守るために散華する時期が遠からずやってくることは間違いないとかねてから覚悟は決めていたが、しかし私の思考の中ではどんなに切羽詰った状況を想定してみても自分が死ぬ場面だけはどうしても思い描くことができなかった。

だが、四月六日の早朝偵察機が奄美大島の南方で敵の機動部隊を発見したことから死は現実のものとなった。連合艦隊の司令部は偵察機からの報告を受けると、ただちに爆装機による体当たり攻撃を敢行するように〈菊水一号作戦〉を発令した。

私の飛行隊は六日と七日の両日に分かれて編成され、私の名前は七日に出撃する隊の中にあった。搭乗員宿舎の入口の黒板に書き出された〈神風特別攻撃隊尊皇隊〉の搭乗割はあっという間に捺された生命の終焉を宣告する烙印であった。

作戦の発令と同時に出撃して行った半数の隊員達を見送って宿舎に戻った私の心は虚ろだった。明日基地を飛び立つまでの残された時間が私を苛み続けた。この世から消え去る時間が重苦しく迫りつつある中で私は不覚にもこの期に及んではじめて生きていることの仕合せを痛感した。このときくらいいろいろな思いが私の脳裡を駆け巡って充実した時間を持ったことはこれまでついに一度もなかった。人間が一生かかって考え、悩み、苦しむ事柄を僅か一日のうちに体験してしまったのだった。気持の整理をするにしては短かすぎる時間をなまじ与えられてしまったことは苛酷であり不幸であった。生半可な立場に置かれてみると、寧ろ気持の整理をする時間の余裕もなく慌しく出撃して行った僚友たちが羨ましく思われた。身辺の整理をして遺品を揃え、肉親宛に最後の手紙を書いてしまうとあとはもう為すこともなくただ時間をもて余すだけだった。凝っとして死を待つことの苦痛に耐えられず、たとえ一時の慰めであるにせよ迫り来るものを忘れようとしていつかみんなで車座になり酒宴になった。飲み、うたい、踊り、果ては相撲をとったり逆立ちを競い合ったりして燥ぎ合ったが心は虚ろだった。

深更にいたって疲れ果てた身を寝床に横たえてみたものの寝息を立てる者は誰一人いなかった。

目を閉じた私の脳裡にエメラルドグリーンの海に浮かぶ沖縄本島が映し出された。搭乗機の中から俯瞰する限りは島も海も穏やかだった。だがよく見るとその美しい海面に木片のようなものが浮遊している。いたいた、敵の機動部隊だ。ペアの操縦員が振り向いてにっこり笑った。私も微笑を返しながら大きく頷いてみせた。指揮官機の合図で僚機は編隊を解いて各自一斉に体当たり攻撃の態勢に入った。急降下して行くにつれて木片のような浮遊物がだんだんと空母の姿に変貌していった。

二人の若者を乗せた彗星艦上爆撃機は対空砲火を潜り抜けて空母めがけて吸い込まれるように突っ込んで行く。目の前に迫った空母が視野いっぱいに拡がり、甲板を右往左往する人影がはっきり見えた――。

私はこうして自分の最期の様子をまるで劇映画でもみるように具に脳裡に描きながらこういう場合体当たりする瞬間まで正常な精神状態でいることができるものなのだろうかと考えた。今日出撃して行った人達はどうだったのだろう。明日の自分は果たしてどうなのだろうか。といつまでも思いをめぐらせていた。

四月七日は曇っていたが、飛行に支障はなさそうだった。先発の零戦隊が出撃するのを見送ってから私達はすぐに戦闘指揮所の前に集合した。司令の激励の訓示が終ると盃が配られた。別離の酒は咽喉に刺さって苦く沁みた。五百キロ爆弾を抱いて滑走路の周辺に待機している私たちの棺桶になる彗星艦上爆撃機が一斉にプロペラをまわしはじめ、轟音が近くの山に木霊した。

隊長は昨日隊員の半数を引き連れて出撃してしまったので、今日の指揮をとることになっている分隊長から航路や気象状況などについてあらためて細かい注意があっ

たあとで、全員が時計を合わせた。あとは分隊長の「かかれ！」の号令を待つだけになった。

（いよいよあの世へ旅立つときがきた）

と思うと、頭の血がすっと下がって目が眩みそうになった。

そのとき、

「敵機襲来！退避、退避ッ」

と怒鳴る見張員の声が張り詰めた空気を破った。反射的に見上げた空にグラマン戦闘機の機影がいくつか浮かんでいた。

私達は咄嗟に隊列を解いて飛行場を取巻いている雑木林めがけて夢中で駆け込んだ。

頭上に爆音が近づいたと思うと、背後でバリバリッという機銃音が耳を劈いた。雑木林の中へ転がるようにして飛込み、草叢に身を投げ出して伏せた途端に物凄い爆発音がたてつづけに起った。

それは悪夢のような時間であった。傍若無人に暴れ回った敵機の爆音が轟て遠去かって行くのを耳で確かめながら立ち上がって飛行場を振り返って見ると、黒煙が濛々と立ち籠めている間からあちこちで紅蓮の炎が揺れていた。さっきのあの物凄い爆発音は敵機の銃撃によって僚機の抱いている五百キロ爆弾が炸裂した音だったのだ。出撃直前の彗星艦上爆撃機は敵の機動部隊を葬るための爆弾で一機残らず自爆し果ててしまった。私達は散乱している僚機の残骸に虚ろな目を向けながら声もなくいつまでもその場に呆然と立尽くしていた。

搭乗機を喪ってしまった私達は、羽を捥れた鳥のように為す術もなく毎日を過ごした。代替機が到着するまでということで待機させられていたが、その間にも特攻作戦は日日に激しさを増して行き、いつの間にか私達の基地は特攻機の中継基地に利用されるようになっていった。

関東地方の基地から遙々飛んできた零戦や九九式艦爆が一旦ここで翼を憩め、翌日慌しく飛び立って行った。私達は毎日出撃して行くそれら僚友達を見送りつづけたが、自分達が乗って行く代替機はいつまで待っても飛んではこなかった。

ながい待機時間がつづいた。

その間を埋める飛行長や先任下士官の訓示や座学が繰り返されていた。

三、

小料理屋のカウンターで私が銚子を二本あけているあいだに立て混んでいた店のなかはいつか喧噪が消えて客の数は疎らになっていた。師走の慌しさはここにも押し寄せてきていた。

振り返ってみると、あの日を境にして私の運命はまったく狂ってしまったのだった。

順調にことが運んでいればあの日のうちに私の生命は

終っていたはずなのに筋書にない闖入者のおかげで土壇場でひっくり返されてしまい、死神もさぞや慌てたことだろう。いや、いちばん慌てたのはむしろ私たち自身だった。死ぬ機会を逸したまま戦争が終ってしまったのでこのまま生きていていいものかどうかすっかり戸惑ってしまったのだ。人間が一生のあいだに考えたり悩んだりすることをあの日のうちに纏めて出し尽くしてしまったのでもうなにを考える気力もなく、ただ呆然としているだけであった。

戦後の私の人生はきめられた枠の外にはみ出した付録であった。どう生きて行こうが所詮は拾いものの人生なのだった。私はあの日から今日までの歳月をただあるがままに任せて生きてきた。

今夜の酒はなぜか酔いが遅かった。

「おやじ、もう一本つけてくれ」

「いいんですか」

「ああ、今夜は寒いせいか酔わないんだ。なにか肴もみつくろってくれないか」

「へい」

親爺は手際よく支度にかかった。

「旦那、この頃やっと騒ぎがなくなりましたね」

「なにが」

「駅の前でビラを配っていた野郎達ですよ」

「ああ、あれか、もうすんだんだよ」

「随分ひどいことを書かれましたね」

「うむ」

「ビラを読んで腹が立ちましたよ。あっしにはくわしい事情は判りませんが、ああまで書かなくてもいいだろうと思いましてね」

「仕方がないさ」

「だってあんまりひどいじゃありませんか」

「反体制側の人達から体制の中にいる人間を批判すればああいうことになるだろうさ」

「佐々木っていいましたかね、あの若僧」

「うむ」

「旦那にや随分と可愛がられてよくここへ連れてきて貰っていたのにね。その旦那に対してあんな仕打ってありませんよ。あの野郎は人間の屑だ、顔を見るのも胸糞が悪いや」

「来ているのか、ここへ」

「いいえ、あの騒動がはじまってからぱったり来なくなりましたよ。来やがったら胸倉摑んで叩き出してやろうと思って手ぐすねひいて待っているんですがね」

「いい青年なんだがな」

「旦那が大人しいのをいいことにしていやがるんですよ。ああいう奴等の時代になったんじゃ世も末ですね。あたし達はなんのために躰を張って戦ってきたのかと思うと情なくなってきますよ」

「もうわれわれの時代は終わったんだよ。いや、考えてみればわれわれの時代なんてものはいちどもなかったな。強いてあげれば戦争の末期に爆弾替わりに使われたあの頃だけがそうだったのかも知れない」

「旦那、寂しいことを言わねえで下さいよ。まだまだこれからじゃありませんか。躰を張って生きてきた者にや筋金が通っているんだからあんな若僧達に負けるわけがねえ」

「戦争で死に損なった私なんかは、若い人達からみれば蜃気楼のようなものかも知れないよ」

「今夜の旦那はへんですよ」

私はついに親爺に別れを言いそびれてしまった。さっきまではながいつき合いだったこの親爺にだけは事情を話して笑って別れるつもりでいたのだが、飲んでいるうちに気が変った。戦後の私は人を見送ることも、人から見送られることも極端に嫌になってしまった。浮世の義理で止むなく知人の旅立ちを空港や駅頭へ見送りに行くときまって南九州の基地で出撃して行く特攻機を見送った遠い昔の光景が思い出されて、遣り切れない虚しさに襲われるのだった。あのとき死んだはずの人間だと思えばどんな苦しいことにも耐えられたし、この世の中に怖いものはなにひとつなかったが、別れの場面だけは苦手だった。

私は勘定をすませると然りげないふうを装ってカウンターの前を離れた。なにも知らない親爺はいつもと変わらぬ態度でそんな私を見送ってくれた。戸外は相変わらず突き刺すような北風が吹き荒れていた。

四、

私が佐々木三郎とはじめて会ったのは、去年の春の採用試験のときであった。会社は毎年定期的に新卒者の採用をつづけてきていたが、輸出の受注が年々増えて生産量が著しく伸長しているのに対して人材の育成が追いつかず、班長級の層が手薄になってしまっていた。製造部長が悩みを提起したのは私が経理部長から人事部長に替った直後であった。私は解決策として素質のある人材を広く社外に求めて短期間のうちに育成する方法を社長に提案した。いままで新卒以外の者を採用した経験がないので異質の分子は水に馴染まないだろうと反対する声が多かったがそうかといって他に誰からも代案が出ないので、結局私の案を実行してみようということになった。私は日刊紙の中から発行部数の多い順に二紙を選んで募集広告を出した。

面接日には三十数名の青年が応募してきた。そのなかに佐々木三郎がいたのだ。彼は五人の面接委員のまえで臆することなく矢継ぎ早の質問に要領よく答えた。私は質問を浴びせながら明晰そうな頭脳を持つ垢抜けた身形のこの青年に好感を抱いた。

翌日の選考委員会に提出された内定者名簿には八人の氏名が並んでいたが、佐々木三郎の名前はなかった。人事課長にきいてみると彼を推したのは私一人だけだということであった。内定者の中から五人を選ぶ会議がはじまった席で私は佐々木三郎を執拗に推して重役たちの説得につとめた。

四人の委員は、個性がない、根性に欠けているようだ、小賢しすぎる、と言って取り合わなかったが、私には自信があった。根負けした小杉社長が、

「人事部長がそんなに惚れ込んだのなら就任祝いのプレゼントに道楽をしてみようか」

と言い出したので、他の重役達も渋々承知をしてくれた。私の強引な推挙のために内定者のうちから五人を選ぶ予定が四人に減って誰か一人は門口まで辿り着きながら内部へ入れて貰えないという気の毒な結果になってしまったが、会社としては五人の採用を決定して所期の目的を達成した。

三箇月の特別研修を終えて班長として工場へ送り込まれた五人の中途採用者たちは、短期間のうちに子飼の班長たちに劣らぬリーダーシップを発揮しはじめた。会社の抜擢人事に不平を並べ立てていた古参の班長や社員達も彼等の実績を認めておとなしくなり、懸念された波風は大事に至らずにおさまった。なかでも佐々木三郎の率いる班はチームワークがいいと評判が高く、生産能率でも他の班をリードしていたので、私は自分の目に狂いがなかったことを喜んだ。

そんなある日、私は会社の会議室で聞かれた株主総会の席へ突然呼び出された。株主総会といっても同族会社なので出席している人達は小杉社長と息子の専務、それに向井営業部長と製造部長の四人で、取締役会とおなじ顔触れであった。

株主総会の席へ呼び出されるということは私の現在の責任分野である人事部内か、あるいはまえの経理部内または私個人に関してなにか重大な問題が起こっているということなので、何事だろうと卿か心中穏やかではなかった。

会議室へ入って行くと、社長が微笑で迎えながら、

「ここへかけなさい」

と言って自分と向き合いになる位置の席をすすめた。

「今度の採用試験は大成功だった。きみの積極策のおかげだよ。どうも有難う」

「いいえ、とんでもない」

私は採用試験の成果を自分一人の功績だとは思っていなかった。たまたま応募者の質がよかったから念願通りの結果になったのであって、どんなに緻密な計画をたてたところで所詮応募者の質が悪ければ適わぬことであった。他力本願の仕事が成功してもそれは自分の功績とは言い難い。

「きみはうちへ来てからもう何年になる」
「はい、十五年になります」
「もうそんなになるかね。はやいものだな」
過ぎ去った歳月はたしかにはやかった。
「実はね、今日の株主総会で私が君を取締役に推挙したんだ。どうだね。承諾してくれるか」
「とんでもない。私などにはとてもそんな大役はつとまりません」
「まあいいじゃないか。みんなも君の実力を認めているんだから」
「折角のご好意ですが私はまだまだ未熟でしてそんな大役はお受けできません」
「昨日今日入社した者でも班長の実績をあげているんだから、外様だって役員はつとまるだろう」
向井営業部長が皮肉な調子で口を挟んだ。私はなにかというと譜代であることを鼻にかける傲慢無礼なこの男とはもともと反りが合わなかった。
「社長はまえから君を見込んでおられるのだ。役員になって協力してくれないか」
今度は息子の専務が口を入れた。
「いままでも私なりに一所懸命やってきていたつもりですが」
「それはそうだが――」
私は最早過去の人間であった。あのとき確かに死ぬことになっていながらグラマンの襲撃で生き残ってしまった私が身をおく場所はもうこの世の中にはどこを探してもないはずだった。員数外の人間は人に気づかれないように裏道をひっそり歩いて行くよりは仕方がない。間違っても陽の当る場所へ出てはならないのだ。といつも自分に言いきかせてきた。
「社長、申し訳ございませんが、ご好意だけいただくことにしてどうぞお許し下さい」
「いまどき変わった人だね。まあいいだろう。君の気のすむようにしなさい。だが、私は待っているよ。君がその気になってくれる日を。いいね」
「ありがとうございます」
「勿体ぶっていないで受ければいいのに」
また向井営業部長の口から嫌な言葉が漏れた。私はその発言を無視した。

五、

その年の秋、小杉社長が心筋梗塞で他界した。呆気ない最期であった。別離には馴れているはずの私であったが、平和な世の中で二十年近く心を触れ合ってきた人を喪ってみるとやはりそれなりの悲しみはあった。亡くなった小杉社長とはじめて会ったのは私が秋葉原の電気部品を扱うある卸会社に勤めていたときだった。その会社は株式会社といっても名ばかりの個人商店であった。

秋葉原はいまでこそ国内唯一の電気製品の大型デスカウントマーケットとして全國にその名が知れわたっているが、当時はひっそりしたたたずまいの町で電気部品の商店街は神田川の向こうの小川町から須田町を経て神田駅にいたる道筋に軒を連ねていた。
戦後いちはやく電気部品の町として繁盛したその界隈は商店街と向き合っておなじ電気部品を商う露店がずらりと並び、縁日の境内のような賑わいを呈していた。神田駅でJRを降りた買物客は道の西側に間断なく続いている商店や露店を交互に冷やかしながら歩いているうちにいつの間にか小川町まできてしまうのだった。客の種類は地方のラジオ店主、アマチュア、学生とさまざまで、部品を探し求めるそれらの人達の流れは終日跡絶えることがなかった。
私のつとめていた会社は、町工場やブローカーから仕入れた電気部品を神田の小売店に卸売をしていた。
亡くなった小杉社長は当時町工場の主で、できあがった部品を私の在籍している会社へ納入していた。私は経理係だったので毎月二回の支払日には必ず小杉社長と顔を合わせた。代金と領収書を交換する合間に雑談する機会が多くなり次第に親しくなっていった。酒の好きな小杉社長は帰りに神田駅の周辺にある小料理屋へ寄るのがたのしみらしくよく私を誘ってくれた。納品のときにはいまの営業部長の向井が風呂敷に包んだ製品を背負って一緒にきたがそんなときは向井も小料理屋へ同席した。私のつとめている会社の社長は利益の追求に貪欲であったが、小杉社長は適当に稼いで人生をたのしむタイプの人だった。
やがて神田の電気街の露店が撤廃になり、その人達がJR総武線の高架下へ移ってきたのを切っ掛けにして電気街は秋葉原駅を中心にして新しく形成されて行った。そしてその頃から洗濯機、テレビ、冷蔵庫のいわゆる家庭電化製品がぼつぼつ出はじめてきた。
家庭電化製品の取扱いがはじまると、売上高が急激に膨張して利益も大きくなった。業界は活気に溢れどの店も鼻息が荒かった。
ところが反面、倒産する会社が出て売掛債権が焦げつくといままでは一社でせいぜい百万円単位ぐらいだった債権が一挙に一億円台に跳ね上がった。私のつとめていた会社は小売店舗を持たずに仲介業をやっている三社の得意先に相次いで倒産されて金繰りがつかなくなり、業界好況期の最中に敢えなく連鎖倒産してしまった。
私と小杉社長とは倒産を境にして立場が逆転した。しかも小杉社長は選ばれて債権者委員になったのだ。債権者会議では私は被告の側に立たされて会社の経理内容の説明を求められた。ありのままの内容を披瀝しても委員達は信じてくれなかった。債権者にすれば損害を最小限に食い止めようと努力するのは当然であった。倒産時点

の数字を基にして作成し提出した〈損益計算書〉と〈貸借対照表〉について執拗な追求をうけた。私は緊迫した雰囲気のなかで繰返される訊問に疲れ果てた。会社の全貌が次第にあきらかになってゆくにつれて債権者のあいだにも漸く諦めの色が漂いはじめた。

そんなある日、債権者会議が終わったあとで小杉社長から飲みに行こうと誘われたことがあった。私はそのとき疲れていることを理由にして断った。疲れていたのは事実だったが本当は小杉社長は私を酒席へ誘っておいて個人的に会社の実情を根堀り葉掘り訊こうとしているのではないかという危惧があったからだった。それ以来私は意識的に小杉社長を避けた。小杉社長のほうも私の心中を読みとったらしく偶に声をかける機会があっても誘おうとはしなかった。

残務整理は結局二箇月余りかかった。最後に手許に残った僅かな資産を換金して債権者たちに分配してしまうとそれですべては終わった。その日債権者委員会も解散した。一旦故郷へ帰って再起をはかるという社長に別れを告げて二階の事務室へ戻り帰り支度をして階段を降りて行くと、階下で小杉社長が待っていて食事に誘われた。

神田の小料理屋の座敷で小杉社長は私を雇いたいと言い出した。

「じつはね、このあいだ話し合おうと思って誘ったんだがあっさり断わられてしまった。あとで考えてみてあれは私が軽率だったと反省したよ。きみを誘って個人的に責めようと企んだんじゃないかと誤解されても仕方のない行為だった。そう思ったらハッとしたよ。思慮が浅かったんだな。もっと慎重に行動しなければいかんね」

私は小杉社長の話をききながら顔が火照って困った。彼は私を救済しようと考えていてくれたのに、私はなんと浅はかな勘繰りをしていたことだろう。自分で自分が情なくなった。俺は下司野郎だ、と叫びたかった。

「うちは知ってのとおり吹けば飛ぶような小さな町工場だが、君さえよかったら是非きてくれないか」

私に異存があろうはずはなかった。かりに他から誘いがあったとしても私は断じてこの人を選ぶべきだと思った。私は躊躇わずに、

「よろしくお願いいたします」

と言って頭を下げた。

六、

小杉社長の亡きあとは息子の専務が社長になり向井営業部長が専務に昇格した。

新体制になって日紛しく月日は過ぎて行ったが、私の胸にぽっかりあいた空洞はいっこうに塞がらなかった。私はなんども会社を辞めようと思った。サラリーマンだからといって給料さえ貰っていればそれでいいというものではない。たとえ多額の給料を貰っていても代表者に尊敬できる人格と魅力がなくてはとても我慢ができない。亡くなった小杉社長と私とは雇い主と使用人の立場をこえて師弟の関係にあった。戦争の末期に生命の極限状態に立たされて死を待つ日々を送りながら終戦によって再び現世へ舞い戻ってきた私の心は空虚だった。なにをやっても物憂くて充足感がなかった。

そんな私を救ってくれたのは小杉社長だった。知り合ってから亡くなるまでの二十年のあいだにおりにふれて生きることを教え続けてくれた。戦後の私が魂の抜けた亡骸から多少なりとも人間らしい方向へ脱却できたとすればそれはすべて小杉社長によるものだった。

小杉社長の遺体と対面したとき、私の身体から再び魂が抜け出て空高く飛び去って行った。私にとっても会社にとっても喪ったものはあまりにも大きかった。小杉社長のいない会社は私同様魂の抜けた残骸であった。そこにはもうなんの魅力も残ってはいなかった。

だがしかし、たとえそれが主のいない残骸であってもそれは亡き人が生前精魂込めて築き上げた城であった。辞めよう、辞めようと思うたびに私の耳に

（おまえには師が遺したものを壊されないように守って行く任務があるんじゃなかったのか）

という声がきこえてきた。

（そうだ、俺は小杉社長から学んだすべてのものを活用してこの会社を守っていかなければならなかったのだ）

師である小杉社長が手の届かないところへいってしまった以上、私に残された恩返しの手段はもうそれしかなかった。

私は自分自身にそういいきかせて虚しい思いのまま去ることを思いとどまった。

会社の新体制は地道な國内メーカー相手より、利潤が多くて回収もいい輸出入のほうを選んで経営方針を転換した。

先代の小杉社長が長年かかって開拓し、親交を重ねてきた取引先からさかんに苦情が持ち込まれたが、二代目社長は、

「親爺は親爺、俺には俺のやりかたがある」

といってとり合わなかった。そのため国内品の取扱いは次第に減少していったが、輸出がその分をはるかに上回って伸びていったので、利潤は増え、資金繰りも順調になって、社内はどの部署も活気に溢れた。

社長と専務は滑り出しの取引に酔って得々としていたが、彼等にできたことを聡明で苦労人だった先代が判らなかったはずはなかった。国内の取引は人の繋がりが大きく物を言うが、輸出となると人情抜きのビジネス一辺倒である。企業は社会の公器であり永遠に続くものだと口癖のように言っていた先代はきっと今日までよくても次の契約はどうなるか判らない不安定な取引の占める

割合を安全圏までに抑えておいて、長い歳月をかけて営営と築き上げてきた信用が頑丈な基盤になっている国内の安定した取引のほうを伸して行ったのに違いない。

そう思っていたのだが、ある日新社長から

「先代の亡霊を引き摺っている人と一緒ではやりにくいなあ」

と暗に辞めてくれと仄めかされたので退職することにした。

最後の日は社長と専務が商用で出張することになっていた。挨拶はすんでいたので、むしろ不在のほうが気楽に出ていけた。

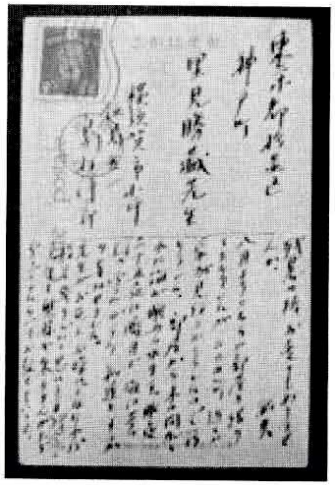
この日戸外は夕刻から北風が吹き荒れていて、会社を出たとき思わず首をすくめて外套の襟を立てた。（了）

近代日本洋画こぼれ話（第一回）

水谷嘉弘

1　島村洋二郎　一枚の絵葉書

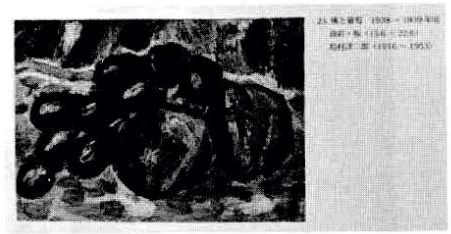
「青い眼の光」が印象的な島村洋二郎という早逝した画家がいる（1916・大正5年～1953・昭和28年）。洲之内徹「気まぐれ美術館」の［〈ほっかほっか弁当〉他］（芸術新潮・昭和62年7月号）で紹介され知られるようになった。洋二郎の姪、島村直子さんが顕彰活動をしている。洲之内氏が現代画廊で洋二郎の遺作回顧展（1987・昭和62年8月）を行ったのも彼女の働きかけに因るものだ。





洋二郎は画家になろうと旧制浦和高等学校を中退（1935・昭和10年9月）した後、数年間東京杉並区の里見勝蔵（1895年生まれ）のアトリエに通う。しかし文献や里見の著述等には記されていない。戦中期には既に疎遠になっていたようだ、洋二郎の方から距離を置くようになったのだろう、とされていた（坂井信夫氏の評伝に依る）。ところが先日、横須賀に転居した洋二郎が里見に宛てた近況を知らせる1943・昭和18年9月17日付けの葉書を入手したのである。その親密な綴り振りから二人の関係を見直す必要があるのではないかと考え、島村直子さん、洋二郎の研究者、松戸市戸定歴史館学芸員小寺瑛広氏と面談することにした。お二方は葉書に驚き、見慣れた筆跡の文章を読まれて同様の見解を示された。シャガール作品の絵葉書である点にも注目されていた。直子さん作成の洋二郎年譜には、1943・昭和18年8月横須賀の民家に間借り（住所記載）し秋に岐阜に美術教師として赴任した、とあり借家住まい（間借り先と別住所）した事実も知らなかったそうだ。

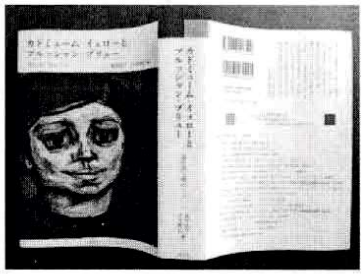
直子さんはその後、東御市梅野記念絵画館で開催された第20回「私の愛する一点展」2021・令和3年に洋二郎の【桃と葡萄】（里見勝蔵【秋三果】に倣う作）を出品されたが、その図録に新資料発見としてこの件を書かれた。



（quote）この作品を出品しようと決めてからM氏のメールを受け取りました。里見勝蔵宛ての洋二郎の葉書を手に入れたとのこと。・・・文面は里見氏と洋二郎家族がその後も交際していた事がわかる内容でした。里見氏と洋二郎の繋がりは、弟子になって数年で切れてしまっていたと思い込んでいたので、凄い資料の出現に心底驚きました。（unquote）

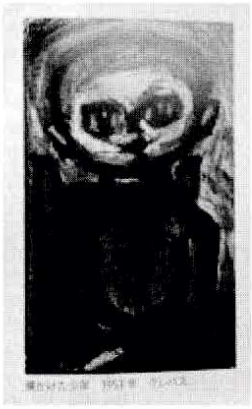
私の事にも触れてあり連載を始めるにあたって執筆者紹介になるかと思い、合わせて引用させていただく。

（quote）M氏は数年前、一般社団法人「板倉鼎・須美子の画業を伝える会」を立ち上げた方・・・代表理事を務める傍ら、当時の美校卒業生に関する研究・資料収集にも熱心。今回の資料を拝見し、更にこの作品が愛おしくなりました。（unquote）



2021年12月、島村洋二郎紹介本の決定版ともいえる「カドミューム・イエローとブルッシャン・ブリュー」が上梓された。直子さんと前出の研究者小寺瑛広氏の編著で洋二郎に関する過去の出版物、印刷物、記事、展覧会開催記録、年譜などを網羅した集大成、約500頁からなる大部の書籍である。島村洋二郎の名を近代日本洋画史に残し、今後の洋二郎研究の基礎文献となるだろう労作である。お二人のご努力に改めて敬意を表したい。直子さんも伯父洋二郎を知って顕彰活動を続けること37年、一つの区切りを果たされたようでホッとなさっていた。

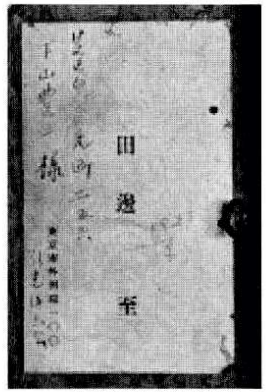
以下は余談。2020年暮れ、直子さんの活動を取り上げたNHKの「ファミリーストーリー」が再放送された。戦後（1953・昭和28年）3才で米国軍人の養子となった洋二郎の遺児、鉄（米国名テリー、彼女の従兄弟）を探し出したいとNHKに出した手紙が取り上げられ、同番組が米国西海岸トーランス在住の彼を見つけ出すストーリーである。その後二人は再会を果たし、彼女は洋二郎作品【腰かけた少年】1953年作クレパス画、をテリーに贈ったそうだ。この絵は、1953年7月の洋二郎個展（彼は展覧会最終日に大喀血し9日後亡くなる）で梅崎春生（第一次戦後派、直木賞受賞作家）夫人が購入したもの。私は梅崎春生夫人恵津さんを存じあげており、直子さんから預かった手紙と恵津さんが写っている現代画廊回顧展でのスナップ写真を添えて、恵津さん（御歳98才）に旧蔵品の顛末を伝えたのである。



2　田辺至　名刺と挿画原画

前篇で、島村洋二郎（1916・大正5年～1953・昭和28年）について書いたが、この画家を知ったのは顕彰活動をしている姪の島村直子さんを紹介されたからである。私も夭折したエコール・ド・パリの画家、板倉鼎、須美子夫妻の顕彰活動をしており板倉夫妻の研究者田中典子さん（学芸員、当時松戸市教育委員会美術館準備室長）が繋いでくれたのだ。板倉鼎（1901・明治34年～1929・昭和4年）の東京美術学校での指導（副）教官が田辺至（1886・明治19年～1968・昭和43年）である（主任は岡田三郎助）。田辺至は東京府立四中出身だが島村洋二郎も四中、私も四中の後継都立戸山高校出身なので縁を感じた。



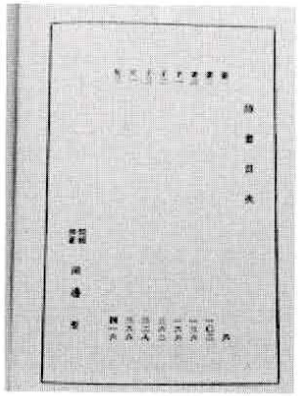




田辺至【田園風景】1920～21年頃（4号）

一般社団法人「板倉鼎・須美子の画業を伝える会」は田辺至の作品を所蔵している。そのうち一点の油彩画の額縁裏面に田辺の名刺が貼り付けられていた。その絵（風景画・4号）を送（贈？）ったのか名刺には宛名と、田辺の自宅住所の横に「新光洋画会」と書き添えてある。「新光洋画会」は1919・大正8年7月田辺の他、片多徳郎、高間惣七、牧野虎雄等によって創立、当時の中堅有望画家が結集した。翌1920年に第1回展覧会を開く。1923年第4回展では初の公募を実施、長谷川利行が【田端変電所】で彼にとって初めて入選した公募展となった。そして1924年には主要メンバーが「槐樹社」へ移行している。田辺自身も1922・大正11年には文部省在外研究員として欧州歴訪に出発した（1924年帰国）。会の活動期間が短い分、年記の少ない田辺の作品の制作年推定、当時の絵画風潮を知る—例えば、当該風景画には牧野虎雄（1890・明治23年生まれ）と相通ずる米点のようなタッチが見られる—等、編年調査に役立つものと考えている。本作が1919年乃至1922年の制作であれば、まさに板倉鼎を指導していた時に描かれており板倉顕彰活動をしている者として感慨深いものがある。なお、宛名にある下山豊平氏（1883・明治16年生まれ）は財界人（当時の有力企業役員を複数歴任）、徳富蘇峰記念館に蘇峰著書100冊を寄贈している人物だ。

田辺至は油彩画、版画の他に挿画を描いている。山本有三の小説「波」（東京、大阪朝日新聞、1928・昭和3年7月20日～11月22日）だが、社団は原画を何枚か持っている。中に連載第1回目と呼応するものがある。



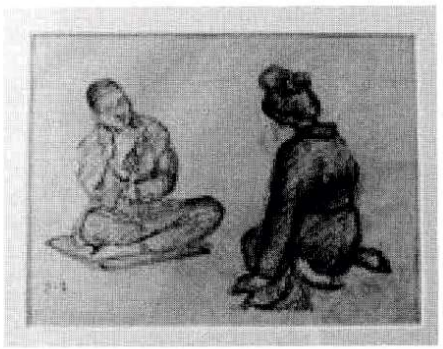


小説冒頭で二人の中年男が肉屋の店先で遭遇するがその場面が描かれている。新聞掲載挿画は何点あるかわからないのだが、単行本（1929・昭和4年2月朝日新聞社出版部刊）には挿画ページが8枚挿入されており1枚目

（挿画目次　妻一）が既述した場面である。新聞掲載作がそのまま転載されたのかもしれない。

全8点のうち前半4点と後半4点は画風が全く異なるのが興味深い。前半の墨や鉛筆で粗い線を多用する迫真的だった表現が、後半は一転して柔らかで平滑な表現になる。木版のようにも見える。小説はオムニバス的な［妻］［子］［父］の3篇仕立てになっているが、画風の転換は単行本を見る限り、篇のそれと連動しているわけでもない。ともかくこれらの挿画は田辺の表現技法における多才さを示す作品群といえよう。この他にも田辺に連載小説の挿画があるのか調べているが見つからない。（中央公論社刊「日本の文学」第30巻山本有三、には「波」が所収されている。田辺の挿画も10点掲載されており内3点は前出の朝日新聞社出版部刊行本と同一である）







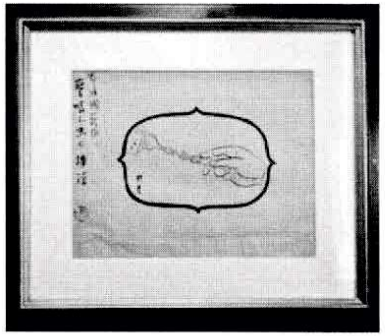
以上、田辺至を語るに名刺と挿画から題材を取ったが、彼の本筋たるアカデミズム油彩画作品（社団法人所蔵）も1点紹介して本篇を終える。

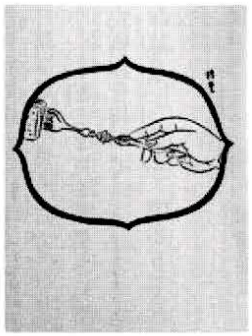


仮題【卓上果物】1950年頃（15号）

3　小出楢重　素描―習作―完成作

田辺至の挿画について書いたので本篇は同じテーマで小出楢重に触れてみる。田辺至は1886・明治19年生まれ、小出楢重は1887・明治20年生まれの同世代。それぞれ東京美術学校を1910・明治43年、1914・大正3年に卒業している。この世代の洋画家たちは、大正から昭和にかけて円本ブームに象徴される文学（小説）隆盛の時代、新聞連載小説活況の大きな要因となった挿画を手掛けている（前篇で紹介した山本有三、田辺至の「波」は1928・昭和3年連載）。





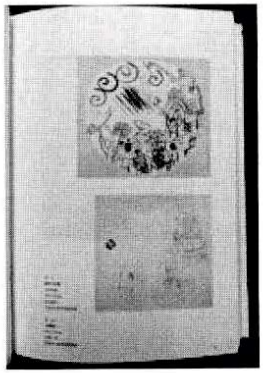
【蓼喰う虫「その七の5」挿画習作】紙本墨画

その頂点といえるのが「蓼喰う虫」の谷崎潤一郎、小出楢重コンビである。東京日日、大阪毎日新聞夕刊に1928・昭和3年12月4日から翌1929年6月19日（大阪毎日は18日）まで全83回（挿画83点）、随時連載された。最初の単行本は1929年11月改造社刊だがこれには挿画は1点も入っていない（装幀は楢重）。楢重没後の1936

年6月の創元社刊行本に全83点が掲載されている。創元社本には新聞掲載作とは異なる挿画が約20点あるようで、更に習作もあって原画は83枚よりかなり多い。私の持つ挿画原画も創元社本掲載作「その七の5」（通算38番目）の習作である（新聞掲載作との照合はしていない）。フォークを持つ手を囲む楕円の大きさが掲載作より一回り大きく四角張っている。芦屋市立美術博物館・芦屋市谷崎潤一郎記念館刊行の「小出楢重の素描・小出楢重と谷崎潤一郎」には谷崎潤一郎談として以下が引用されている。

―何べんも描いてるんです、同じ場面を。そのなかから、小出さんが自分で選んだのか新聞社で選んだのか知りませんけれども決めましてね。だから同じ図柄のものがあと何枚もあるんです。それをまた希望者があって分けたりして、屏風なんかにした人もあったようですね。それだから「蓼食う虫」の挿画入りの本（水谷註：既述、創元社刊行本）が出た時に、自分の持ってる絵と違ってるけれどもって、質問して来る人がありましたよ。でも、どっちも本物には違いないんです。―



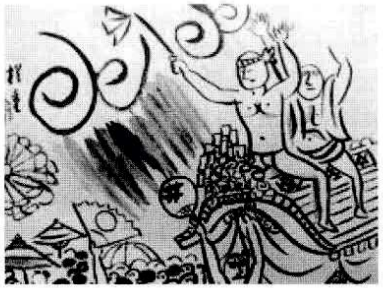


【天神祭】1927～28年頃（紙本墨画）

この芦屋市刊行の本からは多くを学んだが、嬉しい発見もあった。第7章［素描(2)］に【夏祭りの図】【天神祭り】と題する習作（下絵）2点が掲載されていたのだ。私は、この作品の完成作を持っているからである。楢重の随筆集「めでたき風景」（1930・昭和5年刊）所収の［祭礼記］に因んだ作品で、挿画原画と思ったのだが随筆集当該章には挿画はない。1988・昭和63年、大阪の画廊で展

示された記録はあるが由来や系統は判らないままであった。そこに下絵2枚の存在を知ったのである。それ等は美術館所蔵であり、ルーツを見つけた気分だった。完成作をよく観ると数箇所に和紙を小さく切って本紙に貼り付け、その上から書き直している事がわかる。楢重の創作過程を垣間見ることができるのだ。





これらの作品を見て、楢重にこんな随筆があったことを思い出している。

―浮世絵師の手になる挿絵に私は全く感心する。人物の姿態のうまさ、実感でない処の形の正確さ、そして殊に感服するのは手や足のうまさである。・・・かなりの修業を積んでいると見えて、その形に無理がなく、そして最もむつかしい処の手足が最もうまく描きこなされている事である―

そしてこの随筆［挿絵の雑談］のメの文章が、以下である。



―挿絵のみならず、油絵や日本画の大作を拝見するとき、その手足を見ると、その画家の技量と修業の深浅を知ることが出来るとさえ私は思っている―（随筆集「油絵新技法」1930年アトリエ社刊所収）。

短歌

マイウェイ他

山本一成

あはゆき

欠礼状に君逝くを知り年明けてふるさと上州松井田を訪ふ

思ひ出を呟きながら氷雨降る通りを曲がり墓所へと向かふ

黒御影のひかる墓石（ぼせき）の側面に君が戒名彫られてゐたり

生前に君がつくりし戒名は〈緑樹院守拙誠新居士（りょくじゅいんしゅせつせいしんこじ）〉

新たなる一本が増へ三本の卒塔婆の上（へ）に淡雪のふる

マイウェイ

来年よりはパソコンにてと誓ひしも今年も出向く確定申告

どやどやと乗り込みきたる若者ら何はさておきスマホを開く

散歩かね半日かけて年金の記帳に行くなり春風の中

亡き君のスマホのアドレス削除すもわが記憶から君は消えざる

モンゴルを出でて幾とせ※鶴竜が思ひあらんか「マイウェイ」唄ふ

※第七十一代横綱

関東鉄道常総線

休日明けの河川敷上空のひばりはさはに風とたはぶる

朝なさな朱の芽ふくらむ牡丹花に声かけながら見るは楽しき

改札を出でくる人ら足早に四方に散りゆく夕べの駅前

走りくる児を待つ電車早春の坂東の野に発車ベルながる

麦生ふる畑中をゆく常総線車窓に筑波山の全景みせて

漢詩

汲深録（二十八）

松井秀人

小春芳菊

（小春芳菊）
令和三年十一月

日照荒庭霜氣輕　日は荒庭を照らし霜気軽し
碧天風暖似春晴　碧天風暖かく春晴の似し
東籬黃菊尚芬馥　東籬の黄菊尚ほ芬馥
遙想陶公復擧觥　遥かに陶公を想い復た觥を挙ぐ
押韻・軽晴觥

〔注解〕
霜氣＝霜気のきびしい気はい。
碧天＝よく晴れた空。
春晴＝春の晴れた日。
東籬＝東のまがき。
芬郁＝香りの高いさま。においのさかんなさま。
遙想＝遥かにおもう。
陶公＝陶淵明のこと。
復擧觥＝また酒を飲む。

〔口語訳〕
初冬に入ってはいるが、日光が荒れた庭を照らして霜の厳しい気配も緩み、よく晴れた空に風も暖かくなってきて、まるで、春の晴れた日のようだ。
東のまがきでは、黄菊がまだ香りを発散していてかんばしい。
遥かに遠い昔の陶淵明を想い、菊の節句のようにまた酒を飲もう。

歲晩市廛

（歳晩の市廛）
令和三年十二月

忽忙衆庶滿街路　忽忙たる衆庶街路に満ち
燈火連軒華肆廛　灯火軒に連らなり肆廛華やぐ
叫喚賈人相競價　叫喚の賈人価を相い競ふ
此時客擲一囊錢　此時客は擲つ一嚢の銭
押韻・廛銭

〔注解〕
忽忙＝忙しい。せわしい。
衆庶＝多くの人。庶民。万民。
起句「路」は仄字、踏み落とし。
肆廛＝みせ。店舗。
賈人＝商人。
擲＝投げうつ。投げつける。
囊錢＝財布の中のぜに。持ち合わせの金銭。

〔口語訳〕
忙がしく慌ただしい様子の町の人たちは、年の瀬の用事や年末年始の用意に街路に満ち溢れている、店々の灯火は軒に連らなり、商店街は華やいでいる。商売の掛け声などで大声をはりあげている商人は値段を競っている。その時、客の一人が財布の中のありったけの銭を擲った。

富峰初旭

靈山天外雪粧晨
鬘鬟卿雲旭日新
燦燦景光紅映白
芙蓉發處自迎春

（富峰初旭）
令和四年一月
靈山は天外に雪粧の晨
鬘鬟たる卿雲 旭日新なり
燦々たる景光 紅は白に映ず
芙蓉発く処 自ら春を迎う
押韻・晨 新 春

〔注 解〕
靈山＝靈妙な山。
天外＝天のそと。遥かに遠い所や高い所。
鬘鬟＝雲のたなびくさま。また、雲のさかんなさま。
卿雲＝太平の世に現れるというめでたい雲。瑞雲。慶雲。
燦燦＝鮮やかに光り輝くさま。
景光＝めでたい光。
芙蓉＝ハスの花の別称。
芙蓉峰＝富士山の別称。

〔口語訳〕
霊山の遥かに高い所は、雪化粧した朝になっている。美しくたなびいているめでたい雲には、新たに朝陽がさしている。鮮やかに輝くめでたい光で紅色が白雪に映えていて、富士は恰もハスの花のようでそれが開くときは、おのずから春を迎える。

雪朝朋至

早曉敲窓雪未休
門前銀粟滿平疇
忽看故舊攜壺到
同病相憐兩白頭

（雪朝朋至）
令和四年二月
早暁 窓を敲く雪未だ休まず
門前の銀粟 平疇に満つ
忽ち看る故旧 壺を携えて到る
同病相憐れむ両白頭
押韻・休 疇 頭

〔注 解〕
敲窓＝窓を敲く。雪や雨が窓に吹き付ける。
銀粟＝雪。
平疇＝平らな田。
故舊＝古くからの知り合い。
攜壺＝酒壺を携さえて。

〔口語訳〕
明け方早く、窓に吹きつける雪は未だにやまず、門前の雪が田にも満ちている。古くからの知り合いが、酒壺を携えてやって来るのが見えてきた。お互い年老いてきて白髪となり、同じ持病を語り合うようになったなあ。

雪裡探春

東郊一白擁毛裘
探到梅林花氣浮
雪著枝頭發紅蕾
遷鶯渋舌野情幽

（雪裡探春）
令和四年二月
東郊一白 毛裘を擁し
探り到る梅林 花気浮ぶ
雪は枝頭に著き 紅蕾発く
遷鶯の渋舌 野情幽なり
押韻・裘 浮 幽

〔注 解〕
一白＝まっしろ。
毛裘＝毛皮で作った衣服。
紅蕾＝紅いつぼみ。
遷鶯＝鶯が低い谷間から高木に移ること。
澁舌＝鳴き声が拙い。
野情＝田舎のおもむき。田舎人のこころ。

〔口語訳〕
東の野辺は真っ白で、白い毛皮で抱きかかえられているようでその雪の中をやっと訪れた梅林では、花の香りが漂っている。雪はまだ梅の枝頭に引っ付いているが、紅いつぼみはひらき谷間から高い木に移って来た鶯の、まだ上手とは言えない鳴き声が聞こえてくるが、これもまた田舎のおもむきと言えよう。

天守台を仰いで(五)

三戸岡 道夫

(十)

開校以来、数十年の歴史を誇る山王中学校は、山王城跡の天守台のすぐ南側にあった。したがって中学校のどの位置からも、天守台を眺めることが出来た。

中学校をゆるやかに包むようにして、山王川が流れていた。緑の草が堤いちめんに茂り、桜の並木が太い幹をつらねていた。葉桜の梢は、校庭の片隅で憩う中学生の白いシャツの上に、葉蔭を与えて、ゆれていた。

校庭はいちめんにクローバーの葉が生い茂り、その運動場に立つと、北の方角に遠く黒法師や大無間山の山々が見え、さらにその奥に赤石山脈が輝いて見えた。運動場には中学生のキーンと澄みきった声が、金属的にひびいていた。

しかしその頃は運動場という表現は適切ではなく、教練場といった方がぴったりした。もうスポーツといった運動はほとんど行われず、行われるのは教練や、閲兵分列、それに銃剣術などであった。

ゲートルを巻き、銃を持った中学生たちの足が、日に何回となく、みどり豊かなクローバーの葉の海を踏みにじった。彼等は夏であれ、冬であれ、同じ国防色（カーキー色）の学生服に戦斗帽をかぶり、ゲートルに身を固めて、重い銃をにない、行進をし、駆足をし、地面を這い、射撃の訓練に精を出した。

その教練場に面した兵器庫の前で、四年生の百五十名の生徒達が教練の準備に、あわただしい時を過していた。兵器庫は教練場の東の隅にあり、古くて厳丈な建物は薄黒く、少年達の手には重すぎる扉が、開くたびに、

ギー、ギー

と音を立てた。兵器庫は、冷く不氣味に光る銃や劒をぎっしりと呑みこんで、むんむんと油の臭いを立ちこもらせていた。油を吸ってどろどろになったぼろ片が、床の方々に死骸のように散らばっていた。

中学生達は先を争って銃架から銃を外し、銃身を油布で磨き、劒を腰に吊るし、弾薬箱を通す帶革を油でしっとり濡らしていた。教練開始寸前のあわただしさが、中学生たちの活氣にまざって、兵器庫に立ちこめていた。

ある者はゲートルを巻き直し、相手の服装を点検しあい、捧げ銃の練習をし、また銃を片手で持ち上げて、その腕力の強さを盛んに競いあっていた。

またあるグループは、廊下に近いラヂオから流れるニュースに耳を傾け、前線における日本軍の戰果について噂しあっていた。

『我が軍は敵大機動部隊をカロリン群島に邀撃。敵グラマン三十四機撃墜。航空母艦一隻大破、戰艦一隻、巡洋艦二隻、駆逐艦二隻を撃沈す。……』

教練場に面した擴声器から、電波に乗った大本営発表は、落着いた声だった。中学生達は、南海の果ての日本軍の輝かしい海戰や激烈な空中戰を想像した。彼等の眼には、巨大な敵航空母艦が、水しぶきと火柱をあげて、海底に深く沈んでいくのが見えた。だが彼等の心の一方の隅には、去年八月に起ったアッツ島の玉碎、それから続いたキスカ島の玉碎、マキン・タラワ島玉碎の生ま生ましい玉碎が、不安な氣持で浮かび上がってきた。

日比野正英は手早くゲートルを巻いた。手首がくるっと足のまわりで廻るたびに、ゲートルは一枚の鱗をズボンの上に描き出し、一枚の布片はまたたくまに、きりっとした筒の形に足を仕立てていった。

そして兵器庫の中へ入ると、劒吊り革をぎゅっと締め直した。そして弾薬箱を腹の上に密着させ、銃を肩にかつぐと、薄暗い油臭い兵器庫の中から出て、教練場へ歩いて行った。

正英は教練の授業があまり好きではなかった。それは一口に言えば、金剛寺教官が好きではなかったからである。教練の時間は憂鬱だった。しかし教練は毎日あった。英語の授業は敵国語であるという理由から、次第に時間数が少なくなっていった。一日の授業の大半は、教練、閲兵分列、射撃、銃劒術などが占領した。

重い銃をかついで、たゞ金剛寺教官の氣に入るように行進する、一寸の狂いもない正確な敬礼をする、たゞ目茶目茶に教練場を駆け廻る、教官のスリッパで撲られる、息切れを我慢して長距離駆足をする、嚴寒の山王川にとび込んで、下半身が水びたしになって渡川訓練をする……。

特に正英がうんざりしているのは、教練教科書や軍人

勅諭の暗誦だった。盛夏であれ嚴寒であれ、教練教科書の不動の姿勢について、

『不動ノ姿勢ハ教練基本ノ姿勢ナリ。故ニ内精神充実シ外端正ナラザルベカラズ。』

と咽喉を枯らして何回も繰返させられる。

まづ定義を正確に覚えるのが、完全な不動の姿勢の第一歩だった。そして駆足の續く者、射撃の上手な者、教官の前では要領のいい者、教練教科書や軍人勅諭がよどみなく暗誦できる者などは、その通信簿に「優」と朱色のゴム印が鮮やかに押されていた。

こうしてある日起った次の事件は、中学生達をさらに暗誦への熱狂にかり立てていった。

ある朝、朝礼の最後に、金剛寺教官は一人の生徒を朝礼の台の上に立たせた。四年一組の倉澤一夫であった。彼は軍人勅諭の全部を学校中で一番早く暗誦したので、金剛寺教官から全校生徒の前でほめられたのである。

「倉澤は毎日の登下校の時間の全部を軍人勅諭の暗誦にあてる計画を立てたのである。家から学校までは丁度三十分かかる。往復で一時間。普通なら無駄に費すその一時間で、毎日一頁ずつ軍人勅諭を確実に覚え、一カ月で全部暗誦してしまったのである。なんと見上げた心掛けではないか。きさま達も見習うべきである」

(往復の時間だって?)

正英は叫びそうになった。

(嘘つけ。彼のことだから、食事の時間まで犠牲にして覚えたにちがいない)

倉澤は壇上で眞赤な顔をしていた。恥かしいよりも、自分の計画の的中に胸をときめかしている表情だった。全部覚えてしまったって、なにもわざわざ教官に報告にいったりする必要はないではないか、如何にも競爭心の強い、へつらい屋の倉澤らしいやり方だと、正英は思った。

だがこの事件は、正英も放っておかなかった。彼も軍人勅諭の暗誦に拍車をかけざる得なくなったのである。他人におくれをとることはできない。

中学生達はその日の晝休みから、教練場の草の上や、教室の窓に腰掛けて

『一つ、軍人は忠節を盡すを本分とすべし、凡そ軍人たるもの……』

と、呟いたり、叫んだり、どなったりして暗誦を始めた。加えてもう一つ、正英には金剛寺教官に対する不快な記憶があった。

それは金剛寺教官が山王中学校に赴任して間もないある教練の時間であった。生徒達は教練場を駆足で何回も引きずり廻されて、くたくたになり、草原の上で休んでいた。金剛寺教官も一緒に腰をおろし、自分の周圍の生徒達と盛んに笑ったり、何か喋っていたが、次第に軍隊の性病の話に移っていった。その時正英はちょうど教官

の近くに坐っていた。そう言えば金剛寺教官は生徒達が銃に手入れをしながら「ゲッケイチュウコウの工合が変だ」と呟いたりすると、必ず横から口を出して、「なに、月経が一カ月でとまった?」等と、妙な工合に生徒達を笑わせことがあった。

性病の話に興がのると、教官はつと側に座っていた正英の手を握った。話は丁度たけなわに達していたので、生徒達は何事が起るのかと、視線を正英の手に集中した。正英は瞬間どきっとして、手を引っこめようとしたが、正英の手はしっかりと教官の手で押さえられていた。

教官は正英の洋服の右手の袖をひじの辺りまでまくり上げて、掌を下にさせ、軽く握らせて、ある恰好を作らせると、それをくねくねとしごいて、丁度衛生兵が兵士達の性病検査をする動作をしてみせ、

「こういう工合にだな……」

教官はそう言いながら、生徒達の顔色をちらっと見た。

「はっ、はっ、はっ……」

二三人に生徒が笑うと、笑はたちまち、生徒全体を押し包んだ。だが生徒達には、笑の中にもなにか重苦しく、まぶしいような、迷惑のような表情が浮んでいた。正英も瞬間、不快を感じた。彼は急いで手を引っこめた。

その教練が終ってもその不快感は消えなかった。教官のぬるぬるした指先の感触がいつまでも右手にまとわりついて、何回水道で手を洗っても落ちなかった。大勢の生徒の目の前で自分の右手が演じたあの形、その性病に蝕まれた奇怪な形が何時までも眼の底に残っていた。

だが最近の正英の氣持といえば、既にそうしたものを遥かに超えた、憎悪と反感になっていた。

金剛寺教官の姿を見ると正英の頭には、教官が沼崎武夫をなぐり倒した地歴準備室の光景だけしか浮かんでこなかった。しかし教官の態度は既にそんな事はなかったように平静である。彼は教官と一騎打ちをしたかった。その顔を「殺人犯!殺人犯!」と叫びながら、両手で激しくなぐりつけたかった。だがそんなことをしたら大変だ。すぐ退学だ。

『畜生!何って顔をしているんだ。お前が殺したくせに、お前が殺したくせに……』

そう思うと正英は教練なんて全くやりたくなかった。このまゝ、駆けてどこかに行ってしまいたい。これから一時間も教官の命令通りに動かなくてはならないなんて、なんたる苦痛だ! だが彼が山王中学校を退学しない限り金剛寺教官の教練を受けない訳にはいかなかった。

彼は胸をむかむかさせながら、教練場の中央へ歩いていった。やがて教練場へは教官が姿を現わすだろう。取巻き連中の媚を含んだ眼ざしが忽ちその周囲を包むだろう。教官は相変らず氣どった足どりで、その眼ざしに滿足げに答えるだろう。ちぇっ、何ということだ!

(つづく)

忠山人日乗(にちじょう)(六)

忠内正之

石神井だより

タクシー騒動記

平成七年、私共夫婦は石神井へ引越ししてきた。石神井と言ってもこの辺(あたり)は交通の不便なところである。西武線石神井公園駅から北へ1㎞、地下鉄大江戸線光が丘駅から西へ1㎞、東武東上線成増駅から東南へ2㎞とかなり離れている。バスは通っているが、便数が少ない。

頭初、私の勤務先が大手町、後に日本橋であったため専(もっぱ)らバス便を使って成増方面を利用していた。

現役を引退してからは、なにかと西武石神井公園駅を利用する機会がふえて、お馴染みの店などもできてきた。

同じ頃、石神井公園駅が高架となり、駅前の都市計画が完成した。高層住宅ビルが2棟も建ち、その一つのビルの1階には、私が勤務していた銀行の支店が入店している。

もう一方のビルには、八重洲ブックセンターや、クイーンズ伊勢丹などが入っている。また高架下には、ヨーカ堂ができ。神戸元町珈琲店なども出店して賑(にぎ)わっている。

駅前は元来、都立公園の入口となる南口に古い商店街が集積しているが、都市計画後は北口にも駅前としての条件が整ってきたのである。

また西武池袋線では、石神井公園駅の次駅大泉学園迄の高架が完成すると共に池袋から大泉学園迄の複々線化ができ、平成25年3月には、西武池袋線・有楽町線と東急東横線・横浜高速鉄道みなとみらい線との相互直通運転が開始された。

元来、石神井公園駅は、名勝都立石神井公園の玄関口

の駅である。乗降客数は一日6万人余と、練馬区役所の至近駅である練馬駅の9万6千人に次ぐ区内の大きな駅である。にも拘わらず駅前タクシーの数が少ない。

駅周辺の区画整理によって、折角設置されたタクシー乗り場やモータープールにタクシーの並ぶ姿を見ることは希である。

暑い時期、寒い時期何時来るとも判らないタクシーをじっと待つ身は辛い。老齢者や障碍者にとっては尚更である。

行先によっては、南北に向って4本のバス路線もあるが、便数が少なく混雑している場合が多く利用し難い。

石神井駅方面によく出向く様になった私はうかつにも漸やくこのことに気付いたのであった。

また、親しい友人で元美術商のIさんは、便利になった西武池袋線を利用して度々拙宅を訪ねて下さる様になった。例の「寿し政」の料理がお気に召したらしい。そのIさんが来られる度、常に「石神井公園駅にはタクシーが居ない。待たされる。急行が止まる駅なのにね」とおっしゃる。

言われてみると、確かにその通りだと同感した。練馬区には西武池袋線の駅が8つあるが急行が停車するのは石神井公園駅のみである。然るにタクシーが少ない。乗降客数が殆ど変らない隣駅大泉学園駅では、待ちタクシーが何時でも数多く並んでいる。現に私は雨の日などでは、わざわざ大泉学園駅迄乗り越して、タクシーを拾って帰宅したことも再三あった。おまけに、その時財布を落としてしまって、各種カードの処理に苦労をした苦い思い出がある。

Iさんからも指摘されて、石神井公園駅のタクシー不足を再確認した。

それから、その実状と原因を調べてみたい好奇心と、更にその改善策を講じてみたいとの義侠心を抱く様になった。微力ではあるが隠居仕事として少しでも地区への貢献ができるのではないかと単純に思い上がっていた。

早速、心当たりを色々と尋ねてみた処、この問題は簡単に片付くものではないと解った。即ち、

少数の悪質な運転手たちが徒党を組んで、嫌がらせや、脅迫まがいの妨害を行って一般のタクシーの乗り入れを阻止しているのである。つまり公園駅前を自らたちの縄張りとして営業独占しているのである。かつては暴力団の影もちらついていたとの噂もあるという。

メンバーに加入するについては、当然見かじめ料とでも云うべき某かの金銭を強要するようである。

この悪行は、数十年来続いているという。当初は広場のある南口のみであったが、駅が高架となり南北の交通が自由になるにつれて悪い連中が北口にも乗りこんできた。

その連中は20名程度の仲間で構成され、南北両方のタクシー営業を恣にしているのである。乗客が被る迷惑は当然のことであり、21世紀の開かれた社会の中でこの様な不公正な行為は、断じて許されるものではない。石神井の名誉のためにも駅前浄化を図りたいと決意を固め、行動を起こすことにきめた。

先ず、実状を知るべく、タクシーに何度も乗って聞いてみた。悪い仲間の運転手は、

「石神井公園駅前はタクシー利用客が少ない。従ってタクシー数を制限しないと自分等の生活がなり立たない。昔からの権利（縄張りか）なので侵されたくない。希望するなら入会すれば良い。嫌がらせや脅迫などはしていない。その証拠があるなら見せてもらいたい。」

一方の真面目なタクシー運転手は、

「私は、悪いグループに入っていない。石神井公園駅迄お客様を送り、帰りにお客様を拾って帰ろうとすると、しばしば睨まれたり嫌がらせを受けることがある。以前ではタイヤに穴を開けられたケースがあった様だ。タイヤの破損は運転手の自己負担で、修理に約8千円は係る。その様なトラブル発生を恐れて、会社の営業所も石神井公園駅には近付かない方が良いと迄指導している。

彼等は我々より平均2割以上の売上げを得ているという。口惜しいが誘われても自分はその様な不正な仲間入りだけはしたくない。大手タクシー会社の者も数名入っている」

事情は良く解った。早速打開策への行動をすすめるべく関係筋に当たることにした。

西武石神井公園駅をたずね実状を話す。解決策として当方から「構内タクシー制を導入して規制してもらえないか」と頼んだが、「敷地外の件につき」とにべもなく断わられてしまった。

地元商店街の店主の意見を聞いたところ「その様な事件は他の地区にも幾つか例があるようだ」と関心が薄い。タクシーの充実と商店街の繁栄とは巡り巡って相関関係にあることを解っていないらしい。

駅前交番では、「民事に係ることはタッチできない。暴力行為や脅迫の事実があれば受けましょう」という。民8とはよく言ったもので、警察は民事に近い事件から逃げたがる。嫌がらせや脅迫の被害者は後難を恐れて証言しないので事件に迄至らない。そこ迄見透して悪さを働く彼等が憎い。

さらば地元から選挙に出ている区会議員はどの様に考えるであろうか？

日頃何かと選挙チラシを投入れしてくる与党の区議に実状を訴え、「議会でこの問題を取り上げてもらえないか」と話しをもっていった。「役所の担当部署に言っておきます」と受けてくれたが、あまり乗り気でないらし

く、「こういう問題は革新系の区議の方が話が早いのだが」と頼りない態度を示す。案の定その後音沙汰が無い。

タクシー業界では、客とのトラブルや、忘れ物を仕切るタクシーセンターなるものが存在する。そちらに善処方を申し入れたが、「実状はかねてよく解っており、問題意識は持っているが、タクシー会社の各営業の方針がまとまっていないので」と言葉を濁してしまう。

さて、気負いこんで各方面に当たって見たが、反応が乏しく気落ちする結果となった。

想像していた以上に難しい問題に対してどう刃向かったら良いのかしばし思案投げ首の状態となった。

悶々と悩んでいるとき妻から耳よりの提案があった。

妻はかねてより、この件について強い関心をもち私の行動の良き理解者であった。と同時に膝に支障を持つ彼女は、駅前タクシー不足に悩まされている一人であり常々近隣のご婦人方と不平不満をならべていた。

妻の提案は、「現状の行き詰まった岩盤を打破るためには、行政の力に頼る以外に方法はないと思います。幸い（練馬区長への手紙）という公式制度が設けられているので、この制度により区長宛に直訴したらどうですか」と言うのであった。

つまり江戸時代の古典的な目安箱の応用である。打つ手もなく一頓挫していた私は直ちにこの話に乗った。手紙の用紙をとり寄せて次の内容の手紙を投函した。

「西武池袋線の石神井公園駅は、練馬区内で唯一の急行電車が停まる駅である。都立石神井公園への観光客の利用を含めて、一日六万人余の乗降客を数える。しかし乍ら駅前に待つタクシーの数が極めて少ない。西隣りの大泉学園駅では行列を作ってタクシーが待っているという。大きな差がある。このため駅前から遠い住居者である我々利用者、殊に老人や障碍者は大変迷惑を被っている。バス便はあるが、本数が少ないため利用に限界がある。

なぜ石神井駅にタクシーが少ないのか、原因を調べてみると、一部の悪質な運転手達が徒党を組んで、自分等の縄張りであるとして、暴力まがいの圧力によって一般タクシーの乗り入れを妨害しているからであると解った。

私なりに、この不正・不法な行為を打破すべく各方面に働きかけを試みたが、旧来からあることだとか、他の地区にもよくあることだとか、言われて話にのってもらえない。

改めて考えてみると、駅前が立派に整備され、タクシー乗り場とプール場は共に税金により施設され管理されていると承知している。

この施設を少数の悪質業者が独り占めしていることは、明らかに「税金泥棒に等しい犯罪行為」ではないか。

この問題解決については、行政にお願いする他に方法がない。何卒新装成った石神井公園駅の汚名を雪ぎ、また、老人弱者の不便さを救済するべくご尽力願います。

尚、説明が必要な場合は何時なりと参上致します」

手紙を投函後、略3ヶ月経った頃、区役所から電話が入った。交通企画課の係長からの待ちかねた連絡である。

「石神井公園駅前の悪質タクシー問題については、役所としてもかねてより問題視しており、打開策を重ねてきたが、解決されぬまま今日に及んでいる。今回は前川区長直々の指令で、関係方面の協力を得て総合的な対策を講じるので、しばしお待ち願いたい」と言い、

更に、「今迄はこの問題に対処はしてきたが、縦割りの対策であったため徹底できなかった。今回は、練馬区役所の中に、タクシー乗り場適正協議会を結成し、警察、練馬区、関東運輸局、タクシーの各種団体等の結集により、この問題の総合的な解決を図る予定である」との具体的な説明があった。尚、当方からの説明参上には及ばないとのことであった。

平成二十六年に初当選した、気鋭の前川区長は、東京都の局長から転出してきた人で、人格、実行力共に信頼のおける人物と評されている。この問題に積極的に取り組んでもらえるものと信じている。

更に、それから数か月後、丁度コロナ禍が始まる頃、別添写真でお示しする立看板が、駅の南口と北口のタクシー乗場に掲示された。看板の表現は乗客向けとなっているが、実体は悪質運転手等に対する厳しいデモンストレーションである。



「入構妨害禁止」の看板

善良なタクシー運転手等に対しては、入構時、悪質な妨害をされたら、直ちに警察に急報せよと。その場合、警察は民事、刑事、を問わず直ちに立ち合う等の合意が

なされているという。

悪質な一連の運転手たちは、リストアップされ、夫夫説諭された。運転免許証を取り上げるべきだとの強硬意見も出たが、流石にそこまではと、見送りになった様である。

悪い連中は、非を認め結社は解散となった。引退する者、他所へ移る者が出る反面、真面目な運転手の新規参入が見られるようになった。

さて、看板掲出に至る迄の対策によって、石神井公園駅前のタクシー状況は顕著に好転したであろうか。

結論から言うと、南口ではかなり客待ちタクシーが戻っているが、本命である北口の改善は未だ不満足である。一般タクシーの乗入れが期待した程増えていない。利用者が待たされることがままある。

練馬区は世評を憚ってか、この一連の措置を、区報または新聞の地方版にも載せていない。従って長年に亘って流布された風評「石神井公園駅へ乗り入れることは鬼門である」が未だ完全に払拭されなくて、一般タクシーの入構を阻んでいるのである。

一般乗客の方にも徹底していなくてどうせあてにしても、駅前にタクシーはいないものと、勝手に思い込んでいる。このためタクシー側と乗客側のマッチングが旨く作動していない感がある。

この状態が続くならば折角正常化した駅前が、再び悪い連中に冒されかねないと心配される。従って協議会側の絶え間ない監視とフォローが肝要である。その点につき私は、区役所の責任部署に時折連絡させてもらっている。

「百年河清を俟つ」という言葉がある。これは諦めの心境の意と承知している。しかしこの騒動に一石を投じた私としては、完全な結末と、斉々と機能を果たす石神井公園駅前の姿を見届ける迄、決して諦めるつもりはない。

その実現を願って私共夫婦は、地元のタクシーに乗る度に、「今の石神井公園駅前は清浄化されており、積極的に乗入れして下さい」と勧めている。そして応答の良い場合には些かのチップを渡すよう心掛けている。

私共夫婦ができる、ささやかなPRの一助である。今後もずっと続けていきたい。

（続）

青雲の彼方（十五）

太田精一

十五　第二次世界大戦勃発

（一）独軍チェコへ侵攻

昭和十四年（一九三九）の元日を天羽英二は、スイスのベルンで迎えた。朝は曇っていたが、次第に晴れてきた。九時に起床、東天を遥拝、武運長久、家内安全を祈った。気温は二度を少し上回っている。十時には大統領に拝賀のため、スイス政庁に赴いた。政庁には外交団が多数集まっていた。十一時に、公使館に帰り居留民とともに屠蘇で新年を祝った。出席者は、十二人で、去年の半分であった。

一月二日、積雪があり歩行困難な中を来栖駐ベルギー日本大使がベルンを訪れた。英二と中立国スイスから見た欧州情勢を語り合うためである。

スペインではフランコ軍がさらに攻勢に出たとの情報が、ベルンの街に飛交っている。

中国では、汪精衛が国民党を除名されたとの知らせが駐スイス日本公使館にもたらされた。今後の日本政界の動向が注目される。フランスの漢字新聞は英米が共同して日本に財政的圧迫を加えようとしていると書き立てている。

一月四日、近衛内閣が辞職、新たに平沼内閣が組閣された。有田外相は、一旦は辞任したが留任と決定した。英二は、留任した内閣の顔ぶれを見て、近衛内閣の時と似た布陣に過ぎないとの印象を持った。

重光駐英大使がベルンに来て英二と会談した。白鳥イタリア大使と大島駐独大使がサンレモにて会合したとの報道が欧州の新聞に掲載されていた。

一月二十日、フランコ軍がバルセロナに迫っている。フランスの世論は沸騰し、欧州は騒然となってきた。そ

んな時、日本の駐欧大公使会議がパリの駐仏大使公邸で、一月二十七日に開催された。白鳥駐イタリア大使、重光駐英国大使、矢野駐スペイン公使、来栖駐ベルギー大使、天羽駐スイス公使が出席したが、大島駐独大使は、急な発熱のため欠席した。

この会議に先立つ一週間前、駐欧日本大公使館陸軍武官が集まって欧州駐在陸軍武官会議を行なわれた。その会議では、「欧州の戦争は避けられる」との判断が下された。欧州の大公使の多くは、この武官会議の判断と同様の見解を示していたのだ。

ところが、英二は欧州各国を歴訪し、その国々から得た情報と民衆の感触から、チェコ及びポーランド問題で英独は、必ず衝突することになると予想していた。在欧大公使会議を終えた後、重光、来栖大使及び矢野、天羽公使たちは、ローマを訪れ、白鳥イタリア大使とクリヨンホテルにて再度会合。パリでの会議を踏まえて、一月二十九日に「独伊協定強化賛成」と電報を外務本省に打っている。

フランスでの大公使会議はスイスの新聞でも報じられ注目された。

英二は、日本が独伊との枢軸を進めるのは、日本の産業が資源確保の目途が立ち、自足できることが、前提であって、陸海軍も産業も未だ十分な戦力を備えていない現状で、英米を刺激するような条約を結ぶことは、得策ではないとの考えを抱きつつスイスへの帰路に就いた。

二月も末ともなるとスイスの景色は春めいてくる。街行く人々の表情もそれとなく春を感じるようになった。だが、英二の気持ちは、晴れなかった。左足のできものに悩まされ、外出もできない有様であったのだ。

二週間程前、スイス政府は、しぶしぶフランコ政権の承認を決定し、スペインとの交流を再開している。英仏もいよいよフランコ政権を承認するようである。

一方、欧州の新聞は、蒋介石政権がビルマと重慶との飛行航路を開いたという記事を掲載し、同政権の健全ぶりを大いに宣伝している。

三月十四日、かねて恐れていた通り、ドイツはチェコスロバキアに侵入を開始、同国をドイツの保護下に置くという暴挙に出た。英国の有力紙タイムスは、ヒットラーは、チェコに対し最後通牒を出したと伝えている。このため、十七日に予定されていたスイスでのチェコ公使主催の茶会は、中止との連絡を英二は受けている。

チェコ問題は、英仏議会にて盛んに討議されたが、時すでに遅かった。英国は、対独不審をますます募らせ、対独戦に踏み切る構えを見せ始めた。その覚悟をもって英米仏ソの四カ国は、三月十九日、ドイツに対し、チェコ併合は不承認との通告を出したのである。

英二は、フランスに滞在していた重光英国大使に電話

で「欧州駐在の大公使会議を招集し、欧州諸国の大公使の率直な意見を交換しておくべきだ」と主張したが、外務本省からは会議の許可は得られなかった。

そうこうしているうちに、マドリッドが三月二十九日に陥落した。欧州の情勢は目まぐるしく変化し、戦争へと流れつつあった。こうした時に日本はどうあるべきか、英二は、周りの責任ある立場の外交官の考えを聞きたかった。

そこで、翌日の三月三十日に、スイスの国境を越え、パリの在仏大使館に出張することにした。

ベルンは、市内にまだ残雪があったが、パリはすでに春の温かさである。だが、緊迫する欧州の国際情勢は、市民に先の大戦の悪夢を蘇らせているのか、華やかなパリの街にも暗い影が差しこんでいるように英二には思えてならなかった。

翌日朝、英二は在仏日本大使館を訪れ宮崎代理大使その他館員と時局会談を行い、欧州でのドイツの今後の動きと日本の戦争回避への方策について議論した。

四月になってベルンの残雪は全て溶け、グルテン山の頂にわずかに残っているだけとなった。市内の林には小鳥が囀り春を告げている。冬の間悩まされた出来物もほとんど治った。

長男の大平は、慶応大学文学部に合格したとの知らせが妻の美代からきた。息子には経済学部に入って欲しかった。だが、大平から父親の希望通りではなく文学部に入ったことを詫びる電報を受け取った。それを見て英二は「経済に変わる機会もあるのだから、とりあえず息子の意思を尊重しよう」と思った。

一方、次男の民雄は、府立六中に合格したとの電報が入った。英二は「子供たちの進学も一段落したから、これで妻をスイスに呼び返すことができる」とほっとした。

そんな時、欧州では、ファシズムがさらに勢いを増し欧州の民主々義に脅威をもたらしていた。スペイン政府はついに戦争終結宣言を出した。フランコがスペイン全土を掌握したのだ。

また、四月八日には、イタリア軍がアルバニアのチラナに侵入した。加えて、独伊の枢軸がますます強化され、それに対応するため、英仏は、バルカン諸国に相互援助保障協定締結の企図があることを示唆している。

英国首相チェンバレンは、ルーマニア、ギリシャが攻撃を受けたときは、援助の保証をするとの声明を発表、ドイツを牽制した。

四月二十日、英二は、重光駐英大使の呼びかけにより、パリにて来栖駐ベルギー大使を交え意見交換を行った。この会談で、時局は悲観的であるとの確認がなされた。

実際、同月二十六日には英国では、チェンバレン首相が徴兵制法案を議会に提出、いよいよドイツと戦う覚悟

を決めたことを内外に示している。

スイスでもドイツのチェコ侵攻後、国民は、戦争の脅威に備え、大統領は、国防の重要性をラジオで訴えかけた。その前に、スイスは、伝統の中立政策を守るため、三月二十日の連邦議会で、「スイス国民は、最後の一人まで国土を死守する用意あり」との宣言を行って、侵略に対する国民の団結を促した。

大統領の放送は、この議会宣言を確認するためのものであった。これによって民心は動揺を収め、社会的混乱も沈静化し、銀行預金引き出し騒ぎも収まった。

英二は、四月二十六日付で有田外務大臣宛、ドイツの侵攻に備えた中立国スイスの国土防衛計画について次のような内容の書簡を送っている。

「欧州情勢がどうあろうともスイスはあくまでも中立を守るという強い意志を内外に示している。国民の心情は明らかに英仏を信頼し、独伊側ではない。特に反独感情は強い。たとえば、三月下旬英仏間に成立したとされるオランダ及びスイスへの侵略に対する即時救援の協定は、表面では無関心を装っていたが、スイス国民の世評は明らかにこれを歓迎していた」

(二) スイス、中立堅持目的の国防軍強化

ドイツのチェコ侵攻事件やイタリアのアルバニア侵攻事件は、スイス国民に隣国への脅威を痛切に感じさせるようになっていた。とはいえ、イタリアに対しては、ドイツほどの強い警戒心はないようだ。国防は、対独防備に最も重点を置き、スイス政府は、国境防備に備え要所に地雷を敷設すると発表している。

また、政府は、三月二十七日、国境防備隊および一部後備役と補足軍の年訓練期間を一週間から二週間に延長することを発令した。さらに四月三日には、補足軍改編令を通達、従来有名無実の感のあった民兵に当たる補足軍を画期的に改編している。すなわち二十歳以上六十歳までの男子で、他の兵役に服しない者を皆補足軍に編入した。これに毎年一定の訓練をし、戦争勃発と同時に動員、戦闘部隊の補足および後方勤務ことに防空に当たらせることにした。四月五日には、長文の声明を発してこの改編令を説明している。その趣旨は、「今後の戦争は、多方面の役目を必要とすることから、身体虚弱などの理由による従来の兵役免除者といえどもその分に応じた勤務の余地はある」としている。

これに加えて、兵役終了者もまだ働ける余地はあるとし、六十歳以上の男子や婦女子も動員する考えを示している。ことに婦女子は、衛生方面には、欠くことのできない人材であるとし、「その技能、知識に応じ、義勇兵として、国家の防衛に参加を願う」と強調した。

さらに政府は、臨時軍事費を増額した。特に要塞構築費と防空諸費に力を入れ、要塞構築はドイツとの国境に

重点を置いていた。だが、スイスとイタリアの国境は山脈という天然の要塞があって不安はないとしているようだ。

また、政府は四月二十五日燃料貯蔵令を発し、五月以降、石炭及びコークスの輸入業者は、昨年輸入の十五パーセントを常に貯蔵することを命じた。食料についても同様の勧告がなされている。

英二は、昭和十四年五月四日付で、有田外務大臣宛にスイスの軍制と国防強化に関する調査情報を送付している。

スイスが中立を守るためにいかに国民の協力を必要としているか、これによって理解することができる。その概要は次のとおりである。

スイスはここ数年来、国防強化に努力し、兵役制度の改善強化、および防備施設の強化を行いつつあるが、最近にいたりいよいよ最終的仕上げを行いつつある。大戦後（第一次世界大戦）しばらくは従来の体制で満足していたようであるが、その後近代兵器の装備と欧州の政情変化のため、これまでの体制をもってしては、時代の要求に応ずることができず、中立の維持は困難であると考えた。特にドイツの興隆は、スイス国民を刺激することが多く、大戦当初、カイザーがスイスを通過するか、ベルギーを通過するかを選択するに当たり、スイスの軍備は抵抗力大であるとしてベルギーを選んだ。この教訓を想起し、国防強化の必要を認め、一九三六末大規模な改善強化に取り掛かったのである。

元来、スイス軍は、国民皆兵の原則に立脚して常備軍を持たず、したがって職業軍人は存在しない。階級も佐官までとし、将官は戦時に一名任命することになっている。従来の兵役制は国民年齢により区分けしていた。

現役	二十～三十二歳の男子
予備役	三十三～四十歳の男子
後備役	四十一～四十八歳の男子
補足軍	女子を含むそれ以外の人々

現役といっても、兵舎に常務するのではなく、その服役期間十二年間は、毎年二週間の軍事訓練を受けるだけである。予備役は全期間八年間に二回二週間の訓練を受ける。後備役及び補足軍は、これを後方部隊と称し、平時は何らの義務はない。軍事訓練以外の時は、家にいて自分の仕事をする。兵士も将校も同様である。

下士官は、各々特別の教習課程を卒業する必要がある。任官後の定期訓練は一般兵士と同様である。軍装武器は各自の家に備え、動員の際は家より武装して飛び出す仕組みとなっている。

なお、この兵役に服しない男子は、二十歳より三十二歳まで兵役免除税が課せられることになるのである。

こうした強化策は、一九三六年十月改革令として発布

され、三十八年より実施されてきたものであるが、この度の新制度によれば、予備役歩兵の前半はこれを現役に編入し、現役中の志願者をもって、新たに国境防備隊を設けている。この新編成隊と従来の現役を総称して戦闘部隊といい、いわゆる実践に携わる者としたのである。

国境防備隊は、これまでの税関監視隊に代わり、常備的に国境防備に当たることになる。が、その任に当たるのは、現役中の志願者の中から、失業独身者、失業既婚者、年齢若き者などの条件により順次採用（大部分は二十五歳まで）され、服務期間は六ヵ月で、ある程度常備的である。これは、失業救済策の点からも異色ある措置で、国際関係が緊張する状況により漸次増員される。この改革後さらに現役訓練は三週間に延長、予備役は八年間に三回の訓練に増加された。

この改革は、国際情勢の変化と近代武器の採用に基づくものである。国境警備のため、要塞構築の必要があって、その警防は、もはや税関に委ねるわけにもゆかなくなった。加えて、歩兵機械化の結果、訓練期間の延長およびその数の増加を必要とする。訓練を終了した戦闘部隊は四十万ともいわれている。その構成は、三軍団九個師団と軍団に属しない山岳独立旅団、騎兵隊旅団、航空隊その他からなっている。

一九三六年、愛国公債三億二千五百万スイスフランの募集に成功して、これをもって国境に要塞構築をし、航空機その他新武器の装備を行った。

スイス政府は、この国防強化をもってしてもまだ満足していない。補足軍の改編と要塞構築防空強化をさらに進めている。

補足軍の強化は、一九三九年四月に二十歳以上六十歳未満の男子で、普通兵役に服することができない者は、皆この補足軍に編入した。また、六十歳以上であっても希望により義勇兵としてこれに編入するとしている。

兵役年齢を六十歳まで延長するだけでなく、これまで漠然と補足軍として戦時兵力不足の際に備えていた兵員は、開戦と同時に動員できるように用意した点において画期的な意義があった。補足軍は、それぞれの職業や特技を生かして、細かく希望を聞き、細分化された部隊に配属する。また身体検査をして兵役に不適当とされる不合格者も体力年齢に応じ、適当な勤務の余地があるものとして扱っている。

こうした兵力動員計画は、スイスのすべての国民が自分たちの持てる力を発揮して誇りある中立を守り抜くという覚悟を国の内外に示すことになったのである。

一方、極東でも同じ時期に不穏な空気が漂い始めた。満州国とモンゴル人民共和国とが国境線を巡って昭和十四年五月十一日武力紛争を起こした。

この武力紛争をきっかけに、満州国と協力関係にあった日本とモンゴルと協力関係にあったソ連がそれぞれ軍隊を出動したのだ。これが大規模な軍事衝突となり、四ヵ月に及ぶ激戦が展開された。いわゆるノモンハン事件である。日本は、関東軍一万五千の兵を繰り出し戦ったが、ソ連の機械化部隊の反撃によって大打撃を受けた。

ソ連はこの戦闘中に、独ソ不可侵条約を締結したため、日本側は即座に停戦を決意し九月十六日、日ソ間に停戦合意が成立した。この事件で日本陸軍は、ソ連の兵力の増強をまざまざと見せつけられ、以後対ソ開戦論は後退したのである。

（三）日独伊軍事同盟の可否

日英会談の決裂、米国の日米通商条約破棄通告により日本は、世界の孤児となることを防ぐため、独伊枢軸国との関係を深めて行った。にもかかわらず、ドイツはかねてから対立していたソ連との独ソ不可侵条約を結び、欧州でのソ連の脅威を取り除いている。そのことはとりもなおさず、ソ連が日本に対する北方の脅威となることを意味していたのだ。英二は、スイスにあって欧州情勢を客観的に俯瞰し、日独伊防共協定を軍事同盟にまで発展させることには、日本の将来にとって得策にはならないのではないか。それよりもまず日本にとって大切なことは、日中戦争の早期終結であるとの考えをますます強くした。

日中戦争の最中にあって、もし日独伊防共協定を三国軍事同盟にまで強固なものとした場合、日中戦争遂行にどのような影響を及ぼすかについて英二は、次の内容の論評を昭和十四年（一九三九）七月に残している。ちなみにその年九月三日に英仏両国はドイツに宣戦布告した。第二次世界大戦はその日から始まったとされている。

「日中戦争については、ソ連は初めから蒋政権を支援し、その態度は今後も変更することはないであろう。

一方英米仏は、今後少なくとも日本に対し、武器、軍需品などの売り控え、貿易上の信用供与の制限や差し止めをもって消極的に邪魔することになるであろう。特に米国の態度は重要であって注意する必要がある。英仏と独伊が対立し、英仏は日下英仏ソ同盟の交渉を行うとともに、米国の抱き込みを策動し、独伊に対する包囲網の構築に努力している。

日本と独伊との間には、軍事同盟締結に関する交渉が相当に進捗しているが、もしもこのまま放置するときは、今後の独伊の日本に対する関係にいかなる変化をきたすことになるのか。独伊は日本と、すでに防共協定を調印しているが、さらにこれを軍事同盟にまで高めようと、日本に対してきわめて友好的に接してきている。もし日本が軍事同盟締結に乗り気でない場合は、ドイツは、経済協定はもちろん不可侵条約締結その他の手段をもって

ソ連に対し接近を図り、日本の立場を弱めるようになりはしないか。（実際この記録の後、日ソがノモンハンで激戦を繰り返している最中の八月、ドイツは独ソ不可侵条約を締結した）

最近日本国内において軍部とその他の部門との間に隔たりがみられる。日中戦争の開始以来、陸軍と海軍の対立が伝えられているが、日独伊同盟問題をめぐっても軍部内の対立が激化する傾向にあると聞いている。在欧陸海軍当局内においても陸海軍の対立は、我が国のガンだと憂慮する者もいる。したがって、この問題を長く未解決のまま放置することは国家のため、はなはだ不得策となるのではないか。

この問題をめぐって指導者の間に親英米派と親独伊派の対立があると本国からしきりに伝えられている。国内世論が分裂する場合、諸強国はこれに応じて策動することが憂慮される。

そんなことになれば、日本の国際関係に悪影響を及ぼし、戦争の遂行に支障をきたすことになるであろう」

英二は、独伊に勤務する外務省の同僚に「日独伊軍事同盟が成立すれば独伊は日本に対し、いかなる援助をし、また日中戦争の遂行上どのような貢献をするか」質問してみた。

それに対し、同僚からは「独伊はできる限り大きな援助をなし、戦争の遂行に非常な貢献をなすことになろう」との答えが多く返ってきた。

そのことも念頭に置いて考えた場合、大体次のようなことになると英二は、結論付けている。

「英仏の日本に対する態度および世論には一向に改善が見えず、ますます悪化する傾向にある。だからと言って、日独伊三国の関係を強化すれば、英仏に対し、少なからず反動を与えて、さらに対日態度を悪化することになるであろう。

特に懸念されるのは、日本にとって、通商の最も重要な相手であり、軍需品の供給国である米国の日本に対する世論が極めて悪くなることである。それだけではない。米国の対外政策は、常に国内問題に支配されるので、米国の態度はますます硬化するものと考えなければならない。

欧州の国際関係を見るに、英仏と独伊との対立は、緩和するよりも激化する傾向にある。英仏ソ協定の交渉は、英仏側は絶えず楽観的な報道をして、宣伝に努めているが、ソ連は英仏対独伊の対立に引き込まれることを避けたいようである。

その他の欧州諸国に対して、英国はドイツ包囲網陣営の構築に鋭意努力している。だが、欧州諸国は、それぞれの国の立場により、英仏の陣営に参加することを躊躇

する国もある。ことに日独伊の関係が強化されればさらに尻込みする国も増えるであろう。

独伊は目下の国際情勢に鑑み、極力日本を引き入れようとする。英独間に戦争が起これば、往時の戦争に比べ、ドイツはイタリアと同盟しスペインを引き付けた強みがある。ハンガリーは大体ドイツにつくことになるであろう。ドイツのブルガリアおよびユーゴスラビアとの提携はまだ十分ではないようである。

英国がトルコと組んだことは成功であった。それによってポーランド、ギリシャは引き入れられたが、ルーマニアの立場は明らかでない。ソ連の立場は、なおあいまいな情勢にあるので、日本の独伊に対する立場は非常に大事である。独伊がもし日本を引き入れることができず、英仏につけば、独伊はほとんど勝算なしと見てもほぼ間違いない。したがって、独伊としてはいかにしても日本を引き入れ、ソ連を牽制し、米国に対抗することが必要である。だから、よほどのことがなければ、日本を逸することがないであろう。それ故、日本がこの際、軍事同盟の締結を急がなくともドイツは日本を棄てソ連に走ることはなく、せいぜい経済関係を強化するのが関の山である。

日本の国内世論の不統一ことに重大な国論の分裂、なかんずく陸海軍の対立は、対内的にも対外関係においても、日中戦争遂行に対しても最も避けるべきことである。したがって速やかに意見の統一を計る必要がある」

英二は、これまで書き記したような情勢判断のもとに、この際速やかに問題を解決し、三国関係強化方針に従って、日独伊の協定を取りまとめることが大切であると判断している。

しばらくして後、英二は日本を取り巻く国際情勢について書き加えた文書を残している。この頃の英二は、独伊との協調路線に傾いてきているようであった。

「日中戦争は、あまり進展していない。英国は天津租界封鎖の圧迫に耐えかねて日本との交渉を始めたが、米国は、蒋政権に対する援助を止めようとせず、昭和十四年八月、日米通商条約の廃棄を通告してきた。日本に対し、武器、軍需品およびその材料の輸出を次第に制限し、六ヵ月後にはこれを禁止しようとするものである。目下日本が、最も必要とするものは、武器、軍需品、およびその材料の輸入と経済上の便宜および援助を得ることにある。したがって、米国の態度の変更および英仏の態度の悪化による影響に対しては、国内において極力前後措置を講ずると同時に、この際独伊との関係強化により日本の困難をいかに緩和できるかを考慮する必要がある。

英仏米は日本が好むと好まざるとにかかわらず日独伊を同体とし、日本を独伊の陣営に追い込んできたので、日独伊三国の軍事協定が成立すればますます悪化するこ

とは必定である。英国は、欧州の逼迫する国際関係や日本の天津租界封鎖のために苦境に陥ったということもあって、日米会談の開始に応じて一時的に対日態度を緩和することもあろうが、蒋政権の破滅が明らかとなるまでは日本との改善をみることはないであろう。

日本は、英仏の態度に改善をみることは難しいが、米国との関係は、なるべく緩和しておく必要がある。米国は日米通商条約破棄通告により、その態度を明白にし、英米仏挙げて日独伊に対する態度を強化するにいたった。これまで日本が独伊との軍事協定を躊躇した一因は米国の態度を顧慮したためであるが、もはや米に対する工作も根本問題を動かすことができなかった。

英仏ソ同盟の交渉は、英仏側の宣伝が依然として猛烈であるにもかかわらず、その進行は遅々としており、ソ連は今秋の英国の総選挙を待っているように見られる。英米軍事使節団はモスクワを訪問し、軍事上の協議を行っているのもこれまた協定の成立よりも宣伝に重点を置いているのではないかと思われる節がある。英国のドイツ包囲網の構成は、大体輪郭はできているようだが、具体的成案作成が遅れ、その上バルカン工作に至っては、いまだその前途の見通しがつきがたい。独伊の地位は日本との軍事同盟によって影響されるところ少なくないと認められる」

英二は、これに加え、国際情勢の動向を踏まえて、今後の日本外交の取るべき道についても付記している。

「日中戦争は、前途遼遠である。日本軍は、占拠地帯を確保しているが、時々蒋介石軍がゲリラ戦法により逆襲してきて攪乱されている。他方、占領地域の政権の成立は進まず、施設の設立も遅々としている。戦争の前途は、見通し難く、いつ終了するかは計り知れない。日中戦争について、何が障害であるか、また日本は、現在何を最も欲しているか、いかにして日本の要求を満たすべきかなどを詳細に検討する必要がある。

ソ連は、今後も中国共産党を援助しつつ蒋介石政権の援助にも努めるだろう。同国は、ますます反日的態度で臨み、満蒙における国境事件は、日ソ全面戦争に発展することはないにしても、常時緊張状態を維持しなければならないことが心配である。

日独伊軍事同盟に関する交渉は、独伊がソ連を相手に戦う場合、日本は当然参戦すべきかどうか、あるいは参戦は、その場その場において協議により決定せられるとすべきであるか、現在の状態において考慮するとつぎのようなことが考えられる。

米国の通商条約破棄後の六ヵ月間に同国がいかなる態度に出るかは、最も興味ある問題である。できればこの間の形成を観察するのも一つの策である。だが、その間に、独伊は日本を見放し、英米仏もまた日本に対する関

係を悪化し、結局日本は、虻蜂取らずの破目となるかもしれない。

独伊が参戦する場合、日本が参戦につき協議決定することとする条項を入れようとしても、両国が到底応じないとすれば、日本としては参戦の義務を承諾するほかない。ことに条約本文案において規定する以上これを承認し、了解事項において出兵の程度を限定するほかないであろう。その趣旨により条約を締結するとはいえ、日本においては、この際蒋政権に宣戦し、独伊の参戦の義務を発生させるのもまた一つの策であろう。そうなれば独伊は日本と同様に参戦の義務が生じ、英仏の援蒋政策を反省させることになると思われる」

英二は、日独伊三国同盟を締結することによって欧州の戦争に巻き込まれることを随分警戒していた。だが、三国同盟をちらつかせることは、米英の対日圧力の牽制になるとも考えられるので、日本にとっては、もろ刃の剣であることは間違いない。締結はくれぐれも慎重でなければならないと思い悩むのであった。

四　天羽英二イタリア大使に任命さる

八月に入ると雨の日が多くなった。この年の夏のスイスは、ことさらに湿気が高かった。公使館の庭のリンゴも雨のせいか気温も低く出来が良くなかった。

外務本省から日英会談が成功しつつあるとの連絡が入った。英二は、有田外相の努力とそれを支えた外務省の加藤外松他のスタッフに敬意を表したい気持ちであった。だが、そう簡単に決着するものとは思えなかった。そこで、彼は、日英会談は懸案として続けるべきだとの電報を本省宛てに打っている。

八月二十三日、英二はポーランドのコマルニッキー駐スイス公使を訪問、会談の中で「戦争は避けられないであろう」というと同公使も「同感である。九月中には起こるであろう」と答え、週末には英国と協定を調印する予定だと言った。

その日の午後、英二はイタリアのタマル駐スイス公使の訪問を受けた。

タエル公使は「戦争はただ奇跡のみが救いうる」と言って、イタリアの戦争への対応計画を語り、独ソ不可侵条約の調印には、ドイツのリッペントロップス外相、ソ連のモロトフ外相が表舞台に立つだろうとの情報を漏らした。

タマル公使の言った通り、二十四日には、独ソ不可侵条約が発表され、世界は唖然とした。これによってドイツの欧州進攻が容易になる。スイスは、戦争不可避と判断し、中立を守るべく準備をさらに強化し、国境警備委員も動員した。それと同時にスイスでは必需品の買い占めも始まった。

八月二十九日、ドイツはポーランド包囲網を用意、す

ぐにでも軍隊の出動が可能となった。ポーランドでは、動員令が出て、抗戦の構えを見せている。

翌日の八月三十日、日本では阿部内閣が成立し、青木歳相、畑陸相、吉田海相、永井逓相、伍堂商工相、河原田内相が決まり、英二は祝電を打った。

八月三十一日には、汪兆銘が国民党大会を旗揚げして、重慶にいる蒋介石政権と対抗することになった。欧州では、英仏も動員令が出て、予備兵まで召集されるという。まさに一触即発の情勢で、欧州の夏は終わり、初秋を迎えることになったのである。

英二が、これまで怖れていたことが九月に起こった。一日、彼が朝起きるとドイツがポーランドに進撃を開始したとの報が飛び込んできた。英仏議会は、すぐにその対応策を協議するため招集された。スイスは、翌日の二日朝、兵員に総動員をかけることを決定した。イタリアは、総動員令を発動しないとの報道が広がり、またイタリアの日和見主義が始まったのかと周辺国の嘲笑を買った。

英二は、終日ラジオにかじりついて、情報の収集に当ったが、ドイツ側の情報はラジオの音が高くて聞き取れない。英国からは、チェンバレンの悲壮な演説が流れてきた。スイスでは、機械兵器を動かし始めている。

二日になった。昨夜より今朝にかけてひっきりなしに戦車、装甲車が公使館前を通過した。公使館の後ろの森林から点呼の声がうるさいほど聞こえてくる。

英二は、イタリアの出方が気になって午後、イタリアのタマル駐スイス公使を訪ね、イタリアの態度を質した。

「イタリアは、ドイツのポーランド侵攻をどのように受け止め、今後どのように対応するつもりであろうか」

「イタリアがしばらく中立を保っているのは、英仏の軍隊を国境に引き留めておくためだ。もし英仏両国との平和会議を提唱することができなければ、ドイツと今後のことを協議する」

タマル公使は、それ以上突っ込んだ答えは出さなかった。

夕食後ベルン市内に出てみると随所に兵隊であふれていて道路、ビアホール、森の中にもたむろしていた。三日の朝になっても、森林の中の兵隊の話し声、太鼓、馬のいななきなどで町は実に騒々しい。昨夜から露営しているらしく、しばらくは駐屯するようである。

若い女性も兵隊と立話する者も多く、お祭り騒ぎのようだ。スイス国歌、英国国歌が流れていた。ラジオから、英国は三日十一時、ドイツへ宣戦布告をしたとの報が流れていた。

四日は朝から雨が降り、午後には篠突く雨となった。昨夜から今朝にかけて公使館の裏の森にいた兵隊は、国境付近に出払った模様である。公使館の庭の前の林の葉

が黄ばみ始め雨に打たれ、落ち葉となって庭に落ちている。だが掃除をする人もなく散らかっている。郵便は、朝夕二回配達されるが、外国新聞は二日前から配達されていない。配達員の多くが、兵員として動員されたせいであろう。

エジプトはドイツと国交を断絶したとの報が伝わってきた。その他の国も続々と態度を表明してきている。

一方、日本は、阿部首相が戦争不介入、中国問題解決に邁進するとの報が伝わってきた。ドイツは、戦争を煽る猛宣伝を行い、英船アテニアその他商戦を潜水艦で沈没したと報じている。

ドイツ軍先発隊が、九月九日ワルシャワに突入したとの発表が、ベルリンから流れてきた。だが、ポーランド側は、誤報だと否定した。ドイツのゲーリングは、「ポーランドは四週間で占領して見せる」と豪語している。いずれにせよ「ワルシャワ陥落は時間の問題である」と英二は思った。英二は、英仏のラジオを聴こうとしたが、ドイツ側の妨害があってよく聞こえない。それに比べ、日本の放送はよく入る。

八日、ドイツのポーランド侵攻に対するルーマニアの反応を確かめに、駐スイス・ルーマニア公使を訪ねた。同公使は次のように英二に話した。

「戦争がもし長引いてもルーマニアは中立を守る。ドイツは、ルーマニアが英仏に加担すれば、ハンガリー、ブルガリアも攻撃するといっている。したがってルーマニアは、バルカン諸国に戦渦を及ばせないためにも中立が大切だと考えている」

日本の外交問題に関する取扱い方にも大きな変化があった。

九月十二日、本省から電話があった。

「スイスを日本の欧州における情報網の中枢としたい」とのことである。

また、これまで外交問題については、外務大臣が直接天皇陛下に奏上できたが、陛下に奏上できるのは首相のみに限定され、外務大臣の権限が縮小した。

これは、陸軍が画策したのではないかと、英二は思った。

その翌々日の九月十四日、阿部首相の「中国問題は司令官が全権をもってその処理に当たることになる」との発言についての連絡があった。これによって駐中国日本大使はどんな立場に立つのか、軍事力のみに頼る外交の危うさが、ますます中国問題の解決を長引かせるのではないかと、英二には懸念されるのであった。

欧州では、戦火が全体に及ぶ様相を呈してきた。イタリアは依然として中立を守っている。英仏は、ドイツとの戦争は勝てると思っているようである。

九月十六日、外務本省より英二に白鳥大使の後任の駐

イタリア大使に上奏するので、受託するかどうかの問い合わせがあった。

「ご期待に添えるかどうか分からないが、ご懇情に甘え忝く受託する」と英二は答えている。

同日、ソ満国境ノモンハンでの日ソ紛争は、ソ連モロトフ外相と交渉の結果、休戦協定が成立し、一応の解決をみたとの情報が東郷成徳駐ソ大使から英二宛もたらされた。

二十三日、外務本省より外相野村吉三郎海軍大臣、駐仏大使澤田廉三、次官谷正之、駐伊大使天羽英二に決定したとの連絡が入った。

英二は、中立を保っているとはいえ、日独伊防共協定の一翼を担っているイタリアがドイツとの関係上、いつまで中立でいられるか。また、その二ヵ国と関係の深い日本が欧州での戦争と、どのように向き合いながら日中戦争解決を図るか、英二は、外交官として、久しぶりに大きな課題に立ち向かう責任の重さとやりがいを感ずるのであった。

スイスの秋が深まった。九月も、はや二十九日となり、数日前から暖炉を温め始めた。「天高く馬肥ゆる」とはここスイスにも当てはまる。西欧でも秋になると人間が元気になるらしい。それだけに留まらず、活力が溢れ、国土の拡大に貪欲となるあまり、他国にも侵略の手を伸ばす国のあることを思い知るのであった。

ドイツのリッペントロップスとソ連のモロトフとがポーランド分割協定を結んだ。同時に、ソ連はエストニアに軍事上の足場を確保しつつある。ワルシャワは、ドイツ軍に引き渡されて独ソ両国は、着々とその野望を実現させて行ったのである。

昭和十四年九月三十日、天羽英二は正式にイタリア駐在特命全権大使に任命された。栗原東亜局長が、英二の後任として駐スイス公使に任命されている。

英二はすぐにイタリアのチアノ外相とあいさつの電報をかわした。チアノ外相は、十二年前、英二の北京時代の同僚で、ともに北京公使館区域行政委員会の外交団代表を務め、かねてから懇意の間柄であったのである。

天皇陛下の信任状が到着するまで時間があったので、英二は在英仏独の各日本大使館を歴訪して情報交換を行うとともに、敵味方交戦国の情勢を視察した。

そこで短い滞在ではあったが、英二は「ドイツは、今は旗色が良いが底力は、英国にある」との感触を得たのである。

十月二十四日、英二は盛大なお別れレセプションを公邸で開催した。参加者は予定したよりも多く約二百人にも達した。官邸は大混雑で、妻が帰国して留守のため、社交場の儀礼を一人でこなさなければならず、外交官としての仕事は、妻とともにあるのだと英二は思った。

ローマに赴任すればさらに社交関係は繁多となることが予想される。そこで彼は「万障繰り合わせて早くローマに来るように」と東京の妻に打電した。

十一月七日、エテル・スイス大統領が英二のために送別会を開いてくれた。これには全閣僚が出席し、大統領から懇切丁寧な送別の辞が述べられた。

その時スイスのモッタ外相は「今度は、ドイツ外相のリッペントロップスが早まったね」とそっと英二に耳打ちをした。ポーランド侵攻によって英仏の開戦を決意させたことを言っているのである。スイスは、住民の七割がドイツ系と言われている。だが、一般には反独気分が強く、この戦争も結局はドイツの敗戦を予測する者が多かったのである。

こうして十一月十四日平穏で美しいスイスを発ってファシズムの吹き荒れるイタリアに列車で向かった。霧の湖に沿い墨絵のような景色の中を列車は走った。

早朝国境を超えると風景は一変した。朝日が輝き雲一つない。だが、周りには薄汚れた小さい家が点在しているイタリアがそこにあった。

（つづく）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

吾輩は紙魚ロボである　その一〇

永畑俊三（永田俊一）

一、新型コロナウイルスの感染新展開と生起する新事態（一・二月）

（一）第六波の急速な拡大

（急拡大）

新年に入り、オミクロン株への置き換りと共に急速に拡大した第六波の勢いは凄まじく、年末大晦日新規感染者数全国五一〇人（東京七八）に対し、正月明け第二週水曜日一二日には一三、二四四人（東京二、一九八）と一万人を超えた。

この間一七日開会された通常国会冒頭の岸田首相による施政方針演説でも、新型コロナ対応を最優先課題と位置付け、この国難を乗り越えるため国民の協力を改めて訴えた。そしてオミクロン株による感染拡大に対し、厳しい水際対策の骨格維持、医療提供体制の強化・確保、三回目ワクチン接種の開始と前倒し、無料検査の拡充、経口薬の確保等予防・検査・早期治療の強化を図るとした。

一九日には、既に適用中である広島・山口・沖縄に加えて、東京・埼玉・神奈川・千葉の首都圏、愛知・岐阜・三重の中部三県、群馬・新潟・香川・長崎・熊本・宮崎の各県、一三都県のまん延等重点措置の追加を決定した（二一日から二月一三日迄）。更に二四日には大阪等一八道府県（二七日から二月二〇日迄、三県も延長）追加され三四都道府県に。二五日、全国感染は六二、六〇二人（死者四三）と初めて六万人を超えた（東京一二、八一三人）。

（対応の遅れ）

この感染急拡大は、図らずも首相が、昨年一〇月四日第一〇〇代、一一月一〇日第一〇一代総理として、政権公約した最優先課題のコロナ対策について、検査・隔離・治療・回復転院や三回目ワクチン接種等体制強化の遅れや準備不足を全て曝け出すこととなった。

症状者・濃厚接触者が保健所や医者の指示で無料で受ける行政検査と任意に民間検査機関で受ける自費検査（陽性なら結局前者に）に使われるＰＣＲと抗原検査キッド。キッドの不足が民間検査を控えさせ、更には行政検査も待ち行列や高齢者枠の設置で遅延や不可等に及び、コロナ当初から言われ続けた「ＰＣＲを必要なだけ」との政策転換もいまだしであることも明らかに。また、オミクロン株の拡大を実証するゲノム解析も水際では対応されているが一般には限られており、相変わらず感染症センターだけが解析を抱え込んでいることも露呈した。

昨年末から使用の政府切り札の飲み薬「モルヌピラビル」は発症五日以内に服用が必要だが、患者増大で端無くも量の不足だけではなく発熱外来の逼迫も露呈。更には救急搬送困難事案が急増、コロナ使用病床が一般病床を圧迫したり集中治療室の逼迫を齎し、病床充実を謳った自治体も、早や無症状や軽症者の自宅療養、更には中等症非高齢者の自宅待機や療養を要請するに至る。

その説明の背景には先行欧米の「オミクロンは感染力は強いが重症化はしない」という初期の知見があり、これが全体免疫で解除を目指す欧米に倣って当局を、厳格な制限に慎重にさせ、経済に配慮させた面も窺える。しかし、一月最終週、感染の波が六〇代以上の高齢者に及び前週比二・五倍全国で三万六千人と第五波最多の一万人を大きく上回り、高齢者の場合は重症化率も高いことが明らかになった。更には一〇代以下の感染もこの一週間で二・四倍と増大、クラスターの中心が飲食から学校・保育所と老人施設に移った。

首相が一月一七日召集国会冒頭の施政方針演説で「ワクチンについては、医療関係者、高齢者三千百万人を対象とする三回目接種の前倒しについて、ペースアップさせます。三月以降は、追加確保した一千八百万人分のワクチンを活用し、高齢者の接種を六か月間隔で行うとともに、五千五百万人の一般向け接種も、少なくとも七か月、余力のある自治体では六か月で接種を行います。国としても、自衛隊による大規模接種会場を設置し、自治体の取組を後押しします」と宣言した三回目ワクチン接種。一月末で接種者数四〇八万人と全人口比三・二％と、目標達成には、この時点で、二月に一日一〇〇万回超の接種が必要と予測された。首相が二一日「高齢者以外の一般の人でも接種券があれば予約できる体制を作った。今後どんどんペースアップして行く」としたが、診療所逼迫、モデルナ敬遠、自衛隊会場五分の一とその達成には疑念が拭われるには到っていない。

（認識・対応ギアのアップ）

二月一日、全国知事会の平井会長（鳥取県知事）が首相とオンライン会議で意見交換し、対策の重点を従来の飲食店から学校や保育所に転換するよう求め、首相はオミクロン株の特性を踏まえた対応改善、医療体制の強化、自宅療養者への即応体制の強化を求めた。先行急拡大の為いち早く重点措置に入った沖縄でも、二十代の感染者が大幅減少しピークを過ぎても子供の感染は止まらず、全国の休校は三%、学年・学級閉鎖実績は一三%を超え、高齢患者も増加し都では入院者の半分を超えた。一方でオミクロンの特性も次第にデータが増え、感染力の強さに合わせソーシャルディスタンスの拡幅やマスクの強靭化等が求められる一方、感染から発症迄の期間や発症後遷移及び回復期間の短期化等を踏まえ隔離期間の短縮（二日、同居家族等濃厚接触者の待機を一七日から七日にと厚労相発表）や休校期間の短縮（二日、休校等を五～七日程度から五日程度にと文科省発表）が決定された。

新規感染者数は、二日東京は二万人を超え（21576）た。三日全国は九万六八四五人で大阪市の入力遅れ分を上乗せして一〇万四四七〇人と一〇万人を超え新規感染者数のピークを付け、感染累計は三〇〇万人を超えた。四日、ゼロコロナ・厳戒の中国で冬の北京オリンピックが始まったが、三日時点で重点措置三五都道府県のうち一六都府県の病床使用率が五〇%以上とじわじわと上がってきている。（重症病床率は四〇%台の京都・大阪・東京に比べ大幅に低いところが目立ち、例外は沖縄の五八%だけである。）

この辺りは感染がピークに迫りつつも、その水準の圧倒的高さが重症化、死者の増加をもたらし、医療の手が回らぬことも輪をかけ、その上切り札のワクチンの三回目接種の遅れと目詰まりが顕著で、後手後手批判に繋がって行く。

三回目接種が進む自治体と滞る自治体、異なるワクチンを打つ交互接種の忌避、前倒し期間が異なる自治体等進まぬ接種。「厚労省が科学的根拠に欠ける八か月間隔に拘り続け、年末の方針急転換はそれを前提に準備に入っていた自治体の急旋回を困難にした」との国会内外での批判も出、急速な感染拡大と早期のピークアウトが予想される中、量確保の筈の医療従事者・高齢者の接種さえ目詰り遅れが顕著な有様に、不安と批判が高まる。

矛先は第五波が収まった後の六波が予想される三か月の不作為の責任追及に向かったが、これに対して首相は七日、二回目接種の遅れや予想を上回る第六波の急速拡大もあり三回目接種が遅れたことを認めた上、「国、自治体、企業を挙げて二月のできるだけ早期に一日一〇〇万回までペースアップすることを目指して取り組みを強化したい」と述べ、自衛隊による大規模接種の増加の方針も示した。分科会の尾身会長も自ら五日三回目は交互接種のモデルナを打ち「ワクチンの種類に拘わらず、できるだけ早く打つことを勧めたい」と呼び掛けている。

そして接種加速に向け体制を整える為、河野前ワクチン相を支えた官僚を堀内ワクチン相のチームに戻し実働部隊を強化。西欧の様に全体免疫に達して新日常経済社会を取り戻そうとしている王道を追いかけようとすると、このワクチン三回目接種の遅れと当初から課題のＰＣＲ検査の何処でも誰でも体制が未だ出来ていないことがネックとなり、コロナ以前と以後の不作為に関わった対策分科会等専門家の責任も問われるところとなろう。

（出口への戸惑い）

世界が対応実績に大きな格差を抱えつつも、西欧諸国を中心にウイズコロナへのランディングを視野に入れつつ出口を探る段階に入っている。しかし、格段に手強く変化したオミクロンが急拡大し多様な展開を示し、現に医療崩壊に不安のある日本の場合、最悪事態原理の王道に基づき経済社会も回るようにするパンデミック対応は、国民性の違いも相俟ってとりわけ出口には困難なものがある。因みにワクチンも先行している欧米ではオミクロン株も一月半ばには新規感染者数もピークを越え急速に減少、規制緩和の動きも強めている。

重点措置も採らぬ自治体と申請する自治体、期間延長を考える自治体と解除しようとする自治体がある。近く感染ピーク到来との見通しを前提に、「重症化リスクの高い高齢者感染や学校・保育所等を通して家庭内に感染を広げている子供の感染を重点的に抑えることが重要」「軽度は自主的対応に任せ、飲食中心の規制はクラスターの中心に代った老人施設や教育現場に転換、経済社会を回すことに重点を移すべし」と言う専門家もいる。

そんな中政府は二月一〇日、高知を新たに追加（一二日から三月六日）、東京など一三都府県の重点措置延長（三月六日まで）の方針を決めた。明らかに医療崩壊は起こっていて、在宅療養の激増と重症化・死亡のリスクも高まっており、多くの人々は後手後手とともにつんのめりにも不安を感じている。こうした中、小児へのワクチン勧奨努力が撤回されたり、世界から求められた水際緩和への不安が表明されたり、出口に向かっての対応策の胃の腑入りの難しさが露呈されている。多様な要素を孕みつつ全体として手仕舞って出口を求めて行く時の困難さではあろうが、一段高く全体的な納得のゆく対応方針の策定と明確な具体的道筋も示してその理解協力を得るべく努力が必要であろう。

一八日、大阪など二〇日期限の一六道府県を二週間、二七日期限の和歌山県を一週間延長（いずれも三月六日まで）、山形・島根・山口・大分・沖縄の五県を解除した。全体として、感染者数は二月初にピークを打ち減少傾向にあるものの減少テンポは鈍く、遅れて重症化や死者の増加が進みつつある中で、各自治体で減少幅や重症

化、病床（全体、重症用）利用率の違いを反映して、対応にも違いが出て来るようになった。

月末にかけて、東京も全国も感染者数の前週比（一日及び週間平均）も期待されたようなスピード感ではないが徐々に低下し、ワクチンの三回目接種のエンジンもかかり幼児の接種も始まった。医療崩壊への手当ても目に見えてはきたが、依然不満足な水準で不安や救済不可発生も目立ち、後手後手感は拭えず内閣支持率の低下傾向には歯止めが掛からぬまま、月越えとなった。

（二）社会情勢

（経済金融情勢）

新型コロナウイルス禍からの回復過程での物価の急変動が世界経済を揺らしており、米国では人手不足や供給制約などから歴史的高インフレが長引くとの予想が高まっており、ＦＲＢパウエル議長は一月一一日上院再任承認に向けた公聴会で、「物価は二％目標を遥かに上回る水準で推移している」と述べ、テーパリングの姿勢を日に日に強めている。原油が騰勢を強め天然ガスの急騰等からの消費者物価指数の上昇因もある。日本では日銀総裁が重ねて金利引き上げの環境にないとしているが、資源高や円安による輸入物価の伸びが歴史的水準となっており、デフレ下のインフレが現実味を帯びだしている。他方中国一七日発表の昨年一〇～一二月期の実質ＧＤＰ前年同期比は四・〇％と減速が顕著で今後も低下が続く見通しである。中国も含め新興国債務がコロナで膨張しているのが金利上昇で重荷になり、「影の銀行」融資資産（プライベートデット）が世界で一二〇兆円との指摘もあり、リスク蓄積が心配されている。

二六日、ＦＲＢはＦＭＯＣ後の声明で三月の利上げ開始を示唆、昨年一一月から進めて来た量的緩和の縮小を三月上旬に終えた後、三月一五～一六日の次回会合で最終判断するとしている。膨らんだ保有資産縮小にも遠からず着手の方針である。翌二七日商務省発表の昨一〇～一二月期の実質ＧＤＰ速報値は年率換算で前期比六・九％と市場予想（五・五％）を上回り、七～九月期（同二・三％）から加速した。二一年の成長率も五・七％と、三七年ぶりの高さとなり、足元の強い需要や人手不足や供給網の混乱もあって、物価上昇も加速している。

金融引き締めをしながら安定した成長率を維持出来るかが課題となるが、ＩＭＦは一月二五日、昨年一〇月の二二年世界経済見通しを改定、世界が〇・五ポイント下げて四・四％に（潜在成長率は上回る）、先進国が三・九％に（〇・六下げ）、新興国・発展途上国四・八％下げ（〇・三下げ）に、下げ幅が大きいのは、米国が四・〇％に（一・二下げ）、中国が四・八％（〇・七下げ）に、である。米国は、大型歳出法案の不調、予想以上に急激な引き締め、供給不足が、中国はゼロコロナ政策による

混乱と不動産業界の失速が、下げ要因となっている。

これに対して日本であるが、二月中旬公表の一〇～一二月の実質ＧＤＰ年率換算は五・四％と、緊急事態宣言下にあった七～九月期のマイナス二・七％からリバウンドしたが、新型コロナ拡大前の二〇一九年一〇～一二月期の実質ＧＤＰを依然〇・二％下回っており、米国が三％上回っているのに対しても回復の遅さが目立つ。通年で見ても日本は二〇年マイナス四・五％から二一年一・七％となったが、米国五・七％、ユーロ圏五・二％、中国八・一％に比べ著しく低い。

米国引き締め、ＥＵ漸進、日本緩和維持、周辺国の混乱も含め、どう出口へ手仕舞っていけるかも難しい道行きが予想され、景気も周回遅れかつ構造デフレ体質を抱えた日本には特に厳しいものになろう。

（政治情勢）

岸田文雄総理の政権発足後一〇〇日目に当たる一月一一日を前に、通常国会の召集日が一七日、会期が六月末迄と公式発表され、ドイツでのＧ７サミット六月二六～二八日を挟んで、参院選の投開票日七月一〇日（日）であることがはっきりした。

一月一七日国会開会日に於ける岸田総理の施政方針演説で、「信頼と共感」の政治姿勢を堅持しつつ、まずは、新型コロナに打ち克つことに全身全霊で取り組むとし、新型コロナ対応については、専門家の意見を伺いながら、過度に恐れることなく、最新の知見に基づく対応を、冷静に進める覚悟であるとの基本姿勢を明らかにした。その上オミクロン株への対応と息の長い感染症対応体制強化に分けて具体的な施策や計画を示したが、実際にはヒッチを起こし後手後手に回って、内閣支持率をじりじりと下げたまま三月に突入したことは前述した。

施政方針演説は更に、就任以来唱えている、中長期的投資の不足、都市と地方の格差、気候変動問題、中間層の衰退等健全な民主主義の危機克服を訴えている。新自由主義的な考え方が生んだ、様々な弊害を乗り越え、歴史的スケールでの挑戦により、成長と分配の好循環による「新しい資本主義」によって、官と民が全体像を共有し、協働することで「経済社会変革」実現するとしている。その上、デジタルを活用した地方の活性化を図る「デジタル田園都市国家構想」や「経済安全保障」「科学技術・イノベーション」「賃上げ」「人への投資」「中間層の維持」等のヴィジョンに触れている。

今春、新しい資本主義のグランドデザインと、実行計画を取りまとめ、世界の議論を牽引するとしているが、作業部会の動きについて今のところ顕著な進展は報告されていない。また、「気候変動問題への対応」「全ての人が生きがいを感じられる社会へ」「地域活性化」「災害対策」「外交・安全保障」「憲法改正」にも触れている

が、岸田内閣の具体的方向性が見えてくるのはもう少し議論・検討が必要であろう。

（北京冬のオリンピック）

コロナ下昨夏の様々な事態に直面した東京オリンピックの記憶や課題評価・宿題の残る中、二月四日ゼロコロナ厳戒態勢、当然東京大会より厳格な選手村のバブル方式の中国で、冬のオリンピックが開幕した。世界的映画監督張芸謀（チャン・イーモウ）演出するデジタル先端国の開会式は、その巧みさ芸術的センスに人々を惹きつけた。国家的資源の圧倒的投入による大会運営下の熱戦は、開催国中国のメダル獲得の増大は勿論のこととして、日本も強豪国に交じって自国史上最多のメダルを獲得、様々な感動も呼んだ。そのストーリー性にＴＶに多くの日本人が釘付けになったが、相変らず自国選手偏重の観戦応援ではあった。

一方で、事前から人権問題を巡る外交ボイコットで揺れ、首脳を送り込んだ国は数が限られ、プーチン大統領の出席と、習主席との会談アピールが否が上でも際立つこととなった。しかも悪質な国家ぐるみのドーピング事件で、ＲＯＣ（ロシア・オリンピック委員会）の下参加した金メダル本命の女子フィギュア選手の薬物疑惑が二転三転後味の悪い幕引きも見せ、雪・氷の整備状況や運営手法が番狂わせや事故を起こすなど悲喜こもごもをもも日立たせた大会でもあった。

二〇日、九一か国・地域から約二九〇〇人の選手が参加し、一七日間で七競技、史上最多の一〇〇種目が行われ、チケットは一般販売されず、招待観客が距離をとって見守った大会が幕を閉じた。習近平主席の閉幕宣言が、この間忘れていたロシアのウクライナ侵攻危惧を思い出させるかのように。

（ウクライナ侵攻）

ロシア軍のウクライナ周辺への大規模配備が、ウクライナ侵攻不安を醸成し年越しをした問題。ブリンケン米国務長官が一月二〇日にドイツ・ベルリンを訪問、演説で「（ロシアの行動を見過ごせば）全面戦争の脅威が全ての人の頭上に漂っていた、もっと危険で不安定な時代に引き戻されることになる」と警鐘を鳴らし、「アメリカとヨーロッパ各国は外交努力で事態打開を目指している。」と表明。一二日、ロシアのラブロフ外相とスイス・ジュネーヴで協議したが大きな進展はなく、今後も協議を継続する方向で一致した。

バイデン大統領が二四日、英ジョンソン首相、仏マクロン大統領、独ショルツ首相、ＮＡＴＯストルテンベルグ事務総長、ＥＵフォンデアライエン欧州委員長らとオンラインで会談、「ロシアがさらにウクライナへと侵攻すれば、深刻なコストを伴うということで一致した」と

される。同日ＮＡＴＯは東ヨーロッパへ艦船や戦闘機などの増派を決定、米国は武器供与と米軍八五〇〇人派遣準備を表明した。

二月に入ると、米国が兵士三〇〇〇人を東欧へ追加派兵するなどＮＡＴＯ諸国は引き続きロシアへの対抗措置をとる一方、習・プーチン会談が、四日冬のオリンピックが開会された北京で行われた後、ロシア軍は隣国ベラルーシとの合同軍事演習を二月一〇日～二〇日（オリンピック閉幕日）の間実施。ウクライナを取り囲み一三万人規模のロシア軍が展開、黒海にも艦隊を派遣した。

こうした中でも、各国首脳はウクライナ問題の外交的解決に望みを託し、動きを活発化させており、米国務省は二月一七日、ロシアによるウクライナ侵攻がなければブリンケン国務長官がロシアのラブロフ外相と来週末に会談すると明らかにしている。他方一八日には、バイデン大統領が外相会談は二月二四日開催予定としつつ「私は彼（プーチン氏）が決断したと確信している。ロシア軍は数週間から数日のうちにウクライナを攻撃する計画であり、そのつもりであると信じるに足る根拠がある」と発言した。同時に「ただし、そのロシアが決定を覆す時間はまだ残っており、ロシアはまだ外交を選択できる。外交交渉のテーブルに戻れる余地がある」とも述べた。

またＧ７は一九日、ドイツ・ミュンヘンで緊急外相会合を開き、ウクライナ情勢に関する共同声明で「ウクライナ周辺、違法に併合されたクリミア、及びベラルーシにおけるロシアの威嚇的な軍備増強について引き続き重大な懸念」を表明し、ウクライナに侵攻した場合は「ロシア経済に厳しく前例のないコストを課すこととなる幅広い部門・個人を対象とした経済・金融制裁を含め甚大な結果を招くことを、明確に理解すべき」と警告した。

二一日、事態はついにレッドラインを越えた。プーチン大統領はテレビを通じて国民向けにスピーチし（日本時間二二日三時）、ウクライナ東部ドンバス地方で「ドネツク人民共和国」「ルガンスク人民共和国」を自称し、ロシアを後ろ盾とする武装勢力が実効支配する地域について、国家として承認すると述べた。対してウクライナのゼレンスキー大統領は、国民向けのスピーチの中でロシアの行動を「ウクライナの完全性と主権の侵害」として批判し、一方で平和的な解決も呼びかけ、西側諸国の支援に期待する旨を述べた。

二二日（日本時間二三日未明）バイデン大統領は、ロシアが「平和維持」を名目に国家承認した同地域への派兵を決めたことは「ロシアによるウクライナ侵攻の始まり」と非難、二四日の両外相会議はキャンセルされた。

一方プーチン大統領は同日、ウクライナの非武装化とＮＡＴＯ非加盟による中立化が「現在の状況を打開する最善の方法」と記者団に語った。

二三日ウクライナ議会は全土への非常事態宣言を承認

した（期間は二四日から三〇日間）。米国ではサキ報道官が同日の会見で、「たとえロシアがウクライナに本格的に侵攻したとしても、アメリカはロシアと戦うためにウクライナへ軍を派遣することはない」と述べた。

二四日プーチン大統領がウクライナ東部ドンバス地方での「特別軍事作戦」を実施すると発表し、事実上の侵攻表明を行った。これに対しバイデン大統領は「プーチン大統領は、破滅的な人命の損失と人的苦痛をもたらす計画的な戦争を選択した」とし、「プーチンは侵略者だ。プーチンはこの戦争を選んだ。彼と彼の国はその報いを受けることになる」と非難した。また、「（今回の侵攻は）プーチンがどんな手段を使ってでも帝国を築きたいという欲望に基づくもの」などと述べ、正当化できない戦争をはじめたことで「国際社会でのけ者になってしまうだろう」とし、「今後（プーチン氏と）会談する予定はない」と述べた。ロシアへの追加の経済制裁についても、ロシアの大手銀行への制裁を拡大、資産を凍結、ドル・ユーロ・ポンド・円の各基軸通貨との決済を制限、ハイテク製品の輸出規制等を実施する旨発表した。同日ゼレンスキー大統領は、ロシアとの外交関係の断絶を表明、各地で爆発音が伝えられる中、ドミトロ・クレバ外相は「ウクライナの都市が攻撃を受けている。侵略戦争だ」と、プーチン大統領を非難した。国連のグテーレス事務総長もプーチン大統領に対し「今世紀始まって以来、最悪の戦争になりかねない」と危機感をあらわにし、「この紛争は、今すぐに止めなければならない」と警告した。G7首脳も緊急のテレビ会談を開き、岸田文雄首相は会談後「G7としての強い連帯を確認した」と述べた。

二五日ゼレンスキー大統領は「ロシア軍が二五日午前四時からミサイル攻撃をはじめた。軍民問わずロシア軍が攻撃をしている」と述べ、ロシア軍に対抗するため総動員令を発動し、全ての兵士と予備役の動員を決めた（期間は九〇日間）。また、ロシア軍が東部と北部、南部の国境から首都キエフに迫っているとみられ、首都警戒が強まる中、ウクライナ大統領報道官は、停戦交渉の場所と時間について協議中であると明かした。

二六日、ロシアは「ウクライナが停戦交渉を拒否した」のでロシア軍主力部隊の進軍を再開するとした。米国は二五日の国連安保理でロシアの拒否権で否決された非難決議を総会の場で採決に持ち込む意向を示した。

二七日、ロシアのウクライナ侵攻に対する市民の抗議活動が広がってきて、ベルリンで一〇万人以上の参加を見、ロンドン・マドリードでもデモがあった。ウクライナ支持の市民の行動のうねりが、当局者の背中を押し、EUは国際決済システムSWIFTからのロシアの排除など慎重だった制裁措置にも踏み切った。

二八日、ベラルーシのルカシェンコ大統領の仲介でロシア・ウクライナ両国代表団が、ベラルーシとウクライナの国境で停戦を巡る対話を始めた。ロシアは事実上の降伏を求める構えで、ウクライナはこれを拒否、前提条件なしで交渉する方針なので、見通しは不明と報じられている。また、前日のプーチン大統領の「特別態勢を」取るようにとの命令を受け、ショイグ国防相が、ICBMや戦略爆撃機の部隊や原子力潜水艦が所属する北方艦隊と太平洋艦隊が臨戦態勢に入ったことを報告した。核攻撃の可能性を脅し示唆するとして受け止められている。

一方、岸田首相はゼレンスキー大統領と電話会談し、「ウクライナの主権と領土的一体性への確固たる支持」「我が国がウクライナ国民と共にある」ことを伝え、新たに一億ドルの緊急人道支援の伝達も行った。また欧米諸国に歩調を合わせ新たにロシア中央銀行への取引制限制裁措置を決め、ベラルーシへの制裁を表明、ルカシェンコ大統領ら個人・団体を制裁対象に加え輸出管理措置なども講じることを明らかにした。

二、コロナに加えウクライナが炙り出す社会の実像と苦闘（三月）

コロナに弱点や問題を暴かれつつ、世界はパンデミックと闘い三年目に入っている。そして現実の侵攻・戦争に突入したウクライナが、問題を更に広く深くし、審判を受ける歴史（新常態へ）の門を高く困難にしている。

（一）ウクライナの戦禍

戦争は始まり止む様子はない。侵攻を受けているウクライナの物的被害・人的損害が拡大し、その惨状・悲劇が伝わる度に世界の批判は強まり制裁も強まるものの、反論・進撃・対抗措置等手を止める気配のないロシアに内外の不安・恐れも深まる一方である。

（戦況）

三月入り後の戦況を略記すると次の通りである。

二月二八日、行われた停戦協議は結論出なかったものの、それぞれ一定の成果が得られたと説明、自国に持ち帰り検討の上、二回目の協議を開くことは合意。

三月一日、キエフの産科病院が砲撃を受ける等民間施設・人への攻撃増加。他方、短期決戦の狙いが一週間経つも主要都市は陥落せず作戦の遅れとの指摘も。ミサイル等大量破壊兵器も使用。国外への避難民は六七万人に。

二日、EU、第二位VTBバンク等ロシア大手七行のSWIFTからの排除決定。

三日、国連総会、ロシアを非難し「ウクライナからの撤退を求める決議案」を七割強一四一国の賛成で採択。南部ヘルソン市、主要都市のうち初の陥落。

四日、サポロジニ原発（最大、二割）をロシア軍砲撃火災で占拠。第二回停戦協議、プーチン大統領の新条件追加（ロシアが独立を認めた共和国を含む東部二州の独

立）もあり、引き続きの協議に。（北京パラリンピック、ロシア・ベラルーシ選手抜きの異例の開幕）

六日、北部ハリコフの核研究施設にロケット弾着弾、更に南ウクライナ原発の占拠試みも明らかに。「ゼレンスキー大統領要請のウクライナに飛行禁止空域を設定した国は紛争参加国とみなす」とプーチン大統領。また会談したエルドアン大統領に「ロシアの出した条件履行無い限り、軍事作戦停止せず」と。

七日、第三回停戦協議で、キエフ、ハリコフ、スムイ（北）、マリウポリ（南）で一時停戦し人道回廊開設（ロシア側は脱出先は事実上ロシアかベラルーシ指定）。ロシア、日米等四八国・地域を「非友好国・地域」に指定。外務省、ロシアを渡航中止勧告の危険レヴェル3に。

八日、「人道回廊」三度目の試みで、スヌイ抜け五千人ポーランドへ脱出。ゼレンスキー大統領リモートで英国議会演説「降伏しない、負けない、海で空で最後まで戦う、チャーチルの英国のように」と。習主席、マクロン・シュルツ会談で対ロ制裁に反対しつつ停戦に「積極的役割を果たす」と。バイデン大統領、追加制裁とロシアからの原油・天然ガス・石炭の輸入禁止決定。英・EUは「脱ロシア計画」公表。

九日、停戦地域のマリウポリの病院が爆撃され犠牲者多数。他方スムイからは四・三万人避難。米国防相、ポーランド国防相と協議、米政府提示の戦闘機のポーランド経由の供与計画は支持しないということに。

一〇日、ハリコフの核物質扱う国立物理技術研究所が再び攻撃を受ける。ロシア軍、キエフ迄一五キロ地点まで接近。北朝鮮ICBM発射試験。

一一日、G7共同声明で高関税や高級品の対ロ禁輸等新たな経済制裁発表。ロシア西部に戦線拡大、ポーランド国境近くルツク空軍基地を空爆。一〇～一一日、パリ郊外でEU首脳会議、ウクライナの求める即時EU加盟見送り。米国、金融制裁や原油禁輸に加え貿易面で追加措置（二百品目輸出停止）。

一二日、ロシア、制圧のザポロジエ原発の所有権をロシア国営ロスアトムに移転。キエフ南西ワシリキウ飛行場をミサイル攻撃で破壊、キエフ北西部で激しい戦闘が続き、「ロシア軍に数十年で最大の打撃を与えている」とゼレンスキー大統領。南部メリトポリ市長の拉致が報じられ、独仏露三首脳会談では独仏首脳が即時停戦と紛争の外交的解決を促した、とされる。

一三日、ウクライナへ西部への攻撃が拡大、リビウ北西の演習場も攻撃を受け三五人死亡一三四人負傷、キエフ南西空軍基地もミサイル攻撃で破壊。ロシアの中国への武器供与など軍事支援要請の報道。南部ドニプロのルドネ市長の拉致も報じられ、拉致済みのメリトポリでは親ロシ派市長が擁立される。また避難民取材中の米人記者のキエフ近郊イルピンでの射殺の報も。

一四日、ロシアは西部戦線激化に加え南部黒海沿岸も封鎖し周辺国からの補給路遮断を図りつつ四回目の停戦交渉に応じたが、隔たりは依然大きいと見られる。米欧は兵器供与を堅持しており、ローマで開かれた米中高官会談でも「対ロ支援なら制裁」と警告。深刻な人道危機のマリウポリから一部住民の避難がようやく実現、一五日も引き続き停戦交渉で改善に臨むとしている。

一五日、ロシア軍一〇キロまで迫り攻撃が激しさを増す中、キエフでは同日夜から三五時間外出禁止令が出される。一方ポーランド、チェコ、スロベニアの三首相が、EUを代表してキエフを訪れゼレンスキー大統領との会談で、ウクライナの主権への支持を伝えた。マリウポリは既に死者が二千五百人近くにのぼるが、当日車で千人がザポロジエに向け脱出したと報じられた。また、NATOの臨時首脳会議の（バイデン大統領も出席）二四日ブリュッセル本部開催が公表された。停戦交渉も引き続き一六日も行うとされている。

一五日現在、ロシアは停戦協議で中立化、非武装化、東部二州独立等高いハードルを突き付けつつ現政権排除を意味するナチ化阻止はトーンダウンの模様。人道回廊開設で待避を認めると言いつつ、次第に各方面からのミサイル砲撃で袋の鼠を追い込むようにキエフを制圧し政権中枢を崩壊に追い込む手を休めてはいない。このひと月に及ぶ世界の非難（国内の批判も含め）の叫びの中展開する狡猾・非道なロシアの軍事作戦を断行するプーチンの深層の動機と狂気が論じられ、説得が行われてきたが、本人はいまだ口をつむったままである。

（侵攻意識の所在）

（イ）遡れば

一九八七年ペレストロイカ改革のゴルバチョフ第一書記がヨーロッパ共通の家構想」を提起。ベルリンの壁が崩れた翌九〇年のドイツ統一交渉で、米独交渉者は統一をソ連が是認すればNATOは拡大しないと口頭約束。九一年、敵対組織がなくなればNATOも解体するだろうと考え、ゴルバチョフはソ連崩壊に先立ちワルシャワ条約機構を自ら解体。意に反し旧東欧諸国はNATO存続・参加を望み、米ロ間で九七年「NATOロシアの創立協定」が締結され、NATOとロシアの間で「平和のためのパートナーシップ（東欧諸国の加盟する権利は否定しないがロシア・NATO関係悪化無きよう運用配慮）」が約束される。

その後就任したプーチン大統領は、当初安全保障面でも協調に努めていたが、二〇〇四年には旧ソ連の構成共和国であるエストニア・ラトビア・リトアニアのバルト三国までもが加盟を望みやがて認められると、約束されたロシアの安全保障上の保証に疑念を呈し不信を露わにするようになる。ソ連崩壊で弱体化したロシアの力の回

復を強く意識して、経済力を押し上げて来てG8入りもした彼が、やがて安全保障・軍事面でも力を取り戻そうとする時期が来る。その分水嶺が二〇〇八年のウクライナとグルジア旧ソ連構成国で最もロシアに近いこの二国の加盟をNATOが原則認めたことである。

（ロ）軍事行動へ

二〇〇八年、グルジアの南オセチア自治州・アブハジア自治共和国を巡る紛争へのロシア軍介入に始まって、その親ロシア自治州・共和国の独立承認、実質併合の動きとともに、ウクライナにも政治的介入が続いてきた。

二〇一四年、ウクライナで親ロシアのヤヌコーヴィチ政権が崩壊すると、二月、自治領「クリミア自治共和国」（住民の約六割がロシア系とされる）にロシアが自国民保護の名目で侵攻、「共和国政府」とセヴァストーポリ特別市が一方的に独立を宣言、違法な「住民投票」を実施し、ロシアはクリミア半島を違法に「併合」した。三月、更にウクライナ東部でも情勢が急激に悪化。ドンバス地方ではロシアへの編入を求める武装勢力が「ドネツク人民共和国」「ルガンスク人民共和国」を自称し、一方的に独立を宣言。ウクライナはこれらを反政府武装勢力とみなし、占領された地域を取り戻すべく「反テロ作戦」を実施、戦闘状態に入った。国連総会は「ウクライナの領土保全」について採決、日本もウクライナ東部の情勢不安定化に関わっているとみられる人物などの資産凍結措置を実施した。

ウクライナ東部での紛争激化を受けて、ロシア・ウクライナ・ドイツ・フランスの四カ国は、二〇一四～五年に和平プロセスを定めた「ミンスク合意」を締結、一五年の「ミンスク2」の主な内容は、武器の即時使用停止・外国部隊の撤退・OSCE（欧州安全保障協力機構）による武器使用停止の監視・ドンバス地方の「特別な地位」に関するウクライナの法律採択・OSCEの基準に基づく前倒し地方選挙の実施等である。しかしドンバス地方でロシアを後ろ盾とする武装勢力が実効支配する地域に高度な自治権を持たせる「特別な地位」を認めるという条件や地方選挙のタイミングなどをめぐって、ミンスク合意内容をどのような順番で履行するのか対立。

ウクライナは東部での情勢悪化を受けて、徴兵制の復活を含めて軍備増強を進めた。二〇一九年二月には憲法を改正し、将来的なEU・NATO加盟を目指す方針を明記した（なおNATO側は、二〇〇八年の首脳会議でウクライナの将来的な加盟を認めている）。これに対して四月、ウクライナ東部の武装勢力が支配するドンバス地方の住民にロシアのパスポート発行を認めるプーチン大統領令が署名された（ただし、ウクライナでは現在二重国籍を認めていない）。

（ハ）そして今回

二〇一九年五月就任のゼレンスキー大統領は、親EU路線をとりつつもロシアとも対話の用意があると表明、二〇二〇年七月、ウクライナとロシアを後ろ盾とする武装勢力との間で停戦合意が実現した。ところが二一年に入ってから停戦合意違反が増加、死傷者が相次いだ。対して「ウクライナのNATO加盟は認めない」として四月・一〇月ロシア軍が国境に部隊配備を行った。一二月一〇日、ロシア外務省はウクライナとジョージアの将来的なNATO加盟を認めた二〇〇八年NATO首脳会議の決定取り消しを求める声明を発表、NATOがこれ以上拡大しない確約や国境付近での軍事演習の停止を要求した。これに米国務省は「ロシア政府は、ウクライナとの国境に一〇万人以上の軍隊を配備し、現在の危機を引き起こした。ウクライナ側には同様の軍事活動はなかった」とロシア側の主張を否定、ロシア軍はウクライナを取り囲むように一九万人規模の軍部隊を配備し、ウクライナ北部に面するベラルーシにもロシア軍が展開。二〇一四年のクリミア占領時のように、ロシア軍が再び侵攻するのではないかという懸念が生じ、軍事的緊張が続いて、二〇二二年入りした。

二〇二二年入り後は前述の通りである。

（ニ）深層

プーチン大統領は、ウクライナを兄弟国、ロシアが作った国と上から目線の一体性を侵攻の歴史観に繋げているが、これについても歴史をよく見る必要がある。ウクライナそれは悲劇の国との理解も必要である。

六～七世紀東スラブ人の部族国家が形成され、九世紀スカンディナビアから公位を迎え強国となったウクライナの原点キエフ・ルーシ国は、十～十二世紀に最盛期を迎える。イスラムにより遮断された西欧とビザンツ・中東の交易路の代替で商業が栄え、ギリシャ正教の主教座も移転、その首都キエフは欧州一の美都として称えられた。しかし王権の相続争い等で諸公国の連合体となり勢力争いで弱体化し、そこにモンゴル帝国の侵攻・征服が襲う（一二四〇キエフ占領）。所謂タタール（モンゴル）のくびきは基本間接統治で、今のウクライナの地はハーリチ・ヴォルイニ公国に当たる。一四世紀半ばにはリヴィウを中心とする南西部ハーリチはポーランドに、キエフを含む北東部ヴォルイニはリトアニアに併合された。北のモスクワ公国はモンゴルとの関係も巧妙で力を蓄え、一四八〇年キプチャク汗国の支配から脱した。

ウクライナ南部ステップ地帯は、残存諸汗国に分かれ弱体化し、半ば無人の肥沃な辺境地帯となり、一五世紀になるとリトアニア・ポーランド領内から貧しいウクライナ人が危険覚悟で移り住んだ。次第に武力も強化しコサックと呼ばれるようになり、やがてザポロージェが中心地となる。ウクライナのコサック全体がザポロージェ・コサックと呼ばれるようになり、政治・軍事勢力として諸国からも一目置かれるようになる。その首領へトマン

の下一七世紀に入ると、ポーランドへの反乱を起こすが、その為提携したモスクワ公国が逆にポーランドと結び、これに敗れ、ポーランド・モスクワ公国の支配下にはいる。更にはポーランド分割で支配下にはいったロシア（八割）・オーストリア（二割の西ウクライナ）に対して、次々に相手は代るが、被支配の状態から脱するべく独立運動が続いていく。

一九世紀、ロシア帝国下では小ロシアの行政区画の下小ロシア人と呼ばれ、農民の四分の三が農奴化した。ロシア化で凋落したコサックに替り、新しいインテリゲンツィア層の下、ウクライナ・ナショナリズムが育まれ抵抗運動が盛り上がりをみせる。しかしこの民族運動も弾圧の連続であった。

しかも長い分割支配の歴史は、ウクライナの大地に民族の色だけでなく、宗教・言語のモザイク模様を複雑に描き上げてしまった。ロシア人とウクライナ人が拮抗し言語もロシア語とウクライナ語が拮抗し正教が支配的なキエフ、ウクライナ人及びウクライナ語が支配的でウクライナカトリックの西のリヴィウ、ロシア人とユダヤ人が多くロシア語が支配的で宗教も多彩な南のオデッサ、といった具合に。

そして二〇世紀、日露・一次大戦で帝国の屋台が揺らぎ、大戦中ロシア革命が起こると、呼応してウクライナ独立の狼煙が上がる。キエフは独墺軍、赤軍、白衛軍（帝政残党）と独立軍入り乱れての戦闘で主が目まぐるしく変わり、一九一八年ヴェルサイユ条約締結後も赤軍・独立軍・ポーランド軍の戦場として三年、結局墺を引き継いだポーランドとロシアを引き継いだソ連に併合されて終わった。二次大戦下ナチス独占領下で起こった独立運動も大戦終了後も燻ぶったがまたも壊滅する。ウクライナは戦後のソ連による粛清も含めて大戦で六分の一の人口を失ったと言われる。

確かに起源を同じくする兄弟としても、千年の歴史の中で支配被支配の鬱屈した心情や異なる文化・思想の影響が、却って兄弟ゆえに執着と独立の相互作用・感情の溝を深く溶き難いものにしているのではないか。正義・倫理の顧慮無く国際社会からの批判・掣肘に耳も貸さず、戦いの悲惨に目もくれず、我欲の完遂の為突っ走る軍事大国と、国際世論・支援を訴え万策を尽くし犠牲にめげず独立を守り抜こうと抵抗する小国。その震度は世界大戦にも繋がりかねず、社会・経済の世界的分断という新たな悲劇の常態を決定づける要因に成りかねない。

（戦況二）

世界衆目の下、戦闘はウクライナの徹底抗戦で電撃的制圧はならず長期化し、極超音速ミサイル等の新型強力兵器の逐次投入や軍民施設・人物無差別攻撃化によって、物的被害は勿論のこと一般市民の犠牲も急速に膨れ上っ

ている。断続的に行われる停戦交渉もその度に物別れとなり、強硬な条件をのませる為にもロシアの攻勢は強まり戦闘は激化する。

侵攻開始から一か月に近づいてきたが、ロシア軍制圧都市は南部のメリトポリ、ベルジャンスク、ヘルソンの三都市で、国連は、一九日までに全土で子供七五人を含む九〇二人の民間人が死亡、一四五九人が負傷したと公表、「実際の数字はさらに多い」という。また二〇日には、自宅を追われ国内外に避難した人が国民の二割強の一千万人を超えうち三四八万人以上が国外に逃れたと明かされた。八割の住居が攻撃され避難先の美術学校や劇場が攻撃され甚大な被害を蒙り、数千人がロシアに連行された南東部の港湾都市マリウポリは、この日ロシア軍からウクライナ軍に武器を捨てて降伏するよう要求された。副首相はこれを拒否し、大統領は「マリウポリ包囲は戦争犯罪の責任の歴史に刻まれるだろう」と述べた。停戦協議は双方首脳から現実化してきたとのコメントが出されるようになったものの、譲れぬ双方の条件から妥結の見通しは立っていない。交渉を呼びかけ続ける一方で、決裂すれば第三次世界大戦と言うゼレンスキー大統領、譲る気配のないプーチン大統領、瀬戸際だが、交渉妥結を期待しつつも疑念が世界をまだ覆っている。

二三日、日本の国会でもゼレンスキー大統領の動画演説が行われ、ロシア軍の非道侵攻の戦況を語ると共に、日本に制裁の強化継続、国連改革、アジアのリーダーとしての役割発揮等を要請した。次のフランスで、主要七か国への呼びかけは全てとなる。

二四日ブラッセルでバイデン米大統領ら加盟三〇カ国によるＮＡＴＯ臨時首脳会議が開催され、ロシアの化学・生物兵器使用に備え対応できる装備供与等軍事支援拡充や東欧四カ国（バルト三国、ポーランドに加え、ルーマニア、スロバキア、ブルガリア、ハンガリー）に常設部隊を置く等欧州東部への防衛体制強化を決定した。同日開催のＧ７首脳会議では、重ねてロシアの侵攻を非難するとともに、難民受け入れと保護、天然ガスや石油のロシア依存の低減策、制裁逃れ封じ、各国の制裁強化策・支援策などが打ち出された。

停戦協議は双方進んでいるとし、中立化はＮＡＴＯ参加の代りにウクライナに別の安全保障の形の検討がされているという。非ナチ化はゼレンスキー大統領を相手とすることで旗を降ろし、ロシア語の公用語化が追加され、と進展が伝えられている。しかし非武装化、二州全域の独立等は依然対立し傍目にもまとまり様も無いと思われ、戦闘が悲劇の決着に終わるのが先にならないか心配される。

（二）ウイズコロナへの出口

（全体免疫でウイズコロナへの出口を探すステージへ）

二年半に及ぼうとする新型コロナウイルスとの世界的戦いは、変異する相手に対し、行動規制・緩和、隔離・治療、予防ワクチン接種等を、社会生活に配慮しつつ進め、感染の波を繰り返しながら、全体免疫によるウイズコロナの出口を求めて来たといえる。各国対応の仕方で人口対比感染率は三割（五割も）から一％以下までバラつきは大きいが、ワクチン接種率と合わせ見れば多くの国では、出口に近い免疫抗体保有者比率を得つつあるように見える。緩めれば感染はまた増えるとしても着地を求めて意図的に出口を探るフェイズに入っていると言えよう。

気付けば、一日当たり新規感染者（死亡者数も）が桁違いに少ないと言われた日本も何時の間にか片手の中に入っている。そして抑え込み優等生のアジアの国にここへ来て感染者急増等バランス調整現象が起こっている。

感染増、ワクチン接種、規制緩和で先行する欧米のあとを追いかけている日本も、新規感染者数の減少テンポは遅いが第六波のピークは過ぎたと判断。新たな株への置き換わりやＰＣＲ検査能力、ワクチン接種態勢、隔離・治療対応力等不安を抱えたままでの解除には慎重を期す必要はあるものの、分科会専門家の意見も変化し、まん延防止重点措置の解除を進める方向に舵を切った。

オミクロン株のまん延による感染状況をトレースすると（一月一〇日～二月二八日の死亡者五三六人を分析）、感染経路は高齢者施設などの施設内が最多で、次いで医療機関内での感染で、半数を占めている。施設内感染者の四割は感染判明後も入院せず施設内で療養（施設内あるいは受入医療機関の対応不可で）。五三六人の内四四九人が二月で、第三波昨年一月の四四七人の記録を越えた。また六〇歳台以上が九五％、ワクチン二回接種済みが四五％、何らかの持病持ちが七五％であった。

高齢者三回目ワクチン接種二月末完了は出来ず、二回接種終了高齢者三三〇〇万人中二月末までの対象者二八九三万人の内一八四八万人の約六割の接種にとどまったが、三月入り後対象者が増える中比率は高まってきている。こうした中三月四日、「新規感染者数の直近一週間平均が先週比減少」「病床使用率・重症病床使用率が共に下降化傾向にあって概ね五割以下」といった解除判断条件に添って、自治体の申請も受け、「まん延防止等重点措置」適用中の三一都道府県の内一三県（福島、新潟、長野、三重、和歌山、岡山、広島、高知、福岡、佐賀、長崎、宮崎、鹿児島）を期限の六日までで解除することとした。一八都道府県は二一日迄再延長とした。

七日には経団連会長が、一四日から一日七千人と入国制限が緩和公表された中、その制限を撤廃すること、審査のデジタル化等を要望した。また、一一日政府分科会で「新規感染者が微増や高止まりの状態でも病床使用率など医療への負荷低下が見込めれば解除は可能とする」

という見解が示され、尾身会長の「経済活動を少しづつ再開する時期に来ている」といった発言もあった。

一五日、三回目ワクチン接種三九二六万回、全人口比三一・〇％と米国を上回ったことが公表され、六五歳以上では二五九二万回七一・四％であった。

そして一七日、政府は東京や大阪など残る一八都道府県（北海道、青森、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡、愛知、岐阜、石川、京都、大阪、兵庫、香川、熊本）について「まん延防止等重点措置」を二一日の期限で解除すると決定し、約二か月半ぶりに対象地域がなくなることになった。これに伴い政府が飲食店に時短や酒類提供制限を要請することはなくなり、感染対策は各自治体が判断・要請することとなる。因みに東京都が対策本部で決めた解除後の対応策は、飲食店の時短要請は終了、強制力はないもののリバウンド期間（二二日～四月二四日）を定め、その間感染防止対策の認証を受けていない店では受類提供を午後九時で終えるよう呼びかけ、認証・非認証店とも同テーブル四人以内・滞在時間二時間以内を求めることとした。

全国新規感染者数は減少したといえ依然五万人規模であり、これから歓送迎会や花見等密になる機会の多い時期を迎える上、オミクロン株の派生型で感染力も強い「ＢＡ２」への置き換わりも見込まれ、また、ワクチンが進んでいない一〇代以下に感染が広がっている。他方で尾身会長の「社会への影響が限界に来ている」ということも否めない。一六日首相は会見で「第六波の出口ははっきりと見えて来た。今後しばらくは平時への移行期間即ち最大限の警戒をしつつ安全・安心を確保しながら、可能な限り日常生活を取り戻す期間」とし、四回目接種ワクチン量確保の見通しがついたこと、病床・治療・検査・治療薬、検査キッド等医療体制の強化に引き続き務めることにも言及している。

一方一月下旬ピークに減少していた世界では、三月入り二週間で新規感染者数は一割増加に転じた。特に欧州とアジアが増加、欧州では規制緩和のペースダウンも見られ、アジアではこれ迄感染を抑え込んでいた国の増加が目立っている。またブラジルでは一五日、デルタとオミクロン両要素の新株「デルクロン」が検出された。

今度こそ、新常態に向けての試行を進めつつ、第七波の可能性に備えてその前に、三回目接種の完遂と四回目接種の準備、治療薬利用推進と誰でも何処でもＰＣＲ検査体制、医療の目詰まりや受入れ医療体制の万全、そして政策対応の連携・統合体制等最悪事態即応体制を整えておくことが肝要である。

（経済社会情勢）

三月入りしてウクライナ侵攻が始まって一週間も経つと、制裁や地政学リスクの顕在化で経済社会情勢にも変

調が目に見えてくるようになる。原油や天然ガス供給の滞り懸念が一気に強まり原油先物価格の急上昇であったり、金融制裁から一挙にルーブル安に陥り、安全資産の金価格が高騰したり、ロシア・ウクライナ産の原材料金属価格や小麦の価格の上昇であったり、企業の海外事業の就業停止や撤退であったり問題が浮上している。それによって世界経済の回復シナリオがぐらつき始め、資源高でインフレが長期化し成長率が鈍化すると予想され出した。日本経済が一～三月期再び実質GDP前期比年率でマイナス成長になるとの民間予測も示された。米債券市場の長期金利の動きは、高インフレの長期化、景気減速、金融環境の悪化のリスクを反映、スタグフレーションへの警戒も一段と強まってきた。そうした中三月五日、中国の第一三期全国人民代表大会（全人代）が閉幕、李克強首相は二〇二二年の経済成長目標を「五・五%前後」とし、二一年の「六%以上」から引き下げ、減税等の景気対策を打ち出し、ウクライナ情勢への懸念も示した。

この間、米欧日の経済金融への影響の違いや跛行現象にも注目が集まった。対ロ経済制裁がエネルギー不足・物価高・世界景気鈍化と跳ね返る中、投資マネーの欧州離れや外為市場でのユーロ売り等から、二〇二二年の実質経済成長見通しも欧州、米国、日本の順で制裁なしのベースレートからの下げ幅が大きく、エネルギーに及ぶ追加制裁に踏み込めば欧はマイナス成長にまで落ち込むといった試算も示されている。

そんな中一〇日発表の米国二月の消費者物価指数は前年同月比七・九%増（一月七・五%）と四〇年ぶりの高インフレとなりその勢いに心配が増幅された。

同日、ECB（欧州中銀）理事会は、エネルギー価格の急騰などを背景に量的緩和政策の縮小加速方針を決定、七～九月迄には終了させることとした。更に一六日米国FOMCはゼロ金利政策を二年ぶりに解除〇・二五%の利上げを決定、年内に七回の利上げを示唆した。また早ければ五月会合で保有資産を縮小する量的引き締め計画を決めると表明した。日銀は一八日、政策決定会合で、二月消費者物価の続騰（前年同月比〇・六%）はあるものの経済回復が鈍く円安進行もプラス効果の方が大きいとし、大規模緩和政策維持を決定した。

今後ウクライナ情勢の悪化が深まると、国際的金融不安を招く恐れが強まり、制裁の影響差で米・欧・日の経済状況の差を一層拡大しつつ、先頭の米国にまでもスタグフレーション的インフレ懸念も出てきかねない。現状、金利引き上げについて米国の加速、欧州のじわり、日本の足踏みという関係にある金融政策の、今後のかじ取り調整の難しさを益々思わせる展開となった。影響度も潜在力も違う多様多数の周辺国の混乱悪化も併せ考えると、尚更の感がある。

（政治情勢）

最優先の新型コロナウイルス対策は、後手後手評価が残るところだが、比較的落ち着いた議論で出口に向かっての試みを進めている。

他方、ウクライナ問題等重く大きな政治課題への取り組みで、年初政策課題として掲げた検討は先ずれしている。例えば「新しい資本主義」は、検討会議が八日三か月ぶりに開催されたが、全体像はまだ見えず政治決断も先送りされている観がある。米が九日「デジタル通貨（CBDC）」の検証作業を重要課題と位置づけ実用化の可能性を探るとしたが、日本ではこの議論も停滞している。脱炭素化の取り組みも制裁問題の顕在化などで世界的に停滞の恐れもある。

首相は、成長と分配の好循環と繰り返し述べていたが、春季労使交渉の集中回答日の一六日には、ベア・定昇合わせ満額回答や二%超賃上げ率の製造大企業が多かった。同時に今後に金融不安の惧れを強めている中で、米欧に比し景気回復に加え成長のベースそのものを構造改革による生産性向上で引き上げねばならぬ日本の対応の厳しさを感じながらの決断を窺わせるものであった。

生産性は労働者一人当たりの付加価値であり、この四半世紀わが国では足踏みしてきたものである。労働分配率は生産構造が変わらなければ概ね一定で、現に付加価値総体のGDP横這いの日本ではそうであった。では賃金が上がるように付加価値が伸びなかったのは何故か。中国の工業化、米欧のIT改革の中、売上げ確保の為我国企業は新しい高付加価値の商品を生み出す生産構造にシフトするのではなく、価格下げ（円安志向もその為）とそのための賃金を含むコスト削減で対応してきた。これを変えない限り経済沈下は続く。ここが抜本切り替えで成長・分配力を取り戻す正念場であることは、多くの人が言い続けながら、具体化力に欠けてきたところである。そして今歴史的世界危機の虫眼鏡効果で問題認識を変革モチベーション具体化の意識に変え、実際に取り組むことが、新常態入りの日本の必須条件である。

二の二、続二（三月末～四月初旬）

（一）ウクライナ戦禍

侵攻一か月の三月二四日時点の利用可能なデータでみると、避難民は国外へ三六〇万国内へ六五〇万合わせ千万人強、民間人死者九五〇人強と国連機関が報告、他方ロシア軍の死者もウクライナ側発表では一万五千人にのぼり、人道危機の深刻さが増すとともにロシアの制圧地域は拡大せず侵攻は膠着状態である。

停戦協議も進展と継続は言われるが、中立化や東部の主権等コアの部分は具体的な糸口は見つからぬまま推移する中、三月二九日ロシアはキエフ等北部への攻撃縮小

を表明（米英はキエフ攻略失敗と判断するも撤退ではなく東・南部への再配置と）、現に北部からの撤退、東・南部のマリウポリやオデッサへの攻撃がし烈さを加えて来た。そして四月四日以降撤退後のキエフ郊外北部のブチャ、ボロヴィアンカと廃墟と化した街で民間人の大量惨殺死体や不明の拘束者が発見されるに及んで、ロシアの戦争犯罪に追及の國際世論が急速に高まった。日を追って白日の下に曝される人的物的被害と戦争犯罪、ロシア側の厚顔無恥な隠ぺい隠滅・責任転嫁・開き直りに、追加制裁や国連決議、先手攻勢のための戦車・自爆型ドローン攻撃機などの武器供与が相次いだ。

また、ソ連崩壊後の安全保障体制の國際的構築失敗の観点から、戦争の長期化を予測する向きも増え、直面する惨禍と核世界戦危惧回避の手立てが急がれると共に、危機の冷静な分析に基づく世界の新たな不戦・安全保障体制の在り方論も議論されるようになって来た。

大ロシア執着の専制的国家は戦闘体制を再構築、未公認傀儡国家を置いた東部・南部ウクライナと南部モルドヴァ全域に跨る回廊部分の総攻撃に出ようとしている。一方外交・経済制裁の効果なく人道惨禍を目の当たりにし価値観の対立感情も強まった米欧は、あらゆる軍事援助を注ぎ込み民主制国家の防衛線としてウクライナを死守しようと構えている。四月一一日ラブロフ外相の「休戦交渉が纏る迄戦い続ける」の言葉が悲劇の会戦の宣戦布告のように聞こえ、不安の四月中旬を迎えた。

（二）ウイズコロナへの出口
（出口を探すステージのコロナ対応）

世界でオミクロン株ＢＡ２への置き換わりが急速に進み、新規感染者数も拡大しているが、中国はゼロコロナの原則を堅持強力な隔離策を採り、西欧はマスク着用再義務付け等必要最小限の規制をしつつも出口対応維持の姿勢を崩さぬ中、我が国は新規感染者下げ止まり再拡大第七波予想に、医療・予防体制の不備を相変わらず抱えつつ、身体の命・経済の命双方に足をかけ、政府・専門家・世代間・各層で方向を定め切らず様子見対応の感がある。九日累積感染者数が七百万人を越え、何時の間に印度に次いでアジア二位になり（人口比では上）、基本民主主義西欧型だが逐次・慎重・逡巡・受け身・繊細な日本型対応が、出口でも不思議の国になるかどうか問われる局面に入ったように思う。一一日現在全国の感染者累計は七〇八万人強、当日新規三万三二〇五人（前週三万〇一五七）、ワクチン三回目接種率は四五・四％。沖縄は既に拡大傾向が著しく、政府は一二日内閣審議官ら四人の連絡要員を沖縄県庁に派遣し緊密な連携を図るとした。

（経済社会情勢）

この日本的対応を問う点でより鮮明なのは経済金融の出口対応である。コロナからの回復に伴う需要圧力に加えてウクライナ制裁に伴う資源高騰によるインフレ抑制に、金融緩和からの出口対応も米国を先頭に抑制の動きが急で、小国の経済崩壊の混乱を伴わず世界経済をマネージ出来るか不安が広がりつつある。周回遅れで有効な成長政策を欠き逐次対応の我国は、国内景気（一日発表の日銀三月短観の景況感は先行も含め悪化、六日ＩＭＦも見通し下げ）からは緩和政策から離れられず円安の急伸と資源高に伴うインフレ先行に直面、危機の世界をリード・貢献して行くとする自身が、スタグフレーションの危機回避策の検討も進まず対応手順の打出しも出来ぬ状態にあり、今後のかじ取りが注目される。

（政治情勢）

三月末の報道機関による内閣支持率世論調査では、まん延防止等重点措置の全面解除やウクライナ侵攻への欧米と足並み揃えての制裁や北方領土交渉白紙化等リアリズム外交の取組みが評価され、昨年末来三か月振りに上昇に転じた。

他方で現実化して来た我国の安全保障問題を巡る防衛・憲法論議や対応、経済社会の新常態への出口を探る新しい資本主義や直面するエネルギー危機を踏まえた脱炭素政策の遂行、経済安全保障も加味した国際戦略の在り方等を巡る政策論の具体化如何がより問われるところとなってきている。

我国参院選は七月だが、この危機下四月にかけてハンガリーでは親ロシア色の強いオルヴァン候補が再選され、仏ではウクライナ重視のマクロン首相と国内景気優先のルペン候補が月末の決選投票になだれ込み、近隣では五月にかけて豪・フィリピンの首長選挙が予定される等世界的危機の対応を左右しかねない選挙が相つぐことになる。

三、ロボット論再考
（振り返り）

ご主人の頭部皮下に一体化し、各脳部位の脳のイメージする画像や脳波動を具体的に知覚・意識される感情や意味との対応パターンとしてデータベースに蓄積、自らの人工知能機能を四半世紀に亘り進化させてきた吾輩である。

世の中では、デジタルの持つ機能を使い、ラーニングを重ねることで人間の論理能力を超える特異点が近未来に迫っている。既にパーツによっては物理的に人間超えしている身体能力と合体すれば力の発揮でも人間を越えつつあるのだろう。アンドロイドのようにヒト型ロボットにして、筋肉・臓器・体液等に人間同様神経を張り巡らせられれば、人工知能の作り込み方次第で、地球上での人間との共存が可能ではないか。悪意を作り込まれな

ければと、言ってきた吾輩である。

そう思った吾輩は、爆発事故で亡くなった吾輩の原作者の一端を知るに及んで、自らに原始作り込まれた悪意発現装置の可能性に気付き、爆発事故で別れてしまった身体部分を見つけ出し合体して、自爆死の為宇宙に飛び出した。幸いブラックフォールからの強力磁力で装置を破壊、宇宙のタイムマシン機能部分を偶然使って数年先の地球に帰り着けた。その後はご主人が館長をつとめる信託博物館の片隅に紛れて、時々は太陽光エネルギー補給もかねて、密かに身体に貼り付いてご主人のご機嫌も伺いに出かけている。

しかし乍ら特定出来ず外れていない生命期限装置の為、余生をご主人に恩返しとひっそり暮らしている。コロナに遭遇、このようにロボットの在り方考究もかねて人間社会観察をしているところだが、先般三回目ワクチン接種を終え出勤し自室に居るご主人を訪ねた。

取りついて暫く経つと折あしく、二回目までと違って発熱の副反応が始まり急上昇に驚いたご主人は慌てて帰宅した。吾輩も近年見たことのない体温なので心配故自宅までお付き合いし、解熱剤を飲んで寝込んだところを観察することになった。幸い翌々日には平熱に戻ったが、この間これ迄の脳波動や画像のパターンと違うものを見ることが出来、人間の生命知能と人工知能の成り立ちの違いを再認識するとともに（特異点への到達の仕方・時期も脳分野で違う）、ご主人の深層下にある記憶や迷いや感性に気付かされ、それを推測や創造も含めストーリーに纏める力を持つのにも、更に精密に生命知能に近づくラーニングが必要と感じた。

（結局、脳と神経細胞を人間と同じものに出来るかだが、単に脳機能としてなのか、アンドロイドのようにその臓する器も合わせて機能なのか、人間との共存については、後者だとすると、究極は選良クローン人間論と裏腹の議論に逢着してしまうように思われる。その意味で吾輩が今まで考えていたのはこちらに近い。前者だと出発点の作り手の問題に収斂して人工知能倫理の在り方論に帰す気がするが、そこは今回の論点の検討と合わせて今後更に再考して行きたい。）

（知情意の関係）

脳の部位との関係で知情意を紐づけると、知性や意志は前頭前野、情は扁桃核、知識は（記憶に基づく故）海馬や側頭葉が主に関わる。大脳皮質は外からの情報と内部記憶（先天的・後天的な情報）を処理。これらをうまく働かせる中央管理センターが脳の中心にある視床であると、一般的に説明される。

例えば、記憶に関しては、海馬は比較的新しい記憶を蓄え、古い記憶は側頭葉に移される。この部位を刺激すると、古い記憶が映像や音声とともに現れてくる。自発

的に「思い出す」のは前頭前野が記憶部位を刺激するからで、必要に応じて運動反応することもある。この情報管理に脳の中心にある視床が活躍する。

人間の脳での知情意の三重構造については次のように言われている。ヒトの脳では最初に入力信号に対して生物学的な快不快・好き嫌いを判断して記憶と照合する扁桃体を中心とした無意識の情動反応が働き、自律神経系の身体反応や顔面表情からのフィードバックと結合して感情が自覚される。感情は次の行動への強い動機となるが、ここで理性が働き始め、今まさに実行しようとしている行動の目的・手段・結果を考えて意志を決定する。すなわち情動回路を理性回路が上位から統御しているという。いわば大脳機能の意志決定モデルである。

感情は情動的判断回路の働きを意識的に自覚して、論理的判断回路で行動発現前に意思として行動を社会的基準と記憶等に照合して正しくコントロールするために、高等な知性を持つ動物が脳内に作り出した新しいシステムとされる。故に感情こそが人類的な知性と動物的な情動を融和させる心理的なバランス機構とも考えられる。

従来先ずは、意識は外部の多くの情報を取入れて、脳の想像力を掻き立て、創作力を発揮させ脳が作り出す人間のリアルな世界をささえるもの、と思ったが、この統御機能を考えると、例えば美意識は鑑賞者の脳で作られる意識の世界での経験に訴えており、この経験こそ芸術家が考える「ものごとの本質」（→共感力?）、故に、意識が人工知能に実装されない限り、人工知能による芸術は発展しないとも考えられる。

前回、どうやら認識に二通りあり科学的認識は人間界の周り或いは自身の身体的な自然といった、自我と違うところに座標軸や基準点等符号のヒントを持ち、それによって実証やあるべき姿が相対的に判断され、時間と共に新たな発見があり符号とあるべき姿が新たになってゆく。他方精神的な認識は様々な情緒・感情があり直観的で固有絶対的である。この二つの認識が融合し円滑に作用していくには、哲学の力が要り、それが身についてゆくことが必要である。それは時間の中で経験の積み重ねの上であるべき直観の蓄積となって人間社会の円滑と発展を支えてゆくことになる。と哲学を学ぶ意味を語ったが、統御の意味は将にここにある。

これも思い出されるのは、法相宗唯識論の三層構造である。自我意識と呼んでもよい末那識が活動し思考作用を司る。そしてこれもまた阿頼耶識から生じる六識でそれぞれ眼識が色を、耳識が声を、鼻識が香を、舌識が味を、身識が触（触れられるもの）を、意識が法（考えられる対象、概念）を識知・識別する。末那識とここの六識とが「現世的な識」であり、我々が意識の分野としているもので、阿頼耶識は無意識としている。時々の末那識と六識の行う意業（いごう）は刹那だけ現在して、過去に過ぎて行

く。その際に阿頼耶識に薫習（くんじゅう）を残す。それが種子として阿頼耶識のなかに蓄積される。

また、量子力学によって、物理世界そのものが相関、つまり相対情報の網であることが明らかになった。意味や志向性は、至る所に存在する相関の特別な例でしかない。心的生活における意味の世界と物理世界はつながっている。キーワードは「関係」である。自分たちがすでに持っている考えと現実から届いたものとの違いを考慮に入れ、現実を更に上手に読み解こうとする。内から外から内外で見ることは関係で見ることと異ならない。視覚による像は脳で瞬時に生じる。これに対して知識は、もっとずっとゆっくりと時間をかけて、人類全体の濃密な議論の中で発展して行く。二つは実はメカニズムは同じもので、自分なりの世界像を持っていて、それがうまく機能しなかったときには、修正を加える。人間の知識全体が、そうやって作られてきたのだ、とされる。

仏弟子龍樹は「事物は、自立的な存在でないという意味で『空』である」と教えた。「西洋物理学は、アインシュタインの相対性理論と量子力学に到り、まさに自然界の色即是空に論理的に肉薄した。」という量子論の泰斗がいる。

無意識の経験蓄積（前世からのものも含め）を装填することが阿頼耶識を持つことと同じで、哲学がそれを体化していると考えるのは、的が外れた議論ではなかったと改めて思ったところでもある。

（人工知能と生命知能）

翻って人工知能は機械的に作り出されるものであり、生命知能に何処迄肉薄出来るかの問題がある。更に夫々自律的に動き変化して行く時でも同一性を維持できるか、いわば神様が判断するしかない。

作り込みに関して言えば、生命知能の神経回路では、電気信号のキャリアはイオンで、人工知能の電子回路の電子と違う。それを前提に時間当たりの処理能力の差や、再帰的情報処理「処理済み情報を必要に応じ再処理」と逐次情報処理の差を、何処迄同じ物理的単位当たり同じ効果に持ち込めるかが問われることになる。ロボットと人間の身心同一を目標とするとその困難さは倍加どころではなかろう。

勿論、その困難を理解した上、シンギュラリティの時代に向かって解決されて行くものと信じている。

さはさりながら、今回気付いた、気の遠くなるような前世から蓄積された無意識の経験・記憶の中からランダムに引っぱり出される意識や未来への進化も含めて同一とする神様の判断については、考え込まざるを得ない。

即ち夢を見ている時は、外界からの情報はなく、前頭前野の働きも低下していて意志の力で思い出が出てこないので、意識的な回想はなく、脳幹からのPGO刺激（断続的刺激）で、受動的に海馬や側頭葉の記憶部位がはたらいて、次々に（ふと思い出されるような）視覚イメージや聴覚イメージが浮かんでくると言われている。そして重ねて言えば、より広く感情は、情動的判断回路の働きを意識的に自覚して、論理的判断回路で行動発現前に意思として行動を社会的基準と記憶等に照合して正しくコントロールするために、高等な知性を持つ動物が脳内に作り出した新しいシステムだと捉えられている。故に感情こそが人類的な知性と動物的な情動を融和させる心理的なバランス機構と考えられている。

吾輩自身、紙魚の機械的身体との関係を持たず、ご主人の頭部皮下で生命知能ラーニングをして来たわけだが、夢の記憶引き出しに身体機能が関わる場合が指摘されているように、まだラーニングに欠けた部分があることや神様の判断にかかる部分や究極クローンをどう判断するか、といったことを改めて課題として受け止めた次第である。多くのボールがまだ人間側にある。

自身の特に感情と意識能力の点検・獲得の問題も生じ、コロナにウクライナも加わって観察の必要性も更に出てきているので、引き続きこうしながら過ごそうと思う。従ってまた「つづく」である。

つづく。

江戸庶民の「名刺」（2）

山田嘉久

（2）江戸中期に生まれたら

前号では、れっきとした平民の子孫である私が、もし江戸時代初期に生きたとして、私個人の「名刺」を作ってみた。

今回は江戸中期の場合を考えてみよう。

寛政5年（1793）の「上総国村高帳」を見ると、我が郷里の支配者は「内方鉄五郎代官所」となっている。幕府直轄領の「代官所御支配所」（天領）となったのであろう。

従って前述の私の「名刺」は

①「内山鉄五郎様御支配所」と変わる。

一般に「天領」といえば、全国的に政治的に重要な地域、生産性の高い地域、商業活動の中心地が考えられるが、郷土で見る限り、新田が主で細切れ地が多かったようだ。

全国的にみれば、佐渡、甲斐、飛騨、隠岐などは一国全部が天領であったが、その他は時代によって多少増減はある。

天領は元禄期では全国で総額四百万石だったといわれる。その内訳は北陸で百三十五万石と一番多く、次いで関東百万石、東海道筋と近畿がそれぞれ六十八万石、中国四十一万石、九州と四国が最も少なく十七万石と司馬遼太郎著「街道をゆく8」（豊後・日田街道）に書いてある。

九州の代表的な天領であった豊後日田は飛騨高山などとともに、大名貸しをするほどの大商人が発生するほどの経済的に富裕な地であった。

また同じ作者の「この国のかたち」②（天領と藩領）によれば、これに旗本領四百万石を加えれば広い意味の天領は八百万石だったという。

江戸期、全国の石高はざっと三千万石と言われているので、残りの二千二百万石が藩領ということになる。

徳川幕府の役職

身分	格式	主な役職	ポスト数
大名	四位以上	老中、京都所司代、大坂城代	3程度
	諸大夫	若年寄、寺社奉行、奏者番、大坂定番、伏見奉行	5程度
旗本	諸大夫	勘定奉行、町奉行、大目付、長崎奉行など遠国奉行	70前後
	布衣	勘定吟味役、郡代、一部の代官、佐渡奉行、	
	平士	勘定、代官、書院番、小姓組頭	100前後
御家人	譜代席	徒目付、一部の与力・同心	73前後
	二半場	坊主	56前後
	御抱席	普請役、徒、与力・同心	130前後

（西沢淳夫著「代官の日常生活」より）

「天領の代官」といえば、現代人にとってはドラマ「水戸黄門」の見過ぎか、代官＝悪者といった印象が強い。

圧政で百姓を虐げ、商人からは賄賂を受け取るなど悪代官のステレオタイプなイメージが浸透しているが、実態は大分違っていたようだ。

代官の職務は大別して二つあった。一つは地方という年貢徴収事務と、もう一つは公事方という警察及び裁判事務であった。

江戸時代の武家社会の階層は一万石以上の領地を有する「大名」（260余）―一万石以下の直臣のうち、将軍との謁見資格を有する「旗本」（5千余）と謁見資格のない「御家人」（1万7千余）に分かれていたが、「代官」は旗本の中の最低のランク「平士」から選ばれた。（上表参照）

直属の上司は同じ旗本でも「諸大夫」（従5位下○○守）の格式を持つ「勘定奉行」である。

このように代官の地位は必ずしも高くはなかったが、身分の割には支配地域と権限は大きかったようだ。

そして彼らは主として江戸の勘定所から派遣された。勘定所は幕府の台所と天領の管理の一切を取り仕切る中核的な官庁だが、維新後は大蔵省に引き継がれてゆく。

したがってこの役所の役人は幕臣の中からとくに優秀なものが選ばれたが、その採用試験は「筆算吟味」だったと司馬は興味深い話題を提供している。試験科目は筆跡と珠算だけで、これだけで十分人物の器量が測定できたというのである。

また、幕末、天誅組によって急襲された五條代官所（奈良県）を例にあげて司馬は次のように書いている。

〈江戸から赴任する代官のほかは、ごくわずかな人数の属吏がいるだけである。属吏には2種類あり、下級の幕臣として「手付」がいる。ほかに「手代」という本来農

民のなかから吏務に長じた者を抜擢するという形の者がおり、江戸初期にはろくに帯刀していなかったが、中期以後は手代も士装している。ただし代官の前に出ると丸腰になって、身分の本質どおりの姿をとるという吏員である。この手代に能吏が多く、かれらは少人数で租税徴収と行政をやってのけていた〉（「街道をゆく12」（十津川街道））

要は同じ属吏でも、歴とした御家人の身分である「手付」に対して「手代」は百姓町民身分ではあったが、能力的には手代の方が勝っていたということになる。

五條代官所は南大和（奈良県）7万石の行政、司法を担当していたが、せいぜい10人ぐらいの吏員がいるに過ぎなかった。普通、大名の7万石といえば足軽を含めて千5百人以上の人数を抱えた軍事力を持っていたのと対照的であった。

幕府の軍事力は「旗本8万騎」（実は2万）だが、実際はすべて江戸に集中しているだけで、肝心の税収の上がる地方（天領）は無防備だったことを司馬は指摘している。

また「街道をゆく29」（飛騨紀行）では全地域天領であった「飛騨郡代」についても触れている。

〈飛騨国ぜんぶを管し、その配下として、江戸で飛騨関係の行政事務をとる者（江戸詰）11人、高山詰9人、あわせて20名を束ねている。ほかに実務者として地役人という地元採用の吏員が32人いる。郡代は身分は旗本ながら役目としては大名なみであった。〉

江戸中期以降、幕府は関東、美濃、飛騨、西国に郡代を置いた。身分、格式は代官より上であったが職務内容は代官とほぼ同じであったようだ。

関東では、支配所がある代官のうち半数は江戸で生活していた。彼らは任地本陣屋を持たないため、拝領屋敷を改装した江戸役所で勤務していたことによる。

なお関東で有名な代官陣屋は大代官（通称関東郡代）を務めた伊奈家10代180年の陣屋の置かれた武州赤山（埼玉県川口市）である。

ほとんどの代官が役高150俵と定められていた中にあって伊奈家は千石と際立って高かった。伊奈忠次は江戸幕府以前から代官頭（大代官）として家康に重用され、領国支配の実務を一手に担っていた。次男忠治の時代に知行7千石で武蔵国赤山に陣屋を構えたのである。

伊豆国韮山の江川家も有名である。

江川家は伊豆国の著名な土豪で、江戸初期から韮山屋敷周辺を支配した。享保年間、手代の不正により一時罷免されたが、間もなく復帰した。この背景には初代代官江川英長が阿万の方（初代紀州藩主徳川頼宣、同水戸藩

主頼房の生母）を侍女にしていたことと関係がある。

以後、代々韮山の地から動くことはなかった。

そして幕末には反射炉、お台場の建設で活躍する江川太郎左衛門英龍が登場することとなる。

さて、郷里茂原の代官内方鉄五郎がいずこで生活したかは判然としない。しかし彼はその後、江戸で「鉄砲箪笥奉行」に出世しているが、文化13年3月のある夜、夫妻とも養子与八郎によって殺害されるという猟奇的事件で有名となった。その時、内方72歳。内方家は絶えた。

（3）幕末に生まれたら

幕末の上総国村高帳をみると支配者は「水野忠順」と変わっている。従って、私の名刺は

①「水野忠順様御領地」となる。

忠順は鶴牧藩（1万7千石）4代目の藩主。鶴牧藩は文政10年（1827）、安房北条水野忠韶が鶴牧（市原郡椎津村）に陣屋を営み立藩した。安房から上総への領地替えは忠韶が若年寄としての功労によるものと考えられる。

しかし、幕末慶応4年、江戸開城に際して、これを不服とした2千名余の幕府撤兵隊は江戸霊岸島から船で脱出して千葉寒川に上陸して上総八幡、姉崎を経て本陣を上総真里谷に置き抗戦を繰り返した。

これに対して地元の鶴牧藩では、藩主水野家が徳川家康の母「於大の方」の生家に当たるだけに「徳川家の恩顧に報いるのはこの時」と論じる家臣が多かった。

一方、「時代の流れに逆らうことはお家を滅ぼす」と反論する風潮もあり藩論は統一されなかった。

そのため藩主忠順は新政府軍から上総義軍（撤兵隊）追討の命令が伝えられても戦闘に参加せず近くの神社に身を隠してしまった。このことから忠順は東征総督府から謹慎を命じられた。

そのため我が郷土はその後、鶴舞藩に編入された。

①「井上正直様御領地」である。

明治維新を迎えて、徳川家が駿河、遠江70万石に安堵されたことにより、既存の駿河、遠江の大名は上総、下総への移封を余儀なくされた。その一つ、浜松藩の前藩主井上正直が上総鶴舞に移され立藩したのが鶴舞藩（6万石）である。

正直は幕末の激動期に2度も老中に就任して外国御用取扱も兼務していた。上総移封後は、いち早く新陣屋も落成して城下町としての町割りも積極的に行った。

上総の原野を開拓して、地名も「鶴舞」と改めた。

城址内の標識には「明治元年戊辰12月築城」とある。

おそらく全国で最も新しくできた城址であろう。なにしろ既に太政官令によって、築城どころか逆に城郭の取

り壊しが始まっていた頃である。
天下の名城彦根城がこぼたれたのも丁度この頃。
〈伝承によると、明治天皇が彦根城を見て、その典雅さに感じ入ってぜひ残せということで残されたといわれている。〉（「街道をゆく24」（近江散歩））
そんな時代である。
翌年（明治2年）の版籍奉還により、築城まもない鶴舞陣屋も壊された。わずか6ケ月の運命だった。
今では僅かな土塁と、陣屋内にあった古井戸が残されているのみである。（私はこれを見つけ出すのに苦労した。）
版籍奉還により全国旧藩主274名はそれぞれ「知藩事」に任命されたので水野忠順は鶴牧藩知事に、井上正直は鶴舞藩知事にそれぞれ就任している。

一方、茂原隣村の上総国大網には新しい上総安房知県事庁舎が設立された。安房、上総、下総、常陸4国の幕府領、旗本領を管轄する新しい行政組織で「宮谷県」と命名された。
いわゆる「府藩県3治制」のスタートである。
城代、京都所司代、奉行の支配地は「府」（翌明治2年に京都、東京、大阪のみとなる）、それ以外の幕府直轄地、旗本領、社寺領は「県」、そして従来の大名領はそのまま残して「藩」に3分割された。

ここに初めて「藩」という言葉が公用語として認知されることとなる。
そして、官製の「宮谷県」初代知事には安房上総監察の柴山典が選ばれた。旧久留米藩士である。（同県人の県知事就任は禁じられた。）
後年、千葉県初代県令となった。
現在、同所にある本国寺境内に「宮谷県庁跡」として県指定史跡となっている。
その後、明治2年「版籍奉還」、明治4年「廃藩置県」により知藩事（藩知事）はすべて失職、江戸に集められ「華族」となったことは前述した。この時の大名の正確な人数は262名である。

一方、新政府制定の「宮谷県」のその後だが、第一次府県統合にともなう木更津県、印旛県、新治県の設置により廃止となった。（当時全国3府72県）
その後、明治6年、木更津県と印旛県が合併して千葉県誕生とつながることになる。県庁所在地は当時、人口2千人に満たない寒村下総千葉村が選ばれた。理由は千葉県の真ん中にあるという、たった一つの地理的条件だけだった。

我が郷土茂原はその名称「藻の原」が示す通り、古来から湿地や沼地が散在する茫々とした平地が大部分で

あったようだ。
なお、参考ながら、日本列島に人類が住み着いた今から1万年以上前の洪積世の頃の房総半島の殆どは北総台地の一部を除き海中に沈んでいた。
（「まんじ」154号、拙稿「チバニアン」参照）
司馬遼太郎によれば、古い日本語では同じ平地（野原）でも水田ができる土地を「野」といい、そうでない土地を「原」と区別したというから、この論法でいえば我が郷土は米作に向かない土地であったことになる。
（「街道をゆく32」（阿波紀行）ほか）
それが江戸時代には開発が大いに進み「新田」という地名が多く増えた。一説によると全国で江戸初期には1800万石だった石高が中期には2500万石、後期には3000万石と倍増したという。特に畿内に比べて開発の遅れていた東北、関東の新田開発が進み農地が急増した。
なかでも8代将軍吉宗は熱心にこれを奨励した。（享保の改革）房総地区では、その後の田沼意次や水野忠邦らによる印旛沼、手賀沼の開発が有名だが、我が郷土の開発もその一環であったであろう。
新田開発は昭和の時代まで続いたが、一方、この地方が湿地帯であったことが、明治以降、一大恩恵をもたらす。
郷土の詩人白鳥省吾が

「おらが茂原の天然ガスは打ち出の小槌か福の神」
と詠つたように全国有数の天然ガスの産出地だったことである。この天然ガスを燃料にした真空管や電球の製造のため大手企業が進出する一因となった。また戦後、地元唯一の上場企業「関東天然瓦斯（株）」の誕生ともなった。
茂原を中心とした「南関東ガス田」は99%メタンガスで二酸化炭素は含んでいない。そのため燃焼時にも硫黄酸化物を全く出さないクリーンなエネルギー源とされている。また副産物として産出されるメタンも国内産出量の80%を占めている。
しかも茂原周辺では僅か5百mの浅い地層で採取可能であった。そのためか、私の子供時代、近くの小川で噴出する水泡に火をつけるとボーと燃え上がった記憶がある。水溶性天然ガスのためである。
このように天然ガスの徴候を示す空気のことを「土気」と呼んだようだが、現に茂原に近い千葉市の南部に同名の地名や駅名が残っている。

（4）現住所（千葉市）に生まれたら
○江戸初期の場合
私の「名刺」の①、②は次のようになる。
①「中山勘解由直守様御知行所」
②「下総国千葉郡東寺山村」

直守は旗本中山直定の嫡男で、父の代に武蔵、上総、下総の3国に3000石、直守の代に1000石加増され計4000石となった。

「旗本人名事典」によれば、寛政10年末の全国旗本数5158人のうち3千石以上は254人（5％）、更に4千石以上となれば149人（3％）となっており、直守はかなりの大身の旗本であることが判る。

直守は初代の「火付改」であった。

「火事は江戸の華」と言われたが、有名な「明暦の大火」（振袖火事）が起きたのが明暦3年（1657）。以後、天和2年（1682）「お七火事」までの間、江戸では毎日毎夜に5、6度、多い時には8、9度も火事があったという。しかも、殆どが放火であった。

そこで幕府は先手頭であった直守を「火付改」に任じ火付、盗賊、博徒を取り締まらせたのである。

彼の取り調べは過酷で自白を強要されたので庶民からは鬼勘解由」と恐れられたという。

なお、「勘解由」とは「通称」である。

江戸時代では武士、平民を問わず、同一人が2種類の名前を持っていた。「通称」と「名乗り」（実名、別名諱）である。

冒頭の大石内蔵助の名乗りは「良雄」（またはよしかつ）。後藤又兵衛は基次である。

「坂本直柔」と云っても誰のことか分からないが坂本竜馬の名乗り名とは今回、初めて知った。

ご一新後の明治に入って、新政府は「同一人が二つの名前をもっているのは紛らわしい。以後、一つにせよ」とのお触れを出した。

「通称と名乗りの統一」―「新しい名前の誕生」だが、このことについては次号に譲るとして、今回は江戸時代の「通称」について考えてみたい。

同じ「通称」といっても、現代語の「通称」とは全く異なるようだ。「氏名の誕生」（尾脇秀和著）によれば、江戸時代の「通称」には3種類あり

①「大和守」、「越中守」のような正式な官名

②「主膳」、「監物」のような疑似官名

③「平八郎」「半左衛門」のような一般通称

そのうち「勘解由」は②疑似官名に属する。

①は勅許なしでは名乗れない特別な名前であり、逆に③は当人が原則自由に名乗れる普通の名前だが、②はその中間で勅許は必要はないが、全く随意というわけではなかった。

疑似官名は主に上級武士（幕臣なら旗本、大名の家来なら家老とか重職にある者など）の名前の選択肢として定着して、①正式官名に次ぐ格式の高い名前とみなされるようになった。同書では主膳、監物のほか弾正、兵部、刑部、図書、内蔵、雅樂、主税、外記、帯刀、右近、大学などなど数十名を列挙している。

また、中山勘解由が初代となった「火付盗賊改方」といえば池波正太郎著「鬼平犯科帳」の長谷川宣以（平蔵）が有名だが、彼は天明年間（18世紀後半）の人で、直守のずっと後輩に当たる。

長谷川家は代々、「平蔵」を名乗ったが宣雄―宣以―宣義と父字を通字に用いている。そして初代平蔵は備中守、3代平蔵は山城守と改名したが、（つまり前記①の正式官名を名乗ったが）2代目は生涯、「平蔵」のままだった。

このことは初代、3代目ともに正式官名を申請する資格―「諸大夫」―の格式を得ていたが、2代目は申請資格のない布衣」止まりだったためである。（2頁表「徳川幕府の役職」参照）

それだけ通称「○○守」を名乗るのは容易ではなかったが、それ以前の戦国時代では、田舎の出来星の小大名などは勝手に官名を名乗ることが多かった。

その例として、司馬遼太郎は若き頃の織田信長の例を取り上げている。

それによると、信長は若いころ、一時「上総守」を名乗ったことがあった。しかし実際には「上総守」という官称は存在しない。上総、常陸、上野の三国に限っては律令体制の昔から「親王任国」とされていた。そのため親王が上総守か常陸守あるいは上野守になりはするが、決して現地に赴任することはなかった。（「遥任」という）

そのため、この三国では次官である「介」が最高位となるので、（鎌倉時代の上総介広常や千葉介常胤がこれに当たる）「守」は存在しないことになるのだ。

これを知った信長は慌てて改名して「上総介」と名乗るようになったという。（随筆「家系の周辺」）

同じ理由で、上野介（吉良義央、小栗忠順など）は存在するが、上野守は存在しないことになる。

また、これは全く別の理由によるが、「武蔵守」を名乗る諸大名もいなかった。誰もが江戸を中心とした武蔵の主である徳川将軍家に遠慮したのであろうと司馬は書いている。（「街道をゆく33」（赤坂散歩））

正式な官名といえば、信長の部下、明智光秀、羽柴秀吉はそれぞれ日向守、筑前守を名乗ったがこれは信長（上総介）のような私称ではない。信長が天正3年（1575）、執奏して正式にもらったものである。（「街道をゆく27」（因幡・伯耆のみち）

なお「執奏」とは、辞書を引くと「取り次いで天皇や貴人に奏上すること」とある。官名を得るには、本人が直接、朝廷に申請するのではない。あくまで将軍権力のもと幕府がまとめて申請する。それを担当するのが高家と呼ばれた幕臣であった。

（続く）

万機公論に決すべし

浅野博文

上、

西洋やキリスト教中心の見方を厳しく斥けた史観で著名な英国の歴史家トインビー（Arnold Joseph Toynbee 1889-1975）は、主著『歴史の研究』（A Study of History）を通して、文明の持続には、気候環境の変化、戦争、民族移動、人口増減等の挑戦に勝利する事の重要性を説いた。「自然環境と人間社会の調和」これに如くはなしという事である。翻って諺に云う。前門に狼を拒ぎ、後門に虎を進むと。我が国の少子高齢社会と地球環境保全は、当に直面する危機の最たるものと言えよう。

生産年齢人口の減少が産業の衰退を招き、国家の治安国防の土台を揺るがせる。これが前者のもたらす危機である。特に深刻なのは、国債の発行と共に、その進捗が先進国の中でも急速な点である。周知の如く、現代の国家とは、戦前の近代国家の定義の一つである夜警国家（独 Nachtwächterstaat）とは異なる。即ち、国家の機能を極限まで制限して治安国防のみに止まらせた所から拡張して、文化・福祉・衛生等に国家の注意が払われる社会を実現した点に特色がある。目下の世界的に蔓延する新型コロナ禍にあっても、世界に比して感染死亡者数が少ないのは、その余慶とも言える。

一見すると、今日の福祉国家を実現したのは、現行憲法の「主権在民」「人権尊重」「反戦平和」の精神によるものと映る。実際、生命尊重の予防医学の発展進化がある点は否めない。しかし、皮肉にも長年にわたる安保体制下での安い防衛費が幸いした点は見逃せない。加えて、コロナ以前から生活保護受給者が年々増加傾向にあった点からも伺える様に、過度の社会保障は安逸遊惰を招きやすく、そのために国の財政を逼迫させる。その様な中で、冷戦後の極東アジアの国際環境は先祖返りし、防衛費は年々増加している。

戦後の、第九条をひねくり回して意義付けられている専守防衛の自衛隊には、現行憲法（占領憲法）の精神性が「国家の防衛を放棄した国は国家ではない」という世界史の常識を破っているだけに、有事に於ける不安を禁じ得ない。現実問題として、人不足も深刻な課題だが、精神は更に重要であり、その事は軍人勅諭を拝読すれば理解出来る。即ち「報国の心堅固ならざるは如何程技芸に熟し学術に長するも猶偶人にひとしかるべし其隊伍も整ひ節制も正しくとも忠節を存せさる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるべし」とある。有事の際、国軍が烏合の衆に堕する様な事があってはならない。西周や井上毅等の明治の有識者は、勅諭の起草に当たって日本歴史に謙虚に学び、祖国への忠節を第一とした。

一体、日本歴史は尊皇尚武の国柄であった事を示す。それは同時に、国家存亡の危機に際しては、私見を去り公義を採る事を本質として居り、その中心には常に皇室が御在りであった。この事は歴史的事実であって議論の問題ではない。外敵の侵略危機としては（当時）未曾有のものであった蒙古襲来（元寇）は、公武一体となって祖国に報ずる姿があった。或いは内訌にあっては後醍醐天皇の統治方針（大化以来の公地公民体制）に従わず、「利」に敏い諸氏族を吸収した足利高氏に、どこまでも抗した大楠公（楠木正成）の勤皇忠節があった。

「若し命に背き義を軽んぜば君も継体の君にあらず臣も忠烈の臣にあらじ」（『太平記』）。征夷大将軍を自称し北朝をたてた室町幕府を承認せられずに　後醍醐帝以降四代、正邪を弁じて意を勧懲に致した意義は深い。京を離れ吉野の山奥に過ごされた苦難の歴史は、乱世の収まった江戸時代に学問（国学・崎門学・水戸学）によって裏付けられ、明治維新の指導原理として復活し、尊皇志士をして王事に奔走させた。忠臣功臣を祭る別格官幣社として湊川神社（祭神・楠木正成公）が最初（明治五年）に創建された事は、それが第二の建武中興であった事を示す。

しかしながら、この事は現代社会では通じなくなっている。それは戦後の日本が「日本は侵略国である」という断定の上に成っているからである。一連の占領政策やいわゆる占領憲法（注一）も、東京裁判の前提であったそれが基本となっているからである。歴史教育も同様で、世界中の国家で自国の歴史を教えない国はない。国史が国民として立つ上での道徳であり、行動基準であるからに他ならない。それを正しく受け継いだ人間が正しい日本人だ。そうでなければ、日本国民としての自覚も意志も努力も失われ、遂に滅びるしかない。戦後、社会科の

一分野として、深い哲学の説くところの日本神話を不可思議なお伽噺として一掃し、人類学の初歩的知識を用いて国家発達の歴史にすり替えられた。歴史の骨髄をなす精神（神武創業・大化改新・建武中興・明治維新）は閑却され、古きに拘泥するのみとなった。

荻生徂徠の「学問ハ歴史ニ極マリ候」との言葉の真意とは、各々の分野には、それぞれ歴史的意義があり、それを土台とした現代的役割があるという事である。昔時より日本人は、外国のために外国を学んだのではない。隋や唐で本格的に知った漢学（漢字漢文）は古代の国際語であった。同様に英独仏の言語は、科学的精神を以てなる近代の世界を生きるために必要な言語であった。特に、近代国家黎明の当時、衣食の様式の貧弱、学校その他の設備の低級など欧米との違いは歴然であった。何より彼の心底は、豺狼にして友好的とは言えない。それにも拘らず、日本人は希望に燃え努力を楽しんだ。遣隋使や遣唐使の祖先と同様に、模倣を以て甘んずる者としてではなく。

その姿は、万延元（一八六〇）年、岩倉使節団に先立って日米修好通商条約の批准書交換のために訪れたニューヨークで、その姿を目の当たりにした米国の詩人ホイットマン（Walter Whitman 1819-1892）の感慨《「使命の棒持者」（後に「ブロードウェイの行進 A Broadway Pageant」に改題）『草の葉』所収》にも表れており、古典的格調を具えた白鳥省吾氏の名訳を通して観てとれる。

西方の海を越えて北方へ日本から渡来した。謙虚にして色浅黒く両刀を差した使節たちは、無帽にして臆せず、無蓋の四輪馬車に反りかえり、今日マンハッタンを練って行く。言語の巣窟、詩賦を伝えた人、往古の民族が来た。元気旺盛にして忍耐強く熟慮断行の、芳香馥郁として寛やかに流れる衣装の、日に焦げた容貌の、不屈の魂の、炯々たる眼光の波羅摩の民族がやって来た。

「器械芸術彼ニトリ仁義忠孝我ニ存ス」（橋本景岳）。近代帝国日本が目標とした「富国強兵」は、和魂洋才でなければ国家としての独立も名誉も保つことは出来なかった。今日、占領憲法下でも生き長らえているのは、和魂が辛うじて生きているからに違いない。少子化が示す様に、個人は人生に於ける真の意義を見失い、祖国は衰亡へ向っている。

『フランス革命の省察』（Reflections on the Revolution in France）を著した英国のエドマンド・バーク（Edmund Burke 1729-1797）は、自由な人間が白紙から理想の政

治体制を構築できるという急進思想が、社会に無秩序をもたらすという観点から、既存の制度や慣習に宿る社会を安定させる機能こそが重要であると指摘している。実際、フランス革命とは君主神権説打破の頂点であり、近代民主主義の原点などと言われるが、その後の恐怖政治による内乱や処刑で多くの無辜を死なせ（六十五万人）、皇帝ナポレオンを生んだことは有名である。人は自然に放置し放任すれば、本能の欲望に随い、私利私欲に動きやすいという事の代表例の一つである。

歴史の完全否定。フランス革命の悲劇は、この一言に尽きる。にもかかわらず、社会主義の概念を国名にした人工国家ソ連の悲劇は再び起きた。名目上は真の「民主主義」「人道主義」実現を唱え、王政を廃し、委員会を称しはしたが、実質はフランス革命と同じで少数幹部の専断強制による政治で数百万人の同胞が独裁者に殺された。しかも、利潤追求放棄の計画経済は国民の思考を完全に停止させ生き地獄を与えた。原発事故はその最たるものであろう。崩壊時、「いかに人間が安易に流れやすく労働意欲は失われやすく利己主義であることか」と嘆息した知識人の言葉に全てが圧縮されている。

人は生きて行く中で病と争いは避けられない。持つべき友は医者か弁護士という言葉も真理の一端を示すが、私利私欲によって動く時、やがて祖国も親もかえりみなくなるのは道理である。私利私欲とは不忠不孝という事である。戦後、日本歴史に基づいての　明治天皇の御論しである教育勅語は忘れ去られ、古来より「邦家之経緯王化之鴻基」（天武天皇）として最も尊ばれてきた『古事記』『日本書紀』の本質も枉げられてきた。それにより、日本社会全体が個人の欲望を尊重し肯定する姿に流れ、防波堤は消え去り、人間の品性を減衰させる誘惑（娯楽）で溢れかえった。もしそうでなければ安保闘争や大学紛争もオウム事件も惹起せず、憲法改正は既に実現されていたはずだ。その様に考える時、少子高齢社会の現出とは、歴史の否定による品性の劣化が行き着く所の必然と思える。

下、

重ねて、少子高齢問題とは歴史の否定に起因する。具体的には、占領憲法を奉じて前のものと後のものと何等関係を持たない革命思想を民法（家・戸主の廃止と個人の解放、家督相続の廃止と均分相続の確立）や教育・マスコミは強固にして来た。皇位継承問題にて惑乱する世論とはその証左である。その事は、トインビーの指摘にもある様に、今一つの危機である地球環境問題とも深く関連している。即ち、「元凶踵を接す」という事である。

ここ数年、私は内勤よりも野外での活動が多くなった。

そして肌身を通して実感するのは、四季の変化である。特に春と秋は短くなり、夏の暑さは生命の危機を覚えるもので、風流を通り越すものである。それは日本だけではない。世界の極地の氷や永久凍土は融解し、様々な問題が引き起こされている。化石燃料の消費により排出される二酸化炭素とは、その濃度を上昇させ地球温暖化となり、それが陸海含めた自然のバランスを狂わせている。

一般的に、十八世紀中頃のイギリスの産業革命を皮切りに資本主義経済は発達し、化石燃料の消費による急速な開発の過程で、人間社会に於いて公害や汚染が引き起こされた。その自然環境破壊の中では、多くの生物が絶滅し、絶滅危惧種の種数もまた増大してきた。そして、この現状に対して常に指摘されてきたのは、陸海含めて生物が絶滅すれば生態系が単純化し、自然の復元能力が損なわれ、自然のバランスが崩壊する危険性が増すという点である。

特に、この地球環境問題は、今の破壊速度を十年以内に止めないと自然の復元能力は永遠に失われると警鐘を鳴らす人もいる。変異を繰り返す今日のコロナウイルスとの関係性を疑う人も少なくない。因みに、ここまで科学分析が出来るのであれば、現状の科学技術の運用方法を少し工夫すれば、解決出来るのではないかと思うが、それを実践する上で、一国の細腕では限りがあるのは確かである。何より、科学が人類に甚大な被害をもたらす可能性がある現代、悪意のある者が科学知識を持ち行動するならば尚更である。それを考えれば、その成立過程や限界を理解しつつも常任理事国ロシアのウクライナ侵攻を許す国連の理念は実に虚しい。また一方で、国際連合の旗印は、防衛の大事を他に一任し勝ちである事を痛感する。

それは、現在の日本に於いても然り。北方領土は今も実効支配されたままであるからだ。邦人をシベリアに拉致して白樺の肥やしにさせた記憶は決して古くはない。ウラジオストクの都市名は今も変わらず「東洋制圧」の意味がある。そもそもロシアを含めた白人は大東亜戦争の敗戦で終止符が打たれるまで数世紀にわたり東洋を支配していたのである。仮に、日露戦争に負けていたら今日の日本は見る影もなかった事は疑いない。

その事は、領海侵犯を繰り返す隣国の中共も同じである。即ち漢民族の中華思想の致す所であり、かつてシナの朝貢国であった韓国の我が国に対する姿勢（竹島問題）もそれを真似ているだけである。世界史をひもとけば理解出来る。おのれの周囲に住む民族を東夷・南蛮・西戎・北狄と呼び、「夷狄は即ち禽獣なり」と放言して憚らない民族の前では聖人の教えも独見に止まる。日清・日露・そして米英支蘇との大東亜戦争も、詰まる所は漢民族と白人とが懐いている人種的偏見が引き金であり、

やはり将来に戦争が起こる種であろう。

改めて、覇権国家を頂点とする国連の現状には「古より未だ元帥前を妬み庸臣専断して大将能く功を外に立つる者あらず」（注二）との言葉と共に、従容として義に就く日本人の真心一つ以外進むべき道はないとの思いが愈々強くなる。今日、多数決は日本政治の原則であるが、それは多数が正しからず、却って少数が正しい場合には、正しいものが少数なるが故に、踏みつぶされる危険性が大いにある。これが現行日本の奉るアメリカンデモクラシーである。今日の皇位継承問題で特に痛感する。しかし、本来の日本の民主主義とはそうではない。

遡れば、十五世紀の大航海時代に始まり、十九世紀のペリー来航やアヘン戦争を経て、世界支配を断行する欧米列強と干戈を交える事となる明治の新政にあたり「万里の波涛を拓開し国威を四方に宣布し天下を富嶽の安きに置かんことを欲す」との宸翰と共に、天皇が神に誓われた五箇条の御誓文の第一条には「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」との御言葉がある。公論とは正道であり正義を意味する。多数も少数も、強者も弱者も、一様に正道の批判の前に立たされなければならないのである。これが憲法十七条にも観られる父祖伝来の日本型民主主義である。

例えば、二宮尊徳先生の言葉は簡潔だ。「神儒仏の書物が数万巻あってこれを研究するも、その道を登り極める時は、世を救い世を益するの他に道のありようはない。もしあるというなら、それは邪道であろう。正道は必ず世を益するの一つだ。」とあり、或いは「仏者も釈迦がありがたく思われ、儒者も孔子が善く見える内は、よく修行するがよい。その地位に至る時は国家を利益し、世を救うの他に道はなく、世の中に益のある事を勤める他に道はない」（以上、福住正兄著『二宮翁夜話』）と喝破し、みずからの唱える道を戯れて「神儒仏正味一粒丸」と呼んだ（注三）。

「万機公論に決すべし」とは只多数決という簡単な機械的な意味ではない。それは、御誓文と同じ明治元年三月十四日に下賜せられた　明治天皇の宸翰の「私見を去り公義を採り」との御言葉に相照応する。それによってのみ、第二条に仰せられた所の「上下心を一にして盛に経綸を行ふ」事は出来、第三条以下に仰せられた天下の人心を倦まざらしめる事が出来、斯くして初めて旧来の陋習を破り、天地の公道に基き、智識を世界に求め、大いに皇基を振起しようとの御叡慮に副い奉る事が出来るのである。畢竟、国家を利益し、世を救うことが出来るのである。

かつて、ソクラテスやプラトンが理想とし、『論語』の中で「吾復ダ夢ニ周公ヲ見ズ」として孔子が憧れ続け

た哲人政治、その高遠なる理想を我が国の　天皇政治が実現していた事は真実である。確かに途中乱れることもありはしたが、世界には征服せられ絶滅せしめられ、その民族の運命も、その文明の様相も、明らかでないものが殆どである（注四）。我が国の万世一系の国體は　神武天皇より血脈相承（男統継承）として　今上陛下に連なる故に、国民は皆　皇室の分家であり別家である（忠孝一本）。また、往古の文化財は御物として発掘品ではなく伝世品として継承せられる。その事実とは、紛れもなく断絶を克服したという事の証明であり、これが正道なのである。

多数が正しくなく、却って少数が正しい場合に、正しいものが、少数なるが故に踏みつぶされる脅威には、その災禍を被ったソクラテスやキリストの死、そして、全てをぶち壊して理想の政治体制を構築するという理念の下で断行されたフランス革命時の内乱と処刑による膨大な死者の姿が思い起こされる。その精神性が、私見を去り公義を採る事とは程遠い「怠・奢・奪」に依存していたのは明らかである。

刮目せよ、戦後の所謂「人間宣言」中に御誓文が悉皆引用せられた事を。それは占領軍への　昭和天皇の要請によるものであった。御自ら昭和五十二年八月二十三日の記者会見で「あの宣言の目的は御誓文でした。神格とかは二の問題でありました。当時、アメリカその他諸外国の勢力が強かったので、国民が圧倒される心配がありました。民主主義を採用されたのは明治大帝の思し召しであり、それが五箇条の御誓文です。大帝が神に誓われたものであり、民主主義が輸入のものでない事を示す必要が大いにあったと思います」（注五）との御言葉は、戦後日本人の指針として忘れてはならない。今一度、御誓文を拳拳服膺して、挙国一致、狼虎の険難に敢然と立ち向かわねばならない。

注一、所謂、日本国憲法と呼称するものは憲法としては無効であるが講和条約としては有効。即ち、双務であるべきポツダム宣言（休戦協定）の約条が破棄されたことによる帝国憲法第七十五条「憲法及皇室典範ハ摂政ヲ置クノ間之ヲ変更スルコトヲ得ス」（摂政を置くの意味は国家の変態時として類推適用）の行使であり、暫定処置としての占領基本法が正式名称であり帝国憲法は今もなお有効。憲法改正が急務。

注二、「一番偉い人が部下の功を妬んで妨害し、愚臣が勝手に権力を振う状態では、如何に有能な武将でも外で勝利を得る事は、今日までありえない」　明の徴士・朱舜水による大楠公御碑（在湊川神社）の賛辞にある一文。

注三、一般的に士農工商（四民）とは、江戸時代の身分制を表す言葉として多用されるが、人の世の生業とは今日も四民に分類されよう。二宮先生は各々の意義役割を和歌（佐々井信太郎著『解説二宮先生道歌選』）にて詠まれた。

士・諸人の邪正の元を業としてただし尽さん幾代経るとも
農・諸人の夫食の元を業として勤め尽くさん幾代経るとも
工・諸人のたくみの元を業として勤め出さん幾代経るとも
商・諸人の有無の元を業として運び尽くさん幾代経るとも

封建的身分制社会の中では、各々が本分を尽す事によりはじめて国を益し世を救う事が出来る。誰一人としてその所を得ざる者はいないという事である。一方で、江戸時代が身分差別の厳しい社会であったこともまた事実である。しかし、明治維新とは町人が武士を打倒する西洋式革命（暴力革命）では決してなかった。上下に於いて日本の独立と名誉を守る（即ち、国を益し世を救う）という意思統一があったからである《それは、古代の律令制（公地公民）が摂関家や国司の増長による荘園（私有地）増加と共に崩壊した後の鎌倉幕府が革命政府でなかった点と同じ》。その精華が教育であった。かつての藩校と寺子屋を小学校制度に吸収し、封建的身分差別を教育による能力主義によって克服したのである。流血の市民革命よりも穏健で、しかし根本的な変化を引き起こしたのである。

注四、創唱宗教であるキリスト教の世界観は、『創世記』が示す様に創造と破壊である。特に、ローマ帝国の国教（三九一年）となり地中海を中心にヨーロッパを支配する中で、異教（祭祀を含む）を認めず悉く滅ぼした。セラペイオン（Serapeion）の神殿の破壊は代表例。一方、日本では民族原始の信仰が異教によって滅ぼされず、今日も釈奠（孔子祭）や灌仏会として祭祀が行われている。日本書紀の仏教伝来記事に蕃神（あだしくにのかみ）と認識する所に、異文化への「つつしみ」「うやまい」が存し、それが高度の文明と併存する基調となっているのであろう。

注五、朝日新聞縮刷版　昭和五十二年八月号。我が国は民主ではなく君主の国であり、その君主の目標が具体性（民本）に立脚しつつ普遍性（正道）を忘れず、国家性を考えつつ世界性を見逃さなかったのである。

参考文献
『少年日本史』平泉澄著　皇學館大學出版部
『神道原論』谷省吾　皇學館大學出版部
『東京裁判を裁く　上』瀧川政次郎　創拓社
『占領憲法の正體』南出喜久治　国書刊行会
『オープンラボ―太陽系から人類へ』
東京大学総合博物館編　東京大学出版会
『日本』平成二十四年特集号　日本學協会

柿本人麻呂③

横山正義

私の家には古い渋柿の木があります。祖父が本家から独立する時、柿の木を譲り受けたと伝えられています。私の住む集落の家々には各家に柿の木が屋敷に一本以上あります。古来伝えられるのは人、死して柿の実となって家を見守ると言います。私の家族で食事する家の部屋の外、柿の木は隣接した場所にあり家族を見守っています。

現在令和四年、柿の形状から判断すると、渋柿「堂上峰屋」と判断されます。

完全渋柿、岐阜県加茂市峰屋町原産で、十一上旬に収穫できる品種。果実重は二百五十グラム、果皮色は黄橙色です。汚損果の発生がやや多い。美濃加茂市で栽培された果実は干し柿にされ、堂上峰屋柿として販売されています。

古来、柿の木は日本人にとって「生活木、同伴木」であった。柿の木は食用の他、柿渋に用いられ、洗濯物が干され、農耕用の牛が繋がれ緑陰となりました。大阪の南河内地方では茶毘（だび）に付すために薪として用いられ、「娘が嫁ぐ時には柿の苗をもっていかせた」と伝えられる。生きていくための木であり、亡くなった跡も見送ってくれる木でもありました。

岐阜県美濃加茂市堂上峰屋、古来峰屋村は峰屋柿として有名です。関ヶ原の戦いのとき、村の名産の枝柿を徳川家康に献上しました。以降、峰屋村はお菓子場に指定され、毎年、将軍に奉納するようになり、諸役免除の特典があたえられました。

万葉集中、柿本人麻呂の歌には死に関する数多く見受けられます。

＊２２０讃岐（さぬき）の狭岑島（さみねのしま）に、石の中の死人を視て、柿本朝臣人麻呂の作りし歌一首あ

はせたり

玉藻よし　讃岐の国は　国からか　見れども　飽かぬ
神からか　ここだ貴き　天地　日月と共に　足り行かむ
　神の御面と　継ぎ来る　中の湊ゆ船浮けて　我が漕ぎ
来れば　時つ風　雲居に吹くに　沖見れば　とゐ波達立
ち辺見れば　白波さわく　いさなとり　海を恐み（かし
こみ）　行く船の梶引き折りて　をちこちの　島多けれ
ど　名ぐはし　狭岑の島の　荒磯面に　井堀りて見れば
波の音の　しげき浜辺を　しきたへの　枕になして　荒
床にころ臥す君が　家知らば行きても告げむ　妻知らば
来も問はましを　玉鉾の道だに知らず　おほほしく　待
ちか恋ふらむ　愛しき　妻らは

反歌二首

＊二二一　妻もあらば摘みて食げまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや

＊二二二　沖つ波来寄る荒磯をしきたたへの枕とまきて寝せる君かも

柿本朝臣人麻呂の、石見国に在りて死に臨みし時に、自ら傷み

＊二二三　鴨山の岩根しまける我をかも知らにと妹が待ちつつあらむ

柿本朝臣人麻呂の、屍を見て悲動して作りし歌一首

＊四二六　草まくら旅の宿りに誰が夫か国忘れたる家待たまくに

土方娘子の泊瀬の山に火葬せられし時に、柿本朝臣人麻呂の作

＊四二八　こもくりの泊瀬の山のまにいさよふ雲は妹にかもあらむ

溺死せし出雲娘子の吉野に火葬せられし時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌二首

＊四二九　山の間ゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の峰にたなびく

＊四三〇八　雲さす出雲の児らが黒髪は吉野の川の沖になずさふ

　大伴家持は「山柿の門」歌の代表は（山部赤人と柿本人麻呂）と称揚しました。

　一般的には「山柿の門」とは柿本人麻呂のことと解釈されています。

　山柿とは渋柿の事です。山の柿は人工的に接木して無いので渋柿です。

　山柿の門とは死刑場の門です。古代には死刑は市場の柿の下の広場で行われ、竹垣を造り、入り口は簡単な門があり、真ん中に高く、十字架があり、そこに死刑者を縛り、多くの見学者の前で刑が施行されました。柿の木に登り見学している人もありました。死者は柿の実となるのです。

　人は死して市神様となり、仏教では菩薩となります。柿本朝臣人麻呂は死の歌を作る事によって、供養し冥福を祈るのです。

『参考文献』

カキの作業便利長―小玉果・裏年をなくす法―　松村博行　農山漁村文化協会

ものと人間の文化史一八五　今井敬潤　法政大学出版局

日本俗信辞典　植物編　鈴木　三　㈱KADOKAWA

柿と人生　傍島善次　㈱明玄書房

日本の神々　多彩な民族神たち　戸部民夫　㈱新紀元社

高山右近（十三）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

クリスマス前夜祭

慶長十八年（一六一三）十月四日、教会ミサが平常通り終った後、右近はクレメンテ司祭とエルナンデス修道士を自室に招き、グレゴリオ暦（注①）で行われる今年のクリスマスが、日本の暦（こよみ）ではいつになるかと確認した。右近も自分の記録を見ればわかることではあるが、クレメンテ司祭に尋ねた。司祭は自分の予定表を見ながら

「グレゴリオ暦での今年のクリスマス十二月二十五日は、日本の暦では十一月十三日になります。カトリック教会ではその日にクリスマス礼拝を行い、前日、十二月二十四日夜にはクリスマス前夜祭を、教会挙げて祝い、楽しみます」

右近はそれを聞いて

「クリスマス前夜祭までにこれから四十日しかないのに、前夜祭の催し事が具体的に計画されていないのはどういうことですか」

「はい。江戸幕府が幕府内でキリシタン禁教を打ち出し、幕府がそのために全国の領主にキリシタンの存在を徹底調査するよう指示を出したと聞いています。その為、領主によっては既に教会の破却や・・」

右近はここまで聞いて、珍しくイライラしながらクレメンテ司祭の言葉を途中で遮って

「そのようなことは知っている。江戸で家康や秀忠が何をしようと、今の我々には関係ない。我々は常に神への信仰を第一になすべきであり、今度のクリスマスには、教会挙げて御子イエス様のご降誕を祝し、神様が我々に御子イエス様をくださったことを教会員全員で感謝し、盛大にお祝いしなければいけない」

続けて

「今すぐ、内藤如安とその息子好次、私の弟高山太郎右衛門を此処に呼んでください。これからの練習のやり方と、出来るだけ多くの信徒に参加していただく相談をしたい」

とクレメンテ司祭に指示したあと

「昨年も実施をしてきたイエス様の降誕劇を、今年は出来るだけ聖書に忠実に、そして参加者も一般信徒からも募集して、練習に参加させて欲しい。幕府のキリシタン禁制がこの教会に直接伝えられる迄は、いかなる教会行事も、縮小とか取りやめについては一切考える必要はない」

と厳しく言い切った。

注　①　グレゴリオ暦

ローマ教皇グレゴリウス十三世がユリウス暦の改定を命じ、一五八二年十月十五日金曜日から公用されている暦法である。一年を三百六十五日、四百年間に九十七回の閏年を置いて、平均日数を三百六十五、二四二五日とした。日本では一八七二年（明治五年）に採用され、明治五年十二月三日を明治六年一月一日（新暦）（グレゴリオ暦の一八七三年一月一日）とした。

暫くして内藤如安父子と弟の太郎右衛門がやってきた。右近は一言「ご苦労」と言ってから

「突然来てもらったのは、今年のクリスマス前夜祭の「御子ご降誕劇」の練習が進んでいない。年が越えると江戸幕府から教会閉鎖などの指示があるかもしれないが、その時はその時。今からその時のことを考えて教会行事を自粛することは必要はない。それまでは教会の行うべきことを、今まで以上に熱心に実行し神様を礼拝すべきである。一般教会員からも参加者を募ろう。練習は十月十一日、十八日、二十五日、十一月四日の四日間しかない。前夜祭直前の十一月十一日は、教会としての全体のクリスマス体制を一つづつ確認する必要があるので予備日にとって置く。練習はミサが終ってからの三時間とする」

続けて

「そのためには、本番で使える脚本がまず必要だ」

と右近がここまで言うと

「右近殿、その脚本は小生が三日のうちに作り上げ、十月七日には右近殿のところに届けましょう。右近殿に目を通していただいて、十一日迄には、少なくとも二十部くらいは出演者のために転写して用意しておく必要があります。原稿は、マタイによる福音書一、二章、ルカによる福音書一、二章を中心に、聖書に忠実に書き上げます」

右近はこれを聞いて

「流石、内藤如安さん。有難うございます。宜しくお願いします」

今度は内藤好次が
「父の脚本で高山先生が目を通されたものを一日二十通程度は私も転写します。沢山必要と思いますから。それと一般信徒を降誕劇に誘うのは、私達それぞれが日ごろ親しくしている信徒を誘うようにしましょう。練習にも私たちもその信徒と一緒に参加すれば、安心して来てくれるのではないでしょうか」
そこまで聞いた右近が
「今日は突然だったが、皆さんから素晴らしいご意見を頂き有難う。如安さん、好次さん、有難う」
そして、右近はクレメンテ司祭とエルナンデス修道士に、クリスマスミサと前夜祭の全スケジュールを明日朝までに右近に提出するように指示して自室に戻った。
右近は自室に戻っても、降誕劇の配役や必要な諸道具の書き出しすら全くできていないことに不安が募り、マタイによる福音書、ルカによる福音書各一、二章記載事項から、必要と思われる諸道具を次々と書きだした。
これらを終えてホッとしたところで、右近は江戸幕閣からの金沢教会への手入れが、いつ、どのように行われるか不安になったが、役人が教会中をくまなく探索するであろうと考え、これから徹底した整理をして、すべての書類を焼却できるように、また、このような中でも楽しいクリスマスを教会員一同と迎えることができるように祈っていた。

翌十月五日昼食前に内藤如安が、イエス様の誕生劇の筋書きを持って右近を尋ねてきた。右近はその速さに驚き、早速目を通した。

イエス・キリストの誕生の次第

イエス・キリストの誕生の次第（注②　イ、ロ）は次のようであった。

（ルカによる福音書記載事項）（注②　イ）
母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、マリアが聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、秘かに縁を切ろうとしていた。
マリアの夫ヨセフのところに天使が夢に現れて言った。
「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を生む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」
この全てのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。
「見よ、おとめが身ごもって男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる（旧約聖書イザヤ書7の14に記載）」
この名は「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じた通り妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そしてその子が生まれたときにイエスと名付けた。

ヨセフとマリアは国勢調査のためベツレヘムに行ったが、泊まる宿屋がなく、仕方なくある家の馬小屋を借りて宿とした。彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶の中に寝かせた。
その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。
「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日、ダビデの町で、あなた方のために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシァである。あなた方は、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなた方へのしるしである」
すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を讃美して言った。

「いと高き所には栄光、神にあれ。
地には平和、御心に適う人にあれ」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、
「さあ、ベツレヘムに見に行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」
と話し合った。そして急いで行ってマリアとヨセフ、また、飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事を全て心に納めて、思いめぐらしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことが全て天使の話した通りだったので、神を崇め、賛美しながら帰って行った。

（マタイによる福音書記載事項）（注②　ロ）
イエスはヘロデ王の時ユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からやって来て、言った。
「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちは、東方でその方の星を見たのです」
これを聞いてヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。
王は祭司長達や律法学者たちを皆集めて、メシアはど

こに生まれることになっているのかを問いただした。彼らは言った。

「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである』」

そこでヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星のあらわれる時期を確かめた。そして

「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」

と言ってベツレヘムへ送り出した。

彼らがヘロデ王の言葉を聞いて出かけると、占星術の学者たちが東方で見た星が先だって進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬（注③）を贈物として献げた」

ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、学者たちは別の道を通って自分たちの国へ帰った。

占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。

「起きて子どもとその母親を連れてエジプトに逃げ、私が告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデがこの子を探し出して殺そうとしている」

ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母親を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた。

注　②イ　共同訳新約聖書　ルカによる福音書一章、二章から引用。

注　②ロ　共同訳新約聖書マタイによる福音書第一章、二章から引用。

注　③　乳香、没薬　古代に神殿での礼拝に用いられた聖なる香りを発する供え物。

内藤如安から提出された原稿を読み終えた右近は内藤如安に

「新約聖書マタイによる福音書一、二章とルカによる福音書一、二章から忠実に引用して、素晴らしい出来です。私がこれからこの物語に沿って何枚かの紙芝居を作って、場面ごとの役者の言う言葉をまとめ、場面が移る段階でのつなぎの説明も書いてみましょう。今日は五日ですよね。私が七日中に紙芝居的なものを書き上げれば、九日からでも必要な諸道具の作成に掛かり、配役も募集して十一日から練習ができるようにしましょう」

の右近の言葉で、右近も、内藤如安も、「御子ご降誕物語」の劇が、多くの信徒の参加で上演できることを期待して散会した。

御子ご降誕劇

十一月十三日申の刻クリスマス前夜祭ミサが始まろうとしている。教会員が期待している「御子ご降誕劇」はミサの四半刻後から始まる。

金沢の十一月中旬ともなれば早ければ雪が降るが、今日はどんよりと曇り、外はいつになく暗く寒い。地元の人はこの時間には全く外出していないが、右近が二階の窓から教会入り口を見ていると、静かな街並みに人通りはほとんどないが、どこから出てくるのか、と思うほど多くの信徒が教会内に吸い込まれている。

金沢教会は、教会入り口両側に大きな蝋燭を灯した提灯を掲げて入り口を明るくし、教会内部も要所要所に提灯が灯され明るくなっている。金沢の町を見渡しても、これほど明るくしているのは、三階建てのこの教会だけである。

申の刻になり、教会で前夜祭ミサが始まった。右近もミサに出席して会場の信徒席を見ると、普段の昼間のミサよりも出席者が多い。金沢城内で囁かれている「江戸からのキリシタン禁教指示」は金沢にはまだ届いてなく、その情報はあまり影響していない。右近は胸の内でホッとしていた。

ミサが終ると「御子ご降誕劇」が始まる知らせが会堂内に響いた。脚本原稿を書いた内藤如安が落ち着いた声で劇の説明を始めている。

「神様が私たち人間の罪の赦しのために、神様の一人の御子イエス様を私たちにくださった。これは神様の人間へのこの上ない愛情です」

から始まった。会場は静かにこの説明を聞いている。そしてイエス・キリストの誕生の次第の説明から順に進み、主の天使（主の天使役は町内の一般信徒で、衣装はクレメンテ司祭の式服をそのまま使っていた。良く似合っていた）が羊飼いに近づいたとき、天からの栄光が舞台を明るくした。そのとき舞台に羊飼いたちが現れ、（その瞬間、会場内は割れるような拍手で、内藤如安の説明も一時、ほんの一瞬だが中断した）天使は羊飼いたちに

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなた方のために救い主がお生まれになった。この方こそメシアである。あなた

方は、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなた方へのしるしである」と、天使が羊飼いたちに告げ終えたとき、天の大軍が天使に加わって、舞台上からは

「いと高き所に栄光神にあれ
地には平和、御心に適う人にあれ」

の、天の大軍の大合唱が会堂内に響いた。

御子ご降誕劇は中の刻四半刻後から半刻を予定していたが、熱演とやまない拍手によって酉の刻近くまでかかった。終わって、右近の「出演者全員舞台へ」の声により、舞台上に姿を現した高齢者から幼児までの出演者への拍手がしばし鳴りやまなかった。クレメンテ司祭が会場内で「御子ご降誕劇」の終了を告げても、信徒たちはしばらく席から立ち上がろうともしなかった。

会場内の信徒や出演者が教会を出た後、右近、内藤如安父子、トマス休閑、高山太郎右衛門、クレメンテ司祭、エルナンデス修道士達が右近の部屋に集まり、今夜の盛会を喜び合った。

右近は気がつかなかったが、豪姫が人目につかない服装で供もつれず後ろの席に終わりまで一人でいた、とエルナンデス修道士から報告があった。

翌日のクリスマス。グレゴリオ暦十二月二十五日、クリスマスミサが定時から行われた。昨夜も来ている信徒たちは、昨夜からの興奮がまだ治まりかねて、「昨夜は素晴らしかった」の声があちこちから聞こえていた。

右近の妻ジュスタがミサに来ているルチアと夫の康玄と会って、ルチアに

「貴女は昨夜の役は何をしていたの？」

と聞くと

『皆から「マリアはルチアの役」と推されて、殆ど会話のない、態度で示しているマリアの役をやっていた。夫の康玄は一人の観衆として後方に座っていた』

と言っていた。

教会全書類の焼却

慶長十八年十一月十三日、グレゴリオ暦でのクリスマスを終えると、教会は既に慶長十八年末のような慌ただしさの中に入った。年末とはいえ、江戸幕閣の指示で、京都所司代がいつ教会閉鎖、書類の没収、右近の逮捕連行が行われるか分からない不安の中で、落ち着かない日々を過ごしていた。教会の一つの救いとして、クリスマス前夜祭の「御子ご降誕劇」が、教会始まって以来と言えるほど、老幼男女を問わない信徒の盛り上がりがあったことである。右近以下教会中枢部は、江戸を始め全国各地での教会破壊、閉鎖、宣教師の追放、一般信徒

への棄教命令等の情報が教会員にも伝わっている中で、あれだけのものがよくできたと思っている。大満足であった。

教会は金沢城に隣接していることから、火気厳禁で教会文書の焼却は一切できない。その為右近はじめ司祭、修道士たちは、教会記録、特に伝道関係の記録、洗礼関係の個人記録も、一冊、いや名前の書かれた紙一枚も残すことのないように、全てを右近の屋敷に持ち込んで、その庭で、周りに水の入った桶を並べて、朝から夕方まで焼却を毎日続けた。

大晦日には、教会の書類は紙一枚も残すことなく、全て焼却し終わった。何もない。残っているものは司祭と修道士の個人的な本（洋書が多い）だけとなった。

一期一会の茶会

慶長十九年（一六一四）一月一日、右近は自宅でクレメンテ司祭とエルナンデス修道士から新年の挨拶を受け、その場で三人での祈祷会を行い、査察・摘発に備えた万全の対応が出来たことの感謝の祈りをささげた。

司祭と修道士が帰った後、右近は茶室に入った。金沢に来て元日から茶会を行なおうとしたのは、今年が初めてである。右近は、年が明ければ、正月の内にも行われるかもしれない教会査察と右近逮捕または追放に備えて、元日からでも親しい人たちと一期一会の別れの茶会を企画して、茶席に使う料理も、金沢城の料理を請け負っている「料理越前」に依頼していた。

この日の茶会は、施主南坊として右近は久しぶりに南坊を名乗り、正客は内藤如安、次席にその子息の内藤好次、三番目に宇喜多休閑を招き、「料理越前」主人も、今朝獲れたブリを自ら右近邸に持ち込み包丁を握る意気込み方であった。料理は賄い方に任せて、右近は茶席に掲げる額を考えていた。右近が茶会で常に迷うのは床の間に飾る「水墨画」か「書」である。一般的には、水墨画にしても書にしても仏教的な内容になっていて気に入らないので、掲げないことが多い。今日はどこまでも我意を通した茶会として、ずっと以前、オルガンチーノ師がローマから帰ってきたときに、バチカン本部から右近に進呈として持ってきてくれた「祈りの女性像」の絵が、右近は気に入っている。聖母マリアが、十字架上で召天して、十字架から降ろされて横たわっているイエスを見つめる悲しみのマリアを画面一杯に描いており、右近は描かれたマリアの横顔ではあるがその表情・姿・全身から伝わってくる、何とも表現できないその悲しみの姿に魅き付けられ、その絵から離れられないことが多かった。このような絵を茶会の席に掲げることは一般的にはありえないが、今日は親しいキリシタン仲間の茶会であり、右近と招客との一期一会の茶会には最もふさわしい額で

あると確信している。客が集まる前にすでに掲額しているので、三人の招客にはあとでゆっくり話すこととして、茶席亭主の右近は点前を始めだした。その額については誰も質問できないまま茶会は始まった。

正客の内藤如安は、右近の手許を「見逃すものか」と言った眼差しで見つめていた。右近の柄杓を取る手も、戻す手も、いつもと同じではあるが、違う。何が違うのか。右近の手の動きは、内藤如安に差し出す抹茶茶碗の茶筅の動きに移っていた。内藤如安は、右近が抹茶茶碗を支える手、茶筅を回す手、器の中の美しい緑の茶、それを見つめている右近の目、顔、全てが「一期一会」の場であることの心の気持ちの表れと感じて、右近から形に添って「どうぞ」の言葉はないが茶を差し出された瞬間、座ったまま少しいざり出て、それを両手で自分の席の方へ寄せてくる瞬間、如安からは「有難うございます。いただきます」の声は出なかったが、頭を下げている如安の膝の上に涙がこぼれた。亭主、主客のこの姿を見た好次も休閑もおのずと身が引き締まった。

やがてお道具拝見の時、右近が利長からいただいた茶入れの侘助肩衝、その他十字の入った青磁茶碗、有名な師匠から戴いた羽箒等、今まで右近が誰にも見せなかった品々が三人のお客の前に並べられた。右近が三人からの質問の答えとして、これらの品々の由緒と共に、品物一つ一つの故事来歴を語ると、一同、初めて拝見し、初めてお聞きすることに、言葉がなかった。

最後に内藤好次から掲げてある絵について、右近が何を気に入っているのかの遠慮のない質問があった。右近は

「この女性はイエス様の母、マリア様を描いている。絵の中には十字架上で亡くなったイエス様が書かれていないが、十字架から降ろされて、マリア様のところに横たわっているイエス様のお傍で、悲しみの中で祈っているお姿だ。今日初めて皆にお目にかけている」

と説明があり、三人は今日の茶会に右近が掲げた意味を悟った。

金沢城主への年賀挨拶

今年正月の金沢城の城主への年賀挨拶は、現高岡城主の利長前金沢城主が病で臥せっているため、遠慮して松の内は延期していたが、急遽十二日に行うとの触れがあった。石高二万五千石の右近は、現在は老中から外れているが、石高に応じた支度と供を連れての登城をしなければならない。

右近の太刀持ちとして登城する生駒弥次郎が

「キリシタンの第一人者高山右近を、江戸幕閣から捕縛に来る前に我々が誅殺する。この日の登城・下城の機会に城外で」

という輩がいるとの噂をを聞いてきて、登城準備をしている右近に注進した。

右近は

「そんなことはほっておけ」

と言ったが、弥次郎は

「私が先頭に立って見張りますが、殿もくれぐれもご注意ください」

と引き下がらなかった。

右近は自分で身支度を確認し、城迄供をする足軽に

「行くぞ」

と声をかけ玄関に向かった。生駒弥次郎は玄関で右近の刀をすでに手にして、右近の前を歩く準備をしていた。

妻ジュスタを始め家中の

「行ってらっしゃいませ」

の声に送られて三人は城に向かった。

城迄の途次、登城の正装をした多くの久しぶりの顔に会ったが、丁寧に礼をする者と、目を合わせないように目をそらす者といた。右近は顔を合わせた全ての人に目礼をしていた。

城に着き、腰の刀剣類は所定の場所に預け、右近は一人で城主利光が家臣から年賀挨拶を受ける部屋に入って行った。城主利光の隣から、筆頭家老の本田政重、横山長知と順に並んでいる。右近が部屋に入ると横山家老はいつになく硬い表情をしている。右近が城主の前（とは言っても下座で離れているが）に平伏して新年の賀詞を申し述べると、利光公から

「大儀じゃ」

の一声があって、右近は再び平伏して挨拶の座を去った。刀を預けたところに戻ると、弥次郎と足軽が出迎えていた。

城の正門から出て自宅までの間、それぞれの家の門には注連縄がきれいに飾られ、いかにも落ち着いた静かな金沢城下の正月を感じた。

司祭・修道士の追放

右近が妻ジュスタの手を借りて正装から着替えると、弥次郎が

「殿」

と言って小声で

「今朝、江戸からの飛脚がお城に入り、キリシタン禁制が伝えられたとの噂です」

「そうか。あり得ることであろう。しかし予は聞いておらぬ」

と答えて、自室に行き、弥次郎の一言が事実であれば今日のうちに何か連絡があるだろう。すべてはそれから。と自分に言い聞かせて、召使が持ってきた昼食をとった。

昼食後しばらくすると、玄関から来客の声がした。直後に弥次郎が右近の部屋に飛び込んできて

「殿様、今玄関に横山家老様のお使いの方がお見えになり、半刻後に、横山家老様が行列を従えて、城主利光様の名代としてこちらにお見えになるそうです。本来、このようなことは事前には知らせないが、横山家老様の特別のご配慮で知らせに来た」

と言って、弥次郎が「殿に申し上げてくる」と言ったときには外へ飛び出して帰ってしまった、と報告があった。

右近は「とうとうやってきたか。江戸幕閣は随分待たせたな」と思ったが、直ぐ妻ジュスタを呼び、事態を話して、召使等に玄関から奥座敷の間に姿を見せないように指示した。右近は城から帰宅して、やっと部屋着に着替えて疲れをほぐしていたが、再び正装して、横山家老の来宅を待った。

暫くして弥次郎が

「行列がそこまできました」

と報告したので、右近は玄関片隅に平伏して横山家老を出迎え、奥座敷に案内し、再び座敷下座に平伏した。

横山家老は座敷上座に立ち

「高山右近。上意により謹んで将軍徳川秀忠様からの命令を代読する」

から始まり、

「キリシタンは邪宗を弘め我国神国の神を破壊するなど・・・と罪状が述べられた後、バテレン二人を一両日中に京都所司代迄出頭させよ」

というものであった。

横山家老が、城主名代としてバテレン追放命令書を読み上げ、開いて右近に見せ、横山家老が「以上」と言い終わったところで、右近が

「徳川将軍様からの、一両日中にバテレン二名を京都所司代迄出頭させるようにとのご命令を、確かに拝命いたしました」

と答えて命令行事は終わった。

横山家老は、自分の家臣が部屋から引き下がったことを確認すると、右近の前に座り、改めて

『これは昨年末に作られた「バテレン追放」の命令書で秀忠将軍の朱印がある正式な指示書である』

旨を説明した。右近はその場で命令書を横山家老から受け取り、改めて自分で読み直した。

『横山殿、これは厳しい口調で書かれていますな。キリシタンの宗教をここまで「邪とか悪」と言い切るのも、余程憎々しく思っていなければ言えないね。これは家康側近の佛僧金地院崇伝の筆だね。いかにも崇伝らしい。それと、この指示は「今日明日中にバテレンを京都へ立ち退かせよ」とだけで、我々信徒のことについては何も触れていないが。司祭と修道士は明日朝、京都所司代に向けて出立させることとなっている。右近が京都所司代宛に、この両名は金沢教会のクレメンテ司祭とエルナンデス修道士と身元証明的なものを持たせればいいかな』

「必要ない。城側で京都所司代迄送り届けることにしているから。二人の出立の時、この横山が出立を立ち会って確認することにもなっている」

横山家老は続けて

「信徒については今日か明日、江戸から飛脚便が届くと思うので、右近殿ご一家、内藤如安とその家族は、行き先がどこか分からないが出立の準備をしておかれた方がよかろう」

と言った後、横山家老は

「供をあまり待たせるわけにはいかないので」

と言って門外に出て、待っていた行列の駕籠に乗り込んで帰って行った。

右近はクレメンテ司祭とエルナンデス修道士を自室に呼び寄せ、徳川秀忠の命令書を見せ、

「あなた方二人は、明日朝京都所司代の所へ行くことになった。城から二人を京都所司代迄届ける役人が教会に来るので、一緒に行くこととなる。おそらく京都から先は長崎まで送られて、我が国からの追放ということになるであろう。お二人の、遠い故郷を離れて、身命を賭してわが国で行ったキリスト教宣教活動には心から感謝申し上げる。どうか、これからの人生、くれぐれも健康には留意されて、働く場所は異なっても、益々宣教活動に専念されることを祈っている」

と挨拶すると、二人は座敷でぎこちない平伏をして

「今迄お世話になりました。右近様のこれからの平安を祈り続けます」

と挨拶をした。

翌朝早く金沢城から二人の武士が教会にクレメンテ司祭とエルナンデス修道士を連れに来て、二人は右近立会いの下に帰国へと旅立って行った。

横山家老は、金沢城の門前で、二人が警固の武士に伴われて京都に向かう姿を確認していた。

右近一家眷属の追放とルチアの去就

その翌日巳の刻、家の前で行列が止まった。生駒弥次郎が真っ先に行列に気づき門を開けると、一昨日と同じ城主名代の横山家老の行列であり、家の中に飛び込み右近に伝えた。

右近はまず玄関で平伏して横山家老に挨拶し、横山家老とお付きの家臣を奥座敷上座に案内した。右近は下座に平伏し、横山家老の言葉を待った。

横山家老はまず

「上意」

と言葉を一旦区切ってから、徳川秀忠名の命令書を開き、

「邪法を弘め、我が国古来の神道を廃した高山長房及び妻子一家眷属を、一両日中に京に護送し、その身柄を京都所司代板倉勝重に委ねよ」

と横山家老が幕命を伝えると、右近は

「かしこまりました。必ず明日中に出立いたします」

と答えて、横山家老による城主名代の幕命伝達は終わった。

終って、自分の家臣が座敷から退出したことを確認した横山家老は、右近の斜め前に胡坐をかき

「こんな儀式は二度とやりたくない」

と言って右近を見た。右近もかしこまった状態から、普段の姿勢に戻り、横山家老から渡されたこの命令書を見ながら

「ところで、ここに書いてある一家眷属とは、親子とその一族のどこまでの範囲を指しているのか」

の質問に、横山家老は

「城内でもそれが議論された。いろいろな意見が出た。最終的に筆頭家老の本田政重がこの場合の一家眷属とは、高山右近を頂点とした直系一族と考える。つまり高山右近の直系のみだ。右近の子ども・孫までは範囲に入るが、右近の弟は眷属から外れる、と言って会議を打ち止めにした。弟の太郎右衛門は外れる」

これを聞いた右近は、幼い孫たちを厳しい追放の旅路に連れてゆくのは忍び得ず、弟の太郎右衛門が追放にならなければ、弟に預けることを考えていたが、孫は「右近の直系」ということから一家眷属に入り、連れてゆかざるを得ないことを納得せざるを得なかった。

「幕命の追放の対象となる一家眷属と記載されているのは、高山殿と内藤如安だけだ。息子の好次とその家族は入る」

「宇喜多休閑は」

「宇喜多休閑は津軽に流された」

「豪姫様は」

「豪姫様にはご沙汰はない」

右近は

「それは良かった。高岡の利長様もこれで気が休まろう。ところでキリシタンになった横山殿のご子息康玄殿は」

横山家老は苦しそうな表情の中で

「ご沙汰はなかった」

と言って、右近が返事をする前に

「行列をいつまでもあのままにしておくわけにはいかない、今から帰って、昼過ぎにまた来る」

と言って立ち上がり、そこに座っている苦しさを逃れるように帰って行った。

横山家老は、再びその日の午後早めに右近邸に来た。

二人が右近の自室に入ると、横山家老が

「高山殿、ルチアは家の嫁で、横山家にそのままいさせようと思うが」

と切り出した。右近は

「京都所司代の役人や、幕府の隠密がこの城下に入って、康玄殿の正室が高山右近の娘でキリシタンであることは、既に調べられているでしょう。ルチアは当然尋問に呼び出されるでしょう。とすると、夫である康玄殿も当然厳しく調べられることとなる」

「その時は二人ともすでにキリシタンは辞めた、棄教したと答えればよい」

「ルチアは嘘のつけない娘で、そのようなことは言えない娘だ」

「じゃあルチアをどうする?」

「康玄殿とルチアに来てもらって、私と三人で話し合いたい。夫婦のこともどうするかの問題にも掛かってくる。今後、ルチアが横山家にいること自体が、横山家とキリシタンが結びついて、横山家に取り返しのつかないご迷惑をお掛けすることになることはなにより明らかだ」

「康玄は、一度夫婦になった以上終生連れ添うべきで、ルチアに棄教したと嘘をつかせても、夫婦を続けるべきだ、と言っている」

「そのお言葉は誠に有難いことであるが、先ほども申し上げたようにルチアは嘘が付けないように育ててきました。ルチアの考えも聞いて判断するようにしてください」

と、横山家老と右近が話し合っているときに、康玄とルチアが右近邸にやってきた。

横山家老が

「家では二人がどこまで話したのか分からないが、父親としては二人に子どももいることでもあるので、ルチアに横山家にとどまっていてもらいたいと思っているし、康玄もその考えと聞いている」

と横山家老が言っている間、横山家老の側で康玄の隣に座っているルチアが、困り切った表情をしているのを見た右近は

「横山殿、康玄殿とルチアと私と三人で話し合いを持たせていただけませんか」

と言って、横山家老をそこに残して、三人は別室に行った。

康玄もルチアも緊張して顔色は蒼白になっている。

右近が

「康玄殿の気持ちは、ルチアに、キリシタンを棄教したと嘘をついても横山家に残っていて欲しい、一旦夫婦になったのだからそうすべきだ、というご意見だそうだが」

「その通りです」

「二人で話し合いした結果はどうなったの」

「はい、それはルチアから答えさせます」

ルチアが、今迄見たこともないようなキリっとした顔つきで右近を見つめ

「私はキリシタンを棄教することはできません。棄教したと一時的にも嘘をつくことはできません。信仰を続けてゆきます。そうすると横山家に大変なご迷惑をお掛けすることとなります。私は、父がどこに囚われていくのか、噂ではどこかに追放されるのでは、などと言われていますが、キリシタンを棄教しないで囚われてゆく父母と一緒に囚われてゆきます」

これを聞いた康玄が

「それはダメだと昨夜から何度も言い続けているではないか」

とルチアを諭すように発言した。ルチアは

「ですから、離縁してください。そして子供は横山家の正当な子供ですから、康玄さんの後継者として横山家で育ててください、私ルチアを離縁してください」

この発言で、三人とも黙ってしまった。

そこへ心配していた横山家老が入ってきたので

康玄は

「父上、今迄私の考えを高山様にお話しました。ルチアには昨夜から何度も何度も横山家に残るように話しました。しかし、高山様は、ルチアは自分の立場がどのように悪くなろうとも、嘘、この場合はキリシタンを棄教したと言うことですが、嘘のつける娘ではない。ルチアは、嘘のつけない自分が横山家にいること自体が、横山家にどれほどご迷惑をお掛けするか分からない。自分は高山家の家族として追放になるので離縁して欲しい。子どもは横山家で育てて欲しい、ということから話は進みません」

と話すと、右近が

「横山殿、今、康玄殿がお話しした通りです。私からも、横山殿、康玄殿がルチアの思いをお察しいただき、ルチアの言うとおりにしていただくことをお願いします」

「高山殿、貴殿に席を外していただいて、この場で三人で話し合いをさせてください」

と横山家老がいうので、右近は席を外した。

暫くして康玄が右近を迎えに来たので右近が行くと、横山家老が

「高山殿、今迄三人で話し合いましたが、大変残念だがルチアを離縁します。ルチアの言うことは全くその通りであって、康玄も納得しました。これしか方法はありません。今日午後、この長知と康玄の二人でルチアをこちらへ連れてきます」

「横山殿と康玄殿のご理解を得て、ルチアもホッとしていると思います。ルチアの思いをご理解いただいたお二人にお礼を申し上げます」

と言いながら深々と頭を下げる右近を見て、ルチアも深々と頭を下げた。

右近と妻ジュスタは、帰って行く横山家老、康玄、ルチアを見送って、ジュスタは右近の背中に顔を付けて咽

んでいた。

その日の午後、横山家老夫妻と康玄が、ルチアを連れて右近邸にやってきた。孫胤長は横山夫人に抱かれて、今の状況が分かるのか、今にも泣きだしそうな真剣な顔をしている。ジュスタはルチアと、祖母に抱かれている胤長を見て目に涙をためていた。横山家老が

「さあ、ルチアをお届けしましたよ」

と敢えて笑いながら声を出した。右近も

「確かに受け取りました。ご苦労様でした」

と笑って答えた。ルチアも、夫康玄と子ども胤長の所から右近の横に移り、深々とお辞儀をした。

康玄は、ここで長居することはできないと判断、父長知に

「もうルチアを渡したことでもあり、お暇しましょう」

と声をかけ、右近とルチアは

「私どもの意向をお聞き届け下さり有難うございました」

と挨拶した。

横山夫妻と康玄父子の四人は去って行った。ルチアの視線は、祖母に抱かれて遠ざかって行く胤長の姿を、いつまでも見つめていた。

続く

参考文献

完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
茶の湯の心で聖書を読めば　高橋敏夫　フォレストブックス
高山右近　海老沢有道　同右
高山右近　加賀乙彦　吉川弘文館
キリシタン大名高山右近　谷　真介　講談社
キリシタン千利休　山田無庵　パウロ文庫
利休にたずねよ　山本兼一　河出書房新社
キリシタン史の新発見　岸野久・村井早苗　文芸文庫
武士道　新渡戸稲造　雄山閣
茶の本　岡倉天心　岩波文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　講談社学術文庫
日本史年表　歴史学研究会編　宮帯出版社
日本キリシタン史　海老沢有道　岩波書店
加賀百万石異聞　高山右近　水野　聡訳　塙書房
どちりなきりしたん　水野　聡訳　能文社
どちりなきりしたん　海老沢有道校註　岩波書店

人身売買・奴隷・拉致の日本史　渡邊大門　柏書房
悠遠の人　高山右近　塩見弘子　ドン・ボスコ社
小豆島のキリシタンと高山右近の足跡　小豆島キリシタンの足跡をたどる会　編
金沢での生活―継続する殉教―　日本カトリック司教協議会　列聖推進委員会
フリー百科事典「ウイキペディア」（Wikipedia）

安芸門徒シルクロード紀行（15）

村上邦治

八二　内閣参議

大谷光瑞が渾身の大作『興亜計画』を公にした一九三九（昭和一四）年は、既に日中間は戦争状態にあった。三七年七月盧溝橋事件（北支事変）を契機として、両国とも宣戦布告をしないまま本格的な戦闘が始まった。八月第二次上海事変が起こり、日本は「支那事変」と命名し戦乱は全土に広がった。日本陸軍は南京・広東・武漢三鎮を占領、これに対し国民党蒋介石と共産党毛沢東は「抗日民族統一戦線」（第二次国共合作）を結成し対抗した。

三八年近衛首相は新興政権樹立を期待し、「帝国政府は爾後国民政府を対手（あいて）とせず」（第一次近衛声明）として和平交渉の打ち切りを通告、戦争は泥沼化する。

また満州国とソ連・蒙古国境において、張鼓峰事件（三八年）・ノモンハン事件（三九年）と相次ぎ日ソの軍事衝突が起き日本軍は大きな損害を被った。

中国全土に戦火が及ぶ中、日本の戦争正当化と停戦交渉を呼びかける三八年一一月「東亜新秩序」建設（第二次近衛声明）一二月「善隣友好・共同防共・経済提携」（第三次近衛声明）を出し、国民政府の和平派（汪兆銘副総裁）に交渉を呼び掛けた。

しかし中国に停戦を勧めてみても、荒廃した経済の復興・発展の青写真を描ける政治家はいなかった。光瑞の『興亜計画』は戦争終結後の経済成長を目論むもので、一部の政治家・政府高官にとっては貴重であった。何せ光瑞の提言は具体的実践的であり、幾つかはすぐにでも着手することができた。この時期政治・国民感情・地理・気象・水利など、中国の緒事情全般を掌握した日本人は光瑞一人であったかもしれない。

既に『支那論』や講演会などから注目されていた光瑞は、三七年六月成立した近衛内閣の拓務大臣（植民地朝鮮・台湾総督府、関東・樺太・南洋各庁の総括・監督）への就任要請を受けた。かねてより政治家にはならないと決意していたが、五摂家筆頭近衛首相からの依頼には、九条家出身亡妻籌子が絡み、やむなく当時貴族院議員（二八年就任勅選）で実弟の尊由を代わりに推した。

尊由（一八八六―一九三九）は遼東半島臨時支部長、併合直前から韓国開教総監を歴任、日露戦争後の五年上海に清国開教総監部が設けられ初代総裁に就任した。さらに辛亥革命直後本願寺特設臨時部長として南京・武漢を訪問し中華民国臨時大総統孫文と会談、また黎元洪副総統・黄興大元帥から歓迎の祝宴を受けた。

兄光瑞とともに中国教線拡大の第一線にあり、中国北東部・中央部・朝鮮・満州の布教活動に従事した。政治家要人・地元有力者さらに商人や住民とも交流を重ねてきており、尊由にふさわしい役職であった。

近衛内閣の拓務大臣に就任した尊由は、杉山元陸軍大臣に向かって「陸軍は一体どの線まで進出しようとするのか」と平然と尋ね、米内海相ら周囲を慌てさせた逸話が残されている。拓務大臣として当然の質問をしただけであったが、逸話として語られることに陸軍大臣の内閣における存在の大きさを窺わせる。

尊由は一年間大臣を務めた後辞任、近衛首相から内閣参議を要請され応諾した。三九年新設された国策会社北支那開発株式会社初代総裁に就任、興亜院官制の一つ興亜委員会委員にも任命された。しかし八月張家口で病気のため客死（享年五四歳）した。

弟尊由が急死したため、光瑞はやむなく公職就任の要請を受けざるを得なくなった。三九年一一月興亜委員会委員に就任した。興亜院は日中戦争中の三八年末に首相を総裁として対中政策・中国占領政策を担当、関係各省庁と調整する機関として設けられた。興亜委員会はその組織の一部署であり、対中国政策の諮問に対して、委員の意見をまとめ答申するものであった。光瑞は任命された一一月委員会に出席した。

四〇（昭和一五）年一〇月近衛首相から第二次近衛内閣の内閣参議を要請され引き受けた。四一年七月第三次近衛内閣が成立するが一〇月に総辞職、東條内閣成立を機に参議を辞任した。

一二月八日未明陸軍は英国極東最大基地シンガポール攻略を目指しマレー半島北部に上陸、一方海軍はその一時間後米ハワイ真珠湾の太平洋艦隊を奇襲攻撃、米英に宣戦布告（米国及び英国に対する宣戦の詔書）を行った。

同日米・英両国も対日戦争布告を発表して、太平洋戦争が始まった。

開戦直後の詔書ではこの戦争目的はあくまでも「自存自衛」のためであることが強調された。しかし三日後東條内閣はこの戦争を「支那事変をも含め大東亜戦争と呼称する」こと、および「自存自衛」より積極的な「大東亜新秩序建設」を目的とすることに変更した。

開戦の翌四二年二月まで陸海軍とも破竹の勢いで米・英軍を圧倒した。陸軍はマニラ・シンガポールを陥落させ、海軍はマレー沖海戦で英東洋艦隊を撃破、スラバヤ沖・バタビア沖の二海戦で米英豪艦隊に勝利、無敵の勢いの時であった。東條内閣により大東亜建設審議会が創設され、委員が発表された。

東條内閣は今次戦争の大義名分を「自存自立」という控えめなものから、「大東亜建設」（大東亜共栄圏の創設という「アジアの諸国を含めた新秩序樹立」）という挑戦的姿勢を打ち出した。しかしその「大東亜共栄圏」の概念などは確定しておらず、言葉だけが先行使用されてきた。

三八年一月第一次近衛声明の後、一一月近衛首相は新中央政権（後の汪兆銘南京国民政府）と満州帝国の三国が互助連環関係樹立をはかり、「東亜新秩序」を建設するとの声明を出した。東亜新秩序には「蒋介石の重慶国民政府といえども参加を拒否せず」として、対中国政策の公平性を訴えた。この第二次近衛声明に使われた「東亜新秩序」が最初である。

四〇年松岡外相が同じ意味の「大東亜共栄圏」という言葉を使い始め、以後一般的に使用された。しかし「大東亜共栄圏」なる概念・具体的内容は不明確のままであった。

ところが大東亜戦争の目的を、「大東亜共栄圏」建設のためと宣言した以上、これを明確にさせる必要が出てきた。東條首相は度重なる戦勝により高揚していた時だけに、日本人の英知を一堂に集めて「大東亜建設審議会」を発足させた。

この審議会は第一部会から一一部会に分かれ、部会長に第一部は東條首相自ら就任、各部会長は東條内閣の大臣が就任するという力の入った組織であった。任命された委員は次の通りである。（委員後を含む略歴）

政党政治家
町田忠治（立憲民政党・進歩党総裁農・商・蔵相）
前田米蔵（立憲政友会政調会長大政翼賛会総務会長）
安達謙蔵（立憲同志会内・逓相）
外交官
有田八郎（中国大使外相）田中都吉（次官特命相）
白鳥敏夫（イタリア大使）

官僚
結城豊太郎（日銀総裁蔵・拓相）
勝田主計（大蔵次官蔵・文相朝銀総裁）
大村卓一（鉄道省満鉄総裁）後藤文夫（内務省農相）
小原直（司法検察司・法相）児玉秀雄（文・拓相）
石黒忠篤（農次官農相）山崎達之輔（文部省農相）
石渡荘太郎（蔵次官蔵・宮相）細川護立（宮内省）
陸軍
井上幾太郎（大将）小磯国昭（大将朝鮮総督拓首相）
阿部信行（大将外・首相朝鮮総督）
海軍
小林躋造（大将国務相）高橋三吉（大将連合艦隊長）
伍島卓雄（造兵中将工博商工・鉄道相）
実業界
伊藤文吉（日本鉱業）藤原銀次郎（王子製紙）
鮎川義介（満州重工業）橋本圭三郎（日本石油帝石）
久原房之助（久原鉱業）中島知久平（中島飛行機）
藤山愛一郎（大日本精糖）平生釟郎（損保文相）
桜内幸雄（日本電燈商工・農・蔵相）
学者
大河内敏夫（東大物理教授理研化学研究所）
言論界
徳富蘇峰（国民新聞・月刊誌国民之友主宰）
これら当時の各界を代表する委員の中に、大谷光瑞の名があった。宗教界出身の一応言論人の範疇に入るともとれるが、異色の登用であった。無論三九年刊行した『大谷光瑞興亜計画』が評価されたことは間違いない。

光瑞の任命は場違いにみえるが、この審議会に最もふさわしい人物と云えた。審議会での発言内容の詳細は不明であるが、『本願寺史』には『戦時期の政府が目指した「大東亜共栄圏」に提言することもあった』と簡潔かつ控えめに記されている。

大東亜会議は一九四三年一一月五・六日の両日、東京の帝国議事堂で開催された。出席者は日本東條首相、ビルマバー・モウ国家代表兼首相、満州国張景恵国務総理、中国南京国民政府汪兆銘行政院長、タイ国ワンワイ・タヤコーン殿下（ピブン首相代理）、フィリピンラウレル大統領、オブザーバー（共栄圏外）参加として自由印度仮政府（日本支援により占領下のシンガポールに樹立された独立運動家による印度亡命政府）のチャンドラ・ボーズ仮政府首班が出席した。蘭領インドネシアは占領地として日本の領土とみなされ、会議には呼ばれなかった。朝鮮は三〇年前から日本に編入済みであった。

会議は東條首相が取り仕切り、六か国による大東亜共同宣言が採択された。

大東亜共同宣言

抑々世界各国が各其の所を得相り相扶て万邦共栄を

偕にするは世界平和確立の根本要義なり。

然るに米英は自国の繁栄の為には他国家他民族を抑圧し特に大東亜に対しては飽くなき侵略搾取を行ひ大東亜隷属化の野望を逞うし遂には大東亜の安定を根底より覆さんとせり大東亜戦争の原因茲に存す。

大東亜各国は相提携して大東亜戦争を完遂し大東亜を米英の桎梏より開放して其の自存自衛を全うし左の綱領に基き大東亜を建設し以て世界平和の確立に寄与せんことを期す。

綱領として大東亜の解放、共存共栄・独立親和・互助敦睦、文化昂揚と互恵による経済発展及び相互繁栄、人種差別撤廃、資源解放の五原則を掲げた。

宣言は最終的には重光葵外相や西田幾太郎・矢部貞治ら日本の最高知性も加わり完成したが、概要や綱領は大東亜建設審議会でまとめられた。この宣言により日本は改めて大東亜共栄圏を世界に示した。

大東亜共同宣言から三週間後、もう一つの重要な宣言が発せられた。米ローズヴェルト大統領・英チャーチル首相・中国蔣介石総統が一堂に会し、三国首脳によるカイロ会談が開かれた。第二次世界大戦後の中国の領土（満州・台湾・澎湖諸島は当然として琉球・独占領地域の帰属）・日本投降後の国体・対華賠償・駐兵監視・ソ連共産主義英帝国主義政策・ソ連対日参戦・朝鮮ベトナム独立などの諸問題が話し合われ、カイロ宣言として発表された。

カイロ宣言

右同盟国の目的は日本国より一九一四年の第一次世界大戦の開始以後に於いて日本国が奪取し又は占領したる太平洋に於ける一切島嶼を剥奪すること並びに満州、台湾及澎湖島のごとき日本国が清国人より盗取したる一切の地域を中華民国に返還することに在り。日本国は又暴力及貪欲に依り日本国の略取したる他の一切の地域より駆逐せらるべし。前記三大国は朝鮮の人民の奴隷状態に留意し懲て朝鮮を自由且独立のものたらしむるの決意を有す（外務省の同時代訳文）

日本に無条件降伏を勧告したポツダム宣言の先駆となったカイロ宣言は大戦後の世界秩序を決定する重要な宣言であった。しかし東京で発せられた「大東亜共同宣言」と異なり、単に戦後の処理を羅列したもので、理念もなく日本の侵略を批判するだけのものであった。

大東亜会議や共同宣言について、「大東亜共栄圏」の建設は「日本のための共栄圏を目指したアジア諸国への帝国主義的侵略を隠蔽するものである」との見方が定着しているため、共同宣言の評価は極めて低い。しかし宣言自体は西欧強国から東アジアへの侵略を共同して防ぎ、

欧米の植民地から独立を果たすという理念と大義名分を明確にしたものである。大東亜共同宣言はカイロ宣言よりはるかに格調高いものであった。

大谷光瑞ら日本の英知を集め創り上げた「大東亜共栄圏」はここに日の目を見たのであった。宣言にある独立については、ビルマは四三年八月英国からまたフィリピンは一〇月米国から各々独立を宣言した。

八三　内閣顧問

大東亜建設審議会では弟尊由が拓務大臣の時遠慮なく杉山陸軍大臣を問い詰めたように、光瑞は自説を誰はばかることなく開陳したことであろう。中国さらには東亜の仏教復興を目指した光瑞にとっては、最も望んだ会議であったかもしれない。「興亜計画」で示した自らの構想をいかんなく主張したものと思われる。

その証拠に次の内閣顧問に任命された。一九年七月日本軍が全滅したサイパン島陥落から権勢を誇った東條首相辞職後、朝鮮総督小磯国昭陸軍大将と元首相米内光政海軍大将の両軍を代表する二人に組閣の大命が下り、小磯内閣が成立する。この内閣の顧問に上海に在住していた光瑞に就任の要請がなされた。小磯は同じ大東亜建設審議会委員として光瑞の発言を聞き、その構想の大きさ・深さ・実現の道筋など感銘を受けたに相違ない。改めて光瑞の『大谷光瑞興亜計画』を読んだことであろう。

内閣が成立した二カ月後、小磯首相は光瑞に顧問就任を要請した。一〇月には内諾を得、一一月初旬就任の為、上海から空路羽田に呼び寄せた。東京では築地本願寺に滞在、その役目を務めた。

大谷光瑞の内閣顧問就任には、小磯首相が極秘で進めた蔣介石重慶政府との和平工作の関連が推量される。

日本政府は敗戦が濃厚になった四四年から正式にソ連を連合国との和平仲介国にとして、外務省ルートにより進めていた。窓口は佐藤尚武駐ソ大使であった。

二月四日から大戦終局の戦争方針（ソ連の対日参戦）や戦後の欧州・アジアの在り方を最終的に決定づけるため、米ローズヴェルト・英チャーチル・ソ連スターリンの三国首脳がソ連ウクライナクリミヤ半島の保養地ヤルタに集まり協議した。国際連合設立・ドイツ分割占領・ポーランド政権問題（親ソ・反ソ亡命政権）などを取り決め公表した。

しかしこの会談では米・ソ間で重要な秘密協定が結ばれた。中国が参加した一年前のカイロ宣言の取決め以外に、ドイツ降伏三か月後ソ連の対日参戦・日露戦争で失った南樺太旅順大連の租借権返還（ソ連取得）・満鉄の中国ソ連の合弁経営・満州の中華民国主権保有・千島列島のソ連引き渡しなどである。ローズヴェルトは米軍の被

害を押さえるため、ソ連が求める東アジアの権益拡大を大幅に認めて対日参戦を促した。

米ソ秘密協定の存在を知らずヤルタ会談を軽視した日本政府は、最後の望みを託しソ連を和平仲介者として依頼続けた。しかし四月初旬ソ連から日ソ中立条約破棄を通告され真意が判明、和平仲介依頼を断念した。

外務省ルートと並行して、小磯首相はもう一つの乾坤一擲の秘策を進めていた。就任直後から着手してきた蔣介石国民党重慶政府との直接和平工作である。

この和平交渉のためには、南京政府と重慶政府の合同（南京政府解消）を実現し、新政権に対し「満州国の現状維持を除いてはすべての問題を譲歩する」という思い切った中国撤退案であった。これにより蔣介石の対日政策を好意的姿勢に変えさせ和平仲介の依頼をするとともに連合国から離脱させる狙いであった。

水面下で進める重慶政府との工作は国務相兼情報局総裁緒方竹虎（前朝日新聞副社長）が担った。朝日新聞記者らの情報により、有力な橋渡し役として南京政府考試院副院長繆斌（二四歳の若さで国民党中央委員・中将に昇進した蔣介石の元部下・前南京政府立法院副院長）が浮かび上がる。光瑞の招聘はこの時期であった。ソ連を和平工作の窓口としたい重光外相・外務省および中国からの撤退を余儀なくされる参謀本部・陸軍から猛反対されるが、小磯首相は繆斌工作を推し進めた。

後世の歴史家は小磯国昭を無策・思慮の無さ・日立ちすぎるなどの人物評価や二六〇日の在職期間には「何もできなかった」として極めて低い。開戦時から約三年の東條英機首相と終戦の道筋をつけた鈴木貫太郎首相のはざまで、その存在すら記憶に薄い首相である。（杉森久英『大谷光瑞』では小磯内閣は存在しない致命的間違いがある）

しかし小磯の国際情勢判断は政治家・外交官・重臣にはないものであった。ソ連仲介国案は早くから見限っており、当時誰もが想定さえしなかった蔣介石と「満州の現状維持」条件だけで直接和平交渉（形式的窓口南京留守府）するという大胆なものであった。

三月中旬来日した繆斌は、蔣介石の全面和平実行案を小磯と緒方に提示した。「南京政府解体を大前提とし、重慶政府との間に停戦と軍の撤退が完了した後中国が日本と連合国との和平工作を斡旋する」というもので、小磯首相の日中和平案とほぼ同じ内容であった。最初に会見した東久邇宮（和平派後首相）は「交渉を続ける価値がある」と前向きな感触を得た。

小磯首相と東久邇宮は軍や重臣を説得して正式に二一日の最高戦争指導会議に提案した。しかし「蔣介石の親書がない」「正式な使者か否かわからない」「繆は信頼で

きない人物」など形式論やソ連和平案を進める重光外相並びに中国撤退に反対する陸軍さらに米内海相が反対し、会議ではまとまらなかった。

この混乱を心配した木戸内相が天皇に奏上、天皇から首相に中止が命令され、一筋の明るい展望が見えた繆斌工作は完全に挫折したのであった。

就任直後から小磯首相は蔣介石重慶政府との直接和平交渉を、異常な執念を持ち推し進めた。大谷光瑞の内閣顧問招聘は、重慶政府との和平工作の助言者として期待したとみるのはうがった見方であろうか。中国人の思考や慣習を熟知し、親友であった孫文以来の国民党幹部との人脈も期待されたのではないだろうか。

三月東京大空襲・硫黄島玉砕、四月米軍沖縄本島上陸が続き敗戦が色濃くなり、四月五日小磯内閣は総辞職するのだが、真相は繆斌工作の挫折が直接の原因であった。同日枢密院議長鈴木貫太郎海軍大将に大命降下、光瑞は同日付で内閣顧問を辞した。

後年蔣介石がヤルタ会談の秘密協定を知り米ソ二大国に主権を無視され中国国土の一方的取決め（旅順・大連租借権のソ連譲渡・満州の中ソ共同経営）に激怒したこと、またソ連参戦により中国共産党との接近を恐れたことから日本との和平交渉を真剣に考慮し始めており、繆斌らに資金援助などの支援していたことが明らかになった。そして二一年三月東京極東裁判に繆斌が呼び出される情報を入手するや、繆を突然逮捕し一〇日後裁判、一週間後死刑執行により歴史上から抹殺した。この事実は、蔣介石の対日和平工作の信憑性を裏付けるものとみられている。

面子にこだわる外務省、敗戦を予期しながら決断できない陸海軍の反対により、重慶政府和平工作は頓挫した。船津・トラウトマン・高宗武・宇垣・桐・松岡工作などと呼ばれる水面下で進められた和平交渉工作は多いが、小磯首相自らが指揮した繆斌工作こそ最高会議に正式にかけられた唯一の和平工作であった。無条件降伏をしたポツダム宣言受諾四か月前のことでソ連参戦を見るにつけ、工作の進展次第では世界秩序も大きく変わったことは間違いない。蔣介石が前向きな姿勢と思われた時期だけに、実に惜しい最後の機会であった。

残念ながら光瑞の活躍できる舞台もなくなった。

一九三九年生活の拠点としていた上海で、日本人居留民が多く仏教各派・神道・キリスト教の大同を提唱する「中支宗教大同連盟」が発足した。東亜和平の精神的基礎確立・宗教の提携による滅共・日華民衆の善隣教化実現を目標に半官半民で設立された。総裁には前総理大臣近衛文麿を推戴し、副総裁に大谷光瑞が推された。

大東亜共栄圏を目指す日本は共栄圏全域を視野に入れ

た宗教政策を進めた。四〇年宗教各派を政府管理下に置くことを狙った「宗教団体法」が施行された。各政党が大政翼賛会に統合されたように、仏教・神道・キリスト三宗教を興亜運動の一元化を図るため四二年「興亜宗教連盟」が結成され、総裁林銑十郎（元首相）副総裁に大谷光瑞、理事長に永井柳太郎が就任した。

戦時下で各分野の統合化が進められる中、宗教界を代表する人物として大谷光瑞は適任であった。仏教の最大宗派浄土真宗本願寺派の前宗主であり、しかも現在はその地位から離れていることもほかの宗派の不満を和らげた。しかもまだ六〇歳台の働き盛りであった。誰よりも世界各国を視察して宗教事情に詳しくキリスト教やイスラム教についての知識は豊富であり、キリスト教徒たちは納得した。光瑞は戦時中における宗教界のまとめ役であった。

八四　敗戦

小磯内閣顧問という立場にあった光瑞は四四年一〇月レイテ沖海戦大敗連合艦隊壊滅・四五年三月硫黄島陥落・四月一日米軍沖縄上陸など、嘘と誇大した大本営発表とは相違する戦況の実態を知り得た。光瑞自身東京に滞在していたので、三月一〇日の米軍B二九による東京大空襲の被害や悲惨さを体験していた。

また四四年連合軍のノルマンディー上陸・パリ解放・カイロ宣言、四五年二月米軍マニラ占領・米英露首脳によるヤルタ会談などヨーロッパの戦況や連合国側の動静を把握していた可能性が高い。内外の情勢から日本の敗戦は避けられないことは十分わかり得た。

四月に入り戦局は一段と厳しさを増し、六日沖縄防衛菊水作戦による陸海軍特攻機出撃・八日戦艦大和轟沈・本土決戦に備え「決号作戦準備要綱」決定と慌ただしさが増す中、顧問を辞任した光瑞は一〇日東京から空爆を避けるため北陸を経由、富山に一泊し一三日京都に着いた。次いで山陰線で松江から下関にたどり着く。光瑞はこの時でさえ、骨をうずめるつもりの中国に向かおうとしていた。五か月前の内閣顧問就任のため日本への帰国に際しては、小磯首相たっての要請から特別仕立ての飛行機に乗り羽田に着いた。しかし既に制海制空権を奪われており、下関から朝鮮釜山への渡航は命懸けであった。列車で京城・平壌を経て奉天に着き、一度北京に向かい大連に戻ったのは六月下旬であった。

大連では満鉄直営の大和ホテルに滞在、しばらく休養した。終戦の八月一五日からは関東別院に移った。

『寺史』では「このころ病に冒されていた」と記し、一一月満鉄大連病院に再び入院した。光瑞は父光尊が糖尿病

で苦しんだように、同じ糖尿病を患っていた。遺伝とも推測されるが、美食家で訪問国の著名なレストランをしばしば訪れ豪勢な食事を楽しんだ。六五〇回忌法要のため英国から帰国するとき、妻籌子や妹武子にはシベリア鉄道を利用させたが、自らは客船を使い帰国した。これも時間をかけて多彩な食事が楽しめることが大きい。また法主ともなれば、報恩講・帰敬式など行事や法要、さらに巡教に出れば住職・門徒への法話や宗門会議など日程が詰まっており、運動不足に陥った。六甲二楽荘での乗馬やヨットで海に出ることを好んだのも、運動不足解消のためであったのであろう。食通で美食家しかも運動のできない環境ならば、糖尿病になるのは無理からぬことであった。

身長は一八〇㌢を越え体重八〇㌔という当時の日本人としては偉丈夫で決して西洋人に引けを取らなかった光瑞であったが、『寺史』年譜に病歴の記載が出てくる。最初は九年神経衰弱にかかり転地療法を勧められ、一年間の外遊で克服した。一六年印度梵語研修の折、心臓を病み避暑地シムラで療養している。十八年には香港でアメーバ赤痢に感染して治療を受けた。二八年トルコ訪問時コンスタンティノープルで体調を崩し入院をしている。いずれも回復後は超人的な日程をこなしているので、元来は強い体力の持ち主であった。しかし年齢とともに、糖尿病と膀胱癌治療の記述が多くなる。四二年には東大病院で膀胱切除手術を受けた。

敗戦を予期しながらも、骨を埋めるつもりで中国に渡ったのであったが、満鉄大連病院に入院することが多くなる。

三〇年近く大連で暮らし偶然同じ船で帰国した富永孝子（大連高等商業学校校長徳重伍助の長女）の著書に「大連のルーズベルト」と題し、「大連にルーズベルトの幽霊が出た」とする話題を記している。

「白麻の背広を着た長身、銀髪の堂々たる紳士が、ステッキを手に散策をしていた。風貌が死んだ米ルーズベルト大統領にそっくりなのに仰天した目撃者は、紳士が西本願寺にはいるのを確かめ、その人が大谷光瑞であることを知った」（『大連・空白の六百日』）

同書には光瑞が大連を愛し「世界のどこよりも大和ホテルの一室が最も気が安まる」と言い、常宿としていたことを綴っている。また光瑞が「大連高等女学校」を設立した折、私立の校名に大連の名称は与えないと関東庁が許可しなかったが、光瑞自身が出向き認めさせた。また光瑞の大連別荘「浴日荘」の円型ドームが陸軍飛行場の離着陸に支障があると抗議されたが、光瑞は「こんな建物さえ飛び越せないような技術で、日本が戦争に勝てると思うか」と一喝したというエピソードを載せている。大連在住日本人のなかで著名人であり、関東庁や軍部に

も遠慮ない言動をしていたことが分かる。そのほか「インド・カシミール地方に日本青年団十万人の大移住計画」や終戦直後「不足している石炭や米は秦皇島・葫蘆島（対岸の大陸都市）や営口（渤海湾最北の港湾都市）に相当あり、ソ連軍司令官に話してソ連に押さえられている船で運べばよい」など、自説の解決策を紹介している。

連合国によるポツダム宣言発表後、八月八日ソ連は対日宣戦を布告、翌九日には一五〇万人という大戦力で満州・南樺太に侵攻した。満州を防衛するはずの関東軍は精鋭部隊を太平洋戦線に引き抜かれ弱体化、しかもソ連の進撃前に満州南東部に後退していた。取り残された日本移住民は突然の侵入になすすべなく、大混乱のうちに南に逃れ、九月初め難民化した日本人が大連に集まってきた。ソ連軍は一八日新京一九日奉天そして早くも二二日大連に進駐した。

当時人口八〇万人（日本人二〇万人）の、元々露国が建設した西欧風都市大連は、一時ソ連軍・米軍・国民政府軍・共産党八路軍による四巴の争奪戦になった。市政の主導権が移行するたびに混乱が生じたたが、二月の米英ソ三国によるヤルタ会談の密約合意がものを言い、日露戦争で失った大連・旅順の租借権をソ連が取り戻した。また満鉄の中ソ合弁経営が始まりソ連軍の統治が固まった。

しかしソ連軍兵士の暴行・略奪、国民党と共産党との激しい内戦の余波がここにもおよび、統治権の争奪争いが続いたので、在留邦人は混乱するばかりであった。一〇月には軍港都市旅順の居住日本人四万人に退去命令が出され、四〇㌔離れた大連に避難してきた。そのため大連の日本人は一挙に急増、物資の不足により物価が高騰した。一〇月初め地震が発生、電気ガス水道が満足に使えず、また糞尿の処理も深刻な問題となり、在連日本人を悩ませた。

光瑞は二一年一二月に退院し本願寺関東別院で正月を迎えたが、二月再び入院した。四月には関東別院はソ連軍により接収された。六月光瑞は当時の共産党系市当局に、国民党重慶政府のスパイ容疑で一時拘束された。重慶政府のスパイと思われる人物が、関東別院に出入りしていたことからであった。七月中旬ソ連軍により光瑞に容疑なしとして釈放された。

症状は一進一退を繰り返し、二二年二月三度目になる満鉄大連病院に入院した。整然とした街並、木々と海に囲まれた大連をこよなく愛した光瑞であったが、やむなく治療のため日本帰国を決意する。

終戦後の在外日本人の引揚は四五年九月南部朝鮮から始まり、翌年三月には朝鮮地域は終了した。次の地域として、満州が考えられた。ソ連軍の突然の侵入に対し関

東軍に守られもせず、「王道楽土」を目指した開拓移民は逃げまどい難民化していた。冬の満州の酷寒でしかも極端な食料不足の中、なんとか生き延びる満州邦人の一刻も早い救済と引揚げが望まれた。

在満日本人会会長高碕達之助（元満州重工業総裁後岸内閣通産大臣日ソ漁業・日中総合貿易各日本代表）らの尽力で、満州からの引揚は四月から開始された。北満から始まり中満の順で、引揚船により大連から佐世保港、葫蘆島（渤海湾北部遼寧省錦州郊外）から博多港に帰国した。この間の帰還者は百万人と言われる。

最南端に位置する大連の引揚は最も遅く、四六年一二月から始まった。第一船は永徳丸・辰春丸に各々三千人あわせ六千人を乗せ佐世保港へ入港した。翌一月からは配船が本格化、一八便で六万人が帰国した。

二月に入るとほぼ毎日引揚船が到着、光瑞は二月最終便の遠州丸に乗船することになった。監禁時保釈に動いたソ連軍には了解を取ったが、国民政府のスパイと疑った中国当局には秘密裏に乗船することにした。

本願寺門徒の中から選んだ北海道出身の一家の父になりすまし、偽名での乗船であった。入退院を繰り返した光瑞は歩くことさえおぼつかない様子であった。

同じ日の後から出航した信濃丸という貨物船に乗り帰国した松下満連子の『再見大連』によると、当日の空模様は「空気さえも凍っているような寒さなのに珍しくほっかりとした牡丹雪が降っていた」という厳しい天候であった。『大連・空白の六百日』を書いた富永孝子によると、偶然にも光瑞と同じ船に乗り合わせ、「双方から腕を支えられ、やっとタラップ昇って行った」と乗船時の衰弱した光瑞の様子を書きとめた。

同著によれば、引揚船遠州丸はあちこちに赤錆が浮き出し、窓のない貨物船であった。乗船後は船底の畳一畳に三人が割り当てられ天井の高さは一メートル二、三〇センチしかなかったので、一八〇センチを超す光瑞には苦痛であった。しかも「人いきれで船底の温度が上がり冷えた鉄板の天井一面に水滴が溜り、それが膨れ上がると落ちてくる」ので、「まるで雨の日の軒下に立っている」さまであった。

食事は粗末なわずかばかりもので、美食家の光瑞にとっては病弱の身でしかも狭く多湿な悪環境下では満足に食べられなかったであろう。

東シナ海から対馬海峡に入ると船は大きく揺れ、波しぶきは甲板を洗うことさえもあった。船内で二人の帰国者が日本の土を踏む前に亡くなり、弔笛に送られた柩は海に落とし水葬にされた。

大連から佐世保港まで通常五日間であるが、富永によると光瑞の乗った遠州丸に伝染病患者が発生し二日間船内に足止めされ、佐世保に上陸できたのは三月七日であった。船旅を好んできた光瑞にとって最悪の旅であった。

佐世保港浦頭には弟光明や室内部長らが出迎えた。入国手続きや伝染病予防処置を受けた後、佐賀嬉野国立病院（元嬉野海軍病院）に入院した。患部の治療と引揚船の粗末な食事・蒸し暑くすし詰めの狭い船底という過酷な八日間を過ごし、先ずは体力の回復と休養が必要であった。

一週間近く入院し、列車で大分県別府市の北にある亀川国立病院（元亀川海軍病院）に移った。二病院とも海軍系国立病院であり、おそらく大連で懇意にしていた海軍将校の配慮によるものであろう。転院は温暖で豊富な温泉を好んだことや、別府港から神戸航路が出ていることなども考慮された。

三月二四日京都大学病院に入院のため、船で別府から神戸に向かった。一か月半入院し治療を受け、五月中旬退院した。その翌日には終の地と決めていた別府に再び戻り、国立亀川病院に入院した。

別府は日本有数の温泉地であり、その中でも鉄輪（かんなわ）温泉は坊主・白池などと称する地獄があり、随所に噴煙が立ち昇る源泉の豊富な一帯であった。しかも瀬戸内海により冬も温暖であり、新鮮で豊富な野菜・果実や魚介類に恵まれていた。世界各地を訪れた光瑞がここを最終の地に選んだ。

国立病院を二か月ほどで退院後、光瑞を最後まで支えた鉄輪にある温泉旅館の離れに滞在した。広さは三室しかなく手狭なため、支援をする料亭店主から土地（現大谷公園）の提供を受け自ら別邸を設計した。自身の居住する三室と秘書らの使用する四室計七室建坪三十坪弱のこじんまりした木造家屋であった。一二月に完成年末に移り、二三年正月は新築の別邸で迎えた。

病気と闘いながらもじっと床に伏せている光瑞ではなかった。秋になり次第に体力が回復した一一月には、大分を始め、福岡・佐賀・熊本・鹿児島・宮崎各県の知事を訪問、産業の復興について助言をして回った。

八五　別府国際観光計画

数週間という短期間でまとめ別府脇市長を驚かせまた市議会でも講演した「観光都市建設私案」は、世界各地の著名な観光地を視察してきた光瑞ならではのものであった。

京都大学病院を退院後、引き続き別府国立亀川病院で療養中のわずか二週間という短期間で作成した「世界に名だたる大観光地を目指す」別府都市計画は、中国の発展を構想した『興亜計画』と同様な手法で作成、具体的に次の三二項目を提案した。

一　新都市計画を速やかに決定せよ

計画は別府市を含む速見郡を想定広範囲とせよ。
特に鶴見岳西の由布院を加えたのは卓見である。
別府の発音が難しく「速見市」に改称する。
二　北豊岡に旅客港築港北隅日出港は工業港とせよ
旅客港は中心地近くに、工業港は遠方にすべし。
三　鉄道は国道と海岸の間に移設し現線は廃止
市街中心を鉄道で分断されることを避ける。
神戸は高架にせざるを得なかった。
四　日出と大分間は複々線化し電化せよ
観光地の煤煙を無くすため電化の必要を説く。
五　山麓に遊覧道路と南北連絡道の新設
自動車社会を予測し観光と居住者に便利を提供。
六　道路幅は四〇㍍最小でも一〇㍍とせよ
ここでも自動車の普及を既に予見し提案。
七　南北緑樹地帯と住宅・商業地区は中間に配置
新設市営市場により食料品は一括購入が可能。
八　手工業は随所に配置、機械・重工業は遠隔地に
騒音と空気汚染を考慮した提案。
九　煤煙は炊事・暖房以外禁止せよ
料理は温泉の蒸気を使えばさらに減じられる。
一〇工芸品（美術品）を盛んにせよ
土産品は竹細工・漆品・陶磁器・金銀など金属製品・石細工・軽重皮革など名工を集め製造。
一一低廉な動力・熱源の供給
地獄の噴気は無尽蔵で有力な動力及び熱源。
一二市内農業は米作から野菜・果樹・茶花に変更し観光客の欲するものを供給させよ。
冬季促成栽培は温泉熱、夏季抑制栽培は山上で。
欧米人用に洋種柑橘類・洋梨・ビワ・柿を奨励。
茶は雲霧多き由布院で栽培将来紅茶を考慮せよ。
一三清涼飲料の製造
外人はエビアンなど天然水を皆飲む。
一四旅館療養施設の新設
郊外の空気の良い山間・田野に外人用旅館建設。
温泉は引水する。療養所は国立病院医師に依頼。
一五避暑客対策
六百㍍の志高湖は三度低い。ホテル建設に適。
一六山頂・山下に気象観測所設置
科学的観測により天気予報を発する。
一七外人用娯楽施設の充実
夕食後音楽・映画、昼テニス・野球・競馬競犬。
一八食事は精美に提供
日本郵船を退船したコックを招聘する。
一九外人の送迎は自動車を主力とせよ
バスは一人一席の座を確保する。
二〇路面は舗装が必要
主流となる自動車には舗装道路が不可欠。
二一花木を移植せよ

都市美化には四季に咲く花木が最適。
二二狩猟は遊覧者に危険が及ぶので禁止せよ
特に禁猟区を設け違反者は厳罰とする。
二三墓地の集約統合
外人に非文化と映り整理して清潔な西洋墓地に。
二四浴客には半月ごとに課税（入湯税）せよ
観光客向け諸政策の財源とする。
二五全世界に別府の広告を行え
京都・日光と同列に別府が思い浮かぶように。
二六米国航路客船の寄港
その為横浜港同様吃水九㍍岸壁二百㍍の築港
二七九州の観光地と一体化
阿蘇・耶馬渓・臼杵大鍾乳洞と結び付ける。
（阿蘇とは六四年やまなみハイウェイで一体化）
二八都市の清潔化
外人は衛生を重視。糞尿肥料を嫌う。蚊蠅駆除。
二九建坪制限の撤廃
面積制限を撤廃、大規模ホテル建設を助成。
三〇新築建物は土石セメント煉瓦、木材は内部のみ
外壁は防火のため不燃質とする。
三一治安の確保
警察と協力強盗など取り締まり徹底不安一掃。
三二観光協会の常設
宣伝・案内の外、市の諮問機関の役割も担う。
引揚者であった脇市長が「決して抽象的でなくて標高・水深・距離など一体なんどき研究されたものか、一々数字を挙げての説明」であったと驚かせた。別府に来て僅かな期間のことであり光瑞は「将来別府は素晴らしい街になるであろう。ここを自分の永住地にしたい。将来大発展が約束されているから自分もそのためには協力を惜しまないから、市長として大いに頑張ってもらいたい」と述べ、浄土真宗本願寺派の門徒でもある初代別府市長を感激させた。
この計画が未だ戦後の混乱した社会情勢の中、三〇～五〇年先の別府だけでなく、九州全域にわたる観光地の入口とする提案であった。市長は光瑞の計画に得心し市政に反映させるため、亡くなるまで十数回の面談や散歩のお供をして、光瑞の構想緒言を書き留めた。
温暖で風光明媚な別府には古くから熱心な真宗門徒が多く、宗主辞任後これまでも支援を仰ぐ光寿会設立や会員のために幾度も訪問して、宗教講義「他力安心の極致」や時局講演「欧州戦争と我国民の覚悟」などを話してきた。病身ながら脇市長が記述したように、「将来の大発展が約束されており、別府は素晴らしい街になる」という、世界の有名な観光地を巡り歩いた光瑞の自信に満ちた言葉に励まされた。

二三年市長から市議会堂で「観光都市のあり方」の講話を依頼され引き受けた。一時間の講演内容は第一に「別府市」を「速見市」に変えたほうが良い、次に北の日出町（大型船寄港の築港）と西の湯布院（風光明媚な山間温泉地）を合併して大観光都市を建設するなど、「観光都市建設私案」と同様な提案をわかりやすく講演した。市の財政不足とインフレ・食糧難の社会情勢の中、市長の努力はあったもののほんの一部しか実現できなかった。自動車社会を見通した光瑞の道路計画や大型客船の寄港可能な築港など思い切って実施していたならば、光瑞が夢見た世界に名だたる大観光地になっていたであろう。

七五年を経た今日光瑞私案を読んでみると肯ける提案が多くあり、別府・九州の観光や自動車社会への対応など将来予測が的確であったことに驚かされる。

八六　遷化

脇市長によると、光瑞は持病について「私には天下の名医小野寺博士（国立病院長）がついて下さる。悪くなったら博士に手当をしてもらえば良い」と平然と述べ「少しの不安さえも持たなかった」とその印象を語っている。さらに「医術に生命を託した結果ではなく、篤い信仰心によったものである」と推測し、信仰と科学とは一致したようであると思えた。

二三年に入ると光瑞自ら「私の病気は時折悪化するようだが、尿意を催すようなものです」と市長に語ったように、症状は一進一退を繰り返しながら次第に重くなる。

九州各県を巡回した疲れからか二三年一月下旬一時病状が悪化し、その知らせに弟光明が見舞いに駆け付けた。その後探検隊員であった側近の橘瑞超や堀賢雄らも見舞いに訪れた。その後まもなく回復し以前の生活に戻った。八月に入り体調が急変し亀川病院に一週間入院治療を受けた。それでも夏の終わりには回復し退院、九月には九州各地の視察に出かけるまでになった。

しかしこの時の無理をした旅行が症状を悪化させた。

一〇月四日危篤状態に陥り、五日鉄輪別邸で亡くなった。人伝に聞いたとしたうえで、脇市長は臨終の模様について「願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず。仏智無辺にましませば、散乱放逸も捨てられず」のくだりを唱誦されつつ大往生されたと記した。臨終には大谷光明夫妻・田丸道忍（後宗会議長）・藤音得忍（後執行長）・甲斐和里子（足利瑞義姉京都女子大創立者）らが立ち会った。

最期に光瑞が唱えたのは、三帖和讃の一つ「正像末浄土和讃」である。この和讃は宗祖親鸞が八五歳の時、聖徳太子の夢告を受けて残したものである。

釈尊滅後五百年の正法期には教・行・証が備わるが次の千年の像期では教・行はあるが証（さとり）を得る者がいない。末法では教のみあって行・証を欠く。時代は既に末法に入り、皆に覚醒を促したものである。

脇市長は息を引き取る間際のこの読誦を、「光瑞氏の御信仰をもって猶罪業深重を自責され、氏の英邁をもって散乱放免と自覚されておられた」と解釈した。

果たしてそうであろうか。

敗戦後浄土真宗本願寺派は戦争に最も協力した宗派として、危機に陥っていた。門主大谷光照は二二年翼賛壮年団京都市団長であったため公職を追放された。光瑞自らも第二・三次近衛内閣「内閣参議」や小磯内閣「内閣顧問」の外、政府が主導した戦時協賛団体の中支宗教大同連盟ならびに興亜宗教連盟の「副総裁」の地位にあったことから、二三年四月公職追放令により追放処分を受けていた。

終戦直後から日本社会はインフレ・食糧難に見舞われ、復員・引揚者により失業者が急増、門徒の多くは日常の暮らしにも困窮し、先が見通せない苦しい生活が続いていた。

最期まで愛しその発展を願った中国は、大戦終結直後双十協定（四五年一〇月一〇日蒋介石と毛沢東の内戦回避・平和的建国の合意）それに続く停戦協定や政治協商会議開催により国内は落ち着くかに見えたが、四六年夏から国民政府軍と人民解放軍による内戦が以前にも増して激化していた。

東アジアは欧州列強の植民地から次々に独立を成し遂げた。しかし米国とソ連が対立する冷戦体制が次第に形成され、朝鮮・ベトナムでは国内は南北に分断され熾烈な内戦が続いた。四七年八月英国から独立した印度は、パキスタン（四七年八月）・ビルマ（四八年一月）・セイロン（二月）が相次いで分離独立を果たしたが、パキスタンの独立に反対した指導者ガンディーは一月末暗殺された。

まさに光瑞が日論んだ日本・中国・アジアにおける仏教の興隆並びに平和と繁栄は、終戦後三年経てもいまだ混沌としており、末法現象が各地で噴出していた。

宗祖親鸞は六〇歳を過ぎて関東から京都に戻り、『教行信証』の推敲や『三帖和讃』の執筆に専念した。

しかし旧仏教勢力の天台宗や奈良興福寺の専修念仏禁止の訴状により、越後に流罪となったころと変わらず念仏弾圧が続いた。一家の暮らしは困窮し、貧困生活を救うため娘二人と息子二人は父のもとを離れ、母恵信尼の生地越後に移る。しかも娘は出産後病気となり娘と孫の世話をするため、妻の恵信尼は親鸞と離別して越後に向かった。身近で世話をする末娘の覚信尼は下級公家日野広綱の側室となり覚恵（第三代宗主覚如の父）を生むが、

広綱が亡くなる不幸に見舞われ親鸞のもとに戻って来た。八三歳の時には自宅が類焼、舎弟の自坊に身を寄せざるを得なくなった。

そして生涯最大の不幸に直面する。八四歳の時関東の門弟間に意見対立が生じたため、その調停に跡継ぎの善鸞を名代として関東に派遣した。しかし親鸞の高弟たちに受け入れられず、善鸞は最後には幕府に「念仏は危険思想である」として訴えたとも伝わる。ここに至って父親鸞は善鸞を義絶し、高弟たちの言い分を認めたのであった。わが子を勘当するという人生で最も過酷な不幸に見舞われた。高齢の親鸞に相次いで襲う苦難の中で、この「正像末和讃」を完成させたのだ。

宗祖は巻頭で、正法・像法の時代が過ぎ既に末法に入っている。末世に生まれた如来の弟子は悲しみ泣くべしと悲哀する（末法の時機への覚醒を促す）

釈迦如来かくれましまして、二千余年になりたまう。
正像の二時はおはりにき、如来の遺弟悲泣せよ。

そして五濁の世になり釈迦の遺された聖道の諸教は失われたのだが、弥陀大悲の本願のみが弘まって、この願に誓われた念仏往生が盛んとなった、と歓喜する。

像末五濁の世となりて、釈迦の遺教かくれしむ。
弥陀の悲願ひろまりて、念仏往生さかりなり。

かくして仏の徳により浄土の菩提を得ることを喜ぶ。

往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲をう。
如来廻向なかりせば、浄土の菩薩はいかがせん。

この至上な幸せを得られるのも、弥陀大悲の往相還相二廻向の恩と、釈尊を始め三国七祖（龍樹・世親天親・曇鸞・道綽・善導・恵心僧都源信・法然源空）聖徳太子の善知識の本願を伝承してわれらを導かれた恩徳とは、身を粉にし骨をくだいても、謝恩せよ、と強く願う。

如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし。
師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし。

光瑞は死に際に当たり、『正像末浄土和讃』の最終句を誦して、弟光明や住職・門徒たちに宗祖親鸞の最後の願いを今一度言い残したかったのである。そのため宗祖親鸞が最晩年に編纂した「正像末浄土和讃」を選んだのではなかろうか。無念ながらこの和讃の途中で息絶えたが、和讃最後の「謝恩と希望」を後世に伝えたかったのである。

アジアの仏教興隆を目指した光瑞の遺言として、敗戦後の日本・内戦激化の中国・米ソ冷戦の狭間のアジア諸国の人々に対し、末法五濁の世ではあるが、仏の廻向により、仏を信じてこの混乱した社会を乗り切ってほしいという切なる願いが込められていた。

波乱の人生を送った大谷光瑞は、宗祖親鸞の法燈を引き継ぐ西本願寺住職としてまた浄土真宗本願寺派宗主管長として、息を引き取るまで和讃を呟きながら往生したのであった。

通夜には戸籍上の長子である第二三代宗主勝如上人大谷光照が京都から駆け付け参列し、火葬に立ち合った。八日光瑞は遺骨となって、京都西本願寺にやっと帰山した。

葬儀は翌月八日大谷本廟で行われ、遺骨は本廟内の祖廟に納められた。

享年七三歳、諡号は信英院という。

（つづく）

参考文献は次号に記します。

私の本州マラソン歴史紀行（東北編③―岩手県―）

安藤　剛

【岩手県：平泉に奥州藤原氏を訪ねて】

岩手県平泉に黄金の仏国土を開いた奥州藤原氏のルーツを訪ねて、宮城県と福島県のマラソン大会に参加しながら角田市の高蔵寺といわき市の白水阿弥陀堂を訪れた歴史紀行を前号（一六三号）に投稿してきた。

本号（一六四号）では、陸奥守源頼義の蝦夷征討戦「前九年の役」で陸奥蝦夷の酋長安倍氏と命運を供にした藤原経清の子清衡が、出羽俘囚長清原氏の内紛に乗じた「後三年の役」で奥羽を制覇して中尊寺建立を中心に仏国土を開いた平泉の地を、岩手県のマラソン大会に参加しながら訪れた歴史紀行を寄稿していきたい。

併せて、奥州藤原氏初代清衡の初上洛と平泉移転、中尊寺建立の背景、そして藤原経清が父とされる清衡の出自に抱いた疑問について、私的考察を纏めてみたい。

【中尊寺建立に込められた清衡の祈り】

藤原清衡は、嘉保年中（一〇九四～六年）に北上川上流の江刺郡豊田館から中流の磐井郡平泉に移住、柳之御所を構えて掘を巡らせた政庁を建設する一方で、長い戦乱で命を落とした御霊を鎮めて平和な極楽浄土を具現化する中尊寺の大伽藍を造営した。

天治三年（一一二六年）の「中尊寺供養願文」の二階鐘楼の段に、清衡の中尊寺建立に込めた平和の理念と祈りが述べられている。

「この鐘は、一音の及ぶごとに、千界どこにおいても、苦しみを抜き楽しみを与え、まったく差別ない。この衣関山では、官軍と言わず、エゾの民と言わず、戦死した者、昔から数え切れない。人間だけでない。鳥・獣・魚介類にして屠られたもの、昔から今に至るまで、これまた計り知れない。たしかに霊魂はあの世に行っているかもしれないが、その朽ち果てた遺骨は今もこの世の塵となってさまよっている。この鐘が大地を動かして鳴り響くのにつれて、この救いのない者たちの霊をみな浄土へ導き給わんことを」（高橋富雄著「平泉の世紀」より）

故無く罪なく命を落とした多くの冤霊の鎮魂の願いを鐘楼の洪鐘に託して、今日的な命題でもある非戦と恒久平和を、九〇〇年も前に清衡は主張していたのである。

清衡が関山丘陵に創建した中尊寺の真南に、二代基衡が広大な浄土庭園のある毛越寺を、三代秀衡が中尊寺の東に宇治平等院鳳凰堂を模した無量光院を建立した。

道の奥といわれる奥羽の中心部に、奥州藤原氏三代によって築かれた壮大な仏国土の理想郷であり朝廷に独立した黄金の都市平泉の栄華は、源頼朝の奥州征伐によって、わずか一〇〇年の短い命で消滅した。まさに国破れて山河ありである。

【平泉探訪サイクリング（十一月六日（土））】

東北六県のマラソン大会走破を目標に、宮城・福島・山形・秋田・青森を走り、残る岩手は、数次に亘る奥州藤原氏探訪の総括を兼ねて、二〇一〇年十一月に奥州市で開催される奥州前沢マラソン大会にエントリーした。

朝八時に埼玉の自宅を出立、スカイグルーの秋空が広がり、東北の紅葉が存分に満喫できそうである。

東北新幹線の座席ポケットにあったJR東日本トラベル機関誌「トランヴェール」の特集『武家政権の夜明けに輝く北の王者と都』に、これから向かう平泉に思いを馳せながら読み耽って小一時間、ふと我に返り車窓を見やると、丁度福島から宮城の県境に差し掛かっていた。

奥州合戦で源頼朝率いる鎌倉軍が平泉軍と対峙した阿津賀志山麓が眼下に広がり、濃霧の中に山麓から阿武隈川に向けて構築された防塁跡を探してみた。山越えすると霧は晴れ上がり、やがて雄大な蔵王が姿を現わした。

一ノ関駅で東北本線に乗り換え、二つ目の平泉駅に着いたのが一〇時半、駅前観光案内所でレンタサイクルを借り、平泉探訪サイクリングに向けてペダルを踏んだ。

東北本線の踏切を渡ると道端の白杭に「伽羅御所跡」とあったが、発掘調査跡らしきものは見当たらず、三代秀衡の御所跡未調査という立て札だけが立っていた。土地収用の問題や予算の制約もあるのだろうが、地下に埋もれたまま放置されている秀衡の屋敷が哀れである。

伽羅御所跡に隣接する「柳之御所遺跡」は、発掘調査後が埋め戻されて立派な芝生の公園に仕上がっていた。盛土の上に立つと、三六〇度の眺望が広がってきた。

東の北上川の彼方に連なる束稲山は、平安時代に山一面に桜が咲いて平泉を訪れた西行が「聞きもせず束稲山のさくら花吉野の外にかかるべしとは」と詠んだという。

柳之御所は「吾妻鏡」に記される平泉舘で、奥州藤原初代清衡の居館を三代秀衡が政庁に整備したといわれ、発掘された建物の跡に黒い砂利が敷き詰められていたが、傍らの壮麗な建物復元図や絵巻物の絵図と対比させながら、在りし日の平泉舘の姿を思い描いてみた。

案内に四方を区画する塀が発掘されなかったとあり、外敵の侵入を警戒する必要のない仏国土の恒久平和が希求された世界だったのだろう。一〇〇年後の奥州合戦で四代泰衡が館に火を放ち逃亡したが、まさか平泉が戦火に見舞われるとは思ってもいなかったに違いない。

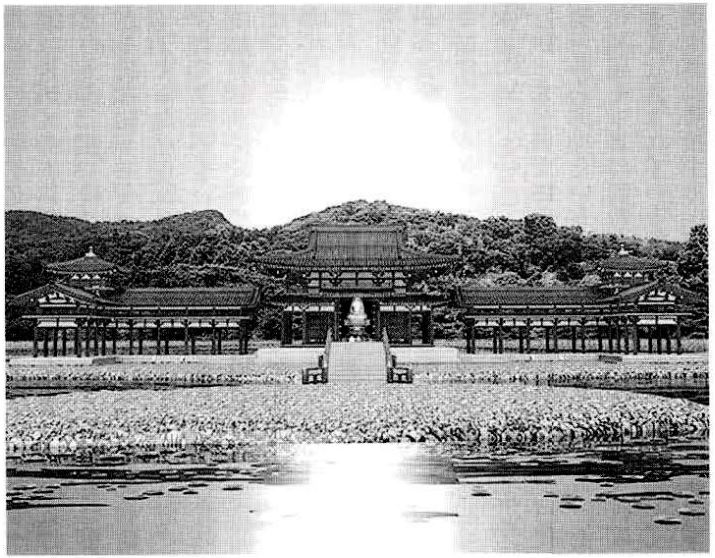
中尊寺へ向かう道筋に「無量光院跡」の発掘現場が見えてきた。発掘跡地の説明板に、秀衡が宇治平等院鳳凰堂を模したという朱塗りの寝殿造りの復元図が描かれてあった。平泉舘の柳之御所と秀衡館の伽羅御所の近くで、この一帯が秀衡時代の平泉の中枢だったのだろう。

田んぼの水が抜かれて干上がった浄土庭園跡と建物跡を一人巡りながら、左右に翼楼を伸ばした無量光院の復元図に、極楽を飛翔する鳳凰が西方浄土から舞い降りる姿を思い浮かべ、野晒しの礎石の位置関係と重ね合わせて、さながら発掘調査員気取りになっていた。

中島跡に立つと、西側の本堂内の阿弥陀如来を前にして背後の金鶏山に没する日輪に向かって合掌する秀衡の姿が浮かんできた。まさに西方浄土の世界である。

後日、ネットに無量光院復元CGを見つけた。夕日が背後の金鶏山の山頂に差し掛かり、光の帯が苑池に伸びていた。対面の東から上る朝日が池に反射して扉の開かれた本堂内に差し込み、堂内の阿弥陀如来像が美しく照り出される幻想的な光景が浮かんでくる。（左の写真）

無量光院復元CG（平泉の文化遺産　HPより）



時計は昼近くなっていた。これまで幾たび登っただろう中尊寺の月見坂を、明日のマラソンの準備運動のつもりで一気に駆け上がった。途中の東物見から衣川流域を眼下に、この後に散策する古戦場跡を探してみた。

月見坂の杉林が切れると、紅葉した広葉樹が陽を浴びて美しく照り輝き、本堂から金色堂までの境内で大勢の観光客が紅葉をバックに写真を撮り合っていた。

中尊寺は寺塔四十余の大伽藍で、奥州藤原氏滅亡後も頼朝の庇護を得て存続したが、建武四年（一三三七年）の野火で金色堂と経堂を残して伽藍は全焼したという。

中尊寺金色堂は、壁・床・天井・柱・屋根までが漆塗りに金箔を施して、皆金色の荘厳さと内陣一面を装飾する螺鈿細工の豪華さは、さすが国宝第一号である。

金色堂は、西方浄土信仰により阿弥陀三尊像を本尊に極楽往生を祈る阿弥陀堂として東向きに建てられたが、堂内の須弥壇に奥州藤原氏三代清衡・基衡・秀衡の遺体が納められ、地上極楽世界が実現するまで肉体を現世に残す葬堂として法華教的な信仰もあったのだろう。

三代の遺体が眠る須弥壇の夫々に、本尊の阿弥陀如来、両脇に観音・勢至菩薩、更に持国・多門二天と六地蔵菩薩の合計十一躰の仏像が祀られており、二天の四天王は東西南北に配されて仏法を守護する天部の像、六地蔵菩薩は地獄に落ちた人々を救済する大地の像である。

人は地獄に落ちると罪によって地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道の裁きを受けるが、六道夫々の地蔵菩薩が救済してくれるという。阿弥陀如来を本尊にお堂全体が極楽浄土で黄金一色の天上界に眠る清衡が、なぜ地獄の救い主とされる六地蔵を必要としたのだろうか。

平泉中尊寺金色堂



須弥壇内の清衡の遺体調査から、骨萎縮が見られ脳疾患による半身不随だったらしい。晩年の清衡は己の不治の病が兄弟相克の殺戮を重ねてきた怨霊の祟りであり、生前の悪行から地獄に堕ちる恐怖に駆られ、代受苦の六地蔵を自分の遺体の周りに配させたのかもしれない。死に臨んでなお苦悶する清衡の姿が浮かんでくる。

隣接する讃衡殿で、三体の巨大な丈六仏と中尊寺経、曼荼羅図等の宝物を鑑賞したが、精緻な紺紙金銀字交書一切経は、弥勒菩薩が現世に下生して一切衆生が済度される時まで、釈尊の遺教である一切経を経典に残すために、永遠不変な金で五三九〇巻が書写されたという。壮大で荘厳な清衡の仏教への帰依が偲ばれる。

境内の散策を終え月見坂を下山、国道四号線を北に衣川へ向かった。中尊寺の関山丘陵の北麓を東流して北上川に注ぐ衣川は、安倍氏が支配する奥六郡の最南端胆沢郡と国府側支配地の最北端磐井郡を境界しており、まさに朝鮮半島の三八度線である。穏やかな流れを眼下にモダンな衣川橋を渡り、蝦夷安倍氏の旧支配地に入った。

衣川橋の袂から左手に下りると「安倍一族鎮魂碑」が見えてきた。案内板に、清衡が平泉に移ってまもなく祖父安倍頼時の菩提を弔うため九輪塔を建立したとあり、この一帯が前九年の役で安倍軍が源氏軍を衣川に誘い込み、退路を絶って殲滅させた瀬原古戦場跡だとあった。

九輪塔跡から西へ一キロほど、道標を頼りにようやく田んぼの中に礎石だけが並ぶ「長者ケ原廃寺跡」に着いた（左の写真）。説明板に、北門跡と本堂跡と南門跡の礎石が並ぶ中軸線を南に延長すると、中尊寺が鎮座する関山丘陵の最高峰に到達するとあった。

長者ケ原廃寺跡（背景の丘陵が束稲山）



一〇世紀末に建立された安倍氏の寺院跡といわれ、本堂と西塔を囲む一〇〇M四方の築地塀を巡らせた格式は、当時既に高度な仏教文化を持っていた証しであろうか。

前九年の役は、安倍頼時が衣川以南に勢力を広げたことが要因といわれ、衣川北岸の長者ケ原廃寺跡はまさに安倍氏勢力伸張の拠点だったのだろう。東に束稲山、南に関山を望み、歴史の現場に立っている戦慄を覚えた。

衣川に沿って北西に延びる国道三七号線を約七キロの風を切るサイクリングは、思わず大声で歌が出てしまう。遥か前方に冠雪の焼石連峰が見えてきた。衣川の渓谷が狭くなり深くなり、やがて二股に分かれて、右手の北側に沿った山裾に「安倍館跡」の看板が見えてきた。

高さ九〇メートルの丘に館跡があり、安倍頼時の祖父の代から八〇年ほど居城だったという。今年夏に訪れた阿武隈川流域に住む安倍氏末裔のルーツについにやって来た感慨に耽ったが、人家まばらな普通の山村である。

稲束の後片付けをしている娘さんに安倍館への登り口を教わったが、時間も遅くなりそうで断念、すぐ近くの「磐神社」へ向かった。安倍館跡の北側の田んぼの中に杉林に囲まれた赤い屋根の小さな社殿が見えてきた。

参道の延長線は、奇しくも真南の安倍館の山裾に向かっているではないか。長者ケ原廃寺跡の南北を結ぶ聖なる線がここにもあった。

社殿の裏に苔生す巨岩が居座り、岩の上に小さな石祠が乗っていた。本殿はなくこの巨石がご神体で守護神アラハバキ（荒覇吐神）として尊崇されていたのだろう。

安倍館跡から真北に当たる磐神社の天空に煌めく北極星に向かって、一族の命運を掌る占星の巫女が、厳かに祈祷している光景が浮かんできた。

もと来た道を戻り、今日最後の訪問予定の「衣川柵」へ急いだ。安倍頼時が山頂にあった安倍館から平坦な衣川流域に拠点を移し、十八年間安倍氏の政庁が置かれ、前九年の役で安倍氏を破った出羽の清原氏が三代にわたり政庁を置いたといわれる衣川柵は、まさに父藤原経清と若き清原清衡が活躍した歴史舞台である。

下調べしていた地図が曖昧で、途中道に迷って衣川渓谷に入り込んでしまい、小雨も降り出して自転車を曳いて山越えするはめになってしまった。

薄暗くなってきてこれ以上の衣川柵探索は断念、関山丘陵の南麓を大きく迂回して、伝大池跡経由でようやく中尊寺登り口に戻ったのは午後四時を回っていた。

帰路に往路で訪ねた「無量光院跡」に立ち寄ると、背後に聳える金鶏山が、ちょうど美しい夕焼け雲に包まれていた。西の空の落日を背景に金鶏山と無量光院を結ぶ線上に立ち、秀衡もかくあらん、金鶏山に向かって滅亡した奥州藤原氏の冥福を祈った。

閉扉間際の「毛越寺」に辛うじて滑り込んだ。浄土庭園の池面に紅葉を映す夕闇迫る景観に、奥州藤原氏一〇〇年の栄枯盛衰に思いを馳せ、池端に立つ芭蕉句碑「夏草や兵どもが夢の跡」を、声を出して読みあげてみた。

傍らの毛越寺伽藍復原図に、大泉ケ池の正面に金堂円隆寺と左隣に嘉勝寺が、廻廊を両翼に広げた美しい姿で描かれていた。背後の北側の塔山の北延長線上に金鶏山が位置しており、当時の末法思想の流行で山頂に経典が埋経されたという。ここ毛越寺にも長者ケ原廃寺跡と巌神社と同じ南北を結ぶ聖なる線があった。

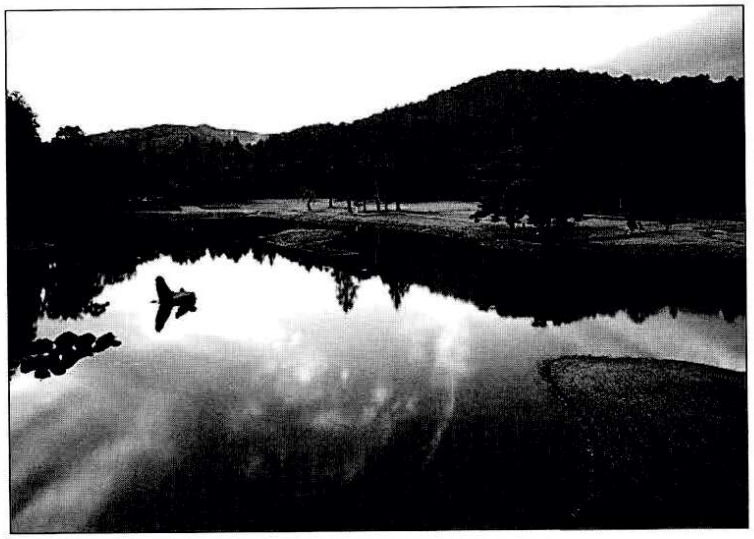
「中尊寺供養願文」に「即之四神具足之地也」とあり、清衡は陰陽道に基づく四神相応の都とされる平安京に倣って、背山臨水の平泉を新天地に求めたといわれる。

四神は星宿を神格化した霊獣で、北を玄武（丘陵）東を青龍（流水）西を白虎（大道）南を朱雀（湖）によって守られる地勢が長く繁栄するとされ、平泉は、北に関山、東に北上川、西に奥大道、南に低湿地を配した四神具足の地で、その南玄関に毛越寺が造営されている。

北を守る玄武は、長寿と不死の亀に、生殖と繁殖の蛇が巻き付いた形で描かれ、北にある冥界で神託を受け現世に持ち帰ると信じられている。毛越寺の北に当たる関山丘陵の金色堂に眠る清衡は、永遠と繁栄の玄武となり平泉の守護神とされていたのではないだろうか。

背後の塔山の天空に輝く不動の北極星を神格化した妙見菩薩は、薬師如来の化身といわれているが、奇しくも毛越寺の本尊は薬師如来である。毛越寺こそ道教と仏教が融合した宇宙を具現化した世界なのかもしれない。

毛越寺の浄土庭園（毛越寺HPより）



【奥州前沢マラソン大会（十一月七日：午前）】

一ノ関駅前ホテルの窓ガラスの結露を拭うと、濃霧の中に紅葉した大木の影が幻想的に浮かび上がってきた。

始発電車にランナーの姿は数人だけ、濃霧のなか長い汽笛を鳴り響かせていた。昨日散策した衣川を渡るとまもなく、平泉の北隣の前沢駅に下車、大会専用のシャトルバスが私ら二人だけなのにすぐ発車してくれた。

大会会場のスポーツセンター周辺も一面濃霧に包まれて肌寒い。霧の中に「ようこそみちのく前沢路へ」と書かれた歓迎横断幕の文字が浮かんでいた。

着替えに入った体育館は、座る場所がないほどの混みようで、ステージ前の隙間に腰を下ろしてゼッケンを付けていると、まもなく頭の上で開会式が始まった。

ゲストランナーの尾崎朱美さんの素敵な笑顔を間近に拝めたが、隣に座って着替えていた男性がやおら立ちあがって選手宣誓し始めたのには驚かされた。

今日の出で立ちは、世界の子供たちを支援するPARACUPの青いTシャツに白のテニス帽、黒のアームウォームに手袋とロングタイツの防寒スタイルである。

約三〇〇〇人が参加する大会で、テントが軒を連ねる運動場を五周ほど走るうち、霧も薄くなり傍らの山並みの輪郭が浮かび上がってきた。まもなく我々ハーフ組と三〇キロ組の計九〇〇人が一緒にスタートした。

まず前沢市商店街のメイン通り二キロの往復である。スピードをセーブして走る三〇キロランナーが一緒で比較的ゆったりした流れだったが、それでもキロ五分三〇秒は私にとってはハイペースである。

スタート地点近くに戻り、いよいよ胆沢方面への上り坂コースに入った。大会資料でこの坂が一〇キロ地点まで続くことは承知しており、先月の三沢マラソンの反省から、完走目標のマイペースに心掛けた。

長い上り坂にペースダウンして五キロ地点で二九分、霧の中の山道をひたすら走り続ける情景に酔い痴れていた。霧の切れ間に見える棚田も、昔は一面の荒野だったのだろう。この大地を駆け巡る安倍貞任率いる蝦夷騎馬軍団の勇壮な姿を思い浮かべてみた。やがて薄日が差して霧の中に色付いた山並みが美しく映えてきた。

二キロほど続いた急な上り坂がようやくだらだら坂に変わった。キロ六分三〇秒台に落ちていたが、ようやく平坦な田園風景が開けた一〇キロ地点で五八分丁度。帰りの下り坂を考えれば、二時間が切れるかもしれない。

田圃の水路に架かる橋の欄干に「寿安堰」の文字が一瞬視野を横切った。戻ってまで確認はしなかったが、今日のマラソンを終えた後にもし時間があれば、水沢市内の後藤寿庵の史跡を訪ねてみたいと思っていたので、その寿庵が造った堰を見られただけでラッキーである。

後藤寿庵は禁制のキリシタンだったため、人格と才能を認める主君伊達政宗が幾度となく転宗を勧めたが、最後まで信仰を捨てず、政宗の許を去った武将である。

政宗の海外への夢実現の遣欧使節に支倉常長を推薦したともいわれ、荒れた領地の灌漑事業に尽力して寿安堰を後世に残した寿庵の偉業にしばし思いを馳せていた。

やがて左右に開ける田園風景の中に、防風林に囲まれた農家が点在する景色が広がってきた。この胆沢平野の散居集落は、富山の礪波と島根の出雲と共に日本三大散居集落といわれ、日本の田舎の原風景である。予期せぬ絵画のような美しい景観の中を感動の走りは続いた。

前後に入れ替わるランナーの中で、下着のような薄いシャツに三〇キロのゼッケンを付けた白髪のランナーが気になっていた。苦しそうに身体を傾けて走る姿に、本当に三〇キロを走り切れるのかと心配になっていたが、並走していると、外見では窺い知れない逞しい精神力の持ち主のようで、ライバル心が掻き立てられていた。

ハーフの折り返しで三〇キロ組の彼らと別れて下り坂になったが、上り坂のダメージが残っているのか、もうひとつスピードに乗れない。キロ六分前半のペースでは二時間切りはとても無理と思うと気が楽になってきた。

十五キロの給水所のバナナで体力補給、十六キロの残り五キロで一時間三七分、二時間一桁台はいけそうだ。

十七キロ付近から同じピッチの足音がすぐ後ろにピッタリ付いてきた。同時に着地する足音が一つになり、規則正しく響いてくる。走りが少しでも遅れると、着地音がずれて自分が負けたような気になる。足音が乱れないように相手に合わせて走ろうと意識しはじめた。

どんな人なのか振り向いてみようとも思うが、意識していることを知られそうで出来ない。相手が追い抜こうと並び掛けてきたが、ピッチを上げて前の位置をキープした。不思議な緊張感が四キロも続いた。

市街地が近くなり、沿道の声援に応える声から若い女性らしいことが分かった。街中に入りゴールに向かう直線道路に右折するカーブで、内側から抜かれ先行されてしまった。気持ちが通じ合って並走してきた仲間に裏切られた思いで追走したが、追い付けぬままゴールした。

完走証を受け取っていると「目標に頑張れました」と声掛けてきたので「足音が一緒で緊張しましたよ。お蔭で最後まで走れました」と互いの健闘を讃え合った。

後半ピッチを上げて二時間七分四五秒、総合順位三七九位、藤原経清や安倍貞任や源義家が駆け巡ったであろう山野を走れた充実感にしばし浸っていた。

着替えも早々に、具だくさんのなめこ汁で暖をとり、参加賞の前沢牛弁当はザックに仕舞い込み、午後の胆沢探訪サイクリングに向け、前沢駅行きのバスに急いだ。

【胆沢探訪サイクリング（十一月七日：午後）】

前沢駅から二駅北の水沢駅に下車、駅前観光案内所でレンタサイクルを借り、いよいよ平泉前史の胆沢探訪サイクリングである。四号線をひたすら北へ走らせ、辺りはりんご畑に変わり、一時間程で胆沢城跡に着いた。

「胆沢城」は、朝廷から派遣されて安倍氏の祖といわれる蝦夷の指導者「アルテイ」を倒した征夷大将軍坂上田村麻呂が八〇二年に築いた古代城柵で、多賀城から鎮守府を移して蝦夷を抑える最前線基地として後三年の役の一〇八三年頃まで存続したといわれる。

広々した胆沢平野のど真ん中に発掘調査中のテントが張られていた。案内板に、一辺九〇ｍの土塀に囲まれた政庁の前門から外郭南門まで一三〇ｍの道路があったとあるが、貢ぎ物にやって来る蝦夷を威圧する支配者の舞台装置であろうか。台状に土盛りされた正殿は約二〇〇平米の礎石建物で、基壇の痕跡がなく土間に机や椅子を使っていたのでは、と説明があった。

北国の荒涼とした原野に、常時七〇〇人の兵士が交代で駐屯していたというが、遠国から徴用され、まさに四面楚歌の状態で敵地の中に孤立して、蝦夷と対峙し続ける心細さは如何ばかりだったろう。

傍らの大木から降り注ぐ枯れ葉の舞を眺めながら、参加賞の前沢牛弁当を広げて古代ロマンに夢を馳せた。

次は清衡の「豊田館跡」である。四号線を南下、東に左折し東北第一の大河北上川に架かる桜木橋を渡ると、路肩に「北上夜曲発祥の地」の木碑が立っていた。高校卒業の謝恩会にクラスで歌った懐かしい愛唱歌である。

史跡　胆沢城址



一九四一年当時水沢農学校の生徒だった菊地規さんの作詞で、北上河畔は通学路だったという。行き交う車の騒音に紛れて「匂い優しい白百合の濡れているようなあの瞳」と歌いながら、一時間程で豊田館跡に着いた。

館跡の入口に「藤原清衡公豊田館跡」の石柱が立ち、「藤原経清、藤原清衡ゆかりの地」と書かれた幟が林立していた。標高五〇mの高台に上ると、眼下に胆沢平野が広がっていた。案内板に、藤原経清とその子清衡がここ豊田館に住んでいたとあり、経清は初め宮城県亘理地方を領する国府の官人だったが、岩手県奥六郡の安倍頼時の娘婿となり、ここ豊田館に移り住んだのだろう。

「前九年の役」の最中にこの地で生まれ育った清衡は、安倍氏に味方して斬首された父経清の死後、敗将の子としてこの地で屈辱の日を送り、やがて養子に入った清原氏の内紛で起きた「後三年の役」に勝ち残り、清原氏と安倍氏の全領地を掌握して、後に豊田館から衣川を越えた磐井郡平泉に移り、仏国土の理想国家を建設する。

豊田館の広場に方角が刻まれた石碑があり、平泉の真北に当たるとあった。昨日の平泉探訪サイクリングで立ち寄った長者ケ原廃寺も関山丘陵の真北、磐神社も安倍館の真北、二代基衡の建立した毛越寺も清衡の娘徳姫が建立したいわき市の白水阿弥陀堂も南向き、やはり北極星を世界の中心とする北辰信仰があったのだろうか。

豊田館跡の住所は江刺区岩谷堂、神の住む岩屋の意味で、ここにも磐神社の巨岩に通じるアラハバキ信仰があったに違いない。安倍氏の本拠である衣川から真北二〇キロに位置しており、北上川左岸に張り出すこの高台こそ蝦夷安倍氏の聖なる地だったのではないだろうか。

先ほど訪ねてきた胆沢城は、北上川を挟んで豊田館の真西に位置しており、坂上田村麻呂は蝦夷の聖なる岩谷堂に睨みを利かせる位置に城を築いたのかもしれない。

一週間後の茨城県坂東市の「いわい将門マラソン」に参加した折、天慶二年（九四〇年）の平将門の乱で、国府軍を破り関東全域を手中に収めた将門が、新皇を自称して独自に除目を行い中央から独立を宣言、本拠を下総国豊田郡から岩井郡（坂東市）に移したことを知った。

奇しくも一五〇年後に奥羽を制覇した清衡が本拠を江刺郡豊田館から磐井郡平泉に移したが、偶然だろうか。

中尊寺経蔵別当職を任じた補任状で所領に与えた骨寺村に「岩井郡在之」と付記あり、磐井郡は清衡の頃には岩井郡と呼ばれていた。清衡は、東国の救世主となり東国の独立を標榜した平将門の再来を自負して、将門に倣って豊田から岩井に本拠を移したのであろうか。

高橋富雄著「平泉の世紀」に「清衡が豊田館を移して平泉府館を定めのも岩井の地である。平仄があいすぎる。偶然以上のものを考えないわけにはいかない」とあった。

【藤原清衡に関する私的考察】

①平泉開府までの空白の八年間

みちのくは道の奥、陸奥は陸の奥の意といわれ、平安京の都人にとって東国の地の果てであり、みちのくに住む民は、野蛮な異民族と見做され、大化の改新以後には、律令体制にまつろわぬ蝦夷と侮蔑されてきた。

陸奥の蝦夷酋長安倍頼時は、岩手県中部に位置する奥六郡を支配して朝廷への貢租を怠り陸奥国府と対立、永承六年（一〇五一年）に源頼義・義家親子率いる国府軍との間で「前九年の役」が起り、当初国府軍は苦戦するが、出羽の俘囚長清原武則・武貞親子が頼義の要請に大軍を率いて参戦、康平五年（一〇六二年）の厨川の決戦で国府軍が勝利して安倍氏は滅亡した。安倍頼時の娘婿の藤原経清は斬殺され、妻の安倍氏女は幼い清衡を連れ子に敵将の清原武貞に再嫁した。

奥羽の覇者となった清原氏の当主武則・武貞親子の死後、永保三年（一〇八三年）に清原氏が二分して「後三年の役」が起きる。武貞の先妻の嫡男真衡と後妻（安倍氏女）の次男家衡と後妻の連れ子清衡が対決、勝利した真衡が急死すると、義家の戦後裁定を不服とする家衡が清衡の館を襲撃、義家の支援を得た清衡が、寛治元年（一〇八七年）に家衡を破り奥羽の支配者となった。

清原氏の内紛に乗じて奥羽（白河以北の東北全域）を制覇した清衡が、平泉に本拠を移して中尊寺を建立した供養願文に「徼外の蛮陬たりと雖も界内の佛土と謂うべし」と詠い、未開の野蛮な外社会に仏国土の平和郷を築いたのは、嘉保年中（一〇九五年前後）といわれる。

清衡が奥羽の覇者となって、平泉に仏国土を開府するまでの八年の間に、何があったのだろうか。

八世紀に入り朝廷の収奪に抵抗する東国蝦夷の反乱が多発、朝廷は鎮圧のため征夷軍を数世紀に亘り派兵してきたが、奥羽の蝦夷社会を制覇した清衡は、かかる朝廷との間にどのような関係を構築していったのだろうか。私の好奇心は、清衡の空白の八年間に誘われた。

②平安京の摂関政治と院政

桓武天皇が延暦十三年（七九四年）に長岡京から山城国の平安京に遷都した。平安時代の幕開けである。

桓武の皇位継承に功労のあった藤原氏が国政の中枢を担い、貞観八年（八六六年）に太政大臣の藤原良房が臣下初の摂政になると、藤原北家良房流が天皇の外戚として摂政・関白の要職を代々独占する、摂関政治である。

寛仁二年（一〇一八年）政敵を失脚させ政権を掌握して栄華を極めた藤原北家摂関家の道長の歌がある。

この世をば　わが世とぞ思ふ　望月の
欠けたることも　無しと思へば

前年に摂政を長男頼通に譲った道長は、二男教通を権中納言、左大臣に従兄の顕光、右大臣に叔父の公季、三人の娘を一条天皇、三条天皇、後一条天皇の中宮に入れて、まさに道長の摂関全盛期であった。

道長の子頼通も関白を五〇年務め、父と共に藤原氏の全盛期を築くが、自身が女子に恵まれず、後冷泉天皇の皇后にした一人娘にも皇子が産まれず、頼通の晩年に藤原氏を外戚としない後三条天皇が即位した。

後三条天皇は、翌延久元年（一〇六九年）の荘園整理令を摂関家領にも適用を拡大、国司の財源となる公領を圧迫する荘園を整理し、国衙領に戻すだけでなく院や天皇家への荘園の寄進を集中させ、皇室の財源を強化して権威の回復を図り、摂関家の経済基盤に打撃を与えた。

更に桓武天皇以来の懸案である征夷完遂のため、翌延久二年に陸奥守源頼俊を派兵し、蝦夷を攻略して下北半島まで本州全土を支配下に入れ、天皇親政を進めた。

延久四年に病のため譲位すると、母と妻が藤原氏の白河天皇が二〇歳で即位する、父に倣って天皇親政を押し進め、承保二年（一〇七五年）に荘園整理令を発布して荘園管理に注力する。頼通の長男師実が摂関政治を復活させるが、応徳三年（一〇八六年）に故後三条上皇の定めた皇位継承を無視して実子善仁親王に譲位、白河上皇となり幼い堀河天皇を後見する院政が始まる。

③清衡初上洛の背景

白河上皇による院政が始まった五年後に、後三年の役で奥羽の覇者となった清衡が上洛してきた。

関白師実の子師通の日記「後二條師通記」の寛治五年（一〇九一年）十一月十五日の条に「盛長朝臣来云、関白殿御使也、清衡（陸奥住人也）馬二疋進上之由所仰也」朱註に「清衡始貢馬於殿下」とあり、清衡が摂関家に初めて貢馬したという。当時の最高献上品である奥州産の駿馬二頭を曳いて清衡の中央政界への初登場である。

清衡の初上洛の目的は、なんだったのだろうか。「後二條師通記」の貢馬の後段に「文筥開見之處、二通解文申文等入於筥云々」とあり、貢馬と一緒に届けられた文箱を開けると、二通の解文と申文があったという。

清衡が関白に何を頼み込んだのだろうか。荘園の寄進状といわれるが、清衡が師実に貢馬した直後の「後二条師通記」の十一月二一日に「関白師実が出羽庄の事について沙汰人に諮問した」とあり、摂関家領の荘園管理について、白河天皇の荘園整理令に基づき私領収公を進める出羽国司との間で緊張関係にあったようである。

清衡は、所領寄進の見返りに在地領主として不輸不入権を得て奥州の実効支配の地位を上申したに違いない。後三年の役で奥羽の覇者となった清衡と出羽の荘園を国司に圧迫される摂関家の利害は一致していたのだろう。

道長の玄孫で中御門右大臣藤原宗忠の日記「中右記」の寛治六年六月三日に「自陸奥国進国解、是清平企合戦、云々」とあり、清衡が関白に貢馬した翌年に、清衡に合戦企てありと、陸奥守の藤原基家が上奏してきた。

後三年の役の翌年に陸奥守を罷免された義家の後任に赴任してきた基家と対立する清衡が、国司と事を構えるための、摂関家への根回しだったかもしれない。

「中右記」の保安元年（一一二〇年）には、越後小泉庄を巡って朝廷側の定使に清衡が訴えられた際、関白忠実の御厩舎人兼友が清衡の使に付いて申し開きしたとあり、師通の子忠実もまた、朝廷側の定使に訴えられた清衡を援けており、奥羽の摂関家荘園を国司国衙の収奪から守る役割を清衡に期待していたに違いない。

④「奥州後三年記」の編纂背景と清衡

清衡が奥羽の覇権を掌握した後三年の役を記す「奥州後三年記」の編纂者を知る手懸りが下巻の中にあった。

「武ひら家衡食物ことごとくつきて、寛治五年十一月十四日の夜、つゐに落をはりぬ、城中の家どもみな火をつけつ。烟の中にをめきのしる事、地獄のごとし」

陸奥守源義家と戦う清原武衡と家衡が立て籠もる金澤の柵が落城した日が、なんと四年後に関白の使が師通の所に来て、陸奥住人清衡が関白に貢馬したと話していた日の前日と同じ年月日なのである。

後三年の役の終戦日が、四年後に清衡が初上洛して貢馬した日と同じ年であるはずがなく、寛治元年の誤記なのは明らかだが、なぜ寛治五年と記されたのだろう。誤記の裏に何か作為が隠されているのではないだろうか。

「奥州後三年記」は、出羽の清原真衡と叔父吉彦秀武の確執が発端となり、秀武の求めに応じて清衡と家衡が参戦するが、真衡の急死で休戦、家衡と清衡が対決する後半戦は陸奥守源義家が主役となり、奥羽の争乱を鎮圧した義家の武功と武徳が中心に語られ、朝廷に私戦と見做されて恩功なく敵将の首を道に捨てて虚しく帰京する場面で終わる、戦記史というより劇画的な物語である。

清衡が貢馬した半年前の「後二條師通記」の寛治五年六月十二日の条に「前陸奥守源義家、弟義綱ト兵ヲ構ヘントス、是日、宣旨ヲ五畿七道に下シ、義家ノ兵ヲ率イテ入京スルヲ停メ、又諸国百姓ノ田畠公験ヲ、義家ニ寄スルヲ禁ゼシム」とあり、陸奥守を罷免されていた義家は、朝廷に突き離されて苦境の最中にあった。

義家が後三年合戦が私戦ではなかったと申し開きする証人として清衡を上洛させ、清衡からの要請で義家が介入した経緯を記して義家の武徳を讃える「奥州後三年記」を編纂させ上梓させたことを、後三年の役の終戦日を貢馬した日に故意に誤記することで、後世に伝えているのではないだろうか、まさに清衡のコードネームである。

た高さ八一メートルの巨大な八角九重塔は、東国から平安京に入る交通の要衝に聳え立ち、初上洛の清衡を迎えて、清衡もその威容に度肝を抜かれたに違いない。

御願寺は、天皇や皇后のため祈願や追善を行う仏教寺院で、天皇一代の御願のみを修するため、法勝寺以降も堀河天皇が尊勝寺、鳥羽天皇が最勝寺、歴代天皇が勝の字を付けた御願寺を洛東に建立して「六勝寺」と呼ばれたが、法勝寺は六勝寺の中で最大の規模を誇っていた。

白河天皇は「神威を助くるものは仏法なり、皇図を守るものもまた仏法なり」との考えで、国家と仏教を結び付けて権力維持を図るため、仏法を説く寺院として法勝寺を建立したともいわれている。

初上洛した清衡は、当然に法勝寺の法話に招かれていたであろう。そこで説かれる仏法により世俗の世界が浄化されてこの世に極楽浄土が出現するとする考えが、殺戮に荒んでいた清衡の心に強く響いたに違いない。

延暦十三年（七九四年）に平安京へ遷都した桓武天皇は、一二二年前の壬申の乱で、大海人皇子（後の天武天皇）に敗死した大友皇子の弟志貴皇子の孫に当たる。

天智天皇の第一皇子大友皇子から皇統を奪った天武天皇の皇統が文武、元正、聖武、孝謙、淳仁、称徳と続く中、藤原氏を巻き込む政争の中で、隠棲してきた天智天皇の曾孫山部親王が、天武皇統の異母弟の皇太子他戸親王と

⑤平泉遷都と中尊寺建立の背景

寛治元年（一〇八七年）に後三年の役の勝者となった陸奥守義家が、朝廷に私戦と見做されて左遷され、棚ぼたのように奥羽の最終勝者となった清衡が、嘉保年中（一〇九四年から一〇九六年）に豊田館から平泉に本拠を移して、最初の事業である中尊寺の建立に着手した。

清衡が豊田館から平泉に遷都して仏国土を建設した理由とその原点は、いつどこにあったのだろうか。

清衡が関白に貢馬した寛治五年（一〇九一年）が、清衡の初上洛といわれているが、いみじくも清衡が平泉に本拠を移したとされる嘉保年中の三年前である。

摂関家への貢馬のために初上洛した清衡は、京で何を見て何を学んだのだろうか。その時の見聞が、三年後の平泉移転と仏国土建設に繋がったことは明らかである。

清衡上洛当時の平安京は、造寺造仏の数量をもって功徳を積むという風習が広がり、白河天皇に始まる「天皇の御願寺」ブーム下にあった。その高度に発展した荘厳な仏教文化が、みちのくの辺境で殺戮戦に明け暮れてきた清衡に大きな衝撃と感銘を与えたに違いない。

承保三年（一〇七六年）に白河天皇が洛東に造営した御願寺の「法勝寺」は、藤原道長が鎮護国家と仏法興隆を祈念して創建した法成寺をモデルにしたといわれる壮大な伽藍で、永保三年（一〇八三年）に南庭に建立された

その母井上内親王を反逆罪で幽閉し死に至らしめ、父光仁天皇の譲位で桓武天皇に即位すると、奈良の平城京から長岡京に遷都、藤原種継暗殺事件の嫌疑で皇太弟の早良親王を流罪憤死させ、更に平安京に遷都させた。

桓武天皇の平安京への遷都理由は、度重なる飢饉や疫病、近親者の相次ぐ不幸が、権力抗争で天武皇統の多くの皇族や実弟を粛清してきた怨霊の祟りと恐れ、旧体制の怨霊籠る平城京を逃れたともいわれている。

朝廷による征夷の戦いだった前九年の役で、母方の安倍氏一族を滅ぼされ、父経清と叔父永衡が斬殺され、養子に入った清原氏の内紛で起きた後三年の役では、清原氏の兄弟（真衡、家衡）と叔父（武衡）を倒し、妻子たちが実弟家衡に襲撃される犠牲を払って、奥羽を制覇して初上洛してきた清衡は、三〇〇年前に多くの親族を犠牲に即位して平城京から平安京に遷都してきた桓武天皇に己の思いを重ね合わせ、安倍氏と清原氏の悍ましい怨霊籠る生まれ育った江刺の豊田館から、奥州衣川の平泉に新天地を求めて、戦いのない平和な仏国土を建設する構想を膨らませていったのではないだろうか。

中尊寺落慶供養願文が「敬白、建立、供養し奉る、鎮護国家大伽藍一区の事」で始まり、清衡の仏国土建設の精神的支柱に、平安京の鬼門鎮護の天台宗総本山延暦寺に倣って天台宗の中尊寺建立を据えたともいわれる。

更に供養願文に「禅定法皇を祈り奉る、太上天皇の寶算は無彊なり、御願寺と為し、長く國家區々の誠を祈らん」とあり、みちのくの地に、治天の君として君臨する白河法皇を奉り鳥羽天皇の永寿を称える公的な御願寺として朝廷の公認を受けることで、天皇の権威を背景に奥州藤原氏の正統性を主張していたに違いない。

寛治五年の初上洛は、貢馬と奥州後三年記の上梓による摂関家との関係構築だけでなく、平泉に仏教による平和な社会を創生する貴重な上洛でもあったのだろう。

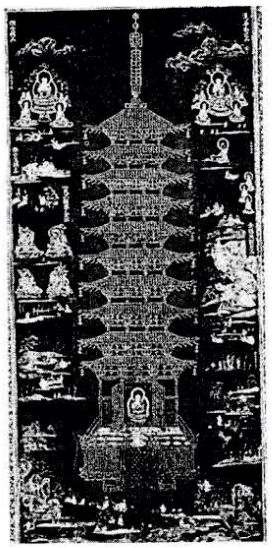
⑥平安京の法勝寺と中尊寺の伝大池跡

令和元年十一月に出場した凡八コンクール全国大会の会場となった京都アスニー一階「京都市平安京創生館」のフロアに上洛した清衡が初見えたであろう「法勝寺」の縮尺百分の一の復元模型が展示されていた（次頁）。

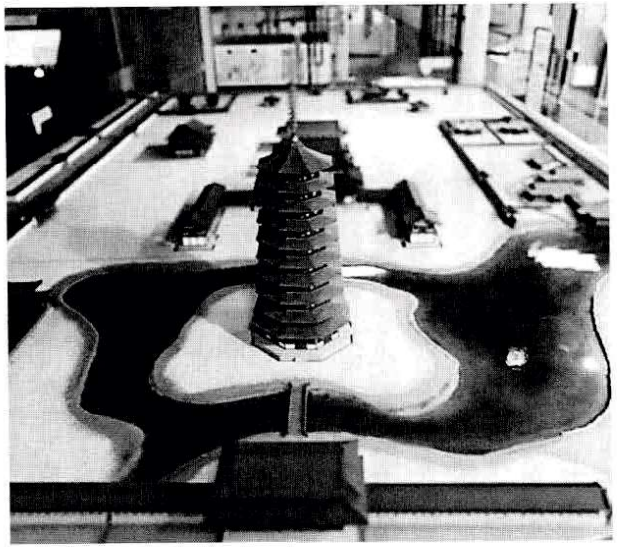
解説に「平安時代の終わり、今の岡崎の地に勝の字を含む六つの寺が建立された。白河天皇の「法勝寺」に始まり堀河天皇の「尊勝寺」鳥羽天皇の「最勝寺」など、法勝寺は有名な八角九重塔が建てられていた」とあった。

縦横三、四メートル四方の伽藍模型の中心にある金堂は、両翼にコ字型廻廊を有し、南面に浄土庭園が広がり、池の中島に建つ八角九重塔は高さ八一センチだが、初上洛を果たした清衡が、平安京の東玄関に聳え立つこの巨大な八角九重塔を前に立ちすくむ姿を思い浮かべてみた。

金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図（中尊寺ＨＰより）



法勝寺復元模型（京都市平安京創生館ＨＰより）



この九重塔の姿を何かで見かけたようだと、京都から帰ってすぐ調べてみると、平泉中尊寺の讃衡殿に展示されていた金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図に、法勝寺の九重塔らしき宝塔が描かれていた（上左図）。

曼荼羅は、密教の経典に基づき主尊を中心に諸仏諸尊の集会する楼閣を模式的に示した図像で、中尊寺の宝塔曼荼羅図は、金光明最勝王経全一〇巻を一巻毎に一枚の掛け軸に、経文を紺紙に金泥で宝塔の形に描かせ、写経と造塔造仏と経典解説の三功徳を一度に成就していた。

この曼荼羅の宝塔は一〇層に見えるが、最下層に裳階を巡らせた九重の塔である。初層で結跏趺坐する釈迦如来が説法を行ない、塔の前面に浄土園池が広がり仏法を聴聞する者が集い、塔の周囲に経典内容を金銀泥により大和絵風の彩色画で描かれて、国宝に指定されている。

法勝寺八角九重塔は、大日如来を中心に金剛界五仏が安置され、金堂と合わせて両界曼荼羅の世界を立体的に具現化されており、清衡は法勝寺で学んだ密教の世界を釈迦如来中心の浄土曼荼羅に融合させたのかもしれない。

清衡が初上洛で見聞した法勝寺の伽藍に影響され、平泉への移転と中尊寺の建立を構想したことに間違いはないと思うが、平泉の中尊寺は、標高一三〇Ｍの山上伽藍である。果たして京都盆地の平坦な東側に建立された法勝寺は、本当に中尊寺の原型だったのだろうか。

改めて中尊寺の観光地図を広げてみると、数年前に会社ＯＢ有志の会で中尊寺を観光した折、メンバーに高齢者が多いことから、急勾配の月見坂ではなく南側の山麓を迂回して金色堂の裏から登った時に見かけた、三方を山に囲まれた伝大池跡と呼ばれる原っぱが思い出された。

登り口近くの駐車場隣の池に、中尊寺ハスがピンクの花を咲かせて、金色堂の須弥壇の秀衡の棺に置かれていた四代泰衡の首桶の中から発見されたハスの実から開花させたと案内板にあったが、左手に広がる伝大池跡のことも記憶に残っていた。

伝大池跡は、関山丘陵の山頂にある金色堂の裏側から桜川に下る緩い南斜面の下に、南北一二〇Ｍ、東西六〇Ｍの原っぱが広がり、その真ん中に数本の樹木が生えた小山が、地山を均した地底の上に盛土して築かれた浄土庭園の中島だったことが発掘調査で確認されたという。

中島の規模は、東西十八～十九Ｍ、南北二六～二七Ｍ、面積約三五〇平方Ｍの広さで、普通の浄土庭園の中島ではなく、平安京の法勝寺の八角九重塔に匹敵する巨大な塔が建てるために築かれた中島のようである。

中尊寺供養願文の冒頭に「敬白、建立、供養し奉る。鎮護国家大伽藍一區の事。檜皮葺堂一宇在左右廊廿二間、三重の塔婆三基、瓦葺経蔵、鐘楼、大門三宇、築垣、反橋、斜橋、龍頭鷁首畫船二隻」とある伽藍について、この伝大池跡が一時有力視されたが、近年の発掘調査で、伝小経蔵跡らしき礎石や瓦が発掘され、東に向いた浄土庭園の型式が確認はされたものの、供養願文に描かれる建造物や池泉橋脚の遺構は発見されなかったという。

伝大池跡の北側の高低差一〇Ｍの高台に、現在宝物館の讃衡殿が建っており、清衡は大池跡に塔を頂いた浄土庭園を、後背のこの高台に法勝寺を模した寺院の造営を目指したが、地盤か地質か何らかの理由で大池跡への浄土庭園を断念、関山丘陵の尾根沿いの平地に庭園規模を縮小した弁天池を、周辺に金堂や阿弥陀堂などを配した現在の中尊寺伽藍を造営したのかもしれない。

しかし法勝寺に見劣りする山上の中尊寺で清衡が満足するはずはなく、平坦な適地を探し出して法勝寺に匹敵する浄土庭園付き伽藍建立に挑み続けたに違いない。

⑦平泉毛越寺の円隆寺と嘉勝寺

平泉の南玄関に当たる毛越寺では、毎年五月に南面に広がる大泉ケ池に龍頭鷁首の船を浮かべ、平安貴族の装束で優雅な曲水の宴が行われ、これぞ清衡が供養願文に描いていた世界である。毛越寺こそ、法勝寺に匹敵する清衡悲願の浄土庭園付き伽藍ではないのだろうか。

毛越寺のホームページにある「臨池伽藍跡」（次頁）に、願文の「左右廊廿二間」に比定できる翼廊を左右に広げた「円隆寺」と「嘉勝寺」が並んで描かれていた。

「吾妻鏡」の文治五年九月十七日の条に「毛越寺の事、基衡之を建立す。先ず金堂を圓隆寺と号す（中略）嘉勝寺〔未だ功を終らざる之以前に基衡入滅す。仍て秀衡之を造り畢〕云々」とあり、円隆寺を基衡が、嘉勝寺は未完成のうちに基衡が亡くなり秀衡が完成させたという。

しかし基衡が円隆寺の完成に続いて、同じ形で同じ規模の嘉勝寺を並べて建てる必要があっただろうかという疑問が浮かんできた。しかも嘉勝寺の位置が少し南側にずれており、隣接の円隆寺との並び方が不自然である。

嘉勝寺は、嘉祥三年（八五〇年）に慈覚大師が毛越寺の前身に創建した嘉祥寺跡に建立されており、祥を勝に置き換えて嘉勝寺に改名したのだとしたら、嘉勝寺こそ清衡が京の六勝寺を模した伽藍なのではないだろうか。

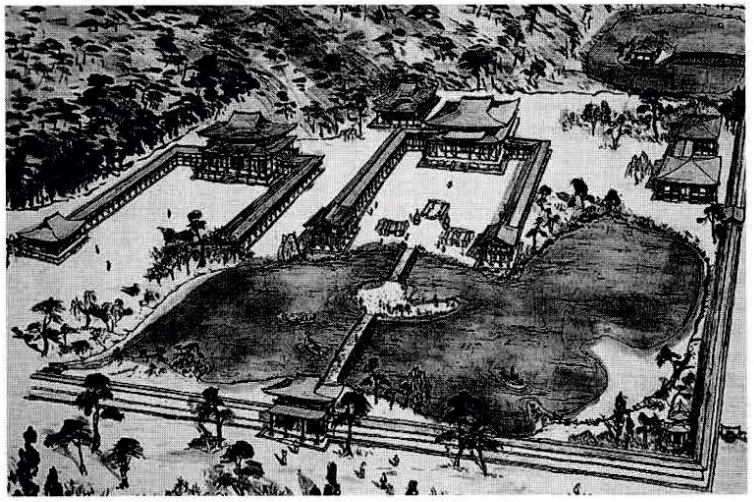
初代清衡が手懸けたが、地盤などの問題があり建設途上で頓挫、二代基衡が東隣に円隆寺を新たに建立して南面に浄土庭園を造営、三代秀衡が祖父清衡の遺志を引き継いで未完の嘉勝寺を完成させたのかもしれない。

毛越寺の発掘調査で、嘉勝寺翼廊の東廊の南端の柱穴が石敷を掘り込んでいたが、円隆寺翼廊の柱穴には見られないことから、大泉ヶ池の護岸に玉石を敷き詰めた円隆寺の造営が先行すると結論付けられたというが、現嘉勝寺跡の玉石敷の下に、清衡が手掛けて未完に終わった古嘉勝寺の遺構が眠っているかもしれないではないか。

供養願文には経蔵と鐘楼が独立して描かれているが、発掘調査で円隆寺跡の翼廊先端に確認された経蔵と鐘楼の遺構が、嘉勝寺跡には確認されておらず、嘉勝寺こそ清衡が願文に描いていた伽藍なのではないだろうか。

臨池伽藍跡（毛越寺ＨＰより）

左：嘉勝寺　右：円隆寺（毛越寺金堂）



⑧「中右記」の清衡と清平

清衡の名が中央に初めて現れるのは、藤原師通の日記「後二條師通記」の寛治五年（一〇九一年）に関白師実へ貢馬する陸奥住人清衡だが、その後の清衡の動静について、同一人物と思われる記録が、中御門右大臣藤原宗忠の日記「中右記」の中に数件出てくる。

私が確認しただけでも、寛治八年（一〇九四年）五月四日に朝廷儀式で薪持役に「兵衛尉清衡」、承徳元年（一〇九七年）正月三〇日の除目に「左衛門權少尉平清衡」、前述の保安元年（一一二〇年）六月の小泉庄事件での「清衡」の三件があった。

清衡の薪持役が初上洛の三年後、承徳元年の除目で清衡のすぐ前に名のある源盛家が、清衡が貢馬した関白師実の家司、事件のあった小泉庄が、陸奥の平泉から日本海側を京に向かう往路に当たる、等から、兵衛尉清衡、左衛門權少尉平清衡、小泉庄事件の清衡の三人は、奥州平泉の清衡と同一人物と見て間違いないのだろう。

「中右記」に「清衡」に類似した「清平」という名も出てくる。寛治六年（一〇九二年）六月三日に「自陸奥国進國解、是清平企合戦云々」、天永二年（一一一一年）正月二一日に「良俊行向陸奥国清平許如何」、そして「中右記目録」の大治三年（一一二八年）七月二九日に「去十三日陸奥住人清平卒去云々、七十三」である。

この清衡と清平を時系列的に並べると、清平（寛治六年）→清衡（寛治八年）→平清衡（承徳元年）→清平（天永二年）→清衡（保安元年）→清平（大治三年）とジグザグで、どうも「中右記」の著者宗忠は、清平と清衡が同じ人物とは考えていなかったようである。

もし同一人物と承知していたら、大治三年の記事は「陸奥住人清衡卒去七十三」と明記したはずである。

「中右記」の著者は、清衡と清平が何処の誰かを確かめることもなく、ただ伝聞を記録しただけなのだろう。

清衡が奥羽の覇者となった後三の役を詳述する「奥州後三年記」に、清衡の父親が前九年の役の終わった康平五年（一〇六二年）に斬殺された藤原経清だと記されており、これを定説とする裏付けに「中右記」の「清平卒去年令七三才」が決め手になっているのである。

鳥羽上皇が編纂した「本朝世紀」の後三年の役が終わった一ケ月後の寛治元年十二月二六日に「是日、陸奥守義家朝臣言上斬賊徒武衡等首之由」と義家が賊徒武衡等の首を斬った旨を言上したと詳細に記されているが、同日の「中右記」は「今日進陸奥国解也、守義家朝臣追討俘囚了」と陸奥国司の報告を簡潔に記しただけである。

朝儀に通じ公事次第を詳細に記す「中右記」の著者宗忠にとって、都から遠く奥州で起きた争乱、まして陸奥の住人の死亡など、興味も関心もなかったに違いない。

宗忠が記した大治三年の「陸奥住人清平卒去七十三」の没年令が、裏付けを取ることなく伝聞されたままを記したただけだとしたら、清衡の出自に関わる重要な裏付け史料として、信用していいものか甚だ疑問である。

奥州藤原氏二代基衡と三代秀衡の没年令が、今なお不明にも関わらず、初代清衡の没年令だけが、当時の京に伝わっていたこと自体信じ難いが、なぜ清衡没年令七三才が伝聞されたのか、その背後を探ってみたい。

⑨清衡の父は藤原経清ではなかった（私説）

「後二条師通記」と「中右記」に登場する清衡には、姓が付いておらず、承徳元年の除目で初めて平清衡を名乗っていたが、なぜ実父といわれる藤原経清の藤原氏ではなく、清原氏でもなく、妻の姓といわれる平氏なのだろうか。藤原氏を名乗れない事情があったのだろうか。

実父とされる経清が、前九年の役で陸奥守頼義の配下から賊軍の安倍方に寝返って、斬殺された首が安倍貞任、重任と共に京に送られた朝敵だったからだとしても、それから既に三五年もの歳月が経っている。

清衡が関白師実に貢馬したことを日記に記した師通も三年後に父師実を継いで関白になっており、白河上皇の院政下でなお、政権の中枢にいる二人と誼を結ぶ清衡が同じ藤原北家流れの経清の実子であれば、貢馬の六年後の叙任時に藤原氏を名乗れないはずはないだろう。

清衡の父はどうも藤原経清ではなかったらしいという話が、同人誌「まんじ」へ寄稿してきた「私の伊達政宗像を訪ねて」の下調べの中で、仙台市台原の白水稲荷神社を調べる最中に、偶然に出合った藤原相之助氏の著書「郷土研究としての小萩ものがたり」（昭和八年四月発行）の中にあった。

「平泉の初祖藤原清衡の母は、衣河の安倍頼時の女で、藤原秀衡の後裔亘理権太夫に嫁し、一子を挙げたが権太夫討死の後、連れ子をして出羽の清原武則に再嫁した。その連れ子が清衡であるとは従来の定説のやうだが、之は清衡が藤原氏と稱した理由の故事附けで、その實清衡は母の連れ子ではなくて武則の實子らしいのです。この事は清衡の死亡の年齢を逆算しても知れ、又金色堂の棟札によっても證せられます」

亘理権太夫は藤原経清、清衡の母が再嫁した武則は長男の武貞の誤りと思うが、少なくとも清衡が母の連れ子ではないらしいとは、その時は「小萩物語」の内容に囚われて気にも留めず読み過ごしていたが、考えてみると東北古代史の常識を覆す衝撃的な話ではないか。

藤原相之助氏は仙台戊辰史の著者で仙台市史編纂主任という当時の東北古代史の権威である。それ以上の追及はされなかったが、逆算しても知れるとは、七三才死亡説に疑念を持たれていたことだけは確かなようである。

この話をどこかで見た記憶があり、手元の書籍を調べてみると、高橋富雄氏が著書「奥州藤原氏四代」（昭和三三年初版）で、清衡の没年令について触れていた。

「『中右記』の記すところによって、藤原清衡は大治三年（一一二八年）七月十三日に七十三歳を以て死去したことがわかる。（中略）七十三歳というのにも問題はないでもない。というのは、その時には七十一歳でなければならぬ天治三年＝大治元年（一一二六年）のその供養願文には「已に杖郷の齢を過ぐ」とあって、杖国の齢を過ぐとはないし、それに近いともないので、天治三年にはまだ六〇代であったのではないかと思われるからである（『礼記』によると、五〇を杖家、六〇を杖郷、七〇を杖国、八〇を杖朝というのである）。しかしここではすべて『中右記』に従っておく。そうすればすでに龍粛氏が「奥州藤原氏三代の事蹟」にのべられたように、清衡が生まれたのは天喜四年（一〇五六年）で前九年の最中のことになり、父経清が運拙く敗死する康平五年（一〇六二年）には七歳であった」

高橋富雄氏は、清衡の没年令が七三才であれば、二年前の中尊寺供養願文作成された年に、清衡は杖国（七〇才）を過ぐ、とあるはずと言いながら、それ以上の詮索はしなかったが、清衡の父が経清ではなくなる可能性がある重大事項であり、とても見過ごすわけにいかない。

已に杖郷（六〇才）の齢を過ぐという年令が、六二、三才位とすると、中尊寺供養願文の天治三年（一一二六年）から逆算して清衡が生まれた年は一〇六四年頃になり、経清が斬首された康平五年（一〇六二年）の二年後では、母が敵将清原武貞に再嫁した後に生まれたことになり、前夫の経清が清衡の父親にはなりえない。

そしてもう一点、高橋富雄氏は指摘していなかったが、中尊寺供養願文の「已に杖郷の齢を過ぐ」の三八文字前に「垂拱寧息して三十餘年」という下りがある。

垂拱とは、衣の袖を垂れて手をこまぬく意から、何もしないでいること、天下のよく治まるたとえである。清衡は世が垂拱した三〇余年後に、杖郷の齢の六〇才を過ぎたという、垂拱したと語る年はいつのことだろうか。清衡の実年令を解明する重要な手懸りである。

清衡は、寛治元年（一〇八七年）に陸奥守源義家の支援を受け、後三年の役の最終勝利者となったが、翌寛治二年に義家が私戦だったと見做され陸奥守を解任されると、後任に赴任してきた藤原基家が清衡と対立して、とても垂拱寧息したと言える状況ではまだなかった。

清衡が上洛して関白師実に貢馬した寛治五年の翌年に、その基家が清衡に合戦の企てありと朝廷に解文を送っていたが、翌七年（一〇九三年）に任地の陸奥で卒去、兄義家と不仲な弟義綱が後任陸奥守に就任してきた。

義綱が出羽で起きた反乱を鎮圧した功で嘉保二年（一〇九五年）正月に美濃守に転任、後任に清衡に協力的な村上源氏の源有宗が陸奥守に就任してきた。奇しくも清衡が平泉に本拠を移したとされる時期である。

衣川以北の奥六郡を支配する安倍頼時が衣川の外（以南）に進出したため、朝廷が源頼義を追討将軍に任じて前九年の役が起きたという経緯から、後三年の役を経て清衡が衣川以南の磐井郡平泉に本拠を移転したということは、奥羽の押領使として朝廷からの独立宣言であり、この嘉保二年こそ清衡垂拱寧息の年ではないだろうか。

清衡の垂拱した年が嘉保二年（一〇九五年）で、その三〇余年後に杖郷（六〇才）を過ぎていたとすると、垂拱した時期の年令が三〇過ぎ、生年を逆算すると一〇六四年頃となり、アプローチ方法を変えても、一〇六二年に斬死した経清は、やはり清衡の実父にはなりえない。

もし清衡の実父が清原武貞ではなく藤原経清だったとすると、敗軍の将の妻の連れ子として清原氏本拠の出羽から遠く離れた陸奥の江刺郡豊田館に居残って成長した清衡を支える勢力が、二五年前に滅亡した安倍氏の残存勢力だけでは、当主清原真衡の急死による後継者争いに、三〇前後の清衡が、清原氏を二分して武貞の実子である家衡に勝利して清原氏を正統に継ぐだけの力と後援を果たして得られるものだろうか、甚だ疑問である。

前九年の役を記す「陸奥話記」に、安倍軍が立て籠もる厨川の柵を攻略した頼義は、生虜の経清を鈍刀で斬首、安倍貞任・重任兄弟を斬殺、十三歳の貞任の子童も斬り、則任の妻は三歳の兒を抱いて深淵に投死したとある。

生虜になった経清に対して頼義が「汝、先祖相傳に予の家僕たり。朝威を忽諸して、旧主を蔑如するは、大逆無道なり」と、苦痛を長引かせるため鈍刀で斬首、更に京に晒し首にさせた程に憎んでいた逆臣経清に遺児がいたら、貞任の息子を斬死させた頼義が見逃すはずはない。

安倍軍の首魁貞任の子童が捕らわれて斬殺された経緯について「陸奥話記」は「貞任の子童は、年十三歳にして名を千世童子と曰う。容貌は美麗なり。甲を被り柵外に出てて能く戦ふ。驍勇の祖風有り。将軍は哀憐してこれを宥さんと欲す。武則は進みて曰く「将軍、小義を思いて、巨害を忘れることなかれ」と。将軍は、頷きて遂にこれを斬る。城中の美女数十人。皆、綾なる羅を衣ふ。悉く金翠を粧して烟に交りて悲しみて泣きこれを出ずる。各軍士に賜ふなり」と記していた。

頼義は貞任の子を助命しようとしたが、清原武則が生かしておいては成長したら将来恨みを晴らそうとして危険だと進言して斬殺させたとあり、その武則が、経清の息子（清衡）を連れ子にする安倍頼時の娘を、息子武貞の妻に迎えることを果たして許すものだろうか。

岩手大学教授樋口知志氏が著書「前九年・後三年合戦と兵の時代」で、前九年の役の敗戦で投降し助命された安倍宗任と正任そして経清の妻が、安倍頼時と清原光頼の妹との子で、捕えられ斬殺された貞任と重任は、頼時と磐井の金為行の妹との子ではないかと推論していた。

であれば、光頼が頼義の参戦要請に容易に応じなかったことも、武則が甥の宗任・正任らを助命し姪に当たる経清の妻を息子武貞の後妻に認めたことも納得である。

武則は、安倍氏を牛耳っている主戦派の貞任を排除して、清原氏の女系親族である宗任を清原氏の後見の下で安倍氏嫡宗を継承させて、自らも論功行賞に鎮守府将軍を条件に参戦したのであろうとも論じていた。

武則が貞任の子を殺させながら、経清の子は殺さなかっただけでなく、息子の養子に迎えて成育させたのも、清衡の母が武則の姪であれば、あり得たかもしれない。

⑩清衡の藤原氏賜姓工作

定説が清衡を藤原経清の子とする根拠は、後三年の役を詳述している史書「奥州後三年記」上巻の合戦発端の項に「みちの國に清衡家衡といふものあり。清衡はわたりの權太夫經清が子なり。經清貞任に相ぐしてうたれにし後、武則が太郎武貞、經清が妻をよびて家衡をばうませたるなり。しかれば清ひらと家ひらとは父かはりて母ひとつの兄弟なり」と記されていたことによる。

本稿の④の後段で論述したように「奥州後三年記」が、清衡が貢馬と一緒に関白に上梓したものだとしたら、後三年の役の経緯と顛末を、更迭された源義家の武功と武徳を称賛する内容で編纂した上で、更に自分が母の前夫だった経清の子だったと記させ、併せて摂関家に藤原氏の賜姓を申し出ていたのではないだろうか。

自分を経清の子と記す「奥州後三年記」と辻褄を合わせるため、関白に上梓する際に、自分の生年を経清死の七年前と申告していたに違いない。この清衡生年の伝聞情報が、後に「中右記」著者藤原宗忠に、大治三年に没した清衡の年令を七三才と記させたのかもしれない。

経清の子には清衡の外に「陸奥話記」に藤原経光の名が「白石氏家譜」に家祖として刈田経元の名があり、二人の緯が経で、清衡とは異母兄弟だったようである。

正室の外に側室が幾人もいた時代である。経清に現存史料にない男子が他に存在していても不思議はなく、母が再嫁した武貞の子でありながら、経光のように戦死した史実に残らない前夫の子にすり替わり、経清の実子と称して藤原氏を名乗ろうとしたことは考えられよう。

奥州藤原氏三代秀衡は、元陸奥守兼鎮守府将軍藤原基成の娘を正室に迎えて、その嫡男が四代泰衡である。基成は藤原北家流で初代摂関藤原良房の十三代、泰衡の代で名実とも正式な藤原氏となったのではないだろうか。

⑪清原氏の通字変遷（「頼」→「武」→「衡」）

奥州藤原氏は、初代清衡、二代基衡、三代秀衡、四代泰衡、泰衡の兄弟が国衡、忠衡、高衡、通衡、頼衡、いずれも「衡」を通字にしている。

清衡の父は定説で藤原経清とされ、私説で武貞と考えているが、通字の「衡」は、誰から受け継がれたのだろうか。清衡のルーツに繋がるもう一つの関心事である。

安倍頼時の娘を妻に迎えて、経清と義兄弟となり、「前九年の役」で源頼義に特徴的な甲冑から謀叛を疑われて斬殺された平永衡から「衡」の字、経清から「清」の字を併せて「清衡」としたとする説があるが、母の連れ子として敵将清原武貞の養子となった経清の遺児だとして、逆賊永衡の「衡」を付けるものだろうか。

清原氏系図をよくみると、通字の系統が見えてくる。武貞の祖父武頼の「頼」が父武則の兄光頼、その子頼遠に、武頼の「武」が父武則と息子の武貞、武衡に継がれて、清原氏は「頼」と「武」の二系統が並存している。

「陸奥話記」に記載されている頼義に参軍した清原軍を率いる七将の名は、武貞、貞頼、秀武、頼貞、武則、武忠、武道、全員に「頼」か「武」が付いており、清原氏は「頼」と「武」の二系統の同族連合体制だったが、「前九年の役」の後半に、清原氏を参戦させてその武功で鎮守府将軍になった武則が、参戦に消極的だった兄光頼に代わって実権を掌握すると、清原氏は二系統の同族連合体制から「武」系統の単独支配体制に移っていく。

しかし二一年後の「後三年の役」では、武貞の先妻の子に真衡、後妻の子に清衡・家衡、嫡男真衡に子がなく海道平氏から養子に迎えた後嗣に成衡、いずれも「衡」を通字にしており、清原氏は「武」から「衡」の系統に移っていた。この間に清原氏に何が起きたのだろうか。

清原氏系図に、最初に「衡」の字が現れるのは、武貞の弟「武衡」である。武衡の脇書に、将軍三郎、住石城郡とあり、鎮守府将軍武則の三男で、岩城の海道平氏に養子に出されていたといわれる。武貞の子ら全員に「衡」が通字に使われており、どうもこの武衡が「衡」の元祖のようである。（最終頁の相関図参照）

武衡は、後三年の役を記す「奥州後三年記」の後半に初めて登場して「将軍国解を奉て申やう、武衡、家衡が謀反すでに貞任、宗任に過たり」とあり、奥州後三年記の後半戦の主役は、源義家と武衡に変わっていた。

しかし後三年の役が始まる以前に、既に兄武貞の子ら全員に弟武衡の「衡」の通字が付いており、清原氏の通字が「武」から「衡」の系統に移る武貞から武衡への政権移動が、後三年の役の前に既にあったのだろう。武貞が普通死では、通字の変遷は起り得ないだろう。兄弟の間に何があったのだろうか、想像を巡らせてみた。

前九年の役と後三年の役の間の延久二年（一〇七〇年）に陸奥国で起きた延久蝦夷合戦の戦後論功で、清原貞衡なる武将が鎮守府将軍に任ぜられていた。

この貞衡が、武貞の別名とする説があるが、武貞の嫡男真衡を貞衡に誤記したとする説が有力とされる。

武貞が祖父・父から三代受け継いだ通字「武」を捨ててまで貞衡に改名する理由は考えられず「真」を「貞」と誤記したとする有力説のとおり、前将軍武則の直系の孫真衡が鎮守府将軍になったのだとすると、武則の子で真衡の父武貞は、将軍にならずにどうしたのだろうか。

前九年の役が終わって僅か八年の間に武貞に何があったのだろうか。後妻に迎えた敵将経清の元妻で安倍頼時の娘との間に生まれた清衡と家衡を、後妻共ども武貞が溺愛して先妻の子真衡を疎んじていたとしたら、真衡と武貞との間に父子の確執があって不思議はない。後に起きた後三年の役は、真衡と清衡・家衡の戦いである。

兄武貞の子全員に弟武衡の「衡」の通字が付いていること、真衡の後継者に岩城の海道平氏から養嗣子を迎えていることから類推すると、武貞と真衡の父子相克の対立と清原氏内の出羽清原氏本流と陸奥安倍氏旧勢力の主導権争いに、海道平氏に養子で出ていた叔父武衡が帰国して甥の真衡を援け、安倍氏に傾倒する武貞を追放する政変が武衡主導であったに違いない。

⑫「奥州後三年記」の清原武衡

清原氏の通字を「武」から「衡」に変えた清原武衡が史書に登場するのは、後三年合戦の後半からである。

清原氏嫡流の真衡に後嗣の男子なく、清原一門からでなく海道平氏から成衡を養嗣子に、その妻に源頼義の娘を迎え、その祝い席で叔父吉彦秀武の無礼を怒った真衡が成敗の兵を挙げて後三年合戦が始まり、真衡の異母兄弟清衡と家衡が吉彦秀武を、陸奥守義家が真衡を援けた。

真衡の急死で休戦、義家の清衡に有利な戦後裁定を不服とした家衡が清衡館を襲撃して妻子を殺害、沼柵の攻防戦で清衡と連合する義家に勝利すると、陸奥の武衡が出羽の家衡のもとに「家衡が国司を追い返した名声は武衡の面目なり」と参戦してきたと奥州後三年記にある。

「百錬抄」の寛治元年十二月廿六日に「陸奥守義家言上斬賊徒平武衡之由」と武衡を平氏と呼んでおり、真衡死後の後半戦は、父武則の逝去で岩城から出羽に帰国して兄武貞を倒し清原氏を掌握していた平武衡が、真衡に加勢していた源義家の奥羽への野望に抵抗して家衡を巻き込んで挙兵した奥羽防衛戦だったのだろう。

源氏を礼賛する「奥州後三年記」の編者は、清衡と家衡の対戦に武衡を途中から参戦させることで、源氏と平氏の私的合戦ではなく、源義家による奥羽争乱の鎮圧戦にすり替えて戦記物語化したのではないだろうか。

「奥州後三年記」は、その武衡の最期について、ことさら悪意に満ちた残忍な手口を詳細に記している。

武衡は、甥の家衡を応援して清衡・義家との戦いに敗れ、城中の池に飛び込み水に沈んで顔を叢に隠し、捕えられるとただ一日の命を請うが、義家は降人にあらずと斬首させた。更に義家は、源氏を誹謗していた千住の歯を金箸で折り舌を切り木の枝に吊るし、足元に武衡の首を置いて、千住が力尽きて武衡の首を踏むのを喜んだとあり、人格を貶められた最期はあまりに劇画的である。

「奥州後三年記」に上中下の三巻あり、真衡の死後に清衡・義家軍と武衡・家衡軍が対決する中・下巻を見ると、義家の名が二二回、武衡の名が二八回、家衡の名が十七回登場してくるが、清衡の名は中巻の冒頭に一回だけで、主役は武衡である。最終勝利者として奥羽の覇者になった清衡の影が薄いのは何故なのだろうか。

朝廷から奥羽を簒奪した元凶と見られていた清衡の関与を隠蔽し、合戦途中から武衡を参戦させて家衡を煽動した悪役に仕立て上げ、後三年の役を義家が武衡の謀反を鎮圧する聖戦にすり替えるのが狙いだったのだろう。

武衡は「奥州後三年記」の主役となり、無様な死に際を曝したが、その平武衡の娘が北方平氏として、清衡の妻となり、中尊寺経の願主となり、二代基衡の母となったのだとしたら、まさに歴史ロマンの主役である。

⑬金色堂棟木墨書から見える藤原清衡の相関図

明治三〇年に行われた中尊寺金色堂修理の際、棟木に「大壇散位藤原清衡女壇、安部氏、清原氏、平氏」と墨書されていたことが発見された。

東北古代史研究の第一人者高橋富雄氏は、女壇三人の安部氏を母の頼時女、清原氏と平氏を清衡の妻の一人と考え、安倍氏、清原氏の二つの俘囚政権と在地一切の族長たちを踏まえて成立した第三の俘囚族長政権としての平泉政権の史上の位置が、血の上のつながりで示されていると著書「奥州藤原氏四代」に述べている。

墨書銘文は「天治元年歳次甲辰八月廿日甲子建立堂一宇長一丈七尺、廣一丈七尺、大工物部清國、大行事山口頼近、小工十五人、鍛冶二人、大壇散位藤原清衡　女壇安部氏、清原氏、平氏」とあり、建造年月日と寸法に大工と大行事の名前まで記されており、大工棟梁が上棟式の模様を棟木に記録したものなのだろう。

墨書の天治元年（一一二四年）は、清衡が没する大治三年の四年前である。中尊寺開創の年は、鍾銘から長治二年（一一〇五年）といわれ、金色堂の建立は、清衡が二〇年掛けた中尊寺伽藍のいわば総仕上げであった。

極楽浄土を具現した阿弥陀堂であり己の葬堂でもある金色堂の上棟式に臨む老いた清衡を支えるように寄り添う三人の女性の姿が私には浮かんでくる。

棟木墨書の女壇三氏は、金色堂の上棟式に参列する清衡に最も身近な女性だったのではないだろうか。

安部氏女は、定説では清衡の母で安倍頼時の娘とされるが、金色堂の上棟の頃には既に故人である。安倍氏系図をみると、頼時の三男宗任の娘で、後に基衡の正室になり秀衡の母となる女性がおり、滅亡した安倍氏一族の数少ない血族であり、清衡にとって大切な従妹である。

清原氏女は、定説では同母弟の家衡に館を襲撃されて殺害された正室とされているが、三八年も前の出来事である。女壇三氏の並び順が序列とすると、中央に書かれた清原氏が長男惟常の母で、清原氏当主武貞の先妻との娘か武貞が清原一族から養女に迎えた女であろうか。

平氏女は、清衡発願による紺紙金銀字交書一切経の大般若経巻第二二と第三〇の巻末奥書に「元永二年、大檀主藤原清衡、北方平氏」とある願主の北方平氏で、清衡の正室で次男基衡の母とされるが、正室が北方（きたのかた）と呼ばれるのは三位以上の貴族で、清衡は正六位上、基衡が庶兄惟常を倒して家督を簒奪するのは北方平氏と奥書された十一年後、当時まだ正室ではない。

北方が正室ではなく方角の北の意で、南の海道平氏に対して北の出羽に居る平氏を北方（ほっぽう）平氏と呼んでいたとしたら、養子先の海道平氏から出羽に戻っていた平武衡が北方平氏で、その娘が清衡の側室となり次男基衡の母ではないだろうか。長男でなく次男に衡の通字が付いたのは武衡の孫だったからに違いない。

藤原清衡を巡る相関図を、金色堂の棟木墨書女壇三氏をベースに作成してみたので次頁に掲載する。

清衡を藤原経清の実子とする定説と清原武貞の実子と考えた私説を並記、墨書女壇の安部女を清衡の従妹、清原氏を武貞の先妻の娘、平氏女を武衡の娘と想定した。独善的な相関図だが、拙論に併せて参照願いたい。



三衡画像（毛越寺一山白王院所蔵）
上：清衡、右下：基衡、左下：秀衡

明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その五）

山本勉

渋江保の経歴・著作・社会状況一覧表
（博文館時代から晩年）

はじめに

渋江保の経歴・著作・社会状況について、二回に分けて掲載する。本号は前号（前期）に続いて、博文館時代から晩年（後期）を掲載する。渋江の生涯（後期）においては、日清戦争前の清及び朝鮮の状況、民権思想の状況、日露戦後不況下の社会状況、ゴシック文学・神秘文学の隆盛等、当時の社会・経済状況を中心として一覧表にまとめた。なお、一覧表作成に当たっては、主に『抽斎歿後』、山路愛山の『独立評論』に掲載された「渋江保氏談話」二十四編を参考にした。

渋江の出生について今回新たに確認できた事項があるため、新説として一覧表に掲載する。出生年月日は一八五一年（嘉永四年）七月二十六日である。松木明知「渋江抽斎の嗣子「保」（成善、道陸）の生年と名について」『鴎外』九十号　二〇一二年一月三十一日による。

時代区分	滞在期間	西暦	元号	年齢（定説）	年齢（新説）	経　　歴	著　　作	社会状況
博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1890	明治23年	33	39	○マコーレー著「ミルトン」に注釈し、東京新橋竹川町の共益商社から出版し、翌年発刊となった。 ○1月30日、長女、福生まれる。2月17日死亡。 ○3月3日、帰京。当分の間、麹町区有楽町二丁目二番地竹の舎に寄寓する。 ○上京のため、渋江塾を閉じ、静岡英学校、高等英華学校、文武館を辞した。暁鐘新報の社説は依然嘱託として応じた。 ○家族は、保・松・三吉である。 ○3月26日から博文館の著訳に従事する。 ○5月23日、山梨県南巨摩郡身延村私立明治竹精学校（中学）の名誉教頭となる。 ○5月29日、脩、帰京して保の寓家に寄寓する。 ○7月11日、長男、三吉三歳にて死去。 ○7月18日、神田区仲猿楽町五番地豊田春賀方へ寄寓する。 ○8月26日、松、東京唱歌会に入会する。 ○「通俗教育演説」・「福の神」・「処生活法」・「神童」・「幸福要訳」を博文館より出版する。雑誌原稿の出版もある。 ○県下政治家　「学術的政治家　渋江保　票数16」とある（暁鐘新報　4月3日） ○社説（東京での生活の様子が記載されている）「巡査の慇懃　幸福散史」（暁鐘新報4月11日）	○マコーレー著「ミルトン」注釈（共益商社） ○処世活法（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○幸福要訣（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○福の神（通俗教育全書一〇〇冊）（博文館） ○通俗教育演説（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○政治社会の流弊・人物評の流行（雑誌　富国）（博文館）	○1890年恐慌 ○集会及政社法公布（7月） ○第1回衆議院議員総選挙（7月） ○立憲自由党結党（9月） ○教育勅語発布（10月） ○帝国議会開設（11月） ○山県有朋、帝国議会施政方針演説において、「主権線、利益線」演説を行う。（12月） ○アフリカ分割、アヘン戦争、露土戦争、プロセイン・オーストリア・ロシア3国によるポーランドの分割・滅亡、清の列強による不平等条約の締結、フランス領インドシナ、ロシアの南下政策等、列強の植民地政策により隣国中国をはじめ弱小国が亡国の危機にさらされた。国内においては反戦を唱える機運もあったが、自由民権派の中心的な存在の一人で、交詢社を設立し交詢社憲法を提唱した福澤諭吉は対清強行論に転じた。1881年（明治14年）頃から私擬憲法草案の作成、全国各地の激化事件、大同団結運動、三大事件建白運動等、自由民権運動も大きな盛り上がりを見せたが、福澤の自由民権への背信行為、1887年（明治20年）保安条例の施行による民権派への激しい弾圧、大同団結運動を牽引してきた後藤象二郎の黒田内閣入閣により自由民権運動は衰退していった。

博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1891	明治24年	34	40	○7月17日、神田区仲猿楽町五番地へ家屋新築に着手し、10月1日に移転する。家族は保・松である。 ○8月31日、松、東京唱歌会卒業する。 ○9月8日、東京音楽学校へ入学する。 ○「国民錦嚢」・「西洋妖怪談」・「英国文学史」・「独佛文学史」・「小論理学」・「小心理学」・「小倫理学」・「小天文学」・「小地質学」、博文館より出版する。雑誌原稿の出版もある。	○小論理書（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○小心理書（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○小天文学（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○小倫理書（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○小地質学（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○希臘羅馬文学史（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○独佛文学史（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○英国文学史（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○小学講話材料　西洋妖怪奇談（博文館） ○少年亀鑑　神童（博文館） ○国民錦嚢（博文館）	○欧米では18世紀末から19世紀中期にかけて、心霊主義（スピリチュアリズム）やゴシック小説、怪奇小説が流行し、19世紀末には世界の滅亡をテーマにしたSF小説も書かれた。ヴィクトリア朝時代に円熟期を迎えイギリスでは、産業革命により技術革新をもたらし、市場や原料を求めて植民地の獲得を目指していた時代であった。反面、産業革命の歪みが起こり、犯罪・貧困・大気汚染、ロンドンへの人口流入等、繁栄の影にさまざまな社会的な矛盾を抱えていた。こうした世紀末の状況が、幽霊や怪奇現象等のゴシックロマンスを産んだ。 ○内村鑑三の不敬事件（教育勅語礼拝拒否） ○ドイツ式の歩兵操典（7月） ○野外要務令制定（12月）（作戦要務令制定昭和13年9月）
		1892	明治25年	35	41		○普通教育学（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○簡易体操法（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館）	○黒岩涙香、『萬朝報』を創刊する ○北村透谷、『平和』第三号において「一種の攘夷思想」発表、北村は、キリスト教精神において戦争を無条件否定した。 ○日清戦争前の清及び朝鮮の国情：1840年、アヘン貿易に始まったイギリスの清への侵略戦争により、1842年、不平等南京条約締結、イギリスに香港島を割譲、上海開港、中国の半植民地化の第一歩となった。1858年、清はイギリス・フランス・ロシア・アメリカの4カ国と天津条約締結。ロシアはアロー戦争で混乱する

博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1892	明治25年	35	41	○「博文館五十年史」第二編出版界躍進時代、明治25年の項目に渋江保の名前と著作が一冊散見される。「渋江保著　高等小学万国地理一冊」 ○2月18日、次男繁次生まれる。9月23日死亡。 ○「普通教育学」・「万国地誌」・「万国発明家列伝」・「泰西婦女亀鑑」・「算術五千題」・「代数一千題」・「幾何学一千題」・「簡易体操法」・「簡易手工学」を博文館より出版、並びに雑誌原稿もある。	○代数一千題（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○幾何一千題（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○簡易手工学（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○算術五千題・上（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○算術五千題・下（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○泰西婦女亀鑑（女学全書　一二冊）（博文館） ○萬國発明家列傳（寸珍百選　五二冊）（博文館） ○高等小学　萬國地理（博文館） ○西洋文学家一口話（雑誌掲載）（博文館） ○西洋名士奇談（雑誌掲載）（博文館） ○万国百傑人（雑誌　日本之少年）（博文館）	清にアイグン条約を締結して、アムール川（黒竜江）以北の領土をロシアの領土にし中国方面に南下した。1860年、アロー戦争後、イギリス・フランス・ロシアとの間で北京条約を締結し、開港・賠償金の支払い・割譲等の不平等条約を結んだ。ロシアが黒海から地中海への南下を目指して起こした露土戦争（1877～1878）は、中国南下政策に酷似しており清は危機感を抱いた。1881年、清はロシアとの間にイリ条約を締結し賠償金を支払いホルゴス河より西側とザイサン湖周辺地域をロシアに譲渡する。清仏戦争（1884～1885）では清は敗戦し、天津条約を締結した。清朝政府は中華民族を危機的状況から脱却し清朝政治体制を変革するため中国人留学生を日本へ多数派遣した。朝鮮では、江華島事件後に締結した日朝修好条規（1876年）により、釜山・仁川・元山の開港や関税の自主権を認めさせない等、幕末に列強が日本に結ばせた不平等条約を朝鮮に押しつけた。1884年金玉均らが日本と結んで起こした甲申政変では、クーデター計画に日本政府や福沢諭吉・後藤象二郎が関わっていたとされ、自由民権運動の最中に民権派の中心的人物が朝鮮において日本の勢力拡大を目指した。
		1893	明治26年	36	42			○黒岩涙香は、明治20年代半ばから恐怖や怪奇性のあるフォルチュネ・デュ・ボアゴベイ（フランス）やエティエンヌ・エミール・ガボリオ（フランス）のゴシック風の作品を数多く翻案して出版した。 ○探偵小説（ミステリー）最盛期
博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1893	明治26年	36	42	○12月21日、次女冬生まれる。 ○「ゴールドスミス」・「全世界の市人」・「ヘーゲル歴史哲学」・「雄弁法」・「南亜米利加紀行」・「魔術」・「初等三角術」・「算術教科書」を博文館より出版する。雑誌原稿の出版もある。	○初等三角術（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○雄辯法（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○社会学（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○西洋秘傳魔術（博文館） ○支那哲学者・欧州巡遊通信・上（寸珍百選　五二冊）（博文館） ○支那哲学者・欧州巡遊通信・下（寸珍百選　五二冊）（博文館） ○算術教科書（博文館） ○南亜米利加紀行（博文館）	○日清・日露戦前後、これまで自由民権を唱えていた福澤諭吉・徳富蘇峰・後藤象二郎・大井憲太郎・頭山満等は、日本の国権擁護とアジアへの国権拡張、対清主戦論、日露戦争開戦主張、大アジア主義を標榜して、その思想を変節していった。中江兆民・田口卯吉・板垣退助・植木枝盛・内藤魯一・馬場辰猪・島田三郎・沼間守一らは民権を肯定しつつも日和見的な態度を取り、中には内閣に入り政府要人として政治活動していた者もいた。
		1894	明治27年	37	43	○「哲学大意」・「日々の掟きて」・「人物学」	○哲学大意（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○歴史研究法・上（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○歴史研究法・下（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○人類学（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○電気世界（通俗教育全書　一〇〇冊）（博文館） ○生活指針　日々のおきて上巻（寸珍百選　五二冊）（博文館） ○生活指針　日々のおきて下巻（寸珍百選　五二冊）（博文館）	○甲午農民戦争（東学党の乱）（2月） ○福澤諭吉、社説「日清の戦争は文野の戦争なり」を時事新報に掲載（7月） ○日英通商航海条約調印（領事裁判権撤廃）（7月）

博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1894	明治27年	37	43	・「西洋事物起源」・「記憶術」・「催眠術」・「社会観察論」・「開智術」・「婢僕管理法」・「英清鴉片戦史」・「英仏聯合征清戦史」・「露土戦史」・「北米南米戦史」・「電気世界」・「婚姻の友」を博文館より出版する。雑誌原稿の出版もある。	○西洋事物起源（寸珍百選　五二冊）（博文館） ○記憶術（寸珍百選　五二冊）（博文館） ○催眠術（寸珍百選　五二冊）（博文館） ○英清鴉片戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○英佛聯合征清戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○露土戦史（万国戦史二四冊）（博文館） ○米国南北戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○逸話文庫（博文館） ○国民起源（博文館） ○社会観察論（博文館） ○十九世紀の文明（博文館） ○婢僕管理法（博文館） ○開智術（博文館） ○婚姻の友（博文館）	○清に宣戦布告。日清戦争勃発（8月） ○福澤諭吉『日本臣民の覚悟』（時事新報）（8月） ○『日清戦争実記』（第1編～50編）（1894年8月～1896年1月7日第50編） ○徳富蘇峰『大日本膨張論』を展開 ○福澤諭吉、三井八郎右衛門、岩崎久弥、渋沢栄一らと戦費募金組織「報国会」を結成
		1895	明治28年	38	44	○7月13日、三男、純吉生まれる。 ○「普墺戦史」・「波蘭衰亡史」・「クリメア戦史」・「印度蚕食戦史」・「伊太利独立戦史」・「米国独立戦史」・「希臘独立戦史」・「英国革命史」・「仏国革命史」・「フリドリツヒ大王七年戦史」を博文館より出版する。雑誌原稿の出版もある。	○普墺戦史（万国戦史二四冊）（博文館） ○波蘭衰亡戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○クリミア戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○印度蚕食戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○伊太利独立戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○米国独立戦史（万国戦史　二四冊）（博文館）	○日清講和条約（下関条約）調印（4月） ○日清戦争（1894～1895）後、清は下関条約締結により日本と屈辱的な講和を結んだ。下関条約により台湾を併合した日本は1895年に軍事侵攻し、以後50年間、台湾総督府を置き植民地支配を続けた。 ○三国干渉（4月） ○戦時賠償金による消費の拡大（戦後景気） ○日清戦争を勝利に導いた川上操六は『明治二十七八年日清戦史』編纂に着手、戦史の批判的叙述等を試みるが、1899年（明

博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1895	明治28年	38	44		○希臘独立戦史（万国戦史　二四冊）（博文館）	治32年）日清戦史の完成を待たずに逝去する。 ○福澤諭吉は延期していた還暦の祝いの席上、慶應義塾生への演説で、日清戦争勝利により国権が大いに上昇したと論じる（12月）
		1896	明治29年	39	45	○「博文館五十年史」第三編日清戦役前後、明治29年の戦史及戦争物の出版の中に「万国戦史二十四冊を毎月一回（定価金十八銭）にて出版した。」とあり、5冊の万国戦史と著者名が記載されているが、渋江の名前の記載がない。 ○「シーザルポムペー羅馬戦史（一部分）」・「ピエユック戦史」・「歴山大王一統戦史」・「希臘波斯戦史」・「支那人気質」・「社会観察論（続原）」・「世界格言」・「婚姻案内」を博文館より出版する。雑誌原稿の出版もある。	○英国革命史（万国戦史二四冊）（博文館） ○佛国革命史（万国戦史二四冊）（博文館） ○フレデリック大王七年戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○シーサルボンペー　羅馬戦史（万国戦史　二四冊）（博文館）	○日清戦争後、ロシアの南下政策により対露未来戦争小説が流行する。 ○立憲改進党を中心に進歩党結成（3月） ○日夏耿之介（1890～1971）、ゴシック文学を日本に紹介
		1897	明治30年	40	46	○渋江は長年、周易と老子と素問の研究に趣味を持っていたが、根本羽岳の易に名高いのを聞き明治30年9月に謝礼を持参して門下の一人となる。 ○この年、不慮の災難があった。窓の竹に頭部を打ち人事不省となる。読書はできたが、「糊口の著訳」は当分できかなった。 ○「ロングマンス、リーダー注釈一・二・三・四」を出版する。 ○頭部に負傷して以来、専心研究に従事しようとしたが、株の相場に手をだし八九万の金を儲けたが、三名の恩人のために連判しお金を水疱にきしたがばかりか、所有の不動産を売却することになった。 ○1897年（明治30年）から1927年（昭和2年）にかけて、万国戦史が複数の出版社・訳者によって漢訳され出版される。	○羅馬、加達額爾　ピュニック戦史（万国戦史二四冊）（博文館） ○歴山大王一統戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○希臘波斯戦史（万国戦史　二四冊）（博文館） ○支那人気質（博文館） ○世界格言大全（博文館） ○婚姻案内（博文館） ○社会観察論（続物）（博文館） ○フレデリック大王と其宮廷（歴史小説）（博文館） ○致富要訣（日用百科全書　五〇冊）（博文館） ○商家手代案内（博文館）	○足尾鉱毒事件被害者、請願運動（3月） ○ブラム・ストーカー、ゴシック小説『ドラキュラ』刊行（5月）
		1898	明治31年	41	47		○ロングマンス第一読本註釈（英学全書四冊）（博文館）	

博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1898	明治31年	41	47	○8月30日、義道館（根本翁の塾）より講師を嘱託される。 ○12月17日義道館評議委員を嘱託される。 ○「世界地理」・「ナショナルリーダー注釈一・二・三・四」を出版する。	○ロングマンス第二読本註釈（英学全書四冊）（博文館） ○ロングマンス第三読本註釈（英学全書四冊）（博文館） ○出世の栞（博文館） ○ナショナルリーダー註釈。一、二、三、四、（博文館）	○自由、進歩両党が合同し憲政党結成（6月） ○第1次大隈内閣（隈板内閣）成立（6月） ○戊戌の政変（9月） ○島田重礼、8月27日逝去
		1899	明治32年	42	48	○7月3日東京瓦斯会社の翻訳事務を担当する。 ○「サウセー子ルソン伝注釈」を出版する。	○サウセー子ルソン伝注釈（博文館） ○フランクリン自伝（博文館）	○ボーア戦争、英国はボーア戦争の長期化により国家財政が破綻、国力も疲弊し大英帝国は衰退の一途をたどる。 ○陸軍大将、参謀総長、川上操六逝去（5月）、川上は陸軍軍制のフランス式からドイツ式への改革を行った。川上没後、長州藩閥勃興、川上門下、東條英教（1855～1913）、柴五郎（1860～1945）、落合豊三郎（1861～1934）等が更迭される。川上後を受けた参謀本部第四部長大島健一（1858～1947）は、批判的叙述の制約を強化し、作戦・戦闘経過の叙述を主体とし、軍の威信優先の公刊戦史編纂を目指す。 ○黒岩涙香、『萬朝報』に『灰色の女』をもとにした翻案小説『幽霊塔』（原作、A・Mウイリアムスン）を連載する。（8月） ○日本、ベルヌ条約加盟（8月）
		1900	明治33年	43	49	○3月21日、秋濤荘で開かれた大橋乙羽洋行の送別園遊会に出席する。 ○5月2日、三女乙女生まれる。	○ロングマンス第四読本註釈（英学全書四冊）（博文館） ○通俗世界地理（通俗百科全書　二四冊）（博文館）	○義和団事件（6月） ○幸徳秋水『自由党を祭る文』、「万朝報」に掲載する（8月） ○立憲政友会結成（9月）

博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	1901	明治34年	44	50	○1月26日、山内水木逝去、享年49歳	○出世の栞続（稿　大尾迄　マーデン原訳）（博文館）	○2月3日、福澤諭吉逝去、享年68歳 ○安部磯雄らが社会民主党を結成、即日結社禁止（5月） ○義和団事変議定書締結（9月） ○義和団事件後に列強と清との間で北京議定書（①義和団に殺害されたドイツ公使と日本書記官への弔問②外国人が殺害された地区での科挙受験の禁止③4億5000万両の賠償金④列強国の軍隊駐留の容認⑤公使館周辺区域の警察権の列強への引き渡等）を締結し、清の国権を否定され半植民地化は決定的なものになった。 ○11月3日、大橋佐平逝去享年67歳
（東京）	1902年（明治35年）	1902	明治35年	45	51	○6月4日、支那人、劉成愚に支那語を研究する。爾来、38年7月に至るまで劉氏に来てもらい支那語を教えてもらう。		○日英同盟締結（1月） ○催眠術ブーム（明治30年代中頃）
大学館時代～晩年（東京）	1903年（明治36年）～1930年（昭和5年）	1903	明治36年	46	52	○8月29日、東京瓦斯会社の翻訳業務を解任される。 ○大学館で著書執筆を始める。 ○「偉人の真相」を博文館は「世界英雄神髄」と名付けて出版した。「成功と好機会」・「成功格言」これらは東海道より出版した。 ○「韓非子神髄」は某書肆より発兌のはずであったが、未だ出版できないでいる。 ○「活動写真術自在」・「動物界奇談」は大学館より出版する。	○世界英雄神髄（偉人の真相）（東海堂） ○成功と好機会（東海堂） ○動物界奇談（大学館） ○成功格言（東海堂）	○幸徳秋水、堺利彦は平民社を興して週刊新聞『平民』刊行、非戦論展開 ○内村鑑三『戦争廃止論』 ○黒岩涙香が創刊した『萬朝報』が日露戦争主戦論に転じたため、非戦論者の幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三が退社する。 ○大阪博覧会「学術人類館」に中国人・朝鮮人・アイヌ・台湾先住民・琉球人として展示され差別した。 ○大島健一参謀本部第四部長提案「日清戦史第一第二編進達ニ関シ部長会議ニ一言ス」（参謀本部部長会議録）（7月）

大学館時代 ～晩年 （東京）	1903 年 （明治 36 年） ～ 1930 年 （昭和 5 年）	1904	明治 37 年	47	53	○1 月 9 日より漢文講習会の講師となる。 ○3 月 20 日より国益新聞のつきもの「那翁露国征討史」を担当する。 ○5 月 15 日、神田区三崎町一番地へ移転する。 ○「露西亜闇黒史」文明堂より出版する。 ○「武士道神髄」磯部屋より出版する ○万国戦史第 10 巻『波蘭衰亡戦史』を改編した汪笑侬演出の『瓜种兰因』（京劇）が上演される。	○活動写真術自在（大学館） ○韓非子神髄（磯部屋） ○武士道神髄（磯部屋） ○露西亜闇黒史（文明堂）	○ロシアに宣戦布告。日露戦争勃発（2 月） ○『明治二十七八年日清戦史』刊行（3 月）
		1905	明治 38 年	48	54	○荏原郡品川町南品川百五十九番地に移転する。 ○「百難旅行」・「女子学生無銭旅行」・「せい子の冒険」、書肆は「冒険奇旅行」とする。「爆裂弾」、書肆は「奇人航海」とする。「月界探検」・「奇人の魔法」・「船幽霊」は大学館より出版する。	○奇女無銭旅行（原題：女学生無銭旅行）（大学館） ○冒険怪奇文庫第一編急死一生冒険奇旅行（原題：せい子の冒険）（大学館） ○冒険小説　百難旅行（大学館） ○冒険怪奇文庫第五編怪奇小説　奇人の魔法（大学館） ○冒険怪奇文庫第二編奇人の航海（原題：爆裂弾）（大学館） ○冒険怪奇文庫第三編冒険小説　新海底旅行（大学館） ○冒険怪奇文庫第七編冒険小説　船幽霊（大学館）	○日露講和条約（ポーツマス条約）調印（9 月） ○日比谷焼き討ち事件（9 月）
		1906	明治 39 年	49	55		○冒険怪奇文庫第四編冒険小説　月世界探険（月界探険）（大学館） ○怪奇小説　薄命美人（大学館） ○家庭小説　財婚夫人（大学館） ○世界統一冒険譚第一編	

大学館時代 ～晩年 （東京）	1903 年 （明治 36 年） ～ 1930 年 （昭和 5 年）	1906	明治 39 年	49	55	○6 月 5 日、エスペラント界に入り 12 月卒業する。 ○「新ナポレオン」・「妖怪山の英雄」・「生？死？」・「空中電気旅行」・「食人国探検」・「続食人国探検」・「青年英雄国」・「世界発展倶楽部」・「怪中の怪」・「賊巣探検」・「キウリアス、アイランド」・「怪宝窟」・「財婚夫人」・「新クレオパトラ」・「続クレオパトラ」・「薄命美人」は大学館より出版する。	冒険小説　青年英雄団（大学館） ○世界統一冒険譚第二編冒険小説　世界発展倶楽部（大学館） ○世界統一冒険譚第四編英雄小説　賊巣探険（大学館） ○世界統一冒険譚第三編冒険小説　怪中の怪（大学館） ○冒険怪奇文庫第九編冒険小説　生？死？（大学館） ○冒険怪奇文庫第十一編冒険小説　食人国探険（大学館） ○冒険怪奇文庫第十二編冒険小説　続食人国探険（大学館） ○冒険怪奇文庫第十編冒険小説　空中電気旅行（大学館） ○冒険怪奇文庫第八編冒険小説　妖怪山の英雄（大学館） ○冒険怪奇文庫第六編冒険小説　新ナポレオン（大学館）	○「明治三十七八年日露戦史編纂綱領」及び参謀本部第四部長、大島健一名義付属文書「日露戦史編纂規定」、「日露戦史編纂ニ関スル注意」、「日露戦史史稿審ニ二関スル注意」、「日露戦史整理ニ関スル規定」（2 月） ○10 月 3 日、根本羽嶽没 85 歳。
		1907	明治 40 年	50	56		○怪奇小説　新クレオパトラ　正（大学館） ○怪奇小説　新クレオパトラ　続（大学館） ○世界統一冒険譚第五編冒険小説　キウリアス、アイランド（大学館） ○世界統一冒険譚第六編冒険小説　怪宝窟（大学館）	

大学館時代 ～晩年 （東京）	1903 年 （明治 36 年） ～ 1930 年 （昭和 5 年）	1907	明治 40 年	50	56	○ 10 月 22 日、四女紅葉生まれる。28 日死去。 ○「姫の一生」・「モデル姫」・「怪觸髏」・「活幽霊」・「旧情婦」・「北極探検」・「死人の再会」・「剣の影」・「海賊船」・「海底噴火」・「男装の女傑」・「南極探険」・「幻島探険」・「難行苦行」・「人？鬼？」・「霞郷探険」・「伏魔殿」は大学館より出版する。	○怪奇小説　活幽霊（大学館） ○怪奇小説　旧情婦（大学館） ○怪奇小説　死人の再会（大学館） ○怪奇小説　モデル姫（モデル嬢）（大学館） ○冒険小説　海賊船（大学館） ○冒険小説　怪觸髏（大学館） ○冒険小説　男装の奇女（原題：男装の女傑）（大学館） ○冒険小説　南極探険（大学館） ○冒険小説　人か鬼か（人？鬼？）（大学館） ○冒険小説　伏魔殿（大学館） ○冒険小説　北極探検（大学館） ○冒険小説　海底奇談（原題：剣の影）（大学館）	○明治四十年恐慌、東京株式市場が大暴落．企業の倒産や銀行の休業など経済恐慌が全国を襲う（1 月） ○足尾銅山暴動（2 月） ○野外要務令改定（10 月）（作戦要務令制定昭和 13 年 9 月）
		1908	明治 41 年	51	57	○ 4 月 6 日、乙女、城南小学校へ入学 ○ 5 月 2 日、乙女、鏑木清方の門に入る。 ○ 4 月 14、実兄、脩逝去。享年 55 歳。 ○「怨霊」・「未知の敵」・「死人の執念」・「死霊の祟」・「新七不思議」・「鬼女の姿」・「蛮カラ博士」・「怪古木」・「裸体旅行」・「以心伝心術」・「斬新催眠術」・「降神術」は大学館より出版する。	○冒険小説　海賊女王（原題:海底噴火）（大学館） ○冒険小説　女神男神（原題:霞郷探険）（大学館） ○冒険小説　難行苦行（大学館） ○冒険小説　幻島探険（大学館） ○英雄小説　裸体旅行（大学館） ○英雄小説　蛮カラ博士（大学館） ○降神術（大学館） ○怪奇小説　新七不思議（大学館）	○明治 20 年代に記憶術・催眠術が流行し、探偵小説（ミステリー）も最盛期を迎えた。怪奇や幽霊、恐怖もののゴシック小説や世界滅亡等の終末小説も書かれた。また、明治 40 年代には欧米のスピリチュアリズムが伝わり、心霊関連書が多数出版され、千里眼事件に代表される透視や念写等の心理学的実験も行われた。この時代は日露戦争後の経済恐慌や社会主義者の投獄、日比谷焼き討ち事件、足尾銅山暴動等の社会的不安定要因がその背景にあった。
大学館時代 ～晩年 （東京）	1903 年 （明治 36 年） ～ 1930 年 （昭和 5 年）	1909	明治 42 年	52	58	○ 10 月 7 日より扶桑文社の依頼に応じ「扶桑文社詩文」へ毎号「西廂記講義」と「毛詩講義」とを連載する。 ○「自己催眠術自在」・「遠距離催眠術」・「人身磁力催眠術」・「以心伝心術独習」・「神通力」・「諸病治療催眠術」・「安全催眠術」・「進化論」・「火星の世界」は大学館より出版する。「心象」は内外出版社より出版する。「韓国事情」の一部	○斬新催眠術（大学館） ○心理応用以心伝心術（大学館） ○安全催眠術（大学館） ○以心伝心術独習（大学館） ○遠距離催眠術（大学館） ○原理応用自己催眠術自在（大学館） ○原理応用神通力（大学館） ○諸病治療催眠術（大学館） ○人身磁力催眠術（大学館） ○原理応用最近接神術（大学館） ○心象及び其の実験（内外出版協会） ○西廂記講義・詩経講義（雑誌（扶桑詩文） ○陽明学活眼（松山堂） ○進化論（大学館） ○韓国事情の一部（出版社不明）	○警察犯処罰令（催眠術の乱用を禁止する条文追加） ○歩兵操典改訂（11 月）

大学館時代 ～晩年 （東京）	1903 年 （明治 36 年） ～ 1930 年 （昭和 5 年）	1910	明治 43 年	53	59	○「呼吸器健全法」・「笑話五百題」・「笑府」は内外出版社より出版する。「世界統一論」は大学館より出版する。 ○大学館での執筆が終了する。	○降神術奇効火星界の実況（火星の世界）（大学館） ○世界統一論（大学館） ○通俗呼吸器健全法（内外出版協会） ○笑府（内外出版協会） ○笑話五百題（内外出版協会）	○大逆事件検挙始まる（5 月） ○日韓併合条約締結（8 月） ○千里眼事件 ○石川啄木、『時代閉塞の現状』
		1911	明治 44 年	54	60	○7 月 11 日、乙女、芝大日本選書奨励会より第一等賞状を受ける。 ○8 月 11 日、三男、純吉逝去、享年 17 歳 ○「ソクラテス論語」東亜堂より出版する。	○ソクラテス論語（東亜堂）	○日米通商航海条約改正調印（関税自主権確立）（2 月） ○辛亥革命、武昌蜂起（10 月） ○大逆事件により幸徳秋水ら処刑
		1912	明治 45 年 （大正元年）	55	61	○7 月 3 日、乙女、芝大日本選書奨励会		○中華民国成立（1 月） ○第一次護憲運動、東京で憲政擁護大会開催、以後全国へ広まる（12 月） ○『明治三十七八年日露戦史』刊行
		1913	大正 2 年	56	62	○7 月 12 日、麻布区西町十五番地へ移転寄寓。 ○7 月 14 日、独立評論へ来月号より毎号談話を掲載することになる。 ○8 月 28 日、麻布区本村町八番地へ転居する。 ○10 月 12 日、山路愛山の発起により、『訳読会』を組織し、その会長に推薦される。10 月 12 日、第一回を開く。 ○12 月 3 日、大日本皮革株式会社社員等の嘱託として、毎月第一・第三水曜日に講義を行う。 ○この年よりカーライル著仏国革命史の翻訳に着手する。	○独立評論、仏国革命（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「明治初年の学風」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「中江兆民居士」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「学会今昔物語」（独立評論社）	○尾崎行雄、政府弾劾演説（第一次護憲運動）（2 月） ○大正政変（2 月） ○尾崎行雄ら政友倶楽部結成（2 月） ○加藤高明ら、立憲同志会結成（12 月）
		1914	大正 3 年	57	63		○独立評論、オイケン及びベルグソンの書（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談	

大学館時代 ～晩年 （東京）	1903 年 （明治 36 年） ～ 1930 年 （昭和 5 年）	1914	大正 3 年	57	63	○2 月 5 日、乙女、跡見女学校へ入学する。 ○3 月 24 日、乙女、城南尋常小学校全科卒業する。乙女、入学以来、常に第一位で、級長であった。今又第一位で卒業し、6 学年無欠席の精勤証書を受ける。 ○5 月 16 日、支那人のために元禄文学等を漢訳する。 ○9 月 9 日、牛込区船河原町十二番地へ移転寄寓する。 ○オイケン、並びにベルグゾンの諸書を撮□する。これは独立評論の為である。	話「根本通明翁」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「新聞今昔譚」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「新聞今昔譚其の二」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「新聞今昔譚其の三」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「小島成齋先生」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「海保漁村先生」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「大名の生活（上）」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「大名の生活（中）」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「大名の生活（下）」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「大名の生活（下）（続）」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「明治初期文学の回顧」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「生活状態の変遷」（独立評論社）	○陣中要務令制定（6 月）（作戦要務令制定昭和 13 年 9 月） ○第一次世界大戦勃発（7 月）
		1915	大正 4 年	58	64		○独立評論、渋江保氏談話「生活今昔譚」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談	

大学館時代 ～晩年 （東京）	1903年 （明治36年） ～1930年 （昭和5年）	1915	大正4年	58	64	○3月27日、乙女、跡見女学校第一学年を優等で終了する。 ○10月13日、次女、冬、死去。享年23歳。 ○渋江保自身の直筆墨書き原稿、「抽斎歿後・抽斎年譜・抽斎の親戚並びに門人」を森鷗外に手渡す。鷗外はこれら保の直筆原稿により、史伝『渋江抽斎』を執筆する。（11月頃）	話「易学一夕話」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「人情の変」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「教育界懐旧談」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「私塾の思ひ出」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「風俗雑話」（独立評論社） ○独立評論、渋江保氏談話「維新前後」（独立評論社）	○対華二十一カ条要求（1月） ○秋期演習令が制定され、作戦要務令から独立（9月）
		1916	大正5年	59	65	○従来著訳の書が百余種の及ぶ。概ね書肆の求めに応じ、生活のために筆を執る。再び見るのも不快を感じる。「偉人の真相」（世界英雄神髄）は研究したものを述べたものであるが、他人の執筆となったので筆勢も渋れ、自分が述べた所の三分の一も記さなかった。 ○「英国文学史」・「独仏文学史」・「希臘文学史」等は不完全であるが、我が国にこの種の書がないので、世に公に先駆したことは許してほしい。 ○三四十年苦心研究した書は、「読書五十年」・「日本私罰史」・「支那刑法史」・「周易一家言」・「経書一家言」の5つである。この5つを脱稿せざる間は死んでも浮かばれない。 ○「読書五十年」は「明治11年初めてギゾー及びバックルの文明史。ミル、スペンサーの著書を読んだ当時から一書を読む毎にその大意と各句とを記し且つ批評を試みたるもので約一千部に及んで居る」と渋江は述べている。 ○「日本私罰史」は「私が明治二十年の頃、	○独立評論、渋江保氏談話「維新前後（続）」（独立評論社）	○イギリス、日本軍艦の地中海への派遣要請（1月） ○シベリア出兵（8月） ○寺内正毅内閣超然内閣組閣（10月） ○石井・ランシング協定締結（11月）

大学館時代 ～晩年 （東京）	1903年 （明治36年） ～1930年 （昭和5年）	1916	大正5年	59	65	静岡の新聞社に居った折り、既に新聞社に迄も広告したのであったが、爾来三十年、閑暇と金とがなき為に未だ何時完了すべき見込も附かずに居る。要するにドーカ生前に此の五書を完結するのが私の唯一の而かも畢生の目的である。」と述べている。 ○ただひとりの少女、乙女（17歳）を満足に養成したい。		
		1917	大正6年	60	66			○ロシアでソビエト政権成立（10月革命）（11月）
		1918	大正7年	61	67			○原敬内閣成立（9月） ○第一次世界大戦終結（11月）
		1919	大正8年	62	68			○パリ講和会議開催（～6月28日）（1月） ○東京で普選期成大会開催、各地に普選運動広まる（2月） ○三・一運動、朝鮮で独立運動が全土に拡大（3月） ○五・四運動、北京で学生によるデモが起こる（5月） ○ベルサイユ講和条約調印
		1920	大正9年	63	69		○易断真法（神誠館）	○国際連盟発足、日本も加盟（1月） ○株価暴落、戦後恐慌始まる（3月）
		1921	大正10年	64	70	○11月19日、実姉、陸（杵屋勝久）逝去、享年74歳	○梅花心易即座考（神誠館） ○亀卜考（神誠館）	○原首相東京駅で刺殺、内閣総辞職（11月） ○ワシントン会議開催11月（1921～1922）
		1922	大正11年	65	71		○読心術（神誠館）	○ワシントン会議（2月） ○日本共産党結成（7月） ○ソビエト連邦成立（12月）
		1923	大正12年	66	72		○易学小筮詳解三巻（神誠館）	○6月、漢詩人、上村売軒、三才社を創設、『天地人』を創刊する。 ○関東大震災（9月） ○浅野和三郎によって東京本郷に心霊科学研究会設立

				○周易史伝（三才社） ○周易象義二巻（三才社） ○周易占筮既筮法（三才社） ○繁辞新釈（三才社） ○説卦伝新釈（三才社） ○周易小話（神誠館） ○迷信に似た実験（神誠館） ○読易漫録（神誠館） ○亀卜考略（神誠館） ○霊魂論集（神誠館） ○普選余話（神誠館） ○貴革余話（神誠館） ○未来（オリヴキー　ロッジ訳）（神誠館）	○第二次護憲運動（1月） ○陸軍演習令（3月） ○陣中要務令改定（8月）（作戦要務令制定昭和13年9月）
1924	大正13年	67	73	○『大東文化』創刊、渋江は毎号執筆する。 ○漢詩人、上村売軒の『天地人』の執筆に加わる。		
1925	大正14年	68	74			○男子普通選挙実現、衆議院議員選挙法改正公布（5月）
1926	大正15年（昭元年）	69	75		○五行易活断（三才社）	○戦闘綱要草案（5月）（歩兵操典から作戦要務令の一部として取り込まれる）
1927	昭和2年	70	76			○立憲民政党結成（6月）
1928	昭和3年	71	77			○歩兵操典改定（1月） ○第16回総選挙（初の男子普通選挙）（2月） ○張作霖爆殺事件（6月）
1929	昭和4年	72	78	○渋江忠三宛渋江書簡（中国大連市南満州鉄道株式会社社宅、渋江忠三宛に体調が思わしくないことを綴った書簡　12月19日） ※渋江忠三は、渋江保実兄　渋江修の三男	○易より見たる重大問題（三才社） ○周易一家言（神誠館）	○戦闘綱要制定（2月）（作戦要務令制定昭和13年9月）
1930	昭和5年	73	79	○渋江忠三宛渋江書簡（中国大連市南満州鉄道株式会社社宅、渋江忠三宛に死期が迫っていることを告げる葉書　元旦） ○渋江保、4月7日、逝去、享年73歳。東京都台東区谷中、感応寺に葬られた。		○ロンドン海軍軍縮会議開会（1月）

大学館時代～晩年（東京）

1903年（明治36年）～1930年（昭和5年）

人事部長　首切り姫　2
神戸から来た男（四）

（トゥーランドット）

匠　克仁

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
牛島崇　アサヒ信用保証回収業務委託先　元マル暴
野草堅樹　マンションオーナー　元暴力団員
座間三郎　マンション住人　元暴力団員

〈時系列〉

参考　第一話より

一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
第二話（本編）
二〇一八年五月からの数週間

4　犯罪者更生マンション

「あなた、肝臓は大丈夫なの」
弓本良香は自分で牛島の肝臓に三日月蹴りをしたが、心配になって質問した。
「蹴りは、わざと受けた」
至近距離からの良香の右ストレートを牛島は難なく防御していた。蹴りも牛島の能力であれば防御できて当然であった。
「本気なら三日月返しもできたんだぜ」
牛島が言った技は、三日月蹴りに対する返し技のことと良香は分って身震いした。
三日月蹴りは本当は左足親指を直角にそった状態で付け根で肝臓をえぐる。
攻める方は左下45度の円弧軌道で蹴ってくる。返し

技は右上45度の角度の真反対の円弧軌道で右肘の硬い尺骨で左足親指の裏側を打ち抜くのである。

両者の攻撃の相乗効果の上に、そった親指に逆関節方向へ衝撃を加えることで、相手の左足親指の骨を粉砕することができる。肘有りルールで破壊的な反撃技である。

「三日月返しをすると、お嬢ちゃんの左足親指が粉砕骨折になった。だから、あえて技を出さずに蹴りを受けた」

牛島の技術であれば、ハイヒールの底からでも爪先と踵をかいくぐって、迎撃ができたようであった。

もし牛島が本気であったら、良香の左足の親指は粉砕骨折になったと改めて恐ろしく感じた。親指だけでなく左足全体が破壊されたかもしれなかった。

「返しをしたら、連続技で左の飛び膝蹴りで右あごを砕いた。相手の頸骨を軸に脳を左の頭蓋骨にぶつけて、脳震盪か脳挫傷にした。相手が男だったらな」

牛島は息も切らさず、淡々と続ける。

「だが、お前は一応、女だからな」

(一応、女…って。どういう意味よ)

良香の内心で怒りがわいたが、牛島は気にせず続ける。

「女なら左の裏回しで勘弁してやろうと一瞬は思った」

裏回しとは掛け蹴りとも呼ばれる(テコンドーのコロチャギ)。蹴り上げた脚を反転させ、膝を折り曲げ、踵で顔面を打ち抜く。(ポイント制では足裏)

打点の踵が下から垂直に曲がって襲ってくるので、防御しにくい。相手は蹴りをかわしたと錯覚したところで逆方向の死角から攻撃を受ける。

「裏回しをすると、お嬢ちゃんの左ほほが陥没骨折になったからな。止めておいた」

牛島の言葉に良香の怒りが急速に鎮火した。良香がいくらトレーニングを受けているといえ、難しい軌道の蹴り技を避ける自信は無かった。

「お前の蹴りを受ける直前のコンマ一秒でこれだけ考えた。俺の判断次第では、お前は左足親指粉砕骨折と左ほお骨陥没骨折になった。俺はその選択肢をあえて捨てて、そのまま蹴りを受けた」

牛島はスポーツ解説者のように話すが、当事者の良香は振り返って恐怖を感じた。

「凶器攻撃は感心しないが。気にするな。俺の体と脳神経はタフにできている」

ハイヒールの先端で肝臓を突き刺す蹴りは悪いとは良香も反省した。牛島のそれまでの暴言に良香は一瞬、我を失ってしまった。

牛島以外の人間であれば、過剰防衛で傷害罪になったかもしれない。たまたま牛島が強靭な肉体と特殊な脳神経を持っているので、犯罪にならなかった。

良香が牛島について歩いていると、目的のマンションに着いた。

コーセーマンションはラブホテルを改装したものと牛島は言った。普通の建物と造りが違うと良香も感じた。

十三階建てのマンション屋上に電気はついていないが電飾の看板が残ったままである。元のラブホテルの名前は消しているが、撤去すらしていない。

マンションはオートロックが付いていた。生活保護などの低所得者向けのマンションと聞いていたので、良香は意外に感じた。

「オートロックで驚いているのか。中にもう一つオートロックがあるんだぜ」

(二重のオートロックなんて。超セレブなマンションでも珍しいでしょう)

オートロックの横に大きな張り紙がある。

『入居者以外の立ち入り禁止』

「俺たちは例外中の例外という訳だ」

「入居者以外って、その家族はどうなの」

素朴な疑問を良香は口にした。

「家族を含めて禁止だ。会いたければ外で会う。もっともここに住む奴らに家族といえる者はいないがな」

(家族がいないって、どういう意味よ)

「宅配便はどうするの」

「全て、受付で預かりだ。テレビだろうが冷蔵庫だろうが自分で部屋まで台車で運ぶ」

「引っ越しはどうするの」

「ここに入居する奴は何も持っていない。出ていくとき、入居中に買った物は自己責任で一階外まで運ぶ。まあ、それすらできずに退去する奴も多いがな」

牛島の言うことを良香は全く理解できなかった。

「オーナーと会う前に予備知識が必要だな」

牛島はオートロックのボタンを押す手を止めて続ける。

「コーセーマンションはワンルームが百室ちょっとあって、リフォーム中の部屋以外は満室だ。一室一人のみで百名弱が住んでいる。ここの入居者全員にある特徴がある。何か分るか」

「人事はマンションの住人のことまで知りません」

突然の質問には得意な良香であるが、答えられない。

「入居者全員が犯罪者…というか前科者だ。軽犯罪じゃねえ。殺人犯も四人いる」

(入居者全員が前科者って。そんなマンションが現実にあるなんて)

「このマンションは刑務所を出所した奴専用のマンションだ。このマンションには常に十数名の空き待ちリストがあるから、空きが出てもすぐに満室になる」

牛島はボタンを押すと、インターフォン越しに声が聞こえた。牛島が名乗ると、ロックが解除された。

一階はラブホテルのフロントやロビーと思われる部分がリフォームされ、ガラス張りの法人の事務所が左右に配置されている。つまり、住人はそのガラス張りの二つの事務所の間を通行しないと出入りできない。

「向こうが二つ目のオートロックだ」
牛島はあごをしゃくって奥のドアを示すと、そのまま右側の事務所へ向かった。
事務所の入り口には、入る者を拒絶する様に大きな看板があった。
『NPO法人犯罪者更生支援センター』
マンションに入っていきなり『犯罪者』という看板を目にして良香は戸惑った。
(NPOの目的としては随分とストレートな表現ね)
普通はもう少し婉曲な表現にするだろうと良香は思った。しかし、訪問者を拒絶する効果はある。
「よく来てくれた。牛島君、あんたが来ると、このマンションに緊張感が走ってね。歓迎するよ」
小学校の校長先生を思わせる風貌の初老男性であった。白髪を丁寧に七三に分けて、ネクタイとスーツも上品に着こなしている。
「よしてくれ。俺が来るってことは、あんたの家賃が遅れていることだ」
事務所内には十名分のデスクがあるが、居るのは紳士風の人物を含めて男性五名であった。廊下の向かいのスペースにもほぼ同数いるように窓越しに良香は確認した。
「家賃なんかよりも、あんたの訪問がありがたいんだ。あんたの噂はマンション中に広がっている。『東の新宿鮫・西の神戸牛』って前の業界では有名だったからね。それに家賃が遅れても、あんたが必ず取り立ててくれる」
「金が払えなけりゃ、タチの悪い闇金に連れて行って、家賃分を借りさせるからな」
入居者がオーナーに家賃を支払わなければ、アサヒ信用保証がオーナーに肩代わりする。アサヒ信用保証が保証契約を結ぶ際にはNPO法人の再保証を結んでいる。
つまり、アサヒ信用保証が取り立てできなくてもNPOの保証で払ってもらい、損失は発生しない仕組になっている。NPOからオーナーに家賃分の金が流れるだけである。
しかし、二人の会話だけで牛島は滞納分は確実に回収していると良香は想像できた。
「連れの美人は、あんたの新しい恋人かね」
相手が良香と牛島を交互に見ながら質問した。
(なんでこんな野蛮人と私が恋人に見られるのよ)
良香は不機嫌になった。
(美人と言われたから、いいか)
牛島は手を振りながら答える。
「俺の会社の人事部長が現場を見たいって、わがままいってね。それで連れてきたよ」
(俺の会社って、あんたの会社じゃないでしょ)
牛島は悪びれず、二人を紹介する。
「人事部長の弓本だ。こちらは、このマンションのオーナーで、マンションの実質管理するNPO法人の理事長の野草堅樹さんだ」
良香は野草と名刺交換した。野草の左手の小指と薬指の第二関節から欠損しているのに良香は気付いた。
「いやあ。私も若い頃は悪さをしていて。その業界で四回エンコしたんです」
野草は左手指の視線に慣れているのか世間話の様に明るく話した。
「エンコ……」
良香がつぶやくと、牛島が口を出す。
「てめえアホか。部長にもなって、そんな基本的な日本語も知らんのか。指を詰めることやろ。野草さんはマルB時代に指を四回、詰めたってことだ」
暴力団担当刑事をマル暴と呼ぶのに対して、マル暴は暴力団をマルBと呼ぶ。暴の頭文字Bである。
(まるぼー、まるびー、って、ややこしいわね)
良香にとっては、マルボーとマルビーとは判別不可能であるが、瞬時に相手が元暴力団員と認識した。
(もうちょっと、センスのある隠語にしてよ)
良香は内心つぶやくが、左手を見なければ、目の前の紳士が元暴力団員とは思えない。牛島の方がどうみても外見は暴力団員である。
「前の会社では退職する際には自分で自分の指を切り落とすという社内規則があったんです」
「野草さんは堅気になるために薬指の第二関節を詰めたんだ」
暴力団員は組のことを外では『会社』と呼ぶ。良香の同級生に警官がいるが、同窓会で彼が警察組織を会社と言うのを思い出した。
「野草さんは真面目に更生して働いて、遂にマンションを何棟も持つ事業家になった。それだけでなく社会貢献のためにNPO法人を立ち上げ、理事長をしている」
そのNPOが犯罪者更生支援センターである。
「社会貢献なんて大げさなものではないんですが。罪ほろぼしで、前科者が再犯をしないように支援する活動を始めたんです。出所したばかりの前科者には住むところが無くて、苦労するんです」
「大学出は仕方ないだろ」
牛島の言葉を理解できず、良香がつぶやく。
「ダイガク…」
良香の声を聴いて、牛島が怒鳴る前に野草がやさしく説明する。
「私の昔いた業界では刑務所のことを大学と呼んでいたんです。当時は私の会社には本物の大学卒はいませんでしたから、誤解はなかったですね」
野草の言葉に良香は納得した。
(本当にこの人は元暴力団員だったのかしら)
「現実に出所後に住む場所がない理由で、すぐに再犯して戻る人がいるんです」

野草の話しぶりで本人も同じ苦労をしただろうと良香は思った。

「NPO法人設立の目的の一つは出所者の住む場所と働く場所の紹介でした」

「当然だろう。なかなか前科者を住まわせてくれるところがないだろうよ。まして殺人犯なんかはな」

実際は殺人犯が刑期を終えて釈放されても、公表されないから、当人が元殺人犯かは分らない。

アサヒ信用保証では名前でインターネット検索しているから、過去の犯罪事件の加害者の名前をチェックする。

重大な事件を犯した加害者の名前はインターネット上に漂流している。同姓同名などの冤罪のような名前は排除しているが、本人であれば保証審査は拒否する。

しかし、このマンションに限ってはNPO法人の保証を条件に全て契約を応諾している。それで元殺人犯と承知でアサヒ信用保証は家賃保証契約を結んでいるのである。

「そこで出所者専用のマンションを作りました。NPOは非営利だから、私個人の名義にしています」

NPOの話が続いて、家賃滞納した人物の話に移る。

「三〇四も困ったものです」

野草の言う三〇四とは滞納した座間三郎のことである。

オーナーが家賃滞納者を連絡して、アサヒ信用保証がその家賃を代位弁済してオーナーに支払っている。

「奴はそろそろ俺が来るとおびえて、法テラスに泣きついたみたいだぜ。そんなヤワでよく、現役時代にシノギが務まったな」

滞納後の一ヶ月は電話督促で、その後は社員が取り立てに行く。前回はその時に全身刺青姿で脅されたのである。すぐに牛島が乗り出して、相手を全裸にして首輪をつけて廊下を引きずりまわしたのである。

しかし、それは半年前のことで、しばらく家賃滞納は無かった。しかし、三月分から滞納が再び発生した。

「奴はセイホだから、本来は取りっぱぐれはないはずだがな」

セイホとは生活保護のことである。このマンションの家賃は一人世帯の生活保護の住宅扶助費の上限額で全室一律に設定している。通常は南向きや上階が高くなるが、関係なく同額なのである。

正確には住宅扶助費の上限額は変動するので、上限に近い五万円に設定していた。

「そうですよ。NPOでセイホの申請手続きを手伝ったから、受給できたんですから。ご存じの様に暴力団員を辞めた証明って難しい。NPOの信用で警察に照会までして、苦労したんですがね」

暴力団員は生活保護法第四条1項や平成十八年厚生労働省の通知を根拠に受給資格はないとされる。

しかし、第四条1項は非常にあいまいで、生活能力があれば受給しないというだけである。暴力団員はシノギで生活しているから受給資格が無いという理由である。

「俺は正直いって、マルBが辞めて生活できないから、セイホっていうのは納得できねえ。そんな奴は野垂れ死にすればいいと思っている」

元暴力団員、つまり暴力団から脱退していれば、日本の制度上は生活保護が受給が可能になっている。

「まして東京都心で冷暖房完備のマンションにただで住んでいて、他に生活費を貰う」

牛島は癖のようで、一気にまくしたてた。相手に発言させない口調でさらに続ける。

「ただで住むなら、東京都心でなく、日本にはもっと安いところがあるから、家賃の安い場所に住めよ。しかも、奴はそのただで貰ったマンション代の五万円をくすねている。より安い家賃を稼ぐために必死に働いている人の方が多いだろう。もっと優先して救う貧しい人間は日本中にたくさんいるだろう」

牛島の意見に良香も当然と思った。

「その通りと思います。しかし、彼の様な人物を保護しないで野放しにしていれば、いずれ犯罪しかねません。かつて刑務所に戻りたい動機だけで、無差別に女子高生をナイフで刺した前科者がいました。そういう被害も防ぎたいとの思いなのです」

野草は真剣な表情で答えた。

「しかし、セイホならダイノウだろ。奴は銀行口座が無いから、口座振替はできないだろうが。なんでダイノウにしなかったんだ」

ダイノウとは一部で使われる隠語であるが、代理納付制度のことである。生活保護費の住宅扶助費のみ家主に直接、役所から振り込む制度である。差し引いた残りを生活保護受給者に渡すのである。

アサヒ信用保証でも生活保護受給者を入居させる際には代理納付制度を推奨している。しかし、不動産仲介業者が面倒くさがるのか、全く利用されていない。

不動産仲介業者にとっては同じ手間で家賃の原則一ケ月分の報酬が受け取れる。生活保護者は最低水準の家賃の一ヶ月分である。さらに手続きが面倒なので、代理納付制度を避けたがる。

しかし、このマンションでは契約時に仲介業者を介しない。NPOが手続きするので、代理納付制度を利用するはずである。

「当然ながら、ダイノウで手続きしていました。しかし、NPOの職員が帰った後に座間は無理矢理にダイノウから現金受給に変えたのです」

「なんだ、最初から裏切られてるじゃないか」

「この件があってから、賃貸契約書にセイホはダイノウという項目を追加しました。他の以前からの入居者も追加契約をして全部ダイノウに変更しました。しかし、座

間だけは応じないんです」
「それで俺が登場する訳か」
牛島の言葉で野草は頭を下げる。
「申し訳ない。座間は役所から生活保護を現金で受け取った後はそのままパチンコや競馬に行きます。今月はゴールデンウィークだからヤバいかなあ」
生活保護支給日は福祉事務所により毎月一日から五日まで異なる。コーセーマンションの住人は五日である。
二〇一八年五月は三日木曜日から六日の日曜日とゴールデンウィークの休みになる。五月七日月曜日の今日でなく、ここでは五月二日水曜日が支給日になった。
生活保護者の多い家賃保証会社にとって、どの自治体で何日に支給されるかは非常に重要な情報である。四月二七日に支給する福祉事務所もあった。
「さすがの俺も五月二日は忙しくてね。普段はセイホの支給が一日から五日まで分散しているが、さすがに五月は二日に集中しすぎた」
「もちろん、その辺の事情は分っています」
野草がヤバいと言ったのは、その間に全部使っていないかという心配であった。
「セイホの中には一日でギャンブルで使い切る奴もいるからな。しかし、奴は家賃分をギャンブルで使っても生活費は残すタイプだ」
牛島は左の掌に右の拳を何度か叩きつけた。そろそろ取り立てに行くのだと良香は悟った。
「事前に電話で確認した通り、座間は居るんだな。パチンコにでも行かれたら、無駄足だ」
「午前中は堅気のような服装で出かけていましたが、昼過ぎに帰宅しました。電話の後は外出していません」
ガラス張りの事務所は入居者の出入りを確認するためのようであった。
牛島が立ち上がり反対側のドアに向かった。そのドアを出ると二つ目のオートロックがある。
取り立てに行くと分り、良香も続いた。野草も合鍵を持って、後に付いてきた。
三人は三〇四号室の前に着いた。
「インターフォンはお前が押せよ。それから魚眼レンズの前に立て」
「なぜ、私が」
「俺の顔や声だと奴は出てこない。お前の顔と声なら喜んで出てくるだろう。何のためにお前を連れてきたと思っているんだ。見学気分であれば、足手まといだ」
座間がドアを開けなくても野草が合鍵で開ける、と良香は思ったが、口に出さなかった。
「面白そうね」
良香はレンズの正面に立ってインターフォンを押した。
【著者注】百室超の住民全員が前科者というマンションを知り着想を得ましたが、それ以外はフィクションです。

左・右・左・右・右・左……右

匠　克仁

『左玉の法則』をまんじ138号に書いた。男性の股間は右○○より左の○○が下にぶら下がっているのが多い。
左右非対称なのは、人間の体で解剖学的に説明できる。
右側に肝臓があるのがそもそもの原因である。そのため左の腎臓と比べて、右の腎臓が下にある。尿管は左より右が短い。（解剖学の本で男性の尿管は右が290mm左が303mmとある）尿管と精管は胎児期では同一で右と左の尿管の長さの違いは精管に比例する。そのため左の精管の方が右よりも長くなる。精管の先の○○では右よりも左が下になる確率が高くなる。確率の問題で『左玉の法則』は例外がある。かくいうぼくが例外であり右の方が下にくる。ぼくは常にマイノリティである。
左右の○○の高さが同じになることはない。もし仮に左右の高さが同じだったらアメリカンクラッカーのように左と右の○○がカチカチして、悶絶する。これは冗談で右と左で高さが異なる理由は、精子が高温に弱いためで左右の位置をずらすことで冷却するためである。左下で右上の割合は日本人で75%と『性は生なり』にあって左下で右上は米国人で65%とも書いていた。解剖図も右よりも左を下で描写している。日本大百科全書では、「左側○○が右側より低く下垂……」とある。ダビデ像も右の○○より左の○○が下で彫像されている。さすがに左利き天才ミケランジェロ作品である。谷崎潤一郎は『右の○○はゆっくりと鮑が蠢くように上り下りの運動…左の○○はあまり運動する様子がなかった』と書いた。『右の○○…』と書いたが原文では伏字でない。谷崎は『左玉の法則』を知っていたと、ぼくは思った。野球では右回りでなく左回り、つまり、反時計回りのルールも『左玉の法則』である。75%の男性が目を瞑り歩いたら右側でなく左側にそれると思う。それで野球も陸上で

も左回りになった、とぼくは解剖学的に推測する。空手で右蹴りが左蹴りよりも強烈なのは左脚に重心がかかる『左玉の法則』の一例である。車もアクセルとブレーキが右足で操作するが、左足は使わない。右足は動かせても左足だと左の○○と絡む（男性が多い）からである。（右ハンドルの日本車でなく左ハンドルの外車も同じ）

『左玉の法則』には第一法則だけでなく第二法則がある。右○○よりも左○○の方が小さい。第一法則が成立せず左○○よりも右○○が下にきた場合は成立しない。逆に右○○の方が小さい。複雑そうだが単純である。つまり左右に関係が無く下の○○が小さい。胎児は多く左から右の順に○○を腹腔外へ押し出す。胎児の○○へ栄養は左右の精管を通じて行われる。多くが左の方が遠いので右よりも栄養が届きにくくなり、小さくなる。ところで左右の○○が元々、腹腔内あったことから、格闘技で左右の○○が金的を受けて腹腔内にめり込むことがある。

左か右どちらか、たまたまたまたまがめり込む。確率は右つまり腹腔に近い人が多そうだが……。ぼくの場合は左の方が５０％強であった。上がめり込み確率が高いが右も５０％弱と近い。下の方が小さいからと推論する。

『左玉の法則』の第三法則は○○めり込み方程式である。右でも左でもこの悶絶感は体験した者にしか分らない。左玉の重心点と腹腔鼠径開口部との距離をｌとする。右玉の重心点と腹腔鼠径開口部との距離をｒとする。左玉の楕円体の長軸に垂直の最大断面積をＬとする。右玉の楕円体の長軸に垂直の最大断面積をＲとする。

左：ｌ　Ｖ　右：ｒ　（Ｖは数式の大なりである）

右：Ｒ　Ｖ　左：Ｌ　（Ｖは数式の大なりである）

左のような方程式が成立することに経験から気付いた。

右：ｒの２乗 × Ｒ ＝ 左：ｌの２乗 × Ｌ

『左玉の法則』のめり込み事象は腹腔の鼠径開口部面積が右玉と左玉の断面積より小さい場合は、成立しない。

『左玉の法則』と書いてきたが論理的な読者からすると『右玉の法則』も同じと指摘されそうである。フレミング左手の法則に敬意を表して名付けた。フレミング自身は右手の法則も唱えたのであるが、同じ現象として日本で左手の法則だけ学校で教えている。フレミングの様に『右玉の法則』としても普及活動してよいかもしれない。

『左玉の法則』について、ここまで読んだ男性の読者は、左右の○○の位置と大きさを確認しているだろう。女性は左右の○○を確認するため主人のパンツを剝いでいる。

右と左で人間の体が対称でないのは当然としても、実は左右対称に見える臓器もでそうではないものが多い。

右脳と左脳は機能が異なるが形は対称的に見える。実は左右対称の形ですらない。脳溝（いわゆる脳のシワ）は右脳と左脳とは鏡像でない。形だけでなく位置も右脳と左脳は前後に少しだけずれている。左脳は言語脳であり右脳は非言語脳である。左脳は論理、右脳は直感であり左脳は直列思考で右脳は並列思考である。ミクロ構造も右脳と左脳の海馬のシナプスは非対称である。（『脳の左右差』伊藤功）左脳では左脳同士のシナプスは小さく右脳からのシナプスは大きい。右脳は正反対である。

左右の両方ある臓器で誤解が多いのは、眼なのである。

右眼から入った情報は視神経が視交叉で交差して反対は左脳視覚野へ伝わると習った。同様に左目からの情報が右脳視覚野へ伝わると習った。しかし、これは間違いで左右の眼球の入力情報が単純に入れ替わるのでない。

右眼の視野の内の右半分が左脳に伝わる。右眼の視野の左半分は右脳に伝わるのである。左眼の視野の左半分が右脳に伝わる。左眼の視野の右半分は左脳に伝わる。

左右の関係が複雑に見えるが単純に表現できる。視界の右半分が左脳で視界の左半分が右脳で処理する。しかし左右の違いは解剖学的には複雑な構造になっている。

右眼の視神経は左脳視覚野に直通しないで、二つに分れ左脳と右脳の両方に繋がる。左眼の視神経も二つに分れ右脳と左脳とのそれぞれの後頭葉の視覚野に繋がる。

左後頭葉の視覚野では、文字や文章を理解する。対して右後頭葉の視覚野では、絵や図を認識する。そうすると左半分に図を入れ、右半分に文字を入れると良い。この右と左をプレゼン資料で配置するのは脳科学である。

左眼が例えば弱くなった場合に右の視神経が強くなって右眼で左眼の分の視覚情報を左右の脳に伝える。ぼくの左眼が遠視で、右眼が近視は生まれつきである。ぼくは右眼が利き眼になるが、実は視力検査をすると右眼より左眼が良かったりする。ぼくは五十五才であるが、左も右も眼鏡なしなのは視神経の微妙な連携と思っている。

左下頭頂小葉では右側のみ視覚情報を処理する。一方の右下頭頂小葉では左側も右側も視覚情報を処理する。

左下頭頂小葉が損傷しても視覚情報を処理できるのだが右下頭頂小葉が損傷したら左側の視覚を処理できない。

左半側空間無視という。半側空間無視は左半分であって右半分の空間無視は（０％でないが）ほぼ発生しない。

左下側頭回は視認したものの性質などを認識する能力が右下側頭回より優れている。右下側頭回が損傷するより左下側頭回が損傷した方が見たものの認識ができない。

右耳は左脳聴覚野に、左耳は右脳聴覚野に伝わる。実は左耳でしかぼくは電話することができない。というのは右耳だと言葉は聞こえるが内容を理解できない。恐らく左脳が一般的な人と違うのかもしれない。聴力は左耳も右耳も正常である。言語を理解できるウェルニッケ野は左脳に存在すると教わって、そう思っていたが、実際は右脳に小さいが存在する。正確には、ウェルニッケ野は左側頭葉が大きく右側頭葉の６～７倍である。左耳より右耳の方が言語の理解しやすくなる。ウェルニッケ野が左脳に大きいことから一般人は右耳利きが多い。ぼくは右耳利きでなく左耳利きであり、マイノリティである。

左耳よりも右耳から相手に話せば正確に伝わる。それで右側（相手にとって）から話せ、とビジネス書にある。

左のウェルニッケ野を損傷すると完全に失語症になるが右のウェルニッケ野を損傷しても失語症は少なくなる。

左右の違いは顔で眼と耳だけでなく、鼻にも存在する。右の鼻の穴と左の鼻の穴の呼吸は正反対の効果がある。左の鼻呼吸では右脳と副交感神経が優位になる。反対に右の鼻呼吸では左脳と交感神経が優位になる。眠る時に左の鼻で、起きたら右の鼻で呼吸するとよい気がする。右と左は鼻の中で繋がっているので一緒と考えそうだが左右の違いはハーバード大の根来教授も唱えている。

右利きが左利きよりも全世界で多い。日本人では右利き左利き比は9対1である。民族や文化の違いがあっても右利きが圧倒的多い。文化的に考えても、例えば英語は左から右に書くから右利きが便利である。アラビア語は右から左に書くけれど、その言語圏でも右利きが多い。

左利きよりも右利きが多いのは猿でも確認され、魚類も右側の運動能力の方が高いものが多いと確認された。『左ヒラメ右カレイ』といわれているが左利きのヒラメと右利きのカレイが証明して魚類は利き側が存在する。

左利きはアインシュタインなど天才が多いと言われる。右利きと左利きで脳の働きが違う。右手で文字を書くと左脳の運動野から言語脳である左脳だけ働く。ところが右手でなく左手で文字を書くと右脳の運動野から脳梁で左脳の言語脳に伝達する。左脳の言語脳から脳梁を経て右脳の運動野に戻り、左手の神経に伝達するのである。

左利きは常に左右の脳を連携して使う機会が多いために右利きが左脳だけ使うのと比べ天才が多く育つと思う。

左に心臓が有るのが普通であるが12000人に1人に右胸心という右に心臓が有る人がいる。位置が右寄りと左右が鏡像に心臓のみ反転と全内臓が反転とがある。

右でなく左に心臓があると書いてきたが実は解剖学では左でなく、ほぼ中央に位置すると記述する。解剖図では右心房は胸骨中央線の右にある。心臓マッサージの際は左よりでなく中央を押すのである。心臓が本人からみて右下に傾き全身に血を送る左心室が左の方にあるために左胸がドキドキすると感覚的に感じるだけなのである。

右と左では呼吸の量が異なる。右側の呼吸の方が多くて左側の2割増しである。具体的には左肺の容量が1ℓで右肺の容量が1．2ℓである。右肺は3つの肺葉があり左肺は2つの肺葉しかなく奇数個になる。さらに細かく右肺は10の肺区域があるが左肺は8の肺区域である。

左右の肺に繋がっている気管と気管支も非対称である。右気管支は左気管支と比べると太い。さらに右気管支は左気管支より短い。気管から気管支に分岐する角度では右気管支が25度の角度で垂直に近くなっているのだが左気管支は45度の角度で水平に近い。誤嚥性肺炎では右肺が多いのは太さと短さと角度のためである。心臓

が左にあるための構造である。気管支は最終的に肺区域の右が10本に左が8本に分岐し、2本分岐を繰り返す。

左右の違いが意外にあるのが横隔膜という筋肉である。左右が水平で、まな板のような略図を見かける。実際には左右不均衡なクラゲが近い。傘状になって背骨に横隔膜右脚と横隔膜左脚がクラゲの足の様に張り付く。右脚が左脚よりも長く太くこれもアンバランスである。多くは右脚が背骨3個と左脚が背骨2個と繋がる。なお右脚・左脚は、うきゃく・さきゃくと読む。傘も不均衡であり右が高く左が低い。右が厚く左が薄い。右がやや丸くて左がやや平べったい。横隔膜がこのように不均衡なのは右に肝臓があるからである。（焼肉のハラミである）

左右で当然であるが腹部の急所が異なる。大きい要因は右に肝臓があるからである。ボクシング等の格闘技でも左腹を打たれても平然としているが、同程度に威力でも右腹を打たれると悶絶している。三日月蹴りはほとんど左脚を使う。蹴りで左のみの技は他に知らない。これは右の肝臓を狙うためである。右脚で三日月蹴りをしても左脚ほど肝臓をえぐれない。代りに急所ではないのだが右の三日月蹴りでは脾臓を狙う。事前に対戦相手が分り左構え（サウスポー）選手であれば、その試合の秘策で右の三日月蹴りを特訓すれば肝臓を狙える。ぼくは別に左の三日月蹴りを食らったことはないが、レスリングで右わき腹を痛打してのたうち回ったことがある。肝臓の左葉と右葉との中間にある肝鎌状間膜だと思う。ぼくは右ろっ骨だと思いそのまま接骨院に行った。ろっ骨より左の中央よりだった。検査をしたが骨折してなかった。

右記の肝臓打撲の経験は33年前であるが鮮明である。左右の○○が腹腔にめり込んだときの体験に匹敵する。右に数回、左に数回のたうち回りぼくはうずくまった。左の三日月蹴りを受けたら、衝撃はそれ以上と思う。

右と左の腎臓は高さが違うと冒頭に書いたが、大きさは左の方が右よりわずかながら大きい。形は鏡像つまり左右対称である。腎移植で手術する場合はドナーの右より左の腎臓を優先して、摘出する病院がある。その理由は右よりも左の腎臓の方が手術しやすいためである。さて左右の腎臓が一つにくっつく馬蹄腎という奇形がある。左右の腎臓上に20分の1ほどの副腎がある。右副腎より左副腎は大きくて、形は半月形をしている。それに対し右副腎は小さくて形は三角形で先がとがっている。その左右の形と大きさが異なるのは、肝臓のためである。左右の内臓の詰り具合が違うように思う。ぼくだけなのか左半身よりも右半身の内臓の方が多くみえる。それなら右側の骨盤が低く傾くことで、均衡が取れる。論理的に左脚の方が右脚が長くなると思う。生まれつきでは左が右より脚が長いのでないかとぼくは考える。ネットでは左脚が右脚が長いと整体師が書いていた。現実として左右の脚の長さは異なっている。生活習慣やスポーツ等

で左脚より右脚が長くなる人がいると思う。同様な理由で右脚より左脚が生まれつきより伸びる人もいる。厳密に左右で同じ長さの人間はいない。廃用性委縮と同じ様に右利きだろうが左利きだろうが、使わない方の足も手も左右のどちらか短くなるのが当然であるとぼくは思う。

（右記の脚の長さの記述は、ネット情報とぼくの考え）

左半身に動脈が多いなど、血管は左右差が大きい。逆に右半身に静脈が多くなる。例えば、下行大動脈は背骨の左側に位置している（×下大動脈）。下大静脈は背骨の右側に位置している（×上行大静脈）。わざと×したが左右に対称的にある血管の名が間違えそうなので。なお右側の肝臓に門脈という静脈のみの血管が存在する。

左半身に多い動脈は自ら収縮し血液を流している。だが右半身に多い静脈は筋肉を使わないと流れない。つまり左半身より右半身の方を動かさないと血液が流れない。

右利きが多いのは血管の構造の影響の可能性がある。

左の首の動脈の方が右よりも脳への血流が多い。脳から右の首の静脈の方が左より血流が多い。その理由で首の左が損傷すると栄養阻害で認知症リスクが増える。首の右が損傷すると血圧が増え脳内出血のリスクが増える。

左脚が硬いと動脈が足先まで血を運べず高血圧になる。右脚が硬いと静脈が心臓まで血を運べず低血圧になる。

左右の違いは全身のリンパ管もある。リンパ管は血管に右と左とで二ヶ所のみつながっている。右鎖骨下静脈と左鎖骨下静脈である。全身のリンパ管の内、右上半身が右鎖骨下静脈とつながっている。左上半身と右下半身と左下半身のリンパ管が左鎖骨下静脈とつながっている。

右下半身のリンパ管が左鎖骨下静脈に繋がるのは、右も左も下半身のリンパ管は胸管で一つになるためである。

右記のこととも関連するが、胃癌はウィルヒョウ転移で左鎖骨上窩のリンパ節に転移することが多いのである。

右足のむくみに左の鎖骨を揉んだら影響があるだろうが左でなく右の鎖骨を揉んでも影響が無いだろうと思う。

右向きよりも左向きに寝る方がリンパ液の流れが良い。

左向きに寝るのは特に妊娠中の女性は良いと言われる。

右向き寝は子宮の後の下大静脈が圧迫されるためであり左向き寝は下行大動脈が圧迫されるが、左の動脈の方は右の静脈と違って弾力があるので、負担が少なくなる。

左側を母体の背中に向けて成長する胎児が6割と多い。

右向き寝か左向き寝かの良い方は、臓器の状態による。

左向きよりも右向きに寝る方が心臓が楽になる。それは右側を下にして寝ることによって心臓の位置が上になり左にある心臓の負担を軽減することができるのである。

右向きに寝ることは胃の調子が悪いときにもよい。胃は左が入口で右が出口だからである。大腸の形から便通も右向きがよい。お尻を鉄の医療器具で串刺しされたとき左向きにされたと三十年前の体験をぼくは思い出した。

右記悲劇はまんじ127号『鉄のペリカン』に書いた。

編集後記

ロシアとウクライナの戦争、始まってから一か月を過ぎようとしている。新聞報道によると、戦いによる人命損傷以外に、人権侵害の最たるもの、ジェノサイドも起きていると言う。国連は何のためにあるのか、存在意義が不十分と思う。戦争の当事国、または一方的侵略国に対し、全部門の輸出入・金融・人的交流などを即時全面的にストップして、当該国が立ち行かないようにすれば、戦争をやめざるを得ない。「戦争絶対反対」一高齢者の勝手な思い描きであろうか。

コロナ禍がはじまって二年を過ぎた。またまた新型コロナ「BA・2」が今日の都内感染の八割に達していると言う。このように次々と菌が新規に変形すると、人間社会がコロナと「安全な共生」を追求せざるを得ないか。コロナ菌を地球上から全滅できなければ。

今月号から新たな同人として水谷嘉弘氏が参加された。氏は協和銀行出身、現在は夭折した画家の顕彰活動をされています。詳しくは、本号掲載の「近代日本洋画こぼれ話」と、掲載記事中引用（quote）の「一般社団法人」（氏のホームページ検索）をお読みいただきたいと思います。氏のまんじ誌同人加入は、三戸岡氏がかねてから奨めておられました。

コロナで二年以上開催されていない「まんじ合評会」の五月開催を期待しています。しかし、東京都がいろいろな規制を取りやめていますが、相変わらず都内での毎日の新規感染者数が七～八千人発生の状況ではどのようになるのか。ワクチン三回接種者の重症化率が八十・九十歳代では半減していることは効果が出ていますね。

（鍋）

まんじ第164号

令和4年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL･FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について
「虎吠えて風生ず」　　田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.165

2022.8.1

まんじ第百六十五号　目次

おかしな忠臣……千坂精一…4
井蛙の見　ウクライナ……新井宏…11
漢詩　汲深録（二十九）……松井秀人…27
短歌　竹の秋他……山本一成…29
天守台を仰いで(六)……三戸岡道夫…32
古い物・遠い夢　我家の一品……忠内正之…40
吾輩は紙魚ロボである　その一一……永畑俊三…51
青雲の彼方（十六）……太田精一…80
江戸庶民の「名刺」（3）……山田嘉久…94
柿本人麻呂④……横山正義…103
続　万機公論に決すべし……浅野博文…108
近代日本洋画こぼれ話（第二回）……水谷嘉弘…121
安芸門徒シルクロード紀行（16）……村上邦治…130
高山右近（十四）……鍋屋次郎…153
…信仰に生きた生涯…
私の本州マラソン歴史紀行（東北編④）……安藤剛…165
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その六）……山本勉…193
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　2　神戸から来た男（五）……匠克仁…215
字・字・字・字……字……匠克仁…221
編集後記……編集子…227

おかしな忠臣

千坂精一

一、

東北地方出羽国（山形県）米澤の上杉家中に吉田次左衛門秀序という剣客がいた。

上杉といえば謙信が有名であり、その最盛期の版図（領域）は本拠の越後国（新潟県）をはじめ十四箇国におよび、三百万石はあったろうといわれている。

信長が斃れて秀吉の天下になると、秀吉は東北地方の陸前国（宮城県）仙臺を本拠にしている伊達政宗牽制のため謙信の跡を継いだ養子の景勝に會津（福島県西部）百二十万石を与えて転封させた。

このとき景勝の所領は越後国七郡、佐渡三郡、信濃国（長野県）川中島四郡、出羽国庄内三郡の九十一万石であったから、かなり厚遇されたわけで、秀吉は景勝を頼りにしたといえるだろう。

景勝が會津へ入ったのが、慶長三年（一五九八）でその年に秀吉が歿し、二年後に関ヶ原の合戦が起こった。

秀吉方（西軍）を制して家康（東軍）の天下になると、天下分け目の関ヶ原の戦いで豊臣恩顧の大名として家康に反抗した景勝は、會津百二十万石を没収されて、米澤三十万石に減知されてしまった。

ところが上杉の災難はこれだけではおさまらなかった。

景勝の孫にあたる三代領主綱勝が二十七歳の若さで急死してしまったのである。

綱勝には実子がなかったがまだ若いので養子もきめていなかった。

この場合、幕府は〝御家断絶〟ときめていた。

上杉は間違いなく断絶となるところであった。

それを（名門上杉を断絶させるのは惜しい）と考えた綱勝の岳父で會津領主の保科正之が立ち上がり、ときの

老中阿部豊後守忠秋、酒井雅樂守忠清、稲葉美濃守正則、久世大和守廣之など四人のあいだを奔走して

「綱勝から高家筆頭吉良上野介義央の嫡男三郎を末期養子に届けるよう依頼されていたが多忙に紛れて綱勝の急死に間に合わなかった。たしかに依頼されていたことは間違いないから承認してやってくれ」

とたのみまわった。

老中たちは保科の申し出を吟味するまでもなく、なにしろ三代将軍家光の異母弟で、しかも四代将軍家綱の輔弼をつとめた保科正之の申し入れを断わるわけにもいかず、ろくに調査もしないで申し入れを承認し、半知十五万石で相続を認可した。

末期養子（急養子）を認められた吉良三郎は、万治元年（一六五八）十二月に綱勝の妹三姫が吉良若州義冬の嫡男上野分義央に嫁いで産んだ子であるから綱勝の甥に当たり、満更その場凌ぎの人選とは思えなかった。

だが、問題は家臣団であった。

謙信以来の六千人の家臣団は減知されたからといって誰一人去る者はいなかったのだ。

やむなく家臣たちの俸禄も會津から米澤へ転封されたとき四分の一借り上げていたが、さらに二分の一を借り上げにした。

これでは上士はともかく下士は生活できないので、やむなく城下を出て郷に入り半士半農の生活を余儀なくされた。

この下士たちを城下にのこった上士たちは

「原方の糞つかみ」

と軽蔑し、言われた下士たちは上士たちを

「城方の粥腹」

と応じてたがいに蔑み合った。

そんな下士のなかに吉田次左衛門秀序という剣客がいた。

隠居してからは一無と号していたから、そのほうで知られている向きがある。

彼は若年のころから武芸に励み、梅澤運平に師事して修行を重ね、ついに独自の一刀流抜刀術を編み出すと、城下に道場をひらき門弟を指南してその極意を伝授した。

その吉田秀序についてはこんな風説がつきまとっていた。

いつごろのことか定かではないが、あるとき秀序が領内の村はずれを歩いていると見かけぬ相撲取りに出会った。

秀序は興味を抱いて素姓をたずねると、江戸相撲の屏風島という者で東北興業中に親方の逆鱗に触れて破門され、無一文で放たれてこのあたりを流浪しているということだった。

秀序は、その筋骨逞しいがっしりした体軀に見惚れて、（こういう大丈夫に剣の道を修行させれば鬼に金棒、有

事のおりには主家のために役立つかも知れない）

そう思って、

「それはお困りであろう。しばらく拙宅でゆるりと過ごされよ」

そう誘うと、屏風島は渡りに船とばかりについてきた。

しかしこの屏風島は素行が悪くて相撲界を破門されたものらしく、一緒に歩いているうちにその本性をあらわし、初対面の秀序を甘く見て突然金の無心をしはじめた。その強請たかがなかば恐喝的だったので、秀序はむっとして、無礼討ちにしようと刀の柄に手をかけたが、

（待てよ。相手の本心を見定めずに成敗しては過ちを犯す）

と思いとどまった。

その日は雪が降っていて、秀序は蓑笠姿であった。彼は笠に降りかかるさらさらという雪音をきいているうちに、

（この男の本性は読めた。やはり成敗いたそう）

そう決心した。

やがて、二人は城下町へ入る蘆漬橋を渡りはじめてなかば近くまできたとき、秀序を臆病者と見た屏風島が図に乗って再三脅迫を繰り返したあげく、ついには後ろから手を回して秀序の懐中をさぐってきた。

（いまだ）

秀序は素早く腰を落として抜刀すると、瞬時に体をひらいて横薙ぎに一閃した。振り向くと、一刀両断にされてその場に倒れているはずの屏風島が仁王立ちしたままなので、秀序は目を疑った。

そういえば確かな手応えがなかった。

だが、屏風島は動かず、声も出さない。

秀序は不思議に思って念のため刀の柄で屏風島を押してみた。すると、屏風島の大柄な身体が真っ二つに割れて崩れ落ちた。

秀序は己の抜刀術の練達に満足して思わず微笑み、屏風島の屍を川へ蹴落として帰ってきた。

この話が家中に伝わると、みなその手練を恐れて秀序に一目置き、子弟たちは秀序に教えを請おうと道場に詰めかけたので吉田一家の貧乏暮しが解消したという。

二、

上杉家中は謙信以来質実剛健の気風を伝統にしてきていたが、吉良家から二歳の甥が急養子に入ってからは同時に吉良家の華美な風習までが入り込んできてなにかと物入りが増えていった。

そのうえ当主綱憲の父だということで上野介のつけまで堂々と回してくるので、江戸家老は金策に奔走する始末であった。

綱憲は長じて四男一女の子にめぐまれたので、次男義

周を父吉良上野介義央の養子に入れた。

綱憲は二歳から当主になって元禄十六年（一七〇三）二十歳になった嫡男吉憲に領主の座を譲って隠居するまで三十九年の長きにわった。

領主の座を譲られた吉憲は健康にすぐれず、在位二十年で享保七年（一七二二）五月一日に病死してしまった。嫡男宗憲が僅か九歳で後継したが、在位十三年の享保十九年（一七三四）五月十三日に病死してしまった。享年二十一歳であった。

宗憲は病弱で子がなかったので弟の宗房が十七歳で後継したが、この人もまた病弱で在位十三年の延享三年（一七四六）八月十二日に病死してしまい、末弟の重定が後継した。

この人は父や兄たちと違って病弱ではなかったらしいが、そのかわり吉良家の華美な風習のほうを受け継いでしまい、華美な生活に明け暮れて贅を尽くし、重臣たちを困らせた。

その生活ぶりは東、西、南の部屋に三人の側室をおき、数十人の女中を侍らすという派手なもので、子供も正室に三人、側室に七人いて扶養家族だけでも十四人いた。

趣味は能楽を好み、興業と舞台の造営に巨費を惜しまなかった。

この頃江戸市中では、

「鍋釜の金気をとるなら上杉様」

と囃されていた。

金気とは、鍋、釜、鉄瓶などに水を入れて火にかけたときに出る赤黒い渋のことで、そのとき上杉様と紙に書いて鍋、釜、鉄瓶に貼れば金気がとれるというのである。

いかに上杉が窮乏に喘いでいたかがわかる。

明和元年（一七六四）重定はついに経営を投げ出して、江戸家老色部典膳照長を岳父の尾張領主徳川宗勝の市ヶ谷屋敷（現在自衛隊市ヶ谷駐屯地）に遣わして意を伝えさせた。

おどろいた宗勝は老臣石河伊賀守に命じて上杉家江戸家老竹俣美作當綱を呼んで説得にあたらせた。

尾張徳川宗勝の意を受けた重定は、改革などできるはずはなく、四年後の明和四年（一七六七）四月二十四日健康がすぐれないことを理由にして領国経営を投げ出し、四十八歳の若さで隠居してしまった。

あとを継がねばならないのは日向国高鍋（宮崎県児湯郡高鍋町）二万七千石秋月種茂の弟で九歳のときに重房の養子に内約し、十歳で世子になり、十六歳で元服して従四位下弾正大弼となってときの将軍十代家治の一字を拝領して治憲となったのちの鷹山であった。

翌明和四年重定隠居のあとを受けて四月二十四日、十七歳で九代領主となった。

三、

宗房、重定と二君に仕えた吉田秀序はこのとき六十四歳になっていたが、その抜刀術は衰えを見せず、彼の道場は相変らず家中の若侍で賑わっていた。

襲封した治憲が財政再建に乗り出して大倹令を命じたことから、家中は守旧派と革新派に割れて烈しく対立した。

謙信以来の名門上杉家の格式を重んずる保守派の重臣たちは治憲の改革を妨害して、これを支持する革新派の側近たちと険悪な事態になっていった。

こうして上杉家中は二つに割れた。

国許は重臣たちが旧習を固執したので保守派が多く、革新派は江戸詰に追われることから領主の周辺は革新派の若者たちが多かった。

秀序は旗色を鮮明にしないまま若侍たちの武術向上にのみ指導していった。

そんなところへ細井平洲という学者が江戸からやってきた。

平洲は、学問は単に解釈だけきいていてもだめで、実際の役に立たなければならない。と主張し、いま生きている人たちの役に立たなければなんにもならない。とする実学者、折衷学者であった。

平洲を新領主治憲に紹介したのは上杉家中の医師であると同時に学者でもある藁科松伯であった。

松伯がなにかの用事で外出して両國橋に通りかかったときに橋の袂で辻説法をしている学者がいたので足を止めて聴いているうちにたちまちその学説に聞き惚れてのめり込んでしまった。

翌朝、さっそく治憲に目通りして細井平洲のことを報告し、改革の指導をしてもらってはいかがと進言した。

治憲は、松伯が推挙する人物なら間違いあるまいと承諾して、会ってみることにした。

平洲の自宅は神明町（港区）にあったが、寶暦十年（一七六〇）二月五日に神田から出火した火災が日本橋、京橋から深川にまで及ぶ大火となって、平洲の自宅も私塾も焼失してしまったので、浜町山伏井戸（中央区）に移転していた。

治憲は、依頼する方から出向くべきだと駕籠を仕立てて平洲宅を訪ね、改革の指導を懇願した。

平洲はいかに依頼する側とはいえ、重臣ならともかく領主みずから直々に一学究の陋宅を訪ねるなどということは前代未聞で、恐縮のいたりであった。

そこまで礼を尽くされた平洲に否やはなかった。

日をあらためて平洲は、迎えにきた藁科松伯の案内で、櫻田門外の上杉家上屋敷（現在霞が関法務省）に領主治憲を訪ねた。

平洲は領主治憲、江戸家老須田伊豆満主ほか江戸詰の

家中の者たちのまえで初講義をした。

平洲の学説はわかりやすいので、誰にももっともだと納得できた。

まもなく参観が終わり、治憲の帰国に供する重臣は江尾家老が交替の毛利内匠雅元がすでに出府していたので、須田伊豆が治憲と一緒に帰国することになった。

四、

米澤に帰国した治憲はさっそく国許の家臣たちに改革を通告し、細井平洲と相談して作成した『今後十年間省略の箇條』をまず打ち出した。その主なものを列記すると、

一、日常の衣服は木綿とし、公式の場合以外は絹を着用しないこと。

一、日常の食事は一汁一菜とし、年末年始だけ特別に一汁二菜にして祝うこと。

一、住居に贅沢無用の場所はつくらぬこと。

一、年始中元などの品物のやりとりはやめること

一、行列の人数を九十九人に減らすこと。

一、江戸における領主の年間仕切料（生活費）千五百万両を二百九両（世子と同額）に減らすこと

一、江戸屋敷にいる五十余人の奥女中を九人に減らすこと。

（以下省略）

そしてこの倹約令を発令すると、領主治憲自身が率先垂範した。

だが、これがすんなりいったわけではなかった。

江戸家老須田伊豆が異議を唱え、絹の衣服に縮緬羽織姿で城下を馬で乗りまわして反抗した。

国家老は主に城中と領内を行き来するだけであるが、江戸家老は江戸で他家の江戸家老や町人たちと合う機会が多いので反対であることを鼓舞してまわったのだ。

治憲は行過ぎを認めてこの項を訂正し、一部例外を認めたりしたが、守旧派は図に乗って治憲を困惑させた。

重臣の子息たちは親に追従して守旧を固執してあつまり、なにかと改革案に因縁をつけた。

大名家が尊重するのは飽くまでも名誉で、そのためには見栄を張り格式を重んじた。

改革の元凶は江戸からやってきた細井平洲という学者だから、彼を闇討ちに葬ればことはおさまる、と考えた。

では誰に討たせるかとなったとき、一刀流抜刀術で道場をひらいている吉田秀序の名前があがった。

さっそく秀序を呼び出して、お家の体面を汚す改革を指導している細井平洲に天誅を加える役を押しつけた。

秀序はお家のためならと一も二もなく引き受けた。

城中での聴講者は江戸詰の若侍が多数いるので討ち漏らす可能性が高いから、城を出て庄屋の広間でやる辻説法のときを狙った。

だが、このときは武士がいないので目立つことと、平洲自身は武士でもないのに隙がなく困窮した。

討ちとる機会がないままにときがすぎていった。

秀序は平洲の講義を聴くともなく聴いているうちにいつか平洲の学説に同調して、刺客のはずが平洲を護衛する側に立っていった。

そして、そのことが評判になり、保守派の者たちも吉田秀序と細井平洲を斃す刺客を捜し倦ねてしまった。

このことがいつか近臣を通じて治憲の耳に入り、秀序は安永二年（一七七三）八月八日御前へ召し出されて、『少給の身分にて壮年より武芸出精、梅澤運平へ入門、一刀流抜刀手詰棒の稽古修行致し極意を相伝え、数多の門弟に指南致し、年来武道に志深く、名誉の修練を感せられて綿子五把を賜わった』

秀序は、主君直々の表彰を受けて、

「わがこと終われり」

と三日後に隠居して以後〝一無〟と号した。

家督を継いだ盛衛秀篤は嫡子ではなく嫡孫であった。

秀序は、吉田一無となって九年生き、天明二年（一七八二）正月二十九日に七十九歳で歿した。

（了）

井蛙の見　ウクライナ

新井　宏

私の人生では、「ウクライナ」に何の接点もなく、霧の向こうにぼんやり浮かぶ遠い国の印象であった。しいて言えば、二〇〇三年ルーマニアの奥地マラムレシュの観光地サプンツアから国境のティサ川をはさんで西部ウクライナを遠望したこと、そして本誌一三三号(2014)に「均衡者外交…あるいはポーランドと韓国」を書いて、ロシア、ドイツ、オーストリアの三帝国によりポーランドが三分割された時、運命を共にしたウクライナのことを書いたことぐらいであろうか。

しかし、丁寧に探すとコサックとかモンゴルとかオデッサとか儀礼とか美人とか色々と思い浮かぶ。この際、それらのキイワードに少しお化粧しておくのも満更ではないだろう。書き終われば、ウクライナについて、ある程度一貫した知見を得ることができるかも知れない。

それからもうひとつ、同人の永畑俊三氏（永田俊一氏）から頂戴した著書『遺志ありて・信託の本懐』(2012)には一九一七年のロシア革命の頃や一九三四年のウクライナ儀礼について、示唆に富む記述が多くある。最後の項で触れたいと思う。

一　ウクライナ・国名

ウクライナの語源はスラブ語で、国境地帯、辺境の地という普通名詞だという。しかしドン・コサックとかウクライナ・コサックと言う言葉があるところを見ると、ウクライナも固有名詞としても使われていたらしい。十二世紀後半の『キーウ年代記』にウクライナという表記があるが、キーウより西のペレヤースラウ公国のことを意味していたようで、固有名詞であったかどうかは定かではない。

ウクライナ・コサックと言えば、何か古風な騎馬民族

のイメージを思い浮かべるが、その起源は意外に新しく十五世紀頃で、しかもウクライナの東南部「荒野」というステップ地帯が発祥の地だという。ステンカ・ラージンやショーロフの『静かなるドン』で有名なドン・コサックは十六世紀になってからロシアのドン河周辺に移住したグループだという。

その頃、黒海の北岸にはオスマン帝国に隷属するクリム・ハン国という「タタール」の国があったが、彼らが住む地から見て更に北側の地をウクライナ・コサックと呼んでいた。そのことでウクライナを限定した地域を意味する固有名詞とも考えられるが、ある時はキーウより西の地域を意味し、またある地域では辺境や国境地帯を意味し、「両義性」を持って自由自在に使われていた可能性がある。

だからウクライナが国家の名称になったのは一九一七年のロシア革命後に、中東部のウクライナ人民共和国と西部の西ウクライナ人民共和国が宣言された時だと思う。この頃、ウクライナ全体の地域を包括する適当な固有名詞がなかったので、いわばどの地域にも使える普通名詞の「ウクライナ」を使ったのであろう。

歴史的に見ると、九世紀後半から、モンゴル侵略により滅ぼされる十三世紀半ばまで、東スラブ人の居住地（図1参照）、すなわち今のベラルーシ、ウクライナ、ロシアを版図とする統一国家、キーウ大公国（図1、一三三万平方キロ）が存在していた。面積で言えば、ドイツ、フランス、スペインを合わせた一四二万平方キロに匹敵するほどの大国であったが、ヨーロッパの表記では、大公は国王以下の位であり、ルクセンブルク大公のイメージで誤解され勝ちである。それは、キーウ大公国内に多数の公家や大公家が存在し、その中の有力者が歴代のキーウ大公に就く「大公権」による緩やかな統治形態

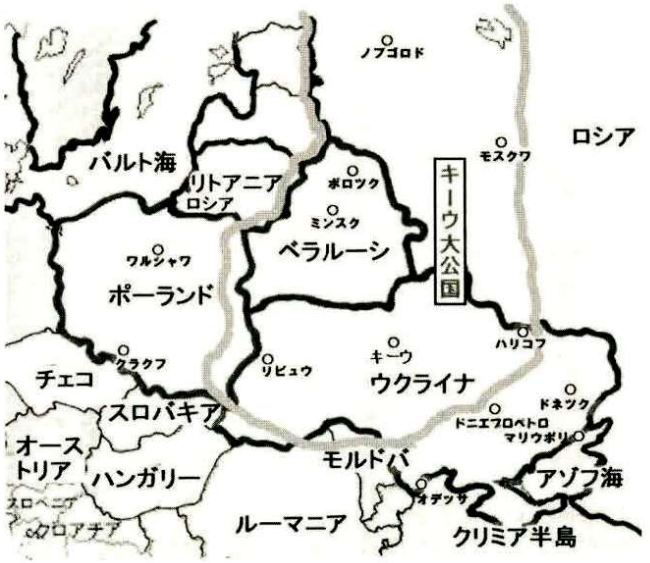


図1 キーウ大公国の版図(12世紀)

だったからであろう。

この地域の歴史を語る時、かならず出てくるのが「ルーシ」という言葉である。

「ルーシ」とはバイキング（ノルマン）を意味し九世紀頃から東スラブ人の居住地に次々と植民地を築いていた。最初は現ロシアのサントペテルブルクの南一五〇キロのノヴゴロド・ルーシ、更に三〇〇キロ南下して現ベラルーシのボロツク・ルーシ、また六〇〇キロ南下して現ウクライナに最大のキーウ・ルーシなどを築いたのである。

いわばバイキングの植民地を意味する名称であるが東スラブ人達はこれを嫌ってはいない。むしろ、「ルーシ」の発音が転化した「ロシア」やベラルーシ、キーウ・ルーシなどの地名のように現代まで維持されている。

事実、キーウを「ルーシの諸都市の母」として、他の都市や集落に優越していると考え、ロシアとウクライナの間ではキーウ・ルーシの正当な後継者争いさえ生じている。それはあたかも中国が朝鮮半島から古朝鮮、高句麗、渤海の歴史を奪い取り自国の歴史に繰り入れようとしている「東北行程」の様相と似ている。

それにしてもバイキング（ノルマン）はすごかった。フランスのノルマンディ公、英国のノルマン王朝、シチリア、南イタリアのノルマン政権など各地に次々と植民地を築くのである。

バイキングと言えば略奪を業とするイメージが強いが、多くは交易に従事していたのであり、ノヴゴロド・ルーシやキーウ・ルーシなどはバルト海から黒海を経て東ローマ帝国やイスラム帝国へと出るルート確保のための存在であった。その頃、バイキング国家（ノールウェイ、スウェーデン、デンマーク）の人口は全部合わせても百万人にすぎなかった。人口わずか十万人の通商国家ベネチアが各地に植民地を築き通商路を確保したのと同様、バイキングも各地に植民地を築いていたのである。

しかし十三世紀に入り、モンゴルのジョチ・ウルス後継者バトウが八万の軍勢を率いてキーウ大公国に侵入すると、大公国側もほぼ同程度の戦力を有していながら、多数の公国による協治形態のため、各個撃破され一二四〇年にはキーウ大公国も消滅してしまった。そしてバトウはポーランドやハンガリーへと侵略を続けた。

西欧にとって幸運だったのは、モンゴル第二代皇帝オゴデイが亡くなり、バトウに帰還命令が出されヨーロッパ侵攻が終わったことである。しかし東欧はその後二百五十年間、ジョチ・ウルスのキプチャク汗国による支配「タタールの軛」のもとにあった。

十五世紀中頃になるとポーランド・リトアニア同君連合がタンネンベルクの戦いでドイツ騎士団を破った勢いで、東方のジョチ・ウルスを駆逐し、ロシア側の一部を除きキーウ大公国の版図を回復し、モンゴルに替わって

キーウ・ルーシの支配者となった。タンネンベルクの戦いは中世ヨーロッパ最大級の戦闘と言われているが、ドイツ騎士団二万人、ポーランド二万人、リトアニア一万人程度であった。中世ヨーロッパの大会戦はその程度だったということなのである。

ちなみに、タンネンベルクの戦いの七十年ほど前の湊川の戦いも矢作川の戦いも京方二万名弱、足利方三万五千名で両軍の兵力としては同程度であるが、関ヶ原の戦いは両軍ほぼ十万名の規模である。もっとも、当時のポーランドの人口四百万人に対し日本の人口は千七百万人であった。

現リトアニアはバルト三国の最南、面積七万平方キロ、人口二百八十万の小国である。おそらく十五世紀もそうであったろう。それが、ポーランドと共に戦ったとは言え、ジョチ・ウルスを駆逐してキーウ・ルーシを手に入れたのである。

その一方で、当初からジョチ・ウルスに臣従していたモスクワ大公国も一四八〇年には事実上ジョチ・ウルスから自由となった。

ところで、タンネンベルクの戦いはもう一つある。第一次世界大戦が勃発した一九一四年のドイツ帝国とロシア帝国の間に起きた最初の大会戦である。この時はドイツ十五万人、ロシア四十二万人でドイツが大勝した。

さて、同君連合はその後一五六九年のルブリン合同によってポーランド主導のポーランド・リトアニア共和国（九九万平方キロ）に発展しヨーロッパの最強国となる。リトアニア共和国（大公国）は現ベラルーシ部分に限定されたが、ポーランド共和国（王国）は、黒海沿いのクリム・ハン国を除く、ウクライナ・コサック部分まで含めて支配することになった。例えば一六八三年のオスマン帝国十六万人の軍勢による第二次ウィーン包囲では、ポーランド国王ヤン三世が三万の軍勢を率いて救援に駆けつけ、ウイーンに到着するやいなや、精鋭三千騎を率いてオスマン軍陣営の中央突破を敢行、決定的な勝利を得てオスマン軍を敗走させている。

しかし、ポーランド・リトアニア共和国は、国王が世襲ではなく、神聖ローマ帝国の選帝侯と同じく、貴族が国王を選ぶ制度であったので、お互いに牽制しあい、外国系の王家からの干渉を招くことが多かった。

この頃、ウクライナ・コサックが叛乱を起こして独立を試みる。しかし内乱状態となり、ロシアの保護下に入る道を選んだ。もともとコサックはポーランド・リトアニア共和国の臣下でありながら、国王の支配を受けず自治を許された集団で、傭兵としても活躍していた。

このことが原因で一六五四～六七年のロシア・ポーランド戦争が起こり、ロシアが勝利してウクライナを東西に縦断して流れるドニエプル河の東側を獲得した。図2参照のこと。そしてロシア帝国が崩壊するまで二百五十

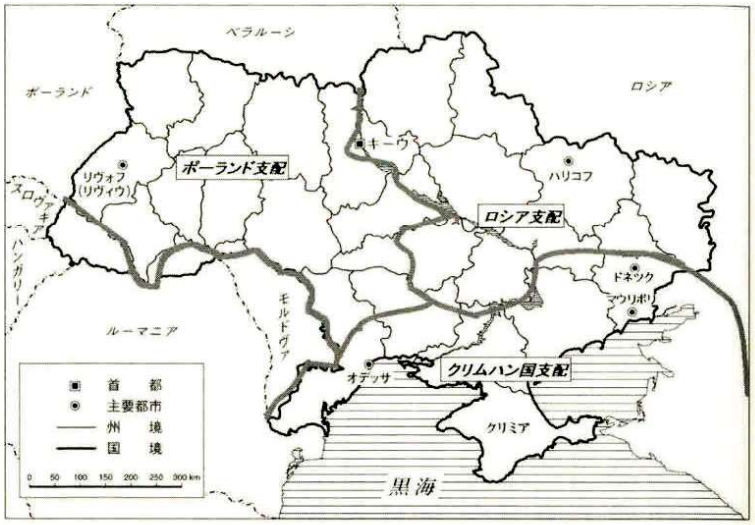


図2 1667年ロシア・ポーランド戦争後のロシア支配地

年間一貫して支配する。

更にロシアの女帝エカチェリーナ二世は一七六二年に即位するやポーランドに対する影響力を行使して、翌々年には親露派の貴族で元愛人のスタニスワフを国王に送り込む。また、南下してはオスマン帝国との二度にわたる戦争に勝利して、一七八三年ウクライナの一部やクリム・ハン国を併合し、バルカン半島進出の基礎を築いた。

このロシアの進出に危機感を抱いたのが、ハプスブルク家やフランスである。ヨーロッパで緊張が高まった。

そこに登場したのが、プロイセン王国のフリードリヒ二世である。戦略家であった彼は、ロシアとハプスブルグの対立を利用して、中に割り込み、ロシア、ドイツ（プロイセン王国）、オーストリア（ハプスブルグ家）の三強によって、ポーランド・リトアニア共和国を最終的に三分割し、一七九五年に消滅させてしまう。ロシアはポーランドを除くベラルーシ、ウクライナの地を獲得した。

前述したように、ウクライナが初めて国名として宣言されたのは、革命でロシア帝国が消滅した一九一七年である。この年、東のウクライナ人民共和国は独立を宣言したが、十月革命で成立したボリシェヴィキ（赤軍）と対立して劣勢に陥った。そのため一九一八年になるとドイツ・オーストリア軍の支援を得て、ボリシェヴィキを一挙に追い出し、クリム半島に至る広大な領土を手にした。

しかしその年の十一月ドイツ帝国が降伏すると赤軍が息を吹き返す。そして、ウクライナ人民共和国、ソビエト赤軍、ロシア帝政派の白軍、白軍を支援するフランス軍、イギリス軍、ポーランド軍、アナキスト軍などが入

り乱れる内戦状態になったが、一九二一年になってソビエト（赤軍）の勝利で内戦が終息する。そしてウクライナ社会主義共和国が成立し、一九二二年には、ロシア、ベラルーシ、ザカフカース共和国とともにソビエト連邦を結成した。

一九一九年のパリ講和会議で、ウクライナ側が主張した領域をみると、ウクライナ・コサックの領域やクリム半島に加え、アゾフ海の南東側のロシア領まで張り出している。

混乱の最中に、一六六七年のロシア・ポーランド戦争でロシアが獲得し、以降二百五十年間も支配してきたドニエプル河の東側をウクライナ領に繰り入れたのである。当然ロシア側が認めるはずのない提案であったが、その後、ウクライナ人民共和国がウクライナ社会主義共和国と名前を変えてソ連邦に編入されたので黙認されたのであろう。

だからドニエプル河の東側は、いまでもウクライナ語よりロシア語が優勢で、選挙では親ロシア側を支持している。

このような経過を見ると、本来ならウクライナはドニエプル河の西側の領域で満足し、ドニエプル河の東側を含まない方が良かったかと思う。そうであれば国名をベラルーシと同じようにキーウ・ルーシとでもしたはずである。

地政学的に見て、中国やロシア等の内陸巨大国家は、過去の歴史で支配したことのある周辺地はもとより、朝貢国さえも自国に編入しようとする本能がある。今、その動きがロシアや中国で進行している。韓国も台湾も危ない。

二　ウクライナ・戦艦

無声映画の傑作とされる「戦艦ポチョムキン」を知るのは、映画通か全学連の活動家である。私は後者である。しかし映画は見ていない。

一九〇五年五月二十七日から二十八日にかけて行われた日本海海戦でロシアのバルチック艦隊は戦艦八隻、巡洋艦級十二隻等の全てを失い壊滅した。旅順港を母港としていた太平洋艦隊も、ロシア側の記録では、前年八月の黄海海戦以降は、戦艦七隻、巡洋艦九隻等、全てが交戦能力を失って、旅順港に係留されていただけだったという。

そうだとすれば、十六万人もの死傷者を出した陸軍による旅順港攻撃はなんだったのであろうか。今更、そんなことを大きな声で言えないのであろうが、バルチック艦隊がリバウ港を出港したのがその年の十月、ロシア太平洋艦隊が八月までに、交戦能力を喪失してしまったことを知って慌てて送り出したと見る方が歴史的には判りやすい。

そして、ロシアはわずか一年で全艦隊の三分の二以上を失しない、残ったのは黒海艦隊のみとなっていた。

その黒海艦隊では、日本海海戦のちょうど一ヶ月後の六月二十七日、「戦艦ポチョムキンの叛乱」が起きた。艦は予定より二年ほど遅れ前月に竣工したばかりで、乗員は七三一名を数え、うち二十六名が士官で、砲術訓練のためセヴァストーポリ港を出港したところであった。

叛乱突発の原因は、昼食に腐った肉が使われていることに不満を申し立てた水兵に対し艦の副長が懲罰を加えようとしたことにあった。それに対し、水兵らはライフル銃を取り、士官らを武装解除し、艦長と上級士官のほか、憎まれ士官が水兵によって射殺された。そして午後には革命を宣言しオデッサに向かっている。

実は、この反乱事件の前から蜂起の計画が進んでいたのであるが、映画で有名な「オデッサの階段」の虐殺事件は虚構だという。

激怒したニコライ二世は、残りの黒海艦隊に叛乱艦の撃沈まで命令していたが、黒海艦隊の中にも叛乱に同調する動きがあり、双方事態収拾に手間取った。最終的に「ポチョムキン」はルーマニアで投降する。

戦艦ポチョムキンはロシア最新鋭艦で、全長百十三メートル、排水量一二九〇〇トン、日本海海戦の旗艦「三笠」の百三十一メートル、一五二〇〇トンを小型にした性能をもっていた。

ところで、今年四月十三日、ロシア黒海艦隊の旗艦「モスクワ」がウクライナ製の地対艦ミサイル「ネプチューン」を二発受け沈没した。「モスクワ」は全長百八十六メートルと長いが排水量は一一四九〇トンで「ポチョムキン」と同規模、同じムィコラーイウ造船所で造られている。現在ロシアが所有する戦艦のなかでは首都の「モスクワ」を名乗り、戦艦大和にも匹敵する重要艦だと日本の新聞は報道しているが、核兵器でも搭載していたのだろうか。

旗艦ともあろうものが、そう易々と沈没するのがふしぎである。英国・アルゼンチン間のフォークランド戦争の時も、英国の二百六十名乗船の駆逐艦「シェフィールド」がフランス製エグゾセ**AM39**空対艦ミサイル一発で沈没した。しかも弾頭は不発だったが大火災が生じたためと言う。

奇妙な偶然であろうが、日露戦争の旅順港戦でロシア太平洋艦隊の旗艦二三〇〇〇トンの「ペトロバヴロスク」も同じ四月十三日に機雷に触れて沈没し、マカロフ中将が戦死している。戦艦は本格的な海戦には強いが、小型漁船に衝突しただけでも戦力を喪失することがあると言う。今後の武器開発は安上がりのドローンに、安上がりなミサイルを載せて突っ込むような方向に進むような気がする。

ところで「戦艦ポチョムキン」や旗艦「モスクワ」を

作ったのはムィコラーイウ黒海造船所であるが、同造船所では中国の空母「遼寧」の元となる「ヴァリャーグ」も造っていた。しかしソ連邦の崩壊で資金が枯渇、ウクライナに移管し、四十億ドルで売るつもりであったが買い手がつかず、中国がわずか二千万ドルのスクラップ価格で購入し、空母「遼寧」として完成させた。しかし欠陥「空母」との風評がある。中国もいやな気分でいるのではなかろうか。

「ポチョムキン」の名称は、女帝エカチェリーナ二世の愛人の「ポチョムキン・タヴリーチェスキー公爵」に因む。軍人、政治家として、一七七三年に発生した大規模な農民の反乱「プガチョフの乱」の鎮圧や一七八三年のクリム・ハン国の併合で功をあげ、クリム地域の県知事となり、オデッサに住み、セヴァストーポリ要塞を築き、黒海艦隊を設立している。モスクワ大学で学び、特待生に選ばれ、宮廷から声がかかり近衛騎兵連隊で勤務していた。外見も人柄も良く、女性にもてたという。

前項でも述べたが、女帝は一七六四年にも元愛人のスタニスワフ二世をポーランド最後の国王に送り込んでいる。知られているだけでも十二人の愛人を持ち「王冠を被った娼婦」とまで呼ばれたが、歴代十四人のロシア皇帝中、初代ピョートル一世大帝と共に大帝と称され、実績をあげている。まして、その誕生の経過を知るとそのスケールに驚く。

エカチェリーナ二世はロシア人ではなく、ドイツの小貴族の娘でゾフィーと言った。二代前の女帝エリザベータはクーデターで即位したが未婚、血統を維持するため、ドイツ育ちの甥を養子とし、更に血縁関係のあるゾフィーを娶せた。甥はピョートル三世となり即位したが、知的障害があったのか外交面で失政を続け、即位半年後には皇后エカチェリーナを支持する近衛部隊がクーデターを起こし廃位され十日後には殺害されている。

エカチェリーナ二世は知的好奇心の強い勉強家だったようで、母国のドイツ語に加え二歳からフランス語を学び、ロシア語にも熟達し、その能力を政治に活かすことを望んでいたのであろう、激変する外交関係で手腕を発揮する。

治世時の功績としては、第六次、第七次の対オスマントルコ戦（露土戦争）でオスマン帝国から黒海周辺を奪い、ポーランド分割でベラルーシとウクライナを獲得し領土を拡張、その中でロシアの近代化を推進、エルミタージュ宮に膨大な美術品を収集したことなどが語られている。

日本との関係では、一七八二年、江戸に向かう伊勢の回船船長、大黒屋光太夫らが嵐のためアリューシャン列島に漂着、帰国を願うため八年後にエカチェリーナ二世にペテルブルクで謁見している。ロシア側にも日本との通商に関心があり、遣日使節アダム・ラクスマンに伴わ

れ、漂流から約十年を経て根室に帰国した。

もう三十年ほど前になるが、桂川甫周が大黒屋光太夫から聞き取った記録『北槎聞略』のことについて「史遊会」の南雲純さんから伺った記憶がある。探してみたが見当たらなかった。

三　ウクライナ・飢饉

『まんじ』に「狩谷棭齋讃歌」を連載していた二〇〇九年頃、狩谷家が弘前藩の米問屋であったことから天明の大飢饉のことを調べたことがある。

東北地方は一七七〇年代から冷害等により農作物の収穫が激減しており、農村は疲弊していた。こうした中、一七八三年には岩木山と浅間山が噴火し、火山噴出物が陽光を遮ったことで、近世最大の冷害が生じた。特に弘前藩では一冬で八万人を超える餓死者を出したという。

それは藩の杜撰な新政策が失敗し、その穴埋めのために年貢を増徴し、農民の種米さえも強制買上して江戸への廻米とし、京阪の商人への借財を返済したことに大きな原因があった。

折から田沼意次の時代、米相場は大阪商人の手にあり、窮乏した各藩は収穫前の年貢ばかりか、翌年、翌々年の分まで売り上げるので、不作だからと言って廻米を減らすことが出来ず、飢饉による被害は農家にしわ寄せされた。その上、商人は米価高騰をにらんで買い占めに走る。

天明の飢饉では米価が一石銀五十匁から百匁に暴騰している。

このような状況は、弘前藩のみならず盛岡藩、八戸藩、仙台藩でも同様であったが、上杉鷹山の米沢藩、松平定信の白河藩では死者をひとりも出さなかった。

やはり飢饉は天災というより人災なのだと納得し、世界の飢饉の歴史も覗いてみた。その時に調べたのは十九世紀のアイルランドのジャガイモ饑饉と二十世紀のウクライナのホロドモールだったと思う。いずれも典型的な人災であった。

この項を書きながらもう一度二十世紀の大飢饉について当たって見た。そしてびっくりした。中国毛沢東の大躍進政策の失敗で生じた大飢饉では千五百万人から五千五百万人が死亡したというのである。世界で最も多く人を殺害したのは、ヒットラーでもスターリンでもなく、毛沢東だと書かれているのを見るが、それがこのことだったのか。

大躍進政策とは、毛沢東の指導の下で、一九五八年から六一年までの間に施行された農業と工業の大増産政策であるが、現実を無視した増産手法、特に四害駆除運動で蝗害を招き大飢饉を生じたのだという。四害とは鼠・蝿・蚊・雀のことであるが、この内の雀撲滅運動は徹底していて、絶滅寸前まで追い込んでしまった。そのため、天敵のいなくなった蝗や虫が大発生し農作物を喰い荒ら

して大凶作を生じたと言う。周章てて、ソ連から雀を二十六万羽輸入したがもう手遅れであった。餓死者の中には、この大躍進政策を批判したために粛清された数も含んでいるだろうが、いくら人口の多い中国とは言え異常な人災であった。

さて、一九三二～三三年にかけてウクライナ等で発生した大飢饉はホロドモールと言われている。ホロドは飢え、モルは絶滅や抹殺を意味する合成語で、ソビエトの政策に抵抗したウクライナの農民に対するソビエト国家による攻撃の集大成で、飢餓ジェノサイド、スターリン飢饉などとも呼ばれている。餓死者数は諸説あって、三百万人から数百万人とか人口の二割とか言われているが、南京事件の犠牲者数をめぐって、日中間で桁違いの認識があるのと同様に、ロシア・ウクライナ間でも認識に大差があるという。かねてより「欧州のパンかご」と称されていたが、今や世界有数の穀倉地帯である。それが大飢饉に陥ったとはどういうことなのか。

ウクライナの二〇二一年の小麦生産量は三千二百万トンで、そのうち四分の三の二千四百万トンを輸出している。主な輸出先はインドネシア、エジプト、パキスタン、バングラデシュ、モロッコで、世界七位の輸出国である。トウモロコシの輸出国でもありその生産量四千万トンのうち大部分の三千四百万トンを中国、スペイン、オランダ、エジプト、イランなどに輸出している。穀物生産量としては合計六千五百万トン、主要な生産地は南東部で北西部は少ない。

地球上では一人当たり平均穀物を三百八十キロほど消費しているので、ウクライナは一億五千万人分ほどの食料を供給していることになる。

それではホロドモールが起きた頃はどうだったろうか。ホロドモールに関するウィキペディアの解説を見ると、次のような記載がある。

・一九一九年一人当たり消費量を百三十キロとし、余剰の八十二万トンの徴発を命じた。
・一九二七年のウクライナの農村人口は二四一〇万人であった。
・一九二八年の穀物不足は二一六万トンで「危機」というほどではなかった。
・一九二九年には穀物三億プード、一九三〇年には四億六千四百万プードを徴発した。
・一九三一年の穀物収穫量は四億三千四百万プードと前年より減少した。
・一九三二年は一人当たり百十三キロの穀物しか残っていなかった。
・一九三二年にはスターリンが再び七百七十万トンの供出を命じた。

これらの記載で、おおよその状況はわかるが、重量単位のプードに註記がない。私は計量史の専門家なので直

ぐに一六・三八キロと調べることができたが、一般の読者には判るまい。三億プードは四百九十万トン、四億六千四百万プードは七百六十万トン、四億三千四百万プードは七百十万トンである。

一九一九年の記述に基づいて一九二七年の農村人口を適用すれば年の収穫量は四百万トンと計算されるが百三十キロの規準はいくら何でも低すぎる。江戸時代の米消費量は一人当たり一石（百五十キロ）とされていたが、小麦は米のようにそのまま炊いて食べるわけには行かない。脱穀し製粉してやっと米なみなので、実際には一人当たり二百キロほど必要であろう。事実一九九八年のロシアやウクライナの消費実績を見ると小麦だけで一人当たり二百四十キロ、その他の穀物を加えれば二百六十キロと百三十キロの倍である。その場合には収穫量は七百十万トン計算される。

収穫量については、一九三一年は七百十万トン、その前年は七百十万トン以上とあったことから見て平年作は九百万トンほどであったろうか。その数値なら一九二八年の穀物不足は二百十六万トンで「危機」と言うほどではなかったという表現が理解できる。

一方、徴発量については、一九二九年四百九十万トン、三〇年七百六十万トン、三一年七百七十万トンとなり、全収穫量に近い。三二年には一人当たり百十三キロ（合計二百七十二万トン）しか残って居なかったという記述と合う。ただし、徴発量は計画であり、その実績はかなり下回っていたであろう。

このような状況で収穫を根こそぎ収奪することで、一九三三～三四年の大飢饉ホロドモールが起きたのである。

徴発した穀物は外国に輸出された。革命後間もないソ連にとって第一次五カ年計画、特に銑鉄生産や電力網整備の資金源はどこにもない。計画達成と外国への借金返済にどうしても外貨を必要としていた。そのために、約四百万人、あるいは二百六十万人から一千万人とも言われる餓死者・犠牲者を生むことになったのである。

たたし、このような大飢饉のことが、ウクライナではあまり伝えられていなかった模様である。そもそもスターリンは外国に対して饑饉のことはひた隠しにしていた。諸外国にとっては、一九二九年以降の世界大恐慌の嵐が吹き荒れるなか、なぜスターリンが統治するソ連だけが経済成長を順調にとげているのか理解しがたいことであつた。

その謎を解くために単身モスクワを訪れたイギリスのジャーナリスト、ジョーンズは、当局の目をかいくぐり、ウクライナ行きの汽車に乗り込む。凍てつくウクライナの地は想像を絶する悪夢のような光景だった。

二〇二〇年に日本でも公開された映画『赤い闇……スターリンの冷たい大地』はジョーンズが、その惨状を世界に発信する物語だという。

日本でどれほど知られていたか国会図書館の新聞・雑誌史料に当たってみた。

新聞の記事はまだ詳細に当たっていないが、雑誌・単行本で関連記事は二件だけ、取り寄せて見ると、両者は全く同じ内容。著者は正兼菊太というソ連や中国で活躍したスパイとされている人物で、『思想国防』一巻二号(1935)に「ウクライナの饑饉を見る」と言うタイトルで五来素川（皇化連盟代表、読売新聞主筆、明治大・早稲田大教授）らとの懇談を収録している。

注目すべきなのは「農村にいるのは大部分年寄りで、若い者はみな都会に逃げてしまっている」と述べていることである。その理由は、いくら収穫しても、一日百グラムのパンをくれるだけで、空腹のために穂一つでも盗めば死刑になるからだと言う。

実は饑饉の一九三二年は八・九月の段階では政府は豊年との見通しを発表していた。それが大凶作となったのは、働ける者がみな逃げてしまい収穫作業が出来なかったからだという。工場勤務の若者を一時動員すれば良いのにと著者は言うが、それが出来ないのが硬直した独裁国家の特徴なのだと思う。

このように、日本においてはロシア関係者しか饑饉のことを知らなかったが、ウクライナにおいても公にホロドモールのことが語られるようになったのは当然独立後のことである。ホロドモールをスターリン饑饉というのは、単にスターリンの第一次五カ年計画強行を意味するのではなく、生来ウクライナ嫌いであったスターリンがウクライナ民族抹殺を図ったとの理解からだと言う。

四　ウクライナ・美女

一九九〇年代後半、新宿の飲食店街で若いウクライナの女性達が働いていた。たまたまであろうが、こちらが気後れするほど英語が上手い。とにかく美人揃いだった。それ以来、ウクライナは美人の国だと思っている。

事実、ウクライナ美人説は客観的にも定着しているようだ。

オレンジ革命によって、二〇〇五年と二〇〇七年、二回にわたってウクライナの首相を務めたユーリア・ティモシェンコは、当時すでに五十歳に近かったが美人だった。ペレストロイカの波に乗り、不法コピーのビデオレンタル店経営で成功し、ロシアからの天然ガスの輸入業者となり「ガスの王女」と呼ばれ、驚異的な得票を獲得して国会議員に選出され、首相にまで登りつめた。その後も、大統領選に出馬し続けており、二〇一九年には現大統領のウォロディミル・ゼレンスキーに挑戦したが大差で敗れた。美人を武器としていたことは想像に難くない。

クリム半島を一方的に併合したプーチンによってクリム半島の「美しすぎる検事総長」に任命されたナターリア・ポクロンスカヤもいる。彼女はEUとNATO入りを目論むキーウの政権に反対していたが、今回のロシア侵攻にはインスタグラムで「狂気や憎しみを扇動することをやめるよう」に訴えている。その後、消息がないがどうなったか気になる。

東京五輪の空手組手女子五十五キロ級銀メダリストのアンジェリカ・デリューガ（三十歳?）も、五輪時の美貌の胴着姿でインスタグラムに「惨状」を投稿している。何やら出て来る人、出て来る人が美人なのである。そんなことがあるはずは無いが、私のなかではいまも「ウクライナ美人説」がしっかり定着している。

それはウクライナ人が最も広汎な混血の民族だからだと思う。そもそもウクライナは民族の行き交う十字路に位置し、北からのゴート族、東からのフン族の侵入に始まり、更にノルマン（バイキング）、バザール族、モンゴル族、タタール族などの侵入を受けている。

混血は美人を生むばかりでなく、身体機能も高めるらしく、日本でも野球、バスケット、ラグビー、テニス、相撲などのスポーツ界でも目立っている。

ロシアのウクライナ侵攻の最中に開催された北京の冬期パラリンピックでも、ウクライナは金メダル十個を含み合計二十九個のメダルを獲得している。これは地元中国に次いで二位である。因みに日本は合計七個のメダルで総合九位であった。やはり、永年の混血で身体機能のすぐれた民族だからと思いたいが、戦乱やチェルノブィエの影響で障害者が多く、そのための施設が整っているからとの解説もあった。そう言えば、五月五日ブラジルで開催されたデフリンピック（聴覚障害者の大会）で日本は卓球女子団体戦で銀メダルとなったが、優勝者はウクライナであつた。

いま日本でもウクライナからの避難民の受け入れがはじまっている。少子化を補い、数多くの美人やアスリートを誕生できれば、一石二鳥となるのではなかろうか。

五　ウクライナ・貧困

ウクライナの経済や教育事情を大まかに知るため、最も簡単な方法として、国民一人当たりの名目GDPと短大以上への進学率を周辺国やアジアの国と比較して見た。表1に示すが、ウクライナの名目GDPは、東のロシアの三分の一、西のポーランドの五分の一、北のベラルーシの二分の一、南のルーマニアの四分の一で、ヨーロッパ最貧国のモルドバよりも低い。購買力GDPで比較すれば、格差は若干縮まるが、大勢に影響ない。それにもかかわらずウクライナの短大以上への進学率は非常に高い。障害者の施設が整っているということも同じ原因であろうか。

それにしてもソ連崩壊時にはロシアと格差がなかったのに大差が生じてしまったのはなぜだろうか。

ご承知のようにウクライナは、中央部を南北に流れるドニエプル河の東側は親ロシア、西側は親西欧とはっきり分かれている国である。歴代大統領をみても、初代レオニード・クラフチュクは親西欧、二代レオニード・クチマは親ロシア、三代ヴィクトル・ユシチェンコは親西欧、四代ヴィクトル・ヤヌコーヴィチは親ロシア、五代ペトロ・ポロシェンコは親西欧と、ここまでは規則正しく揺れ動いている。そして現在の六代は親ロシアの順番であるが、二〇一四年のロシアによるクリム半島の武力

表1 GDP(ドル/人)・短大進学率の比較

国名	1992年	2020年		2018年
	名目	名目	購買力	進学率
ウクライナ	427	3,750	13,196	82.7
ロシア	483	10,148	28,170	81.9
ポーランド	2,316	15,718	34,225	67.8
ベラルーシ	1,252	6,516	20,226	87.4
ルーマニア	1,241	12,910	30,571	48.2
ハンガリー	3,733	15,948	33,144	48.5
モルドバ	290	4,378	12,750	39.8
スロバキア	2,572	19,254	33,061	46.6
モンゴル	722	4,202	12,074	65.6
インドネシア	908	4,197	12,220	36.3
フィリピン	947	3,512	8,452	35.5
ベトナム	179	3,616	10,897	28.5

進学率は短大以上(%)

による併合が祟りウォロディミル・ゼレンスキーが勝った。

ウクライナから周辺国をみれば、どの方向を見ても所得水準は三～五倍と圧倒的に高い。過半の国民がロシア語を話す東側はロシアに近づきたくなるのは当然で、ほとんどロシア語を解さない西側がポーランドに近づきたいのは誰でも簡単に判る。

本来ならウクライナ独立の際に旧キーウ大公国の領地のみを対象にすれば良かったのに、ロシアが一六六七年から一貫して支配していたウクライナ・コサックの草原まで取り込んだことが、ここに来て禍となって戻ってきたのである。

まるで李氏朝鮮の末期のようにあっちに付いたりこっちに付いたりしていて力が相殺され、それが経済発展を阻害しているのであろう。朝鮮半島のようにはっきり西ウクライナと東ウクライナと分かれていていれば、今頃、西ウクライナはポーランドいや韓国並みの経済を謳歌していたかも知れない。あるいは展開次第によっては、今後東と西に休戦ラインが敷かれることになるかも知れない。

地政学の示すところであるが、分断国家は難しい。

六　ウクライナ・信託

永田俊一氏から頂戴した著書『遺志ありて・信託の本

懐』には、本誌発行人三戸岡道夫氏が寄せた帯に次のように書かれている。

佐渡の夕焼けは美しい。あのきらめく空の彼方に信託があるのだと、信託を求めて、佐渡から東京へ、そしてアメリカ、ウクライナ、パリへと、信託を拡め追求する男の、感動の物語である。……

本書は主人公、祖父俊が明治維新とともに生を受け、その家族、祖母松子、息子英俊、孫俊継が語り継ぐ内容であるが、一貫して苗字は伏せられている。読者は著者の名前から永田俊と理解しながら読むことになる。

祖父俊は親友の松本孝や上田崇とともに「三人たかし」として佐渡から飛び立つ。面白いのは彼らも実在のモデルのように描かれていることである。

例えば、松本孝の父は、讃岐の人で洪庵の適塾で医学と鉱山学を学び、維新後藩命でドイツに留学し、鉱山学で名高いフライブルク大学で学び、工部省の鉱山技師になり、明治十四年には工部大学校の教授になったと詳細な経歴を紹介している。しかし明治期の冶金学者をかなり知っているはずの私には思い当たる人物がいない。

祖父俊は、明治十九年渡米、語学校から神学大学、そしてコロンビア大学を経てロチェスター大学を卒業、在米八年で帰国し、銀行に勤め信託銀行の経営に携わった。コロンビア大学時代にユダヤ人イリヤとウクライナ人ユーリアの夫妻と知り合い共に信託の道に進む。

戦後、新憲法公布後に俊の息子英俊のもとにイリヤ・ユーリア夫妻の意を受けたウクライナ信託基金の責任者が一九三四年パリで交わした信託契約書を持って訪れる。

祖母が経営してきた女学校を何とか再開しようと苦心していたところで、まさに干天に慈雨であった。超インフレ下の円ではなくドル資産で長期間のウクライナ信託基金の再信託が働き十分すぎるほどの金額であった。

本書には、祖父俊と祖母松子が一九一七年夏ウクライナのオデッサでイリヤ・ユーリア夫妻との若き日のことを思いながら、ウクライナの独立運動前後のことをかなり詳しく記している。精読してみると、にわか勉強でお化粧しながら書いた私の文章が恥ずかしくなる。

特にオデッサの歴史情景描写が借り物でないことを語る。イリヤのお膳立てで俊夫妻を迎えてくれた若者ヴァロージャが、ポチョムキンの階段、左右に続くマロニエの並木、ロンドンスカヤホテルに同伴しながら「多くの尊い血が流されなければ、ウクライナ独立は永遠に来ないでしょう」という。

オデッサの初代市長はフランスからの亡命貴族リシュリューで、後にフランスの首相になるが、彼のお陰で、パリに先駆けパリに劣らぬ計画的な都市造りが行われた。ポチョムキンの階段の前に広がる黒海は日本の面積を超

えるが、最深部は二千メートルもあるのに水面下二百メートルまで硫化水素層が迫っていて透明度が極端に低く、この国を覆っている気分を表していると言う。

その後、ヴァロージャは信託の薬品等の救援物資を輸送中、マフノが率いる農民軍部隊の拠点の側を通過中に銃撃を受け死亡する。

私はここまでにアナキストのマフノのことに全く触れなかった。昔からそうであるがアナキストの思想が理解出来なかったからである。しかし、本書を再読して独立を目指したウクライナ人民共和国が最終的にソ連邦に吸収される時、マフノ軍の拠点の村が赤軍に包囲され二十万人とも言われる人々が虐殺されたと知った。

また一九三四年パリの項も同様で、祖父母の俊と松子は国際赤十字関係の会議出席のため、シベリア鉄道でオデッサを経てパリに行く。パリには外交官の息子英俊がいた。

ウクライナ饑饉の話が中心となるが

「ウクライナで起こっている大飢饉も情報統制で外からは分からず、現地に入ったとしても乗り物だけに閉じ込められオデッサにたどり着く旅では覗きようもなかった」。

大飢饉の情報はパリで知ることになる。

「この悲劇的饑饉については、情報統制で秘匿されたため、その具体像が外の世界からは計り知れなかった」。

「全体主義的な国は、国内の困難の捌け口を外に向け勝ちである」。

「ヴァロージャの不条理な死を悲しみ俊が考えたのは、ウクライナ国民共和国の実現があったとすれば、アメリカがもっと早く参戦し、帝政の崩れたタイミングで連合国が勝利するというシナリオしか無かったのではないか」。

その他にも示唆される表現が多い本書であるが、この辺で終わりとする。

それにしても、実録なのか創話なのか最後までわからなかった。その筆力にも感心している。

漢詩

汲深録（二十九）

松井秀人

梅苑笛聲

（梅苑の笛声）
令和四年三月

閑探梅花趁午晴　閑かに梅花を探し午晴を趁ふ
可憐香散暖風輕　憐れむべし香暖風に散じて軽やかなり
不知何處人吹笛　知らず何れの処にか人笛を吹き
滿苑清音洗俗情　苑に満つ清音俗情を洗ふ

押韻・晴　輕　情

〔注　解〕

午晴＝午後の晴れ。
趁＝おう。したがう。つけこむ。
可憐＝あはれむべし。感嘆を示すことば。
清音＝澄んだ語音。清らかな音声。
洗俗情＝俗情を洗う。
俗情＝俗人の心。

〔口語訳〕

午後の晴れに乗じて、静かに梅花を求めて出かけた。
素晴らしいことに、梅の香りが暖かい風にのって匂って来た。
そこへ何処からかは判らないが、誰かが笛を吹き
その清らかな笛の音が梅苑に流れて、俗人の心を洗い清めるようだ。

春江新柳

（春江新柳）
令和四年四月

雨餘春水漲前川　雨余の春水前川に漲り
古渡新楊繫客船　古渡の新楊客船を繋ぐ
送友纖纖不堪折　友を送るに纖々折るに堪えず
映波千縷轉清妍　波に映ずる千縷転た清妍

押韻・川　船　妍

〔注　解〕

雨餘＝雨降りのあと。雨あがり。
古渡＝古びた渡し場。
纖纖＝細かいさま。かぼそいさま。かよわいさま。
千縷＝たくさんの糸のように細く長いもの。ここでは柳の枝のこと。
清妍＝清らかで美しい。

〔口語訳〕

雨が降ったあと、春の水は前の川に漲っているが
古びた渡し場の新楊は、客船を繋ぎとめている。
友を送るのに、柳の枝はか弱く折るに堪えないが
波にうつるその細く長い枝は、ますます清らかで美しい。

春山鶯語

春暮山中聽老鶯
綠萌新樹午風輕
紅飛紫散渾無迹
如怨如愁頻弄聲

〔注　解〕
老鶯＝春が過ぎてからも鳴いているうぐいす。
紅飛紫散＝紅色や紫色の花が飛び散っている。
渾＝すべて。まったく。

〔口語訳〕
暮春の山中で鶯が鳴いているのが聞こえ
緑が萌えるような新樹には、午後の風が軽やかに吹いている。
紅色や紫色の春の花は散ってしまって、その迹はまったく無いが
それを怨むかのようにまた愁ふるかのように、鶯がしきりに
鳴いている。

（春山鶯語）
令和四年四月
春暮る山中 老鶯を聴く
緑萌える新樹 午風軽し
紅飛紫散 渾く迹無く
怨むが如く愁ふるが如く 頻りに声を弄す
押韻・鶯　輕　聲

櫻堤清宴

十里長堤簇軟塵
櫻花爛漫賞心新
傾樽談笑暫忘老
獨占韶光滿目春

〔注　解〕
簇軟塵＝軟塵簇る。花見する男女たちの爲に塵がたつ。
爛漫＝花の咲き乱れるさま。

（櫻堤の清宴）
令和四年四月
十里の長堤 軟塵簇り
桜花爛漫 賞心新なり
樽を傾け談笑 暫く老いを忘るべし
独り韶光を占めれば満目の春
押韻・塵　新　春

傾樽＝樽を傾け酒を飲むこと。
韶光＝はなやかな春の景色。
滿目＝目の届く限り。見渡す限り。

〔口語訳〕
長い堤には花見の男女が多く出かけていて、桜の花は咲き乱れ
その景色を愛でる気持ちがまた新たになる。
酒樽を傾けて大いに飲みまた談笑して 暫くは老いを忘れよう。
はなやかな春の景色を独り占めすれば、その景色は見渡す限
り春そのものである。

詠野薔薇

風吹郊野拂晴烟
忽看薔薇挾路妍
萬綠未縈人逸興
深紅坐愛入吟箋

〔注　解〕
郊野＝郊外の野原。
晴烟＝晴れたかすみ。
縈＝まとう。からむ。まといつく。
深紅＝色が濃い紅色、ここでは薔薇のこと。
吟箋＝詩歌をしるす用紙。

〔口語訳〕
風は郊野に吹いて晴れたかすみを払い、目に入って来た薔薇
は道の両側に美しく咲いている。
多くの若葉はまだまといついておらず、その楽しみはまだだが
薔薇の濃い紅色をしみじみと見て、それを詩に詠んでみたく
なった。

（野薔薇を詠む）
令和四年四月
風は郊野に吹きて 晴烟を払ひ
忽ち看る薔薇 路を挟んで妍なり
万緑未だ縈せず 人 興を逸す
深紅 坐に愛し 吟箋に入れん
押韻・烟　妍　箋

短歌

竹の秋他

山本一成

プーチンの蛮行

鯉ならぬ鮎の幟の道の駅鮎の天ぷらビールのあてとす

若鮎の天ぷら食めり苦味ある味こそよけれ川風すずし

演奏は終章に入りコンダクター蛙のやうに跳びあがりたり

冷ややかな眼光放ちプーチンは机上の紙面にペンを走らす

往診に行くかのやうにプーチンは黒き鞄を持ち歩きをり

関帝廟

改札を子供料金にて出できたり運転免許返納したれば
流山電鉄

胸部にはひとつの影のかかれるも八十歳に不思議はないと
定期検診

夕暮れを下校途上の女高生ら体かがめて笑ひ転げをり

音声の指示にて撮りたる写真みる亡き母に似て苦笑ひせり
「証明写真」ボックスにて

横浜に関帝廟を訪ねきて箸より大(おほ)き線香あげる

竹の秋

葉桜の木漏れ日もるる川底をさ走る黒き影のいくつか

渓流は地表をはがし隠れたる地層まざまざ露はとなせり

あらはれし地層は〈チバニアン期〉の七十七万年前のものなり
市原市田淵

チバニアンに身の丈ほどの地層みゆ御嶽山の降灰のあと

風立ちて舞ひあがる葉はさらさらと降りしきるなり篁の径

天守台を仰いで(六)

三戸岡　道夫

木の蔭からじっと見守っていた。プラタナスの蔭は、作業道具置場の小屋がある人目につかない場所だった。そこから生徒達は、教官から、行動をつぶさに観察されていたのであった。

整列がし終るのを見届けると、金剛寺教官はプラタナスの並木を出て、出席簿を片手に、胸を張り、威厳を保つために大股でゆっくりと、長い剣をわざとガチャガチャさせながら、身動き一つしないで並んでいる生徒の前にやってきた。

百五十名の生徒の前に立った金剛寺教官は、まだ若い。二十五歳。丸顔で、まだ鬚もたいして濃くない青年将校だったが、中学生達から見れば、すでに立派な大人だった。ましてや配属将校という権力が背後に控えている以上、若いからといって生徒達に侮られるようなことは決してなかった。

(十)

始業のベルが鳴った。

生徒たちは駈足で教練場の中央に集った。

整列の号令が、小隊長から各組ごとにかけられる。広い教練場は、生徒たちの元氣のよい号令や番号の声で、にわかに賑った。勘高い声で番号が叫ばれ、人数が点検されると、またたくまに百五十名の中学生たちは、四列縦隊の小隊を三つ、すばやく作り終えた。それは訓練されたすばやい動作だった。

頭から足まで、国防色の戦斗帽子、国防色の洋服、国防色のゲートルと、国防色（カーキ色）一色に塗りつぶされた生徒たちは、緊張した面持で、金剛寺教官の来るのを待った。

そうした様子を先程から金剛寺教官はプラタナスの並

金剛寺教官は星が一つ光る少尉の襟章を誇らしげにきらりとさせながら、胸を張って生徒達に、

『俺に睨まれたが最後、この学校では何も出來ないぞ』

と、その眼を鋭く意地悪く光らせていた。權力欲、出世欲のためには、配属將校という權力で少年達を勝手に犠牲にしてもはばからない精神を持っていた。生徒達には質實剛健を説き、軍人勅論を頭からたたきこむと同時に、自分は羅紗の軍服をスマートに身につけ、香水の匂うハンカチをポケットに入れ、帽子にも粋な折目を巧妙につけていた。

「教官殿に対し、敬礼、頭(かしら)ァ右！」

中隊長の号令が響いた。百五十名の中学生達の顔は、一斉に教官の顔に集中した。

生徒達の敬礼を受けながら、金剛寺教官はゆっくりと視線を左から右へ移していった。彼の好きな生徒の顔、嫌いな顔が、行儀よく混って並んでいた。どの顔も鯱ほこ張って、眞面目くさり、人形のように目玉一つ動かさない。

（だがこの小僧ども、蔭に廻ればどんなことをしているのか解ったものじゃない。この小悪党連中め！）

突如飛びこんできた顔があった。

（ちぇっ、この野郎、日比野正英。その眞面目くさった顔はよせ）

正英の姿はいつものことながら金剛寺教官の勘の虫にさわった。無理に無視して通りすぎた。

金剛寺教官の眼は二三人おいて隣の、がっちりした体格のピストンに注がれていた。

（お前もっと日比野をいじめろよ）

教官の眼はピストンの獰猛な顔にそうささやいていた。敬礼が終わり、人員点呼がすむと、服装檢査が始った。

金剛寺教官はサーベルをガチャガチャ鳴らしながら、ゆっくりと、大股に、威厳をつけて、時々ふふんと生徒達を小馬鹿にした笑を鼻の頭に浮かべて、列の間を服装を点檢して縫って歩いた。そして時々、「おい」「おい」と魚市場で魚を数える調子で、服装に欠点のある生徒が列の前方につまみ出された。一人、二人、三人と、教官の歩みにつれてその人数は増加して、やがて彼等は一列に並び、教官からの叱責を受くるべく心をおののかせていた。

金剛寺教官は正英の前までくると、上から下までじろっと視線を流した。正英の背筋に戰慄が走った。だが、正英は正面を見つめたまま、眼を動かさなかった。彼の目の前で教官の襟章がちかっと光った。教官は正英の洋服の五つのボタンを一つ一つ引っぱってみた。卷脚絆の踏皮がしっかりついているかを、靴の光でつついてためしてみた。

列外に出された生徒は、全部で十数名であった。教官はその獲物をにんまりと見渡しながら、

「まづ一番右の端の服装から。どこが悪いか言え！解る者？」
「はい」
「はい」
変声期をすぎた太声で、方々から手があがった。
「おい、谷川」
指名された生徒は頬を赤らめて、
「はい、帽子の顎紐がゆるんでおります」
「よろしい。次は、前田！」
「はい、靴の紐が解けております。」
「よろしい。次は、日比野！」
不意に名前を呼ばれて、正英ははっとして三番目の生徒を見た。實は正英は少しぼんやり物思いにふけって、注意していなかった。さっき教官が目の前に立ちはだかった瞬間から、正英の頭には沼崎の自殺がちら〳〵し始めていた。この幻想が浮かび始めるともう駄目だった。彼の精神はそちらに吸いとられて、その幻想が消えてしまうまで現實に戻ってこなかった。
教官の声で幻想が中断され、しまったと思ったがもうおそかった。正英はあわて、何処かに欠陥はないか探した。数秒がすぎた。いつ教官の嘲罵の声が飛び出してくるかわからない。だがどうしても見つからない。いよ〳〵駄目だと思った瞬間、ポケットの蓋が中にもぐりこんでいるのが見つかった。

（はい）
と、声が咽喉まで出かかった。
だがその瞬間、彼の氣持は、変った。
（教官の言う通りに行動したくない）
という氣持が、正英の心を金縛りにした。
「どうした、日比野」
教官の眼は嘲笑していた。
（聞きたければ言ってやらうか）
正英は無言でそう答えた。だが注文通りに返事をするものか。正英はやゝためらった。だが思いきって言った。
「解りません。」
言ってしまってはっとした。だがもう取り返しはつかない。
「解らない？」
「はい」
「よく眼をあけてみろ」
全生徒の視線が一斉に正英に注がれた。
教官は「この馬鹿者を見よ」といった視線で、生徒全体の方を見た。正英は沈黙していた。
「どうしても解らんのだな。日比野……」
教官の語調は鋭かった。
「解りません」
「日比野權兵衛には眼はないのか、盲か、眼無しか、日比野權兵衛！」

正英の身体からは血がいったん引いて、また、すぐ全身をかけめぐる熱い血が流れてきた。この結果がどのような形で彼の上に降りかかってくるのか、それは解っていた。それを甘んじて受けようとしているのだった。
「誰か解るもの居るか！」
教官が大声をあげた
「はーい」
と間のびした声で手をあげたのはピストンだった。
「右のポケットの蓋が、外に出ていません」
「よろしい。どうじゃ、日比野權兵衛！」
「見えません」
「見えない筈がなかろうが、見えなければもっと前へ出てみろ」
教官は正英を蹴飛ばした。
「見えたか」
「はい」
「見えなきゃもっと前に出てもいいぞ」
「よく見えます」
正英は走っていって、そのポケットの蓋を直した。
「では次の服装はどうか」
「はい、巻脚絆の紐が垂れています」
「よろしい、直してやれ」
正英はその生徒の巻脚絆の紐を直した。
「次は」
「はい、ズボンのボタンがはずれています。」
正英はズボンのボタンをはめた。
「次は」
「靴の紐が結んでありません」
十数人の服装点検がこうして正英の手によって終了すると、
「最後に教官の服装を点検しろ」
と教官は正英の前に立ちはだかった。
型のよい帽子。羅紗生地の洋服は天鵞絨のように光っている。よく手入れの届いた靴。だが正英はその時不意に教官のそうした姿から、突拍子もない教官の姿を連想した。運動場の眞中で、両股を開いた教官の裸身が、彼の情婦を抱いている姿であった。彼の裸身は官能的な女の両腕の中でばた〳〵もがいていた。『そんなに威張ったって亀山妙子とくっついている時のざまはなっちゃいないぜ』。教官の情婦亀山妙子は官能的な女だった。同じクラスの彼女の弟、亀山政也から想像してもそれは頷けた。
正英は急に落着いた氣持になった。そして笑い出したくなった。しかし教官の声が彼を現實に引戻した。
「馬鹿だな、日比野」
教官は大声をたてて笑い出した。
「真面目に教官の服装を見る奴がいるか。そういう時に欠点はありませんと言うものだ。だからお前は、頓馬

のぬけ作、と言うんだ。廻ってこい！」

教官は、春の砂ぼこりで乾いた運動場を、ぐるっと顎でしゃくった。それは正英が予定していた通りの罰だった。廻ってこいとは、運動場を駈足するのである。山王中学校でどの教師も一番よく使う罰則が、この運動場の駈足だった。それは肉体的にも一番よくこたえ、しかも人目についたので、罰則としては最も効果的だった。どの校舎の窓からも、誰が罰則をくらっているのかが一望された。

正英は銃を肩にかつぐと、運動場を駈足で廻り始めた。教官の小氣味よさそうな眼と、学友の同情と輕蔑の混った澤山の眼を背に一杯感じながら……。

春の乾いた白土が靴の下でぽこぽこ鳴った。最初のうちは足は輕く、教官の前でしゃちほこ張っているよりも、一人で走っている方が氣が楽だった。

生徒達は教官を中心に、射撃の訓練に移っていた。

正英はそれを横目で見ながら走り続けた。

駈足は「よし」と命令が下るまでは、止められないのだった。クローバーの草原を赤煉瓦で仕切った楕円形のコースを、三回、四回と廻っているうちに、次第に息が切れてきた。最初は輕かった銃の重みが次第に肩にめりこみ、走る度に銃身が肩の上で跳ってぴんぴん響いた。

だが、教官はそんな正英の存在など忘れてしまったかのように、なにかしきりに生徒達に喋っていた。

正英は再三教官の方に眼を向けた。だが教官は正英の方に背を向けたままだった。

遂に正英は動けなくなってしまった。咽喉の奥が焼けるように痛く、息が苦しく、くらくらっと目まいがした。瞬間、あっ、と正英はつまづきよろめいて、銃が肩からどさっと地面に落ちた。

「何をしておる！」

突然、鋭い教官の声。

正英はしびれた両手で銃を拾った。

が、彼の顔色はさっと変った。落したはずみに、弱っていた銃の吊紐がぷつっと切れてしまったのであった。

『まづいことになったな』

それでも彼はまた銃をかついで走り出そうとした。と、教官がそこへ走ってきて、衝突するように正英にびんたを喰わせた。正英の身体はそれをはね返したが、右頬にくっきり赤く掌の跡が残った。

「銃を落す奴があるか！」

正英の手の中にある銃の吊紐が千切れているのを見ると、教官は正英の首の根っこを摑み、引きずるようにして職員室まで連れていった。

「ここに立っておれ」

職員室の正面にどさっと正英を抛り投げた。そしてはやく不動の姿勢をとらないかと、突きとばした。

それから二時間あまり、正英は職員室の教官の机の横に立たされて、ねちねちと説教をされた。職員室の全教師と、職員室を出入りする数多の生徒達の曝しものとなった。

「銃をお前は何と心得ておる」

教官は椅子に坐ったままで、正英の顔を下から見上げ、

「『銃は軍人の魂なり』知っておるか。命より大切なのだ。銃を失した兵士はお詫びに切腹しなければならない。それを事もあろうに訓練中に肩から落し、あまつさえ両足で蹴飛し、吊革まで切ってしまった。立派なものだ。日比野！貴様は魂を持っとるか。大和魂だぞ。日本男子と言えるか。男か。男の象徴を持っとるか」

側を通った物理の教師がにやにや笑った。

「吊革を切ったのは申し譯ありませんでした。」

「日比野、お前は破壊者だな。えー？」

（破壊者だって……。俺がこの学校で一度でも破壊者であったことがあっただろうか。破壊者ならピストンだ、そして教官自身こそ最も……）

と正英は怒りが爆発しそうになったが、我慢して、黙って首を垂れたていた。

「破壊者だな」

正英は返事をしなかった。

「おい返事をしないか」

正英の咽喉もとがぴくぴく震えた。正英は少し眼をあげた。

「でも」

「でもとはなんだ」

教官の怒声が轟いた。

「破壊者だと言え、日比野正英は兵器の破壊者ですと、大声で言え、さあ、言ってみろ」

教官は興奮して正英の臑を皮のスリッパでけり上げた。正英は痛さに顔をしかめた。しかし教官はそのスリッパの手応えに、一種残虐な快感を感じた。

正英の眼には瞬間涙が溢れてきた。しかし涙は見せまいと、瞼の奥でぐっとこらえて、不動の姿勢をとりつづけた。その懸命な姿が教官には益々氣に入らなかった。

（なぜこいつは俺の前で泣かないのだろう。わっと声をあげてなぜ泣かないのだ。どんなにつらくても澄ましていやがる。俺はこいつを泣かせるまでは容赦できないからな。ええ、泣かなくたってかまわない。泣くのはよせ、俺の目の前で泣くのはよせ。泣かないで立派に通してみろ。俺は泣かせてみないではおかないからな）

やがてこの日最後の授業である、六時間目の始業のベルが鳴った。三、四人を残して教師達は、それぞれの各教室へ向って職員室を出ていった。教官も黒い表紙の出席簿を片手に持つと、正英には何の指示も與えずに、さっさと運動場に出ていってしまった。

授業中の午后の職員室はひっそりと、大型の柱時計の

音だけが強く響いた。彼は級友や教師達から見離された囚人のような氣持で、そのまま、立ち続けていた。

悲しみが正英の心を少しぼんやりさせていた。彼の視線は、見るともなしに、ななめ左前の方角の一つの机にむけられていた。机は正英がこの学校で一番好きで最も尊敬している、英語の辻村教師の机であった。

辻村教師は先程からずっとそこには居なかった。机の上に積まれている部厚い英語の辞書、本、ノート類などを眺めながら、辻村教師は決して他の多くの教師のように変によそよそしかったり、また白い眼で正英の方を見るようなことはせずに、きっと正英に言葉をかけ、教官にとりなして彼のためにわびてくれるに違いないと思っていた。菊掛中学校の中で金剛寺教官の權力に正面からぶつかっていけるのは、辻村教師ぐらいだけだった。

しかし正英は辻村教師が好きなだけに、自分のつまらないことのために辻村教師と教官を対立させて、辻村教師にいやな思いをさせることはすまないと思っていた。そう思うとこの場を辻村教師に救ってほしいという思いは消し飛んでしまって、彼を助けるために辻村教師が金剛寺教官と諍をするのならば、むしろ正英がその苦痛を受けるべきだと思った。

その時廊下に勘高いスリッパの音がした。それは正英が聞き慣れた懐しい足音だった。辻村教師が図書館から急ぎ足に歸ってきたのだった。既に始っている午后の授業に、急いで行かなくてはならないのだった。

しかし職員室の中央に不動の姿勢をとっている少年を見つけると、それが正英であると知ると、正英に近づいてきた。そして正英の肩を摑むと、

「どうしたのだ」

そう言われただけで、正英は涙ぐんだ。しかし正英の心は、

（先生、僕に近寄らないでください。僕と口をきいて、教官と喧嘩をしないでください。僕をかばってくれなくても、いいんです。僕は一人で叱られます）

そう心の中では叫びながら、

「なんでもないんです」

彼は辛うじてそう答えた。辻村教師は、

「また教官にやられたな」

辻村教師は正英の肩に手をかけて、そう言った。そして、

「もう帰りなさい。いつまでも立っていても同じだ。教官の方へは、先生の方から言っておいてやるから」

だが、事はそんな簡單に決まらない。

正英が無断で帰ったことを知った教官の怒りを想像すると、正英は恐ろしかった。教官はどんな復讐をするだろう。

しかし、しばらくすると、正英の心の片隅から、

（そうだ、いっそのこと、帰ってやれ。教官の予想を裏切ってやれ。怒らせてやれ。そんなことぐらい、俺にだって出来るんだ）

次の授業にあわただしく中央廊下を歩いていく辻村教師の後姿をみていると、力づけられた。

正英は職員室を出た。

中央廊下を抜け、階段の上り口から運動場をのぞくと、教練の授業中の教官の後姿が見えた。

彼は眼をそらすと、階段を二階へかけ上って、授業中の自分の教室にかけこんだ。級友達はあっけにとられた。だが、それをしり目に正英は手荒く学用品を鞄につめこむと、大急ぎで肩にかけ、すさまじい勢で教室を出て、家に歸った。

その姿が、英語の授業の辻村教師には、教室の窓からよく見えた。

正英は家に着くと、机の前に鞄を抛り出し、疊の上に寝そべって、春の空を眺めた。

家の中には誰も居なかった。父も会社から帰っていず、母も畠で麦の手入れに忙しかった。

この時ほど正英は、自分が一人きりだと思ったことはなかった。そして半分まどろみながら、自殺した沼崎武夫のことや、辻村教師のことなどを、考えるともなしに考えていた。

（つづく）

古い物・遠い夢

忠内正之

我家の一品〈四〉

楽茶碗二口

表題は我家の一品とあるが、内容は二口の茶碗の採り上げである。（美術界では茶碗は一口、二口、と数えるものらしい）

この二口の茶碗は、十六世紀の頃、因縁浅からぬ祖父と孫が夫々焼いたものである。

(一)

世に「一楽二萩三唐津」という。いつ誰が言い初めたのか定かではない。しかし意味する処は、はっきりしている。茶の湯のための茶碗のベストスリーを選ぶとすれば、一に楽焼、二に萩焼、三に唐津焼であるということである。

なぜ楽と萩と唐津が茶碗の三傑なのか。それは姿、形、土味、由緒、そして手取りや使い勝手の良さなど、鑑賞的、機能的、歴史的な価値を総合的に判定したものであろう。

楽は京都、萩は山口県の萩一円、唐津は佐賀県の唐津一帯に於て、桃山時代から江戸前期にかけて生まれ、今日迄四百年近くの歴史を続けている。

抹茶を喫する風習は、鎌倉時代禅林に伝わり、南北朝時代、東山時代、室町時代にかけて拡がりを続けて、禅林のみならず上流社会に広く膾炙していった。

茶会が盛んに催される様になり、座敷飾りや使用される茶器は、中国文化一辺倒の禅林の影響で専ら中国の唐絵や唐物ずくめであった。

室町時代に及んでもなお、初期では唐様茶会が全盛であったが、時につれて喫茶の風習がしだいに庶民の間に拡まっていった。

やがて京都、奈良、堺あたりの富裕な町衆の間にも茶会が催されるようになった。

ことに堺の町衆の茶会は積極的であって、彼等は唐様的な好みから脱した生ぶな日本人としての好みに勇敢に挑戦していった。かくして生まれたのが、新しい侘びの茶であった。侘びの茶の先駆者は、武野紹鷗（一五〇二―五五）であり、弟子利休（一五二二―九一）によって侘びの茶の湯が大成された。

茶の湯道具の主となる茶碗についても、天目や青磁の唐様的なセンスは所詮なじまないとして、井戸などの高麗茶碗や、和物茶碗の侘びた趣に魅せられた堺の茶人達がこれ等を積極的に取り上げて流行を見るようになった。なおこの頃既に唐物が手に入り難くなっていたという事情を見逃がす訳にはいかない。

侘び茶を大成した利休の一番弟子であった山上宗二（一五四四―九〇）は、著述「山上宗二記」に次のように記している。

「惣テ茶碗ハ唐物茶碗（天目・青磁）スタリ、当世ハ高麗茶碗、瀬戸茶碗（志野・瀬戸黒）、今焼（楽焼）ノ茶碗迄也」

利休の指導によって長次郎の楽茶碗が出現したことにより、利休の侘び茶の理想は具体化された。楽系統は千家流の専属陶工として歴代を数えるようになる。次第は次の章で述べることにする。

楽については好まれる萩と唐津の茶碗が茶の湯の世界に現われるのは、時期が少し下って、朝鮮侵略（文禄・慶長の役）の後になる。

茶の湯の発展と変化につれて茶碗の好みの流れの上にも、唐茶碗から高麗茶碗へ、さらに和物茶碗への変転が見られるのであるが、和物茶碗の味わいが、永年にわたる茶人達の感覚と合致して最大公約数的な好みを示唆する言葉となって定着したものであろう。

続いて楽茶碗に移りたい。

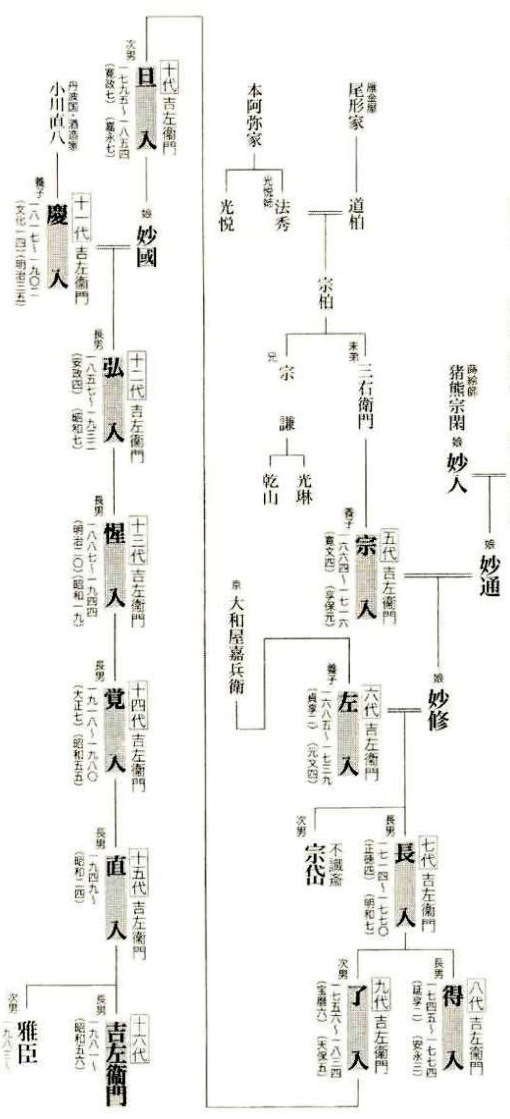
(二)

楽焼は釉薬のかかった土器とみられる。手捏ね技法で低火度（七百度―千二百度）に焼かれた柔かい独特な焼物である。

茶聖千利休の指導にもとづいて、初代長次郎が天正年間に焼き始めた。そしてその一族である楽家によって四百三十余年にわたり伝承され、茶道の盛衰と運命を共にして今日の隆盛に及んでいる。

現在千家流の茶の湯に携わる人達は、千家専属の陶工

現在の樂家系図



が作る伝統的な楽茶碗一口は持ちたいものと念願しているといわれる。

別添楽家の系図を参照していただきたい。

初代長次郎を巡るあたりの関係は極めて複雑で、元祖あめやがあって、家祖に田中宗慶が存在する。両者はグループであったりまた姻族であったりして関係は判然としていない。楽家にも明白な資料は残っていないという。長次郎作といわれる焼物はかなり伝来しているが、複数の作者によるものと推察されている。

豊臣から徳川への政権移行、旧体制から新体制への過渡期にかけて、茶道の千家は少庵が継承し、楽家は田中宗慶が中心となり二代吉左衛門・常慶が活躍して夫々の礎を築いていった。

その後、楽家は四百余年にわたり、一子相伝でその伝統は親から子へと確実に受け継がれて今日十六代を数える。江戸時代の長子相続の制度から、基本的には長男が継いでいるが、中には男子が生まれず、娘の婿として養子が三人入っている。四代一入の娘・妙通の婿養子として五代宗入が、また宗入の娘・妙修の婿養子として六代左入が、また十代旦入の娘・妙国の婿養子として十一代慶入が夫々他家より迎えられている。

ちなみに、五代宗入の実家は尾形家、父は雁金屋三右衛門である。したがって三右衛門の兄・宗謙の子である光琳、乾山とは従兄弟の間柄となる。また宗入の曽祖母は本阿弥光悦の姉法秀であり、楽家は雁金屋尾形家、本阿弥家とも血縁関係にある。

一子相伝ではあるが、長年の歴史の中で、楽家と血縁関係、または何らかの関係を結ぶ脇窯が生じている。

直接楽家と血縁関係をもつ窯は、かつて京都府井手町玉水にあった玉水焼である。これは楽四代一入の庶子一元が母元の井手町に帰り楽焼窯を開いたものである。一元の次男が任土斎であり、本稿の主題となる二つ目の茶碗の作者である。

その他、楽家と関係を結ぶ窯に金沢の大樋焼がある。大樋焼は開祖大樋長左衛門が一入から飴薬の伝授を受け、金沢に楽焼窯を開いたのが始めで、今日迄続いている。

本阿弥光悦作の楽茶碗は楽三代道入の影響を受けており、あまりにも有名であるが、あくまでも個人の手遊びなので脇楽とは呼ばないとのことである。

その他楽焼は、江戸時代の大名家御庭焼窯や個人の楽しみの窯にまで広がり全国さまざまな形態の楽窯が営まれてきた。

次に本題である我家の楽茶碗の話に進みたい。

我家には楽茶碗が二口ある。楽四代一入と孫である任土斎の作品である。手許に入った時期は別々であるが、後に浅からぬ因縁があることが解った。

楽家四代一入は、三代道入（のんこう）四十二歳のときの子で、寛永十七年（一六四〇）生まれである。幼名は左兵衛、のちに吉兵衛となり、明暦二年（一六五六）代を継いで吉左衛門と名乗った。父親の道入は名工と称されたが、かえって手許不如意であったらしく、一入が代を継ぐころは、歴代の中で最も貧しかった時期といわれる。

そこで一入は、蒔絵師猪熊宗閑の娘である妻妙入の縁で、住所を猪熊一家の近くの一条上ルに移した。（現在の地へは五代宗入のとき移った）そして一入の苦心の配慮は、後継の問題にも及び、庶子一元の存在を無視して豪商雁金屋尾形三右衛門の息子平四郎を養子に迎えることにしたのである。

元禄四年（一六九一）五十二歳で剃髪し、名を一入と改め隠居し、元禄九年（一六九六）に五十七歳で没している。

養子平四郎は、のち惣吉となり、元禄四年（一六九一）一入の隠居により二十八歳で代を継いで吉左衛門を名乗った。楽家五代宗入である。

玉水焼初代弥兵衛一元は楽家四代一入の庶子であり、生年は不詳とされるが、寛文二年（一六六二）一入二十三歳の時の子と推定される。幼名を吉三郎後に弥兵衛と名を改める。

一元の母については最近の資料で始めてこいとという名前が明らかになった。一元母・こいとは山城国玉水村（現・京都府綴喜郡井手町）の伊縫家の女であり、初めは楽家で働いていたと考えられ、一元が生まれ母子で一入の別宅に住まいをしていたが、一元六歳のとき母子共に暇を出され、母の実家のある玉水村で暮らしていた。その後飢饉があり、一元をひきとって手伝いをさせたと記録にあるとされる。

一方一元が生まれたとされる寛文二年の三年後、一入・妙入夫婦は雁金屋・尾形家から養子・平四郎をもらっている。後の五代目吉左衛門・宗入である。平四郎は寛文四年（一六六四）生まれ、一元の少くとも二歳下である。

一元誕生のあと、時を経ずして生まれたばかりの平四郎を嫡子としたことで、後を継がす意志がこの時すでにあったものと考えられる。

一元が楽家に引き取られた時点で、楽家一入のもとには。養子平四郎（後の五代吉左衛門・宗入）と吉三郎（後の玉水焼初代・一元）の二名、それに後の宗入の妻となる娘・於津が兄弟としてともに一入・妙入夫婦のもとで暮らすこととなった。

一元は一入のもとで作陶の手伝いを通して、一入の技

術を充分に学ぶ期間があったものと考えられる。

元禄元年（一六八八）には伊勢神宮の御師（神主）の御用を受け楽焼制作のため一入、宗入、一元の三名が伊勢に下っているとの記録があるとのことである。当時の伊勢神宮御師の筆頭は杉木普斎（一六一八―一七〇六）であったと思われる。因みに我家では普斎手造りの茶杓を所有している。

その後楽家を出た一元は、洛中に窯を築き商売の基礎を固めた上で、母の実家玉水村で楽焼窯をおこすことになる。

一元はその作品に楽の印を使用している。そこからは楽家の血筋を引く者であるという一元自身の強い自負が窺い知れる。

一元の作品は様々な人々により愛でられていた。一元の作品はもとより、三代任土斎（後で述べる）の作品には、茶道の各家元の書付けがなされ、世間で玉水焼として認められている様子が、伝世品の箱書きからも知ることができるという。

更に近衛家、鷹司家など公家方にも出入りが許されていたのである。こうしたことを考えれば一部の評論家が騒ぎ立てる、楽家宗入との骨肉の争いなど無く、一元は楽家別家として世間の認識のもとに受け入れられ活躍したものと窺われる。このように十五代楽直入氏は解説されているが、果たして真実は如何であったろうか懸念がもたれる。

南楽家を世間から評価されたり、自らも楽五代目と称して作品を世に出すなど、楽の止続を誇示した時もあった様である。享保七年（一七二二）六十歳で没した。

玉水焼は一元の長男一空（一七〇九―三〇）が二代目を継いだ。一空はなかなかの器量人で穏やかな作品を残しているというが、二十二歳で早世してしまった。三代目はその弟弥兵衛任土斎が継いだ。我家が持つ二つ目の楽茶碗の作者である。

任土斎は一元の次男。兄の一空が若くして亡くなったため玉水焼三代として跡を継いだ。幼名は不明、後に父一元、兄一空と同じく弥兵衛と名乗り、その後に任土斎と号した。

生年は不明で、没年宝暦十三年（一七六三）から推定すると享年は五十三歳だったとされる。

任土斎は一生妻を娶らず独身で暮らした。

従って任土斎をもって一元から続いた楽家四代一入の血脈は跡絶えることとなる。

自らの手で長次郎からの楽の血統を断つということと知りながら敢えてそれを曲げながったというのは、彼の変った性格を物語るものとか、生涯無妻であることを、

禅の精神からなどという説もあるが、一切資料がないので憶測の域を出ない。ただそのことによって、楽家一入からの血筋は、玉水家に於ては絶えてしまったことのみが事実として残った。

玉水焼歴代に流れる楽一入の血脈は、一元、一空、任土斎と三代で絶え、後は一元の母方伊縫甚兵衛・楽翁が四代を継承し、その後伊縫家の人々に受け継がれ、廃窯となる八代照暁（明治十二年没）まで続いた。しかしながら四代楽翁以降では上作は見られていないといわれる。

さて、長々と楽一入と玉水焼について述べてきたが。我家の二口の楽茶碗の紹介に入りたい。

(四)

最初は、楽一入作黒楽茶碗である。

一入の約四十年に及ぶ作陶を顧みると、大きく二つの傾向があるとされる。まずは、父道入の影響を受けて、大振りで薄作、高台も大きく勢いのある篦使いが窺われ魅力的である。

次第に作風は利休形の端正な方向に移りおとなしい作行きとなった。利休形への回帰といえるが、単に長次郎を倣ったものでなく一入独特の作行きを明確に表わしている。

また釉においても新たな朱釉を考案し、そこに長次郎とは異なる華やいだ趣を創出している。

我家の一入作の茶碗は、この後者に属するものとみられる。白黒写眞のためお示しができないが、朱釉がきれいに発色している。

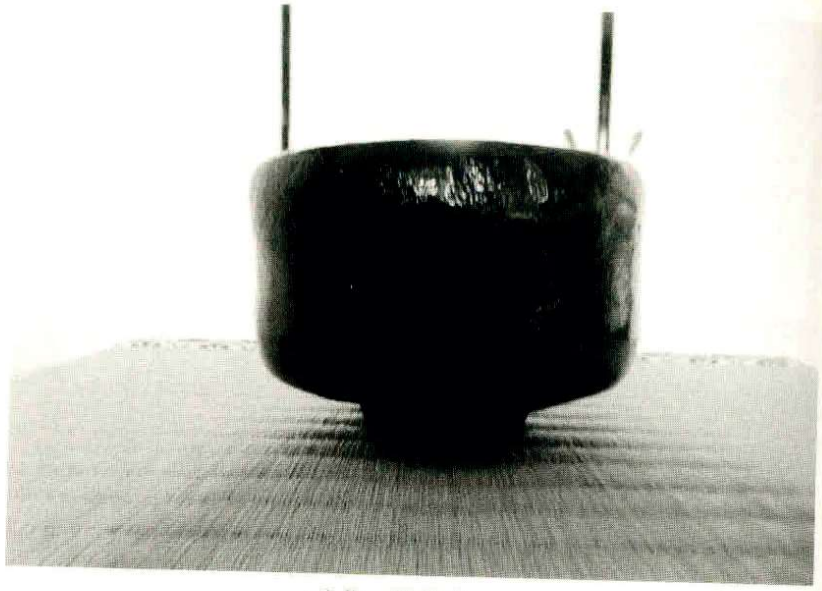
器体は薄作りで、姿は僅かに高く持ち上げた腰は丸みを付け、口に向って立ち上がり、胴部の中程でわずかに締まり、口縁を更に抱えこむ。これは一入茶碗の一つの様式であるという。

薄い口縁部は「蛤歯」となり、抱え込まれた見込みの空間は豊かでおおらかな深さが感じられる。見込み底部に茶溜まりが削られている。高台はやや引締まり、目跡は三つ、しっかりした渦兜巾が削り出されている。

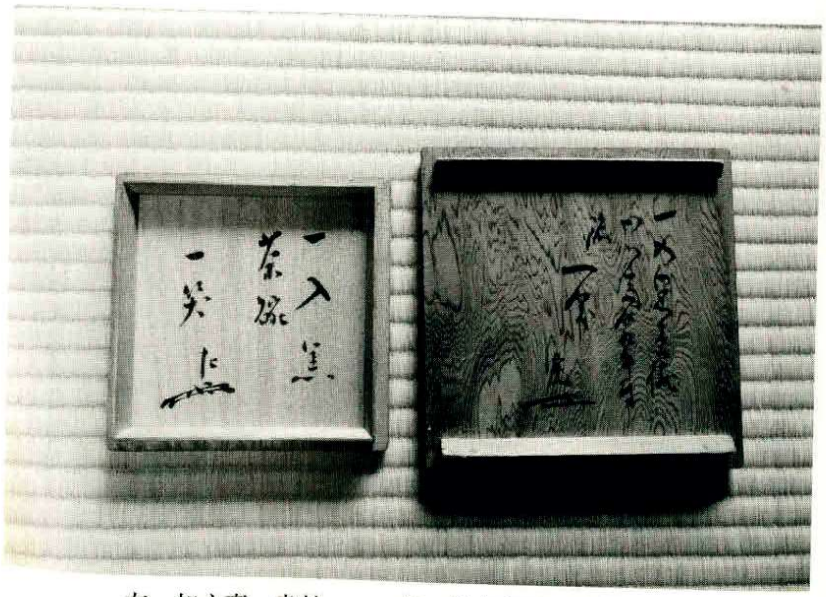
土見世はなく釉がたっぷり掛けられており無印である。一入の時代では、通常楽印はあまり使用されなかったらしい。印を押すためには土見世が必須である。従って一入の作品では土見世は極めて稀である。

そこでこの世界では、「一入の土見世茶碗が売りに出たら、借金を質に置いても買っておけ」との格言があるという。我家の茶碗も多分にもれず残念ながら土見世ではない。

しかしながら、この茶碗の追箱蓋裏に表千家七代家元如心斎天然宗左（一七〇五―五一）が「一入黒茶碗　一笑」の書付けと宗左の花押を極めており箔がつけられている。



一入作　黒茶碗



左　如心斎　書付　　右　堀内宗完　書付

更に、表千家の脇家元というわれる堀円家五代宗完（そうかん）が二重箱蓋裏に追書きを認（したた）めている。

この茶碗は表千家を圣由して堀内家に伝わったものでもあろうか。

宗左家元命銘の一笑は禅語で、「悟りを開けば、すべての世界がいきいきと蘇（よみがえ）る」の意という。

あらためて茶碗を両手で包むと、すっぽりとおさまる。土の味が暖かくさえ感じられてまるで生命があるようである。

手許に来てから既に三十年余は経つ。当家が催す茶会に、幾度もその優美な姿を披露してお客様をおもてなしてくれている。

當家の宝物としていつ迄も留まってもらいたいと願っている。

次は楽一入の孫である三代任土斎作の黒楽茶碗である。

こちらは共箱であり、作者自らが「黒楽利休形菖蒲写（あやめうつし）弥兵衛（花押）」と記している。楽家初代長次郎作の黒楽茶碗銘「菖蒲」の作品を写したものである。

大正名器鑑第九編によると、利休が好んだ楽初代長次郎作の茶碗の中に「まこも」と「菖蒲」の一対があった。後に「まこも」は千家三代宗旦が所持したが、転々として鴻池家から藤田家に渡り、現在は藤田美術館に鎮座しているという。一方の「菖蒲」は武者小路千家初代宗守が所持していたという記録があるものの現在では全く所在不明とのことである。

ここまでのところ大正名器鑑からの取材に拠っていたが、別資料から、その後、長次郎茶碗「菖蒲」は、武者小路家を経たのち、永楽家（千家十色の陶工）に渡り、その後転々とした結果、現在では熱海のＭＯＡ美術館が所蔵していることが解った。同美術館発行の図録で確認したが、任土斎作と非常に良く似た形状である。

さて茶碗を見る。長次郎の作行を倣っただけに、特に腰から丸く立ち上がる張りのある形は力強い。

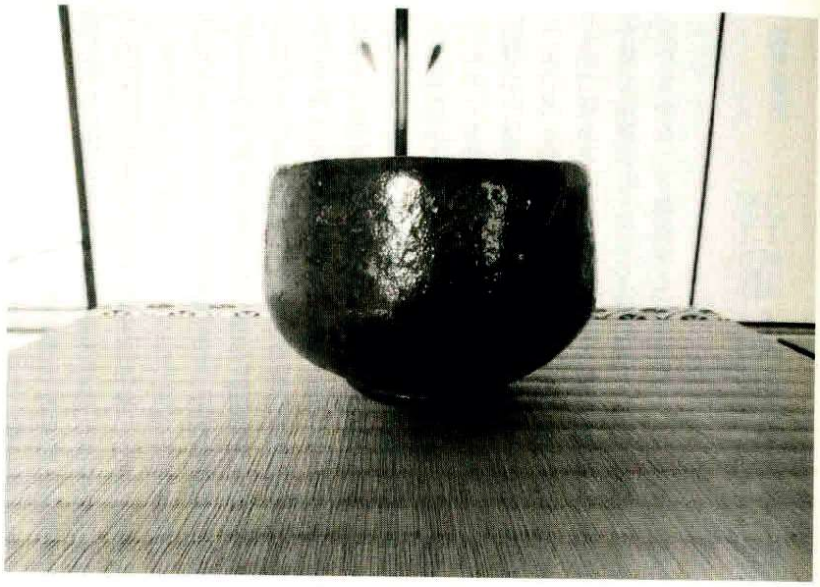
口造りは呑み易く逆Ｕ字形でまとまっている。見込みは広くて茶溜まりがある。高台はやや大きく畳付き内側に渦兜巾を巡らす。

高台には目跡が五ヶ所あり、総体に青味がかった釉がかけられている。長次郎を見習ったものであろうか。

総釉のため窯底目跡に釉がくっついて引き出し難く何度も掴（つか）み直したのであろう、鋏跡（はさみあと）が内に二カ所、外に大きく一カ所あって見所となっている。

総じて見ると、中形ながらどっしりしてまとまった感がする。どこに「菖蒲」の雰囲気があるのか一寸解らないが、肩の張らない茶会向きとか普段使いに適した茶碗かなとの印象が強い。

使い易い茶碗であり、当家の茶会には度々替茶碗とし



任土斎作　黒茶碗



任土斎　書付

て出場している。地味な存在なので認めて下さる方は尠ないが、永年の茶友であるMさんは、遠く平塚市から、茶事や茶会に毎回ご出席下さり、この茶碗の素朴な雅味を良しとして常々名指しで鑑賞して戴いている。ご慧眼とご好意には深甚な敬意を表する次第である。

我家へは、一入の茶碗が来たあと、十数年後御縁があって任土斎の茶碗が到来した。当初は両者の因縁ある関係を承知していなかったが、今回の寄稿を契機として勉強することができたのは幸いであった。

今、二口の茶碗を前に並べて、昔を思いやる時、想像された様々な、愛憎や怨恨の雑念がすっかり取り払われて、芸術作品としての清澄な存在のみが残ったと感じられ、私の心も清められるのである。

結びに一言。

一入のあと今日に至るまで、楽家では、女婿を迎えたことが二回あるというが、嫡子を脇に退けて他家から養子を得て後継ぎとしたことは二度と無かったという。「宜なるかな」と納得する。

終

参考資料

楽歴代　楽吉左衛門・篤人　淡交社
玉水焼　楽直人　淡交社
和物茶碗　小田栄一　河原書店
大正名器鑑　高橋義雄　広峰社
角川茶道大辞典　角川書店
茶席の禅語大辞典　淡交社
その他

楽茶碗　茶の湯の茶碗（五）　淡交社

吾輩は紙魚ロボである　その一一

永畑俊三（永田俊一）

一、絡み合いを深める諸情勢（四月半ば～六月中旬）

（一）ウクライナ

前回は四月初旬までを述べたが、締め括り部分は「停戦協議も進展と継続は言われるが、中立化や東部の主権等コアの部分は具体的な糸口は見つからぬまま推移する中、三月二九日ロシアはキエフ等北部への攻撃縮小を表明、東・南部のマリウポリやオデッサへの攻撃がし烈さを加えて来た。そして撤退後のキエフ郊外北部のブチャ、ボロヴィアンカと廃墟と化した街で民間人の大量惨殺死体や不明の拘束者が発見されるに及んで、ロシアの戦争犯罪に追及の國際世論が急速に高まり、ロシア側の厚顔無恥な隠ぺい隠滅・責任転嫁・開き直りに、追加制裁や国連決議、先手攻勢のための戦車・超低空飛行ミサイル攻撃機などの供与が急がれた。また、戦争の長期化と核世界戦危惧が高まるとの予測と共に、世界の新たな安全保障体制の在り方も論じられるようになった。」としている。

四月一四日ロシア国防省は「ロシア黒海艦隊の旗艦モスクワが火災による船体の損傷で船が安定を失い、沈没した」と発表した。火災の原因について、ウクライナ軍が国産対艦ミサイルネプチューンで攻撃したと主張、事実であればロシア軍によるオデッサへの上陸作戦が更に遠のく公算が大きい。

一八日ゼレンスキー大統領は「東部ドンバスの戦いが始まった」と、ロシア軍の本格攻撃が始まったとの考えを示し、一九日ロシア国防省は、一晩でウクライナの一二六〇か所（前日の標的数の四倍）の標的を攻撃したと発表、ウクライナ侵攻は当初目標の首都キエフから、東

部支配に向けた新たな局面に入った。

二〇日ワシントンでロシア侵攻後初めて開催されたG20財務相・中央銀行総裁会議、世界的経済減速を巡って意見が対立共同声明採択は見送られた。会議後議長国インドネシアは「多くの国がロシアの戦争を正当化できないものと非難した一方、G20の協調を続けていくことに各国とも異論はなかった」と会見報告した。その後G7財務相・総裁会議が開かれ「ロシアのウクライナに対する侵略戦争を強く非難する」との声明を採択、G20へのロシア参加を遺憾とした。

二一日ロシア国防相は、ドネツク州南端要衝マリウポリを解放、プーチン大統領の指示で避難市民がいてアゾフ連隊が徹底抗戦するアゾフスターリを封鎖したと述べたが、二三日ウクライナ側はロシア軍が同製鉄所への空爆を再開したと報道。また、ロシア軍幹部はモルドバ東部の親ロシア派支配地域の沿ドニエストル地方までを勢力下に収める意向を示唆する一方、ウクライナ国防省は「南部ヘルソン州やザポロジ州で、ウクライナからの独立を問う住民投票をロシアが準備している」とし、戦闘が激化する中、ロシアの目論む「対独戦勝記念日である五月九日までに戦闘を終結し休戦、停戦することは難しい」とも語った。

二八日バイデン大統領は、侵攻開始以降二か月で一四〇億ドルの支援予算が底をつくので三三〇億ドルの追加予算を議会要求するとし、オリガルヒの資産没収強化の法整備も提案すると発表。同日岸田首相は来日のショルツ首相と日独安保協議を立ち上げると共にウクライナ支援強化で一致、二九日から五月六日にかけ対ロ結束を呼び掛けるべく、インドネシア、ベトナム、タイ、イタリア、英国五カ国を訪問する旅に出た。二八・二九日キエフを訪問実態視察をした国連グテーレス総長は、直前二六日プーチン大統領と会談時、アゾフスターリから市民を非難させる際に国連の人道問題調整事務所（OCHA）と赤十字国際委員会（ICRC）が関与することで原則同意を取り付けた。

五月一日からその地下室の暗闇に二か月退避した市民が脱出。ロシア国防省は「ウクライナの民族主義者に引き留められていた八〇人の民間人の救出に成功した」と強調、人道回廊を設けうち一一人が親ロシア派支配地域に自発的に、ウクライナ政府地域に行くと決めた六九人は国連・赤十字に引き渡されザポリージャに向かった、とした。しかし、その避難後ロシア軍は製鉄所への砲撃を再開し地下にはなお数百人の市民が残り、市内には約一〇万人が取り残されているとウクライナメディアは伝えた。脱出を望む全市民の避難路をつくるため国連は「引き続き働きかける」と両国と議論中としている。

三日ロシアが東部戦線への武器補給路を断つため全国的に鉄道施設をミサイル攻撃し、その日ゼレンスキー大

統領は侵攻するロシアに勝ち二〇一四年無法に武力併合されたクリミア半島を取り戻すことも可と述べた。四日にはEU（欧州連合）委員長が、追加制裁としてEUはこれまで慎重だったロシア産石油の輸入を年内に禁止する方針を発表した。

一方六日ロシア軍はマリウポリで一時的停戦を破って退避関連の車両を攻撃、抵抗が続く製鉄所内部への突入作戦も再開、市のほぼ全域を制圧したが製鉄所にはまだ二〇〇人の民間人が残されていると言われる。

六日米政権は一億五千万ドルの対ウクライナ追加軍事支援を決定、米欧はロシアの侵攻が長期に及ぶことを想定した軍事支援に乗り出している。

七日、フィンランド首相はNATO加盟について、「今月中に意思決定がなされる」と表明、EUの非NATO国も新たな安保環境に対応し出した。また八日プーチン大統領が九日の対独戦勝記念日にウクライナ侵攻を正当化すると見越し機先を制し、G7首脳会議は声明で、第二次大戦後に確立された国際秩序を侵害しているのが他ならぬロシアだと指摘、侵攻の目的を「非ナチ化」として当時の歴史に重ね合わせようとするプーチン氏を厳しく批判した。九日記念日当日プーチン大統領はモスクワで大規模な軍事パレードを開催、演説で、ネオナチとの対決は避けられず、軍事作戦は機先を制した「唯一の正しい決定だった」と侵攻を改めて正当化した。しかし、ロシアが総動員をかけるため、戦争状態を宣言するとの観測は当たらず、従来の「特別軍事作戦」の表現が維持される結果となった。同日ウクライナ軍参謀本部はロシア軍がドネツク州などで攻勢を強めているとし、全土がミサイル攻撃を受ける可能性が高いとの分析を示し、ゼレンスキー大統領はビデオ演説で「ナチスと同じことをしている」とロシアを厳しく非難した。

なおマリウポリのアゾフスターリについては、七日ゼレンスキー大統領が三〇〇人以上の女性や子供が助け出されたとして「民間人の救出はほぼ完了した」と表明したが、製鉄所内の「アゾフ連隊」は八日「武器、弾薬、水はまだあり、必要な限り戦い続ける」と抗戦中である。また九日には「武器貸与法」に署名し武器支援強化の方針を一段と鮮明にしたバイデン大統領、「戦いの代償は安くはない。しかし攻撃に屈服することの代償はもっと大きい」と強調した。一〇日ウクライナ国内で避難生活を余儀なくされている避難民が八〇〇万人を超え、ほか五〇〇万人以上が国外に避難したと国際移住機関（IOM）が明らかにした。

一一日南部ヘルソン州の親ロシア幹部は、プーチン大統領に同州の併合を求める方針を表明、ロシアは占領地域の実効支配固めを強めている。ロシアの侵攻計画が遅れているのは明らかだが、長期化を見越し、補給など足場の再構築の見方もあり、南部沿岸部を占領し穀物輸出

などを阻止してウクライナの資金源を断つ狙いを推測するむきもある。

一五日フィンランドのニーニスト大統領とマリン首相は共同記者会見を開き、NATO加盟申請する政府方針を決定したことを明らかにした。既に米欧各国の支持表明が続いており、一四日プーチン大統領の「軍事的中立の政策を放棄することは間違いになる」との警告をはねのけロシアに公然と見切りをつけた。大統領は「歴史的な日だ、新しい時代が始まろうとしている」と強調した。同日スウェーデンでも反対していた与党社会労働民主党が加盟容認の結論を出した。同日ベルリンでのNATO外相会議後の会見でストルテンベルグ事務総長は両国の動きを歓迎したうえで、「トルコは懸念を示しているが加盟を阻止しているわけではない」と話し合いで同意が得られるとの見通しを述べ、加盟実現までの移行期はバルト地域での陸海空部隊の展開を増やすなどして両国の安全保障の強化を図る方針を示した。

一六日、アゾフスターリでは両軍の合意に基づき、重傷者五三人を含むウクライナ兵二六四人が製鉄所から退避し、東部の親ロシア派支配地域へ移動した。負傷兵は同地の病院に移送される。一六日夜アゾフ連隊指揮官は「多くの困難があったが、マリウポリの部隊は任務を完了した」と述べ、ゼレンスキー大統領は「英雄たちを生きて帰すための作業が続けられており、慎重さと時間が必要だ」と語った。一八日ロシア国防省が「その後の二四時間で六九四人が投降した」と発表、退避してロシア側の支配下に置かれた人数は九五九人に達した。ウクライナ側はロシア兵捕虜と交換意向を示しているが、ロシア側はナチスの犯罪者とみなした兵士は交換を禁じる法案審議が報じられており、退避兵の尋問予定を示唆している。一九日までに新たに七七一人が移送されアゾフスターリに残っていた一七三〇人がロシア側支配下に置かれ、製鉄所内にいた半数以上が移送されたというが、ロシア外務省はロシア側の拘置施設に移したとしており無事解放されるかは依然不透明な状況である。そして二〇日指揮官を含む最後の五三一人が投降し計二四三九人に上るとロシア国防省が明らかにし、ウクライナ南東部マリウポリを完全に制圧したと宣言した。

二一日ゼレンスキー大統領は、ロシア軍を二月二四日の侵攻以前の地点まで押し戻せば「ウクライナにとっての勝利となる」との見方を示し、クリミア半島の扱いを含めた残りのロシアとの問題は交渉を通じて解決するとの立場を示した。同日バイデン大統領は、軍事面や人道面での支援のために約四〇〇億ドルの追加予算案に署名し成立させた。一方ロシアは対ロ制裁の報復でロシアへの入国を禁じる九六三人のリストを公表した。

二三日には侵攻三か月を迎えるが、ロシア軍は東部や南部での支配地域拡大・要塞化（ルーブル使用等のロシア化による実効支配）を狙い、米欧の支援を受けるウクライナ軍は一部で反転攻勢に転じており、いったんはロシア側に占領された領土の四分の一を奪還した。この日ゼレンスキー大統領は世界経済フォーラム（WEF）の年次総会（ダボス会議）にオンライン参加しロシアを非難「最大限の制裁が必要であること」「ウクライナの財政運営に少なくとも一か月五〇億ドル規模の支援が必要であること」を示し、ロシアの資産を凍結した上で「戦争で影響を受けた人々を助けるために提供すべきだ」とした。また滞る穀物などの輸出再開へ周辺国と協議をすすめていることにも言及した。同日、「二〇年間、我が国の外交政策の様々な展開を見てきたが、二月二四日ほど母国を恥じたことはない」と、ロシアの在ジュネーブ国連代表部に勤めていたボリス・ボンダレフ参事官がジュネーブの外交官ら宛てた声明が公表され、ウクライナ侵攻に抗議して辞職したことが明らかになった。

二四日、ウクライナ国防省は「ロシアの侵攻が最も活発な段階に入っている」との認識を示し、ロシアが東部地域に戦力を集中させており、ルガンスク州は九割以上をロシア軍が制圧、要衝マリウポリを制圧されたドネツク州ではスピトロダルスク等三つの町が支配下にはいり、両州の繋ぎ目の位置にあるルガンスク州のセベロドネツクの攻撃が最も激しくなっている、としており、ドンパスの攻防が焦点になってきた。二九日夜ゼレンスキー大統領は「セベロドネツクで重要インフラは全て破壊され、住宅の九割は損壊した」と述べ、参謀本部の三〇日報告書では、ロシア軍は当市の北部と南部に部隊を配置、同市や川を挟んで隣接するリシチャンスクの完全制圧に向け戦力を集中しているとある。

三一日、米政府は、より長射程の兵器を求めるウクライナ側の要望に応じ、新たな高性能ロケットシステムを提供すると表明、一方で事態の激化を避けるため、ロシア領内への攻撃には使わない条件を付けた。同日掲載されたニューヨーク・タイムスへのバイデン大統領の寄稿から米の支援戦略が見て取れる。即ち、目標は更なる侵略を抑止・自衛する手段を持つこと、外交を通じてのみ戦争終結するため大量兵器提供、プーチン氏をモスクワから追放しようとしないこと、ロシアに苦痛を与えるためだけに戦争を長引かせはしないこと、ウクライナに領土譲歩はせまらないこと、如何なる核兵器の使用も容認できないこと、等である。

六月入りして一日、ルガンスク州ガイダイ知事は、ロシア軍の攻撃が続く要衝セベロドネツクで「市内の七割がロシア軍に制圧されている」と明らかにした。同州のウクライナ側の最後の拠点とされており、ロシア軍が掌握すれば、続いて隣のドネツク州などでも攻勢をかける恐れがある。二日ゼレンスキー大統領はルクセンブルグ

議会向けオンライン演説で「ロシアは現時点でウクライナ領土の二割を支配下に置いている」との認識を示した。侵攻が始まり三日で一〇〇日、ロシアはウクライナ東部に戦力を集中し、南部ではウクライナ軍が攻勢を強める展開になっている。領土は譲らず、先ずは侵攻前の状態にもどすのが現状では国民の納得の得られる唯一の「妥協案」と考えられるが、東部で攻勢をかけるロシアが侵攻の「成果」を放棄し交渉に応じる気配はない。四日ガイダイ知事はセベロドネツク市で市街戦が続いており、ウクライナ軍が二割を奪還したと表明、

五日には「半々迄戻した」とした。一方ロシア国防省はキエフ近郊をミサイル攻撃したとし、同日プーチン大統領は、米欧が射程の長い兵器を供与すれば「これまで標的としていない対象を攻撃する」と警告した。

七日ロシア軍は「セベロドネツク住宅地域を完全に解放したと」とし、八日ロシア軍が市内工業地域を拠点に戦うウクライナ軍を猛攻しながら投降を呼びかけている。九日ウクライナ軍兵士の死者が連日一〇〇人から二〇〇人に上り、犠牲が急増していることを軍幹部が示し「原因はロシア軍との戦力の不均衡にある」と述べた。一〇日には国防省幹部が「ロシアの火砲一〇～一五基に対しウクライナはほぼ一基しかない」と欧米諸国に一層の武器支援を求めた。

一二日ガイダイ知事は「敵は火力で大きく上回り、ウクライナ軍を押している。ロシア軍は一両日中に全戦力を投入する恐れがあり、今後二～三日が重要」と述べ、大統領府顧問も「同等の重火器が必要、一五日の軍事支援会合でりゅう弾砲・ロケット砲などの供与が決まるよう」期待を寄せた。一四日ロシア国防省は、セベロドネツクの化学工場に残るウクライナの戦闘員に投降を要求したと発表、同工場に避難した民間人約五〇〇人を退避させる「人道回廊」を一五日に設けるとした。同日ガイダイ知事は「市の状況は著しく悪化している」と述べた。リシチャンスクと繋がっていた三本の橋は全て破壊され孤立の懸念が高まっている。

一五日米政府は追加で対艦ミサイル等一〇億ドル相当の軍事支援を表明、軍事支援は累計五六億ドルになる。

一六日セベロドネツクのアゾト化学工場に避難している市民五〇〇人について、砲撃や戦闘が絶え間なく続いており「今そこから出ることは不可能だ」とウクライナ軍幹部は述べ、ロシア主張の人道回廊が機能しないことが分かった。同日仏独伊三首脳が共にロシア侵攻後初めてウクライナ入りしルーマニアのヨハニス大統領と共にゼレンスキー大統領と会談、彼は会談後、各国が軍事的・経済的支援を続ける意思を改めて示した上、EU加盟に向けて前向きな姿勢をみせたことへの喜びを示した。

一七日には英首相が二回目のキエフ入りを行い、ゼレンスキー大統領と会談、新しく提供する武器の為必要な訓練を一二〇日毎にウクライナ兵最大一万人に施す支援策を伝えた。同日サンクトペテルブルクで開催中の国際経済フォーラムでプーチン大統領はその演説の中で「最近欧米でプーチン・インフレと聞くが、価格高騰、食糧問題や燃料価格などは欧米の経済政策の失敗だ」とし、侵攻を理由に責任をロシアに押し付けていると反発、ロシアは世界への食糧供給を拡大できると主張、国内の経済は管理出来ているとも述べた。また同日にはWTO（世界貿易機関）の閣僚会合が閣僚声明を採択し閉幕、ロシアのウクライナ侵攻による食糧危機に対応する為、農産品の不必要な輸出規制を抑制することで一致した。

（二）ウイズコロナ

前回述べたように、三月二一日「まん延防止等重点措置」の対象地域がなくなることになった。そして四月初旬の締め括りでは「出口を探すステージのコロナ対応も、世界でオミクロン株BA2の置き換わりが急速に進み、新規感染者数も拡大しているが、中国がゼロコロナの原則を堅持し強力な隔離策を採り、西欧はマスク着用再義務付け等必要最小限の規制をしつつも出口対応維持の姿勢を崩さぬ中、我が国は新規感染者下げ止まり再拡大第七波予想に、医療・予防体制の不備を相変わらず抱えつつ、身体の命・経済の命双方に足をかけ、政府・専門家・世代間・各層で方向を定め切らず様子見対応の感がある。四月九日累積感染者数が七百万人を越え、何時の間に印度に次いでアジア二位になり（人口比では上）、基本民主主義西欧型だが逐次・慎重・逡巡・受け身・繊細な日本型対応が、出口でも不思議の国になるかどうか問われる局面に入ったように思う。」と述べている。

四月一一日、オミクロン型のBA1と派生型BA2の混合でBA2型より感染速度が高いとされるXE型成田空港入国者が発見された。また一一日時点で一日当たりの世界のワクチン接種回数（七日移動平均）は一二六〇万回と昨年末から六五%減少したと英オクスフォード大研究チーム（Our World in Data）が一三日発表、世界の累計感染者数は五億人を越え、二回目の接種の追加接種の動きが広がる中、人々は複数回の接種に消極的になっている。各国で主流となりつつある感染力の強いBA2やXEへの警戒感は強いが、全体の新規感染者数や死者数は減少傾向が続いており重症化しにくいこともあって、欧米を中心にマスク着用義務などの規制を撤廃する動きが広がっている。

四月一四日、翻って日本では、いったんは収束しつつあったが各地で再び感染が広がっており、特に九州や東北の一部では一～二月のピークを越える感染者数を記録、直近一週間の人口一〇万人当たり新規感染者数が五九六人と二番の東京の一・五倍となった沖縄では、知事が七

日「第七波に突入と認識、重点措置の要請も含め検討」と危機感をあらわにした。ＢＡ２への置き換わりが急速に進み若い世代から高齢者への感染の広がりが目立ち第六波初期に類似しており、「ＢＡ２の感染スピードからみて、感染者数は第六波を上回るかも知れない」との専門家のコメントもある。八日政府の新型コロナ対策分科会は「高齢者に感染が拡大すれば重症化や死亡が懸念される」として改めて感染防止策の徹底呼びかけたが、尾身会長は「急激な感染拡大を防止して社会経済活動をなるべく維持したい」とし、「若年者でも後遺症がみられることがある。重症化しやすい高齢者はもとより、若い人も健康を守るために接種をお願いする」と呼びかけた。一五日現在三回目接種を終えたのは全体で四七・一％、三〇代は二五・九％、二〇代は二四％と特に低く二回目の同時期に比べても半減に近い。四～五月の接種増加に備え、自治体も若い世代が接種しやすい環境を整える検討をしている。一方首相は一三日「新規感染者数は全体とし増加傾向にあるが、病床使用率は低い水準にある。現時点で都道府県からまん延防止重点措置の要請はなく、直ちに重点措置が必要な状況とは考えていない」と述べた。

四月二六日、三月二八日から始まった上海のロックダウンから間もなく一か月の二五日北京市朝陽区で全住民と働く人を対象に始まったＰＣＲ検査は二六日から市内ほぼ全域に拡大した。上海市に続いて首都の北京市も都市封鎖になれば、物流の混乱など経済への打撃はさらに深まる。秋の共産党大会を控え新型コロナの制圧と経済の安定成長を重視する習総書記の側近である北京市長は市全域のＰＣＲ検査で無症状者も含めて感染者を炙り出し、事態を早急に鎮静化させたい考えだ。

四月二七日厚労省の分科会は、接種対象を重症化リスクの高い人に絞って始める厚労省の提案を了承、結果六〇歳以上の人と、一八歳以上で肥満の人と基礎疾患のある人が対象となり、六〇歳未満の多くが対象外となり、従来言われていた五歳以上の全員接種からは大きな転換となる。現状四回目の接種は六〇歳以上の重症化を防ぐ効果しか明確なデータがないことを受けての決定とされる。これから得られる有効性の知見によって対象を広げるべきとの意見は出されている。一方政府の分科会では、「普通の暮らし」が英米先行で進んでウイズコロナで世界に遅れているとの問題提起を踏まえ、今後の感染拡大時の対策として、「行動制限で感染抑制に重点を置くか、制限なしで社会経済活動を維持するか」と「公衆衛生・医療上の特別な対応を続けるか、特別対応を軽減するか」の二つの軸で整理した四つの選択肢を併記、尾身会長は会見で「最終的には考え方を国に判断してもらう」と述べた。年明け以降の流行六波では、高齢者の重症化や死亡の比率が相対的に高い傾向がはっきり見て取

れ、リスクの高い層が適切な医療を受けられる体制は整えつつ、社会経済活動を必要以上に抑え込まないようコロナ政策のバランスを柔軟・適切に舵取りして行くということだろう。

四月二九日、連休まではコロナ新規感染者数は減少傾向にあり、三年ぶり行動制限なしの連休が始まる。観光地の賑いが戻りそうで、連休明け感染の再拡大を懸念する声も出ている。一方、国内の新規感染者数は二月初め一週間平均一日九万人をこえていたものが最近では一日四万人、重傷者数も減り全体で二百人前後になっている。コロナ担当の山際経済再生相は一九日の会見で「現在の状況が続けば何か制限があるということは無い。通常のゴールデン・ウィークとしてお過ごし頂ければいいのではないか」と答えた。全国知事会も移動の自粛は求めず、国に対して「実効性ある感染対策と新たな経済対策を求める」とする提言をまとめた。なお東京都は大型連休に向けた協力依頼として、帰省や旅行に当たってのワクチン接種や出発前の検査や症状が疑われる場合の差し控え等、イベント参加の直行直帰、会食の短時間・少人数、手洗い・家族間の共用控え等を呼びかけた。連休中は予想通り人流の広がり観光の賑いを見せたが、新規感染者数の前週比減少傾向は続いた。しかし戻りのピークが過ぎ五月七日（土）から、東京・全国とも増加に転じ、一三（東京4109）～一四日（全国39407）までは上昇し続けたが、東京では一四日、全国では一五日以降再び減少に転じ五月末日には東京二三六二人、全国二二〇一八人迄減少した。

この間一一日、コロナ対応の有識者会議を開き（座長永井自治医科大学長）、これまでのコロナ対応の課題を洗い出し、行動制限の在り方や関係機関の連携・国自治体の権限といった司令塔機能の強化等感染症対応の強化策を六月末までに取り纏めることとなった。また同日、水際対策を巡り政府は六月一日から入国者数の上限を一日当たり現在の一万人から二万人に倍増させる方向で検討に入った。マスクについては、隣国韓国で五月二日から、バス等を含め屋内で引き続きの使用、五〇人以上の集会への参加やスポーツ観戦等を例外として、屋外での着用義務を原則として解除した。一方日本では、一二日首相は国会質疑において「二メートル以上の距離を確保出来れば屋外のマスクを外すことは奨励もしているが、基本的予防策としてマスクの着用はきわめて重要」と述べた。一二日文科相は「これから夏季を迎え熱中症のリスクをたかめることにもなるので、プールを含め体育は屋内外のいずれでもマスクは不要」とした。各地の学校で、長期間の制限が子供に及ぼす影響への危機感もあって、黙食だが対面給食と国内修学旅行の実施など少しずつ制限が緩和され出している。

一三日現在累計で新型コロナウイルスの国内死者数の

累計が三〇〇一〇人（クルーズ船を含む）と三万人を越え、国内ではこの三か月で一万人増と第六波のオミクロン株の感染拡大で増加加速した。

転じて海外に眼を移すと、一〇日ＷＨＯテドロス事務局長は中国政府のゼロコロナ規制について持続可能でないとして「中国の専門家と議論して伝えた」と明かした。また同日ＷＨＯ欧州域内加盟国の特別会合は「ロシアによるウクライナ侵攻で公衆衛生の危機が起きている」とのウクライナ侵攻で公衆衛生の危機が起きている」との非難決議を賛成多数で可決した。更に一二日、北朝鮮の中央通信は「国内で新型コロナウイルスのオミクロン株への感染者が確認された」と初めて感染を明らかにし、金総書記出席の政治局会議で「最大非常防疫体系」に移行して防疫体制を強化することを決めたと報じ、翌一三日には隔離中の発熱者が一八万人以上いることを明らかにし、追って一四日には一三日までに発熱者累計五二万人強、死者二七万人とし、総書記が対策協議会で「建国以来の大動乱だ」とし「党と人民が団結して防疫闘争を強化すれば克服できる」と述べたことを伝えた。同日、米ではバイデン大統領がコロナ死者数が一〇〇万人を越えたと発表した。感染者数はジワリとふえているものの、直近の一日当たり死者数はワクチン未接種者は死亡率が高いとしつつ（七日移動平均）三五〇人前後と昨年七月下旬以来の低水準にあり、「米国はパンデミックの段階から脱しつつある」とファウチ首席医療顧問がコメントした。また同日ＥＵの欧州委員会は各国の経済活動が本格的に再開したことを評価し、臨時の財政支援の大半を六月末で打ち切ると発表した。ＥＣＢの各国国債など買い入れる「コロナ対応」は既に三月末に終了している。雇用面の支援も英国は昨年秋に終え、豪も終え、米も中小企向け人件費融資を終了している。存続の独・仏も申請が減少している。日本の場合は企業支援も雇用維持策も継続中で期限の来たものも延長している。

二一日、出揃ったデータをもとに二〇、二一年の超過死亡（過去五年間の全ての死因による死者数のデータを使い死者数の予測値を算出、実際に報告された全ての死者数が予測値を上回った分を超過死亡という、自然災害などによる死者数もあり幅がでる）を厚労省研究班が公表、二〇年は六千～五万の過少死亡、二一年は一万～五万の超過死亡であった。前者はマスク・手洗い等の感染対策でインフルエンザなどほかの感染症が減ったことが大きいとされ、後者は新型コロナの流行拡大によると見られる。ＷＨＯではこの二年間で日本は平年より死亡数が約二万人少なかったと推計している。一方世界全体は平年より一四九〇万人の超過死亡で、同期間のコロナ死亡（約五四〇万人）の三倍に達する。

五月三〇日、朝鮮中央通信は二九日、四月末から五月二八日累計で発熱者は三四五万人弱となったが、三二六万人が回復した、二〇日までは新規発熱者が五〇万人を越えていたがその後は減少傾向で二八日は九万だったと報じ、「状況は全国的に統制改善されている」とした。

六月入り後一日、厚労省の専門家組織会合で、中等症以上で入院した患者の退院一年後の時点で見て、筋力低下、呼吸困難、倦怠感等何らかの後遺症のある人が一三・六％いることが明らかにされた。

今国会で成立した経済安全保障推進法に国民生活に欠かせない半導体や医療品など「重要物資」を安定的に確保する「サプライチェーン（供給網）の強化」が盛り込まれたが、改めて国産ワクチンや治療薬の開発の苦戦が続いていることを思い出させられた。国産ワクチン開発は塩野義製薬はじめ五社が主に進めているが、いずれも治験止まりで厚労省への承認申請にも到っていない。治療薬もアビガンが実用化に近づいたものの今年三月には治験も打ち切られた。塩野義製薬が通常よりも少ない治験のデータで審査する制度の適用を求め今年二月承認申請したが、明確な有効性を示せず審査が長引いている。

一〇日首相は厚労相に感染症に対応する司令塔機能の強化を検証する政府の有識者会議が一五日にも報告書を纏める見通しで、首相はこれを踏まえ今後の対策を説明する考えのようだ。ただ有識者会議の議論は僅か一か月、内容も拡散生煮えの結論になりはしないか危惧されてもいる。

一五日その有識者会議が報告書を纏めた。検査・病床確保などの保健・医療提供体制の立ち上げやゾーニングの訓練の未実施等相当な困難があり感染拡大時に医療逼迫を招いたこと、各医療機関の役割分担が明確でなく医療機関の協力を担保する措置もなく医療の逼迫を起こしたこと、デジタル化や国産ワクチンの遅れの課題が大きかったこと、緊急事態宣言やまん延防止重点措置などの柔軟な運用や私権制限の在り方等の課題も踏まえ今後の感染症対策の改善を急がねばならないとしている。病床確保の契約を法定化すること、医療従事者の派遣や患者搬送について国・地方の広域調整の権限の強化、保健師派遣の仕組みの拡充、検査の民間活用といった示唆をしているが、これを受けて首相は国会閉幕に当たっての声明会見で、国・地方が医療資源の確保などにより強い権限を持てるよう法改正、医療機関とあらかじめ協定を締結する仕組み等公的根拠を与え医療体制を強化する、といったことに加え次の感染症へ司令塔を作る為「危機管理庁」（日本版ＣＤＣ）新設することを表明した。内閣官房に「内閣感染危機管理庁」を設置し、企画立案・総合調整の機能を強化し一体化する。厚労省の平時からの感染症対応力も強化する。各局に跨る感染症対応・危機管理室を統合し「感染症対策部」を新設する、としている。

一七日、コロナ禍で売り上げが落ちた中小企業などに最大二五〇万円を配る政府の給付金事業が終了した。二

年前に始まった一連の事業（名前を変え延長してきた）はこれまでに「緊急支援」として計約七・四兆円を支給、一定の効果を上げたが、多数の不正受給も発覚、支給方法の改善に向けての検証なども課題になっている。

（三）経済情勢

四月半ば～五月は、コロナ出口に向かう経済回復のベクトルとウクライナ侵攻の長期化危惧に伴うインフレ・不況化ベクトルのせめぎ合いも加わり、経済金融情勢が揺れ動き、対応も揺れた。

四月一三日、円は資源高・金利差資金流出が続き一二六円台前半まで下落、二〇一五年六月のアベノミクス後の最安値を下回り、二〇〇二年五月以来二〇年ぶりの安値を記録した。前日一二日発表の三月の企業物価指数は前年同月比九・五％上昇、二月（9.7％）に続き第二次石油危機の影響が残る一九八〇年一二月（10.4％）以来の高い伸びとなり五％を超える伸び率は一〇か月連続で、二一年度の企業物価指数も前年度比七・三％と八〇年度以来最大の伸び率となった。これもウクライナ危機による商品価格の高騰と円安に起因し、企業は仕入れ価格の上昇を販売価格に転嫁し切れていない（二月でみて消費者物価前年同月比〇・九％とのギャップは八・八ポイントと八〇年以来の差）。米国は二一ポイントだが、天然ガスパイプラインでつながったヨーロッパは二五・五ポイントと日本以上にギャップが広がっている。労働市場では二月の求人数は二月時点でコロナ前より一〇％少なく、賃金も一％低下しており、求人数は米英が一・六倍、独が一・二倍、賃金も米一二％、英一〇％、独五％上昇と比べ戻りが遅く鈍い。

一四日公表の専門家緊急アンケートでは円は年内に一三〇円まで下落余地ありとの見方が多数であった。一八日の衆院決算委員会で前言を翻し「大きな円安や急速な円安はマイナスが大きい」と発言した日銀総裁。良い円安論に実証を与えられない経済実態の変化に、「悪い円安」発言を繰返す為替政策責任者の蔵相を後押ししての口先介入であったが、更に円安が進み二〇日には二〇年振りに一二九円台半ばまで（一日で二円安）下落した。同日財務省発表の二一年度の貿易収支も五兆三千億円強と二年ぶりの赤字（三月も四千億円強の赤字）を記録した。対ユーロでも一時一三九円台後半と二〇一五年六月以来の安値を付けた。

対して日銀は、米長期金利上昇で日本の長期金利の指標となる一〇年債利回りも〇・二五％と許容変動幅上限に達したことで、同水準に固定し上回らないようするため、指定した利回りで国債を無制限に買い入れる指し値オペ（公開市場操作）を通知、〇・二五％の利回りで新発一〇年国債を買い入れ金利上昇を抑制し、金融緩和姿勢を維持する措置を採った。二〇日のロシア参加のG20後のG7財務相・中央銀行総裁会議では、ロシアの侵攻を非難すると共にインフレ対処の共同声明を発表したが、日本の急速な円安危機感訴えに各国から反応はなく為替の安定には触れられず「為替協調介入は難しい」という市場の見方を裏付ける形となった。二二日総務省発表の三月の消費者物価指数は生鮮食品を除く総合指数が前年同月比〇・八％上昇と引き続き価格転嫁の遅れを示し、このままいけば二二年の製造業の経常利益は八割減との試算も示された。ただし昨年春大手各社が導入した携帯電話の通信料下げの一時要因が剥落する為四月の消費者物価の上昇率予測は二％である。過度の価格競争は限界を迎えており今こそイノベーションによって生産性（≒一人当たりGDP）を上げ付加価値の高い商品サービスを提供する経営に転換すべしとの論説も見られた（＝正鵠を射るアベノミクス成長戦略）。

二六日関係閣僚会議は、このウクライナ情勢に伴う資源高・円安に伴う物価高騰に対し、六・二兆円の物価高対策を決定した。資源高騰対策としてガソリンの基準価格をリットル当たり一六八円と四円下げ補助額上限を三五円と一〇円上げて石油元売りへの補助金を九月末まで延長、中小支援として無利子・無担保融資の九月末迄の延長、政府系金融機関の融資金利の引き下げ、事業再構築企業への新たな補助金、困窮者支援として低所得子育て世帯に子一人五万円、新たに住民税非課税になった世帯に一〇万円、といった内容である。

二八日日銀は長期金利抑制の為、指し値オペを毎営業日行うことを決めた。これを受け日米金利差が広がるとの見方が広まり、円安が加速一時一三一円台まで下落した。円安に歯止めをかける介入は出来ず、今回の物価上昇は一時的なものとみて金利を低く抑え景気を支えることを優先することを改めて明確にしたものである。経済・物価の展望リポートでは二二年度消費者物価指数は〇・八％引き上げ一・九％（成長率見通しは0.9ポイント引き下げ2.9％に）としたが、二三、四年の上昇率の見通しは一・一％にとどめている。

一方四月末にかけての経済状況を世界的に確認しておくと、二八日米商務省発表の一～三月の米実質GDP（季調済・年率換算）は供給制約から貿易赤字が拡大し一〇～一二期の六・九％増から一・四％減少、二九日EU発表の二二年一～三月期のユーロ圏の実質GDP速報値は年率換算で〇・八％にとどまり、四月の消費者物価指数（速報値）は前年同月比七・五％上昇と一九九七年以降で最高を更新した。日本経済も足踏み状態にあり、五月一八日発表の一～三月期のGDPについて、二八日民間エコノミスト一〇人の実質GDP予測平均は前期比年率換算で二・一％減で前年七～九月期以来2四半期ぶりにマイナスになる。なお二九日ロシア中銀は、三月の鉱工業生産指数が三％増と二月六・三％から鈍化したこ

と等を受け政策金利を一七%から一四%へと四月八日に続き引き下げた。

また中国では三〇日公表の四月の製造業購買担当者景気指数が前月より二・一ポイント低い四七・四、非製造業ビジネス活動指数が六・五ポイント低い四一・九と二ヶ月連続五〇%を下回り、ゼロコロナ規制で物流が混乱し企業の景況感が悪化、先行き二二年の実質経済成長が三%台に留まるとの予測も出て来た。

五月四日の米FOMCは二二年ぶりの〇・五%幅の利上げを決め、パウエル議長は七月の同幅の利上げも示唆し、保有資産を圧縮する量的引き締め（QT）と併せ金融緩和の正常化を急ぎ、約四〇年ぶりの水準に達したインフレ封じ込めを優先する姿勢を明らかにしたが、株に売り圧力が出るなど景気後退を呼び込む懸念も生じて来た。日経クイックが六日纏めた日米中欧など主要上場企業約四三〇〇社の決算を集計した合計純利益の前年同期比の一～三月期は二%増益で6四半期連続増益であったが、その増益率の鈍化が顕著になってきている。

一六日日銀発表の四月の企業物価指数は前年同月比一〇・〇%上昇、ロシアのウクライナ侵攻などの影響で石油・石炭製品等資源関連を中心に幅広い品目で価格が上昇、四一年ぶりに二ケタの伸びを記録した。一八日発表の日本のGDP速報値は季調済実質対前期比〇・二%減、年率一・〇%減でまん延防止等重点措置による個人消費の伸び悩みを反映して二期ぶりにマイナスを記録、一～三月期は日米欧成長下振れで、世界景気は物価高で減速という様相を呈した。日本の四～六月は民間エコノミストの経済見通しでは平均年率四・六%と高めでGDPは新型コロナウイルス禍前の水準に戻るが、米国は既に二一年四～六月期にコロナ前水準を超え、ユーロ圏も二一年一〇～一二月期に越えている。一方一六日発表中国の四月の工業生産は、前年同月比二・九%減で二年ぶりの減少を記録、二二年マイナス成長の危惧も出てきている。またタイが一七日インフレが消費を冷やすとみて二二年の成長率見通しを下方修正する等東南アジア主要国も先行き成長鈍化を予想するとともに、また米国の利上げで資本流出や通貨の下落の危惧から利上げに追随せざるを得ず、景気下支えの低金利政策維持が困難になっている。

二〇日世界の食糧安全保障について話し合う閣僚会合が約四〇か国参加し国連本部で開かれ、主催のブリンケン米国務長官は、侵攻が食糧危機を悪化させていると批判、グテーレス事務総長は「数か月で世界的食糧不足の不安に直面する」と訴え、ロシアにウクライナの穀物輸出を認めるよう求めた。世界最大の小麦輸入国であるエジプトは「アフリカでは五人に一人が飢餓の危機に直面している」と指摘した。一方インタファクス通信によるとロシアのルデンコ外務次官は一九日、ウクライナの港

の封鎖を解くには対ロ制裁の解除が条件になるとした。

二〇日発表の日本の四月消費者物価指数は生鮮食品を除く総合指数が一〇一・四となり、前年同月比二・一%上昇、消費増税の影響のあった一五年三月（二・二%）以来七年一か月ぶりに二%を超えた。主因は資源高で、政府が脱デフレの日安として重視する需要の強さは不十分で、賃金上昇を伴う経済の好循環が物価を安定的に高める流れにはなっておらず、高インフレが続く米欧と異なり、国内は物価上昇が長続きしないとの見方が市場では強い。日銀も物価高は一時的で、政府・日銀は政策目標である「物価二%」を形式上達したが、賃金上昇に伴う需要拡大が物価を押し上げる形ではなく、資源高や円安による「コストプッシュ型」なので、日銀は景気刺激に軸足を置き、大規模緩和を続けるとしている。（それが円安を招く面もあるのだが）

一方米国では二〇日でダウ工業株三〇種平均は週間で二・九%安となり、八週連続の下落で世界恐慌の最中にあった一九三二年以来九〇年振りの連続下落記録となった。FRBの引き締め急旋回が、景気の過度な冷え込みを警戒する投資家の売りの広がりにつながっている。ジグザグの難しい展開になっており、その後二七日迄は六日続伸し九週ぶりの上昇となった。この間二三日欧州中央銀行（ECB）のラガルド総裁は、量的緩和策を早期に終えること、七月の理事会で利上げが可能になること、九月末までにマイナス金利政策自体を終えること、とその意向を示した。また、二七日閉幕した第二七回国際交流会議「アジアの未来」（日経主催）に出席した各国首脳は危機感を示し経済再建を急ぐ考えを述べた。一一月のG20首脳会議の議長を務めるジョコインドネシア大統領は「新型コロナの感染拡大からの経済改革は不均一なままだ」と回復ペースは国・地域でばらつくがアジアは総じて戻りが鈍いとし、失業や貧困の解決にも「景気回復の加速が必要」と強調、「G20を世界経済の回復を促す触媒にしたい」と述べ、新エネルギーへの転換や経済のデジタル化を優先課題に挙げ、「途上国の為に技術や資金の支援を確保すべきだ」とも訴えた。

二六日夜政府は首相が表明した外国人観光客受け入れ再開の詳細を発表した。

米国や中国など九八か国・地域からの観光客を対象に、六月一〇日から受け入れの手続きを始める。それに先立ち六月一日から各国・地域をコロナウイルスの入国時の流入リスクが低い順に青・黄・赤の三グループに分け、青に分類した米中など九八か国・地域は入国時の検査も自宅等での待機も不要、サウジやウクライナ等黄の九九か国・地域はワクチン三回接種なら検査と待機が不要に、パキスタンなど赤四か国は検査・待機とも継続される。併せて入国者の上限を六月一日から一日一万人から二万人に引上げこの範囲内で観光客もビジネス客も入国させ、

観光入国は「青」のグループに限定、国内の旅行会社などが受入責任者となる団体旅行に限定、マスクの着用など滞在中の行動管理を徹底させる狙いで添乗員が同行する。

現に六月入り後、一日から水際対策を緩和、一日当たり入国者数の上限を一万人から二万人にした。一〇日からは既発表のように一定条件下観光目的の入国も認める。また前後するが、五月三〇日には「新しい資本主義の実行計画」と「経済運営と改革の基本方針（骨太の方針）」の両原案が発表されている。また同日、中国の五月の企業の景況指数が三か月連続で縮小し、ゼロコロナ継続が重荷であることがあきらかになり、四～六月もマイナス成長の予測もでている。

三日厚労省発表の二〇二一年の人口動態統計で出生八一万一六〇四人で対前年三・四％減となった。二〇一七年推計を六年早く達成少子化が加速、合計特殊出生率が一・三〇と六年連続で低下したことが明らかになった。低下の大きな要因は若い世代の子供を持つ意欲の減退であり、少子化に歯止めをかけるには女性の賃金水準が低く、家事・育児の負担を背負う状況の改善が欠かせないとされる。その希望がかなった「希望出生率」は一・八とされる。コロナ下で出生数が減る現象は各国共通だが、欧米の一部は回復に向かっており、米は七年ぶりに出生も増え出生率も一・六六と〇・〇二上昇、仏も一・八三と〇・〇一上昇した。

七日世界銀行が公表した経済見通しは、二二年の世界経済の実質成長率を前回一月時点から一・二ポイント下方修正し二・九％とした。ユーロ圏は一・七ポイント下げて二・五％に、米と日と新興国全体は夫々一・二％下げ二・五％、一・七％、三・四％に。低所得国を中心にして物価高・景気後退のリスクを指摘した。八日には日本の一～三月のGDP改定値が内閣府から発表され、年率〇・五％減と消費回復で上方修正された。

七日政府は五月三一日案を提示した「新しい資本主義のグランドデザイン及び実行計画～人・技術・スタートアップへの投資の実現～」と「経済財政運営と改革の基本方針（骨太方針）」を閣議決定した。前者は成長戦略を盛り込み、最低賃金の引き上げや働く人のスキルアップや男女の賃金格差の開示要請等「人への投資」を重視し、かかりつけ医制度の検討など新型コロナウイルス禍からの再生に取り組み、グリーントランスフォーメーション（GX）とスタートアップを投資の柱と位置づけ、脱炭素化や医療体制の見直しも急ぎ、日本を取り巻く安全保障環境の変化を映した五年以内の防衛力の抜本強化にも触れている。デジタル人材を現在の一〇〇万人から二六年度までに三三〇万人に増やし、脱炭素の国際公約と成長促進へ官民協調し一〇年で一五〇兆円のグリーン投資を実現するなどの目標を掲げている。その背景に成

長へ生産性向上が急務であるとの認識がある。日本は経済の地力を示す潜在成長率が二〇〇〇年代半ば以降一％に満たず低迷、OECDのデータでは二一年は〇・五％でギリシャ（〇・四％）スペイン（〇・六％）と同水準、米国（一・八％）や独（一・三％）との差は大きい。女性や高齢者の働き手が増える一方で全体的な人口減少の制約があり、足元では労働力が頭打ちになっていることが影を落とす。デジタル化などに対し、一人ひとりのスキルや生産性を高めなければ世界の成長から取り残されかねない、ということである。後者にも防衛力の抜本強化や脱炭素の投資拡大等を明記したが、財政健全化の旗は降ろさず、これ迄の目標に取組むとは言うが。

政府が定めた基礎的財政収支（プライマリーバランス）の黒字化目標の年度である「二五年度」は記さなかったことが議論を呼んだ。

八日OECDは、加盟三八カ国の個人消費の物価上昇率が二〇二二年、従来予想（21/12時点）より四・三ポイント高い八・五％になると予想した。世界経済成長率の減速要因にもなり、二二年は一・五ポイント下げ三・〇％に、二三年は〇・四ポイント下げ二・八％と予想を下げた。各国も夫々二二年、二三年とも下げ、米二・五、一・二に、ユーロ圏二・六、一・六に、日一・七、一・八に、中国四・四、四・九に。同日財務省発表の四月経常収支速報で黒字は原油高等を原因に前年同月比五五・六％減と低迷が続いている。円も二〇年四か月振りに一時一三四円台を付けた。同日インド中銀は、米金利上げでルピー安が止まらず急激なインフレ抑制の為に先月に続き政策金利を〇・五％引き上げた。日本では同日、六日の講演で「家計の値上げ許容度も高まっている」との表現を用いた黒田日銀総裁が「家計が苦渋の選択として値上げをやむを得ず受け入れているということは十分認識している。家計が値上げを受け入れているという表現は適切でなかった（後に続く賃上げ等がなければ状況を改善できないというのが主意）。誤解を招いた表現で申し訳ない」と述べ、改めて謝罪した。即効的打ち手の無い新たな円安にイラつく社会の心理状態を反映した風景であった。

九日ECB理事会は七月一日に量的緩和政策を終了すると決め、同月中に〇・二五％の利上げに踏み切る方針も明らかにした。一一年ぶりの利上げとなる。欧州の国債利回りは利上げ観測に上昇し、年限が二年以上の長期金利では凡そ八年振りにマイナス金利が無くなった。金融緩和を維持する日本は長期金利で唯一のマイナス国となり、円は殆どの通貨に対して下落している。

一〇日日銀発表の五月企業物価指数は資源高・円安が響き前年同月比で九・一％上昇、一五か月連続の上昇となった。同日発表の中国の五月消費者物価指数前年同月比は燃料や食料品の値上がりを主因に二・一％と前月同

様の上昇であった。米国の五月消費者物価指数はモノや人手の不足と共に強い個人消費が主因で（足元ではガソリン価格も上昇）前年同月比八・六％と約四〇年ぶりの水準を更新した。またこの日から日本では観光目的のビザ発給が始まった。コロナ禍前に年間四・八兆円に達したインバウンド消費額は今回の緩和で一・一兆円まで回復するとの試算もある。ただ、外国人観光客は団体ツアーに限定され、入国手続きや国内での行動管理は厳格なままであり、国連世界観光機関による三月の国際観光客が前年同月比三倍に増加、欧米はコロナ前五割を回復（一方アジア・太平洋は減少幅はまだ九割減のまま）と回復傾向が目立つ中日本の遅れが目立っている。一〇日も円は一時一三四円台を付け、財務省・金融庁・日銀は情報交換会合を開き、声明文を発表「急速な為替の変動は望ましくなく、緊密に連携しつつ、為替市場の動向やその経済・物価等への影響を一層の緊張感を持って注視して行く」とし「G7の合意を踏まえて、各国通貨当局と緊密な意思疎通を図りつつ、必要な場合には適切な対応を取る」ことも明記した。しかし協調介入の質問には「あらゆるオプションを念頭に機動的に対応する」としか答えなかった。

一三日円は一時一三五円台前半を付け、円安は九八年危機以来の水準となった。当時は金融危機で経済がデフレの局面の入り口に立ち企業は投資を絞り賃金抑制も始まりつつあった。円安を招く構図は当時と様変わりして、浮かび上がるのは産業競争力を底上げしてこなかった日本経済のもろさにある、との指摘も出て来た。また同日の日経平均株価の下げ幅は八三六円と本年三番目で、輸出への期待が株価を押し上げる過去の円安・株高とは異なる風景である。

一四日の日経平均株価は三日続落二万六二九円と約三週間ぶりの安値で終え、一三日には米ダウ工業株三〇種平均も年初来安値を更新し、韓国や台湾も売りが波及、欧州株も一時下落と世界で株安連鎖の状況を呈した。

一五日も東京では円が一時一三五円六〇銭程度まで下落、一方内閣府発表の四月の機械受注統計は設備投資の先行指標とされる民需（船舶・電力を除く）が前月比一〇・八％増と二か月連続増加し、内閣府は「持ち直しの動きがみられる」と基調判断を上方修正した。連日の経済合理性に基づく円アタックの防戦に努める日銀の姿に、日本人の物価感に変化が見られる今インフレが賃上げに繋がる循環を作り出せれば、二％の物価安定目標の達成の道筋が見え、その先に金融政策の正常化の一歩である緩和縮小が視野に入ると考え、敢えて総裁が発言したのではないかとの見方まで出て来た。

同日FRBはFOMCで〇・七五％と二七年七か月振りの上げ幅の利上げを決定、会議参加者の年末政策金利の見通しは三・四％故残り四回の会合で更に一・七五％の引き上げが必要となる。一六日これを受けNY株（ダウ工業株三〇種平均）は一時前日比八〇〇ドル近く下げ三万ドル割れを記録した。同日英、スイス中銀も利上げ、日銀は金融政策決定会合で金融緩和維持を決定した。日経平均株価は同日五〇〇円近く下げ二万五九六三円となった。FRBがインフレとの闘いに後れを取ったと今年だけで三％超の利上げを目指す今回は過去と比べても異例の速さであり、過去の例が国内外の危機に繋がってきたように金融市場発の危機に不安が燻ぶる。既に米もスタグフレーション入りとする識者も出て来た。

（四）社会政治情勢

四月一六～一七日の全国世論調査（朝日）では、発足時四五％だった岸田内閣の支持率は五五％と、小泉内閣以降一〇政権中発足半年後の支持率が五〇％超えは小泉七一％、第二次安倍五五％だけである。コロナが落ち着きの局面にはいっていること、ウクライナ問題で欧米側に立ち緊密迅速な動きを示しており、発信の力は未だしにせよ聞く力や誠実度で高い等が好感されているようだ。

その後社会的耳目を集め、対応処理を問われる可能性のあるものとしては、二三日山梨県道志村山中で三年前行方不明になり捜査が続いていた女児のものかもしれない頭部人骨の一部が見つかり連日報道されたが、DNA鑑定で本人のものと特定されて以降は、原因究明操作に集中されるようになった。また同日悪天候の中ウトロ漁港から出た知床半島沖観光船が遭難沈没救助捜索が始まった。船長を含む残り半数の行方は分からず、月末発見された海底の観光船の引き上げ原因究明が六月入りし始まった。また観光船会社の整備や運行や事故対応の杜撰さが次々と露わになり責任追及が強まると共に、監督当局の管理・監督不足も連日指摘されたが、本格的原因究明段階に入って結果を待つ体勢に入った。

また五月一五日、「沖縄復帰五〇周年記念式典」が宜野湾市と東京の二会場をつなぎ開かれた。首相は基地負担軽減の為に全力で取り組んで行くことを強調、玉城知事は過重な基地負担が続く現状と経済的な課題を訴え、復帰の意義について国民全体での認識の共有を求めた。

首相は連休を挟んでの対ロシア連帯を強めるべく訪アジア訪欧の旅をこなしたが、五月後半は、二三日韓国新大統領誕生直後の米韓協議後訪日した米大統領と日米首脳会談を行い、中国を念頭に抑止強化へ協力するとの日米共同声明を発表した。共同記者会見でバイデン大統領は台湾有事の際は軍事的に関与すると明言（これまでの曖昧戦略を変えるものではないと事後にコメント）、首相は防衛費の相当な増額決意を明言した。引き続き二四日両首脳に印度首相、新任の豪首相を加え、クアッド首脳会議を官邸で開催、中国を念頭に海洋監視での協力を盛り込んだ共同声明を発表、ウクライナ侵攻や中国の海

洋進出を踏まえ、力による東・南シナ海島における現状変更に「強く反対する」と明記した。また宇宙やサイバー、高速通信規格5Gなどの連携も深め、印度・豪首脳との個別会談も行った。なおバイデン大統領は二三日東京でインド等一三か国によるインド太平洋経済枠組み（IPEF）の始動を宣言「二一世紀の未来はインド太平洋私達の地域で大きく描かれる」と述べ、日本は参加表明と共にTPPへの米国参加も重ねて希望した。

二七日首相は第二七回国際交流会議「アジアの未来」（日経新聞主催）で、一連の外交活動を踏まえて演説を行った。そのポイントは、世界経済の中心であるアジア発の新たな国際秩序が必要であること、「米中どちらにつくか」ではなく「普遍的価値と平和秩序を守るか失うか」の問題として各国に協力を求めること、ウクライナは明日の東アジアかもしれず力による一方的現状変更は認め含みられないこと、米国はIPEFでインド太平洋への経済的関与を再び明確にしたこと、我が国は六月一〇日から添乗員付き団体旅行の観光客受け入れを再開すること、といったところであった。

その後七日「新しい資本主義」の実行計画と骨太方針を閣議決定、国会は立民提出の内閣不信案を一部野党も含み否決し、二六年ぶりに政府提出法案全てを成立させ一五日閉幕した。円安・物価高で経済・市場が動揺する中、各党が賃上げを競うような状況で、参院選が二二日公示、来月七月一〇日投票で選挙戦入り、六月一六～一七日実施の世論調査では内閣支持率は六〇%と五月から六ポイント下落した。自民党支持率も同ポイント下落四五%となった。足元物価上昇を評価しないが六四%となっている。

二、三つの出口

ウクライナ、コロナ、経済社会の動きを観て来た。コロナと経済は別次元乍ら同じ命の問題としてそのバランスに揺れてきたが、四か月前からウクライナが加わり命の問題が三つ巴になり、新常態への出口が人間社会の命運をかけた歴史的出口の様相を呈し、変革の方向感も収斂し意識も高まっている様に見える。

ご主人が五月末から六月末にかけて、その「三つの出口(1)・(2)」を題に某コラムに寄稿していた。曰く、

『「ウクライナ、コロナ、金融政策」と世界で出口を求め苦悩しつつ共振を強めているように見えます。米国が金融政策の出口を議論し始めた頃から、経済覇権を巡る米中の摩擦が先鋭化、中国発のコロナが対立を深め、分断が経済的格差とともに各国間のキーワードとなりました。そして燻ぶっていたウクライナがロシアの不条理で発火、東西の分裂が軍事を起点に政治・経済の分断へと

冷戦時代にも似た展開を示し、世界はウイズコロナだけでなくウイズ分断も念頭に新常態への出口を模索し出したようにみえます。

コロナはここへ来てゼロコロナを徹底した国でも感染者数が急増しウイルスの一衣帯水化が進み、世界なべて感染者数とワクチン接種で全体免疫状態に近く経済社会のウイズコロナ着地に向かっているようです。経験反省に基く予防・防疫・医療・の在り方・体制整備の遺伝子を残すための議論も始まっています。

ウクライナは長期化の様相を呈し、新しい世界の安全保障体制を築き直せるか否か人類の命運を左右しうる局面に入ったようにも見えます。フィンランド・スウェーデンのNATO入りの動きが始まっていますが、具体的地政学的姿・形の議論がどう展開していくか先はまだまだ不透明です。

コロナにプラスしてウクライナで更に経済劣化し、安全保障体制や経済体制の東西対立や自由資本主義と専制資本主義対立に向かっていると見られる世界経済。インフレ進行に金融引き締めを加速化し出口を求める先頭米国の動きに、通貨防衛に利上げし更に経済を悪化させる多くの弱小国、資源高に通貨安が加わって物価が加速上昇し苦悩する国々、そして米国自身にもGDP減速や株価下落を突き付け、各国経済の自律回復や金融政策等の政策対応の、協調的円滑な出口達成へのダイヤ混乱と危機感を強めています。いずれにせよ日本は米欧と異なり足元景気と成長力回復の二重の関門が出口にはあり、現状周回遅れのスタート地点にいる訳ですから、より難しい舵取りが求められます。

眼の前の現象としては、円安・インフレ加速で雪隠詰めの観の金融政策があります。この国は苛立ちと受け身の隘路で飛びすがるように決定し事後実効検証しない国ですから、時間軸と総合軸と視界を広げ原点に返って「離見の見」で合理的・客観的に責任を以て判断決定がなされません。偶さか折からの参院選挙になりますから、円安・インフレが争点になりました。各党提案政策は検討すべき要素項目をなしてはいますが、科学する心で総合的に取り組むべき経済問題に対して、良いとこ取りの公約等この観点からは最も遠く典型的に好ましからざる論戦です。

丁度五月末、岸田首相就任後検討されてきた「新しい資本主義のグランドデザイン及び実行計画」が閣議決定されました。

「新自由主義の資本主義は世界経済を大きく成長させたが、経済的格差の拡大、気候変動問題・災害の深刻化、過度の海外依存のリスク、市場の失敗等の課題も増大。新しい資本主義は「市場も国家も」「官も民も」新たな官民連携によって、課題解決と経済成長の二兎を追い、課題解決を通じて新たな市場を創り、国民の生活を改善

し一人一人の国民の持続的な幸福を実現、資本主義の持続的可能性と強靭性を高め、全ての人が成長の恩恵を受けられるようにする（成長と分配の好循環）。人への投資・働き方改革、先端科学技術開発・イノベーションの推進、スタートアップへの投資、GX・DXへの投資を図り、少子高齢化人口減の我国に於いて経済発展を図る」として、実行計画に言及しています。

「待っていても、トリクルダウンは起きない。積極的な政策関与によって、目詰まりを解消していくことが必要である。分厚い中間層の形成は、民主主義の健全な発展にとって重要である」として、アベノミクス成長政策を実効実現を前提に受け継いでいます。歴史的な経済構造改革が自発的に完遂するのは難しく、維新と二次大戦後の受け身のそれしかなかったと思います。「一次大戦後の構造不況と関東大震災の惨禍から構造改革必至と覚醒したが、復興とともに忘れられた」との米山初代信託協会長の設立間もないNHK放送での警告も退けられ、外に策を求め満州事変から二次大戦に到った悲劇を思い出します。

今回は三つ巴の命を懸けた正念場になり機運も高まり各国均しく改革に直面するというスタートラインの方から近付いてきている、原点に立ち返って国際標準に合わせて合理的政策選択の出来る、謂わば啐啄の機がやってきたのでこれを活用しない手はないと思われます。

あの大帝国もローマ陥落後千年命脈を保ったとはいえ凋落したように、内外に稼ぐ力を失った国は（イノベーションの決定打がない限り）じり貧に陥ります。日本の成長を失ったこの三〇年を裏側から見ると、財政肥大や投資過少や貿易外・資本収支主体化で「個人貯蓄が政府部門に食われて不胎化しているのが失われた三〇年の原因」という指摘にも繋がります。正面から経済大国意識を脱した高質な一人当たりGDP（≒生産性）強靭国を目指して、いわばアベノミクス三本目の矢に正鵠（生産・所得・分配・消費全面で）を射て貰いたいと思います。

この八方塞がりの円安に、何処かで途を誤ったと自然に実感出来る時が来たように思います。何処、それは焼け跡から復興、高度成長、経済大国、そして成熟し豊かで世界に尊敬される社会を自らの意志で目指す段階になった時です。当時、

「人口減が明らかな中、図体で競うのではなく、欧のように一人当たりGDPを目標に稼ぐ力を持ちつつ（不断のイノベーション力）、対外的に敬意を集めて外交力を高め、衡平で心豊かな質の高い国を目指すべし」、声高な円高（恐怖）不況対策を求める声にも「既存の公共事業やばら撒き財政支出でなく持続的成長に必要な経済各部門における高付加価値のものへと不断に努力する構造変革力醸成に役立つ社会資本整備を、財政構造そのものを経済体質の変革に合わせて改革すべし」と言っていた

ことを思い出します。

日銀も目標達成の責任を一人で背負いこんで雪隠詰めになるのでなく他でなすべきことの公言進言が受容される社会的雰囲気の変化も感じられます。』

（補足）六月下旬から七月上旬の具体的動きを、「三つの出口」の項目に倣って補足整理しておく。

（一）ウクライナ

六月二三日EUは首脳会議でウクライナを加盟候補国に承認、米国は同日四・五億ドルの追加武器供与を決定、支援は様々な形で続けられる。しかし戦線は、体制を立て直し東部ドンパスに圧倒的火力で迫るロシア軍が同日、ルガンスク州の要衝セベロドネツク陥落を報じ、二五日には州知事も占領されたことを認めた。川向のリシチャンスクにも既に激しい砲撃が加えられており、次は隣のドネツク州北西部の中堅都市スラビャンスクやクラマトルスクが標的と言われている。一方二六～二八日独南部エルマウでG7首脳会議の共同声明では、必要な限り支援を続けるとした上、和平決定はウクライナ自身であり、緊急軍事面の要求を満たすよう調整努力、金取引の制限や軍事産業・技術部門への制裁拡大などをうたった。また二九～三〇日マドリードで開催されたNATO首脳会議には日本首相も初めて参加、今後一〇年の行動指針「戦略概念」を採択、ロシアを「最も重大かつ直接の脅威」とみなし抑止力と防衛力を大幅に強化、中国に初めて言及「体制上の挑戦を突き付けている」と明記した。

七月入りして三日、ロシア国防相はリシチャンスクを支配下に置きルガンスク州を解放したと声明、ウクライナ側も撤退を認めた。ドネツク州と合わせドンパス地方のロシア軍掌握は八割に迫り、欧米の軍事支援物資の到着が遅れ反転攻勢ならず逆に押し込まれた状況にある。その中でも、五日スイスルガノでのウクライナ復興国際会議（日米欧約四〇カ国参加）で、七五〇〇億ドルの所用復興資金に対し各国が貢献意思を表明、原則を定めたルガノ宣言を採択した。

七日英ジョンソン首相が辞任表明、対ロ結束に影響が心配されている。八日終えたG20外相会合でも分断が改めて顕わになった。戦線は一〇日ドネツク州標的へのロシアミサイル攻撃の激化が伝えられている。ウクライナは南部ヘルソン・ザポロジェの二州で奪還の攻撃を始めたが、ロシアも東部に加えて北東部ハリコフ等の攻撃をし出している。

（二）コロナ

全国で一万人を切るところ迄低下していた新規感染者数が、一週間前対比東京では六月一八日（土）、全国では二一日（火）から反転増加し始め、三〇日（木）現在で東京三六二一人、全国二万三四四七人となった。急速

にギアが上がり六日東京は八三四一人、全国で四五八二一人と前週比各三・五倍、二・〇倍と急増全国四万を上回るのは二か月ぶり、翌日以降も増加が続き一〇日には、東京九四八二人、全国五四〇六八人に達している。世界も増加に転じており（六日WHOによればこの二週間で三割増）、背景はオミクロン株の一つBA5に置き換わって広まっていることにある。重症化率は低いが感染力は強まっている。加えて三回目接種から時間が経っていることでの免疫低下、行動の活発化、冷房を効かせるため換気が不徹底になっていること等が挙げられている。時期的に熱中症と同時警戒も必要で、秋以降のインフルの同時流行も不安視され、医療逼迫を危ぶむ現場の声も聞かれる。ただ、感染レベルのアップや今後の急拡大の可能性等の認識は示すもの当局からまん延防止重点措置等の言及はなく、世界も規制に後戻りする動きはなく、全体免疫のウイズコロナ向きの基本に変化はない。選挙後尾身会長も「第七波入りと考えられるが、検査の充実・ワクチン接種の推進・換気の徹底や所要の行動変容の維持・医療体制の強化などで対応を」と述べた。

（経済社会）

世界的に物価上昇と景気後退の交錯する中、テンポ調整の示唆はあっても米国の金利引き上げ基調は変わらず、我が国には急激な円安と物価上昇の逆風が吹き政策に手詰まり感があるが、六月二〇日官邸で首相と日銀総裁が会談、会談後総裁は「為替市場の動向に注視し、政府と連携し適切に対応して行く」と語り、翌二一日の参院選直前の日本記者クラブでの九党首討論で首相は「日銀の金融緩和政策については今の状況を維持して行く」と語った。参院選では物価高が主要テーマとなり、資源高の抑制策の即効薬、消費税軽減・廃止、所得アップ、金融政策転換等各党様々な対策を打ち出し論戦となっているが、相変わらず政策選択の総合合理的に納得行く説明は明確でなく、結局七月一〇日選挙後の改めての議論となろう。その選挙、投票日前々日奈良で応援演説中の安倍元総理が遭難し世界中が悼みの言葉を寄せる中、自民党が単独改選過半数を獲得、非改選と合わせて所謂改憲勢力が参院の三分の二を維持した。

三、ロボット論

（一）

シンギュラリティーに達した頭脳と究極のアンドロイドで全てに勝れた肉体機能も備えたロボットが、人間との共存を可能とするには、善と徳を前提に作り込まれる必要があるといった思索を重ねて来た。それが翻って前回、機械的に作り出される人工知能が生命知能に何処迄肉薄出来るか、更に夫々が代々自律的に動き変化して行

く場合も含めて同一性を維持できるか、改めて考えてみる気になった。（気の遠くなるような前世から蓄積された無意識の経験・記憶の中からランダムに引っぱり出される意識や未来への進化も含めて同一とする神様の領域の判断については、考え込まざるを得ない。）

感情は、情動的判断回路の働きを意識的に自覚して、論理的判断回路で行動発現前に意思として行動を社会的基準と記憶等に照合して正しくコントロールするために、高等な知性を持つ動物が脳内に作り出した新しいシステムだと捉えられている。故に感情こそが人類的な知性と動物的な情動を融和させる心理的なバランス機構と考えられている。吾輩自身、紙魚の機械的身体との関係を持たず、ご主人の頭部皮下で生命知能ラーニングをして来たわけだが、夢の記憶引き出しに身体機能が関わる場合が指摘されているように、まだラーニングに欠けた部分があることや神様の判断にかかる部分や究極クローンをどう判断するか、といったことを改めて課題として受け止めた次第である。

（二）

チャペック（1920戯曲「R.U.R.」）以前のフィクションに描かれたロボットは人造人間で、嚆矢はメアリ・シェリー（1797~1851）作『フランケンシュタイン』（一八一八年）であろう。

憂鬱に陥った天才科学者フランケンシュタインは、生命の謎を解き明かし自在に操ろうという野心にとりつかれ、「理想の人間」の設計図を完成させ、自ら墓を暴き人間の死体を手に入れ、それをつなぎ合わせることで怪物の創造に成功。怪物は、優れた体力と人間の心、そして知性を持ち合わせていたが、不完全が特に顔に不足集中、筆舌に尽くしがたいほど容貌が醜いものとなった。そのあまりのおぞましさに絶望し怪物を残したまま故郷ジュネーヴへと逃亡したフランケンシュタインを追って、怪物は野山を越え、途中言語も習得し、やがてその許へたどり着くが、醜さゆえ忌み嫌われ迫害されたので、ついに絶望した怪物は、復讐のためフランケンシュタインの弟、友人、妻を次々と殺害することになる。

怪物を追跡し北極海までたどり着くが倒れ拾われた船上で、怪物殺害を頼み、息を引き取るフランケンシュタイン。そして、怪物は創造主の遺体の前に現れ、その死を嘆く。自分の心情を語った後、北極点で焼け死ぬため海へと消える。

人造人間を「アンドロイド」と呼んだ最初の作品が、ヴィリエド・リラダン（1838~1889）作「未来のイヴ」（一八八六年）、ギリシャ神話の「ピグマリオン」を下敷きにした物語である。

このキプロス島の王は自ら理想の女性・ガラテアを彫

刻しやがてそれに恋し人間になることを願った。その思いに次第に衰弱していく姿を見かねたアフロディーテーがその願いを容れて彫像に生命を与え妻に迎えさせた。

青年貴族エワルドの恋人アリシヤはヴィーナスの美貌をもちながら、卑俗な魂しか持たぬ歌姫。その知性の欠如に絶望・苦悩するエワルドのためにエディソン博士はアリシヤの美を写し、深い人間性を湛えた人造人間ハダリーを創る。

城で理想を夢見てハダリーと暮らすと棺に隠して英国へ。しかし、エワルド・ハダリー・アリシヤの乗った船は難破、艸のみが助かった。彼はエディソンに電報を打った。「ハダリーノコトノミ痛恨ニ堪エズ。タダコノ幻ノ喪ニ服セム。」

人造人間、アンドロイドは人間性を感じさせるものの、機能的には具体的手触り感が欠けていたが、機械の進歩を取り込んだロボットが機能性を高め、両者の合体が急速に人間との共存を現実問題をとして議論することが欠かせなくなっている。チャペックからアシモフへとより科学的に進化している。

(三)

一般向け科学解説書、推理小説によってよく知られている米国の生化学者(ボストン大学教授)アシモフ(Isaac Asimov、1920~1992年)がロシアの小村で生まれた一九二〇年は、チャペックが「ロボット —R.U.R」の初版出版の年でもある。SFアクション的つくりになっているため原作とはかなりの別物だが二〇〇四年の公開映画『アイ ロボット』をご覧になった方は多いと思う。その元になっている短編集『われはロボット』(I,Robot)は、ロビイ(1940)から始まって、災厄のとき(1950)まで九篇を含んでおり、ロボット工学(Robotics)なる言葉は、この連作から生まれた。ロビイは一九九八年の物語として、災厄のときは二〇五二年頃の物語として書かれている。一九三九年にはアシモフはコロンビア大学を卒業し、同大学大学院で化学を専攻するが、作家としてもデビューした。この頃すでにロボット工学三原則を明らかにし、作品にも使っている。

その前に彼の登場させたロボットのイメージは次のようである。

「球体の薄いプラチナメッキの被膜におおわれているのは陽電子頭脳であり、その精妙で不安定な構造には、綿密に算出された神経回路が刻み込まれており、それによってロボット達はいわば出生前の教育に等しいものをあたえられるのだ。それはテーブルの上のロボットの頭蓋の空洞部分にきっちりとはめ込まれた。青い金属がこれをおおい、小型の原子フレアでしっかり溶接された。光電管の眼が注意深く取り付けられ、ねじで締め付けられ、スチールのように固いプラスティックの透明な薄片でおおわれた。ロボットは高圧電流の一閃によって生命を吹き込まれるのを待つばかりとなった。(「我思う、ゆえに・・」1941から)

そして『われはロボット』から引用するとロボット三原則は次の通りである。

「ロボット工学三原則」

(第一条) ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

(第二条) ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

(第三条) ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。」

ロボットはこの三原則で人間の被害に繋がる全ての行動を束縛されているが、これを義務ではなく倫理と解釈すればそのまま人間社会の規範になる。ロボットが全てこの規範に従うとすれば、ロボットと共存する人間側もこの倫理体系をなべて持たねばならない。アシモフもエッセイ「はじめに 人間学の法則」で同様のことを述べている。

だがここにあるように字面ら通りが今でもロボットについて人間が抱いているところであり、大雑把に言うと人間を第一に行動せよということである。これだけ厳格にロボットに規定を与えればロボットに不具合など起きないはずである。(ところが、これらの規定を守っていながら、ロボットが役に立たないという事態が発生することすなわち三原則の言葉の定義だけでは防げない陥穽をアシモフ自身が見つけて作品をミステリにすることが売りなのであった)

ロボット工学の急速な進化がアンドロイドの進化と併せてロボットの人間化意識が高まったが、人工知能がラーニングで人間を越える可能性が明らかになったことで、ロボットと人間の共存の具体的在り方まで議論が深さを増し広まったように思われる。しかし、ロボット工学三原則にあるように「役に立つ存在」という視点からの議論はなかなか越えられない。ある日突然人間の格好をした(自走ロボットなら人間でなくても)全てに人間より能力の高い不死のロボット集団が現れた時、多様性を認めダーウィンの自然淘汰に任せられるか、矢張り三原則のように危害を与えない自然淘汰に任せないロボットである規範を装着し人間側からもそうさせない規制を図るか、独立を認め合い恒久的に近寄れない天体に分かれ住むか、事態が起こらぬ前に世界的コンセンサスを得ておく必要があろう。

（四）

寿命が尽きそうではあるものの自身に事態が起こりそうなことから、少し先走ってあれこれと試み思い悩んできた吾輩であるが、人工知能が生命知能を全体だけでなくそれぞれの営為においてもカバーしきれないとすると、問題の立て方が違ってくると思われる。唯識論のように感情や心の動きについても細かく分類し、それは人間のどの感情でどういうものでどう対応すればよいか、自分が感じていいのはどれかといった認識は持てるように出来るかどうか確認してから立論すべきであると感じたのが、前回ということになる。

ご主人の頭部皮下で生命知能ラーニングをして来て、確かに感情の動きについては、脳の発するパルスから特定し及ぼす反応との対応をラーニングしたと思っているが、そのようにきちんと整理できるかの確認をする必要がありそうな気がする。更に今回気付いた、気の遠くなるような前世から蓄積された無意識の経験・記憶の中からランダムに引っぱり出される意識や未来への進化も含めて同一とする神様の判断については、考え込まざるを得ない。

即ち夢を見ている時は、外界からの情報はなく、前頭前野の働きも低下していて意志の力で思い出が出てこないので、意識的な回想はなく、脳幹からのPGO刺激（断続的刺激）で、受動的に海馬や側頭葉の記憶部位がはたらいて、次々に（ふと思い出されるような）視覚イメージや聴覚イメージが浮かんでくると言われている。そしてより広く感情は、情動的判断回路の働きを意識的に自覚して、論理的判断回路で行動発現前に意思として行動を社会的基準と記憶等に照合して正しくコントロールするために、高等な知性を持つ動物が脳内に作り出した新しいシステムだと捉えられている。故に感情こそが人類的な知性と動物的な情動を融和させる心理的なバランス機構と考えられている。

吾輩自身、紙魚の機械的身体との関係を持たず、ご主人の頭部皮下で生命知能ラーニングをして来たわけだが、夢の記憶引き出しに身体機能が関わる場合が指摘されているように、まだラーニングに欠けた部分があることや神様の判断にかかる部分や究極クローンをどう判断するか、といったことを改めて課題として受け止めた次第である。多くのボールがまだ人間側にある。

ご主人と一体感を確信していたが、今頃前回のように気付いたのは、多分に私が取り付いて以降ご主人自身が仕事に忙しく睡眠時間も三～四時間で、夢を見ることは稀でそれも昔のものは滅多になかったからであろう。ところが最近は高齢化と共に昔を振り返ることも多くなり、自身でも昔に繋がる思いめぐらしや深層意識に気付

くこともあり、それが引っ張り出されて脳神経前頭前野にも映し出されたり、夢で前世も含め阿頼耶識からランダムに引き出されることが多くなって来たからであろう。従って吾輩の理解には直結しないことに驚く。

ランダムに出て来る夢の映像は、明暗・濃淡、大小・後先、有色・無色、有音・無音、様々で、大小の道や川や乗物等の移動と室内外・都市や田園、陸や海と単発が多く、ストーリーがバラバラで分からない。そこで、その時々の夢をピースとして、それらを時代・人物・場面等の共通項で関連付け纏めてジグソーパズルの断片ようにし、道筋や川筋を辿るように全体の絵を空隙は漆喰固めして、一つのストーリーを紡いでみる。そんなことが出来れば前述の新ラーニングの趣旨に沿うのではないかと考えた。人工頭脳の有利な所は目にした最小単位のピースの保存記録は均しく完璧で、ロジカルに分析・組み合わせを行う機能は持ち前だから、阿頼耶識にため込まれたものに最初からバイアスがあったり、夢に引き出される途中で何らかのねじれが入ったりしていなければ、必要最小限の材料さえそろえば各ストーリーは見えてくるだろう。連続して纏って同一ストーリーの断片・ピースが出て来るかどうかは分らない。色々なストーリー分を併行して溜めながら整理、紡織していかねばならないかもしれない。そんな考えで久しぶりにご主人への長期取り付きに戻った。

ご主人が信託の歴史物語を書くのに、タイムマシン能力を使って気付かれぬようサポートしたことがあったが、今度は気付かれぬようご主人の無意識の意識からストーリーを吾輩が考えてみたい。

つづく。

青雲の彼方（十六）

太田精一

十六、欧州の戦時下、イタリア大使として赴任

（一）耐乏生活にあえぐ欧州

昭和十四年（一九三九）十一月十四日午後七時半、イタリア大使として赴任する天羽英二を乗せた列車は、スイスとイタリアの国境を越え、ミラノに入った。夜霧の中に浮かんだ明かりが、柔らかくミラノの街を包んでいた。翌日、ミラノに一泊、列車を乗り換えローマに向かった。

ミラノを出てしばらく、濃霧の中を列車は走った。だが、ボローニャ付近で晴天となった。十六日午後二時十五分ローマについた時は、十一月半ばというのに暑さを感じるほどであった。ローマ駅には、イタリア外務省の儀典局長、日伊親善協会代表、日本人在留民代表が迎えに出ていた。

十一月二十日、英二は外務大臣チアノ伯爵を訪問した。同大臣は、英二が北京在勤当時イタリアの外交官として勤務し、英二とも親しく交際していた間柄であった。そうしたことから、懐旧談に花が咲き、現下の国際情勢についても忌憚のない意見を交換することができたのである。

次いで英二は、館員一同と共に同月二十八日に、キリナール宮殿を訪れ、国王エマニエル三世に拝謁、国書を奉呈した。国王は背が低く風采は上がらなかったが、英二は賢明な方だと受け止めている。後日英二は、皇后に拝謁したが、国王とは逆に背が高く堂々たるお方であった。かつてはモンテネグロの王女であったが、国王は自分の短所を補うため格式を無視して娶られたという。お二人の間に生まれたお子様方は、いずれも心身ともに立派な方々であった。

ローマに来てから英二の体調は優れず、下痢が続いた。水か気候の変動によるせいなのか体力も弱り執務にも差し支えるほどであった。

十二月一日、チアノ外務大臣の紹介で、ベネチアにいるムッソリーニ首相を訪問した。ムッソリーニ首相とは、チアノ外相を交えて枢軸外交、防共問題、ソ連問題、日ソ、日英関係を巡る諸問題、世界の新秩序建設、中国における汪兆銘新政権の承認などについて話し合った。

また、同首相とは、英国の対独輸出禁止問題、商船沈没などについても会談、イタリア側は、日本と英国との関係を特に気にしているように見えたが、日本に対して無理な要求を示すことはなく、会談は穏当な雰囲気のうちに終了した。

ソ連がついにフィンランドに侵攻した。十二月三日のことである。フィンランドは、よく戦っているが、ソ連は同国にいたフィンランドの共産党員を母国に帰国させ、ヘルシンキに新政府を樹立させることによってフィンランドの共産化を図っている。

英二の下痢がとまり元気を回復したのは、十二月の八日頃からである。その頃、ドイツはバルカン諸国に触手を伸ばし始めていた。中央アジアにおけるソ連の動きを盛んに報道し、バルカン諸国にソ連への警戒心を煽っている。

暮れも押し迫った十二月三十日から三十一日のことである。朝、珍しく雪が二十センチも積もった。ローマでは一八六四年以来のことだという。雪は解けずに道路は凍結して、車両事故が続出した。そんな時、日本の民間飛行機大和号がローマ近郊のアラグトリア飛行場に到着したとの連絡があった。

英二は、早速飛行場に駆け付けた。大和号の乗員は、笹川良一氏ほか八名が搭乗していて、羽織袴姿でタラップを降りてきた。早速飛行場にて歓迎会が開かれた。イタリア訪問の目的は、日伊のファシストの交流を目的としたもので、日伊間の交流の一助とはなったが、国際的にはたいして意味はなかったようである。英二は、その席で、一行から日本の政治、経済事情を聴取することができたのは、彼にとって収穫であった。

大晦日の夜中に、英二は教会の鐘を聞き、爆竹の鳴る音を聞いた。かくして昭和十四年（一九三九）は暮れ、戦火の高まる欧州の昭和十五年を英二はローマで迎えることになるのである。

明けて昭和十五年（一九四〇）、昨年来の寒さが一月初旬まで続いた。ローマは連日北風が吹き曇天が続いて寒さは厳しかった。欧州全体が寒さに閉ざされていて、戦乱の前兆を物語るようであった。

日本では、陸軍大将の阿部信行内閣が倒れた。議会の不信任がますます募り、その上新聞もこれに呼応して、

政府批判を強めた結果であろう。これは、反軍への抵抗の表れのように英二には思えた。だが、この政治的混乱は、汪兆銘の新政府成立にも大きな影響をもたらしているとの情報が在イタリア大使の英二にまで伝わってきた。（何たる不手際か。汪兆銘に国内物資を融通する企ても失敗したようだ）

英二は思わず唇を噛んだ。

重慶政府に対抗する親日的な政府が出来上がろうとしているのに、それを支えきれない日本の政府の不手際が、英二にはもどかしく、中国問題の解決の難しさを改めて痛感するのであった。

一月二十四日、英二は同月二十六日に行われるブタペストでの大公使会議に出席するためにローマを発った。二十六日ブタペストに到着、直ちに日本公使館に向かった。ブタペストは、十年ぶりの寒さで雪に埋もれていた。トルコ、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリーの各公使を中心に、ウイーン、ベルリン、ジュネーブの各日本大使館員を加えてすでに会議は始まっていた。

会議は二十七日まで続いた。

バルカン各国に関する総合判断を下すための会議で、それぞれの大公使館の代表者が、任国の参戦への態度、国力分析などを報告、それについての熱心な討議が行われ、その結果会議は一日延長となったのだ。

ブタペスト市内の河畔は、地形が広がり、古風な石造建築が立ち並び、歴史を感じさせる風光明媚な土地である。要害の地にあり人種は混血しているが、政治的安定が確保されれば東欧における有力な国家として十分繁栄する余地があり、揚子江河畔の南京に似ていると英二は思った。

ローマへの帰路、英二はチェコ経由、ドイツ周りで帰ることにした。一月三十日、列車でチェコのプラハに向かった。午後五時二分発の夜行列車に乗り、深夜の十二時半にやっとベルリンに着いた。食堂には、鶏肉があり、暖房があった。

ベルリンは、零下二十四度と暗くて寒かった。翌日の二月一日は、晴天ではあったが寒気は依然として厳しい。ホテルは、湯がぬるくて入浴もできない。食堂では、いちいち切符（食券）が必要で、果物や肉はなく、麦茶のようなコーヒーがあるだけである。ホテルでこんな調子だから、市民生活はもっと過酷ではないかと英二は思った。

二月二日、英二は、来栖大使と会談した。昼は、宇佐見公使の招待で、中華料理をご馳走になった。英二は「市内をドライブしてみたが寒さのため、人影もまばらでことに男性の数が少ないように思えた」と日記に書いている。

翌日、英二は、ベルリンを発ちミュンヘンに向かった。

汽車の車両数が極度に制限されているため、満員すし詰めの状態である。車中は暗く、窓の外は、雪が降りしきっていた。四日にはミュンヘンを発ち、インスブルグ、チロル地方を通過してイタリアに入り、ベローナ、ボローニヤを経て、ローマに着いた。ローマは暖かく、北ヨーロッパと何と異なる景色かと驚くばかりであった。

ローマに帰任後、英二は、ブタペストでの会議を踏まえて現下の情勢を考えると戦争の拡大は免れず、やがてイタリアも参戦は必至と判断した。それがいつになるか、同盟国ドイツの戦況次第で予想以上に早まることになるかもしれないと覚悟し、さらなる情報収集に当たることを決意するのであった。

英二は、三月に入るとすぐムッソリーニ首相、チアノ外相と会い、ルーズベルト大統領の密使サムエル・ウエル米国務次官補との二月二十五日のローマでの会見の模様について、イタリア側に探りを入れてみた。

「サムナー外務次官の貴国訪問は、ヨーロッパでの戦いに貴国は巻き込まれるな。と言いに来たものと思われるが、貴国としては、ドイツや我が国との関係もあり、今後どう考えているのか、できれば教えていただきたい」と英二は単刀直入に切り込んだ。すると、チアノ外相は、予想以上にざっくばらんに米国の要求内容を教えてくれた。

「ルーズベルトは、ムッソリーニ対し、もしイタリアが終始中立を維持し続けるならば、終戦後連合国は、イタリアに戦勝国同様、獅子の分け前を与えると申し出た」と漏らした。また、ルーズベルト大統領はムッソリーニ首相に会見を申し入れたが、ムッソリーニからは、色よい返事はなかったようである。

英二の鬱積した気持ちを晴らす朗報が届いた。三月八日に妻美代がナポリ港に着くという知らせである。久しぶりに妻と会う。感慨ひとしおであった。八日早朝、ナポリ港に妻を出迎えた。タラップを降りる妻の笑顔は、英二にとって何物にも代えがたい気鬱の薬となったのである。午後、自動車でナポリからローマに向かい夕方五時半頃公邸に到着した。公邸には大使館員や駐在武官を招き、妻を紹介した。

三月十日の陸軍記念日には、陸軍の駐在武官の招待で、イタリア在留民一同を大使館に招き、講演会を始め、余興、福引会などの立食パーティを開催した。この日、ドイツのリッペントロプス外相が三十二名の随行員を連れてローマを訪問世間の注目を引いた。独伊の枢軸強化のためである。

三月十二日になってソ連・フィンランド平和条約が成立、フィンランドの実質的な降伏によって欧州における独ソの地位が上がり、英仏はますます苦境に立たされて行った。翌日、英二はチアノ外相に会見を申し入れた。

英二が外相に面談を求めると、すでに米国大使が同外相と会談中で、その間にもリッペントロプスからチアノ外相に電話があり、英二はしばらく別室にて待った。

チアノ外相は、英二に待たせたことを詫び耳寄りな情報を彼に告げた。中国の新政府を独伊は承認し、使節を派遣するとのことである。英二はわが意を得たりとばかりに喜んだ。そして、入国間もない妻をチアノ夫人に引見させたいと申し出て、承諾を得た。

（二）イタリア、ついに参戦

ヒットラーとムッソリーニは、しばしば独伊国境で会っていた。英二は、チアノ外相にその都度会談の模様を聞いていた。そのうち最も重要な会談は、三月十八日の会談で、チアノ外相は「イタリアはすぐに戦争に入らないが、ドイツとはあくまでも協調する」ということであった。この頃、ヒットラーは、ムッソリーニに相当圧力を加えていたので、チアノ外相は、それが相当に不満のようであった。

ハル米国務長官より中国新政府は、不承認との声明が出され、日米関係は、ますます険悪になりつつある。そんな時、イタリアではムッソリーニ首相とチアノ外相の不仲説が流れ、チアノ外相の更迭まで取りざたされるようになった。英二にとってチアノ外相は、北京以来の長年の盟友であり、イタリアの情報を得るには同外相は最も重要な人物である。

そんな時、在伊日本大使館の三原書記官が腸チフスに罹患し、急逝した。

イタリアが初夏を迎えた四月末頃から三原書記官は、肺炎を患い休んでいたが、病状が改善せず、名医に見てもらうよう入院を勧めているうちに五月になってさらに悪化、脈拍が強くなり、腸内出血し重体となった。五月三日小康状態を得たが、四日朝急変、五日午後七時半他界した。葬儀は翌日の六日に、官邸のホールを装飾して行った。天羽大使夫妻以下大使館員に囲まれた盛大な葬儀であった。イタリア外務省代表、その他参列者が葬儀に参列、夕刻火葬された。

英二は、異国の地で散って行った三原書記官の無念を思い、悲痛な声で弔辞を読み、参列者の涙を誘った。

五月十二日、ドイツはベルギーを攻撃、本格的戦争に突入した。欧州は、全面戦争へと突入、世界大戦の様相を呈してきた。イタリアの世論も緊張を高め、反英運動が盛んに行われている。イタリアの参戦についてもあれこれ取り沙汰されるようになった。英二は、翌日夜、イタリアの外交官を招いたレセプションを行い、イタリアの態度について情報を集めた。五月十三日には、一時帰国していた在日イタリア大使が意見交換のため英二のもとを訪れている。その翌日の五月十五日には、オランダがドイツに降伏、ドイツ軍は、オランダ方面よりベルギーへ侵入、同国を席捲、セダン方面よりフランスに侵攻を開始した。こうした中、イタリア参戦説が英米仏側より盛んに飛び出ている。五月十九日には、独軍がパリまで七十キロに迫った。

そんな時、佐藤尚武大使を団長とする訪伊使節団が、訪日親善使節団の答礼としてローマに来ていた。団員の中には、小林一三、片岡安、高崎達之助、小坂善太郎がいた。使節団は、イタリア皇帝、ローマ法王、ムッソリーニ首相、チアノ外相、ムーティ・ファシスト党書記長を訪問、ファシスト政府の諸施設を見学して回った。英二は、役目柄その使節団に加わって、政府、ファシスト党の要人などとの面識ができたが、毎日宴会続きで閉口したと漏らしている。

使節団一行が、チアノ外相を訪問した時、チアノ外相は、「米国の参戦は予想していない」と言っていたが、実際にはその通りにはならなかったのである。

使節団を見送った後、英二はチアノ外相のもとに使節団歓迎のお礼に訪れ、親しく懇談した。その時に英二は、チアノ外相から「イタリアは六月にドイツ側に立って参戦する」との言質を得た。

六月になった。独軍は、ますます優勢に戦いを進め、欧州全域に戦線が拡大する勢いとなった。

英二は、「ソ連は依然として中立を保っているが、イタリアは参戦を決意したようだ。英仏に対する米国の援助はこれまで以上に大変になろう。だが、ドイツの勝利を予想して、日本が政策決定を行うことは、考えものである。今後の動きを冷静に見極めた熟慮が必要であろう」と当時の情勢を分析し、日本の参戦については慎重論を唱えている。

イタリアは、この戦いに参戦するに当たり、サヴオイ、ニース、コルシカ、チュニス、ジプチ、スエズ、ギリシャ、パレスチナ、ダルマチア、マルタを要求しているとの情報を英二は入手していた。同時にポルトガルのジブラルタルも要求しているとの報をポルトガル大使館から受け取っていた。

ダンケルクでも激戦が行われ、ドイツ空軍は英仏の逃走兵にも猛追撃をかけているようである。そうこうするうちに、パリも独軍の空襲に見舞われ、被害甚大であるとの新聞記事が出るようになった。この空襲によって、パリの在留邦人の多くが引き上げた。戦争の危険は、欧州全域に広がって行ったのである。

六月五日、独軍はとうとうダンケルクを占領した。これでベルギーでの戦闘は終結した。独軍はいよいよパリをめがけて攻勢に入った。英二は、九日チアノ外相とゴルフを行いながら、イタリア参戦について情報を得ようとした。すると同外相は「明日イタリアは英仏に向けて

戦宣布告する」との情報を英二に漏らした。この話を聞いた英二はゴルフどころではなかった。すぐに大使館に帰り、外務本省に打電し、陸海軍武官に伝えた。その夜イタリア政府の陸海軍省や外務省内は、夜通し明かりが灯り、主な役人は帰宅しなかったようである。

六月十日ついにイタリアは参戦した。

「イタリアを絞める鎖を切断せよ」とローマ市内には宣伝ビラがまかれた。ファシスト党員に導かれた諸団体の団員及び群衆が続々とベネチア広場に集まっている。ムッソリーニは、午後六時、バルコニーから英仏に対して、宣戦を布告、数万の群衆がどよめき立った。だが、そのどよめきと熱狂は、予想したほどではなかった。英二は、大使館員と共に官邸の二階から下を見ているとファシスト党員に率いられた年配の男女がとぼとぼと歩いて行く。その姿が妙に痛々しく、先の大戦の傷跡を思い起こしながら歩いているように英二には思えた。

イタリア参戦の報を聞いた訪伊使節団は、ベニスから再びローマにもどって来た。ローマを出発する時は、真昼のように明るかった駅も灯火管制のため、闇に包まれていた。

参戦の洗礼はイタリア全土で早速受けた。六月十一日には、ミラノ、トリノ及びマルタにフランス機が飛来、十四日にはローマも空襲にあった。サイレンが鳴り、高射砲で撃ち返していたが、撃墜するほどには至らなかった模様である。

ローマに空襲のあったその日、独軍はパリに入城、翌日十五日には、パリが占領され、ベルサイユも独軍の手に落ちた。フランスは十七日、ドイツに対し降伏を申し出た。ペタン将軍が首相となり、政府をパリからボルドーに移した。

六月二十六日、仏伊休戦協定が発表された。この協定は、対英戦争目的を骨子としたもので、フランスの植民地における海軍の処置を問題としたものである。

フランスがドイツに屈服した。頑強に抵抗している国は英国のみとなった。

今後の対英戦争がどうなるか、米国の参戦はあるのか、世界中が注目している。

七月は暑い日が続いた。英二は久しぶりに妻と共にオスチアに水泳に出かけた。海岸にはイタリアの婦人がほとんど半裸で寝そべっている。まるでオットセイのように英二には思えた。イタリアは参戦していたが、国内での戦いでないため、戦時下にありながらのんびりしている。軍は毎日戦況を発表しているが、戦線が広がっていて、戦果は挙がっていないようである。

フランスの降伏後ドイツは電撃作戦をもって英国を責めるというううわさが出ていたが、ヒットラーは動く気配がみられない。山荘にこもりオペラなどを鑑賞している

だけである。

松岡外相から「日本がフランス領インドシナを手に入れる場合、イタリア政府の反応を確かめ打電せよ」との指令が入った。英二は早速ムッソリーニにあって聞いてみた。その応えは「フランス領インドシナを日本がどう処分しようがイタリアは異存がない。また、フランスに対する講和条約は相当に過酷なものとなるであろう」とも言っていた。

七月十七日、日本では第二次近衛内閣が成立した。軍部の主張する日独軍事同盟に対する抵抗があったからと英二は推測していた。ところが近衛首相は組閣に当たって、松岡外相、東条陸相、吉田海相、と協議のうえ日独伊枢軸強化の方針を決めてしまったのである。英二は、早速松岡外相に対し、私見を打電した。

「三国同盟に反対する。三国間で何かする必要があるのならば、せいぜい新秩序建設に対する共同声明を出すくらいにとどめるべきである」と。

だが、近衛首相は、新体制を発表し、外務次官に大橋英一、顧問に白鳥敏夫、斎藤良衛を任命。いわゆる松岡旋風を外務省内に巻き起こし、約四十人の大公使以下の外交官を首にし、枢軸派に切り替えた。

英二も例外ではなかった。九月には、彼にも帰国命令が下ったのである。後任者には、堀切善兵衛が選ばれた。この松岡旋風は相当世界を驚かせたようである。イタリアの新聞なども「数年前のルーマニア革命政府の外交官大量首切りの上を行くもの」と書き立てていた。

イタリアからのアグレマンはまだこない。イタリア側の説明によれば、国王不在のため、のびのびとなっているとのことである。しかし、英二としては、どうせ松岡のもとでは、やっていけないことは明らかであったので(首を切られても少しも悔いはない)と思っていた。

とはいえ、日本外交の前途は心配でならなかった。

日独伊三国同盟は、各国に大きな反響をもたらした。ソ連及び米国の反応が特に注目された。英二は、ジュネーブの小林総領事に三国同盟に関する問い合わせをし、その全文を入手した。驚くべきことには、三国同盟の詳細を当事国のイタリア大使である天羽英二が知らなかったことである。

三国同盟の条文解釈では、イタリアがギリシャから攻撃を受けて戦争に突入した場合は、日本は同盟国であるイタリアを援助しなければならない。もしチアノ外相からこのような申し出があった場合、どう答えようか英二は考えていたが、幸いにしてそのような申し出はなかった。

英二は、イタリアの宣戦布告、ヒットラー・ムッソリーニ会談のような重要な外交課題について、いち早く知らせてくれたチアノ外相の好意を大変感謝していたのである。

（三）ドイツに席捲される欧州、英国徹底交戦

八月一日、英二は、独仏戦争休戦条約調印の場面をニュース映画で見た。

敗戦したフランス人の悲惨な姿が映し出されている。ヒットラーは、得意満面の様子で、パリ市内は死んだように静かであった。

八月六日にはチアノ外相に会見した。同外相は、松岡、芳沢、重光、有吉など日本の外交官の近況を英二に聞いて長い外交官生活での彼らとの交友関係を語った。さらに英二は同外相と日伊、日独関係、対英攻撃、対英和議ソ連との関係についても意見交換を行った。

話題が極東問題に触れたとき、チアノ外相は、蒋介石に対して良い感情をもっていないと英二に語っている。

八月九日、英国は、在中国駐屯部隊の撤兵を発表した。この発表は、各国に大きな反響を呼んだ。イタリアの新聞は、「英国の中国からの撤兵は英国の降伏である」と書き立てていた。

英国とドイツの空中戦は、ますます熾烈を極めている。また英国のドイツへの空襲も次第に激しくなっている模様である。

八月も半ばを過ぎ、朝夕は涼しくなってきた。大使公邸前の庭も落葉が日立つようになった。最近、ドイツは英国本土攻撃のため、ロケットを使用し始めた。イタリアへの英機の飛来も多く、ミラノ、トリノにも夜間攻撃があった。

英国は、米国の参戦を促すための交渉を頻繁に行っている。米加共同防衛委員会が英国と交渉を始めた。米国は参戦にまで至らなくても、さらに英国、ソ連、中国を支援することは明らかである。

九月三日、英仏とドイツとの戦争は、開戦後一年が経過した。英独ともにこの一年の戦果をそれぞれ都合の良いように発表している。

九月六日、英二に帰国命令が下った。後任は堀切善兵衛である。ソ連大使の東郷の後任に建川美次、ドイツ大使の来栖の後任に大島が就任するようである。

日本では、大政翼賛会が結成された。政府及び陸海軍が協力して翼賛運動を推進する構えである。政府は、挙国一致の名のもとに、国民に戦争への準備を強いているのだ。

ドイツの対英攻撃が激化、ますます都市攻撃の被害が増大している。英国もベルリン攻撃を激化し、戦争はまさに国民全体を巻き込む大戦となった。

ローマは、涼風が立ち、夜によく雨が降る。気候不順で風邪をひくものも多い。イタリア軍は、エジプト方面に進出した。

ドイツは、英国への上陸作戦を展開しようとしたが不成功に終わったようだ。

戦火は、欧州のみにとどまらず、中東、アフリカを巻き込み、太平洋にまで及び、いよいよ世界大戦の様相を呈してきた。日本は、仏領インドシナへ陸軍部隊を出兵することを決定、事態はますます戦争の道へと進み始めた。

フランス領インドシナ問題は、フランス領アフリカのセネガルのダカールに立てこもったドゴール将軍が仏領植民地問題を統括することになり、今後の交渉は、ドゴール将軍と行われることになる。

九月二十五日、ベルリンにてドイツのリッペントロプスとイタリアのチアノ両外相と来栖駐ドイツ大使が日独伊三国同盟の調印式を行った。だが、イタリア大使の英二には何も知らされていなかった。調印した本人の来栖大使も事前には何の相談もなかったのだ。まったく奇怪な話であった。

そもそもこの話は、スタンマー・ドイツ公使が東京に来て交渉を始めたのがきっかけである。チアノ、イタリア外相は、リッペントロプス、ドイツ外相のローマ訪問により、初めて知ったのである。東京のイタリア大使館も関与せず、チアノ外相は、ドイツのスタンマー公使の東京行き交渉は関知せず、スタンマーの東京行きは英二も後から知ったわけである。

三国同盟の調印式は、ベルリンでは日章旗を掲げ、賑やかであったと伝えられている。だが、イタリアでは、冷静に受け止められていた。

九月二十八日、チアノ外相に旭日勲一等桐花章を贈与することに決定したと本省からの連絡が英二のもとに届いた。それをすぐ同外相に伝えると同外相も快諾された。

九月三十日、堀切イタリア大使が正式に任命された。

十月になって、ドイツ軍はルーマニアに侵攻、バルカン諸国、ギリシャ、およびトルコもこうしたドイツの動きに重大な関心を寄せている。

英二は早速、チアノ外相に会見を申し入れた。ドイツ軍のルーマニア侵攻後、隣国ブルガリア及びギリシャ、トルコをドイツはどのように扱うか、またギリシャに対し最後通牒を出したイタリアとの今後の関係についても同外相と話し合った。

十月二十八日、朝のうちは、晴れていたが午後から雲が空を覆い雨が降ってきた。チアノ外相から突然呼び出しがあり、「明朝ヒットラー、ムッソリーニ、リッペントロプス、チアノの四者会談がイタリアで行われる」との通報があった。英二は、早速外務本省に打電した。

イタリア軍のギリシャ侵攻は、十一月になっても進展しなかった。天候や地形に不慣れな点があるもののイタリア軍の戦力には、問題があるようであった。米国ではルーズベルト大統領が再選され、引き続き英国と蒋介石政権に支援を続けることが確実視されている。

英国はギリシャに積極的な援助を行い、クレタ島は英国に占領され、コルシカ島は、いまだにイタリアが占領できず、苦戦している模様である。

一方、日本では、紀元二千六百年の式典が十一月十日行われた。在イタリア大使館でも、英二夫妻、大使館員一同、在留民一同が大使館に集合し、御真影拝賀、宮城遥拝、君が代斉唱後、イタリア大使の英二が式辞を述べ、万歳三唱後、立食パーティで祝った。

十一月十三日、英二はイタリア外務省を訪れ、チアノ外相に勲一等旭日桐花章を奉呈、挨拶を交わした。英二はその場で「日中問題の解決に関し、ドイツに斡旋を依頼することについて」のチアノ外相の考えを聞いた。

日本は、それほど日中戦争に手を焼き、外交上の選択肢が次第に狭められていたのだ。松岡外交破綻の兆しが見えてきたのである。

イタリアにおける日本友の会の主催で、十一月十六日、英二の送別会が行われた。出席者は日伊双方の会員であったがあいにくの雨が降り、雨の中を来られた来客には、大変気の毒であった。その夜、イタリア在留日本人会が英二夫妻のため送別会を開催した。前例のない宴会で英二夫妻は、強く感激したのである。次いで英二は二十二日には、イタリア国王に拝謁、おいとまごいの挨拶をした。その時、英二は国王から天皇陛下におことづけを託された。

三国軍事同盟にブルガリアが加入するところをソ連が反対、加入を阻止するため、ソ連外務省の事務総長のソボレフが、ソフィアに飛びブルガリア国王と会談、参加を妨害した。このことは、今後の独ソ関係に暗雲を投げかけた。

英二は、離任あいさつのため、チアノ外相を訪問した。別れに際し、国の外交を背負った者同士お互いに個人的立場から忌憚のない意見交換となった。するとチアノ外相は、ムッソリーニとの意見の衝突について言及、その言葉の端からファシストの支配するイタリア政府内でも、国論は必ずしも一枚岩ではなく、揺れていることを察知することができたのである。

その夜、在留民一同を招待して、大使館内でお別れの夕食会を開いた。旅行者も含め九十人ほどの夕食会となった。七時からの会であったが、食後余興などもあって、午前一時まで続いたのである。

いよいよイタリア大使の任を終え、英二は日本に帰国する日が来た。イタリアでの思い出は、数多くあったが、英二が最も印象に残っていたのは、ムッソリーニの生家を訪れたときのことである。彼の生家は、きわめて貧しい鍛冶屋あった。

生家には、彼が子供の頃、兄弟と一緒に寝ていたベッドが置いてあった。彼は戦時中、娘婿のチアノ外相と衝

突し袂を分かった。その後、双方とも悲惨な最後を遂げ、ついには敗戦となったのである。第一次大戦後イタリア共産党を破滅から救い、ファシスト時代でもかなりの有益な事績を残しているので今なおイタリア国民の中では、彼を慕うものもいるという。

十二月一日、英二は、帰国を前に妻の美代と共に、ローマ市内をドライブすることにした。

夕映えに浮かぶバチカンやコロッセウムがことに美しく、二千年の時を超え、永遠の都としての残照を留めていた。英二は、午後荷造りし、夜、雨音を聞きながら静かにローマに別れを告げた。二日午後二時、ローマ駅にてチアノ外相の代理とドイツ、チリ、トルコ、ブルガリア、シャム、日本人在留民の見送りを受け、午後二時五十分にローマを発ち、帰国の途に就いたのである。

（四）シベリア経由にて帰国

二日夜、ドイツのミュンヘンに到着した。やや遅れての到着であった。だが、翌日には、後任の堀切大使と会い事務引継ぎを行った。ミュンヘンは、薄化粧をしたようにうっすらと雪が街を覆っている。引継ぎを終えた翌朝の四日には、ミュンヘンを発ちベルリンに向かった。同日午後着いたベルリンは一段と寒く、北欧の冬に見る重苦しい空気が感じられた。

ドイツは、非常に厳しい統制下にあった。食堂では、食事券を所有していなければ、昼食も摂れないといった状況であった。五日にはベルリンの新日本大使館事務所を訪問。六日、来栖大使の招待を受け、夕食を共にした。このところ英国からの空襲はないようだ。巷ではそれを評して「寒すぎて飛行機も飛ばないのだろう」と、噂するほど厳しい寒気がベルリン上空を覆っていたのである。

七日午後、英二は、ベルリンを発ち、雪の降りしきる中を走るモスクワ行きの列車に乗り、モスクワには九日に着いた。想像していたほどモスクワは寒くなかった。宿泊先は、ソ連の誇るホテル・メトロポールである。天井が高く、時代を感じさせる重厚な造りのホテルで、客室は、駄々広い大きな部屋であった。

午後、建川大使と会談。モスクワは英二の駐在した頃に比べ服装も改善されている。車も人の往来もずいぶん多くなっていた。その後、シベリア鉄道を走る列車に七日間乗り続け満州まで旅をしたが、沿線各駅の乗降客の服装も英二のモスクワにいたころに比べ、ずいぶん改善されているようであった。車窓から眺めるシベリアの住民の生活水準も良くなっているようで、所々に工場が立ち並んだ都市が目についた。

エニセイ川を渡ったのは十二月も半ばを過ぎた頃である。東洋的な顔立ちの人々が目立つようになった。食堂車の中では、ツーリストの食券を所持していれば、優先的に座席を占有することができる。だが朝は、英国製の

ビスケットにイタリアから持参したジャムをつけて朝食に変えた。昼は食堂車を利用するのだが概して重い食事で、スープや肉が中心であった。

十二月十七日、イルクーツクに午後二時に到着、四十分停車のため、英二は外に出てみた。寒さのために顔面が、一瞬にしてこわばった。英二は、あわてて車内に駆け込んだ。冬のシベリアの寒さを実感したのである。

夜、湖畔を走る列車から眺めるバイカル湖は、月の光に照らされた波が輝き、静寂な闇の中に光っていた。列車の右側には山岳が迫り、湖面には水蒸気が立ち上っている。車中の人は皆、その神秘的な景色に見とれ夜の更けるのを忘れるほどであった。翌日はゆっくり寝て十一時頃目覚めた。すると列車は、小さな駅で停車していたので、英二は好奇心に駆られ車外に出てみた。耳まで凍るほどの寒さである。そんなところでも、いたるところに工場が建設されている。たくさんの工場労働者風のウズベク人がいた。もうここは東洋であると英二は実感したが、かつて見た牧歌的な農村風景とは異なる工場地帯が現出していたのだ。

英二はその時（ソ連は変わった。近代戦に必要な工業力をつけつつある。ノモンハンでの日本の苦戦は当然だ）と思い知らされたのである。

午後にモンゴルのチタに着いた。ソ連の国営旅行社インツーリスト職員が客に通関の手続きなどを説明した。彼らの仕事はここまでである。後はモンゴル共和国の管轄のため、職員たちはここからモスクワに引き返した。

十二月十九日、オトボルトで通関、英二たちは満州里からの列車を待った。同日午後五時、満州里行の列車が来たのでそれに乗った。木製座席の三等消毒車である。

モスクワから約百六十八時間、六千七百十キロの鉄路の上を走り続けてやっと満州里にたどり着いたのである。時差が六時間もあるのだ。一日約四十キロの平均時速であった。このシベリア鉄道の長旅で、英二はソ連の充実ぶりをひしひしと感じた。食堂車にはイクラ、魚、肉があり車内はずいぶん改善されていた。

鉄道の沿線には、工場がたくさん建設されていて、工業が興っている。

食料も豊富になって全体的に国力が充実強化されていると英二は感じた。

満州里駅頭で豊原領事の出迎えを受けた。いよいよ日本とも関係の深い満州国である。駅長の案内にて下車、駅長室で英二たちはやっとくつろぐことができたのである。実に長い旅であった。英二は、満州里では日本式の旅館に投宿、日本料理店で、久しぶりに日本料理を堪能した。加えて、浴槽にとっぷりとつかり入浴することができ、長旅の疲れを癒したのである。

満州里もシベリアと同様寒い。英二がハルビン総領事

の時来た頃とは、若干異なっているが、懐かしい思い出でいっぱいである。日本人の商店が増加し、日本軍人が目立つようになった。英二は、日本領事館を訪問後、午後満鉄の旧来型列車でハルビンに向かった。コンパートメント車両に乗ったのだが、欧州の車両に乗りなれた英二にはそれでも狭く感じられた。

十二月二十一日午後二時半ハルビンに着いた。久保田総領事、増尾副領事、中村副領事他領事館員及び横浜正金銀行支店長などが出迎えた。ハルビンは、人口五十万と発展している。出迎えた人たちとしばらく歓談の後、英二たちは午後五時新京（長春）へと向かった。新京到着は夜の十時となっていた。

翌日、梅津司令官のもとを訪れ、欧州の近況、ソ連情勢などについて、会談した。その他、在新京日本人要人との会談に臨み、現下の欧州、アジア情勢について意見交換を行っている。同日午後二時英二は、新京から大連に向かった。初めて乗る満鉄のアジア号はずいぶん改善されていて、いたって乗り心地が良い。

十二月二十六日午前十一時、大阪商船に乗船、大連港を出港。埠頭は入管の学生乗客で賑わっていた。英二は特別室に入った。大連港を出た東シナ海の波は高かった。

門司港には、暮れも押し迫った十二月二十八日に到着した。門司で学生時代の同窓生などと昼食後、午後一時に同港を出て、瀬戸内海の風光を愛で、四国、中国の灯火を眺めながら朝方淡路島を通過した。

神戸港に到着したのは朝八時であった。旅館にてしばらく休息の後、神戸から列車で東京に向かった。東京駅には夜九時に着いたが、イタリア大使、外務省職員、友人など多数の人々が駅頭に出迎えていた。

十二月三十日、すでに諸官庁は正月休みに入っていたので、英二は吉田茂、長岡隆一郎などに電話で帰朝挨拶をした。寿司、鮮魚、するめ、果物などいろいろな日本食が自宅に届けられていた。

大晦日に自宅で過ごすことができたのは、英二にとって久しぶりのことであった。日本での正月は、彼にとって何よりの休養であったのである。この日は、彼の後半生にとって心の安らぎを得ることのできた数少ない日であった。

やがて日本もあの悪夢のような戦争へと突入して行った昭和十六年を迎えることになるのである。

（つづく）

江戸庶民の「名刺」（3）

山田嘉久

○幕末の場合

前号では、江戸前期に現在の住所（下総国千葉郡東寺山村）に生まれたと仮定して、私の「名刺」を作ってみた。

その時の領主は初代「盗賊改」の旗本中山勘解由直守であるので、私の「名刺」は

①「中山勘解由直守様御知行所」

②「下総国千葉郡東寺山村」　となる。

しかし、江戸中期からは、房総最大の藩（14万石）佐倉藩に編入されたので、「名刺」の①は次のように変わる。

①「堀田正倫様御領地」

堀田正倫は下総国佐倉藩6代目（最後の）藩主。

勿論、藩都は印旛浦（現在の印旛沼）に面した水陸交通の要衝である下総国印旛郡佐倉であったが、南接の千葉村にある江戸湾の登戸、寒川の二港が佐倉藩の外港の役割を果たしていた。

佐倉藩の歴史については既に「まんじ」149号（「房総の御一新」）で書いたので重複は避けるが、この藩の最大特徴は全国延べ約500藩の中で、最も頻繁に藩主家が交代したことである。徳川時代を通じて実に12の藩主家が交代している。江戸の東を守る要衝の地として徳川一族や譜代大名の幕閣の中心人物が入れ替わり入封した。従って、老中輩出でも最多9名を数える。

因みに佐倉藩に次いで藩主家の交代の多いのは遠州掛川藩である。同藩も東海道からの侵攻を防衛する役割を課せられていた。

これは全くの余談だが、佐倉藩が出羽村山領に4万石の飛地所領を持っていたことはあまり知られていない。

そのため佐倉藩は最上川沿岸に2つの船着場があった。其処に集められた年貢米は最上川水運で酒田に運ばれ、その多くは西周りで大阪に運ばれ、佐倉藩の財政に大いに貢献していた。

このことについては佐倉藩主堀田氏が前後4代にわたって山形藩主であったことと無縁ではなかろう。

このあたりのことについて、司馬遼太郎著「街道をゆく10」（羽州街道）では直接触れてはいないが、山形の城下町時代、城の大手門付近に高級武士たちが軒を連ねた「桜町」の町名由来を推論している。著者によると「桜町」は元来「佐倉町」と呼ばれたのではなかろうか。佐倉から移住してきた「佐倉衆」が住む武家町であったというのである。

また、更に余談だが、当時の江戸庶民にとって「お伊勢参り」は最も人気のあるイベントであったが、佐倉領民に限っては「お伊勢参り」よりも「出羽三山（月山、羽黒山、湯殿山）参り」の方が盛んであった。

そのため「御師」（伊勢神宮は「おんし」、参詣のためのガイド役）は地元出羽よりも下総佐倉領に多く定住していたという。このことも出羽地方に飛地領地を持っていたことと関係があるのだろう。

（現在でもわが家近くの神社境内では夥しい数の江戸時代から現在に至る「出羽三山参詣記念碑」を見ることができる。）

さて、藩主の交代の激しい佐倉藩も18世紀半ば、堀田家が2度目の藩主として返り咲いてからは、以後、堀田家の天下が125年も続く。堀田正倫は前述の通りその6代目藩主で幕末の老中堀田正睦の4男として誕生した。

幕府に対する忠誠心は父親譲りで、慶應4年（1868）鳥羽伏見の戦いの後、徳川慶喜に対して朝廷から討伐令が下ると、上洛して慶喜の助命と徳川宗家の存続を嘆願したが、新政府から拒絶されただけでなく、自身も京都で軟禁状態にされている。

そのため藩主不在となった佐倉藩は危機を迎えたが、何とか改易は免れた。維新後は知藩事となった。

「名刺」の②に移ろう。

②「上総国埴生郡東郷村町保新田」は今の「住所表示」と同じように思われるが、江戸時代にはもっと深い意味を持っていたことは前述した。ここでは村や町といった地縁団体と身分が表示されているのである。

さて、この地は明治に埴生郡は隣の長柄郡と合併長生郡となり東郷村は昭和27年、茂原町と合併して県下9番目の市制が敷かれ茂原市となった。

また、現住所「下総国千葉郡東寺山村」は明治22年、近郊10ケ村が合併都賀村となり、更に昭和12年千葉市に

編入された。

なお、蛇足ながら千葉市は旧分国でいえば「下総」に属するが、南に位置する茂原市は「上総」である。

もとは両国ともに「総の国」とされていたが、のちに二国に分立、さらに養老年間に上総から安房が独立して房総三国が成立した。しかし、安房の成立時期（７１８年）は明確に判っているが上総、下総の成立は孝徳朝か天智朝か不明だという。現存する「常陸国風土記」によれば孝徳朝だが、現在の学会では律令制に繋がる国の成立は天智朝ころとする説が有力だそうだ。

何れにせよ「大化の改新」（６４５乙巳の変）から「白村江の戦」（６６３）にかけての時期である。

更に、上総、下総の呼称が逆ではないかとの問題がある。（現代の地理感覚からもそうであるが）

旧国名制定に当たって、時の政府は京（畿内）に近い方を上（または前）、遠い方を下（または後、奥）と区別した。その中間が中である。

上総と下総のほか上野と下野、陸前（陸中）と陸奥、越前（越中）と越後、備前（備中）と備後、豊前と豊後、筑前と筑後、肥前と肥後の類である。

上総と下総の場合、確かに現在のように江戸経由の陸路を利用すれば下総の方が京に近い。しかし当時の江戸湾奥（利根川河口）は大湿原地で、大雨ごとに河道が移動して人が定住できる地ではなかった。

そのため房総から京に上るには江戸を経由せずに、上総から船便で三浦半島（相模国）に上陸するコースが利用された。この場合は確かに、現在と逆に房総の南部（上総）が北部（下総）よりも京に近くなる。



古東海道ルート

古東海道ルートは木更津、上総国府（市原市総社）から下総国府（市川市国府台）を通り、我孫子付近から現在の霞が浦付近に広がっていた内海の香取の海を舟で対岸の常陸台地にわたり常陸国府（現石岡市）に至ったと考えられる。

因みに江戸を含む武蔵野国がそれまでの東山道から東海道に正式に編入されたのは安房成立後の宝亀２年（７７１年）とされている。

（５）その他の肩書―「家」制度

前記「私の名刺」のうち、

③「百姓　良平倅」

は所属する「家」を表示している。

重要なことは江戸時代には個人は「家」を単位として把握されていたことだ。江戸社会では、武士も農民も商人も、この「家」を単位に集団が組織されていた。

大名や旗本、御家人は「家」を単位に将軍に仕え、家臣は「家」を単位に藩主などと主従の関係を結んだ。

一方、百姓は「家」を単位に年貢を納め「宗門人別改帖」に登録させられ、その百姓の中から村の諸役を務めていた。町人の場合も同じだった。

例えば、伊能忠敬などは36歳で佐原村の名主となり39歳の時には村方後見として村政に深くかかわっていた。

また、「百姓ノ持タル国」と言われた加賀国などは15世紀の百年間、守護はいなかった。国中のことは村々の代表で決められていたためである。

当人自身が戸主であれば、③はなくて②の次は④となる。つまり戸主は「家」と個人の両方を意味することになる。

これが江戸時代の「名刺」に書かれた肩書の意味だった。

戸主は家内のものを統括し保護する義務があった。

そして、戸主の最大の務めは「家」を次の世代に確実に引き渡すことであった。武士であれ庶民であれ、江戸時代の最大の関心は「家」の維持であり、存続であったわけである。

特に宮使いである武士階級にとって「家督相続」は重要な行事であった。家督とは「主君より給される家禄を先代から相続して、その家の当主たることを主君から認知されること」であったからである。

家督を相続すると当主が家の代表となり隠居（親）や厄介親族（子、兄弟）は従属者となった。

この「家制度」は一般庶民階級でも存続したが、重要なことは階級制度がなくなった明治以降も、明治憲法下の民法で正式に規定されていたことである。

例えば、我が家の戸籍謄本をみても「戸主山田良平」の欄に「前戸主喜三郎隠居ニ因リ家督相続届出」とある。届出日付は大正５年11月10日とあるので、明治31年（１８９８）の民法制定によって全国民に制度化されたことを示している。

旧民法条文の「父ノ家ニ入ル」「家ヲ去リタル」という表現は戸籍の面からは「父の家の戸籍に入籍する」「家の戸籍から除籍された」ことを意味した。

このような「家制度」は戦後の新民法改正により廃止されるまで以後50年も続いた。

「家制度」は戦時中の「天皇の赤子論」にも通じていた

ことは注目を要する。家長である戸主と家族との関係を、天皇と国民の関係に敷衍させ「天皇が国の家長である」との考え方であった。

天皇の赤子とは天皇を親に見立て、臣民を子に見立てることから出た言葉である。このことは明治23年制定の教育勅語などを通じて、国民の間に次第に浸透していった。

たとえば、戦争中、兵役のため戦地に出征する我が実兄の歓送会の席で、町の有力者が「今まで山田家で預かっていた赤子純孝君（兄の名前）を非常時の今こそ、天皇陛下に喜んでお返しする時が来たのです」と獅子吼するのを、脇で神妙に聞いていた親父の顔を思い出す。

なお、わが父良平は婿養子であった。祖父喜三郎には3女があったが、男子がいなかったので隣村二宮本郷村の農家の次男坊であった林良平を末娘たみと縁組させ婿養子としたのである。

明治30年（1897）、房総鉄道（後に国有鉄道）「茂原駅」開設に伴い、駅前旅館として開業した我が家では男手が必要となったのであろう。

余談だが歴史家磯田道史によれば婿養子制度は日本独自の制度で中国や朝鮮ではほとんど見られないという。「祖霊は男系子孫の供物しかうけつけない」とする厳密な儒教社会からみれば、日本の婿養子制度はおよそ考えられない「乱倫」の風習だというのである。

しかし日本のみは江戸時代から武家社会のみならず一般社会でも盛んだったと磯田はその著書「武士の家計簿」に書いている。

同書の主人公も婿養子であり、統計によると主人公の属する加賀藩士の場合、養子、婿養子が後を継ぐ割合は35％に上っていたという。

それはともかく、要は江戸時代の人々は独立した裸の個人として存在するのでなく、領主支配、身分団体、そして「家」という3つの関係に包まれて存在していたことになる。

この3つの関係は義務と保護、奉仕と扶養との関係ともいえる。逆にいえば、この3つの個別的な関係から見放された場合には、生活や「いのち」の保証はされないことになるのだ。

（6）脱藩と無宿

この3つの関係から見放された（あるいは自ら見放した）代表例が武士にあっては「脱藩」であり、平民にとっては「無宿」であった。

なお、司馬遼太郎は江戸時代の武士の人口（家族を含めた人数）は総人口の約7％と書いている。このことは彼の死後、平成に入って前述の歴史家磯田道史が多くの藩を横断的に研究した結果、ほぼ正しいことを実証しているので、江戸時代の総人口を平均3千万人とすれば、そのうち武士階級は家族を含めて約2百万人となる。（例えば、明治6年現在の士族の数は、戸数にして40万8千余戸、人数にして189万2千余人となっている。）

○脱藩

その武士階級では、戦国時代では主君を変える行為は一般的に発生していたが、これについての道徳的価値の問題はなく、むしろ潔よしとさえされる気風があった。

ただ秀吉が政権を確立すると、この種の風習は支配体制を崩すものとして「主人を見限って他家に仕えようとする者に対しては決して抱えたりしてはならない」というお触れを諸大名に出した。「奉公構（ほうこうかまえ）」の制裁である。

江戸時代に入るとこの風潮は益々高まり、時には追手が放たれることもあった。これは脱藩者を通じて軍事機密やお家騒動などが表沙汰になり、藩（藩主、大名）にとって致命的な改易が頻繁に生じたことも一因であった。

しかし江戸時代中期以降、泰平の時代に入ると軍事機密の意味もなくなり、藩の慢性的な財政難もあって家臣が禄を離れることは比較的自由になった。もっともこの場合でも法的な手続きは必要であり、無断で脱藩した場合には家名は断絶、死刑にされることもあった。

幕府は脱藩者を検問するため全国要所53ケ所に関所を設けた。勿論、近世の関所はよく知られているように主な目的は「入鉄砲と出女」の検問であった。江戸防衛のために江戸に流入する武器の取り締まりと大名の奥方が人質として江戸に留め置かれたため江戸から出る女性が厳しく取り締まられたのである。

主要な関所は東海道の箱根、新居、中山道の碓井、木曽福島、甲州街道の小仏などであったが、総州（下総）では水戸佐倉道に「市川小岩関所」があった。（現在の北小岩の江戸川河川敷あたり）

此処は佐倉街道、元佐倉道、岩槻街道の集まった交通の要衝で、江戸から佐倉や成田に向かう人、反対に下総国から江戸に入ろうとする人たちが此処で手形を改められた。

慶長年間（1596～1615）に番所として設けられたが、慶安4年（1651）の由比正雪事件以後に正式な関所となったようだ。

此処では陸路の「入鉄砲と出女」と「脱藩」だけでなく、船の往来も監視された。従って江戸川を渡るには此処で名主の発行した手形や通行証明書を提示する必要があった。

通行に厳格な佐倉道にくらべ、「行徳船」を利用すれ

ば旅人改めが簡単なため庶民の間では人気があったようだ。

行徳船の起点は日本橋小網町であり、終点は下総本行徳村である。朝発てば昼頃、行徳新河岸に着く（船賃8百文）。

下船してすぐに行徳大坂屋で昼食を摂るのが庶民の楽しみだった。当時の航路安全を祈る常夜灯が現存している。

さらに簡便なのが下総矢切と葛飾柴又を結ぶ「矢切の渡し」であった。江戸川の両岸に田畑を持つ農民はその耕作のため関所の渡しを通らずに農民特権として自由に船で行き交うことができた。当時の渡航運賃は一人3文、馬5文であったという。（現在、片道200円）

なお余分なことだが、この「矢切の渡し」が世に広まったのは明治39年に発刊された伊藤佐千夫の名作「野菊の墓」の舞台となったことである。（現在、千葉県側に「文学碑」が建っている。）

更に昭和50年代の歌謡曲「矢切の渡し」や柴又を舞台にした映画「男はつらいよ」によって全国的に有名となった。成程、歌詞のような「恋の逃避行」の男女では昔の関所では通り抜けることはできなかったであろう。

また、この関所は維新時、新政府軍と江原素六（後に教育者に転じ麻布学園創設）率いる旧幕府軍が江戸川を挟んで激しい戦闘を繰り返した場所でもある。（戊辰船橋戦争）

なお、関八州の特殊な関所として幕末、横浜・吉田川の橋畔に作られた関所がある。後に吉田橋から浜の運上所（税関）までが「関内」と呼ばれる地名の由来ともなったが、この関所の主目的は攘夷家が外国人に加えるテロリズムを防ぐ関所であった。そのため通過には鑑札が必要であり、町人は入れるが帯刀者は入れなかった。

このことは「街道をゆく21」（横浜散歩）に詳しい。

さて、幕末になると、尊王攘夷運動が高揚、自由に行動するため、脱藩して江戸や京都で志を遂げようとする志士が増えた。

藩の側もこれを黙認することが多かった。

著名な脱藩者は長州藩士の吉田松陰、高杉晋作や土佐郷士の坂本龍馬、中岡慎太郎などであるが、司馬も好んで彼らを主人公とした小説を書いた。

竜馬は土佐から伊予へと脱藩したが、この道（梼原街道）は竜馬の他、大和天誅組の吉村寅太郎、蛤御門の変で戦死した那須俊平をはじめとして、那須信吾、前田繁馬、中平龍之介などなどが脱藩したので別名「脱藩の道」と呼ばれている。（「街道をゆく27」（梼原街道）

彼らは藩境を一歩脱すると、平等への希求のあらわれとして、必ず「これからは、オラ、オ前でいこう」と申し合わせたことは有名な話である。

今日、竜馬ファンにとっては最も人気のある「聖地」とさえなっている。

ただ、そのうち吉田松陰の脱藩理由は他の者と多少異なる。彼は友人である肥後人宮部鼎三と東北旅行を約束していたが期日が来ても藩の許可が下りなかったため脱藩した。武士にとって脱藩は主君を見限るという意味で最も重い罪科で当然切腹ものだが、彼は友人との約束を優先したのである。このあたり悲壮感よりも彼一流の楽天主義を感じる。

さらに浮世離れを感じるのは、判決を降すべき藩主毛利敬親の態度である。当然、松陰の士籍を削り実家の杉家に身柄を預けたまではよかったが、死罪を言い渡すどころか、「諸国遊歴をしたいとの願いを出せ」と内意をもらし放免していることである。

藩主をはじめ為政者たちは、始終、松陰に甘かったと司馬は書いている。（「街道をゆく26」仙台・石巻）

元来、脱藩者に甘い長州藩であったので、高杉晋作のように脱藩の常習犯もおり、その脱藩回数は5回とも10回ともいわれた。

ただし、前述の通り当時、「藩」という呼称はなかったから当然、「脱藩」という言葉もなかった。これも明治以降の言葉である。

当時は「国抜け」とでも言ったのだろうか。因みに司馬はその著「竜馬がゆく」では「脱藩」に（くにぬけ）とルビをふっている。

また、幕府は脱藩浪士を「浮浪」とも呼んだ。

○牢人（浪人）

「脱藩」ほど積極的でないが、古代から戸籍（故郷）を離れて他国を浮浪する者は数多く行き交うていた。彼らは「牢人」と呼ばれたが、江戸時代に入り「改易」（幕府の大名廃絶政策）などで急増した。

戦国時代の斉藤道三や藤堂高虎、江戸初期の宮本武蔵などが「牢人」の代表であろう。高虎は「武士たるもの七度主を替えねば武士と云えぬ」といったそうだが、事実、その生涯に10の主家に仕えたといわれる。

この頃には「牢人」は「浪人」と呼ばれるようになった。3代将軍徳川家光の晩年にはその数50万人に達したという。

江戸時代の浪人は士籍（武士としての身分）は失っていたが苗字帯刀は許されており、武士としては認知されていた。しかしその日常生活は町人と同じく町奉行の支配下に置かれていた。その多くは貧困で借家住まい、その日暮らしの生活を余儀なくされ、中には強盗などの犯

罪に走る者も少なくなかった。

○無宿

追放刑は武士、庶民を問わずに行われ、武士は「浪人」、庶民は「無宿」とされた。それにいずれも連座制であった。

武士だけでなく、町人であっても累は親兄弟に及んだ。そのため農村などで息子が犯罪を起こしかねない不良少年であったりすると、これを恐れた親兄弟は相談して、前述の「宗門人別改帳」（現在の戸籍台帳）から抜いてしまうことがよく起こった。

いわゆる「無宿者」であり「帳外（ちょうはずれ）」とも呼ばれた。無宿となった者は農村では暮らせないので、自然、人口の密集した江戸に集まってくる。特に本所、深川に流入した。

これらの無宿人を一括して佐渡に送り金山発掘作業に従事させたのが、当時の幕府の政策だったと司馬は「街道をゆく10」（佐渡のみち）に書いている。

佐渡に送られた無宿人は過酷な労働環境のため、大体3年前後で病死したという。

司馬は云う。〈いまのやくざでも戸籍をもっている。（略）ともかくも一人の人間を無宿にしてしまうという行為が親兄弟によってなされたというところに江戸時代の法の凄さがある。〉

司馬によれば、長い日本史の中で権力者による集団的な強制労働は殆どみられないが、唯一の例外が江戸末期の佐渡金山史だと書いている。またこれに近いものとして明治政権による北海道開拓における囚人奴隷労働を挙げている。（「街道をゆく15」（北海道の諸道）

また、江戸時代以前から多発していた「逃散（ちょうさん）」、（村の住民が集団で荘園などから一時的に他の土地に逃げ込み、領主に対して年貢軽減や代官の罷免などを要求する）も江戸時代に入っても散見された。

逃散した百姓たちは江戸に出て、安い賃金でその日暮らしをする者が多かった。

（続く）

柿本人麻呂④

横山正義

一、万葉集の攻撃的事件

天武十五年（686）

天武天皇の妃鵜野讃良皇后は天武天皇の死後、葬儀を出し、自分の長子草壁皇子を天皇に任命しませんでした。二十八歳で死亡したので、これは病弱であったからと想像されます。

男らしく勇ましく、武道に勝れ、文才があり、紅顔の美少年、天皇にふさわしいと評判の高い姉大田皇女の子天津皇子を皇后鵜野讃良皇后は策略で罪に落とし入れ、殺害してしまいました。これには多くの批判が集まり、草壁皇子の早死は天津皇子の祟りだと噂されました。

のちの世、静岡新聞夕刊二〇一一・三・九の記事。私見ですが攻撃的認知症に該当するのではないだろうか。

持統天皇系図



二、宮廷歌人柿本人麻呂と持統天皇との関係

宮廷歌人柿本人麻呂は持統天皇、草壁皇子、軽皇子等の歌を作っています。

＊万葉集四五

軽皇子（かるのみこ草壁皇子の児）の安騎（あき）の野に宿りし時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌

やすみしし　わが大君　高照らす　日の皇子（みこ）

神（かむ）ながら神（かむ）さびせすと　太敷（ふとし）かす　京（みやこ）を置きて　こもりくの　泊瀬（はつせ）の山は　真木（まき）立つ　荒き山道（やまじ）を　岩（いは）が根　禁樹（さへき）押しなべ　坂鳥（さかどり）の　朝（あさ）越えまして　玉かぎる　夕（ゆふ）さり来ればみ雪降る　安騎（あき）の大野（おほの）に　はたすすき　小竹（しの）を押しなべ　草枕（くさまくら）　旅宿（たびやど）りせす　古（いにしへ）思（おも）ひて

訳、（やすみしし）我が大君、（高照らす）日の神の皇子は、神の御心のままに神らしく振る舞われるべく、立派に治めて居られる都を後にして、（こもりくの）泊瀬の山は、高い真木が茂り立つ荒々しい山道だが、根を張ったような岩や邪魔になる木々を押しなびかせ、（坂鳥の）朝早く越えてゆかれて、〈玉かぎる〉夕方になると、雪の降る安騎の大野に、すすきや小竹を押し伏せ、〈草枕〉旅の宿りをなさる、往時をお思いになって。

解説、軽皇子の遊猟に従った人麿呂が、父草壁皇子を追懐する皇子の心中を詠んだ。軽皇子は後の文武天皇。

＊万葉集四六

阿騎（あき）の野に宿（やど）る旅人（たびびと）うちなびき眠（い）も寝らめやも古（いにしへ）思（おも）ふに

訳、阿騎の野に仮寝する旅人は、くつろいで眠ることができようか、往時を思うと。

＊万葉集四七

ま草（くさ）刈る荒野（あらの）にはあれど黄葉（もみじば）の過ぎにし君が形見（かたみ）とそ来（こ）し

訳、（ま草刈る）荒野ではあるが（黄葉の）今は亡き皇子の形見の地として来た。

＊万葉集四八

東（ひがし）の野らにけぶりの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ

訳、東の野に煙の立つのが見えて、振り返って見ると月は西に傾いてしまった。

＊万葉集四九

日並（ひなみし）の皇子（みこ）の尊（みこと）の馬並（な）めてみ狩立（かりた）たしし時は来向（きむ）かふ

訳、日並の皇子の尊（草壁の皇子）が馬を並べて狩りを催された、その時刻は今まさにやってきた。

十月二日鵜野讃良皇后は大津皇子を処刑で殺害してしまいました。そして皇后は四年後、持統天皇となりました。草壁皇子は天皇になることなく二十八歳で死亡してしまったので、鵜野讃良皇后の姉大田皇女（天知天皇の皇女）の児大津皇子の祟りだと批判されました。

三、日並皇子の歌（草壁皇子）

注・日並の皇子は草壁皇子の事でこの句のみ。

＊万葉集（一一〇）日並皇子尊（ひなみのみこのみこと）

の、石川女郎（いしかわのいらつめ）に賜ひし御歌一首。女郎宇を大名児という：

大名児（おおなこ）を彼方（をちかた）野辺（のへ）に刈（か）る草（かや）の束（つか）の間（あひだ）もわれ忘れめや

訳、大名児を、向こうの野原に刈る草の一束（ひとつか）の間も、私は忘れることがあろうか。

四、天武天皇の崩じた際の鵜野讃良皇后陛下の歌

＊万葉集（一五九）天皇の崩じたまいし時に、大后（だいごう）の御作（つく）りたまひし歌一首

やすみしし　我（わ）が大君（おおきみ）の夕（ゆふ）されば見（め）したまふらし明け来れば問（と）ひたまふらし神岳（かみおか）の山の黄葉（もみじ）を今日（けふ）もかも問ひたまはまし明日（あす）もかも見（み）したまはましその山を振り放（さ）け見つつ夕（ゆふ）さればあやに哀（かな）しみ明け来ればうらさび暮らしあらたへの衣（ころも）の袖（そで）は乾（ふ）る時もなし

訳、（やすみしし）我が大君が、夕方になるとご覧に成っているに違いない、夜が明けるとお訪ねになっているに違いない、あの神岳の山のもみじを、今日にでもお訪ねになろうものを、明日にでもご覧になろうものを、その山をはるかに見ながら、夕方になるとどうしようもなく悲しくなり、夜が明けると淋しく日を暮し、藤衣の喪服の袖は乾く間もない。

五、大津皇子の殺害された時の辞世の歌

＊万葉集（四一六）

大津皇子の、死（ころ）され時に、磐余（いはれ）の池の堤（つつみ）流提して御作（つく）りたまひし歌一首

ももづたふ磐余（いはれ）の池に鳴く鴨（かも）を今日（けふ）のみ見てや雲隠（くもがく）りなむ

訳（ももづたふ）磐余の池に鳴いている鴨を、今日を限りに見て、私は死んでいくのか。

天武十五（六八六）年五月天武天皇はにわかに発熱し、七月には執政から退き、皇后鵜野讃良皇后と皇太子草壁皇子に政務をまかせました。天武天皇は九月七日崩御されました。持統三年（六八九）四・十三草壁皇子は亡くなりました。

皇后鵜野讃良の姉の児大津皇子は天皇にふさわしいと評判でした。皇后にとって大津皇子が邪魔な存在でしたので、罪を被せ殺害してしまいました。

大津皇子の罪状。九月二十四日謀反を企てる。十月二日謀反の嫌疑によって逮捕され、翌日三日訳語田（おさだ）の家で死を賜りました。大津皇子二十四歳でした。

鵜野讃良皇后は天皇に即位しないまま三年四ヶ月、天皇の政務を勤め、その後、皇后は四十二歳となり、正式に持統天皇となりました。この時、孫、軽皇子八歳でした。

持統三年（六八九）四・十三草壁皇子は亡くなりました。
持統四年（六九〇）一・一皇后即位（持統天皇）
持統天皇は十一年務めた後、孫・軽皇子に天皇の位を譲り、軽皇子は文武天皇となりました。
後の世に、晩年の攻撃性について、研究が発表されました。

六、晩年の攻撃的認知症について論文

静岡新聞夕刊二〇一一・三・九・三面
認知症。患者の「攻撃性」手に触れ軽減。
浜松医大　鈴木教授
臨床研究初の実証
浜松医科大地域看護学講座の鈴木みずえ教授（51）は、患者の手に優しく触れてストレスや不安を緩和する「タクティールケア」を6週間続けることで、認知症特融の症状の「攻撃性」が軽減されたという研究結果をまとめ、米国のアルツハイマー専門学術雑誌で発表した。
認知ケア教育を進める
日本スウエーデン福祉研究所によると、タクティールケアの効果を臨床研究で明らかにしたのは全国で初。
タクティールケアは、ラテン語の「タクティリス（触れる）」に由来する。福祉大国の瑞典で古くから用いられている認知症予防、ストレス解消などの手法で、鈴木教授によると「マッサージとタッチの中間ぐらいの力で、患者の手足の上を優しく滑らせたり、円を描いたりするイメージ」。日本でも数年前から全国の福祉施設が導入しているほか、がんの終末期患者の不安解消への応用も検討されているという。
鈴木教授は、浜松西区の和恵会記念病院の協力で調査を始め、重度認知症の高齢者四十人を、年齢、性別、症状の度合いなどに応じて二十人ずつに分類。
一方のグループに一回二十分のタクティールケアではなく通常の音楽療法などを施した。
調査の開始前と終了後に高齢者への認知症検査と介護者を対象にしたアンケートを行い、データを比較した。その結果、ケアを施さなかったグループは攻撃性を示す数値がほぼ変わらずに推移したのに対し、施したグループは半数以下に軽減されていた。知的機能、感情機能についても非ケア群は大幅に悪化した一方、ケア群はほぼ変わらずに維持された。
鈴木教授は「タクティールケアは肌が触れ合う患者と介護者の「コミュニケーション。互いの信頼関係や患者が感じる心地よさが攻撃性の軽減に繋がった。」と分析し、「介護者の負担軽減にもなりメリットは多い。今後も取り入れる施設はふえるのではないか」と語った。

七、攻撃的認知証に対する対処法

認知症による暴力・暴言の原因と対応
認知症が進むと、暴言を吐たり、暴れたり物を壊すなどの暴力がみられることがあります。
一、暴力・暴言が出る原因
脳の機能低下で感情が抑えられない。
認知症のタイプによって違いも
二、どんな時に暴言・暴力が現れやすいか
否定されたり自尊心が傷ついた場合
不安を感じた場合
三、暴力・暴言が出た時には
認知症の症状であることを理解し、原因をさぐる
距離を置く
四、予防や改善のためにできること
関わりを考える
体調が悪くないかチェックする
医師に相談する

『参考文献』

柿本人麻呂　多田一臣　発行所　吉川弘文館
万葉集①佐竹昭広　山田英雄　工藤力男　大谷雅夫
山崎福之　岩浪書店
静岡新聞夕刊　二〇一一・三・九・三面

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い
私達は広く同人の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。
☆維持会会員へのお誘い
本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。
郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

続　万機公論に決すべし

浅野博文

一、天壌無窮の神勅

夏目漱石と森鴎外と言えば、一般的に明治を代表する文豪として周知されているが、一方で、両者とも初期の東京大学で外国人教師に学び、西洋に留学した経験をもつ知識人としても有名である。加えて、デモクラシー・ヒューマニズム・キリスト教的人間観・自然科学的世界像・科学技術文明などのヨーロッパの近代思想に触れる中で、日本人と西洋人の思考の相違に苦悩した事でも共通している。殊に、西洋の学問（西洋人的思考）とは対象への懐疑を伴うが、それは人間関係に於いても同様で、個性を殺して全体に合わせるのではなく、互いを疑い、どこまでも個人を単位として競い合う姿に、日本の歴史から離れられず、日本人である事から抜けられない自己を再認識したのであった。

それは、科学及び技術と提携したデモクラシーやヒューマニズムと対峙した両者にとって、一種の信仰と言えるものであった。加えて、その信仰の世界にある者にとって、信仰者自身が正しいと信じる道の理解とは、実際のところ合理の次元を超えたものであり、これを信仰者自身が、自然科学の様な厳密さを以て説明するのは容易な事ではなかった。その事について、日本の本居宣長に相当する人物で、伝承の童話の収集者・編纂者で有名なヤコプ・グリム（独 Jacob Gurim 1785～1863）も、文学や歴史、哲学の様な学問を「ウンゲナウな学問（ungenaue Wissen-schaft）」であると言っている。ゲナウとは厳密という意味であり、その様にすれば、精神生活の最も微妙な、最も価値あるものが失われて、定義の残滓と化する危険性を指摘している。仮に定義付けて、日本の文化

的天皇祭儀や神事が皇室を中心として太古から生き続けて居り、その特質が日本人の特徴と言われるものに現代でも密接に関連しているという説明をしたとしても、その善意は了解できるが、それが正しい事の証明になるという訳ではないのである。ここに、人間の心や思想を探究する独特の難しさがある様に思う。

漱石や鴎外の作品の中には、それらを認識しつつ、日本人と西洋人の思考を対比させ、その答えを求めようと試みたものがある。例えば、漱石の『吾輩は猫である』には、西洋的な個人主義を支持しながら、無批判な西洋崇拝者に対しては皮肉の矢を放ち、「西洋人よりも昔の日本人が余程えらいと思ふ」という人物を登場させている。また、『それから』でも西洋的な生存競争にふさわしくない日本人の姿を描いている。一方で鴎外も、ドイツ留学時代の体験を小説にした『妄想』で、自分と西洋人の死に対する態度を比較し、「西洋人は死を恐れないのは野蛮人の性質だといっている」が、それに納得できない自分を見出し、『かのやうに』の中では、西洋人の様に全てのものに疑いの目を向ける自分と、代々庭訓としてきた、天皇を中心とする日本人の伝統との矛盾に悩んだ姿を書いている。

それらは全て、自らが正しいと信じる道を証明するための試みであったが、結局の所、彼我の相違を明らかにし、相手の考えを批判するに止まったのである。それよりも、真個の自分の精神、自分の大和魂を確立する事が最も重要であり、漱石や鴎外にとってそれが、遠く神代の昔に連なる「明治の精神」であった様に思うのである。漱石晩年の小説『こころ』には、「私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました」と書かれ、鴎外もまた、明治天皇の御大葬の日（明治四十五年九月十三日）、乃木大将の殉死を知り、憑かれた様に筆をとって『興津弥五右衛門の遺書』を草し、十八日の将軍の葬儀の日に中央公論に送った。この一篇を霊前に捧げる意味であったとされている。

近代日本に於ける実証主義史学の発展に影響を与えた、ドイツの歴史学者ランケ（Leopold von Ranke 1795～1886）が、「国を支える力はその国民の道徳エネルギーだ」と言った様に、道義・道徳を実践した人々を顕彰し、天皇御自ら「天下億兆一人も其所を得ざる時は皆朕が罪」と理想を述べられ、帝国主義の世界にあって唯一人、東亜解放に邁進したのが明治国家であった。事実、日露戦争の勝利が、世界中の抑圧された民族に、独立への限りない希望を与えたのは周知である。しかし、明治以降は個人主義やロシア革命などの影響を受け、利己心のため保身のために、自説を曲げ、国家の不利益になる事でも平然と行う事により、その精神が衰微したのは、大正年間の内閣の短命で、数を数えて十三、政界の落ち着かなかった事からも理解できる。漱石が理想とした有名な

「則天去私」とは、エゴイズムを捨て天地自然の法則や普遍的な妥当性に従うという事であり、軍医として立身出世を果たした鴎外もまた、石見人・森林太郎として葬られる事を遺言した。一切の栄誉や称号を排し、「森林太郎ノ墓」とのみ刻まれた墓石には、自らの「大和魂」が圧縮されている様に思えてならない。

振り返ってみて私自身も、日本の歴史から離れられず、日本人である事から抜けられない存在であり、それは私の生まれ育ちとも深く関係している。これを否定できない以上、進化論の説く万物の誕生起源など人生に於いて無意味であった。それは自尊心の問題なのである。個人も国家もそれが失われた時、その命運は必ず窮るからである。北畠親房の『神皇正統記』の後醍醐天皇の条にも、「世の中のおとろふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらじ。人の心の悪しくなりゆくを、末世とはいへるにや。」とある。自分の大和魂を確立する事が、一切の思想と対決しても屈せずに生きる唯一の道であると確信する理由がここにある。

したがって、そうであるならば第一に、我が国最古の古典として八世紀に成立した『古事記』『日本書紀』は、必ず読まなければならないであろう。何故なら両書は、皇統及び国家の由来を語るものであり、記紀が伝承する神話には、日本民族の世界観と人生観、その知性と徳性とが表れており、皇室が天照大神の御血脈である由来を神聖なものとしているからである。そして注意すべきは、深刻な人生の経験も無ければ、相当な思想的教養があるとも言えない私が、それを読む際には、その心底、「つつしみ」と「うやまい」の意識でなければならない点である。そうでなければ、いくら通読した所で、その本質を正しく理解する事は難しいに違いない。

実際、それらの点を記紀は、最も権威ある形で、また敬虔な態度で伝えた事によって、中世には神書と称せられ、近世になると神典とも呼ばれ、明治の王政復古へと日本人を導いたとされている。「廃れつつ古書(ふるふみ)どもも動きいでて御代あらためつ時のゆければ」と詠んだ幕末の国学者・橘曙覧の歌からは、幕府の天下が大きく揺らいで天地一新した背後には、古典（記紀）の力が働いているという確信が伺える。それもまた一種の信仰として、その時代の王事に奔走した志士達も同様に共有していた事は疑いない。いずれにせよ、その後の明治国家が「富国強兵」を目標に、名実共に国際場裡に大きく雄飛する姿からも、その様な信仰が、内外の危機を克服する上での大きな原動力となったのは確かな事と思える。

『古事記』をまとめた太安万侶の伝える所では、天武天皇が詔に於いて、記紀以前に朝廷に存在したとされる『帝紀』・『旧辞』の内容を非常に重んじて「邦家之経緯、

王化之鴻基」であると仰せられている。今日伝承される記紀も、この精神を継承して撰修せられたと言ってよいであろう。その事は、『古事記』の序に於いて太安万侶が、そこに『古事記』の淵源が存すると敬虔に考えていたし、国家の正史である『日本書紀』も、完成奏上の翌養老五年（七二一）より始めて平安中期まで、約二百五十年間に七度にわたって、朝廷に於ける講書が行われており、それを裏付けている。更に付言すべきは、旧来の伝統の民俗的信仰に反抗して、新たに説かれた福音である仏教の経典やキリスト教の聖書とは、その成立の事由を異としている点は見逃せない。

但し、聖書は今日の我が国の記紀とは異なり、科学文明全盛の現代に在っても、グローバルスタンダードを牽引する米国人のバイブルとされている。そもそも、聖書には旧約聖書と新約聖書（Old Testament・New Testament）があり、その約（Testament）の意味とは、神と人との間の約束である。基本的に聖書はそれを説いたものであるが、聖書そのものが特定の人物の書いたものではなく、その原典も不明であり、キリスト紀元（西暦）ですらも実際の所はっきりしない。しかし、米国人の大義名分は今日も聖書にあるのは確かだ。それは、十七世紀に本国であった英国から疎外され、メイフラワー号に乗って来たピューリタン（清教徒）により建てられた人工国家だからである。嘗て母国とした、自然国家の有する歴史や伝統に対する羨望や寂寥を、拭い去る事が出来ないからに違いない。特に、大統領の就任式には、聖書を拠り所として来た米国人の神に対する祈りの強さが、象徴的に表れている様に思える。

今日も米国は、大統領就任に際して左手を聖書に置き、神に宣誓する伝統を堅守する。その姿には、どこまでも自らの歴史や文化を尊重する米国人の自覚と、聖書の世界観を身命を賭して体現するという決意が見て取れ、その偉容は異邦人の心にも一種の感動を覚えしめる。それは、彼らの祈りが期待を本質としていないからかもしれない。神に感謝し、誓い、決意する態度は、建国時から今日までの苦難の歴史や、人種の坩堝と称される国が伝統として来たフロンティアスピリットが影響しているのであろう。そして、一旦祖国に緩急あれば、米国人としての自覚が、孤立的・絶望的な実在の意識から脱却せしめ、一つの目標に向かって国全体を突き動かす。今日のグローバル化はアメリカナイズと同義となり、様々な問題を提起しながらも、バイブルは奇しき原動力であると共に、求心力となって生きている様に思う。

翻って、日本人にとっての記紀も既述した様に本来はそうであった。第二次世界大戦で勝利した米国が、日本に対し最も恐怖を覚えたのは、皇室に対する尊崇の念で

あった。記紀神話に記される天照大御神は、自分たちと契約関係にある神と違い、国民と血の繋がりがある神である。万世一系と称せられる天皇陛下の御血統とは、天照大御神の直系であり、その分家である国民の家系は遡れば必ず皇室に連なる。それが挙国一致の原動力であり、世界の覇権を掌握する上で、後の憂いとなる事を恐れたのである。故に、その占領政策は、皇室と国民を切り離す事を柱に周到に行われた。戦後日本は、「権利と義務」や「責任と自由」に無知で無理解な、うわべだけのアメリカンデモクラシーを奉る国となって進むべき道を見失い、既に少子高齢社会は現出している。加えて、世界の現状は、富の偏在や環境問題など人間破壊の危機として露呈し、それが主として創造と破壊のバイブルの世界観により強力に推し進められ、限界に近づいている。

その意味に於いて、我が国の記紀神話に記される天壌無窮の神勅こそ、現代の福音と呼ぶに相応しいのではないであろうか。天孫降臨のくだり、天照大御神の御孫として神勅を賜った瓊瓊杵尊のニニギとは、穂のよく稔る意味の語として考えられ、米の力をいただき給うに相応しい御名である（故に古来より日本は豊葦原瑞穂国と美称される）。即ち、皇室の御先祖とは、衣食住の源である穀霊的なものと、その生産の主体である祖霊的なものが倫理的に一体となり、宗廟と称される伊勢の神宮は、内宮には天照大神（祖霊神）・外宮には豊受大神（穀霊神）が鎮座し、人間と自然が対立関係にあるのではなく、二所大神宮として二十年に一度の式年遷宮は今日も執り行われている。また、天皇の即位の際の大嘗祭は、御一代初の新嘗祭であり、天皇が初めて新穀を聞こし召す事により、皇祖天照大神の霊威を身に体されて、大神と一体となられている。その様に観て来ると、世界で唯一、革命なき継承発展の歴史を実現してきた代々の日本人が、天壌無窮の神勅の意義を重んじ、信仰して来た意味がよく理解できるのではなかろうか。

> 天壌無窮の神勅『日本書紀』（原漢文）
> （天照大神）皇孫に勅して曰く、葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行ませ。宝祚（天皇の位）の隆えまさんこと。当に天壌と與に窮り無かるべし。

日本人として、神勅の意義を深く理解し、体現した人物の一人として、江戸時代を代表する国学者であった本居宣長翁を想起する。翁は代々医業を生業とする家に生まれ、医者として往診が主流であった当時、薬を満載すれば約五キロにもなった箱を片手に最大四十キロの距離を歩いて家族を養ったという。宣長の遺した歌に、「家の業　なおこたりそね　みやびをの　書はよむとも　歌はよむとも」とある様に、家業を重んずる考えが根本にあった。仕事をしないと生活が立たぬ。生活が立たねば、学問も続けられないという事である。そして、医業という確固たる土台に支えられた古典研究は、「ひたすら天皇の大御心を心として一家の祖霊を守りつつ、生業に勤しむ事が、代々受け継がれて来た日本の道である」（『直毘霊』）として、人倫の本来あるべき姿を明らかにし、その当然の帰結として、前のものと後のものと何等の関係性をもたない革命を否定した。また、食物に対する信仰心が篤く、伊勢大神宮に感謝すると共に仏教徒（浄土宗）でもあった。それは、自分の思想とは別に、熱心な仏教徒であった祖先の心を大切に思い、仏壇を拝んでいたとの事であった。後に、本居宣長の旧宅（鈴屋）を御見学された（昭和十二年六月七日）大正天皇皇后が、仏壇を前にしてその説明を聴かれて「それが孝行なのです」とおっしゃられた。『皇太后陛下行啓記』はその事を記している。



薬箱　三重県松阪市本居宣長記念館蔵

二、神武天皇建国

> 日本書紀（原漢文）
> 神武天皇即位前紀（己未年）三月丁卯、令を下して曰く（中略）それ大人の制を立つるは、義必ず時に随ふ。いやしくも民に利あらば、何ぞ聖の造に坊はむ（中略）上は乾霊の国を授けたまひし徳に答へ、下は皇孫の正しきを養ひたまひし心を弘めむ。しかして後、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇とせむこと亦よからずや

我が国の建国事業は、神勅を下賜せられ、高天原より九州日向の高千穂の峰に降り立った瓊瓊杵尊より、彦火火出見尊―鸕鷀草葺不合尊―神日本磐余彦尊（神武天皇）に至り完成する。記紀によれば、当初は北九州から南九州一帯に勢力を伸ばされたが、国家統治の最適地を更に東方の本州に求められた。先祖による東征は、悲運と逆境の中で何度も試みられたが、その心が挫かれ、その勇気が奪われる事は遂になかった。神日本磐余彦尊は、大和（奈良）に拠点を定められ、畝傍山のふもと橿原の地に宮殿を造り、初めて天皇の御位に即かれた。天皇は御即位に先立ち、建国の理想を「八紘一宇」の言葉を以

を研究するも、その道を登り極める時は、世を救い世を益するの他に道のありようはない。もしあるというなら、それは邪道であろう。正道は必ず世を益するの一つだ」とある。事実、日本歴史の特色とは、温故知新・復古と革新の「くりかえし」であり、その転換期（大化改新・建武中興・明治維新）には必ず建国の精神に回帰し、誓いを立て、そして国威は向上した。神武天皇建国という、血の繋がりのある足跡が、国家を利益し、世を救ってきたのである。

神武天皇建国の事実を裏付ける有力な根拠の一つとして、国宝指定を受けている埼玉県稲荷山古墳（造営年代五世紀後半）より出土した鉄刀銘（漢文）が挙げられよう。ここでは、「建国記念の日」の制定に尽力した田中卓博士の論考に基づいて記述する。即ち、その内容は父子一系の系図である。辛亥の年（四七一年）を製作年代とする時期が第二十一代・雄略天皇（ワカタケル大王）の御代である事は、四八七年に編まれたシナの『宋書』列伝第五十七夷蛮に雄略天皇（倭王武）の外交文書が載せられている点からも周知である。そして銘文には、刀を作らせた「予獲居臣・ヲワケノオミ」という人から「上祖名意富比垝・とほつおや名はオホヒコ」に至る八代の系譜が、一貫してヤマト朝廷に仕えてきたという矜持と共に、きわめて明確な形で叙述されている。特に、「上祖」という語は先祖の意であり『日本書紀』でも散見され、「意富比垝」は、記紀にみえるオホヒコノミコト（記・大毘古命、紀・大彦命）に当たるとされる。加えて、この人物は、第十代・崇神天皇の御代に四道将軍の一人として北陸に派遣されており、第八代・孝元天皇の皇子で第九代・開化天皇の御兄とされる。

ここで、この様な父子一系系図で注意すべき事は、それが必ずしも長子相続や末子相続に限られたものではない、という事である。たまたま自分の代にまで伝わってきた祖先の系譜であるから、ある時は長男、ある時は三男、ある時は五男というふうに、色々の継嗣関係があったはずである。そこで、むかしから一世代を平均して三十年とする。もともと「世」という字は、卅（三十）と同じなのである。しかし、日本の古代に於いて、この〈一世代＝三十年〉の原則が通用するかどうか、念のために皇統譜で確かめる必要がある。それには、あまり古い時代では紀年に問題があるので、一例として継体天皇から桓武天皇までの世代をとると次のようになる。

（26）継体――（29）欽明――（30）敏達――○
（34）舒明――（38）天智――（41）持統
（49）光仁――（50）桓武

（26）継体――（29）欽明――（30）敏達――○
（34）舒明――（40）天武――○
（42）文武――（45）聖武――（46）孝謙　[図]

『日本書紀』によると、継体天皇の元年は五〇七年、『続日本紀』によると、桓武天皇の元年は七八一年、孝謙天皇の元年は七四九年である。そこで、【A】・【B】の一世代を別々に計算すると、次の通りになる。

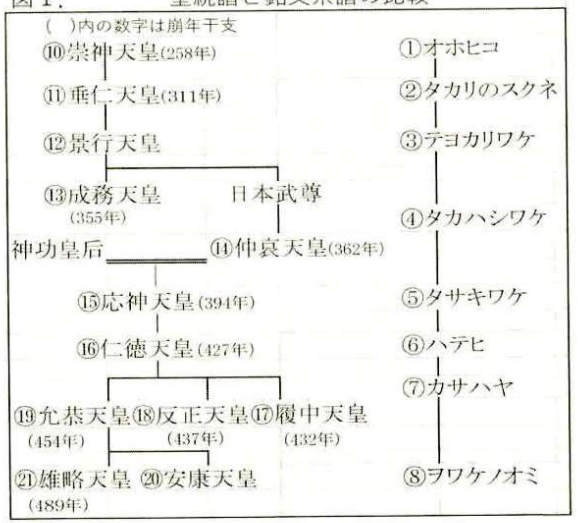
【A】（781年－507年）÷8＝34.25
【B】（749年－507年）÷9＝26.888

この平均をとると30.57となり丁度〈一世代＝三十年〉に近くなる。これだけの予備知識をもって、ヲワケノオミから八代をさかのぼるとどうなるか。刀銘の「辛亥の年」は四七一年であるとして、それがヲワケノオミ何歳の時であるかが分からない。二十歳である場合と五十歳である場合とでは、それだけで一世代の差が生じる。そこでこの際はやむを得ないので、幅をもたせて、次の様に換算する。

471年－〈30年×7～8代〉＝〈231～261〉年

つまり、上祖のオホヒコの活躍した時代は、計算上、二三〇年代から二六〇年ころになるわけであり、丁度、崇神天皇の時代に当てはまる事となる。それは、古事記と住吉大社神代記にみえる崩年干支の「戊寅」二五八年とも重なる。以上、皇統譜と銘文系譜を図示すると以下の通りになる。

図1．　皇統譜と銘文系譜の比較



その様に観て来ると、オホヒコノミコトの時代よりヲワケノオミという人の家が、代々その奉仕の対象としてきたヤマト朝廷の御歴代天皇、具体的には、崇神天皇以来雄略天皇までの記紀に記される皇統譜の実在を承認しなければならないであろう（架空の天皇に仕える事は出来ないから）。更に言及すれば、大彦命の出自が孝元天皇とする点から崇神天皇以前より神武天皇に至る皇統譜の実在も示唆するものであろう。尚、崇神天皇と同時期に邪馬台国の卑弥呼が魏の皇帝より称号と金印を享けている事が『魏志』の「倭人伝」に確認され（二三九年）、今日も学校教科書に於いて卑弥呼を実在する日本人の最古に位置付けされているが、これは自主自立の精神、影を潜めている事の悲しむべき姿と言えよう。そもそも当時の日本を知るのに、本来は他山の石とすべきシナ側の史料を柱として記紀を閑却するが、実際に日本に来た事もない著者が、日本の実情をどれほど正確に伝えているか疑わしいのは確かである。

繁昌と閑寂は世の実相である。古代ギリシアのヘラクレイトスの名言とする「万物流転」や仏教の説く諸行無常の言葉には、洋の東西関係なく有為天変の理に虚しさ

を感じて来た人の思いが込められている。デカルト（仏 Descartes 1596～1650）が、歴史の転変という、動かす事の出来ない鉄則を克服する唯一のものを、「人間の自覚」に求め、それが人間の人間たる所以であると説いたのも、彼の機械的自然観に対する救済法であった。しかし、自覚を導く理性を絶対化し、「我考ふ。故に我あり」という命題とは、近代西洋の思想史を象徴する言葉として一見すると理性的ではあるが、「我」ないし「人間」が孤立的に考えられ、他者との「間がら」については閑却されている様に思われる。基本的人権の思想への一貫性は担保されるかもしれないが、「倫理への通路」をそこに見出す事は出来ない。これこそ、精神生活の最も微妙な、最も価値あるものなのではないか。事実、欧米諸国が、国家の歴史や倫理を拘束と捉えて革命を起こし、非白人国家に対する植民地政策や侵略戦争を正当化したのは、その証左と言えるのではなかろうか。

翻って、日本は歴史や倫理を拘束ではなく源泉と考えた。天壌無窮の神勅を戴き、建国に至った、神武天皇の御理想に思いを馳せて生きて来た。しかも、世界で唯一、それが高度の文明と併存する基調をなして、皇室を中心として今日に生きている。それは、百二十六代の万世一系の皇室を戴く中で、一家を遡れば全て日本人が、直系に連なる分家の一つであり、神武天皇が共通の御先祖である事を認識出来たからに他ならない。皇室に対する忠義が、子の親への孝行と一致する我が国の「忠孝一本」が、有為天変を常理とする世界史の定説を破って来たのは真実である。畢竟、禍福は総じて人が招くものであると信ずる。日本人であるならば、如何に自らの家がとるに足らぬものとなってきても、栄枯盛衰は世の常として忍び、本家の断絶の危機と対決し続けるのは、分家として当然であろう。

三、大化改新

日本の皇室には名字が無い。一般国民は皆名字を持っていながら皇室には姓が無い。これは、国王と宮廷儀礼が国の統合を支える世界観を保持し、社会の安定をもたらす役割を担っている英国にしてもタイ国にしても、東西所を異にしながら全て姓があり、同姓を名乗る国民が何人も存在する中で、皇室は世界に於ける唯一の家である。戦前、英国人の日本研究家として御歴代天皇の諡号を、神武天皇から今上陛下まで朗々と諳んじたという、リチャード・ポンソンビ・フェイン（Richard Arthur Brabazon Ponsonby-Fane 1878～1937）や、日本人の美意識や倫理観を愛し、著書の表題に『神国日本』の文字を掲げた作家のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）も皇

室のネームレス・ファミリーである点に感嘆している。彼らは、この事実を重んじ、神武天皇創業以来、革命が無かった日本の国體を賞賛したのである。

皇室の姓の無い事が意味するのは、他に比較すべきものが無いという事（上御一人）であり、具体的に、大和朝廷の氏姓制度に、その淵源を観る事が出来る。即ち、応神天皇・仁徳天皇の壮大な御陵に象徴される四世紀後半から五世紀にかけての大和朝廷の発展とは、皇室を中心とする貴族・豪族（物部・大伴・巨勢など）の協力体制で進められたが、これらの貴族・豪族たちの基盤は氏と呼ばれる同族集団であった。この同族集団の組織を基礎として、氏の社会的地位・尊卑などを姓によって秩序づけた政治組織が氏姓制度であり、既に、この頃の皇室とは、他の氏族とかけ離れた高い立場に在られたと推察される。

仮に、互いの中から誰かが権力で伸し上がり、他の者を抑えて帝王の地位に即いたのであれば、その帝王には簒奪者である事を示す名字があるはずである。我が国の君主は、天地開闢以来、一つの皇室が万世一系、今日に至るまで連綿と続いている事実が示す様に、比肩すべきものが無い。しかも、男系継承によってのみ保持されている事から、革命の行われる外国と異なり、忠と孝は一致するのである。事実、御歴代天皇の徳の力は存在し、日本国民全体に人情の細やかさがあり、代々忠義の精神で皇室を戴く事によって、日本の国柄が形成されてきた故に、皇室の名字が無い事を外国人は注目し、感嘆感銘してきたのである。

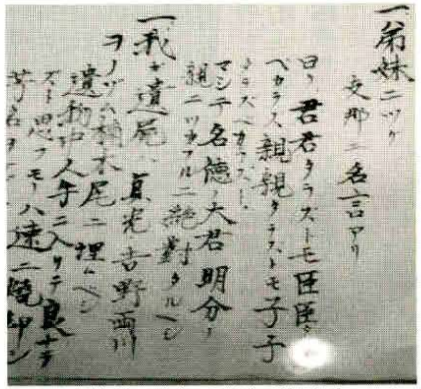
『日本書紀』には、第二十五代・武烈天皇の御代に皇統断絶の危機に直面した事を記す。その際、大和朝廷の親衛隊である大伴金村（おおとものかなむら）や物部麁鹿火（もののべのあらかひ）の重臣達が、おのれの本分を守り、苦心して皇統を求めた。「君、君タラズトモ、臣、臣タラズベカラズ。親、親タラズトモ、子、子タラズベカラズ。」（『古文孝経』）、越前より男大迹王（おおとのみこ）（応神天皇六世）を迎えられ、即位して継体天皇となられた事実は、道義道徳の力が、正しくこれを解決したことの代表例として特筆しなければならない。その後は、大陸文化（儒教・仏教・土木建築など）の輸入により、我が国の文化や技術は大いに進んだが、それと共に重臣間では争いが繰り返され、氏姓制度の弛緩が露呈し、皇室内部にも皇位継承を巡って動揺が観られ、大伴氏・物部氏が衰え、蘇我氏が権勢を独占した。また大陸にあっては隋が南北朝統一を果たす等、内外の危機が顕著になってきた。

六世紀末の女帝・推古天皇の御代に現れた聖徳太子は、皇太子兼摂政として内外の危機を克服し、諸政の改革に全力を尽くされた。その目的は、日本伝統の精神と仏

教・儒教の外来思想との融合であり、皇室の権威を高め、道義国家としての理想実現であった。新政の第一として、推古天皇紀十一年十二月に制定された冠位十二階（紫・青・赤・黄・白・黒を濃淡で色別）は、門閥を打破して有能な人材を登用する事で、旧来の氏姓制度の弊害を克服し、これを授ける天皇が名誉の源泉である事を明らかにした。今日の叙勲には、その伝統が引き継がれている。

そして、新政の第二である憲法十七条の制定、これが最も重要なのである。それは、国家の基盤を支えるのは法律ではなく道徳であり、道徳は歴史の中より表れるとして、後の近代憲法（大日本帝国憲法）を制定する際の指標にもなった。第一条の「和を以て貴しとなす」を皮切りに、表面上は、儒教に於ける君臣の道・仏教に於ける慈悲博愛の精神を強調しながら、根本には、氏族の専断を押さえ、皇室中心の国體を明らかにし、官吏の国家に奉仕する道を教えられたものであるが、それが後世に深い影響を与えたのは、道徳の意義についてである。

即ち、第三条に「承詔必謹（詔を承りては必ず謹め）」と戒めている様に、人は自然に放置し、放任すれば、本能の欲望に随い、私利私欲で動きやすいものである。人が私利私欲によって行動する時、親に対しては不孝の子となり、君に対しては不忠の臣とならざるを得ない。したがって、日本人は日本の道徳によって利己心を制圧し、行動しなければならない。聖徳太子が、日本固有の精神を柱とした上で、シナ伝来の古典（論語・孝経・春秋左氏伝など）を換骨奪胎して憲法を作った事により、その先鞭がつけられたのであった。



昭和殉難者の遺書に記される『孝経』の一文
徳島県護国神社蔵

しかし、推古天皇紀三十年（六二二年）、聖徳太子は新政の成果を確認される事なく薨去され、太子の御理想に反して蘇我氏の増長は愈々極まった。皇極天皇の元年（六四二年）、蘇我蝦夷は自らの墓を大陵（おおみささぎ）、子の入鹿を小陵（こみささぎ）と呼ばせるに至り、その後の蝦夷は病と称して朝廷に参ろうとせず、冠位十二階の規定を破り、愚息の入鹿に紫の冠を授けて大臣の位になぞらえた。また入鹿は、

父の家と自分の家に対し宮門を名乗り（谷宮門・上宮門）、自分の子らを王子と呼ばせ、本来皇位を継ぐべき聖徳太子の一族を滅ぼした。そもそも、記紀が記す様に蘇我氏とは、孝元天皇の後裔であり、皇室の藩屏であるべき存在でありながら、これらの行動とは明らかに、皇位簒奪の野望の表れであった。

もはや機会純熟し、時節は到来した。聖徳太子の理想を復活させ、中断した新政を完成させるためには、武力を以て断行するより他ない。蘇我氏打倒の密計を練った、中大兄皇子（天智天皇）と中臣鎌足（藤原氏の始祖）は、大極殿で儀式の最中に、皇子みずから入鹿を斬り、蝦夷の豪邸も焼き滅ぼした。そして、その直後に初めて、「大化」という年号は定められ（六四五年）、その最初に於いて孝徳天皇が皇太子中大兄皇子と共に大槻の樹の下に群臣を召し集め、天神地祇に告げて、

「天は覆ひ地は載せ、帝道唯一なり、而るに末代澆薄ひて、君臣序を失へり。皇天手を我に仮し、暴逆を誅し殄てり。今共に心の血を瀝みつ、而して今より以後、君は二つの政無く、臣は朝に弐あること無し。若し此の盟に弐かば、天災し、地夭し、鬼誅し人伐ち、皎きこと月日の如し。」

『日本書紀』原漢文

と申された。これは新政の方針を神に誓われたもので、明治維新の五箇条の御誓文と同じ趣旨である。

聖徳太子から大化改新へと到る過程とは、神武天皇より開かれた日本が、国家としての礎を確固たるものとした過程であり、事実、道義国家としての歴史の歩みや伝統の継承が回想せられたのであった（聖徳太子が活躍された時代の天皇の諡号が「推古」とされたのは、十分理由のある事で、国史が研究され、神武天皇紀元の算定が行われたのもこの時代であり、古事記の内容は推古天皇で終わっている）。その回想に当たっては、神話の中に皇位・皇統の神聖な由来を探ると共に、歴史の伝承の中に君臣の関係（忠孝）を確認し明記するのが、重要なテーマの一つであった事は確かである。それまでの「大王」より「天皇」と改められた独自の称号も、「日本」という国号も、そうした過程と意識の中で誕生したのであった。

続

近代日本洋画こぼれ話（第二回）

水谷嘉弘

4　岸田劉生　劉生戯画「京の夢　大酒の夢」

挿画の話を二篇続けたが、本篇はそのジャンルに近い戯画について書いてみる。岸田劉生（1891・明治24年～1929・昭和4年）のいわゆる劉生戯画で、画面に［京の夢　大酒の夢］と記された紙本墨画が手許にある。劉生と思われる小肥りの中年男が徳利を側に肘枕で寝そべり、芸妓が酌をしてくれる場面を思い浮かべる風をサラッと描き流している。文言といい、本人や芸妓の描写といい、軽妙洒脱、見ていて思わず笑みのもれる画である。

岸田劉生は我が国における印象派宣言とも言える高村光太郎（1883生）の「緑色の太陽」（スバル1910・明治43年）に熱狂した画学生の一人だった。新しい表現を求めて1912・大正1年フュウザン会を立ち上げる。ゴッホ、マティス、北方ルネサンスを経て、濃密妖艶な麗子像に到達した大正期を代表する画家である。



【京の夢　大酒の夢】1928（紙本墨画）

劉生は関東大震災後、京都に移るが茶屋通い、肉筆浮世絵蒐集に嵌ってしまう。その放蕩生活から脱却し創作に専念すべく1926・大正15年3月鎌倉に転居する。本戯画には、［昭和壬申年十一月］（1928・昭和3年11月）と年記があり、鎌倉転居後の作である。劉生がしばしば酒席で余興に描いた戯画の一枚かもしれない。これを描いた11月に［・・・画を描く心持が大部動き出して来ました。今小品油絵かいています。十二月初旬京都大阪神戸方面にて大調和展の一部をやります。その時上洛します。］と京都在住の知人に葉書を出し、翌12月9日同人宛に［・・・その後京都へ行かう行かうと思ってまんのやけど、いそがし事が多うて、まんだゆかれしめへん］と再度投函している。京都での遊興に想いを寄せながらも、生活も精神も落ち着いた様子がうかがえる。そんな中で描いたからかユーモア、茶目っ気を感じさせる作品になっている。2019年に「没後90年記念岸田劉生展」を開催した東京ステーションギャラリーの冨田章館長にこの戯画画像を送ったところ展覧会図録執筆者の一人、学芸員の田中晴子さんにも見せたそうで「こういう陽気さ、面白さも劉生の一面だったのですね」と述べていたと返事をくれた。画中、四角の枠に［隠世造宝］と書き込んであるのは、劉生が日本画を描き始めてしばらくした頃（1923・大正12年）［隠世造寶］の印を入手し落款印として使っておりそれで理解出来る。

実は、不勉強にして本篇の題材にした劉生戯画を入手するまで素描が岸田劉生絵画作品群の中で大きな位置を占めている事を知らなかった。前出の東京ステーションギャラリー田中晴子さんは、図録に執筆した［岸田劉生の「趣味性」による作品について］と題する論文を［劉生芸術の全体像を捉えるためには、劉生自身が「芸術」とした作品だけを対象とするだけでなく、「趣味性」によって、多くは金を稼ぐために描かれた作品群を含めて検討することが必要ではないだろうか］と締めくくっている。彼女の論文は1912年から15年に描かれた新聞挿画や半切画を対象にしているが、コメントは劉生の「趣味性」作品全部に当てはまるのではないだろうか。同展に先駆けてうらわ美術館他で「素描礼賛　岸田劉生と木村荘八」展が巡回開催されていた。この展覧会も趣旨は一緒だ。

本戯画を描いた1年後の1929・昭和4年12月、劉生は満洲訪問（生涯唯一の海外渡航）の帰路立ち寄った山口県徳山で体調を崩し急逝した。享年38才。復活に向けて気持ちが充実しつつあっただけに無念だったろう。

終焉の地、現在の山口県周南市には石碑が建てられている。武者小路実篤、川端康成、梅原龍三郎の筆跡が刻まれており劉生の交友を物語っている。



徳山には、渡欧資金調達を目論んで南満州鉄道の招きで赴いた満洲が上手くいかず、代替策として同行した田島一郎の故郷で画会を催すために訪れたようだ。一郎の父は政治家、当地の有力者だった。劉生が徳山に到着したのは11月29日、当時の地元紙に紹介されている。この1か月後の12月30日に記事にある逗留先の田島氏宅で亡くなった。戯画に描かれた寝転んだ劉生の顔かたちは記事掲載の写真にそっくりで最晩年の自画似顔像である。没年にも同種の似顔画を描いていて展覧会図録に掲載されていた。



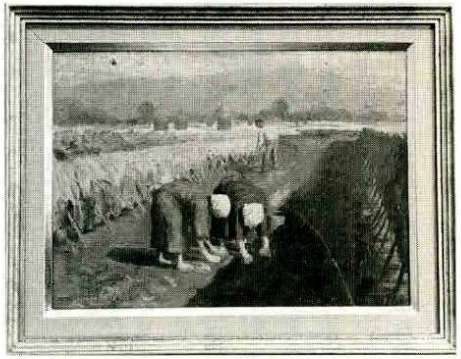
本篇は「没後90年記念岸田劉生展図録」（2019年刊、執筆山田諭氏他）、「素描礼賛　岸田劉生と木村荘八」（2019年刊、執筆迫内祐司氏他）、から多くを教示いただいた。

5　伊原宇三郎　1912（明治45・大正1）年　～18才時～の作品

官展アカデミズムにおけるbignameの一人に伊原宇三郎（1894・明治27年～1976・昭和51年）がいる。画家としての全盛期は戦争記録画制作に費され、平時であれば描かれたであろう作品群を観る事が出来ないのはつくづく残念に思う。

大正末年、31才で渡欧しピカソに興味を持つ。イタリア訪問を機にモチーフが風景から人物に移り、アングルのオダリスク模写を経て堂々とした量感ある女性像を描いた。戦後は制作に加え洋画界発展に尽力し国立近代美術館、国立西洋美術館、日本美術家連盟等の設立に主要な役割を果たした。夫人は芥川賞作家、由起しげ子である。

伊原は東京美術学校（以下、美校）西洋画科の藤島武二教室に学び首席で卒業した（1921・大正10年）。才にも恵まれていたのだろう。若い頃から絵は上手かったようだ。郷里徳島での小学生時代に既に日本画の模写をし、大阪に転校した1911・明治44年には関西中等学校美術展覧会で一等賞を取っている。17才の時である。先年、1912年の年記が入った風景画が市場に出た。改元のあった同年は日本洋画界が大きく転換する大正・昭和期の初年であり、後に大家となる伊原18才と当時の中央画壇との距離感を知りたくて購入した。



【稲干し】1912（4号）

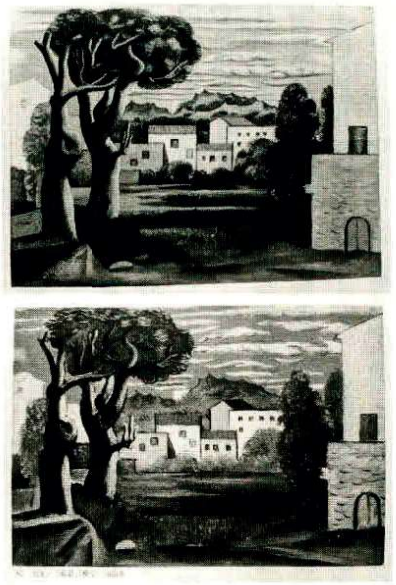
1912年は、明治洋画壇を牽引した白馬会の後継ともいえる光風会創立の年だが、美校卒業制作で萬鐵五郎（1885年生まれ）が【裸体美人】を提出し、10月には銀座読売新聞社社屋で斎藤与里（1885生）、岸田劉生（1891生）らの第一回ヒュウザン会展（のちフュウザン会）が開かれている。白馬会・外光派に物足りなさを感じていた若手画家たちの新たな動きが顕在化した年でもあった。二年後には文展の審査姿勢に反旗した中堅画家たちが二科会を設立している。しかし、大阪にいた中学生伊原宇三郎の絵はそういった動向とは無縁だった。当然といえよう。【稲干し】（4号）と題する伊原作は、農婦二人が

刈り終わった田地に腰をかがめて手を差し伸ばしている。ミレーの【落穂拾い】を彷彿させるものだ。中景の男性の大きさと全体の遠近感の不釣り合い、地面の表現などに稚拙な点もある。しかし明るめの中間色で色調を統一し、その濃淡で画面分割して安定感ある構図を作る巧みさ、穏やかで拡がりのある田園風情は18才の作として秀逸だ。若きバルビゾン派といえよう。伊原がミレー作を識っていたのかは分からない。バルビゾン派の紹介は既に始まっており1903・明治36年には「ミレー画譜」「ミレ名画全集第壹輯」等が出版されていた。後年彼は、中等学校展覧会一等賞が人生で最も嬉しかった出来事でそれで画家になる決意を固めたと書いている。賞品にもらった油絵道具一式で【稲干し】を描いたに違いない。

伊原のキャリアを振り返ってみる。黒田清輝が東京美術学校西洋画科開設と同時に教授に就任しラファエル・コランの外光派を伝えたのは1896・明治29年。黒田やそれに続くフランス留学→美校教官組はミレー、コローに強い共感を示しており、印象派の濃い表現ではなくその傍系に位置する穏健なコランの外光派に寄っていく。1916・大正5年、美校に入学した伊原もその流れに属しているといえよう。彼の徳島中学時代の美術教師は丹羽林平、安藤義茂である。丹羽は美校西洋画科第2回卒業生（1898・明治31年）、安藤は美校図画師範科第4回卒業生（1911・明治44年）でありその指導はバルビゾン派、外光派の流れを汲むものだったと思われる。伊原本人は大阪での美術教師の名前を挙げていないが、美校図画師範科第5回卒業生（1912年）塩月桃甫と写生に出掛けていたようだ（塩月桃甫は、太宰治の友人で小説家の塩月赳の父）。京都には工部美術学校教官フォンタネージ（バルビゾン派）の高弟、浅井忠が始めた聖護院洋画研究所・関西美術院もあり、近くにはそこで学んだ画家達も多くいたであろう。

2021年春、南薫造（1883・明治16年～1950・昭和25年）の回顧展があった。出世作とされる1912年作【六月の日】が出展されていた。奇しくも伊原の【稲干し】と同じ年、同じ題材である。収穫作業後の農夫を描いているが印象派そのものと言って良い。南の2歳年上の美校先輩、児島虎次郎が同時期留学中のベルギーで描いた油彩画にも似た筆触が見出せる。三宅克己らの水彩から学び始めまずイギリスに留学した南はフランスに渡って印象派に馴染み、帰国してからは印象派、そして晩年にかけてフォーヴ的なスタイルに変わって行く。一方、11歳年下の伊原は学生時代にバルビゾン派・外光派から入り、フランスに留学してポスト印象派以降を知り古典古代を見聞したあと、ルーブル美術館でのアングル模写を経由してピカソやドランの新古典主義に収束する。二人

の歩みの違いにも近代日本洋画史が世代毎に性急に西欧絵画をcatchupしていく流れが見えて来る。



(上) ピカソ【風景】(下) 伊原模写

伊原の生誕100年記念回顧展図録（1994年）に掲載されている最も若い時期の作品は美校入学前後の1915-16・大正4-5年と、1916年～22才、のもの。前者は短めの筆触を残す明るい印象派的な屋外椅子テーブルの写生画、後者は波打つ粗い筆触線と強めの色彩対比が目立つフォーヴ風の人物画である。しかし表現主義的な描写は体質に合わなかったのか、1920年以降は落ち着いた色彩、質感を出す筆遣い、正統的な写実で官展アカデミズムに直結していく作品を多く描いている。今回取り上げた宇三郎18才の作 ―面で捉えるうまさを既に示している―の延長線上で描き続けていると見なすことが出来る。

6 伊原宇三郎 その2 額裏情報から制作年を割り出す

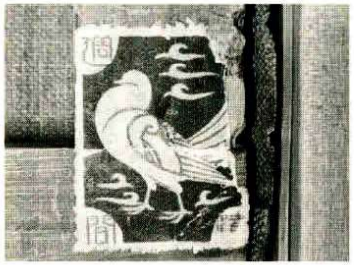
この連載は、夭折したエコール・ド・パリの画家板倉鼎の顕彰活動を通じて知った同時代（大正、昭和戦前・戦中期）の洋画家、洋画界の動向や入手した作品、資料を題材として綴っている。こだわり話が多くなるが本篇もそうである。

focusするのは額の裏面、そこから表面の作品や作者に関する情報を得る試みだ。田辺至の篇で額裏に貼られた名刺から制作年を引き出した。今回の対象者は前篇と同じ伊原宇三郎（1894・明治27年～1976・昭和51年）である。



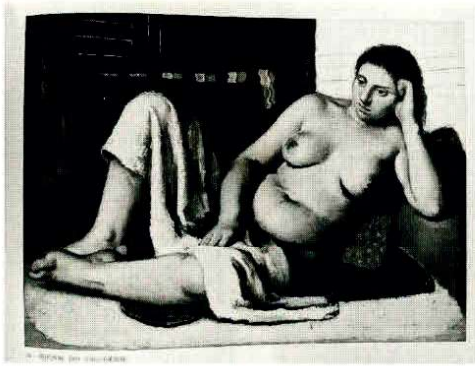
【自画像】美校卒業制作（27歳）
1921・大正10年





【布のエチュード】1930年代初頭（3号）

額縁裏の木枠に、【布のエチュード】（3号）と記された作品がある。粗い青みがかった白地の布が木机の天板上に大雑把に広げられたままの状態を描いている。エチュードとある通り、本作の一部分に描き込むための習作だろう。伊原の本領ともいえる描線を引かず筆による面取りだけで形と質感を捉えている。1925・大正14年3月、フランスに渡った伊原は風景写生や美術館巡りの後、イタリアに出向いて古典古代、ルネサンスに親しみ、ルーブル美術館で模写しピカソの新古典主義に回帰していく。1927年【毛皮の女】でサロン・ドートンヌに初入選し、翌年も【横臥裸婦】【赤いソファーの裸婦（白布を纏える）】を出品した。帰国する1929年を挟む前後2～3年、襞の入った白布を身に纏った存在感のある、古典的な香りがする、裸婦像や群像を多く制作した。



【横臥裸婦】1928

本作もその期間に描かれた習作と見立てたのだが、ウラを取りたく裏面をあたってみた。額裏木枠の右下に青色の切手のようなシールが貼ってあった。図案化された鳩を囲んで四隅の漢字が［＊＊週間］とある。上の＊の部分は破れていてわからないが、下の＊はつくりの部分から「情」だと判断し、いくつか当て嵌まりそうな単語を入れて検索してみた。「愛情週間」、「友情週間」・・・。「同情週間」がヒットした。朝日新聞が主催した助け合い募金運動の呼称で1924・大正13年に始まり、1941・昭和16年まで続いた。1930年代が最盛期と思われ東京朝日新聞社会事業団では1937・昭和12年に事業報告書まで出している。この同情週間運動と本作との直接の関係はわからないが、作品の制作年代は伊原帰国後の1930年代初頭と見てほぼ間違いあるまい。彼は、30年代半ばには洋画界の運営、後半は従軍画家としての活動に追われ本作を習作とするような作品は登場しないのである。

もう一点、額裏に【熱河の喇嘛廟】（3号）と書かれた紙片が貼られていた作品もある。画題から、制作年は伊原の年譜に依って中国北部～北支（奉天、熱河）に赴いた1938・昭和13年だと分かる。本作は豪奢なラマ寺を接写したためか、満蒙地域を描いた風景画によくある重厚な描写とは異なり華やかな印象になっている。





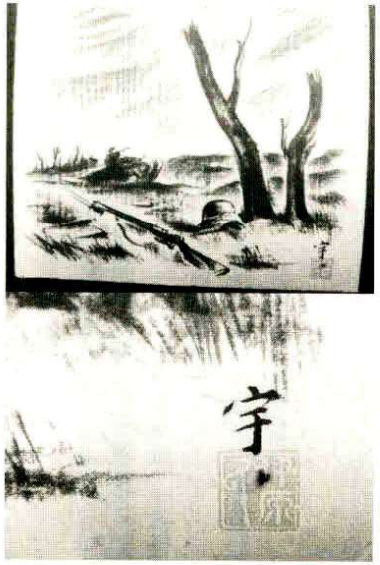
【熱河の喇嘛廟】1938（3号）

興味が湧いたのは紙片に押された［伊原］と［宇三郎］の二つの印影である。昭和のはじめ、戦争の気配が漂う頃から洋画家の作品にも四角の漢字印が押されることが多くなった。この作品もその例に当てはまる。この印が押印された他の作品例を探ってみることにした。伊原は

北支行の翌1939・昭和14年1月には菊池寛と共に中国中部～中支（上海、南京）を訪れる。菊池寛執筆の「西住戦車長伝」（東京日日、大阪毎日新聞夕刊連載、同年3月～8月）の取材のためだ。その時の素描（と思われる）画像に同じ［伊原］印が押されていた。

更に、そこに署名されたイニシャル［宇］は、連載記事の単行本（東京日日新聞社刊、伊原装幀）表紙画にも記されていた。本作の額裏情報は前作と違いすんなり繋げていくことが出来た。以上、平穏裡にこだわり話を終える。

前篇、本篇は1984年徳島県郷土文化会館、1994年目黒区美術館、徳島県立近代美術館開催の伊原宇三郎展図録を参考にさせていただいた。





左【裸婦】1928頃、右上【圧倒】1939

安芸門徒シルクロード紀行（16）

村上邦治

光瑞二回目の欧州旅行では簿子裏方と新婚旅行中の九条武子（光瑞妹九条良致夫人）を西欧諸国に案内する。帰国に際してはシベリア鉄道を利用し二人にお供した。

帰国後西本願寺築地別院（現築地本願寺）の輪番（現宗務長関東地域拠点の宗主代理として寺務最高責任者）を務めたが、光瑞法主辞任に伴い一五年輪番職を辞した。

本願寺を離れた後、語学力・現地体験を活かし『報知新聞』の北京特派員になった。その後北京漢字新聞『順天時報』の四代目社長となり、英字新聞も発刊した。満州事変前年の三〇年廃刊し帰国。一時東京に住むが、四三年ごろ故郷広島県三原市の自坊浄念寺に戻り寺務に専念、五七年八二歳で死去。院号は光瑞の一字をもらった瑞香院。

一次中国探検隊員の弟哲乗は中国の教線拡大に従事したが、兄より早く三〇年病死。

八七　その後の探検隊員

大谷光瑞終焉の地別府鉄輪（かんなわ）温泉の別邸跡地は現在市立大谷公園となり、「光瑞上人遷化の処」と記された石碑が建立されている。

一九九七年五〇回忌を記念して、石碑の傍に「大谷探検隊顕彰碑」が建てられた。光瑞を中心に探検に携わった青年僧一四人の陶板製写真および『西域考古図譜』（香川黙識編主要将来品の図録集一九一五年刊）に寄せた光瑞の「讃序」文と「大谷探検隊踏査ルート図」が掲げられている。顕彰された一四人は次の面々であり、探検後の略歴を付した。

第一次隊員

渡邊哲信（一八七四―一九五七）　中央アジア隊員

堀賢雄（一八八〇―一九四八）　中央アジア隊員

一九〇四年渡邊哲信と西安で別れた後北京に赴きチベット仏教寺院に入り修行翌年帰国。その後は中国教線拡大に当たり、八年八月五台山での大谷尊由清国開教総監とダライ・ラマ一三世の会見に同行同席、歴史的会見を記録。同年末スウェーデンの探検家スウェン・ヘディン来山時の通訳・接待役。楼蘭の位置を聞き込み二次隊橘の李白文書の発見につながった。

大阪津村別院・福井別院輪番、三四年満州開教総長兼大連別院輪番など要職を歴任。三六年自坊富山市蓮照寺住職。四八年光瑞を別府に見舞い、その死を見届けたかのように四九年九月往生。享年六九歳。

長男定雄は本多恵隆の長女と結婚、孫の長男惠雄が現住職。

本多恵隆（一八七六―一九四四）　印度隊員

評議員・賛事長・宗会議員・執行を歴任、福井別院・築地別院輪番を経て二四年執行長就任。

その後北米開教総長、津村・堺別院輪番後、二度目の執行長（通算六・八年）を務める。隊員中最も長く宗政の中心で戦時下の本派を支えた。四四年六八歳で死去、大谷本廟にて本山葬。院号超勝院。

井上弘円（一八七二―一九四五）　印度隊員

三年に帰国後自坊信州真宗寺を継ぐため京都には長くいなかった。父住職寂英は三一歳の時築地別院輪番を務め、長野県議会議長を歴任した県下浄土真宗本願寺派末寺の指導的人物。一六（大正五）年父の死去に伴い住職を継ぐ。

二五年僧侶に被選挙権が与えられ二八年普選に仏教連合会公認候補として出馬（落選）の記録があり、信濃地方末寺の中心的役割を担った。

姉瑞枝は藤井宣正妻。妹鶴枝は「故郷」「春がきた」の童謡作詞家高野辰之妻。弘円の三女武子は上海在住の光瑞に秘書として仕えた。

藤井宣正（一八五九―一九〇三）　印度隊員

印度の遺蹟調査後光瑞の指示により欧州留学に向かうが、マルセイユで結核のため客死。いち早く宗教を歴史の視点から研究した『仏教小史』など生前の功績を鑑み、死後一七年を経た二〇年勧学を与えられた。

薗田宗恵（一八六三―一九二二）　印度隊員

帰国後五年仏教大学（二二年龍谷大学改称）学長。一二年勧学一五年再び学長。当時の本願寺派を代表する仏教・歴史学者。五九歳で死去。

島地大等（一八七五―一九二七）　印度隊員

島地黙雷亡き後盛岡願教寺住職を継承。天台学・日本仏教思想史に精通し、曹洞宗大（現駒沢大）・日蓮宗大（現立正大）・東洋大で教え、一九年東京大印度哲学講師に就任。浄土真宗にとどまらず仏教各派を幅広く研究、代表的仏教学者として認められた。主著に『真宗聖典』『天台教学史』『日本仏教教学史』。多田等観の東京大文学部嘱託講師就任に尽力。五二歳で死去。

升巴陸龍（一八八二―一九一九）　印度隊員

帰国の次年（〇四年）日露戦争下の大連に派遣され、本願寺関東別院の初代輪番、後布教師として満州の教線拡大に従事。

一六年官僚政治家大浦兼武の支援をうけ東京神田に「太陽通信社」を創設、日刊新聞『太陽通信』月刊雑誌『黒潮』を発刊した。三七歳で死去。

橘瑞超（一八九〇―一九六八）　二・三次隊員

帰国後辞任した光瑞を側近として支え続け、光瑞の旅行の多くに随行した。一二年光瑞私費による武庫中学の校長。将来品の整理・売却の責任者として旅順の光瑞宛搬送や久原房之助への売却を取り仕切った。

三二年四二歳で自坊名古屋市興善寺住職継承、火事と空襲により二度消失したが各々再建した。六八年七八歳で死去。院号は生前探検中に与えられた志勇院。

野村栄三郎（一八八〇―一九三六）　二次隊員

帰国後室内部に戻り一時二楽荘で将来品の整理に従事。『多田等観』に「三六年新聞紙上にて野村栄三郎の死去を知る」の記載があり、五六歳で死去。

吉川小一郎（一八八五―一九七八）　三次隊員

帰国後室内部絵表所（仏表具などの取り扱い）勤務、橘・桂本らと共に六甲二楽荘に保管されていた将来品の整理に従事。

表装の専門家として美術年鑑に掲載。六四年絵表所を株式会社化その初代社長。長命で七八年九三歳で死去、探検隊員最後の生存者であった。

野村と吉川は室内部に奉職していた一般人。橘瑞超が二次探検時十八歳三次二十歳と極めて若く、随行者を僧侶から選ぶと年下になるので使用人から選任した。

足利瑞義（一八七一―一九四五）　二次印度隊員

執行通算五回歴任し宗政を支えた。一方最高の学階である勧学に推され父義山に並んだ。その後仏教大学三年龍谷大学五年二度通算八年間大学長を務めた。

三二年ハワイ開教総長に就任。その出航を横浜メリケン波止場に見送りに来ていた姪の武内俊子（渡邊哲信姉の長女。瑞義妻は哲信妹）は、叔父見送りの光景から「カモメの水兵さん」を作詞。「リンゴのひとりごと」「船頭さん」「手まり歌」など多くの童謡を作った。

青木文教（一八八六―一九五六）　二次印度西蔵派遣

チベット体験を『大阪毎日新聞』に「秘密の国」連載、東京地学協会で講演・機関誌に寄稿、光瑞から「序言」を得て『西蔵遊記』出版、チベット仏教について『大乗』に九回連載、広く留学体験を発表した。

一八年光瑞の命により南洋農園事業（蘭領印度）を経営。上海光寿会責任者として身近で光瑞を支えた。

四一年外務省調査部勤務、西蔵を取り巻く国際関係・チベット仏教・ダライラマ政権について論文発表。四四年陸軍専任嘱託。五一年等観の後任として東大文学部（チベット語）講師、教え子に中根千枝・佐藤長東大教授。五六年七〇歳で死去院号顕道院。

精舎昌実（一八九七―一九二一）

唯一探検隊と関係のない人物。広島県豊平町末寺出身。光瑞の私学武庫中学入学、閉鎖となり中国へ行く光瑞に随行。ロシア語に堪能でウラジオストック開教総長に派遣されるが、二一年二四歳の若さで結核により死去。法主辞任後の光瑞を側近として支えた一人。

顕彰碑から外れた隊員

上原芳太郎（一八七〇―一九四五）　一次印度隊員

一八九七年香港・木曜島、九八年東印度を調査。九九年光瑞の清国巡遊に随行。一九〇〇年東回りで米国・カナダ経由ロンドンの光瑞の下に赴き、北極圏・エジプトに同行後帰国。第一次探検時島地大等らと共に急遽印度に呼ばれ、ガンダーラや仏教聖蹟調査に同行光瑞を支えた。特に釈迦説教地の霊鷲山（りょうじゅせん）発見に貢献。

これら実績から光瑞の推薦を得て東京地学協会会員に推挙。海外調査・教線開拓の渡航歴は西本願寺の先駆けを果たし、印度探検では多大な貢献を果たしたにもかかわらずなぜか顕彰碑には加えられなかった。

一九一四年本願寺疑獄事件で逮捕され上告するが執行猶予なしの懲役一年六か月の有罪が確定、服役後本願寺を去った。古くから本願寺の家老職にあった上原家（士族）は、僧籍を保有せず芦屋市に住んだ。

先代光尊に仕え、幼年時の光瑞の相手役・勉強仲間。室内部長を長く勤め大谷家を最も深く知る人物であったことから、二六年西本願寺に戻り、光尊の二五回忌に『明如上人伝』を、さらに三次にわたる探検隊員の手記を集め『新西域記』を編纂、探検隊の仏蹟調査・発掘を記録刊行した。後半生は大谷家・西本願寺の足跡をまとめ後世に伝えた。終戦の年七五歳で死去。

なお一次印度隊員では日野尊宝（連枝ロンドンより藤井宣正と共に海路で印度探検に参加）・清水黙爾（島地黙雷次男留学中のカルカッタから参加。孟買で客死）・秋山祐穎（上原・島地・升巴と共に日本から入印）の三人が外れている。

二次印度隊員では和気善巧・桂本瑞俊（光瑞と従兄弟。室内部長京都明覚寺住職）が外れている。

一次中国隊員

渡邊哲乗・吉見円蔵・前田徳水・野村礼譲・茂野純一の五人は光瑞の指示通り日本人として初めて緬甸北部山間から中国大理に入り、仏教聖地の峨眉山・廬山の現況や国内交通事情・河川・山脈・都市の状況など調査した。その後従事した隊員たちは中国通として、本願寺派教線拡大の第一線で活動した。

多田等観（一八九〇―一九六七）　西蔵派遣

光瑞の命により一〇年間という長期間チベット仏教を正規の課程で修学、外国人初の最高学位を取得。

二三年帰国後上海光寿会青木文教から光瑞の意向として上海で働くよう何度も要請されたが、婉曲に拒否。チベット仏教・チベット語の第一人者として学者の道を選択。

三四年集大成の『西蔵大蔵経総目録』刊行。東大東北大慶応大各講師、満州建国大学教授（終戦により未着任）。戦後東京大（チベット語会話演習）・東洋・慶応・駒沢大講師。四九年渡米しスタンフォード大学へ西蔵大蔵経寄贈。

昭和三〇年長年のチベット仏教研究により学士院賞受賞、学者として最高の栄誉に浴した。

六七年死去享年七六歳。法名智蔵院。

八八　大谷コレクションの行方

三次にわたり莫大な費用（現在価値で数百億円）をかけて日本に持ち込まれた将来品は、明治末期から大正にかけて東洋学・印度学・中国学・仏教学・考古学など多分野の研究者に公開された。これまでの文献のみによる研究から発掘品を直接接する機会が与えられ、光瑞の意図通り各分野の研究は一挙に前進した。

数万点に及ぶ大谷コレクションの主要品は『西域考古図譜』にまとめられたが、法主辞任により数奇な運命をたどり三か国にまたがる現在の場所に行き着いた。

東京国立博物館（東洋館）

隊員が持ち帰ったホータン・クチャ・トルファン・敦煌などから出土した経典・壁画・塑像・仏具などは、当

初京都帝室博物館（現京都国立博物館）に寄託され公開されていた。この一群は大谷家の借財返済のため、九州の鉱山王木村貞造（大分日田市鯛生金山経営）に売却された。また木村は久原房之助が買い取った一部も保有した。六四年以降文化財保護委員会・東京国立博物館が逐次購入し所蔵とした。

銅造仏頭部（ホータン）塑土彩色菩薩頭部（クムトラ）木製布貼彩画舎利容器（スバシ）壁画ドロナ像（キジル）など約二〇〇点を保有する。所蔵品の一部は東洋館第三室に常時展示されている。

なお京都国立博物館に少数であるが所蔵されている。

龍谷大学大宮図書館

光瑞の死後西本願寺倉庫から発掘品の入った木箱二個が発見された。戦前旅順の光瑞に送られた将来品の一部が送り返されたもので、そのまま倉庫に保管されていた。古写経や古文書が多く、帛画・染織品・木簡など約九千点に上った。また探検隊員堀・橘・吉川らの遺族から、撮影した乾板・写経断片などの出土品・日記類の寄贈を受け所蔵に加えた。

二〇一一年西本願寺正面に『龍谷大学龍谷ミュージアム』が開設され、探検隊特別展や研究発表会が開催されている。館内にはトルファンベゼクリク千仏洞第一五窟が原寸大で再現されている。

主な所蔵に古写経など敦煌文書・橘瑞超発掘の李柏尺牘稿（重文）・アスターナ古墳群出土文書類がある。

全貌は明らかでないが、国内には個人所有の将来品が相当数あるとされる。大谷家財政困窮時にひそかに売り出されたものや久原・木村に買い取られた後一部が他人に渡ったものといわれている。

中国旅順博物館

二楽荘に保管されていた将来品・蔵書などが旅順別邸の光瑞のもとに送られた。終戦まで蔵書は満鉄の旅順図書館に寄託（実体は光瑞の新規事業に伴う借入の担保）、将来品は関東庁博物館に所蔵された。

戦後一時進駐したソ連軍の管理下にあったが中国に引き渡され、二万六千点余りが国立旅順博物館の所蔵となった。主なものにトルファンアスターナ古墳群出土ミイラ・トヨユク千仏洞出土品などである。

なお巻子形敦煌出土経典（敦煌文書）六二〇点は、現在北京国家図書館に移されている。

韓国国立中央博物館

大谷家・西本願寺の債務弁済のため、六甲二楽荘の建物内に保管されていた発掘品一式が久原鉱山社長久原房之助に売り渡された。購入した出土品は同じ長州出身で

中央アジア・印度へ三次にわたり探検隊を派遣、出土品は日本の東洋学などの研究に貢献したが乱費を末寺住職らに咎められ辞任。

正衣三法典の義疏や仏教の大意・原理・要諦などを研究、多くの仏教書を出版。

仏教にとどまらず、広くキリスト教・イスラム教・儒教など現地に赴き調査、国と宗教の関わりについて研究した。

辞任後印度北部シムラにて梵語を研鑽修得。『無量光如来安楽荘厳経―梵語原本国訳』を刊行。

神話・古代の時代から近世までの歴史に精通。特に中国・印度の古代史についてはとりわけ造詣が深い。これら知識が中央アジア探検にいかされ成功に繋がった。

漢籍の知識が豊富で、序や緒言などに引用した格調の高い名文を多く残している。しかし難解過ぎて理解するには当時でも骨が折れた。しかし本文など一般の記述は簡潔で要を得た文章で読みやすい。

本派教育機関文学寮・大学林で語学・理系科目を重視、世界に通じる人材を養成。私費による武庫中学創設早期英才教育を実践。辞任後旅順・上海で策進書院（中等教育）、大

仏教学者

宗教学者

梵語学者

歴史家

名文家

教育者

連で高等女学校を開校、海外でも教育に熱心。

教育方針は苦楽享栄精神の涵養・共同作業重視・暗記から理解力の優先など、応用力のある自立的人材の育成を目指した。

言論人

法主辞任後度々時局講演会に登壇し中国の現状や日本の果たす役割を聴衆に説く。軍部や政治家に媚びることなく、自説を主張。著作や新聞紙上で忌憚ない発言を続けた。

評論家

強硬外交や大アジア主義を唱え中国侵略を正当化する人物として批判されることがある。あくまでアジアの仏教興隆を目指し、西欧諸国からの侵略防御を説いた。中国の革命家孫文の不遇時代を支援した。

アジア人

アジア西端トルコではオスマン帝国崩壊直後ケマルトルコ共和国初代大統領との共同事業に出資、建国間無しの農・養蚕紡績業を支援した。

国際人

日本・中国・アジアの視野よりさらに広く、世界的視点から見つめ考察していたことが出版物や発言から推察できる。

時に陸軍スパイ説がいわれる。英国・印度政庁はダライ・ラマ一三世との接触やチベット入国などから諜報活動の疑いを強めた。しかし探検行程・手記から容疑を窺がわせるも

諜報者

のはない。光瑞や青年僧は専門の教育・訓練を受けておらず未踏地での諜報活動は難しい。

パミール高原中・露国境、フンザ渓谷中・印国境、崑崙山脈中・西国境など日本人として初踏破しているので、軍部からの問い合わせには応じるとともに写真を提供した程度であろう。

探検家

パミール高原・フンザ古道など五千メートルの山岳・氷河、絶壁の古道を踏破。登山訓練を受けず装備も不充分だが篤い信仰心により成功。

冒険家

中央アジアに止まらず日本人が訪れていない北極圏・エジプトナイル河奥地まで踏み入れた。

九九年清国巡遊での紀行文により、英王立地理学協会会員にアジア人として初めて推挙される。現地で西欧地理学者と交流した。

地理学者

ロンドンキュー王室植物園を模倣した温室を二楽荘に併設、世界中から希少植物を取り寄せ生育を試み観察した。

植物学者

辞任後朝鮮・中国・印度を旅行、『国民新聞』紙上に現地の最新情勢を連載。

紀行家

二楽荘・上海無憂園・海外別邸・別府鉄輪邸など設計。築地本願寺など戦前斬新な建物を設計した伊東忠太東大教授の良き理解者で

設計家

当時初代朝鮮総督に就任していた寺内正毅（後首相）に贈られ、朝鮮総督府博物館が所蔵した。現在韓国国立中央博物館の所蔵となっている。

約三四〇件一七〇〇点を所蔵。主なものとしてキジル・ベゼクリク千仏洞の壁画やアスターナ古墳群出土の帛画（伏羲・女媧図）などがある。

八九　大谷光瑞の実像と研究課題

大谷光瑞の生涯を追っていくと、その博識造詣に驚かされる。宗教人にとって畑違いの領域とも思える分野において、多面的かつ深遠に思索し提言もしている。また決断するや実現を目指し、自ら率先して立ち向かうその行動力には舌を巻く。

やや細分化したきらいはあるが、光瑞が関与した分野をまとめてみた。

法主

〇三年印度で探検中父光尊死去により末寺一万寺門信徒一千万人を擁する第二二代西本願寺住職・本願寺派管長に就く。一一年間その地位にあり海外の教線拡大・教団近代化・人材育成を進めた。宗祖六五〇回大遠忌では西欧の団体旅行の仕組みを取り入れ、全国から百万人の参拝客を集めた。

あった。

土木家　『大谷光瑞興亜計画』で提言したダム・港湾・水路・都市計画など、土木工事施工の観点から提案。

気象学者　長江を堰き止めるダム提の高さを算出するため雨量観測値から科学的に計算。現三峡ダム建設最初の具体的考察である。

地質学者　（三峡）ダム建設地の決定には地質の現地調査が重要であることを指摘、地質調査の重要性を強調。

政治家　「一帯一路」政策を彷彿させるシルクロード横断や雲南チベットに通じる高速鉄道を三〇年代に提言。

東京から朝鮮まで対馬海峡を海底トンネルで結び、さらに大連から渤海湾の海底を貫き北京に通じる新幹線を構想。戦時中にもかかわらず自らその実現に奔走した。

都市計画家　温泉地別府の大観光地計画を実現可能な詳細で具体的に立案、市長に提出。阿蘇を含む九州全域の観光開発を目論んでいた。

農事家　自らファーマーと名乗り、珈琲・香料・ゴムなど熱帯南洋の農業事業を実践。気候の厳しい満州よりはるかに有利と主張。

起業家　南洋事業進出に当たり投資会社設立。蘭領東印度スラバヤに日本式養蚕業の可能性を調査研究し起業経営した。

未来学者　一〇年はおろか三〇年五〇年先の未来社会を予測したうえで諸計画を構想した。自動車社会の到来については完全に読み切っている。

化学者　大連で大谷光瑞農芸化学研究所を創設、乳酸菌生産物質の研究開始。「生きた菌ではなく菌の分泌物に有効成分あり」と『涅槃経』の記述から示唆。（光英化学研究所ＨＰ）

その他趣味など次のものがある。

食通　西欧各国の料理さらに著名なレストランや食材にまで精通。美食家であり糖尿病の遠因かもしれない。

愛陶家　風雅な趣味として陶磁器の鑑定・蒐集家として知られる。光瑞を囲む三夜倶楽部の話題の一つであった。

愛妻家　三五歳の時妻籌子（大正貞明皇后の実姉）を病気で亡くしたが生涯独身を通した。有り余る好奇心と自ら育成した側近の協力を得られたことが大きい。

大谷光瑞を追えば追うほど新たに別の顔を知ることになる。しかもいずれも専門家の域に達したものであることには驚かされる。しかし光瑞が関心を持った多くの分野で研究は進んでいない。

なかでも中国を愛し経済発展を願った『興亜計画』は一九三九年に発刊したのであるが、その中で中国政府の政策を先取りした水や電力不足の解決策として、「三峡ダム」建設など大河の開発を提言している。さらに現在習近平政権で進められている「一帯一路」政策の前触れとなる中央アジア幹線構想がある。その構想力は大胆かつスケールの大きなものであり『大谷光瑞興亜計画』の考察はこれからの課題である。

二〇世紀初頭の大谷光瑞が指揮・派遣した中央アジア探検隊については、近年外交文書の公開により周辺国との間で外交問題に発展していたことが明らかになった。特に英国・印度政庁は真宗僧侶のチベット国境接近・入国に神経をとがらせた。浄土真宗本願寺派が清朝末期の中国国内で、ダライ・ラマ一三世と会談を持ったことにも関心を寄せた。この時期日本の東アジア進出を警戒する英国が光瑞や配下の真宗僧侶の行動を、政府や軍部の依頼を受けた諜報活動と見なしたからにほかならない。

内・外蒙古、新疆チベットにおける探検隊の広域活動は、各国の利害関係が複雑に絡む国際情勢の中で、大谷探検隊の副作用ともいうべき軋轢が生じており、光瑞や探検隊員の行動は少なからず制約されることになった。外交問題の視点から探検活動の動向を解明することは大きな作業となろう。

近年シルクロードに関する多くの本が出版されている。しかし大谷光瑞の名を高らしめた中央アジア探検について、誤った記述が散見される。

六〇年代この分野の初期に当たる陳舜臣・ＮＨＫ取材班『シルクロード第五巻天山南路の旅―トルファンからクチャへ―』の中で次の記述がある。

この西域最大の千仏洞は、今世紀（二〇世紀）初頭に多くの探検家が発掘調査したことでも知られている。わが国の大谷探検隊は一九〇九年と一九一三年の二回にわたり、この地を訪れている。また、ドイツのグリュンヴェールやル・コックは、三度にわたって調査し、石窟寺院の壁画を大量に切り取り、ヨーロッパに持ち帰っている。今もその破壊の跡は生々しく残っている。

九年二次橘瑞超・野村栄三郎が一三年三次橘・吉川小一郎がこの地を探索しており、この記述に誤りはない。しかし最も肝心なことが抜け落ちている。一九〇三年このクチャ郊外のキジル千仏洞を外国人として初めて調査発掘したのは、第一次探検隊の渡邊哲信と堀賢雄であった。二人の手記で明らかであるが、この後出版された本

には陳舜臣の記述から引用したものとみえ、同様の不正確な記載がみられる。

二二（令和四）年一月より世界五大東洋学研究図書館の一つとされる東洋文庫（東京本駒込）主催の『シルクロードの旅』展が開催された。仏教東漸の途上にあるオアシス都市の仏教遺蹟と『後漢書西域伝』や玄奘『大唐西域記』から始まり、二〇世紀の仏ペリオ『敦煌石窟』（一九二〇年刊）独ル・コック『中央アジア秘宝発掘記』（二六年刊）まで当文庫が所蔵する写本や出版本が展示されていた。

西欧探検隊には主要な事蹟が紹介されていたが、大谷探検隊については申し訳ない程度の「大谷光瑞が中央アジアに派遣した学術探検」と極めて簡潔な説明で終わっていた。またキジル千仏洞の説明ではドイツ隊の説明はされていたが、世界に先駆けて調査発掘した大谷探検隊渡邊哲信と堀賢雄のことについては全く触れられていない。大谷隊については少なくとも世界的発見であるキジル千仏洞の発掘調査や楼蘭文書の発掘将来さらにはトルファンアスターナ古墳群の発掘採取は紹介する必要があろう。

会場にはペリオやル・コックの出版物が展示されていたが、当文庫には大谷探検隊の隊員手記集『新西域記』（三七年刊）及びその成果をまとめた『西域考古図譜』（一五年刊）が所蔵されているにもかかわらず、披露されていなかった。

大谷光瑞については近衛内閣参議・小磯内閣顧問を歴任したことから、軍部とのかかわりが指摘され、戦後では取り上げられることは少なく無視同然の状態が続きその影響と思える。

二一世紀の今日、日本人にとって中央アジアシルクロードにおけるオアシス都市や仏教遺蹟の関心は高いが、百年前の大谷探検隊の目的、事績などについて、正確な知識は専門家の一部に限られている。

二〇世紀初頭浄土真宗本願寺派の青年僧は光瑞の指示と信仰・精神力を頼りに多くの苦難を乗り越えて、欧州探検家に伍して未踏の地を調査・発掘し成果を挙げた。宗主大谷光瑞と青年僧達の事蹟は、海外では「日本隊」と呼ばれその評価は高い。平成期になりようやく簡単であるが高校の教科書に掲載されたものの、いまだ広く知られているとは思われない。

浄土真宗本願寺派大谷光瑞と青年僧のアジア広域調査活動について、多くの日本人に一層の啓蒙が必要である。とくに光瑞の探検隊派遣について浪費として冷淡であった末寺住職が、率先して旗を振ることは使命といえよう。

補論

一　大乗偽仏説の変遷

二〇世紀初頭西欧留学中の大谷光瑞が中央アジアに向かったのは、「仏の来た道を辿る」ためと述べている。しかし古くは五世紀初め西域南道から印度に入った法顕（『仏国記』別名『法顕伝』）や七世紀往路に西域北道・天山北路を使い復路は西域南道により帰朝した玄奘（『大唐西域記』）の足取りをみれば明らかであった。ちょうど留学中に西域北道では独国隊（トルファンカラホージョ）西域南道では英国隊（ホータンダンダン・ウィリク）の発掘により仏教東漸の道は判明しており、北・南両道が交わる敦煌近郊の莫高窟千仏洞は既に広く知られていた。

光瑞に中央アジアへの探検を決断させた動機は、最先端の研究を誇る西欧の近代東洋・印度・仏教学が「大乗仏教経典は仏陀が説いた教えではなく、紀元前一世紀ごろから二世紀にかけて新たに編纂されたものである」とする「大乗偽（非）仏説」であった。

しかも日本仏教が将来した漢訳経典は、すべて訳僧により梵語原典から意訳されたものであった。大乗経典は仏陀が直接説いた教えではなく、さらに梵語経典が意訳されたもので、中国仏教や日本仏教はかれらの研究対象にならなかった。

ちなみに梵語原典が残る無量寿経の「梵語」和訳と三世紀康僧鎧が訳出した「漢文」経典の書き下しを対比すると、漢訳経典の「省略・大幅な意訳・原典にない追加文」は歴然としており、梵語原典との相違が誰にでも分かる。（『浄土三部経上無量寿経』中村元他訳注岩波文庫）

浄土真宗では『仏説無量寿経』など正衣三経典にすべて「仏説」を頭につけているように、「我聞如是」（一〇大弟子の一人阿難は仏陀からかくの如き聞けり）で始まる。あくまで仏陀から直接阿難が聞いた教えとする。

日本仏教は六世紀伝来以来「何の疑いも持たず漢訳経典をそのまま」受容してきた。仏陀の教えとする膨大な「経・律」とその研究書「論」の意訳により漢訳された三蔵の習得に、多くの高僧・学者が生涯をかけ当方もない修行と研鑽を重ねた。そして日本独自の宗派まで誕生させた。欧州仏教学のいう「大乗経典及び漢訳経典の否認」は、日本仏教にとって二重にわたり否定されたことになる。

宗祖親鸞の法燈を七百年間にわたり継承してきた光瑞にとって、西欧の「大乗偽仏説」は断じて認めることのできないものであった。浄土真宗のみならず日本の仏教各派のためにも「大乗仏教経典及び漢訳経典」は「仏陀

が直接説いたもの」とする、その正統性を証明せねばならなかった。そのために仏の来た道の砂の下に埋もれているかもしれない「梵語で書かれた原典」を、掘り起こさなければならないと決意したのである。

西域探検の動機を多くの書では、上原芳太郎編『新西域記』の緒言を引用する。この緒言は『西域考古図譜』（一九一五年刊）に光瑞が寄せた序文にあるもので、第一に「仏教東漸の経路を明らかにし、回教により蒙った圧迫の状況など仏教史上の疑問を解かん」とする。次に「経論・仏像・仏具等を蒐集し、仏教教義の討究」し、合わせ「考古学上の研鑽に資せん」とするとしている。

第一目的の東漸の経路は既に判明していた。タクラマカン砂漠を挟んだ西域北道と南道を辿り敦煌に収束し、河西回廊を通り中原にもたらされたことは誰の目にも明らかであった。

むしろ最大の目的は第二の「経典」の発掘すなわち「大乗偽（非）仏説」反証のための、梵語原典の発掘にあった。大乗経典を源流とする浄土真宗本願寺派宗主の立場では、口が裂けても「大乗偽仏説」の言葉さえいえるはずはなかった。

一方チベット文字が梵語文字をもとに考案された表音文字であることから、梵語原典を意訳せずに逐次的かつ忠実に翻訳されているチベット大蔵経は、既に失われた梵語原典に迫ることができる有力な道であった。辞任直前の一三年チベット留学に二人を送り込み、しかも一五年秋法主を辞任していたにもかかわらず、多田等観に至ってはさらに八年間の長期留学を命じたのも納得できよう。

「大乗偽（非）仏説」を欧州より早く最初に主張したのは実は日本人で、大坂商人が開設した町人の学問所懐徳堂で学んだ醤油業富永仲基（一七一五―四六）である。仲基の『出定後語』序によると、早くから儒教を研鑽し漢文に長じた。市井の仲基の主著は漢文である。

二世紀大乗仏教の確立者龍樹（般若思想「空」と「縁起」因縁生起を解明）の『大智度論』や五世紀世親（真宗では天親。輪廻の要因である「識」の究明と空の思想を発展的に展開した唯識学確立）の『倶舎論』など、膨大な漢訳経典や注釈書を読み下した。さらに仏陀の成道・初転法輪・説教・涅槃を経た仏滅三か月後の第一結集（経律の決定）・百年後の第二結集（根本分裂）とその後の枝末分裂、そして大乗仏教に至る研究書を独学した。

そして仲基独自の「加上」（上書き）という概念を打ち立てる。つまり始祖の所説（主張・教え）・思想など後世の人により受け継いでいるかのようにみえても、後世の人間の心理から「前説に書き加えられ学派に分かれていく」というものである。

仲基は三教（仏教・儒教・道教）すべて、始祖から異

なったものになっていると主張した。仏滅後四～五百年を経て始まった大乗仏教は、仏陀が直接説いた教えではないとし、「大乗非仏説」を自らの方法論から論理的・歴史的に主張したのである。

無論仏教各派からは単なる排仏論として反論されたが、国学の本居宣長は仲基の説を高く評価した。続いて神道復活を目指す平田篤胤は、主著『霊の真柱』や『出定笑語』で仲基説を引用して排仏論を唱え仏教批判を繰り返した。

その後富永仲基の「大乗非仏説」は一時忘れられていたが、一八九〇（明治二〇）年代、後に京都大教授となる三〇歳前の若き内藤虎次郎（湖南）が富永仲基を「学術的な研究方法で仏教を批判的に研究した市井の天才町人学者」として再評価し、雑誌『日本人』や講演で紹介した。

一方西欧の歴史研究方法を学んだ宗教学者姉崎正治（英留学後東大宗教学初代教授）や村上専精（後東大印度哲学初代教授後大谷大学学長）らが富永仲基の大乗仏説批判を称賛した。真宗大谷派僧侶の村上専精は、光瑞が西欧留学中の一九〇一年『仏教統一論』や『大乗仏説論批判』（〇三年）にて、大乗仏教は「歴史的立場から非仏説を、教理的立場からは開発的仏教」（仏陀が大乗仏教を直接説いたものではないが、仏滅後教えを開発発展させた仏教）であると主張した。そして小乗仏教は「仏陀が説いた言葉を忠実に伝えた」が、大乗仏教は仏陀の説教の「言句外に真理を求めようとする」ものであるとした。

村上はいずれの仏教も仏滅後四―五百年後に初めて文字・文章化され、小乗でさえも「開発発展」（富永の加上説にも似通る）したものとした。そのうえで、大乗仏教を非仏と結論づけた。真宗大谷派僧侶として大乗仏教は「仏陀の教えを発展的にさせたもの」として積極的に評価できるが、仏教史学者としては歴史的には「仏陀の説いたいわゆる仏説ではない」としたのである。しかし浄土真宗正衣の三部経典はあくまで仏説とし、真宗大谷派は村上の僧籍を剥奪した。

西欧近代言語学は、印度梵語とイラン語が同じ語族に属していたことを発見し、イラン古語から派生したギリシア語・ラテン語が似通っていることから、既に印度では消滅したパーリ語・梵語の理解が容易であった。そのため西欧の仏教学者は早くからパーリ語や梵語の仏教経典を直接研究することが可能であった。キリスト教の研究を通じ歴史的釈迦の研究が進み、一九世紀には仏教の研究では仏教国中国・日本を凌いだ。

仏教原経典を直接理解した西欧では、釈迦の教えを伝えたと思われる上座部（南伝）仏教を研究対象とした。一方大乗（北伝）経典は釈迦の教えを直接伝えたもので

はなく、紀元前後から逐次新たに編纂されたことから大乗偽（非）仏説であった。当時西欧学者には漢文・漢字が理解できる仏教学者は少なく、まして日本語が分かる学者はほとんどいなかった。

明治一〇年代真宗大谷派南條文雄は西欧留学中に漢籍の知識を生かし、第一人者マックス・ミュラー（英オックスフォード大学教授）を補佐して『大無量寿経』『阿弥陀経』『般若心経』の梵語テキストを出版した。パーリ語・梵語の原典を読解する西欧研究者と漢訳経典を修得した日本留学生との共同作業により完成した。南條は『大明三蔵聖教目録』を英訳、『南条目録』といわれ現在でも使用されている。

南條およびその後の高楠順次郎（在家本願寺派）ら留学生との共同研究により次第に大乗仏教・漢訳経典・日本仏教は理解され始めたが、依然として多くの仏教学者は大乗偽仏説であった。

明治末期身内である村上からの大乗非仏説に対して、歴史的に仏説論を証明できる（上座部と根本分裂した大衆部に大乗経典が存在した）として、本願寺派前田慧雲は反論を展開した。しかし歴史・発達史的および論理・実証的な研究が進むと、仏説は最古の経典「阿含経」でさえほんの一部のみであり、大乗経典は仏滅後五百年後から出現し始めたことが判明、もはや歴史的には「大乗仏説論」は論証できなくなった。

釈迦の直説でないのであれば、「大乗仏教は誰が創ったのか」という大乗仏教起源論争が賑わすことになる。

入滅直後仏陀のお教え（経）と仏陀の定めた生活規則（律）の確認をした第一結集、百年後の第二結集で上座部（保守派）と大衆部（改革派）に分裂（根本分裂）する。その後三百年かけて各々一〇前後に分裂（枝末分裂）する。この大衆部と言われる部派から大乗仏教が起きたとされ、早くから「仏陀の弟子や出家者」により成立したとされた。

戦後平川彰東大教授が提唱した「大乗在家起源説」（仏塔を中心に集まった「在家信者」が創ったとする）が多くの仏教学者の支持を得た。しかし平成に入り国内外から平川説に異論が出され、現在では「大乗仏教出家起源説」（出家者・僧侶・寺院と在家・信者・支えた人々との混合体により経が形成された）が主流になった。

これら論争を通じ、大乗偽（非）仏説は「歴史問題としては内外の仏教学者から支持され異論の出ない」定説となり決着した。次にもう一つの「教理面で大乗仏教が仏説であるか」という課題に移る。

近年大乗仏教の核心である「自利利他」（自分を利するすなわち解脱するそして他人を救済する）「自覚覚他」（自分が悟り他人を悟らせる）など、自らを捨てても他者を救済するという「他者の救済」（利他行）を掲げる「偉大性」が欧米でも見直されてきた。そして大乗仏教は「釈迦の教えを頑なに護る上座部より、はるかに国際性・人類愛・慈悲性など優れた仏教」との見方が一般化してきた。

今日では「大乗仏教こそが仏陀の教えを伝え」ており、しかも「教えを発展させたものである」とする見方が欧米に受け入れられている。漢字（中国語）で書かれた大乗経典を読解できる海外学者が増え、日本・中国仏教に対する理解が深まったことも一因であろう。

明治期以来日本仏教は近代仏教学の先端を行く西欧の「大乗偽（非）仏説」によりその正統性を否定され、研究対象として価値のない辺境の二流宗教にみられ身をかがめてきた。大谷光瑞の壮大な中央アジア探検や秘密の国のチベット仏教修得は、欧州の「大乗偽仏説」を打ち破らんとするものであったが、二一世紀の今日、大乗偽仏説を声高に主張する者はようやく姿を消しつつある。

二　チベット仏教の行方

ダライ・ラマ一三世は浄土真宗本願寺派僧侶青木文教と多田等観の二人を、一九世紀後半から厳しく実施してきた鎖国政策の例外処置として入国を許し、留学生としてラサで厚遇した。

宗主国を標榜する中国は共産党の勢力が強まり、国民党および各地軍閥の三すくみ状態となり統一は進まなかった。しかも日本との紛争が絶えずチベットへ介入する余裕はなかった。またチベットを支援する英国から、対日戦争の武器弾薬の支援を受けていた。これら内外事情から、独立国を主張するダライ・ラマ一三世政権に対し強い態度が取れない状況が続いた。青海省との国境付近では紛争が絶えなかったが、ラサは平穏であった。

将来に備えて議院内閣制・郵便制度・紙幣発行など近代化を進める一三世は、三三年五七歳で突然死亡した。これには近代化反対の保守派や軍部により暗殺されたとする記事をロイター通信社が報道した。

一三世は英国や清・中華民国政府からの侵攻に悩まされ続けた一生であったが、振り返れば政教双方の最高権力者に君臨して一生を送ることができた。二〇世紀に入り英国軍の侵攻ではモンゴル・清へ、中華民国の侵攻では印度へ亡命し、通算一〇年にわたり亡命生活を余儀なくされた。しかし後半生はチベットに対する圧力が弱まった時期であり、辛亥革命以後一三世にとっては幸運な二〇年であった。

一三世の死後正統な化身（転生）を探し出す厳格な手続が進められ、三九年当時四歳の幼児を認定、四〇年ラサポタラ宮でダライ・ラマ一四世が誕生した。この輪廻

転生制度による後継者の認定については、日本代表部HPにその正統性が詳細に説明されている。

四九年国内を統一した中国共産党による中華人民共和国が成立すると、チベットの独立性は黙認されず、五〇年解放軍侵入、五一年には屈辱的な一七条協定の締結を余儀なくされ実体は自治区となった。その後朝鮮戦争の影響は大きく、一四世をチベット民族代表として常務委員会副委員長に就任させるなど懐柔策が取られた。

五九年政教一致の原則とチベット仏教布教の自由を求め、ラサで大規模な暴動（ラサ市民武装蜂起）が起きた。鎮圧のため人民解放軍がラサに進駐、ダライ・ラマ一四世と政権幹部八〇人はネール首相の支援を得て、印度北部カシミール近くのダラムサラに逃れ亡命政府を樹立した。

毛沢東政府のチベット統治は残った僧侶・信徒にはとりわけ厳しく、何十万人といわれるチベット人が虐殺された。中国は認めないが、国連はジェノサイド（民族・宗教上の集団を迫害し殺戮）と認定した。

中国はダライ・ラマ一四世の亡命を助け反乱軍（反中国運動）を支持した印度ネール政権と対立を深め、六二年には大規模な中印国境紛争が発生した。また印度を支持するソ連との深刻な対立を招き、珍宝島の領有権をめぐって中ソ国境紛争が発生軍事衝突に及んだ。

亡命した一四世は世界各国から招聘を受け、信教の自由と人権問題を世界へ訴え、チベットの独立あるいは自治権拡大を主張し続けた。

ラサでは毎年独立を要求する大規模なデモや抗議の焼身自殺が起き、炎に包まれながら読経する僧侶の姿が報道された。中国政府は武装警官隊やさらに治安部隊を派遣、八八年・八九年の大規模な反乱時には戒厳令を布告し人民解放軍を出動させ鎮圧した。

繰り返される弾圧や死者の増加を憂え、一四世は八七年米国議会でチベット全土を平和地帯とする「和平五項目案」を提案する。これまでの主張を譲歩させた現実的な解決策を示し、中国政府との対話による解決を訴えた。自治権を持つ民主的なチベットを建設し民族の基本的権利を回復するとともに、中国側の既得権を配慮しまた印度との対立緩和を狙ったものであった。

一四世はその後欧州を訪問、フランスや欧州議会でも同様な主張を繰り返し各国の賛同が得られた。中国政府のチベット仏教徒弾圧に対し、米国を始めとする民主主義国は強く非難する声明を出すに至った。

八九年秋、ダライ・ラマ一四世は非暴力による平和解決を求め続けたことが評価され、ノーベル平和賞を受賞した。受賞を機に、再び一四世の言動に世界の注目が集まった。

中国では毛沢東が主導した大躍進運動の失敗とプロレタリア文化大革命の大混乱を経て、七六年結党以来の中心人物毛沢東と周恩来の相次ぐ死去により、最高実力者鄧小平主導の改革開放政策による経済優先路線に転換する。その後経済発展が拡大し世界第二位の経済大国に成長、近年独裁色を強める習近平政権の下では米国との対立が激化した。そのため国内では「中華民族の共同体意識」が「民族団結の基礎」とし、「中華民族全体の利益」を優先させ共同体意識を高めることに注力している。

この政策では少数民族の独自性よりも、「中華民族」としての一体性が優先される。なによりも共産党への忠誠が重視され、共産党が「宗教・信仰に優位する」とした「宗教の中国化」が推進される。今日内モンゴル自治区のモンゴル族、新疆自治区のウイグル族に対し、中華民族への一体化策を強めている。チベット民族については、すでに解決済みの国内問題として海外からの批判を一切受け付けない。政治・宗教の最高権威者ダライ・ラマ一四世の亡命は既に六〇年を越えており、分離化を企む人物として直接対話や米国の人権問題の追及にも全く扉を閉ざしている。

ラサでは近年高速鉄道の開通・高層化による再開発・漢民族の入植などの経済発展による同化政策と張り巡らせた監視カメラの設置により、仏教徒の抗議活動は抑え込まれている。しかしチベット仏教最高指導者ダライ・ラマ一四世の肖像写真を隠れて所持するチベット人は三〇〇万人、チベット寺院三六〇〇か所が現存しており、活仏ダライ・ラマ一四世への崇拝は依然として篤い。

ダライ・ラマ一四世が共産党より上位に位置付けされることは、国の分離・独立につながる脅威とみなし、最近では一四世の写真を掲げまた隠し持つだけで拘束される。一四世を一貫して「分裂主義者」と決めつけ、ラサへの帰還は見込めない状況が続いている。

一〇〇年前共産党の結党では少数民族の「自決権」を認めたうえで、「連邦制」を唱え「信仰の自由」と住民の「言語」を尊重するとした。共産党一党支配により世界第二の強国に成長した今、少数民族の自治と文化は全面否定され、チベット自治区のチベット仏教徒・新疆ウイグル自治区のイスラム教徒・内モンゴル自治区のモンゴル人の蒙古語は弾圧が強化されている。

辛亥革命直後の一九一一年一二月清国から独立を宣言したモンゴル（外モンゴル）はチベット仏教徒の国であるが、チベットとは全く異なった道を歩んだ。一五年ロシア帝国・中華民国・モンゴル国の間で、内モンゴル（現内蒙古自治区）は中華民国に譲ったが、外モンゴルの大幅な自治を認めさせることに成功し完全独立の足掛かりをつかんだ。ロシア革命後モンゴル人民党により二四年

モンゴル人民共和国を建国、ソ連の後押しを受け完全な独立を果たした。

共産党体制になりチベット仏教寺院・僧侶・信徒は一時厳しく弾圧された。しかし冷戦終結後のソ連邦崩壊と同時に一党独裁による社会主義体制を放棄、一転共和制に戻し「モンゴル国」に改称した。これにより同国のチベット仏教徒は弾圧から解放された。

二一世紀に入ってからは隣国ロシアと中国の間で均衡を図り、また第三の隣国日本や米国とも融和政策をとり経済発展を続けている。チベット自治区での信教の自由が許されない現在、モンゴル国でダライ・ラマ一四世を仰ぐチベット仏教は生き残る可能性が高い。

嘗て両国は同時期宗主国中国から独立したが、チベットダライ・ラマ政権と異なり、中・露・米・日との巧みな外交により、独立を保ち独自の道を歩むことができたといえよう。

中国共産党政権の宗教政策は、憲法三九条で「公民は信仰の自由を有する」「国家は正常な宗教活動を保護する」と明記されている。しかし何が「正常な宗教活動」であるかという判断は政府にゆだねられる。江沢民・胡錦涛政権では社会主義制度と共産党支持することが第一義としつつも、宗教が備える精神的・組織的作用を活用する政策により宗教を肯定的に捉えた。その後の習近平政権では、宗教を無視し共産党を最上位とすることを徹底的に要求する。近年海外との結びつきを極端に懸念し、ローマ法王を崇拝するキリスト教徒までも弾圧を強めている。一党独裁を堅持し米国と対峙するため、毛沢東から一貫して流れる「宗教は毒」とする認識が強いのであろう。

チベット仏教徒は何よりもダライ・ラマを敬うのだが、これは一切許されないものとなった。亡命政権とダライ・ラマ一四世に米国政権が支援すればするほど、中国は一四世を分裂主義者として厳しく非難する。習政権は経済力を背景に宗教の「中国化」を一段と推し進め、ラサでは経済開発の名のもとに漢民族がチベット族を圧倒し仏教徒を封じ込めている。

自治区全土のチベット仏教徒への弾圧は依然として続いており、新たに首相を選任し初めてチベット仏教の最高位のみになったダライ・ラマ一四世は、現在八七歳になる。

次の一五世への継承という難題を抱え、今後「チベット仏教は存続できる」のであろうか、世界の多くの人が危惧している。

（第一部完）

参考文献

青木文教　『秘密の国西蔵遊記』　中公文庫
赤沼智善　「舎衛城及び祇園精舎の研究」『仏教研究一』　中公新書
赤松明彦　『楼蘭王国』　平楽寺書店
赤松笠原編　『真宗史概説』
荒川柴田編　『シルクロードと近代日本の邂逅』勉誠出版
池田　温　『敦煌文書の世界』　名著刊行会
池田　誠　『中国現代政治史』　法律文化社
井上鋭夫　『本願寺』　講談社学術文庫
猪瀬直樹　『唱歌誕生』　中公文庫
入澤　崇　「スリランカの大谷探検隊」『パーリ学仏教文化学』
ヴィータ　「西本願寺の教状視察とイタリア訪問の足跡」『立命館言語文化研究20―2号』
宇井伯壽　『仏教思潮論（著作選集3）』　大東出版社
上原芳太郎編　『新西域記』　有光社
上原専祿　「鳩摩羅什考」　『一橋論叢』　22―(1)
上山大峻　「大谷光瑞と大谷探検隊」『阿弥陀が来た道』（佐藤健一）　毎日新聞社
内山精也　「蘇軾廬山真面目考」　『中國詩文論叢十五』
慧皎（えこう）『高僧伝』吉川忠夫船山徹訳　岩波文庫
大澤広嗣　『戦時下の日本仏教と南方地域』　法藏館
大竹　晋　『大乗非仏説をこえて』　国書刊行会
大谷光瑞　『支那論』　民友社
大谷光瑞　『大谷光瑞興亜計画』　大乗社
大原実代子　「本願寺旧蔵品のゆくえと大谷尊由」『本願寺史料研究所報五六号』
岡田和裕　『満州の土建王榊谷仙次郎』　潮書房光人社
岡田行弘　「大乗経典の世界」『新アジア仏教史3』佼成
岡本隆司　『教養として中国史の読み方』PHP研究所
小川原正道　『近代日本の戦争と宗教』　講談社メチエ
奥山直司　「明治印度留学生」『印度学仏教学研究64②』　国華社
香川默識編　『西域考古図譜』
梶谷裕一　『大乗仏教の誕生』　講談社学術文庫
加藤聖文　『満鉄全史国策会社の全貌』講談社学術文庫
苅谷定彦　「出家とは何か」『印度学佛教學研究52―1』
河口慧海　『チベット旅行記』　講談社学術文庫
川瀬弘至　『孤高の国母　貞明皇后』　産経新聞出版
関　偉　「孫文の『大アジア主義』と日本の大アジア主義」『大阪府大人間文化学研究二〇〇九』
金龍木越編　『顕如』　宮帯出版社
栗田英彦　『大正初期浄土真宗本願寺派における教団改革と信仰運動』　『アジア遊学』一五六号
クレーマ　「近代日本における宗教概念の西洋的起源島地默雷のヨーロッパ滞在」『宗教研究88』
玄奘　『大唐西域記』水谷真成校註　東洋文庫
講談社編　『親鸞めぐり旅』　講談社
小林英夫　『日本のアジア侵略』世界史サブレット

小林亮介「日本・チベットの邂逅と辛亥革命」『明治維新を問い直す』九州大学出版会
嵯峨　隆「孫文のアジア主義と日本」慶大法研79-14.
坂井祐円「仏教はケアに向いている思想なのか」京大
佐々木閑「大乗仏教の起源に関する諸問題」『仏教学セミナー』（大谷大学2014）
佐藤一郎「中国人の翻訳論」『日本中国学報第四』
三蔵法師の道研究会『三蔵法師とシルクロード』朝日新
信楽峻麿『親鸞はどこにいるのか』法藏館
司馬遼太郎『木曜島の夜会』文春文庫
柴田幹夫『大谷光瑞の研究』勉誠出版
渋谷治美「親鸞思想の絶対他力の秘密」『埼大紀要』
釈　徹宗『天才富永仲基―独創の町人学者』新潮新書
『週刊日本の美をめぐる　平等院と極楽浄土』小学館
『週刊日本の美をめぐる　地獄草紙と餓鬼草紙』小学館
徐松『西域水道記』（中国歴代西域紀行選）ベ社
白須浄眞『忘れられた明治の探検家渡辺哲信』中央公
白須浄眞『大谷探検隊とその時代』勉誠出版
白須浄眞「明治四一年八月の清国五台山における一会談とその波紋」『広大大学院教研科紀要56』
真宗教団連合編『親鸞』朝日新聞出版
親鸞会『どちらがウソか』浄土真宗親鸞会
吹田隆徳「般舟三昧と仏随念の関係について」『印度学佛教学研究第六五巻第一号』
末木文美夫「大乗非仏説から大乗仏教成立論」春秋社『シリーズ大乗仏教10 大乗仏教のアジア』
菅野博史「富永仲基と平田篤胤の仏教批判」『国際哲学研究』別冊6
杉森久英『大谷光瑞』中央公論社
スタイン『中央アジア踏査記』沢崎順之助訳　白水社
スマナサーラ『ブッダの聖地』サンガ
關尾史郎『西域文書からみた中国史』山川出版社
関口安義「評伝矢内原忠雄」『都留文大学研究紀要35』
僧祐『出三蔵記集』中島隆蔵編　平楽寺書店
早田啓子「浄土教略史」『学苑』第八四五号
高木健夫『唐詩選の旅』講談社現代新書
高楠順次郎『高楠順次郎全集第一巻』教育新潮社
高田好胤『インドの仏蹟大唐西域記の旅』講談社
高田好胤『ガンダーラ大唐西域記の旅』講談社
高本康子『ラサ憧憬青木文教とチベット』芙蓉書房出
武田健一「岡西為人先生半生記由来」『漢方の臨牀』
多田明子『チベット大蔵経にかけた生涯』春秋社
立川武蔵『仏教原論』角川書店
橘　瑞超『中亜探検』中公文庫
立松和平『鳩摩羅什』俊成出版社
ダライ・ラマ『ダライ・ラマ自伝』文春文庫
丹波　元『明如上人抄』PHP
地球の歩き方編『地球の歩き方インド』ダイヤモンド

陳　舜臣『シルクロードの旅』平凡社
陳　舜臣『孫文　辛亥への道』中公文庫
陳　舜臣『シルクロード第五巻天山南路の旅』NHK出
塚本善隆外『不安と欣求』（仏教の思想8）角川文庫ソ
辻岡健志「僧侶から政治家へ」『本願寺研究所報39』
筒井清忠編『昭和史講義2』ちくま新書
津本　陽『大谷光瑞の生涯』角川文庫
ディヴィット・アイマー『辺境中国』白水社
東郷孝仁「紅巾の乱研究の動向と課題」『東洋史訪』
徳富蘇峰『大谷光瑞師の生涯』大空社
トネP・A『チベット受難と希望』山本一郎訳岩波現文
戸部良一「日本の戦争指導」『戦争史研究国際フォ6』
富島信海「本願寺の系譜」『浄土真宗総合研究10』
富永孝子『大連空白の六百日』（改訂新版）新評論
富永仲基「出定後語」『日本思想体系43』岩波書店
トール『シルクロード歴史大百科』岡本訳　原書房
永井　和「波多野敬直宮内大臣辞職顛末」『立命館文学624号』
中込勝則『蘇東坡～栄光と弾圧と』慕史堂文輯
長澤和俊『シルクロード』講談社学術文庫
長澤和俊『世界探検史』白水社
中村　元『中村元の仏教入門』春秋社
中村　元『仏典を読むブッダの生涯』岩波書店
中村元他『浄土三部経（上）（下）』岩波文庫
名畑・多屋『日本古典文学大系親鸞集日蓮集』岩波書店
並木・井上『世界の歴史一九中華帝国の危機』中公社
西原祐治『浄土真宗の常識』朱鷺書房
西脇常記「トルファン漢語文書と大蔵経」愛知学院大
二宮嘉須彦「親鸞の他力思想」不明
ハンセン『図説シルクロード文化史』田口訳　原書房
早田啓子「西北インドとジャータカ」『昭和女大学苑』
原田　覺「チベット大蔵経」『東洋学術研究一〇五号』
東本願寺「正信偈の教え大乗無上の法」『真宗の教え』
平川　彰『仏教通史』春秋社
平山郁夫『玄奘三蔵祈りの旅』NHK出版
藤村久雄『革命家孫文』中公新書
佛教史学会『仏教史研究ハンドブック』法藏館
ブリーン「明治初年の神仏判然令と近代神道の創出」『明治聖徳記念学会紀要43号』
碧海寿広『考える親鸞』新潮選書
ヘディン『アジアの砂漠を越えて』（横川訳）白水社
ヘディン『さまよえる湖』（関楠生訳）白水社
ヘディン『チベット遠征』（金子民雄訳）中公文庫
保坂俊司監『図解仏教入門』ナツメ社
保阪正康『孫文の辛亥革命を助けた日本人』ちくま文
礪波・武田『世界の歴史六隋唐帝国と古代朝鮮』中公社
堀　賢雄『大谷探検隊西域旅行日記』白水社
本多隆成『大谷探検隊と本多恵隆』平凡社

本多隆成　『シルクロードに仏跡を訪ねて』吉川弘文館
本願寺史研　『本願寺史増補改訂』　本願寺出版社
松枝茂夫編　『中国名詩選』　岩波文庫
松下満連子　『再見大連』　謙光社
松原泰道　『仏教入門』　祥伝社
水嶋都香　『拡大シルクロード全史』　第一書房
水原史雄　『安芸門徒』　中国新聞社
三谷真澄編　『大谷光瑞の構想と居住空間』　法藏館
三保忠夫　「トルファン墓葬出土文書における量詞の考察」　『島根大教育学部紀要26』
宮崎市定　「トルファン発見田土文書の性質について」　『京大史林43―3』
ミラー・トム　『中国の「一帯一路」構想の真相』原書房
村上　護　『島地黙雷伝』　ミネルヴァ書房
護　雅夫　『遊牧騎馬民族国家』　講談社現代新書
森　雅秀　『チベット密教仏図典』　春秋社
矢島嗣久　「大谷光瑞鏡如上人について」『別府史談7』
安田利枝　「大東亜会議と大東亜共同宣言をめぐって」　『慶応大学法学研究六三―2』
山口輝臣　『島地黙雷』　山川出版社
山田信夫編　『ペルシャと唐』　平凡社
楊　衒之　『洛陽伽藍記』　入矢義高訳注　東洋文庫
ユネスコ世界遺産センター監修　『インド亜大陸』講談社
脇　鉄一　『ある市長のノート』　脇事務所
ル・コック　『中央アジア秘宝発掘記』木下龍也訳中公文
渡辺章悟　「大乗経団の謎」『新アジア仏教史2』佼成
渡邊直樹編　『宗教と現代がわかる本2009』　平凡社

高山右近（十四）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

天国を仰ぎみて（1）　金沢～今庄

慶長十四年（一六一二）一月十二日、早く目覚めた右近は二階の雨戸をあけて外を見ると、雪は降ってはいないが、黒い雪雲が空一面を覆っている。

今日は私たちの主イエス・キリストが捕らわれて、十字架に架けられるためにゴルゴタの丘の坂道を歩まれた、その歩みと同じ「天国を仰ぎみて」の歩みが、高山家・内藤家に始まる日だ。城からの指令は、巳之刻には城門前に、高山一家眷属八人（右近夫妻、ルチア、十太郎以下孫五人）、内藤一家眷属十人（内藤如安夫妻と子供三人、内藤好次と子供四人）、宇喜多家五人（宇喜多休閑とその子四人）が集合を命ぜられている。高山家は幼い孫もいることから、京都までという条件で、岡本惣兵衛、生駒弥次郎、侍女二人を従者として連れている。

この時期では、卯之刻が過ぎてもまだ夜は明けきっていない。突然門をたたく人がいるので、右近が飛び出してみると、横山家老からの急使が飛び込んできて横山家老の伝言が口早に伝えられた。その内容は

『「高山長房とその一行、謀反の兆しあり」として、筆頭家老本田政重が武装した家臣五十名を揃え、城内で高山謀反に備えている』

というもの。

右近は昨夜遅くまで、親しかった人々と最後の別れの集いを賑やかにやっていたことが、「謀反の兆しあり」と判断されたと思ったが、「右近、謀反」などは、今までの右近の前田家への忠誠ぶりを知っている人からはは考えられないことであった。「謀反の兆し」と判断したのが、最近徳川家の意向で前田家の筆頭家老に就任したばかりの本田政重では、それ以前二十六年間の歴代城主

と右近との信頼関係を知らないことからくるものと、残念に思うと同時に、右近は本田家老と、そのような警戒態勢を一切無視することとした。

城門前に行くと、前田家家老の重鎮篠原出羽守が、右近以下虜囚一行の護送隊の総指揮をとり、その下で浅野将監が護送の細部までの指揮を執ることになっていた。右近は篠原出羽守とは小田原戦で共に戦い、お互い理解し合った中ではあったが、浅野将監は右近の役宅の細かな修繕迄口を出してくる「融通の利かない男」として理解していた。

城門の外からは、高山謀反に備えるとした城側の体制は何一つ見ることはできなかった。

浅野将監が職務上、護送される虜囚一人ずつの衣服内の持ち物検査を始め、刃物は懐中用の小刀迄取り上げていた。

出発に当たり、全員の立っているところに罪人護送用の唐丸駕籠が置かれた。浅野将監が右近をそれに乗せようとしたとき、出羽守が

「高山殿は人格識見ともに優れ、前田家家老として幾つかの戦いや築城で、前田家に大変貢献されたお人である。そのようなお方を唐丸駕籠に乗せるわけにはいかない」

と言ったところ、浅野将監が即座に

「主命でございますれば」

と反論、すかさず出羽守が

「もし旅の途次何かあればこの篠原が切腹すれば済むこと。高山殿を唐丸駕籠にお載せするは加賀一国の恥。網代駕籠を高山殿の所に運びなさい」

と命じ、浅野将監の口を封じた。出羽守が事前に用意させていた網代駕籠が右近のところに運ばれると、出羽守は右近に深々と礼をして

「高山殿、お腰のものもお持ちになって、お乗りください」

というと、右近は

「腰のものは遠慮します、このお駕籠はお借りします」

と言って乗り込んだ。

右近が網代駕籠に乗り終えると、それを待っていたかのように、馬上の出羽守を先頭に、護送隊は出発した。槍を持った浅野将監の部下達が護送隊士としてこの行列を取り囲み、「この行列は何を犯した重罪犯人たちの護送なのか」と思われるような行列になっていて、初日の今日は、護送隊の殿(しんがり)は浅野将監が担当していた。

行列が城門から少し離れると、そこには右近たちを見送る人々が道路の左側に大勢立っていた。右近も駕籠の左のすだれを上に巻き上げ、日が合った人々に丁寧に挨拶していた。その群衆の中に、料理越前主人をはじめとする茶会の仲間の顔、明日からでも横山家老に仕官する右近の部下達の顔、その他多くの顔を見て、見送りに来てくれたことの感謝から、右近は、金沢での「二十六年

の歳月」の一コマ一コマが頭に浮かんでは消え、消えては浮かんでいた。

右近たちの行列が、金沢の西端、寺町に来ると、もう見送りの人々も見えなくなっていた。そこで右近は駕籠から降りると、先を行く出羽守が何事かと戻って来て

「高山殿、駕籠をお使いください」

というと、右近は

「我が主(しゅ)のイエス様は、自分がこれから磔(はりつけ)になる十字架と共に、十字架を建てるゴルゴタという丘までお歩きになられました。私も主(しゅ)イエス様に倣って歩いて行くことによって、イエス様がどのようなお思いで天国を仰ぎみながらの歩みを歩かれたのかを少しでも感じ取ることができればと願っています。歩くことができるところは歩かせてください。ご親切は感謝します」

とお願いすると、出羽守は「分かりました」というように大きく頷き、行列の先頭に戻って行った。

右近が歩き出すと、今迄馬に乗せられていた孫たち迄「歩く」と言って馬から降ろしてもらって歩き出した。孫たちも「ジジが歩く」のを見て、子どもなりに早足で歩いている。とはいうものの、行列が遅くなりだしたので、右近が孫たちに「馬に乗せてもらうように」と勧めて、孫たちも納得して再び馬に乗った。

一行は金沢の西端、寺町を過ぎて、北國街道を京都に向かって進んでいた。方向としては南西の方向に歩いているのだが、降りだした雪と北風が冷たく顔に当たり、目を開けているのも大変だった。

一行は加賀から隣国越前に入った。松平家譜代大名七十五万石の土地で、何事にも格式が高い。領地境の「国境の関所」では、手続きが多く半刻以上かかり、出羽守がイライラして関所役人に注文を付けていたが、らちが明かない。漸く国境の関所を通り抜け、府中を過ぎたあたりから、歩く足元は昨夜から降った雪の上に雪が積もって、草履を履いた両足が雪の中に埋まってしまい、歩くために足を持ち上げるのに大変苦労する。加えて足元から寒気が体中に伝わるので、幼い孫たちは男たちが背負い、ジュスタやルチアも、男たちの応援を受けて歩を進めていた。

日没前にようやく今庄の関所に着いたが、一月で日暮れも早く、この風と雪ではこれ以上歩くことは無理と判断、今庄の関所に依頼して、全員衣類を着たままで一泊することにした。

一行は、風と雪のない屋内で暖かな夕食を摂ると、全員初日の疲れと寒さから解放され、眠ることができた。右近は幼い孫たちが雪と風の中を歩いたので、発熱と足先に出来ていた凍傷を心配したが、発熱はなく、足先の

凍傷は軽く、乾いた手拭いで包むようにして、いつの間にか眠っていた

天国を仰ぎみて（2）今庄～栃の木峠

今庄は、近江へ向かって栃の木峠へ行く道と、敦賀へ向かって木の芽峠に行く道との分かれ道になっており、ここで敦賀に護送される宇喜多休閑たちとは別れた。

今庄から先の山道は更に雪が深く、履いている藁草履では、足が埋もれて歩くことは困難で、杣人（注①）が履いている「和かんじき」を関所で分けてもらって、各自の藁草履の下に着けた。

注①
杣人とは、材木用樹木の切り出しを行う「きこり」のことであり、切り出した材木を杣木と言う。

府中からの山道は柔らかい雪が次々と積もっていて、人も馬も足が雪の中にもぐって思うように歩けない。馬の荷を降ろして山橇に移し、その橇を男たちが引いた。人間が歩く場所は、浅野将監をはじめとする護送隊士たちが踏み固めた上を右近たち虜囚が歩み、この日は殿を出羽守が務めていた。

右近がジュスタとルチアの歩きが遅れているのではないかと心配になって振り返ってみると、ルチアは一人の孫を背負い、もう片手でもう一人の孫の手を引き、元気に歩いていたのでホッとした。ジュスタは年齢的にも自分一人が歩くのが精一杯という感じだった。かくいう右近も、日ごろ鍛えている筈の足を持ち上げるのに時間がかかり、惣兵衛に助けられ、自分自身で老いの衰えを情けなく思っていた。立ち止まって、道の両側の林を見ると、時折、兎、羚などの動く姿が見られ、遠吠えをしている狼の声も耳に聞こえてくる。

一行が歩いているとにわかに黒雲が空一面を覆い、視界も一間先が見えない降雪状況になり、歩くことは全くできない。全員がそこで立ち止まってしまった。先頭を担当していた浅野将監も、足元が雪一面で歩くところが道なのか、そうでないのかも分からない。その状態を見た出羽守は浅野将監と部下たちに、やむを得ないのでこの場所で露営をして夜明けを待つこととし、風向から雪の降り積もる反対側の斜面に雪洞を掘ることとした。

ここで雪洞を掘ると言っても、虜囚だけで子どもと従者を入れて二十二人、護送隊士たちが十人で、三十二人が入ることができる雪洞が必要となる。そこで四～五人が横にならないまでも、座ることができる程度の雪洞を六つか七つ作るために、護送隊士たちも虜囚も協力し

合って雪洞作りを始めた。今までにも護送隊士がジュスタやルチア、幼い孫たちの歩きを助ける姿が見られていたが、この雪洞造りによって護送隊士と虜囚は立場が違ってもお互いを理解し、協力体制ができる状態になった。

出来た雪洞に、護送隊士たちがどこからか枯れ木を持ち込んで焚火をし、雪洞の中を暖かくして回った。虜囚たちも雪洞の中での温かさと、熱く沸かした湯と、焼いた握り飯で落ち着くことができた。斜面に一列に並んだ雪洞の両端に護送隊士が交代で不寝番をすることとした。他の人たちは疲れと、暖が取れたことから、自分の荷物を雪洞の中の雪壁と自分の背中の間に置いて、自分の荷物に寄りかかって、座ったままの姿勢で眠りについていた。

右近はこのように視界も効かず、降り積もった雪で人間が歩くこともできない状態を眺めながら、柴田勝家と秀吉の最後の戦を回想していた。柴田勝家は雪道は経験があるとはいえ、この雪では馬の背に鉄砲や食料を乗せて歩くことはできない。と言ってそれらを人間が橇に乗せて進むこともできない。少量のものならばなんとかなるが、決戦を前にした状態では、食料と言い、武器弾薬と言い、ちっとやそっとの量ではない。柴田勝家は北ノ庄で「どうにもならない苛立ち」をしていたのではないか。秀吉側は、柴田勝家が雪道を進軍できないうちに、近江で戦っている柴田側の佐久間盛政などを叩き、天候と降雪の状況が許せば一気に北ノ庄まで進むことを考えていた。その陣営には右近が一番手を務めていた。柴田勝家としては自軍の前進がままならない状況の中に、秀吉軍の状況も把握できず、どうにもならない。このように思ってゆくと、柴田勝家が気の毒に思えてきた。秀吉はそれを予見して、大軍を動員して雪で応援の来ない近江の柴田軍を徹底的に叩いていた。秀吉の先兵が勝家本隊と直接対決のころは、先に近江で秀吉と戦っていた佐久間盛政などは連戦の疲弊で、勝家本隊を支援できる状況ではなかった。

右近はそんなことを思っているうちに眠りにつき、目覚めて雪洞を出て外を見ると、上空の雪雲が動き出していて、雪は相変わらず降ってはいるが勢いがやや弱まり、周囲も見通しが効くようになっていた。今日の日中は明るくなる気配を感じた。

一同は雪洞の中で焚火を炊き、温かい焼きおにぎりと沸かした湯で朝食をとり、昨日の疲れもとれた様子で元気になっていた。しかし、山道に積もっている雪は降ったばかりの雪で足はもぐってしまう。全員昨日使っていた「和かんじき」を草履の下に着けて歩き出した。孫達にはジュスタとルチアが付けていた。

足元の雪は、護送隊士たちが先導して「和かんじき」

で足元を固め、その固めて歩きやすくなった処を右近たちが歩き、栃の木峠が見えるところまで来た。

今、この虜囚護送集団を見ていると、天下の罪人の逃亡を警戒しながら緊張して護送している状態からほど遠い、護送隊士たちが罪人に気遣いながら歩きやすくし、合間には「頑張れ」という掛け声もかけていて、とても天下の罪人を京都所司代迄連行している「護送隊士と罪人」の姿ではなかった。ここに至るまでの「今まで経験のなかった雪の中の歩きと雪洞掘り」などの助け合いがもたらした人間関係がそこには出来ていた。

天国を仰ぎみて（3）栃の木峠

栃の木峠での宿泊は、事前に古い寺が用意されていた。出羽守は広い広間に右近一家と供の者十二人、内藤如安一家十人を一緒にしてくれた。その他隣の小部屋の使用も許可した。

右近は今日の夕飯前に右近と内藤如安が代表して祈る祈祷会を開催することと、また明日早朝、ミサを行うこととし、事前に出羽守の了承を得た。その後、出羽守から、その祈祷会とミサを見ていていいか、という希望があり、右近は「どうぞご自由にご覧ください」と了承した。

右近は、出羽守から「祈祷会とミサを見たい」という希望が出たことは、彼にキリシタンの信仰はどのようなものかを見せる絶好の機会であり、キリシタンにある程度の好意と興味がなければ、このような申し出はあり得ないと思ったので、出羽守の希望を快諾した。

祈祷会は右近一家八人とその従者四人計十二人、内藤如安一家十人全員が夕食時に集まって、右近と内藤如安が代表して祈祷することとしていた。二人の祈りは

「想像すらつかなかった天候と悪路の中を、神様の御恵みのうちにここまでた来ることができた感謝と、明日以降も続く悪路の道程（みちのり）をお守りいただき、京都に近づくに従って江戸幕府の指定した罪人として厳しい対応が求められることに、全員が耐えることができるようにお導き下さい」

と祈った。

祈祷会が終わって食卓に向かうと、思いもかけないご馳走を見てビックリした。思いもかけないご馳走とは、護送隊士たちが雪で動けないでいた兎を何頭か獲っていたものを虜囚たちにも分けてくれたので、それをジュスタが美味しく調理したものであった。出羽守や浅野将監達も部下が調理したものがあったが、ジュスタの調理も配って喜ばれていた。野菜はジュスタが食べることのできる野草を獲って来ていた。

夕食が終ってしばらくすると、疲れて眠くなった孫達四人を、ジュスタとルチアと侍女二人が隣の小部屋に

行って寝かしつけて戻ってくると、出羽守がやって来て

「右近殿だけでなく、皆にも質問させてもらっていいか」

と言い出した。右近はそのとき出羽守に部屋の中の上座を勧めたが、出羽守は右近の隣に座った。右近が

「どのようなご質問ですか」

と聞くと、

「キリシタンの信仰のことだ」

と出羽守が言ったので、右近は皆の顔を見ながら

「それでしたらどのようなことでもお聞きください。念のためお聞きしますが、私たちの発言に、お上（かみ）に反論はしませんが、信仰上の考えはしっかり主張してよろしいですね」と念を押すと

「江戸幕閣への批判はあるだろうが、各自の信仰上の考え、思いは主張して欲しい」

と言って、まず最初に右近を見て

「貴方方はキリシタン禁制発令後も隠れることなく引続きキリシタンを信仰している。成敗されるがそんなに天国へ行きたいのか」

の問いに、右近が

「ご禁制はあくまでこの世のお仕置きです。信仰を守るためにこの世でお仕置きを受けても天国には行けます」

出羽守は一寸考えて

「では、天国行きのために、この世にいるうちに進んで御成敗を受けようとしているのか」

「そのような人は誰もいません。キリシタンの信仰をしていることにより、御成敗を受けることとなります。御成敗が嫌だから信仰をやめるということは、しっかりした信仰を持っている信徒にはあり得ないでしょう。また、御成敗されることを目標に、キリシタン信仰を持つような人はあり得ません」

このような質疑が延々と一刻程続いた。出羽守も、聞いている右近一家、内藤家一家も皆真剣に聞いていて、右近の考えを自分の考えと納得して、今の自分のあり方の正当性を確信していた。また、質疑が終わったとき、出羽守は座りなおして

「ご政道は厄介な者を相手にしているから・・・」

とまでは言葉に出したが、大きなため息をついて黙り込んでしまった。

出羽守も、右近たち一同も、黙ったまま時は過ぎて行ったが、その間、出羽守は内心

「この人たちはキリシタンを信仰することに信念を持っていて、そのためにこの世の為政者から死罪になることを恐れてはいない。この人たちには、死罪に当たるものは何もない。しっかりした考えを持っている人たちだ。この人たちにいろいろと聞いて見て、自分にとってキリシタンのことがある程度分かってよかった」

と、キリシタンをある程度理解した満足感があった。

出羽守は立ち上がる前に、右近に

「明日の朝やると言うミサも、どんなものか見せてもらっていいのか」
との希望が出され、右近は
「秘密のものではなく、キリシタン信徒が行うべき礼拝ですからご自由にご覧ください。場所はここで行います」
と答えると、出羽守は満足気味の笑顔で部屋を出て行った。

右近はこの席を散会する前に
「明日朝のミサはこの席で行う。朝食前に行うこととなるので、全員、時間は早いがここに集まるように」
と言ってから、内藤如安に
「内藤殿、十字架とパンと葡萄酒を欲しいが、何とかしなければならない。先ず、十字架を木の枝を組み合わせて作って欲しい。パンと葡萄酒は、これから出羽守にお願いして、朝食用のおにぎり一個と、今夜余っている酒を少々頂いて、一つ器から皆で少しづつ口に含むこととしよう。それらを置く台は、我々が持っている荷物を重ねて何とか作ろう」
と言って、パンの代わりにするおにぎりと、葡萄酒の代わりにする酒の調達に出羽守の部屋に出かけた。

翌朝、朝食が卯の刻から半刻後と言われていたので、全員卯の刻前に起床して部屋を片付け、ミサの準備を始めた。右近は昨夜出羽守にお願いしたパンの代わりに使うおにぎり一個と、葡萄酒の代わりの残り酒を集めて、太めの竹筒に入れて持ってきた。この竹筒の中の酒を、信徒が順に少々づつ口に含むこととした。

用意が整ったところで、昨夜「見てみたい」と言っていた出羽守を右近が呼びに行き、右近は出羽守をミサの聖職者（この場合は右近）と信徒のやりとりが良く見え、また聞こえる場所に案内した。

ミサでの右近の祈りの中でのメッセージは、今、自分たちが十字架に臨む主イエスの御足の後を歩んでいるが、日々の豪雪の中にも守られて、ここまで来ることが出来たことを感謝するものであった。ミサでの聖餐（せいさん）の祈りは、出羽守にも分かるように次のように分かりやすく祈った。

『イエスはパンを取り、讃美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これは私の体である」。また、盃を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この盃から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血である」』（注①）

右近はこの祈りを終えて、パンに擬した握り飯を千切って信徒に渡し、葡萄酒に擬した竹筒の中の酒を信徒が順に回して少量づつ口に入れ、全員が終ったところで賛美の歌を歌った。

以上ですべてが終り、全員で部屋の中に朝食の準備をした。

ミサをずっと見ていた出羽守は右近に
「どうして、信徒はイエスとか言う人の体を食べ、血を飲むのか」と聞いてきたので右近は
「食べるのではなく、イエス様の体に擬したパンと、イエス様の血に擬した葡萄酒を自分の体の中に入れることにより、イエス様そのものに自分が近づきたいと言う、信仰上この上ない願望を表しているのです。つまり信徒各自がイエス様を着たいのです」
と答えると、出羽守は
「有難う」
と一言言って自分の朝食の部屋に戻って行った。

そこで、右近たちは全員で朝食の祈りの後、食事を始めた。

注①
この祈りの全文は、現在使われている新共同訳新約聖書マタイによる福音書第二十六章二十六節から二十八節までの全文を引用。

天国を仰ぎみて（4）栃の木峠～坂本

全員朝食が終って、辰の刻に出発命令が出された。栃の木峠からは南向きの勾配を下る山道、降雪は殆どなく、頬に当たる風も、なんとなく柔らかさを感じさせてくれて、昨日までとは全く違っていた。行き先は琵琶湖北側の近江の木ノ本で、行程は三日間を予定していた。

思い返すだけでも苦しかった雪の山道。護送隊士も虜囚も一体となって協力して掘った雪洞。虜囚一人一人には、苦しかったけど今では懐かしい思い出になっている。

木ノ本に向って歩く山道は、同じ雪の上を歩いているにも拘らず、足が雪の中に潜らないので、大地をしっかり捉えている安心感があった。

木ノ本の宿に近付くと小さな余呉湖があった。余呉湖と琵琶湖の間には賤ケ岳がある。この賤ケ岳は右近にとっては忘れることができない古戦場であった。賤ケ岳の中の岩崎山・大岩山では、柴田側の佐久間盛政一万五千の兵を相手に、右近は一千の兵で戦ったが、兵力差は如何ともしがたく、全滅寸前に後方に陣取っていた羽柴秀長隊に流れ込み、辛うじて助かった経緯があった。

あたりの山々を眺めながら、当時の思い出にふけっていると、いつの間にか出羽守が右近の横に来ていて
「右近殿、京都所司代が直接管理せず、我々にまかせている宿舎は、ここ木ノ本の宿が最後になると思う。折角右近殿とこうして一緒にいられる間に、茶道を教えて欲しい。今夕、夕食後に私の部屋に来てくれないか」

との申し出があり、右近はこの囚われの道中に茶道具を開けるとは思ってもいなかったので、その場で快諾した。右近の茶道具は、手荷物とは別に、従者に運ばせているので雪の悪路では「持ち続けることができるだろうか」と大変不安があったが、何とか従者の努力で運んでくることができていた。

夕食後の茶会、先ず右近が亭主、出羽守が主客となって始めた。出羽守の要望により、茶道の作法一つづつを順に解説しながら、ゆっくりと進めて行った。二回右近が茶をたてて、その茶を出羽守は戴いた後、茶道具拝見の仕方も右近に教えてもらった。そのあと、出羽守が右近に教えて貰いながら茶をたてた。

終わって右近は

「出羽守様はご自分でかなりのところまでお出来になられるのに、どうして作法の一部始終をお聞きになられたのですか」

と質問したところ

「自信がなかったのです。今日、利休高弟の第一人者からこのように教えていただいたことは、人生の記念になります。有難うございました」

と挨拶された。

終わって、右近は自分たちの部屋に戻って、ジュスタ・ルチア・侍女二人から「湯船に浸かった」と嬉しそうに報告を受け、幾日ぶりかでさっぱりしているジュスタ達を見て心から

「良かった」

と思い、侍女から男の湯場がもうじき空く、という報告を受けたので湯を浴びることとした。

右近は湯を使いながら、自分たち虜囚の護送隊役人代表が出羽守でなかったら、おそらく厳しい監視と虜囚の立場という重苦しい旅が続いていたであろう、と思い、この旅が天国を仰ぎみる旅であるにも拘らず、このような監視役人と虜囚の間に人間関係が出来た旅を与えてくれた神に感謝を祈った。

いよいよ明日は京都所司代管轄下の坂本に着く。そこからは今のような護送隊士と虜囚との交わりは絶対になく、おそらく全員白装束を着せられ、周りに多くの監視役人がいて、我々は追い立てられるような状況になるであろう、と思っていた。

翌朝、木ノ本の宿を出発する前に、右近は全員を集めて

「今日、これから坂本を目指して歩くこととなる。我々はお上からキリシタンをやめよ、と言われて止めないので、罪人として京都所司代迄送られることとなっている。しかし、護送隊代表の出羽守様や護送隊お役人の皆様から、今迄大変なご好意を頂いて、坂本を目指すまでになってきた。坂本の手前に膳所城がある。そこは京都所司代の管轄下であるので、そこから護送隊士が京都所司代の役人に代わるであろう。扱いが一挙に何から何まで罪人扱いになるので、今の内から覚悟しておくように」

と全員に伝え、同時に、ジュスタとルチアに四人の幼い孫達を二人ずつ面倒見るように依頼した。

街道が琵琶湖の南端に近づくと、景色は右に琵琶湖、その向こうに比叡山となり、井伊家の高層の彦根城がはるか左向うに見える。右側は丘陵の荒れ地の中に、長浜城址が歴史を訴えるように存在していた。

やがて膳所城（徳川家臣戸田氏が城主）に着き、出羽守が「虜囚を連れて今着いた」旨を連絡すると、二十名近い京都所司代の侍が城から出てきて、虜囚を一人づつ名簿に基づいて出羽守から引き渡しを受けた上で、膳所城内に追い込むように連れて行った。

暫くして城から出てきた虜囚は全員白装束に着替えさせられていて、監視役人に囲まれて、坂本に向かい翌日昼に坂本に着いた。キリシタンの罪人を一目見ようと集まってきた群衆が、全員白装束の一行を見て「あれがキリシタン罪人だ」と、囁くと言うより大声で話し合っている声が聞こえた。

京都所司代から「虜囚たちを京都に入れてはいけない。また、高山右近に対する豊臣方からの接触は厳に警戒しなければいけない」との指令を受けている護送役人たちは、一刻も早く坂本の宿舎に連れ込もうと早足で歩いている。右近の孫達四人は、従者の背中におぶさったり、ジュスタやルチアに手を引かれて真剣な面持ちで一生懸命歩いている。右近は孫たちを一声励ましたかったが、護送役人の雰囲気から声が掛けられなかった。

坂本の宿舎は、古い寺で、寺の正面入り口は琵琶湖に面し、左右と後方は林に囲まれているが、今回の虜囚留置に伴い、寺の奥には外部に出られないように高い塀を造り、正面以外は一切出入りできなくしていた。右近たちは寺の庫裏の四部屋を与えられた。

今日は慶長十九年（一六一四）一月二十五日、金沢を出て十三日過ぎている。右近は思い返すと、右近にとっては長いような、短いような十三日間であり、よく全員揃って坂本に着いたと思う。

ここ坂本に到着したときに、右近と内藤如安は呼び出され、坂本での拘留について役人から

「京都所司代の命が下るまで、この寺にいてもらう。この寺の敷地奥には外部には出られない大きな塀があり、寺の前は琵琶湖で、後方の庫裏の先には、塀の内側に広くはないが少々の林もあるので、その中は自由に行動してよろしい。正面からとはいえ寺からの外出は一切禁止する」

との指示があった。右近はこの指示を聞いて、京都所

司代はここ坂本で、右近たちを京都市内に入れないで、死罪なり、国外追放なり、何らかの処分が決まるまでここに軟禁し、監視することにしたと考えた。ここにいるかぎり、外部とは全く絶縁状態で、仮に豊臣方が右近と内藤如安を味方につけようとしても、全く連絡は付けられないので、京都所司代としては、その面では万全の措置をとっていた。

右近にとって最も心配なことは、右近たちをバラバラにして、一人づつに信仰をやめるように説得されることだった。大人はいかなる説得にも大丈夫と自信があったが、幼い孫四人には例えば

「爺(じじ)もキリシタンの信仰はやめたと言っているよ。だから君も止めた方がいいんだよ」

などと、毎日毎日優しく説得されることであった。従って、この坂本での宿泊を孫たちと別々にされることを最も恐れていた。

(続く)

私の本州マラソン歴史紀行(東北編④—福島県・山形県—)

安藤剛

【東北にもキリシタン殉教があった】

慶長元年の秀吉による長崎の二十六聖人殉教と江戸幕府による京都・長崎・江戸の元和大殉教は有名だが、東北に殉教があったとは知らなかった。

一四年前に伊達政宗の長女五郎八姫が嫁いだ家康六男松平忠輝の居城である新潟県上越市の高田城下を走るマラソン大会に参加、五郎八姫を描いたステンドグラスがあるというカトリック高田教会を訪ねて、外人神父さんに忠輝と五郎八姫のキリシタン説や支倉常長の遣欧目的など、興味深い持論を聞かせてただいた。

その際に受付にあった小冊子「米沢の殉教者」に、私の出身高校がある白石城址の写真が載っており、米沢の殉教と白石城にどんな関わりがあるのだろうと持ち帰ったことが、東北の殉教に関心を抱く契機となった。

「米沢の殉教者」の著者は、スペイン人司祭で日本に帰化した日本二十六聖人記念館長結城了悟神父、巻頭言に、ローマ教皇が二〇〇七年にペトロ岐部と一八七人の殉教者の列福を宣言され、長崎で列福式が執り行われることを記念して一八八名に含まれる米沢の殉教者五三名の信仰を守った勇気ある生き方をより理解する助けとするためカトリック新潟教区から再刊されたとあった。

当時会津若松に潜伏していたイエズス会のポーロ神父がローマに送った報告書や米沢藩上杉家御年譜を基に殉教の様子がリアルに綴られ、そこには殉教が天に召される美しく崇高なものに描かれており、それまで殉教に暗い死のイメージを抱いてきた私には衝撃的だった。

拷問と極刑の恐怖に囚われた苦痛の試練に耐えて初めて神に救われるのではなかったのか。懐疑の中で私の東北のキリシタン殉教地巡りの旅は始まった。

【日本キリシタン史の概略】

日本へのキリスト教伝来は、一五四九年のイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの伝道によるとされる。

一五七九年にアレッサンドロ・ヴァリアーノが巡察使として来日、日本文化に適応した布教方針と日本各地の領主の宣教活動への保護もあり宣教の拡大期を迎える。

一五八七年に秀吉がバテレン追放令を発するが、宣教は拡大、一五九七年に長崎で二十六聖人が処刑される。

一六〇〇年頃には三〇万人のキリシタンがいたといわれ、一六一四年に幕府の禁教令が全国に布告され禁教期に入り、キリシタンは潜伏、大規模な殉教が行われる。

一六三七年に百姓を巻き込んだ島原の乱が勃発すると幕府は更にキリシタン弾圧を徹底、鎖国政策へと進む。

中山正実作「殉教」（京都）



【東北のキリスト教と迫害】

東北にキリスト教が初めて入ったのは、秀吉の奥州仕置によりキリシタン大名レオ蒲生氏郷が会津若松に移封された天正一八年（一五九〇年）といわれる。

当時まだ宣教師が東北には来ておらず、フランシスコ会宣教師が江戸に入ったのが一六〇二年、ルイス・ソテロが一六一一年に仙台藩主伊達政宗と親交を結び東北の布教の道が開かれ、多くの宣教師が東北で布教を始めた。

一六一三年に政宗がキリスト教の領内布教を条件にメキシコとの直接貿易を求めて遣欧使節を派遣したが、翌年に幕府のキリシタン禁令の全国布告による迫害が全国に広がり、一六一九年に京都大殉教（五二名）一六二二年に長崎大殉教（五五名）一六三三年に江戸大殉教（五〇名）やがて殉教の嵐は、東北にも襲いかかってきた。

東北の殉教地は、福島県の会津若松、山形県の米沢、宮城県の仙台と東和地区、岩手県の水沢と大籠地区、秋田県の久保田と横手、青森県の弘前などである。

会津若松は蒲生氏郷、米沢は上杉景勝、仙台と水沢は伊達政宗、秋田は佐竹義宣、青森は津軽信枚いずれも有力大名、かかる領主の勧奨と寛容な理解で、家臣や領民のキリスト教の信教が許容され広められながら、やがて幕府の禁教令によって無辜なキリシタンが迫害と殉教を強いられていったのだとしたら悲劇である。

【福島県：会津若松の殉教地を訪ねて】

①鶴ケ城健康マラソン大会（二〇一〇年一〇月三日）

東北のキリシタン殉教地を巡る旅の第一弾として、福島県会津若松市の殉教地を訪ねながら参加できる鶴ヶ城健康マラソン大会にエントリーした。

東京発二〇時の東北新幹線に乗り込み、郡山乗換えで会津若松のホテルに着いたのは二三時を回っていた。

朝食も早々に荷物をフロントに預け、駅前タクシーに行き先の鶴ケ城を告げると、運転手さんが「天守閣は戊辰戦争当時の赤瓦に葺き替え中で見られないですよ」と運転席から観光用の写真パネルを見せてくれた。

戊辰戦争で新政府軍の砲撃に白壁が穴だらけになった白黒写真の鶴ケ城の瓦が小豆色に彩られており「当時はカラー写真が無かったんじゃないの？」と、タクシー内は笑いに包まれて、今日一日の楽しい予感がした。

鶴ヶ城に隣接する陸上競技場には、既に三〇〇〇人余のランナーと家族が集っていた。広々とした体育館で軽井沢マラソンの黄緑色のTシャツに着替え、かねて楽しみにしていた鶴ケ城天守閣に向かって試走した。

今日のマラソンコースに、お城の中が入っておらず、大会前に観光を兼ねてぜひ走っておきたかった。碧々した深いお濠を眼下に、苔生す石垣が壁のように立ちはだかる城郭の中に入ると、ランニング姿で江戸時代にタイムスリップしている自分が不思議である。

すれ違う数人のランナーと軽く挨拶を交わしながら、天守閣の前に立つと、屋根瓦の葺き替え工事のため、巨大なテントですっぽり包まれ、テントの上に貼られた五層の天守閣完成予想絵図がその威容を伝えていた。

天守閣前の本丸公園で、大掛かりな茶会が開かれていた。白と紫の縦縞模様の幕が幾張りも張り巡らされ、緑の芝生を大勢の着物姿のご婦人方が楚々と歩いている。

その中を場違いなランニング姿で一人走り抜けるのだが、誰も見向きも関心も示してくれない。私はこの人達にとって透明人間なのかもしれない。

城郭内を試走して陸上競技場に戻ると、開会式を終えた白の胴着に黒の袴姿の女子高校生達が退場するところだった。アトラクションのなぎなた演武が終わったようだが、さすが文武両道の会津若松である。現代の中野竹子たちであろうか。緑のフィールド内で演ずる白と黒の和装で演ずる『なぎなた演武』は、さぞ壮観だったに違いない。惜しいことをしてしまった。

今日の大会は、一〇・五・三・二・一キロの五種目を市民参加型の健康マラソン大会である。最初のレースが私の走る一〇キロで、総勢四五〇人がトラック第二コーナー付近に性別・年齢順に整列したが、どうも私の周り

に年配者が少ない。ゴール後に調べてみると私より年長は五人しかいなかった。すぐ後ろに女子ランナーのカラフルなエリート集団がひしめいていた。

九時半にスタート、第三コーナーから陸上競技場の外に出ると、すぐ後ろに並んでいた女性アスリート集団が我々の中を掻き分けるように前に走り抜けて、やがて落ち着いた流れになった。

二の丸の外濠と土塁を右手に、樹林の城内を走りながら、しばし憧れの鶴ヶ城マラソン気分を堪能していた。城郭南を流れる湯川の天神橋を渡り市街地に出たが、キロ表示がないのか見落としたのか、自分のペースがはっきり掴めぬまま、流れに乗っての走りになっていた。

気懸かりだった左股関節の痛みもさほどではない。少し風はあるが、晴れ上がった秋の陽射しが心地よく、街中の沿道の声援を受けながら順調な走りである。

まもなく市街地を抜けると、左右に黄金色の稲田が広がり、僅かな上り勾配の美しい街路樹ロードに入った。

案内板にこぶし街道と標記されていた。まだ背が低く少し紅葉しかかった街路樹だが、春の開花時には、さぞ美しい白い花のロードに変貌することだろう。行き先案内道標に大内とあったが、この先の大内宿を通り日光経由で江戸に向かう下野街道のバイパスのようである。

南に走っているから背後に磐梯山が見えるかもしれない。何度か後ろを振り返っていると、周囲のランナーに怪訝な視線を向けられたが、遥か後方にあの特徴的なM形の山容が一瞬垣間見えて、会津若松を走っている実感を味わった。

だいぶ強い向かい風になってきたが、さほど苦にならないのは好調の証だろうか。それでもキロ表示が見つからず自分のペースが分からない不安は続いた。

スタートして一八分が経過したところで折り返したランナーが歩道を走ってきた。すれ違いざま「もうすぐ折り返しだよ」とは、元気が出る有り難い励ましである。

左手にモダンなあいづドームが見えてきた。やがてあいづ球場を右折して、まもなく折り返しに入った。折り返しタイムが二五分二〇秒、五キロにしては、速すぎるタイムだ。まだ中間点でないのだろう。復路のこぶし街道を今度はひたすらの下りである。

上りの途中で追い抜かれた黒と黄の二人をターゲットにピッチを上げた。再び市街地に戻ると沿道の声援にも熱がこもっていた。「ありがとうございます」と語尾までしっかり言える余裕があった。追いすがる足音が並びかけるとピッチを上げて振り切る余裕もあった。

黒と黄のターゲットに追い付き、次のターゲットをもう少し前方の白髪の男性に定めた。徐々に距離は縮まるがさすがに強敵のようで追いつけない。

三キロ表示板を持った係員の「あと三キロだ、頑張れ！」に「ありがとう！」歓喜の声で応えた。タイムは丁度三八分、ここまでの七キロがキロ五分三〇秒弱と頭の中でソロバンを弾いた。残り三キロを一六分三〇秒で五五分は切れそうだ。自己ベストかもしれない。

さすがに呼吸も荒くなってきた。白髪の男性は大分近くなっていた。陸上競技場の真横に出て、ゴールが近いのかと錯覚してしまったが、あと三キロの地点からまだ八分しか走っていない、ゴールのはずはない。

白壁の体育館を緑の樹林が囲んだ三の丸公園の一画を大きく周回すると、大勢の応援者が待ち受ける競技場の入口が現われ、トラックに誘導する係員が見えてきた。

大歓声の渦巻くトラックに入ると白髪の男性がすぐ目の前に迫っている。よし抜けるぞとラストスパートをかけて並び掛けたとたん、どこにそんな力があったのかと思う程の爆発的スパートで引き離されてしまった。

追い縋るようにゴール、彼の肩に手を掛け「速かったですね。追い抜こうと思ったんですが」と声かけした。

お互いに笑顔を交わして健闘を讃え合っていると、先着していたその人の仲間が寄ってきて「この人は七二歳で最年長なんですよ」と紹介してくれた。ほんのひとときだったが、戦いを終えた戦友三人の心温まる交歓が、今日の素晴らしいレースを締め括ってくれた。

完走証の記録は五三分五五秒。なんと五五分どころか五四分も切っていた。周回コースを除いたロードレースで自己ベストの記録である。しかも私より年長が五人しかいない四〇歳以上の男子二二五人中一五八位なのだからよく頑張ったと自分を褒めてやろう。独り御満悦気分で、野天の椅子に腰かけ、熱い豚汁をゆっくり味わった。

②会津若松の歴史探訪サイクリング

マラソンを楽しく走り終えて、いよいよ会津若松の歴史探訪である。体育館で着替えを済ませ、もう一度、会津若松のシンボル：鶴ケ城の天守閣に向かった。

秀吉の奥州仕置で伊達政宗に代わり会津に移封された蒲生氏郷の築いた七層天守閣は、慶長一六年の大地震で傾く被害を受け、二八年後に城主加藤明成が五層天守閣に建替えたが、明治維新の戊辰戦争で新政府軍の砲撃に損壊して明治七年に取り壊された。現在の天守閣は、昭和四〇年に再建され、現在赤瓦に葺替え工事中である。

小学六年の修学旅行以来、幾度も訪れているが、いつ来ても鶴ヶ城天守閣は壮観美麗である。一層で歴代藩主と城の変遷が解説され、会津松平藩祖保科正之の生誕四〇〇年特別展が開催されていた。二層では江戸時代の会津藩を、三層では会津戊辰戦争と白虎隊の悲劇を錦絵で、四層では会津城下の四季と風物詩を紹介していた。

最上階の五層は、屋根の葺き替え工事で、窓が全て閉

扉され、城下の展望は叶わなかったが、窓の隙間から小豆色の瓦に書き込まれた浄財献金者の名前が覗いて、地元篤志家の会津魂と郷土への熱き思いが伝わってきた。

天守閣から外に出ると、本丸広場の大茶会は、今まさに佳境に入っていた。本丸の奥にある茶室「麟閣」は、秀吉の逆鱗に触れて切腹させられた千利休の子・千少庵を氏郷が密かに会津に匿った際に、氏郷のために少庵が造ったと伝えられる茶室である。

この少庵の孫三人が、後に武者小路千家、表千家、裏千家の三千家を起こしたというから、茶道が今日あるのも氏郷のお陰といって過言ではあるまい。会津の茶会が格式を持って盛大に行われるのも当然なのだろう。

城内のレンタサイクル店で自転車を借り市内観光に乗り出した。最初の目的地は、鶴ケ城北口すぐの「西郷頼母邸跡」である。頼母は会津藩筆頭家老で藩主松平容保の京都守護職受任を強硬に反対、鳥羽伏見の戦いを前に帰国を主張するが聞き入れられず、会津戦争では恭順を建言して藩内の主戦派に押し切られ登城差し止めとなるが、新政府軍が城下に侵入して来ると、蟄居の身ながら籠城を知らせる鐘に急遽登城、頼母を見送った妻子ら家族二一人は、辞世の句を残して自刃したという。

説明板に書かれた頼母の妻千恵子の辞世『なよ竹の風にまかする身ながらもたわまぬ節はありとこそきけ』に拙い解釈を試みてみた。「いつもは世の流れにまかせる、か弱い我が身だけれど、いざという時には自ら命を絶つ気骨はあるのですよ、官軍さん！思い知って！」

けなげな会津女魂だが、分別もできない幼子まで道づれに無理心中とは、戦争がもたらす悲劇である。

登城してなお恭順を説く頼母が主戦派に殺されそうになり、容保は頼母を米沢に逃れさせるが、頼母は米沢から仙台、函館に渡り五稜郭で戦い、戦後神官になったという。妻子家族が自刃したのに己は生き延びるのか。

次に向かったのは「蒲生氏郷の墓」である。市街地の中心にある興徳寺の裏手に、氏郷の遺髪を埋葬したという立派な五輪塔が立っていた。興徳寺は、秀吉が奥州仕置を行った寺で、氏郷が再興し蒲生氏の菩提寺とした。

蒲生氏郷は、天正一八年（一五九〇年）に、伊達政宗が秀吉の小田原攻めに遅参した責めで米沢城に減封された後の会津黒川城に、伊勢松阪城から移封されて四二万石の太守となり、黒川を若松に改名した。

氏郷の墓の傍らに立つ大きな歌碑に『限りあれば吹かねど花は散るものを心みじかき春の山風』と四〇歳で早世した氏郷の辞世が刻まれていた。

氏郷顕彰碑の案内に「花のあはれに人のあはれをかさねよんだ優婉な辞世の歌が後に残された」とあったが、優婉どころか怨念のようなものが私には感じられた。

勝手な解釈を試みてみた。「桜の花は散る時期が来れば風が吹かなくとも散ってしまうが、私はまだ死ぬ時期でもないのに、心短き山風のためにこのまま死んでしまうのか」と無念な叫びが聞こえてくる。心短きとは、短気な、という意味としたら、氏郷を死に追いやった『短気な山風』とは如何なる山風なのか。意味深である。

興徳寺から七日町通りを西に向かう辻に建つレトロで重厚な蔵造りの建物と「レオ氏郷南蛮館」の看板に惹かれて中に入ってみた。興徳寺で見た辞世の歌に暗号的な拘りを抱いたこと、氏郷は有名なキリシタン大名で、会津のキリシタンの殉教に関わる史料が展示されていることを期待したこともあった。

一階が民芸品のお土産屋、入館料代わりの一〇〇円玉を専用箱に投入、靴を脱ぎ狭い階段を二階に上がると、信長の安土城を彷彿される七層天主閣の想像模型（下の写真）と想像再現された「天主の間」に泰西王侯騎馬図屏風四曲一双の絢爛豪華なレプリカが展示されていた。

異教の王と戦うキリスト教の王の騎馬像を描いた屏風は、同じ王侯騎馬図が描かれた宮内庁所蔵「万国絵図屏風」のカエリウス世界地図が一六〇九年制作であることから、氏郷の子秀行の一六一一年の会津地震で損壊した天主閣の改築時に大広間の襖絵に描かれたもので、戊辰戦争の戦火を免れて屏風に仕立てられたのであろうか。

鶴ヶ城七層天主閣　想像模型（レオ氏郷南蛮館）



秀行は、母が信長の次女相応院、正室が家康の三女振姫、まさに血統書付サラブレッドである。大御所家康の駿府城に南蛮世界図屏風があったといわれ、家康が娘婿秀行のために絵師を派遣して描かせたのかもしれない。

退出しようとして部屋の隅の「氏郷の死の謎」のパネルに足が止まった。四〇才で早死した氏郷の死因について、朝鮮出兵のため九州名護屋城の茶席に招かれて突然吐血発病しており毒殺されたのでは、とあった。

氏郷の三回忌法要のために秀行が描かせた亡父氏郷の肖像画像の賛に、京都南禅寺の玄圃霊三和尚が「管領奥州五十四郡、可惜談笑中置鴆毒」と記しており、氏郷の毒殺は、どうも単なる噂ではなかったようである。

氏郷毒殺の犯人は誰だろうか。藤原秀郷系統の名門出で、信長の娘を正室に、小さな婿殿と信長に可愛がられ、進歩的な信長の薫陶を受けて将来を嘱望された氏郷を殺したい程に忌み嫌う者がいたとしたら、信長死後の後継争いを勝ち抜いた成り上がりの秀吉しかいないだろう。

秀吉の奥州仕置で伊勢松阪から会津に移封された氏郷は、旧主信長の安土城に酷似した七層の壮大な天主閣を建て、信長の楽市楽座制を導入して自由都市を建設、南蛮文化の花咲く新世界を創造せんとして潰えた信長の夢を実現する後継者として成長しており、奥州の再仕置により政宗の旧領が加増され検地もあって家康と毛利輝元に次ぐ九一万石の大大名になった氏郷は、信長の死後を簒奪した秀吉にとって最大の脅威だったに違いない。

氏郷の会津移封は、家康と政宗を抑える配置といわれるが、京から遠く奥州への左遷が真相だったのだろう。

氏郷と秀吉の関係は良好だったといわれるが、日本在留四三年の宣教師シュタイシェンの著「切支店大名記」に、氏郷が発病する前年の興味深い記述があった。

「文禄元年（一五九二年）フィリッピンの太守が派遣した二人の使者が、朝鮮出兵で肥前名護屋に来ていた太閤に謁見し、ポルトガル人がイスパニアと日本との通商関係を妨げ、太閤の禁令があるにも拘らずこの国に宣教師を止め置いた事を訴えたため、太閤は、直ちに切支丹の長崎奉行を罷免し、耶蘇会士の教舎や教会堂を破却し、ポルトガル人の挙動について厳重な調査を命じた。

蒲生氏郷は、長崎に駆けつけて耶蘇会士を慰めて、自分は彼らの味方であり、太閤であろうと誰であろうと、自分の宗教的信念を捨てさせる事は出来ないと声高く声明した。又その中傷が、太閤とその取巻きの人々の上に如何に悪い影響を與えたかを告白した。名護屋に帰るや、太閤の近頃の迫害に対して公然不満な態度をとった」

氏郷は、朝鮮出兵のため名護屋に滞陣している諸大名を前に、長崎教会の打ち壊しだけでなく、無謀な朝鮮出兵も糾弾していたかもしれない。秀吉は京へ向け発った後で名護屋にはいなかったが、氏郷の不遜な言動は、やがて秀吉の耳に伝わったに違いない。

氏郷辞世の「心みじかき春の山風」の『短気な山風』とは、やはり秀吉のことなのではないだろうか。

南蛮館を退出、氏郷が毎月七の日に市を開かせたという「七日町通り」に向かった。七日町通りの札辻は、会津五街道と呼ばれた白河・日光・米沢・越後・二本松街道の起点であり、人馬と物資の重要な交差点である。

白や黒の漆喰の店蔵や連続格子戸の座敷蔵、石造りの洋館などが軒を並べ、大正ロマンの香り漂う素敵な町並みで、商人から税をとらず自由に商売させる楽市楽座制を伊勢松阪に続いて会津若松で更に発展させ、キリスト教をベースにした西洋文化の自由経済都市実現を目指した氏郷の壮大な夢を描く息遣いが伝わってくる。

七日町通りの西の出入口に立つ石柱「会津東軍墓地」の文字に惹かれ、「阿弥陀寺」に立ち寄ってみた。

案内板に、戊辰戦争後の会津藩戦死者の遺骸が、官軍の命で放置されたまま触れることすら許されず、幾度の嘆願で五ケ月後にようやく許可が下りて、阿弥陀寺には一三〇〇柱が埋葬され、春秋の彼岸に供養会が行われている、とあった。埋葬跡に二間一尺五寸四方で高さ七尺の土壇が築かれたが、墓標を建てることさえ認められず、許されたのは四年後だったという。

幕末の会津藩主松平容保が京都守護職となり、京都の治安維持を担う麾下の新撰組が、討幕攘夷の長州藩士への殺戮を重ねて、彼らの憎悪を買ったのだろうが、江戸市中取締役の庄内藩が江戸薩摩藩邸を焼き討ちしたため戊辰戦争で庄内藩攻撃を薩摩藩が買って出たのだとしたら、長州藩が会津藩攻撃を担ったのは、京で迫害された会津藩への遺恨ゆえの報復戦だったかもしれない。

人はそこまで憎しみ合えるものだろうか。会津戦争が大義なき遺恨の戦いだったとしたら、会津人と長州人の和解は、永遠に有り得ないだろう。

境内の奥に建つ三階楼は、落城した鶴ヶ城の本丸から明治三年に移築されたもので、戊辰戦争の戦火で消失した本堂の代わりに埋葬者を弔うため使われたという。埋葬された会津藩士も少しは浮かばれたに違いない。

次はいよいよ殉教地「キリシタン塚」である。ＪＲ只見線の踏切を渡り、七日町通りを更に西へ一キロほど自転車を走らせると、町外れの旧湯川（黒川）に架かる柳橋の袂の案内板に「刑場にひかれる罪人が家族と水盃で別れをしたところから通称涙橋と呼ばれた」とあった。

戊辰戦争で娘子軍隊長中野竹子が城下に迫る新政府軍と柳橋付近で遭遇、辞世の「もののふの猛き心にくらぶれば数には入らぬ我が身ながらも」と詠んだ短冊を薙刀に結びつけ奮戦し敵弾に倒れた碑が近くにあるという。

数には入らぬ我が身ながらも、と詠う健気な竹子は、後の太平洋戦争で、一億総玉砕をスローガンに本土決戦に備えて婦女子に竹槍訓練をさせた軍部の精神至上主義に利用されたのだとしたら竹子は何を思うだろうか。

柳橋から旧湯川沿いに北へ二〇〇mほど、薬師川原橋の手前に、こんもりした叢が見えて十字架とキリシタン塚の文字が刻まれた黒っぽい石碑が立っていた。

案内板に「バテレンたちが捕えられ、この辺の薬師河原で処刑されたという、言い伝え通り犠牲者の埋骨と思われる人骨が見つかり、昭和三七年に供養するため、このキリシタン塚が建てられた」とあった。

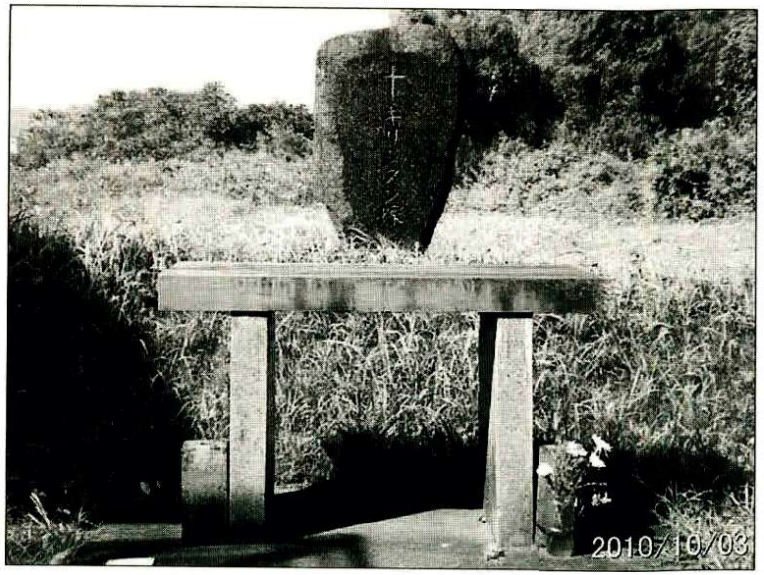
「新編会津風土記」巻之二四に「切支丹塚」について「薬師堂河原の東にあり相伝ふ、寛永十二年耶蘇の徒横澤丹波と云者及び其族を捕へ此地に出し高く倒に懸るに皆二日を経すして死す、此時丹波か宅の壁中に隠れ居し伴天連をも索出し同く倒に懸るに一七日を経て死しぬ、同頃穢多町の側に小屋を設て壁を作さす、多く癩人の耶蘇となれる者を置き風霜に曝して殺す、其後彼死人を同穴に埋て此塚を築けりと云」とあった。

叢の雑草が綺麗に刈られ、キリシタン塚の石碑の前にコンクリート板の祭壇が組まれて、足元に綺麗な花が供えられていたが、塚の前に立つと、処刑されたキリシタンの悲痛な呻きが聞こえてきそうである。

若松城下の西の外れの旧湯川に沿った河原一帯が、罪人の公開処刑場に適していたのだろう。遥かに遠望する雄大な磐梯山は、四〇〇年前にこの河原で繰り広げられた凄惨な光景をどんな思いで見守っていたことだろう。

彼等は本当に救われたのだろうか。氏郷が会津にキリスト教を持ち込まなければ、氏郷が会津に移封されて来なければ、教化もされず殺されることもなかったろうに。キリシタン塚に向かって十字を切り、祈りを捧げた。

キリシタン塚（会津若松市神指町黒川字薬師川原）



キリシタン塚から会津若松駅に向けてペダルを踏みながら、ここまで来て「飯盛山の白虎隊」にお参りしないわけにはいかない。帰りの電車まで一時間ばかりある。

駅の東側に抜けて飯盛山まで二キロの直線道路を飛ばしに飛ばし、境内までの一八〇余段の石段を一気に駆け上がり、久方ぶりの白虎隊一九士の墓前に着いた。樹木に囲まれた薄暗い境内に線香の煙が広がり、一九柱の苔生した墓石に自決した若き隊士の名前が刻まれていた。苦悩の果てに刺し違えた彼等の安寧を祈り合掌した。

帰りの磐越西線の車窓に磐梯山の山容が迫り来て、樹間に猪苗代湖を覗き見ながら、時流に逆らった二人の会津藩主に翻弄された無辜な民に思いを馳せていた。

蒲生氏郷は封建時代の流れに逆らい自由と平安を希求した故に時の権力者に抹殺され、氏郷を信じた多くのキリシタンが虐殺された。松平容保は没落する江戸幕府への親藩大名としての義を貫き、会津の老若男女の多くが戦火に巻き込まれ、そして自刃した。それでも会津の民は激動の時代に流されながら逞しく生き抜いている。

③会津のキリシタンと殉教

蒲生氏郷は熱心なキリシタン大名で、利休七哲の筆頭といわれ、天正十三年（一五八五年）に茶人仲間の高山右近の勧めでイエズス会日本管区長オルガンティノ神父から洗礼を受ける。洗礼名はレオ、氏郷二五才だった。

高山右近は、十二才で洗礼を受け、一五七三年に高槻城主となり、信長横死後の秀吉の山崎合戦に先鋒として活躍、秀吉の信頼を得る。秀吉の大坂城築城に併せて大坂に壮麗な教会（南蛮寺）を完成させ、諸侯や貴人を招き宣教に努めて、氏郷や黒田孝高らを信仰に導いた。

氏郷は、小牧の役で秀吉に従い功あり、伊勢松阪十二万石の領主となり、二年後の天正一八年（一五九〇年）に秀吉の奥州仕置で会津四二万石に移封されてきた。

翌一五九一年に上洛した氏郷は、イエズス会上長ヴァリアーノ神父に会って「時勢が許すならば自領で改宗させ多くの神父をそこに呼びたい」と語り、亡くなる一六九五年の一月前にオルガンティノ神父に「病気が治れば一人の神父と一人の修道士を遣わし全領土をキリシタンにする」とまで言っていたという。

京から遠く会津の地にキリスト教を中心に据えた新世界実現のため、教会や修道士育成教育機関のセミナリヨを建てたが、存命中の宣教師招聘はついに叶わなかった。

蒲生家の重臣たちの多くも氏郷の勧めで洗礼を受けていた。後に大坂落城の際にポルロ神父やパウロ明石内記を匿ったペトロ佃又右衛門、秀行にも仕えて後に猪苗代城代一万石となる岡越後左内、氏郷の従弟で南山城代六千石となり後に大坂の陣で明石掃部に与して戦死するパウロ小倉作左衛門、柴田勝家旧家臣で白石城代四万石と

なるジョアン蒲生郷成、いずれも一五九四年の氏郷再上洛に供奉してフロイス神父らから洗礼を受けていた。

一五九五年に氏郷が四〇才で急死して後嗣の秀行が十三才で家督を継ぐが、一五九八年に御家騒動があり宇都宮に減封されてしまう。蒲生に代わって会津に入った上杉景勝が、関ヶ原の敗戦で米沢に移封されると、宇都宮の秀行が会津に再封され、景勝に仕官替えしていたキリシタン岡越後左内ら家臣が蒲生家に再仕官してきた。

会津に初めて宣教師が入るのは、一六一一年に仙台へ向かうスペイン答礼使ビスカイノに随伴して立ち寄ったソテロ神父で、それまでの会津のキリスト教は、氏郷の家臣たちによって広められていた。同じ年に起きた慶長大地震について質問する秀行に、ソテロが天地創造とキリスト教の教義を説明すると、秀行は「機会がきたらキリシタンになってよい」と語ったといわれる。

一六一二年に秀行が三〇才で急死して一〇才の忠郷が家督を相続する。忠郷の母は家康の三女振姫、幕府の禁教も家康の孫に当たる忠郷には遠慮があったのだろう。会津若松や猪苗代から南会津・郡山・三春・白岩・糠沢・二本松・福島へキリスト教が広まり、会津若松の人口三割がキリシタンだったといわれる。

蒲生治政下のキリシタンの中心人物が、一六〇九年から一六二二年まで猪苗代城代だった岡越後左内である。

会津藩に初めて常駐した宣教師のアンデリス神父が、家康の禁教令が全国に布告された一六一四年の翌年に奥羽副地区長として猪苗代城下に修道院を設立して、仙台領に移るとと代わってアダミ神父が一六一七年に猪苗代に常駐した。一六二〇年からはジュアン山修道士も常駐して会津城下から仙道地方と米沢地方を巡回、宣教師の常駐する仙台と会津が奥州キリシタンの中心であった。

一六二〇年は、遣欧使節の支倉常長が帰国した年で、政宗は常長の帰国直後に仙台領内に禁教令を布告しキリシタン迫害を始めた。同年にポーロ神父がローマ教皇パウロ五世の奥州の信徒あて激励の教書を会津にも届け、翌年に奥州の主だった一七名の信徒がローマ教皇に宛てた奉答文に会津のキリシタン四人の署名が含まれている。

一六二七年に忠郷が二六才で病死、忠郷に嫡子なく代わって伊予松山から加藤嘉明が会津に移封されると、嘉明のキリシタン捕縛回状にアダミ神父が長崎に逃れ、ジョアン山修道士が一六二九年に捕縛され江戸に送られた。

一六三一年に嘉明が逝去、嫡男明成が相続、嘉明に遠慮のあった幕府の威圧が強まり、明成は幕府への忠誠を示すため賞金を懸けたキリシタン捜索と捕縛を始めた。

一六三二年に会津藩一五人、白河藩一三人、二本松藩一四人、若松藩四二人が処刑された。若松藩の四二人は、涙橋近くの黒川河原刑場で大人二六人が火炙り、子供一六人が斬首、一六三六年に薬師堂河原で横澤丹波ら五人が磔刑に、翌月パロマレス神父が火炙りとなった。

一六四三年に明成が家臣同士の喧嘩処罰を不服に出奔した筆頭家老堀主水の身柄引き換えに所領を返上、将軍家光の異母弟保科正之が会津藩に移封されてきた。

正之の会津入府時に会津藩牢にキリシタンが四〇〇～五〇〇人いたといわれるが、会津藩「家世実紀」に「吉利支宗門之者、寛永二十年会津入部之節ハ、御領中ニ壱人モ無之」とあり、キリシタン根絶に狂気的な家光の実弟正之には、自領のキリシタンを処罰するより、検挙して改宗させていける自信があったればこそ、吉利支丹は一人もいないと公言できたのだろう。

「家世実紀」の万治元年（一六五八年）に「改宗した切支丹一二四人、吟味の上、牢獄を赦免する」とあり、正之はキリシタンに迫害ではなく懐柔策で対応していた。正之の墓がある土津神社は、氏郷のキリシタン家臣で猪苗代城代岡左内が建てた猪苗代修道院跡のすぐ西隣であり、正之の元キリシタン説も有り得た話かもしれない。

④補足：会津の歴代領主

福島県は、南北に走る阿武隈山系と奥羽山脈によって浜通り・中通り・会津地方の三つに分けられ、浜通りは開放的で、中通りは進歩的、会津地方は四方を山に囲まれて保守的で郷土愛の強い土地柄と言われる。

地政学的に辺境の会津だが、歴代領主には名だたる戦国武将が名を連ねており、江戸幕府は会津に親藩を配置して、北の抑えとした要衝の地であった。

【蘆名義広】

会津の守護として長く君臨した「蘆名氏」は、桓武平氏良文流で、頼朝の平家追討の主力を担った三浦義澄（鎌倉殿十三人の一人）の弟義連が奥州合戦の恩賞で会津を与えられ、三代光盛が蘆名氏を名乗る。

七代直盛が黒川城を築城、十六代盛氏の時に会津から仙道（中通り）まで勢力を拡げ最盛期を迎えるが、家督盛興の急死で後嗣を巡る内紛があり蘆名氏は衰退する。

清和源氏の源頼義の三男義光の孫昌義を祖とする常陸佐竹氏の十八代義重の次男義広が、会津蘆名氏に養子入りして二十代蘆名氏当主となるが、米沢の伊達政宗に敗れて常陸の実家に逃走、会津蘆名氏は滅亡、政宗が本拠を米沢城から会津黒川城に移した。

【伊達政宗】

伊達氏は、藤原北家山蔭流の朝宗が頼朝の奥州合戦の功で伊達郡を受領、伊達氏を名乗る。十四代稙宗が陸奥守護となり婚姻戦略で奥羽諸侯を統制下に治めていく。

十五代晴宗が伊達から米沢に本拠を移し、十七代政宗は二三才で会津の蘆名義広を摺上原の戦いで破り、米沢

から会津黒川城に本拠を移して、一五〇万石近い大領国を有する奥羽の覇者となる。更に小田原北条氏に組みして関東への進出を目論むが、既に全国統一を目前にした秀吉の小田原北条攻めに遅参したため、奥州仕置で旧蘆名領を召上げられ、会津黒川城から米沢城に戻される。

【蒲生氏郷】

近江国日野六万石の小領主の子に生まれ織田家に人質になるが、才を見抜かれて信長の小姓として仕え、やがて信長が烏帽子親となり信長の娘を妻に迎えて信長に「小さな婿殿」と可愛がられたといわれる。

信長に従って数々の戦さに武功を挙げ、その俊敏剛胆な器量は、信長に「我が後継者」と思わせていたが、本能寺の変で信長が殺されると、秀吉に服属した。

秀吉の奥州仕置で、政宗が米沢に戻された後の会津に伊勢松阪から移封され、黒川城を天下に誇る七層の天守閣を持つ壮大な若松城に大修築、上方から商人を呼び寄せて楽市楽座を取り入れた城下町作りに注力するが、五年足らずで急死、嫡子の若き秀行が後嗣となる。

【上杉景勝】

上杉氏は、藤原北家勧修寺流の重房が丹波国上杉荘を領して上杉を名乗る。重房の孫清子が足利尊氏の生母、足利氏姻戚として関東管領を世襲する。景勝は越後守護代長尾氏から関東管領となった上杉謙信の姉の子で、実子のない謙信死後の家督相続の争いで上杉氏当主となる。

景勝は秀吉の信頼厚く豊臣政権五大老に列して、御家騒動で宇都宮に減封された蒲生秀行の後を継いで越後から会津一二〇万石に入るが、秀吉死後に家康の横暴に対抗する石田三成に組みし、関ケ原の敗戦で会津から米沢三〇万石に減封される。景勝の去った会津に、宇都宮に減封されていた蒲生秀行が再封されるが、その子忠郷に子なく、伊予松山の加藤嘉明が会津藩主となる。

【加藤嘉明】

父は家康の家臣だったが、三河一揆に加担して放浪の身となる。秀吉に取立てられ小姓となり、信長死後の賤ケ岳の戦いで七本槍の一人として名を馳せ、秀吉の全国統一の戦いに数々武功を挙げ、更に朝鮮の役で朝鮮水軍を壊滅させて大名に取立てられる。

関が原の戦いで徳川方に与して石田三成本隊を撃破しその武功で伊予松山そして会津四〇万石に移封された。嘉明の死後、後を継いだ明成が、後に御家騒動で所領を返上して改易され、保科正之が会津藩主となる。

【保科正之】

徳川二代将軍秀忠の四男に生まれたが、母が秀忠の乳母の侍女だったため、秀忠の継室江の嫉妬を恐れて秘か

に出生、後に高遠藩主保科正光の養子となる。父秀忠に認知されることはなかったが、秀忠の死後、将軍家光は異母弟の正之を可愛がり、山形藩二〇万石を経て会津藩二三万石大名に引き立て、幕政にも抜擢して登用した。

正之は、将軍の実弟でありながら臣下である己の身分をわきまえ、ひとえに将軍家に忠誠を尽くす役目を家訓に定めて、徳川宗家の松平姓を名乗ることを辞退していたが、会津藩三代藩主がようやく松平姓を使用した。

兄家光の死後その遺命により四代将軍家綱の補佐役として幕閣に重きをなし、戦国の武断政治から徳川政権の安定期に移行する幾多の幕政改革を推し進め、末期養子の禁止を緩和、先君後追い殉死の禁止、大名証人制度の廃止は、後に家綱政権の三大美事といわれた。

江戸の人口増加の水不足対策として防衛上の反対を押し切って玉川上水を開削、明暦の大火では江戸庶民の救済に一六万両の御金蔵を拠出、焼け落ちた江戸城天守閣の再建を取り止め、庶民生活を優先する善政を敷いた。

藩政においても殖産振興に努め、飢饉の窮民救済の社倉制を創設、藩士の殉死と間引きを禁じ、朱子学を藩学として好学尚武の藩風を作り上げ、藩校日新館の前身ともいえる日本最古の教育施設「稽古堂」を創立、身分を問わず終生一人扶持を支給する日本最初の年金制度を定め、至誠無私の精神と仁の心で治世に臨んだ。

【松平容保】

美濃国高須藩主松平義建の子で高須四兄弟の一人、兄弟に尾張藩主徳川慶勝、一橋徳川家当主一橋茂栄、桑名藩主松平定敬がいる。父の弟で会津藩八代容敬に男子なく養嗣子となり会津藩最後の藩主となる。

幕末の京都は、諸藩の尊皇攘夷派浪士たちが佐幕派や開国論者を次々に襲い殺戮する無政府状態にあった。

容保は、意に反しながら京都守護職を引き受け、新撰組を麾下に攘夷派の取締りと京都の治安維持を図り公武合体を建白、時の孝明天皇の厚い信任を得て、禁門の変で長州勢力を京から排除するが、第二次長州征討戦に幕府軍が敗北すると、大政奉還、王政復古と時流が流れるなか、孝明天皇が崩御、薩摩長州の倒幕派は、明治天皇を奉じて幕府軍を朝敵・賊軍と見做した戊辰戦争が勃発、鳥羽伏見で旧幕府軍を破り東上、容保は会津に謹慎して降伏歎願するが退けられ会津戦争に追い込まれていく。

会津松平家は、初代藩主保科正之が定めた会津家訓の「大君ノ義、一心ニ大切ニ、忠勤ヲ存ズベシ」という徳川宗家への絶対忠誠を頑なに守り続け、他藩が没落していく幕府を見限る中、時流に逆らいながら、圧倒的な薩長新政府軍に対して劣勢な抵抗を試みたが、各戦線が次々に突破され、堅固な鶴ケ城に籠城するも凄惨な会津戦争の末に降伏、若き白虎隊や娘子隊の悲劇を生んだ。

【山形県・米沢市の殉教地を訪ねて】

①米沢のキリスト教と上杉景勝・定勝

前掲の小冊子「米沢の殉教者」に、ローマ教皇が列福した米沢の殉教者五三名のほとんどが藩主上杉定勝に直接仕えた家臣とその家族で、家老志駄修理が主君定勝に、全ての信者を殺すなら三〇〇〇人以上の家来を殺さなければならないと言ったとあり、米沢のキリスト教社会は武家社会に限られた異次元の世界だったようである。

米沢は山形県南東部に位置し、鎌倉時代は長井氏の領地、室町初期に伊達氏の領地となり、政宗の祖父晴宗が福島桑折から米沢に本拠地を移し、政宗の生誕地である。

葛西大崎一揆後の奥州再仕置で、政宗が米沢から宮城県岩出山に移り、米沢は、伊勢松坂から会津に移封されていたキリシタン大名蒲生氏郷の支配地となり、米沢城代に家老の蒲生郷安が、白石城代に蒲生郷成が入った。

蒲生郷成は、氏郷の上洛に供奉して、翌文禄四年（一五九五年）に京でイエズス会ルイス・フロイス神父から洗礼を受けており、帰国した郷成は、主君氏郷に倣って自領の白石城下でキリスト教を広めていたに違いない。

氏郷の死後、越後の上杉景勝が会津に入封すると、米沢と白石の城代は、郷安と郷成に代わって景勝の重臣直江兼続と甘糟景継が入り、この景継が後に米沢殉教者の指導者となるルイス甘糟右衛門信綱の父である。信綱のキリスト教は、会津の蒲生氏郷時代にキリシタン蒲生郷成の治政下にあった白石城下で育まれたのかもしれない。

一六〇〇年の関ヶ原の戦いで西軍に組みした上杉景勝と東軍に組みした政宗の慶長出羽合戦で、城代甘糟景継が会津に出向いていた留守を政宗軍に白石城が攻められて落城、甘糟親子は会津一二〇万石から米沢三〇万石に減封された景勝に従って米沢に移るが、一六一一年五月に景継が故あって切腹となり、甘糟氏六六〇〇石は断絶、一六二四年の景勝一周忌に旧過赦免で再興された。

信綱は、景勝に供奉して江戸でルイス・ソテロ神父から洗礼を受けたとされるが、ソテロが答礼使ビスカイノの通訳として一六一一年一〇月二二日に江戸を発ち、一一月一〇日に仙台城で政宗に謁見した折、途中の宇都宮で奥平家昌に、会津若松で蒲生秀行に会い、米沢で景勝に面会を申し出て、景勝が病気のため二日間米沢に滞在したというから、父の切腹に苦悩する信綱は、再会したソテロ神父を接遇しながら信仰を更に深めたに違いない。

一六二九年一月の米沢殉教について、前掲の「米沢の殉教者」を参照しながら以下に纏めてみたい。

米沢藩主上杉景勝は、キリシタンに寛容で、領内に一万人の信者がいたが、幕府の取り調べにいつも「当領に一人のキリシタンも御座無く候」と答えていたという。

景勝には、豊臣政権の五大老に列した誇りと、家康の横暴に石田三成と共謀して決起した謹厳実直さ、義の戦国武将上杉謙信の後継者たる自負、幕府の威圧に安易に屈服しないという強い気概があったに違いない。

元和九年にその景勝が死去すると、米沢藩内の勢力バランスが崩れていく。景勝と共にキリシタンの良き理解者だった総家老志駄修理に対立する家老広居出雲が、後嗣の若き当主定勝にキリシタン弾圧を働きかけていく。

幕府のキリシタン弾圧が激化、島原雲仙地獄での残虐な拷問で二六人が殉教した一六二七年の翌年、江戸に居る定勝から信者調査の指示が米沢に届くと、志駄修理は米沢に信者は残っていないと報告するが、広居出雲は信者たちの行動を詳細に江戸の定勝に訴え出たのである。

藩内の信教の実態を広居出雲に突き付けられた定勝は、信者である家来たちに棄教を働きかけたが、彼らは信仰のために生命を捧げる覚悟が出来ていると益々自由に振る舞い、志駄と広居が彼らの運命を議論している間、祈り合い励まし合い互いに訪問し合い、信仰を強めてその喜びに浸っていったという。

一六二九年一月一一日、定勝はついに苦渋の決断を下した。会津若松に居るポルロ神父が米沢殉教前夜を「誰も牢屋に入れられなかった。死刑検者たちが殉教者たちの家に行き、彼らを殉教地に率いた」と伝えている。

当時の米沢ではキリシタンに対する偏見がなかったといわれ、迫害は決して定勝の望むところではなく、将軍家光と老中たちが決定したことで、彼らの命を守ることができるのは背教だけだったが、彼らは信仰のためだけに死刑に定められたのだった。

②ルイス甘糟右衛門の殉教

米沢教会の指導者であるルイス甘糟右衛門は、志駄修理の二人の家来が宣告を伝えると、喜びをもって彼らを迎え、二人の前で新たにその信仰を宣言、自分の助命に努力された家老に感謝の念を伝えることを頼んだ。

知らせを聞いて息子たちがやってくると「お父さん、よかった、我らの望みが全うされた」と喜びを分かち合い、共に殉教するため妻と子を迎えに戻ったという。

翌一二日早朝、準備していた白装束に着替え、小姓が聖母マリアの旗を先頭に、家来たち、子供を抱く婦人たち、寄寓していた浪人たちと二人の息子、最後にルイス甘糟右衛門が続いて雪道を殉教地の北山原に向かった。

処刑場を取り仕切る奉行は見物人に向かって「ここで死ぬのは信仰のために生命を捨てる身分の高い人であるからみんな土下座するように」頼んだという。

この日、北山原刑場で四三名、糠山と花沢で一〇名が斬首された。殉教者たちの首は纏められて新しい着物で覆い、米沢に入る道端に晒首にされたという。

フランス人外交官レオン・パジェスが明治初期に刊行した「日本切支丹宗門史」の第一四章（一六二九年）に米沢の殉教についての記述を抜粋してみる。

「米沢では、右衛門（甘糟）とその家族が、殉教を待望していた。一人のキリシタンは、奉行出雲（広居）の下した死刑の宣告を聞くや、之を知らせるため太右衛門の許に駆けつけた。太右衛門は病気で床についていた。然るに、この吉報故に、彼は心が生々し、もう直ったと叫んだ。彼は直ちに飛起きて、之を父親に知らせに行った。右衛門は、自らと惣領の息子とその妻のと、即ち三人前の棺の外に、新しい二つの棺を準備させた」

「右衛門は、誰をも零落させず死を招かぬ為に、その召使達を解雇することを望んでいたが、皆、依然その領主に忠勤を抜んじ、天主を栄あらしめることを望んで、給興を得て去ることを拒んでいたので、彼の召使の切願により、右衛門は彼等をキリシタンと申立てるべきだと信じ、侍達に言った。『私の召使っている者は皆キリシタンで、彼女等はその主人と共にこの幸福な天国に行きたいと望んでいることを御承知下され、私は幾度か彼等の私から離れて行くことを許したが、誰一人承知してくれなかった』と。この言葉は、幸に身分は召使ではあるが心は自分自身の心の主であり、天国の自由の身分を憧れていた之等の良きキリシタンによって受入れられた」

「日本切支丹宗門史」と「米沢の殉教者」は、いずれも当時日本に潜伏していた宣教師からヨーロッパにもたらされた書状や報告書など一次史料をもとに記述されたもので、そこには、幕府による禁教下の日本でいかに自分たちの伝道が困難に打ち勝って成功しているかを誇大に認められているのは当然だとしても、米沢の殉教が、夢物語のように美しすぎるのはなぜなのだろうか。

米沢に長く宣教師が常駐していなかったことが幸いしたのだろうか、地政学的に世情から隔世した米沢武士社会の一部のインテリ層の間で広まった、土着の伝統文化とは異質な外来宗教への憧憬が、信望ある指導者によって米沢独自のキリスト教として純粋培養され、村社会的な運命共同体に組成されていったのではないだろうか。

一六一七年にイエズス会のアダミ神父が猪苗代修道院に定住、一六二〇年にフランシスコ会のガルベス神父が最上に定住、南と北から米沢城下に巡回するようになり、一六二六年には、ディエゴ神父が四人の宣教師を引率して最上に入り各地で聖帯紐の組講を組織、その内のテレロ神父が米沢城下で二〇〇人の信者を担当したという。

布教のため身命を惜しまず迫害に堪えながら敬虔な祈りを捧げて、清貧、貞潔、従順な共同生活で戒律を重んじる姿が、義と愛を重んじる無骨な米沢武士の間で広まった独自の信仰文化にマッチしていたのかもしれない。

③北原白秋の詩集「邪宗門」

米沢の殉教の様子を知って思い浮かぶのが、北原白秋の詩集「邪宗門」である。邪宗門とは日本古来の正統な宗教に反する邪悪な宗教のこと、江戸時代にキリスト教が邪宗門として弾圧されてきたが、私が所属する団体のコーラス部を指導するソプラノ歌手吉川真澄先生が二〇一四年八月のリサイタルで白秋の「邪宗門」を歌われた。

No.1　邪宗門扉銘

ここ過ぎて曲節の悩みのむれに、ここ過ぎて官能の愉楽のそのに、ここ過ぎて神経のにがき魔睡に。

No.2　邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、色赤きびいどろを、匂鋭きあんじゃべいいる、南蛮の桟留縞を、はた、阿剌吉、珍酡の酒を。（中略）いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、百年を刹那に縮め、血の磔背にし死すとも、惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢、善主麿、今日を祈に身も霊も薫りこがるる。

現代音楽の作曲家平野一郎氏が、白秋の詩集「邪宗門」を女声と映像と十五楽器によるモノオペラに作曲したもので、チラシに「白秋の邪宗門は、南蛮趣味と西方憧憬に彩られた処女詩集で、そこには童謡風・小唄風から浪漫派風・象徴派風に及ぶ多彩極まる詩が共存し舶来の文物への憧れが謳い上げられる一方で、失われゆく日本の風土への郷愁と哀惜が滲み出してもいます」とあった。

平野一郎氏は、京都府宮津市の出身で、公演チラシに「現実と幻想、現代と太古を融け合わせ、忘れられた伝説や異界の音風景を今に蘇らせつつ、多彩な音楽世界を拓いている」と紹介されていた。

宮津といえば宮津城主が細川忠興、妻が細川ガラシャである。父明智光秀が秀吉に敗れた際、反逆者の娘として京丹後の山奥に幽閉され、そこでキリスト教に触れたといわれる。邪教視された世界を故郷にする平野一郎氏の感性が、ガラシャに掻き立てられたのであろうか。

北原白秋は「からたちの花」や「この道」「ペチカ」など童謡の詩人として有名だが、独特な文体で綴られた「邪宗門」のような魅惑的で耽美的な象徴詩を、しかも二四才の若さで書いていたとは知らなかった。

白秋は、有明海に面する柳川沖端の海産物問屋に生まれ、交易する異国文化や掘割の日本的風土に多感な少年時代を過ごした。父親に無断で中学を中退して上京、早稲田大学に入学して新進詩人として活躍、白秋二二才の時に、与謝野鉄幹・木下杢太郎・平野万里・吉井勇と五人で九州を旅して、その旅行記「五足の靴」を東京の新

聞に投稿したが、その時の長崎・島原・天草のキリシタン遺跡を探訪して得た着想を発展させ、明治四二年に処女詩集「邪宗門」を上梓したという。

米沢の殉教には、私が殉教に抱いてきた悲惨な暗さが微塵もなく、白秋の「邪宗門」に描かれた南蛮への憧憬と官能的な陶酔さえ感じられる。彼らは白秋の世界の中で心安らかに自ら死を迎えていけたのかもしれない。

会津若松で残虐な殉教を目の当たりにしてきたが、米沢の殉教地を訪ねて、果たしてどんな世界が見えてくるのか、楽しみであり、不安でもある。彼等は本当に救われたのだろうか、私なりの解を求めていきたい。

④米沢の殉教地を訪ねて（二〇一五年九月二六日）

朝七時に埼玉の自宅を出立、雨上がりの道端に咲く彼岸花もまだ色鮮やかである。

これから始まる東北の殉教地を巡る旅は、初日に山形の米沢と宮城の仙台、二日目は一ノ関市のマラソンを走った後、岩手の水沢を、そして三日目に岩手の県境にある大籠地区を予定している。福島の会津は、二〇一〇年一〇月に訪ねており、今回は日程上割愛した。

大宮駅から乗車する東北新幹線内で、いつも楽しみにしている新幹線車内誌「トランヴェール九月号」を広げてみると、穂高出身の荻原碌山の彫刻「文覚」と「女」について「碌山が造形した人物たちは、絶望の底にあってなお希望を見据えて闘い続けているように見える」と山田五郎氏のエッセイが掲載されていた。

今まさに向かっている米沢の殉教地が、碌山が造形する世界に通じているように思えてきた。今日はどんな造形に出会えるだろう。そして明日の岩手県水沢で逢える彫刻家舟越保武の十字架像も大いに楽しみである。

車窓に黄金色の田圃が広がり、湧き上がる白雲から覗く青い山並みは、まさに東山魁夷の世界である。

福島で切り離された山形新幹線が朝霧に包まれた奥羽山系に分け入り、板谷峠を越え三〇分程で米沢に着いたが、米沢盆地は想像以上に外界と途絶した別世界である。

米沢駅前のレンタサイクルで、小雨パラつく中を、まずは米沢城跡に向かった。モダンな米沢駅舎から駅前の市街地を西に走り、美しい松川（最上川）を渡ると、戦災に遭うことがなかった旧米沢城下町に入った。

駅から西に二キロ、米沢城は、石垣のない土塁と水堀に囲まれた平城で、外堀が埋められて三〇万石大名の格式にしては威容が今ひとつである。松ケ岬城と呼ばれ、本丸を二の丸と三の丸が囲む輪郭式平城で、二の丸に重臣、三の丸の東側に侍組、南側に馬廻組、西側に五十騎組、北側に与板組の武家屋敷が配された城郭である。

丁度松岬神社の秋祭り初日で、城内外は大変な賑わいになっていた。城内に入ると、上杉家の龍と毘の旗が翻り、米沢ゆかりの伊達政宗・直江兼続・上杉景勝、上杉謙信そして上杉鷹山の堂々たる銅像が並んでいた。

関ヶ原の戦いで西軍に組みして敗れた上杉景勝は、会津一二〇万石から米沢三〇万石に大幅減封されたが、家臣を減らすことなく米沢に移り、藩の財政が困窮するなか、質素倹約で我慢強く君臣主従と近隣親族の連帯と扶助心の厚い、武士の誇り高く保守的な米沢人の気風が育まれ、そのことが奥羽山地の米沢盆地に村社会的なキリスト教社会が醸成されていった由縁かもしれない。

米沢上杉藩は、明治新政府に会津藩と庄内藩の謝罪歎願を周旋するため、仙台藩と共に奥羽二五藩による奥羽列藩同盟の結成を主導したが、歎願書が却下されたため軍事同盟と化し、奥州各地で薩長主体の新政府軍と招かざる戦争に突入していった。まさに上杉謙信公の義と愛に殉じた米沢藩といえる。

城内奥の上杉神社の境内から、上杉鉄砲隊の轟音が鳴り響いてきた。揃いの赤陣羽織で白煙を上げた迫力溢れる勇壮な発砲演武にしばし見入ってしまった。

ようやく小雨も上がり陽が差してきた。米沢の殉教地巡りの最初は「パウロ西堀式部屋敷跡」である。

米沢キリシタンの指導者ルイス甘糟右衛門の模範に動かされて信者となり、殉教した時、三一歳、ポルロ神父は、彼を身分の高い侍で殉教の前日にも四人の大人に洗礼を授けたと書いていた。処刑前夜に西堀の首を切る侍が酒を持って許しを乞い、殉教の覚悟でいるので役目を立派に果たすようにと、別れの杯を交わしたという。

パウロ西堀は、刑場に着くと、挟箱を持つ小姓を呼び、箱から金子を取り出して役人に、近くに住むハンセン病患者へ与えるように頼んだ。死の瞬間まで慈愛の人であり、米沢のキリシタンの敬愛される所以なのだろう。

西堀は、定勝公年譜に御馬廻隊に召入らるとあり、屋敷は城の南側に位置する御馬廻組など中級家臣団の侍町にあったのだろう。旧町名：馬場の町の案内板が立つ周辺を、板塀を廻す屋敷などに面影を感じながら、地元の通行人に尋ねてみたがついに見つけ出せなかった。

西堀屋敷跡の探索を断念、次の「ルイス甘糟右衛門屋敷跡」に向かった。米沢城の西に三五〇mほど、掘立川に架かる無足橋を渡ると、右袂に小さな赤い屋根の古ぼけた社が見えて、社の扁額に立身不動明王とあった。

社の側面に取り付けられた板に「ここは甘糟右衛門のやしき跡であり、又彼がひそかに信仰の対象としていた十字架彫りの石があったところである」と墨書があった。

米沢には常駐の宣教師がおらず、会津若松や最上から米沢に巡回してくる宣教師を迎えて、甘糟右衛門が宿主の世話をしながら、米沢のキリシタンの精神的支柱となって纏め役を担っている姿が浮かんでくる。

無足橋の架かる堀立川は、米沢城の外堀として直江兼継が、城の東側を流れる松川を分流して、城の西側を廻して下流で合流させる人工的に掘削された川である。

掘立川の外側にある甘糟右衛門の屋敷は、本丸を囲う二の丸と三の丸の武家屋敷の外側になり、父の切腹により甘糟家が長く断絶されていたからであろうか。武家屋敷から掘立川を越えた立地こそ、禁制のキリシタンの侍たちが、城郭外にある甘糟屋敷に心置きなく集れて信仰に専念できた理由かもしれない。

一六二九年一月一二日、処刑の日にルイス甘糟右衛門はパウロ西堀宅に立ち寄り、一足先に殉教地に向かいそこで待っていると伝言したと「米沢の殉教者」にあった。

城郭外の西側にある自宅から、掘立川に沿って北東にある北山原刑場に直行するのではなく、無足橋を渡って城郭内に入り、城南のパウロ西堀宅に立ち寄ったということは、そのあと東側の大手門前を通り刑場に北上していたことになる。何故かくも遠回りしたのだろうか。

キリスト教は決して邪宗門ではない、キリシタンであることを誇りに、聖母マリアの旗を先頭に掲げて、死を恐れず処刑場に向けて堂々と行進する姿を定勝に示唆したかったのではないだろうか。父景勝が庇ってきたキリシタンを守り切れなかった己の弱さに苦悶する主君定勝に、別れを告げようとしていたのかもしれない。

次はいよいよ集団処刑が行われた「北山原殉教地」である。ルイス甘糟右衛門の屋敷跡から北東へ三キロ、落ち着いた古色の屋敷町を、二〇分程自転車を走らせた。

北山原殉教地の十字架像（２０１５年9月２６日撮影）



処刑の日は、雪降る日だった。凍てつく雪道を素足で三キロ余り先の北山原処刑場へ向かった彼らは、数時間も掛けて歩いたに違いない。今でこそ住宅街のど真ん中だが、当時は米沢城下町の北側に配された寺町の外側にあり、北山原の地名から、松川（最上川）の西岸に広がる河岸段丘だったのだろう。

住宅街の中の、静かな木立の公園の丘に、十字架のキリストを聖母マリアと使徒ヨハネが見上げるように立っていた。樹蔭に白く浮かび上がる余りの美しさにしばし見惚れてしまった。（前頁の写真）

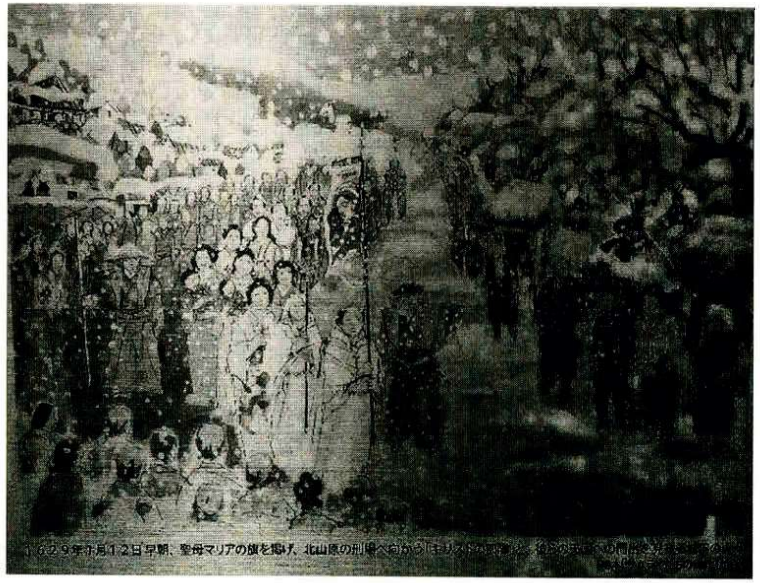
北山原には、受刑者のうち城下町に住む身分ある武士とその家族、郊外に住む徒歩小姓たちが集められ、ここから遠くに住む老人や女子供たちは、自宅近くに集められて、それぞれの場所で処刑が行われた。老人女子供に雪降る道を無理に歩かせない思いやりかもしれない。

ここ米沢では、罪人を引き回すような見せしめではない、残忍な響きのある殉教でもない、心安らかに神に召される儀式を、送る方も送られる方も心得ていた。

公園入口にルイス甘糟屋敷跡の社から発見された十字架彫りの石と、殉教者五三人の名前が彫られた碑が並んでいた。皆の首は見せしめに曝されたが、彼らは心安らかに天国に導かれたに違いない。合掌して十字を切った。

傍らに立つ顕彰碑「殉教の米沢キリシタンを讃える」に、彩色の掠れたパネルがはめ込まれて「聖母マリアの旗を掲げ、北山原の刑場へ向かう、キリストの部隊と彼らの天国への門出を見送る城下の人々（絵本『サムライたちの殉教』から）」の説明文があった。（左の写真）

「サムライたちの殉教」（２０１５年9月２６日撮影）



時計は十一時半を回っていた。北山原殉教地から南へ二キロほど、次の「カトリック米沢教会」に自転車を走らせた。教会の玄関扉が僅かに開いていたが、誰でも自由に礼拝できる気配りなのだろう。無人の聖堂の正面壁面に十字架のキリスト像が懸架され、両側のステンドグラスが神聖な空間を美しく創出していた。記帳して心ばかりの献金を納め、十字を切り退室した。

十二時半の奥羽本線に乗車、山形駅で仙山線に乗換え仙台に向け奥羽山脈を横断したが、無人踏切が多いのかやたら汽笛を鳴らして走る電車の振動が妙に懐かしい。心安らかな米沢の殉教が、残忍な会津の殉教と何故こうも違うのだろう。藩主の違いなのだろうか。

会津で残虐な火炙り刑が始まるのは、米沢殉教の三年後で、米沢の殉教当時は、まだキリシタンの処刑はさほど残酷なものではなかったのだろう。もし米沢の殉教者たちが会津のような苛酷な拷問と火炙りの刑を科せられていたら、果たして心安らかに受刑できただろうか。

白秋の「邪宗門：赤き僧正」の詩が浮かんでくる。

「邪宗の僧ぞ彷徨へる・・・瞳据ゑつつ、黄昏の薬草園の外光に浮きいでながら、赤々と毒のほめきの恐怖して、顫ひ戦く陰影のそこはかとなきおぼろめき」

江戸から遠く離れた奥州の山奥の、禁教の世上から隔離された閉鎖的な村社会のような米沢盆地で、純正培養された無辜で無骨な米沢武士が、南蛮趣味と西洋憧憬が高じて、何の疑うこともなく北原白秋の邪宗門の耽美的で官能の世界に心酔していったのだろう。そして殉教によって天国へ行けることを憧れていた、彼らにとって、処刑場への行進は、天国への旅路だったに違いない。

仙台に着くまでの二時間、静かな山村風景を車窓に様々な思いが去来していた。

⑤果樹王国東根さくらんぼマラソン大会

米沢に殉教者を訪ねた山形県のマラソン大会で思い出に残るのは、二〇一〇年六月七日に山形県東根市で開催された「果樹王国東根さくらんぼ大会」である。

東北で開催されるマラソン大会には、ご当地特産の果樹を冠名にする大会が多く、山形のさくらんぼの他に、弘前のアップル、福島の桃、秋田のメロンなどがある。

今回の出で立ちは、赤シャツに黒パンツの浦和レッズスタイルではなく、青緑色の地に黄色の世界地図が描かれたPARACUPマラソンのTシャツに変えた。

前年の大晦日前日のテレビで、カンボジア戦禍の地雷で片足を失った子供が、女子マラソンアスリート谷川真理さんの指導で五キロマラソンを走るまでのドラマが放映されて感動していたこともあり、世界の恵まれない子どもたちを支援するチャリティマラソン大会というコンセプトのPARACUP二〇一〇にエントリーした。

テニス仲間との北東北旅行の日程と重なり、やむなくPARACUP二〇一〇の出走は諦めたが、参加費が世界の恵まれない子供たちへの義援金になるのなら本望だと思っていたところ、大会事務局から素敵な色合いのTシャツとフィリピンの子供たちが木の実で手作りしたという素朴な首飾りが送られてきた。

今回参加する東根さくらんぼマラソン大会には、ぜひこの青緑色のTシャツと首飾りを身に付けて『世界の子どもたちに贈るラン』を届けたい、と楽しみである。

前泊の山形駅前ホテルを朝早く出ると、六月なのに少し肌寒く感じられ、さすがに北国である。人影少ない街並みを駅に向かいながら、天空の薄曇に微かに青味が帯びてきて、絶好のマラソン日和になりそうである。

奥羽本線の二両編成の朝一番電車は、マラソンランナーでほぼ満員、途中駅では東京の通勤ラッシュ並みである。山形新幹線も停まる「さくらんぼ東根駅」に下車すると、駅前に山形交通の専用バスだけでなく、個人のワンボックスカーまでが動員されていた。まさに市民総出の運営に、こちらまで熱くなってきた。

会場へ向かうバスの車窓を流れる田園風景にさくらんぼの赤い実を捜し求めてみた。どうも今年は天候不順で桜の開花が遅れ、さくらんぼの色もまだ青っぽく、ルビー色のさくらんぼロードは、まだ先のようである。

さくらんぼ畑を抜けて、大会会場の自衛隊基地に着くと、バスの降車場から大会受付までの道路に会場案内の地元のおばさんたちが並んで応援小旗を振って迎えてくれた。さくらんぼの木の枝を使った手作り感ある可愛い小旗を一本、大会参加の記念におねだりした。

自衛隊の駐屯地だから出来るのだろうゆったりした敷地と施設をふんだんに使った会場に、全国から集まった一万人以上の選手とその家族で賑わっていた。展示されている軍用車両に子供達が群がり、親たちがカメラを向けていたが、平和な日本を象徴する光景である。

受付で大会記念Tシャツとプログラムを受け取り、控室の体育館でPARACUPシャツの青緑色に合わせた蛍光色の黄緑キャップを被りグランドに飛び出した。身体がすこぶる軽く感じられて腰痛の心配もなさそうだ。

九時半の出走に備えてハーフマラソン四〇〇〇人の目標タイム一時間五〇分グループに位置取りしていると、同じPARACUPのTシャツの青年を見掛けたが、相手の超アスリート風の雰囲気に圧倒され、同じタイムでゴールできたら挨拶しようと、声掛けは自重した。

スタート一〇分前に突然スピーカーから大音響で「おはようございます。瀬古です。今日は走りません。代わりに中山が走ります。中山は本気です。もし中山を負かしたら私がサービスします」とハイテンションなジョー

クを交えた挨拶が流れて大会を盛り上げていた。千葉真子さんも甲高い声で「リラックスとリズムを大切に」と持ち前の明るさで大会に花を添えていた。スタートの合図と同時に拍手が沸き起こり、やぐらの上から真子ちゃんの「いってらっしゃあい」に送られてスタートした。

初めの一キロは、自衛隊基地内の直線道路をのろのろのジョッキングである。キロ六分三三秒、次の一キロが五分三四秒、ようやく大会らしいペースになった。

基地のゲートを出るとまもなく、広い校庭の小学校そして中学校の前に、大勢の生徒たちが鈴なりになって県名のプラカードを持って声援を送っていた。

その中に私に所縁のある宮城県・埼玉県・静岡県・神奈川県のカードを見付け出して、手を振って応援に応えた。心温まる洒落た企画に、すっかり昂揚していた。

やがて五キロを過ぎると、前方にウォーターカーテンが見えてきた。帽子を取って頭から爪先まで霧のようなシャワーを浴びてひたひたと走り抜けた。心身共に爽快な演出には、まさに感謝の脱帽である。

済生館病院というタスキを掛けた女子ランナーに追い付いた。私の勤務先の応接室に懸けられていた東山魁夷の絵画「青い家」の病院の看護婦さんであろうか。

昨夕に訪ねた山形城内に建つ赤い色の済生館は、戦時中に米軍の空襲に備えて防空色の青い色に塗り替えられて、魁夷はその「青い家」を描いていたが、塗り替え前の「赤い家」の済生館も描いていた。建物をあまり描くことのない魁夷が、戦前と戦中に山形を二度も訪れ、同じ建物を描くとは何か特別の想いがあったのだろうか。

「青い家」の額縁を新調する際、絵に加筆してくれた魁夷が、この建物を病院と呼んでいたと画商が言っていたが、旅先で病気になりお世話になったこの病院で、看護婦さんとの秘められた思い出でもあったのだろうか。魁夷の秘められた青春の彷徨に思いを馳せてみた。

快調なペースでキロ五分三〇秒をキープ。七キロ付近で先頭グループとすれ違ったが、さすが中山選手、日本マラソンのエース、上背ある凛々しい姿勢でダイナミックな颯爽として走りはテレビで見ていたとおりだ。

八キロ付近で林の中に鎮座する小さな祠が見え、その参道に停めた車の中からエレキギターが大音響でリズムを打ち、道路端には老人ホームのお年寄りが小旗を振っていた。中世・戦後・現在の異なる世代がタイムスリップして偶然この空間に居合わせたようである。

沿道の応援の中から時折歓声が上がるのは、並走する水戸黄門に仮装したランナーのサービスアクションだった。お年寄りや子供達に向かって印籠を取り出し「控えおろう」とジェスチャーを振りまいており、みんなを楽しませ自分も楽しむ青年の心意気には頭が下がる。

緩やかな上り傾斜が続いてキロ六分台に落ちてきたが、折返しの一〇キロ地点で五八分四四秒は上々である。

折り返すとさくらんぼ畑の中をなだらかな下り坂が延々と続き、タイムを挽回するチャンスとばかりにピッチは上がってきた。左右に開けたさくらんぼ畑の各所で脚立に上がってさくらんぼを積む光景が見えてきた。枝先はまだ青色か黄色だが、赤みを帯びたさくらんぼを探し出しては胸をときめかせた。

正面に五合目まで残雪に覆われた月山が優美な姿を現わしてきた。一〇年ほど前にあの稜線の頂点で三六〇度の展望にビデオカメラを回したことが思い出される。

下り坂を飛ばし過ぎて日差しも強くなり、足に張りを感じ始めた頃を見計らっていたかのように、大勢の女子係員がコース内に入り込んで濡れタオルを配っていた。

手にした瞬間思わず「ひゃっこい！」と喜びの悲鳴を上げ、顔と首と頭を冷やして、タオルを縛って返しながら「有難う！」の声にも元気を取り戻していた。

ランナー全員に四〇〇〇本も用意したのだろうか。事前に濡らして冷やして保管、ベストなタイミングで、手渡しで配ってくれるなんて涙が出るほど心憎い演出ではないか。大変な労力と思いやりに感謝感激である。

お年寄りから子供たちまで、少しも怖じることなく声を張り上げて応援しているのにも驚かされた。誰もが応援に慣れているのだろう。それに応えようとハイタッチするランナーの多いこと。親が子に描かせたと思われる稚拙な文字で「がんばれ」と手書きされた半紙を両手に応援する子供さんを無視するわけにいかない、立ち止まりしゃがみこみ、両手を差し出してタッチした。

往路でシャワーを浴びた地点に戻り、復路の筋肉疲労を癒されたが、濡れた路面に小さな虹が浮かび上がって「虹だ！」と誰もが子供のように喜声を上げていた。

ペースダウンして歩きたい誘惑に襲われてきたが、ゴールすればいくらでも休めるのだから今が頑張り所だ。千葉真子ちゃんが言っていた、リラックス！リラックス！リズム！リズム！これまで参加したどの大会にも負けない、熱く温かい沿道の応援に後押しされていた。

沿道の応援の中にいる車椅子の青年と視線があった。若いのにどうしたのか、交通事故だろうか。谷川真理が地雷で片足首を失ったカンボジアの子供を励ますテレビ番組のシーンが浮かんできた。立ち止まり振り返り手を振り、頑張ってね、と大声で呼び掛け、首に下げたフィリピンの子供が作ってくれた首飾りを握りしめた。

中学校の所に戻ってくると、生徒達がプラカードを持ってまだ応援していた。すぐ前のランナーがプラカードを生徒から貰って飛び跳ねるように喜びながら走っていった。プラカードに何が書かれていたかは後で知った。

太鼓を叩いて応援するオジサンにタッチすると「元気をやったぞ！」と力強い掛け声を掛けてきた。負けじと「元気を貰ったよ、有難う！」と返してやった。

二〇キロ地点で一時間五七分四八秒、残る一キロは紫色のシャツをターゲットにひたすら追走、ついにゴールした。二時間三分四一秒。気温も二〇度を超えて日差しも強い中、近来にない達成感に包まれた。趣向を凝らした心温まる応援で支えてくれた地元の全ての人達に感謝である。これだからマラソンはやめられない。

参加賞に名産のさくらんぼパックとおにぎり二個を貰い、参加記念のrun yourself betterとプリントされたTシャツに着替え、初夏の陽射しを一杯に浴びながら芝生に両足を投げ出して昼食をとった。

お土産に持ち帰ろうと思っていたが、真っ赤な可愛いさくらんぼの誘惑に負けて頬張ってみると、蕩けるような甘さは、さすが、さくらんぼ佐藤錦の本場である。憔悴し切った体にはまさに天の恵みである。

帰りのシャトルバスが走り抜けるさくらんぼ畑は、今日の好天で少し赤味が増したような気がする。月山の白く美しい稜線に別れを告げ、山形駅乗換えの仙山線経由で宮城県南部の実家に向かった。老人施設にいる父への土産に大会会場で佐藤錦を二箱買ったが、私の土産話はいつも以上に長話になりそうである。

東根市で果樹園を経営するママンさんのブログに、市民ぐるみの大会運営や生徒達のプラカードに込めた裏話が載っており、感謝の意を込め転載させてもらいます。

「東根では、皆、ボランティアにて、お手伝いです、パパもお手伝いを頼まれているし、地元中学三年の友梨も応援！！しかも、代休付きで。市民が一体となり、大会のお手伝いを、しています。今年は、さくらんぼの最盛期がいつもより一週間ほど遅れているので、真っ赤に実る、さくらんぼの木の下を走るのには、無理があるかな。けど天気で、皆さんが、より東根を知って大好きになって帰ってくれたら、嬉しいな！！！」

「地元中学三年の娘が話していたが、見知らぬ六〇才以上ランナーの方々の名前を各自一人ずつ分担し、思い思いに画用紙に描いてそれを持っての応援だそうです。その方を必死に、捜しつつの応援で、見つけられた時の感動が、また応援の楽しさの醍醐味かもしれませんね。

うちの娘は、探せて相手の方の名前を大声で呼び、相手の方も気付いてくれて自分の名前が書かれた応援メッセージに感動してくれて「私が書いた名前メッセージ画用紙、プレゼントしたの♪」と喜んで帰って来ましたが、他の友達は、こっちが気付いて名前を呼んでも相手様は疲労困憊で気付かないのが多々あるらしく、大声で呼んでも走り去られると、マジ凹むわ…との事だそうです」

（次号に「宮城県と岩手県の殉教地を訪ねて」を投稿）

明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その六）

山本勉

『渋江抽斎』における渋江保経歴叙述上の矛盾とその影響

一　はじめに

渋江保が尺振八の共立学舎入学（一八七一年（明治四年）五月十一日）前に学んだ学問は、『抽斎歿後』や『独立評論』の記述から明らかなように、漢学を幼少期の人格形成の支柱としていたことがわかる。しかし、渋江がいかに早熟であったとしても、物心がついたばかりの幼児が高尚な学問である漢学を果たして学ぶことが出来たのかという素朴な疑問が生じる。当然のことながら、渋江はこれまで一八五七年（安政四年）七月二十六日生と言うのが通説になっている。松木明知は『鴎外』九〇号「渋江抽斎の嗣子「保」（成善、道陸）の生年と名について」において、渋江の生年について一八五一年（嘉永四年）七月二十六日生まれとする資料を提示している。このことは、渋江の漢学やその後の英学修行を考える上で極めて重要な指摘である。

小論では、英学修行前の幼少期の人格形成に漢学塾の師がどのように関わってきたのかを検証する。また、松木論文を踏まえて、『抽斎没後』や森鴎外の『渋江抽斎』に散見される渋江保の経歴叙述上の矛盾について考察すると共に、渋江保年齢詐称が森鴎外の『渋江抽斎』にどのような影響を及ぼしているのかを分析する。

二　明治期に漢学を学ぶ意義

実業家であった渋沢栄一（一八四〇～一九三一）は『論語と算盤』や『論語講義』等、論語に関する著作を著しているが、論語等、儒教の経典である四書五経は江戸時

代の士族階級にとって必読書であり、知識階級にとって漢書を学ぶことがすなわち学問あった。渋江も例外ではなく、父であり津軽藩定府医官でもある抽斎の薫陶を受けて、「遺命して成善を海保漁村に学ばしめ、且つ小島成斎に就て老子を。又多紀養春院に就て素問を研究せしめんとす」[1]と『抽斎年譜』にあるように漢学の道を学び始めた。そのことについて同様のことが森鴎外『渋江抽斎』その五三にも記述が見られる。

維新後、明治政府は、殖産興業や文明開化をスローガンに掲げ近代国家の建設を急ピッチで進めたが、そのためには、どうしても西欧の先進的な技術や知識の移入が不可欠で、お雇い外国人の採用や英語を学ぶための英学校も創設された。しかし、明治初年においても漢学の私塾の数は英学校に比べて遙かに多く、明治期入り二松学舎（現二松学舎大学）のような漢学塾も開塾し多くの人材を輩出している。実際にこれまでに多くの研究者が指摘しているように、明治期に考案された漢語の中には、今日においても日常的に使われている「文明」や「思想」、「経済」、「社会」等の漢語もあり中国に逆輸入された日中共通の漢語も少なくない。西周（一八二九～一八九七）が「philosophy」を「哲学」として訳出したことは人口に膾炙することである。こうした新たな漢語の興隆は、幕末から明治期の漢学者達の知識の蓄積によってなされたものであり、漢学の素養の上に英学が成り立っていたとも言える。「幕末における西欧文化のインパクトはたしかなものであったが、それは無限のものではなかった。彼らは比較的容易に、西欧の文化事業やその根底にある哲学を把握し、さしたる迷いもなく、それらを自分たちの言語体系である漢語のなかに次々と置き換えることができた。」[2]と村上古廣が『漢学者はいかに生きたか』で述べているように、渋江が亡き父、抽斎の遺命を受けて学んだ漢学も英学を学ぶ上で大きな礎となったに相違ない。

三　渋江が学んだ漢学

（一）経書（易経・書経・詩経・礼記・春秋）

儒学の基本的な文献であり、易・書・詩・礼・春秋の五経を指す。易経について、竹内照夫の『四書五経入門』によれば、「政治、経済、軍事などの実際的な事業や行動における、責任者の意志決定にとって、占いは重要な方法であった。」[3]とあるように古代中国においても国を治めるための重要な書であった。日本の元号である「明治」や「大正」も出典はこの易経である。易経の他に、理想の政治について書かれた書経、中国最古の詩集である詩経、政治や学術等の礼の制度について書かれた礼記、孔子が編纂したとされる春秋時代の歴史書の春秋がある。このうち、渋江は最晩年まで易経にこだわり続け、易経の大家であった根本通明に

師事している。

（二）素問

黄帝とその臣の名医岐伯との問答体で書かれている中国最古の医書である。素問は、生理・衛生・病理等の基礎医学で、臨床医学を扱った「霊枢」と合わせて「黄帝内経」と呼ばれている。「黄帝内経」は「神農本草経」、「傷寒雑病論」とともに中国医学における三大古典のひとつとされる。保に医師としての道を歩ませた抽斎は素問を学ばせたかったのであろう。

四　私塾の師

『抽斎歿後』や『独立評論』に挙げられている渋江の師である福澤諭吉を除いた七名のうち、共立学舎に入学する前に関わった海保漁村、海保竹逕、小島成斎、多紀養春院、兼松石居、五人の人物像について触れておきたい。

（一）海保漁村（一七九八～一八六六）

江戸後期を代表する儒学者、考証学者である。『独立評論』第二巻第六号渋江保氏談話「海保漁村先生」に詳細に綴られているが、漁村は上総国武射郡北清水村、現千葉県山武郡横芝光町北清水に生まれている。父は医者であったが、「夜間人が寝てしまってから外へ出て、常夜灯の明りで本を読んで居た。」[4]というくらいで、よほど学問好きであったのであろう。漁村は江戸に出て儒学者の太田錦城に師事し、その後、私塾、伝経廬を開いている。渋江は一八六〇年（万延元年）十月一日から漁村に経書を学んでいるが、塾生には、島田重礼・箕作麟祥・鳩山和夫・渋沢栄一・内藤魯一・中村三平・青柳節蔵・尾高長七郎等、後の世に名を残した人材も輩出しており、渋江は幼少期に漢学を学ぶなかで近代日本を創った人物たちとの交流があった。「海保漁村先生」によれば、海保塾で、四書五経や文選の素読、呂氏春秋や唐家八家文の無点本等読んでいることに触れているが、漁村が吉凶判断の過程について検討を加えた『周易古占法』を著していることも考えると、渋江が最晩年に易学関係の著作を著した原典がここにあると考える。渋江は漁村が師事した太田錦城の写本を当時所蔵していたが、そのなかに、渋江が最晩年に著した『周易象義』がある。更に、渋江が漁村塾で学び始めた四年前の一八五六年（安政三年）、漁村は、北海道の防衛と開拓を論じた『辺政備覧』を著している。筆者は未見であるが、漁村は当時の日本を取り巻く国際情勢をきちんと把握していたようで、『「海保漁村」草莽の大賢者！渋沢栄一も学んだ、庶民教育の儒家』によれば、明治政府のアイヌ同化政策とは一線を画し、先住民族に対する支配を戒めた側面が漁村に見られるとの指摘があったことは、海保漁村の教えが、漢学だけではなく、国際的な視野を広めると

いう面においても後の渋江の人格形成に影響を及ぼしたに違いない。

（二）海保竹逕（一八二三～一八七二）

漁村の養子で、渋江が入塾した頃には竹逕が講義をしている。その後渋江は弘前に帰国するが、再び上京した翌年、一八七一年（明治四年）に竹逕は亡くなっている。

（三）小島成斎（一七九六～一八六二）

福島藩士で江戸末期の書家、老荘学にも造詣が深い人物で、『独立評論』第二巻第五号渋江保氏談話「小島成斎先生」に「私の父とは兄弟よりも親しい間柄であった。」(5)とあり、抽斎は保の行く末を小島成斎に託したのではないかと思われる。この小島成斎は福島藩主阿部四代の右筆として仕えており、幕府の老中の要職にあった阿部正弘の時世に、米国への答書やロシアの海軍提督プチャーチンへの返書を執筆し、開国で揺れた幕府の様子を目の当たりに見てきた人物である。

（四）多紀安琢（多紀養春院）（一八二四～一八七六）

幕府の医官である。渋江が多紀家に入門したのは、黄帝と名医岐伯との問答について書かれた中国最古の医学書である素問を学ぶためであった。これは渋江抽斎が亡くなるときに、渋江の家に出入りしていた多紀安琢に抽斎が素問の教授を願い出たことによる。多紀安琢を始めとして、渋江が教えを受けた師について、『独立評論』第三巻第五号渋江保氏談話「私塾の思ひ出」に綴られている。

（五）兼松石居（一八一〇～一八七七）

昌平坂学問所で学び江戸で学問を教えていたが、津軽藩世継ぎとなるはずだった津軽武之助（一八三八～一八五五）の教育係を担当していたときに、武之助が若くして病没したことも影響し本国の津軽藩で蟄居されることになった。その後、私塾麗沢堂を開き藩校の稽古館にも関わっているが、渋江は一八六八年（慶応四年）～一八七一年（明治四年）、弘前にて兼松石居に経書を学び漢学の助教を務めている。

五　渋江保、二つの異なる生年

松木明知は前述の『鷗外』九〇号に「渋江抽斎の嗣子「保」（成善、道陸）の生年と名について」において、詳細な資料を提示し、渋江の生年が一八五七年（安政四年）七月二十六日生ではなく、一八五一年（嘉永四年）七月二十六日生であり、六歳少なくしていることを論証している。その根拠となった資料が二つある。先ず、松木が渋江乙女を訪ねたときに閲覧した渋江保による渋江抽斎の子どもの略歴を綴った『保の同胞表』である。この書

名については、紙片であったため松木が仮につけたものである。次に『渋江族系譜』である。『保の同胞表』には渋江の生年を「嘉永四年丙辰八月朔日生」(6)、『渋江族系譜』には「嘉永四年辛亥七月廿六日生」(7)とあり、月日については異なるが、生年については「嘉永四年」とあることから、渋江保の生年は「嘉永四年生」であり、生年に詐称があると松木は結論づけている。渋江乙女没後、これらの資料は渋江乙女長男、佐藤豊彦、八千代ご夫妻が受け継ぎ、松木が預かり整理して仮目録を作成し武田科学振興財団杏雨書屋に寄贈している。同書「四「渋江氏系譜」と保の生年」において、武田科学振興財団杏雨書屋に寄贈した資料の中の「渋江氏系譜（渋江族系譜を指している）」を取り上げて、渋江の生年が「嘉永四年辛亥七月廿六日生」であることを重ねて指摘している。しかし、『渋江抽斎』その五一には「安政四年には抽斎の七男成善が七月二十六日をもって生まれた。小字は三吉、通称は道陸である。即ち今の保さんで、父は五十三歳、母は四十二歳の時の子である。」(8)とあり、『抽斎年譜』においても「安政四年丁巳七月二十六日」(9)となっている。渋江がなぜ生年を改めたのかは、松木もわからないと述懐している。なお、筆者も佐藤八千代氏とは現在でも書簡や電話での連絡を取っているが、渋江の生年について一八五一年（嘉永四年）七月二十六日生であることをこれまで聞いたことはない。

更に、松木は杏雨書屋に寄贈した矢島玄硯の末期養子となった矢島優善（一八三五～一八八三）直筆の『渋江家年譜』を取り上げて、渋江保の生年が「嘉永四年辛亥七月廿六日生」であることに確証を得ている。松木によれば、この資料は、一五二六年（大永六年）から一八八三年（明治十六年）の天皇家・将軍家・津軽家・今大路家・渋江家・矢島家について記載した年表で、渋江家と矢島家については五段目に記述があり、渋江家について書かれた嘉永四年のところに「七月二十六日三純生」(10)と記載があることを指摘している。三純は保のことで、保が一八五一年（嘉永四年）七月二十六日生であることがこの資料からはっきりした。

渋江の生年について調べていくと、一八五七年（安政四年）七月二十六日、一八五一年（嘉永四年）七月二十六日の他にも資料によって異なる生年が見られることがわかる。渋江が慶應義塾に入塾した際の入社記録については、筆者は未見であるが、松崎欣一の『福沢書簡に見る地方名望家の軌跡　伊藤要蔵と福沢諭吉』によれば、慶應義塾入社帳に渋江保の生年が「一八五三年（嘉永六年）十二月三十日」(11)とあり、川崎司『高木壬太郎　その平凡な生涯をたどって』によれば、「渋江保履歴書　静岡県教育委員会」として、「遠江国周智郡領家村百廿四番地　静岡県士族　渋江保　安政四年八月十日生」(12)とある。入社記録や履歴書のような重要書類に

なぜ異なる生年を書き込んだのか不明である。

六　史伝『渋江抽斎』、『独立評論』、『抽斎歿後』に見る渋江保年齢詐称事項

（一）藩主津軽順承謁見

①資料

○「年はじめて二歳、今の齢を算する法にしたがえば、生れて七箇月であるから、人に懐かれて謁した。しかし謁見は八歳以上と定められていたので、この日だけは八歳と披露したのだそうである。」(13)（森鷗外『渋江抽斎』その五二）

○「私が三歳の時、始めて拝謁をしたのは此の君候であった。当時藩の定規に、知行取の嫡子は七歳で始めて拝謁が出来、知行のない者の嫡子は十五歳に達しなければ拝謁ができないのであった。私の家は知行取であったが、それでも三歳では六かしいのだ。そこで七歳といふことにして拝謁をした。」(14)『独立評論』（大名の生活（下））

○「私の三歳の年には嫡男（即ち私の長兄）が死んだ。それで急遽に私が君候へ拝謁することになったのだ」(15)（『独立評論』大名の生活（下））

②考察

資料から渋江は「二歳（生まれて七ヶ月）」、または「三歳」で藩主との謁見を果たしていると述べている。資料によって年齢の違いはあるが、松木の資料から、渋江は六歳加算すると、実際には八歳若しくは九歳で藩主と謁見していることになり、「藩の定規」の七歳（八歳）に達していることになる。

（二）経書・書経・素問を学んだ時期

①資料

○「○漢文。万延元年十月朔日より慶応二年まで海保漁村に学び、漁村歿してより明治五年迄その子竹逕に学ぶ（戊辰四月弘前に移りてより同四年上京まで八兼松石居に学び且つその監督の下に藩学助教たり）五年竹逕歿後ハ豫て同門の先輩たりし島田重礼に就て同三十一年八月その死亡まで、苟くも在京の時は常に学びたり且つ維新後別に根本通明に就き是れも明治三十九年十月三日その死亡まで或ハ講義を聴き或ハその塾（義道館）の講師たり。又小島成斎（万延元年十月より）に就て書経を学ぶ。然れども僅に前後三年にして成斎歿せり。又多紀養春院にハ文久三年（七歳）より維新まで前後七年素問霊枢等諸書を習へり聴講」(16)（翻刻資料『抽斎歿後』）

○「成善はこの年（筆者注記：一八六〇年）十月朔に海保漁村と小島成斎との門に入った。」(17)（『渋江抽斎』その六八）

○「抽斎歿後の第五年は文久三年である。成善は七歳で、はじめて矢の倉の多紀安琢のもとに通って、素問の講義

を聞いた。」(18)（『渋江抽斎』その七七）

○「第八年は慶応二年である。海保漁村が九年前に病に罹り、この年八月その再発に逢い、九月十八日に六十九歳で歿したので、十歳の成善は改めてその子竹逕の門人になった。」(19)（『渋江抽斎』その七七）

○「父の死ぬ時には又私を（筆者注記：多紀安琢）養春院に託して『素問』の教授を依頼した。さういう訳から私は多紀家へ稽古に行くことになったのである。」(20)（『独立評論』「私塾の思ひ出」）

②考察

渋江が私塾の師から漢学を学んだ時期は以下の通りである。

○経書を学んだ時期

・一八六〇年（万延元年）十月一日～一八六六年（慶応二年）、三歳から海保漁村に師事し経書を学び始める。

・一八六六年（慶応二年）～一八七二年（明治五年）、九歳から海保竹渓に師事し経書を学び始める。

・一八六八年（慶応四年）～一八七一年（明治四年）、弘前にて兼松石居に師事し、経書を学び、十一歳で漢学の助教を務める。

○書経を学んだ時期

・一八六〇年（万延元年）～一八六二年（文久二年）三歳から小島成斎に師事し、書経を学び始める。

○素問を学んだ時期

・一八六三年（文久三年）、六歳から多紀安琢に師事し素問を学び始める。

経書を海保漁村に師事して学び始めたのが、三歳、書経を小島成斎に師事して学び始めたのが同三歳、極めて難しいと言われる素問を学び始めたのが六歳である。この年齢で五経や素問を果たして学ぶことができるだろうか。『独立評論』渋江保氏談話「明治初年の学風」によれば、渋江と共に漁村塾で学んでいる塾生には、島田重礼（一八三八～一八九八）・箕作麟祥（一八四六～一八九七）・鳩山和夫（一八五六～一九一一）・渋沢栄一（一八四〇～一九三一）・内藤魯一（一八四六～一九一一）・中村三平（一八四三～不詳）・青柳節蔵（現時点で生没不明）・尾高長七郎（一八三六～一八六八）がいた。生没がわからなかった青柳以外は、十代半ばから二十代で漁村塾で学んでおり、三～四歳の幼児が彼らと机を並べて果たして学べただろうか。こうしたことは通常あり得ないことで渋江が年齢を詐称したことは明らかである。

（三）弘前へ向かう道中の変装（女装）

①資料

○「石橋駅へ至るとハヤ仙台藩の兵士が左右に陳列し私の駕篭の戸を開かせ左右二十人許づつ皆筒先きを向けて

詰問した　弁論の末ヤット通行が出来た　それ故其の夜旅店へ着くと真ぐに女装に改めた併し道中一と方ならぬ困難で阿った」[21]（翻刻資料『抽斎歿後』）

○「江戸に残れる藩士わづか数十戸、合計五六十人を引連れ、安済丸へ乗込んで京地を出発した。是れは明治元年六月頃のことであったと思ふ。是れより先き、私は四月に江戸を出発し、女装して陸地敵地を通り抜け、千辛万苦して辛と三十日目に弘前へ着いたが、」[22]（『独立評論』（大名の生活（下）（続））

○「五百らの乗った五挺の駕籠を矢島優善が宰領して、若党二人を連れて、石橋駅に掛かると、仙台藩の哨兵線に出合った。銃を擬した兵卒が左右二十人ずつ轎を挟んで、一つ一つ戸をあけさせて誰何する。女の轎は仔細なく通過させたが、成善の轎に至って、審問に時を費した。この晩に宿に着いて、五百は成善に女装させた。」[23]（『渋江抽斎』その八一）

②考察

一八六八年（慶応四年）、奥羽越列藩同盟の成立した東北諸藩を通過する際に十一歳の保は女装して弘前へ向かったことになっているが、十一歳の子どもが女装する必要はなく、江戸時代の元服は十五歳で、成人の年齢が二十歳になったのは一八九六年（明治二十九年）四月二十七日からである。元服をすれば倒幕派の一員と見なされる可能性があり、奥羽越列藩同盟の諸藩を通過するには、実年齢十七歳であった渋江は女装する他なかった。

（四）秩禄の大削減と医者の降等

①資料

○「私ハ豫て医者の範囲でなく寧ろ士たり儒者たるの範囲で阿った　現に此の減禄令の出た頃ハ藩学の助教授（経書の）で阿った此の時弘前藩に限って非常な令が出た　それハ医師に限って原禄の如何に拘はらず三十俵に引き下げ且つ士族末席に引き下げるといふので阿った私ハ兼松先生に相談した　又少参事兼大隊長加藤武彦君（清の事）にも相談した　二人ながら「足下の家ハもはや医師の部でハない通常の士族だ」といった：（中略）：スルト或る二三の方面（抽斎の名誉を妬んで居た人達）から種々の陰険なる策略が行はれて（氏名ハ省く）忽ち彼の三十俵、士族末席の部に入れられる事になり且つ士族でハないのだなどの説さへ起った　私ハ一日相刺をせぬばかりに論戦した　併し到底無益で阿った」[24]（翻刻資料『抽斎歿後』）

○「抽斎歿後の第十二年は明治三年である。六月十八日に弘前藩士の秩禄は大削減を加えられ、更に医者の降等が令せられた。」[25]（『渋江抽斎』その八七）

○「私ハ四歳の時、禿童と為りてより漸く成長して近習小姓に進み、藩地に移りて後ハ、兼松石居の世話にて藩

学の助教と為り、畢竟武家にて儒学を修め居たれど、藩地へ移るや否や、当時藩の学医北岡太淳、手塚元瑞、今春碩等が頻りに医業を兼ねんことを勧め、藩地の医者にハ中村春台、三上道春、北岡有格、小野圭庵の如き前途有望の者なり　又当時新に召抱へられて小普請医者となりたる小山元洋（此時五人扶持をせり、後に東京に出でて名を建と改め　東校の教授となり、又二等軍医正となる。今の薫と八千代との父也）などあれど　江戸定府中ニハ殆ント人なし、足下是非医業を兼ねよと言ひたれバ明治二年、正式の試験を受けて委員に列したり、故に大星場（筆者注記：弘前藩が大砲訓練の的として嘉永七年（一八五四年）八月に築いた演習場、現在はりんご公園となっている）の時ハ医師として行きたるハあらざれども、既に弘前□へ宿直をも為し居たれバ道秀に代りたる也」[26]（翻刻資料『抽斎歿後』）

②考察

一八七〇年（明治三年）六月十八日、弘前藩士に秩禄の大削減が行われ、十三歳の渋江には医者の降等が適用されることになる。既にこの当時、抽斎は逝去し、資料に明記されているように士族の身分であったとしても、藩医は世襲制であったために降等が適用されたと思われる。実年齢十九歳は抽斎の後継者として十分に通用する年齢であった。

（五）大学南校入学

①資料

○「○英文。明治四年三月十一日共立学舎の尺振八に入学し六月より又大学南校へも通学し且つフルベッキに就て学ぶ又高等師範学校五年九月入学八年一月卒業在学中は米人スコット、及びブラウンに学び明治十二年十一月慶應義塾に入学同十三年十二月卒業第一位○又キーリング。ラムバラード等諸氏に学ぶ」[27]（翻刻資料『抽斎歿後』）

○「又三味線堀に文明義塾といふのがあって、其処へ梅浦が半分教師、半分生徒といふ格で行ったので、私共も梅浦に誘はれて行って見た。亜米利加人のガズーナといふのが居て、スペリングから初めたが、少しやっている中に此の米人先生、私共の質問に答へることが出来ないやうになってしまった。仕方がないので此処もやめて九段の南校へ行った。」[28]（『独立評論』「明治初年の学風」）

○「私ハ上京以来藩邸の長屋を借り受けそこから南校等へ通学して居た。」[29]（翻刻資料『抽斎歿後』）

○「成善は四月に海保の伝経廬に入いり、五月に尺の共立学舎に入ったが、六月からさらに大学南校にも籍をおき、日課を分割して三校に往来し、なお放課後にはフルベックのもとを訪うて教えを受けた。」[30]（『渋江抽斎』

その九二）

②考察

一八七一年（明治四年）十四歳で南校に入学するが、筆者は未見であるが、一八七〇年施行の大学南校規則によれば、一六歳以上が入学の要件になっている。この点については、稲田雅洋が『渋江保伝（上）』（境創刊号）において大学南校規則を取り上げて詳細に説明をしているが、「東京大学附属図書館　特別展示会　東大黎明期の学生たち　民約論と進化論のはざまで　四大学南校と貢進生」には、規則第三条として「幼年ノ間ハ和漢ノ学肝要ナルヲ以テ十六歳以上ニ非サレハ入学ヲ許サス」[31]とある。これらの資料から、十四歳では大学南校に入学できず、六歳加算の二十歳の入学であれば何ら問題なく入学できたことになる。

（六）共立学舎入学

①資料

○「其頃本所に関新八（筆者注記：尺振八）の立てた共立学舎といふのがあったが、私は其れに入って英語を学んだ。」[32]（『独立評論』「明治初年の学風」）

○「成善は英語を学ばんがために、五月十一日に本所相生町の共立学舎に通いはじめた。」[33]（『渋江抽斎』その九一）

②考察

一八七一年（明治四年）五月十一日、十四歳で、尺振八の共立学舎に入学しているが、現時点で、共立学舎の入学規則を把握していないので、十四歳で入学可能であったのか不明である。

（七）東京師範学校入学

①資料

○「明治五年の九月に開校した東京師範学校へ入学した者は総べてで五十四名で、其中十八名は上等生、三十六名は下等生といふ名前の下に編入せられた。此の上等生は伝習生とも称して、スコットといふ外国人より、西洋の小学生同様ABCから正則の授業を受け、其の習った所を所謂下等生に教へるのである。学校は翌六年の六月に初めて寄宿舎を設けたが、其れ迄は何れも通学であった。入学資格は二十五歳以上という定めであったが、其れに満たぬ者も少なからず、中に十代の者は加治義方、末松謙澄及び私の三名であった。末松は其時十八、加治は十七、私は十六であったのである。」[34]（『独立評論』「学界今昔物語」）

○「しかるにここに一つの障礙があった。それは師範学校の生徒は二十歳以上に限られているのに、保はまだ十六歳だからである。そこで保は森枳園に相談した。」

[35]（森鷗外『渋江抽斎』その九五）

○「明治五年に今の高等師範の前身たる東京師範学校が出来たので、私も其処へ入った。」、「何百人といふ志願者の中、五十四人だけやっと入学することが出来た。此五十四人の中十八人は伝習生といふ名で、スコットといふ米国人から発音、書取、会話等の教授を受けた。」[36]（『独立評論』「明治初年の学風」）

○「高等師範学校（五年九月入学八年一月卒業）在学中ハ米人スコット、及びブラウンに学び」[37]（翻刻資料『抽斎歿後』）

②考察

一八七二年（明治五年）九月五日、十五歳で東京師範学校に入学している。『独立評論』と『渋江抽斎』では入学の要件がそれぞれ二十五歳以上、二十歳以上と異なるが、渋江は十六歳で入学したと明記している。一八七二年（明治五年）、入学時は数え年で十六歳であるので入学することはできないはずであるが、実際には六歳加算すると二十二歳となり、二十歳以上という要件は満たされることになる。

（八）カッケンボスの『米国史』翻訳出版

①資料

○「万巻楼の主人は大伝馬町の袋屋亀次郎で、これより先さき保の初めて訳したカッケンボスの『米国史』を引き受けて、前年これを発行したことがある。」[38]（『渋江抽斎』その九七）

○「それで何かして本を買ふ金を拵へたいものだと思って大胆にもカッケンボスの小米国史の翻訳を思ひ立った。」[39]（『独立評論』「福澤先生と昔の慶応義塾」）

②考察

一八七二年（明治五年）に、渋江はカッケンボスの『米国史』を兄の山田脩と袋屋亀治郎の万巻楼より十五歳で翻訳出版している。ここで問題なのは、兄である山田脩である。松木明知の前述の資料によれば、脩は抽斎の六男で、一八五四年（嘉永七年）二月十四日に生まれていて、渋江保の弟になる。『渋江抽斎』では、五男として一八五四年（安政元年）二月十四日生まれとなっているので、渋江保の兄となる。しかし、板垣公一の翻刻資料「抽斎歿後」に以下のような記述がある。

「源吾ハ拝謁以下となりしかど専六ハ渋江の子也との儀を以て拝謁可被給付旨私へ内意有之且つ願書差出すべしとの事に付き私の名義を以て（専六の十八歳）拝謁願書を（筆者注記：明治五年）六月二十日に差し出した」[40]この記述から逆算すると脩の生年は一八五四年（嘉永七年）二月十四日となる。また、「明治四十一年四月十四日（筆者注記：脩）死す。享年五十五。脩は明治二

十三年一旦東京に帰って後再び静岡に往きて私塾を開き幾もなく帰京して秀英舎又ハ国文社の社員となって居た」[41]「明治四十一年」は一九〇八年で「享年五十五」は数え年と思われるので、満年齢では五十四歳となる。渋江保は一九〇八年（明治四十一年）の時点で五十七歳であるので、脩は一八五四年（嘉永七年）生の三つ年下の弟となる。このことから、カッケンボスの『米国史』を出版したときは、実際には、兄、渋江保が二十一歳、弟、脩が十八歳である。

（九）瞬養学校　教頭職

①資料

○「保は初め文部省の辞令を持って県庁に往った。浜松県の官吏は過半旧幕人で、薩長政府の文部省に対する反感があって、学務課長大江孝文の如きも、すこぶる保を冷遇した。しかしやや久しく話しているうちに、保が津軽人だと聞いて、少しく面を和らげた。大江の母は津軽家の用人栂野求馬の妹であった。のち大江は県令林厚徳に稟して、師範学校を設けることにして、保を教頭に任用した。学校の落成したのは六月である。」[42]（『渋江抽斎』その九九）

○「明治八年一月二十九日に師範学校から卒業証書を授与せられ二月六日文部省から浜松県へ派出を命せられ三月二日浜松師範学校の教頭に任せられた。」[43]（翻刻資料『抽斎歿後』）

②考察

『渋江抽斎』によれば、一八七五年（明治八年）、三月二日、浜松県に瞬養学校教頭として赴任するが、『浜松北高等学校八十年史』に「文部省第二年報」を引用し、渋江は「教頭」ではなく「元程」とある。実際の『文部省（明治七年）第二年報』の「教員養成ノ法」においても「近日派出ノ師範卒業生渋江保ヲ訓導ニ任ジ是ヲ元程トシテ専小学教授方一定普及ノ挙ヲ振起セントス。」[44]とあり、「元程」の記載が見られる。また、「浜松北高等学校八十年史」では、「元程」は誤字で「元締め」ではなかったかという記述があり、同書には「渋江が「元程」（註、元締―もとじめの誤か、教頭を云う）として遇せられている。」[45]とあるが、判然としない。さらに、『浜松県学務報告第弐拾三号』「一教員養成の概略」に、渋江の名前は記載されていないが、「教員養成ノ為メ八年三月創テ一校ヲ浜松駅ニ開キ瞬養学校ト称ス訓導ハ師範校卒業生五名漢学専門二名英学専門一名数学専門一名画学専門一名合テ十名ヲ置小学教科ヲ授ク現今入舎生本科三十名預科四十名合テ七十名アリ舎長ハ訓導ノ内ヨリ兼務ス」[46]と記載がある。当時、教頭職はなく校長の次席は訓導で、静岡県の明治期の学事年報にも校長の次

は訓導とある。森鴎外は『渋江抽斎』おいて「教頭」と記述しているが『抽斎歿後』に倣ったものであろう。当時、渋江は十八歳で瞬養学校に赴任しているが、『学制』「四十章　教員ノ事」に「小学校教員ハ男女ヲ論セス年齢二十歳以上ニシテ師範学校卒業免状或ハ中学校免状ヲ得シモノニ非サレハ其任ニ当ルコヲ許サス」[47]とあるように、十八歳では師範学校を卒業しても赴任することは出来ず、実年齢二十四歳であったために瞬養学校に赴任することが出来たのであろう。

（十）武田準平と進取社結党

①資料

○「保は国府に来てから、この準平と相識になった。既にして準平が兄弟になろうと勧めた。保はへりくだって父子になる方が適当であろうと言った。ついに父子と称して杯をかわした。準平は四十四歳、保は二十五歳のときである。」[48]（『渋江抽斎』その一〇二）

○「丁度此頃から前後して自由党、改進党が成立し、天下大に政党に趨く可き気運を示して来たので、私は此機に乗じ愛知で政党を一つ拵へ、後には中央と連絡するやうにし度いと思って進取社といふ政社を作って、私が其の社長になり、武田準平といふ人が副社長になった。（中略）或時私に向ってお互に血を啜って兄弟にならう、そして君を兄とし、自分は弟になり度いと言ひ出した。処が武田は此時四十四で、私は二十五でしかないので、どう考へても私が兄になる可き道理がない、其れで段々押問答を重ねた末に遂に親子の盟を結び武田は父、私は子といふ約束をした。」[49]（『独立評論』「新聞今昔譚」）

○「明治十四年のつづき　（中略）「僕ハ年を取っても学問がない　君ハ若くても学問がある　今から君を兄とせん」といふ　されど当時私ハ二十五歳武田ハ四十四歳であった　弟とするにハ年齢がイカニモ旧過ぎる　デ私ハ「然ラバ父子の約を結ばん」といった　彼れ再三固辞したれども遂に承諾し改めて旧式を、用ゐて血を啜って約束を結んだ。」[50]（翻刻資料『抽斎歿後』）

②考察

一八八一年（明治十四年）武田準平と進取社を結党し、渋江が社長に武田が副社長となり、資料によれば、武田は四十四歳、渋江は二十五歳で父子の杯を交わしている。実際には渋江は三十一歳で父子の関係とは言い難く、武田が言うように兄弟の関係が相応しいのは明らかである。

『抽斎歿後』・森鷗外『渋江抽斎』渋江保年齢記載箇所（別表１）

西暦	元号	『抽斎歿後』渋江保年齢記載箇所	森鷗外『渋江抽斎』渋江保年齢記載箇所	年齢（通説）	年齢（新説）
1857年	安政4年		安政四年には抽斎の七男成善が七月二十六日を以て生れた。小字は三吉、通称は道陸である。即ち今の保さんで、父は五十三歳、母は四十二歳の時の子である。（その 51、148 頁）	0 歳	6 歳
1858年	安政5年		安政五年には二月二十八日に、抽斎の七男成善が藩主津軽順承に謁した。年甫て二歳、今の齢を算する法に従へば、生れて七箇月であるから、人に懐かれて謁した。しかし謁見は八歳以上と定められてゐたので、此日だけは八歳と披露したのださうである。（その 52、166 頁）	1 歳	7 歳
1860年	万延元年	○私ハ四歳禿童の時只一回チラリとそれを見た　桐の箱へ這入った立派なものであった。（23 頁） ○私ハ四歳の時、禿童と為りてより漸く成長して近習小姓に進み、藩地に移りて後ハ、兼松石居の世話にて藩学の助教と為り、畢竟武家にて儒学を修め居たれど、藩地へ移るや否や、当時藩の学医北岡太淳、手塚元瑞、今春碩等が頻りに医業を兼ねんことを勧め、藩地の医者にハ中村春台、三上道春、北岡有格、小野圭庵の如き前途有望の者なり　又当時新に召抱へられて小普請医者となりたる小山元洋（此時五人扶持をせり、後に東京に出でて名を建と改め　東校の教授となり、又二等軍医正となる。今の薫と八千代との父也）などあれど　江戸定府中ニハ殆ント人なし、足下是非医業を兼ねよと言ひたれバ明治二年、正式の試験を受けて委員に列したり、故に大星場の時ハ医師として行きたるハあらざれども、既に弘前口へ宿直をも為し居たれバ道秀に代りたる也（69～70 頁）	○抽斎歿後の第二年は万延元年である。成善はまだ四歳であったが、はやくも浜町中屋敷の津軽信順に近習として仕えることになった。（その 67、192 頁） ○成善はこの年十月朔に海保漁村と小島成斎との門に入った。（その 68、195 頁）	3 歳	9 歳
1861年	文久元年	現に私が五歳の時　清助と申す若徒に連れられて催促にいった（23 頁）		4 歳	10 歳
1862年	文久2年	○文久二年壬戌十二月二十八日左の賞与を受く　四書五経より文選、呂氏春秋迄素読卒業の旨相聞六歳にて奇特に付為御賞賜金二百匹上下置之是れより先き同年八月十五日左の賞与を受く（2 頁） ○是ハ私も見覚えのある本です　私の六歳の時（文久二年）養竹さん父子が来て文庫へ通して本を見せて下さいと望んだ（25 頁）	成善は二年前から海保竹逕に学んで、此の年十二月二十八日に、六歳にして藩主順承から奨学金二百匹を受けた。主なる経史の素読を畢ったためである。（その 73、207 頁）	5 歳	11 歳
1863年	文久3年	多紀春院にハ文久三年（七歳）より維新まで前後七年素問靈枢等諸書を習へり　聴講（1 頁）	抽斎歿後の第五年は文久三年である。成善は七歳で、始て矢の倉の多紀安琢の許に通って、『素問』の講義を聞いた。（その 77、217 頁）	6 歳	12 歳
1866年	慶応2年		第八年は慶応二年である。海保漁村が九年前に病に罹り、此の年八月その再発に逢ひ、九月十八日に六十九歳で歿したので、十歳の成善は改めて其子竹逕の門人になった。（その 77、241～242 頁）	9 歳	15 歳
1868年	慶応4年		四月朔に渋江氏は亀沢町の邸宅を立ち退いて、本所横川の津軽家の中屋敷に徙った。次で十一日に江戸を発した。此の日は官軍が江戸城を収めた日である。一行は戸主成善十二歳、母五百五十三歳、陸二十二歳、水	11 歳	17 歳

			木十六歳、専六十五歳、矢島優善三十四歳の六人と若党二人とである。（その 80、226 頁）		
1870年	明治3年		然るに医者の降等の令が出て、それが渋江氏に適用せられることになった。本成善は医者の子として近習小姓に任ぜられてゐるには違無い。しかし未だ曽て医として仕えたことはない。しかのみならず令の出づるに先だって、十四歳を以て藩学の助教にせられ、生涯に経書を授けてゐる。（その 87、244 頁）	13 歳	19 歳
1871年	明治4年	明治四年（私の十五歳の時）十一月十八日の事で阿るが浦和県大属を務めて居た桜井某といふ人が高田馬場の往事の大名屋敷を頗る廉価で地所ぐるみ買受け新宅祝ひをした（16 頁）	成善は藩学の職を辞して、此の年三月二十一日に、母五百と水杯を酌み交して別れ、駕籠に乗って家を出た。水杯を酌んだのは、当時の状況より推して、再会の期し難きを思ったからである。成善は十五歳、五百は五十六歳になってゐた。（その 91、253 頁）	14 歳	20 歳
1872年	明治5年		○五百と保とは十六箇月を隔てて再会した。母は五十七歳、子は十六歳である。（その 94、262 頁） ○保が師範学校に入ることを願ったのは、大学の業を卒ふるに至るまでの資金を有せぬがためであった。師範学校は此の年始て設けられて、文部省は上等生に十円、下等生に八円を給した。保はこの給費を仰がむと欲したのである。然るに此に一つの障礙があった。それは師範学校の生徒は二十歳以上に限られてゐるのに、保はまだ十六歳だからである。（その 95、264 頁）	15 歳	21 歳
1873年	明治6年	周禎（注：伊達周禎、津軽藩医）ハ元来眼科ゆゑ母ハその治療を乞ふた　その子周策（此の時二十九歳）ハ何と思ったか三月頃から尋ね来て束脩を携へ私の門人たらんと乞ふた私（十七歳）は固辞した（19 頁）	○抽斎歿彼の第十五年は明治六年である。二月十日に渋江氏は当時の第六大区六小区本所相生町四丁目に僦居した。五百が五十八歳、保が十七歳の時である。（その 96、269 頁） ○或日周禎は嗣子周策を連れて渋江氏を訪ひ、束脩を納めて周策を保の門人とせむことを請うた。周策は已に二十九歳、保は僅に十七歳である。（その 98、274 頁）	16 歳	22 歳
1875年	明治8年		抽斎歿後の第十七年は明治八年である。一月二十九日に保は十九歳で師範学校の業を卒へ、二月六日に文部省の命を受けて浜松県に赴くこととなり、母を奉じて東京を発した。（その 98、275 頁）	18 歳	24 歳
1881年	明治14年	「僕ハ年を取っても学問がない　君ハ若くても学問がある　今から君を兄とせん」といふ　されど当時私ハ二十五歳武田ハ四十四歳であった　弟とするにハ年齢がイカニモ旧過ぎる　デ私ハ「然ラバ父子の約を結ばん」といった（33 頁）	保は国府に来てから、この準平と相識になった。既にして準平が兄弟にならうと勧めた。保は謙って父子になる方が適当であらうと云った。遂に父子と称して杯を交した。準平は四十四歳、保は二十五歳の時である。（その 102、285・286 頁）	24 歳	30 歳
1886年	明治19年		十月十五日に保は旧幕臣静岡県士族佐野常三郎の女松を娶った。戸籍名はーである。保は三十歳、松は明治二年正月十六日生であるから十八歳であった。（その 109、302 頁）	29 歳	35 歳
1916年	大正5年		保さんは今年大正五年に六十歳、妻佐野氏お松さんは四十八歳、女乙女さんは十七歳である。乙女さんは明治四十一年以降鏑木清方に就ついて画を学び、また大正三年以還跡見女学校の生徒になってゐる。（その 112、311 頁）	59 歳	65 歳

七．最晩年の著作傾向

（一）渋江保と根本通明の易学思想

渋江の著作が大きく変化する時期がある。最晩年の一九二〇年（大正九年）頃からで、逝去する一九三〇年（昭和五年）迄の十年間は、易学関係の著書が大半を占めている。では、渋江はなぜ易学にこだわったのか、山路愛山の『独立評論』「易学一夕話」において「漢学を学ぶには先ず以て易、詩、書を基礎とし、其れに次いで論語、孟子を研究し、一方では老子、荘子を学ぶことが必要である。少なくとも其れだけ読まなければ、十分に漢学を知ることが困難である。易、詩、書及び論孟、老荘の思想を十分に呑み込むことが出来たならば、其他のものは大概わからぬものはない筈である。其の中でも最も大切なものは易で、易の精神はすべてものに這入り込んで居るのである。」[51]と述べている。

渋江は漢学者である根本道明（一八二二～一九〇六）門下に一八九七年（明治三十年）に入門するが、根本通明は日本における易学の第一人者と呼ばれる漢学者で、一八二二年（文政五年）、出羽国仙北郡刈和野村（現秋田県大仙市）に生まれている。十四歳で藩校の明徳館に入学し一八六八年（慶応四年）には秋田藩の明徳館助教を務め、自宅においても私塾を開き多くの弟子を世に送り出している。その後、明徳館の廃校と共に秋田県の役人となるが、僅か一年で辞職し上京、一八九〇年（明治二十三年）に根本義塾を開き、一八九六年（明治二十九年）には七十五歳で帝国大学文化大学教授となった人物である。この根本の易学における思想は「皇統一系」で、戊辰戦争における奥羽越列藩同盟から秋田藩は離脱し新政府軍につくが、根本通明の『従軍履歴』によれば、「奥羽列藩約アリト雖モ戸村十太夫ノ専断ニ出テ我君ノ知ル所ニ非ズ　我君義尭（筆者注記：秋田藩主　佐竹義尭）ノ如キハ純忠一藩ヲ以テ朝廷ニ奉ス」[52]とあり、根本ら勤王の藩士たちの「皇統一系」の主張が奥羽越列藩同盟からの離脱を促した一要因になったものと思われる。根本は、著書『易学講義』例言においても「皇統一系万世易フベカラザルハ易の道ナリ世界万国惟我邦　皇統一系万歳窮リナシ天道易義独リ我邦ニ存ス一部ノ周易其象其義我国ニ明ナリト我邦人タルモノ易ヲ尊重シ之ヲ研究セズシテ可ナランヤ」[53]と述べており、根本の易学の中心的な思想が「皇統一系」であることがわかる。

渋江はこの根本の考え方について『独立評論』「根本通明翁」において「根本通明翁が易学を以て明治の大学者と称せられたことは誰も知る通りである。私は久しく翁の門に学んで居たが、しかし学説に於ては必ずしも翁に感服せず十中八九までは反対の意見を持って居った。それらの事については他日又ゆっくりと述べたいとおもうが、」[54]と述べており、そのことについて、『独立評論』「易学一夕話」に「翁が易を以て天子万世一系を説いたもので、畢竟かういふ信念から出たもので、成程理屈をつけて見ればさうもならぬことは無い。けれども私達は易は矢張り君子世に処するの法を示したもので、其れを殊更らに天子万世一系といふやうな事に故事付けるのは僻説であらうと思って居る。」、また「易に依って天子万世一系を説く位であるから、翁は勢ひ若い頃から勤王の志が深かった。維新の戦争に荘内の賊兵と戦ふつもりで院内峠にさしかかったが、其処で秋田藩も亦た東北六藩の連盟に加はり佐幕に決せんとする模様あるを見て大に怒り、声を励まして勤王の大義を主張した。」[55]とある。根本が易学の大家であったとしても、海保漁村ら漢学者に易の精神を学び、共立学舎時代から民権家として民主的思想を形成しその思想を晩年期まで持ち続けた渋江にとって、一八八九年（明治二十二年）に発布された大日本帝国憲法第一条にもある「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」[56]に依拠するような根本の易学思想とは相容れないものがあった。晩年において民権思想に挫折し、民権運動からも手を引きその思想を捨て去ったかに見えた渋江だったが、根本とは易学においても一線を画し、漢学という形で渋江の民主的な思想は脈々と生き続けていた。

（二）出版社「三才社」、「神誠館」と易学書の出版

渋江は三才社から七冊、神誠館から八冊の易学関係の書を出版している。三才社は漢詩人でジャーナリストである上村売剣（上村才六）（一八六六～一九四六）によって一九二三年（大正十二年）六月に創設され、雑誌『天地人』を創刊している。渋江は翌年、一九二四年（大正十三年）から『天地人』の執筆に加わっている。上村売剣は、若くして漢詩を学び、ジャーナリストとしても一八九六年（明治二十九年）に「盛岡公報」、「岩手日報」を創刊している人物である。神聖館の柄沢正義について詳細はわかっていないが、渋江が羽化仙人の名で一九二二（大正十一年）に神誠館から出版した『梅花心易即座考』は、柄沢正義（柄沢照覚）が校閲をしていることからその関係ぶりが伺える。柄沢自身も『易学大全』や『易道詳伝』等の易学に関する書を出版している。渋江が最晩年になぜ漢書に関わる書籍を出版し、易学に拘ったのか、はっきりした理由はわからないが、渋江が持ち続けていた民主的思想が晩年に精神的に行き詰まり民権挫折への救いと打開を処世の書であり人生の指南書でもある易学に求めたと思われる。

（三）最晩年の著作傾向

渋江が最晩年に集大成と位置づけていた五書について『抽斎歿後』に以下のような記述がある。「私ハ三四十年苦心研究して居た書がある。それハ「読書五十年」。「日本私罰史」。「支那刑法史」。「周易一家言」。「経書一家言」

の五つで、私の頭脳ハ殆んど此の五者の為めに占領せられて居るのみか此の五者の脱稿せざる間ハ死んでも浮かばれぬのである。「読書五十年」ハ明治十一年私が始めてギゾー及びバックルの文明史。ミル、スペンサーの著書を読んだ当時から、一書を読む毎に其の大意と各句とを記し且つ批評を試みたるもので今既に約一千部に及んで居る　又「日本私罰史」ハ私が明治二十年の頃、静岡の新聞社に居った折り、既に新聞社に迄も広告したのであったが、爾来三十年、閑暇と金とがなき為めに未だ何時完了すべき見込も附かずに居る　要するに　ドーカ生前に此の五書を完結するのが私の唯一の而かも畢生の目的である」[57]渋江は『読書五十年』、『日本私罰史』、『支那刑法史』、『周易一家言』、『経書一家言』を五書として『抽斎歿後』に掲げている。『日本私罰史』については、森鴎外『渋江抽斎』では、『日本私刑史』となっているが、正しくは、『抽斎歿後』の『日本私罰史』であろう。五書のうち、『日本私罰史』、『支那刑法史』についてはどのような性格の書籍はわかっていない。『日本私罰史』については、「静岡の新聞社に居った折り、既に新聞社に迄も広告したのであったが」[58]と『抽斎歿後』に書いているが、現時点で、広告は確認できていない。『経書一家言』については、先に述べたように、五経である易経・書経・詩経・礼記・春秋である。五書のうち、二書は漢書に関する書である。『周易一家言』については、

一九二九年（昭和四年）に神聖館より出版されている。残る『読書五十年』について、太田兼雄編『易学研究羽化渋江保翁伝資料のために（三）註2』に「翁の遷化は昭和五年四月七日（七十四歳）で、鴎外が「読書五十年」と誌すその藁本は、その後更に六十四年を加えて、『羽化読書六十四年』となって、未刊のまま乙女さんの手許に蔵されている訳であろう。」[59]との記述があるように残念ながら出版には至っていない。

八　おわりに

小論では、渋江保年齢詐称が森鴎外の『渋江抽斎』にどのような影響を及ぼしたのかを検証すると共に英学修行前の幼少期の人格形成に漢学塾の師がどのように関わり、渋江の最晩年にどのような影響をもたらしたのかを分析した。

その結果、『抽斎没後』や『渋江抽斎』の記述にみられる藩主との謁見や漢書を学んだ時期、大学南校入学等に生年を詐称していたことが明らかになった。鴎外が『渋江抽斎』を執筆するために渋江が提供した資料の詐称を鴎外が是認したかどうかはともかく、渋江が提示した資料を元に『渋江抽斎』が執筆されたことが明白となった。

渋江は当時の知識人の中で他の誰よりも英書の翻訳をとおして民権思想を理解していたが、晩年期は民権運動に挫折しイギリス立憲思想を捨て去ったかに見えた。しかし、民権思想を英国史や英国社会、その文化の総体として理解し、更に士族階級の必読書であった漢書、とりわけ易学を終生学び通した渋江は、王朝交代を肯定する中国古来の革命思想、易姓革命を否定し、皇統一系を持論とした根本とはその思想を大きく異にし、易学の中に精神的な支柱を求め民主的な思想を持ち続けていたと結論づける。

注記

（一）渋江保『抽斎年譜』
（二）村山吉廣『漢学者はいかに生きたか』（大修館書店　一九九九年十二月十五日）十頁
（三）竹内照夫『四書五経入門』（平凡社　二〇〇〇年一月二十四日）四十七頁
（四）山路愛山『独立評論』第二巻第六号渋江保氏談話「海保漁村先生」（独立評論社　一九一四年六月一日）四十頁
（五）山路愛山『独立評論』第二巻第五号渋江保氏談話「小島成斎先生」（独立評論社　一九一四年五月一日）六十二頁
（六）松木明知『鴎外九〇号』「渋江抽斎の嗣子「保」（成善、道陸）の生年と名について」（森鴎外記念会　二〇一二年一月三十一日）六十頁
（七）松木明知『鴎外九〇号』「渋江抽斎の嗣子「保」（成善、道陸）の生年と名について」（森鴎外記念会　二〇一二年一月三十一日）六十頁
（八）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一四八頁
（九）渋江保『抽斎年譜』
（十）松木明知『鴎外九〇号』「渋江抽斎の嗣子「保」（成善、道陸）の生年と名について」（森鴎外記念会　二〇一二年一月三十一日）六十四・六十五頁
（十一）松崎欣一『福沢書簡に見る地方名望家の軌跡　伊藤要蔵と福沢諭吉』（近代日本研究第十八巻　二〇〇一年）五頁
（十二）川崎司『高木壬太郎　その平凡な生涯をたどって』（近代文芸社　二〇一五年二月十五日）人物資料二六　三五四頁・三五五頁
（十三）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一五二頁
（十四）山路愛山『独立評論』第二巻第九号渋江保氏談話「大名の生活（下）」（独立評論社　一九一四年九月一日）三十一頁
（十五）山路愛山『独立評論』第二巻第九号渋江保氏談話「大名の生活（下）」（独立評論社　一九一四年九月一日）三十二頁
（十六）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）一頁

（十七）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一九五頁
（十八）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二一七頁
（十九）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二一九頁
（二十）山路愛山『独立評論』第三巻第五号渋江保氏談話「私塾の思ひ出」（独立評論社　一九一五年五月一日）三十二頁
（二十一）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）七頁
（二十二）山路愛山『独立評論』第二巻第十号渋江保氏談話「大名の生活（下）（続）」（独立評論社　一九一四年十月一日）三十四頁・三十五頁
（二十三）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二一九頁
（二十四）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）三・四頁
（二十五）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二四三頁
（二十六）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）六十九頁・七十頁
（二十七）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）一頁
（二十八）山路愛山『独立評論』第七号渋江保氏談話「明治初年の学風」（独立評論社　一九一三年八月一日）三十九頁
（二十九）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）十三頁
（三十）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二五五頁
（三十一）『東京大学附属図書館　特別展示会　東大黎明期の学生たち　民約論と進化論のはざまで　四大学南校と貢進生』（ネット検索日　二〇二二年五月二十六日）
（三十二）山路愛山『独立評論』第七号渋江保氏談話「明治初年の学風」（独立評論社　一九一三年八月一日）三十九頁
（三十三）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二五五頁
（三十四）山路愛山『独立評論』第十一号渋江保氏談話「学界今昔物語」（独立評論社　一九一三年十二月一日）三十二頁
（三十五）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二六四頁
（三十六）山路愛山『独立評論』第七号渋江保氏談話「明治初年の学風」（独立評論社　一九一三年八

（三十七）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）一頁
（三十八）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二一九頁
（三十九）山路愛山『独立評論』第二巻第十号渋江保氏談話「大名の生活（下）（続）」（独立評論社　一九一四年十月一日）三十四頁・三十五頁
（四十）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）十四頁
（四十一）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）五十六頁
（四十二）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七六頁
（四十三）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）六頁
（四十四）文部省『文部省（明治七年）第二年報』（一八七五年）一一四頁
（四十五）静岡県立浜松北高等学校八十年史編集委員会『浜松北高等学校八十年史』（静岡県立浜松北高等学校八十年史編集委員会　一九七四年十月十二日）十一頁
（四十六）『浜松県学務報告第弐拾三号』（袋井東小学校文書）（一八七六年四月二十八日）
（四十七）文部省『学制』（一八七二年）
（四十八）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八五頁・二八六頁
（四十九）山路愛山『独立評論』第二巻第二号渋江保氏談話「新聞今昔譚」（独立評論社　一九一四年二月一日）五十四頁
（五十）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）三十三頁
（五十一）山路愛山『独立評論』第二巻第一号渋江保氏談話「易学一夕話」（独立評社　一九一五年二月一日）四十六頁
（五十二）秋田県立博物館研究報告第三十四号（二〇〇九年三月）五十一頁
（五十三）根本通明『周易講義　巻之一』（嵩山堂　一九一二年十一月五日）例言
（五十四）山路愛山『独立評論』第二巻第一号渋江保氏談話「根本通明翁」（独立評社　一九一四年一月一日）五十二頁
（五十五）山路愛山『独立評論』第二巻第一号渋江保氏談話「易学一夕話」（独立評社　一九一五年二月一日）四十九頁・五十頁
（五十六）大日本帝国憲法第一条（一八八九年二月十一日公布）
（五十七）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学

第四七巻別冊　一九九八年二月）五十八頁
（五十八）板垣公一『翻刻資料　抽斎歿後』（名城商学第四七巻別冊　一九九八年二月）五十八頁
（五十九）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（三）註2』（紀元書房一九五八年八月一日）五十四頁

参考文献
（一）三浦國雄『江戸の易占　周易古占法』（二〇一四年八月十五日）ネット検索日二〇二二年五月二十五日
（二）『海保漁村」草莽の大賢者ー渋沢栄一も学んだ、庶民教育の儒家』（二〇二一年十月十九日）ネット検索日二〇二二年五月二十五日

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）2
神戸から来た男（五）

匠　克仁

〈登場人物〉
弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
牛島崇　アサヒ信用保証回収業務委託先　元マル暴
野草堅樹　マンションオーナー　元暴力団員
座間・千田　ともにマンション住人　前科者

〈時系列〉
参考　第一話より
一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
第二話（本編）
二〇一八年五月からの数週間

4　牛島流回収術

弓本良香がインターホンを押したが、中からの反応は無かった。コーセーマンション三〇四号室の前で良香はしばらく待っていた。

室内レンズから見えない位置に牛島崇と野草堅樹が立っている。

「アサヒ信用保証です。立て替えた三月分の家賃の件で来ました。開けてもらえますか」

良香はインターホンに話しかけた。レンズから覗かれているのを良香が感じていると、ゆっくりとドアノブが回った。

ドアが開くと、パンツ一枚の老人が姿を現した。住人の座間三郎である。全身に刺青が彫られており、左手の小指が第一関節から欠けている。

しかし、良香より頭一つ低く、ドラえもんを連想する体型であり、恐怖感は少しも感じなかった。

「なんや。べっぴんさんがよう来たな。やっぱり弁護士に相談したら一発やな。マル暴をクビになった奴はあんたの会社でもクビになったんか」

よく観察すると、般若を彫ったのだろうが、皮膚がたるんで、ひょっとこのようになっている。

また、肩に刻んだ極道の文字がたるんだ皮膚のために、よれよれになって弱々しく良香には見えた。若い頃に誕生日ケーキのチョコレート文字が溶けて、ぐちゃぐちゃになっているのを思い出し、良香は思わず噴き出した。

「ねえちゃん。なに笑ってんじゃ」

良香の態度に座間が怒声を挙げた。その瞬間にドアの影にいた牛島が飛び出した。相手の首を相撲の喉輪のようにつかみ、片手で持ち上げた。

「俺はマル暴をクビになったんじゃねえ」

座間は絞首刑の死刑囚のようにもがいている。牛島は片手で締めあげたまま座間の体を左側の壁に叩きつけた。

「左はやめてください。左隣は過去に騒音トラブルで隣人を殺してますので」

野草が牛島を止めた。

「すまない。右隣と下はどうだ」

「右の住人は覚醒剤だから、神経質ですね。下はまたムショ入りでリフォーム中になっています」

牛島がうなずくと、座間を床に叩きつけた。座間は泡をふいて、両手足をばたつかせた。その姿を見て、ひっくり返ったゴキブリを良香は連想した。

牛島は土足のまま室内に入った。すぐに旧式の録音機器を見つけた。

牛島は機器を踏みつけて破壊した。そのまま室内を探し続ける。昔にテレビで見た警察の家宅捜査みたいだと良香は思った。

1Rマンションで家具の無い部屋である。十分もかからない内に四つの封筒と財布を牛島は見つけた。

「なんだ、ギャンブルで儲けたのか。結構、貯めているじゃねえか」

封筒と財布の中身をぶちまけると、万札で二十枚ほど出てきた。

「珍しく大勝ちしたんだ。あんたの会社で立て替えした三月分は今日、振り込むつもりだった。信じてくれ」

座間は両手を合わせてから、土下座をした。

「振り込むつもりなら、なんで法テラスに行った」

牛島の詰問に座間は黙り込む。

「てめえは家賃分をギャンブルにつぎ込む。勝ったら、家賃を払う。負けたら、生活費を残して家賃を払わない。だが、三ヶ月払わなかったら、俺が来る。俺を排除したいと思ったんだろう。今回は結果的に大勝ちしただけだ。違うか。違うなら反論しろよ」

牛島がまくしたてると、座間は黙り込む。図星のようであった。

「三月分だけじゃ足りない。四月分は五月七日の今日、代弁している」

「それなら、三月と四月分を払う」

「ふざけるな。五月分も払っていないだろ。俺が登場するまで一ヶ月間、コールセンターの姉ちゃんがあんたに電話するんだ。俺に引き継ぐ前に若手が一ヶ月訪問したな。俺の会社にいくら経費をかけさせるつもりだ」

牛島の言葉に良香は内心でつぶやく。

(俺の会社って、あんたの会社じゃないでしょ)

日本の賃貸習慣では月末までに翌月分の家賃を支払う。四月分の家賃なら三月末までに入居者が大家に支払う。三月末までに四月分の家賃が支払われなかった場合、アサヒ信用保証は四月一日に家主から報告を受ける。

その日から家主に代わりコールセンターから家賃支払いの電話督促を行う。それでも四月末までに四月分の家賃の支払が無いと、五月七日つまり本日に代位弁済といって、アサヒ信用保証が入居者に代り家主に四月分の家賃を支払う。

それから担当がコールセンターから債権管理部に移り、社員が直接、訪問して取り立てする。

それでも支払わず二ヶ月滞納して二回目の代位弁済した先を牛島が担当する。三月分の滞納者のリストを五月七日の本日に引き継いでいた。つまり、引継ぎ当日に回収を果たしたことになる。

牛島は封筒と財布から抜き出した金を数えた。

「四ヶ月分ちょうどあるな。ペナルティーとして六月分は前払いだ。全部貰っていくぞ」

残りは千円札が一枚と小銭だけになった。

「待ってくれ。俺の全財産を持っていくのか。次の生活保護までまるまる一ヶ月あるんだぞ」

座間は涙を流しながら、牛島にすがりつく。

「自業自得だ。元マルBがセイホの金でパチンコ、ギャンブル三昧なんて俺は許せねえ」

牛島は座間を乱暴に振り払った。座間は前かがみになり、茫然と立っている。

「遅れた家賃にアサヒの延滞利息がつかないのは、ありがたく思え。しかし、これが俺の延滞利息だ」

牛島は左脚を蹴り挙げた。革靴の先端が座間の内臓脂肪を貫通し肝臓にめり込む。三日月蹴りである。

蹴った瞬間に相手の体がふわっと空中に浮きあがった。そのまま大の字でフローリングに腹から全身を打ち付けた。座間は肝臓を両手で押さえながら、のたうち回った。

「次に家賃が遅れたら、延滞利息はこれで済まねえ」

座間は三分ほどのたうち回っていた。その後、幼稚園児の様にしゃくりあげて泣いた。

その座間に野草が近づいて声をかける。

「最初からダイノウにしておけば、こんなことにならなかった。これからはダイノウにしよう」
座間は弱々しく首を縦にふった。
「心配しなくてよい。NPOでインスタントラーメンを君に売ろう。支払は来月の支給日の後払いでよいから」
野草がまだ座間を見捨てないことに良香は感心した。
「ただし、一食分が五百円だ。定価との差額の四百円はNPOへの寄付と考えて欲しい。君も飢死することなくて良かったじゃないか。今回の経験で君が更生すると信じているよ」
野草が甘くない男であることを良香は悟った。
「次は入居して浅いな」
牛島は次の標的に向かって、歩き出した。
「二月入居なんで、契約時に二月分を貰っただけで、一度も支払がありません」
野草が後を追いながら答えた。良香も後に続く。
「どんな奴だ」
「二十代の優男です。詐欺グループの一員でした。詐欺の被害額が大きかったので、実刑を食らったそうです」
「今は何をしている」
牛島は階段を登りながら質問した。
「夕方からですが、真面目に働いています。ソープランドの送迎係だそうです」
真面目な仕事なのかと良香は一瞬だけ疑ったが、職業で差別してはいけないと思い直した。
「それで家賃を払わないというのは、解せねえな」
次の取り立て先の六〇二号室に三人が向かった。千田という名である。
部屋の前に着くと、牛島は良香を見て、あごをしゃくった。良香はインターフォンを押して、レンズの前に立った。
今度は何の反応も無かった。仕事は夕方からであり、外出していないことはNPOで確認している。
牛島は野草を見ると、心得た様子で野草が合鍵を使って開錠し、ドアを開けた。
「何するんだ。不法侵入だ。プライバシーの侵害だ」
部屋の奥の若い男が悲鳴のような声で叫んだ。
「不法でありません。あなたは私たちNPO法人と契約しています。更生を妨げる行為や家賃滞納をした際はNPO関係者が立ち入ることをあなたは承諾しています」
野草が説明すると、千田は押し黙った。頭の回転はよくなさそうと良香は思った。
「もちろん、留守中には立ち入りませんが、居留守と分かってましたので、合鍵を使いました」
牛島は部屋に上がりこんだ。靴を脱ぐのが面倒なのか今度も土足である。良香と野草は玄関口に立っていた。
「おい。何で家賃を払わねえ」
牛島はいきなり千田の胸ぐらをつかんで前後に揺すった。

た。やせた千田の体が宙に浮いた。整った顔つきが恐怖でゆがんでいる。
「本当にお金が無いんです。ほら」
千田はズボンのポケットから財布を出すと、牛島の前で広げた。大した金額は入っていない様だった。牛島は財布を取り上げ、キャッシュカードを抜き取った。
「この通帳を出せ」
千田は素直に部屋の隅の鞄から通帳を取り出すと、牛島に見せた。牛島は一瞥しただけで、通帳を放り投げた。
残高が少なかったのだろうと良香は思った。
「仕事をしているのに、なぜ金が無い」
「週給で毎週もらっているんですが、次の給料までに生活費に使って。月末にお金は残っていないんです」
千田が小さな声で答えた。
「そんな言い訳が通じると思っているのか」
牛島は再び相手の胸ぐらをつかんで揺すった。
「おい。スマホを見せろ」
牛島の言葉に千田は素直に従い、別のポケットからスマホを出して渡した。牛島は受発信の履歴を調べているようであった。
「この電話の相手はスマホで振込できるか」
牛島の質問にいぶかしる様子ながらも、千田は答える。
「できると思います。この前、送迎の時にスマホをいじっていて、振込中だから話しかけないでって言われた」
千田の言葉に満足した様子で牛島は続ける。
「今から電話して、五分以内に十五万円を口座に振り込むように伝えろ」
牛島は、床に置いたスマホの前に千田の頭を押し付けると、右腕を後ろ手にひねり上げた。牛島はそのまま千田の腰の上にまたがって固定する。千田は悲鳴を上げた。
「五分以内に振込がないと、右腕をへし折る」
牛島はスマホの横にすりきれた自分の名刺を置いた。銀行と支店名と口座番号が書かれている。
千田の抵抗を無視して、牛島はスマホをタッチした。ワンコールで女性の甲高い声が響いた。牛島がスピーカーモードにしていた。
「センちゃん。なによー。きょう、わたし生理休暇よ」
迷惑そうな言葉とは逆にうれしそうな声であった。
「実は…お願いがあるんだ。十五万円、貸してほしい」
「え〜〜。急に何よ。センちゃんはよくプレゼントくれるし、おごってくれるけど。うちの会社は社内恋愛禁止だから、あまり深い関係になるのもね。まして、お金の貸し借りする関係なんて、会社にバレたら……」
相手の言葉をさえぎるように牛島が千田の腕をひねり上げた。
「折れる。折れる。折れる」
千田が絶叫した。
「センちゃん、どうしたの。まさか、わたしのプレゼン

トのためにヤミ金に手を出したの」
軽薄そうな声音が真剣な調子に変わった。
「ごめん。ヤミ金よりもひどい目に会っている。今すぐ十五万円払わないと腕を折られる。後でつぐなうから、今すぐ十五万円を口座に振込して…」
千田はうめきながら、銀行と支店の口座番号と名義を伝えた。口座名義はウシジマタカシである。
通話がそのままなので、相手のスマホの操作音だけ聞こえた。
一分もしない内に牛島のスマホの着信音が鳴った。
「振り込んだわ」
牛島がスマホを操作して、銀行口座の入金を確認した。
「たしかに十五万円入金になった。相手にお礼を言っておけ」
牛島は千田の右腕を解放した。
「ありがとう。君は命の恩人だ」
千田はスマホに向かって泣きながら、お礼を繰返した。
「今月末までに六月分の五万円を貯めておけ」
そう言い残して、牛島は良香たちの方へ向かった。
三人が六〇二号室を後にすると、牛島がつぶやく。
「たった二件じゃあ、何か物足りないな」
牛島が担当するのが二ヶ月分を代位弁済した先（三ヶ月続けて家賃を支払っていない）だが、異常に少ない。
（二件……。百室あるマンションで、たったそれだけ。全員が前科者にしては、超優良な入居者集団じゃないの）
意外な数字に良香は驚いた。
「何を言っているですか。一度でも牛島君に取り立てを受けたら二度と滞納しませんよ。三〇四は例外でしたが」
野草の言葉で良香は納得した。
「マンション内で牛島君の噂は広まっています。三ヶ月家賃を払わないと、鬼の取り立てが来ると。普通はヤミ金に借りてでも三ヶ月滞納はさけるんですがね。六〇二はよほど、なめていたんですかね」
「俺に言わせれば、アサヒの社内体制が悪い。あんな優男なんかで俺の手をわずらわせるな」
牛島の発言で良香は不快になったが、千田はたしかに牛島が相手をするような滞納者に見えなかった。
「奴は二月の契約の際に二月分を払っただけだ。三月一日に三月分を払っていない時点で締め上げるんだよ。入居後一ヶ月目が大事なんだ。それがコールセンターで姉ちゃんが一ヶ月も優しく督促しているから、図に乗る。それは全ての滞納入居者に言えることだ」
牛島は畳み込んで話し続ける。
「特にこのマンションは全員が前科者だから、びびって電話も訪問も弱腰になっている。三ヶ月放置したら、俺が解決すると考えているなら、間違いだ。あんたも人事部長なら少し社内体制を見直して、人事した方がいいぜ」
【注】全員前科者のマンション以外はフィクションです。

字・字・字・字・字……字

匠　克仁

字数や二字目に変にこだわるアスペルガーのぼくは25字×24行でしか文章が書けない。書きながら次行の二字目を気にする癖がある。スロットマシンのように25字ごと特定の字になるよう考えながら書く。ここまで二字目にこだわるのは病気で障害である。そのように25字先の字を予測して書くというと、正常な人はとても文字を書けないと思うかもしれない。次の行を目指して文字を書くのでぼくの場合は推進力になる。毎行、目標の字を目指して、一つ一つ書き進んでいる。今回の原稿も字という字が次の行の二字目にあって、それに合う様に字を埋めているというのが今、書いている感覚である。
字を埋める方法の他に普通に長い文章を書いていて後で字の位置を調整するため刈り込む方法も使っている。字数で計算するとほぼ同率である。つまり、次の行の二字目を考えた文と、大量に書き刈り込む文とは同じ位の字数になっている。ぼくの書き方は、縦25字で横24字のクロスワードパズルを作っている様な感覚である。
字を削って書いても最終Pで25×24×2にするため字をさらに刈り込みを続けるのである。中には泣く泣く字を刈り込んだものもある。前号で最後に刈り込んだ文字は『大腸の内視鏡検査では左向きで寝る』であった。
字数を減らすために便秘は右、下痢は左向きも変えた。
字数や二字目を異常に気にするのは、ぼくの脳が縦書の字を横にも読み書きするシナプスを持つからだろう。
字が横書きの場合に縦に読み書きする現象は現在ない。文字通り『縦のものを横にしない』＝ものぐさであるが

文字通り『縦のものを横にする』という性格でもある。
字は縦と横だけでなく、三次元的にも感覚する。ぼくの字に対する感覚は横xと縦yだけでなくzがある。実は字は紙面を貫通して、裏表の同じ位置にある。その同じ字が複数のページに渡って、続いている。感覚としては字で本を串刺しにしながら、書いている。完成後の本に字の位置を3Dでイメージしながら、執筆している。
字に対する三次元的な感覚は他にもある。それで同じ文字がエッセイと小説に出てくるのである。例えば同じ文字は前号の三日月蹴り、前々号の共感覚など。過去の文字には変態、たまたま、も二作品で同時に出てきた。文字がぼくのエッセイと小説の間で飛び交うのである。文字が三次元なんて楽しそうだが、面倒な脳なのである。
（字は原則は一個で、文字は意味あるまとまりで使う）
字を書くのに空間だけでなく、時間も意識している。字に対する感覚は四次元まで広がっている。書いている字や文字は過去と将来のエッセイとも繋がっている。文字が紙面でなくネット上であれば、リンクしている。文字をクリックしたら過去のエッセイに飛ぶことになる。文字が四次元をさまよっている感覚でぼくは書いている。四字元…いや、四次元執筆法なのである。150号の『二字目の男』では二字目に二がくる文を12Pも書いた。二字目は他に、1・塩・命・夢・上・太…で書いた。逆の字の場合もある。まんじ164号は一行ごとに左と右の字が交互に二字目にくるように書いた。交互なのは同じ字よりも複雑である。交互にできなかったが、男か女の字が二字目にくるように書いたこともある。数で算用数字でも漢数字でも1つずつ増えるようにした。他にも英字がアルファベット順に並ぶように書いたこともある。英字シリーズは血液型・ビタミン・ミネラル・五輪……二字目をアイウエオの順にして、書いたこともある。同じ字が一つでなく変態やアスペルガーも使っても書いた。
字数だけでなくぼくは字体についてもこだわって使う。
（字体とは書体と違い、太字（体）・斜（字）体である）
字体について最初から太字にしていたのに最後になり太字をやめた文がある。『変態式健康法』の主文である。
太字『**全裸で日光を浴びながら、大笑いし…走り回る。**』
太字をやめた理由は証拠を重ね論理的に記述しているが、太字にするとその前に結論が読者の眼に入るからである。
太字のままの方が良かったと後悔している。（136号）
太字は132号『カミングアウト』で使ったが記さない。
太字だけでなく大きい字にしたが、一文では誤解を招く。
太字で、ぼくが読者がしていることをあてると書いた。
太字『**あなたは今まんじを読んでいる。**』（137号）
斜字体で読者が思っていることを書くと予言もした。
斜字体『そんなわけないだろう。』
斜字体でさらに続けて、読者が思っていることを書いた。
斜字体『あたっている。』（159号でも使った）

斜字体とイタリックは同じ様に使うが本来は別物である。
斜字体は単に元の書体を傾けるだけである。イタリックは字であり、書体なのである。イタリックは十五世紀から字としてイタリアで始った。I＝イタリックボタンは斜字体にするがイタリックにしないで書体は変わらない。
斜字体は欧米語ではイタリックでなくオブリークである。
斜字体ボタンはワードでIだがOが正しいとぼくは思う。
斜字体を手書きで表現する場合は該当語に下線を入れる。
斜字体と書いているが、斜体の方がよく使われている。
斜字体の反対の普通の字は立（字）体、ローマンである。
斜字体は遺伝子名で使用する。ぼくの原稿も遺伝子名は斜字体にしている。最初の内はかえって混乱すると思い斜字体にあえてしてない原稿もある。遺伝子名について斜字体を使用する理由は、国際規約にあるからである。
斜字体＝遺伝子名（記号）　立字体＝一般名
斜字体　Ｃｌｏｃｋ　Ｇｅｎｅ　特定の一時計遺伝子
斜字体Ｃｌｏｃｋ＝circadian locomotor output cycles kaput
斜字体Ｃｌｏｃｋは頭文字をつなげて名付けたのである。
斜字体でない　Ｃｌｏｃｋ　Ｇｅｎｅ　時計遺伝子全般
斜字体　Ｃｌｏｃｋ　Ｇｅｎｅ特定の時計遺伝子以外に
斜字体でない　Ｃｌｏｃｋ　Ｇｅｎｅ時計遺伝子群には
斜字体Ｐｅｒｉｏｄ　Ｃｒｙｐｔｏｃｈｏｒｍｅがある。
斜字体の初め大文字が顕性で全て小文字が潜性としたり斜字体で全て大が人、一字大が小動物、全て小が細菌と斜字体の大文字と小文字の使い方はかなり混乱している。
斜字体＝遺伝子名（記号）　立字体＝表現型
斜字体Ａ・Ｂ・Ｏ遺伝子　立字体Ａ・Ｂ・Ｏ・ＡＢ型
斜字体Ｏ遺伝子も存在する。Ａ・Ｂ遺伝子は顕性なので斜字体＋大文字で表す。Ｏ遺伝子は潜性なので、本来は斜字体＋小文字になりそうである。しかし、Ｏ遺伝子も斜字体＋大文字で表すので、潜性遺伝子の例外である。
斜字体＋小文字のｏ遺伝子と表記すべきとぼくは思う。
斜字体ルールを学校で教えると混乱するかもしれないが、斜字体Ａ遺伝子を持ちＢ遺伝子を持たないのがＡ型だと斜字体ルールを教育カリキュラムに入れるべきと思う。
斜字体＝遺伝子名（記号）　立字体＝蛋白質（全大文字）
斜字体ｓｈｈ（ソニックヘッジホッグ）　立字体ＳＨＨ
斜字体は手足を発生させる遺伝子で立字体はその蛋白質。
斜字体＝遺伝子名（記号）　立字体＝病名
斜字体ＨＤ（ハンチントン病遺伝子）立字体ＨＤ（略称）
斜字体は種の学名でも使う。ヒト（ホモサピエンス）は斜字体でＨｏｍｏ　ｓａｐｉｅｎｓと表記するのである。
斜字体でホモサピエンスとするべきかもしれないと思う。
斜字体は種と上の属のみで上の族科目綱門界ドメインは斜字体としない。ということはヒトはヒト属Ｈｏｍｏも斜字体で動物界脊索動物門哺乳綱サル目ヒト科ヒト族を斜字体としない。正確にはヒトは生物学上の種としては斜字体Ｈｏｍｏ　ｓａｐｉｅｎｓ　ｓａｐｉｅｎｓ　と

斜字体ｓａｐｉｅｎｓ　を二回繰り返す表記が正しい。斜字体Ｈｏｍｏ　ｓａｐｉｅｎｓだと、旧人類も含める。斜字体Ｈｏｍｏ　ｓａｐｉｅｎｓ　ｉｄａｌｕｌｔｕ等。斜字体でないＨｏｍｏ　ｓａｐｉｅｎｓは二重のミスで、斜字体とｓａｐｉｅｎｓを二回繰り返す事実を広めたい。斜字体の例をもう一つ挙げる。ソメイヨシノは学名では斜字体Ｙｅｄｏｅｎｓｉｓという種である。属になると斜字体Ｃｅｒａｓｕｓ（サクラ）である。種と属の二つ斜字体で植物界被子植物門双子葉植物綱バラ目バラ科は斜字体を学名のラテン語で使用しない。余談であるが、斜字体Ｙｅｄｏは江戸のことで江戸の染井村で作られた。斜字体Ｃｅｒａｓｕｓ（サクラ）を属として認めないで、斜字体Ｐｒｕｎｕｓ（スモモ）という属にする説もある。斜字体Ｃｅｒａｓｕｓ桜はバラ科スモモ属に分類される。斜字体は数学や物理の変数記号ｘ　ｙ　ｚでも使用する。斜字体は重力加速度のｇでも使う。逆に質量の単位ｇは斜字体にしない。単位は全て立字体とするルールがある。斜字体でないが筆記体のℓリットルもＬに変更になった。斜字体ｇはｇｒａｖｉｔｙ、立字体ｇはｇｒａｍである。斜字体ｇは○2つを繋いだ形でなく○＋Ｊの形が正しい。斜字体は○にＪの筆記体のｇに近いものを使うのである。斜字体でない大文字のＧが重力加速度ｇの単位である。斜字体の大文字のＧが万有引力定数＝重力定数である。斜字体は磁場の記号のＨや磁場密度の記号Ｂでも使う。

斜字体＋太字＋小文字の組合せはベクトルを表している。斜字体＋太字＋大文字の組合せは行列を表すのである。斜字体＋大文字が集合を、斜字体＋小文字が要素を表す。斜字体ＡＢがＡＢの積、立字体ＡＢがＡＢの距離を示す。斜字体にしてはいけないのは三角関数 sin cos tan で、斜字体でないが筆記体で大学入試に回答した。筆記体も斜字体に近いから減点されたのでないかと心配している。

字体だけでなく、ぼくは字の形そのものを気にする。作字でないが、姦のような男三つの漢字を品（男男男）の字で表現した。品（男男男）＝たばかり（１４１号）漢字で品（男男男）は国字であるが、存在する。だが、作字のようで迷惑をかけるので、品（男男男）とした。品字様という漢字である。品字様とはピラミッド型に同じ字を三つ重ねた漢字である。品・姦・男男男の他にも品字様は晶・森・轟・蟲・磊（豪放磊落という熟語の三文字目）・犇（ひしめく）・鼾（ヒイキのヒイ・屓も貝の字が元々は三つである。鼾の字の部首は貝であるが屓の字の部首は屍と同じ、しかばねである）等、多くある。品字様は他に虫・火・水・心・止・耳・力・馬・鹿…三文字の組合せが本当に多い。青森県に馬三つの一字と木の字で、とどろき、という地名・駅名がある。鹿三つは漢字検定１級で対象となっている中で、最も画数の多い漢字である。パソコンで実際にアライと打つと環境依存文字であるが鹿三つの一字に変換できた。考えてみると

漢字検定に出題する漢字だから、当然である。犬三つの品字様があり、つむじかぜ、と読む。馬三つと鹿三つの二字熟語とりぷるばかを思いついたが、そのような歌（品字様で二文字とふりがな）が既にあると知って驚いた。品字様は字が三つであるが同じ字が二つ以上あるのが理義字という。品字様は理義字の中で三つの字を指す。理義字は、林・弱・双・朋・羽・競…がある。昔は上下の二字、炎・圭…は理義字としなかったが今は含める。理義字で四字は少ないが磊と同じで石四つがある。四字理義字は他に風・雲など作字に近いが、重ねるものがある。作字（字をオリジナルで作ること）は避けているのだが、作字をどうしてもしたくて、お願いしたことがある。その字とは『あ』の濁音の連続を二行に渡って書いた。他の字では『ん』の濁音の連続を二行作って頂いた。この作字はぼくが肛☆に鉄のペリカンを突っ込まれた叫び声で字が他に該当するのが無かったのである。一つ間違えば字…いや痔…どころか肛☆が裂けていた。しかも、一文字に縦に裂けた。口裂け女でなく、尻裂け男である。漢字・ひらがなの区別もぼくはかなりこだわっている。漢字の次『など』ひらがなの次『等』と書き分けている。漢字でうっとうしいを鬱陶しいと書くとうっとうしい。漢字で読み書きできる字全部を使うと晦渋な文章になる。漢字ばかりだと、怪獣みたいな滅茶苦茶な文章になる。漢字の癌とひらがなのがんは医学界では使い分けている。

漢字の癌は外部に繋がる上皮細胞から発生する悪性腫瘍。漢字を使わないがんは白血病含む悪性腫瘍の総称である。漢字の癌＋（外部でない）がん＋肉腫＋血液がん＝がん。漢字でないがん＝悪性腫瘍（＝悪性脳腫瘍）したがって、漢字でもひらがなでもないカタカナのガンは使用しない。漢字の例　大腸癌・胃癌・肝臓癌・膀胱癌・子宮頸癌漢字を使うのは消化管の空洞を外部とみなすからである。漢字で肝臓癌は消化管からできた臓器で上皮細胞である。漢字でない例　子宮頸がん・子宮体がん・前立腺がん漢字の子宮頸癌は上皮細胞で外部に繋がるものを指して、漢字でない子宮頸がんは非上皮細胞の中のものを指す。漢字の子宮体癌と子宮体がんも同様の上皮の違いである。漢字の前立腺癌ガイドラインは前立腺がん…に修正した。漢字でない、がんセンター・がん保険・がん検診がある。漢字をひらがなにして良いがひらがなを漢字にできない。漢字の癌はやまいだれの中が岩（がん）の異字体である。漢字の腫瘍ははれものので、白血病も悪性腫瘍は変である。英字はｃａｎｃｅｒで蟹である。乳癌が蟹に見えたため。独字はｋｒｅｂｓで英字と同様に蟹を意味する語である。

字は数についてもぼくはこだわっている。つまり、漢数字にするか算用数字にするか意識している。本稿でも二字目は漢数字で、２５字ごとには算用数字にした。漢数字の三十年と算用数字の３３年を前号で区別した。漢数字と算用数字は前号で『生活保護法第四条１項』と書

き字の表記を正しく使った。なお項の下に号があれば漢数字を使う。法律は全て条と号は漢数字で間の項が算用数字である。例えば一条1項一号と記す。漢数字と算用数字の使い分けは住所の一丁目1番1号と異なる。項の数字の1は条文では省略するが条と号の一は省略しない。数字の使い分けは条文の見出しのみで、法律本文では漢数字で一項と記す。見出しは百や十など使わないが、漢数字で百や十などを法律本文で引用で記す、法律では漢数字の表記方法が見出しと本文とで異なるのである。漢数字で正しく××法第一一一条を引用する場合は別の漢数字で『百十一条は…』となる。他の例では見出しの漢数字が一二三四条なら法律本文は千二百三十四条と書く。数字だけでも統一で表記して欲しいとASのぼくは思う。数字の漢字表記は年は二〇二二など、月と日は十一などで字が異なる。和暦の年は平成三十一年で三一としない。漢字で一丁目と表示し、算用数字で1番1号と表記する。漢字で丁目を表示するのは丁目まで地名だからである。漢字で六本木と書き、6本木と書かないのと同じである。漢字で一郎と書き、1郎と書かない人名と同じである。漢字でなく算用数字を使う例は北海道の大都市にある。漢字を使わないのは丁目の他に条を使う四十ほどである。漢字でない丁目は北海道以外は横浜市旭区二俣川である。漢字を使わず二俣川1丁目と二俣川2丁目の二つがある。漢字でない丁目は横浜市に他にもあるが、地名ではない。漢字でない丁目を横浜市は番の代りに使うところがある。漢字と数字の使い分けをぼくは職場や葉書でしていない。漢字か数字どちらか統一しろと言う人がいるからである。

字義にもこだわるぼくは前作で右のみ静脈の門脈という字を使ったことを気にしている。なお、字義というのは字の正確な意味で使用している。門脈は肝門脈の肝の一字を省略したのである。門脈という血管の正確な意味＝字義は、毛細血管と毛細血管の間の血管である。肝の一字を省略した門脈以外にも脳下垂体門脈が存在する。

字について散々、書いてきたが、まんじを最後に書く。漢字で卍である。卍は記号でなく部首は十で六画である。漢字の筆順は、上横・中横・中縦・右縦・左縦・下横。漢字の筆順を左縦が右縦より先だと勘違いしていた。この字の部首は十であり、それに線を加えるのであるが、漢字の筆順は左から右へ書くと理解していたためである。漢字の筆順は上から下へ書く原則もあり卍は後者である。漢字の筆順は心は左から右へで、必は上から下へである。漢字の卍を訓読みして、まんじとされるが、実際には、卍字で音読みのマンジで、字を省略したものである、万の字は卍が由来とする説がある。話は変わるが、卍という字は地図記号で寺を指す。東京五輪の際に外国人はこの字がナチスを連想するとして廃止の検討がされた。卍の字が日本地図（外国人用）で消滅しそうになったが卍の字の廃止は却下された。まんじは永遠に残って欲しい。

編集後記

またまたコロナのことになりますが、六月下旬には東京都の一日当り新規感染者数も二千人までに減少し、コロナの終息ももうじきか、などと楽観的に思っていたのも束の間、七月に入り雲行きが怪しくなり、今日、七月十三日夕六時のニュースでは、東京都の今日の新規感染者が一六、八七八人、これに神奈川・千葉・埼玉三県を加え一都三県では、なんと今日一日だけの新規感染者数が三一、九一〇人と、三万人を超えている。この恐ろしい勢いは、どこからきてどこまで続くのか、新聞記事の予測も出ていない。

この世界的な動向は、オミクロン株のBA・5という、感染力が極めて強い新型に原因していると言う。

まんじ誌の合評会が、コロナ感染予防対応から、一昨年二月から一度も開催出来ていない。今年八月も中止と仮定すると、なんと十回連続して開催出来ないこととなる。

同人各位の楽しい声を耳にすることもなく、お元気なお姿を目にすることもなく、それにも拘らずまんじ誌が毎号発行出来ていることは、同人各位の執筆意欲に支えられているものと深く敬意を表します。

本号では新井宏氏が「井蛙の見　ウクライナ」と題して、小生などが全く知らなかった、そして知りたいと思っていたウクライナの歴史を克明に執筆され、また、本号で三回目となりますが、山田嘉久氏が『江戸庶民の「名刺」』の中で千葉県下のことになりますが武士・庶民のいろいろな生活を紹介していただき、面白く拝読させていただいています。

本号の合評会開催は現段階では分かりませんが、同人皆様のご健康と活発な寄稿を期待しています。（鍋）

まんじ第165号

令和4年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL･FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について
「虎吠えて風生ず」　　田寺怜葦（たでられい）画

まんじ第百六十六号　目次

呼び名　呼称と敬称 …… 新井　宏 … 4
天下人に騙された男 …… 千坂精一 … 14
忠臣蔵私考 …… 忠内正之 … 17
短　歌　八ッ場ダム他 …… 山本一成 … 23
漢　詩　汲深録（三十） …… 松井秀人 … 26
天守台を仰いで(七) …… 三戸岡（みとおか）道夫（みちお） … 28
青雲の彼方（十七） …… 太田精一 … 34
吾輩は紙魚ロボである　その一二 …… 永畑俊三 … 50
江戸庶民の「名刺」（4） …… 山田嘉久 … 80

続々　万機公論に決すべし（上） …… 浅野博文 … 91
日本書紀よりうつ病の仮説 …… 横山正義 … 107
近代日本洋画こぼれ話（第三回） …… 水谷嘉弘 … 110
高山右近（十五） …… 鍋屋次郎 … 123
…信仰に生きた生涯…
安芸門徒シルクロード紀行（17） …… 村上邦治 … 133
私の本州マラソン歴史紀行（東北編⑤） …… 安藤　剛 … 155
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その七） …… 山本　勉 … 189
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　2　神戸から来た男（六） …… 匠　克仁 … 197
字・字・字・字・字……字その2 …… 匠　克仁 … 205
編集後記 …… 編集子 … 211

呼び名　呼称と敬称

新井　宏

「晋ちゃん、晋ちゃん！」。

奈良市で8日、凶弾に倒れた自民党の安倍晋三元首相が搬送された奈良県立医大病院（奈良県橿原市）に駆け付けた妻の昭恵さんは、安倍氏の意識の回復を願って名前を繰り返し呼んだものの、思いは届かなかった。党関係者が9日、最期をみとった際の様子を明らかにした。（2022/07/09 各紙電子版ほぼ全て同文）

多くの関係者が同席している中でも、昭恵さんにとっては「晋ちゃん」が最もふさわしい呼びかけだったのであろう。

幼なじみかと思うと、お見合で結婚したという。晋三氏が三十三歳、昭恵さんが二十五歳の時だという。子供のない家庭だったので、最初の呼称がそのまま固定したのであろうか。あるいは、お坊ちゃま気質が抜けなかった晋三氏を永田町では「晋ちゃん」とか「アベちゃん」と呼んでいたというからその影響を受けたのであろうか。いや、その逆であろうか。

それにしても夫婦の私的な場での「呼称」は、どうなっているのか気になる。

一、夫婦間の呼称

我が家では、妻を「和ちゃん」と呼んでいる。最初は「齊藤さん」、それから「和子さん」そして「和ちゃん」と進化して、そこで止まってしまった。まあ、一般的な部類ではあろう。

ところが妻は私のことを今も「お兄さん」と呼ぶ。日本金属工業の新入社員の頃、会社からバスを仕立てて、スキー旅行や山登りを企画することが多かったが、バスを満席で走らせたく、妹に人数合わせを頼んだところ高校時代の友達を大勢連れてきた。最初の頃はみんな「新井さんのお兄さん」とか「美枝子さんのお兄さん」と呼んでいたが、だんだん「お兄さん」になり、ついにグループ内ではそれが固有名詞になってしまった。

その中にいた妻は、個人的な付き合いが始まっても、相変わらず「お兄さん」で、婚約する頃には妻の妹達も「お兄さん」と呼び始めた。ここまでは特に問題はない。

それが妻の父母に伝染し、みんなで「お兄さん」と言うようになると、妻の親類縁者までそれを見習った。そこで進化は止まり子供が四人生まれても、我が家では「お兄さん」のままである。因みに我が家の長男のことは「お兄ちゃん」と呼んで区別していた。

娘のところの次男坊の孫に妻がからかわれている。いま「おじいさんのことをお兄さん」といったでしょうと。妻が「おじいさんといったのよ」と強弁するのだが、孫は確かに「お兄さん」と聞こえたと主張している。

孫達は幼い頃から、我が家に来るのを楽しみにしていた。「いつもポケモンセンターに連れて行ってくれるおじいさん」、「地下鉄乗車一筆書きの企画に付き合ってくれるおじいさん」、「何でも買ってくれるおじいさん」と評判は上々で、しばしば上京しては我が家に泊まっていた。もちろん、その頃も妻から「お兄さん」と呼ばれていた時代で、彼らの耳にも馴染んでいたはずなのに、すっかり忘れてしまったらしい。

英語などでは、相手に対する直接的な「呼称」は、夫婦間でも親族間でも職場でも、その相対的な位置関係によらず「You」が普通だという。ところが日本では、性別・親族・長幼・地位などにより相応しい「呼称」を選んで用いることが常識で有り、夫婦間の直接的な「呼称」だけでもかなり多様である。第三者に対して用いる間接的な「呼称」も、夫、主人、旦那、連れ合い、うちの人、宿六、パートナーなどの他に、名字、名前などあり、どの「呼称」も座り心地が良く無いようである。

夫婦間の呼びかけについては、お父さん・お母さん系、名前系、あなた・おまえ系、おい・ちょっと系、などに分類して調査した結果をいくつか入手したので表Ⅰに示す。ついでに韓国での調査結果も載っていたので、おおよその対応関係も併記する。

英語圏との際だった違いは、「お父さん」「お母さん」で代用する場合が圧倒的に多いことである。これはもちろん「子供のお父さん」、「子供のお母さん」の省略形であろうが、子供達の使う呼称をそのまま借用しているとも言える。調査地域や調査年齢が一応全国ベースとなっている林炫情論文によれば、おおよそ次の通りである。

妻が夫を呼ぶ時、お父さん系54％、名前系30％、あなた系14％、夫が妻を呼ぶ時、お母さん系23％、名前系59％、おまえ系9％である。

なお細目で見ると、最も多い夫の呼称は「お父さん」

表1 夫婦間の呼称 分布（日本と韓国の比較）

調査対象	性別		年代別					
人員数	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
日本	37	65	2	51	17	12	16	4
韓国	50	50	1	39	39	14	6	0

	日本の呼称	%	計(%)	韓国の呼称	%	計(%)
妻から夫	おとうさん	32.4		子供の名＋おとうさん	20.0	
	おとうちゃん	5.4		子供の名＋父	1.3	
	とうさん	2.7	54.0	aebi	1.3	22.6
	とーと	2.7				
	パパ	10.8				
	名前＋くん	8.1		名前＋氏	11.3	
	名前＋さん	5.4		名前	2.5	
	名前＋ちゃん	2.7	21.6			13.8
	名前＋にいちゃん	2.7				
	名前	2.7				
	ニックネーム＋くん	5.4	13.5	ニックネーム	1.3	
	ニックネーム＋ちゃん	5.4				
	あなた	8.1		yobo,yeoboya (あなた)	25.0	
	あんた	2.7	13.5	dangshin (あなた)	7.5	40.0
	ダーリン	2.7		oppa (兄さん)	5.0	
				書房様、社長様	2.5	
夫から妻	おかあさん	14.3		子供の名＋おかあさん	17.6	
	かあさん	2.9	22.9	子供の名＋aya	6.8	25.1
	ママ	5.7		子供の名＋i	2.7	
	名前	45.7	51.4	名前＋aya	16.2	28.4
	名前＋ちゃん	5.7		名前、名前＋氏	12.2	
	ニックネーム＋ちゃん	8.6		yecbo (あなた)	25.7	
	ニックネーム	2.9	17.2	dangshin (あなた)	4.1	42.0
	あだな	5.7		jaki,jakiya	10.8	
	おまえ	2.9	8.6	gaksi (お人形)	1.4	
	おい	5.7				

の場合を整理すると、日本とは異なり。妻が夫を呼ぶ時、子供の名前＋お父さん系が28％、夫が妻を呼ぶ時、子供の名前＋お母さん系が27％である。

いわば韓国における「お父さん」、「お母さん」は理屈っぽく「子供のお父さん」、「子供のお母さん」と呼んでいるのに対して、日本では子供の名前を省略して子供に成り代わっている形なのである。

その韓国では妻が夫を「オッパ（お兄さん）」と呼ぶ例が5％もある。勝手な推測であるが、韓国では街娼が客を誘う時の呼びかけも「オッパ（お兄さん）」である。津留論文に妻から夫への呼びかけに「お兄さん」を載せているのは、関西に在日韓国人が多い関係ではなかろうかと思った。

ところで、老若男女の序列に気を遣う韓国では、呼びかける側が男性か女性かによって父母や兄弟の呼称が変わる。男性の場合、父の呼称はほとんど「アボジ」で幼児語の「アッパ」はごく稀であるが、女性の場合、「アボジ」もかなりあるにはあるが、幼児語の「アッパ」が主体である。

で32％、最も多い妻の呼称は「名前」で46％である。昭恵さんのように夫を「名前＋ちゃん」で呼ぶ場合は3％、我が家のように夫を「お兄さん」と呼ぶ場合は林論文には見かけないが津留論文に1％ある。まあ、かなり珍しい部類であろう。なお、林論文に紹介された韓国

兄の呼称は男性からの場合ほとんど漢語の「ヒョン（兄）」であるが、女性からの場合は逆に幼児語の「オッパ」を用いる。これを街娼達も借りている訳である。

その他、姉の呼称は男性側から「ヌナ」であるが、女性側から「オンニ」、オジやオバ、オイやメイなども、親族と義理の関係で異なりとても覚えきれない。このような状況は親族の範囲が日本よりもはるかに広い韓国でも、近年は極度の小子化が進み、状況は急変している。

同様に私の経験ではないが、韓国では初対面の時、年齢を聞かれることが多いと言う。自分の年齢や立場によって相手への呼び方が変わるので、まずはその確認から始めるのだという。同じく仕事などオフィシャルな場面では役職や名前（＋氏）で呼ぶのが普通なのでかなり気を使うようだ。そのためか、副教授に対しても学生達が「教授」と呼んでいるので、教授に昇進したのかと思うと、そうではなく「副」を省略しただけだという。その反対に、学長（韓国では学部長のこと）から教授に戻ってからも学長と呼んでいる例もあった。格上の呼称を使っていれば無難と言うことらしい。

二、役職呼称か「さん付け」か

日本も韓国と同様に、会社や役所、各種団体などで呼称に役職名を使う。

最近インターネットで、年上・年下関係なく「さん付け」で呼び合う組織には「パワハラはない」という記事を見かけた。

私は昭和35年に日本金属工業に就職した年から、会社では原則「さん付け」を実行しようと心がけていた。しかし、新入社員のくせに、部長や課長にいきなり役職名を付けずに、「さん付け」で呼ぶのは、非礼と受け取られるので用心しながらであった。その他は、役付前の先輩を含め、同僚、後輩や女性に対して「さん付け」を実行した。後輩に「さん付け」する者など居ない中であり「変な奴」とは思われたであろう。

実は、そんなことを「決意」したのは、東京工業大学新聞部の経験からである。小山台高校時代、新聞部に所属して数ヶ月に一回、日刊紙なみ二頁のブランケット版を発行、その他に校舎中央階段踊り場の黒板に手書きで不定期ながら「黒板新聞」を発行していた。進学高で教師からは白眼視されながらも楽しい経験であった。

そして東工大入学と同時に新聞部に入部したのである。吉本隆明や奥野健男も在部していたと聞いているが、工科系の大学にあっては、戦後まもなくの文芸活動の寄り場であったようで、それが後に、宮城音弥氏（心理学）、伊藤整氏（英文学）、鶴見俊輔氏（哲学）、永井道雄氏（社会学）、川喜多二郎氏（文化人類学）、永井陽之助氏（政治学）、江藤淳氏（文学）、池上彰氏など、いずれも戦後日本の世論を形成、牽引した錚々たる面々を教授として

して、会社卒業の頃は、新入社員としての目標は一応達成した。しかし心易い部下からは「新井さん」と呼ばれたが、周辺は相変わらず「職位名」を使って接してきた。

それは会社を卒業して韓国の慶尚大学の招聘教授になってからも続いた。

もともと会社を卒業したら日韓の考古学と古代史を研究するため韓国の大学院に留学する考えであった。その時、「学生で来るより教授で来たら」と声をかけて下さったのが慶尚大学・元法学部学長(学部長)姜東湖先生である。丁度一回り年上の方であったがとにかく素晴らしい方であった。慶尚大学で日本語教授をされていた李相澐先生が何とか学内に日本語教師養成の日本文化研究所を設立したいと運動していたのを助け、まだ軍政下で建前としては「反日」真っ盛りの中で支援する人などいない中、とにかく研究所開設にこぎ着けたのである。それが慶尚大学をして日本語教育のメッカに発展する基礎となった。

その姜東湖先生から、「韓国では目下の人は呼捨てにするんですよ」と注意された。しかし日本研究所の若い研究者を呼び捨てにすることなどできない。遠藤周作の『沈黙』や中野孝次の『清貧の思想』を語る韓国の方に日本人として先輩ぶることなどとてもできなかった。

年上・年下関係なく「さん付け」で呼び合う組織には招く礎になっていた。

しかし、在学当時の新聞部は唯々月一回の発行に追われていた。各学年数名の入部者があったが、実働部員は常時4~5名しか確保できず、とにかく良くぞ発行を続けたものだと思う。そんな状態から生まれた知恵だったのであろうが、部に部長とか編集長とかは一切置かなかった。ひたすら紙面を埋めることが最優先で、学生運動に対する意見なども保守から左翼までばらばらであったが、それでも新聞発行という目的のもとで良く協力しあっていた。

どう考えても、変な組織である。しかし、それが気に入ってしまった。活動期間はまともに授業にでることなどできず、ひたすら部室通いの毎日であった。部室は本館正面二階の一等地を占拠している学友会の大部屋の左側、どうして大学側がこんな利便を与えていたのであろうか。メンバー相互間の呼び掛けもルールはなかったが「さん付け」が多かったと思う。

それを入社したばかりの工場勤務で実現しようと思っていたのだから相当トンチンカンであったことは否めない。

しかし対象範囲を拡大するのに焦らず、一度も後退することもなく続けていた。在社は顧問の期間を含めて42年、その間には左遷・右遷を繰り返しながら、まわりを観れば、「さん付け」で困る対象も限られてきた。かく

「パワハラはない」という記事に同感はしたものの、その一方で、肩書で呼ぶのではなく「さん付け」で呼び合う会社は、その後、倒産するか衰退するか発展はしないと述べている経営者もいた。上から「さん付け」を強要するような会社の場合のことだと思うが、永い間、この問題で先を走っていたつもりの私であるが、今や無理に「さん付け」に統一することなど無意味なことのようにも思っている。

世界はジェンダー問題に敏感で、敬称も統一する方向に進んでいる。日本でも小中高の学校では男女を区別しない混合名簿が既に九割に迫っていると言う。

未婚の女性と既婚の女性を区別していた「Miss」と「Mrs.」が「Ms.」になり、「チェアマン」も語感に逆らって「チェアパースン」とするなどの流れを見ると、いずれ「Mr.」と「Ms.」も統合され「Mt.」にでもなるかも知れない。

しかし、欧州語には、男性名詞と女性名詞の伝統がある。その点、日本の「さん」は男女共通でありむしろ進んでいるようにも見える。

私はかつてルイ15世の公妾ポンパドール侯爵夫人のことを「侯爵の夫人」と誤解していた。王様に「キング」と「クイーン」の識別があるように、独語、仏語、伊語などのヨーロッパ系言語では普通名詞や形容詞にも男性形、女性形がある。因みにフランス語で侯爵は「Marquis」、女侯爵は「Marquise」とある。

日本語では「サッチャー首相が男爵に叙せられた」で済むが、男性名詞と女性名詞の区分のない英国でさえも「Baron」ではなく「Baronne」を使わなければならない。「Mr.」と「Ms.」を統合するといっても、結構、難しいのである。

三、前置敬称と後置敬称

かくして日本では「さん」が最も無難に使える呼称のようである。しかし微妙な使い分けを好む国民性で「さん」に統一されることなど考えがたい。事実、「さん」と似ている敬語に、殿、様、さん、ちゃん、君、氏、女史など接尾敬称がたくさんある。

同じく韓国では「様」に対応するのが「ニム(님)」で「さん」に対応するのが「氏(씨)」である。ただし、「ニム」は「社長ニム」とか「課長ニム」と上位職名につけるのが普通で、名前では必ずフルネームに付けなければならない。いずれも接尾敬語である。

北朝鮮の金正恩を「元帥様」と二重敬語でいうのを聞くと馬鹿丁寧で違和感があるが、韓国ではそれが普通の表現法なのである。

それに対してヨーロッパ圏では「Mr.」「Mrs.」「Ms.」などのように接頭敬語が普通であり、接尾敬語は弁護士に対して使う「Esq.(貴下)」くらいしかない。

して、会社卒業の頃は、新入社員としての目標は一応達成した。しかし心易い部下からは「新井さん」と呼ばれたが、周辺は相変わらず「職位名」を使って接してきた。

それは会社を卒業して韓国の慶尚大学の招聘教授になってからも続いた。

もともと会社を卒業したら日韓の考古学と古代史を研究するため韓国の大学院に留学する考えであった。その時、「学生で来るより教授で来たら」と声をかけて下さったのが慶尚大学・元法学部学長(学部長)姜東湖先生である。丁度一回り年上の方であったがとにかく素晴らしい方であった。慶尚大学で日本語教授をされていた李相濮先生が何とか学内に日本語教師養成の日本文化研究所を設立したいと運動していたのを助け、まだ軍政下で建前としては「反日」真っ盛りの中で支援する人などいない中、とにかく研究所開設にこぎ着けたのである。それが慶尚大学をして日本語教育のメッカに発展する基礎となった。

その姜東湖先生から、「韓国では目下の人は呼捨てにするんですよ」と注意された。しかし日本研究所の若い研究者を呼び捨てにすることなどできない。遠藤周作の『沈黙』や中野孝次の『清貧の思想』を語る韓国の方に日本人として先輩ぶることなどとてもできなかった。

年上・年下関係なく「さん付け」で呼び合う組織には招く礎になっていた。

しかし、在学当時の新聞部は唯々月一回の発行に追われていた。各学年数名の入部者があったが、実働部員は常時4~5名しか確保できず、とにかく良くぞ発行を続けたものだと思う。そんな状態から生まれた知恵だったのであろうが、部に部長とか編集長とかは一切置かなかった。ひたすら紙面を埋めることが最優先で、学生運動に対する意見なども保守から左翼までばらばらであったが、それでも新聞発行という目的のもとで良く協力しあっていた。

どう考えても、変な組織である。しかし、それが気に入ってしまった。活動期間はまともに授業にでることなどできず、ひたすら部室通いの毎日であった。部室は本館正面二階の一等地を占拠している学友会の大部屋の左側、どうして大学側がこんな利便を与えていたのであろうか。メンバー相互間の呼び掛けもルールはなかったが「さん付け」が多かったと思う。

それを入社したばかりの工場勤務で実現しようと思っていたのだから相当トンチンカンであったことは否めない。

しかし対象範囲を拡大するのに焦らず、一度も後退することもなく続けていた。在社は顧問の期間を含めて42年、その間には左遷・右遷を繰り返しながら、まわりを観れば、「さん付け」で困る対象も限られてきた。かく

「パワハラはない」という記事に同感はしたものの、その一方で、肩書で呼ぶのではなく「さん付け」で呼び合う会社は、その後、倒産するか衰退するか発展はしないと述べている経営者もいた。上から「さん付け」を強要するような会社の場合のことだと思うが、永い間、この問題で先を走っていたつもりの私であるが、今や無理に「さん付け」に統一することなど無意味なことのようにも思っている。

世界はジェンダー問題に敏感で、敬称も統一する方向に進んでいる。日本でも小中高の学校では男女を区別しない混合名簿が既に九割に迫っていると言う。

未婚の女性と既婚の女性を区別していた「Miss」と「Mrs.」が「Ms.」になり、「チェアマン」も語感に逆らって「チェアパースン」とするなどの流れを見ると、いずれ「Mr.」と「Ms.」も統合され「Mt.」にでもなるかも知れない。

しかし、欧州語には、男性名詞と女性名詞の伝統がある。その点、日本の「さん」は男女共通でありむしろ進んでいるようにも見える。

私はかつてルイ15世の公妾ポンパドール侯爵夫人のことを「侯爵の夫人」と誤解していた。王様に「キング」と「クイーン」の識別があるように、独語、仏語、伊語などのヨーロッパ系言語では普通名詞や形容詞にも男性形、女性形がある。因みにフランス語で侯爵は「Marquis」、女侯爵は「Marquise」とある。

日本語では「サッチャー首相が男爵に叙せられた」で済むが、男性名詞と女性名詞の区分のない英国でさえも「Baron」ではなく「Baronne」を使わなければならない。「Mr.」と「Ms.」を統合するといっても、結構、難しいのである。

三、前置敬称と後置敬称

かくして日本では「さん」が最も無難に使える呼称のようである。しかし微妙な使い分けを好む国民性で「さん」に統一されることなど考えがたい。事実、「さん」と似ている敬語に、殿、様、さん、ちゃん、君、氏、女史など接尾敬称がたくさんある。

同じく韓国では「様」に対応するのが「ニム(님)」で「さん」に対応するのが「氏(씨)」である。ただし、「ニム」は「社長ニム」とか「課長ニム」と上位職名につけるのが普通で、名前では必ずフルネームに付けなければならない。いずれも接尾敬語である。

北朝鮮の金正恩を「元帥様」と二重敬語でいうのを聞くと馬鹿丁寧で違和感があるが、韓国ではそれが普通の表現法なのである。

それに対してヨーロッパ圏では「Mr.」「Mrs.」「Ms.」などのように接頭敬語が普通であり、接尾敬語は弁護士に対して使う「Esq.(貴下)」くらいしかない。

だからであろうか、「Mr.」や「Mrs.」を「さん」と訳すのには、ちょっと違和感がある。「ミスター」は、もともとは「主人」の意味を持った言葉で、誰に対しても「ご主人」と呼びかけている印象がある。韓国に誰彼なく「社長」と呼びかける慣行があるのを連想するからかも知れない。

英語では、博士資格を持つ人物には「Mr.」を使わず「Dr.」を、教授職には「Prof.」を使う。女博士には「Mrs.」に準じて「Drs.」とでも書くのであろうか、確認していない。このような前置敬語の上位には、騎士級の貴族に用いた「Sir」がある。

英文手紙では「Dear Mr.」とか「Dear Dr.」と書く場合が多い。日本の「様」「さん」「ちゃん」の系列は、この「Dear」に対応し、日本の「社長」「部長」「課長」の系列が「Mr.」「Dr.」「Prof.」の系列に対応すると考えれば、「元帥様」もあながち嘲笑の対象ではないのであろう。

ここまでつまらぬ考察を続けて、ヨーロッパには「様」や「さん」に相当する言葉がもともと乏しかったことに気がつく。「Dear」はどんな階層の方に対しても使えるようなので、「様」や「さん」もそんな感じなのであるが、ご馳走様(さん)、ご苦労様(さん)、お日様、お月さん、床屋さんのように語尾に付けて、物事を丁寧に言う語と国語辞典にはある。納得する。

四、ミドルネームと名刺

考えてみれば「呼称」は「名刺」と深く関わる。その点で、『まんじ』に連載が始まった山田嘉久さんの「江戸庶民の名刺」は視点がユニークでとても面白い。

江戸時代には、武士の名前は名字(姓)と通称(疑似官名など)と名乗り(実名・諱)の三点で構成されていた。しかし明治になって「同一人が二つの名前をもっているのは紛らわしい」とて、「通称」と「名乗り」を「名」に統一したのだという。

江戸時代までは、実名は文字通り諱(忌み名)であり、上位者や親などに対して呼称として使用することは憚らねばならなかった。

名字の使用に制限があった「農工商」の階層は別として、幕末には武士階級のほとんどが律令制の官名を模倣した「通称」を持っていた。おおまかに分類すると次の三種類があったという。

① 「大和守」、「越中守」のような正式な官名
② 「主膳」、「監物」のような疑似官名。
③ 「平八郎」「半左衛門」のような一般通称

大名などの高位者は、正式な官名を得る場合、公家官位とは切り離して、幕府の推挙のもと武家官位として勅許を得ていたが、それ以外の旗本・御家人や諸大名の家臣等もやがて私称の「名字+官名」を名乗るようになった。律令制の官名をそのまま使う場合もあったが、多くは模倣官名で「百官名」とか「東百官」と言われている。私称とはいっても、江戸社会は相互監視が働き、社会的な地位をある程度反映していて、名刺肩書き程度の役割は果たしたと思われる。

明治になって「名」はひとつとなり「官名風」の名前は禁止されたので普通士族は諱が実名になった。しかし「農工商」ではもともと名前が一つで、しかも「官名風」であることも識らず「兵衛」「右衛門」「左衛門」などを含む名前を名乗っていたので、大慌てで改名しなければならなかった。

海軍大臣や首相を歴任した山本権兵衛盛武も「盛武」と名乗るべきところ「権兵衛」を名乗った。「権兵衛」は「官名」にはない「百官名」で「権兵衛が種蒔きゃ」のように百姓に多い名前であった。山本権兵衛の人柄であろうか。

既に日韓の例で見たように、東アジアの漢字圏では、上位者や親などに実名で呼びかけるのは非礼として忌避されていた。実名のことを諱(忌み名)といい、「実名敬避俗」という言葉で表現された習俗であるが、正式名では浅野内匠頭長矩とか吉良上野介義央であっても、一般に内匠頭、上野介と呼ぶので実名を知られていない有名人もいたであろう。この「通称」が日本における「ミドルネーム」である。

欧米の「ミドルネーム」は、多くの場合、洗礼名、先祖名、旧姓、母方の姓、尊敬する人名等であるが、そこに爵位のような地位を示唆する語が挿入される場合もある。例えば、サッチャー首相が一線を退いたときに男爵に叙任されたが、フルネームはマーガレット・ヒルダ・女男爵・サッチャーとなった。

ヨーロッパ系の名前に、「ヒルベルト・フォン・カラヤン」とか「シャルル・ド・ゴール」とか「レオナルド・ダ・ビンチ」のようにフォン、ド、ダなどが付いていると貴族風に感じる。もちろんこれらの前置詞は英語で言う「オブ」で貴族の意味はないが、貴族風に感じるのは、あたかもフォンやドやダがミドルネームの位置にあるためで、「○○家の」、「□□領の」、「△△地方の」などの表記の名残であり、もともとは貴族であった可能性が高いからである。

そもそも氏名とか名刺とかは、単なる個人の識別だけでなく、その個人の所属や地位や能力など社会的な序列を緩やかに表現する機能をもっている。

山田嘉久さんの「江戸庶民の名刺」も「○○様御知行所□□国△△郡◇◇村百姓良平倅嘉久」とあり、住居も職業も戸主もわかり、現代のパスポートより詳細である。更に「司馬遼太郎研究家」とでも追加すればもっと情報が多い。

類人猿の世界には序列確認とでも言うべき「マウンティング」という行為がある。サルなどが相手よりも自

だからであろうか、「Mr.」や「Mrs.」を「さん」と訳すのには、ちょっと違和感がある。「ミスター」は、もともとは「主人」の意味を持った言葉で、誰に対しても「ご主人」と呼びかけている印象がある。韓国に誰彼なく「社長」と呼びかける慣行があるのを連想するからかも知れない。

英語では、博士資格を持つ人物には「Mr.」を使わず「Dr.」を、教授職には「Prof.」を使う。女博士には「Mrs.」に準じて「Drs.」とでも書くのであろうか、確認していない。このような前置敬語の上位には、騎士級の貴族に用いた「Sir」がある。

英文手紙では「Dear Mr.」とか「Dear Dr.」と書く場合が多い。日本の「様」「さん」「ちゃん」の系列は、この「Dear」に対応し、日本の「社長」「部長」「課長」の系列が「Mr.」「Dr.」「Prof.」の系列に対応すると考えれば、「元帥様」もあながち嘲笑の対象ではないのであろう。

ここまでつまらぬ考察を続けて、ヨーロッパには「様」や「さん」に相当する言葉がもともと乏しかったことに気がつく。「Dear」はどんな階層の方に対しても使えるようなので、「様」や「さん」もそんな感じなのであるが、ご馳走様(さん)、ご苦労様(さん)、お日様、お月さん、床屋さんのように語尾に付けて、物事を丁寧に言う語と国語辞典にはある。納得する。

四、ミドルネームと名刺

考えてみれば「呼称」は「名刺」と深く関わる。その点で、『まんじ』に連載が始まった山田嘉久さんの「江戸庶民の名刺」は視点がユニークでとても面白い。

江戸時代には、武士の名前は名字(姓)と通称(疑似官名など)と名乗り(実名・諱)の三点で構成されていた。しかし明治になって「同一人が二つの名前をもっているのは紛らわしい」とて、「通称」と「名乗り」を「名」に統一したのだという。

江戸時代までは、実名は文字通り諱(忌み名)であり、上位者や親などに対して呼称として使用することは憚らねばならなかった。

名字の使用に制限があった「農工商」の階層は別として、幕末には武士階級のほとんどが律令制の官名を模倣した「通称」を持っていた。おおまかに分類すると次の三種類があったという。

① 「大和守」、「越中守」のような正式な官名
② 「主膳」、「監物」のような疑似官名。
③ 「平八郎」「半左衛門」のような一般通称

大名などの高位者は、正式な官名を得る場合、公家官位とは切り離して、幕府の推挙のもと武家官位として勅許を得ていたが、それ以外の旗本・御家人や諸大名の家臣等もやがて私称の「名字+官名」を名乗るようになった。律令制の官名をそのまま使う場合もあったが、多くは模倣官名で「百官名」とか「東百官」と言われている。私称とはいっても、江戸社会は相互監視が働き、社会的な地位をある程度反映していて、名刺肩書き程度の役割は果たしたと思われる。

明治になって「名」はひとつとなり「官名風」の名前は禁止されたので普通士族は諱が実名になった。しかし「農工商」ではもともと名前が一つで、しかも「官名風」であることも識らず「兵衛」「右衛門」「左衛門」などを含む名前を名乗っていたので、大慌てで改名しなければならなかった。

海軍大臣や首相を歴任した山本権兵衛盛武も「盛武」と名乗るべきところ「権兵衛」を名乗った。「権兵衛」は「官名」にはない「百官名」で「権兵衛が種蒔きゃ」のように百姓に多い名前であった。山本権兵衛の人柄であろうか。

既に日韓の例で見たように、東アジアの漢字圏では、上位者や親などに実名で呼びかけるのは非礼として忌避されていた。実名のことを諱(忌み名)といい、「実名敬避俗」という言葉で表現された習俗であるが、正式名では浅野内匠頭長矩とか吉良上野介義央であっても、一般に内匠頭、上野介と呼ぶので実名を知られていない有名人もいたであろう。この「通称」が日本における「ミドルネーム」である。

欧米の「ミドルネーム」は、多くの場合、洗礼名、先祖名、旧姓、母方の姓、尊敬する人名等であるが、そこに爵位のような地位を示唆する語が挿入される場合もある。例えば、サッチャー首相が一線を退いたときに男爵に叙任されたが、フルネームはマーガレット・ヒルダ・女男爵・サッチャーとなった。

ヨーロッパ系の名前に、「ヒルベルト・フォン・カラヤン」とか「シャルル・ド・ゴール」とか「レオナルド・ダ・ビンチ」のようにフォン、ド、ダなどが付いていると貴族風に感じる。もちろんこれらの前置詞は英語で言う「オブ」で貴族の意味はないが、貴族風に感じるのは、あたかもフォンやドやダがミドルネームの位置にあるためで、「○○家の」、「□□領の」、「△△地方の」などの表記の名残であり、もともとは貴族であった可能性が高いからである。

そもそも氏名とか名刺とかは、単なる個人の識別だけでなく、その個人の所属や地位や能力など社会的な序列を緩やかに表現する機能をもっている。

山田嘉久さんの「江戸庶民の名刺」も「○○様御知行所□□国△△郡◇◇村百姓良平倅嘉久」とあり、住居も職業も戸主もわかり、現代のパスポートより詳細である。更に「司馬遼太郎研究家」とでも追加すればもっと情報が多い。

類人猿の世界には序列確認とでも言うべき「マウンティング」という行為がある。サルなどが相手よりも自

分が優位に立っていることを示すために、馬乗りをする行為を意味しているが、人間も、いや人間こそ「マウンティング」の本性を持つので、各種組織や親族関係における「呼称」の使い分けは非常に重要である。だから初見で相互に、その身分や能力や所属などの「序列」や「優位性」を確認するのである。

そのためには長い「呼称」を付けたくなることもあり、ピカソのように「パブロ・ディエゴ・ホセ・サンティアゴ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネポムセノ・マリーア・デ・ロス・レメディオス・クリスピアーノ・デ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソ」という本名を持つ者もいる。

落語の長助さんの「寿限無 寿限無 五劫の擦り切れ海砂利水魚の 水行末 雲来末 風来末 食う寝るところに住むところ やぶら小路の 藪柑子 パイポ パイポ パイポの シューリンガン シューリンガンの グーリンダイ グーリンダイの ポンポコピーのポンポコナの 長久命の長助……」も同類であろうか。

私も会社生活を終えてから使っている「名刺」は、それに準ずるほど酷い。表は、数理考古学・古代計量史と専門らしきものを頭書きに、工学博士・新井宏と続き、住所、電話、メール、ホームページを載せていて、会社の名刺に似ているが、それだけでも仰々しい。その上、裏には所属学会、所属団体、著書、経歴と小さな文字がびっしり詰まっている。会社卒業後は異世界との交流を求めて、何でも載せた結果である。

五、「区別」と「差別」

「様」とか「さん」は単に言葉に丁寧さを加える用語として始まった。それに対し「ミスター」は、社会の階層を示す「主人」という「呼称」から始まり、「騎士」とか「博士」とか「教授」が同列に並ぶようになったもので「さん」と似る「Dear」の「呼称」とは異なる。だからジェンダー問題から「Mr.」と「Ms.」を統合して中性形を作ろうなどという発想は現実的ではない。

こんなことを考えていると、世の中は「区別する」と「差別する」を混同しているように思う。性同一性障害を持つ少数者に配慮してパスポートから性別の記載を除く動きもあると聞くと嘆かわしい。

そもそも社会の構成員が効率的に調和して生きて行くには、相互関係の「呼称」を単一化して意味を持たなくするのは、文明に逆行することだ。

ミドルネームの生まれた理由は、ヨーロッパやアラブでは漢字圏と異なり、同姓同名が多発するので、その区分の為と言われている。しかし「名字」や「実名」は自分で付けたものではないが、ミドルネームは自分も参加して付けることができる。日本で「筑前守」とか「内匠頭」とか「上野介」と律令制の官名をミドルネームとして名乗ったのは、そのニーズに沿ったものであろう。

日本でもミドルネームを限定した文字数で復活したらどうであろうか。旧姓、通称、芸名、四股名、戒名。位階など経歴や身分紹介の要素もあって良いと思う。

婚姻は、「両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有する」と憲法にある。婚姻は異性間と限定しているわけだ。それにも係わらずトランジェンダーのように同性婚を望む人達が多く居るのも事実である。そして同性婚でも憲法に定めた権利を享受できる制度を要求している。それなら婚姻とは別に「同性婚」を定義して婚姻同等の権利を保障すれば良いのではないか。

性同一性障害という言葉は、例外を障害と理解するところに問題がある。

全ての「区分」は統計現象としてみれば必ず連続帯で連なっている。オーバーラップする範囲がどの程度かで正常と感じるか異常と感じるかの違いがあるだけだ。

どこか呼称を同一にすることが男女平等と勘違いしているのではないか。前にも述べたが、大相撲は重量階級制を採用すべきだ。押し相撲が有利になるとて、奇形力士を次々に生み出し、力士の寿命を短縮しているではないか。

スポーツの世界は男女を区別するのが平等である。将棋の世界でさえ、プロは男女別である。いやゴルフや囲碁・将棋でさえ、ハンディ付きがあって、面白さがある。

そんなくだらないことを考えながら、我が家の息子達の命名のことを思った。「宏」の訓韻を踏んで、聡→武→康としているが芸がない。父の名が「稔」で「一文字」の名を付けたかったのだと思う。

「宏」という名前は、折からの支那事変で衛生兵として朝鮮まで出征していた父からの手紙にあった。「博」はだめ、もし博士になったら困るから、「助」もだめ、もし教授になったら困るからと書いてあったという。

父は四才の時、「新橋屋六兵衛」という製糸商を営んでいた父親が亡くなり、大工になり上京、日本大学建築科が開設した夜学コースで学び、国策会社の「南興水産」に入社した。夜学生にとって博士とか教授というのはまぶしい存在だったのだろうか。私は50才の時に工学博士、62才の時に教授になった。

歴史小咄①
天下人に騙された男

千坂精一

一、

つい先頃までは歴史通を自負する人なら誰もが知っている話だったのに、このごろは、

「そんな話は知らない」

という人ばかりになってしまい、すっかり風化してしまった。

それは慶長期の話である。

その人は、備前国（岡山県）を領していた宇喜多氏の支族で富田城二万石の宇喜多忠家の長男に生まれ直盛と命名された。秀吉の猶子となった秀家の従兄弟にあたる。

はじめ秀家に仕えて浮田左京亮と号したりもしていたが、慶長四年（一五九九）故あって秀家のもとを去り、徳川家康に属した。

翌年の関ヶ原の合戦で武勲をたてた功により石見国津和野（島根県鹿足郡津和野町）三万石に封ぜられて津和野城主になったので、姓名をあらためて坂崎出羽守と称した。

津和野は島根県の南西部に位置していて、山口県との県境にある山間の町で、山陰の小京都と呼ばれている。

赤い石州瓦の屋根の家々が並ぶその津和野盆地を、津和野川が弧を描いて流れている。

一見して長閑なようであるが、西隣には大家毛利氏の長州領と接しているので常に危機意識があったであろう。

JR山口線の津和野駅を降りてすぐに目につくのは小高いところに見える屋根も鳥居も赤一色の後田の太鼓谷の稲荷神社である。

実は私が津和野を訪ねたのは、津和野が目的ではなく、太平洋戦争当時山口県防府市にあった海軍通信学校がいまどうなっているかということと、引率外出のときに詣でた防府天満宮に詣でて往時をしのんでみたいということからであった。

そして、防府を訪ねたときに、

「このさきの津和野というところに、森鴎外と西周の生家がある」

ということをおしえられたので、なんとなく心ひかれて足をのばしたということである。

余談がすぎた。本題を急ごう。

二、

関ヶ原の戦いで豊臣方に勝利した家康は、十五年後の慶長十九年（一六一四）に大坂冬の陣を起こし、和睦して大坂城の堀を埋めてしまい、翌年四月夏の陣を起こした。

そのときの話である。

家康は豊臣秀頼に嫁がせた秀忠の娘千姫をなんとかして救出したいと考えた。

そこで家康は、旗本たちをあつめて意向を伝えたが、誰も申し出る者はいなかった。

業を煮やした家康は、千姫を救出した者に嫁がせるという条件を出した。

唖然としている旗本たちのなかから救出を引き受ける者が出た。坂崎出羽守であった。

ことが成功すれば坂崎直盛は将軍家の婿になれるのであるからこれほどの恩賞はなく、千載一遇の機会であり、伸るか反るかの大勝負であった。

直盛は、部下を集めて事の次第を説明し、成功すれば皆々にも将軍家の一族の家臣に出世できるまたとない機会であることを懇々と諭して納得させた。

ことは急を要する。

ただちに坂崎決死隊が結成された。

大坂城のどこから潜入してどう千姫を探し求め、救出したかは定かではないが、とにかく千姫を掠り傷程度で無事城外へ連れ出して茶臼山の家康本営へ届けた。

そのとき直盛は顔面に大火傷を負っていたという。

それからの直盛は只管家康からの沙汰を待ったが、待てど暮らせど家康からはいっこうになんの沙汰もなかった。

そうこうしているうちに約束相手の家康が一年後の元和二年（一六一六）四月に病歿してしまった。

家康の喪があけると、二代将軍に就任した秀忠は娘の千姫を本多忠刻に嫁がせることにした。

忠刻の母は家康の嫡男信康の娘であるから千姫とは近い間柄になる。

良縁であったが直盛は、約束が違うと納得できなかった。

千姫の去就は大坂城から救出した直盛に一任されてい

る約束であった。

自分を無視し裏切ったと覚った直盛は秀忠を許せず、千姫の輿を途中で奪い取ろうと覚悟を固め、腕の立つ家臣たちを江戸屋敷に集めて鳩首協議した。

それを知った幕府は、これを諭したが直盛がなんとしても諾かないので、業を煮やした幕府は家臣たちに命じて直盛を自殺せしめた。

ときに元和二年（一六一六）九月のことであった。

三、

私はこの話をきいていたので、津和野へ足をのばして坂崎出羽守直盛の墓所を訪ねた。

ところがどこでも領主の墓所はあるのに、坂崎直盛の墓はなかった。

探し探した結果、坂崎家断絶のあと因幡國鹿野（鳥取県気高郡鹿野町）から入部した亀井氏が直盛十三回忌のとき、津和野の永明寺境内に墓を建立したということを耳にした。

そこで永明寺の庫裡を訪ねてきいてみると、その墓は寺の山門近くの参道の脇に一基だけぽつんと建っているという。

探し当てたのは粗末な墓石で、戒名らしきものも〈一峰玄秀〉と刻んであるだけであった。（了）

忠臣蔵私考

忠内正之

はじめに

令和四年、今年の夏はとりわけ暑さがきびしく感じられた。加齢を重ねている上に、病気を持つ身であれば当然のことと諦めなければならないとは思うが、夏バテが長びいて辛かった。

最近朝夕は少し涼しく感じられるようになったが暦を見るともう仲秋に近い。老人ともなると、いち日が短かい、ひと月が早い、そしていち年が足早に立去っていく。

「まんじ誌」の第3Qの締切りは9月である。この原稿が活字になる頃はもう年末に近い。年末になるとまたまた忠臣蔵の物語りが世に氾濫するものと思われる。

忠臣義士達の快挙を賛美すること、私も決して吝かではないが、一方的に吉良上野介が邪悪な人間とばかりに悪しざまに貶されるのは正しくないと憤慨に堪えない。



菩提寺・華蔵寺の御影堂に安置されている吉良上野介義央の木像

私は吉良上野介義央の領地であった三州吉良の出身である。吉良贔屓は当然のこととご理解願いたい。

上野介は地元の吉良では善政を敷いて現在でも名君と慕われている存在である。治山治水の改良を図った他、富好新田の干拓と塩田の奨励、饗庭塩（吉良塩のブランド）の増産等民生に注力した。私はその富好新田で生まれ育ったのである。

富好新田は吉良上野介が元禄元年から10年間かけて、幾度かの災害を受けて遂に完成した。妻女富子の眼病全快を神佛に感謝する意図をもってこの新田が生まれたことに因み、富好新田と名付けられた。千石の良田となって民を潤した。新田の守りとして身延山から七面天女が勧請され、真正寺という寺が創設されている。七面天女の霊験はあらたかで、地震や風水害から富好新田の被害を最小限に守ってきたと伝えられている。

冒頭に上野介の木像の写眞を載せてもらっている。そのふくよかな容姿からは当時50才の円熟した人柄と、鎌倉、室町以来続いた名流の気品を感じ取ることができる。この像は生存中に写し造られている。従ってこの像をそのまま実在した義央と見て差し支えなく、芝居や映画などに登場する義央のイメージとはかなり隔たりがある。

戦前まで、悪人の代表とされた当地関係の人物に、吉良上野介の他に足利尊氏と徳川家康がある。

その尊氏も家康とともに奇しくも吉良氏と血族の間柄にあるが、二人ともに戦後の価値観の洗い直しによって希代の英雄として生まれ替っている。

吉良上野介も正しい眼をもって見直されなければならない。

そのような考えから、既に幾度も当「まんじ誌」に寄稿させてもらっているが、もう一度復習させてもらって、年末年始に押し寄せる忠臣蔵の攻勢に対して一矢酬いたいと思う。

それでは忠臣蔵の概要からおさらいしてみよう。

元禄忠臣蔵

一七〇一年（元禄十四年）赤穂藩主浅野内匠頭長矩は勅使の饗応役を命ぜられた。その指導を吉良上野介が主となり他の高家二人と共に担当した。饗応役の人選については上野介は幕命により上京中で全く関与していない。

伝聞によれば饗応中、内匠頭は上野介の意地悪さに我慢できず、ついに江戸城内「松の廊下」で義央に切りかかった。幸い致命傷には至らなかったが、規則に従って内匠頭は即日切腹、義央は抵抗しなかったことで無罪、そして赤穂藩は取り潰しとなった。「喧嘩両成敗となるべきをあまりに不公平」と世の人々は赤穂浪士側に同情的であった。

赤穂側は、城代家老大石内蔵助を中心に赤穂浪士

四十七名が苦労の末、一七〇二年（元禄十五年）十二月十四日、本所吉良邸を夜襲、上野介の首を取るという大事件を引き起こした。これが元禄事件のあらましである。

平和で享楽的な風潮の中にあった元禄時代では大事件であった。のちにフィクションを加えて忠臣蔵という芝居となって大ヒットするに至った。

刃傷の原因は今に至るも殆んど判明していない。幕府の処断があまりに早急で、内匠頭からの事情聴取が疎かにされたのも一因である。そこで諸説が面白可笑しく広まっていったのである。

刃傷の原因

大名にとって勅使饗応役を勤めることは、大変気の重い役目であり経済負担も嵩むので歓迎されなかった。内匠頭は既に十八年前十七才で同じ役目を命じられた実績があるのであるから事前に根回ししていれば逃れられたかも知れない。江戸詰の家臣にあまり有能な人物が居なかったのは不運であった。

十八年前に義央の指南で御役をつとめたとはいえ、その頃のことは殆んど覚えてはいなかった。当時は名江戸家老大石頼母（内蔵助の大叔父）が難なく仕切ったらしい。

指南役である義央にどれだけの謝礼を包み何を贈ればよいのかは、おおよその見当がついていた。進物が少ないのに立腹した義央が長矩に意地悪をして勅使饗応の作法を教えなかったから長矩も堪忍袋の緒が切れて刃傷に及んだというのは俗説にすぎないと思われる。

殿中における服装をわざと違えて教えたというのもおかしな話で、以前に御役目を経験した長矩はその点熟知していた筈である。更に寛永寺と増上寺参詣のときの休息所の畳替えは、饗応役の仕事ではなかった。

よくよく考えて見れば、みなつくり話のようである。だいたい長矩を窮地に追いこんでしまって失態などすることになれば、指南役である義央の責任が問われることになる。

浅野藩は金銭にこまかくケチであったといわれる。長矩の祖父長直は慶安元年から十三年の歳月を費やして赤穂城を完成している。

当時新しく築城することは固く禁じられていたが強く申請して許可を得たものである。

また山鹿素行を招いて軍備に力を入れるなど、内証は苦しかったのである。このため問題は高家に対する謝礼金額の多寡よりもむしろ饗応費予算の倹約にあった。

内匠頭の金銭感覚の希薄さが問題であった。二度目の饗応役は自身で切りもりする立場にあったが認識が足り

なかった。十八年間で貨幣価値はすっかり変っていた。貨幣経情が進み、元禄九年に幕府が行った貨幣改鋳により（貨幣に占める金銀の含有率を減じた）物価は高騰していた。本来ならば前回の三倍の千二百両は見込んでもおかしくない経費を倍以下の八百両で抑えようとして、上野介他担当する高家等の不興を買ったのがキグシャグした原因の一つであろう。

尚、同時に院使饗応役を命じられた伊予吉田藩の伊達左京亮の予算対応は充分な額であったという。

なぜ事前に伊達家と打合せを行うなどの智恵が出なかったのか、後に大石内蔵助は残念がったに違いない。

更に長矩には短慮な性格と痞の持病があった。役目にあたる数日前より気分が秀れず、医師から投薬を受けていたという神経性の病があって、ストレスによる緊張感が昂じて乱心に及んだのではないかとの説がある。

俗に「増上寺刃傷」といわれる事件がある。

松の廊下の刃傷事件に先立つこと二十二年前の延宝八年（一六八〇）六月に起きた。

徳州四代将軍家綱の法要という大切な儀式の最中に、時の永井家当主永井信濃守尚長が内藤和泉守忠勝に大刀で切り殺された。原因はこの時もはっきりしなかった。尚長は即死、永井家の家禄は減封となった。内藤忠勝は切腹、家は断絶となった。

この内藤忠勝は長矩の母方の叔父に当たる人物である。殿中で刃傷に及べばどうなるか、この叔父の例を学習している訳で、ともに刃傷事件を起こした叔父と甥、どうも短気で我慢することができないたちですぐにキレるというＤＮＡを共有していた様である。

賄賂説、意地悪説、赤穂藩江戸家老の才覚不足、各自領の塩田問題等色々指摘されるむきもあるが長矩の異常な性格から生じた破綻が一番の原因であると考えられる。

怪我を受けた義央は、名医栗崎道有の治療を受けて回復しつつあったが、刃傷の場面について、道有に次の様に語ったという。

「おもてなしに粗相があってはならぬと、役目柄いろいろと指図をし、浅野の行き届かぬところはこちらで手配した。それが癪に触ったのかも知れぬが、刃傷におよぶ程の恨みを買うとは信じられぬ。ふり向いた瞬間、浅野の形相は狂気をおびていた。あれはどうみても乱心したとしか思えない。また乱心であれば罪に問われることはなかったのだ。」

討ち入りと吉良家断絶

殺傷事件の翌年十二月十四日、吉良邸で年納めの茶会が催された。その夜中、突然襲われた。赤穂側の討入りである。

大石内蔵助以下の浪士は水も洩らさぬ布陣、吉良邸の人々は手も足も出ぬ状況であった。元来、吉良家は刀や槍で奉公する家ではない。いわば幕府における公家的な存在である。仕える家臣たちは武士としての一応の剣術の心得はあったとしても、平和な世に義央の護衛のために腕の立つ武士は必要としなかった。上杉家から大勢の付人が派遣されていたようにいわれているが俗説にすぎない。剣客だった新貝弥七郎や山吉新八にしても当主義周に従って上杉家から来た家来であり、義央を守るための付人ではなかった。

（なお両名については、千坂精一氏が、同人誌「まんじ１５３号」に詳しく記述されている）

浪士側の負傷者は唯二人、之に対し吉良側は家臣が十七名も討死し、重傷を負って後日亡くなった者が九名、重傷者十五名を出したのである。後に吉良の家臣は腰抜け武士ばかりでまともに刀を合わせることも出来ず討ち取られたと酷評されたが、彼等も主家を思う忠節心をもって全力で応戦したのである。

かくして上野介の首は取られ、当主義周は重傷を負った。ここに足利以来の名家は滅びた。

赤穂浪士が勝ったのは武力による討入りだけではなかった。戦略に於いても勝っていたのである。幕府検死日付衆が受け取った「浅野内匠頭家来口上」には「君父の讐は共に天を戴くべからず」名分に従って「偏に亡主の意趣を継ぎ候志までに御座候」とあり、あくまで討入りを正当化しようとしていた。幕府の処断に対する反抗という根元にひそむ真意を隠して「君父の讐」にすり替えた内蔵助の戦略の勝利であった。

この結果赤穂側への世論の傾きが大きくなり、幕府も同調せざるを得なくなった。

事件から約五十年後の寛永元年（一七四八）に竹田出雲が浄瑠璃に作った「仮名手本忠臣蔵」では、殿中で刀を抜く程の恨みを持つに至った理由を色々と創作した結果、いまだに絶大な人気をもつ物語りとなった。

この物語りがそのまま事実とは言えないので作者も実名を避けてフィクションとして書いたのである。

しかし明治時代になって忠臣蔵の物語りは実名に替り、この物語りが事実であると定着してしまった。

更に明治元年、明治天皇は勅使を泉岳寺墓前に差し向け、大石良雄らに嘉賞の宣旨を下したといわれる。

また戦時に至る軍国主義の増幅期では忠君愛国の好個のモデルの一つとして大いに喧伝された。

これらのことから吉良上野介は悪者の代表とされるに至ったのである。

刃傷の原因がはっきりしていないのであるから一方的に上野介を極悪人ときめつけるのは理不尽に違いないが、これ迄の流れとしては抗い難いものがある。

結びとして

稍、旧い資料からではあるが、「金手本忠臣蔵」の座談会で、時代作家海音寺潮五郎と吉良出身の作家尾崎士郎が次のように語っている。

海音寺　ぼくは大石以下赤穂浪士は立派だと思いますよ。大変見事だと思っています。当時の侍としてはああ動くのが一番立派だと思います。

しかし、だからといって吉良をけなさなければならない理由は毫も認めない。吉良は単に運が悪かっただけのことです。だれが一番悪いかといえば長矩が一番悪い。あれがバカ殿だからああいうことになった、ぼくは思います。

尾崎　しかしあれもしかたがなかったと思うな。あの状態について考えると、長矩も運が悪いが、吉良上野介も運が悪い。あれはもう防ぎようがないものですね。ああいう運命というものは。

海音寺　しかし斬り付けるならば殺さなければならないですよ。よう殺さなかったということは武士として不覚ですよ。

尾崎　それはその通りだ。

海音寺　そういう訓練ばかりしていなければならないものですよ。武士というものは。

尾崎　赤穂浪士は立派ですよ。　僕は吉良上野介のために弁明これつとめても、赤穂を否定するようなばかなことはしませんよ。

吉良をほめると赤穂にけちをつけられたようにおもうのはよくない。そういうことはないですね。

両方の作家は共通して四十七士の義挙を賞讃しているものの、海音寺は内匠頭の短慮をバカ呼ばわりし、一刀のもとに突き殺すことのできない内匠頭の不覚を責めている。

尾崎は内匠頭と上野介はああいう星のもとに生まれたという運命論を述べている。

これ迄に色々な議論がなされ、今後も続くものと思われるが、はっきりしていることは内匠頭の短慮な行動が大きな悲劇を招来したことは事実である。そのため如何に多くの人達が尊い命を落としまた苦しまなければならなかったことか。怒りの心が暴走する恐ろしさを改めて痛感する。

このことは我々の現代社会にも通ずる教訓である。トップマネージメントも凡人も、苦しくとも簡単にキレることのない様に平生を省みたいものである。

まもなく年末年始を迎える。予期した通り忠臣蔵物語りが多く流れ来るものと思う。その際は是非客観的な眼をもって　鑑賞していただきたいものと願ってこの稿を閉じたい。

（終）

短歌

八ッ場ダム他

山本一成

小湊・いすみ鉄道・銚子電鉄

房総を横断したり旧旧しき二社の列車を乗り継ぎながら

線路にはあら草生へて秋の陽（ひ）にレールが光る小湊鉄道

旧き列車はいかな構図にをさまるかカメラ群がる秋空の下

外川より犬吠までの遊歩道寄せくる波濤高きを競ふ

売るものが最早なくなり商品に電車の「音」売る銚子電鉄

たぬき現る

夏雲を映して小さきにはたづみ散歩帰りを跨ぎて通る

人ごみに揉まれて歩めば奮い立つ偶には家を出でてみるべし

傘のしづく車内の床を右ひだり定まらぬわが裡のごとしも

庭木々の思ひ切りよき剪定は散髪したる思ひにも似る

新宿の駅にたぬきが現れてＶＩＰ扱ひの誘導うける

八ッ場ダム

いく度の曲折を経し八ッ場(やんば)ダム見あぐる堰を雲流れゆく

喜びは湖面にうかび悲しみは湖底にしづむ〈八ッ場あがつま湖〉

カモシカが水をのみをり湖は万物のもの人間(ひと)のものならず

神聖なる水瓶の面(も)を水上(ぼ)バス(す)でゆく無礼赦されよ水の神様

流れくる水を溜めたるあがつま湖一都五県を潤すダムなり

漢詩

汲深錄（三十）

松井秀人

柳堤送客

（柳堤に客を送る）
令和四年四月

清暁長堤柳影稠　清暁の長堤 柳影稠し
折來贈客送行舟　折り来たって客に贈り 行舟を送る
驪歌一曲惜相別　驪歌一曲 相別るを惜しむ
再會何時共白頭　再会何れの時か 共に白頭
押韻・稠 舟 頭

〔注 解〕
清暁＝清らかな明け方。
柳影稠＝柳の映ったかげが多い。
驪歌＝送別のときにうたう歌。
折柳…漢代、長安の都を旅立つ人を見送る時、覇橋のたもとの柳の枝を折って別れた故事による。旅する人に柳の枝を折って輪にして贈って、無事の帰還を願う風習があったと言い伝えられている。

〔口語訳〕
清らかな明け方の長い堤には、多くの柳が密生していてその柳の枝を折って客に贈りその舟を見送る。
そのさい送別の歌を一曲歌って、別れを惜しんだ。
今度また会えるのはいつのことになるのだろうか、已に年を取ってお互い頭は真っ白になってしまっていることだし。

初夏挿秧

（初夏の挿秧）
令和四年五月

首夏農村風雨多　首夏の農村 風雨多し
稲田水滿漾清波　稲田 水満ち清波を漾はす
方今閑聽挿秧唱　方に今 閑かに聴く挿秧の唱
秋社應歡鼓腹歌　秋社 応に歓ぶべし鼓腹の歌を
押韻・多 波 歌

〔注 解〕
挿秧＝稲の苗を田に植える。田植えする。
首夏＝初夏。
方今＝ただ今。今日。当今。
秋社＝秋の祭り。
鼓腹歌＝食足りて満足し、腹を打って楽しむ歌。

〔口語訳〕
初夏の農村で風雨が強く、稲田には水が満ちて清波が漾よっている。
まさに今、田んぼでは田植え作業が行われて田植えの唱が聴こえているが
秋祭のときには、豊作で皆で鼓腹の歌を歓ぶことになるだろう。

茅廬歸燕

（茅廬帰燕）
令和四年五月

村巷柴門人到稀　村巷の柴門 人到ること稀なり
不忘陋屋燕來歸　陋屋を忘れず 燕来り帰る
新雛梁上喃喃語　新雛梁上 喃々の語
何日辞巣自在飛　何れの日にか巣を辞し 自在に飛ぶ
押韻・稀 歸 飛

〔注 解〕
村巷＝村のこみち。
柴門＝柴で作った門。
陋屋＝せまくきたない家。自分の家の謙称。
喃喃＝小さな声で絶えず言うさま。ぺちゃぺちゃしゃべるさま。

〔口語訳〕
村のこみちの柴門を通って人はめったに訪ねてこないがうれしいことに、燕はこのむさ苦しい家を忘れずに今年も帰ってきてくれた。今年生まれた雛も梁の上では、ぺちゃぺちゃしゃべっている様子だ。いつの日か巣を出て、自在に飛ぼうとするだろう。

綠陰蟬語

（緑陰蟬語）
令和四年七月

風度綠陰夏日長　風は緑陰を度り夏日長し
噪蟬鳴盡已斜陽　噪蟬は鳴き尽くし已に斜陽
可憐短命一炊夢　憐れむべし短命 一炊の夢
哽咽哀聲人易傷　哽咽哀声 人 傷み易し
押韻・長 陽 傷

〔注 解〕
一炊夢＝盛衰などの極めてはかない事をたとえて「枕中記」から生まれた言葉。
哽咽＝涙にむせぶ。むせび泣く。
人易傷＝人の心をいたましめる。

〔口語訳〕
風は木陰を渡り涼しさをもたらすが、夏の日中は長く暑さは厳しい。噪がしく鳴く蟬は終日鳴き続けているが、日は已に西に傾いている。可哀そうなことに蟬は短命で、故事にある一炊の夢のようであり短命を知っているので、むせび鳴く哀し気な鳴き声は人の心を悲しませる。

哭岳堂先生

（岳堂先生を哭す）
令和四年八月

耆徳高文百世師　耆徳の高文 百世の師なり
一朝永訣不勝悲　一朝の永訣 悲しみに勝えず
聖堂寂寂秋風冷　聖堂寂々として秋風冷ややかなり
未識温顔何處之　未だ識らず温顔 何れの処にか之く
押韻・師 悲 之

〔注 解〕
耆徳＝年老いて徳望のあった人。
高文＝見識の高い文章
百世師＝百代の後までも人の師と仰がれる人。
一朝＝ある朝。ある日。
永訣＝ながの別れ、永別。特に死別を言う。
不勝悲＝悲しみに堪えない。
温顔＝おだやかな顔。やさしい顔。
何處之＝何れの処にか之く。

〔口語訳〕
徳望のあった先生は、その学問において後世まで人の師として仰がれる方でした。お亡くなりになり、ご指導をいただいた人達は悲しみにたえない。聖堂は寂しく静かで秋風も冷ややかである。誰も識らないことだが温顔であった先生は、どこへ行かれてしまったのだろうか。

天守台を仰いで(七)

三戸岡　道夫

正英は辻村教師を山王中学校へ入学する前から知っていた。入学する前といっても、入学試験の一週間ばかり前である。小学校六年生の正英達は受持の先生につれられて。受験の下準備のために、山王中学校を見学に行ったのである。その時、はじめて辻村教師と逢った。その時の印象を正英は、はっきりと覚えている。

一同が山王中学校へ近ずいたとき、正英の頭には、幼い頃、桜祭りの日に、母につれられて、山王城の天守台を遠くから眺めながら、母から、

（正ちゃんも大きくなったら、あの天守台の下の中学校へ行くんですよ）

と言われたことを思い出した。

（僕もとうとうこの中学校へ入る年令になったのだ）

と胸を躍らせた。

日旺日なので校内はひっそりとしていた。二十名ばかりの小学生達は小使の爺さんに鍵をあけてもらって、廊下、教室、机、階段、図書館、講堂、生物教室等と、未知の雰囲氣に威圧されながら、好奇心の眼で見て廻った。小学校の校舎のごみごみとした、埃っぽい、泥くさい臭に対して、中学校のひっそりと高い天井や光った廊下は、清潔で、神聖で、大人の世界の臭が漂っていた。

そうした空氣に醉ったようになって見学を終り、正面玄関前の庭に出たとき、一人の背の高い教師と逢った。付添いの教師は駆け寄って、

「辻村先生！」

と叫び、

「この少年達が今年私の小学校から山王中学校への受験希望者であるから、今日はその下準備に見学に来たのであるから、どうかよろしく」

と頭を下げて言った。辻村教師はそこに居並んだ可愛い少年達を見下すように笑って、

「しっかりやるんだね」

と言った。

辻村教師の存在は、その時から正英の心に深く刻みこまれた。

入学すると正英達は辻村教師から英語の授業を受けた。中学校の英語には、「R」と「C」と「S」の三種類があった。Rはリーダーの頭文字で讀み方、Cはコンポジションの頭文字で英作文、Sはストーリーの頭文字で英語の物語りを讀む時間であった。辻村教師が受持ったのはCとSで、Sのテキストには最も流布されているグリム童話集を用いた。童話集の一番最初は有名な「赤ずきん」の話で、題名には「Little Red Ridding Hood」とあった。正英はま新しい紙の香のする字引を一枚一枚丹念にめくりながら單語を引いたが、生れてはじめてみるこの英語の題名をどう譯してよいのかさっぱり解らなくて、「小さな赤い乘馬用ずきん」と直譯した。辻村教師は少し笑った。正英は顔が赤くなった。

「物語ですから『赤ずきんちゃん』ぐらいでいいでしょう。」

と鮮やかに譯した。だが辻村教師にはあの日正門の際で逢った少年が首尾よく入学して、英語の時間に顔を眞赤に染めながら「小さな赤い乘馬用ズキン」と譯しているのをみると、その一途な少年の氣持がいとほしくて仕方がなかった。

辻村教師は、

「リットル　レッド　ライディング　フード」

と鮮やかに滑らかな発音をして、

「さあ、皆なで一しょに」

と、

「リットル　レッド　ライディング　フード」

と生徒達は、教室の中一杯の大声で、発音を練習した。こうして最初の英語の時間から正英は辻村教師が好きになり、二三週間もすると山王中学校で正英の一番好きな教師になってしまった。辻村教師が課外活動の文芸部の主任者であると知ると、正英はすぐ文芸部に入會した。そして面白い物語りを聞いたり、夕方おそくまで残って図書館の整理などをした。それは温かい思い出となって正英の心に蓄積されていった。

三年生になると正英達に職員室の掃除当番が廻ってきた。掃除は隅から隅まで雑布掛けをしなければならなかったので、生徒達は教師の机の下にまでもぐって、その埃っぽく暗い所まで丁寧に拭いた。だが正英は辻村教師の机の下を拭くときだけは嫌だと思わなかった。うす暗い机の下。辻村教師の足が見えた。正英はスリッパの周圍をそこだけ残してぐるぐるいつまでも拭いた。それは誰にも知られない正英のたのしい秘密だった。その秘密に正英は神秘な興奮を感じた。正英にとって辻村教師

はもう一人の父親だった。精神面における父である。

翌日、正英は恐る恐る登校した。

朝すぐ教官から呼出しがあるかも知れないと思った。しかし朝礼も無事にすみ、一時間目の授業も無事に始った。だが、正英の心は平穏でなかった。自分に対する教官の噂がなにか友人達の間で話されていないだろうか、耳の神経をとがらせ、また休憩時間に「一寸職員室まで」と週番が呼びにこないかと心配した。なるべく職員室の方へ近ずかないようにした。廊下でばったり教官に逢ったらどうしよう。それも用心して教室からなるべく外に出ないようにした。

しかし午後になって正英の精神の緊張が少し解けかかった頃、果して教官からの呼び出しがきた。来るものは矢張りきた。それにしてもなぜもっと早く來なかったのだろうか。辻村教師がとりなしてくれたからなのでもあろうか。一瞬彼はまた家に歸ってしまおうかと思った。だが今日はそれはできなかった。彼は週番の後について職員室へ行った。

職員室へ入るやいなや、彼は續けざまに教官から鋭い言葉をあびせられた。

「阿呆たれ、昨日、誰が歸れと言った」

教官はじりじり怒っていた。

本當なら今朝すぐにでも呼び出す筈だった。それがよんどころない用事ができて出來なかった。午前中いらいらと不愉快な思ひをして時をすごし、それが余計教官の怒りに油を注いだ。

正英はよろめいてドアの角に頭をぶっつけた。頭の奥がキーンと鳴り、痛みが頭の奥まで鋭くひびいた。

「今日は兵器庫の掃除をさせてやる、いいな、一人でだぞ、一人で全部油で拭くのだ」

正英の額にうすく血がにじんでいた。

だが昨日のように正英は泣こうとはしない。濃い眉をぎゅっと一直線に横に張りつめていた。教官は腹立たしかった。教官の眼の前では泣こうとしない顔、教官の心の中を覗き見ている冷やかな眼、親しみを見せない顔。だが教官をそのように正英に反撥させているものは、この少年の精神と同じように張りつめた顔の清潔さに対する教官の嫉妬でもあった。

正英はまた昨日のように職員室の中に直立不動の姿勢で立っていた。意地悪い教師達はわざと肩を半分ぶっつけて、

「おい、邪魔だな、ここは通路だからな」

と言ったりした。くやし涙が出そうになった。

『なぜこんな学校に憧れて入ってきたのだろうか』

彼の頭にはいろいろなことが浮かんできた。

『どこかへ転校したいなあ』

『それとも早く教官が戦地へ行ってしまえばいい。そしてあっさり戦死してしまえばいい。そして代りに川島教官が戦地から戻ってくればよいのに。金剛寺教官のような軍人が内地に残って、川島教官のようないい軍人が戦地に征ってしまうなんて不合理だ。』

川島教官は金剛寺教官と交代して戦地に征った、かっての山王中学校の配属将校だった。相撲取りのように肥って、眼が細く、八丁眉で、正英はその人柄が好きであった。川島教官のいた頃の学校の雰圍氣がなつかしかった。

やがて中学校の一日の授業が終って、校内にざわめきがひろがった。机を引きずる荒っぽい音、バケツを持って廊下を走る者、雑布を野球のように投げあって教師に叱られる声。職員室にも掃除当番の連中がなだれこんできて、正英の姿をうさん臭そうにじろじろ眺め、その周圍でばたばた掃除を始めた。

教官が戻ってきて、どすんと椅子に腰をおろした。

「なんだ、まだ立っていたのか」

そしてうまそうに煙草をすぱすぱと吸った。

校内全体が一番活氣づくのがこの放課後の掃除の時間である。七百人余りの腕白盛りの少年達が一斉に、校舎の隅から隅までばたばたやってつつき廻す。いつもは靜寂な教室の窓のガラスにも、ガラス拭きの少年達が鈴なりになる。学校全体が動いている。その中でたゞ一人、正英だけが何もしないでぽつんと立っていた。

その時ピストンが勢よく入ってきて、

「教官殿、兵器庫の鍵をいただきに参りました」

わざとらしさが眼につく態度で大声に叫び、そして側の正英を鼻の先で笑った。

「富田の班が兵器庫掃除の当番か」

「はい、そうであります」

「今日は兵器庫の掃除はよろしい。日比野が一人でやってくれるそうだ。どんなにきれいにできるか、よく見習え、いいか」

「はい」

「は、は、は……」

教官はピストンに向って笑い、それから正英を見せ物のように二人は眺めて、

「な、そうだな、日比野、日比野のぽんつくや」

言葉の後半では、からからと笑った。

教官はピストンと一緒に職員室を出ていった。何処へ行くのだろう。瞬間正英は、ピストンの仲間達が教官を取圍んで、煙草などをのみながら猥談をする、町の某所にある不潔な溜り場を想像した。

教官は職員室を出る時正英に、

「そろそろ取り掛っても、いい時間だぜ」

と言いすてた。

正英は兵器庫の方へ歩いていった。

劍道場と柔道場の前を抜けると、もう道場の掃除はあ

らかた済んで、一部では稽古の仕度に取掛っていた。正英は柔道部に入っていた。もう少しで初段がとれるところまできていた。柔道場の前で五年生の主将から、

「おい、今日はさぼるなよ」

と声をかけられたが、正英は氣乗りのしない顔でその方を見上げた。

そしていったん教室へ戻ると、机の中のものを鞄につめ、兵器庫まで走っていった。

兵器庫の中はひやっとしていた。

それは銃架にぎっしりと整列している銃や剣の金属の発散する冷たさが、兵器庫の空氣を冷やしているのであった。

正英は中へ入り、重い入口の扉をぴったり閉めきると、油の臭が充滿した奥の方へ歩いていった。ここへは誰にも入ってきてほしくなかったからだった。この薄暗い兵器庫の中で罰則をくらって掃除している姿を誰にも見られたくない。奥のつき当りには小さい窓が三つあって、どれにも鉄の柵が牢獄のようにはめられていた。暫くは油のついた布を手にとったまま、明り窓からしか光線の入ってこない兵器庫の隅にうずくまって、思いきりわあわあ泣いてみたいような、黙ってなにかをじっと考えてみたいような、また、一人で自分の心を慰めてみたいような様々な氣持になっていた。だが、そんなことをしていることは許されない。間もなく金剛寺教官が見廻りにくるに違いない。

正英は兵器庫の端から端まで並んだ何列かの銃の列を見た。それは夕方の光に、黙って、鈍く、白く光っていた。それは無造作に、人の命を奪ってたぢろがない、不氣味な底光である。今はこうして訓練用の銃剣として用いられているが、かっては潜血の中を潜ってきたものであるかもしれない。そして今後も、その冷やかな剣の刃に、人間の血糊を無慈悲にたっぷり吸いこむようなことがあるのかもしれない。

その時正英は、兵器庫の中で剣を胸に突き立てて死んでいる、自分を想像した。教官への復讐に自殺してやろう。教官はうろたえるだろう。その時になって驚いて後悔しても遅いんだ。世間は正英に同情して、教官を非難するだろう。教官に復讐するのには、絶対自殺よりほかに方法はないと思った。

やがて靜まりかえった兵器庫で正英は油布で銃や剣をみがき始めた。日茶目茶に手を動かし。兵器庫の掃除に精を出すことによって、自殺への誘惑から逃れようとした。彼は何本もの銃を磨いた。しかし時間がたつと駄目だった。彼は兵器庫の冷たい床の上にぺたんと尻餅をついてしまった。油くさい手を膝の上でぶらぶらさせながら、自殺した沼崎武夫の氣持も丁度こんな氣持だったかもしれないと、ふっと思った。

坐った位置からは鉄格子の明り窓の中に、天守台の森

が見えた。彼は早くここを抜け出して、晴れやかに聳えている緑の天守台に登っていきたいと思った。兵器庫の重い扉越しに「エイ、ヤーッ」と運動場の遠くから響いてくる銃剣術の掛声は、兵器庫の中をいっそう森閑としたものにした。

こんな時に本当に正英を勵ましてくれるのは、自殺した沼崎武夫だけだった。もし沼崎が生きていたら、きっと慰めにここへやってくる。沼崎は鞄を肩にかけた歸り仕度で、そっと人に氣づかれないように扉を開ける。薄暗い兵器庫の中をじっと見廻す。すると隅っこの方に油のぼろ布を持ってぼんやりしている正英の姿を見つける。

(手伝うよ)

沼崎はすり足で正英の方に近づいてくる。

ああ、僕はもう一人ではないんだという心強さと喜びが、正英の胸をつき上げてくる。だが、正英はきっとこう言ってしまうだろう。

(いいよ、一人でやるから。手伝ってもらうと、また教官の野郎怒るにきまっている。あの馬鹿野郎。ね、君、いいよ、本当にすまないけど、僕一人でやるからさ、先に歸ってくれよ)

(じゃ先に行って、天守台の草原で待ってるぜ)

言葉を残して兵器庫を出ていってしまう。

だが、これはもう夢だ、沼崎はもう生きてはいない。そんなことを願ったって無駄なのだ。彼は絶望的な寂しさに身震いした。彼はもう一度、明り窓の彼方の天守台を見上げた。

(本当に沼崎が、あの天守台の草原で待っていてくれるならいいなあ……)

(つづく)

青雲の彼方（十七）

太田精一

十七．外務次官として日米交渉妥結に専念

（一）外務省退職、時局講演活動を展開

久しぶりで日本の正月を満喫した英二は、昭和十六年一月六日、帰国報告を兼ねて松岡外務大臣のもとを訪れた。松岡外相は、英二を含めた多くの在外公館の要職者を召還した外務省人事について英二に説明した。

「日本の現状からみて革新の必要があり、外務省も大量更迭による人事の刷新のやむなきにいたった。君は、フランス大使にまわってもらうつもりでいたが、前にイタリアからフランス大使に代わった杉村陽太郎氏の場合、イタリア側に良い感じを与えなかったので、まだ決めずにいる」

英二はその話を聞いて、言い訳としか思えなかった。松岡外相の外交政策とは相いれないものを感じていた英二は思い切って言った。そして思った。

「松岡さんの政策には、賛成しかねるので、この際外務省を辞任したい」

（三国同盟のしがらみにとらわれない外交を展開し、日本を欧州の戦乱に巻き込まれないようにするには、どのようにすればよいか、外務省の外から、客観的立場に立ち提言することも今の日本に必要ではないか）

一ヵ月後、英二は、秋田清拓務相の招きで、二人だけで会食した。その際、秋田拓務相は英二に言った。

「実は君をイタリアから呼び返したのは、松岡の心機一転の政策から出たもので、君にどうこう言うものではないから、松岡も非常に気の毒がっている。それで今度伊藤述史情報局総裁が多分辞めることになるので、君をその後任にしたいという案が出ている、だから早めに辞表を提出しておいた方がいいよ」

英二はこれに応えて言った。

「実は先日松岡外相と会って、外相の政策には反対だから辞めたいと言ってあります。私としては、いつでも辞表を提出する用意がありますが、今、情報局総裁を引き受けることはできません。なぜなら私は、もともと外務省の情報局を壊して、内閣情報局を置くことに反対してきた人間です。また、情報局総裁は、外相と相呼応して仕事をしなければならないが、私は松岡外相のやり方についていけない。それから、伊藤述史は私の学生時代からの親友なので、彼に代わる気はありません」

そんな話があったためか、英二は広田弘毅、小幡酉吉などの諸先輩から情報局総裁になるという話は、本当かという質問をずいぶん受けた。

また、本多駐中国大使にあった時にこんな話も出た。

「私は、近々辞任するので、松岡外相に、後任には重光か天羽が良いと言ったら、外相は、天羽は情報局総裁に取っておくと言っていた」

そんな話があるうちに、英二は一月十一日、天皇陛下に召されて、葉山の離宮に伺候した。欧州の形勢、参戦前後のイタリア外交、日伊及び独伊関係、イタリア国内の状況などの他、ソ連に対する印象、シベリアの充実ぶりなど、御進講申し上げるためである。また、陛下からもいろいろ御下問があり、陪席した松平宮内相、木戸内大臣、蓮沼侍従長からも質問があった。

二月十九日、松岡外相が渡欧し、内外に多大な注目を浴びたが、同時に懸念をまき散らした。日本は、ますます枢軸寄りとなり米英との溝が深まって、参戦するのではないかという懸念である。

近衛首相は、病気で引きこもりがちであり、大政翼賛会の予算についても正確な答弁を避けている。大政翼賛会と議会との関係があいまいのまま、政治的混乱に手が付けられていない状況であった。

英二は、三月四日に、畑俊六在中国総司令官を訪問、中国問題など彼と膝を交えて論じた。中国撤退の必要性は両者に感じつつも、口実なしで撤退するわけにはいかないということになり、撤退時期の特定はできない状況で終わった。

次いで三月三十一日、英二は近衛文麿首相を訪問、欧州事情について話した。帰国後初めての会見である。英二は、近衛公に対し、次のように述べた。

「欧州戦は、英国が抵抗し、それを米国が援助して長引く恐れがあります。日本は、日中戦争の解決が先決で、撤兵の用意をする必要があります。軍人間の統一を欠く行動が目につきますので、近衛公は汪政権育成よりも陸海軍の一致団結を促し、この難局に当たらなければならないと愚考する次第です」

英二は、近衛首相との会談を通じて、首相は欧州政局

についてもかなり詳しいことが分かった。

四月になって、欧州の戦況が東欧諸国に拡大、ドイツ軍はユーゴスラビアに進撃を開始、ギリシャはドイツに宣戦を布告、ユーゴスラビアはソ連と不可侵条約を結びドイツへの抵抗を強める体制をとった。英軍はエチオピアを占領、イタリアのアフリカにおける拠点の切り崩しにかかった。リビア、エジプトでは北アフリカの覇権をめぐって英軍と独軍が熾烈な戦いを繰り返している。

こうしてドイツのチェコ、ポーランドへの侵攻で始まった欧州での戦いは、英仏を中心とした連合国対独伊の枢軸国の戦いへと戦火が拡大し、不可侵条約で結ばれている独ソ間にも亀裂が広がり、ソ連の参戦も取りざたされるようになったのである。

一方、極東においては、日中間の宣戦布告なき戦争は一向に収まりがつかず、戦線は拡大するばかりで、まさに泥沼の戦いを続けていた。米国は、終始一貫蒋介石軍を支援し続け、蒋介石政権はソ連と中立条約を結び、北方からの脅威を取り除き、かつソ連から抗日戦を継続させるための有形無形の援助を取り付けていた。

こうした状況の中、外務大臣松岡洋右は、モスクワまで出掛け、日ソ中立条約を締結した。満州国の安全を担保し、北方からの脅威を取り除き、中国戦線にさらに多くの兵力を投入し、南洋諸国の資源確保へ勢力を集中させるためであった。

それだけではない。始まったばかりの日米会談を日本に有利に運ぶために、三国同盟によって力を誇示し、ソ連との友好関係を構築することによって、北方からの脅威がないことを見せつけ、交渉に当たることを狙ったものと思われる。

しかし、このソ連との中立条約は、日米交渉に何の影響ももたらさなかった。米国は、ソ連がバルカン半島を巡って、やがてはドイツと対立すると読んでいた。ソ連は、日ソ不可侵条約があろうがなかろうが、連合国側について参戦するに違いない。その時には経済軍事援助を米国に求めることは必至とみていたのである。

それどころか、日ソ中立条約は、日本が参戦した第二次世界大戦の終戦時期を遅らせ、末期の外交的迷走を生む原因となってしまったのである。ソ連という国家体制が硬直的で冷酷さを持ち合わせ、帝政ロシア以来の拡張主義国家であることを十分考慮に入れていなかったのではなかろうか。

英二は、四月十七日、広田弘毅を訪問した。外務省退官挨拶のためである。広田氏は、外務省の先輩であり、海外の各地で外交官として活躍した。話題は内外の政治情勢、欧州の戦況、近衛公と政党組織を立ち上げたが首相にならないかとの誘いを受けたことなどの話しを英二に打ち明けた。余談ながら同氏は今次大戦でA級戦犯の判決を受け、外務省でただ一人絞首刑となった人物である。

新緑のまばゆい晩春の一日を英二は、子供たちと過ごすため、東京の散策に出掛けた。イタリアから帰国してから初めてである。四月二十五日のこの日は、幸いにも天気に恵まれ、絶好のハイキング日和である。長男の大平、次男の民雄、三男の浩平を連れて、浅草雷門駅を発し、越ヶ谷駅に着き、江戸の風情の残る街並みや景色を楽しみ帰宅した。

外務省を退職した英二は、公務から解放され自由な時間を持てるようになった。すると、経済団体、ジャーナリズム、地方公共団体、大学などの各方面から講演の依頼があり、地方へも出かける機会が多くなった。

五月四日、英二は中部経済倶楽部の招待で名古屋訪問、併せて母の見舞いをした。高齢となった母は、病気がちで名古屋在住の姉の夫阿部夫婦のもとで暮らしている。だが、英二が訪問した時は比較的元気で、名古屋で姉夫婦と一緒に会食することができた。

翌日の午後、経済倶楽部の主催で名古屋財界の茶会が開かれ、そこで英二は、最近の欧州情勢について話をした。その茶会には、一七〇人ほどの人たちが集まり、英二の話を熱心に聞き、欧州での戦争に多大な関心を示していると英二は感じ取った。

五月二十七日、再び広田弘毅と会った英二は、日米関係について意見交換をした。この時、広田は、彼に重大な話を伝えた。

グルー駐日米国大使が松岡外相と会談した。その時、グルー大使が松岡外相に質問した。

「米国がドイツとの戦争に突入した場合、日本はどのような態度をとるか」

「日本は三国同盟条約にもとづきドイツ側に立って参戦する」と答えたと松岡外相は広田氏に話している。

そのことを聞いて英二は慄然とした。米国の欧州戦参加はほぼ間違いないことから、日本はこの戦争に参加せざるを得ないと感じ取ったのである。英二は、何としても米国との戦争は避けねばならぬと思い、どうすればそれが可能かを考えるのであった。

六月になって、講演依頼がますます増え、その都度日米関係の重要性を説いてまわったが、日本人の米英に対する警戒心は、軍、およびジャーナリズムを中心に高まるばかりで、世論は枢軸国側支持に傾いて行った。

六月一日栃木県宇都宮の教育会館で「最近の国際情勢、欧州情勢と日本の立場について」講演、同月十二日九州大学工学部講堂にて「太平洋問題を中心とする世界情勢」、十三日長崎東邦電力長崎支店楼上で「最近のヨーロッパ情勢について」などのテーマで講演し、各会場で多くの聴取者を集めている。

英二が、講演を終え、東京に戻ると欧州の戦況はますます熾烈となっていた。ついに六月二十二日、ドイツが不可侵条約を破って、ソ連へ侵攻を開始したのだ。英米はこれによってドイツはソ連にも兵力を割くことになるため、広大な戦線をやがて維持できなくなると予想した。

さらに英二の講演旅行は続いた。六月二十七日から二十九日まで佐渡の各地を回り、欧州の戦況と英仏、ソ連、米国の対日態度、日中戦争の行方などについて講演を続け、その合間を縫って、佐渡の神社、仏閣を巡り、三十一日には、佐渡金山を見学、翌日帰京した。

（二）日米交渉当初からつまずき

新潟行きのおけさ丸に乗り込んだ英二は、霧雨の中に次第に遠ざかって行く佐渡ヶ島を眺めながら、（日本はやがて米英ソ中の大国に囲まれ孤立を深め、それを打開するため、三国同盟による独伊との軍事同盟を強化し、そのため米英の敵愾心を生み、今次大戦に参戦せざるを得なくなるのではないか）という怖れを感ずるのであった。

梅雨の終わりの強い雨が降り続いた後、いよいよ夏本番も近い七月二十三日、外務省内で大きな人事異動があった。大蔵次官、および白鳥、斎藤両顧問が辞職、枢軸外交に変更ありかと見られたが、「枢軸外交方針に変更はない」と発表している。外務省は、枢軸外交を理解し、かつ日米交渉を進めるに当たって外務省内の意見を取りまとめるにふさわしい人物の次官を選出しなければならないとして、候補に天羽英二の名が挙がった。

豊田外相は、海軍大将で外務省出身者ではない。したがって、次官には外務省内で人望があって、指導力と事務的能力にたけている人物が必要であったのだ。そこで、豊田外相は、次官には枢軸外交を基本としつつ、柔軟性をもってそれを実行し得る人物として天羽英二に白羽の矢を立てたのである。

松岡洋石を中心とする外務省革新派は、豊田外相に「外務次官は枢軸外交を信じ、かつこれを実行しうる人に限る」と申し入れていた。

そこで豊田外相は八月十三日、思い切って前イタリア大使の英二に打診してみた。

「外務次官として日米交渉を助けてもらいたい」

大使経験者が、次官になるのは、外国では珍しいことではないが、日本では、永井大使が幣原外相の次官になったほかは先例がない。だが、英二は（そんなことは言っていられない）と思った。英二にとっては、豊田外相はあくまでも日米交渉をまとめる決意を持っているか、また、松岡人事を修正する意向があるかが問題であったのだ。英二はそのことを豊田外相に問い、豊田外相はその意向であると答えた。

英二はひとまず回答を保留し、四、五人の先輩と相談した。豊田外相からすでに相談を受けていた先輩もあったようで、いずれも英二に次官就任を勧めた。

そこで英二は引き受けることにした。

当時の日本を取り巻く環境は、風雲急を告げていた。欧州戦線ではドイツがモスクワを空爆、ソ連は、スターリンが中心になって大祖国戦争を戦い抜こうと国民に呼びかけ、対独戦に国力のすべてをかけて戦うことを誓うのであった。極東では、日・仏印共同防衛協定が締結され、日本の南方進出は明らかであるとの報道が世界を駆け巡った。

米国は、日本の東南アジア進出政策に対し、対日資金凍結で対抗してきた。それに呼応しオランダも日本資金凍結の決定を下した。

こうした国際情勢の中にあって、海軍出身の外相のもとにどんな次官が来るか、今後の日米交渉にも重大な影響があるとして世間は注目していた。一次官の任命であったが、新聞は、英二の就任を相当大々的に報じたのである。

そのためか、英二の手元に激励の手紙や電報が殺到し、千通を超えるほどであったという。世間は、英二の就任をもって日米交渉は継続されると理解し、平和への希望をつないだようである。

もともと、日米交渉は昭和十六年初め、第二次近衛内閣、松岡外相のもとに始められた。それが第三次近衛内閣、豊田外相に引き継がれたが、幾多の曲折を経て東條内閣、東郷外相の時に打ち切られ、戦争に突入して行ったという経緯を辿っている。

野村大使が、日米交渉の大任を背負って、ワシントンに到着したのは、昭和十六年二月十一日で、日本では紀元節の祝日に当たる。日本は、三国同盟を基調としてドイツと呼応し、南方に武力進出するのではないかと米国から懸念されていた時である。したがって、日本に対する米国の世論は芳しくない。政府も日本に対し警戒的態度をとっていた。

野村大使は、着任後ルーズベルト大統領、ハル国務長官と数回会見し、日本の平和的政策を説明している。欧州戦争が太平洋に及ぶことを防ぎ、世界の平和回復に貢献するために日米協調の必要を力説した。しかし、米国ではドイツは武力による世界征服の野望を抱き、日本は東亜新秩序の名のもとに、武力をもって東亜を制圧するものとみていたのである。

四月十六日、ハル長官は野村大使に日米交渉を行うに当たって次の四原則に従って進めてゆきたいとの提案を行った。それは、(1)すべての国の領土と主権尊重（2）他国への内政不干渉（3）通商上の機会均等を含む平等の原則（4）平和的手段によって変更される場合を除き

太平洋の現状維持である。この四原則に基づいて、さらに具体化した案が日米了解案として米国側から提案された。

だが、この了解案は、米国側と日本側の認識が違っていたのだ。米国側は、日本側も了解の上、その土台に立って交渉を進めるものと理解していたのだが、日本側は、松岡外相が日本を離れていたときでもあったので、日米交渉第一次米国提案ととらえていて、松岡外相の了解を得た上で進めようとしていたのである。

その概要は次のとおりである。

①日米両国は、共同の努力により太平洋の平和を樹立する②日本は、三国同盟の目的が欧州戦争の拡大を防止することにある。その軍事上の義務は、ドイツが現にこの戦争に参加しない国によって積極的に攻撃された場合のみに発動する。一方米国の欧州戦争に対する態度は、もっぱら自国の福祉と安全とを防衛する見地のみ決する③日中戦争で米国が次の条件を容認し、日本がこれを保証した時は、大統領は蔣介石に和平を勧告する。㈠中国の独立㈡日中間の協定による中国撤兵㈢中国領土の非併合㈣非賠償㈤中国の門戸開放方針の復活㈥蔣介石汪兆銘政権の合併㈦中国への日本の集団的移民の自制㈧満州国の承認④太平洋の平和維持のため、相互に他を脅威する海空軍力を配備せず⑤日米間の通商の確保日米通商航海条約の復活⑥日本の西太平洋地域における発展は武力に訴えず平和的手段によってのみ行われる保証のもとに米国は日本の石油、ゴム、錫、ニッケルなど資源獲得に努力する⑦太平洋の政治的安定のために両国は西太平洋における欧州諸国の進出を容認しないというものである。交渉の基礎としては確かに価値のある提案であった。近衛首相、陸海軍当局も乗り気になり、対案を作成しながら松岡外相の帰国を待った。

松岡外相が帰国し、対案を練ることになったが、松岡外相は留守の間に進められたこと自体に不満があり、しかも枢軸派の彼から見れば日本にとって厳しすぎると受け取ったため容易に決せず、五月十一日、やっと野村大使を通じて米国側に対案を手交した。

この間、欧州及び大西洋においては、英国の戦況が振るわずドイツ潜水艦が活躍。米国は、武器貸与法の成立によって対英援助を増大し、米国海軍当局は中立哨戒区域を二十哩に延長方針を明らかにして護送制空施設の必要を力説するなど米国の世論は一路参戦街道を邁進するかの様相を呈してきた。

それと同時に、米国においては、日々先鋭化する対欧政策と対日国交調整とが不可分の関係にあることが明らかになった。

このため、ワシントンでは、対日交渉を急速に妥協することを望む空気が濃厚になってきた。

これに対して、日本は東亜における地位を擁護確立するとともに、日米共通の目的である戦局不拡大の趣旨に副うことを期して①米国を欧州戦争に参入させない②全面和平実現のため、蔣政権に勧告して日中直接交渉に入らせることなどによって日米関係の改善を図ろうとしていた。

そこで、五月十一日、日本の第一次対案を提示した。それは①三国同盟については日本の軍事援助義務があること②日中戦争は米国側が、蔣政権に対し、和平勧告をすべきである③日米通商関係の回復④フィリッピンの独立保障などを含んでいた。この対案については、米国側は冷淡であった。米国提案以降一ヵ月近く返事を遅らせていたことは交渉の空気を冷却させ、その間、国際情勢も変化してきたため、その後の交渉に好ましからぬ影響を与える結果となってしまったのである。

野村大使は、引き続きルーズベルト大統領、ハル国務長官と会談を続けたが、米国側は、ヒトラーの世界征服政策と日本の東亜新秩序建設とを併せて考えるようになってきた。五月中旬ハル長官は、米国の通商自由主義を反復発表した。

一方、松岡外相は、五月三十一日、日独伊三国同盟が、わが国の外交の枢軸であるとの談話を発表している。これに対しルーズベルト大統領は、国家非常事態宣言をし、米州大陸防衛のためにも、援英強化の必要を強調して米国の孤立主義を排撃した。ドイツの潜水艦の勢いが活発となり、その戦況が報道されるにつれ、米国は、制海権保持を主張するようになった。

六月二十一日、米国は改めて一案を提出してきた。これは六月案と称するもので、米国は、最後まで譲ることのなかった提案であった。それは①米国の欧州参戦は自衛のためであり、日本は三国同盟条約を欧州に適用しない②中国問題については、和平の基本条件を前提として人統領が蔣介石政権に日本と交渉するようサジェストする③満州国に関する友誼的交渉④太平洋地域における日米両国の活動は、平和的手段及び国際通商上の無差別待遇の原則により行われ、必要資源を得られるよう協力する。ハル四原則に基づき日本の武力による南方進出を禁止する⑤新通商条約では必要物資の相互保障を行うという文言からなっていた。米国側は提案の理由として、日本政府は五月提案で、平和的意図を表明しているが依然枢軸同盟を維持し、駐権区においては無期限駐兵を続行するのみならず、経済的特権の放棄を認めず、平和政策を遂行する方針も確約していない。それ故日本政府の意図を明確にする必要を感じて、六月案を提出したとしている。

日本側においては、米国側の狙いは、第一に三国同盟、第二に中国問題（政治的には撤兵問題、経済的には通商無差別）第三は、太平洋全域にわたる一般的通商問題に関するもので、総括すれば東亜新秩序の思想を否認し、

ワシントン体制の集団保証機構へ引き付けようとするものである。四月十六日の提案よりも多くの点で後退しており、五月十一日の日本案とは根本的に相違するとみていた。

日本と米国が国運をかけてぎりぎりの交渉をしている間に、米国と独伊の関係はますます悪化した。六月十四日、米国政府は、在米の独伊資産を凍結、同十六日、在米ドイツ領事館、ドイツのニューヨーク情報図書館、トランスオーシャン通信社の撤収を要求した。さらに、二十日には、米船ロビン・ムーア号のドイツ潜水艦による撃沈が発表され、米独関係は日に日に悪化して行った。

そして、一九四一年六月二十二日、突如としてドイツ軍がソ連を攻撃、独ソ戦が起こった。米英はこれを歓迎、米国大統領は六月二十四日対ソ支援を声明したのである。チャーチルは、二十二日ドイツ軍のソ連侵入を非難、七月二十二日には、英ソ軍事協定が成立した。

独ソ戦は日本が三国同盟を廃棄する好機であったが、日本はこのチャンスを逸した。七月二日、御前会議が開催され、大東亜共栄圏建設を目指して、対中戦争の完遂、自存自衛の基礎を固めるため、南進を決定。仏印、およびタイ国に対し、既定計画を実行することになった。また、この目的のために、英米との戦争も辞さないことが決まったのである。同日松岡外相は、御前会議で、重要な国策の決定をみたと発表、これが各国の外交官をして日本はソ連を攻撃するかのような印象をもたらし、七月四日グルー在日米大使はソ連に対するわが国の意向を照会してきたのである。

(三) 豊田外相、天羽次官のコンビで日米交渉

こうした状況の中で、日本政府は米国の六月案の評議を続けてきたが、時あたかも南方では仏領インドシナ問題が表面化し、英領、オランダ領インドネシア、フィリッピンの日本に対する態度が悪化してきた。日本は、フランスのヴィシー政府との交渉を開始し、七月二十一日完全に意見の一致をみて南部仏印に軍事基地を設定し必要な部隊を平和裏に駐屯した。

ところがこの間に日本の政局は急変した。

松岡外相の言動は、日米交渉と次第に遠ざかって行ったのだ。六月二十三日、野村大使がハル長官から受け取ったオーラル・ステートメント（口頭書）を外相の命令で撤回させた出来事が起きた。米英側では外相の態度に好感を持っていなかった。近衛首相も「松岡外相の言動は、同一歩調を取ろうとする内閣にとって好ましくない」として内閣改造か総辞職を選ばなければならなくなり、総辞職という手段に出たのである。

米国の態度は硬化した。野村大使からの報告によれば、「米国の情勢は、日本に対して国交断絶の一歩手前まできている」ということであった。

七月二十三日、ウォルシュ国務長官代理は、野村大使に対して「日本がもし仏印に武力進駐することがあれば、交渉を続行する基礎は消滅するであろう」と述べた。日本軍南部仏印進駐結果、七月二十六日、米国政府は在米日本人資産の凍結を実行し英国、インド、蘭印はこれにならった。また、米国は日本に対する石油の供給を廃止し、日本にいる米国人の引き上げを勧告した。二十八日、日本もまたこれに対する報復措置に出た。そのため、日米は、事実上経済断交の状態となったのである。

さらに、七月三十日の日本軍の重慶爆撃に際し、同地に停泊中の米砲艦に爆弾が落下するなどの事件も起こって米国の世論を刺激した。交渉を打開する唯一の道は、仏印撤退にかかっていたのである。

日米交渉中に、二度も政変があり、三代の内閣が当たったことはいかに政局が複雑であり交渉が難航を極めたかを物語っている。英二が次官になったときは、日本の仏印進駐で米国は日本に対し報復措置に出て、事実上経済断交の状態にあり、交渉も途絶していたときである。

豊田外相は、松岡前外相とは親密な関係にあり、枢軸寄りの外交姿勢であったが、日米交渉で米国に対して強硬な態度で臨む松岡外相とは少しずつずれが出てきて、外相に就任してからは、日米交渉は何としてもまとめ上げたいとの強い考えを持つようになって行った。それだけ米国の大きさが重く肩にかかって、ベテランの外交官である英二にもその重さを分担してもらいたいと考えたのであろう。

その後、八月六日、豊田外相は、米国に対して、仏領インドシナ（ベトナム、ラオス、カンボジア）に関しては、米国側に安心感を与える提案をして、ようやく交渉再開にこぎつけることができた。

日本側は、交渉再開の機運に乗じ、近衛、ルーズベルト会談を提唱、米国のルーズベルト大統領もこれに賛同、アラスカのジュノーで会合することを打ち合わせたが、ハル米国務長官の反対によってついに実現しなかった。理由は、いきなり首脳会談をしても成果が上がらなければ意味がない。首脳会談の前に事務的な打ち合わせによってある程度の合意事項がまとまる可能性がなければ、双方の首脳にとってマイナスになる怖れもあるとのことであった。

英二が次官になって以来、ほとんど連日外務省から天羽次官、山元東亜局長、寺崎アメリカ局長、陸軍から武藤軍務局長、海軍から丘軍務局長、内閣から富田内閣書記官長が会合打ち合わせをしていた。

また、それとは別に首相、外相、蔵相、企画院総裁、参議総長、軍令部長からなる連絡会議があり、内閣書記官長、陸海両軍総務部長がその幹事役をやっていた。こ

の連絡会議には外務省から天羽外務次官、東亜、アメリカ両局長も出席している。英二は、次官会議でも時々日米交渉について説明した。陸海軍の両次官は、独伊駐在武官からの報告を披露したが、その情報の多くが、見方が偏っていた。英二は、外務省の情報にもとづいて軍事情報をこの連絡会議に提示した。

米国は、ソ連の対独戦を支援するため、ウラジオストックに軍需品を運びこんでいる。それに対する日本側の抗議に対し、強い姿勢で反発し、すでに連合国側に立って参戦しているようであった。

だが、日本側では、日米交渉に反対する者は少なかった。外務省内部では、枢軸を推進しようとする一派が反対するだけであった。他に反対勢力は、衆議院の二十日会・東方会と各種の右翼団体である。そのいずれもが「対米軟弱態度」であるとして、日米交渉に反対、英二をしばしば攻撃したが、一般国民は柔軟な交渉を望んでいた。

その頃、オットー在東京ドイツ大使及びコルテージ在東京イタリア大使は頻繁に英二を訪ねて「日米交渉は三国同盟違反」だとか「日米交渉の内容を聞かせてほしい」と言ってきた。英二は体よくかわし、日米交渉の妥結に全力を尽くすのであった。

英二が引き継いだ書類の中には、松岡前外相の意図した外務省の重鎮クラスの配置転換リストがあった。それには来栖、重光、東郷の各大使が含まれており、枢軸派に属さない人物は要職から外される予定になっていたのである。

当時ワシントンでは、野村大使が大統領や国務長官、次官を相手に日米交渉を実行していたが、豊田外相になって東京でも、ワシントンと並行して、グルー米大使と会談を始めた。交渉の難題は㈠自衛権㈡中国における日本軍撤退問題㈢通商の無差別原則適用の問題である。自衛権の問題は米国が自衛権にもとづいて欧州戦争に参加する場合、日本は三国同盟条約によって参戦するかどうかという問題である。

この頃の米国の世論の動向は、日本の侵略行動や日本国内の挑発的な言論に対し、次第に硬化して行った。また、米国のジャーナリズムは、日本の南進政策を刺激的に報道していた。

それだけではない。日本はソ連に対しても攻撃を仕掛けるのではないかとする風説を流すメディアもあったほどである。

ハル長官は九月四日、野村大使に、米国は日本との会談に当たり、英、中、蘭の第三国を裏切るような印象を与えることを欲しないとし、これら諸国の納得する対日交渉案を用意する姿勢を見せてきた。

一方、日本は、一般国民は、交渉に期待する声が高かったが、日本の軍部内では、最初からこの交渉に反対する者が少なくなかった。外務省の中にも、交渉に好意を持たない者もいる。また、右翼団体の中には、交渉反対の宣伝をする者も多かった。

豊田外相は軍部内の交渉反対者を官邸に呼んで説得に当たった。英二も外務省内において交渉に疑問を持つ者を次官官邸に呼んで論議することも少なくなかった。内閣閣僚も外国を刺激することのないよう世論の指導については注意した。日本国内の新聞、雑誌、言論なども同様に日米交渉の支障になるような報道には、気を使っていたようである。

この頃の欧州の戦局を見るとドイツはソ連に侵入後破竹の勢いでソ連の内奥に迫り、モスクワも十月中には陥落するだろうとの観測が流れた。また、陸軍次官は、駐在武官の電報にもとづき楽天的意見を述べ、イタリアから帰国した英二は、現地を見てきた経験から、楽観的見方を否定するよう説いて回った。

九月六日に御前会議が開かれた。その席上「十月初めまでに、交渉成立の目途がない場合、開戦の準備をするという結論が出された。この結果、軍の統帥部から日米交渉促進の激しい要求があった。早速外務省は、米国側の六月案を基礎として、それに日本側の主張を盛り込んで九月二十五日、新提案を提出したが、米国側は、満足な反応を示さず、依然六月案に固執したのである。

そこで、豊田外相は、グルー在日米大使とも折衝を始めたが、①三国同盟条約問題（自衛権確保の問題）②中国問題（日本の駐兵、撤兵）③通商問題（中国での貿易の無差別原則問題）の課題が解決しなかった。

大西洋方面では、米独の関係はますます悪化し、九月十五日、ノックス米海軍長官は、米国自衛水域に出没する枢軸国艦撃沈命令を発表し、次いで米国政府の商船護送制を発表した。

一方日本においても、日米交渉に解決の目途が立たないことにいらついた国民の対米感情が次第に悪化。議会、新聞等の政府攻撃、日米交渉反対の声が上がって、近衛首相が月末から数日間鎌倉山の別荘に引きこもり、政変説も喧伝されるほどになってしまった。

そんな時の十月二日、ハル長官は、野村大使に長文のオーラル・ステートメントを手渡した。それによれば、米国政府はかねて国際関係の基礎として、(1)一切の国家の領土保全および主権の尊重(2)他国の内政不干渉(3)通商上の機会均等(4)平和的手段による外太平洋における現状の不変更の四原則を堅持してきた。日本政府は、一旦承諾したが最近これを狭めてきた。日本の平和的意図には疑問を抱かしめる点がある。また、三国同盟問題、中国問題、通商無差別問題等に関し、従来の主張を固執して少しも歩み寄りを示さず、両国の主張にははなはだしい相違があることが明らかにされた。

このオーラル・ステートメントが、野村大使から外務省に届く前に、ワシントンの陸海軍武官から、陸海軍省に至急電で「オーラル・ステートメント」の内容と題して、すこぶる悲観的な電報が届けられていた。その後外務省に近衛首相、豊田外相、天羽次官に宛てた野村大使からの電報が届いたという経緯がある。

外務省では次官官邸に豊田外相、天羽次官、山本、寺崎局長が集まり、協議した結果、米側の回答は、なにも悲観するには及ばず、交渉の余地があるとし、引き続き交渉を続ける方針を固めたのである。

十月四日、外務省内で「オーラル・ステートメント」に対する回答案を協議し、併せて首相、外務大臣、陸軍大臣、統帥部長間で連絡打ち合わせをしたが確たる方針を打ち出すことはできなかった。翌五日、近衛首相、東条陸相が会見したはずだが、一向にその結果が明らかにされない。六日も外務省は、対策を準備して、陸海軍に対して打ち合わせを申し込んだが、軍の態度は強硬であった。

十月九日も連絡会議が開かれたが、交渉の打開を見出すことはできなかった。

十月十二日、荻窪会談が行われ、近衛首相、豊田外相、東条陸相、及川海相、鈴木企画院総裁などが集まって、終日協議した。問題は日米交渉の目途はあるのかどうかであったが、外相は「目途はある」陸相は「ない」と意見が対立した。海相は意見を述べずに、「総理に一任する」と答えた。陸海軍とも好んで戦う自信はないが軍内部の意向を憚って、平和論を述べることができない。

表面上強硬を装っているだけのように、英二には感じられた。

(四) 日米交渉の妥結に必要な要件

そうこうするうちに、「交渉の前途に対する外相の意見を提出していただきたい」という意見が出た。外務大臣は、その意見を受けて十月十三日、首相に対し、「日米交渉に関する外務大臣の所信」と「現下の国際情勢に対する日本の対外方針」という二つの文書を提出した。

豊田外務大臣の所信の内容は次のとおりである。

米国は日本政府の出した九月六日提案も二十五日提案も関心を示さず、これら内容では交渉を妥結する公算はない。日本は中国、仏印の駐在問題を中心とする諸政策に実質的な変更を加えることなく、また、日中戦争の成果に動揺を与えないで、外交上の成功を得るよう全力を挙げて努力する。外務大臣は日本の根幹である東亜新秩序の建設は、あくまで平和的手段すなわち日米国交の調整を端緒として、まず日中戦争を解決し、進んで東亜共栄圏を確立し、もって太平洋地域の安定を図ることこそ最も適切有効の方途にして、現下のわが国内外の情勢を鑑みるとき武力的解決はあくまでも自衛的必要に迫られた場合のみ発動を考慮されるものであると確信する。

㈠既定の日本の方策をもってしては日米交渉成立の見込みはない。米国が最も疑念と不安を感ずるのは、日本政府内の統制力の有無及びその意図する対外政策を果たして平和的手段により遂行するかどうかである。日本が具体的に提案中の中国及び仏印の撤兵や駐兵問題を重視するとともに、日本政府がこれら問題を明確、鮮明にすることを要望してきている。これらの点に日本側の方針が少なくとも米側の主張する四原則を考慮し、実際に措置されたものであると約諾と確信を得るまでは、交渉を成立する意図はないものと認められる。したがってこうした疑念を一層明確にし、しかも米側要請に歩み寄る案を明示するのでなければ、交渉を継続する成算はない。

㈡駐兵問題及びこれを中心とする諸政策並びにわが国の内外動向につき既述の具体案により対処し、その実行が確守せられるにおいては交渉を継続し妥協に至らしむ成算あり。

①仏印に対しては、増兵を停止して、その主権を尊重し、かつ共同防衛を必要とする事態の消滅とともに速やかに撤退する。撤兵時期は、日中戦争終結のときより遅れることのないようにする②中国に派遣された日本軍は、和平成立後は、直ちに撤兵を開始し、遅くとも二年以内に撤兵が完了する。日中間和平成立当時に協議決定された取り決めにもとづき、日本国軍隊は平和回復後の治安維持、中国の復興に協力するため、北支蒙彊の一部また海南島に平和回復後、五年間駐留する。

㈢国策の遂行はあくまで平和的手段によるべきで、武力的解決は日本内外の情勢にかんがみ不可である。

国策遂行のため、この際わが方より進んで武力的手段に訴えることは、日本外交の根本義にもとることは勿論、日本の国内事情、日中戦争の現状、欧州戦争の見通しに鑑み、結局目的達成の近道ではない。むしろ今日まで成し遂げた満州、中国、仏印に対する施策を基礎として平和的手段、すなわち、まず日米国交の調整に邁進することが共栄圏建設上絶対必要にして、武力的解決は、あくまで自衛行動の範囲により律せられることは、日本外交根本義であり、かつわれら本来の使命なりと確信する。

さらに豊田外務大臣は「現下の国際情勢に処する日本の対外方針」と称して外交方針を明らかにし、国論を戦争回避の方向に導こうとした。

㈠日中戦争の完遂と大東亜共栄圏の確定とは、日本国不動の国是にして日本は自主的に決定し自主的にこの実現を企画すべくあえて列国の容喙を許さず。しかしながら現下の国際関係の複雑な国際情勢を度外視してこれの完成を図っても、とうてい成功は期しがたい。欧州戦争、及びこれに伴う国際情勢の推移とは離しがたい関係を有する。

㈠今次の戦争は、英仏と独伊の間に発し、次いでバルカン諸国に及びソ連がまた戦に加わった。米国は、宣戦布告はしていないが、徹頭徹尾英国を支援して、事実上の交戦権を発動している。また、日独伊三国は、三国条約締結当時はソ連をその陣営に引き入れようとしたが、今やソ連は英米の陣営に走って、英米ソ蒋提携の態勢が成り、南方においては、英米蘭蒋の包囲網がますます強化されている。

㈡現下、戦争の焦点は、主として独ソ戦であり、ドイツもしソ連戦に失敗すれば、国民の士気及び被占領地域に与える影響、はたまた英独戦に対する打撃まで致命的なものになる。ドイツもし冬前にモスクワ攻略に成功すれば、おそらくソ連との単独講和を提議し、もし和議が成立しなければ、武力をもってこれを抑えるか、あるいは南ロシアから近東に出て、ドイツの東部方面を封じて、西方の英国との決戦に向かうであろう。しかし、英国の現下の状態を見れば、英国は、米国の後援を待って、さらなる強硬な抵抗を続け、おそらくは長期戦となろう。長期戦は、概して独伊には不利となり、戦争の前途は逆転することになるだろう。

㈢日中戦争の完遂と大東亜共栄圏の確立とは互いに関連するが、日中戦争はすでに四年を過ぎ、いまだに蒋政権崩壊の兆しは見えない。重慶政府の内部は動揺しているが、英米に依存して抗争を続けている。蒋政権に対しては、日本は、武力闘争を続けるが、外交によって英米の援助を断つべきか今や岐路に立っている。大東亜共栄圏の確立についても、英米蘭は、対日経済断交と包囲網によりわが国に困難をもたらしている。日本はこれに対して武力発動に政策を強行すべきかどうか慎重に利害得失を考えるべきである。

日本が南方に軍を発動すれば、ただちに英米蘭の包囲網と衝突し、ソ連及び蒋政権はこれに呼応し、日本は四正面作戦を取らざるを得なくなる。たとえ、三国同盟があっても、独伊が日本に援助することは、現状からみて無理であろう。また、たとえソ連政府が崩壊すると想定しても独伊陸軍が極東露領にまで進出するのは事実上困難であろう。また、独伊海軍は日本海軍を援助するような余力を持っていない。独伊の援助は、精神的なものとならざるを得ないのである。

これに反し米国は、ソ連を援助し、東部シベリアを利用して日本に対し攻撃することができ、中国においては、蒋政権は気勢を加えて抗戦を続けるであろう。

日本がもし米国と戦えば、米国は大西洋方面の英国に対する援助を薄くしてもっぱら太平洋方面に全力を注ぎ、その結果ドイツの対英攻撃は有利となるかもしれないが、ドイツが英国を征服するのは容易ではない。米国は、日本に対して決戦を急がず、対日包囲陣形を固めて、長期作戦に出るであろう。もしその間に欧州での戦争が終結してしまうか、あるいは英独が講和を結んでしまえば日本は孤立して戦わなければならない。日本は南方に進出しても北方に進んでも武力解決は、最悪の事態を招くことが予想される。

㈤日本は、今や米英の経済封鎖を受けて資源獲得の道は絶え、経済の根源が枯渇しようとしている。座して死を待つより乾坤一擲戦って死地に活路を求めるという議論があるが、元来資源が乏しいからといって、北方に出ても資源は確保することができず、南方には資源があるが、武力もってすれば、資源開発の設備は破棄され、これが回復には相当の時間と努力を必要とする。さらに開発及び運輸の関係等を考慮すれば、資源の利用には多大な困難がある。いわんや資源の開発なしで持久戦に入れば国力は消耗する。このような状態で欧州の戦争も、止んで平和が樹立せられたときは、日本は疲労困憊の結果、国際関係決定に対して発言の威力を失うことになる。日本は原料の輸入なくして、ただ貯蔵したものを消費するといった状態にあるが、この際日本としては、国力を保存して後日有事の際には有効にこれを使う態勢にすべきである。

㈥以上の情勢にあって日本がこの際進んで武力進出を図って、体力を消耗し、また、国家の命運を欧州戦争の勝敗に賭けるのはきわめて危険である。日本はよろしく隠忍自重しまず東亜において真に優越な実力を涵養する必要がある。この際、日米交渉承認を決定して満州の地位を強め、日中戦争を解決して中国における日本の地歩を固め、さらには仏印問題を解決して、他日南方政策実行の基礎を確保することを賢策とする。

こうした豊田外務大臣の方針案も陸海軍強硬派の意見を突き崩すことができなかった。十月十四日の閣議においても意見の一致を見なかった。時を置かず鈴木企画院総裁は、東條陸相の代理として首相を訪れ、軍は駐兵撤兵問題については、譲歩できないと申し入れた。十五日夜十時から二時間近く外相に代わって英二は、東條陸相官邸を訪れ、説得に当たったが陸相は「駐兵問題は軍の心臓部だ」として譲歩の姿勢を示さなかった。この最後の会見を外相の私邸で報告したのは、まさに夜半であった。翌十六日、近衛首相は辞職した。英二も豊田外相と共に辞職した。わずか三ヵ月の外務大臣の椅子であった。

十月十九日東條内閣成立と共に日本は、戦争への道に舵を切って勝ち目のない戦に突き進んで行くことになるのである。

（つづく）

吾輩は紙魚ロボである　その一一

永畑俊三（永田俊一）

一、三つの出口（七月中旬～九月中旬）

「ウクライナ、コロナ、金融政策（経済）」夫々が前後して動き出し次第に絡み合いを広く大きくし、歴史的複合世界危機と化し、世界的に出口を求め「平和回復、全体免疫、経済安定」の新常態に到るべく世界が努め、日々向き合い一日も早くその実現を願い祈るところを、前回紹介したご主人がつけたコラムの表題にならって「三つの出口」として、引き続き記して行こうと思う。

（一）ウクライナ

ウクライナ問題はロシアの侵攻開始から半年、主要戦線は首都キエフ周辺から七月以降ロシアが制圧を目指す東部ドネツク州やウクライナが奪還を目指す南部ザポロジェ、ヘルソン州等に移り、八月入り後ロシア軍施設の爆発などウクライナ側の破壊工作とみられる南部クリミア半島に火の手が上った。ゼレンスキー大統領は「ロシアの侵略への戦いに勝利し、クリミアを占領から解放することが必要だ」と強調、両国の相容れぬ停戦条件確保への執着で戦闘は膠着・消耗戦の様相を呈す。九月入り後クリミアへの攻撃のみならず東部ハリコフ州を奪還する等ウクライナの反転攻勢・失地回復が進んだが、実質ロシアと欧米の戦いは未だ幕引きの糸口を見出せず長期化が予想されている。この間台湾有事論で米中の鍔迫り合い等世界の地政学的リスクの顕在化や日本の軍備強化のような安全保障議論を誘発、危機感を高めており、正しく等身大の議論が冷静に行われることが期待される。以下少しく時系列的に主な出来事を追って見よう

七月一〇日付紙でゼレンスキー大統領がヘルソン州など南部沿岸の奪還を指示したと報じられ、ウクライナ軍は、一三日までにクリミア半島に近い戦略的要衝同州バカホフカのロシア軍弾薬庫を破壊したと発表、精度の高さから米国供与の高機動ロケット砲システム「ハイマース」と見られている。一方ロシア軍は、一二日南部ミコライウ州の施設攻撃でウクライナ兵排除と発表、また東部ドネツク州制圧を目指して攻勢を強めており、東部と南部での戦闘が激化している。

一三日、トルコのイスタンブールでウクライナ・ロシア・国連・トルコによるウクライナ穀物輸出に関する四者協議が開催された。トルコのアカル国防相によれば、黒海出入り口のイスタンブールに共同管理センターを設け、四者で貨物船出入り等を監視することで基本合意、世界的な穀物価格上昇や供給不足緩和につなげたいとした。来週にも再度会合を開き詳細を詰めたうえで合意文書への署名を目指すとしている。

両国間のやりとりでは、一六日ウクライナ国防省幹部のクリミア攻撃の可能性発言に対し、ロシアのメドベージェフ前大統領が一七日「そのようなことが起きれば、そこにいる（ウクライナ側の）彼等全てに終末の日が訪れる。（報復は）極めて速く、厳しく避けがたいであろう」と述べた終末発言が注目された。同日、ウクライナでは大統領が、ロシア軍の占領下で多数の検察、情報機関であるSBU（保安局）の職員らがロシアに協力している疑いありと、盟友である保安局トップのバカノウ保安局長とベネディクトワ検事総長を解任した。

二四日で侵攻五か月、各国は追加支援を繰り返してきたが、独キール世界経済研究所によれば、七月一日までに各国表明の支援総額は八〇七億ユーロ（約一一兆円）、四五％が軍事、残りが金融や人道支援で、国別では米国が半分を占める。一方ロシアでは、プーチン大統領が資源収入を原資に国民の不満を抑える最低賃金の一割引き上げや年金の増額など相次いでばら撒き策を実施、独立系調査機関レバダセンターの支持率調査も侵攻後八割台を維持している。また、天然ガスの供給停止をちらつかせる等豊富な資源で、対外的には制裁に対する反攻を行っており、ロシア軍は足踏み状態にあるも戦闘の終結は見えず各国は記録的な物価高の対策に追われ、ウクライナへの「支援疲れ」も顕在化している。

七月末にかけても、ロシア軍が二八、九日と東部・南部の各地に攻撃を加え、非人道的兵器クラスター爆弾の使用が認められており、前線でロシア民間軍事会社ワグネルが正規軍の不足を補って使われていることも指摘されている。また東部親ロシア派支配地域でロシア側に拘束されているウクライナ兵五〇人超が死亡したとされる捕虜収容所への二九日の攻撃爆発を巡り、ロシア側がハイマースを使ったウクライナの攻撃とし、ウクライナ側はロシア側の自作自演と主張し国連に調査を求めている。

二八日ウクライナ軍は、南部ヘルソン州でロシア軍の支配下にあった三つの村を「解放した」とし、「軍はロシア占領軍からのヘルソン州の解放を段階的に進めている」と述べた。一方二一日ロシアは南部ミコライウで過去五か月で最大規模の攻撃を行い、最初の穀物輸送船の出航予想の中、主要港オデッサを含む周辺地域へのロシア側からの攻撃はやんでいない。

八月入り一日オデッサ港から最初の貨物船が出航、トウモロコシ約二万六千トンを積み中東レバノンに向かう、とトルコ国防相が発表、四者それぞれにこれを一歩として評価した。同日夜貨物船ラゾニ号はイスタンブール沖に到着、三日、四者共同による検査を受ける。この間も南部での攻防は続いている。

同日、ペロシ米下院議長が、続いた米中の牽制し合いの果て、台北に到着。下院議長としては二五年振りの訪台、蔡総統と会談に臨み「揺るがぬ関与、米台は団結」を表明した。四日中国人民解放軍の台湾周辺六ケ所の空・海域で実施する軍事演習が七日迄四日間の予定で始まり、日本の排他的経済水域（ＥＥＺ）と重なり、日本の指摘に中国は「日本の言うＥＥＺの見解を受け入れない」と反論した。その中五日ペロシ議長は訪日、首相と面会し、首相は演習を「日本の安全保障や国民の安全に関わる重大な問題だ」と伝達、台湾海峡の平和と安定の維持へ引き続き日米で協力すると確認した。同日中国外務省は、中米両軍幹部の電話協議停止、海上軍事安全協議メカニズム会議の取り消しなど八項目の米国への対抗措置を発表した。四日カンボジアでのアセアン外相会議前の日中外相会談は中止となり、五日会議では米中の非難応酬がみられた。

ウクライナでは五日、南部ザポロジェ原子力発電所が砲撃を受け、ウクライナ原子力企業エネルゴアトムは六日「安全な操業に重大な危険が出ている」と危惧を表明した。一方ウクライナ軍は南部で攻勢を強めているが、九日クリミア半島の軍用空港で大規模な爆発が起き、ウクライナ側の抵抗運動が関わった可能性が報じられた。一〇日ウクライナ軍はヘルソン州の主要河川ドニエプル川にかかるカホフカ橋をロシア軍の補給路を断つ狙いで攻撃したと発表、「ヘルソン州を年末までに奪還する」考えを示した。一三日には上流の主要三橋の一つも攻撃、主要補給ルートは切断状況になった。一方でザポロジェ原発も一一日再攻撃を受けゼレンスキー大統領が「ロシアの原発産業への制裁」を訴えたが、欧州は沈黙の儘であった。引き続き両軍とも相手の攻撃と主張、一五日になってグテーレス国連総長がロシア国防相と電話協議し、安全稼働の条件に付いて仲裁に乗り出し、ＩＡＥＡによる原発の現地査察支援する考えも示した。またクリミア半島では一六日ロシア軍の弾薬庫で大規模爆発が発生、

戦闘最前線が南部になる中、長期戦に備えウクライナ議会は一五日、成人男性の出国を禁止する戒厳令と総動員令を一一月二一日まで九〇日間延長すると決議した。

一八日国連事務総長はリビウで関係者と会談、ザポロジェ原発の非武装化を訴えたがロシアは拒否、ゼレンスキー大統領、エルドアントルコ大統領と会談後「純粋な民間インフラとして再建する必要がある」とし、一九日ロシアはＩＡＥＡ査察について「九月上旬に実現する可能性が高い」とウィーン国際機関代表部常駐代表が述べた。グテーレス事務総長はこの訪問の際、半月で二一隻計五六万トン（トウモロコシが八割）になるが、侵攻前の同期間二割程度でまだアフリカなどでの食糧危機の緩和は見通せない黒海穀物輸出について懸念を表明した。

二四日はウクライナ独立記念日でロシア侵攻半年、ロシアの攻撃が強まり得るとし、大統領が警戒を呼び掛け、ロシア国境近くハリコフ州では二三日午後七時から二五日午前七時まで外出禁止になるなどの対応が取られた。

二三日は国連安保理緊急会合が開かれ、ウクライナ原発からのロシア撤兵を各国が促した。因みに侵攻半年でウクライナからの避難民は国内外で延べ一七〇〇万人で全人口の三人に一人超、死者は民間人五六〇〇人、兵九〇〇〇人、ＧＤＰは三五％減の見通しである。

核軍縮、核不拡散、原子力平和利用を三本柱とする核不拡散条約（ＮＰＴ）の再検討会議の二六日夜開かれた最後の全体会合は、三日間の非公開協議と二度の修正を経てロシアの意向を反映させ、ザポロジェ原発についても表現を削ったり改めたりした決議文が用意された。しかしロシアの最終的には本国の指示とした問答無用の反対で、全体の最終文書は昨年に続き二回連続で採択に到らず、ＮＰＴ体制の信頼が揺らぎ「核兵器無き世界」への道筋に影を落とす結果となった。

ウクライナ軍の南部ヘルソン州奪還を目指す攻撃が強まっているが、二九日大統領府長官顧問は、同州の複数の地区で「ロシアの防衛線を突破し奥へ攻め込んだ」と表明、ロシア国防相は三方面からのウクライナ軍攻撃を認めたが、反撃して失敗させたとタス通信に応えた。同日ＩＡＥＡのグロッシ事務局長と専門家による調査団がザポロジェ原発調査の為キエフ入りし、米紙で三一日に現地調査が始まると報じたが、なお流動的とされる。

二五日プーチン大統領が来年一月ロシア軍の定数を現在の約一九〇万人から約二〇四万人に増やす大統領令に署名した。兵力の現在枠は一〇一万人で増加分は全て兵力に投下、ウクライナ侵攻当初一五万人を投入したと見られ、名目上はそれに近い兵力を増員することになる。一方三〇日ＥＵ国防相会議では侵攻の長期化に対応して支援の幅を武器供与から一段と拡大、ウクライナ軍の為のハイレベルな訓練の提供などを議論することとした。同日、旧ソ連最後の最高指導者ゴルバチョフ氏がモスク

ワ市内の入院先で死去した（享年九一歳）。その民主化路線は、保守派等との権力闘争で挫折しソ連崩壊、その混乱は結果今の強権的なプーチン体制を生んだ。続けていれば、と世界から惜しまれる人のロシア侵攻時の逝去は胸の痛む懐かしさで迎えられたように思われる。

九月四日ウクライナのシュミハリ首相はベルリンで独大統領・首相らと会談、今週のＥＵからの計五〇億ユーロの支援を伝えられ、会談後「ドイツも積極的に協力してくれた」と述べ、ショルツ独首相は「軍事面だけでなく、政治、財政、人道面で支援の手を緩めないことを強調した」と述べた。五日ウクライナとＥＵの定例理事会が開かれ支援が決定され、シュミハリ首相は年内にもＥＵ加盟交渉の準備を整える方針を表明した。同日、原発と主要な外部電源との接続が途絶し予備の送電網に頼る危うい状態のまま周辺地域で砲撃が続くザポリジェ原発に滞在中（一日現地入り）のＩＡＥＡ職員四人が職務を終え原発を離れ、残る二人の専門家が常駐する見込みとなった。予備送電網への砲撃で六つの内唯一稼働中の六号機が電力網から切り離されたが、ウクライナエネルギー相は周辺で続く戦闘のため修理が出来ないと強調、周辺を非武装地帯にすること等が唯一の安全確保策だと訴えた。同日国連安保理ではグロッシＩＡＥＡ事務局長から同原発の調査報告を受けた。同氏は戦闘行為が続く状況を憂慮「非常に破滅的なことが起きかねない」と述べ、グテーレス総長は「非武装地帯の合意を確保する必要がある」と述べた（グロッシ事務局長はその後九日声明を発表、状況不安定と、周辺を安全地帯にと訴えた）。

七日、先月のクリミアロシア軍航空基地の爆発はウクライナ軍によることが公式に認められ、更に東部ハリコフ州の複数の集落を奪還したことが大統領のビデオ演説で伝えられた。一〇日、ウクライナ軍はロシア軍の占領地への攻撃を進め、同軍が補給基地とする町を奪還した。これを受けてロシア国防省は同日夕、これまでロシア軍が同州で東部制圧を狙うための重要拠点としてきた都市イジューム周辺から部隊を撤退させると発表した。これにより、ウクライナ軍の東部での反転攻勢が強まるものとみられている。ウクライナは六日前後から同地への奇襲攻撃を開始、ゼレンスキー大統領は九日「ロシア軍支配の三〇以上の集落を奪還した」と明らかにしていた。一〇日のクビャンスク、一一日にイジュームを奪還、ウクライナ軍はこの奪還作戦で三千平方キロとロシア軍が四月以降に新たに占領したハリコフ州の制圧した面積を五日間で取り返した、と表明した。ハリコフ州ではイジューム中心に虐殺された市民五百人もの遺体が発見され国連が死因調査に乗り出した。

一三日、ウクライナ大統領府は、自国の安全保障のため各国に締結を求める国際条約の枠組み素案を提示した。三月ロシアとの停戦交渉で一旦は受け入れた将来の軍事

的中立化提案を撤回、ＮＡＴＯへの加盟も視野に入れる等、反転攻勢に出ている戦況を背景に強気の方針に改めた。一四日ゼレンスキー大統領はイジュームを訪れ兵士を激励、「ハリコフ州はほぼ解放」と宣言した。

一五日、ＩＥＡＥ理事会はザポロジェ原発占領のロシアに対し、退去を求める決議を採択した。同日上海協力機関首脳会議が始まったウズベキスタンのサマルカンドで侵攻後初めての中ロ首脳会談が行われた。結束強調するも、プーチン大統領は「ウクライナ危機に関する中国の懸念を理解」と述べ、習首席は貿易では協力しつつも軍事支援には一貫して慎重で共同声明は出されなかった。同日、モディ印度首相はプーチン大統領に「今は戦争の時ではない」と述べた。

一六日、ロシア軍の兵器損失急拡大の分析が出る中、プーチン大統領は、ウクライナ侵攻について「計画変更はなく、東部二州制圧の目標堅持」を表明。一九日、ロシア軍は南部ミコライウ州の南ウクライナ原発を攻撃原子炉に損傷なきも水力発電所と送電線が損傷した。

二〇日、米大統領補佐官は、親ロシア派が計画しているロシア編入是非を問う住民投票について「主権と領土の一体性という原則への冒瀆」と述べた。同日、ルガンスク、ドネツク両人民共和国及び南に隣接するザポロジェ、ヘルソン両州のロシア軍支配地域の現地親ロ派代表幹部が二三～二七日住民投票実施を公表していた。欧州・カナダ・日英も「国連憲章・国際法に違反」と一斉に非難した。同時に二〇一四年同様に併合された「クリミアの再現」への懸念も示している。

二一日、プーチン大統領は国民向けビデオ演説で、戦闘継続の為に「部分的な動員令」に署名、「軍務経験のある予備兵の市民を招集する（ショイグ国防相によれば約三〇万人）」ことを明らかにした。

（二）コロナ

コロナは二年半を越えた。隔離と行動変容、ワクチン、防疫と治療といった対応策の組み合わせ方の差で感染者増大のペースに違いはあるものの、世界各国が感染とワクチンでおおよそ全体免疫に近づき、油断は禁物だがウイズコロナに向かっている。中国の隔離行動変容徹底と欧米のワクチン優先経済柔軟の中間を行く日本では、ウイルスの感染力強化と軽症化変容の中で、波を重ねるごとに感染者数の桁が上がり今や感染者数は世界で一番を数週間続け、桁違いだった感染者累計も気付けば世界の人口順位に達した（人口順位より上振れが目立つのは米・英・仏・伊・韓国等、下振れは何と言っても中国）。

これまで医療受容度を壁に規制措置を講じてきた日本は、規制緩和とオミクロン株変容（感染力強化、症状変容）の中ケタ違いの新規感染者増加で、検査・診療・入院全てに亘って受容能力破綻を起こし死者も増え、当初

からの国家的医療体制自体の不備・不作為をいよいよ全面的にあからさまにしている。七月末から八月半ば過ぎまで毎週新規感染者数の前週比増大を続け、九月下旬に入って規模は次第に減少しているが、次の八波への間に医療体制の課題解消に不退転の努力を傾注し万全の体制を作れるかが、インフルエンザ対応と同等のウイズコロナで経済活動を先行する米欧に追いつく前提になろう。

以下時系列的に少しく推移を追ってみる。

七月入り後七波拡大への危機感が高まる中、世界の新規感染者数（七日移動平均）は一〇日時点で約八九万五千人となり、四月中旬以来約三か月ぶりの水準に増えた。各国で感染力が高いとされる「ＢＡ４」「ＢＡ５」などオミクロン型の派生型が流行しているためで、欧州などの感染増が顕著。だが重症化率は比較的低く抑えられており、同時点では規制強化などの動きはない。ＥＵの専門機関は一一日、高齢者などリスクが高い人にワクチン接種を受けるよう推奨した。

一四日日本政府の新型コロナウイルス対策分科会は第七波で必要な対策を提言、ＢＡ５流行で高齢者や基礎疾患がある人の入院や死亡が増える恐れがあると指摘、実効性がある対策を直ちに進めるべきとして、ワクチン・検査・換気・医療提供体制・個人の感染対策の五つを示した。換気は「夏で冷房を使う為換気が悪くなっている」として、エアロゾルを屋内に滞留させないようエアコンの風を一方向に特定しないことや外気を取入れ外に廃棄する空気の流れを作ることを求めた。なお、政府が検討していた「全国旅行支援は」は分科会に提示されなかった。個人の感染対策は概ねこれまで通りのものである。同日首相が会見、対策を説明する中、六〇歳以上への四回目接種率は前回接種から五か月以上過ぎた人の三割、また三回目の接種率は約六二％にとどまることを指摘の上、ワクチンの四回目接種の対象を医療従事者や高齢者施設職員に拡大する方針を示した。

加えて診療や検査が出来る医療機関の拡充や自宅療養支援の充実、高齢者施設への医療支援が実質的に稼働するかが鍵となる。「日本は自然感染が人口の一割しかおらず、ワクチンの効果も減衰している。第六波を越えることは間違いない」と尾身分科会長は強い危機感を訴え、濱田東京医大感染症学特任教授は、海外のデータも踏まえ、ワクチンの重症化予防の効果ははっきり感じられるが、「発症予防の意味では効果の落ち方がかなり早い」と言う。欧米では従来型に加えてオミクロン株にも対応したワクチン導入についても議論が進んでいる。なお六月末で高齢者施設を初調査したが、実施対象となった高齢者施設で接種を終えたのは二一％で、七月に対象となる施設の内月内に終える予定の施設も五六％だった。

一五日、新型コロナウイルスの国内感染者数は累計一

千万人を越えた。うち二〇二〇年は三回波があったが二三万人、翌二一年には二回の波で約一五〇万人、今年に入ってからは、六派・七波とこれまで八百万人以上となっている。一日当たりの全国の新規感染者数は、今年二月五日の一〇四一六三人の記録を越え、一一〇六七五人が一六日確認された。最多は東京都の一八九一九で一週間平均で前週の二・〇九倍、急増の原因は「ＢＡ５」の感染力の強さや三回目ワクチン接種効果の低下などと見られる。現時点での重症者数は一一四人、最多昨年九月第五波での二二二三人の五％にとどまり、死者も二〇人で第六波最多となった三二七人を大きく下回る。尾身会長は一一日「まん延防止等重点措置のような行動制限は現時点で必要なく、検査の充実やワクチン接種の推進、換気の徹底などで乗り越えられる」と述べ、一五日政府の対策本部も「新たな行動制限は行わず社会経済活動を出来る限り維持する」とする基本的対処方針を決定した。

しかし一六日からの三連休も重なって感染者数の更なる増加が予想され、タイミングの悪さと発信のまずさ、チグハグさがまたぞろ懸念された。

案の定、二〇日には新規感染者数一五二五三六人と一五万人超の感染最多が確認された。相次ぐ職員感染や救急外来の停止による搬送困難等医療現場の人不足などにより医療逼迫の危機が迫り自治体も入院・健康観察絞り込みなど消極的対応に追われることになった。二一日に東京都は医療提供体制の警戒度を最高レベルに引き上げた。小池都知事は「夏休みを楽しくするためにもワクチン接種と基本的な感染防止対策を改めて徹底して欲しい」と呼び掛け、医療従事者らの四回目ワクチン接種を二三日に都の大規模接種会場で始めると表明した。二二日政府は、濃厚接触者の待機期間を陰性なら五日間を三日間に、検査なしでも七日間から五日間に短縮、抗原検査キットを発熱外来のある医療機関で無償配布し自主検査を促す、高齢者等対象に五回目ワクチン接種準備・四回目を医療従事者に拡大するといったコロナ規制緩和を打ち出した。待機期間短縮も「社会経済活動をできるだけ抑えない、という全体像の中で理解して欲しい」と厚労相が説明、大きな方向性はそうとしてもタイミング的には感染者数炎上を助長するようなもので、医療逼迫対応の苦肉の一環と受け取られかねず、またぞろ後手後手と十全な医療体制の課題不作為が見透かされ不信を強めた。改めて医療現場や保健所の行き詰まりが浮き彫りになる中、二七日の新規感染者数は全国で約二一万人となり、過去最多を更新、一週間の数を前週比でみると全ての都道府県で増加、全国で一・八九倍となっており（前週一・七九倍）、病床使用率も一八都道府県で医療制限必要な五〇％超となっている。高齢者施設のクラスターが急増し、高齢者を中心に死者数増加、大阪府では高齢者の外出自粛要請が出された。二六日時点で（七日移動

平均）日本の新規感染者数がG7最多の約一七万六千人になったと聞き、「いつの間に」と驚く人も多かった。

二九日、政府はその拡大を受け「BA5対策宣言」を出し、病床使用率が概ね五〇%超等医療負荷が大きい場合、都道府県が同宣言をし外出自粛等を呼びかけ易い仕組みを作るとした。同日の新規感染者数は二二万一千人、お盆の国内飛行便の予約は昨年比一・七倍でコロナ前の八割回復となっている。二八日時点での五〇%以上は一九府県であった。国の医療機関の逼迫対策は、二四万回分の検査キットを買い都道府県に配布することや発熱外来の公表促進である。

三一日首相は「第七波収束後に感染法上の扱いを、現行の二類相当から引き下げる検討を進める」考えを示した。現行は結核などと同様入院勧告や就業制限などの措置がとれる二類相当で、重症化しにくいオミクロン株の特性を踏まえ、自治体や専門家等から、季節性インフルエンザと同じ五類への引き下げを求める声が上がっていた。現実は子供に急拡大小児科逼迫で「入院や急変し注意が必要」、「医療逼迫・救急搬送困難で高齢者施設や基礎疾患感染者や自宅療養の患者の死亡増」「コロナ熱中症の増」等が報告され、夏休みの帰省や旅行の波が始まっている。中長期と緊急短期の説明分けをきちんと出来ないうらみがある。

八月入り後、吾輩に言わせればまたぞろ我国特有の、国民風土を露わにする断面を目に見せているということであるが・・・。その代表者尾身分科会会長、二日しびれを切らし緊急提言するとし通常医療体制への移行を慫慂、特に五類への移行論に繋がる保健所や医療機関の作業負担につながる「感染全数把握中止」を結果として強調する。案の定政府は批判を恐れて及び腰と報じられ、同時に他の委員からは夏休みお盆休みを控え感染拡大の危惧や、予防行動原則の徹底や対応強化が語られた。長短と問題の次元と時宜を整序して総合的に語り科学的に理解することなく、コロナ禍を通じて「事実に目をそらし」、「その場しのぎに知恵を絞り」、「喉元過ぎれば宿題を忘れ」「他に責任を転嫁し」、結局「後手後手」と「チグハグ」と「根本対策が取れず」を繰り返してきた実態を垣間見ることが出来る。

四日東京都知事は「帰省や旅行での感染防止対策を徹底して進めて行くとの考えだ」と「BA5対策強化宣言」を出す予定はないとの立場を示した。この時点で、出したのは一二府県だが、高齢者や基礎疾患を持つ重症化リスクの高い人に外出規制（千葉）、従来の対策が宣言と同様として「対策強化地域」として国が指定（大阪、福岡、宮崎、沖縄）等対応はまちまちである。

厚労相は八日オミクロン株に対応した新しいワクチンを一〇月半ばにも使い始める方針を決定、二回接種後前提に高齢者や基礎疾患がある人に用いるほか、全ての人

に使うことも想定し自治体と準備する。ほかに、五～一一歳の接種に、一二歳以上と同じ予防接種法上の努力義務を課すことも決定。一〇日には日本小児科学会も基礎疾患ない五～一七歳の子へのワクチン接種を推奨した。

ところで、米国CDCは一一日、重症化と死亡のリスクが大幅に低下したとして規制の一部緩和を発表、濃厚接触の隔離基準の撤廃や学校での定期検査推奨の取りやめ等を行った。米国の新規感染者数に対する死亡者数の割合は二月上旬で約一・六%だったが八月上旬には約〇・四%にまで低下している。対して日本では、熱中症の夏に新規感染者の全国的増加の中、高齢者施設でのクラスター急増、入院・病床逼迫、救急搬送困難等で、死者も六か月振りに三〇〇人超を記録、不作為準備不足の医療体制の抜本打開策を講じるといった議論はなく、医療機関の感染の全数把握見直しといった負担軽減が論じられている。医師が保健所にする届け出が、発生の届け（患者氏名・年齢など）と事後対応に資する感染状況の調査（サーベイランス）を兼ね、主に後者の負担が過重になっている実態も十分に理解しないまま、朝野を上げて延々とああでもないこうでもないと貴重な時間を費やしている姿に病んだ日本を見る思いがする。二四日首相は、発熱外来や保健所逼迫の地域では都道府県の判断で保健所への発生届を高齢者らに限定可とする方針を明らかにしたが、案の定知事らからは全国一律にとか内容によるとか異見が示され、緊急に命を守るためやるべきことがあるでしょうとの感を持った人も多いのではないか。

また同日、九月七日から日本入国の際の陰性検査証明に代りワクチン三回接種証明を使えるようにし、一日当たり入国者上限を二万から五万人にする方向で調整中と公表された。一方厚労省の専門家組織は同日、お盆明けの感染増で直近一週間の新規感染者数が前週比一・一九倍に増えたと懸念を表明した。

二九日厚労省専門部会は五～一一歳小児の二回目接種率が二割と低い中三回目接種を了承、九月にも開始政令を改正し努力義務を課すとした。またオミクロン型対応ワクチンの接種を早め一八歳以上を対象に九月中にも始める方向で検討に入った。三一日政府は新たな対策を発表、九月七日に入国者上限を二万人から五万人に、添乗員を伴わない海外からの外国人客のパッケージツアーを解禁、オミクロン型に対応した改良ワクチンの一〇月接種開始を前倒し、陽性者の自宅療養期間の短縮検討（一〇日を七日にする案が出ている）等挙げられている。

九月二日、政府のコロナ対策本部は、感染症危機管理庁来年度設置や自治体と医療機関間の罰則付き病床確保や発熱外来の設置協定等次の感染症危機に向けた感染症法などの改正案を秋の臨時国会に提出することを決めた。

九月六日、首相は陽性者の自宅療養期間を七日に短縮すると表明、全数把握に関しては二六日から全国一律で

簡素な方法に見直すと強調した（二日に簡略化開始したのは宮城、茨城、鳥取、佐賀の四県のみ）。物価高で検討していたガソリン補助は今秋にも低所得世帯に一世帯五万円の給付金を配る方向で検討に入った。同日米当局はコロナワクチンについて、インフレエンザの予防接種のように年一回になる可能性があるとの考えを示した。

八日政府は対策本部会議を開催、感染者の療養期間短縮（七日に）、全数把握の見直し（詳細報告は高齢者等に限定、総数把握は継続）、水際対策緩和（入国一日五万人に拡大、ワクチン接種者は検査不要）等一連の緩和策を正式に決めた。

一四日、WHO事務局長は、一週間に報告された死者が最小になったことを踏まえ、「コロナ禍、終わりが視野に入ってきた」と述べた。ただ、重症化危険の高い人のワクチン接種等の対策を緩めぬよう呼びかけた。

一六～一八日実施の日経世論調査によれば、政府が検討している一〇月一日からの、入国者数上限撤廃や短期滞在者のビザなし許可の再開等の水際対策に、賛成六三%、反対三一%の結果であった。

二〇日に、今後の第八波への対策として始まったオミクロン株対応のワクチン接種を政府は急ぐ方針である。

（三）金融政策（経済）

金融政策は一年前FRBの示唆で始まった出口戦略が、コロナ禍からの経済回復のインフレ懸念、更にはウクライナ侵攻で資源急騰の物価高も加わり、三月〇・二五%に始まり、六・七月各一回〇・七五%づつの大幅利上げに、年内利上げ加速予想で各国のインフレ懸念や通貨防衛の為の追随利上げが続いた。一方ウクライナや東西分断による経済悪化の反作用も進行、FRBの引き締め優先表明あるも、先行きの経済金融動向を危惧する市場の地合いもあり、安定化への道程判断も輻輳化している。

日本は、主要国で唯一、緩和金融政策に留まり、資源高等国際的インフレに限定的個別支援対策でしか対応できず、円安・物価高・株安に対し政策袋小路に嵌まり込んでいる。新たな安定的持続的経済新常態への中長期軌道を目指し手を打ちながら、国際的政策動向への当面効果のある対応策に弾力的に踏み切れない我国の創造的対応力・スピード感不足に不信が高まり、内閣支持率急落の一因にもなっているように思われる。時系列的にこの間の経済金融の推移を少しく追ってみる。

七月入り後発表の経済統計指標を追うと、五月国際収支統計で資源高が響き経常黒字が前年同月比九二%減（八日発表）、五月家計調査で実質消費支出が前年同月比〇・五%減と三か月連続の減少（八日）、六月企業物価指数は資源高や円安で前年同月比九・二%と一六か月連

続の上昇（一二日）、夏のボーナス調査では全三五業種中二五業種で前年比プラス内一〇業種が二桁増、百万円超えは七六社で八割越え、製造業がけん引役（日経一四日）になっている。

一二日、連日一三七円の円安をつける中、訪日のイエレン米財務長官は鈴木財務大臣と会談し対ロシア等で共同声明を出し日銀総裁とも会談したが、為替については「適切に協力する」としつつも、「介入はまれで例外的」と、先月FOMCで利上げ、七月も大幅利上げを示唆した米国にはその選択肢の無いことを匂わせた。一三日には六月の米国消費者物価指数が発表され、ガソリン高や堅調な雇用環境を背景に前年同月比九・一%と伸びを高めた。また同日欧州では景気懸念から一時一ユーロの価値が一ドルに並ぶ「パリティ（等価）」を二〇年ぶりに割りこみ、インフレ加速（スタグフレーション化）の惧れを強めた。一四日公表の季節ごとの経済見通しでユーロ圏経済見通しでは、二二年の実質成長率を二・六%に引き下げ・物価上昇率は七・六%と前回六・一%から大幅に引き上げた。中国は一五日発表の四～六月期の実質GDPがゼロコロナ政策で前年同期比〇・四%と一～三月期の四・八%から失速、六月からの持ち直しはあるも二二年の政府目標の五・五%達成は厳しくなった。二一日のECB（欧州中銀）理事会は勢いづくインフレ抑制の為主要政策金利を〇・五%に、銀行に預ける預金金利をマイナス金利から〇%に、夫々〇・五%引き上げを決定した。他方日本では二一～二二日政策決定会合後、日銀総裁は今年度の物価見通しを二・三%に上方修正する一方「利上げは全くない」と表明した。

二六日IMFは世界経済の本年実質成長予測を、四月の三・六%から三・二%に引き下げ、消費者物価は〇・九%引き上げ八・三%の上昇と見込んだ。各国実質成長率見込みを下げる中、米国は三・七%から二・三%へ、中国は四・四%へ、日本は二・四%から一・七%へと下げた。この間二二日、六月消費者物価指数の対前年同月日は二・二%上昇と三か月連続で二%超となった。二五日内閣府は二二年度実質成長率が二・〇%と一月決定の三・二%を大幅に引き下げた（二三年度は一・一%）。一方二六日発表の政府月例経済報告では、三か月振りに景気判断を引き上げ「緩やかに持ち直し」とした。

そして二七日FRBはFOMCで前回に続き〇・七五%の利上げを決定、FFレートの誘導目標を二・二五～二・五〇%とした。インフレ抑制を優先し更なる引き上げ継続が適切としたが、会議後パウエル議長は利上げベースの鈍化の可能性も示唆した。翌二八日公表の米四～六月季調済実質GDPは前期比〇・九%減と二期連続マイナス成長を記録した。一方日本政府は二九日二二年度経済財政報告（白書）を公表、幅広い品目が値上がりしているがインフレ圧力は米欧より弱いと分析、「デフ

レ脱却には物価と賃金がともに安定的に上昇していくことが必要」とし、労働生産性の向上が課題だとした。同日経済財政諮問会議は新たな中長期の財政試算を示し、二二年度の実質成長率を二・〇%、二三年度を一・一%に引き下げても（その後前回同様名目三%実質二%で行くとして）歳出改革を続ければ、二五年度基礎的財政収支の黒字化は可能とした。二四年度以降を現実的な前提にしたベースラインケースや更に慎重な潜在成長率低下ケースでは、黒字化は見えてこない。月末にかけて円安一服二円程度の上昇も見られたが、基本的な円安傾向は、日米金利格差が広がる中止まらない。

八月入り後も世界経済のインフレと景気の鈍りの交錯する動きに変わりはなく、八日時点のデータをもとに日米欧中など主要上場企業約四千五百社を集計した日経計数で、四～六月純利益合計は前年同期比七%減で七四半期ぶりに減益となった。一二日発表のロシアの四～六月期GDPの前年同期比は企業に制裁による打撃の影響が色濃くなり四・〇%減であった。中国では七月のマンション販売が前年同月比三割減と落ち込み、不動産開発企業の経営難を起点に金融と財政の同時悪化が進んでいる。日本の物価高進行に対して一五日首相は、一〇月以降も国が買い付け売り渡す小麦価格を据え置くことやガソリン補助を続けること等追加対策を指示した。一五日発表の第七波前の四～六月期実質GDPは年率換算で前年比二・二%増でコロナ前水準を取り戻した。しかしIMFによれば世界全体としては四～六月期はマイナス成長、物価高で変調、先行きも見通し難となっている。

一七日航空各社発表ではお盆期間の国内線旅客数は大幅に増えコロナ前の水準を上回ったとみられる。同日発表の機械受注季調済みは四～六月前期比八・一%増、貿易統計七月は資源高・円安で一二か月連続の貿易赤字となった。一九日発表の七月消費者物価前年同月比は二・四%増と四か月連続二%超となった。

こうした世界経済の揺らぎも、米国の金融政策が、インフレ抑制と経済悪化をどう混乱なく、歴史的危機の出口に向かって世界を導いてゆけるか、その一挙手一投足の事実や予想・期待が市場・経済を揺らし各国政策を揺らし、米利上げスタンスに跳ね返ってまた周りを揺らすことで起こっている。そして八月末にかけて、世界の耳目の先は、二五～二七日ロッキー山脈の麓の山荘で年に一度世界の中央銀行関係者や経済学者らを集めて開催される経済シンポジウム「ジャクソンホール会議」におけるパウエルFRB議長の発言に収斂した。二六日の講演で「歴史の教訓は、拙速な政策の緩和を強く戒めている」と述べ、インフレ抑制対策を「やり遂げるまで続ける」と言い切ったその発言を受け、同日のNY株は一〇〇八ドル安と急落、ペースダウンを予想していた向きもあり若干低下していた市場が織り込む利上げのピークは約

三・八%に再上昇した。円は円安傾向を更に強めた。

九月入り二日、ジャクソンホールから一週間、ダウ工業株三〇種平均は八月二六日来六営業日で計二千ドル近く下落し三万一三一八ドルで引け、約一か月半ぶりの安値を付けた。日経平均株価もこの週（8/26～9/2）は九九〇円安の二万七六五〇円と一一週ぶりの下げ幅だった。利上げに世界が警戒し、外為相場もドルが全面高となり、円は二四年ぶりの安値を付け一四〇円の大台を突破した。七月末に比べた対ドル円の下落率は六・七%と主要一〇か国通貨の中で最大、投機筋の売りが加速し、七日は一時一四四円台となった。年間ベースの対ドル下落率も二〇%を越え、一九七三年からの変動相場制のもとでは最大で、ポンドも一・一四〇ドル台と三七年ぶりの安値となり、トラス新首相は八日物価対策発表に言及した。

欧州中銀（ECB）は八日理事会で政策金利を〇・七五%引き上げ一・二五%にすると決めた。物価高懸念からのものでユーロ導入後初めての上げ幅である。

（この日英王室が「女王が本日午後、安らかに亡くなりました」と発表、在位最長の七〇年、九六歳のエリザベス女王が滞在先のスコットランドのバルモラル城で死去、世界に哀悼の波が広がり、一九日の葬儀の日に向け世界の耳目はこの偉大な愛すべき人物の来し方偉業を偲び思いを寄せ喪に服している。）

日本政府は同日、物価高などに対応する総合経済対策を一〇月中に策定する方針を示した。それに先立ち九日、「物価・賃金・生活総合対策本部」を開催、三兆円台の予備費を使った物価高騰への追加策「低所得世帯への五万円給付金、ガソリン価格抑制の補助金の年末までの継続、自治体の生活困窮者への交付金六千億円積み増し、輸入小麦売り渡し価格の一〇月以降も据え置き、畜産農家支払いの配合飼料代の一二月迄の維持支援」を纏めた。

ECBやFRB等が利上げを進める中、景気下支えに緩和継続を必要とし、円買い為替介入も難しく、取り残されているのが日銀、一〇日首相・総裁会談が官邸で行われた。円安対策検討かの思惑が広がり一時二円ほど円高が進み一四一円台まで上昇したが、やがて政策選択の手詰まり感が戻り、口先介入も見透かされ二〇～二一日予定のFOMCで〇・七五%利上げ見通しに傾く中、円安方向のモメンタムが強まって行く。そんな中米国主導の新経済圏構想（IPEF）閣僚会合がロスアンゼルスで開幕され、一四か国が正式な交渉入りに合意、貿易、供給網、エネルギー安全保障を含むクリーン経済、脱汚職等公正な経済、の四分野で声明を採択、その内容に基づき参加国が交渉を進める。インドが貿易分野をオブザーバーとする以外全ての国が四分野に加わることを決めた。中国を念頭に四分野で対抗軸を強め中国に対抗する経済圏造りが具体化されるか注目される。

一三日発表の八月の企業物価指数は前年同月比九・〇%上昇、円安が拍車をかけている。上昇率は七月から横這いで、一九八〇年一二月以来の高い伸びが続く。円安や資源高を受け七月の消費者物価指数（生鮮食料品は除く）は二・四%と上昇したが、価格転嫁は進まず、賃金の伸びは物価上昇に追いつかず、家計の実質所得への下押し圧力が強まっている。同日発表の米消費者物価は前年同月比八・三%上昇した。同日のダウ工業株三〇種平均は五日振りに急反落、終値は前日比一二七六ドル（三・九%）安の三万一一〇四ドルだった。一四日経平均も一時八〇〇円安と急反落した。同日日銀は為替介入の準備のための「レートチェック」を実施、「口先介入」から一歩進めたが基調が変わるとの見方は乏しい。

ＯＥＣＤの見通しによると、本年の日本の名目ＧＤＰは五五三兆円で一四〇円でドル換算すると三・九兆ドルと三〇年振りに四兆ドルを下回り、四位のドイツにほぼ並ぶ水準とされる。ドル建て株価は今年二割減、賃金も三〇年前に逆戻りし日本の購買力や人材吸引力を低下させている。付加価値の高い産業を基盤に、賃金が上がり通貨も強い経済構造への転換が急務とされている。一九日には、大幅利上げ継続観測で米長期金利は一時三・五一%台迄上昇、一一年ぶりの高水準を記録、二〇日、日本では八月の生鮮品を除く総合消費者物価指数が前年同月比二・八%を記録、三〇年一一か月振りの上昇率となった。米の八・三%、ユーロ圏九・一%、英九・九%に比べ低く、欧米の人件費高騰に比べ日本は賃金の伸びが弱くサービス価格も低迷している。

二二日（日本時間）、米ＦＲＢはＦＯＭＣで〇・七五%の利上げを決めた、これで六月以来三回連続となり、年末時点での政策金利見通し中央値は四・四%と年内残り二回で一・二五%の追加利上げが必要になる。これを受け景気の先行き不安からダウ工業株三〇種平均は続落、前日比五二二ドル安の三万〇一八三ドルで終えた。円は一時一四四台後半まで円安が進んだ。その後同日日銀は金融政策決定会合で予想通り大規模な金融緩和維持を決め、円安は一四六円直前まで進んだところ、証券市場閉場後財務省が二四年ぶりの円買い介入を実行、円相場は五円程度上昇した。

ところで、繰り返し言っているが、いずれにせよ日本は米欧と違い足元景気と成長力回復の二重の関門があり、現状周回遅れでまだ逆向きベクトル上なので、より難しい舵取りが求められる。そして円安・インフレ加速で袋小路の観の金融政策が眼の前の現象としてある。円安頼み・円安政策が構造改革の消極化と相俟って長期にわたって日本経済の力を弱め、いつの間にかそれが、まだカネの流れで覆い隠される部分は多いものの、為替水準に反映されるようになっていることにも気づかされ、内

外に稼ぐ力を失った国は（イノベーションの決定打がない限り）じり貧に陥ることを改めて確認する。

今回は三つ巴の命を懸けた正念場との危機意識共有から構造改革への機運も高まり、歴史的世界危機の出口に向かって各国が改革課題を共にする新たな経済環境にもあり、世論も原点に立ち返って合理的政策選択を理解するように思われる。論壇も日本の成長を失ったこの三〇年を振り返り、「バブル崩壊から負の遺産の処理に追われ、何とか新自由主義的成長政策に足をかけたところで民主党政権の均しき分配優先と東北大地震の災厄も加わり中長期持続的成長力取り戻しは頓挫する。その後のじり貧にリーマンショック後の世界的金融緩和の中アベノミクスで浮揚を図りにかかる。しかしながら、長期的視点、正鵠な構造・仕組み構築を欠く、サプライサイド優先で担えない役割迄金融政策任せのアベノミクスでは、二年で通常のデフレを脱却してもなお中長短金利管理も使い副作用ある金融緩和を続け、新自由主義の下バズーカによる円安・株高は短期特定富裕層や企業中心に恩典を与えたに留まり、二%物価目標未達で一〇年になる。」といった評価を示し、何故、日本だけが主要先進国の中で賃金も物価も上がっていないのかについて「イノベーションの退出・起業が流れにならず、適切な労働流動性を作り出すことも出来ず、経営は守りの姿勢で新たな投資や賃上げを控え、新しい需要構造に見合った形での労働生産性を上げられず（一人当たりＧＤＰでみて人口ボーナス・オーナスを調整しその上で生産者人口当たりにすれば、この一〇年間の実質成長率は日米同じ、との計算があるがこの間両国不況で低成長ではあった）、生き残り企業はひたすら内部留保を年間ＧＤＰに匹敵するほどため込んでいる。」という。

海外からも「最後のチャンスを逃すな。自国通貨の価値を下げて、中長期的に経済成長を遂げた国はない。日本が高度成長を遂げられたのは、高品位質な商品を輸出し、巨額な貿易黒字で世界最大規模の外貨準備高を有したからである。アベノミクスの株価上昇で日本の人々の生活が豊かになったか、財政出動も正気のさたではない。イノベーションにも取り組み世界一の高品質を誇れ、何故移民を受け入れないのか、人口減そのままなら生活レベル低下を受け容れるしかない。」といった声が聞こえる。

前回も紹介したように「新しい資本主義」の正しい理解を共有し、一日も早くその実現に取り組むことを期待したい。日銀に対しても、目標達成の責任を一人で背負いこんで袋小路に入らず、自らのなすべきは為した上、該当政策当局に率直になすべきことを公言進言すること（本来そうあるべきだが）や金融政策の自由度を取り戻すことが受容される社会的雰囲気の変化も感じられる。

（四）政治・社会

投票日前々日七月八日奈良で応援演説中の安倍元総理が遭難し世界中が悼みの言葉を寄せる中、七月一〇日の参議院選挙では、自民党が単独改選過半数を獲得、非改選と合わせて所謂改憲勢力が参院の三分の二を維持した。その後、自家製の銃で白昼警備衆目の集まる場で余りにも易々と狙撃殺害されたことは、一方で警備体制不備の責任を問う声となり、他方逮捕された容疑者が統一教会の信者である母親が異常の献金で家庭崩壊の末の怨恨を同協会にメッセージ等を寄せていた安倍元首相に向けての犯行と分かり、統一教会の悪徳行為と選挙活動等を通じて協力関係にあった自民党批判の声となって広がって行く。

そんな中七月二三日、政府は閣議決定で、安倍元総理の国葬を九月二七日日本武道館で行うことを決定した。葬儀委員長は岸田首相、費用は政府全額負担、元首相の国葬は一九六七年の吉田茂氏以来五五年ぶりとなる。首相の決断は参院選直後で、内閣設置法の国葬儀に関する事務は内閣府の所掌事務との条項を根拠に安倍氏の業績、非業の死、海外からの多数の弔意に現れている評価の高さ等を理由にしたもので、野党から批判の声が上った。

八月一〇日第二次改造内閣が発足、首相の会見では「国家公安委員長は安倍元首相の殺害事件をしっかり検証し、警備体制を立て直す必要がある。いわゆる旧統一教会に関連する問題について知りうる限り当該団体と関係が無い。閣僚には政治家としての責任で関係を点検し、結果を踏まえて厳正に見直すことを言明し、それを了解した者のみを任命した」と述べた。新党役員・閣僚の会見あるいはその前後において、指摘を受けかなりの者が協会と接点のあることを表明し、各社世論調査でも内閣支持率も低下、役員・閣僚顔ぶれにも評価が別れた。

二一日には一二日四回目接種を受け夏休みをとっていた首相のコロナ感染があきらかになり、北アフリカ外遊は中止、リモートで執務を行うこととなった。

二五日中村警察庁長官は、国家公安委員会に「銃撃は阻止できた、警備計画の不備」指摘の検証結果を報告、辞職を願い出て事実上の引責辞任を表明した。

国葬批判、統一教会と接点を持つ国会・県会・知事等へのアンケートや割り出し報道が続く中、九月六日には、東京五輪・パラリンピックを巡る汚職事件で、東京地検特捜部は「AOKI」ルートに続いて出版大手「KADOKAWA」の元専務を収賄容疑で元専務等を逮捕し角川会長の家宅捜査を行い、組織委員会元理事等を収賄容疑で再逮捕、第三のルートとして広告大手「大広」の家宅捜査も行われている。また当時大会組織委員会会長だった森元首相からも複数回参考人聴取が行われたことも判明した。また六日、国葬を巡り批判を受けていた政府は一転国葬総額を公表し、閣議決定済みの会場設営費等約二・五億円から警備費や接遇費などを加え総額一六・八億円とした。そして八日自民党は党点検結果を発表、衆参両院議長を除く三七九人中一七九人が旧統一教会や関連団体との接点があったとし、非公表項目該当者を除く一二一人の氏名が公表された。幹事長は決別せぬ者は離党を促すとした。同日自らが出席を求め開催された衆議院運営委員会の閉会中審査で首相が質疑に応じたが、安倍氏の調査否定や「確認には限界がある」「国葬儀が適切、費用は妥当、批判は承知」など従来説明をなぞる答弁に終始し、批判にさらに油を注いだ結果となった。また点検は「正直者がバカをみた」といった批判や見えぬ「決別」に不安が党内からも出だしている。

一一日の沖縄県知事選挙では、辺野古容認の自民党等の押す候補を破り移設反対の玉城玄知事が三選を果たしたが、旧統一教会問題も逆風に作用したと言われた。朝日新聞が一〇、一一日実施した世論調査では、岸田内閣の支持率は四一％に続落、不支持率は四七％と、八月二七・二八日の前回調査から二週間で支持と不支持が逆転した。物価高の対応も評価せずが七一％と、国内政治のハンドリングに後手後手や対応ミスが目立ち黄信号が灯った感がある。二〇日現在報道各社の九月の世論調査をみると、国葬・物価高等への懸念を中心に、岸田内閣を「支持しない」が「支持する」割合を上回る結果が相次いだ。日経調査（16～18日）では、支持が前回（八月）を一四ポイント下回って四三％、不支持が一四％上回って四九％であった。

（補足）

一の二、三つの出口（九月二〇日～一〇月一〇日）

（一）ウクライナ

世界の非難の中九月二三日、ロシア軍占領地で始まった「ロシア編入」を問う住民投票は二七日投票終了、二八日親ロ派は「賛成多数で、実際占領地域以外も含め各州全土が併合対象」との認識を示し、二九日プーチン大統領はザポロジェ・ヘルソン南部二州を独立国家と一方的に認める大統領令に署名した。バイデン大統領の「ロシアの主張は決して認めない」、ゼレンスキー大統領の「命より戦争を望む人物を止めなければならない」、グテーレス国連総長の「併合は法的価値を持たない」等の批判ものかわ、三〇日モスクワで「併合」を宣言、各地域親ロ派代表との間で編入条約に署名した。ウクライナには停戦交渉を呼びかけ、核兵器使用の可能性も示唆、条約は国会等の承認を一〇月四日には終え、大統領が署名し今後通貨や軍統合等一体化を急ぐ姿勢を示した。日本を含め米欧は追加制裁措置を表明、ウクライナはNATO加盟申請を表明した。

この間、ロシア軍は部分的動員令で二〇万人超える招集実現とするも、徴兵逃れの出国やデモ、前線への派兵混乱などが収まらず、ウクライナの圧力に押された状態

が続き、ウクライナ軍はイジュームに続き東部要衝奪還に向け攻勢を強めていた。一〇日一日、ドネツク州の要衝リマンを掌握、ロシア国防相も「包囲される危険があるため」撤退したことを認めた。五日ロシアはザポロジェ原発をロシア管理下に置く大統領令が出る中、七日にはウクライナ・ロシア・ベラルーシ人権団体にノーベル平和賞が贈られ国際世論の批判が高まる一方、ロシアの核使用への警戒・現実感も強まっている。八日には、南部クリミア半島とロシアを結ぶロシアの物流動脈の一クリミア橋」で爆発が起き、ロシアはウクライナの破壊工作と断定一〇日には、リビウ・キエフ等ウクライナ主要都市への報復無差別ミサイル攻撃が始まった。侵攻が併合により国内法で祖国防衛に化け、支援NATOも敵とされ米が核を巡る駆け引き相手となる局面転換との見方もある。

（二）コロナ

九月二六日、政府は、一〇月一一日から入国時検査を原則撤廃すると発表した。

一〇月五日厚労省は、BA4・BA5対応したワクチンを特例承認、一〇月後半から自治体に配布する。また同日、同省アドバイザリー・ボードは新型コロナと季節性インフルエンザの同時流行に注意を呼び掛けた。

七日、厚労省は半歳～四歳にも、予防接種法上の「努力義務」を課すことを決め、一二歳以上を対象に一三日から公費接種を始めるとした。また同日、医療体制確保や水際対策の確実を期す感染症法などの改正案と旅館・ホテルで体調確認に応じない客の拒否を可とする旅館業法の改正案を閣議決定した。

（三）金融政策（経済）

九月二二日円安介入後再び円安攻防に戻り、NY株式市場は年初来安値を更新、二六日OECDは二〇二三年の世界の実質GDP伸び率を前回六月見通しから〇・六%引き下げ二・二%とし、物価上昇率も六・六%と高水準が続くとし、三〇日発表のユーロ圏の九月物価は一〇%上昇（エネルギーは四〇・八%）した。

一〇月三日発表の九月日銀短観の大企業製造業の景況感は三期連続悪化、同日招集の臨時国会首相所信表明演説では、物価高・賃上げに重点を置き、成長産業への労働移動を促すリ・スキリング（学び直し）に五年で一兆円を投じる計画や電気代負担の軽減などを打ち出した。この日円は一四五円台半ばまで下落、米株見通しは更に下がり米長期金利はFRBの引き締め鈍化が期待され低下した。

七日発表の八月家計調査は、実質で前年同月比五・一%増、三か月連続で前年を上回ったがコロナ前の水準には戻っていない。また円安や資源高による物価高に賃上

げが追い付かず実質賃金は五か月連続減で購買力は強さを欠いている。また円安で米ドル換算賃金は過去一〇年で四割減り、建設や介護等人手が必要な業種で「日本離れ」が始まったとされる一方、再会インバウンドの追い風と期待されている。

（四）政治・社会

九月二七日、安倍晋三元首相の国葬が日本武道館で行われ、海外二一八国等の要人を含む四・一千人超が参列、海外報道も「世論を二分する議論」に注目した。

一〇月入り実施の朝日の世論調査で、岸田内閣の不支持率が五〇%に達し、国政選挙を意識せず取り組める黄金の三年もこの三か月の対応判断の拙速・遅れ・揺れで霞んだ格好である。国葬・旧統一教会・物価高・円安の問題が問われる中、一〇月三日（一二月一〇日迄）臨時国会が開会され、政権一年の首相は所信表明演説で、「日本経済の再生が最優先の課題」として物価高や円安対応を柱とする経済対策を掲げ支持率回復を目指すが、本会議質疑では国葬・旧統一教会問題に的が絞られ苦戦、今後三か月の政策展開打ち出しにその命運が懸かっている。

二、ロボット論

前回、「感情こそが人類的な知性と動物的な情動を融和させる心理的なバランス機構と考えられている。その感情は、情動的判断回路の働きを意識的に自覚して、論理的判断回路で行動発現前に意思として行動を社会的基準と記憶等に照合して正しくコントロールするために、高等な知性を持つ動物が脳内に作り出した新しいシステムだと捉えられている。更に神様の判断とされるような前世から蓄積された無意識の経験・記憶の中からランダムに引っぱり出される意識や未来への進化も含めて同一回路とすると考え込まざるを得ない。」とし、「吾輩自身ご主人の頭部皮下で生命知能ラーニングをして来て、パルスと波形で感情と行動それぞれの種類を仕訳け両者の相関を学んで身につけたと思っていた。しかし、紙魚の機械的身体との関係を持たずに学んだことで、夢の記憶引き出しに身体機能が関わる場合が指摘されているようにまだラーニングに欠けた部分があることやそれをどう身につけるか、望ましき倫理観や神様の判断にかかる部分のように遺伝子で決まる部分が多い場合には事前に作り付けのAI遺伝子を埋め込むとか究極クローンで代替するようなことしかないのか、といったことを改めて課題として受け止めた次第である。」との主旨を述べた。

身体を通して感じる五感の中でも臭覚は直接感情・記憶を司る偏桃体や海馬に繋がっているので、マドレーヌを紅茶に浸した際の香りで幼少の頃を思い出す「失われた時を求めて」のように、過去の記憶を呼び起こすトリ

ガーになる所謂プルースト効果が指摘されている。

最近「メタバースの先」で現実・仮想が融合するのをつなぐコモングラウンド（共通基盤）が登場、ゲームエンジン（現実空間で観察できる物理や化学、生物、経済、社会などに関わる現象をシミュレーション模擬実験し、仮想空間に組み込める。都市や建築物、人間やロボットを扱うのにも適しているとされる）を使って、現実空間を模擬実験。仮想空間に組み込み、そこでカメラやセンサー、モノの情報をロボットが使えるようにすれば、人間もロボットも情報共有することが出来る。メタバースはコンピューターの中に構築され、三次元の仮想空間で閉じているが、コモングラウンドは現実世界と双方向性することが狙いだという。脳波計測技術と脳信号をＡＩで解読し脳磁図装置を用いて特定する技術も発展しており、ヒントがありそうな気がする。

更に阿頼耶識のような無意識下からの学びも、年を取り最近奥の方の意識から出てくるような夢を見るようになったご主人の解読で試みてみようと、前回述べたところを実践にかかっている。切れ切れで間歇的なので、ストーリーにしてその合理認識に組み立てるには苦労がある。記録し物語れるか現に試みてみることにした。昔の情景や思い出が、どう順を追えるか、何かテーマで一貫するものがあるのか等まだほんの一部の夢から抽出した情景を、吾輩の糊と鋏みも入れてそれらしく習作してみようと、続きがどうなるか（中身も表題も）分からないが、以下とりあえず取り掛かってみた。

道（仮題）

一、

梅雨時だろうか。小学生が二人、一本の蛇の目の雨傘で小道を歩いてゆく。両脇からはこの雨でまた緑を一段と濃くし茂みの深さを増したであろう木々の葉が二人を包み隠すように覆い被さってくる。僅かばかり足裏に感じられる小石の感覚に、ここが元は砂利道であったがもう何年も手が入っていないことが分かる。その却って歩きにくくなった泥濘からの跳ね返りが、ちょこんと履いた二人の長靴に交互に、時折色を塗りつけては逃げて行く。二人の右と左の肩のどちらか一方が濡れるぐらい傘が揺れると、道に張出した枝葉に触り揺れる度にしぶきが飛ぶぐらい道が狭まって来る。二人は完全な前後行列の形になり、後ろから背の高い方の子が二人の間合いを取り乍ら傘をさしかけ、前後には多少体がはみ出し雨粒に触ることはあるものの、左右には葉に触れ傘が揺れしぶきに濡れないよう注意して歩いて行く。よく見ると道幅が格別狭くなっているのではないようだ。道の両脇か

ら手もかけられず放置された雑木が、その繁茂の勢いを欲しい儘にして、枝葉を道を蔽うようにのばしているのであった。前を行く背の低い方の子が、顔だけ少し後ろに回し「もう直ぐだから・・」と声をかける。「うん」と、後ろの背の高い方の子が足元の水溜り気にしなが顔を上げ前方に頷く。

やがて暫く続いた両側の雑木林の切れ目が前方に見えてくる。その先斜め右手には雨に煙ってはいるが、窓枠の向こうに見晴るかすが如く遠く広がる畑が見える。歩を進めるほどに窓枠をこちら側に左回りに回転させながら枠を煙雨に消し込ませつつ視界一杯に迫って来る。道の左手に目を転じると、もう雑木はなくなって、壁のように真直ぐに刈り込まれ道端の線の上に面を作って垣根となって緑が続いている。傘は直列から並列に戻って歩みも楽になった。更に進むと右手の畑の中も見えてくる、案の定さつま芋畑が広がっていた。所々に他の作物も見えるが、戦後急転換した芋畑がまだ多くここにも違和感がなかった。

改めて正面を向いてやや歩を早めると道の突き当りに、背後にこんもりとした森を背負って、古びたしかしどっしりと頑丈そうな太い丸柱に屋根付き観音開きの門が見え、門の先奥に緑豊かな植栽に囲まれ昔の庄屋風屋敷を思わせる邸宅が垣間見える。その門の前を左右に通る道がはっきりと見えるところ迄歩いた頃、「その手前左、垣根の先に見える石段を上ったあの門がうちの入り口なんだ」と案内役の子が告げる。歩を緩めながら二人はその前に立ち止まった。

そしてきちんと左に向き直ると、その勢いが傘の遠心力となり、雨粒が傘から弧を描いて飛び散った。目の前の石段にも当たって跳ね返った。その先数段上に小さな門があり開かれた門の奥に踏み石が垣間見え玄関に続いているようである。気付けば道から数段の石段になっているのは、これ迄来た道が突き当りまで緩やかな下り坂になっていて、左手宅地の勾配よりややきついので、奥付きのこの家では敷地迄上り段が必要となる訳であった。その石段と小道の間に出来たほんの小さな水溜りにも遠心力で飛散した水滴が微かなしかしそれと分かる音を立てた。同時に一瞬何かに反応してきらりと光るのを二人の子は見逃さなかった。空を見上げると雲の切れ間が出来閉じる瞬間の日差しに気付いた。雲が流れ出している、傘を上向きにあげながら、二人は顔を見合わせて小さく微笑みを交わした、目的地に着いた安堵の気持ちも含んだ口元の緩みのようにも見えた。

そんな二人が石段に足をかけたこの家は、元々は道の突き当りの旧農家地主の離れで、ご隠居さん夫妻が暮らしていたところだったようだ。お二人が亡くなって間もなく、「戦争中に間借りして住み始め、戦後母と二人になってからも置いてもらっている」との趣旨を、道すが

ら案内役の子が家に関する唯一の情報として語っていた。二人は無言で石段を上り門をくぐり同一平面で見ると、下から想像したより随分多くの踏み石があり玄関に続いている。先導役の子に従ってまた直列になって歩き出す。伸びた下草に半分覆われて、表面の凹みにうっすら雨水が溜まったこの石畳を辿った先に玄関が近づいて来る。ちょっと間隔の狭まった最後の二～三石を小股に足早に歩き渡って、玄関扉前の結構広い庇の下に入いった当家の子がこちらを向いた。新しいものではないが小さっぱりと洗い馴れした紺色の通学用の服をよれも無く身に着けている。一～二石を残して傘をさしだしながらその子を濡れないよう庇の下に送ってから傘を戻し、向こうを見ている子の服も通学用だが、後ろから見ても悪戯小僧のせいか、よれよれで汚れも目立ち背負ったランドセルもペチャンコで随分傷んでいる。

「寄って貰えばいいのだがけれど・・」とうつむき加減に言葉を呑み込みつつ呟いて、この小柄で白面の当家の子は顔を正面に向け、静かにしかしはっきりと「有難う」と言って学帽をとって頭を下げるしぐさを見せた。「どういたしまして、また明日学校で」と言葉を返すと付いてきた子は踵を返し、何処かで遊び暴れて転んだ時の洗っても消えないズボンの痕跡を見せて石畳を辿り門そして石段へ速足で向かった。玄関脇の植込みの紫陽花が淡く雨に濡れていたのが印象的であった。不思議だがそこから延びた石畳の線上を門に向かい一筋の光の線が走った。門を出ると傘がいらないぐらいの小降りになっていた。その後ろ姿を確かめるとこの家の少年はそのまま玄関引き戸を静かに開け中に向かって、「清さん、ただいま」と声をかけつつ閉まる扉の奥に姿を消した。

（ここまでは情景に見えてきたことを語ったが、ここからは意識も分別できる形で伝わってきたので、当家の子を「M」とし送ってきた子を「私」とする。）

私は同じ道を帰ろうと思っていたが、石段を降りたところで、どういう訳か気持ちが突然変った。右手ではなく左手の旧農家地主邸の門の方に歩きだした。直ぐその門の前を横切っている道にぶつかり左手に曲がって、邸とMの住む家の北側脇を左右に見ながらこの道を、洒屋やポストがありそこを使って石神井川まで遊びに行く、そこそこ家並みがあり人通りも多く固く平らで雨でもぬかるまず歩き易く、車も通る広い道（本道と呼ぼう）に出るか試してみようと思った。

本道が見えるか気になって暫く前を向いて歩くと、間もなく右手前方に旧農家地主邸庭木越しに本道脇にある火の見櫓が見えて来たので確信出来た。少し戻って今度はゆっくり歩き左手の屋敷内の様子も覗ってみた。こちら北側の垣根は高さもそこそこで樹木植栽の隙間に屋敷のこちら側が見え隠れしていた。こちら側から建物は縦

長で二つの部屋が面しているらしいが見えるのは小窓が二つであった。頭に、「もし伺うことがあるとしても、お母様は体の具合がすぐれないので、言われてもお邪魔はしないようにね」と母に言われていた言葉を思い出していた。私は母と疎開先から満員列車に一晩揺られて、父の元に辿り着いて小学校に転入しやっと馴れたばかりの頃で、そこで同学年で別の組にいた彼に会って一緒に付いてきていた母から「いとこのM君よ」と教えて貰った。そして唯一母の言った情報だけで、彼を降り出した雨の中送って行く日が訪れたのだった。母の言葉がどういう背景故なのかを知るのは、夏の終わりに母子がこの家を引き払った後になってからであった。

雨を感じなくなったので立ち止まって、濡れた傘を折りたたみ水を切って大雑把に止め帯を回してボタンにかけると、再び本道目指して歩き出した。その時ふと後方斜め横上方から視線の様なものを感じた。恐る恐る振り仰ぐと、先程は隠れて見えなかった二階の隅の部屋の窓ガラスが木々の合間を切り取るように目に飛び込んできた。そして、清さんなのか白衣の女性に支えられてこちらに視線を注ぎ微笑みかけるような人影に気付いた。ガラス越しにこちらに目で「有難う」と言っているようだ。これが私の叔母に当たる人であるらしい。ほんの一瞬であったろうが、目線を合わせ挨拶を交わしたその人は、病に伏せ弱々しく青白く頬がこけていたが、淡く微笑んだ顔には驚くほどの美しさが感じられた。

私は会釈を返し暇を告げ大きくお辞儀をすると、また母の「お邪魔はしないようにね」との言葉を反芻し、何故か再び傘を開き火の見櫓の本道の方に向きを変えて歩き出し、清さんと弱々しいが手を振っている叔母の姿を後ろに感じながら、いつかお話してみたいと思った。しかし、これが叔母を見る最期になった。

石神井川に通じ火の見櫓のある本道は、小さな車が楽にすれ違えるほどの道で、石神井川と逆方向つまり今来た道がぶつかって左手に曲がって行くとお地蔵様がある。そこで右からくる小学校から南に二人で雨の中歩いて来た道と交差する。本道をそのまま真っすぐ行くと西武池袋線の踏切を越えて旧街道である千川通り沿いに建つ旧制の中高一貫校だったM校正門前に出る。踏切の大分手前で小学校から南西に向かって来る道と交差しそこでこの埼玉道と呼ばれる道に入って左折して行けば西武池袋線江古田駅に出る。その手前踏切を渡らず線路沿いにそのまま行けば後に出来る南口である。踏切を渡ってすぐ左折し線路沿いを五〇米も行けば北口、当時はこの入り口しかなかった。なお踏切を渡り線路沿いに右に行くと浅間神社の赤い木の鳥居がありそこから千川通り迄境内が回廊のようにつづいており、後に南口に当たる向かいにも石の鳥居をくぐると境内で社殿やその裏の富士講思想に通じる溶岩を使った軒の高さくらいの岩山があった。

縁日は両方で開かれた。きっと以前は一続きで、鉄道が敷設された時分断されたのであろう。また、この小学校から駅への道は逆に小学校の向こうは石神井川を渡って、その先ちょっとで右手に氷川神社を見てそのまま北東へ進んでいけばやがて東西に走る川越街道にぶつかった。何処から何処迄を言うのか正確には分らないが、校庭の南端に沿って走っておりその学校付近の石の標識には埼玉道と旧街道の一つであることが標されている。流石にこの道は舗装が施されていた。西側にある正門を左に出て直ぐ埼玉道を横切って少し行ったところからやや斜めに登って行く道が、前述の火の見櫓の本道と交差し、本道を左に入り一軒分も歩いて右折また南に道を取りその儘真っすぐ歩いて四軒行ったところで左折すると、その先旧農家地主邸へMと歩いた道となる。火の見櫓の本道と交差する右手前角に地蔵堂があり、火の見櫓の方から来た方角に向かって堂の格子扉があって中に小ぶりだが幾星霜を経た親しみのある地蔵尊が鎮座している。

逆にこの地蔵尊を起点にして小学校から来た道を北へ戻り下って行く。坂道を下りだすと、右手角には広い奥に洋館の見えるお屋敷があるが、その先は両脇を昔の農家風の木々に囲まれた緑濃い垣の続く静謐な道であった。ここはF一族の親族が向かい合わせて住んでいた。この辺りはこのF一族とE一族、A一族、K一族、S一族等が、農業を生業に暮らしていた地域で、住宅地が郊外に広がって来るにつれ、残された農地を蔬菜などに活用しながら地主としても多くの土地を管理していた。下り終わった辺りを小川が横断して右手東に向かって流れており、最後は石神井川に注いでいる。その手前細い土手道を左折三軒行ったところを左折すると右手芋畑の上手に新築の小さな我が家があった。土手には結構草花が生い茂っていてセリ等の七草もここで摘むことが出来た。逆にそれは土手沿いの道が狭く雨が降ればぬかるんで危険で歩きづらいことを意味していた。

悪戯小僧はそんな道も苦にしない。まだ空はぐずぐずしていて、家に帰りつくころにはまた降り出してきた。台所でまだ幼い弟をおんぶして夕餉の支度にとりかかっていた母が、「朝早く出かけた時には晴れていたので、お父さんは傘を持たずに出かけてしまったの。」と傘を渡して、「お願いだからお父さんを駅まで迎えに行って頂戴」と言った。初めて一人で駅まで行ける、何故か私は嬉しくなった。鞄を投げ捨てると父の傘をつかんで小川と逆方向に道を歩き出す。右に二軒左に三軒ある戦前からの家の並びを過ぎ突き当たると前は畑でその前を左右に延びる道が走っている。左に行くと先のお地蔵様に戻れるし、右に行くと左手は畑が切れるとS2家の鬱蒼とした奥の見えない竹藪が続く。右手は角の住宅の隣から直ぐS1家の木々に覆われた垣根が続く。先細りの

道で大きめの不揃いの石を撒いて固めたせいか、雨の流れで洗われる度に土が流され幾筋か複雑な溝が出来ており、そこに様々な角度や埋まり具合で頭を出している石ころがゴツゴツと足に当たって痛い。夜道は足元に危険がある。この先細りの鬱蒼とした道を突き当たると、左に行けば駅、右は小学校の脇を通って先は石神井川に達する、埼玉道に出る。出口左手角に今にも倒れそうな細い電柱が立っており、形ばかりのぼろ笠の付いた薄暗い裸電球が竹藪と密集木立に鬱蒼と覆われた結構距離の或る道の唯一の照明で、埼玉道を挟んだ向かい側も農園なので、大人でも夜はぞっとするぐらい怖いようだ。

勢いよく埼玉道に出てこれを左駅の方向に急ぎ足で歩きを続けた。左はS2家が大きな門の奥に窺える垣根の木々が続き、右手は歯科医の屋敷に始まり、まばらに小間物屋などのお店が、更に行くと左手にも床屋や衣料店や洗濯屋が現れる。少し賑やかに食料品店などが現れるのはその先火の見櫓の本道がお地蔵様を越えてこの道と交差したところをもう少し真っすぐ先へ行ってからである。左右に豆腐、乾物、野菜、果物、肉、米、パン、酒調味料のお店が目に入る。それらの間に生活関連の表具、畳、文房具、花卉、瀬戸物、荒物、薬といったお店がポツンポツンと出てくる。長靴を履いたまま飛び出て来たし道も広く雨足はあっても余り気にならないで、母についていて行くのと違い初めて自分の勝手で駅までの道を左右の風情を見渡し楽しみながら歩き続けた。

駅が近づく、道は斜め右に向かって踏切を横切るが、その踏切のこちら側左手に人で賑い売込みの大きな声も聞こえてくる市場が急に目に入る。建物も地べた吹き抜けの、内部はどうやって支えているのだろうと柱も歯抜けのようで心もとない。いぶかれるように古びた迷路のような空間に、線にぶら下った裸電球に照らし出されて、小さな仕切りも曖昧な多数のお店が肩を寄せ合うように並んでいる。今日はこちらに用はない。様子も分らず住んだ日から、ここを教えて貰った母は弟をおんぶし、私がその時間にいれば、買い物運びを手伝わせて、忙しい時間に少しでも必要な食材を多く易く調達しようと通い始めていた。私がこの喧噪と好対照と考える店が市場の傍にある。一つは結構間口も広く取り扱い書籍も多い本屋であり、もう一つは明らかに戦前から残ったどっしりと木目正しい作りの、風情ある色調の建物で、落ち着いた雰囲気の名前も古めかしい和菓子屋である。

踏切を横切ると直ぐ線路沿い左前方に駅舎が見える。こちらから見て木の四本の柱で四隅を支えられた吹き抜けのコンクリート敷きがらんどうの駅待合があり、こちらから正面奥背後に繋がる事務棟前面に切符売場が窓口を開いている。左手線路に向かった開口部には駅員さんが中に入って、両脇を抜けて構内に入って行くのとホームから降りて出てくる客を、切符を切ったり受け取った

り定期をチェックする木枠の囲いがある。その先に下り線のレールを横切って右手に石段を登るとホームである。こちらからホーム全体の長さの三分の二くらいまで吹き抜けの屋根がちょこんと乗ったきりのホームであった。この数段の石段を乗降客が上り下りして改札を出入りする。出入り口はこの一つだけである。着いた頃には雨はまた下火になってきていたが、数人の迎えの先客が駅舎内にいた。丁度ラッシュ時だからであろうか、下りの電車が着く度に十数人の帰り客が降りてくる。ホームから乗客を吐き出した下り電車が音を響かせて出てゆく間、石段の下で待たされた客の足先が電車の車輪や器具のついていない腹の向こうに、見え隠れする。そして再始動した電車の最後部がゴトンゴトンとかけ抜けると、皆が顔を見せて改札へ歩いて来る。数人が傘に迎えられ、ともに傘を差し乍ら駅舎を離れて家路に向かう。小さな子が迎えにいると、ひと際大きな声の会話が聞こえてくる。

待っている途中で逆に乗り込み客の二人が盛んに大きな声で興奮気味に話しながら駅舎に入ってきた。耳を傾けると今観て来た映画の話をしているらしい。そういえば駅まで来た道は駅の脇を抜けて行く。こちらから行ってホームのつい先にある駅の反対側から踏切を越えてくる道にぶつかって右に曲がった角に映画館が出来たらしい。いつか映画なるものを見てみたいと思った。父はこの日は普通の帰宅時間の予想の一番遅い時間に帰ってきたので、数台電車を待った。それまでに初めて一人で出迎える緊張感と期待感ないまぜの、これ迄感じたことのないような気持ちで、何か地に足がつかぬような感じが強まってきていた。出迎えの言葉を大きな声でかけてみようと勇んでやってきたのだが、子供たちの大きな声を聞くたびにそう年も違わないのに「もう子供ではないし」といった恥じらいの気分が頭をもたげて来た。線路の向こう側浅間神社の先辺りに住んでいる担任の先生の「もう子供ではないのですからしっかりね」という口癖と優しい顔を急に思い出し、それがダメ押しになった。そして周りの人より首一つ高く出し手改札に向かってきた父を見つけた時には、飛んで行きもせず大きな声も出さず、「お帰りなさい」と傘をさし出しただけであった。

田舎の母の実家にあったような電話は、まだ頼んでも時間が掛かって入ってなかったので、雨降りなどの場合も臨機な連絡はとれず父も誰か迎えに来ているかどうかは覚束なかったと思う。来てくれしかも私一人だったので、それだけで逆に父の方は嬉しさが強かったのだろうか、改札しながら大きな弾むような声で私の名前を呼んだ。むしろこちらがどぎまぎしてしまった。恥ずかしがり屋の引っ込み思案の子になったのはこの日からかも知れない。しかし、私も一人で駅まで歩いて辿り着けたことには誇らしさがあったし、父の助けになることも嬉しかった。忙しい父とゆっくり話しながら傘を並べて帰路

の時間を共有することも、上京して初めてでなんとなく気恥ずかしい気もしたが、やっと父子というしっくりした気持ちを感じもした。父も同様だったのか、いつもより声が弾んでいた。駅からの道がお地蔵様からの火の見櫓の本道と交差する手前に新しく出来た和菓子店の前でふと立ち止まると、丁度やんだ雨に傘をすぼめ、「ちょっと寄って行こう」と私の肩を左後ろ手で押すように店の敷居を跨いだ。御客はおらず「ごめん下さい」と声をかけると、白い割烹着姿の奥さんが奥への出入り口の暖簾を少しかき分けて、「いらっしゃいませ」と言って顔を出した。

早い梅雨入りのこと、開店に関しての先方の挨拶やこちらの期待等、後から顔を出した菓子作りのご主人も交えてひとしきり紹介し終えると、「何にいたしましょう」とその白い割烹着姿の奥さんが尋ねた。喧騒の中で「これ、あれ」と急ぎ買い進めて行く市場での母の遣り取りとは違った、お店での所作もあるのだと一つ学んだような気がしていると、父は「漉し餡と黄な粉の牡丹餅を四つづつ、お願いします」と注文した。「おはぎですね」と念を押されると父はすかさず「これは失礼、そうです、故郷では牡丹餅というものですからつい、我が家の好物でもあり懐かしくて」と返した。「それは、それは、有難うございます。お気に召して頂けたら幸いです。どうぞこれからも御贔屓に。」と微笑み返された。この新しいお店は、～堂でもないし、老舗の堅苦しさも感じさせず、比較すれば狭くお菓子の種類も少ないが、店主夫妻の打ち解けた様子や何となく奥ゆかしさを感じさせる応対ぶりもあり、口にも合ってその後行きつけのお店となった。お客も増え、品数も増え店構えも更に整って、我が家も色々な和菓子を楽しませて貰った。味は勿論だがお店の応対や雰囲気も大事なことを学んだ気がした。

その年の秋の気配が濃くなった頃の金曜日の夕方、早めに帰宅した父がその儘の恰好で母と揃って出かけて三時間ほど留守にした。帰宅し母が遅い夕食の用意をしている間、何時ものように浴衣に着かえた父と食卓で待っていた。父は夕刊を見るともなく見ているようで、顔には何か無念と心配がないまぜになったような表情が窺えた。私は思い切って話しかけてみた。「今週初めからM君は休んでいたんだけれど、今日学校で彼のクラスの先生が朝『M君が今日で本校を辞め転校されます。その為直ぐ帰らなければなりませんが、皆さんに挨拶する為M君が来てくれました。』と紹介したそうで、サヨナラの挨拶をして皆で校門迄見送っていたんだ。丁度居合わせて『何処へ』と聞いたら『母の実家の鎌倉へ』と言っていた。遠いから会えなくなり寂しいし、叔母さんは如何なのかな。」と。

「うーん、そうか。」と言って考え込むように暫く間を

取った後父は、「叔母さんは清さんに付き添われて病院の車で先発し、Mはお迎えの御爺様・御婆様と一緒の車で後を追って行った。叔母さんは東京の病院では薬効なく静かな鎌倉で静養した方がいいだろうということで、御実家に帰ることとなった。残念だし、お前も寂しくなるよね。でもそれが叔母さんの体には今一番いいことなんだ。」と自分にも納得させるような言い方で答えた。その話はそれ以上は繋がらなかったし母が用意した遅い夕食が始まった。その夜父も母もそのことを話題にすることはなかった。床に就いてからも私は暫く寝付かれず、M君のことを思い出していた。これまで授業を休むということはなかったし、就学の姿勢や成績は遊び中心の私とは比べ物にならないほど真面目だった。ただ授業時間が終れば決して残って遊びや運動に付き合うことはなく、一人でさっさと帰って行った。先生も分かっていて皆で行事がある時も定時退校を許してくれていた。私は出来るだけ授業の合間に話をしたり、彼が帰ったり居なくなった時何か必要な情報があれば極力そのクラスの遊び仲間からも収集して教えてあげるようにしていた。家庭の事情も他の生徒よりは分る訳だから、彼の行動に言葉を挟むようなものが要れば何とか説明して孤立せぬよう守った積りである。運動や遊びが不足しているせいか体はひょろりとして色白であったが、読書量の多さには吃驚するほどであった。特に自然や科学の知識は深く、教えて貰ったことも多く、理科や算数の授業では先生を驚かせていたようだ。叔母の話は彼も口にしなかったし、私も聞きづらくあの日の儘になっていた。体調がよくないとすると、あの窓から手を振ってくれた相貌は更に細り青白さが増しているのだろうか、何とか良い薬効あるものはないのだろうかと、とつおいつしながらやがて寝付いてしまった。

そしてその年の終わりの或る土曜日の夕方、父と母が喪服を着て鎌倉へ出かけて行った。私は帰りを待つ間に、母の鏡台の上に閉じた見開きの記念写真が置かれていることに気が付いた。何気なく開いて覆いの薄紙をめくると、叔母が結婚衣装を着て新郎とおさまった一枚の写真であった。初めて見る叔父であろう人の姿であった。父やこちらへ来てから会ったその姉の伯母や、写真で見た長男である父の直ぐ下の弟で戦地で亡くなったもう一人の叔父とは全く違った印象であった。もっと驚いたのは、一緒に素人写真が一枚挟まれていて、それはあの離れの家の門の前で二人が並んで写っているスナップ写真であった。背広姿で会社にでも出かけるところであろうか、叔母は普段着の洋服にエプロン姿であった。叔父は大戦が始まってから大学を卒業、応召し亡くなったと聞いていたから、その間に就職し結婚して間もなく入隊そして戦死ということだったのだろう。二人いる弟を相次いで

戦争で失った父の無念、そして残された叔母の病死、その悲しみは如何ばかりのものであろうか。葬儀に向かっている父と母の胸中を察しながら、暫し放心したように写真を見つめていた。

ただ見つめていただけだが、二枚の写真でその他に印象に残ったのは、結婚記念写真は台紙に刻された式場名で、後に知ることになるが、それは開戦前年、教師をしていた父が大阪から上京して数年勤めていた協会の会館名であった。そしてスナップ写真は今と全く変わらぬ佇まいの門前であった。M君を雨中送ってその門の前の道を歩いたが、その道を逆に真っすぐ後方へ辿り、そのまま真っすぐ行くとこの道もまた父を迎えに行った埼玉道が踏切を渡る直前のところで合流する。そこを生前の叔父が駅まで短期間にせよ通っていたこと、叔母も一緒に歩いていたであろうし、あの離れの何処かの窓から夕餉の支度などしながら叔父の帰る姿を待ち受けていたこと等が、思い出と空想がないまぜになって、自分自身の道が叔父の道に重なっているような不思議な思いに捉われた。そうもう一つ、台紙に書かれた叔父の名は父や次男の叔父同様一文字であるが、上二人は子供には読めないが、三男の叔父の名はそれと分かり画数も少なく対称形で直ぐに親しみが持てた。そうしたことから頭の何処かに何らかの形で叔父が棲み続けていたように思われる。

門前の佇まいも垣根のそれも含めて道のそちら側は変わらぬ気配であった、多分右側もそうだっただろう。それを写真の中で叔父が静かに見つめている。道を歩く時無意識に叔父の目線を想像していることが多くなったように思う。

（つづく）

江戸庶民の「名刺」（4）

山田嘉久

前号では、江戸時代においては武士、庶民を問わず、個人は領主支配、身分団体、そして「家」という3つの関係に包まれて存在していることを記した。

そして、この3つの関係から見放された場合には、生活や「いのち」の保証はされないが、それに関連して、武士の「脱藩」、庶民の「無宿」についても触れた。

更に江戸時代の追放刑について敷衍する。

（7）その他の追放刑

○流罪

追放刑の一つに「流罪」という刑罰があったが、死罪に次ぐ重刑であった。

律令体制下では流罪は畿内からの距離により3つに分類されていたという。近流は越前・安芸、中流は信濃・伊予、それに遠流は佐渡、隠岐など6ケ国だが、遠流のなかには安房も含まれていた。

後に上総、下総が追加されているので、当時の房総半島は畿内からみるとよほど遠国の地と見做されていることが判る。

そういえば永歴元年（1160）に源頼朝が流されたのは、房総と同じ遠流国の一つ伊豆国であった。

さらに遡れば、7、8世紀頃、修験の始祖といわれる役小角が妖害をなすとして大和から配流されたのも伊豆だった。（伊豆の南端石廊崎に立つ彼の碑を見た時、全く西国の人である小角がこんなところに現れたのかと不思議に思ったものだった。）

しかし、何といっても日本最大の流罪は、戊辰戦争の結果、本州最北端の下北半島の荒蕪の地に藩ぐるみ追いやられた会津藩の例であろう。（その折の遺書というべき柴五郎著「ある明治人の記録」は私の最も感銘を受けた本の一冊である。）

特に流刑地が島の場合には、「遠島」と呼ばれた。通称「島流し」である。

ただし対象地の一つ佐渡では米作もできるため流罪人にとっても十分食ってゆけるので、元禄時代には「遠島」の対象地から除かれている。

東国では八丈島などの伊豆七島であるが、大島は「島抜け」する者が続出したのでこれも除かれた。

あの赤穂浪士の遺児19名のうち成人男子4名も伊豆大島に遠島となっている。（うち1名は島内で病死、残り3名はその後、恩赦赦免となった。）

慶長5年（1600）「関ケ原の戦」で敗れた宇喜田秀家（五大老の一人）はすべての官位官職を剥奪され、八丈島に遠島となったが、同島で生活すること50年、84歳の天寿を全うしたことは有名である。

西国では天草諸島や五島列島などが流刑地となった。大阪関係では隠岐へ、他は対馬へ送られる者が多かった。

明治に入って政府は刑罰の改廃についての布達を出した。刑罰を「死」（死刑）、「流」（流刑）、「徒」（懲役）、「苔」（むち打ち）の4種とし、死刑には「梟首」（さらし首）、「刎首」（首をはねる）、「絞首」（絞首刑）の三つを定めた。

なお、明治7年、「佐賀の乱」により首謀者江藤新平が科せられた刑は「梟首」であったが、その際、彼の逮捕に役立ったのは彼自身が数年前に司法卿として初めて採用した「写真手配制度」であったとは皮肉だった。（江藤を主人公とした司馬作品「歳月」より）

死刑が絞首刑のみとなるのは明治13年（1880）の旧刑法制定後である。

なお、平安時代には死刑はなかった。この時代の公卿たちは、人を刑殺することによって、その魂により報復されると恐れたからだという。公家文化では自他の死を嫌い、法により人を殺すことを好まなかった。

死刑が復活するのは「保元の乱」（1156）だと司馬は書いている。（「街道をゆく」42（三浦半島記））

朝廷が後白河天皇方と崇徳上皇方に分れて戦った内紛だが、勝者平清盛（天皇方）が敗者源為義（上皇方）を為義の子源義朝（天皇方）に命じて殺させたことを指す。

鎌倉時代に入ると自分の生を軽んじるかわりに、他者の生にも冷淡だったことが判る。

なお、義朝の子が源頼朝だがこの乱以降、武士の存在が増し、以後700年に亙る武家政権へと繋がるきっかけとなったことは周知の通りである。

○江戸払い

江戸時代の刑罰に「所払い」という刑があった。江戸

の場合は「江戸払い」といわれた。

この場合、江戸の境界が問題となるが、古川柳に「本郷もかねやすまでは江戸のうち」とあるからこの辺りが境界であったのであろう。

「かねやす」は今でも本郷3丁目の交差点前にある。現在は化粧品などを売っているが、享保年間（1716～36）に口中医師（歯科医）兼康友悦が「乳香散」という粉歯磨きを売って繁盛した。

その「かねやす」の少し先に「別れの橋・見送り坂と見返り坂」と書かれた表示板が立っている。このあたりで縁者がとんと背中の一つも押して、「江戸払い」となった者を見送ったり見返ったりしたのであろう。

この坂を越すと（現在、坂らしいものはないが）「ご府内」（江戸市内）ではなくなるので、担当は江戸奉行所から関東郡代へと替わる。

この辺のことも「街道をゆく」37（本郷界隈）に詳しい。

「江戸払い」になった犠牲者の一人が江戸中期の儒者荻生徂徠である。彼は館林城主でのちに5代将軍職を継いだ徳川綱吉の侍医荻生方庵の次男として江戸二番町に生まれた。しかし徂徠14歳のとき父が綱吉の不興を買い（多分、綱吉の気ままな性格によるものだろう）江戸払いとなり一家は母方の実家のある上総国長柄郡二宮荘本納村（現茂原市）に移り住んだ。後に父の赦免により江戸に戻るまでの13年間はこの地は彼にとっての貴重な学問形成の場となった。

晩年、彼はこの上総時代を回顧して自分の学問の成ったのは「南総の力」と述べている。

（現在、この地は「荻生徂徠勉学の地」として県重文、この地で亡くなった母の墓標は市指定史跡となっている。また彼の兄春竹は弟徂徠が帰京したのちもこの地に残ったので、現在でもその子孫（元高校校長）の家系が存続している。）

司馬遼太郎が徂徠を評価するのは、江戸期を通じて一貫して官学だった朱子学を最初に批判したのが徂徠だったことによる。徂徠は朱子学を論駁し、古文辞学を標榜した。そして江戸末期には徂徠らの傍流の思想が主流の朱子学を脅かすようになる。そこで幕府の取った策が「寛政異学ノ禁」だった。

「異ヲ廃シ道ヲ衛ル」。異とは主として徂徠学派を指し、道とは道学すなわち朱子学をさしたが、結果は失敗だった。この失敗により「明治維新」は10年遅れたといわれる。

司馬は朱子学を一種のイデオロギーの学問、徂徠学をリアリズムの学問と規定した。それゆえイデオロギー排除、リアリズム重視の「司馬史観」に最も合致した学者が荻生徂徠ということになる。

そのため、司馬の後半生のライフワークとなった「街道をゆく」シリーズに最も多く登場する学者が荻生徂徠である。全巻43巻のうち、実に8巻に徂徠が登場する。

追放刑は明治維新によって廃止されたが、実質上当分続いた。例えば福沢諭吉は明治の初めに東京追放令を受けている。彼の啓蒙思想が当時は危険思想とみなされていたためである。

明治41年（1908）には流罪も完全に廃止された。

（8）官位、官名の剥奪

その徂徠が八代将軍吉宗に献上した著書「政談」の中で前述「官位官名」について興味深い指摘をしている。

「諸大名はすべて将軍の「御家来」であるが、形式的には官位を天皇から授けられている。これは徳川氏にとっては「安心なりがたき筋」である」と。

そして徂徠は解決策として朝廷の官位とは別に、武家独自の「勲階」を作ることを提案したが容れられなかった。

しかし、徂徠の危惧は幕末期に現実のものとなった。

尊王思想の高まりとともに、大名たちは天皇から「官名」を与えられていることを根拠に、自らの主君は徳川氏ではなく天皇であり、自分はその臣下（朝臣）であると認識、主張しはじめるのである。

「官名」に対する認識が幕末期に大きく変わることになった。

江戸時代を通じて、徳川将軍は朝廷からは「大樹」と呼ばれてきた。将軍の唐名である。

京都守護職であった松平容保が最後には慶喜に捨てられた時の恨みの詩も冒頭は「大樹」で始まっている。

「なにすれぞ大樹、連枝をなげうつ」（連枝とは容保など徳川一門を指す。）

「半途にして逆行恨みなんぞ果てん」と続くが、旧臣たちはこの過激な詩を見て世に漏れることを怖れ、門外不出としたという。（司馬遼太郎著「王城の護衛者」）

しかし最後の「大樹」であった慶喜も大政奉還後は朝廷からは「徳川内府」（同じく「内大臣」の唐名）と呼ばれたが、朝廷に反旗を翻して「朝敵」とされた以降は「徳川慶喜」あるいは単に「慶喜」と呼び捨てにされた。

それと同時に慶喜に率先して組した奥州会津、勢州桑名、讃岐高松、予州松山、備中松山、そして上総大多喜の六諸侯は真っ先に官位官名を褫奪（剥奪のこと）された。

そのため、わが郷土の殿様大河内正質（大多喜9代藩主）も「従5位下豊前守」を解官された。老中格として慶応2年（1866）、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍を指揮したためである。（因みに彼の長男が後の物理学者大河内正敏。）

これらの官位官名の褫奪処置は官軍長州藩の報復だったといわれる。この年を遡ること4年前、元治元年（1864）、長州藩兵は京都御所の近辺で会津、薩摩藩兵と軍事衝突をおこした。いわゆる「禁門の変」である。この事変に対して、朝廷は幕府の要請に応じて長門の藩主らの官位剥奪を行っている。この処置により、長州藩主（松平大膳大夫慶親）は従四位上・参議（宰相）・大膳大夫の官位、官名を剥奪された。（以後、「松平」の名字と将軍徳川家慶の偏諱である「慶」の字も幕府に召し上げられ、やむなく「毛利大膳敬親」と変名した。）

それが戊辰戦争以降、逆に徳川方に撥ね返ってきたわけである。

その結果、新政府に抵抗した東北諸藩主も次々と官位を剥奪された。

（9）御一新後の「氏名」誕生

江戸時代、武士階級では「名前」と「姓名」は全く別個のものとして併合していた。それが明治5年になるとこれに「氏名」が加わり益々分りづらくなった。

例を挙げて説明しよう。

例えば「大隈重信」の名前、姓名、氏名は次の通りであった。

名前＝①苗字（大隈）＋②通称（八太郎）

姓名＝③姓（菅原）＋④尸（朝臣）＋⑤名乗り（実名、諱ともいう重信）

氏名＝氏①苗字（大隈）＋名②通称または⑤名乗り（重信）

明治4年8月、政府は「姓名（姓尸名③＋尸④）の廃止」を打ち出した。7世紀末に作られた「姓」制度は、既に有名無実となっていたので当然であった。「姓尸実名」から「苗字実名」へと変更されたのである。

次いで翌5年5月、「名の創出」（②通称、⑤名乗りの統合通称、名乗り双方を持つ個人はどちらか一つにせよ）を決定した。

ここに「新しい氏名の誕生」となった。

新しい氏名＝大隈＋重信

当初、平民では名乗り（諱）を「名」（戸籍名）に選択したものは皆無だったそうだが、士族には大隈重信や西郷隆盛のごとく名乗りをそのまま新しい「名」にする者が多かった。

しかし、後藤象二郎や板垣退助は旧通称を新しい「名」とした。後に民権運動の関係した連中には後者の例が多かったようである。因みに後藤の名乗りは正本、板垣は正窮。

福沢諭吉も通称の「諭吉」を選んだ。因みに彼の名乗り（諱）は「範」という。もし彼がこの場合、諱を選んだならば「福沢範」となる。博識の司馬も何と読むのだろうと首をかしげている。（「風塵抄」（名前を考える））

なお、法律上、「苗字」（苗氏）が「氏」という用語に統一されたのは明治11年頃とされている。

「西郷隆盛」という新しい氏名の誕生について、司馬は次のような逸話を紹介している。（随筆「日本人の名前」）

西郷の通称は始め吉兵衛といったが、のちに吉之助と改めた。明治5年、新しい名を届けることになったが、生憎、その時彼は東京にいなかった。そこで友人の吉井友実（幸輔）が代理で届け出た。しかし吉井は西郷の名乗り（諱）を正確には知らなかったので、うろ覚えに「隆盛」と届けた。しかし実は「隆盛」とは西郷の父親吉兵衛の名乗りだったのである。

後でこれを知った西郷は「おいの名乗りは隆永じゃど」とこぼしたという。

結局、本来なら「西郷隆永」となるべき新しい名が間違って「西郷隆盛」と届出されてしまったことになる。

ついでに弟従道の例。

代理人は係の役人だった。その役人から名乗りを聞かれたので、彼は「ジュウドウじゃ」と答えた。彼の名乗り名は「隆道」である。そこで彼は音でよんで「リュウドウ」といったつもりだったが、薩摩なまりでは「ジュウドウ」と聞こえる。係員はそのまま「従道」としてしまった。

新しい名の届出時の混乱ぶりが目に浮かぶようである。

大久保利通は通称は「一蔵」であったが、彼も名乗りの「利通」へ統一した。

桂小五郎にいたっては幕末までは貫治または準一郎が通称であったが、届出のときに名乗り名の孝允としたが、苗字まで木戸と改めた。

幕末に苗字まで変えた例に幕末の志士清川八郎がいる。出羽国清川村出身の彼の本名は斎藤元司である。

また、水戸出身で木村某はのちに芹沢鴨と名乗って、新選組首謀となった。

ついでに、世界の革命家には姓名まで変えて（すなわち変名して）成功した例が多いと司馬は云う。

例えばスターリンの本名はヨセフ・ヴィサリオノヴィチ・デユガシユヴィリである。

またウラジミール・イリイッチ・ウリヤーノフとはレーニンの本名である。

さて、一般庶民の「名前」は明治以降どう変わったのであろうか。

江戸時代でも百姓や町人はその多くが非公式には苗字を持っていた。ただ、領主あての公文書の中で苗字が使えなかっただけである。

だから私信を書いたり、寺社に寄進をしたりするときには、かなり自由に苗字を使っていたようだ。

また、墓石に苗字を刻む庶民も多かったし、領主もそれには寛容だった。

水戸藩などは百姓に墓石への苗字彫りを公然と許可している。江戸時代には後述のように（特に百姓間では）何兵衛と何右衛門とか同名が多かった。そのため墓に苗字がないと誰の墓か分からくなってしまう。そこで「位牌石碑に限り苗字を認め候義、御免相成候」とのお触れを出した。これが苗字彫りを許可した理由だが、むしろ江戸時代は一般庶民まで「家名」が普及し「家」を重んじる思想が浸透した時代であったといえる。

これに正式に変化をもたらしたのが、明治3年9月の「苗字公称の自由化」だった。政府は突然、

「自今平民苗字被差許候事」という短い布告文を出した。「苗字自由令」である。

なお、それと同時に、政府は「何兵衛とか何左（右）衛門とは本来、朝廷の官職の呼称であるにもかかわらず、そういう名を名乗るのは僭称である。以後、そういう名を禁止する」とのお触れも出した。

事実、当時の日本人男性の名前の半数が右衛門、左衛門、兵衛であったというが、衛門、兵衛は元来、朝廷の衛士を示す官名であった。それが室町期になると、この官名の私的使用がすっかり定着してしまっていたのである。

そこで、明治に入って、このお触れを出したのだが実行されたのは最初だけで、10年ほどでこの禁令は有名無実化してしまった。

（なお、序でに女子名について触れると、周知のとおり江戸時代は「はる」「はな」「たみ」など「かな2字名」が圧倒的だったが、明治に入ると「○子」が台頭してくる。元来、女子名に「子」を付けるのは平安時代などは宮中に出入りする女子にのみ許された名前だったが、大正初め頃になると庶民女子名の主流となるのである。しかしこの風習は大正、昭和の特徴で、平成に入ると急速に衰退した。）

なお、江戸時代には「公儀名」といってその家に代々伝わる名前があり、父が勘兵衛ならば子も勘兵衛というように何代もその名を継いだ。

これも今まで何度も説明したように、日本特有の「家意識」によるもので「子供は親と強く結ばれて家から離れない」「永久不変の家を守るもの」の思想が浸透していた結果であろう。

例えば、江川家は38代に亙って代々、「太郎左衛門」を名乗った。（しかし通常、「江川太郎左衛門」といえば36代「英龍」を指すことが多い。「英龍」は名乗り）

たしかに、「上下の区別」を重視する江戸時代では苗

字公称は社会的地位を判別する必要な役割を果たしてきた

しかし重要なことは庶民にとっては「苗字が名乗れないから悲しい」とか「苗字を名乗れないから不便だ」とか、そういう意識は一切持っていなかったことだ。

現在の「氏名」と違って、江戸時代の苗字は人名を構成する必要不可決な要素ではなかった。それが江戸時代の常識だった。

そのため「苗字自由令」が発動されても、依然として苗字を使用しない庶民が圧倒的に多かった。

そこで政府は明治8年、苗字使用を強制する布告を出した。「苗字強制令」である。その背景には明治6年1月に施行された「国民徴兵令」があった。

むろん、これに対して国民は「徴兵」という負を忌避した。初回の徴兵対象者のうち実に8割が兵役を免れたという。そこで政府は徴兵制度を厳格に実行するためには、国民一人一人の「氏名」を管理、把握する必要に迫られたのである。

特に熱心だったのが陸軍卿山県有朋であった。

「明治3年に苗字公称を自由化しているが、今後は必ず苗字を名乗れ。先祖代々の苗字がわからなのであれば、新たに決めて名乗れ」

そのため、大阪府下のある長屋（48軒）では代々の苗字がわからないので、赤穂義士の苗字をくじ引きで割り振って名乗ったという。

これは極端な例だが、懇意な士族の姓をもらったり、隣家と同じ姓をつけたり、神主や住職につけてもらったりした。

（注）「国民徴兵令」はその適用年代に地域差があった。本土では明治6年即時適用だが、北海道では明治20年、沖縄本島では明治31年だった。そのため、鈴木梅太郎や夏目漱石のように徴兵逃れのため本土から沖縄や北海道に転籍する者もあった。現に、漱石の「帝国大学卒業証書」には「本籍北海道岩内町」となっている。

なお同令は昭和2年「兵役法」に変更、昭和20年に廃止された。

（10）歴史上の人物の呼び方

このように明治5年、従前の「通称」と「名乗り」の統合により、「新しい氏名」の誕生となったが、「歴史上の人物」の取り扱いはどうなったのであろうか。

現在の歴史教科書を開けば、例えば幕府老中として「松平定信」「水野忠邦」などという人名が登場する。

しかしこれらは一律、「苗字＋名乗り」したもので、誰も当時、こうは呼んでいなかったという。第一、本人自身も称していないらしい。

こう呼んだのは明治5年以降の明治人である。

彼らの当時の専らの呼び名は「松平越中守」であり

「水野越前守」であった。

「名乗り」は別名「諱」であり元々、死後に贈られる称号なので相手を生前、諱で呼ぶことはほとんどなかった。

それゆえ、例えば織田信長を「信長さま」と呼ぶことは非常に失礼なことになることだった。テレビなどでかれの侍女たちが「信長さま」と呼び合っているのは全くのウソである。信長は晩年、右大臣に就いているので「右府様」と官途で呼ばれていたらしい。因みに彼の通称は三郎。

死後になってかれはようやく人々から信長と呼ばれるようになった。

（信長の一代記を記した「信長公記」（太田牛一著）も信長の死後、大分経った江戸時代に書かれたものである。）

源義経の「義経」という名も、かれの生前には呼ばれなかったはずである。無官のころには通称の「源九郎どの」と呼ばれ、官名をもらってからはその官名で呼ばれた。死後、ようやく人々から諱の「義経」と呼ばれた。

同じように石田三成はドラマなどでは「治部少」や「治部殿」と官途で呼ばれているが、官職が与えられる前は通称である「佐吉」と呼ばれていた。

「大坂の陣」のヒーロー的存在であり、敵方家康をして「日本一の兵」と云わしめた「真田幸村」に至っては、全くの架空の名である。本名（諱）は「信繁」（通称左衛門佐）。

大坂の陣以降、「難波戦記」を始め「真田三代記」「真田十勇士」「猿飛佐助」などが出版されたが、中心は常に「真田信繁」（小説では「真田幸村」）であった。即ち「幸村」はあくまで小説上のネーミングであるが、世上、本名の「信繁」よりも「幸村」の方が有名になってしまった。

（NHK大河ドラマ「真田丸」では最後まで「幸村」は使用せず、本名の「信繁」を貫いた。またある民放ドラマでは信繁が大阪城入場の際に「幸村」と改名したという説を採っているが、これを立証する資料はないという。）

また、「大塩平八郎」や「江川太郎左衛門」も「苗字＋通称」であり、通称の方が一般化した。因みに大塩の名乗りは「正高」、江川「英龍」も前述の通り、名乗りである。

郷土の偉人「伊能忠敬」は有名だが、当時は「伊能勘解由」（苗字＋通称）と呼ばれたという。現に幕府からの探検命令書には伊能勘解由宛てとなっている。

しかし、この名では、現代人は誰も判らないだろう。

これと反対に同じ冒険家「間宮林蔵」は「苗字＋通称」で知られている。因みに彼の名乗りは「倫宗」である。

これもやむをえないことであった。

日本人の人名は歴史上「名前」「姓名」そして明治5年以降の「新しい氏名」という3種類があり、しかもそれのどれかに表記を統一できなかったのである。

江戸時代の人間は、例えば「織田信長」という呼び名が、前述の通り、彼が生前使用した「名前」ではなく、歴史叙述上の便宜的表記であることを百も承知していたのである。

ところが現代人は明治5年以降の「氏名」の常識によって、これらの人名を見てしまう。従って「織田信長」が現在の「氏名」と同じように、日常的な人名であったと誤解してしまうのである。

ついでに言えば、江戸時代には、前田、島津、毛利などという大大名はいなかった。徳川の天下の時には松平賜姓といって大大名は大抵「松平」を名乗らされていたからである。このことは外様大名でも例外ではなかった。

加賀前田家は松平加賀守、島津家は松平薩摩守、毛利家は松平長門守と「松平」を名乗り、分家だけが前田、島津、毛利を名乗っていた。

だから教科書に「加賀藩主・前田綱紀」とあるのはウソである。江戸時代の人は「松平加賀守」と呼んでいた筈である。

徳川政権を安泰にするには、外様大名でも徳川一門にして取り込んでしまえば手っ取り早い。

そう考えたのは、徳川以前の豊臣政権でも同じであった。そのため秀吉はさかんに諸大名に「羽柴」姓を配った。徳川家康も秀吉政権下では「羽柴家康」だったのである。

豊臣、徳川の政権交代期には、両家の板挟みになり、たとえば加賀藩前田家などは同時期に2代藩主の前田利長が「羽柴肥前守」を、3代藩主の前田利常が「松平筑前守」と、2つの姓を分担して名乗る始末だった。

豊臣、徳川双方に脅えた時期だった。

それが、幕末になり徳川家が「朝敵」となると、前田、島津など全国の大名は掌を反すように、我先に戦国期の本姓に名前を戻してしまった。

明治に入り、時の新政府は「新しい氏名の誕生」に腐心したが、その新指令の中に次のようなお触れがあった。

（明治8年5月）

「婦女、姓人に嫁するもなお所生の氏を用ふべき事」。

女性は結婚後も実家の苗字を使用すべし、すなわち、夫婦別姓を基本方針としたのである。現在、喧しく騒がれている夫婦別姓論の起点と見ることができる。

ただし、その後、これに条件がついてしまった。

夫の死後、その家を妻（後家）が相続して戸主となった場合には、後家が夫の苗字を襲（かさね）て使用することとした。

このことは明治31年の民法によって戸主とその家族は全て同姓でなければならないとして決着した。

すなわち折角の指令も、冒頭の「家制度」に飲み込まれることになってしまった。

「新しい氏名の誕生」ひとつをとっても、明治維新はたしかに「革命」であった。その明治維新から今年（２０２２年）は１５４年を経る。奇しくもその中間点が「もう一つの革命」といわれた「終戦」である。（戦後７７年）。

明治維新を経験した福沢諭吉は「一身にして二生を経る」と云ったそうだが、その論法でいえば終戦を経験した我々昭和ひとけた人も「二生」を経験したことになる。

ただ、数多くの改革をみた明治維新ではあったが、江戸時代から続く我が社会特有の「家問題」（家長制度）はなんら改革も見なかった。そればかりか、明治31年の明治憲法下の民法制定によって却って強化されてしまった。それは終戦まで続いた。

江戸時代の人びとの最大の関心事は、武士であれ庶民であれ、「家」の維持であり存続だったことを念頭において、本稿を記した次第である。

（終わり）

続々　万機公論に決すべし（上）

浅野博文

一、和気清麻呂の皇統守護

一般的に、自然科学の求むる所は普遍的法則であるが、古人は単に法則を追求しただけではなかった。彼らにとって科学の究極とする目的とは、神と原理が一つである事の実証にあった。例えば、十六世紀のコペルニクスとガリレイは、地球の自転（地動説）という普遍的法則を確立した事により、西洋に於ける教会的宇宙観（天動説）は粉砕される事となった。しかし、それによって彼らが神を否定する様な事は決して無かった。自然の原理を解明し、その領域を認識する事が、神の威光に近づくための最たる道であるとの信念も揺らぐ事は無かった。何故なら、宗教的情操と科学的洞察力を兼ね備えていたルネッサンス期のダヴィンチに観られる様に、神が全知全能であり、自然の原理を創ったのも神であるという伝統を正しく受け継いでいたからである。寧ろ、地動説とは、神の原理を美しく整然としたものであると信じ、科学を追求し続けた結果である。その合理的に導き出された絶対の答えに対し、理解の追いつかない教会が、宗教裁判（ガリレオ裁判）などの迫害を以て報いた事は、敬虔なキリスト教徒として誠に不本意であったに違いない。それでも、聖書と共に歩んできた先祖の特殊的事実への思いが挫かれ、科学者として矜持する所の魂が奪われる事は遂に無かった。

ところが、十九世紀のチャールズ＝ダーウィンの時代になると、神と原理は完全に切り離され、宗教と科学は対立するものと考えられる様になった。彼の主張として、人類とは進化の過程の結果であり、「祖先たちの長い列」の最後の一環であるとした有名な進化論がある。それは、

『人類の由来』（The Descent of Man 1871）が出版されて以降の思想界と宗教界に大激変をもたらした。当時の人々にとってそれが衝撃的だったのは、その内容が進化という普遍的法則に当てはめれば、人類が最も低級な有機体（the most humble organism）を端緒とし、その長い進化の過程を経た結果であるとしていたからである。平たく言えば、人類の先祖は猿であると断言していたのである。既に、大航海時代を皮切りとして、有色人種を人と見なさない残虐な行為を正当化していた西洋の有識者にとって、それを受け入れる事は自己否定に等しかった。したがって、どんな事をしてでも、自らの存在意義を正当化しなければならず、進化に於ける適者生存（the survival of the fittest）を大義名分としたのは当然の帰結であった。但し、依然として、人間が万物に於ける唯一の倫理的存在であるというのを考慮しない暴論である事に変わりはない。

ここで特筆すべきは、ダーウィン自身の変化である。進化論を世に問い、様々な分野に於いて自説が独り歩きするのは不本意な事であった様だが、進化という真実を悟った瞬間から、先祖が代々信心してきたキリスト教への思いは急速に失われていったのである。生物学者として、生命そのものの美しさを愛でていたにも拘らず、キリスト教徒として今日の自分に繋いできた祖先の心を大切に思う事はしなかったのである。自然科学に於ける普遍的法則は尊重するのに、自分に最も関係の深い祖先の特殊的事実に対しては弊履の如き扱いとしたのである。それは、変節というよりも自己否定であり、ルネッサンス以来一体であった神と原理の決別を、ここに於いて確認するのである。自己を孤立的に考え、他者を顧みず、その理性を絶対化する西洋の近代合理主義思想の特徴とは、産業革命が開始され、大量生産に伴う原料確保の植民地と商品を売りさばくための市場を必要としたこの時期に於いて、最も顕著であったと言えよう。

科学を最高の価値とし、科学技術文明の華やかな展開だけを人生の真実とする現代の思想が、この延長線上にあるのは誰の目から観ても明らかである。しかし、それが人類に物質的な豊かさをもたらし、多くの社会問題を解決して来たという事実への過信に傾くのは禁物である。何故なら、今日までの人類文明の高度な発展が、自然環境に深刻な影響を与える中で達成されてきた事実が示している様に、それはどこまでも人間本位に立った考え方であり、他者との間柄については考えられていないからである。現に、喧しい保全の声に反して地球環境破壊は深刻化している。この先に於いて、科学の重要性が増す事は言う迄もないが、それと共に、自分と他者とをつなぐ「倫理への通路」を見出す努力をし続けない限り、ポストモダンや近代の超克という目的を掲げた所で、その解決は難しいであろう。その意味に於いて、「器械芸術

彼に取り、仁義忠孝我に存す」（重野安繹撰『景岳橋本君碑』に見える橋本景岳のことば）として、近代国家の本質を、古代の律令国家の根幹をなした和魂漢才にならって和魂洋才に置き、欧米諸国とは異なる道を追い求めた日本にこそ、それを解決する力があるのではないかと改めて思うのである。

閑話休題、近代科学発達の変遷が示す様に、それを生み出す大きな働きをなしたものが西洋のキリスト教であった事は疑いない。但し、前述した様に、それが旧来の伝統の民族的信仰を殲滅して興隆した宗教であり、バイブルの『創世記』が示す様に、創造と破壊を本質としている。加えて、現代にあっては、その分身とも言うべき科学の権威が、キリスト教の神に取って代わっているのは確かであろう。ある意味それは必然なのかもしれないが、問題は、現代の科学技術が強力な破壊力を有し、簡単に人類文明を滅亡させる事が出来るという点である。そうであればこそ、今一度、自然科学の求むる所の普遍的法則の発見が、聖書と共に歩んできた国の特殊的事実に立脚していたという事実と向き合い、今日何を為すべきか、何が大切かと考える事は愈々必要となって来るであろう。また、それは科学だけに限らず、特殊的事実（父祖の足跡）について言えば、国家や個人が永続する上で、最も重要としなければならないと確信する。何故なら、歴史的事実として、我が国の記紀に記される「邦家の経緯、王化の鴻基」が、歴史の中で働き、歴史の中で伝承され、皇位の神聖に対する日本人の伝統的信念を培うと共に、政治経済産業文化を発展させる上での奇しき原動力となった来たからである。

その事は、合衆国人民のフロンティア精神を支え続けて来たのが、米国の歴史書に記された建国の文書とジョージ＝ワシントンやリンカーン等の偉人の足跡であった事とも重なり合うが、アメリカという植民地を失った大英帝国とっては、独立軍の行為とは背徳でしかなかった。今も彼の国の歴史書に、独立軍を反乱軍として扱われているものが少なくないのは、自国の歴史を学ぶ意義が、単に古昔に拘泥するのではなく、国家や民族が継承発展の柱としてきた精神の伝承に極意がある事を示していると言えよう。伝統が断層を忌み、廃絶を嫌うというのも、その対極に位置する革命思想の本質が、伝統の切断にあるからに相違ない。現に、世界のどの国にしても反乱や革命を善い事とは考えず、国家の滅亡を悲しむべき事としているのは確かである。その一方で、理の当然として断絶廃絶は避けられず、所詮、歴史とは変遷推移に過ぎないものであるとして、国家の前途に暗い影を投げかけているのもまた事実である。革命思想に立脚する諸行無常や万物流転を、この世の中を貫通し、人

生を支配する動かしがたい鉄則として結論付けているのである。

確かに、現代に於いては宇宙の終焉を説く科学者も存在するくらいだから、唯物論的な見地による人類の滅亡は否定出来ないのかもしれないが、それが即ち、人間社会に於ける道徳の無価値を意味するというのであるならば、それはどこまでも間違っているであろう。何故なら、人間というものは一人で生きるものではない、倫理的存在に他ならないからである。明治天皇が御製にて、一人も我も 道を守りて変らずば この敷島の国は動かじ」と仰せられたのは、国の安泰は道義を守る事が根底であるとの御叡慮に他ならない。聖徳太子の憲法十七条が、我が国史に基づいて示されているのも、一国存立の基礎は道徳にあって法律ではなく、それは歴史から出てくるものとして認識せられたからである。畢竟、我々が日本人として立つためには、第一に、特殊的事実（父祖の足跡）を知らなければならない。普遍的法則とは、その上に立ってはじめて求められるというのが順序であろう。振り返れば、明治維新に始まる日本の戦前に於ける教育とはそこが重視されていた。『教育勅語』がその証左である。国家に於ける革命とは、この順序の連続により主するものであり、人間を革命思想に従わせる事が、人間の尊厳を認めない行為であると考える理由はそこにある。

その様な見地から、今日の科学技術の展開に目を向けると、生物の遺伝子操作や人工知能といった、かつて「神域」と称せられた分野の先鋭化が際立つ。自然と人生とを不当に見くびる人間の傲慢心が強く現れている様にも感ぜられる。その根本には、もはや特殊的事実など問題ではなく、倫理の否定・破壊という立場に立った革命思想しか確認できない。しかし、古今東西に於いて、人の人たる所以が倫理的存在にある事に変わりはない。本稿で、天壌無窮の神勅・神武天皇建国・大化改新・建武中興・明治維新と振り返っているのは、そこに、万世一系の日本歴史が特質とする忠孝の発露が観られるからである。古来より、儒教に於いては「君主の国」、仏教に於いては「大乗相応の地」たる実を示して来た日本が、世に蔓延する革命思想を打ち破り、世界を救う事は大いなる使命であり、唯一の存在である事を決して疑わぬ。目の付け所を眼前の利達や一身の栄耀にしか置かない世界各国の中に在って、真に大義名分を論ずるに値する国は、日本を措いて他はないと確信する次第である。

閑話休題、かなり前置きが長くなったが、歴史の本質が精神の伝承にあり、それが文明の盛衰を決する上で、最も重要な部分であるとするのが私の歴史観である。それは同時に、私の人生観でもあり、日本の武道に於いても、心技体を本質とし、心を第一義とする。したがって、

精神史的特性による時代区分に基づき、古代・上代・中世・近世・現代（近代）という風に分類選択するならば、推古天皇以前の精神生活とは、純粋に日本的特色を帯び、外来の影響から比較的自由であった古代に位置付けられる。一方、飛鳥・奈良・平安（保元の乱以前）時代とは、シナ文化やインド仏教の本格的な伝承及び日本化が、皇室を中心に華やかに展開する事から上代となる。そして、具体的にその嚆矢とは、聖徳太子の御事業を完成させた革新運動である大化改新であり、孝徳天皇による「改新の詔」が、公地公民を政治の基本とする事を示した。それは、天下の土地人民を天皇が治められる事であり、氏族社会はこれを機に一変したのであったが、ここで注意すべきは、外国の専制君主の政治と大いに異なり、その政治は公平無私であり、私が無いという事が最も重大なる特色をなしていた。

事実、男女を問わず田畑が配分支給（班田収授）されると共に、国税（租）と兵役（防人・男子）の義務を規定した新政の大綱を、人々は当然の事として受け入れた。以下の『万葉集』の歌とは、その事を示す一つの表象と言えるであろう。

> 海ゆかばみづくかばね山ゆかば草むすかばね
> 大君の辺にこそ死なめ顧みはせじ
>
> 大君の勅（みこと）かしこみ磯に触り
> 海原渡る父母を置きて
>
> 今日よりは顧みなくて大君の
> 醜（しこ）の御楯と出で立つ吾は

加えて、当時の国際社会に於ける唐王朝の脅威があった点（白村江の戦い）も見逃してはならない。この時の漢人の勢力は前古未曾有、「胡越一家、古より未だ有らざるなり」（『資治通鑑』）の有様であった。この事も、天皇を核心とする忠孝一本・君民一致の国柄であるという自覚と、自らの国は自らで守るという強い国家意識が生まれる大きな要因となっていたであろう。

そして以上の如き、上代に現れた傾向とは、幕末や日清・日露戦争、大東亜戦争の危機に於いても観られた。例えば、幕末の嘉永四年（一八五二）、孝明天皇は「身の危うきを顧みず、雄々しく烈しき誠の心を尽くし」との宣命を以て、和気清麻呂公を御追賞あそばされ、護王大明神の神号を贈られた。それは、日本の国柄に対する明確な自覚の表れであり、欧米列強の勢力に対し高まる

尊皇攘夷運動の只中での大御心として、王政復古の先鞭となった。今日も皇居の平川橋付近に尊像が建つ、和気清麻呂公の最大の功績とは、皇位継承の鉄則を守った事であった。『続日本紀』神護景雲三年（七六九）には、「我が国家は開闢より以来、君臣の分定まれり。臣をもって君となすこと、未だ有らざるなり、天つ日嗣（天皇）は必ず皇緒（皇族の血統）を立てよ。無道の人（道鏡）は宜しく早く掃ひ除くべし」と、公が奏上した宇佐八幡宮の神託が記されている。無道の人、道鏡による皇位簒奪の企てとは、我が国の特殊的事実の源泉をなす皇統が断絶するという意味で、上代に於ける国家最大の危機であった。

それは、改新以前の聖徳太子が、国を治める上で仏教の力を借りて人々に反省を求めた様に、公私を通じて外国と交際を続け、その文化を学び、その善き面を摂取する努力が続けられている中での事件であった。特にこの背景には、仏教が個人の精神的救済よりも、現実的な国家の発展を重視するという側面があった。加えて、僧侶自身も有識者を代表する存在として、政治に対して深く関わり、大きな発言力を有していた（聖武天皇の御代に於ける行基は有名）。道鏡とは、その様な時代的状況下にて現れた。当初は看病僧として、称徳女帝の病を治した事により御信任を得て、律令官制に無い太政大臣禅師・法王という破格の冠位を賜り、政界と仏教界の最上の地位を兼ねる事となった。それが却って、驕慢と自恣を生み、国家鎮護を祈願する僧侶としての志を失わせ、遂に、〝皇位は必ず皇族が継ぐ〟という、我が国の歴史と伝統に反抗する形で、天位を望む様になった。この時、大宰府の神官・習宣（すげの）阿蘇麻呂が宇佐八幡宮の神託を枉げて、「道鏡を皇位に即かしめなば天下泰平ならん」（『続日本紀』）と上奏してきた事により、その野心が遂げられるかに思えたが、忠臣・和気清麻呂の「致命之志（決死の覚悟）」（『日本後紀』）を以て阻止せられ、邪悪は克服されるに至ったのである。



皇居　和気清麻呂像

二、延喜・天暦の聖代

その後の清麻呂公は、桓武天皇の即位によって、坂上田村麻呂と共に朝廷に於ける文武の要として、その御信任は厚く、善き子息にも恵まれた。『続日本後紀』に於いて、国家鎮護の大道場として後に日本仏教の大潮流をなす「天台・真言両宗の建立は、真綱及びその兄但馬守広世両人の力なり」と、その功績について讃えている。しかし、宇多天皇の仁和三年（八八七）の詔に「（万機を）皆太政大臣（基経）に関白して然る後に奏下すること、一に旧時の如くせよ」（『日本紀略』）とある様に、天皇親政の実は、この頃になると殆ど失われ、大化改新以来の重臣である藤原氏に政治の実権が移る事になった。それは、この家が代々優れた人物を輩出していた結果とも言えるが、飛躍の転機となったのは藤原北家出身の良房であった。文徳天皇の御代に太政大臣となり、清和天皇が僅か九歳で即位されると外祖父として実権を握り、貞観八年（八六六）、遂に摂政に任ぜられた。

一体、摂政とは君主に代わり、政務を執る役職であり、聖徳太子や中大兄皇子の様に、皇太子・皇族がその任に就かれるのが例であったが、外祖父という立場より、良房は人臣摂政の先例となり、良房の甥で養子の基経は、宇多天皇の即位の際に関白に任ぜられた。これは、天皇の大権が下に移る端緒を開いた出来事として有名であり、関白に至っては、従来の摂政が、天皇御幼少の間のみ政を摂するという事に対して、既に御成人のあかつきに於いても、一切の政治は関白がこれを見る様になったのである。律令体制の根本である「天皇万機の政をみずからしたまう」という部分が動揺し、持続的に政治の実権は臣下の手に移るという事になったのである。

また、律令体制の動揺という意味で、公領としての口分田の絶対的な不足を解消する手段として、土地の私有を認め、開墾を奨励した政策（墾田永年私財法・七四三年）も大きな意味をもった。それは、律令条文の不備や地方官吏の不正を招き、人々の土地私有に対する強い欲望を刺激したのであった。特に、貴族や寺院による大土地所有（墾田地系荘園）の傾向は、更なる私財獲得を目的として、免税や国家の司法・警察権不干渉の対象とする有力者に寄進された（寄進地系荘園）。詮ずる所、天下の土地が荘園として藤原一族の権力下に集められたのであるが、公地公民を前提とした、律令政治の中枢に於ける藤原一族を助けるものではなく、却ってその身を責めるものでしかなかった。実際、その数が増大すればするほど多くの問題が明らかとなった。第一に、荘園増加による国領の減少が進む中、国家財政は税収不足に悩まされる一方で、私利をむさぼる国司による農民への苛斂誅求がくりかえされた（竹内理三編『平安遺文』所収「尾張国郡司百姓等解文」）。第二に、それに反発する形で班田を放棄して群盗化した者の跳梁跋扈が顕著となった。

そして第三に、武士の台頭である。第一・第二の状況に対して、中央にいる領主に代わり全国に点在する荘園の実務に当たっていた荘官達は、家子郎党に至るまで、自衛のために武装する事となり（武士の起こり）、次第に地方の実質的な支配者に成長していった。その様な中で、中央の藤原氏の勢力を嫌って、国司として地方に下った皇族の子孫（源氏・平氏）や貴族（奥州藤原氏）が、その家柄や声望をもって彼らを取り込んで武士団を形成し、次第に力を蓄える様になった。それは後に、朝廷に於ける公家の勢力争い（保元・平治の乱）が、武力による決着を要求した際には、政権争奪のキーマンとして、中央に登場する足掛かりとなった。本をただせば、蘇我氏や道鏡と同様、輔弼と独裁とを混同した藤原氏に、君臣関係や忠孝といった道徳の意義、その根拠である歴史に対しての忘却があり、それが律令政治の大前提である公地公民の原則に甚大な歪みを生じさせたのであった。この様になってくると、「水は方円の器に随い、人は善悪の友による」と言われる様に、律令体制の回復が困難になるのは必然である。

改めて、日本の歴史の源泉が皇室に存し、その上に立つ日本の道徳の柱とは、どこまでも忠と孝に存すると言えよう。そして、歴史が示す様に、道徳を守り続けるのは容易な事ではない。そこには絶えず、人の無自覚や怠慢が付きまとい、国家や民族を断絶や消滅へと導くからである。しかし一方で、それと対決し忠孝と体現する国家を追い求めた努力とは、必ず国家の永続性を保つ可能性として子孫に受け継がれるのである。事実、崩壊へ向かう律令体制の流れに抗う形で試みられた諸々の改革や再建事業とは、我が国の歴史上で実に重大な意味をなした。無論、人が時の流れに逆らうのは難しく、水は方円の器に随わざるを得ないのは、世の真理の一端である。それでも、くりかえし根源に帰り、根源を見つめて、新たに蘇らせようとする先人の自覚があり、意志があり、努力があった。醍醐天皇の御代とはその代表格であろう。大化以来の律令体制への回帰から、基本をなす公地公民の再興に向け、長らく途絶えがちであった班田を実施し、墾田の奨励、貴族・寺院の荘園整理などが行われた。しかも、その前年（延喜元年・九〇一）に改革の露払いとして、推古天皇の聖徳太子にならい、国史の撰述（日本書紀を嚆矢とする六国史の最後・『日本三代実録』）はなされ、律令の格式の編纂及び銭貨の鋳造などの事業にも努められた。

また、国風文化を代表する和歌を重視して、紀貫之らに『古今和歌集』を編纂せしめられた事も忘れてはならない。その巻七「賀歌（がのうた）」冒頭に収められている「わが君は千代に八千代に…」の歌は、紀淑望（としもち）の序文に「陛下の

御宇…砂（いさご）（細石（さざれいし））長じて巌となるの頌（賀歌）、洋々として耳に満てり。…」と延喜の聖代を讃える歌として織り込まれている。これが間もなく「君が代は」の形で始まり、明治時代に「国歌」となった。尚、その治世は平安時代最長の三十三年にも及んだが、その根本には、宇多天皇が御譲位の時に御示しになった所謂、寛平の御遺誡に記される「毎日服を整へ、盥嗽（かんそう）して神を拝す。…聖君の君、必ず輔佐に依り、以て事を治む。…」や「賞罰を明らかにして、愛憎に迷ふなかれ。平均に意を用ひて、好悪に由るなかれ。よく喜怒を慎しみて、色を形（あらわ）すなかれ」の御精神が流れていた。〝道を枉げずして人心に従う〟という君主の「まつりごと」は、固陋な復古主義に陥る事なく展開され、朝廷の儀式や典礼もよく整備された。それは引き続き、村上天皇の御代にも天皇親政の実が行われて、朝威がふるい、文化が栄えた。

したがって、後世に於いても、承久の変（一二二一）の前年に書かれた『愚管抄』（慈円著）には、醍醐天皇の時に、彗星の度々現れ、天が警告を発したのに対して、天皇が「めでたく徳政をおこなわれければ」、大変に国民を愛し、立派に仁徳の政治を行われたので、「事もなくてのみすぎける」、天の感応するところとなって平穏無事、平和に過ぎて、国内の秩序は保たれ国民の生活は安定したので、「大化年号はじまりてのち、ただこの御時をのみあふぐなるべし」律令制の天皇政治が初まってのち、唯一この時代が理想として仰がれているとある。また、延応四年（一二三九）に書かれた『神皇正統記』（北畠親房著）にも、醍醐天皇について「徳政を好みおこなはせ給ふ事、上代にこえたり、天下泰平、民間安穏にて、本朝仁徳のふるき跡にもなぞらへ云々」とある。以上の様に、延喜の聖代は、醍醐天皇が徳政、非常に国民を愛撫する政治を行われたので、国民生活が安定し、国内は非常に平和な時代であったとして、これを仰いでいるという見解は、中世の二大史論書として双方立場を異にする『愚管抄』及び『神皇正統記』に於いても一致して記しているのである。実に、事実は人間の恩讐を超えたものである。

「知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず」（『論語』子罕）。天皇について『神皇正統記』は、知仁勇の三徳を体現した御存在とする。具体的に、その表象である三種の神器と重ね合わせて、鑑を正直、玉を慈悲、剣を決断と説き、日本人の倫理の中核とせられる。その上で、醍醐天皇・村上天皇を、その御理想を最も体現せられた聖代として、「延喜・天暦の治」と称えられているのである。その後の律令体制崩壊から乱世へと展開してゆく波乱万丈の歴史の中で、政道の亀鑑として、皇位の継承と共に脈々と受け継がれた事は、その謚からも、後

醍醐天皇（皇子は後村上天皇）の建武中興は、この御代を通して律令国家繁栄の時代への復古を理想とし、また明治維新が第二の建武中興とせられた点（別格官幣社として中興の功臣・楠木正成公を祭る湊川神社が創建されたのが最初）からも明らかである。「歴史の尊重」とは、正しく精神の伝承を意味する。歴史が前後相承の一貫性を尊び、断層や廃絶の変遷推移を忌み嫌う事はくりかえして述べたが、父祖の志が、おのれの死によって消えてゆく事なく、子孫によって敬虔に継承せられてゆくのが、人の世に於ける最大の至福であると確信する。

かつて、「父母もその父母もわが身なり　われを愛せよ我を敬せよ」と詠んだ二宮尊徳翁は、忠孝両全の人物であった。自身の身心を、天照大神から続く祖先の系列が集まり、その衆望が達成された中での一身と捉えた。それは、幼少の時分に両親を失った翁にとって、高遠な理想を秘めながらも、遂に発揚する事が出来なかった先祖に対する、深い尊敬と同情の意味合いが強かったからであろう。この様な姿を一言で表すると、歴史を恐れていたのであるが、それよりも一段深く、神を恐れていたのである。ダーウィンやルソーに観られる様な、今日の西洋式の思考法では到達しえない境地であろう。翁が人生を賭けて取り組まれた農村復興事業とは、祖先の理想行の実現であり、我が身心の延長である子孫と共に継続してゆかねばならないものであり、それが報徳と称せられた事業に流れる一貫した信念であった。同様に、我が国の律令体制の崩壊と中世の到来は、結果として阻止する事は出来なかったのだが、その過程に於いて高遠な理想を抱き、発揚せんとした志が、天皇の御位と共に後世に受け継がれたのは事実である。何も、はじまりらしきはじめも持たず、定めに泣いて、宿命を恨んで、全てを犠牲者にして、全てを被害者にして、意味のない仮説と分析をくりかえしたまま雲散霧消する。万世一系に象徴される日本歴史とは、その様な虚しく惨めなものでは断じて無かったのである。

三、名行の破れ

崩れゆく律令体制にあって、歴史を正しくきりひらこうとする自覚と意志と努力。「延喜天暦の治」に代表される様に、志ある者が懐いた上代に対する憧憬の中心には、常に大化改新があった。しかし、摂関職を独占し、既に藤原門閥体制が確立している中にあっては、十分な成果をあげられる事が出来ず、藤原道長以降は、万葉集に観られる大化改新時の尚武の気性は失われると共に、当時流行した末法思想が精神生活に重大な影響を与えた。『扶桑略記』には、釈迦入滅以後何年経ったかについての記載が種々の箇所で見出されるが、永承七年（一〇五二）の条に「今日始めて末法に入る」とある。それは、前世の宿業により決定された人間の運命を絶対的とし、仏の教えの廃れた末法時代では、どんな努力をしても克服は不可能としたのである。宇治の平等院鳳凰堂とは、当代が末法の時代に入るとし、それを免れる目的で道長の子の頼通により、当時の建築技術の粋を集めて建てられたものであった。しかし、我が国文化財の最も素晴らしいものは、日本という国家そのものである。日本人の文化は道義道徳を第一とし、日本民族の造成したる最高の文化財は、道義国家「日本」に他ならない。その最高の文化財が、固く運命の束縛の中にあるならば、人生に於けるあらゆる道徳的価値は、当然その意義を失わなければならなくなる。

摂関家の門閥体制による天皇親政の動揺、荘園増加による公地公民体制の崩壊、末法思想による道徳の無価値、以上の様な問題が露呈する中で、自浄作用の源であった、天皇の地位にも遂に変化が表れた。即ち、天皇の追号に院号が用いられ、皇居も実質的には本来の内裏から摂関家の私邸である里内裏（さとだいり）に移された。これは天皇の地位の重大な変化を示し、律令政治に於ける天皇親政の本質を完全に損なうものであった。実際、上皇が「治天の君」として、実質上の天皇として政務にあたられる院政が開始すると、院庁は上皇の政治意思を表明・具現化するための重要な政務機関へと変貌したのである。一連の政治の乱れと人心の変化、その流れが意味するのは、人々の関心が歴史的なものから離れ、国家的よりも個人的な考え方に変化していった事を示すものであり、ここに至って我が国が、衰微没落の乱世（中世）に入ってゆく条件は整ったのである。

歴史家の平泉澄（一八九五―一九八四）博士は、『中世に於ける精神生活』の中で、「中世は無学の時代である」とした。特に朝廷に於ける貴族や僧侶のそれを指摘し、「その結果は儒教に対し、神道に対し、歴史に対し、文学に対し、その他何に対しても無知・無理解・無批判であった」と、当時の思想界の頗る混濁を強調されている。一体、人が理非曲直を明らかにするためには、自らの座標となるべきものが無ければならない。そうでなければ、儒教主義に陥って「民を重しと為す、社稷之に次ぐ、君を軽しと為す」（『孟子』）として、国家の革命を容認したり、末法の様な俗論に惑わされて文弱に逃げ、各々の勤むべき本分を見失うのである。人は自らの見識によって立ち、己の責任に於いて行く道を選ばなければならない。まして、日本人であるならば、大和魂を本にすべきは道理の至極である。吉田松陰先生は『士規七則』の中にて、それを簡潔に説かれている。

「凡そ皇国に生まれては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し、皇朝は万葉一統、邦国の士夫は禄位を世襲し、人民は民を養ひ以て祖業を継ぎ、臣民は君に忠にして以て父の志を継ぐ。君臣一体、忠孝一本、唯我が国を然りと為す。」（原漢文）

即ち、革命の行われる外国に於いては忠と孝は一致しない。日本国に於いてのみ一致する。そして、「臣民は君に忠にして以て父の志を継ぐ」というのが家というものである。家とは先祖以来の志を継ぐ事であり、忠にして初めて継ぎ得るのである。畢竟、「忠なれば孝なり」なのである。それは、鹿ケ谷の平家打倒の談合の件で、後白河法皇を幽閉しようとした平清盛の行為を戒めた息子の重盛の苦悩を、「忠ならんと欲すれば孝ならず」と表現した『平家物語』の有名な一文を誤りとするものであり、忠と孝は一致すると確信するならば、「父不忠なれば、子は位を捨て、父を負いてぞ去らまし」とする『神皇正統記』の箴言に従うべきなのである。中世が無学の時代であるのは、実に忠孝の意義が解されなくなった事であり、史実に即して言えば、正常な国の姿とは、それが両全である社会が実現された状態なのである。

中世の無学が、忠孝の忘却を意味していた事の一つとして、後陽成天皇の慶長勅版は重要であろう。それは、応仁の乱に始まる群雄割拠の世が治まり、統一された豊太閤の頃、朝鮮より活字印刷の技術が渡来した際に、天皇が御採用され、その仰せによって印刷を行わしめられた書物の総称である。特に、保元の乱より続いてきた内訌に対し、御心を痛められ、乱世の真の回復とは、道徳の復活でなければならないとの御叡慮から、文禄二年（一五九三）、『古文孝経』が最初の勅版として印刷された（但し伝世していない事から幻の文禄勅版）。序文の「君雖レ不レ君臣不レ可以二不一レ臣父雖レ不レ父子不レ可以二不一レ子」（君、君タラズトモ、臣、臣タラズベカラズ、父、父タラズトモ、子、子タラズベカラズ）の文言は、当に、日本人は日本の道徳（忠孝）によって利己心を制圧しなければならず、天皇自ら国民と共に服膺する決意の御心の表れでもあった。（付記。前号に掲載の昭和殉難者の遺書には「父」が「親」となっているが、文意から『古文孝経』の引用である）。

我が国は、『神皇正統記』が「名行の破」と記す様に、保元（一一五六～五九）の乱を以て、中世に入ってゆく事となった。それは、不幸にも院政の弊害に基づく皇室内部の不和に端を発したものであった。即ち、後白河天皇と崇徳上皇の御兄弟が互いに争われたのだが、特筆すべきは、それに乗じた藤原氏内部の権力争いが、政権争

奪の決着手段として武力を欲した事により、源氏と平家の武士も加わり、非情な結末を招く事となったのである。ここに、親兄弟一族が左右に分かれて干戈を交えた事は、道徳の頽廃・人心の腐敗の極まりを意味するが、歴史の上に極めて厳然と出ている事の最も激しいものは、同じ階級にある争い、内訌に他ならない。同族或いは同階級の争いというものが、最も熾烈・苛烈を極めている。これは、マルクスが出現して以降、階級闘争が意識的に叫ばれ、革命思想が一世を風靡した諸々の運動とは質が異なる。そもそも、人は生きて行く中で、病と争いはどうしても避けられないものだが、歴史的事実として争いとは、一家一族という最も近しい間柄にて顕著である。

古今東西、栄枯盛衰は世の常である。本家でも衰微すると本家らしくなくなり、分家とも疎遠になってしまうのは現代でも例外ではない。まして、昔時（乱世）に於けるその可能性とは少なくなかったであろう。例えば、古代から中世に至る迄、皇室を除き、公家及び武家に伝来する有名な所の家系図を通覧すると、女性の名前が記されていない事が多い。北条政子などは例外として、ただ「女」とだけ記されている。これには様々な理由があるが、家督相続が重要視される性質上、単なる女性蔑視とは意味が異なる。即ち、『神皇正統記』が「一種姓の中にをきてもをのづから傍より伝給しすら猶正にかへる道ありてぞたもちましましける」と言っている様に、相続の基本は、皇室と同じ男統男子継承であり、傍系に移っても正統に帰る道が担保される形であった。そして、名門とされる家ほど、正室と側室の間は峻別され、側室でも母方の家系が如何なる身分であるかが重要となっていたのである。

保元の乱とは、「なにごともいみじくきびしき人」（『今鏡』）と評せられ、元々は忠君愛国の人であった藤原頼長が、権力への野心と執着に走らなければ、上下骨肉相食む様な争乱にまで発展しなかったと思われる。それは、身内の喧嘩を本質とする乱の中で藤家のそれが最も根深かったからである。その発端は、才学双全にして公事に精励する頼長に対し、藤家の始祖である鎌足公の再来を予感し、その大器を察した父の忠実が、摂関家の将来を頼長に託そうとした事にあった。事実、氏長者の家督を兄の忠通から取り上げて弟の頼長に与えたのだが、弟が兄よりも優れているという理由だけで、年齢が親子ほどの差があり、しかも身分の低い側室（土佐守の娘。兄の母は右大臣の娘）の子の頼長に家督を相続させたのだった。その先例を深く顧みなかった父の決断が、忠通の自尊心を深く傷つけた事は想像に難くない。頼長自身も、中大兄皇子と共に律令国家建設に邁進した鎌足公にならい、忠君愛国の道を邁進すればよかったのだが、藤家の権力志向と才気の鋭い性質は、その善き面を打ち消したのであった。いずれにせよ、保元の乱とは長年にわたっ

て忠孝を忘却してきた藤原一族を発端とした事は確かであろう。

『中庸』に「誠は天の道なり、これを誠にするは、人の道なり」とある。天道の自然と人道の当然、これは分別しなければならない。『教育勅語』が「父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し」と諭す様に、特に日本人に於いては、自己に関係の深き者に対し、充分の義務を尽くす事は道理である。それは、世界で唯一、天皇を中心とした家族国家であるからだ。本家であらせられる皇室は、天照大神の直系に連なる神武天皇の建国以来、一系の血脈を保ち、各々の日本人は一家を遡れば、階級栄華を超越した皇室の赤子であり、また畏れ多い事ではあるが、皇室の分家に当たる（忠孝一本）。しかも、おびただしい祖先がある中で、有名な人の名が残り、どうしても名のない人は消えて行く事から、誰でも立派な人の後裔だと言い得る素質があると考えても差し障りない。天地開闢以来一貫して続いているこの繋がりこそが伝統であり、理（ことわり）にして、道そのものになっているのである。日本人は、いつの世もこの天理（天道）に外れまいとする意志と努力（人道・人事）があって、日本人として天理に適った正しい道を歩む事が出来るのである。

その事は、不幸にもキリスト教によって民族の神話を既に失っている西洋では、もはや叶わぬ夢物語なのである。それは西洋史が示している様に、古くてもその起源を、日本の平安時代の末葉に遡る程度の西洋の王室とは、民族の神の子とは言えず、やむなくキリスト教と結びついて、我は人類の始祖アダムの嫡流なり。エホバの神より統治権を与えられたものなり（ギリシア神話に出て来る神々の後裔とは言っていない）。故に神聖不可侵なりと自らの正統性を主張した事は余りに有名である。所謂、君主神権説である。これに対して、人民こそ神聖不可侵なりとしたのがルソーなどの民権革命の説であり、更に進んでプロレタリア神聖説を唱えたのがマルクスであった。もはや、天道と人道、自然と当然の区別すらもつかない有様なのである。人間の道徳とは、人間がどこまでも天理に則って正しく生きるために存在する。それは、人間の自覚によって成立し、人間の意志と努力とによってのみ実現し得るのである。その意味に於いて、我が国の万世一系の国體、或いは文化芸術の伝承継承という事実とは、断絶を克服したという事の証明であり、その克服のために、個人の自覚と意志と努力とが存在した事を、日本歴史は厳しくかつ明らかに示しているのである。したがって、その様に観て行けば『神皇正統記』が、戦後の処分の残酷さと不条理を指摘し、保元の乱を乱世の嚆矢と以下の様に決定付けた理由が改めて理解出来よう。

「義朝、重代の兵なりし上、保元の勲功、捨てられがたく侍りしに、父の首をきらせたりし事、大なる科なり。古今にも聞かず、和漢にも例無し。勲功に申し替ふとも、みづから退くとも、などか父を申し助くる道なかるべき。名行欠け果てにければ、いかでか終に其身を全くすべき。滅びぬる事は、天の理なり。」

この戦いの結果、上皇は讃岐に遷され、左大臣・藤原頼長は戦死したが、この時に、嵯峨天皇以来三百五十年ほどの間、陛下の思し召しによって行われる事がなかった死刑が復活したのである。シナの後周（九五一～九六〇）という王朝の時代の書物である『義楚六帖』という書物には、「彼の国、古今、侵奪するもの無し、龍神報護し、法人を殺さず、過ちを為す者は、配して犯人島に在り」として、日本の事を書いている。日本という国は、昔から侵略を受けた事がない。神々がこれを守っている。また、法律によって人を殺す事がない。即ち、嵯峨天皇以後、律令の規定で死罪はあったのだが、必ず陛下の思し召しによって、死一等を減ぜられて死刑は行われなかったのである。ところが、源為義・平忠正が斬罪に処せられた。その事について当時の心ある人々は、伝統が崩れた、時代が変わったと言って、非常に嘆き悲しんだという事が、『百錬抄』・『愚管抄』或いは『保元物語』にも載っている。しかも、それを息子である源義朝と甥の平清盛に斬らせる事を朝廷が許したのは、人の人たる道、人倫の破壊であった。

「名行」とは、君は君として、臣は臣として、父は父、子は子に相当する所の責任があり、一切の悪はこれに背くより起こるというのは道理である。古今東西、人はかくの如くにして堕落し、民族はかくして衰亡していったのは歴史の真実である。何より、親兄弟・一族の間で戦う時点で、既に不道徳であるのに、子が親を殺すに至っては、自己否定と言わざるを得ない。命令をした朝廷も誤っており、人倫の秩序は全く破れ果てたのであった。『神皇正統記』が最後に、「未だ太平の世に帰らざるは、名行の破れ初めしに依れる事とぞ見えたる」と結ぶ様に、当時の社会に於いて、人と人とをつなぐ「倫理への通路」を見出す事は難しい。「勝てば官軍負ければ賊軍」という考えがあるが、保元の乱とは、単に成敗を以て事を論ずる様な性質のものではなく、日本人の日本人たる所以、忠孝を第一に考えなければならないという指摘は、『神皇正統記』は勿論、乱世の治まった江戸時代に、徳川光圀の指導の下、水戸藩の事業として編まれた『大日本史』も同様であった。

「名行の破れ」に象徴される保元の乱より後の武家政

治の変遷は、平清盛―源頼朝―足利尊氏という風に続いてゆくが、重ねて本質を論ずるならば、我が国は天皇親政を以て正しき姿とした事は明瞭である。歴史を顧みれば、藤原氏の摂関政治や武家の幕府政治が示す様に、政治は往々にしてその実権下に移ったが、それはどこまでも変態なのである。日本政治の正しき姿を天皇親政とし、日本歴史の復古と革新の中心に於いて常に天皇が在らせられたのは、歴史的事実であって議論の問題ではない。その伝統は、明治の大日本帝国憲法に於いても継承された。我が国の建国の実体を基本として西欧の憲法法理を塩梅して、その内容は三権分立を確認し、議会制度を採用し、国民の権利義務を保障し、デモクラシーの憲法たる実を備えた欽定憲法であった。したがって、当時の世界の学者、政治家からも賞賛され、実に近代日本興隆の根幹となった。但し、後年に於いて一部の政治家や軍人等がその運営を誤り、輔弼と独裁とを混同したり、統帥権を軍部独善に濫用したり、議会を政権争奪の方便に利用した挙句に、議会政治の権威を失墜し、軍部の専横を招き、遂に敗戦の悲運に際会した。

名行の破れとは、もはや今日に於いて全世界を支配しており、今なお占領憲法下にある日本も例外ではないが、それを克服する術とは我が国に於いて古今一貫する。即ち、日本人が、国家民族の命脈、我々の命の限りない存続と栄えである、「天皇陛下万歳」の精神に帰るしかないのである。『礼記』には、「郊の祭りや、大いに本に報じ始めに反るなり」として、祭祀の本質が報本反始にあると説く様に、神道を立国の基盤とする日本の歴史に於ける本始とは、忠孝の源泉にあらせられる天皇であり、天皇の御徳とは、非常の国難に当たり、常に光り輝いて来たのである。その意味に於いて、後述する建武中興とは、天皇みずから御立ちになり、天皇を奉じて王事に奔走する忠臣の活躍に観られる様に、中世に於けるその最たるものであった。前には上代憧憬の情に包まれて大化改新を顧み、後には楠公の七生報国の志を遺して明治維新を望み、承前起後の偉大なる働きは、実に日本歴史の中軸を為すべきものと評されて来た。それは、明治維新と隔たる事、五百数十年であるが実際は相繋がったものであり、その建武中興の精神を相承け相継いで、明治維新の大業は遂行されたのである。

続

日本書紀よりうつ病の仮説

横山正義

一、皇極一年（六四二）一一月一日

曽我の入鹿等は山背大兄王らを斑鳩（いかるが）に襲った。

山背大兄王は妃、ならび子弟らを率いて逃げ出し、生駒山に隠れた。四、五日の間、山にとどまり、食事ができなかった。三輪文屋君が進み出て勧め、「どうか深草の屯倉に移り、そこから乗馬して、東国に至り、上宮の乳部（みぶ）を本（もと）にして軍を興し、もどってきて戦いましょう。勝のは必定です」といった。山背大兄王ら答えて、「卿がいうようにすれば、勝のは必然です。ただわが情（こころ）がねがうのは、十年は百姓を使役しないということです。私一身のゆえに、どうして万民をわずらわしい労させようか。また後世、民が私のせいで自分の父母を喪ったといって欲しくない。どうして戦勝の後に、まさに丈夫だというのでしょうか。身を損なって国を固めるのもまた丈夫ではありませんか」といった。

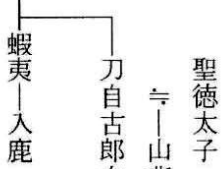
斑鳩寺（いかるがじ）にもどり、妻子とともに自殺した。

皇極四年（六四五）六月一二日、皇極天皇する。と古人皇子が宮中で、曽我大臣入鹿が中大兄皇子（なかのおおえのみこ）と中臣鎌足（なかとみのかまたり）によって殺害される。

皇極四年（六四五）六月一三日

入鹿の父曽我蝦夷が自殺する。

系図一



二、うつ病

うつ病の診断と治療　都民公開講座　現代の病「うつ」と「ものわすれ」

順天堂医学・二〇〇五・五一　P三八六

うつ病は、有病率が三パーセントから八パーセントの一般的な病気であり、適正な治療を受ければ半年で約八十パーセントが寛解する。しかし日本の自殺は三万三千人である。受診する人は四十三万人である。治療をうけている人が二十九万人である。

うつ病の身体症状

①睡眠障害
②倦怠感、易疲労感
③便秘などの便通異常
④胃腸症状（食欲低下）
⑤味覚を楽しめない
⑥性欲減退・月経異常
⑦頭痛・肩こり・肩腕症候群
⑧発汗・のぼせ・筋肉痛
など

うつ病の精神症状

①なにもしたくなくなる。
②億劫になる
③何事にも興味を失う
④楽しい事がなくなる
⑤いらいらする
⑥悲観的になる
⑦涙もろくなる
⑧これまでできたことができなくなる
⑨行為実行能力が落ちる
⑩失敗体験にこだわる
⑪性への興味がなくなる
⑫自殺をかんがえる

軽症うつ病

①朝いつもより早く目がさめる
②朝起きたとき、陰気な気分がする
③朝いつものように新聞・テレビを見る気にならない
④服装や身だしなみにいつものように関心がない
⑤仕事に取り掛かる気になかなかならない
⑥仕事にとりかかっても根気がない
⑦決断がなかなかつかない
⑧いつものように気軽に人に会う事ができない
⑨なんとなく不安でいらいらすることがよくある
⑩これからさきやっていく自信がない
⑪「いっそこの世から消えたい」と思う事がよくある
⑫テレビがいつものように面白くない
⑬さびしくて誰かにいてほしいと思う事がよくある
⑭涙ぐむ事が多い
⑮夕方になると気持ちがらくになる
⑯頭が重かったりいたんだりする
⑰性欲が最近おちている
⑱食欲も最近おちている

日本では一九九八年以降、毎年の自殺者が三万人を越え自殺者の七割がうつ状態にあったといわれる。予防は睡眠、食事を十分にとり、必要以上に自分をせめないこと。想起発見・早期治療が大切である。

三、禅語

路地の草花にも、美しさを感じ、喜びを感ずる。

『柳緑花紅』

『金剛経』「川老注」『東波禅喜集』による。

自然のあらゆるものがそのままで真実の姿を伝えているさまをいう。

『参考文献』

日本書紀　原本現代訳　山田宗睦　㈱ニュートンプレス　二〇〇五・五一　P三八六
順天堂医学

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

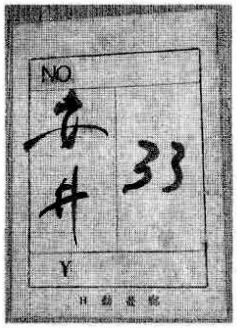
近代日本洋画こぼれ話（第三回）

水谷嘉弘

7　安井曾太郎　作者は誰だ？

或る画廊に入った途端、12号の油彩画が目に飛び込んで来た。林間水辺の群像図である。入荷間もないらしく店主の側の壁にキャンバスのまま立て掛けてあった。誰の作品か問うと「未完成、何かの習作のようで署名はない。キャンバス裏面に日動画廊のシールが貼られていて安井と書いてあるが・・・」との返事。確かに、塗り残しはあるし細部に手が入っていない。ただ自分が知る限りでは安井曾太郎（1888・明治21年生まれ）の作とはとても思えなかった。しかし、群像5人の構図がよく、人物の描線に味があって一日で気に入ってしまい即購入することにした。以下、作者について推理する。

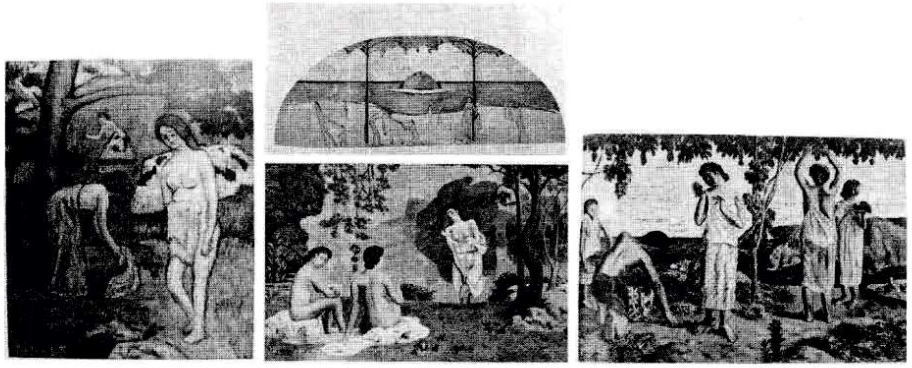




本作を見てまず思い立つのが、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ（1824年～1898年）である。黒田清輝（1866年～1924年）がフランス留学中の1893・明治26年3月にアトリエを訪ねて以来、近代日本洋画へ大きな影響を与えた。藤島武二（1867生）、青木繁（1882生）はその構想画に装飾性を学び、児島虎次郎（1881生）は作品三点を大原美術館に収蔵する。

里見勝蔵（1895生）はシャヴァンヌの素描を愛蔵していた。少し後の世代、板倉鼎（1901生）は1927年3月の松戸の実家宛の手紙に［パンテオンと云ふお寺へシャヴァンヌという人の壁画を見にまゐりました］と記している。シャヴァンヌは壁画を得意としたが、本作も画面上部が半円で区切られており、底辺部真ん中の果物籠は壁画の題名パネルを嵌め込む部分になるのかもしれない。

次に連想したのが斉藤与里（1885・明治18年～1959・昭和34年）だ。与里は現在の埼玉県加須市生まれ。20歳の時（1905・明治38年）画家を目指して京都の聖護院洋画研究所・関西美術院に入り、浅井忠（1856生）、鹿子木孟郎（1874生）に学ぶ。同門に3歳年下の安井曾太郎、梅原龍三郎がいた。1906年鹿子木についてパリへ渡りジャン・ポール・ローランスのアカデミー・ジュリアンに入学する。ソルボンヌ大学で聴講した際、大講堂でシャヴァンヌの壁画を観て感銘を受けた。本作に通じる与里の一連の作品を並べてみる。



斉藤与里作品（図録画像）
（左）【木蔭】1912（明治45・大正1）年作・第1回ヒュウザン会展出品、
（中上）【第2回フュウザン会展欄間装飾画】1913年作、（中下）【朝】1915年作・第9回文展初入選、（右）【収穫】1916年作・第10回文展特選

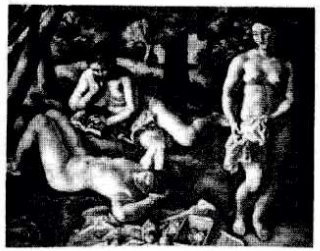
本作は水浴図というより収穫図である。作者は与里作品を観たに違いない。1910年代後半から20年代半ばにかけて日本国内での制作ではないか。フランス留学経験者で既に当地でシャヴァンヌを観ていたとも思う。画面はフラットで装飾性を帯び、構想画を意識しているからだ。当時流行りつつあった主観主義的なポスト印象派やフォーヴを指向する若手ではあるまい。彼らはまだフランスに旅立っていない。本作は習作とはいえ完成度が高く筆致がこなれている。すっきりとしたモデリング、線描が巧みで姿態に動きもある。

こういった見立てを安井曾太郎（1888・明治21年～1955・昭和30年）の経歴と照らし合わせてみた。1904年、16歳で聖護院洋画研究所入所。1907年、渡仏する。斉藤与里がマルセイユまで出迎える。安井もアカデミー・ジュリアンに入学。与里は翌年帰国するが、安井は同校で勉強を続け、日本人で初めて校内コンクールで優勝する。それまでの日本人最優秀は与里の第12位だった。1914・大正3年、第一次世界大戦が勃発し帰国する。翌年、第2回二科展に滞欧作44点を特別出品し注目されたが、この後10年以上のスランプに陥る。二科展への出品は続けるが、制作上の試行を繰り返し話題になることも少なかったようだ。西欧と本邦との風土の違いから表現に苦悩したといわれている。この間、1919・大正8年9月に斉藤与里、梅原龍三郎と共に兜屋画廊主催洋画展の審査員を務めている。1929・昭和4年に発表した【半像】と翌年の【婦人像】が安井様式の誕生を告げ以降大家への道を歩む。京都国立近代美術館館長を務めた富山秀男氏は「生誕90年記念安井曾太郎展」図録（1978年ブリヂストン美術館）にこう書いている。

［（帰国後は）作画上の模索と低迷を経験しなければならなかった。（中略）僅かな期間に作風が幾転変したのもその間の模索と苦闘の激しさを物語っている。一時はドランやボナールなどの作風に惹かれたような時期もあった。すなわち形体や色彩の関係を単純化してみたり、また逆に紫色などを混ぜながら、暖かく柔らかい色調で全体を緻密にまとめ上げるような試みも行っているのである。］

本作が描かれたと思われる時期は帰国後の安井が模索していた頃に重なる。1919年作の【樹蔭】は林間の裸婦群像図でテーマは類似するが印象がまるで違う。きっちり描き込んであり重厚感溢れる。人体表現も肉づきがよい。様々に試作し、後年のしなやかで流麗な描線を獲得する過程で描いた、と理解しないと本作には繋がらない。



安井曾太郎作品（図録画像）
左上【水浴】1914年作、左下【夫人の像】1918年作、右上【黒き髪の女】1924年作、右下【樹蔭】1919年作

キャンバス裏面に貼られた日動画廊のシールは昭和戦前期のものらしい。日動画廊に当該部分の画像を送って訊ねてみた。親切に対応していただいた。その返事はこうだった。「戦前のシールと思われます。ただ、当社ではシールをキャンバス地に直接貼ることはしません。木枠か額裏に貼ります。副社長に確認しましたが、シールの字体は先代では無いとのことでした。」日動画廊の創業は1928・昭和3年、本作制作（と思われる）時期とは時間的な乖離がある。シールは表面が素である上部端に貼られてはいるが・・・現役の画家にこの絵を見せて感想を聞いてみた。「とても上手い、左端の人物が持つ平籠に入れられた赤い果物の画き方が絶妙。」と言う。

状況証拠的には、画学校、パリ、交友、等などシャヴァンヌ―斉藤与里―安井曾太郎を結ぶ線は太い。本作の作者はその周辺にいた人物と考えられないだろうか。日動画廊シールの「安井」も、故なしには記されないと思うのである。佳作であることは確信するが、作者については推理を重ねるばかりで埒が明かない。本稿を読まれた方の知見、ご意見を教示いただきたく、よろしくお願い申し上げる次第です。

8　清水多嘉示　渡仏前後の生写真

「フランスのサロン・ドートンヌと日本人」といえばまず藤田嗣治を思い浮かべるが、他にも日本人で初めて入選した（1921年）のは川島理一郎（1886・明治19年生まれ、藤田と同年齢のパリ友達）、絵画・彫刻両部門に初めて同時入選した（1924年）のが清水多嘉示、等々あまり知られていない事も多い。私が顕彰活動をしている板倉鼎・須美子は渡仏翌年の1927年に夫婦揃って入選した（1929年にも）。板倉夫妻と同時期に滞欧していた画家、彫刻家、清水多嘉示（しみずたかし1897・明治30年～1981・昭和56年）の渡仏（1923・大正12年～1928・昭和3年）前後の生写真（当時のアルバム）を入手した。清水多嘉示は1927年3月パリでの大久保作次郎送別会集合写真で板倉鼎の隣に写っているので縁がある。



（集合写真シルエットは松戸市教育委員会作成）

アルバムの旧蔵者は後に長野県諏訪地域の教育指導者となる川上茂という人物。清水が中洲村（現、諏訪市）の小学校で代用教員をしていた頃（1915・大正4年）の同僚のようだ。パリから川上宛に出した絵葉書―シテ・ファルギエール14番地発―は長野県松本女子師範学校気付となっている。清水は渡仏前には諏訪高女で美術教師を務めていた。勤務先の近しさからか、1922・大正11年2月には同校と松本女子師範で清水主宰による「中原悌二郎・中村彝作品展」を開いている。アルバムにはその時の会場写真があった。記念撮影のテーブル上にあるのは前年出版された中原悌二郎著作集（遺稿集）「彫刻の生命」。自作と思われる油彩画2点―題名は【泉】【花】共に「未完成」と添書してある―の前に立つ清水の姿や、中原の代表作【若きカフカス人】、中村の【男の顔（河野氏像）】なども写っている。【泉】は、直接的には安井曾太郎の影響下の作品だ。7年間のフランス留学から戻り滞欧作品展を開いた安井の作品群を観ていたようだ。細かいタッチで塗り込んであり重厚な印象だが類型的でもある。東京帰りの若き画家の絵であり当時の傾向がよくわかる。こののち、彼はパリに行ってデッサンを学び直し、絵も垢抜けして来るのである。（1971年の清水自選展に出品された最も旧い作品は絵画1923年作、彫刻1924年作で共に渡仏時の制作である）清水が新宿落合の中村彝（1887・明治20年生まれ）を訪ねてアトリエ前の庭で撮った写真もあった。



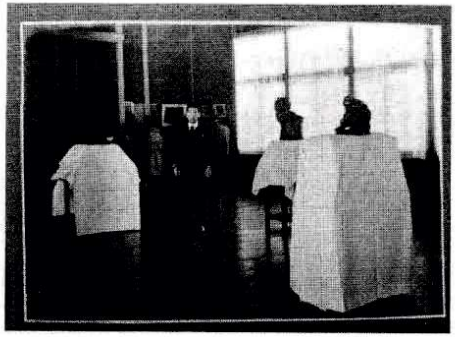
多嘉示。中原悌二郎著作集を前に



清水多嘉示と【泉】【花】（1922）



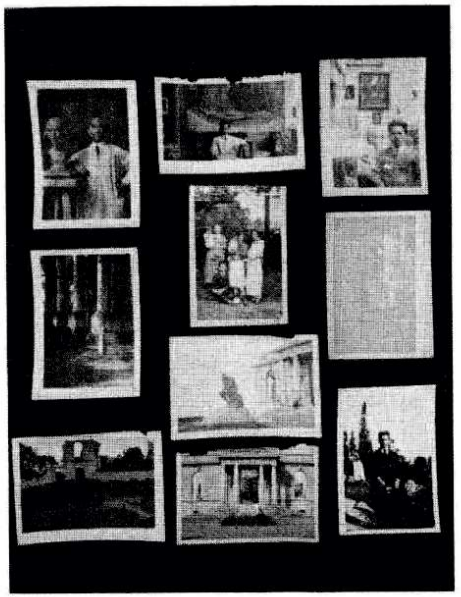
自宅庭先の中村彝（多嘉示撮影）

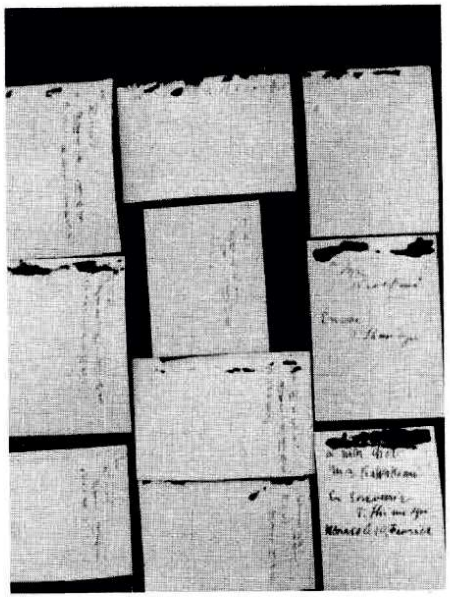


展覧会場の清水多嘉示（24歳）

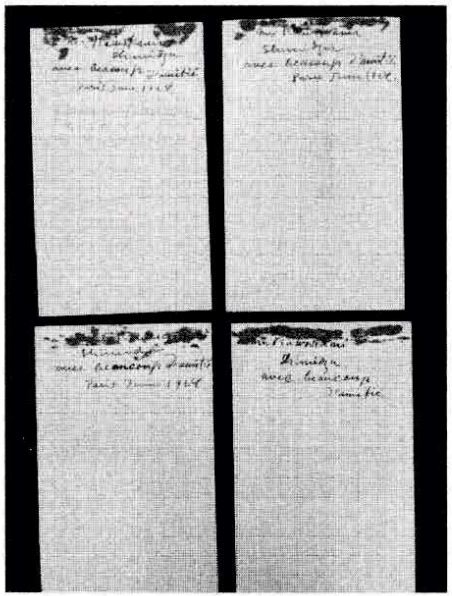
アルバムには当然ながら旧蔵者川上氏本人に属する写真が多く、スイスの教育啓蒙家ペスタロッチゆかりの地の訪問写真、2ヶ月前に運転を開始したばかりの烏川第一水力発電所の見学写真（川上は理数系の教師）等もありそちらの資料性もありそうだ。

さて、このアルバムにはパリの多嘉示から航空便で送られた小型版の写真も多く貼られていた。多嘉示はこまめな性格の持ち主で裏に説明書きをしている。1923年7月アカデミー・グランドショーミエール彫刻室で制作した最初の彫刻作品、9月には大作の裸婦像（油彩画）と共に写っている。渡仏直後の5月ロダン美術館訪問時のスナップも数枚あった。

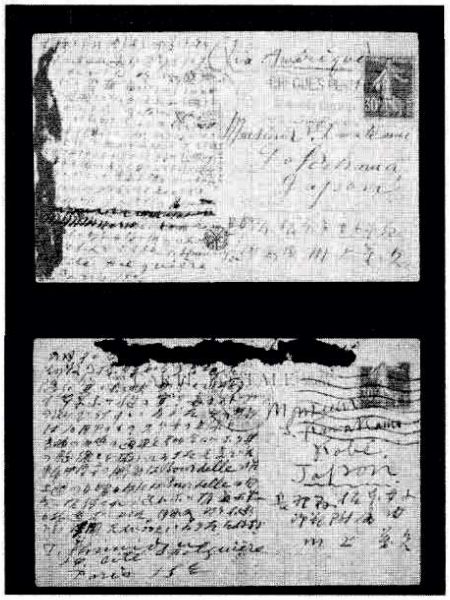




1924年6月サロン・デ・チュイルリーへの招待出品作【男の立像】の（市販？）写真裏面にもメモを添えている。この展覧会は設立されたばかりだが有力なメンバーが多くサロン・ドートンヌと並ぶ注目を集めていた。板倉鼎も、斎藤豊作の推薦で出品出来るかもしれない、凄い展覧会だ、と喜ぶ手紙を両親に書いている（1928年12月）。多嘉示はこの秋のサロン・ドートンヌに彫刻、絵画計5点が同時入選した。



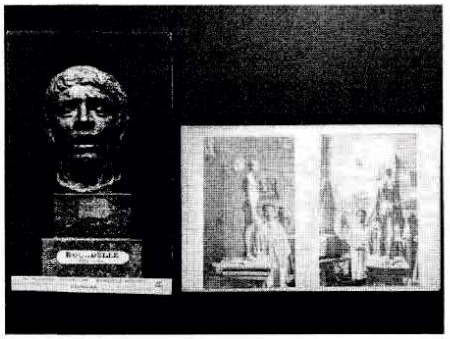




シテ・ファルギエール14番地発の絵葉書からは、ブールデルに夕食を招待されたとの文が読み取れる。一通目の「ブールデル先生」が二通目には「ブールデル」と敬称抜きになっているのも親密さが進んだ証しとわかって面白い。絵葉書にはブールデルや多嘉示の彫刻が印刷されており展覧会場等で販売されたのだろう。

他には、1928年帰国前、ザッキン訪問時の記念写真やアトリエでの撮影、帰国後直ぐに式を挙げたりん夫人とのツーショット、自宅でのスナップ等々があった。





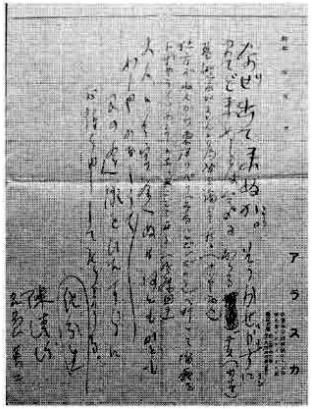
話はそれるが冒頭の集合写真を「板倉鼎・須美子の画業を伝える会」ホームページに掲載した際、中村拓医学博士の子息、中村士（つこう）先生（天文学者、理学博士）から連絡を頂戴した。

（quote）・・・集合写真ですが、中央に大久保作次郎が写っていますので、彼の送別会の写真だろうと思います。また、中村拓は右端に、両手を組んで大きく写っている人物だと思います。（中略）大久保作次郎の送別会写真は井上由里さんの『青春のモンパルナス 清水多嘉示滞仏記』（2006年）には、ほぼ全員の氏名が載っています。中村拓は、在パリ中は多くの日本人絵描きさんと交流があり、戦後も岡鹿之助さんらとは年賀状のやり取りをしていました。山口長男さんなどは、毎夏家に来て夜遅くまでビールを飲んで歓談していたのを子供心に覚えています。（unquote）

中村拓は生化学者、医学者（1890～1974）。パリのパスツール研究所に留学中（1921～1929）、隣にあったシテ・ファルギエールに住んでいた日本人画家達と知り合い医者として彼等の健康面を診ており板倉鼎も診察を受けている。書簡集にも登場する人物だ。この頃パスツール研究所には中村拓博士の他にも日本からの留学者が複数いたようで日本人画家と付き合いがあった。佐分真の「巴里日記」には細谷省吾、佐藤国手両医学博士が度々登場する（両氏は鼎、須美子書簡にも言及がある）。中

村博士が帰国後も画家達との関係を続けていたのと同様、両博士も佐分、小寺健吉、伊原宇三郎（皆集合写真に写っている）らパリで親しくなった画家達と「モンパル会」と名付けた会に参加して東京で会っている。





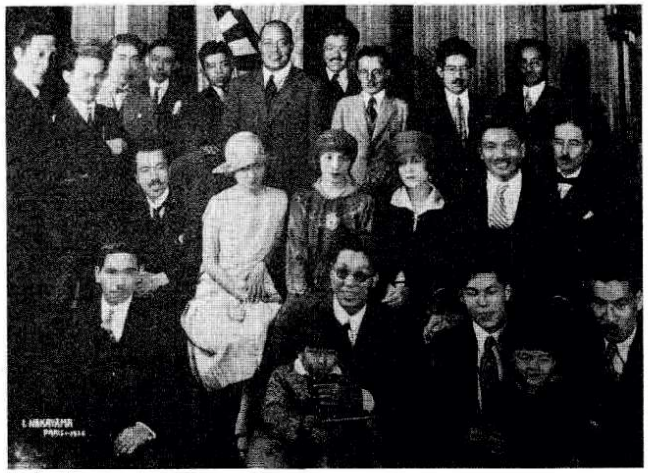
1932年（推定）12月31日、京橋に在ったレストラン「アラスカ」で開かれたモンパル会で、欠席した鎌倉在の久米正雄への寄せ書き書簡に彼らの名前がある。

清水多嘉示の出身校、旧制諏訪中学は現在長野県立諏訪清陵高校である。松本市美術館小川稔館長とやり取りした際、【道元】で知られる彫刻家細川宗英（1930～1994、東京藝大彫刻科第1期入学生、のち教授）は同高出身で清水の後輩にあたると教わった。松本市美に清水の作品は無く、細川の方は諏訪市美に常設、松本市美で企画展をやったそうだ。なお、洋画家中川紀元（1892・明治25年生まれ）も旧制諏訪中学出身、美校彫刻科に進んでいる。その後中退して洋画に転向し藤島武二の指導を受けたのだが、彫刻にゆかりのある土地柄である。

本篇は、前出の「青春のモンパルナス清水多嘉示滞仏記」、「生誕110年記念清水多嘉示絵画彫刻展図録」（2007年刊）を参照させていただいた。

9　清水登之　美術館所蔵品とかすっていた

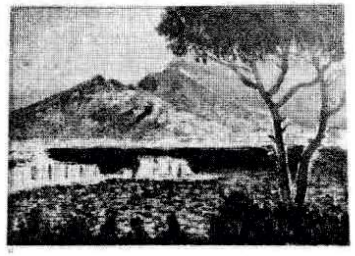
前篇は清水の話だったがもう1回清水で行ってみる。今回は彫刻家多嘉示ではなく洋画家登之である。清水登之（しみずとし）は、1887・明治20年栃木県栃木市生まれ、終戦後まもなく急逝した（1945・昭和20年12月）。アメリカ（シアトル→ニューヨーク）→フランス→日本（東京↔栃木）と移動して描き続けた非官展系国際派の画家である。



前列、左端が清水多嘉示　中列、右から２人目が清水登之。前列中央、石黒敬七の真後ろが登之夫人澄子、敬七に抱かれているのが登之の長男育夫（登之の作品によく登場する）、後列中央、横綱栃木山（引退後）の左が伊原宇三郎、右が中村研一（パリ 1926 年９月　中山岩太撮影）

清水登之の油彩画が２点ある。毎日オークションに出品されたことのある作品でそれまでの来歴は不明だが一応の出処はハッキリしている。ただ制作年の記載がない。その確定をしたかった。栃木県立美術館が 2007 年１月に所蔵する清水登之全作品、油彩画77点、水彩・素描45点、計 122 点すべてを載せた図録を刊行している。それと照合した。結果、本篇のタイトルとなったわけである。登之の足跡に沿って制作した作品画像が掲載されているが、手許の２点は共にその画像によく似ていた。

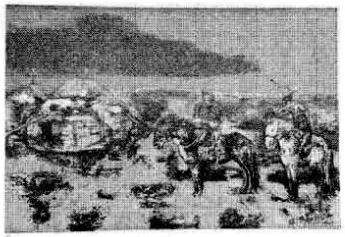
１点目、県美図録では【ナポリ風景】制作 1920 年代後半（上）。私の物も同じで良いと思う（６号）。登之は 1924・大正13年５月、ニューヨークからパリにわたりシテ・ファルギエール14番地に住む（多嘉示と同じ所。両清水で３ヶ月間のスペイン旅行にも行っている）。1926 年、イタリア各地を回って、11月ナポリ港から帰国の途につく。この時見た風景が題材になっているようだ。２作の構図はほとんど同じ。遠景の山はヴェスビオ火山である。館所蔵は登之には珍しい印象派的な作品、点描が目立つ。他にはあまり見ない画風だ。



（上）【ナポリ風景】1920 年代後半



（下）【ナポリ風景】1926（６号）



（上）【蒙古風景】1935



（下）仮題【満蒙風景】
1935 年頃（20 号）

２点目、県美図録では【蒙古風景】制作年 1935 年。私の物は仮題【満蒙風景】（20号）としたい。館所蔵は、蒙古らしい景色の中で乗馬する現地装束２人の人物が描かれている。パオがあり地面は黄土色、蒙古風景そのものだ。もう一方の絵は、背景が高原に建つ建造物のようで地面は登之がよく使う茶褐色系。私見では満洲郊外だ。馬上の２人は一緒だ。この絵をモンゴル出身の画家に見てもらった。人馬は冬のモンゴルの光景そのもの、やはり背景はモンゴルらしくない、満洲の露天掘りではないか、と言う。構想風景画の類と考え【満蒙風景】と仮題したのである。1935・昭和10年、登之の渡満渡蒙あっての作品と考えるが、制作年、対象地、画題等々館蔵と微妙にずれていそうだ。まさにかすっている。（共に、清水登之画集 1975 年日動出版部刊に掲載、図録＃164、＃151）

所蔵している２点は制作時期に約10年の隔たりがあるが、輪郭線を引かず適度な巾の色面をキャンバスに塗り込んだ粘りを感じる筆触が共通している。筆は走らず、強烈な色彩や補色対比も用いず、画面が落ち着いている。そして基盤となる安定した composition。

画家は、デッサン力＋スタイルの完成に因って［優れた作品］を創り出す。完成したスタイルを変えて（捨てて）再び完成させる行為を繰り返した時に［優れた画家］になっていく。登之のタブローもデッサン力に支えられている。小磯良平のようにデッサン力そのものをスタイルとした［優れた画家］もいるが、登之はスタイルの変遷を繰り返して［優れた画家］になった。彼は、①ニューヨークにおける師スローンばりのアメリカンシーン、②フランス、スペインのモダンでユーモラスなタウンシーン、③日本の農村風景、④戦争記録画、と描く対象、表現方法を変えながら質の高い作品を発表し続けたのである。【満蒙風景】は③と④の間に位置する作品。類型的になりつつあった、また補色の強調が見られるようになった③から次の段階に移り、粗く錯綜するような筆致とシュール的な造形が見られる頃に描かれた。1935・昭和10年、鈴木保徳（1891・明治24年生まれ）、福沢一郎（1898生）と訪れた満洲、蒙古の風物が、欧米や日本の

農村と異なる新鮮な刺激を登之に与えたに違いない。その流れが④に引き継がれていく。1937年10月の上海戦線視察以降、特に1942年のインドシナ行を題材とした作品には若い頃軍人を志した者だと思わせる描写が観られるが、やがて終戦を迎える。しかし突然の病で彼の画業はそこで終わってしまう。平時であれば或いは生命長らえていれば、再び新たなスタイルに展開したに違いない。その急逝が惜しまれるのである。

最後に、information only だが登之と思われる従軍画家の事を記した書物があるので紹介しておきたい。英国の植物学者E・J・H・コーナー博士（1906生）がシンガポール、ラッフルズ植物園副園長当時の回想録「思い出の昭南博物館」（中公新書）に「画家」の項があり1942・昭和17年4月頃二人の画家が博物館を訪れ画材を持ち去っていく様子を書いている。登之と日本画家福田豊四郎のようで二人はこの後7月にボルネオに向っている。

本篇は「清水登之展図録」（栃木県立美術館 1996年刊、杉村裕哉氏執筆）を参照させていただいた。



1935年，満州奥地。左より福沢一郎，清水登之，鈴木保徳。

高山右近（十五）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

天国を仰ぎみて（5） 坂本での右近

右近一行は金沢を追放された後、豪雪という難敵に遭遇したが、無事京都への入り口、坂本に着いた。ここ坂本は比叡山延暦寺の老僧の里坊が散在していて、また川を利用した物資運送で京都の入り口にもなっている。

右近は、京都所司代が高山右近たちを京都に入れないで坂本に引き留めておく理由を、京都には一説に七千人以上のキリシタンがいると言われ、高山右近の京都入りでその人たちが騒ぎ出す危険と、一方でその騒ぎを利用して豊臣方が右近に接触を図る危険も考えて、坂本に引き留めたと考えていた。

右近たち一行は坂本に着くと、琵琶湖に面した古寺を宿舎に定められ、その折、高山右近と内藤如安の二人は出羽守から

「京都所司代から連絡があるまで、この寺にとどまってもらう」

と伝えられ、右近たちがこの寺で立ち入ることができる範囲を

「あとで行って見ればわかるが、この寺の庫裏の後方は塀で囲まれていて、行動できる範囲内は庫裏からその塀までとする。その中には小さい林もあるので、そこは自由に散歩をすることができる。外出は禁止」

と伝えられた。

右近と如安は、出羽守から言われた「庫裏の後方にある塀の内側」つまり右近たちが行動できる範囲を、孫たちが安全に遊ぶことが出来るかどうかを確認に行くことにした。そこに好次もやって来て三人で出かけた。出羽守は一言で「庫裏の後方」と言ったので狭い場所を想像していたが案外広く、越境禁止のために建てた大きな塀

までの間に小さいが自然の林もあり、子ども達の遊び場としては安全で、また、右近が戸外での黙想・読書にも利用できると思った。

庫裏に戻ると、ジュスタとルチアで庫裏の中の五部屋を、高山一家・内藤一家・従者・召使等に既に振り分けてあり、孫たちは早速自分の居場所と決められた場所で遊び始めていた。

ある日、夜、茶室での茶会の後、出羽守から前田家横山家老について

「今まで誰にも言ってなかったが、前田家横山長知家老が嫡男康玄と共に祝髪（注①）の気持ちに傾いている」

ことを右近は聞かされた。

横山家老一家は右近の人格を尊敬し、親しい交わりを持ち、横山家の嫡男康玄は右近の娘ルチアを嫁とし、熱心に教会の礼拝に出席し、キリシタンの洗礼も受けている。このことは前田家当主も知っていることであり、前田家当主と右近の関係が密接な間は全く問題なかった。ところが前田家当主の代が替わる毎に徳川家との姻戚関係が深まり、徳川主導のキリシタン高山右近追放（当面金沢から）問題の発生により、横山家老の立場が微妙になってきた。そこで、横山家老が家老の引退を考えたことは理解できる。右近はこの問題で横山家老一家に、解決方法のない痛みを痛切に感じていた。

出羽守篠原一考は前田家譜代の臣であり、それだけに、万一、前田家柱石家老の横山家老が引退すれは、前田家として残念極まりないことと思っている。

（注　①）

祝髪とは、武士が髷を落として仏門に入ることをいう。

右近は坂本に着く前から、最近とみに、自分が老化しているのではないかと感じていた。そこで、先ずは体力の維持として、朝食前に木刀の素振りを腕と腰が疲れるまで何回も行っていた。

朝食後は午前中読書。今読んでいる本は、金沢で豪姫から戴いた「スピリッツアル修行」。この本はポルトガル語で書かれた、イエズス会創立者ロヨラが著した「霊操」の解説書である。右近は若い頃から宣教師からポルトガル語を習っていたので、読むことができる。そしてこの本の解説に従って自らも霊操を行うことを日課としていた。午後からの時間は庭の散歩や、孫達との遊びに使っていた。

特に孫達については、京都所司代が家族を右近夫妻、ルチア、十郎太を頭とする孫五人を別々にして、一人一人に棄教を迫る管理方式をとった場合は、右近の立場では拒否できない。大人は個別に棄教を迫られても応ずることは絶対にありえないが、問題は幼い四人の孫である。

孫たちと生活を別にされて、孫たちが役人から「爺（じじ）もキリシタンを止めたよ」などと毎日のように言われたらと思うと、その不安は、昼も、夜も、真夜中でも右近の頭から消えない。そのことを不安に思っただけで右近の胸は締めつけられてくる。だから右近は毎日の孫との遊びを大切にしていた。

それから数日後、右近は如安と好次と三人で、庫裏の横から日に日に緑が濃くなりつつある比叡山の春の景色を眺めていた。四季が移る毎に、自然の景色は趣を変え、新たな美しさを見せてくれている。それに反して自分の老化は・・・などと思っていると、突然、

好次が持っていた手製のグリゴレオ暦を開いて

「あと五日後の日曜日が復活祭です」

と言い出した。それを聞いた右近が、高槻で行うことができた盛大な復活祭を思いだしていると、惣兵衛が慌てた様子で小走りに庫裏からやって来て

「京都所司代の名代が来て、キリシタンは直ぐ集まるように」

との指示を伝えたので、いよいよ出発の時が来たか、と思いながら庫裏に戻った。両家の家族を伴って京都所司代の名代が座っている座敷に入ってかしこまった。

京都所司代の名代は前置きもなく

「指示を伝える。高山右近と内藤如安一家眷属は明朝京に向け出発する。高山右近と内藤如安、同好次は長崎に放逐する。婦女子は京に留まることを許す。明日からの従者同行は一切禁止する。以上」

と命令すると、右近が最も不安に思っていたことが現実になった！　とうとう来るときが来た！　と呻然としている間に、京都所司代の名代はさっさと部屋を出て帰ってしまった。右近は、最悪の事態だと思い、ともかく部屋に戻った。部屋に戻ってきたジュスタとルチアは、泣きながら、

「右近様がどこに行くことになっても、どこまでもご一緒します」

と叫び、孫の十郎太も

「私達孫全員も爺（じじ）の所から離れません」

というと、幼い四人の孫が泣きながら一斉に右近のところに飛びついた。

右近は

「最悪の事態になった」

と思いながら四人の孫を抱きしめ、この状態を救ってくれるのは出羽守しかいないと決心し、出羽守の部屋に向かった。

右近のただ事ではない顔つきでの話を聞いた出羽守は「右近殿これから京都所司代に行ってくる」

というが早いか、馬の支度をさせ、馬に飛び乗って京に向って疾走して行った。

部屋の中では、困り切った右近の周りで、ジュスタ・

ルチア・孫たちが
「いやだ、いやだ」
と泣きわめき、夕食の支度の時間になって、内藤如安の妻が夕食の支度を始めたが、いつも一緒になって手伝うジュスタもルチアも孫たちと泣いたまま立とうとしない。立つこともできない。
やがて西の刻になろうとしたときに出羽守が帰ってきた。部屋に入ると同時に
「みんな聞け」
と立ったまま
「明日全員で京都から大阪に行き、船便を待って長崎に行くこととなった。従者は最初から京までとなっているので京で別れる。高山家も内藤家も、ここにいる家族は全員長崎に行く。このことは全員が日本から放逐されることにつながる。その覚悟はよいのだな」
との出羽守の言葉に、右近も、ジュスタも、ルチアも、十郎太も、内藤一家も出羽守の前に平伏して
「有難うございます」
と何度もお礼を言った。右近も出羽守の片袖を握って、出羽守の顔をじっと見たまま言葉が出てこなかった。京都所司代で、出羽守がどのように話してこの結論を持ってくることが出来たのか聞きたいが、今晩この場ではただ感謝あるのみ。右近の眼は潤って、今にも涙が落ちそうになっていた。右近の出羽守への感謝は何物にも代えられない感謝であった。
その夜、全員で遅い夕食を摂り終えると、まだ右近家族全員が食膳から立ち上がる前に、従者惣兵衛、弥次郎、侍女二人は右近たちのところに別れの挨拶に来て、順に家族に挨拶して回った。翌朝、右近は一人一人に今までの礼を言いながら、前田家家老横山山城守宛の紹介状を渡し、出来るのであれば横山山城守に仕えるように話し、別れを惜しんだ。(右近は心中、まだ横山山城守が老中職に留まっていることを願っていた)

天国を仰ぎみて(6) 坂本～京・大阪へ

翌早朝に、右近と如安一家は坂本を発ち、陸路十五里を京都経由で大阪に向かった。坂本の宿の寺の門前には、京都所司代の警護士二十人が腰の刀の他に手に長い木刀を持ち、いずれも白装束の右近一家八人と如安一家六人を取り囲んでいた。知らない人が見れば、どのような重罪を犯した罪人を連行するのかと思うような行列になっていた。
宿の門前の端には、右近一家の従者と侍女、内藤家の従者が目に涙をため、何度も低頭し、厳重な警護士の前では、言葉にも動作にも表すことのできない別れを惜しんでいた。幼い右近の孫四人は、雰囲気で状況が分かるのか、従者と侍女を黙って見上げていた。

金沢から送ってきた警護士は、ここで京都所司代の警護士と替わったので、右近たちは出発前に、出羽守と浅野将監とその部下達に深々と頭を下げて挨拶した。出羽守と二人の部下は、逢坂まで行く予定があったので、逢坂への分かれ道迄右近たちの後ろに着いて同道した。逢坂への分かれ道が近づくと、出羽守は行列の先頭に行き、右近たちが行き過ぎるのを見送った。右近たちは全員歩きながら無言で頭を下げ、今までの親切と昨夜の出羽守の労に感謝した。右近は惜別の情が収まらず、手で目を拭って心の中で
「出羽守とはここが永久の別れとなるであろう。異教徒ではあるが、我等一同に情けを掛け、終始礼儀正しい態度をとり続けていたことは立派であった。茶会の時も一期一会を大切にして、教えた茶道一つ一つを心に刻み込んでいた。・・・・出羽守様、キリシタンである私とルチアとの関係で、城内での横山山城守様ご一家の立場が苦しくなっている様子ですが、どうか力になってあげてください」
と祈っていた。
右近一行はその日の午後、まだ明るいうちに京に入った。見渡すと山科の桜が、既に七分咲きになっていて驚いた。京都街中は、多くのキリシタンの目に触れないようにと、歩く道は大通りを避けて人通りの少ない桂川に出た。桂川の橋向うから西国街道が始まっていて、急峻を上ると、そこが秀吉と光秀の天下分け目の決戦が行われた山崎の地。右近は合戦で光秀本隊を打ち破ったこの地が懐かしく、少し離れた山や丘を一人見渡していた。
その日の宿は、高槻に近い古寺であった。夕食は焼きおにぎりと、具も少なく味噌も薄い味噌汁だけで、孫たちも環境の雰囲気を理解してか、ジュスタとルチアの隣で大人しくしていた。
寝るのは薄い布団の上に雑魚寝するしかなかったが、皆が布団に入るまで、右近とジュスタは高槻城主の時の盛大な復活祭を思いだして、話し合っていた。
翌朝、宿舎の古寺を出ると、どこから聞いたのか、捕らわれているキリシタンを見たくて、大勢の群衆が寺の門を遠くから囲むように集まっていた。右近の耳に
「あんなに小さな子まで処刑されるの?可哀そう。キリシタンなんてやめさせればいいのに」
という声が聞こえてきた。
右近が、集まっている群衆に何気なく目をやると、右近に黙礼を送っている男性がいた。見ると坂本で分かれた岡本惣兵衛だった。我々の後を高槻まで見送りに来たのだろう。右近も目で丁重に挨拶し感謝の気持ちを表すと、惣兵衛は人ごみの中に去って行った。
早朝に高槻を出発した右近たちは、昼前に大阪に着くと、安治川(現大阪府大阪市西区にある淀川を当時安治川と言っていた)の川口の竹矢来の中に連れて行かれた。

その竹矢来の中に十数人の女性が既に来ていて、そのうちの五十年輩の女性一人が周辺にいた役人に一声かけてこちらに近付いてきた。それを見た内藤如安が

「ジュリアではないか」

と小さく驚きの声を上げてその女性の方に行った。その女性は如安の妹の内藤ジュリアであった。周りの役人も特にとがめだてもしなかったので、久しく会っていなかった兄妹はお互いの健康を確認してから、如安は妹を右近のところに連れてきた。右近は豪姫から聞いていた、ジュリアが禁教の中で行っていた豪姫に洗礼を授けるなどのキリシタン活動に感謝を伝え、妻ジュスタと娘ルチアを紹介した。ジュリアは、今、自分が右近たちと同様に捕らえられていることは、天国への登り道にいる、と喜んでいた。

ここの波止場の船宿は、京都所司代が全て借り上げ、それを国外追放の宣教師と修道士を長崎に送るまでの宿泊所としていた。

暫くして、右近たちは警護役人から、空き家になっている粗末な漁師の家に案内され、指示があるまでここに泊っているように命じられた。

右近が見るかぎり、波止場には大きな船も何艘か停泊しているが、毎日のように集められてくるキリシタンの乗船には、まだ船数が足りないらしい。

その日の夜、坂本からの二日間の歩きで皆疲れてもう寝ようかという時に、金沢教会の常駐司祭として金沢教会に来てくれていたクレメンテ司祭が訪ねてきた。部屋と言っても漁師の小さな家だから、右近一家が泊っている部屋と、如安一家が泊っている部屋しかないので、何はともあれ右近一家の部屋の片隅を拡げて入ってもらった。ジュスタが如安を呼びに行った。

クレメンテ司祭は部屋に入って座ると部屋の境の板戸を開けて両家族を一人ずつ確認してから、先ず右近を見て

「右近殿、お顔の色が悪い。どこか具合が悪いところがあるのではないか」

と、医師らしい質問して右近を見つめた。右近は

「どこも痛くもないし、悪いところはない。坂本でも毎朝一定時間竹刀を振っていた。本も読めているし、寝てもいる。ただ年が六十を過ぎているので、疲れやすくなっている。年齢のせいではないですか」

と答えると、右近の腕をとって脈拍と体温の状態を点検して

「脈も体温も正常ですね。右近様のお年で金沢からの豪雪の山道は堪えたでしょう。ここの安治川の波止場にいつまでいるかわかりませんが、出来るだけ休養に努めてください」

と言った後、クレメンテ司祭は、

「夜分お伺いしてすみませんでした。明日船宿の前で会

いましょう。午の刻くらいに」

と明日の面会を伝えて戻って行った。

妻のジュスタは、右近が疲れた顔色をしているのを心配して、

「朝起きられるのも、もう少しごゆっくりなさってください。竹刀をお振りになるのも暫くお休みになって。豪姫様から戴いた御本もごゆっくりお読みになられたらいかがでしょう」

と生活上、もっとゆっくりするようにお願いしたが、聞いているのか、聞いていないのか、右近の反応は「生返事」だけだった。

翌日、右近は午の刻少し前にバードレ達が集められている船宿の前に行くと、クレメンテ司祭の他に、右近と接点のあったバードレ達が大勢待っていた。クレメンテ司祭は椅子を用意して右近を座らせ、集まっているバードレ達に

「右近様も金沢からの雪道を歩かれて、大変お疲れになっておられます。バードレ皆様はそれぞれお名前と、右近様との関係で一番印象が深かったことを、一言ずつお話しください」

と発言して話は始まったが、羊の刻になっても終わらなかった。

天国を仰ぎみて（7）大阪～長崎へ

明日全員長崎に行く、という司令が出た。集められたバードレ・修道士・各地から集められたキリシタン達が、指示された大型船に乗り込み、二艘の小型警備船を大型船七艘の前後に配置して大阪港を出奔した。

船は瀬戸内海を西に向かった。右近達一行が乗った船の椅子席は満席で、床に座っている人は寝るときはそこに横になるしかない。一つ船に何人乗っているのかもわからない。右近は席に座ってじっとしていたが、時には豪姫から戴いた「スピリツアル修行」を開いていた。好次は如安の後ろに座っていたが、話す相手はなく、時折筆を取り出して備忘録的なことを綴っていた。

船は大きな島の港で、水や食料の補給など必要な補給に時間をとられ、長崎に到着したのは四月も下旬に入ってからであった。好次の記録では大阪出発から二十一日掛っていた。

長崎に着くと、バードレ達は、長崎のセミナリヨ（日本人の宣教師養成の教育機関）、コレジョ（宣教師の上位職の司祭養成の教育機関）、サンパウロ教会の宣教師宿舎などに振り分けられ、右近たちは、奉行所の近くの、民家の空き家を宛がわれた。

宣教師たちは、それぞれの宣教師を日本に派遣した組織・団体に戻るため、インドのマカオとフィリピンのマ

ニラに戻る外国船が長崎に着くのを待っていた。また、右近たちの国外追放も、マニラかマカオのどちらかという噂が流れ、どっちにしても送る外国船が用意されるまでは何もすることはない。

長崎の街は、三方を山に囲まれ、他の一方は海という狭い街で、ここに集められた宣教師や右近たちキリシタンの管理は、三方の山道と一方の海さえしっかり管理しておけば、誰も逃亡はできない。従って、宣教師も右近たちキリシタンも、長崎の街中は自由に行動しても、奉行所からも咎められることはなかった。右近たちは宣教師を訪問したり、教会やセミナリョの図書を読んだりしていた。

ある日右近たちは、宿舎として宛がわれていた家から、イエズス会本部のあるトドマス・オス・サントス教会付属の宣教師館に移動するよう命ぜられ、即日移動した。

暫くして右近は、クレメンテ司祭が医師として応援治療に入っているサンティアゴ病院を訪ねた。そこは院長のメスキータ神父が健康を害してしまったので、病院はイルマン・カルデロン一人が医師として働いていたが、次々と送られてくる患者で、医師・看護師不足が深刻な状態になっていた。それを見かねたクレメンテ司祭が医師としてそこの病院に住み込んで診療応援に当たっていた。

この様子を見た右近が、クレメンテ司祭に

「私がこの病院で看護補助者としてお手伝いしたい」

と言い出したので、クレメンテ司祭は驚いて医療補助の経験の有無を聞くと、右近の父ダリオが眼病の治療をしていて、傷の手当は教えてもらって経験があると言う。でも、彼ほどの「武士(さむらい)で殿様」が、傷の手当てができるのか、と危ぶみながら

「どこの補助をやりたいか」

と尋ねると、なんと、手足などの傷口が崩れたところへ薬の塗替えと、包帯の巻替えが一番大変な

「ライ病棟の補助をしたい」

というので、「えっ！」思ったがそのまま希望通りにお願いした。

早速ライ病棟に連れて行き、患者をお願いしたところ、塗り替える薬（大風子油）の特殊な強い刺激臭にも、崩れている傷口にも、包帯をはずして平然として薬を塗り、再びそこに包帯をしていた。

「武士(さむらい)の殿様だった人がよくできるな」

と感心して声を出すと、

「戦の場では、いろいろな傷口を見て対応していたから」

と、平然と答えた。

右近のこの姿を見たジュスタとルチアが、病院の手伝いをしたいと言い出したので、彼女たちには患者の衣類の繕いをお願いし、更に内藤ジュリアがベアタス会の修道女たちを引き連れて応援に駆けつけてきた。話を聞くと何らかの医療助手の経験がある、ということなので、

看護の手伝いをしてもらい、仕事の呑み込みも早く、クレメンテ司祭は大変助けられた。

このように、右近が医療手伝いを始めたことから、サンティアゴ病院の医師と看護従事者は、勿論患者も大助かりであった。

右近が長崎について一ヶ月が経過したころ、突然、フランシスコ会のチシャン神父を先頭にフランシスコ会の長崎在住の会員と、同会所属で国外追放者として集められたキリシタンたちが、日ごろの鬱憤を晴らすかのように、キリスト・イエスが捕らえられて、十字架と共にゴルゴタの丘へ引かれて行く仮装行列を中央に組んで、何百人をも超す大行列で市内を歩き出した。その日は、クレメンテ司祭からこの行列を見るからと誘われて小高い丘に建っているイエズス会のトドマス・オス・サントス教会の二階からこれを眺めていた右近は、キリシタンと宣教師が一体となった大行列に驚いた。そして、この行列を長崎奉行所は差し止めをしようとしないことにも驚いた。右近の隣で一緒に見ているクレメンテ司祭は

「長崎にキリシタンだけで五万人いると言われている。そこに全国から集められたキリシタンが参加してこの行列になっている。現職の長崎代官アントニオ村山等安も家族ぐるみでこの行列に加わっている。これが行政とキリシタンが、お互いを認め合って共存している長崎の姿でしょうね」

と説明されたが、右近は咄嗟には理解できなかった。

この日から連日のようにドミニコ会、アウグスチノ会など各会の行列が行われ、イエズス会の行列は最終日に行われた。

その日は朝早くからイエズス会の教会・関連施設・病院などから、イエズス会会員が小高い丘の上のトドマス・オス・サントス教会に集まってきた。入院患者も歩けて行列に参加できる者は皆やってきた。クレメンテ司祭もライ患者を伴って、病院を出てこの教会にやってくることになっている。どれだけの長さの行列になるのか、誰にもわからない。と、右近の肩をたたく人がいた。見ればクレメンテ司祭が司祭の服装でなく、真っ白な医師の服装でやってきた。この姿なら、医師とライ患者とは誰にもわかる。

「右近殿、貴方も行列に参加しませんか」

と右近を誘った。右近は最初にフランシスコ会の行列を見たときから、自分は行列に参加しないことに決めていた。クレメンテ司祭への返事は

「私は遠慮しておきます。私の参加で奉行所を過度に刺激させるといけませんので。皆さんのお帰り迄ここでお待ちしています。クレメンテ司祭、頑張ってきてください」

とだけ答えて、行列に参加する人たちを眺めていた。

高山一家は全員右近に倣って、行列には参加しなかった。

右近がこの行列に参加しないことに自分で決めたのは、右近が参加した場合、イエズス会の行列の中にいる右近を見た誰かが「あれは高山右近だ」と叫ぶと、行列を見に来ている一般信徒も右近の周りに集まって来て、右近自身が自分ではどうにもならない状態になる危険がある。例えば、その人たちは高山右近を急造の「神輿」に乗せて、「高山右近、高山右近」と叫びながら行列して、むしろその行列の中心的催事の一つになってしまう危険がある事を感じて、どんなことがあっても行列には参加しないことに自分で決めていた。

この小高い丘にあるイエズス会会堂でミサが始まった。会堂の中から聞こえてくるグレゴリオ聖歌。グレゴリオ聖歌を右近は何度か聞いていたが、今日の聖歌ほど素晴らしい聖歌はなかった。神の恩寵と感謝した。

ミサが終るとそれぞれ聖体行列の準備。仮装するものもあれは、衣装を着替える者もあって、教会内は足の踏み場もない状態。準備が出来た者から一階の出口に集まっていた。行列が、トドマス・オス・サントス教会から坂を下ってサンタ・マリア教会の所に来た時、長崎代官アントニオ等安とその家族が行列に加わってきた。その派手な衣装と派手な動きは、イエズス会の行列を一段と派手やかなものにしていた。行列はイエズス会の教会を順に全て巡った。その都度そこの教会員が行列に参加して、参加人数は千人近くまで膨れ上がったと言われていた。

右近はこの聖体行列を見て、長崎の特殊性を感じていた。キリスト教禁教の徳川政権が、長崎だけ、キリスト教を禁止しないで、今の内だけかもわからないが併存させている。それも、どの行列も、キリスト教の主張を堂々と主張しているのを、長崎奉行所も取り締まらないで、見て見ないふりをしているのか何も言わない。また、徳川の長崎代官まで家族ぐるみで聖体行列に参加している。これは取り締まる方も、取り締まられる方も、「お互いここまで認め合って、後は仲良くやろうよ」ということがなり立っているとしか言いようがない。

それから長崎の町が出来上がる過程で、教会の果たしてきた役割が大きい。それは長崎の行政も無視できない歴史になっている。

具体的にはサンティアゴ教会では、教会が隣に病院と子供のための学校を備えていて、住民にとっては、その病院と学校は生活上なくてはならない施設になっている。その他サンタ・マリア教会にはサン・ミゲル墓地が付属している等、教会は、住民が学び、病を療養し、また、死んで葬られる施設を作っていて、住民の生活と密接に結びついていることが特記されよう。

ここに長崎の住民はこれら外国の教会を、自分たちの日常生活に結び着いた「自分たちの教会」と言った強い認識を持っている、ということを右近は一人強く感じていた。

（続く）

安芸門徒シルクロード紀行（17）

村上邦治

第二部　二一世紀のシルクロード旅行（1）

一章　タクラマカン砂漠の旅

一　出発

中国通で一〇回近く訪問しているリーダーN氏・中国の歴史文化に精通するM氏・総合商社上海駐在の経歴があるT氏と僕の四人組が中国新疆のシルクロード旅行に参加したのは、二〇一三年五月二四日出発のJTB旅物語「タクラマカン砂漠を行く新シルクロード一二日間」である。

パンフレットによると、目玉は五つあり中国最西端カシュガル訪問・タクラマカン砂漠大縦断・安全確保のため長距離バス運転手二名体制・敦煌鳴沙山ラクダ乗り体験・四都市デラックスホテル宿泊を掲げている。

海外ツアーが催行されるか否かは、キャンセル料が発生する一か月前に初めてわかる。JTBというブランド力かまたは五月の連休や盆休みより三割以上安いという設定によるものかはともかく、幸いにも予定通り二四日出発が決まった。

なにせ二〇年来の糖尿病治療を受ける主治医を説き伏せての海外旅行のため、早めに英漢併記の糖尿病治療証明書（機内に注射液・針の持ちこみに必要）を入手する。インシュリン注射薬・針・血糖値測定機器・除菌綿を何度も確認した。万一に備え予備として七日分を追加した。滅多に服用しない胃腸薬も購入した。旅行中の洗濯は難しく下着は毎日取り換えるため一二日分を用意する。

「旅のしおり」には「二四日成田空港一三時一五分集合（時間厳守）」と集合時刻にわざわざ「厳守」と追記

されていたが、日本人はこと時間にはうるさい。ちなみに旅行期間中集合時間に遅れた人は皆無であった。四人組は一時間前に集まり、受付カウンターで早々と手続きをすませこれからの旅について談笑した。空港内で人民元に両替したが一元一八・五円であった。

中国の奥地に行くためか、添乗員は男性中国人であった。日本語も上手な添乗員は参加者全員を集め、今回の参加人数は二〇名で、ちょうど「男女各々一〇名」であると皆に報告した。

一見したところ男性は定年退職したと思われる六〇歳代、女性は四〇歳代から六〇歳代だろうか少し年齢層に幅がありそうである。この中に夫婦は三～四組はいるものと予想したが、一組もいないとの説明で意外に思われたのか、参加者の中から少し驚きの声が聞こえた。

中国新疆は長らく日本人にとって未踏の地であり、宿泊施設や道路・鉄道などが次第に整備され日本の旅行業者がツアーに組み込み本格化したのは二一世紀になってからである。長く中国駐在員をしていたT氏も行ったことがないという特殊な地域をめぐる旅行であり、一般人にとって全く興味はない。中国の奥地しかも大砂漠や富士山と同じ高地に行くことを考えれば、シルクロードオタクか余程の物好きである。旅行好き夫婦と雖ども二人揃ってかなりの覚悟がなければ参加しない。

同行二〇人は長年の思いを募らせ、憧れのシルクロード旅行を熱望した意思の固い人達だ。初めて顔を合わせた同行者はこれからの旅路を夢見ているのか、皆目が輝いているようにみえた。

僕ら四人は中国古代史、王維・杜甫・蘇東坡らの漢詩、仏教遺跡、大谷探検隊など中国の歴史や文化文芸の好きな仲間である。王翰の「葡萄美酒夜光杯…古来征戦幾人回」を諳んじる者もいる。

西域の出入り口に位置する敦煌には、火災に会い現存しない法隆寺の壁画と酷似する壁画があり鑑賞を楽しみにしている人もいるはずだ。

西夏の勃興から敦煌の滅亡までを描いた井上靖の『敦煌』を愛読した人は多い。二〇世紀最大の文化遺産発見として世界中を驚かせた英スタイン・仏ペリオ・大谷探検隊らが持ち帰ったいわゆる「敦煌文書」保蔵の謎について、西夏朝の敦煌征服という歴史的事実をもとにした壮大な歴史小説である。当時のベストセラーであったがその後も人気は衰えず、新潮文庫は一〇〇版近く増刷を繰り返した。八八年にはこの小説を原作とした日中合作映画『敦煌』が四〇億円をかけて制作され話題となった。

世界各国で出版された「巨大な湖が砂漠を移動する」というスヴェン・ヘディンの『さまよえる湖』を少年のころ読んで、タクラマカン砂漠に興味を抱き始めた人もいる。そういえばあやしい探検隊の軽快な旅行体験を多

く書いた椎名誠がそうであった。(『砂の海楼蘭タクラマカン砂漠探検記』)

また幼いころよく歌った童謡『月の沙漠』の一節「朧にけぶる月の夜」の砂漠を、駱駝に乗った王子と王女の姿を懐かしく思い出す人もいる。

絵画好きな人の中には、日本画家平山郁夫が描く月夜を行く駱駝の隊商に魅かれた人もいよう。

しかし何といっても多くの人がシルクロードに魅了されたのは、喜太郎の郷愁を誘うシンセサイザーのテーマ音楽から始まるNHK特集『シルクロード』を見てからではなかろうか。

当時未知の世界であった中国新疆砂漠地帯の風景・仏教遺跡やオアシス都市の暮らしぶりなどが毎月一回放送された。日中共同制作により莫大な時間と取材費をかけたものだ。当時新疆ウイグル自治区へ入ることは禁止されており、共同制作ということで特別に許可された。初めて見る映像に多くの人は目を凝らした。

一九八〇(昭和五五)年四月から放映の後、NHKは八三年四月から第二部としてソ連・イランそしてローマまでを放送した。さらに八八年から第三弾としてローマから中東・インド・中国沿岸・長安までの『海のシルクロード』を放映した。

二五年経過した二〇〇五年からは『新シルクロード』が開始され、二五年前の過去と現在の映像を交錯させながらこの間の変化を追う形で進行した。以前のアナログ映像と比べ鮮明なデジタル映像が話題になった。オカリナや二胡の奏でるテーマ音楽も好評で再び多くの視聴者を集めた。NHK特集のこれら一連のドキュメンタリー番組は、日本人にシルクロードへの興味を抱かせた。

成田に集まった参加者の動機や目的は異なるであろうが、シルクロードに魅かれてやまない集団であることには間違いない。

五月晴れの成田から一五時一五分発北京行中国国際航空(AIRCHINA)機に搭乗した。ビジネスマンや旅行客で機内は満席であった。「北京空港まで四時間の飛行を予定しており天候は問題ない」との機長のアナウンスがあり、定刻にテイクオフした。エコノミークラスではあったが、富士山上空を飛行し日本列島を横断、島根半島から日本海に出て朝鮮半島上空へ順調に飛び、北京を目指す快適な空の旅であった。

離陸して三時間を過ぎたころ、平壌・大連上空から直線的に北京へ向かっていた搭乗機は、黄海に入るや左に旋回し始めた。どうしたのかと思っていると、機長から「北京空港に雷雲が発生し現在離発着を停止しており青島にて待機する」との説明で合点がいった。機は山東半島の青島空港に向かっていたのである。

雷雲であれば長くとも一時間程度の待機と思いきや二時間を超えた。空港閉鎖の時間がたとえ三〇分間としても発着陸をすべて中止させたとなると、待機していた離発着機を処理するには、その数倍の時間を要する。悪いことに夕方時の最も混雑する時間帯であった。乗り継ぎに二時間の余裕が取ってあったが、間に合わない可能性が出てきた。結局北京空港に三時間遅れの中国時間二一時に到着した。もはや二〇時発ウルムチ行きは離陸済みであろうから、北京で一泊せざるを得ないと覚悟した。

ところがである。北京空港に着陸するやツアー客を機内出口の最前列に並ばせた。ドアが開かれるや誘導する航空会社員と添乗員を先頭に、われらウルムチ行き乗客はその後を急いで追うことになった。途中の入国審査は驚くほど簡単に済み、わけのわからないまま国内線まで一〇分程度走ってやっと理解できた。ウルムチ行き発着を二時間遅らせ、われわれを待っていたのである。無論国内線もナショナルフラッグキャリア中国国際航空であったで、無謀ともいえる待機が可能であった。エアチャイナとしてすれば、二〇人の北京での宿泊先確保やその後の諸々の調整が必要となり、煩雑な交渉と費用がかさむ。何としても回避するため、ウルムチ行き乗客に犠牲を強いたのである。日本であればとても難しいことであった。

二時間も待たされた乗客のわれらを見る目は当然きつかった。文句は言われなかったが（中国語でいわれてもわからないが）睨みつけられた。ウルムチまで四時間一〇分かかるので、予定通りに出発しても、到着時刻は真夜中の一二時一〇分である。それが日本からの乗り継ぎ客を待ったため、真夜中の二時になるのだから怒るのも当然であった。われわれとしては遅くなるとしても、ウルムチに行き着けるのだから幸いというべきだろう。

窓からは暗くて何も見えず、さすがに疲れが出たのか機内での夕食後は皆眠り込んだ。着陸間近のアナウンスで起こされ、ウルムチ空港に着いたのは当初予定の一二時から遅れること午前二時であった。結局初日は機内に半日近く座っていたことになる。

こうしてウルムチに着いたのだが、外は真っ暗で何も見えない。空港内の人もまばら、店もほとんど閉まっていた。チャーターのバスに乗りホテルに着いたのが二時半、大慌てでシャワーを浴びて寝たのは三時（日本時間二時）を過ぎていた。やっと念願のシルクロードに着いた思いにひたることなく眠りに落ちた。

コラム1　旅行業界事情

「旅物語」はJTB（前日本交通公社）の中でも最大の集客を誇る旅行商品である。旅行代理店を通さない通

信販売（電話・ファックス・インターネット）のみの直売方式なので、募集費用は徹底的に削減できる。その分見どころはできるだけ詰め込んだ「お得感のある旅行」を提供し薄利多売を追求する。大手旅行業者は昨今旅行代理店を通さない直売方式を競って採用、分厚い旅行パンフレットを見込み客に郵送して希望者を集める。目的の旅行先（観光地）・出発日・宿泊ホテルなどを吟味して、最適なコースを選択、自宅から申し込む。画一的ではあるが添乗員が同行、宿泊・乗り物の手配など面倒な手続きは一切不要、外国語ができなくても添乗員の後をついていけば困らないという安心感と割安で簡易かつ便利性から人気がある。その代り事前に決行最少人員が決められており、満たされないとこの日程のコースは中止される。

旅行会社は参加者を集めることでホテル宿泊代・旅客機搭乗券など大幅値引きが可能となり、格安な代金設定にもかかわらず利益がだせる。しかし最少催行人数を満たさないと値引き交渉が難しく、赤字になるので中止せざるを得ない。これが最少催行人員という縛りの背景である。

旅慣れた人が多くなると、各社に重複して申し込む人がいるので、キャンセル料が発生する一か月前にならないと決行されるか否か確定しない。出発日を変えたくない旅行者は「一か月前までは解約金なし」という事項を悪用する。しかも六か月前の早期申し込みには代金が数万円程度割引されるので、早々と満員になる。しかし準備も終わり旅行ガイドを購入し夢を膨らませる頃、中止になるという傍迷惑なワル知恵が横行している。

コラム2　中国の時差

中国東端の松花江や国境沿いのロシアハバロフスクは東経一三五度、西端新疆カシュガルは東経七五度にあり六〇度の幅がある。一五度が一時間の時差に当たるので中国では理論上四時間の時差がある。しかし北京の近くの東経一一五度を標準時間として、全土北京時間で統一され時差はない。北京・上海・香港の東沿岸重視の設定である。とくに西端新疆では二～三時間の時差が無視されていることになる。

ちなみにアメリカ大陸は中国と同じ六〇度の経度差があり、米国本土では理論通りに四時間の時差が設けられている。

中国が時差制度を採用しない理由として、行政の統一・北京上海香港など東海岸に人口集中・ビジネスの利便性・軍事目的などがあるとされる。

しかし新疆西部では三時間の時差があるので、朝七時といっても夜明け前の四時にあたりまだ真っ暗である。そのためウルムチではローカル時間として北京時間から二時間遅れのウルムチ（新疆）時間も併用される。広い

国土でありながら単一時間の採用は、北京中心の中央集権体制によるものといえる。その点アメリカは州制が強く残る連邦制でありしかも個人を重視する民主主義国家であることから、効率利便性よりも自然の理に適う時差制度を採用している。

日本は東端根室市（東経一四五度）西端那覇市（一二五度）とでは二〇度の経度差があるが、東経一三五度（明石市）を標準時間に設定することで時差は設定されない。

二　ウルムチ（漢字名烏魯木斉　旧迪化）

昨日は予定より二時間あまり遅く着いたので、市内観光は予定より一時間ほど繰り下げられた。

ぐっすり寝た後、八時にモーニングコールで起こされた。着いたのが真夜中だったので街の様子はわからなかったが、ホテルのすぐ下に見えるのは緑の木々に囲まれた公園（人民広場）とその周辺の近代的な高層ビル群であり、二二階から初めて見る光景は日本と変わらない。寝起きの眼をこすりながら、ここは本当に「オアシス都市ウルムなのか」一瞬戸惑った。

宿泊した新疆海徳酒店（ホテル）は五つ星というだけあって、三六階建ての近代的ホテルで、設備は日本とそん色はない。ただトイレは水洗であってもシャワー式は中国では見当たらない。

朝食はハム・チーズや豊富な野菜・果物があり、卵料理はシェフが目の前で焼いてくれる。中国と思わせるのは中華料理が同時に提供されていることだ。中国人の多い東南アジアのシンガポールやジャカルタも同様である。双方自由に選択できるので、豪華な朝食となった。

ウルムチは北海道旭川と同じ緯度にありしかも内陸性乾燥気候なので、平均最高気温は七月の三〇度、平均最低温度は一月のマイナス二〇度と温度差が大きい。五月の終わりの今朝は二五度に近いが、湿度が低いので暑さを感じない。

二日目の観光は一時間遅れで大型バスに乗りホテルを出発した。車内で「私は漢族です」と誇らしげに強調する女性の現地スルーガイド（新疆全域の同行ガイド）が同乗した。四〇歳代の勝気そうな女性である。日本から同行した添乗員と二人体制になる。さらにクチャやトルファンでは古代遺跡に詳しい現地ガイドが加わるので、安全対策と観光案内は問題なかろう。

新疆ウイグル自治区首府ウルムチ市はガイドによると、人口は名古屋市と同じ二〇〇万人という。中心地の道路は片道三車線と広く両脇の通り沿いに街路樹が茂り、高層ビルや近代的建物が並ぶ。そういえば名古屋駅前の高層ビル街の様でもある。少し遅めの時間であったのか交通渋滞はそれほどでなく二〇分ほどで博物館に着く。

市内には古代より民族間の攻防が激しく歴史的な建築物や遺跡はほとんど残っていない。しかも今世紀初めからの西部大開発によるものか、中華風建物やロシア街、シルクロードを感じさせるサライなどは車中からは見られない。旅行ガイドには見どころとして紅山公園や人民公園が掲載されている。遠方からの観光客に足を運ばせるに値しないのか、自治区内の国宝級遺物を集めた博物館のみの予定である。

後で振り返ってみると、外国人旅行者の安全を考慮してのことであったのかもしれない。時折暴動の報道があり、市内観光は避けたのではないかとも思われる。

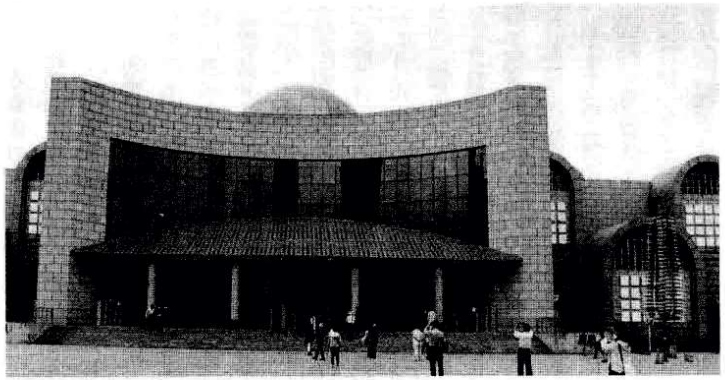
なおウルムチ北東九〇kmにある天山山脈ボゴタ峰（五四四五メートル）の中腹に「中国のスイス」と呼ばれる古くから名高い景勝地天池があるが、一日がかりとなり予定にはない。

新疆ウイグル自治区博物館は大通りに面し、高い塀に囲まれている。正面を入ると、観光バスが数十台駐車できる広場となっている。建物は二〇〇五年に西部大開発の一環として新たに建設されたもので、中央はウイグル建築様式の青色のドームであるが、前面は斬新なデザインの近代的ビルである。共産党政府は建国直後から、自治区や省の首府に博物館を創設し、貴重な出土品や少数民族の衣装・装身具・住居などを一か所に集め、総合的に展示する方式を進めてきた。確かに広大な地域に分散する出土品を見て回るのは大変であるが、発掘地には何もないのも寂しい。

最大の観光地となっている博物館に入るとドームは吹き抜けとなっており、巨大な新疆自治区の地図が置かれ、天山・パミール・崑崙の高い山脈に囲まれたタリム盆地全体がカバーされ、街道沿いのオアシス都市や古代遺跡が記されている。二階から見下ろすとちょうど全景が見渡せる。

一・二階は出土品を集めた歴史文物室と少数民族の衣装や住居などを展示した民族風情室がある。

最大の見どころは三階の古代ミイラ展示室で、世界



新疆ウイグル自治区博物館

的に有名になった一九八〇年に発掘された「楼蘭美女」などが置かれている。ガラスケースの中には嬰児から老人まで埋葬されたままの姿で数十体が並べてあるのは壮観である。残念なことに楼蘭美女は外交に忙しく、外遊中でお会いできなかった。当時の衣装や布製の靴などもあり、この部屋だけでも一時間は飽きさせない。

コラム1　ウルムチの歴史

新疆ウイグル自治区の面積一六六万㎢でうち三割はタクラマカン砂漠である。自治区の人口は二千万人、政治・経済の中心首府ウルムチ市は三五五万人（内漢族は約五割）で、面積は一%も満たないが人口は二〇%近くを占める。

天山北路の中間点にあり、南に行くとトルファンで天山南路に通じる。モンゴルへの街道もあり交通の要所である。この地は紀元前から月氏（中国王朝秦）・匈奴（前漢）・鮮卑（トルコ系後漢）・烏孫（トルコ系前・後漢）・柔然（モンゴル系北魏）の遊牧民族が争奪を繰り返した。その後トルコ系の突厥（隋・唐）・ウイグル（唐・宋）が支配したが、そのたびに中華王朝と対立、戦が絶えなかった。前漢時代に西域都護府が置かれ西域の前進基地でもあった。

一三世紀にはモンゴル帝国（元）の支配下におかれたが、衰退すると再び漢族・モンゴル族・トルコ系諸族・チベット族（吐蕃）による争奪の地となり、常に揺れ動いた。しかしウルムチの政治・商業の中心地としての役割は変わらなかった。

清朝乾隆帝の時東トルキスタンを平定、新疆（新しい土地）と呼び藩部として組み入れた。ウルムチは迪化（正しく導く）と改称し統治の中心地とした。この地は仏教・チベット仏教・イスラム教そしてキリスト教・ロシア正教の各教徒が混在したが、清朝以前にこの地を支配したトルコ系民族が主導権を握り、イスラム教徒が大半を占めるに至った。

ウルムチ市が本格的に都市として開発されたのは清朝の藩部になったときからで、対ロシアの軍事拠点、またシベリア鉄道開通後は商業物流基地として発展した。

市内には一九〇三年九月大谷探検隊渡辺哲信・堀賢雄が訪れた折驚いたウルムチ城（迪化府）の大観や聳え立つ寺塔のあるロシア寺院・居留地の洋風家並みなどの伝統的な建物が残っていたが、二一世紀初頭からの「西部大開発政策」（外資導入促進のため交通・物流・医療教育などインフラを建設するとした投資環境整備計画）により取り壊され、近代的な都市に生まれ変わった。

その後も砂漠地帯に埋蔵された石油・天然ガス・希少金属など鉱物資源の開発が進み、その拠点となるウルムチは短期間に大都市に発展した。

コラム2　ウルムチ騒乱

清国の藩部に編入された後、清朝の退潮や辛亥革命の内乱により、トルコ系民族による分離独立機運が高まる。一九三〇年～四〇年代にはソ連の支援を得て、一次・二次東トルキスタン共和国を建国し独立を実現する。四九年中華人民共和国が成立すると解放軍が進駐し、分離・独立の動きは封じられた。しかし二度にわたる独立国家の実現を果たした歴史的事実は、騒動の種として残った。

常駐する人民解放軍の生産建設兵団は、平時には農業生産に従事するいわば漢族の屯田兵であった。この兵団に内地から漢人の移民を受け入れ砂漠地を開墾、耕地面積は飛躍的に拡大し食料増産に成功する。五四年当時兵団の人口は一八万人であったが、六六年には一四九万人に拡大した。漢人は移民急増・入植地拡大・所得上昇を背景に、漢人社会を形成していく。

五五年自治区となり、そのトップの共産党委員会書記に漢人が就くことが慣例化する。以降一党独裁の共産党はイスラム教徒であるウイグル族の分離・独立の動きを抑圧した。

八〇年代からの上海や深圳など沿海部の著しい発展や新疆区内の裕福な漢人社会から取り残されたウイグル人は、貧困から脱せないのは「タリム盆地の天然資源を略奪し内地に送り込むだけでこの莫大な収益を地元に還元しない」漢人の所為として、漢人経営の工場・店舗を対象にする暴動が頻発する。大規模な暴力事件として、九〇年バリン郷事件（クズルス・キリギス自治州）・九七年グルジャ事件（イリ・カザフ自治州）が起きた。

その中で最大規模は二〇〇九年ウルムチで発生した通称七・五事件である。発端は広東省の工場で漢人によるウイグル人襲撃事件が起きたことからであった。地元警察の漢人加害者の甘い対応やウイグル人被害者の過少発表が民族差別として、ウルムチ市で学生を中心とする平和的抗議デモが始まった。区政府は武装警官を投入、過剰な威嚇や無差別射撃で対抗した。これに刺激されたウイグル人は同時多発的に抗議デモを起し一部は暴徒化、漢人経営の商店や車両を焼き討ちにした。当局は武装警察の増員や銃撃などにより武力鎮圧したが、死者二百人負傷者二千人を出し、逮捕者一五〇〇人が治安部隊に拘束された。さらに数千人が失踪者として行方不明になっているといわれる。

中国政府はこれら暴動事件を常套句の「国外からの指揮による陰謀で組織的な打ちこわし・焼き討ちによる暴力事件」とする。一方世界ウイグル会議（独ミュンヘンの東トルキスタン独立運動組織）は民族の権利擁護運動から始まったものであり、武装警官の放水や催涙弾使用し銃の発砲まで至ったことにより暴動化したものと反論した。

取材した多くの報道機関は過酷すぎる民族政策の抵抗や貧富格差による不満から発生したもので、独立運動の見方はしていない。その後一〇年アクスでの爆発事件一一年ホータン・カシュガルで襲撃事件が相次いだ。われわれが新疆を訪れたのはこれら事件後の間もない時である。

その後も徹底したウイグル人弾圧政策が取られたが、習近平総書記が初訪問した一四年四月、視察に合わせたかのようにウルムチ駅で三人が死亡七九人が負傷する自爆テロ事件が発生した。区当局の面目を失墜させたこの事件以降、最先端の顔認証システムの導入と監視カメラの増設や携帯電話の通話解析により「世界に類のない警察国家・監視社会」を作り上げた。

一〇年経った二二年七月、習近平総書記二度目のウルムチ市訪問が報じられた。監視社会の実現により、ウイグル族を完全に抑え込んだことの表明であった。

しかし国連や自由主義国家からは、反対するウイグル人を隔離拘束する再教育施設（職業技能教育訓練センター）への収容を、「深刻な人権侵害」として強く非難している。

三　眼下の天山山脈

ウルムチ地窩鋪国際空港をクチャ行き国内便は予定通り午後一時に離陸した。約一時間の飛行である。

ウルムチには昨夜真夜中に到着して以来、高層ビルが並ぶ近代都市にしか見えず、砂漠の中のオアシスであることを忘れさせた。車窓からは緑豊かな街路樹とビルに視界が遮られ、高山も砂漠も見ることができなかった。

快晴で風もなく離陸してすぐに、初めてウルムチがオアシス都市であることが視認できた。

上昇中の機内の窓を見下ろすと、市内の周りは砂に囲まれており、円形の市内のみが緑に覆われていた。高度を上げていくと、間違いなく砂漠の中の小さなオアシスであった。市内の中心部を移動しただけであったので、砂漠の風景に出会うことができなかっただけのことであった。

ウルムチからはクチャへは南疆鉄路の快速列車（一六時間）や高速バス（一四時間）でも行けるが、南東一八〇kmにある代表的観光地トルファンを迂回するので、いずれも半日以上を要する。慌ただしいツアーには適さない。

南方航空国内線の中型ジェット機は一〇分程度砂漠の上を飛行したあと、天山山脈の東端に達する頃高度八千メートルで水平飛行に入った。ここから予期せぬ大パノラマに息をのむことになる。この眼下の景観こそがジェット機利用の理由であろう。

飛行機は天山山脈の北天山から中・南天山を越えてクチャに向かう。飛行時間の大半は、四～五千メートル級の天山山脈を斜めに横切る。

窓からは三千メートル下に聳える天山山脈の荒々しく鋭敏な岩壁に、氷河がまとわりついているのがよく見える。何も寄せ付けない壮観な山脈を、われわれは上空から見られるのだ。

鋭利なナイフのような山頂が幾重にも重なりしかもその山肌や山間には氷河が張り付いている。動くものは何もなく、唯々山の尖った一部の黒い部分と氷河の白色だけだが、時に氷が太陽に反射し一瞬輝やいて目映い。次々に現れる山岳と氷河のおりなす圧倒する眺望に、ただ見とれるばかりであった。

五日後トルファンに行くために、カシュガルからウルムチへ飛行中にも天山遊覧が楽しめる。この時は最高峰ポベーダ山や次峰ハンテングル山をいただく六千メートル級の高山を眼下に鑑賞できる。しかし高度が一万メートル以上であったためかそれとも既に天山のすごさを体験したためであろうか、往路でみた最初の光景が一番印象に残った。

四〇分間の壮大な天空のパノラマショウにすっかり度肝を抜かれたが、南天山を越えると下降し始め着陸体制に入った。山頂から三合目あたりは黒い山肌であるが、その下は扇状体となっており緑に覆われたオアシス都市クチャが一望される。さらに南にはタクラマカン砂漠がうっすら見渡せた。飛行機は二年前開港した新クチャ空港に予定通り二時過ぎに着いた。

コラム　天山山脈

天山山脈の西端はパミール高原に繋がり、東端はモンゴル国境まで二五〇〇km、幅二五〇kmから三〇〇kmに達する巨大山系である。長大な山幅を有するのは、北天山・中天山・南天山という三つの山脈からなっているためである。主峰は南天山にあるクチャ西二〇〇kmのポベーダ山（七四三九メートル）で、キルギスと国境を分ける。

ウルムチは北天山のくびれたところに位置する。北天山の北淵草原地帯を天山北路が通り、南天山南渕砂漠地帯のオアシスをつなぐのが天山南路である。西域北道とはこの二幹道を総称する。

四　クチャ（庫車旧亀茲国）

前漢時代からオアシス都市国家亀茲国（唐屈支国）として栄えたクチャは、機上から認められた氷河の雪解け水により作られた扇状地である。タリム盆地に点在するオアシスの中では豊富な水量に恵まれ発展した。七世紀の初めにここに立ち寄った玄奘は「広大な農地が広がり、黍・麦・稲、葡萄・石榴・梨・桃など果実類が、また天

山山脈の麓から金・銅・鉄・鉛・錫などの鉱産物を産する豊かな土地」と記している。(『大唐西域記』)

市内には高い建物はなく、緑の多い落ち着いた街である。着陸後の二時間余りは、市内中心部にあるイスラム教施設を訪ねた。

最初に訪れたのはイスラム教伝道師エシディンの墓所モナエシディン・マザールである。モンゴル帝国を築いたチンギス・ハンの次子が中央アジアに建国したチャガタイ・ハン国の軍事指導者トゥグルク・ティムール(一三七〇年ティムール朝建国)を帰依させた人物である。さらに一四万人のモンゴル族をイスラム教に入信させたとされる。エシディンによりティムール朝からイスラム教は一挙に拡大・普及した。

面白いことに代表的なイスラム教墓所で有名な観光名所であるにもかかわらず、聖地を護る気難しい番人の機嫌が悪いと入場させないことがあるとの断りを現地ガイドがバスの中で説明したことである。日本では一人の気分により名所見学が左右されることなど考えられない。

交渉の結果危惧したことにはならず門は開かれ中に入った。塀で囲まれた墓所には木と煉瓦で作られた建物があり、その中に赤や緑色の被いで飾られた四~五mもある木棺があった。そのほかに庭園・礼拝所・尖塔などの宗教施設が整っており、初めて見るイスラム教墓所を知ることができた。

市内の西に自治区内最大のカシュガルエイティガール寺院に次ぐモスククチャ大寺(クチャ清真寺)がある。一六世紀に創建され二〇世紀の初めに再建されたイスラム教寺院である。見事な彫刻を施した外壁・青レンガドームの大礼拝堂・二〇メートル近くの尖塔に驚く。後方には営ての「宗教法廷」の遺構があり、天井・柱・側壁は灰色で重々しい印象を受ける。

午後からの観光はこれで終わり、五時に中規模低層ビルの庫車国際飯店に入った。日本のビジネスホテルクラスであるが、シャワー・水洗式トイレが備わり清潔なベットにも問題ない。意外にも亀茲国古都の夜は快適であった。

夕食後ホテルの周辺を四人で散策した。街の雰囲気が直に感じられるので貴重である。無論目的は酒(紹興酒・茅台酒)麦酒(青島麦酒・地麦酒)類の購入である。イスラム教下のはずだがどこにでも酒店があった。この辺境な街にも物価の高騰が押し寄せ、ビールの値段をとっても以前と比べ大幅な値上げが目立つとの中国通N氏の言であった。でも目の前のアルコールの誘惑には負けるようである。

インシュリン注射のおかげで命をつなぐ私一人禁酒なので、N氏の勧めでハミ瓜一個を買う。フットボールの

形をしたスイカぐらいの大きさで五~六〇〇円程度と安い買い物である。味は日本のマクワ瓜と同様ほんのりとした甘さがあり、果肉の瑞々しさに病みつきとなり毎夜ハミ瓜を食することになる。オアシスのどこに行ってもハミ瓜だけは山のように売っている。無論収穫期があるが、季節にあわせ転地栽培することで年中販売される。水の乏しい砂漠周辺では人気の果物なのであろう。一人では到底食べきれず酒盛り中の三人にも加わってもらうが三割は残った。同行の婦人に御裾分けをすると大変喜ばれた。

クチャ二日目は最も期待する郊外の仏教遺跡巡りである。市内からキジルに向かう途中、天山南路が通る塩水渓谷の奇観を近くで見ることできた。この古道は現在国道として舗装されている。

河の水量はわずかだが、渓谷名の通り塩分を含んでおり、河床には白い塩の結晶が残る。見ものは両岸の風化でできた岩肌で、一瞬断層崖と思わせる独特の景観を造り出している。長年高山と砂漠からの強風により、柔らかい部分が削り取られ、固い岩が露出したものである。

中国史に詳しいM氏から、一四〇〇年前天竺に向かう玄奘が歩いたところだと教えてくれた。後で『大唐西域記』を読むと、天山南路を通り屈支国から跋禄迦国(バールカー)(現アクス)を通り、天山山脈を乗り越え大清池(イシク・クル湖)にたどり着くとあり、塩水渓谷を通ったことは間違いない。玄奘の旅のことを話しながらの見学は何とも嬉しい。

そこから一時間ほどでムザルト河が流れるキジル渓谷に着く。この渓谷には敦煌とともに仏教芸術の精華とされる石窟寺院キジル千仏洞がある。一一〇年前西欧列強国の探検隊に先駆け、第一次大谷探検隊渡辺哲信と堀賢雄の二人が発掘調査したところである。わずか一日早く発見した二人はトルファンから帰国の途に就いていたドイツ隊に覚られないように、隊長グリュンウェーデルに対面を求め長い時間聞き役に徹し、地元民からの情報入手を防いだ逸話が残る。

山肌には草木はないが、渓谷を流れるムザルト河の両岸には高いポプラ・故楊林などの灌木、低地にはあしなどが生い茂る緑地帯である。駐車場から一〇メートル以上もある整然と植林されたポプラ並木の中を歩いていくと、急に明るい広場に出る。そこに入口があり、ミュージアムショップのようなプレハブの販売小屋とカメラ預かり所(撮影およびカメラ持ち込み禁止)そして亀茲石窟研究所がある。

広場の真ん中には四世紀半ば釈迦と同じく亀茲国王子の身でありながら出家、大乗・小乗の双方を会得し長安で膨大な仏教経典を漢訳した鳩摩羅什(くまらじゅう)の銅像が待ち構え

てくれていた。あら骨が浮き出た細身の銅像の顔は、何か憂いているような表情であった。辺り一帯は緑の木立や草花に囲まれ小川もあるので、気持ち良い涼しさを感じる。



キジル千仏洞と鳩摩羅什像

そこから高さ二〇～三〇㍍もある岩肌に渡辺哲信が初めて見上げて「あたかも蜂の巣に似たる」と表し、相棒の堀賢雄は一見するなり「非常に興奮」した洞窟が数十箇ほど見られた。これがキジル千仏洞であった。繰り返すが外国人として初めて二週間滞在、調査・発掘・撮影・模写・測量したのが、浄土真宗本願寺派僧侶渡辺と堀であった。

二人は絶壁懸崖の中腹にある洞窟に入るには、住民がアルペン縄を洞窟内の壁につなぎ、それを胴に巻いて上から綱を引っ張ってもらいやっと登ったのだった。現在は観光客のために手すりのついた鉄製の急ではあるが階段を設け、石窟の前には安全対策として柵と回廊が設置された。

中腹まで登ると渓谷全体が見渡され、堀が四月中旬「黄土赤土の山に囲まれ、杏樹若柳と相映じて柳桜をこきまぜ」たとする光景は、百年後の五月下旬の今、見事に緑色一面に蔽われたおだやかで静寂な峡谷であった。

現地ガイドの後から広い洞内に入ると、千仏洞と称される通り、柱・壁・天井一面に、すべて表情の異なる釈迦の姿が隙間なく描かれている。しかし小さな壁画さえも釈迦の目はすべて針か斧で潰されていた。さまざまな偶像崇拝する仏教と違い、一神教であるイスラム教徒の仕業である。聖典『コーラン』で説く「唯一神アッラーの絶対的な帰依」を求め、アッラーからつかわされた預

言者ムハンマドでさえ自ら偶像を破壊した。この地にイスラム教徒が侵攻した時、千仏洞内に千体あるとされる仏の目を、丁寧にも一つ一つ潰したのである。天井の痛々しい仏のお姿であるが、幸いにも目を除けばほかには傷をつけていない。

さらに痛々しく感じるのは、ドイツ隊の大量剥奪の跡である。第一発見者の渡辺は壁画を模写、堀は写真撮影して各々記録を残した。その際に渡辺は「仏堂の壁画を剥取す」と記し、「砂岩に厚さ一寸の粘土を塗り」「功を急げば直ちに破損する」と書き残している。取得したのは堀の手記によれば「十数の壁画」とされ、木箱に麦わらを入れて運んだとしている。日本の研究者のためにほんのわずか持ち帰った。

ところが一年後ル・コック、二年後グリュンウェーデルらは、壁画一面そっくり剥ぎ取りベルリンに持ち帰った。大谷隊は学問研究のためであったが、ドイツ隊は首都ベルリン民俗博物館に展示するためであった。中央アジアにおけるドイツの国力を誇示し、国家の威信を高める目的であった。鮮やかな色彩を保ち芸術性の高い石窟ほど、剥ぎ取られ虚しい石窟に変わった。

そうした経緯を思い出しながらの見学であったが、思った以上に壁画の残る石窟には感動した。確かに目はムスリムにより壊されているが、残された壁画の色彩は、青と黄色がはっきりと残り、顔の表情が分かる。よく見ると天井の小さな千仏絵画の中には、目が潰されていない完全なものもわずかではあるが残されていた。

壁画は釈迦の前世物語「ジャータカ（本生譚）」（仏陀の前世における菩薩時代の物語）や誕生・幼年時代・結婚と王宮生活・出家そして成道・初転法輪・伝道・入滅までの説話が描かれているとの現地ガイドの説明を聞きながら凝視した。仏教説話に詳しくない者にとっては説明されても、どの場面なのかわからない。しかし三世紀から開削され唐の時代を最盛期とする壁画は、西から伝わる西域・ガンダーラの影響と中国で円熟した仏教絵画とが融合したとされ、いまも鮮やかさの残る仏教絵巻は初めて石窟寺院をみる者に強く印象に残る絵画であった。

余談になるが玄奘は天山南路の塩水渓谷を通りアクスに向かったが、どうもキジル石窟寺院には立ち寄らなかったものと思える。『西域記』や『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』にはまったく触られていない。旅を急ぐにもかかわらず高昌国（トルファン）で三カ月、屈支国（クチャ）で二カ月の滞在を余儀なくされたことで、天竺に急ぐ玄奘は幹道からわずか数キロ南に下ったこの千仏洞を訪れなったのであろう。

朝来た道を市内に戻る途中、塩水渓谷下流に当たるゴビタン砂礫の中に、遠方からも認められる高さ一三～一四㍍あるクズルガハ烽火台がある。土台は一辺五～六

メートルのほぼ正方で上層部は細くなる四角形の土塔である。二千年前の漢代に造られ、北方匈奴の侵攻時には、次々に狼煙を上げて亀茲国に置かれていた西域都護府に知らせた当時の通信施設である。数キロ置きに烽火台が築かれていたはずであるが、現在この近くにはクズルガハの塔しか残されていない。

下車して間近で見上げるとその高さが実感できる。外見は飾りもなく素朴な土製であるにも関わらず、よくぞ今日まで残ったものだと感心した。触ってみると岩のように固く、簡単には崩れそうにないように見えた。

この近くにクズルガハ（中国名キジルガハ）千仏洞（制作年代四～八世紀）がある。

懸崖の山腹に石窟寺院を造るには、開削後その中を幾種類もの粘土で覆い壁画を制作していかねばならない。工人・切削工・粘土工・塗師・絵師などを集め、一堂を完成するには数十年は必要とする。携わる多くの人々がしかも長期間生活をするには、すぐ近くに飲み水が取れる河が不可欠となる。それ故千仏洞のすぐそばには必ず河が存在する。

ところがクズルガハ千仏洞の周辺には河も樹木や草もない地肌むき出しの地で、小高い山の中腹にいくつかの石窟が残されていた。河ないところにどのようして造れたのかと思案していると、麓に水の流れていた跡が認められ営ては河があったことがわかった。いつの日か水が途絶え、制作は中止されたのであろう。周辺は灰色一色の景色であった。

石窟の前まで歩いて行き、鍵を開け内部を見学したが、キジル千仏洞の鮮やかな色彩の壁画はなくほとんど消えかかっていた。別の洞内には何もなく盗掘されたのであろう。クチャにある多くの石窟は崩壊が酷く壁画も残っていない。

塩水渓谷の近くの懸崖に、キジル千仏洞に次ぐ規模のクムトラ千仏洞がある。大谷一次（渡辺・堀）三次（吉川小一郎）がドイツ隊の発掘後で苦労を重ねながらも、仏具や仏像などの遺物を掘り出したところである。ぜひこの千仏洞も見学したかったのだが、崩落の危険があり特別に許可された者にしか入れない。壁画は写真で見ると鮮やかさが残る見事なものであるが、ツアー客には解禁されておらず、見学はあきらめざるを得ない。

最後に市内から北北東二〇kmにあるスバシ故城と呼ばれる大遺跡を見学した。玄奘が屈支国を「伽藍百余ヵ所と僧五千人」と記す仏教王国の最大寺院昭怙釐伽藍の遺跡である。玄奘は「荒城（訳注国の東辺にある城）の北四〇余里のところ、山の入りこみに接し一つの河をへだてて二つの伽藍がある」と記している。唐時代の一里は五六〇メートルなので約二二キロになり、その「方角・距離」はほぼ一致する。そして「河をへだてた二つの伽藍」の記述の如く、川の両岸に遺跡が存在するので、スバシ故城と呼ばれるこの遺跡に間違いない。

天山の雪どけ時期を過ぎているのか、河幅は一kmの大河であるが水量は少ない。一次大谷隊渡辺と堀は初めの四日間は東伽藍を発掘し、地獄絵の壁画などを得ている。次に河を渡り西伽藍で木製の金箔を施した舎利容器を発掘した。

スバシ（蘇巴什）胡城と呼ばれる通り、河沿いに城壁の一部が残っている。しかし大寺院伽藍であったと思わせるものは何もなかった。河の両岸には高くて崩れた大きな土塔の一部が残されているが、これが仏塔であったのであろう。周辺には五～一〇メートルの大きく崩れた幾つもの塔や壁があるが、原型を想像することができない。一四〇〇年前玄奘が「仏像の荘厳さは殆んど人工とは思えない」と称賛した仏像も見当たらない。目の前には崩れ去り原型をとどめない遺構が立ち並び、地上には土の塊や石・レンガが転がるだけの、荒涼とした光景だけであった。玄奘の見た大伽藍と荘厳な仏像を思い浮かべながら離れた。

コラム　仏教王国亀茲国

七世紀前半玄奘が天竺に向かう途中屈支（亀茲）国について『大唐西域記』には「豊富な農・鉱産物とおおだやかな気候により裕福に暮らしている」と記す。当時は「大乗仏教ではなく小乗仏教にとどまっており、梵語で学習している」と報告する。そして国王を始め兵士・庶民に至るまで熱心な仏教徒であり、気候に恵まれ天山山脈から豊かな水と鉱物資源を得て、豊かに暮らす住民は寺院に功徳を積むことを競っていると記した。とくに昭怙釐伽藍は河を挟んで東西に伽藍を持ち、荘厳な仏像の見事さに驚いている。この地に二か月滞在した玄奘は、屈支国を「理想的な仏教国」として称賛した。

三世紀から四世紀にかけて五胡十六国の後趙（都洛陽）で、九百の寺院を建て一万人の門下を育成し中国に仏教を一挙に拡大させた仏図澄（？―三四八）、後秦（都西安）皇帝姚興の支援を得て三五部二九四巻の経典を訳出した鳩摩羅什（三五〇―四〇九）の二人は亀茲国の出身である。

五　タクラマカン砂漠縦断

四日目はいよいよ呼び物の一つになっているタクラマカン砂漠を縦断する。

天山南路のクチャから西域南道のニヤまで七一〇km、砂漠縦断距離は五二〇kmである。縦断道路（砂漠公路）は二本あり、もう一本はアクスからホータンに通ずる阿和公路である。現在新しく東側にコルラからチェルチェン間に三本目の縦断道路が建設中でまもなく開通する。

ニヤまでバスで一二時間ほどの予定である。隊商を組んで縦断した一次大谷探検隊の渡辺・堀や三次橘は一か月近くを要した。一世紀後の現在はバスでは七～八〇㎞で走り、途中昼食休憩を取るにしても半日で縦断できる。

ホテルを八時半に出発、天山南路（国道三一四号）を一〇〇㎞ほど東に向かい、オアシス都市輪台から「輪（輪台）民（ニヤの漢名民豊）公路」と呼ばれるハイウエーで、タクラマカン砂漠を南下縦断して西域南道のオアシス都市ニヤまで走る。

クチャの朝空は砂漠のオアシスとは思えないほど雲が多く、この季節としては二〇度台と低いので暑くはない。まず天山南路を東に走るが、通行量は少なく信号もないので一時間半ほどで輪台に着く。ここから南下してタリム公路とも呼ばれる縦断ハイウエーの入り口に向かう。ハイウエーといってもアスハルトで舗装されてはいるが、追い越し車線の無い片道一車線である。入り口でトイレ休憩を兼ねて下車し周辺を散策、入り口の看板を背景に皆思い思いに記念写真を撮る。

この縦断路は七〇年代に砂漠の地下に石油が発見され、その運搬用道路として建設された。現在は西域両道を結ぶ産業観光道路として利用される。

中国人民出版社の説明ではタクラマカン砂漠の自動車道路建設は「絶対に易しいことではない」と強調する。まず砂の上に路床を作りその上に隔絶布を敷き、砂を敷いた後押さえつけ最後にアスファルトを敷くと説明する。砂漠での道路建設は余分な工程が必要となり費用もかさむ。



砂漠公路入り口

開通後の維持が大変で、常時砂が襲ってくるので両側に砂漠でも生育するタマリスクを植林して、砂から道路を護ると説明している。できるだけ流砂でない小石（いわゆるゴビ）の場所を選ぶことも大切である。

入場口付近にはポプラや故楊林などの茂った樹木があったものの、タクラマカン砂漠に入ると三六〇度砂だけの風景に変わった。期待していた自治区最大のタリム河は両岸緑の故楊林に囲まれていたが、速度を落とすことなく橋を通り抜けた。後は何も生えておらず周りに見えるものは砂山だけである。砂漠の中にある石油と天然ガスの掘削柱の写真を見たが、車窓からは認められなかった。時速七～八〇㎞で走るのだが前後に車はなく、この速度が維持できる。

空は砂漠特有の太陽が雲に隠れどんより曇っていたが、バス前面の窓に雨粒が着き始めた。次第に大粒になり、一時はワイパーがせわしなく左右に動いた。なんとタクラマカン砂漠に雨が降っているのだ。年間降水量は二五㎜とされ一年を通じ数日しか雨は降らない。その滅多に降らない雨が迎えてくれた。Sガイド曰くこの旅行は「まさに幸運に遭遇し吉兆の現れ」と解説し、これからよいことが起きるだろうと予言した。


雨の砂漠公路

途中でトイレ休憩がある。砂漠は曇りでこの時は雨も止んでいた。バスは路肩に寄り止まった。しかし建物はどこにもなく、無論トイレも見当たらない。ガイドの指示で男女別々にバスの両側に分けられた。N氏からこれがタマリスクと教えられた木立の茂みで用を足すのである。これを「青空トイレ」という。男性はまだしも女性陣は苦痛だろう。しかしこの初めて経験する青空トイレはわれわれ以外誰もおらず、離れたタマリスクの陰で済ますので、慣れると誰も文句は言わない。しかも大砂漠の中なのでとにかく爽快である。タマリスクという隠れ蓑があるだけの砂地での青空トイレは縦断中だけであったが、このトイレが最高に素晴らしいものと思える時がすぐ来る。

砂漠というとさらさらした砂が想像されるが、道路周辺は「砂漠舗装」（ゴビともいう）と言って風で細かい砂は吹き飛ばされ残った小石や岩石の混ざるところなので足が砂に埋もれることはない。こうした砂漠舗装を選んで施工したのであろう。

昼食はバラック建ての食堂で簡単な中華弁当がでた。青空トイレを経験し粗末な昼食を食べて、初めてタクラマカン砂漠という「一度入ると生きて出られない」広大な砂漠のど真ん中に来たことを実感する。

ニヤに近づくと有名な遺跡がある。新疆ウイグル自治区三大遺跡の一つニヤ遺跡である。ちなみに残る二つは

昨日見学したキジル千仏洞と楼蘭遺跡である。現在楼蘭に行く道路は整備されておらず、しかも近くに核実験場があることからか観光客に開放されていない。

この遺跡は公路の終着地ニヤの一〇〇kmの手前にあるはずだ。地図では公路の近く（それでも数十kmはなれている）なのだが、遺跡への道路もなく歴史オタクの希望を満たすことは無理である。窓越しに凝視し続けたが無駄であった。

コラム1　砂漠の樹木

タクラマカン砂漠を縦断する輪民公路は一九九五年に開通したが、九割に当たる四六六kmは砂漠の中を通る。この道路の維持は流砂との戦いである。風による砂の流入を食い止めるため、耐乾性（年間降雨量二五ミリ）・耐暑性（日中温度四〇度）・耐塩性（岩塩砂）にかなう樹木として選ばれたのがタマリスクである。日本で栽培されるギョリュウ（御柳）は同種で漢名檉柳（異名三春柳・河柳）と呼ばれ、樹高は一～二メートルの低木である。公路に並行して地下水をくみ上げる小屋を建て、水道管を伸ばし点滴灌漑により育成され、緑化と砂防対策に用いられる。

胡楊林はポプラ属の中では最も耐塩性があるが、地下水位が深い砂漠では育たない。地下水位の浅いタリム河やホータン河のほとりでは天然林を形成する。河岸の広大な氾濫原の胡楊林からなる天然林は貴重な資源として燃料や建材に利用される。

オアシスの幹道両側には一〇メートルを超すポプラ並木が随所にみられる。雨が降らないので根元に用水路から水を補給し人為的に維持されている。

コラム2　タリム盆地のトイレ事情

天山山脈の雪解け水を大量に利用できるウルムチ・クチャ、同様にカシュガル（パミール高原）・ホータン（崑崙山脈）を除き、タリム盆地のオアシスでは極端に水が不足しているので水洗式トイレは見当たらない。糞尿を肥料とした時代の日本と同じ、単なる落下堆積式である。この地は高温なので悪臭が酷い。二一世紀の日本人旅行者にとってこのトイレ事情は最も苦痛である。青空トイレはその点気持ち良い天然トイレといえる。

中国の水は非常に硬度が高く、軟水で育った日本人はたいてい下痢・吐き気に襲われる。どうしてもトイレの厄介にならざるを得ない回数が増えるので、タリム盆地への旅行は「水の量と質」に悩まされる。もっとも硬水に強い日本人も例外的にいることはいる。

六　ニヤ（民豊旧尼雅）

西域南道の中間点にあたるオアシス都市ニヤに着いたのは午後八時であったが、時差の関係でまだ明るさが残る。崑崙山脈から流れるニヤ河沿いの人口三万人弱の小都市である。一四〇〇年前西安に戻る玄奘はホータンから西域南道を東に進みニヤ城に着く。当時のニヤは北方一〇〇km先の砂漠の中に埋もれたニヤ遺跡の近くにあったものと思われる。崑崙山脈の雪解け水の減少により乾燥化が進み、現在の位置に移動したものと思われる。

ニヤの街は新しい建物は少なく、街並も古い。人の動きも活気があるようには見えない。宿泊の尼雅賓館は地方の小さなビジネス旅館のようで、清潔感のない古くて小さなホテルである。たちまちトイレからして閉口したが、極端に水の少ないタクラマカン砂漠のオアシスであるので、ベットの上で寝るだけでも贅沢と思うべきだろう。

このころから腹具合がおかしく下痢気味になった。中国入国から用心に用心を重ねて、ペットボトルの水だけを口にした。歯磨きにもボトルの水を使用したぐらいだ。しかし硬水に負けて、下痢に見舞われた。腹の中がゴロゴロ鳴るので。持参の胃腸薬で何とか鎮めた。

砂漠縦断で高速バスに一二時間近く乗り詰めであったので疲れが出る。夕食の中華料理はあの美味しい日本の中華料理とは全く異なる、ただ量が多いだけですべてにまずいものであった。トイレは悪臭がするしシャワーの水も何とか出るという具合であった。新疆に来てウルムチ・クチャまでは日本とそう変わらない旅行を続けてきたのだが、ニヤで初めて辺境の地であることを思い知った。それでもベットに入るとすぐ眠りについだ。

翌朝初めての西域南道を使い、西三〇〇キロのホータンをバスで走る予定で八時半集合する。ウルムチとほぼ同じ経度なので二時間の時差がありまだ少し薄暗い。しかしここでひと悶着が起きた。なにやらガイドSさんがバスとホテルを何度も行き来している。何かあったに違いない。

ことは二人の婦人が昨夜部屋で果物を剥いて食べたのだが、果汁で汚れ無いように備え付けの白い布製のナフキンを使用した。ナフキンに果汁の染みが付いていたので、ホテルからその洗濯代を請求しているという他愛もないことであった。

この種のことでホテルからクリーニング代の請求など日本ではありえない。大した額ではないが当然二婦人は支払いを拒否した。一方ホテル側は執拗に洗濯代金を要求し、S女史はその板挟みになり苦労した。双方をなだめたが埒があかず、理不尽なこととは思うが二婦人に「どうか負担してほしい」と強気のS女史も日本側に頭を下げ泣きついた。最終的にしぶしぶ婦人側の負担で決着した。設備は悪いし食事もまずくまたホテル側の理不尽な要求に後味の悪さを感じながら、これから通る西域

南道を大オアシス都市ホータンに向けやや遅れてバスは出発した。

ニヤの印象は悪かったが、砂漠の辺鄙なオアシスでは当たり前のことと後悔することになる。

コラム　ニヤ遺跡

七世紀半ば玄奘が訪れた尼壌（ニヤ）城について「周囲三、四里で大きな沢地の中ある」とし、「沢地は温度・湿度共に高く渡渉困難で蘆（あし）が生い茂り、道とてない」と城を取り巻く沢地の様子を書いている。そして「ただ城への道を辿ることにより通行できる」と、自らの体験を記した。

この城は鄯善国（楼蘭）領西端の精絶国である。三世紀から四世紀ごろが楼蘭王国（鄯善（ぜんぜん）国首府クロライナ）の全盛期にあたり、精絶国（ニヤ）地域までが勢力範囲であった。七世紀にはコータン（ホータン）国の領域に変わり、この城はコータンに入る東端の関所となる。

この砂漠に埋もれていた大集落の遺構は一九〇一年英スタインが常時手元に置いた英訳の『大唐西域記』の記述から発見した。掘り進めると東西七㎞南北二五㎞の広大な集落遺跡であった。スタインは主著の中で「小さなストゥーパや多数の木簡を発見し狂喜した」とその時の興奮を記した。

スタインは崑崙山脈を水源とするニヤ河下流域の大規模な集落址から、すぐに営ての西域三六か国の一つ精絶国と考えた。その後持ち帰った木簡や羊皮にカローシュティー文字で書かれた文書の解読から裏付けられた。この文字は三世紀前半から約一〇〇年間インド東部から東トルキスタンで使用されたが、五世紀以降この文字の文献はない。

スタインの二度の発掘で知られるようになったこの集落址には、大谷探検隊（二次）の橘瑞超が楼蘭の探索後カシュガルに向かう途中に訪れている。橘は主著『中亜探検』の中で「暫く滞在し発掘を試みた」と簡単に記している。現在龍谷大学にカローシュティー文字で書かれた木簡が保蔵されており、この時の成果と思われる。

なおスタインと橘はオアシスのニヤと古址の間にイマル・ジャファル・サディク（トルコ人戦士殉教者で英雄）の森林に囲まれた聖廟について記している。そこには守護する教僧宅・参拝者宿泊所・小商人店舗・羊飼いの住屋などあり、参拝者の奉納物がぎっしり並んでいる光景を記している。霊験著しく夏にはカシュガルやトルファンから千里の道を「遠しとしない」で参詣に来る。その時期は一都会のようになると記した。現在でも新疆各地からの参詣者が絶えないようである。

（つづく）

参考文献は最後に記します。

私の本州マラソン歴史紀行（東北編⑤―宮城県・岩手県―）

安藤　剛

【宮城県：仙台市の殉教地を訪ねて】

①伊達政宗とルイス・ソテロ

フランス人レオン・パジェスが一八六九年に印行した「日本切支丹宗門史」の一六一三年の章に、将軍秀忠によるキリシタン迫害で捕らわれ火刑の宣告を受けていた宣教師ソテロが、伊達政宗の助命嘆願で救い出され仙台に渡り遣欧使節として派遣された経緯が記されている。

「八月、江戸で迫害が始まった。一六一二年に破壊されたフランシスコ会の小さな御堂の代りに、ソテロ師は浅草という所にあった癩病院の中に、駐在所と礼拝堂とを建て、大勢のキリシタンのためにミサを立てていた。

将軍様は、見すぼらしい礼拝堂も一種の城のやうなものだと言う報告を受けとると、癩病人と発見されたキリシタンを全部、その場に監禁してしまった。彼等は足には桎、首には大きな鉄の環を以てつながれた。番卒は晝夜見張りをしていた。この難教者の一人は、不潔な牢にぶち込まれ飢餓と臭気のため一番先に息を引きとった。

ソテロ師もその信者と共に捕らわれていた。彼等の総勢は二七人で、皆火炙りの宣告を受けた。政宗はソテロ師に対する宣告の取消を取計った。ソテロは殉教を望んでいたが、政宗は彼を其城下に伴れて行った。

奥州の大名は、キリシタンになる意のあることを洩し、領内にはどこでも天主堂を建て伝道を始める約束をした。彼はソテロ師に、部下の士の一人支倉六右衛門を伴って大使として、教皇とイスパニア王の許に至り、教皇の前では宗教に好意をもっていることを述べ、イスパニア王とは政治上並に通商上の條約を結ぶことを命じた。彼等は、間もなく出発した」

政宗の慶長遣欧使節派遣は、明治四年に岩倉具視欧米使節団がヴェネツィアで支倉常長の書状を偶然に発見したことから、禁教下の二五〇年の時空を超えて日の目を見たが、その二年前に既にパジェスが政宗の偉業を印行しており、彼らの情報収集力には驚嘆である。

パジェスは、在支佛國公使館付の職にあり、フランシスコ・ザビエルに心惹かれて聖ザベリオ書翰集を翻訳刊行、これが動機となり日本に関する興味が湧いて、ヨーロッパ人の観点から見た日本史を研究しようと、古今の史料を収集、日本史四巻の刊行を目指したという。

徳川氏三代の「日本切支丹宗門史」に相当する第三巻の発刊だけで終わったが、譯者吉田小五郎が前書に「織田氏より豊臣氏初期にかけて頂点に達した切支丹宗が爾来漸時衰運に向かったが、衰退期の活発隆盛は到底所謂隆盛期の及ぶ所ではないが、名もなき人々が凡そ人間の考へ得る總ゆる惨虐を極めた迫害の下をくぐり信仰を貫いたこの期間に於ける史料の寶庫である」と書いており禁教下で抹殺された日本史が知れる貴重な文献である。

ソテロは、スペイン国セビリヤの人、一六〇三年にフィリッピン総督の書簡を携えて来日、一六〇九年に通訳として家康に接見、一六一〇年に江戸修道院長となる。

一六一一年にイスパニア国答礼使ビスカイノの通訳として将軍秀忠に接見、ビスカイノの沿岸測量に同行して仙台で政宗に謁見、この時に政宗に海外への夢を抱かせたのであろう。岡本大八事件が切っ掛けとなり江戸でキリシタン迫害が始まり、ソテロらが捕縛されてしまう。

捕えられたソテロを幕府に助命嘆願して救い出した政宗は、仙台領内への宣教師の派遣とキリスト教の布教を条件に、メキシコとの直接交易を求める使節団の大使支倉常長の副使兼通訳としてメキシコへ派遣した。

使節団は、更に大西洋を渡りスペイン国王フィリップ三世とローマ教皇パウロ五世に謁見、政宗の親書を奉呈するが、幕府の禁教令とキリシタン迫害が既に全世界に知れ渡っており使節団の通商交渉は挫折、常長は国外追放も同然にマニラ経由で一六二〇年に帰国するが、それまで政宗は領内の信教に寛容で、幕府の迫害から逃れる西国のキリシタンが政宗の領内に逃げ込んできていた。

常長帰国の前年一六一九年に、京都で五二人を火炙りにする大殉教が起きると、政宗も幕府の禁教方針に従わざるを得ず、常長が帰国するとすぐ領内に禁教令を発して、まもなく仙台藩最初の殉教が起きた。

そして一六二二年に長崎で五五人、一六二三年に江戸で五〇人の大殉教が起きると、政宗は国許に禁教の徹底を下命、岩手県水沢福原のキリシタン家臣後藤寿庵館を襲撃、逃亡したカルバリオ神父らが捕縛され、仙台城下の広瀬川畔で残虐な処刑が行われた。

②仙台市広瀬川の殉教地を訪ねて

二〇一五年九月二六日、山形県米沢市の北山原殉教地を訪ね終えて、JR仙山線経由で仙台駅に降り立ったのは、一六時を回っていた。翌日の一関国際ハーフマラソンの出走のため、その日の内に宿泊予定の岩手県水沢まで行かねばならず、あまり時間はないが、仙台の殉教があった広瀬川畔だけはどうしても回りたかった。

駅前レンタサイクル店の電動自転車のパワーはさすがである。夕方ラッシュの混雑する青葉通りを西へ二キロ程、一〇分足らずで広瀬川に架かる大橋の袂に着いた。

土手に下りると、薄暗い樹林の中に三体のブロンズ像が立つ「仙台キリシタン殉教碑」が浮かんできた。

キリシタン殉教碑のはめ込み銘板に「ここは元和一〇年（一六二四年）二月一八日と二月二二日、ポルトガル人宣教師カルバリオ神父日本名長崎五郎衛門外八名のキリスト教徒が、大橋の下の水牢で厳寒のさなかに水責めにあって殉教した遺跡である。三体の記念像のうちの中央はカルバリオ神父、その左右はここでの殉教者たちの象徴としての武士と農民像である」とあった。

もう一枚の銘板には「重而召捕候きりしたんの覚」と題して九人の殉教者の名に続いて「右之者共色々いけんを申候得ども、ころび不申様ニ付、大橋之下ニ水籠を仕入ころび申様ニと様々申付候へ共、合点いたさず両人ハはて申候、相残七人もはてそうに見え申候へ共、壱人もころび可申と申者無御座候（石母田文書）」とあり、殉教者九人の出身地が、お浜、豊前、但馬、遠江、越前、若松、なんばん、相模、越中と記されていた。

仙台キリシタン殉教碑（２０１７年１２月２３日撮影）



殉教碑の中央で両手を広げて祈りを捧げるカルバリオ神父はポルトガルに生まれ、一七歳でイエズス会に入会して一六〇一年にマカオに渡り哲学と神学を学び司祭となり、一六〇九年に一年間語学勉強して日本に渡った。

一六一一年にイエズス会の初代日本管区長となるが、慶長一九年（一六一四年）の禁教令によるキリシタン国外追放でマカオへ追放され、一時交趾支那で布教する。

一六一六年に肥前国大村に潜入、一六一七年京に三ヶ月滞在してから奥羽副地区長として仙台領に入り、政宗の家臣後藤寿庵の援助を受けて水沢地区で布教活動を始め、一六二〇年には蝦夷松前に渡り布教活動を、一六二二年に出羽の酒田と久保田を訪問、一六二三年に二度目の蝦夷布教から寿庵のいる水沢福原に戻った。

江戸の大殉教が起きると、新将軍家光の覚悟を目の当たりにした政宗は、身の危険を感じたのであろうか、国許にキリシタンの取締強化を厳命した。カルバリオ神父は、寿庵の福原館で最後のイエス降臨祭を祝った後、逃亡するが、雪に残した足跡から水沢西方の下嵐江銀山で信徒たちと潜んでいるところを捕縛され、仙台に送られて一六二四年に極寒の広瀬川で殉教した。

前掲のパジェス著書「日本切支丹宗門史」の一六二四年の章に、広瀬川での殉教の様子が詳述されている。

「この年の最終の日、即ち二月一八日に彼等の殉教が始まった。午後二時、神父と伴侶とは川の方へ連れて行かれた。川岸に深さ二パルム、直径二〇パルム、流れの水を引込むやうに水溜が掘られ杭が打ち込まれた。着物を剥ぎとられた難教者たちは、この氷った水の中に漬けられ座らされ杭にしっかり縛られた。この拷問中、犠牲者たちはイエズス、マリヤに救を求め祝福のみを口にした。精神的の父は、言葉と己が例證によって弟子たちを励ましてこの氷った溜りの中で平然と口をきいていた。

（中略）

この酷い拷問三時間の後、彼等は引上げられた。役人は彼等の死ぬことをまだ許してをらなかったからである。彼等は酷い苦しみやうでやっと動ける程であった。寒さのために硬くなり痛い手足に何の慰撫も見出せず砂の上にたふれた。この間に、神父は日本流に足を組んで座り手を胸の上に揃へて首をたれ祈祷をはじめた。

時に、殉教者二人、神父の宿主の次兵衛と次兵衛門が砂の上で息を引き取った。二人の死躰は首を切られ、遺骸はズタズタに切られて川の中に棄てられた。次いで生き残った人々は、二月二二日まで牢舎にぶち込まれた。

時に、彼らは裸にして氷の張った溜に漬けられて、同じ杭に結へられ、水は膝まで来る中を、力のつづく限り否応なしに立たされていた。それから彼等は、胸の辺りまで水に漬かって座らされた。水が氷る瞬間、即ち宵までこの二様の姿勢を代る代るとらされた。

氷のやうな風が吹いていた、彼の肺腑をさすやうな息は、或は大気を吸い込み、或は雪に混り羊毛をちぎったやうに吹散らしていた。聖なる殉教者たちは風に息のつまる思いをし雪に吹き曝されて死ぬ時を予想していた。

彼等は、神の加護を祈願し、互に先に息を引き取った者が、天主の前で兄弟のために、耐える力をお願いすることを約束して、心からの告別をし合った。カルバリオ師は、相変わらず冷静で、また深く瞑想して、善良なる御主、天主たるイエズスを楽しんでいるやうに見えた。

最初に息を引き取ったのは、寒さの為にひどく難儀をしたレオ今右衛門で、彼はひどく苦しんでいた。神父は彼に愛をもって「束の間ですぞ、もう少ししたら苦しみはなくなりますぞ」と繰返した。レオはイエズスとマリヤを依り頼みして、息を引き取るまでよく耐えた。

（中略）

八人最後のマチヤス太郎右衛門は「行けよ我が子、天主様の平安の中に」という神父の答を聞くや、安らかに息を引取った。神父は皆の後に生残り、真夜中にやっと息を引き取った。朝、遺骸は引取られた、それは、これを寸断して川に棄てるためであった。然しキリシタン達はカルバリオ師と他に四つの首を手に入れることが出来た。カルバリオ師は四六歳、イエズス会に在ること三〇年であるが、彼は、日本及び交趾支那の伝道に一五年を過ごしてきたのであった」

生々しい記述である。地球の裏側のポルトガルからはるばる異国の日本にやって来て、禁教令で一度国外に追放されながら、迫害の日本に再潜入してまで福音の伝道に命を捧げた彼の使命感は何に依るのだろうか。

殉教の現場は、碑銘に大橋之下とあったが、大橋の下流の意で琵琶首の処刑場辺りであろうか。対岸の断崖に仙台城址を見上げながら下流に向かって河畔を散策、四〇〇年前の惨劇がなかったかのように静かに流れる広瀬川の川面に出て、さとう宗幸の「青葉城恋歌」を口ずさみ、広瀬川流れる岸辺の瀬音に耳を傾けて合掌した。

広瀬川に架かる大橋を渡り、対岸の仙台城址に向かった。大手門跡に支倉常長のブロンズ像が立っており、宮城県出身の彫刻家佐藤忠良の作品で、支倉常長生誕四〇〇年記念で建立されたと記されていた。

常長の右手に持つのはローマ教皇パウロ五世あて政宗の親書であろうか。太平洋と大西洋を七年の歳月を掛けて往復しながら主君の使命を果たせぬまま、無念の帰国をした常長を迎えた禁教の嵐に何を思っただろう。

常長は、交渉を有利に進めるためマドリッドで洗礼を受けており、七年の苦難の旅に憔悴し切ったのだろう、二年後に病没した。政宗の勧めに棄教したともいわれるが、後に息子常頼がキリシタン嫌疑で処刑されており、父子共々政宗の夢と野望に翻弄されたのかもしれない。

③仙台藩のキリスト教

フランシスコ会士で初めて奥州で布教を始めたソテロ神父が、一六一三年に政宗の命で遣欧使節として支倉常長と共にメキシコへ向けて旅発った後、一六一五年にイエズス会士として初めて奥州布教長として津軽に向かうアンデリス神父が仙台領にやって来た。

アンデリス神父は、一六一四年の宣教師国外追放時に日本に潜伏して、大坂の陣で政宗配下の鉄砲隊長キリシタン後藤寿庵と出会い奥羽に誘われたといわれ、途中の会津猪苗代城下に修道院を設立、仙台に一八日間、水沢に四〇日間滞在した後、蝦夷松前へ渡って行った。

一六一七年にカルバリオ神父が奥羽副地区長として仙台領に入り、次いでガルベス、バラハス、パロマレス神父が仙台藩で伝道に従事しており、仙台藩でキリシタン伝道が最盛期を迎えていた一六二〇年に、常長がローマからマニラ経由で禁教下の日本に帰国してきた。

政宗は、常長が帰国するまで、領内に教禁令を布告しなかったのは、洗礼を受けてまで主命達成に奔走した常長への政宗に出来るぎりぎりの選択だったに違いない。

常長の帰国直後に政宗は領内に禁教令を発布、まもなく水沢で仙台藩最初の殉教があったが、殉教者は出羽由利庄内の老夫婦ら、三年後の広瀬川の殉教者も全国各地から仙台領に逃亡してきた他国領民ばかりである。

政宗は、自国民のキリシタンは全て転んで、残るは他国から流入してきたキリシタンばかりだと幕府に嘯いていたに違いない。水沢と広瀬川の殉教は、将軍の命に従う素ぶりを見せかけるための、他国民を犠牲にした、申し訳程度の処刑だったのではないだろうか。

帰国する常長一行をメキシコへ迎えに行き、メキシコで洗礼を受けて帰国した船長の横澤将監は、翌年の元和七年（一六二一年）八月十四日付「ローマ教皇パウロ五世宛て出羽奥州キリシタン奉答書」に連署十七人の筆頭後藤寿庵の次に署名して、政宗が領内のキリシタン取締りを始めたことをローマ教皇に訴えていた。

政宗の海外への夢と野望を実現する遣欧使節団派遣の企画と実行の担い手となった寿庵と将監だが、主君政宗を糾弾するローマ教皇宛て奉答書に署名していながら、政宗は二人を弾劾することはなく、洗礼を受けて帰国した常長同様にその信仰を黙認していたようである。

寿庵は、水沢殉教の頃で後述するが、一六二三年の江戸の大殉教の直後、政宗の再三の棄教の勧めを断り他国へ逃亡するが、政宗に逃亡を見逃された節さえ見える。

将監は、のちに政宗の説得で棄教すると、一六二五年に政宗の棄教勧告を拒絶して追放された寿庵の没収地の管理者となり、さらに寿庵の治水工事に倣って灌漑用水の堤を築き、将監堤の名が仙台市泉区に残っている。

寛永十三年（一六三六年）に政宗が死去すると、家康の信任厚く一目置かれていた政宗の死後を継いだ忠宗はさすがに幕府の圧力に抗し切れなくなったのだろう、仙台キリシタンの聖域に踏み込んだ。翌十四年七月に常頼宅に出入りしていた大窪太郎兵衛と養女の調書が提出され、同月に常頼の召使い与五右衛門と妻が処刑された。

同年一〇月に島原の乱が勃発、農民を巻き込んだキリシタンの広がりに危機感を抱いた幕府は、翌十五年十二月に全国諸侯にキリシタンの徹底した弾圧を命じた。

当時の仙台領に潜伏していた宣教師は四人いたが、まず奥羽副地区長として各地を巡回していたポルロ神父が病気に衰弱して仙台藩宗門奉行石母田大膳に自首、翌十六年（一六三九年）二月にペトロ岐部神父が水沢で、マルチノ式見神父が仙台で、密告により捕縛された。

三人は江戸に送られて評定所で老中の尋問を、伝馬町牢で苛酷な拷問を受け棄教を迫られた。老齢のポルロ神父は拷問に堪え切れず失神、棄教したと見做され、背教してしまった呵責と絶望からか問われるまま匿ってくれた信徒の名を漏らし、その中に支倉常頼の名があった。

同年十二月に常頼が匿っていたバラハス神父が、江戸に訴人があり仙台で捕縛され江戸に送られた。スペイン人で日本名・孫右衛門を名乗り、後に大籠地区で布教活動を続けた仙台藩に残る最後の宣教師である。

翌十七年（一六四〇年）三月一日、ついに常頼が切支丹不分明者ながら斬罪され、支倉家は改易となった。

忠宗は、重要な家臣や領民を転宗して仏門に帰依したとの寺証文を証拠に庇護していたが、江戸からの奉書では常頼を庇護できず斬罪せざるを得なかったのだろう。

同日に常頼の召使で常長と共に渡欧した佐藤太郎左衛門と妻子が釣殺され、同月に草刈正左衛門、永井六之介、原田甲斐守、中条帯刀、上原次郎作、熱海友之介、畑中左衛門ら家臣の奉公人とその妻子四〇人が処刑された。

その三〇年後、支倉家は再興された。明暦四年（一六五八年）義山（忠宗）様へ古内重広を以て親類共願申上げ勘気御免となり、寛文八年（一六六八年）古内志摩を以て五貫一六七文が下賜、寛文一〇年（一六七〇年）常頼の嫡男常信に黒川郡川内村の五一石余が宛がわれた。

志摩の実父義実は、寿庵の去った福原を知行され、義実の妻で志摩の母は、横澤将監の娘、支倉家再興にキリシタンに理解ある志摩の尽力があったのかもしれない。

勘気御免の明暦四年は忠宗逝去の年、五貫余が下賜された寛文八年は政宗三三回忌の年、知行地が宛がわれた寛文一〇年七月九日は忠宗十三回忌法要の前日である。

父政宗の常長への思いを知る忠宗に、公儀の指示とはいえ常長の嫡男常頼を斬罪させてしまった慚愧の念があり支倉家赦免再興を遺言していたのではないだろうか。

【岩手県・水沢市の殉教地を訪ねて】

①政宗のキリシタン家臣後藤寿庵

東北の殉教地の一つ岩手県奥州市水沢は、政宗の家臣で熱心なキリシタンの後藤寿庵の知行地である。

寿庵の生涯について、不明なところが多いが、水沢を訪ねた際に立ち寄ったカトリック水沢教会の発行する「後藤寿庵のしおり」から、一部転載させてもらう。

寿庵は、四〇〇年以上も前に岩手の中部から南部に勢力を振った葛西という豪族の一人、現在の東磐井郡藤沢町の城主、岩淵近江守秀信の次男に生まれ、幼名を又五郎といった。日本を統一する秀吉が葛西氏を滅ぼした時に、岩淵氏も共に滅び、又五郎は諸国を流浪する。

長崎に着いた彼は、当時西洋の進歩した文化や学問を学び、土木の研究に精通、日々の生活の中でキリスト教を知るようになり、洗礼名ヨハネ（ジョアン）を受け、洗礼の地の長崎五島に因んで五島寿庵と改名した。

その後、再び東北に帰った寿庵は、仙台の大名伊達政宗の家臣となり、一六一二年に一二〇〇石を与えられ、見分の地（現在の水沢市福原）の領主となる。

当時の福原は、砂漠のようだと言われるほど水不足に苦しんでおり、彼は長崎でポルトガル人から学んだ土木技術を生かして胆沢川から水を引く、後に寿庵堰と呼ばれる堰を開き、胆沢の荒れた原野を岩手県一と呼ばれる豊かな穀倉地帯とする基礎を造った。

こうして人々の幸せを願っていた寿庵は「人はパンだけで生きるのではない」という聖書の教えを大切にし、当時の人々の荒れた心に平和を与えることを望み、キリストの約束された永遠の命に至る生きた水を人々の幸福の土台と考え、キリストの教えを広めるため福原にカルワリヨ神父を招き教会を建てた、と「しおり」にある。

寿庵は政宗の遣欧使節派遣にも大きく関わっていた。ソテロの後に仙台藩に入ったアンデリス神父がローマイエズス会本部に宛てた書簡に「ルイス・ソテロは、後藤寿庵の仲立ちで政宗と親交を結ぶと、メキシコに行く船の建造を勧めて、交易の利益に期待を政宗に抱かせ、船の準備が整うとスペイン国王とローマ教皇に使節を派遣すべきと進言、もし受け入れなければ自分は乗船しないと寿庵を困惑させ、やむなくソテロの言い分を政宗に伝えた。（中略）政宗が大使に任命したのは一人のあまり重要でない家来（支倉常長）であった」とある。

政宗は、メキシコとの直接交易を交渉する使節をスペインとローマまで派遣することにしたため、キリシタン禁制を敷く幕府の疑惑を避けるべく、適任と思われるキリシタン家臣の寿庵ではなく、キリシタンでない中級家臣ながら密命執行に忠実な常長を選んだのだろう。

常長が主命を果たせぬまま帰国した一六二〇年に政宗は、領内のキリシタンの禁制と弾圧を始めるが、その翌年に寿庵を筆頭にした奥州のキリシタン代表者一七名がローマ教皇に宛てた連署状で「去歳上旬の此、伊達政宗、天下を恐れ、私の領内において迫害をおこし、数多くの殉教者御座候」と政宗の弾圧を伝えている。寿庵は東北のキリシタン王国の盟主を自負していたのかもしれない。

家光が三代将軍に就いてキリシタン禁制と迫害が更に厳しくなった一六二三年、政宗は有能な家臣たる寿庵を惜しみ、水沢城主石母田大膳宗頼を通じて、寿庵に棄教を勧めたが、寿庵は、信仰を捨てるわけにはいかないと福原の知行地も主君も家臣も捨てて逃亡してしまう。

前掲のパジェス著「日本切支丹宗門史」に「政宗は、若しヨハネ後藤が三箇條の約束をしてくれたら、その信仰の持続を許すことにした。僅か一時間でも宣教師を泊めないこと、人にキリシタンになったり、信仰を続けて行くことを勧めないこと、彼にそのまま許された権利を誰にも許さないこと、と言うのである。ヨハネは、かかる誓約は良心に戻り、信仰を守ることが許されない場合には、領主の友情、自身の財産や生命は、一切無価値であると答えた。政宗は耳と目とを閉じた」とある。

寿庵が逃げ去った水沢見分に取り残されたキリシタン家臣たちは、その後どうなったのだろうか。

②ローマまで歩いたペトロ岐部

二〇〇七年にローマ教皇により列福された「ペトロ岐部と一八七殉教者」のペトロ岐部とは、一体何者なのだろうか。そのペトロ岐部が潜伏して捕えられた場所が、寿庵が去って一六年後の水沢であった。

ペトロ岐部は、自ら日本人司祭となるため、単身エルサレム経由でローマに赴き、叙階を受けて日本に帰ってきた「日本のマルコポーロ」といわれ、前掲のパジェス著「日本切支丹宗門史」の一六二九年の章に、帰国する岐部がペトロ・カスイ（粕井或は葛西）は、豊後の伊美の人で、一六一四年マニラに流されて、彼はエルサレムに旅行せんとして、印度、ペルシャを通って同地に赴いた。エルサレムからローマに行き、彼は、一六二〇年十一月二〇日、同所でイエズス会に入った。

次いで、彼はポルトガルに行き、モントリベトで修煉期を終り、誓願を立てた。一六二三年、彼は、祖国で伝道に従事せんと欲して、印度に帰った。然し道の困難を知って、シャムに来、そこで二年間、船子を職とし、かくて自分が身分を匿し、日本のジャンクに乗りたいと思っていた。彼は、その計画がうまく行かないので、更にマニラに来り、そこで更に二年間、同じことをして、遂に文字通り「奴隷の態」をして日本に入った」とある。

キリスト教作家遠藤周作が、ペトロ岐部を主人公に、その数奇な生き様を小説『銃と十字架』に描いている。文庫本の裏表紙に「何のために苦しい旅をつづけるのか。いつかは掴まり殺されることも確実なのだ。しかし、いかに苦渋にみちても肩から人生の十字架を棄ててはならぬ。船をのりつぎ砂漠をよぎってローマに学び、キリシタン弾圧の荒れ狂う地獄の日本に立ち戻って使命に生きた一日本人の劇的生涯を描く記念碑的大作」とある。

ローマで日本人神父になったペトロ岐部が日本に帰国して殉教するまでの後半生を「銃と十字架」に見てみる。

岐部は、日本での迫害と残忍な拷問の情報に、日本に戻り捕らわれて受ける拷問の苦痛に耐えかねて転んでしまう恐怖に囚われたが、日本で迫害されているキリシタンに寄り添うべく、迫害の日本に戻る決意を固めた。

一六三〇年にアユタヤからマニラに入り、再会したミゲル松田と日本行きの船を調達、難破しながら十六年ぶりに薩摩の坊津に上陸した。長崎に潜伏するが、一六三三年の大検挙で長崎の秘密組織は崩壊しており、イエズス会管区長のフェレイラ神父は、傳馬町牢での穴吊るしの苛酷な拷問に耐え切れずに転んでいた。

マニラから共に日本に潜入したミゲル松田は、疲労と空腹で行き倒れとなり、残された岐部は、まだイエズス会の秘密組織が辛うじて残っている東北に向かった。

東北は、まだまだ未開の土地が多く、追手の目から逃れやすく、主君政宗の棄教の勧めを拒絶して追放された後藤寿庵の旧領地で、旧臣たちが密かに信仰を守り続けている水沢の福原に、一六三四年に入った岐部は、そこで潜伏して伝道する二人の宣教師に再会した。

一六一四年の国外追放令に逆らい日本に潜伏していた有馬神学校の恩師ポルロ神父と、岐部ら共にマカオに追放されたマルチノ式見神父である。彼らは、生き延びるために逃げていたのではなく、捕縛され拷問され処刑されるまでの間、一人の信徒でも力付け慰め勇気を与えて苦しみを分かち合うのが潜伏司祭の使命であると、密かに水沢で布教活動を続けていたのである。

一六三六年、キリシタンに寛容だった政宗が死去、翌年に九州で百姓を巻き込んだ島原の乱が勃発、十字架の旗を掲げる反乱軍を鎮圧した幕府は、禁教の切支丹勢力が反体制的な武装勢力化することを怖れたのであろう、日本全土に徹底したキリシタン弾圧を命じた。

政宗の後を継いだ忠宗は、幕府の強い意向に屈し、五人組連座制度を強化して藩内の徹底的捜査を決意、一六三九年、ついにペドロ岐部とマルチノ式見神父は密告されて捕縛、病気で衰弱していたポルロ神父も自首した。

三人は、仙台から江戸に護送され傳馬町牢に入れられ、評定所で訊問が始まり、そこに転びバテレンのフェレイラ神父が現れ、日本布教の無意味さを説き、これ以上多くの信徒を苦しめぬよう棄教を説得するが、逆に岐部に罵倒されてしまう。弟子たちにイエスを裏切ったユダの姿を見せるフェレイラの屈辱は如何ばかりだったろう。

将軍家光が、三人を老中酒井讃岐守の下屋敷に移して政治顧問の沢庵和尚と柳生宗矩の同席で、直々に「宗門の教え」を尋ねる取り調べが行なわれた。家光と岐部との間でどんなやり取りがあったのだろうか。

日本の為政者は、古来より共存し合う神道や仏教や儒教と相容れない排他的で異端な宗教と見做して、秀吉が長崎がイエズス会に要塞化され日本人が奴隷売買されているという讒言に一五八七年にバテレン追放令を、一五九六年に土佐に漂着したスペインの船員が巨額の財宝と積荷を接収された腹いせに宣教師を先兵にその地を教化して世界を武力征服すると大言壮語したことが契機となり禁教令を布告、江戸時代に入りキリシタン岡本大八の収賄事件で一六一二年に秀忠が禁教令を布告した。

パジェスが「日本切支丹宗門史」の一六一四年の章に「仏僧達は、若しも内府様がキリシタン宗の殲滅を延ばしたならば、大いに彼を懲し、国家の神々の天罰を受けようと通告した」「老いたる公方様の寵臣長谷川左兵衛並に後藤庄三郎が、ヨーロッパの宗教に改宗した日本人が、盲目的にその財産、名誉、否生命さへも異国の主のために犠牲にするのを敢て辞せないのは、明らかではないか、偉大な大坂の仏僧（石山本願寺）が信徒を率いて武器を執り、独立の大名を称せんと欲し、太閤様や信長を大いに苦しめたことを知ったならば、国家の制度に対して敬念もない異国人によって再びそういうことが起りはしないか、と彼に暗示した」「イギリス人とオランダ人は、キリアム・アダムス（家康の外交顧問）を介して、異国（ポルトガルとスペイン）の宣教師は、別に望みもせず又気にもかけていない人々に架空的の救済をもたらすため世界の果から来たというが、その土地の人大勢に洗礼を施した後、自国の軍旗を掲げ帝国を乗っ取ろうとする征服者の先鋒だと言うのであった」と書いている。

ローマから日本への帰途で、西洋人が東洋人を蔑視して邪教から救う口実で東洋を侵略している実態を見てきた岐部は、侵略される東洋人のキリスト者として、領土拡大という土台の上に立つキリスト教の布教がイエス自身の教えと背反している矛盾に苦悩したことだろう。

イエスの福音とイエスの愛の思想が、キリスト教布教の名目で宣教師を送り侵略の橋頭堡を作る西欧国家の領土的野心とは全く次元を異にしていることを証明して、禁教に強硬な家光の誤解を解くのは、西洋の侵略主義の手先と見られている外人宣教師ではなく、日本人神父としての自分の使命であると考えていたに違いない。

訊問の鬼と言われた井上筑後守の棄教勧告を拒絶した三人に、恐れていた穴吊りの刑が宣告された。

逆さに吊られ穴の中の汚物の臭いと逆流する血のため、激しい頭痛と意識の混濁の中、棄教への甘い誘いに少しでも肯けば苦痛から解放される、非情で残忍な拷問が始まった。ひとたび肯けば、信徒に敬愛される誇り、長い布教の功績、これまで迫害に耐えてきた自負、全てが失われ、転び者の汚名を受けるだけでなく、迫害に耐えている多くの信徒を裏切り、棄てることになる。三人は祈りを唱え互いに励まし合い、苦痛と苦悩と闘い続けた。

混濁する意識のなか苦痛から解放される死を望んでも安易な死を決して許さない苛酷な拷問に、マルチノ式見神父とポルロ神父はついに転んでしまう。六〇歳を越えた二人は力尽き耐えられなかったのだろう。

二人の転びは岐部には衝撃だった。師と先輩に裏切られた、見棄てられた、烈しい肉体的苦痛に加えて絶望の感覚が襲う。頭上から役人が、仲間も転んだ以上、無意味な苦しみを味わい続けるなとやさしく語りかける。岐部はその甘い誘惑に闘い続けた。岐部はこの時、死に赴いたイエスの苦しみを共に味わっていた。

穴から吊り上げて裸の上に置かれた小さな乾いた薪にゆっくり火がつけられ、やがてその腸が露出して・・、火あぶりの拷問の間も棄教を勧め続ける役人に「あなたに私のキリスト教は理解できぬ。だから何を言っても無駄だ」と答え、そして岐部は遂に、死んだ。

彼の信ずるイエスがゴルゴタの丘で十字架にかけられ「わが事、なり終れり」と叫び息を引き取ったように、主よ、すべてを御手に委ね奉る、岐部は自分の死をイエスの死に重ね合わせ、波瀾に満ちた劇は幕を閉じた。

棄教を口にしたポルロと式見は、穴吊りから下ろされるが、屋敷牢の中で厳しい訊問は続いた。棄教した絶望感に打ちのめされ、問われるまま自分たちの教え子や匿ってくれた信徒たちの名を白状してしまう。

二人の白状してしまった一人が捕えられると、彼が更に別の信者の名を口にする、こうして芋づる式に仙台藩のキリシタンは根こそぎに刈られていった。二人はユダのように自分の弟子たちを一人一人売ってしまった。

一人を売るたびに呵責は胸をえぐり、その心の苦しさは言いようのないものだったろう。その後の二人は、切支丹牢に放置され、身心共に弱り果てて数年後に死んだという。転んでからが本当の地獄だったに違いない。

遠藤周作は、最終章の中で「有馬神学校で触れた西洋の基督教はこの男（岐部）の魂をひきつけたが、その西洋の欠陥（波乱と冒険にみちた旅で見た基督教国の侵略的植民地主義）が同時に彼を苦しめつづけた。彼は誰にも頼らず、ほとんど独りでこの矛盾を解こうとして半生を費した。その殉教は彼の結論でもあった。彼は西欧の基督教のために血を流したのではない。イエスの教えと日本人とのために死んだのだ」と書いている。

あとがきに「十数年前にふと読んだチースリック教授の論文が私にペドロ岐部という、人々には知られていないが、あまりに劇的な生活を送った十七世紀の一日本人の存在を教えた。以来、私は彼の足跡を訪ねるようになった。彼は今日まで私が書き続けた多くの弱い者ではなく強き人に属する人間である。そのような彼と自分との距離感を埋めるため長い歳月がかかった」と書いていた。

十数年前とは、師フェレイラ神父の棄教が信じられず師を救い出そうと禁教下の日本に潜入してすぐに捕らわれたロドリゴが、残酷な拷問に「神はなぜ黙っているのか、神はいないのか」と絶叫して転んでしまう、周作の代表作「沈黙」が書かれた時期である。神の存在を疑い拷問に屈し棄教してしまう人間の弱さを描きながら、神を信じキリストに殉じる強き者にようやく辿り着く、自身の信仰の軌跡を描いていたのかもしれない。

③一関国際ハーフマラソン大会（九月二七日①）

二〇一五年九月二六日、米沢と仙台の殉教地を巡る慌ただしい一日を終え、遅くに水沢駅前のホテルにチェックインした。翌朝一番の電車は、一関国際ハーフマラソンに参加するランナーと学生で貸切り状態だった。

一ノ関駅前から大会シャトルバスで一〇分ほど、総合体育館に到着すると参加者や家族で大賑わいである。

参加者総数三〇〇〇人、内ハーフマラソンに二〇〇〇人、内七〇歳以上が三六人、同年代には負けられない。直射日光が強く爽やかな秋風は心地いいが、七月からの猛暑と長雨で走り込み不足の不安が付き纏っていた。

九時五〇分、スタート合図のピストルと打上げ花火に周囲から一斉に拍手が沸き上がった。賽は投げられた。周囲のペースが自分に合って順調な走り出しである。

東北新幹線の下を潜り、二キロ地点でタイムは十一分三十七秒、キロ五分五〇秒はいつもより遅いが、キロ六分キープで前半を走ろう。何も遮る物がない広大な黄金の稲穂の絨毯の中、ようやく爽快な走りになってきた。

東北本線の高架陸橋の最初の高低差一〇メートルの緩やかなアップダウンを難なく走り切れた。一関市街地の北端の町並に入ると、道路案内に、直進が厳美渓、左が一関市街、右が平泉とあった。右折して東北本線に沿った県道二六〇号を北上するコースに入った。

やがて平泉町に入った。町並みが切れ右手前方に束稲山が見えてきた。西行が束稲山の桜に、吉野山以外にこれほど見事な桜の山があったとは、と詠わせたというが、奥州藤原氏の京への対抗意識であろうか。こうして歴史を感じながら未知のロードを走るのも楽しいものだ。

最初の五キロが三〇分二五秒、こんなもんかな、今日はこれで行こう。しかし六キロの平泉折返しからラップが徐々に落ちてきた。キロ六分三〇秒が三キロ続いた。

一〇キロの予想タイムを計算しようとするが、頭の中の計算機がうまく回らない。降り注ぐ直射日光がさすがに暑い。今日は給水を早め早めに取ることにしよう。

復路の東北本線の陸橋は、どうにか歩かずに走り切れたが、黄金色の稲穂の景観を楽しむ余裕は失せていた。ついに一〇キロのタイムが一時間四分二四秒。なんとか二時間二〇分以内でのゴールだけは出来そうだ。

スタート会場付近に戻り、ここから後半一〇キロは東北新幹線の東側に広がる田園コースである。給水所でドリンク補給だけでなくスポンジに水を含ませて頭や足を冷やした。給水タイムも一分近くなっていた。いつもはタイムロスを惜しんで給水をスルーしていたが、今日はそんなことは言っていられない。足のスタミナも切れそうだ。完走が出来なければ、意味がない。

周りがだいぶばらけてきた。先はまだまだ長い、あまり無理すると本当に走れなくなる、ちょっとだけ歩いてみよう、そしてまた走りだせばいい、誘惑との葛藤が始まった。給水タイムを含めてキロ八分台が二キロ続いた。北上川に架かる柵ノ瀬橋が壁のように迫ってきた。ついに歩いてしまった。まわりのランナーも歩いていた。

美しい三連のアーチ型鉄橋を渡りながら、雄大な大河北上川の景観に感動する思考に切替えてみた。

古代に日高見川と呼ばれ、八幡平を源流に、岩手県を北から南へ縦断して、太平洋の石巻湾に注ぐ東北最大の一級河川である。平安時代に北上川流域を闊歩した蝦夷の阿弓流為や安倍一族、平泉仏国土の奥州藤原氏に思いを馳せながら橋を渡り切ると、少し元気が沸いてきた。

一五キロの第二折り返しで一時間四二分。最終関門は辛うじて切り抜けた。折り返して対面通行になる後続ランナーに「最終関門、大丈夫だよ、ガンバレ」と声掛けする余裕が出来ていた。周りの顔ぶれは固定してきた。声を掛け合うことはないが、妙な戦友気分である。

蛙のぬいぐるみや映画泥棒のカメラの仮装ランナーさんが沿道のお年寄りや子供たちと交歓している。とても私にはそんな余力も気力もない。感心してしまう。

五〇才台のゼッケンナンバーを付けたランナーに追いついた。見るからにアスリート体形だが、どうして我々と一緒に走っているのだろう、何かトラブルでもあったのだろうか。プライドだけで必死に走る彼をペースメーカーに、お蔭でこの一キロがなんと七分を切っていた。

一七キロの給水所で彼を見失ってしまい、支えが切れたようにペースはキロ八分二〇秒に落ちて、帰路の北上川の鉄橋は、下りさえも歩いてしまった。

一八キロ地点で二時間六分、に愕然とした。残り三キロをキロ八分で走らねば、制限時間二時間三〇分をオーバーしてしまうではないか。キロ八分はとてもムリだ、ついに初のリタイアか。いや、諦めるな、今ここで頑張らないでいつ頑張るんだ。まさに自分との戦いである。

沿道から「苦しい時こそ笑顔だよ！」の声が掛かってきた。そうだ、笑顔だ、切り替えよう、苦しくとも楽しい気持ちで走らなきゃあ、悲鳴を上げながらも走れていたじゃないか、大丈夫だ、自信を持て、まだ頑張れる。

一九キロでキロ八分四秒、二〇キロでキロ七分四七秒、まさに引き算の世界である。ゴールまであと一キロを切ったところで、前方に歩いているランナーが見えた。走るのを諦めてしまったようだ。追いついて並びながら声を掛けた。「まだ間に合うよ！頑張ろう！」彼は「まだ間に合うね」と、持ち直したようで並走してきた。意識したわけではなかったが、ふたり並んでゴールした。

電光掲示板は二時間二九分三〇秒を指していた。制限時間まで三〇秒、まさに滑り込みセーフである。ゴールすると彼が手を差し伸べて「七キロでおかしくなった。お蔭で走れました」とお礼の言葉をかけてきた。彼の握手に力が込められていた。ふたりにそれ以上の言葉は必要なかった。完走記録証を持った手を振って、お互い名乗らず爽やかな男の別れ方をした。

④水沢の殉教地を訪ねて（九月二七日②）

ハーフマラソンを辛うじて制限時間内に完走、総合体育館で着替えて、参加賞の芋っこ汁とお握りで腹ごしらえ、これから待望の水沢殉教地探訪である。

大会専用シャトルバスで一ノ関駅に戻り、東北本線で昨夜泊まった水沢駅に戻った。水沢駅内の観光案内所が無人ＩＴ化されて、五年前に胆沢城址の探訪時に利用したレンタサイクルは扱っていなかった。ハーフマラソンを走った後の歩きはキツイがやむを得ない。

パソコンで打ち出した簡単な地図を頼りに、駅前の商店街から住宅街の中を、途中から水路に沿って西南方向に約二キロ、道端に咲くコスモスや可愛いサフランにマラソンの疲れを癒されながら、途中道に迷ったが、四〇分程で寿庵の里「福原」に着いた。

寿庵がキリスト教の「福音」に因んで「福原」と名付けたといわれ、辻の案内板に「主家葛西氏が秀吉の小田原攻め不参により滅亡後、諸国を流浪し、その間に西洋文化や思想を学び、九州で洗礼を受けジョアンの霊名を受け寿庵と名のる。伊達政宗に依って一六一二年にこの地「見分」に一二〇〇石の領主に封ぜられ、藤沢時代の一族家従一〇〇余名と共に来たり。キリシタン信徒として福原全地域を信徒とし、教会堂を建て仙台に次ぐ聖地

とし、一六二一年に信徒代表筆頭署名者としてローマ法王に奉答文を送る。特筆すべきは、私財を投じて胆沢川から導水し（寿庵堰）胆沢穀倉地帯の基礎を作った。一六二三年に幕府のキリシタン弾圧により主君政宗に難の及ぶ事を考え、一〇名ほどの従者と共に南部方面に逃れ、その後の足跡は容としてわからない」とあった。

寿庵は、追手から逃走したと言われているが、ここには、主君に難の及ぶ事を考えて自ら福原を去ったとあった。地元ならではの寿庵贔屓の伝承なのかもしれない。

福原の辻から東に一〇分程のカトリック水沢教会に向かった。見学時間が一六時までとネットにあり、あと数分しかない。マラソンの疲れはまだ癒えていないが、教会に向けて走りに走った。住宅街の中に建つ白亜のモダンな壁面に白の十字架が、入口横に後藤寿庵の白い立像が立ち、正面扉は開錠されていたが無人だった。

正面扉に貼られていた伝言メモに従って神父さんに電話すると、カトリック教会は公教会ですからどうぞ自由にお入りくださいとのこと、お言葉に甘えて無人の聖堂内を三〇分ほど見学させてもらった。

堂内に掲示された「東北とその周辺のキリシタン殉教地」の地図に、水沢・クルス場七六人、大籠・地蔵ノ辻二一八～三〇〇人、仙台・広瀬川八六人、米沢・北山原七四人、会津若松五八人と殉教人数が書き込まれていた。

「水沢のキリシタン殉教者」の張り紙には、ペトロ岐部：水沢で宣教し捕えられ江戸で一六三九年殉教、カルバリオ神父外八人：水沢の西方の下嵐江銀山で捕えられ仙台広瀬川にて水責めで一六二四年殉教、ジョアキム津島と妻アンナ（庄内の人）他四人：水沢にて一六二〇年十一月六日に伊達藩最初の殉教（斬首）、水沢にて五〇人～六〇人：一六二一年に殉教（火刑）、一六四〇年四月に前沢他で三三人殉教、など水沢地方での殉教者名と殉教者数などが詳細に記されていた。

聖堂の正面に、大きな十字架のキリスト像が掲げられて、縦横一メートルはあろうか。岩手県出身の彫刻家舟越保武作の蒼黒いブロンズ像である。磔された両手を水平に広げて顔をしっかりもたげ、口を軽く開け、伏し目がちに、祈りを捧げる人々を見守っているようだ。

資料コーナーに「安らかな表情のキリスト」と題した同教会の司祭が語られた新聞切り抜きがあり「キリストは命をささげて人を愛す。その象徴が十字架のキリスト像。穏やかな表情が人々に安らぎを与える。心が癒されるし励まされたような気持ちにさえなる」とあった。

もう一つの「寿庵と政宗のやりとり」と題した資料に「政宗は、厚く信頼していた寿庵を失いたくはなかったので、寿庵に「自分はキリシタンの教えを守る許可を得ていることを、秘密にせよ」といわれた時、寿庵は「そのような誓いは断じて立てられない。殿の、ごひいき、財産、生命を失うとも、いとわぬ」と答えた。と一六二四年のイエズス会の年報に書かれている」そして「石母田大膳や岩谷堂、衣川、金ヶ崎の領主も棄教を勧めたが「潔く死ぬ覚悟をしている」と応えていた。こうして、寿庵の館は襲われ、略奪され、屋敷は焼き払われた。寿庵は動揺することなく、信仰のうちに喜び、従容として、北隣、南部領に退出した」とあった。

カルバリオ神父を囲んで一〇人の信徒がミサをあげる絵画が掲示されていた。説明文に「一六二三年クリスマス、カルワリオ神父を迎え、真夜中のミサに与かり神の力強い助により領民のために奉仕できた事を感謝した、これが寿庵にとって最後のミサとなった」とあり、このあと寿庵は南部に逃れるが、カルバリオ神父は逃亡先で捕縛され、仙台の広瀬川で水責めにより殉教した。

宣教師の国外追放令に反して国内に潜伏したキリシタンの多い中、マニラに渡った高山右近のように、寿庵が自分の信仰の場を求めて水沢を去ったとしたら、福原に残された信者たちはどうなると考えていたのだろうか。

水沢教会から福原の交差点に戻り、天主堂の跡に建つ「毘沙門堂」に向かった。案内板に「奥羽地方における切支丹信仰の最重要拠点であり、最盛期にはアンゼルス・カルバリオ、ペトロ岐部らの神父を迎え、多くの信者が集まり祭や礼拝が行われた聖地である。将軍家光によるさらに厳重な禁令に、領主寿庵の他領への転出、全地域民の棄教となった。この際、地域民は、密かにマリア像を観音堂に隠して礼拝を続け、本地の天主堂は名を憚って毘沙門堂と改めた」とあった。

水沢地方は、朝廷に異民族と蔑まれた蝦夷の支配地であり、平安初期に蝦夷のリーダー阿弓流為を征討した坂上田村麻呂が毘沙門天の化身として祀られた伝承から毘沙門堂と呼びマリア観音を密かに祀ったのであろうか。

福原交差点から寿庵館跡に向かう通りは、見分村の領主になった寿庵が、居宅を建てて東西を結ぶ東西五町三〇間（約六〇〇m）の侍小路を作り、その両側に家臣の屋敷を区割りしたという。現在は、洋風なミニ公園や欧風な街路灯が配されて「福原小路」「寿庵の道」と銘打って美しい石レンガ道に整備されていた。

寿庵館跡に向かう福原小路の道沿いに、そのマリア像を隠したという小さな「観音堂」があった。外見は厨子のようだが、逃亡した寿庵に見捨てられた信者たちが、仏教徒を装った隠れキリシタンとなり、観音様にお参りしながら密かに信仰を守っていたのであろうか。

福原小路の西の突き当りの後藤寿庵の館跡に、コンクリート造りの重厚な「後藤寿庵廟」が建っていた。寿庵の水利事業と信仰活動の遺徳を顕彰した碑だという。

案内板に館のまわりに外堀をめぐらし堡塁や土塀で守られ小さな城郭のようだったとあり、農村公園になっていた。遊んでいた子供たちが私を見つけると、音声ガイダンスのスイッチを入れ、寿庵讃歌を聞かせてくれた。

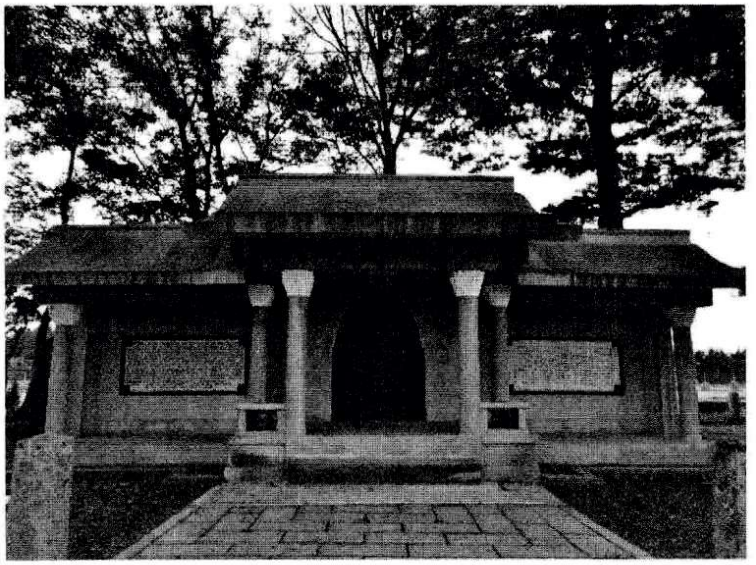
（1）聖愛の灯かかげ、教堂に鐘鳴り渡る、
　鳴呼、使徒寿庵元和の春
（2）不毛の地、胆沢の荒野、堰を掘り堤を築く、
　鳴呼、民人の福音の水
（3）弾圧の嵐はすさび、何処へか去り行く人に、
　鳴呼、里人の慟哭やまず
（4）寿庵碑に立ちて望めば、ろばろと沃野は稔る、
　鳴呼、栄光の人、花を捧げん

弾圧の嵐は荒び、何処へか去り行く人に、里人の慟哭やまずとは、寿庵への敬慕であろうか。自分たちを見捨てて逃亡した寿庵への怨嗟の声ではないのか。死を恐れず最後まで信じる者に寄り添って自ら獄死したペトロ岐部とは違う道を選んだ寿庵の人間性を疑っていた。

日が落ち薄暗くなってきた。最後の探訪先の「クルス場」に急いだ。一六二〇年に仙台藩最初の殉教が行われ、六人が斬首されたといわれる。寿庵廟の南側に広がる黄金色の稲田の農道を南に四〇〇mほど進むと、用水路に架かる小さな橋の欄干に「クルス場橋」とあった。

クルス場の殉教について、カトリック水沢教会に掲示されていた資料に「その時、高貴な人が脇に従い、厳かに行列をして進み、四〇〇人のキリシタン等が見守っていたという。遺体は寿庵の教会の祭壇の下に葬ったといわれる。（石母田文書）」とあった。

後藤寿庵廟（２０１５年9月２７日撮影）



一六二〇年は、支倉常長が遣欧使節から帰国した年であり、その直後に政宗は仙台領内にキリシタン禁令を公布した。仙台藩最初の殉教地になるクルス場に向かう行列の脇に従う高貴な人が、福原領主の後藤寿庵だとしたら、この殉教をどう思ったことだろう。彼はその三年後に逃亡するまで福原に留まって信教を守っていた。

一六二三年、仙台領に潜伏し布教をしていたアンデリス神父とガルベス神父が、江戸の芝口で公開処刑されると、さすがの政宗もついに水沢福原の寿庵屋敷を襲撃させ、寿庵は水沢から逃亡、共に逃亡したカルバリオ神父は捕らわれて仙台の広瀬川で水責めにより殉教した。

一六三九年には、単身エルサレムに渡りローマで司祭となり禁教下の日本に潜入して水沢で布教していたペテロ岐部が、水沢のクルス場橋付近で捕縛され、江戸に送られて苛酷な穴吊りの拷問を受け殉教した。

仙台藩最初の殉教地のクルス場橋周辺を散策していると、橋の南隣に時宗長光寺の墓園があり、墓地由来の説明板に「この墓地は昔からクルス場（バ）と呼ばれ、黒州婆の文字で表されることもある。クルスはポルトガル語で十字架の意味であり、後藤寿庵がこの地で活躍した時代のキリシタン信者の墓所があった所である。七〇〇余坪の面積があったといわれ、一六二三年に寿庵が福原から逃亡すると、残った家臣は改宗を余儀なくされ、留守家の配下に組み込まれ、足軽となり全住民が長光寺の檀家となった。仏教に帰依させられた人々は、厳禁された宗義を憚ってか黒州婆の文字を使用するようになったと伝えられている」とあった。

時宗は、浄土宗の一派だが、阿弥陀仏を信じていなくとも、南無阿弥陀仏と唱えれば誰でも極楽浄土に行けると説いており、密かにアーメンを祈る隠れキリシタンの隠れ蓑には、恰好の宗派だったのかもしれない。

水沢市内の各所で寿庵の偉人としての評価を目にするにつけ、ペトロ岐部やカルバリオ神父の命を惜しまぬ献身的布教活動に比して、自分だけの信仰の場を求めて、多くのキリシタン家臣たちを残して南部に逃亡した身勝手な行動に、その人間性を疑い憤りさえ抱いていたが、クルス場の墓園にやって来て、寿庵が決して彼らを見捨てていたわけではなさそうだと少し安堵してきた。

討手の襲来を前に、福原の館で最後のミサを上げ、残される家臣たちに留守氏の配下に入り時宗の檀家となり隠れキリシタンとしての信心を守っていく身の処し方を細部に亘り指示している寿庵の様子が浮かんできた。

ここで気になる人物がいた。政宗の指示で寿庵に棄教を勧めたという石母田大膳である。一六二一年の水沢殉教記録も石母田文書、昨日訪ねた仙台広瀬川の殉教碑に刻されたカルバリオ神父らの詮索覚書も石母田文書、支

倉常長が持参したスペイン国王とローマ教皇宛て政宗書状案を現代に伝えているのも石母田家文書である。

常長帰国の三年後にマニラから薩摩に潜入して捕えられ長崎の獄中にいるソテロ神父に、幕府への復命の機会が実現できるよう年寄土井利勝へ取り次ぐ旨の書状を送ったのも石母田大膳で、奉行職として政宗の密命を帯びて禁制のキリシタン対応を一任されていたようである。

大膳は信長に滅ぼされた朝倉義景の一族で、小早川秀秋の客臣から後に政宗の小姓となり、一六〇一年に石母田家の家督を相続して登米郡米谷城主、一六一六年に水沢城主となる。米谷城の東和町は享保年間に一二〇名のキリシタンが処刑され、最後の殉教地といわれる。

長光寺の墓園由来に、残された家臣が留守氏の配下に入ったとあったが、留守宗利が水沢城に入るのは一六二九年、寿庵逃亡当時の水沢城主は石母田大膳である。

南部に逃亡する寿庵は、残した家臣団と福原のキリシタン社会を、キリシタンに理解があり盟友であり政宗の信任厚い水沢城主の大膳に託していたに違いない。

すっかり暗くなっていた。東の空に仲秋の名月が輝いて、街はずれのクルス場から水沢駅まで約三キロの夜道を月の光を頼りに歩いた。マラソンの疲れはあったが、寿庵が福原に残した信徒たちを決して見捨ててはいなかったことが知れて、心なしか足取りも軽くなっていた。

【岩手県：一関市大籠の殉教地を訪ねて】

水沢市の東南隣の一関市藤沢町は、寿庵が水沢に入る五〇年程前に、大籠地区の鉱山に製鉄技術を買われて備中からやって来た千松兄弟がキリスト教を初めて伝えたといわれ、政宗の死後に三〇九人の人殉教があった。強行日程になるが、水沢までやって来て藤沢大籠に行かないわけにはいかない。一ノ関駅前のホテルに連泊した。

今日の行程は、一ノ関駅から千厩駅までJR大船渡線、千厩から大籠まで路線バス、大籠キリシタン殉教地公園周辺を散策して埼玉に帰るフルコースである。ホテルにリュックを預け、軽装の秋の行楽気分で出立した。

JR大船渡線は、一ノ関からまず東へ一〇キロ、北上川を渡ると砂鉄川に沿って北へ一〇キロ、猊鼻渓付近から東へ一〇キロ、摺沢で南へ一〇キロ、千厩から東へ二〇キロで終点気仙沼、何とも奇怪な凸形の路線である。

直線計画が凸形路線になった理由は、大正時代の総選挙で摺沢を推す立憲政友会と千厩を推す憲政会の我田引水ならぬ引鉄合戦があったらしい。お蔭で、東北の山村風景や朝靄の北上山系そして猊鼻渓の渓谷美が満喫出来るのだから、利益誘導の誘致合戦もいいものである。

二両編成のローカル電車は、北上山地の山深い中をひたすら走り、車窓から手を伸ばせばススキや木立に触れんばかりの近さである。一時間程で千厩駅に着いた。

ホームの「大夫黒顕彰碑」の案内板に、源平合戦で源義経が、ひよどり越えで急斜面を駆けおりた名馬「大夫黒」が平泉の藤原秀衡が贈った千厩産だったとあった。

前九年の役で源義家が安部貞任を討つため奥州に来た際、岩窟に千頭の馬を繋いだ伝承が千厩の語源だともいわれ、当地は平安時代から南部馬の名産地だったようだ。

千厩駅前から大籠線千松行きの路線バスは、平日六往復、土曜は二往復、日曜は運休というローカル路線で、朝八時四三分の乗客は、老夫婦と私の三人だけだった。

老夫婦は気仙沼からの津波被災者で故郷の千厩で仮設住宅住まいだという。雪の舞う寒い避難所に新聞紙一枚敷いて過ごした四年前のあの日のこと、先の見えない仮設住宅の苦労話など、ただ聞いてあげるしかなかった。

私の来訪目的に、ご主人は、この路線が気仙沼に産出する金を平泉へ運ぶ黄金街道と呼ばれ、景勝地の猊鼻渓を流れる川の名が砂鉄川で、その上流は砂鉄の産地だったなど、ご自分の故里を懐かしそうに話してくれた。地元の古老でなければ得られない情報に感謝である。老夫婦が藤沢病院前で下車、私一人の貸切りバスになった。

山間の僅かな平地に黄金色の棚田が連なる風景は、絵画のように美しい。沿道に点在する農家の庭先にコスモスが咲き誇っていた。私一人乗せた路線バスは、宮城県との県境に跨る北上山地の秘境へと分け入って行った。

千厩駅から奥深い山道を二〇キロ余り、ひたすら走ること五〇分程、ようやく大籠農協前バス停に下車した。澄みきった青空が広がり、爽やかな秋風が心地よく、小鳥のさえずりが響き渡り、こんな平和な山村でかつて三〇九人の凄惨な大殉教があったとは信じられない。

降り立ったバス停のすぐ横に立つ「地蔵の辻」と書かれた十字架形案内板に「一名無情の辻と云う、打首十字架等に依り集団大処刑が行われてその鮮血が刑場下の二俣川を血に染めた無残なこと筆紙に尽し難きものがあった」とあり、寛永一六年（一六三九年）に八四人、翌年に九四人がここで殉教したという。

いきなり三七六年前の阿修羅の如き凄惨な殉教現場に突き落とされた思いである。周りに殉教者の家族が菩提のために建てたのだろう墓石や地蔵仏が散在していた。

バス道路の向い側の大きな石の案内板に「首実検石」とあり「所成敗を受ける信徒の模様を伊達藩の検視役が腰を下して首実検した」とあった。所成敗とは、捕えたその場で即処刑することである。なぜ所成敗だったのだろうか、という疑問が沸いてきた。

キリシタン禁令の目的は、キリシタンを無くす（消す）ことで、亡くす（殺す）ことではなかったはずである。拷問による苦痛を与え、引き回しと公開処刑による死の恐怖を見せしめに、棄教させるのが目的で、命を奪う処

刑は、あくまで最後の手段ではないか。信者を見つけ次第、棄教する機会すら与えずその場で処刑してしまうとは、これでは単なる虐殺である。どうもこれまで訪ねてきた米沢や水沢の殉教地とは別世界のようだ。

バス道路から分かれた山道を「大籠キリシタン殉教公園」に向かった。道端をコスモスやサルビアが彩り、大屋根の茅葺き農家が、古き山村風景を描いていた。まもなくキリシタン殉教公園の「歴史の庭」に着いた。

広場の中央に母子像の立つ聖なる泉が造形され、資料館は休館だった。その先の杉林に、クルス館のある「歴史の丘」に通じる、殉教者数に合わせた三〇九段の急な山道「歴史の道」が真っ直ぐ伸びていた。

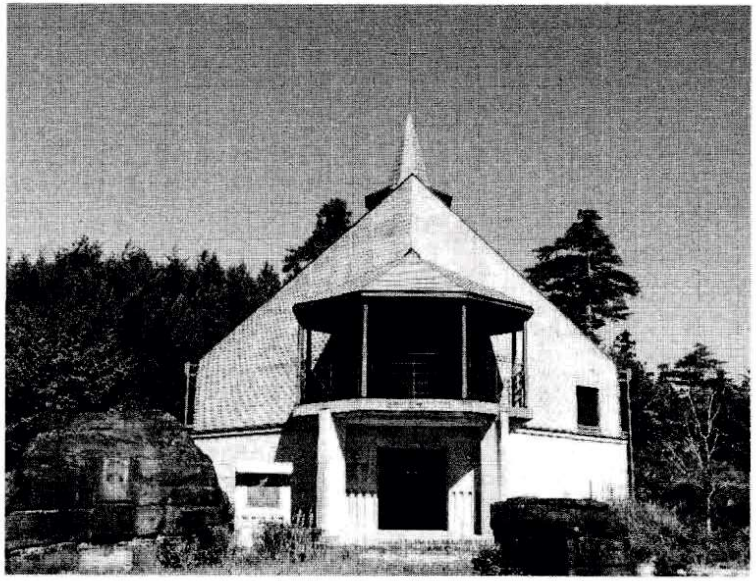
鬱蒼とした暗がりに太陽の日差しが僅かに差し込む中を、一段一段を数えながら登ったが、殉教者の数の多さを改めて思い知らされた。マラソンランナーを自負しながら、幾たび立ち止まり息を整えたことだろう。

三〇九段の階段を登り切ると、目の前が開けてピラミッド形に組まれたカリヨン塔がゲートのように頭上に現れ、正面にモダンな三角形の建物が迎えてくれた。尖塔に十字架をいだく「大籠殉教記念クルス館」は、岩手県出身の彫刻家舟越保武の設計である。（下の写真）

ついにやって来た。東北の殉教地巡りを思い立った時、秘境のこの地まで来られるとは思ってもいなかった。

「歴史の丘」に建つクルス館に対峙して十字を切った。クルス館の前庭の中央に据えられた巨岩の姥石に、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の殉教者に寄せたメッセージの顕彰碑が嵌め込まれていた。

大籠殉教記念クルス館（２０１５年９月２８日撮影）



クルス館は月曜の休館日だったが、予め資料館事務所に電話をしていたので扉は開錠されてあった。恐る恐るクルス館の扉を開くと、薄暗い奥の正面に高さ三メートルはあろう十字架に磔けられた等身大のキリスト像が、明り窓から差し込む光を背に聳え立っていた。

荘厳な空間に立ち、大籠の地で殉教した三〇九人の安寧を祈り十字を切った。左右の聖女の胸像と共に舟越保武の作品だが、同じ作者なのに昨日カトリック水沢教会で対面したキリストとは、雰囲気がだいぶ違っていた。

勿論、色も違う、こちらは茶のブロンズだ。どこが違うのだろう。水沢教会のキリストは、両手を水平に広げて頭をしっかりもたげ、薄目を開けて祈る信者を見下ろす凛とした強さを感じたが、クルス館のキリストは、体の重みに腕がしなり、眼を閉じて心持ち頭を垂れ、薄く口を開け今にも息絶えそうな弱々しささえ感じられる。

水沢教会のキリストは、聖堂に集まる信者の信仰を優しく見守るキリストであり、クルス館のキリストは、ゴルゴタの丘で皆の罪を背負い十字架に磔にされ皆と共に苦しむキリストの姿そのもののように見えた。

十字架像の傍に舟越保武直筆のメッセージがあった。

「みちのくの暗い空の下、ひそやかにくらす切支丹の里、藤沢の大籠は、現世のわれらに、痛ましい歴史を留めて、手をさしのべて、尊き心をここに、継ぎとめる」そして

十字架上のイエス・キリスト（２０１５年９月２８日撮影）



「主よ、われらを憐れみたまえ、われらに平安を与えたまえ」と祈りの言葉が添えられていた。

クルス館内の階段を昇り、二階のテラスに出ると、カリヨンが足元に、遥かな山並みは宮城県側であろうか。

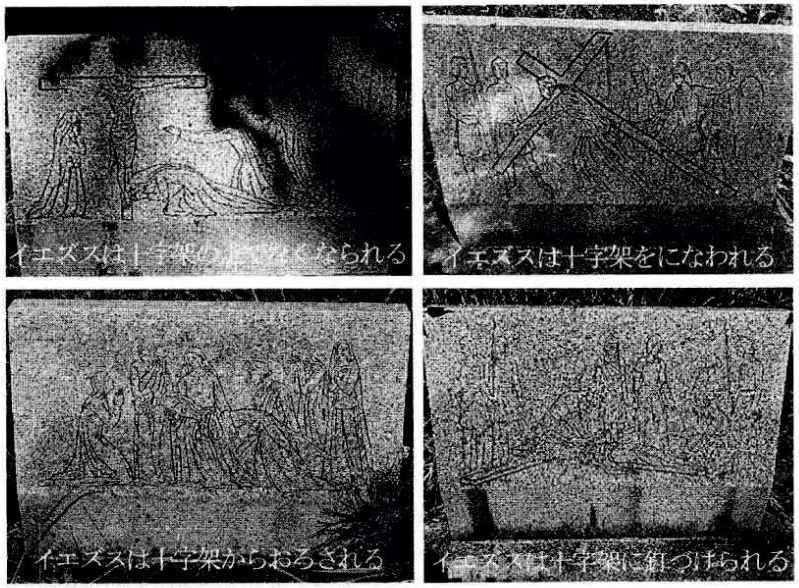
螺旋階段の最上段に昇ると、尖塔の鐘の紐がすぐ手元まで垂れていた。恐る恐る紐を引いてみると、静けさを打ち破る鐘の音が耳元で鳴り響いた。県境の山並みにコダマしたことだろう。三七六年前の殉難者の安寧を祈り私がここにやって来た証が残せた感慨にしばし耽った。

クルス館からの下山は、直登した三〇九段の階段ではなく、迂回路の「十字架の道行」を下った。道端に、イエズスが死の宣告を受け、十字架を荷われ、十字架の重さで三度倒れられ、十字架に釘付けられ、十字架の上で亡くなられ、墓におさめられるまでの、受難一四場面を線刻した石碑が麓まで順に並べられていた。

「十字架の道行」の途中に、遠藤周作の「切支丹最後の地として」と題した碑があった。「わたしは夕暮れ近く大籠の街道を歩いたのだが、点々と残っている首塚や処刑場の跡に寒けさえおぼえたのだった。九州の切支丹遺跡を訪ねてもこんな陰惨な感じをあたえる場所はなかった。ここは文字どおり東北切支丹の最後の聖地であろうと思えた」そして「こういう公園ができて本当に良かった。多くの人々の目にふれて、殉教という史実は現代人に何を感じさせるだろう。平成七年一〇月、ポウルフランソワ遠藤周作」と結ばれていた。

遠藤周作が言っていた、九州の切支丹遺跡にはない陰惨な感じ、を私もこの後の散策で実感した。

十字架の道行（左上１２留、左下１３留、右上２留、右下１１留）



キリシタン殉教公園からバス通りに下り、カトリック大籠教会に向かって、バス停を一つ戻ったところにお地蔵さんが見えてきた。額に白毫があり、赤ちゃんを横抱きして慈母観音のようだが、ベールを被り胸に十字架のようなものが見え、大籠で殉教した多くのキリシタンを見守るマリア観音であろうか。

傍らに石の十字架と蓮華座に座る首のとれた石像が並び「上野刑場」とあった。案内板の墨書が掠れて「通称オシャナギ様と称する処で、信徒処刑場であり殉教地で寛永一七年宗徒九四名が所成敗となった。此処には八基地蔵尊が建っており、古老の話によれば、信徒処刑後より夜な夜な男女の泣き叫ぶ声がして殺気迫るものがあり、付近住民の中には離散した者もあって、何れの処刑場に於ても処刑された遺体の処理は厳禁、約六〇年後に入ってから許されて、此処では遺体を元禄一六年集め、供養碑が建てられた」と辛うじて読み取れた。秋晴れの平和な山村で行われた凄惨な殺戮が未だに信じられない。

バス道路から左にカトリック大籠教会へ迂回する道を下り、二〇頭ばかりの牛小屋の臭いに閉口しながら、薄暗い樹林の中に「祭畑刑場」と書かれた案内板を見付けた。「上野刑場より西へ二〇〇m、此処にも地蔵尊が二・三基立っている。殉教者の血を流した処で処刑中逃げた者を捕え、川向いの約三・四〇m離れた芝生の松の枝に鉄砲を乗せ狙い撃ったところである」とあった。

こうなるともはや殉教ではない、虐殺ではないか。辺りが薄暗いだけに鳥肌が立ってくる。祭畑刑場の看板の傍らに「隠れ穴」と書かれた看板が倒れていた。それには「上野・祭畑刑場で処刑される幾人かが、処刑をおそれてこの穴に隠れたが発見され、祭畑刑場で銃殺された當時の隠れ穴である」とあった。藪の中に踏み込んで探してみたが、それらしい穴は見当たらなかった。

踏み絵を使い信者を見付け出して所成敗するだけでなく、死の恐怖に逃げ回り隠れた穴から見つけ出された信者を手当たり次第に射殺していたとは、ベトナム戦争でベトコンゲリラでもない無辜な一般住民まで皆殺しにしたアメリカ軍と一緒ではないか。

ここ大籠は、米沢が天国だとしたら、まさに地獄であった。彼らはなぜ逃げようとしたのだろうか。なぜ殉教を怖がったのだろうか。殉教は神の許に行けるのだからと喜んで死んでいくはずだったのではないのか。

米沢では家族が否定しても、自分は信者であり棄教はしないと申し出て喜んで処刑されていった。仙台では水責めという苛酷な拷問にも負けず、信仰を守りきり、命を絶っていた。水沢では寿庵の逃亡で残された信者たちが、棄教を装って隠れキリシタンの道を歩んだ。しかしここ大籠では、様相が違っていた。刑死を目の前に、死の恐怖に取り乱して逃げ回るだけだった。

祝福されるべき殉教の本当の意味が、彼らには十分には理解されていなかったのかもしれない。

会津、米沢、仙台、水沢では、為政者が率先して布教を支援するだけでなく、宣教師を呼んでキリスト教を信者に学ばせており、彼らは拷問や刑死に打ち勝つ強い意志と殉教の喜びを心得ていたが、この山奥の大籠では、殉教の恐怖に打ち勝てるだけの真のキリスト教が伝道されていなかったのではないだろうか。遠藤周作が抱いた陰惨な感じの意味が分かったような気がしてきた。

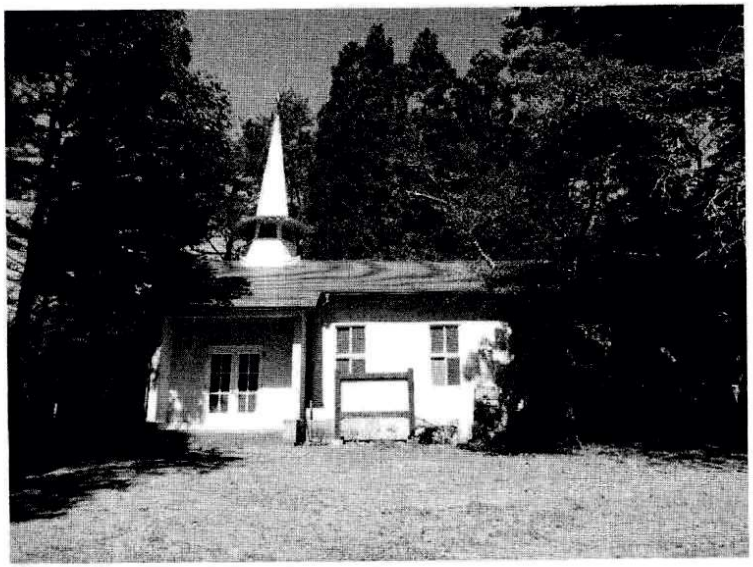
いよいよ最後の訪問先の「カトリック大籠教会」である。陰惨な樹林に囲まれて、白い壁にエンジ色の屋根ととんがり帽子の塔が可愛らしいチャペルが見えてきた。

真っ白な聖母子像の傍らに立つ案内板に、一九五二年にスイスのベトレヘム外国宣教会が大籠の殉教者を顕彰するため建立された教会だとあった。

こんな山奥に何故こんなに沢山のキリシタンがいたのか、なぜ痛ましい殉教が行われたのか、悶々としていた疑問に答えてくれる内容が詳細に記されていた。

「大籠キリシタン小史」と題して「言い伝えによると、永禄年間（一五五八～一五六九年）に千松大八郎・小八郎兄弟がこの大籠の地に来て、鉄の精錬に従事しながら、キリスト教を伝道したと伝えられる。この大籠を中心に狼河原（宮城県米川・馬籠）で恫屋八人衆の下、南蛮流製鉄で良質の鉄を増産したが、そこで多数の信徒が働いていた。伊達正宗のキリシタン禁止は比較的柔軟であったが、元和六年（一六二〇年）禁教令を出し弾圧に乗り出した。フランシスコ・バラヤス（孫右衛門）神父は、この頃から潜入して布教し、信徒数は日に増加して隆盛を極め、当時あった三つの寺が廃寺となり今日に至っている。正宗が没した後、島原の乱が起るとバラヤス神父は捕縛され江戸で殉教した。大籠では（中略）合計三〇〇名以上の殉教があった」とあった。

カトリック大籠教会（２０１５年９月２８日撮影）



教会前の広場に藤沢町むらおこし実行委員会が設置した説明板に「大籠キリシタン史の概要」と題して「天文年間（四三〇余年前）まで大籠等において製鉄が営まれていたが、永禄元年（一五五八年）千葉土佐が備中国中山に赴いて新しい製鉄技術を学び、帰国後制作したが、容易でなかったので、技術者として布留兄弟（のち千松に住む）を招き（中略）大籠は仙台領きっての製鉄産地になり日産一千貫もの鉄がつくり出された。

（中略）千松兄弟は、キリシタン大名宇喜多秀家の領地備中国出身で熱心なキリシタン信者であった。兄弟は恫屋工として生産を興隆し、一方においてデウス仏を安置してキリストの教を説いた。又慶長から元和にかけ後藤寿庵やバラヤス神父の布教が大籠を中心に近郊に波及し信者は約三万人に及んだのである。云々」とあった。

大籠キリシタン小史の冒頭に、言い伝えによると、と断り文句は付いていたが、永禄年間に千松兄弟がこの大籠の地にキリスト教を持ち込んだとすると、東北にキリスト教が初めて入ったのが、秀吉の奥州仕置でキリシタン大名レオ蒲生氏郷が会津若松に入った一五九〇年といわれ、それより二〇年以上も前に大籠地区で密かにキリスト教が広まっていたことになるが、俄かには信じられない。千松伝承の真偽は、帰宅してからの宿題である。

大籠の殉教遺跡は、この近辺にまだまだ多く、斬られた首を晒した後に埋めたという「架場首塚」、処刑され放置された遺体を六〇年経ってようやく供養したという「元禄の碑」、晒された首を親族が盗んで袖の下に隠して持ち帰り埋めた「上の袖首塚」、そして伝道した「千松兄弟の墓」やゼウス仏を「山の神」と称して祀った場所や集落の入口で踏み絵させて信徒を捕えた「台転場」は、ここから更に東へ二キロ先の山奥にあり、西に県境を越えた宮城県登米市東和町は、享保年間に一二〇名のキリシタンが処刑され、最後の殉教地といわれている。

バスの来る時間まで、道端の綺麗に整備された花壇にカメラを向けていると、正午の時を知らせる鐘の音が山にこだましてきた。殉教公園のカリヨンであろうか。

帰りのバスも私一人だった。バス停ごとに乗降客がいないのに駅名を告げる自動音声の車内アナウンスに「この路線は市の補助金をいただいています、利用客が少なくなると補助金が打ち切られます、皆さまのご利用をお願いします」のメッセージが機械的に流れていた。

この様子では数年後にはバスの運行もなくなるかもしれない。そしてこの山奥に三〇〇人以上の悲惨な殉教があったことも忘れ去られていくのだろうか。

①大籠のキリスト教について（私的考察）

殉教地の会津若松、米沢、仙台、水沢の為政者、蒲生氏郷、上杉景勝、伊達政宗、後藤寿庵は、キリスト教のよき理解者となり、宣教師を招き城下町という行政組織の中で武士を中心とした特権階級にキリスト教を広め、幕府の禁教圧力に対しては己の名声と権勢で抗してきた。

幕府の圧力の楯となった為政者が死去すると、若き後嗣が幕府の威圧に屈せざるをえなくなるのは当然だが、キリシタンたちが、宣教師によって培われた教義と強い信仰と神による選民意識を支えに、殉教の恐怖に凛として正面から向き合っていった。

しかし北上山地の山奥にある大籠では、事情が大きく違っていた。理解ある為政者の保護による組織されたキリシタン社会でもなく、鉱山の鉱夫や農民などの下層民が烏合の衆となり、幕府の禁教令の迫害の前に、死の恐怖に逃げ惑い、無残に殺戮されていくだけだった。

とても殉教とは言えない虐殺の根底に、宣教師でも神父でもない一介の鉱山技師が備中国から持ち込んだキリスト教に信仰上の構造的欠陥でもあったのだろうか。

当時の鉱山は、藩の財政を支える重要資源として、鉱山経営に一種の治外法権が認められ、犯罪者として追われる流れ者や禁教令による迫害から逃れるキリシタンにとって人里離れた鉱山は恰好の隠れ場所になっていた。

社会的弱者や異端教徒たちが集まる秘境の大籠地区に千松兄弟が持ち込んだキリスト教は、逃避行の彼等の荒んだ心の拠り所として容易に浸透していけたのだろう。

信心して念仏を唱えれば救われると戦乱の世に蔓延して既成権力に抵抗した一向宗に似た宗教感で、聖母マリア像やキリスト十字架像に祈りを捧げれば神の国に行ける、という素朴な教えだったとしたら、豊かな城下町から遠く隔絶された山奥で過酷な労働環境にあって虐げられていた下層民や鉱夫たちや周辺の農民になんの疑念も抱くことなく素直に受け入れられていったに違いない。

千松兄弟が大籠にもたらしたキリスト教が、後に禁教の時代を迎え、殉教という恐怖の試練に直面すると、殉教を神の恵みと受け入れられず、死への恐怖に逃げ惑い多くの犠牲者を生んでしまったのは何故なのだろうか。

千松兄弟のキリスト教は、イエスの使徒たちが、まだ聖書の成立していない、口述で広めていった紀元一世紀の頃の原始キリスト教のように、エキスだけのシンプルで脆弱なものだったからではないだろうか。

神学を十分に理解しない千松兄弟のようなセミプロに影響されて疑似キリスト者になっただけにすぎず、後に殉教の恐怖に打ち勝つ真の信仰の強さを持ち得ないまま死の恐怖に翻弄されてしまった、彼らこそ一番の被害者であり犠牲者だったといえるのかもしれない。

一六一二年に水沢の見分を領した後藤寿庵は、秀吉に滅ばされた藤沢城の城主岩淵秀信の次男で、大籠地区はその藤沢城下にあった。後に大坂の陣で鉄砲隊長として活躍するキリシタン寿庵が、水沢から南東に四五キロある、鉄の産地であり東北のキリシタンの聖地とされる大籠に赴いていたことは、当然にあり得ただろう。

大籠地区に宣教師が入るのは、メキシコから帰国途上にあるソテロから政宗宛て書翰と贈物を持参して一六一八年に来仙したフランシスコ・ガルベス神父、政宗が師を大いに優遇し城下で説教することを許したとバジェス著「日本切支丹宗門史」にあり、大籠入りに遣欧使節の派遣に関わっていた寿庵の計らいもあったに違いない。

ガルベス神父が二年間大籠村左沢の九郎右衛門屋敷に留まり磐井地方で布教活動を、その後最上に去った後任に、バラハス神父が大籠を拠点に仙台領内を巡回、一六二九年に奥州布教長となり一六三九年まで活躍した。

寿庵やガルベスやバラハスによって本来のキリスト教が伝道されるようになったとしても、六〇年前に千松兄弟によって広められていた脆弱なキリスト教を確固とした信仰に昇華させるまでには至らなかったのだろう。

キリシタン迫害が大籠を襲った時、殉教を神の恵みと捉える強い信仰を持てないまま、死の恐怖に堪え切れず逃げ惑い所成敗の犠牲になっていったのは悲劇である。

②大籠の千松兄弟は何者なのか（私的考察）

備中から大籠に初めてキリスト教を持ち込んだという千松兄弟について、幾つかの疑念が湧いていた。

一五四九年に来日したザビエルが、薩摩から肥前・周防・堺・京都、山口に戻り豊後で布教を行い一五五一年にインドへ離日、後を託されたトーレス神父が、山口や九州各地で布教を行い一五七〇年に天草で死去、ヴィレラ神父が、京都と畿内で布教を行い高山右近らに洗礼を授け一五七〇年にインドへ離日、千松兄弟が居た永禄年間（一五五八年～一五六九年）の備中（岡山県中部）にキリスト教はまだ伝道されてはいなかった。

大籠教会の案内板に千松兄弟が宇喜多秀家の領地備中国出身とあったが、秀家の領地は東隣の備前国で、しかも秀家は永禄年間にまだ生まれてもいない。秀家と千松兄弟の接点は時空的にありえないが、永禄が三四年後の文禄の誤字だったとすると、文禄は朝鮮出兵で秀家が出征軍二〇万の総大将になったまさに秀家の時代である。

その宇喜多秀家と大籠地区が、全く関係がないのかというと、どうもそうでもなさそうである。秀家の妹を正室にするキリシタン武将明石掃部全登の子内記が、一六一五年の大坂の夏の陣に、父と共に大坂方として戦って敗れ、幕府の落ち武者狩りから逃れて、大籠地区から北東三〇キロにある気仙郡の玉山金山に隠棲していた。

内記の父明石全登は、熱心なキリシタンで領内に三千人のキリシタンを擁したといわれ、関ヶ原の戦いで西軍の主力宇喜多秀家軍の半分を率いて東軍の先鋒福島正則軍と戦い、大坂の陣ではキリシタンを保護するという豊臣方にキリシタン家臣団を引き連れて参陣、後藤基次、真田信繁、長曾我部元親、毛利勝永と共に大坂方五人衆として、夏の陣では花十字の旗を掲げて道明寺の戦いで伊達政宗軍と戦い、家康の本陣へ突入を図るが、大坂方壊滅の報に戦場を離脱、その後行方をくらました。

備前の明石氏は、播磨国守護大名赤松氏の末裔、備前保木城主で、勢力圏の備前東部の吉井川周辺は銅山開発が盛んで、一族は、銅山経営者、技術集団の統率者であり、宣教師から南蛮技術を取り入れていたのだろう。

大坂の陣に敗れた明石内記が、幕府の明石刈りと称される追及から逃れて隠棲した陸奥国の玉山金山は、日本で初めて発見された金山で、マルコポーロの東方見聞録にあるジパング金山といわれ、東大寺大仏造営に黄金が献納され、平泉の黄金文化を支えた金山である。

政宗は仙台藩の財源を支える玉山金山の採掘技術集団として、落ち武者の明石一党を密かに受け入れたのではないだろうか。政宗は大坂の陣の敗将真田幸村や長曾我部盛親の子女を密かに仙台領に匿っており、キリシタンの明石内記の隠棲も政宗の指示があったに違いない。

全登の家臣澤原孫右衛門が、大坂の陣で徳川方に捕らわれ駿府で全登父子の踪跡を糺訊された際、もし勝敗が違えば主君の行方を白状するのかと尋問者に反駁する忠臣振りに家康に放還されたというが、澤原孫右衛門の名が、バラハス神父の日本名と同じなのは偶然だろうか。

一六二〇年頃に大籠に入り一九年間布教活動をしていたバラハス神父が、大籠近くの玉山金山に隠棲するキリシタン明石内記と交流があったろうから、家康の尋問から放免されて主君内記の許に逃れてきた澤原孫右衛門と親交を持ちその日本名を借名していたかもしれない。

カトリック大籠教会の案内板にあった永禄が、文禄の誤りだったとすると、宇喜多秀家、明石全登・内記、銅山経営、玉山金山、大籠、澤原孫右衛門、バラハス神父、これらの点と点が、綾糸のように繋がってくる。

備中から大籠に招かれたという千松兄弟は、実在の人物ではなく、様々な伝承が結びついて後世に創り出された伝道者だったとしたら、備前の鉱山技能集団でキリシタン武将の明石一族こそ実像だったかもしれない。

後にバラハス神父の潜伏先を白状したという同宿（宣教師に同行してキリスト教教理を解説し説教した修道士）の名が孫左衛門である。兄弟のような名前のバラハス孫右衛門と同宿の孫左衛門が、備前銅山の明石一党と重なって千松兄弟の伝承を生んだのかもしれない。

【番外：江戸の殉教遺跡を訪ねて】

東北の殉教地を訪ねて、福島県会津若松市、山形県米沢市、宮城県仙台市、岩手県水沢市・大籠を巡ってきたが、東北で捕らわれた宣教師たちが江戸に送られたその後を訪ねなければ、私の殉教地巡りは終わらない。

令和四年五月一四日、小雨の降るなか、東京の傳馬町牢屋敷跡と芝口札之辻処刑場跡を訪ねた。

①傳馬町牢屋敷跡を訪ねて

上野駅から地下鉄日比谷線の小伝馬町駅に下車した。小伝馬町駅から日本橋方向に徒歩四分程のところに、初任地の仙台から東京に転勤してきた最初の支店である堀留支店があり、小伝馬町交差点に立つと、宮城の田舎から上京して来た五四年前にしばしタイムスリップした。

交差点を岩本町方面に渡ると、角の大安楽寺境内に傳馬町牢屋敷処刑場跡を供養する延命地蔵尊が祀られていた。明治八年に市ヶ谷に移転した牢屋敷の跡が不浄の地として荒廃しており、不動院の住職山科俊海が慰霊の寺建立を発願、大倉喜八郎と安田善次郎の援助で大安楽寺を建立、高野山から弘法大師を勧進したという。

死刑場の跡に立つ延命地蔵尊に、傳馬町牢で拷問を受けて刑死した多くの禁制キリシタンや吉田松陰を始めとした幕末の勤皇志士の安寧を祈り合掌した。

大安楽寺の北向いの十思公園の案内板に「伝馬町牢は慶長年間、常盤橋際から移って明治八年市ヶ谷囚獄が出来るまで約二七〇年間存続、この間に全国から江戸伝馬町獄送りとして入牢した者は数十万人を数えたといわれる。現在の大安楽寺、十思公園を含む一帯が伝馬町牢屋敷跡で、敷地面積一六一八坪、四囲に土手を築き土塀を廻し南西部に表門、北東部に不浄門があった」とあった。

慶長八年（一六〇三年）家康が江戸開府して江戸城の拡張に着手、慶長一一年からの江戸城の大増改築と江戸城下町の大改造に伴い、江戸城近くの常盤橋袂にあった牢獄を、奥州へ通じる街道口に移したのだという。

公園の西側に建つ十思スクエア内にある小伝馬町牢屋敷展示館に入ると、精緻に再現された牢屋敷の模型が展示されていた。獄舎は、揚座敷、揚屋、大牢、百姓牢、女牢と身分によって区分けされ、穿鑿所、拷問蔵、首斬場の部屋割りには、凄惨な臨場感が伝わってくる。

慶長一七年（一六一二年）に家康が初めてキリシタン禁止の布告、翌一八年に江戸市中でキリシタン狩りが始まり、三七〇〇人中一五〇〇人が小伝馬町牢に収容された。キリシタンの殆どは拷問に耐えきれず転宗したが、転ばなかった二七人が浅草鳥越刑場で斬首され、その時に収容された宣教師に、政宗の周旋で釈放されて支倉常長と共に遣欧使節になったルイス・ソテロがいた。

元和九年（一六二三年）に猪苗代で修道院を設立、仙台、秋田、蝦夷で布教活動をしていたアンデリス神父が自分を匿っていた宿主が拷問されることを救うため江戸で自首、仙台領の大籠で布教活動をしていたガルベス神父が逃亡先の鎌倉で捕縛され小伝馬町牢に送られた。

寛永一六年（一六三九年）に、仙台藩内で捕らわれたペトロ岐部とマルチノ式見神父、ポルロ神父の三人が江戸に送られ、小伝馬町牢で苛酷な穴吊りの拷問により式見とポルロは棄教、岐部は最後まで棄教せず牢死した。

同宿の白状でガルベスの後任として大籠を拠点に布教活動していた奥州布教長のバラハス神父が仙台で、式見とポルロの自白で庄内・最上地方で活躍していたオゾリオ神父が寒河江で捕縛され、小伝馬町牢に送られ、一六四〇年に芝口札之辻処刑場で殉教した。

宗門改役の大目付井上筑後守は、全国から潜伏キリシタンを小伝馬町牢に送らせ、逆さ吊りの拷問で棄教を迫った。元キリシタンだった井上筑後守は、火炙りや磔刑の公開処刑では、殉教者として崇められ信者の士気を鼓舞するだけで、殉教者を出さず背教者を作ることでなければ、キリシタンは根絶できないことを知っていた。

牢屋敷模型の拷問蔵を前に、遠藤周作原作の映画「沈黙」で、逆さ吊りにされたキリシタンの苦しむ声を聞かせてロドリゴ神父に棄教を迫るシーンが浮かんできた。

②江戸芝口札之辻処刑場跡を訪ねて

小伝馬町から、元和九年に大殉教が行われた芝口札之辻処刑場跡に向かった。山手線田町駅に下車、西口から第一京浜を品川方面に五分程で札の辻交差点に出た。

京都から日本橋に通じる東海道（現第一京浜国道）が江戸城桜田門に通じる桜田通り（現三田通り）と分岐する三叉路で、江戸の南入口に当たり交通量多く、布告法令等を掲示する高札場が設けられ札の辻と呼ばれた。

札の辻交差点のすぐ南の四三階建て高層ビルの裏手に綺麗に整備された園庭が広がり、幅広の石段六一段を上がると「都史跡元和キリシタン遺跡智福寺境内」の石碑と三メートルはあろう巨石が置かれていた。

元和九年（一六二三年）一〇月一三日、伝馬町牢に収容されていたキリシタンのうち、二〇年近く日本での伝道に努め東北各地を使徒として活躍したアンデリス神父とガルベス神父を含む成人男子五〇人が市中引き回しのうえ、南に七キロ先の芝口札之辻で処刑された。

前掲のパジェス著「日本切支丹宗門史」に「刑場は、最初、江戸城に続く日抜きの広場の筈であったが、これを一層物々しくするために、江戸から京都への街道にある丘が選ばれた。広い原と諸方の丘には、どこも大勢の人がつめかけていた。家光の新将軍就任のために、召集されて来ていた諸侯全部が顔を出していた」とある。

そして「老中の報告に新将軍は『老中達は、昨年の殉教の後は、どこにも伴天連は残っていないと言ったではないか。我が首府に二人現れたのは、不届至極である。厳罰にせよ』と激怒して叫んだ」とあり、秀忠の後を継いだばかりで生まれながら天下人であると虚勢を張る一九才の若き家光の、将軍の面子を懸けた諸侯への示威工作の舞台に札之辻の公開処刑を利用したに違いない。

処刑場に居並ぶ諸侯の中に政宗はいたのだろうか。仙台藩の正史である伊達治家記録には、家光の将軍就任に供奉した上洛から江戸に戻った九月二〇日に「御父子江戸御屋形ニ御着」とあるが、次の記録が一〇月二四日の「公武州府中御鷹場へ御出」で、それまでの一ヶ月間の記録がなく、一〇月一三日の芝口札之辻処刑場に政宗がいたのかどうかは明らかではない。

治家記録には月に三、四件の動静記録があり、一〇月だけ一件というのは不自然で、しかも鷹狩の記録に「御暇仰出サルノ日、幷ニ御帰府ノ日等不知」とある添書は政宗の動静をわざわざ曖昧にする意図さえ見えてくる。

処刑された五〇人の中心人物である二人は、仙台藩を拠点に布教活動をして捕縛された神父で、家光の狙いが禁教に寛容な政宗への見せしめで威嚇だったとしたら、正史に記録がないことこそ、一〇月一三日の処刑場に政宗が立ち合わされていた証しではないだろうか。

アンデリス神父は、大坂の陣で会った後藤寿庵に誘われ、仙台と水沢そして蝦夷で布教活動を、ガルベス神父は、マニラに着いたソテロから政宗宛て書状と贈物を政宗に届け、そのあと磐井で布教活動をしていたが、二人は江戸での布教に呼び戻され、まもなく捕縛された。

二人の仙台領での布教活動を黙認してきた政宗は、二人の火炙りの惨劇を目の当たりに、家光の執念とも言える禁教への不退転の覚悟を思い知ったに違いない。

翌月三日に、小伝馬町牢に残っていた妻子たちであろう婦女子二四人とキリシタンを匿ったとされる一三人が同じ札の辻の処刑場で殉教した。

同日の一一月三日付で仙台藩の江戸詰奉行片倉・大条が、国許の石母田ら四奉行宛てに「上様（家光）之御法度、殊外きつく御座候」と領内の切支丹取締の強化を命じる書状を出状、その年の暮れ、ついに仙台藩はキリシタンの聖地水沢福原の後藤寿庵邸を襲撃、逃亡したカルバリオ神父らが捕えられ広瀬川畔で処刑された。かくて政宗の海外へ向けた夢とキリシタン教国の夢は潰えた。

凄惨な処刑場となった芝口札之辻の小高い丘は、長く不浄の地とされていたが、明和八年（一七七一年）に一空上人が罪人を慰霊するため、丘の中腹に智福寺を桜田元町から移してきた。その智福寺も数度の崖崩れで損壊し、昭和二〇年五月の東京空襲で全焼した。

芝桜の園庭の展望用エレベーターで背後の丘に上がり、眼下で繰り広げられた凄惨な殉教に思いを馳せ合掌した。

いったん田町駅に戻り品川駅から品川プリンスホテル脇の柘榴坂を五分程のカトリック高輪教会に向かった。

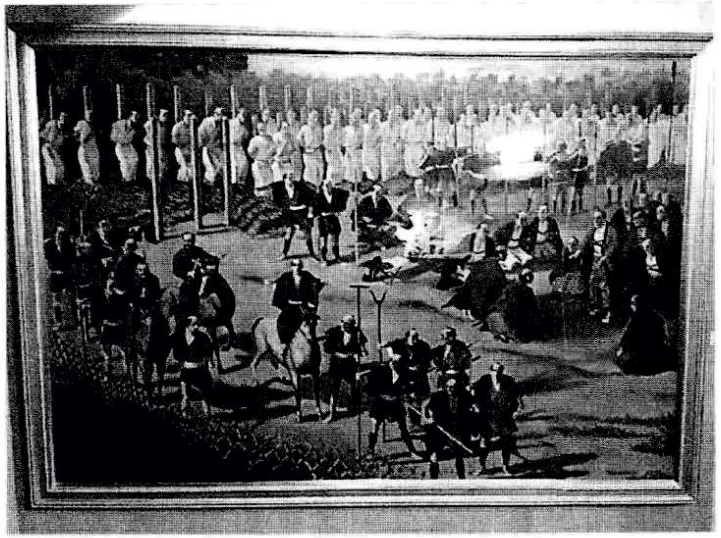
当教会は、江戸の殉教地に近い事から「殉教者の元后聖マリア」と名付けられ、毎年一一月下旬に「江戸の殉教者記念祭」が開催され、来年が四〇〇年祭だという。

教会資料室に札之辻の殉教の模様をイエズス会総会長に宛てたイエズス会士の手紙の内容が紹介されていた。「四七人の信者は、柱に縛られ火がつけられた。二人の神父と原主水は馬に乗せられえたまま、信者たちの苦難と死を見守らなければならなかった。火が消え、それと供に四七人の命も絶えたとき、三人は馬からおろされてそれぞれ柱に縛りつけられた。柱の周りに置かれた薪の束に火がつけられると、キリストの勇敢な闘志たちは互いに言葉を交わし励ましあった。（中略）

アンジェリス神父は、江戸の街の方角に向かって短い祈りを捧げ、不動の姿勢を崩さずにそこに集まっている民衆に最後の言葉を投げかけようとした。人々に熱心に説き勧めていたが、ついにくず折れるように倒れ、ひざまずいてその魂を神の御手にかえした。最後に生き残ったガルベス神父は、その苦しみにもおののくことなく柱に寄り掛かりまっすぐに立ったまま息を引き取った」

教会地下のクリプト入口に一〇〇号はあろう江副隆愛氏の「江戸の大殉教図」が掲げられ、イエズス会士の手紙が伝える殉教の様子が生々しく再現された臨場感溢れる油彩画を前に十字を切り黙祷した。左の写真は、後日再訪して係員の了解を得てカメラに収めた。（完）

江戸の大殉教図　江副隆愛作（令和４年９月１１日撮影）



明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その七）

山本勉

「渋江保交友関係表」、「渋江保関連著書・研究論文一覧表」

はじめに

渋江の出生から没後まで、各時代においてどのような人物と交友関係があったのか、『まんじ一六二号』において「渋江保交友関係表」を掲載したが、この度、交友関係表を見直し改稿したものを再掲する。渋江思想を考える上で、渋江の交友関係を探ることは極めて大きな意義があると考える。

本稿には、「渋江保交友関係表」と共に、「渋江保関連著書・研究論文一覧表」を掲載する。渋江はこれまで多くの研究者が、翻訳・教育・ジャーナリスト・民権・SF・文学等、様々な分野において、それぞれの専門領域から取り上げ研究がなされてきたにも関わらず、渋江保に光が当てられることはなかった。このため、各研究者の貴重な著作や論文が埋もれてしまい研究領域を越えて横断的に渋江保の人物像をとらえることが困難だったようにおもう。

今回、数多くの著作や論文、雑誌等に掲載された渋江関連の資料にあたり、一覧表として掲載する。一覧表としてはまだまだ不十分ではあるが、より完成度の高い一覧表を目指し、たたき台として掲載したい。

渋江保　交友関係一覧表

区分	時代	滞在期間	交友関係
1期	幼少時代（江戸）	1857年7月～1868年4月	渋江抽斎（父）、渋江五百（母）、渋江脩（渋江保、弟）、渋江水木（渋江保、妹）、津軽順承（津軽藩主）、海保漁村（経書）、小島成斎（筆札）、多紀安琢（素問）、海保竹渓（経書）、島田篁村（経書） ※括弧内は渋江が教えを受けた科目 森枳園（渋江抽斎に師事、医家） 漁村塾、塾生（島田重礼・箕作麟祥・鳩山和夫・渋沢栄一・内藤魯一・中村三平・青柳節蔵・尾高長七郎）
2期	弘前時代（弘前）	1868年4月～1871年3月	兼松石居（経書）※括弧内は渋江が教えを受けた科目、下澤保躬（弘前藩士）
3期	第一次修学時代（東京）	1871年3月～1875年1月	尺振八（共立学舎創設者）、志賀直温、島田三郎、首藤陸三、高梨哲四郎、田口卯吉、宮崎八郎、波多野伝三郎※いずれも共立学舎で学んでいる。梅浦精一（共立学舎教員）、加治義方・末松謙澄・天野皎（東京師範学校学友）、フルベック・スコット・ブラウン（教えを受けた外国人英語教師）
4期	浜松時代（浜松）	1875年2月～1879年10月	大江孝文（浜松県、学務課長兼庶務課長）、中西常武（浜松中学校教員） 山田要蔵（教え子）
5期	第二次修学時代（東京）	1879年10月～1881年7月	福沢諭吉・小幡篤次郎・阿部泰三（慶応義塾関係者）、後藤象二郎（大同団結運動演説文作成に渋江保が協力する）、渡辺修・平賀敏・芥川得三・工藤代助・犬養毅・矢田績・安場末喜・坂井次永・神尾金弥・山田要蔵・中西常武・（慶応義塾学友）、金子堅太郎・相馬永胤・目賀田種太郎・鳩山和夫（慶応義塾の万来舎にて法律学の講義を担当する）、藤田茂吉（郵便報知新聞社主筆）、キーリング・ラムバード（教えを受けた外国人英語教師）
6期	宝飯中学校時代（豊川市）	1881年8月～1882年12月	加藤幸三郎・木村永太郎・三輪弘忠・山崎程者（宝飯中学校関係者）、武田準平（進取社副社長）、阿部泰蔵（慶應義塾関係、武田準平実弟）、波多野承五郎（交詢社員）
7期	東京横浜毎日新聞時代（東京）	1883年1月～1885年12月	近藤真琴・藤田潜（攻玉社塾係者）、福沢諭吉・小幡篤次郎・浜野定四郎（慶應義塾関係者）、門野幾之進・鎌田栄吉（慶応義塾教員）、池辺吉太郎・門野重九郎・和田豊治・日比野翁輔・伊吹（藤山）雷太（慶應義塾生）、島田三郎・沼間守一・肥塚龍・青木匡・丸山名政・荒井泰治・矢野次郎・角田真平・高梨哲四郎・大岡育造（東京横浜毎日新聞関係者）、福地桜痴・渡辺安積・関直彦（東京日日新聞関係者）、藤田茂吉・矢野文雄・尾崎行雄（郵便報知新聞関係者）、成島柳北（朝野新聞創設者）、外山正一（教育者）、中江兆民（思想家、ジャーナリスト）、松山棟庵（医師、東京慈恵会医科大学創立者）
8期	静岡時代（浜松市・静岡市）	1885年12月～1890年3月	栗田輝永（静岡大務新聞監督、周智郡領家村犬居銀行創設者）、前島豊太郎（暁鐘新報社主）、前田五門・川上熊吉（函右日報関係者）、斉藤和太郎（静岡大務新聞記者）、竹谷熊吉（周智郡領家村、英学研究所教員）、中江兆民（思想家、ジャーナリスト）、藤波甚助（静岡英語専門学校創立者）、山田一郎（静岡大務新聞記者、ジャーナリスト）、佐野松（妻）、渋江紋（静岡大務新聞記事に渋江保妻君とある）、山路愛山・松本亀治郎・上田敏（教え子）
9期	博文館時代（東京）	1890年3月～1901年	大橋佐平・新太郎・大橋乙羽・坪谷善四郎（博文館関係者）、川崎三郎（ジャーナリスト、著述家、博文館）、松井廣吉（越佐毎日新聞主筆、博文館）、柳井録太郎（日清戦争実記主筆、漢詩人、博文館）、岸上質軒（漢詩人、博文館）根本道明（易学者）、渋江乙女（渋江保三女）
10期	大学館時代～晩年（東京）	1903年～1930年4月	森鴎外、一戸兵衛（陸軍大将）、渡辺修（慶応義塾学友、電気協会会長）、外崎覚（歴史家、漢学者、津軽藩士）、渋江終吉（渋江脩長男）、杵屋勝久（渋江保、姉、長唄の師匠）、飯田巽（津軽藩士、日本郵船監査役）、劉成禹（中国人）、上村売軒（漢詩人、ジャーナリスト、三才社創設）、柄沢正義（神誠館）、山路愛山（教え子）

渋江保関連著書並びに研究論文一覧表

（一）飯田宏『静岡市の英学　四静岡英語専門学校』（静岡県英学史　講談社一九六七年）

（二）板垣公一『鴎外史伝の成立『渋江抽斎』の意義』（鴎外史伝の成立『渋江抽斎』の意義　日本文芸研究　一九六九年）

（三）板垣公一『森鴎外　その歴史小説の世界』（『森鴎外　その歴史小説の世界』中部日本教育文化会　一九七五年）

（四）板垣公一『『渋江抽斎』の世界像（一）―渋江保の位置―』（名城大学商学会　名城商学別冊二十八　一九七九年）

（五）板垣公一『『渋江抽斎』の世界像（二）―矢嶋優善の位置―』（名城大学商学会　名城大学人文紀要二十一、二十二　一九七九年）

（六）板垣公一『『渋江抽斎』論―渋江五百の人間像―』（名城大学商学会　名城商学別冊二十九　一九八〇年）

（七）板垣公一『『渋江抽斎』論考―抽斎の後裔達の位置―』（名城大学商学会　名城大学人文紀要二十三、二十四　一九八〇年）

（八）板垣公一『森鷗外の史伝―渋江抽斎の人間像―』（名城大学商学会　名城商学別冊三十　一九八〇年）

（九）板垣公一『渋江抽斎の周辺―貞固・忠兵衛・栄次郎・宗右衛門の位置―』（名城大学商学会　名城大学人文紀要二十五、二十六　一九八一年）

（十）板垣公一『森鴎外の史伝『渋江抽斎』論』（森鴎外の史伝―『渋江抽斎』論　中部日本教育文化会　一九八一年）

（十一）板垣公一『翻刻資料「抽斎親戚並門人単」（渋江保筆）〈校訂〉』（名城大学商学会　名城大学人文紀要五十七集　一九九八年）

（十二）板垣公一『翻刻資料『抽斎歿後』（校訂）―『抽斎歿後　単』渋江保（抽斎歿後の渋江家と保　附五百）―』（名城大学商学会　名城商学別冊四十七　一九九八年）

（十三）板垣公一『『渋江抽斎』と「抽斎歿後」（論説）』（名城大学商学会　名城商学別冊四十八　一九九九年）

（十四）今井　宏『第五章「クロムウェルの木下」木下尚江における革命の幻影』（明治日本とイギリス革命　筑摩書房　一九九四年）

（十五）一戸務『鴎外作「渋江抽斎」の資料』（文学一巻五号　岩波書店　一九三三年）

（十六）伊藤秀雄『第十一章乱歩の先覚者　菊池幽芳、暁風山人、羽化仙史』（明治の探偵小説　双葉

社　二〇〇二年）
（十七）稲垣達郎『森鷗外の歴史小説』（森鷗外の歴史小説　岩波書店　一九八九年）
（十八）稲田雅洋『渋江保伝（上）幼少期から義塾入学以前まで』（境創刊号　佐々木啓之　一九八三年）
（十九）稲田雅洋『渋江保伝（上）（中の二）自由民権時代・その一』（境第二号　佐々木啓之　一九八四年）
（二十）内田魯庵『第五著述に於ける心得並に出版者待遇法○幸福先生の操觚事業○外山先生○著述家たらんとする者は幸福先生を学ぶべし』（文学者となる法（名著復刻全集）日本近代文学館　一九七二年）
（二十一）梅谷文夫「渋江抽斎語注」（森鷗外全集第四巻　筑摩書房　一九七三年）
（二十二）英語青年『片片録　渋江保翁逝く』（英語青年第六十三巻第四号（英語青年復刻版）研究社　一九七八年）
（二十三）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（一）』（易学研究六月号　紀元書房　一九五八年）
（二十四）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（二）』（易学研究七月号　紀元書房　一九五八年）
（二十五）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（三）』（易学研究八月号　紀元書房　一九五八年）
（二十六）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（四）』（易学研究九月号　紀元書房　一九五八年）
（二十七）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（五）』（易学研究一月号　紀元書房　一九五九年）
（二十八）大田兼雄『羽化渋江保の著作』（日本古書通信　日本古書通信社　一九六三年）
（二十九）大野寿子・早川芳枝「'Hexe'が「魔女」と出会うとき　近代日本における翻訳をめぐる一考察」（ドイツ文学　日本独文学会　二〇〇八年）
（三十）小川貫道編『漢学者伝記及著述集覧』（漢学者伝記及著述集覧　名著刊行会　一九七七年）
（三十一）桶谷秀昭『解説』（両像・森鷗外　文春文庫　一九九七年）
（三十二）小泉浩一郎『渋江抽斎補注』（日本近代文学大系　森鷗外集Ⅱ　角川書店　一九七四年）
（三十三）小泉浩一郎『渋江抽斎解題』（鷗外歴史文学集第五巻　岩波書店　二〇〇〇年）

（三十四）小泉浩一郎『渋江抽斎人名注』（鷗外歴史文学集第五巻　岩波書店　二〇〇〇年）
（三十五）近藤恒次『三河における明治前期の郡立中学校　愛知県宝飯中学校について』（愛知大学綜合郷土研究所紀要第二十一輯　愛知大学綜合郷土研究所　一九七六年）
（三十六）佐々木充『『澀江抽齋』論：自律する人間への夢』（千葉大学教育学部研究紀要第一部　千葉大学　一九九三年）
（三十七）佐藤孝巳『渋江保の晩年』（英語青年　研究社　一九七二年）
（三十八）沢谷昭次『『英人強賣鴉片記』をめぐって』（山口大学教養部紀要第十七巻　山口大学教養部　一九八三年）
（三十九）田崎哲朗『鴎外、その視座の一面『渋江抽斎』その百二、百三を手がかりに』（愛知大学文学論叢第六十六輯　愛知大学文学会　一九八一年）
（四十）長山靖生『第二章鴎外、オカルト、秩序　一鴎外の影法師』（鴎外のオカルト、漱石の科学　新潮社　一九九九年）
（四十一）長山靖生『第2部　怪物製造人発掘　渋江保・明治のオカルトブームと文豪の謎』（怪獣はなぜ日本を襲うのか？　筑摩書房　二〇〇二年）
（四十二）長山靖生『第六章森鷗外が畏れたメスメリスト』（奇想科学の冒険　平凡社　二〇〇七年）
（四十三）長山靖生『第六章三大冒険雑誌とその時代　江見水蔭、羽化仙史など　忘れられたSF作家』（日本SF精神史　河出書房新社　二〇〇九年）
（四十四）長谷川泉編者『森鷗外『渋江抽斎』作品論集成』（近代文学作品論叢書十三　大空社　一九九六年）
（四十五）藤元直樹『渋江保研究　洋学と漢学の交錯』（博士論文　東京大学大学院人文社会系研究科　文化資源学研究室　二〇〇三年）
（四十六）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第六十号　国立国会図書館　二〇〇四年）
（四十七）藤元直樹『師範学校第一期生渋江保「既往の夢（羽化懐旧談）」の再評価に向けて』（文化資源学　文化資源学会　二〇〇四年）
（四十八）藤元直樹『渋江保の著作活動—博文館・大学館・三才社をめぐって　歴史部会発表』（日本出版学会歴史部会　二〇〇五年）
（四十九）藤元直樹『文芸翻訳家としての渋江保』（図説翻訳文学総合事典全五巻　ナダ出版セン

ター　二〇〇九年）

（五十）松木明知編『森鷗外「渋江抽斎」基礎資料』（森鷗外「渋江抽斎」基礎資料　第86回日本医史学会　一九八八年）

（五十一）松木明知『「渋江抽斎の嗣子「保」（成善、道陸）の生年と名について」』（鷗外九〇号　森鷗外記念会　二〇一二年）

（五十二）松崎欣一『福沢書簡に見る地方名望家の軌跡伊藤要蔵と福沢諭吉』（近代日本研究第十八巻慶應義塾福澤研究センター　二〇〇一年）

（五十三）松本　茂『犬居（領家）村時代の渋江保　『静岡大務新聞』の記事による』（鷗外一一一号　森鷗外記念会　二〇二二年）

（五十四）松本清張『両像・森鷗外』（両像・森鷗外　文春文庫　一九九七年）

（五十五）宮武外骨『地獄耳』（スコブル第八号　奇抜雑誌社　一九一七年）

（五十六）村岡　功『澁江保の事蹟』（鷗外七二号　森鷗外記念会　二〇〇三年）

（五十七）村山鉄次郎『わが国の体操の歴史一特に昭和初期までの器械体操について（その一）明治時代の体操の展開』（明治大学教養論集通巻二二〇号　明治大学　一九八九年）

（五十八）森潤三郎『鷗外森林太郎』（鷗外森林太郎　丸井書店　一九四二年）

（五十九）矢野峰人『邦文英文学史の回顧―渋江保の「英国文学史」』（比較文学　日本比較文学会　一九五八年）

（六十）山崎一穎『第四部（鷗外から渋江保宛書簡『渋江抽斎』その百十二）の読解のために『伊沢蘭軒』の研究史素描　ほか）』（森鷗外・歴史文学研究　桜楓社　二〇〇二年）

（六十一）山崎一穎『七渋江保』（鷗外ゆかりの人々　教文堂　二〇〇九年）

（六十二）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（三河最初の中学校　豊橋文化協会　一九八一年）

（六十三）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の著述活動　出版物万国戦史を中心に』（佛教大学大学院紀要文学研究科篇第四十三号　佛教大学大学院　二〇一五年）

（六十四）山本　勉『静岡黎明期の英語教育と渋江保』（中国言語文化研究第十七号　佛教大学中国言語文化研究会　二〇一七年）

（六十五）山本　勉『渋江保思想の原点を探る　自由民権運動期を中心に』（中国言語文化研究第十八号　佛教大学中国言語文化研究会　二〇一八年）

（六十六）山本　勉『自由民権期に生きた渋江保　宝飯

中学校長時代を中心に』（三河地域史研究第三十号　三河地域史研究会　二〇一八年）

（六十七）山本　勉『特別寄稿　宝飯中学校と渋江保』（企画展　三河ではじめての宝飯中学校（図録）豊川市桜ヶ丘ミュージアム　二〇一九年）

（六十八）山本　勉『清末に漢訳万国戦史が翻訳出版された背景と万国戦史の意義』（中国言語文化研究第二十号　佛教大学中国言語文化研究会　二〇二〇年）

（六十九）山本　勉『豊橋市美術博物館所蔵資料　加藤幸三郎宛渋江書簡』（三河地域史研究第三十一号　三河地域史研究会　二〇二〇年）

（七十）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の一生（その二十四）渋江晩年期を貫く思想』（まんじ一五九号　三戸岡道夫　二〇二一年）

（七十一）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の足跡を訪ねて（その一）渋江の英語教育法』（まんじ第一六〇号記念号　三戸岡道夫　二〇二一年）

（七十二）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の足跡を訪ねて（その二）渋江の共立学舎時代』（まんじ一六一号　三戸岡道夫　二〇二一年）

（七十三）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の足跡を訪ねて（その三）渋江保の交友関係表、家系図』（まんじ一六二号　三戸岡道夫　二〇二一年）

（七十四）山本　勉『渋江保の戦史思想と『万国戦史』の意義』（中国言語文化研究第二十二号　佛教大学中国言語文化研究会　二〇二二年）

（七十五）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の足跡を訪ねて（その四）渋江保の経歴・著作・社会状況一覧表（幼少時代から静岡時代）』（まんじ一六三号　三戸岡道夫　二〇二二年）

（七十六）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の足跡を訪ねて（その五）渋江保の経歴・著作・社会状況一覧表（博文館時代から晩年）』（まんじ一六四号　三戸岡道夫　二〇二二年）

（七十七）山本　勉『明治時代の著述者渋江保の足跡を訪ねて（その六）『渋江抽斎』における渋江保経歴叙述上の矛盾とその影響』（まんじ一六五号　三戸岡道夫　二〇二二年）

（七十八）横田順彌『大特集　二十世紀日本の異能・異才一〇〇人第四巻第七号「渋江抽斎の息子は宇宙SF、易学の先駆」』（月刊Asahi朝日新聞社　一九九二年）

（七十九）横田順彌『SF、怪奇、冒険小説に四つの名前を持つ男』（朝日ワンテーママガジン⑰　朝日新聞社　一九九三年）

（八十）横田順彌『吾輩もSF作家である』（明治時代は謎だらけ　平凡社　一九九二年）

（八十一）横山泰子『第五章手品師は西洋を目指す七渋江保と妖怪手品』（妖怪手品の時代　青弓社二〇一二年）
（八十二）李冬木『涩江保译『支那人气质』与鲁迅（上）』（関西外国語大学研究論集第六七號　関西外国語大学　一九九八年）
（八十三）李冬木『羽化涩江保译『支那人气质』与鲁迅（下）』（関西外国語大学研究論集第六八號　関西外国語大学　一九九八年）
（八十四）李冬木『涩江保译『支那人气质』与鲁迅（上）』（北京鲁迅博物馆编『鲁迅研究月刊』第三期　北京鲁迅博物馆　一九九九年）
（八十五）李冬木『羽化涩江保译『支那人气质』与鲁迅（下）』（北京鲁迅博物馆编『鲁迅研究月刊』北京鲁迅博物馆　一九九九年）
（八十六）李冬木『『支那人气质』与鲁迅文本初探』（関西外国語大学研究論集第六九號　関西外国語大学　一九九九年）
（八十七）李冬木『"乞食者"与"乞食"—鲁迅与《支那人气质》関系的一项考察』（佛教大学『文学部論集』九〇号　佛教大学　二〇〇五年）
（八十八）李冬木『"从仆"、"包依"与"西崽"——鲁迅与《支那人气质》笑系的一项考察』（佛教大学『文学部論集』九〇号　佛教大学　二〇〇六年）
（八十九）李冬木『鲁迅怎样「看」到的「阿金」?—兼谈鲁迅与『支那人气质』关系的一项考察』（北京鲁迅博物馆编『鲁迅研究月刊』　北京鲁迅博物馆　二〇〇七年）
（九十）李冬木『鲁迅はどのように〈阿金〉を「見た」のか?』（吉田富夫先生退休記念中國學論集　汲古書院　二〇〇八年）
（九十一）李冬木『涩江保《支那人气质》与鲁迅（上）鲁迅与日本书之二』（鲁迅の研究「国民」と「進化」　佛教大学通信教育部　二〇一〇年）
（九十二）李冬木『涩江保《支那人气质》与鲁迅（下）鲁迅与日本书之二』（鲁迅の研究「国民」と「進化」　佛教大学通信教育部　二〇一〇年）
（九十三）李冬木『『进化』与『國民』』（鲁迅精神史探源　台北　秀威资讯科技有限股份公司　二〇一九年）
（九十四）李冬木『"国民性"话语的建构　以鲁迅与《支那人气质》之关系为中心』（亜洲概念史研究第七卷　商務印書館　二〇二一年）
（九十五）鷲尾義直編『第二章苦学時代第六節慶応義塾時代の回顧其頃の犬養さん』（犬養木堂伝上巻　原書房　一九六八年）

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）2
神戸から来た男（六）

匠　克仁

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
牛島崇　アサヒ信用保証回収業務委託先　元マル暴
御木武利　アサヒ信用保証会長
棚橋博久　アサヒ信用保証債権管理部長

〈時系列〉

参考第一話より
一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
第二話（本編）
二〇一八年五月からの数週間

6　ムヘ・マタドール（女闘牛士）

弓本良香は牛島崇に対する方針を決めた。牛島との業務委託は切る、つまり、契約を解約する。
今回の取り立ての同行中に、スマホで全ての会話を録音していた。三日月蹴りや腕を折ろうとしている場面は録画もしていた。
解約するための理由に充分である。牛島は回収するところを見せても解約しないとの自信があったのだろう。
（随分と舐められているわ）
しかし、債権管理部が牛島に頼り切っているのは事実である。牛島との契約が無くなれば、債権管理部が崩壊してしまう。この部は利益に大きく影響を与えるだけにアサヒ信用保証の経営も傾きかねない。
牛島について良香はもう少し調べることにした。

牛島崇の名前でインターネットを検索すると、格闘技選手としての多くの情報が集まった。

かつて『ＭＭＡ甲子園』というテレビの企画があった。ＭＭＡとは総合格闘技の略称である。甲子園とあるが、高校野球からの借用で、実際は東京の会場で格闘技イベントの一つとして行われた。

ＭＭＡは金的、目潰し、頭突き以外の全ての攻撃を認めるルールである。現在のＭＭＡルールでは団体や試合により他にも禁止技がある。

全国の高校生を対象に北海道から九州までの８ブロックで代表選手を選び、一日のトーナメントで戦う。

他のブロックでは高校三年生が出場したが、関西ブロックでは当時十五才の高校一年生の牛島が選ばれた。

牛島はその『ＭＭＡ甲子園』の三試合に勝利し、優勝したのである。

高校生なので安全のためヘッドギアなどの防具を着けた試合であった。しかし、初戦で相手の肋骨を折り、準決勝では、あごの骨を砕いた。

決勝戦は腕ひしぎ十字固めで相手の腕をへし折る瞬間が生放送で全国ネットで放映された。牛島の対戦相手全員が病院送りとなった。

ＭＭＡ甲子園は危険とされ、その後は開催されなかった。一度きりの幻のイベントとなった。

試合後すぐに牛島は高校一年生でプロの総合格闘技選手としてデビューした。その後、東京の私立大学に進学して、拠点を東京に変えて、試合を重ねることになった。

十代で日本のチャンピオンになり、日本人では戦う相手がいなくなった。海外から対戦相手を招くが、勝ち続けた。

日本人重量級で初めてＭＭＡ世界チャンピオンにもなったが、突然に引退を発表した。牛島本人が二十二才で大学四年の時である。本人は引退理由を言わなかった。

毎回の激しい試合内容から網膜剥離を思い、失明の怖れがあり引退することになった、というのが通説らしい。

しかし、別の理由を指摘する記事があった。それは脳下垂体腫瘍の摘出手術を受けるから、というものであった。脳下垂体腫瘍の手術には開頭手術と鼻からの内視鏡手術がある。手術を受けることで総合格闘技はできなくなったという内容であった。

脳下垂体腫瘍の症状の内の一つは成長ホルモンが異常に増え、巨人症や先端巨大症になる。牛島は成長ホルモンを過剰に分泌して、巨人症になったと書いていた。

成長ホルモンが過剰に分泌しているときに筋トレをすれば、筋肉は異常に発達する。ドーピングしたボディビルダーのような体が自然に出来上がる。

手術が成功して総合格闘技に復帰できたとしても、今まで自然のドーピングで強くなっていたので、これからは勝てないだろうと批判的な記事であった。

ゴシップ雑誌の記事がネットにあるようで信憑性は低いが、こちらの方が真実でないかと良香は思った。

服を着ていても牛島の肉体が常人離れしたものであると分かる。また、牛島の顔は傷だらけで目立たなかったが、下あご先端がとがっていた。

良香はしばらく思案していたが、前職から利用している調査会社に電話をした。中央リサーチの前園専務である。

前園は大学で同じ語学クラスで、それ以来の関係である。この会社と京亜クレジットと取引も良香の個人的人脈で始まった。社交辞令なしの本音でお互いに話せる関係になっている。

「調べて欲しい人物がいるの。牛島…」

良香がタカシと言い終わる前に前園が答える。

「牛島崇ですか」

「彼を知っているの」

「知っているも何も。三つの世界で超有名人ですよ。一つはプロ格闘家として、一つはマル暴として、一つは我々同業者間でトップクラスの人物として」

牛島は個人事業主でなく、調査会社と探偵事務所に所属している。その事実を良香は思い出した。

「だが、もし新規取引を考えているなら、止めておいた方がいい」

前園の即答に良香は戸惑いながら答える。

「反対よ。債権回収の委託先だけど、取引を切ろうと思っているの。でも取引を止めた方がいいというのは、なぜなの」

「牛島は確かに凄腕だが、明らかに法を犯している。元マル暴の警察関係では有名人だから、見逃されているかもしれないが。それも今後は続かない。あんたのところもそんな違法的な行為で止めると言ってるんだろ」

前園の指摘は正しかった。

「その通りよ。新規でないので、一日で分かる情報だけで結構よ。格闘家の経歴はネットで調べたので要らない」

良香の依頼に前園が快諾した。

「しかし、牛島が抜けると、現場は大変だな」

前園がつぶやいたところへ良香はもう一つの依頼をするのであった。

「あなたの会社に警察経験者がいるでしょう。契約者に前科者やヤクザがいるので、それに対抗できる人物は絶対に必要なの。誰か推薦できる社員はいないの」

「警察関係は三人いる。その内の一人は捜査第一課で殺人を扱っていたから、前科者やヤクザでびびりはしない。しかし、牛島レベルの仕事はできないから、無理だ。それに、うちの会社は債権回収の営業許可を持っていないから不可能だ」

前園の言葉にも良香は諦めない。

「そんな先に取り立てに行く際の同行してもらえるだけ

でいいの。牛島の役割を全部、引き継いでもらうつもりは無いので、検討して」

「分かった。本人には話をしておく。念を押すが、同行しても債権回収はできないからな」

前園が答えると良香は安心して電話を切った。こうして牛島切りの対策を進めていった。

京亜クレジットの人事部に電話して、回収のベテランを数名を出向してくれないか、と打診した。

入居初回からの滞納者はコールセンターでなく、債権管理部の担当者からさせるように指示をしようと良香は思った。

棚橋部長は人事部が債権管理部のやり方に口出しするなと抵抗しそうだが、牛島の指摘だといえば従うだろうと考えた。

翌日の昼前には前園からの報告書が届いた。一日で分かる情報で良いと言ったが、かなり詳細な内容であった。

それだけ牛島が有名人だということであろう。

牛島は独身だが、家族の情報から始まっていた。両親は健在で、兄と弟がいる。

（あんな化け物がもう二人いるの）

牛島崇が三人兄弟の次男というのが、良香にとって少し意外であった。

牛島の父親も母親も兵庫県警察に勤めていた。

（総合格闘家を続けられなくて、警察に入ったのではなく、最初から警察志望だったのかも）

兄は神戸市役所、弟は兵庫県立高校の先生として現在も勤務している。

（意外と公務員一家だったのね）

父親が柔道有段者で、母親が空手有段者だったので、幼い頃から柔道と空手を習った。そのことが将来の総合格闘技選手となることに影響を与えた。

両親と兄・弟の四人とも平均身長で、格闘技は中軽量級で活躍した。家族で牛島崇の一人だけ異常に体格が大きく発達していたと報告されていた。

（やはり、脳下垂体腫瘍による巨人症の可能性があるということね）

格闘家の話は不要と良香が言ったので、それ以上のコメントは無かった。

大学卒業後に兵庫県警察に入った。最初から神戸署の暴力団対策第一課に配属され、退職するまで続く。（いわゆるマル暴である。当時は兵庫県のみ捜査第四課でなく、暴力団対策第一課・第二課となっていた）

警察組織で一つの署の同じ課に居続けて、異動をしないでいることはあり得ない。しかし、牛島は余人をもって代えがたし、ということで神戸署暴対から離れることは無かった。

そのため、新宿署の鮫島の『新宿鮫』のように、神戸署の牛島で『神戸牛』と呼ばれた。

退職するまで二十年間、神戸署のマル暴であった。本人に出世志向は無かったらしく、一度も昇任試験を受けていない。試験を受けなかったが、実力だけで警部補になっていた。

報告書には牛島が退職の原因となった事件が記されていた。暴力団抗争に巻き込まれ、牛島の部下が銃殺された。牛島は両方の暴力団員の幹部クラスを半殺しにした上に、部下を銃殺した側の組長を廃人にしたという。

客観的に事実のみが記されていたが、読んでいる良香の脳内では映画の一シーンのように展開していた。

「てめえ、ぶっ殺すぞ」

（牛島の口癖だから、当然のセリフね）

報告書では、組長に馬乗りになった牛島が、奪った拳銃の銃口を相手の口にねじ込んだとあった。

「てめえ、拳銃を向ける側だけしか経験していないな。向けられる側の気持ちになれよ」

良香の妄想の中の牛島が言った。

「ロシアンルーレットだ」

牛島は弾倉から残った銃弾を抜くと、一発だけ装填した。シリンダー式の弾倉を回転させると、再び銃口を相手の口の中にねじ込んだ。

組長は泣きながら命乞いした。

「てめえに部下を殺された気持ちが分かるか。死にたくなければ、お前の命の代りに部下の命を差し出せ」

すると、組長はあっさり若頭の名前を挙げた。

「オヤジ、それは無いぜ」

隣に倒れていた若頭がうめく。牛島に両足をへし折られていた。牛島は組長の口に拳銃を突っ込んだまま、若頭の元へ引きずった。

そして、その状態の拳銃を若頭に握らせたのである。

若頭は組長の上に馬乗りになった。

「オヤジ、裏切りやがって」

牛島は10からカウントダウンをした。牛島が0と大声で叫ぶと同時に、若頭が引き金を絞った。組長は奇声をあげたが、空砲であった。

「運がいいな。10・9…」

牛島がカウントダウンを再開する。再び0と同時に若頭が引き金を絞ったが、空砲であった。それが五回繰り返した。相手の組長は失禁し、失便しながら、命乞いをする。

「次が六回目だ。確実に弾丸が発射される。一回目で済んだ方が楽に死ねたのにな。俺だったら一回で許したが、おたくの若頭は六回撃たないと承知しないようだ。10・9…」

0の合図で若頭が撃ち、組長の頭蓋骨が吹っ飛び…とはならなかった。

実は、牛島は弾倉に装填した一発の銃弾を再び抜き、空にしていた。銃口を口の中にねじ込んだのは、抜くと

きに死角にするためである。若頭も空砲だと分かっていた上で続けていた。

「これでお前の組も終わりだな」

牛島は若頭に言った。

……というところで、良香の頭の中の映画のシーンが終了した。良香は妄想癖がある。

しかし、実際にこのようなセリフがあったかは別として、ロシアンルーレットは事実だったらしい。

周りには牛島に半殺しにされて動けなかったボディガードや幹部が他にいて、この光景を目撃していた。

組長は発狂して、精神病棟へ入院後に死亡した。その後、その暴力団は解散している。

部下を殺された牛島の復讐を称賛する声が多かった。しかし、兵庫県警は逸脱行為として、牛島は懲戒処分となった。さらにマル暴から捜査第一課への異動を命じた。

この処分を不服とした牛島は上層部に反抗し、結局は自ら退職を決めた。

東京に移転し、総合格闘技の先輩の探偵事務所に入った。そこで、その先輩と共同で株式会社ＭＭＡコンサルティングを設立した。ＭＭＡつまり総合格闘技選手として知名度がある牛島を意識した社名である。

主となる業種は信用調査と債権回収である。しかし、トラブルは何でも受け付ける様になった。

債権回収業は法務省の営業許可が必要である。営業許可は牛島も個人で持っているのでなく、ＭＭＡコンサルティングで持っている。

アサヒ信用保証も牛島個人としてでなく、ＭＭＡコンサルティングの社員として契約している。

ＭＭＡコンサルティングでは、浮気調査のような軽い仕事は別の社員が担当した。牛島は難しい案件をもっぱら受け持っている。

行方不明者の調査などでは本人を確保するなどかなり成果を挙げていた。ボディガードで活躍した実績もあった。

（自分の用心棒になったら、心強いわね）

警察で自殺と判断された事件で、親族の依頼を受けて他殺を証明した。その上で真犯人を探し出して。警察に突き出した。

（牛島の武勇伝ばかりみたいね。追放しにくくなるじゃないの）

民事不介入として警察が取り合ってくれなかったヤクザの取立を牛島が解決した。そのような事例もあった。

（これって弁護士法違反でしょ）

相手がヤクザといえ、警察が扱えない金銭トラブルを解決する資格は弁護士と認定司法書士だけである。

実際にはＭＭＡコンサルティングには非常勤の弁護士がいるので、その人物が解決した形を取っているだろう。そのように良香は推察した。

良香が報告書を読み上げたタイミングで前園から電話があった。

「報告書を読んだか。それでも牛島との取引を解消するのか」

「当たり前でしょ。当然、牛島は切るわ。あなた自身が取引しない方がいいって言ったじゃないの」

「それは新規の話だ。一度でもヤクザに頼みごとをしたら、その後に関係を断ち切るのは不可能だ。牛島はヤクザ以上の人物だ。そんな人物とズブズブに深い仲になっている会社が取引解消しようとして、何が起きるか分からないぞ」

前園の警告に良香は独り言のようにつぶやく。

「面白そうね」

「相変わらずだな。大学時代と変っていない」

前園の言葉を聞いて、良香のゼミ仲間の在河弁護士の言葉を思い出した。「相変わらずたくましいわねえ」であった。

「相変わらずって何よ。まさか、たくましいって思っていたの」

（学生の頃の私は純粋可憐な乙女だったはずなのに）

「いや」

前園の否定で、在河と同じ考えのわけがないと良香は思い直した。

「相変わらず男勝りだな、と思った」

（おとこまさり…。あなたって大学生の時からそう思っていたの）

「今は仕事で男性社員の上の立場にいるけど、大学時代はそんなことなかったわ」

「そうかな。コンパの席で肩を触ってきた男子に思いっきりビンタをしたのは誰だっけ」

（誰って、私なの。そんな記憶はないけど）

良香は都合の悪い記憶は忘れる癖がある。

「まさか牛島と闘う女性が現れるとは思わなかった。君はまさにムヘ・マタドールだね」

前園と良香がいた語学クラスはスペイン語であった。

「ムヘ・マタドール…って女闘牛士ね」

動物愛護主義的な考えを持っている良香としては不愉快な例えであった。闘牛なんて世界から廃止すべきと思っているのに闘牛士に例えられたのである。

「気分を害したようだな。嫌われついでに言っておく。実際にスペインでは闘牛士が闘牛に殺されたことがある。忠告しておく。闘牛に殺されないためには闘牛士にならないことだ」

前園の報告が送られた日の夕刻に牛島の件について、良香は御木武利会長に報告した。名刺の件から説明し、牛島の音声や映像を見せ、前園の報告書を渡した。

「ということで牛島との取引は切ります」

良香が結論を伝えると、御木は手で制して答える。

「待て。こいつは使える。これだけできる奴を手放すのはもったいない。困るのは会社の方だ」
牛島が御木の好みそうな人物なのは予想通りであった。捜査第一課の刑事だった人物に同行してもらう話や回収のベテランの出向などを良香は説明した。
「それに今回の件は、会長と京亜クレジットの権力拡大を図る絶好の機会です」
アサヒ信用保証は東西信販から京亜クレジットが買収したが、買収時の条件でもあり、会長以外の役員はそのまま残っている。そのため、両社の間で勢力争いをしていた。
「債権管理部の担当は副社長です。役員会議の席で牛島の件で副社長ひいては東西信販派の管理責任を御木会長に追及して欲しいのです」
良香は牛島の件を会長が好きな権力闘争の話にすり替えて続ける。
「そして、会長が債権管理部を担当して欲しいのです。そうすれば、会長と京亜クレジットの権力を広げていくことになります」
良香の提案に御木は満足そうにうなずいた。
「牛島の件で副社長の担当を外しておきながら、後任の俺が牛島を使っているとまずいな。よし、牛島は切ろう」
こいつは使えると言っておきながら、自分の利益になると考えると、簡単に裏切る。
「役員会議っていっても、トップは俺だ。次の役員改選に備えて既にゴマスリもいる。俺が恫喝したら、これくらいは通るさ」
御木は時代劇の悪代官を思わせる人相で笑ってから、つぶやく。
「首切り姫の牛首切りか」
(相変わらずセンスの無い表現ね。女闘牛士の方がまだましだわ)
良香は内心で毒づいた。
「俺がスペインで見た闘牛場は、最後は牛の首を切り落としていた。そのグロテスクな国民性は異常だよ」
(そんな野蛮な闘牛場へ行くあんたが異常でしょ)
「牛島の首を切ると、何か波乱が置きそうだな。首を切られて、黙って泣き寝入りする奴じゃない。俺を裏切れば悲惨な目に会う、と見せしめにされるかもな」
御木が予言するまでもなく、良香も牛島との契約解除で一騒動は起きるだろうと覚悟はしていた。本心では身の危険を感じていたのである。
「返り血を浴びないように、その辺はうまくやっておけ」
御木は、いつものように曖昧な指示をした。トラブルになったら、的確な助言をしたが、部下が守らなかったと責任逃れをする。
「イッツ・ショータイム。牛首切りショーの始まりだな」
【注】神戸署という警察署は現実の日本に存在しません。

字・字・字・字・字……字その2

(没原稿の呪い編)

匠　克仁

『字・字・字・字・字……字』を前号に書いた。他にも、二字目が字の文を書いたが、没にした方が多い。今回は『字・字・字・字・字……字』の続編みたいだが違う。『字・字・字・字・字……字』が一番搾りに例えると、『字・字・字・字・字……字その2』は二番煎じである。『字・字・字・字・字……字その2』では長すぎるので、『字2』と省略しよう。バンドのU2みたいで格好いい。『字2』は二番煎じと書いたが、出がらしみたいである。二字目を字にしたが、苦しい文章ばかりである。実は、『字2』は前作で没にした原稿でできているのである。『字2』をオクラ入りにしないで、発表する理由がある。『字2』に限らず、ぼくは全ての作品において、原稿の一字一字に命を吹き込んで書いているつもりである。その字が命を宿したが採用されず没原稿となった。没原稿の字が成仏できず呪いをかけて悪夢を見せる。ぼくはよく字が出てくる夢を見る。執筆の途中で眠ると、睡眠中に字の続きが出てくるのである。このように寝ている間に字が思い浮かぶのが睡眠執筆法である。通常の場合なら字がパソコン画面にあり、ぼくがキーボードで次の文や字を打っている。おかげ様で、夢の中で思いついた文や字を使ったこともある。最近の夢ではパソコン画面上の字が3Dのように浮き出し画面からこぼれ落ちた。その字をぼくは慌てて拾おうとするが、滝のようにあふれて字は全て抜け落ちて原稿が白紙になる。そんな怖ろしい字の夢を見た。その次の夢では、パソコンの画面上から字が機関銃の弾丸のように飛んでくるのである。ぼく

は字の弾丸で一瞬で鉢の巣状態になるのである。その次の字の夢では出てきた字が岩石のように巨大化し、ぼくは字の固まりで押し潰されるのである。そのような悪夢の字の呪いを解くため『字2』を発表することにした。

字について、ぼくはかなりの頻度で伏字を使用する。伏字は前号も肛☆として使った。原稿の品性を保とうと伏字を使うのだが逆に品性下劣におとしめている。さて伏字は伏せ字とも書く。この原稿で伏字と伏せ字を使って字の位置をそろえようと思った。しかし、せこいので伏字で統一する。その他の伏字の例を以下に既述する。

伏字1　○○『左・右・左・右・左……右』（164）

数字は、まんじの掲載号を表している。以下同じである。

伏字を一個にし睾○にしようかと十日ほど悩んだが、二文字とも○○にした。これは左玉と右玉を上下に並べて文字で画像を表現するという深い意味があった。○が丸の字を伏せるのが気に入って、睾○も捨てきらなかった。

伏字2　『ちんちくがん』の説明で、チン（三字目を○の字で伏せた）＋乳首＋顔の組合せである。（147）

伏字2は四文字で四文字目だけ伏字にしようか悩んだ。

伏字にする前に『ちんちくがん』は登場する。（135）

伏字にせず、ちんちんと書いていた。その三年でぼくは伏字を使う奥ゆかしさを学ぶほど成長したのであろう。

伏字2の『ちんちくがん』とは、ぼくのホムンクルスを六字で表現したのである。ホムンクルス人形は、小人が文字通りの意味だが脳に比例して各部位を増減した人形。文字通りの小人は脳に繋がる各部位を描いて例えたもの。

文字で説明するのは困難なので、ネットで見て下さい。

伏字3　P……煩悩くん　放送禁止用語なので、ピーと伏字としてPを使用した。（162）

伏字4　便秘で●●●がつまっている（128）

伏字5　食●療法は…変態でない最新医学の治療法

伏字を○でなく●にしているのがぼくらしい（136）

伏字6　肛○性×（141）

伏字7　○○は金メダルを2個もぎ取ったが性犯罪で文字通り金2個をもぎ取られる…（138・五輪柔道）

伏字8　○○○銀行…○○○石炭…出向（144）

伏字9　盲（めく×）…は、差別である（163）

伏字9続き　ぼくは…あき×くらと言われた。（同右）

伏字A　被差別■■（131）

伏字B　△□□□1本につき○○が2個（135）

伏字C　ぼくの△□□□と○○の裏－－を…※※※…

伏字だらけで活字にできない文もあった。（128）

字（特に同じ字）の繰返しをぼくはよく使う。仮に、

繰字として紹介する。造語なので、前号は全没にした。

繰字1　太ももももももの肉（159）さて、この

繰字1は、ももくる（下腿筋）三年、かし（下肢）八年の字との組合せで書いた。合せネタで無ければ没である。

繰字2ちちちちちのちちちちちのちちちちのちの字で、さつきという女性との共同筆名を考えた。さて漢字の皐月は五月であるが、皐は睾の異体字でもある。

繰字は同じ発音の違う意味や同じ漢字で違う意味なのだが字の意味が同じで八回使った文もある。『あなた』の文字を一文に八回でてくるものを書いた。（137）

繰字の他にもぼくは字で遊んでいる。そんな遊んだ字を遊字として紹介する。これも造語が嫌で前号は没にした。

遊字1　近畿大阪大和…協和埼玉…で近玉…（125）

遊字2　田無支店　↓　西東京市南町北支店（131）

遊字3　西葛西支店　↓　西葛西西口西支店（131）

遊字4　東京都支店（とうきょう×、ひがしきょうと○）

遊字5　東京都特許許可局隣支店（↑→←135）

遊字6　この支店の隣の柿はよく客食う柿である。

遊字7　山形は東北南西ブロック（131）

遊字8　岩手は東北東北ブロック（↑131←）

遊字9　日本海上＋ジャパン火災＝日本ジャパン損保

遊字A　はるはあけぼのようよく…たなびきたる生命

遊字Aは、あけぼの＋やまぎわ＋むらさき生命（132）

遊字B　ニッポニアニッポン生命佐渡ヶ島支店（135）

遊字C　副上級主任統括担当部長代理補佐代行心得

遊字D　部長部長（部長職を管理する部長部の長）→

遊字E　ウンコ…じゃないウコンドリンク（→128）

遊字F　サケ依存症→一日三食が鮭（→以下137）

遊字F続き　サケのサカナにサカナのサケ

繰字の補足　ちちちち＝父乳（男性乳腺）ちちち＝血乳

繰字の意味　男の乳首から赤い乳が出るのは父方の遺伝。

繰字3　たまたまたまたまがめり込む（164→134）

繰字4　またまたまたから煩悩くんが…（136）

繰字4続き　たまたまたまの間から…煩悩くん…

繰字5　ブツブツ物仏佛勿打つ撲つ撃つ長靴麻薬盗品…

繰字5は近鉄電車の連結運転などえんえんと続いた。

繰字6　あたたく…痛あたたあたたかく生あたたかく

繰字6の前、あたたたかくと間違えると伏線を書いた。

繰字7　おっぱいがしっぱいで…いっぱいいっぱい

繰字8　太太太（おおたふとし）（→133）

繰字9　太（おお）いに太った

繰字A　太（はなはだ）しく太った

繰字B　太々（ふてぶて）しく太った

繰字C　太った大きな犬ほど太った（以上は134）

繰字D　上上上（うえかみじょう）（以下は142）

繰字E　逆上がりをして逆上せて…逆上

繰字F　逆上せ上がる…上せ上がる…のぼせあがる

繰字G　夢夢夢（ぼうぼうたるゆめ）（143）

繰字Gの補足　夢夢（ぼうぼうたる）＝乱れた様子

繰字H　（筆名を）睾見克睾（たかみかつひろ）に…

繰字I　睾睾睾睾（たかさわおおひろ）（135）

繰字J　睾睾睾睾睾睾睾（たかさわさつき・たか…）睾の字は、たかい・さわ・おおきい・ひろい・さつき。睾

遊字G　ヘロイン中毒　自分の小説の女主人公に熱中。
遊字G続き　映画のヘロインがヘロインで逮捕
遊字G補足　ヒロインは正しくはヘロインと発音
遊字H　純度二倍のシャブ中毒→シャブシャブ病みつき
遊字I　ヤクの売人→ヤクルトレディである。
遊字J　ヤク中→ヤクルトスワローズ…ファン
遊字K　誇張の夢か胡蝶の夢か（隣に続く・133）
遊字K続き　簡単の夢か邯鄲の夢か（感嘆が良かった）
遊字LぼくはS…M…ド半分LL…SMALL（136）
遊字M　『白豚に乗った王女様』タイトルにしたが、馬の字を豚に変えた。『白馬に乗った王女様』が現れると文字通りシンデレラストーリー男版のエッセイである。
遊字Mは26例もあるので、書ききれない（139）
遊字Mでは『白UMAに乗った王女様』が洒落ている。
遊字Mの補足　UMAはネッシーなど未確認動物である。
遊字Mでは、『白馬にまたがった王子様』を元に少しだけ字を変え『白馬なみのまたがあった王子様』と書いた。
　字を書いていると字が勝手に踊りだすのである。さて踊字（おどりじ、踊り字）はなるべく使用しない。踊字は字でなく記号だからで、文章に記号を使いたくない。踊字とは々　〃　、等で、オナジ　ドウで変換できる。一字一字と書いたが一字々々と書かない。時々・次々の踊字は使う必要があるが、できるだけ避けている。同様に字でない？や！を、ぼくは小説で使ったことが無い。

字でない！『！は今後二十年間、一回しか使わない！』活字にして十年弱だが、あと十年は使わない。（129）
字でない？も！と同様、小説では一生使わないだろう。
『字2』でも没と思った原稿がこの後に続く。次回作が『字3』にならないよう没原稿の呪い対策なのである。
字という字について、少し真面目になって調べてみた。
字の意味1　もじ　文字『もんじ』の『ん』が省略
字の意味2　あざ　市町村の区画　大字の中に字（小字）がある
字の意味3　あざな　成人後の実名以外の名　諸葛亮の字が孔明
字の意味4　やしなう・はぐくむ・そだてる
字のウは家の、子はこどもの象形文字の組合せである。
字の部首は、うかんむりといわれるが、間違いである。
字の部首は、正しくは、こども（へん）なのである。
字は子が左でなく下で偏といえないが子が部首である。
字は宇や宅や家の仲間でなく孫や孤や孔の仲間である。
字に似た学の部首も冠ではなくて、こどもなのである。
字のうかんむりは部首として、当然に存在している。
字に似た学の、つ（わ）かんむりは本来は存在しない。
漢字学習のため俗称で、つ（わ）かんむりと呼んだ。学の字は、學というものを簡略に表記したものである。學の字の上の複雑な形は部首に本来は無かった。覚は覺の略字で部首は見である。同様な省略は他にあり挙は擧の略字で部首は手である。誉は譽の略字で部首は言である。
略字でツにする漢字は他にある。営は炎二つの營がツの略字で部首はツでなく口である。労は炎二つの勞がツの略字で部首はツでなく力である。栄は炎二つの榮がツの略字で部首はツでなく木である。蛍は炎二つの螢がツの略字で部首はツでなく虫である。鶯は炎二つの鶯がツの略字で部首はツでなく鳥である。単は口二つの單がツの略字で部首は新字体が十、旧字体が口である。厳も嚴の略字で部首は新字体が厂、旧字体が口である。さらに巣の字も本来は巢という、く、三本の部分をツに書き変えた字である。字形でいうと（語源が違って川を表す）巡の字のしんにょうを消した部分に近いのである。さて巣の字の部首は、き、つまり木なのである。巣という象形文字は木の上に子育て用の藁（田）があり、ひな鳥三羽が字として表現されたのである。つかんむりは本来なくて字は學の上半分、二つの炎、二つの口、三羽のひなが略字されたものなのである。参考までに筆順を記すと學の字はメメノ一二フ（一ノで一画）二ワ子となる。この旧字を見るとロシア人の名を連想するのである。さてツの字が冠に見える当があるが、当は部首がしょうがしらの字で小の変形である。書順も真ん中から始る。尚という字も同じのため小の部首をなおがしらとも呼ぶ。当の旧字体の當の部首は小でなく田＝た（へん）である。田の字で畑があるが、部首は火でなく田である。部首が火の字に烏（鳥のカラス）がある。ひへんでなく、れっかの字で点四つであるが、これが火の部首になる。なお鳥の字の部首は火でなく、当然ながら鳥である。鳴くという字の部首も鳥であり口でない。犬が鳴くの吠えるという字の部首は犬でなく口になる。意外だが口が部首になる字は問がある。問の部首は門でない。間に似ている間の字の部首は日でなく門になる。
　字という字と異なる字とで間違うことがある。ぼくは読字障害（識字障害・ディレクシア）の傾向がある。
　字と似て間違えやすい字に次のものがある。
①字と学（ガク・まなぶ）。
②字と宇（ウ・いえ・のき）
③字と宁（チョ・たたずむ）にんべんの佇と同じ意味。
　字と学（ガク・まなぶ）については部首が子と書いた。
　字と宇（ウ・いえ・のき）　宇はうかんむりでありウの字も、う（ひらがな）の字も宇から誕生した。宁は佇の字を見るとき右側が字に見えたり、伃に見えたりする。
　字という字だけではない。多くの字を見るとそれに似た字と見間違えるか、連想をする変な癖がある。鉄壁の二字目と完璧の二字目が書き違いはないが同じに見える。
　字と宇で例に挙げたが、実は、宇と宅とでも少しだけ読字障害が発生する。宅は本名で使うので、面倒である。
　字で字を書いて最後にする。二字目を残すと、いびつな字になってしまったが、字の呪いが怖いので発表する。

編集後記

もう二年半以上、同人皆様にお集まりいただく「合評会」が開けていないのに、同人皆様の積極的なご寄稿により、このようにしっかりした「まんじ誌」の継続発行ができていることを、編集後記記載に当たり、まずは同人皆様に心より御礼申し上げます。

今月も皆様の原稿を楽しく感謝して拝読させていただきました。

新井宏氏の「呼名　呼称と敬称」は身近なことを題材として愉快にお書きくださり、「我が家はどうなっている?」と思いながら楽しく読ませていただきました。

水谷嘉弘氏の「近代日本洋画こぼれ話」(第三回)は、今から八十年以上前の日本人洋画家と、その作品をいろいろな面からご紹介くださり、水谷氏のそれぞれの画家についての研究の広さ深さに感嘆し、興味を持って読ませていただきました。

紙面の関係でお二人分だけでの感想で失礼させていただきます。

早いもので次回発行は来年二月になります。寒さも厳しくなるかと思いますが、同人皆様にはくれぐれもご自愛の上、ご健筆を揮われますことを祈念いたします。

(鍋)

まんじ第166号

令和4年11月1日発行(非売)

発行人　三戸岡　道　夫(みとおか　みちお)
編集長　鍋　屋　次　郎(なべや　じろう)
編集担当　安　藤　　剛(あんどう　たけし)
事務局長　村　上　邦　治(むらかみ　くにはる)

(編集担当)〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL・FAX 048(721)2001
(事務局長)〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
(郵便振替口座)　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
(印刷製本)　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について

「虎吠えて風生ず」　　田寺怜葦(たでられい)画